
桜町幻想奇譚

里芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜町幻想奇譚

【Nコード】

N4266F

【作者名】

里芽

【あらすじ】

私達の住む「こちら側の世界」と妖や精霊達の住む「向こう側の世界」時の流れと共に、関係性は薄れていく。昔は行き来もそれ程難しくなかったが、今は双方の世界を繋ぐ道を見つけることすら難しい。それでも双方の世界の関係は、完全なる終焉を迎えることは無い。主な舞台は、桜の木と言い伝えの数だけ多い田舎「桜町」や「三つ葉市」「舞花市」/ /勝気で男勝りな少女「井上紗久羅」と夢見がちでマイペースな少女「臼井さくら」二人は、出雲という男と出会い、深く関わったことをきっかけに、人や妖の起こす様々

な事件に巻き込まれていくことになる…… / / 初期エピソードは一人称と三人称がかなり入り混じっています / / *エピソードによっては流血表現など有(ほんの一部ですが) / 更新は1〜2週間に一度位

第一話：鬼灯一夜（前編）（前書き）

- ・前、後編
- ・宿題で書いたものの改訂版で、発表済み
- ・やや長いので重いかもありません
- ・連載しようと思って元々書いていたものではないので、後の話と設定がやや変わっています（書き直す予定）

第一話：鬼灯一夜〜前編〜

第一話：鬼灯一夜〜前編〜

氷を三つほど入れた水のように冷たい空は、熟れた柿の色から、夜の色に変わりつつあった。鬼灯の実のような夕日は、もうそのほとんども地平線に埋まっている。薄荷飴の色をした月が、白い光で氷水のような空を優しく照らしていた。カラスや小鳥の鳴き声も、人々の声も少しずつまばらになりはじめて、世界はしんと静かになりはじめている。

桜町の西の外れには、通称『おばけ通り』という通りがある。

田舎町とはいえ、町の中心は商店街やビル、駅や店、住宅が密集しているためそこそこ活気がある。だが、町の中心から離れた場所は、昔からある家や店や田んぼがぼつぼつとあるだけである。

そんなよく言えば長閑、悪く言えば寂しくて廃れている町の外れの中でも『おばけ通り』は輪をかけたように寂しくて静かだ。おまけにじめじめしていて気味が悪くて、暗い。

桜町の北西にある標高二百メートルほどの桜山を傍に見る『おばけ通り』というのは、もう何十年も前からそこにある、小さな居酒屋とおばあちゃんが一人でやっている雑貨屋の間にある道から行く所だ。

二、三百メートルほど続く栗色の地面の細い道の両側に木造の家がずらりと並んでいる。家といっても、もうその家達に住んでいる人間は誰もいない。

どの家もぼろぼろで、まともに残っているものなど殆どない。あるものは屋根が吹き飛んでいるし、あるものは牛乳をガラスに混ぜたような濁った色の窓が割れているし、あるものは完全に虫や風にやられて崩れている。障子はびりびりに破れているし、木の戸は外れて倒れているし、畳からは茸のようなものが生えている。

どれもこれも、もう家とは呼べないような代物になっている。

ここにいるのは蜘蛛と野良猫、野良犬位。誰もこの通りには近づかない。あまりにも気味が悪いからだ。

気味が悪いだけではない。ここは「出る」らしいのだ。何が……幽霊と妖怪だ。ここを秘密基地にしようとした子供達や、取り壊し工事をしようとした会社の作業員らが、この通りでのっぺら坊やら天狗やらろくろ首やら、足のない女やら血だらけの落ち武者やらを見たというのだ。

見ただけではない。ここに関わったもの、関わろうとした者の殆どが病気になるたり、怪我をしたり、不幸な出来事に見舞われたりした。そのため、この通りに近づく者は殆ど居なくなった。

通りの入り口には『立ち入り禁止 入って酷い目にあっても知らないよ』という真面目なかぶさけているのかさっぱり分からない看板がたち、黒と黄色のしましまのロープが張られている。

そんな、気味の悪い通りを人々は『おばけ通り』といつの頃からか呼ぶようになったのだ。

そんな、誰もいないはずの『おばけ通り』を半分ほど進んだ先に『鬼灯』はある。

いや、正確に言うと『鬼灯』のあるそこは『お化け通り』であって『お化け通り』で無いのだが……。

『鬼灯』は小さな建物。横長のそれは、目にみえて壊れているところがない。

黒ずんだ木を組み立ててできた質素な建物。屋根に瓦はなく（他の建物もほとんどそうだが）、ペンキも塗られていない。壁と同じ、朝見ても暗く見える色の木で出来たやや平べったいものである。

入り口の戸は上半分が障子、下半分がガラスだった。障子に張られた紙は、古本屋で売られている古書のように黄ばんでいる。みればところどころ指であけられたような小さな穴がある。

下半分にはめこまれているガラスはにごった色をしていて、建物の中の様子を見る事は出来ない。見れば、菊の花の模様が右下にある。

戸の両端には、鬼灯の形をした提灯がぶら下がっており、達筆なのか下手糞なのか分からない字で『居酒屋』と書かれている。提灯にあかりは灯っていない。

やがて、鬼灯の実のような夕日が地平線という地面に完全に埋まって、空が完全な夜の色になった頃『鬼灯』から一人の男が出てきた。

高くもなく低くもない背で、やや細身のその男は、細く尖った顔に狐のお面をつけていた。

牛乳のように白い面で、鮮やかな赤で耳や髭が描かれている。金の眼に黒い瞳。まぶたは耳や髭と同じ赤で描かれている。人を睨んでいるような小馬鹿にしたような表情のそれは、祭りの屋台で売られていそうなものだった。

面を被っているため、男の年齢をうかがい知るのは難しい。髪の毛は漆黒で、白髪はない。指は細くて骨張っている。皺はないから、高齢ではなさそうだが若くもなさそうだった。

紺色の着物姿で外に出た男は、はあと月の光と同じ色の息を吐き出しながら身震いする。そうして、提灯にゆっくりとあかりを灯した。

そして何かを思い出したかのように一度建物の中に入り、また出てきた。手には藍色の暖簾。男は低い声で「寒い」と一言漏らした後、暖簾を戸にかけた。暖簾には白い文字で『鬼灯』ほおずきと書かれている。やはり、達筆なのか下手糞なのかは分からない。

男は両手を着物の袖に突っ込みながら、建物の中へとまた入っていった。ぴゅう、という冷たい風が暖簾をぱたぱたと揺らした。

見ての通りというか何というか、『鬼灯』は居酒屋である。さて、誰も近づかない、この通りに何故男は店を構えているのだろうか。そもそも、ここに住んでいる人間は誰もいない筈なのだが。答えは至極単純にして、奇妙奇天烈摩訶不思議。

この居酒屋『鬼灯』は妖怪や幽霊……つまり『人ならざる者』の為の店なのである。店の中へ入っていったあの男もまた人間ではない。

『鬼灯』は通常、人間は見る事も入る事もできない店である。

この店がある場所には、本来は何もない。象に踏まれたかのようにぺしゃんこになった家の残骸があるにはあるが。

普通の人間に『鬼灯』を見ることは出来ない。

そもそも『鬼灯』は、我々が住んでいる世界に存在しているものではない。

存在していないのだから、見たり入ったりすることが出来るはずもなく。

そんな『鬼灯』は、狭い。カウンターの形はコという字を時計回りにくいつと動かした 凹という形。

両端は壁にくつついているため、椅子が置けない。窪んだ部分は調理場であり、主人の居場所である。

背もたれの無い、小豆色の座布団が敷かれた木の椅子は八つだけで、真一文字に並んでいる。それでも十分だった。一日に何十人もの人ならざるものがいっぺんにくるなどということはない。どうしても足りない時は、必殺『人ならざるものが使えるすごい力』を使つてどうにかすればいいだけの話だ。

調理場の向こう側は真つ暗で何があるのか見る事はできないが、恐らく主人の生活する部屋などがあるのだろう。

店の中は殺風景で、これといった飾りは無い。ただ左の壁にメニューのかかれたぼろぼろの黄ばんだ紙が張られているだけだ。明かりはついてはいるが、その明かりが何によるものなのかは、不明である。

男は、もつの味噌煮込みの入った鍋を無言でかき混ぜながら客が来るのを待つ。

その他にも、秘伝のだし汁でこれでもかというくらいぐつぐつ煮込んだおでんもある。魚の煮つけや、豚の角煮、おにぎりなどたくさん料理が調理場にある。うどんや蕎麦の汁や天ぷら粉、天かすなどもある。……一体食材はどこから仕入れているのだろうか。疑問ではあるが、あまり気にしない方がよさそうだ。

店を開いてから十分ほどが経った頃、がらつと勢い良く戸を開けて最初の客が入って来た。

その客は、店に入るなり大きなくしゃみをする。男は大柄で、が

つちりとした体つきである。濃い茶色の髪の毛はぼさぼさしていて、ぴんぴんとあちこち跳ねている。肩ほどまであるそれは、無造作に束ねられている。目はややたれている。顎には、無精ひげが生えている。

適当にそつて伸ばして、また適当にそつて、を繰り返しているよ
うだ。緑色の甚平に下駄姿の男は、見た目は二十代半ばから三十位である。男は人懐っこい笑みを浮かべながら、一番左側にある椅子に足を大きく開いてどかつと座つた。店の主人が、静かに顔をあげた。

「いらつしゃい」

小さい声で主人がそついうと、男はども、と大きな声で返した。

「こんばんは、鬼灯の旦那。おや、他の客はまだ来てないっすか。それじゃあ、またあつしが一番つすね」

男は、一番乗りできたことが嬉しいのか、とても弾んだ声でそう
いった。男はほぼ毎日ここを訪れる。そして、大体一番乗りなのだ
つた。

「ああ。大体いつもあんたが一番乗りだよ、弥助さん^{やすけ}」

主人にそういわれた客、弥助はまあそれもそうなんですがねと返
した。

一番目の客、弥助は見た目こそ人間だがその正体は齡八百年ほど
の化け狸。真正銘の妖だ。

今はただ人に化けているだけで、真の姿はばかでかい狸である。
人ならざる者たちの多くは、人間と関わることをやめたが、弥助は
違う。弥助は人間の世界に酷く興味を抱いていて、大胆にも人間の
世界で人として生活をしている。

今は、小さな喫茶店でアルバイトまでしているというのだから驚きだ。しかもこの男、あるうことかその喫茶店で一緒に働いている人間の娘に恋をしてしまったのだ。もうべた惚れらしく、彼女の話をする時の彼の顔と云ったらもう本当に酒を飲んで酔っ払ったようにでれでれのべるべろになるのだった。

この男、しまいに関自分が妖である事をすっかり忘れてしまっただ。そして仲間たちが彼の事を忘れかけた頃にひょっこり現れて、人間との間にできた子供を見せにやってくるかもしれない。長くの間人間の姿で居続けたがために、真の姿である狸に戻る方法を忘れてしまったこの男ならやりかねない。

主人はお面の下で微笑むと、空色のどんぶりを一つ手に持った。もう、弥助が最初に注文する品は分かっているらしい。

「やっぱり、最初はあれを頼むかね」

「そりゃあもちろん。あれを食べなきゃ一日が終わりませんぜ」

「はいはい。それでは、すぐに用意をしよう」

主人はそういうと、奥の部屋に向かっておいと声をかけた。するとぱたぱたという足音と共に、美しい女が一人出てきた。若くも見えるし、中年のおばさんにも見えるその女は、真っ直ぐで艶やかな黒髪を腰ほどまで伸ばしている。切れ長の瞳は柳の葉のように細い。肌は白い。桜の花びらの色の着物を着た女は主人の奥さんで、名を柳という。彼女は人間から柳女と呼ばれている妖である。柳は、弥助を見るとにこりと微笑みながら小さく頭をさげた。

「いらっしやい、弥助さん。今日も最初はあれですか」

「ええ、もちろんつすよ」

「ほほ。そうですね、貴方が一番最初にあれを頼まない日はありませんものね」

そういいながら柳は桜海老と葱と人参と玉葱の入ったかき揚げを三つ揚げ始めた。

カラカラカラという心地よい音が店の中に響き渡る。その音を聞くたび、弥助の口の中がつばでいっぱいになってしまふ。弥助はそれをごくりと飲み込みながら、それが出来上がるのを待った。

柳がかき揚げを揚げているとき、主人は調理場のすみにある、規則正しく並んでいる蕎麦の束が入った古びた木箱の蓋をあけて、そこから二束ほどとりだした。本当は一束でも十分なのだが、大食漢の弥助の場合一束だと足りないのだ。だから、弥助に蕎麦を出すときは二束と決めている。本当は三束も四束もいけるんですがね、と弥助は言っているが蕎麦だけでお腹一杯になられるのもなんだかなあということ、二束にとどめているのだ。良い蕎麦粉を使い、つなぎもほとんど使わず作られた麺は、ほとんどが小麦粉でできた安物よりもずつと香り高く、また美味しい。

主人は、その蕎麦を湯の入った鍋に丁寧に入れてそれを茹で始める。弥助は掻き揚げの揚がっている音を聞きながら、湯気がでていく鍋をぼつと眺めていた。

「毎回毎回の蕎麦が出来る様子をじつと見ているのがたまらなくあつしは好きつすねえ。好きなものを待つってというのは、いつだってドキドキワクワクすることなんですよね」

「全く、弥助さんは童のようですね。好きなものをそわそわしながら待ち続けたり、些細なことでも楽しんだりできる童ですわ」

褒められているのか、馬鹿にされているのか。どちらかといえば後者のような気はするが、とりあえず弥助は褒められていると思うことにして、いやあそれほどでもと頬をかいた。

柳はくすくす困ったように笑いながら、からからに揚がった掻き揚げを油を軽く落としてから皿においた。それから程なくして、蕎麦も茹で上がったようで、主人は大きめの丼に透き通った色をした、出汁のきいた汁をその中にさっと入れた。そして茹で上がった蕎麦をその中にそっと入れた。ねずみ色の蕎麦が透き通った茶色の汁にゆっくり沈んでいく。そして丼に蓋をするように、さきほど揚がった掻き揚げをさっとおいた。香ばしい香りが弥助の腹と口の中を刺激する。

「ああ、これこれ。この匂い。ああ、もう本当になんともいえませんねえ」

完成したためき蕎麦の香りを弥助は鼻をひくひくさせながら嗅いで、幸せそうな表情を浮かべた。その表情は、なるほど確かに大好物を目の前にして幸福に浸っている子供のようにだった。

柳が、丼を弥助の前にそっと置いた。黄金色の掻き揚げは、本来この居酒屋のためき蕎麦にはいれず、天かすを入れるだけなのだが、常連客である弥助が頼むためき蕎麦には特別にいれてある。ためき蕎麦、というよりはかきあげ蕎麦といったほうが正しいかもしれない。

弥助は、大きな声でいただきますという左手で丼を持ち、まずは掻き揚げを一つ大きな口を開けてぱくりと食べた。しかも一口で、そしてその掻き揚げの下に隠れていた蕎麦を大きな音を立ててずるとすすり始めた。それはもうすごい勢いで、水を飲むような速さですするものだから、みるみるうちに汁に沈んでいた蕎麦は消え

ていく。急いで食べる上に、豪快に食べるものだから、せつかく主人が綺麗に拭いたカウンターの上に汁やら掻き揚げや蕎麦のかすやらが飛び散ってしまう。ずるずるびゆるっと弥助が蕎麦をすするたび、カウンターの汚れは酷くなっていく。主人は面の下で苦笑した。いつものことで、もう慣れてはいるがやはり何度見てもその食べ方には呆れてしまう。

「もう少しゆっくり食べてくれないかね。蕎麦は逃げやしないよ」

「全く、そんなにこぼして。本当、童みたいな食べ方ですね」

柳も困ったような顔をしながら肩をすくめる。おいしそうに食べてくれるのはいいのだが、やはりもう少し綺麗に食べて欲しいとはおもつ。

「まあ、自分を馬鹿にした子供を本気になって追いかけたり、子供の遊びにムキになって自分が勝つまで延々とその遊びを続けたり、子供に自分の好物をとられて本気で泣き出したりするような人だからね、しょうがないといえましょうがないのだがね」

という主人の言葉を聞くと、弥助は急に慌てだしてごぼごぼとむせてしまった。柳があわててだした水を飲んで、どうにか落ち着いた。

「な、なんで鬼灯の旦那がそんなことを知っているんですか」

「この前出雲ちゆういさんから聞いたんだよ」

そう主人がいうと、弥助の顔が真っ赤になった。どうやら怒っているらしい。

「あの馬鹿、余計なことをペラペラ喋りやがって……後で覚えてるよ」

どうやら「出雲」という人物とは仲が悪いらしい。しかし、すぐにためき蕎麦をまだ食べ終っていない事を思い出すとまた食べることに集中し始める。至極単純な奴である。

「蕎麦も香りがあっておいしいですけど、この掻き揚げもまた美味いっすよねえ。人参と玉葱の優しい甘さに、桜海老の磯の香りとはどよい塩味、さくさくした衣。また、この衣にやや甘めの汁がすつと染みこんで……くう、なんともいえないっすね」

三流のグルメリポーターのようなことを一人でいいながら、弥助は二つ目、そして三つ目の掻き揚げをやっぱり一口で食べると、少しだけ残っている蕎麦をすすり、最後に丼を両手でもって汁をごくごくと飲み干してしまった。別に飲まなくてもいいのに、いつも主人と柳は思うのだが、人間と違って塩分をとりすぎたからって体を壊すことも滅多にないから口にはださない。

すっかり丼が空になると、弥助はぷはあと息を吐いて、口の周りについた汁を手でぬぐった。何かをやり遂げた時に浮かべる表情を何故か浮かべながら、弥助は丼をカウンターに置いた。

「いやあ、美味かったっす。あつしは、もし死ぬ時はこのためき蕎麦がたくさん入った鍋の中で死にたいと常々思っすよ」

「ほう。ならば今すぐやってみるかね？協力してやるよ」

そう主人が意地悪い声で言っていると、弥助は慌てて首と両手を振った。

「いやいや、いや。嫌ですよあ、あつしはまだ死にたくないっす」

「冗談に決まっている。生憎、あんたのような無駄に大きな体がすっぽり入る位の大きさの鍋がないものでね」

「あつたらやつていたんすか？」

「さあ、どうだかね」

そういつて、主人はははと笑った。果たして面の下に隠れている目は笑っているのだろうか、笑っていないのだろうか。表情を読み取れないから、主人の考えていることは分かりづらい。分かりづらいから、余計に怖い。弥助は鬼灯の旦那にはかなわないや、と冷や汗を流しながら柳にもつの味噌煮込みと日本酒を頼んだ。

外はもう本当に暗くなっていた。空には薄荷飴のような月が浮び、ぴかぴかに磨きあげられた金や白金の星が瞬いていた。空に溶かされた氷の数はどんどん多くなっていつて、空はますます冷たくなった。

そんな頃、『鬼灯』に次の客が入ってきた。客は、天狗だった。

三十センチほどある細くて長い鼻、太い眉毛と大きな目は弥助とは対照的に釣りあがっている。白目の部分は、金箔を貼り付けたような黄金色で、瞳は黒い。その顔は、現代日本においては、天然記念物とも呼べる超頑固親父のそのような、厳格で恐ろしいものである。小さな子供が見たらわあと泣きながら逃げてしまいそうなものだ。艶のない、硬くてボサボサした髪の毛は、だらしなく胸まで伸びている。肌の色は唐辛子のように真っ赤だ。背は弥助よりも頭一つ分高い。山伏の格好をした天狗は、体を丸めて戸をくぐった。そうでもしないと、戸に頭をぶつけてしまうのだ。そして、弥助の右隣の椅子にどかっとな足を大きく開けて座った。

「こんばんは、鞍馬くまの旦那。今日も外は寒いつすねえ」

「こんばんわだ、弥助。ああ、ここ数日は特に寒いな。我の住んで

いる山は、ここよりもつと寒いぞ」

そういつて鞍馬と呼ばれた天狗は、自分の住む山のある方を指差した（実際は「ここ」にはないのだが）。鞍馬は、桜山の頂上近くに住んでいる。ただ、彼の住んでいる場所には結界が張られているため、人間が入ることは出来ない。入ることができたとしても、あつという間に結界の力でそこから追い出されてしまう。ゆえにそこは人間の干渉をうけていないため、空気は綺麗でゴミもない。美しい木々が切られることもない。しかし、山の上であるため、冬は寒い。

「そのようつすねえ。ところで、この頃姿をここで見かけませんでしたか、何かあったんすか？」

いつもなら二、三日に一回はこの店を訪れる鞍馬がここ二週間ほど全く姿を見せなかったことが気になって弥助は鞍馬にそう尋ねた。すると鞍馬は急に「ごほ」と咳き込みだし、弥助からあからさまに視線をそらした。だが、やがて鞍馬はいいにくそうな表情を浮かべながら早口で答える。

「いや、あの、その、あれだ。我が住処の近くに住んでいる凶暴猫又とつまらぬことでケンカをしてな。その時、猫又に鼻を折られてしまった。それで少しの間山でおとなしくしておったのよ」

なるほど、弥助がそつと恥かしそうに顔をしかめている鞍馬の鼻をよく見てみると、確かに鞍馬の自慢の鼻のさきっぽがやや折れ曲がっている。どうやらまだ完治していないようだ。鞍馬と、その普通の猫の何十倍いや何百倍も大きい猫又がケンカすることはしょっちゅうあるようだ。今まで鼻を折られるほど派手にケンカしたことはそんなになかったはずだ。つまらぬ理由などとはいつているが、案外とんでもない理由だったのかもしれない。

「あれまあ、それはお気の毒に。ところで、何が原因でケンカした

のです?」

弥助がそう聞くと、鞍馬はまた咳き込んだが結局観念したのか、口を開いた。

「魚を食うとき、頭から食うか尻尾から食うかということでは揉めたのだ。あの猫又め、魚を尻尾から食うとはけしからんと言つて我の大事な鼻を折りおつた。今度会つたら奴の耳を引きちぎつてくれるわ」

鞍馬は固く握り締めた右手でカウンターをどんと叩いた。弥助は、最初は口を開いてぼかんとしていたが、やがて笑いがこみあげてきたのか口元がぴくぴく動き始め、そしてしまいにはわざとらしく大声をあげ、腹を抱えて涙を流しながら笑い出した。おまえは笑い苺でも食つたのかというような勢いで。

「そ、そりゃあ、まあ、ほ、ほほほほ、本当に……くくく……つま、つまらないここに、ことで、ケケケ、ケンカしました……ね、ははは、くく、くつくつく」

「貴様、それ以上笑うとその鼻をへし折るぞ。それとも、貴様の背中にある傷を広げてやるうか」

そう鞍馬が鬼のような形相でぎろりと睨むと、弥助はぴたっと笑いを止めて急におとなしくなった。

「そりゃあ、困るつす。この古傷広げられちまったら、あつしは当分動けなくなつちまう」

弥助はそう言いながら、自分の大きな背中をさすった。弥助の背中には大きな古傷がある。何でも大昔に化け狐につけられた傷らしい。かなり大きな傷で、今も時々痛むのだという。

「ならば、それ以上笑うな。……主人、焼酎を一杯もらおうか。あ

と、おでんも一皿頼む」

「はい。それにしても、随分こつ酷くやられたね」

主人は、コップに焼酎を注いで鞍馬に手渡す。柳はぐつぐつと音を立てている土鍋から、だし汁や竹輪、蒟蒻、牛すじ、はんぺんなどをすくって白い深皿にいれる。そしてそれを鞍馬にそつと手渡した。鞍馬は元々赤い顔をますます赤くさせ、汗を流しながらそれを受け取る。その様子を見ていた弥助がにやりと笑う。

「おやあ、鞍馬の旦那。随分と顔が赤いつすねえ。まだお酒も飲んでないのに、一体どうし……くはあ」

鞍馬が柳に好意を抱いていることをしっているくせにそんな事を言う弥助は、鞍馬に思いつきり頭をぐーで殴られた。頭が潰れてしまっんじやないかというくらい強く殴られて、弥助は涙をながしながら頭を抱えた。

「貴様は黙れ。背中 of 傷を開けられなくなかったらな」

「あらまあまあ、駄目ですよ鞍馬さん。そんなに強く殴ってしまったら、ただでさえ阿呆な弥助さんがますます阿呆になってしまいますわ」

ふんわりした笑みを浮かべながら柳がそつたしなめると、鞍馬は頬を赤く染めながらこくりとうなずいた。

「う、うむ。そうですね」

一方、頭を殴られた上に阿呆扱いされた弥助は面白くなさそうな表情を浮かべている。主人はお面の下で、弥助を面白いものを見るような目で見つめている。

「酷いつすよ、柳の姐さん。あつしはそんなに阿呆じゃないつすよ」

そう弥助が涙ながらに訴えると、柳は袖で口元を隠しながらほほと笑った。

「あら、冗談ですよ」

「冗談には聞こえなかったんですがね」

「あら、弥助さんたら。私の言う事が信じられませんか？」

「そうだ。柳さんの言う事が信じられないのか。流石阿呆狸だな」

「私の妻のいう事が信じられないというのかい。あまりそんなこと言っていると、もうたぬき蕎麦を食べさせてあげませんよ」

三人から集中攻撃をうけ、弥助は拗ねる。

「なんであつしだけ、あつしだけ！ ああ、もう皆して酷いっすよ
お」

そう弥助が抗議すると皆楽しそうに笑った。特に鞍馬ときたら、酒を一気に飲みながら大声でがっはつはと笑っているのだ。全く、自分が笑われると怒るくせに勝手な奴である。鞍馬は柳から酒のおかわりをもらう。弥助は頬を膨らませながら主人からもつの味噌煮込みを受け取った。

「全くもう、本当に意地の悪い人達っすねえ」

弥助は素晴らしいながら、もつ煮込みを口にいれる。少し濃い目の甘辛い味噌がもつの臭みを気にならなくさせ、一緒に煮込まれたごぼうやにんじん、葱はとろとろで柔らかい。糸こんにゃくにも味が染み渡っている。一口食べると、味噌の香りともつの独特な香りが口の中に広がり、続いて舌にぴりつとした刺激がくる。続いて酒を飲み干せば、もうなんともいえない幸せな気持ちになる。

弥助は食べては飲み、食べては飲みを繰り返す。一方、鞍馬は柳によそつてもらったおでんの具の中から、だし汁に染められて日焼けしたようになっているに卵を箸で器用につかむと、ぱくりと一口で食べてしまった。その様子は、魚を丸呑みする鵜の様だ。

「うむ、相変わらずよく味が染みているな。いつ食べても美味しい」

「お褒めに預かり光荣だよ」

主人は嬉しそうだ。今度は味のよく染みた大根に箸をのばす。雪のように白かった大根は今もその色を変え、冬の道路にパラパラと散っている落ち葉のような色をしていた。大根は、箸を入れると簡単に割れた。その割れた大根の中から、だし汁がこぼれ出る。柔らかく、それでいて形の崩れていないそれを口の中に入れると口の中にダシ汁が、肉をかんだときに出る肉汁のように溢れる。ダシの味とダイコン本来の味が美味しく交じり合う。

「こつという寒い日に食うおでんは格別だな。兎角今日は寒い。身が凍りつくようであったぞ。夏の暑さも好きではないが、冬の寒さはもっと嫌いだ」

「あつしも冬は苦手っすねえ。冬になって喜ぶなんて、雪んこに雪女に雪男位のものっすよ。雪女といえば、この前雪女の小雪と久しぶりに会ったんですけれど、いやあもうものすごく嬉しそうな顔を浮かべていたっすよ。また冬が来た、嬉しい嬉しい。凍てつくような寒さがなんともいえないっす」

その言葉に鞍馬は顔をゆがめた。凍りつくような寒さが嬉しくて仕方ないという雪女の気持ち理解できないようだ。

「我にはどうにも理解できぬな。まあ、雪男になってみればあ奴ら

の気持ちも少しは分かるかも知れぬがな」

そういつて鞍馬はコップに注がれた焼酎をまた一気に飲み干した。酒は味わうものではなく、一気に飲むものというのが鞍馬の信条らしい。

「ははは、でもあつしは雪男にはなりたくないっすねえ。あつしは暖房のきいた部屋の中で、ミカンを食べながらのんびりぬくぬくやっていますよ」

「暖房？ああ、人間共の使う摩訶不思議な術か。その術を使うと暖かくなるのか？」

「術じゃなくって、機械っすよ。き・か・い。よくあつしがお話するでしょう。ええと、昔でいえばカラクリっすかね。それを使うと家の中がとても暖かくなるんですよ。寒い日も、それさえあればぬくぬくぽかぽか。もうそうなると外に出たくなくなってしまうっす。ただ、あまりこれを使いすぎるのはよくないようっすね。環境に悪影響を及ぼすとかで」

苦笑いしながら弥助はぷにぷにした食感のもつを口の中に放り込む。

鞍馬は、暖房が一体どういうものかを一生懸命考えているようであつんあつん唸っている。もともといかつい顔が、ますますいかつくなる。

普段山の中で暮らし、人間と接触することのない鞍馬には暖房がどんな形なのか、想像もつかないのだ。今鞍馬の脳内にある暖房像はどのようなものだろうか。

「うん、何というか……長方形の箱だと思えばいいっすかね。白い

ものが多いっすかねえ。……ああ、それよりも。この前あげたクッキーはどうでしたか？あれ、朝比奈さんが作ってくれたんですけれど」

朝比奈さんあさひなというのは、弥助が恋している娘のことだ。現代の人間の食に興味を抱いている鞍馬に色々な食べ物を食べさせてやろうと、弥助は時々そこらへんにある店で様々な食べ物を買ったたり、朝比奈さんに頼んでつくってもらったりしているのだ。もちろん、というか何というか朝比奈さんに何かを作ってもらうときは自分の分もつくってもらっている。

弥助の「これを作って欲しい」「あれを作って欲しい」というワガママな頼みを嫌がらずに快く引き受けてくれる朝比奈さんはなんと心の広い娘だろうか。

鞍馬は一瞬クッキーというなじみのない言葉に首をかしげたが、やがて何を言っているのか分かったのか、ああとつぶやいた。

「ああ、食クッキーう気が。せんべいのようなものかと思ったが、全く違う味で驚いたわ。随分甘い食い物だったな。堅いものかと思ったらさくさくとしているし。現代の人間の世界には摩訶不思議な食べ物が多い。貴様から色々な人間界の食い物をもらっているが、本当に人間界は興味深いものだ」

「そうっすね。外国の文化がどんどん流れてきていて、鞍馬の旦那の知っている人間の世界とはずいぶん様子が変わっていますからね」「うむ。まあ、変化するという事はよいことだがな。とはいえ、寂しいものよ。我は昔の方が好きだったからな。まあ、人間の世界がどうなるうと我には関係ない。我は山奥でひっそりと静かに暮らすのみよ」

そういつて酒をまたぐいつと飲んで「まあ、そういう我ら人ならざる者や山に住む動物達の静かな生活を、人間どもは平気で邪魔するのだが」と一言付け加えた。人間に好意的感情を抱いている弥助もそれには同意するしかないのか、ただ苦笑いするだけだった。

「まあ、人間はどこまでも貪欲つすからねえ。最近じゃあつしの仲間の狸も住処を人間たちに追われて迷惑しているそうつすよ。食うものがないから、民家にある食べ物をあされば、卑しいど畜生めといわれて殺されて。あつしらは有害な動物扱いされるのみ。あつしから狸が悪いわけじゃあないんですがね。まあ、あつしは妖ですから食べなくても死にはしませんけれど」

一部の妖は別に食べなくても死なないが、食べないとなんとなく気分がよくないし、どこか物足りない気分になる。弥助も、別に何かを食べなくてもそう簡単に死にはしない。ただ何か食べることは楽しいことだし、何か食べると気分がいいし、力もでてくるから食べるのだ。鞍馬もまた然り。

弥助は主人から、炊き立てのごはんをうけとってそれをもつ煮込みの中に入れ、御飯と汁をよく混ぜ合わせて一気に口の中にかきこんだ。野菜の旨みと味噌の甘辛さが混ざった汁と、ご飯の組み合わせはまさに最強である。

「狸も大変だな。まあ、どうしようもないことだ。時に弥助、次はどのようなものを持ってきてくれるのだ？」

「へ？ はて、どうしましょうかね。にしても、本当に鞍馬の旦那は食べ物が好きつすねえ。まあ、あつしも人のことはいえないつすけどね」

弥助は、口元についた米粒を手で取りながら次にどんな食べ物を持ってこようか考えていた。鞍馬は弥助の答えを待ちながら、ニラと卵のさっぱりした味のお粥を大口をあけてせっせと食べている。

外から若い娘のすすり泣く声が聞こえ始めたのは、それから二、三分後のことだった。聞いているこつちが悲しくなるような泣き声は、冷たく寂しい外の空気をますます悲しいものにしていった。その泣き声は少しずつ少しずつこちらに近づいてきている。どうやら、この店を訪ねるつもりらしい。

その泣き声と一緒に、若くも無いが老いてもいない、やたら威勢のいい女の声が聞こえる。泣いている娘と一緒にこちらに向かっているようだ。馬鹿みたいに大きな声なので、店の中にもよく聞こえる。どうやら泣いている娘を慰めているようなのだが、その女の大きな声がする度娘の泣き声は酷くなっていく。慰めが慰めになっっていないようだ。

さらにもう一人いるようだがその人物（とえばいいのか妖といえいいのか）の声はあまり聞こえない。少年であることは確かかなようだ。

弥助と鞍馬、主人に柳はその声だけで誰が店にやってくるのか分かったようだ。今から店に入るであろう三人組は常連客なのだろう。やがて、戸ががらりと開いてその三人が入って来た。表に飾つてある提灯の暖かい鬼灯色の灯が氷水で満たされた外ですっかり冷えた体を照らしている。

「いらつしやい」

主人は、そういつて三人を店の中に招き入れた。三人は軽く主人に挨拶すると、それぞれ席に座った。女は鞍馬の右隣、泣いている

娘がさらにその右隣、少年がさらにその右隣へ座った。

泣いている娘を慰めていると思われる女は、美しく艶やかな女だった。

黒い髪で結った鬘に金と銀の細工がたくさんついたかんざしをつけている。白粉を塗りたくった顔には、長いまつげに切れ長の瞳と一目見るだけでどきりとしてしまいそうな、ぞくつとするくらい妖艶な真紅の唇がある。服装は、派手な赤い着物で芸者さんが身につけていそうなものだった。金や赤や青で花や蝶が、これでもかというくらい描かれている。そんな着物をわざと肩をはだけさせるように着ているのだった。見た感じ、決して若くなさそうだがその体からは若い娘にはない色気が漂っている。

そしてその女が慰めている娘は、十六、七くらいの若い娘のようだった。黒い髪には赤いかんざし、着物は橙色と白の縞模様で帯の色は黒い。そんなに高くなさそうな着物だ。横にいる女とは違って、色気も何もない。おまけに胸もないし、顔もない。顔がないというのは、ようするに眉毛や眼、鼻や口が一切ないということだ。どうやらこの娘は、人間が「のつぺらぼう」と呼んでいる妖のようだ。

その娘の右隣に座っている少年は、おでこにも目が一つあった。三つ目小僧である。髪の毛はなく、格好はお寺にいる小僧そのものである。小僧ははあとため息をついた。見た目の年齢は十、十一くらいで他の二人に比べてずっと小柄だ。

主人は、何も言わずに三人の前に豚の角煮を入れた小さな器を置いた。ことことに煮込まれて柔らかくなった豚肉と葱のはいつたそれからは、とてもいい匂いが漂ってきて、彼らの胃を刺激する。柳が、三人に日本酒を注いだコップを差し出した。女と坊主は礼をいしたが、娘だけは礼もいわずただ泣いていた。口もないのにどうや

って泣き声をだしているのか、兎角人ならざる存在とは思議なものである。

女が、いい加減うんざりしたような表情を浮かべる。

「全く、いい加減泣き止んでおくれよ。そんなに泣いていると、目が兎みたいに真っ赤になっちゃうよ。ああ、ごめんごめん、あなたにはそもそも目がなかったねえ」

女がそういうと、娘はますます大きな声をあげて泣き出した。女は、嗚呼しまったと後悔したような表情を浮かべた。

「ああ、あなたに目がない口がない鼻がない胸がない色気がないって言葉は禁句だったねえ」

「胸がないと色気がない、は余計です！うわあん！」

「そうはいったって、仕方ないじゃないか。事実あなたの胸はぺったんこのぺったぺた、鯉をのつけたまな板だつてびっくりするほどのぺったんこぶりなんだからさあ。色気のいの字だつてありゃしないしね」

「そこまでいうことはないじゃないですかあ！大体、私の胸が小さいんじゃないかって白粉おしろいさんの胸が大きすぎるんです！絶対そうです、そうじゃなくっちゃ私やつてられません。ああ、もうなんだかますます悲しくなってきたじゃないですか」

白粉と呼ばれた女が口を開くたびに娘の泣き声は大きくなっていった。もしこの娘に目があればいまごろその目は真っ赤で、

そこから涙がぼろぼろでていただろう。鼻があれば、鼻水が滝のようにあふれているに違いなかった。

三つ目小僧は、甘めの味付けの口の中ですうつと溶けるくらい柔らかい豚の角煮を口いっぱい頬張りながら、大きくため息をついた。

「もう、いい加減に泣き止んだらどうですかむじな貉さん。せつかくの美味しい料理が不味くなりますよ」

「そうだよ。さつさと泣き止みな。鬼灯の旦那と柳の姐さん特製の極上料理が、あなたの泣き声で台無しになっちまうよ」

と、三つ目小僧の言葉に賛同する白粉を、三つ目小僧がぎろっと睨む。

「白粉さんも白粉さんだ。あんた、一言多いんですよ。慰めが慰めになってない」

「うるさいねえ、このガキは。そうは言ってもしょうがないだろう、あたしは目もない鼻もない、口もないつんつるてんの顔なんて嫌いだなんて理由で男に振られた奴の気持ちなんて分からないんだからさ」

白粉が言い訳がましくそう言うと、また貉が泣きだす。自分が、好いていた男に顔がないという理由で振られた時のことを思い出してしまったのだろう。ほらまたそうやって、といわんばかりの視線を三つ目小僧が白粉に向ける。ご飯ともつ煮込みを食い終わった弥助が、口の周りについた御飯粒と汁をぬぐう。

「いやはや、入ってきてそうそう五月蠅いっすねえ。白粉がこの店に来るといつも五月蠅くなる」

「ちよつとお待ちよ、狸公。今回はあたしが五月蠅いんじゃないか、この猪がわあわあ喚いているんじゃないか」

白粉は、むっとして弥助を睨みながら猪の顔を指差した。弥助は、白粉に睨まれても全くひるむ様子はなく、へらへらと笑っているだけだ。

「でも、猪がここまで大きな声で激しく泣いている原因はあんただと思っんですがねえ。あんたが余計なことを言わなければ、猪だって今頃はもう少し大人しくなっていたんじゃないですかねえ」

「なにおう、この狸公め。たかが化け狸の分際でこの白粉様を馬鹿にしようっていうのかい！」

かんかんに怒った白粉は、蛇の体のようなにゆるりと柔らかい首を勢いよく伸ばした。今やその首の長さは二メートル以上になっている。白粉は、ろくろ首らしかった。今、白粉の顔は弥助の目と鼻の先にある。

「たかが三百二十年しか生きていない、首を伸ばすしか能のない奴を馬鹿にしてなにが悪いのでしょうかねえ」

弥助はけたけた笑いながら酒を飲む。白粉の美しい顔は今や真っ赤で、怒りと屈辱に満ちた表情で弥助を見ている。

「なんだって！ああ、本当に腹の立つ奴だねえ。がさつで汚くって、ただ腕力だけがとりえの馬鹿狸のくせにさ。あんたに惚れられた人間の小娘が可哀想だよ」

「あつしからすれば、あんたのようながさつで乱暴で、厚化粧で、声は馬鹿みたいに大きくて、胸のでかさとよく伸びる首だけが取り

柄の女に惚れられちゃった、鬼灯の主人の方が可哀想だと思うけどね」

そういうと、白粉は今柳が三つ目小僧にだしている、刻み生姜が味のアクセントとなつているタコ飯に入っているタコのように全身を真っ赤にさせて、大いに慌てふためいた。

「ば、ばか！　そこでそれをいう必要がどこにあるんだい！　よりにもよつて、本人の目の前で！　ああ、やっぱり世界で一番嫌いなのはあんただよう！　この化け狸、今すぐあたしのこの自慢の首で絞め殺してやるうかい」

「くつくつく。できるものならやってごらんよ。きつとあんたはあつしを絞め殺すことなんてできやしませんぜ。あんたがあつしを絞め殺す前に、あつしがあんたの首を自慢の怪力で引きちぎるから」

そういつて弥助はぐねぐね動いている白粉の首をぐいつと&am p・#25681；んだ。柔らかい首は弥助が少し力を入れただけでぐにやりとつぶれる。白粉はちくしょう！とやや苦しうに呻きながら首を縮めた。やがて首は元の長さに戻つた。掃除機に、伸ばしたコードがしゅるしゅると戻つていく様子と似ていた。

あいかわらず猪は泣いている。鞍馬と三つ目は顔を見合わせてはあ、とため息をついた。

弥助に勝てずにむかむかしている白粉は、しくしく泣いている猪の頭をぺしつと叩いた。

猪の髪が乱れる。せつかく結つた鬘が台無しになつた。

「まったく、いい加減泣きやみな！　どんなに泣いてもね、あんたが

振られたっていう事実はかわらないんだよ」

「猪は白粉に叩かれた辺りを手でさすりながら、だつてだつてと小声でブツブツ言っている。」

「結局は暴力にでるなんて、流石は………いてっ」

また白粉をからかおうとした弥助の頭を鞍馬がげんこつで叩いた。弥助は、世界が揺れたように感じた。大して回っていなかった酒が、一気に回ってしまったような気もする。鞍馬は串にささった塩味の葱と鶏肉を串から一気に抜き取って食いながら猪をじつと見た。葱をしやりしやりと噛む音が聞こえる。

「貴様が話に加わるとややこしくなるわ。まあ、猪よ。そんなに泣くな。我もな、そんなに鼻が長くて真つ赤な顔をした人は嫌いという理由で振られたことがあったのだ。だが、我のこの顔が格好良く好きだといってくれた者もいる。きつと、お前さんも、お前さんのその顔が好きだといってくれる人に会えるだろうさ。それまで辛抱するがよろしかろう」

「旦那、そんな理由で振られたことがあったんすか？そりゃあ傑作だ！その顔を格好いいといった人もいるんすか？随分物好きな人なんですなえ、なんというか美的感覚が狂っているんじゃないですか、その人」

弥助はその事実が余程可笑しかったのか腹を抱えて、大きな声で笑い出した。そして鞍馬に腹に強烈なパンチを食らって、今度は泣きながら悶絶した。一言多い性格なのは、白粉だけではなさそうだ。白粉は、憎き敵である弥助が酷い目にあつたのが余程嬉しかったのか、ケタケタと涙を流しながら笑っている。

「ざまあないねえ、狸公。くっく、こりゃあいい酒の肴になるよう」

そういつて豚の角煮を頬張り、酒を一口飲む。弥助が苦痛に顔を歪める様子をみて、元々おいしい料理がますます美味しくなつたように、その表情は満足そうだった。

「痛いっすよお、鞍馬の旦那。腹に穴が開くかと思つたっす」

「貴様が笑うからだ。まあ、阿呆な貴様は置いて。のう、貉。だから元気を出すのだ。泣いていてもしょうがない。今宵は我らと飲み明かそう。そしてそんな嫌なことは忘れようではないか」

その言葉を聞いて、貉はそうつと顔をあげた。

「ひっく、ありがとうございます鞍馬の旦那様。そうですよね、きつといつか私のこの顔を好きだといつてくれる人が現れますよね。私、もう少し頑張ります。人生長いですものね」

貉は鞍馬の優しい言葉のおかげで気持ちが悪く落ち着いたのか、泣くのをやめた。

皆、よかつたよかつたといいながらほつと肩をなでおろした。

「全く、手のかかる子だねえ。まあ、この白粉姐さんの手にかかれば小娘一人を宥めることくらいいけないさね」

「つて、あんたは何もやってないでしょうに。本当に調子のいいろくろ首っすねえ」

弥助はただ呆れるしかない。

「さあ、貉さん。乱れてしまった鬘を直しましょうか」

柳はにこりと微笑んでカウンター内からでてきて、貉の背後にたつた。そしてさつき白粉が滅茶苦茶にした髪の毛を直して

始めた。鞍馬は髪を結う柳の姿をぼうつとした表情で見つめていた。

闇はますます濃くなっていく。空に氷がどんどん溶けていつて冷たくなつていく。黄金色の星が氷水の中に沈んでいる。薄荷飴の月が銀色の光を放ちながらぶかぶか浮んでいる。猫の鳴き声が微かに聞こえる。

一方で居酒屋『鬼灯』の中は、暖かい。蜜柑の果汁の色のような証明に、暖かくて美味しい料理、そして悪友という名の仲間との楽しい会話。それらが狭い店の中を暖かく、優しくしていった。

「全く、ようやっとゆっくりと酒が飲めるよう。鬼灯の旦那、あたしに酒を一杯おくれ。うんときつい奴を一杯」

白粉が空になったコップを主人に差し出した。

「はいよ。柳、いっとう強い酒を白粉さんにやっておくれ」
そついうと白粉は不満そうに口を尖らせる。

「あら、いやだよ。あたしは柳の姐さんからじゃなくって鬼灯の旦那からもらいたいんだよ」

白粉は主人に熱く艶かしく、そしてねちっこい視線を浴びせつつ、その豊満な体をくねくねと動かしてみせた。隣にいた鞍馬は、やや目のやり場に困ったのか白粉のを見ないように顔を背けて、狸蕎麦（本日二杯目）を美味そうに食っている弥助の阿呆面を見た。弥助は苦笑するだけだった。

「困りましたな。別に、私からもらおうと柳からもらおうと味なんてかわらないのに」

「変わりますよう。ねえ、この杯にさ主人がくいくいっとお酒をつ

いでおくれよ、ね、ね？いいだろう別にさあ」

「まあまあ、私は嫌われているようですね」

柳は困ったように笑う。白粉が口を尖らせる。

「別にそういうわけじゃないけどさあ」

主人は肩をすくめ、店にある中で一番きつい酒を白粉の持つコップについてやった。白粉はそれを満足そうな笑みを浮かべながらじつと見つめていた。白粉は、コップになみなみと注がれた酒をぐいぐい飲み干す。

「ちょっと白粉さん、そんなにきつい酒を一気に飲んで大丈夫なの」

三つ目小僧があきれたような顔で、白粉が酒を飲む様子を見ていた。猪は「みているこっちの方が酔いそうですわ」とつぶやいた。早くも酒がきいているのか、三つ目小僧を睨むその目はややとろんとしていた。

「いいんだよう。あたしは大人だからこれくらいわけないさ。あんなみたいな餓鬼とは違うのさ」

「失礼だなあ。いっておきますけど、あんなより僕のほうが六年ほど長く生きていますからね。僕の方が年上だ」

「六年くらい長く生きていますからって何生意気いっているんだい。そういうところがガキだっていうんだよう。全く背だっけいっこうに伸びやしないじゃないか」

白粉がケタケタと笑う。三つ目小僧は悔しそうな表情を浮かべる。

「どっちもどっちだと思えますけどねえ」

弥助のその囁きは二人に聞こえたのか聞こえていないのか、はてさて。そういう弥助もまた、子供である。

「全くどいつもこいつも本当に童だな。人間の子供達と大して変わらぬわ」

鞍馬はそういつて酒をぐいっと飲み干した。

第二話：鬼灯一夜〜後編〜

一方氷と星と月を浮かべる外はといえば。

町の西側、もう人も自転車もほとんど通っていない暗い暗い細道を、一人の少年が走っていた。数十メートル間隔で道路の脇にある街灯の灯りはぶんぶんという気味の悪い音を立てながら、ついたり消えたりを繰り返している。その灯りの周りで蛾がばたばたと飛んでいる。少年は、昼でさえ人通りの少ない道を走り続けていた。

年齢は十一、二歳くらいだろうか。黄色い手編みの帽子に赤いマフラ。クリーム色のセーターに青いジャンパーで、チョコレート色のズボンをはいている。腕を振るたび、赤い手袋をつけた右手に握られている青いかばんが弧を描く。少年は、月の光のような白い息を吐きながら速度を緩めることなく走り続けている。

少年は、別に好きで走っているわけではなかった。趣味が夜のジョギングというわけでも、ダイエットの為にジョギングしているわけでもない。少年は確かに走ることは割と得意だし嫌いではない。でも、趣味にするほど好きではない。標準の体重だからダイエットする必要も特にない。

少年は、逃げているのだ。変質者からではない。奇妙なものから逃げているのだ。奇妙なそれというのは、本当に奇妙なものとかいいようがないものだった。黒い霧のようなものが凝り固まって、妖怪の一反木綿のような姿になっている。

その一反木綿真つ黒版には赤い目と大きな口がある。そんな変なものか「むけー」とか「うきよー」とか「めきよー」とか、奇声をあげながら少年を追いかけ続けているのだ。動くスピードは早いわけではないが、決してスピードを緩めることなく少年の十メートル後

るくらいにしている。

少年は、ちらちらと後ろを見ながら必死になって走っている。叫び声をあげようにも、もうへとへとで声がでない。第一、こんなほとんど人のいないような場所で叫んだところでどうにもならない。よしんば誰かが気付いて少年のもとに駆けつけてくれたとしても、その人がこの黒いもややお化けをどうにかできるとは思えない。少年は途方にくれていた。誰かの家のドアを叩いて、その家にかくまってもらおうという考えもなかった。考えている余裕がない。滅茶苦茶に逃げているうちに、自分の家からどんどん遠ざかってしまった。

少年は泣きたくなかった。ああ、だから塾なんて行きたくなかったんだ。塾に通わされていなければ今頃は家でのおんびりしながらゲームをやっていたのに。こんな風に変なものに追いかけられるということもなかったのに。

ああ、あいつに捕まったらどうなるんだろう？きつと酷い目にあうんだろうな、下手したら食べられるかもしれない。大体あいつは何なんだよ、あんなのこの世の中にいるわけじゃないか！ここはゲームとかマンガの世界じゃないんだぞ、出るところ間違えているんじゃないのか？いや、そもそもこれは幻覚で本当は僕も誰にも追いかけていないんじゃないか。きつと夜に勉強なんてやったものだから頭が疲れているんだ。だからこんな幻覚が見えているんだ。ああ、そうだったらどんなにいいか……。

少年はそんなことを思いながら、もうとにかく文字通り必死になってその化け物から逃げている。いつまで走り続けていけばいいのかわからない。いつまで逃げていけばあの化け物はあきらめてくれるのだらう。少年は人間だから疲れがくるけど（現にもうへとへとだし）、相手は人間ではないから、そう簡単に疲れはこないはずだ。

だから少年が逃げるのを諦めてその場に止まってしまっただけで、少年を追い続けるに違いなかった。化け物は、きつとやろうと思えばもっと早く動けるのだらう。ただ、あっさり少年を捕らえてしまったらつまらないから、こうして大して速くないスピードで追いかけていているのだ。マンガがかかったら、あと少しでやられる！というところで正義の味方がやってきてくれるのだが。現実はその甘くない。

少年は、もう寒さなど感じていなかった。もう身体の中はキムチ鍋を食べたときのようになりポカポカしている。ポカポカを通り越して暑い。心臓がぎゅっと強く握り締められているかのようになって、痛い。喉が焼け付くように痛くて、カラカラしている。血でも吐いてしまっただけじゃないかと思うくらいに痛いし気持ち悪い。足がフラフラする。こんなに走ったのは生まれて初めてかもしれない。

気付けば少年は、町の中で一番暗くてじめじめしていて、ある意味一番危険なスポットである『おばけ通り』前までやってきていた。通りの左にある居酒屋は珍しく開いていない。戸の前に何か張り紙がしてある。何日かお休みするという内容でも書いてあるのだから。右にある雑貨屋はしんとしている。おばあちゃんももう寝ているに違いない。

『おばけ通り』に近付いてはいけない、と幼稚園の頃から母にいわれていた。いわれなくても、こんなに気味の悪い場所なんて最初から行かない。通りの入り口を塞いでいるバリケードに風が当たって、ガタガタいつている。バリケードの向こうには、最早家とも呼べないものが不気味に並んでいる。街灯など灯りの類は一切なく、その通りは暗黒に包まれていた。少年は絶対あそこには入るもんかと心に決めてとりあえずおばけ通りを無視して、右へ曲がろうとした。

少年は化け物がどの辺りにいるか確認しようとはっと後ろをみた。そして、心臓が止まるくらいに驚いた。

自分の目と鼻の先に誰かが立っていたからだ。

少年は枯れた声でぎゃつと叫んで後ろにさがった。足がふらついて、しりもちをついてしまった。少年は口から飛び出てしまいそうな心臓をどうにかして元に戻そうとしながら、恐る恐る顔をあげた。

少年の目の前に立っていたのは、一人の男だった。

二十半ばから三十歳位の男で、月の光のような白い肌に切れ長の赤い瞳。風に揺れる真っ直ぐでさらさらした髪は薄い藤色で、腰よりも長い。ありえない色ではあるが、不思議と違和感がない。

手足は細く長く、少し力を加えたら簡単に折れてしまいそうだった。髪の毛の色よりやや濃い色の薄地の着物を着ている。帯の色は黄色い。薄荷飴色の穢れなき月光が、男を背後から照らしている。

男の体は月の光を受けて、銀色に輝いている。その姿は、この世のものとは思えないくらい神々しくて、美しい。あまりに美しすぎて、気味が悪い。男は、少年をじっと見つめていた。その目は少年を見下すようにも、優しく包み込むようにも見えた。

「おやおや、こんな夜遅くに子供が何をしているのだろうね？ こは危ないよ、坊や」

少年は開いた口が塞がらない。なんとか言葉をつむぎだそうとするが、恐怖と驚きと寒さのせいで上手くいかない。

男はやや首を傾けて微笑む。男のくせにその仕草は妙に女らしく、また少しいやらしいものに見えた。

「なんだい、そんな間抜けな面して」

「あ、あんた……何なんだ……」

「何だかんだと聞かれてもねえ。私は私だよ。そういう君こそなんだい」

「……ば、化け物……に追われてる……んだ」

少年は震える体をおさえながら何とかそういつた。このどうみても人間ではない男、もしかしたら黒いもやもお化けの味方で、自分が油断している隙について二人がかりで自分を捕まえて食べてしまつかもしれない。男はそんな少年の震える右手をつかんで、少年を立ち上がらせた。その手は氷のように冷たくて、少年はその手から体温を全て奪われるのではないかと思った。

男は、さきほどから少年が自分の背後を凝視していることに気がつき、後ろを振り返る。そして、そこにいるものを見て、男は風で顔にかかった、絹糸のような髪の毛を右手で軽く払って、くすりと微笑んだ。

「ああ、あれ？ あいつ、弱いくせにしつこいんだよねえ。追い払うの結構大変なんだよ。まあ、いいか……しょうがないから助けてあげる。坊や、このまま君たち人間が『お化け通り』と呼んでいる通りを進みなさい。これを持ってね」

そう男はいつて、少年の右手に何か握らせた。それはとても暖かいもので、手袋越しにその熱が伝わってきた。少年は恐る恐る何かを握らされた手を開いてみる。

男が少年に握らせたものはどうやら鬼灯のようだった。大きさや色は普通の鬼灯と変わらない。が、中に入っている実は普通のものとは違っていた。

形と大きさは普通の鬼灯と同じだ。しかし、その実は普通のものとは違って、淡いややオレンジがかった光を放っていた。その光は

とても暖かいもので、ただ見ているだけで、少年は自分の冷えた体が温まっていくのを感じた。

「早くお行き。それをちゃんと握っているんだよ。それさえ握っていれば、あそこを通ってもなんともないからね。……しばらく真っ直ぐ進むと一軒の居酒屋が見えるはず。とりあえずそこに行つてかくまってもらいなさい。いいかい、ちゃんと握っているんだよ。握らなければ、いつになっても店にたどり着かないからね」

「で、でも……お化け通りにそんなものなんて」

「あるよ。君達人間には見えないから知らないだろうけれど。とにかくそれさえ持つていけば見えるから。ほら、早くお行き。ここは私がどうにかしてやるから。ああ、そうそう。店の中にいる人達は一風変わった奴らばかりだけど、驚かないでくれよ」

そういつて少年の体をお化け通りに向けさせて、背中をぽんと叩く。少年は一步二歩よろめき、男の顔をしばらく見た後、お化け通りへ向かってよたよたと走り出した。もう男があのもやもらお化けとぐるだろつが、お化け通りに入ったとたんにお化けに襲われようが知ったことか。少年はあまりに疲れていたために、半ばヤケになっていた。

男は少年が闇夜へと消えていくのを見届けると、律儀に待っていてくれた真つ黒お化けをその綺麗な瞳でじいつと見た。

「やれやれ。せっかく鬼灯でおいしいきつねうどんを食べようと思つていたのに。まあ私は優しいからね、困っている子供を見捨てることはできないのさ」

嘘つばい口調で話す男はあくまで冷静だった。真つ黒お化けが、むきよーと奇声をあげながら男に襲いかかった。男は妖しい笑みを

浮かべ、右手を振り上げる。

藤色の袖が淡い色の弧を描く。男の右手には金色の扇。扇の右下には淡い桃色の桜が描かれている。

男が右手を今度は勢いよく下ろす。男を中心に風が舞う、袖が舞う、そして、大量の桜の花びらが舞う。桜の花びらは、銀色の月の光を浴びてまぶしく輝いている。むせるくらい濃い桜の花びらの匂いが、暗く寂しいこの地を包み込む。

月下に桜が舞うその光景は、まるで夢のようであった。

男と、真つ黒お化けの戦いが始まった。

一方、そんなことが外で行われていることなど微塵も知らない『鬼灯』と愉快的仲間たち。酒の勢いもあってか、店の中はますます盛り上がっていた。

完全に酔っ払っている白粉は首をにゆるんと伸ばして主人の身体にそれを巻きつけた。その様子は支柱に巻きつく朝顔の蔓のようだった。主人は、抵抗する様子もなかったがあまり喜んでる様子でもなかった。主人の表情は狐の面に隠れてうかがい知ることができない。

白粉は、主人が抵抗しないのをいいことに主人の頬（というかお面）に頬ずりしたり甘い言葉を吐いたりとまやりたい放題やっている。主人の妻である柳は、困ったような表情でそれを見つめていた。

「旦那あ、あたしはね、旦那のことが死ぬほど好きなんだよう。ねえ、今度ある鬼灯夜行にさ、一緒に参加しようよ」

鬼灯夜行というのは、光る実の入った大きな鬼灯で作った提灯を持ちながら、妖の住んでいる世界にあるとある巨木を目指して歩い

たり、その木の下で飲み食いしたりする祭のことである。お祭り騒ぎが好きな妖にとつて、この祭は楽しみなもの一つだ。主人はゆつくり首を横に振った。

「残念だが、私は例年通り柳と行くことにしているのだよ」

「嫌だい、嫌だい。鬼灯の旦那あ。柳の姐さんよりあたしのほうがよっぽど綺麗だよ。ねえ、あたしと結婚しようじゃないか、ねえ、それがいい。きつといい」

白粉は、駄々をこねる童のようだった。まるで歌を歌うように「あたしを選べ選べ、そして共に行こう行こう鬼灯夜行へ」と主人にねだった。

「まったく、手のかかるろくろ首つすねえ。ああ、本当に鬼灯の旦那がかわいそうつすねえ。こんなのに惚れられちまって」

「お黙りよ、狸公。他人の恋路に口を挟むんじゃないよ」

「おお、怖い。柳さんも、何か言ったらどうつすか？」

「いつものことですから」

そういつて柳はほほほと笑った。本当に気にしていないのか、実は腹の底では「ふざけんなよ、このアマ」と思っているのかは分からない。とにかくこの女、何を考えているのかさっぱりわからないのだ。

「弥助さん、今の白粉さんに何言っても無駄ですよ」

小僧が焼鳥を頬張りながら言う。

「そうですねよ、酔っ払った白粉さんに言葉は通じません」

そういつて猪は酒を一気に飲み干した。口もないのにどうやって飲んでいいのかは不明だが、コップにはいつている酒や、皿に盛りだくさん豚の角煮は確実に減っているのだから、まあどうにかして飲み食いしているのだろう。

「本当、白粉は酒を飲むとやたら積極的になるな。この前は確か鬼灯の主人の仮面越しに接吻しなかったか？」

「ああ、そういえばしたっすねえ。接吻どころか、もっといやらしいことをしていたような気も……」

「ああ、うん。そういえば。酷いものを昔見たような気がする」
鞍馬は、そのときの事をおもいだしかけたのか咳き込んだ。

「鞍馬の旦那もあれ位積極的になればいいのに。酔った勢いで柳の姐さんに猛烈なアタック……ぐえっ」

また余計なことをいつて鞍馬の強烈な拳を腹につける弥助。

「貴様というやつは！ それ以上いつてみる、本当にその背中にある傷を広げてやるからな！」

「もう、冗談なのに」

「あらあら、弥助さん大丈夫ですか？」

「心配するな。この馬鹿は一回や二回くらい我の拳を腹に受けても死にはしない」

「それもそうですね」

「ちよ、貉……」

心配そうに弥助を見ていた貉も鞍馬のその言葉に納得する。弥助は腹を抑えながら涙する。

がらり。

戸がまた開いた。次の客が来たのだろうかと思われ、振り向いた弥助たちは目を見開いて驚いた。そこに立っていたのは妖でも、人ならざるものでもない、ただの人間だったのだから。人ならざるものたちは一目見ただけでそれが仲間なのか、ただの人間なのか見破ることが出来るのだ。

それにしても、この店を見る事が出来る人間がいたなんて。戸の前に立っているのは、まだ十一、二歳位の少年だった。少年は息を切らし、汗をだらだら流している。弥助たちはただただ呆然とその少年をみているのだった。

そんな彼ら以上に驚いたのは少年だった。男に言われるまま、気味の悪いおばけ通りを、噂通りお化けをみたり、危ない目にあうことなく少年は走った。

灯りのない道を月というライトを頼りに走る少年は、もの言わぬ化け物のような建物をなるべくみないようにしていた。しばらく走っていると、左側にぼんやりと橙色の灯りが見えた。ああ、あそこだと少年は確信し最後の力を振り絞って走った。そして提灯と暖簾のある建物の戸を思い切ってあけた。

そして、大いに驚いた。自分の目の前に広がっている光景に。赤い肌の天狗、顔のない娘、三つ目がある小僧、にゆるりと首を伸ばして狐面の男の体に巻きついている女。一番左に座っている男と、狐面の男、その男の隣にいる女は人間の姿であったが、人間である

かは怪しい。こんな光景をみて、驚かないほうがおかしい。驚かない人がいれば、拍手を送りたい。

少年はその場にへたりと座り込んでしまった。足に力が入らない。奥歯ががちと音を立てている。

「おやおや、人間さんの登場っすか？ 珍しいこともあるもんっすね」

「人間にはこの店は見えないのではなかったのか、主人よ」

「基本的には。ただ、何事にも例外はあるものだ。これまでも何回があつたよ、人間が入ってくるのが」

柳もあらあらといいながら手を口に当てているが、あまり驚いている様子はない。これまでも何回があつたから、そこまで驚かないのだろう。

「人間なんて珍しい。それにしても、可愛らしい坊やだねえ」

白粉の長い首は主人からはなれ、今度はしりもちをついて固まっている少年へと向かった。白粉の顔が少年の目と鼻の先までやってきた。少年はひいっと小さな叫び声をあげた。白粉は艶やかな笑みを浮かべ、いやらしい視線を少年に向ける。三つ目小僧は立ち上がって、白粉の顔の真横にやってきてしゃがみこみ、少年を三つの大きな目玉でぎよるぎよる眺める。

「へえ、こんなに間近で人間を見たのは久しぶりだな。ちよいと白粉さん、この坊やあんたを見て怯えているじゃないか」

「おや、あたしを見て怯えているんじゃないかえ？ お前のように顔に目玉が三方を見て怯えているのではないかえ？ お前のように顔に目玉が三

つついているなんて、人間さまからみればありえないことだからねえ」

「白粉さんのように、にゆるりと首が伸びる奴だって人間から見れば、ありえない存在だと思えますけど？」

三つの目が白粉を睨みつける。

「白粉さんも三つ目さんもやめてくださいな。その男の子は、私たち全員を見て怯えているのですよ」

貉は、なるべくその何も無い顔を少年に見せないようにしながら二人をたしなめた。その言葉に鞍馬がうんうんとうなずいた。

「そうだぞ。とにかくその少年をあまり驚かしてやるな」

鞍馬の言葉を聞いて、白粉は仕方なく首を元に戻し、三つ目小僧も席についた。

「そうっすよう。ほれ、坊主、大丈夫っすか？」

弥助は人懐っこい笑みを浮かべながらしりもちをついている少年に近付き、彼の右手をくいと引つ張って少年を立ち上がらせた。弥助が右手をつかんだとき、少年がずつと握り締めていた鬼灯がぼとりと落ちた。弥助はそれを拾い上げ、顔をしかめた。

「げ。こりや通しの鬼灯じゃないっすか。なるほどね、これさえ握っていれば人間には見えない」向こう側の世界』も見えるし、双方の世界を行き来することもできる」

少年は、何がなんだか分からずただその場に立ち尽くしている。

「なんでただの人間が、そんなものを持っておるのだ？」

「さあ？ でもこの鬼灯は貴重品で、もっている奴はほとんどいな

い。あつしが知っている中でこれをもっている奴といえば、あの馬鹿狐くらいのものつすよ」

弥助はその「馬鹿狐」の顔を思い浮かべて顔をしかめた。

「あ、あの……おばけ通りの、い、入り口でもらったんだ。藤色の髪の毛の、き、綺麗な男の人に」

少年はひきつった声で、やっとこさつとこそ言う。

「藤色の髪の毛で綺麗な男の人、となれば出雲しかおらん」

「あんな腐れ外道のどこが綺麗なんだか」

弥助は、出雲を嫌っているのかもものすごく嫌そうな顔をしながらいう。少年は、そんな弥助の背中に回ってびたりとくっついて、鞍馬や貉の顔を見ないようにした。弥助はそんな様子を見て苦笑いする。

「いやだなあ、そんなにびくびくしなくてもいいのに。こいつらは確かに見てくれは怖いかも知れないっすが、いい奴らばかりつすよ。不用意に人間を襲って食つちまうことはないっすから、安心しておくれ。まあ、あのろくろ首は危険だから近付かないほうがいいっすけどね。とって喰われちまうよ」

白粉の元々酒を飲んでいるせいで赤くなっていた顔がますます赤くなった。

「ちょっと、なんだいそれは、どういうことだい！ あたしはねえ、人間のガキ食う趣味はないよう」

「あんたの場合は、別の意味で食つちまいそうだ」

「いやらしい奴だねえ、あたしは年下には手はださないよう」

「まあ、とにかく椅子にすわりなさいな。一番はじつこの椅子でいいっすか？」

弥助は白粉の言葉を無視して、まだびくびくしている少年をさっきまで自分が座っていた椅子に座らせた。そして皆座る場所を一つずつ右にずらしていった。

鬼灯の主人は、あつあつのおでんを皿にもって少年に手渡した。少年はびくびくしながらそれを受け取り、自分の目の前に置いた。が、食べるのをためらっているのか、箸を持たずにその皿をただじいっと眺めている。皿にのっているのは、卵に大根にこんにゃく、ちくわに白はんぺんと自分の家で食べるおでんと何ら変わりはない具だった。しかし、見た目はそうでも実際味まで同じかは分からない。もしかしたら、変なもののだしを使っているかもしれない。材料だって、人間の世界のものと同じとは限らない。

「心配しなくてもいいっすよ。ここで出る食べ物は一基本的に人間の世界で出るものと同じ味付け、材料っすから。毒もゲテモノも変なものも入ってないっすから」

弥助が優しくいう。少年は、しばらくは皿とにらめっこを続けていたがやがて空腹と匂いに負けたのか、箸を持ち大根を一口サイズに切り分けると恐る恐るそれを口にいれる。しばらくは目をつむり、ゴキブリでも食べているかのような表情でそれを噛み続けていたが、徐々に驚いた表情を浮かべていった。そしてごくりと大根を飲み込むと、弥助たちの前で初めて警戒を解いたほっとしたような表情を見せた。

「……おいしい。お母さんが作るのよりずっとずっとおいしい」

その言葉を聞いて、一同はほっと胸をなでおろした。少年は、大根を、卵を夢中になって食べた。よほどおいしかったのか、あつと

言う間に全て平らげてしまった。

「おいしかったですか？」

「うん。おいしかった」

その言葉をきいて柳が嬉しそうに微笑んだ。少年はその笑顔にどきまぎして、思わず顔を伏せてしまった。鞍馬もまた、同じように顔を伏せた。

「ところで、何故君はこんな夜中にこの店へ？ 何故出雲さんから、あの鬼灯を？」

貉が聞くと、少年のやや照れたような顔があっという間に暗くなっ
っていった。

「それが……。塾の帰り道に変な真つ黒のもやもやしたお化けに会って。そいつにずっと追いかけられていたんだ。それでもって、このお化け通りの近くまでやってきたら藤色の髪の毛の男の人……出雲さん、だっけ？ その人に会ったんだ。そしてその人からこの鬼灯をもらって、しばらく走ったところにある店ですばらくかくまっ
ってもらえていわれたんだ。後は自分がどうにかするっていつて」

「なるほどね。まあ、どうせ雑魚だろうし出雲さんだったらあつと
いう間に倒してしまっしょうよ」

「それもそうだな。この馬鹿狸とは違って、出雲はああいうものを
払う能力に長けておるからな」

「あ、あっしだっちゃんとできるっすよ」

「嘘いえ。人間の姿に化けるのがやっとのくらいの力しかもってお

らぬくせに。魔を払う力だってほとんどないではないか。いつだったか、自分よりも遙かに劣る自縛霊にあやうくとり殺されそうになつていたではないか」

「そ、それは鞍馬の旦那がつくつたでたらめな記憶つすよ」

「はいはい」

鞍馬はそれを軽く聞き流すと、酒をぐいぐい飲んだ。三つ目小僧は夕ご飯をめいっばい口の中に放り込んだ。白粉はまた主人を誘惑しようと、首をにゆるりと伸ばした。少年がそれを見て、ひいと悲鳴をあげる。

「これ、白粉。この少年がいる間は、その首を伸ばすのはやめろ」

「そんなあ、あんまりですよ、鞍馬の旦那。なんであたしが勝手に転がり込んできた人間の為に、愛する人への誘惑をやめなくてはいけないんですか」

「そんな方法で誘惑しても、鬼灯の主人はなびかんわ、馬鹿者。そんな気味の悪い首に巻かれたって主人は喜ばないぞ。むしろ嫌がるのではないか？」

「そうつすよ。それに主人には柳の姐さんという素敵な奥さんもいるんですからね」

「全くです。いい加減あきらめなさいよ、白粉さん」

「同感だね。どうせなにやっただって無駄だよ」

「しつこい人って嫌われるんだよね」

少年までそんなことをいう。

「ああ、もうなんだって皆あたしを目の敵にするんだい」

そういつて白粉は口を尖らせた。だが、結局は大人しく首を元に戻し、そしてカウンターに顔を突っ伏して泣き出してしまった。だが誰も彼女を慰めない。何事もなかったかのように酒を飲み、飯を食う。ようするに「いつものこと」なのだ。いつものことだから、かまう気にならない。

「いいの、あの人あのまま放っておいて。僕余計なこと言っちゃったけれど」

少年は弥助に耳打ちする。弥助はニヤニヤ笑って、

「いいんですよ、あいつはいつも酒を飲むと一人盛り上がっては泣き、盛り上がっては泣きを繰り返しているんですから。あの状態の白粉には何を言っても無駄ですしね。いつものことっすから、いちいち相手にする必要もないっす。まあ、あんな奴は放っておいて、どンドンお食べよ。もつの味噌煮込み、美味いっすよ。あまり食べたことないっすか？」

「もつとか、あまり好きじゃない」

「そうっすか。それは残念っすねえ。それじゃあ、味噌田楽とかどうっすか？」

「あ、それ美味しそうだね」

少年と弥助はすっかり打ち解けたようだった。鞍馬の顔にも少しずつ慣れてきたのか、ややおびえつつも少しずつ言葉を交わすようになった。

「少年。貴様はどんな食べ物が好きなのだ」

「え、えっと……カレーライス、かな。お母さんのつくるやつ、とってもおいしいんだ。えと、カレーライス……っていったって、わかる？」

少年はやや身を乗り出して心配そうに鞍馬を見た。鞍馬はやや首をかしげた後、小さくうなずいた。

「辛いらいすか、この前弥助から聞いたことがあるぞ。やたら辛い食い物らしいが、そんなに辛いのか」

「うん、まあ……甘口か辛口かによって変わるけど、辛いかな。でもずっと煮込んでいると野菜とかお肉の甘さがでてきて、味がまるやかになるよ。一晩ねかせたカレーとかは大分辛くなくなって美味しいんだ」

少年は、甘い味噌がたっぷりぬられた味噌田楽にかぶりつく。

「そうか。山葵と七味唐辛子とその辛いらいす、どれが一番辛いのだ？」

「え、ええ？ど、どれだろう……分からない。辛さの部類が違うし」

「そうか。我は辛いものは好きだからな。今度弥助に持ってきてもらおうか。……そういえば弥助。雨傘が足を折る大怪我をしたことは聞いているか」

「雨傘……ああ、からかさおばけの雨傘っすか？ そういえば、そんな話を聞きましたね。一本しかない足を折っちゃったものだから、すっかり身動きがとれなくなって寝たきりになっているとかで」

「おばけも怪我するの?」

「そりゃあするっすよ。怪我もすれば、恋もするし、ケンカもする。あつしの隣にいる天狗の、鞍馬の旦那だって先日魚は頭から食うかじっぽから食うかで化け猫と大いにもめて鼻をへし折られたし、あつちにいるのつぺらぼうの貉は顔がないからつて好いてた男に振られるし、厚化粧のろくろ首の白粉は、あつしや三つ目のあの坊主としょっちゅうケンカしているし。あつしも、人間の娘に恋しているし、ライバル兼悪友と呼べる馬鹿狐がいるっすよ。ああ、その馬鹿狐つて言うのは坊主がさつき会った出雲という化け狐っすよ。まあ、妖も人間も姿かたちは違えども大した違いはないということっすよ」

弥助はそういつてにかつと笑つてみせた。貉は弥助の言葉で自分が振られたときのことをまた思い出したらしく、急にしょんぼりしながら柔らかく煮込まれた葱をもぐもぐと力なく食べる。三つ目は、その三つの目を弥助にくぐぐつと向けた。

「人間にいたずらする奴や、人間を食つちまう奴だつてたくさんいるよう。白粉姐さんだつてねえ、昔はよく人間どもを驚かして楽しんでたものさ」

未だ顔をあげようとしない白粉がくぐもつた声でそういつた。みんな、うんうんとうなずいた。

「今は、人間との関係が薄れてきちゃつたからね。あまりこつちの世界にきていたずらしたり、人間を食べたりする奴はいなくなりましたけど。人間は、お化けのことなんて信じなくなってしまったから」

三つ目が、やや寂しそうに言った。昔、たくさんの人間を驚かしてきやつきゃと笑つていたときのことを思い出したのかもしれない。た。

人間は、科学の技術という現実的なものばかりを信じるようにな

り、非現実的なことをないがしろにするようになってきた。昔は、人間と妖や神は時に争ったり、共存したりしていたというのに。今は、もう双方に関係性というものがなくなってきている。

「ねえ、さっき言っていた『向こう側の世界』と『こちら側の世界』って何なの？なんでないはずの店があるの？」

「ううん、上手く説明はできないんですけどねえ……。まず『こちら側の世界』というのは、坊主たち人間や他の生き物が暮らしている世界のことです。そして『向こう側の世界』というのは、あつしら妖や幽霊、神様や精霊などといった……。まあ坊主たちから見れば空想上の存在である奴らが暮らしている世界のことです。『向こう側の世界』は『こちら側の世界』にびつたりと重なっている」

「うん」

「それですね『こちら側の世界』では、あつしら今いるこの場所にはぼろぼろの壊れた建物があるだけなんです。『向こう側の世界』では、この場所にはこの居酒屋がある。坊主が今いるこの居酒屋は『向こう側の世界』です」

「はあ」

「同様に、坊主の住んでいる家があるところも『向こう側の世界』では坊主の家じゃなくなって全く違う家が建っている。もしくは何もなかったか……。訳が分からないって顔ですね。だからあつしは説明なんてしたくなかったんですよ。まあいいや、どんどん先へ進んでしまえ。だけど、坊主は普段この『向こう側の世界』にある居酒屋を見る事はできない。見る事が出来ないから入る事も出来ない。同様に『向こう側の世界』の住民も『こちら側の世界』にあるものを見る

事が出来ないし、行き来することも出来ない。たまに『こちら側の世界』の住人が『あちら側の世界』へ行ってしまうことはあるっすけどね。ただ『こちら側の世界』へ戻る方法が分からず、帰れなくなってしまうというのが大半らしいっす。それが坊主たちのいう『神隠し』って奴っすよ」

「ううん。よく分からないや。……でも、なんで僕この店を見る事が出来たの？あの鬼灯のおかげ？」

「そっつす。あの通しの鬼灯というのは『こちら側の世界』に重なって存在している『向こう側の世界』を見る事が出来る。反対に『向こう側の世界』に重なって存在している『こちら側の世界』を見る事もできる。見る事が出来れば、その場所の存在を認識することが出来る。だから、行くこともできるっすよ。昔は、そういうものがなくてもある程度自由に行き来ができたんですけどね。ただ『こちら側の世界』、すなわち坊主達人間が『向こう側の世界』の存在を否定するようになってから少しずつ二つの世界に大きな隔たりができてしまっつて、今では簡単に行き来できなくなっつてしまっつたんすよ」

弥助はそれだけ言っつと、説明するのをやめた。自分の力では説明しきれないと判断したからだろう。他の者達も補足する気はないようだった。少年としても、これ以上説明されてもいまいち理解できないからいいやという感じだった。

「とにかくこの世界は、僕達の住んでいる世界だけって訳じゃないっつてことはなんとなくわかつたような気がする。そういえば、あの出雲っつて人……」

どうしたんだろう、と少年が続けようとしたところでがらっと戸が乱暴に開いた。戸から、氷を含んだ風が吹いてくる。戸を開けたのは、出雲だった。やや息は切れ、美しくまっすぐな髪の毛はや

乱れている。乱れた髪が顔にかかっているが、それを払う気にもならないようだ。しかし、髪が顔にかかる様子も美しい。やや汗ばんでいる白くしなやかな手足が、銀の光を含んで光っていた。

「いらつしゃい、出雲」

主人は驚いた様子もなく酷く落ち着いた調子で出雲を出迎えた。

「こんばんは、鬼灯の主人。全く、誰も手助けしてくれないなんて酷いじゃないですか。恨みますよ、祟りますよ、呪いますよ」

男は心底恨めしそうに文句を言った。低くもなく、高くもないその声は薄荷の月光を吸い込んで透き通ったものとなっていた。だらりと下げた右手に握られている扇からは仄かに桜の匂いがした。

「だって、あんたが引き受けたことでしょう。あつしらには関係ないっすよ」

「お黙り、この馬鹿狸」

出雲が弥助をきつとにらむ。が、弥助は意にも介さずに平然とした顔で酒を飲み続けている。貉と三つ目は申し訳なさそうな表情をしていた。

「まあ、よいではないか。どうせ雑魚だったのだから。貴様一人で充分だっただろう」

「まあそれはそうだけれど。ところがあいつ、本気を出すとやたらすばしっこくて。おまけに数え切れないくらいの仲間を呼ぶわ、親分的存在を呼び出すわで。しかもそいつらが四方八方に散らばってものすごい速さで走り出すし。全く。思ったよりもずっと時間がかかってしまったよ」

「ははん、それでずっと追いかけてこをやっていたんっすか。出雲は本当に体力がないっすからねえ。よく全部倒せたっすね、えらいえらい」

「全く、腹の立つ奴だ。私はお前のような、体力と怪力だけが取り得の阿呆とは違うんだよ。私は、いつだっておしとやかに、静かに生きているのだから。早足でバツバツと駆けるのは性にあわないのさ」

「へいへい。まあ、とにかく雑魚は倒したんでしよう。だったらいいじゃないっすか」

「ああ、そうだね。そうですね。本当に。鬼灯の主人や、私にきつねうどんといなり寿司をおくれよ」

「了解。柳、いなり寿司のほうを四つほどだしてやってくれ」

「はいな」

柳は甘く煮た油揚げの中に、同じく甘く煮たしいたけとにんじん、れんこんをまぜた酢飯を丁寧にいれて、さっと包んでやった。慣れている作業なのか、あっという間に作り終えて、それを、右端に座った出雲の前に置いた。

出雲はまるでまたたびをもらった猫のような、うっとりとした表情でそれを見ながら、いなり寿司を一つ手にとって頬張った。口の中に入れると、油揚げの油と甘味が交じり合い、そしてそこに酢飯の仄かな酸味加わる。口の中に広がる甘い味と酸味が、なんともいなかった。噛めば噛むほど甘くなり、酸味も増してくる。またれんこんのしゃりしゃりという音がたまらなく心地よい。

「うん、やっぱり鬼灯の旦那さんのいなり寿司も美味しいねえ。とある弁当屋のいなり寿司も同じくらい美味しいのだけれど。この昔から全くかわらない味、本当に一口一口ゆっくり噛む度に、ああ生きていて良かったと思えるよ」

「そんな大げさな。出雲の旦那は将来、いなり寿司と結婚しちまいそうだねえ。あれもつたいない、とつてもいい男なのにさ」

「いや、私とてさすがにいなり寿司と結婚はしないだろうよ。そんなの、人間と妖怪が結婚するようなものじゃないかい」

そういつて出雲はタコの足一本丸ごと揚げられたものと格闘している弥助をちらりと見た。

弥助が急に不機嫌になる。

「いなり寿司と朝比奈さんを一緒にされては困るっすよ」

「きつねうどん、できたよ」

「おや、きつねうどんができたのかい。どれ、早速いただくか」

「ちよ、無視っすか」

出雲は自分からけしかけておきながら、弥助をまるつきり無視して柳からきつねうどんの入ったどんぶりを受け取った。そして箸を手に持ち、手をあわせる。

「お前と話す時間がもつたないよ。うん、今日もいい香りだねえ。今度、どうやってこのおいしい汁を作っているのか教えてもらいたいものだよ。まあ私は料理はできないけどね」

「作り方は、企業秘密ですよ」

「あれ、それは残念」

出雲はそういうと、白くてこしのあるうどんをすすり、油揚げを一口食べる。稲荷すしの油揚げとはまた違う、甘い味がした。

「あつしからすれば、狸そばの方が何十倍も美味しいとおもつんですがねえ」

「私にとっては、きつねうどんの方が何十、いや何百倍も美味しいのだよ。うん、冷えていた身体があつと言う間に温まったよ」

「ごめんなさい、僕のせいで」

冷えていた体が温まったという言葉を自分に対する「お前のせいであんなものと戦わされて、すっかり体が冷えたんだよ」という意味の嫌味だと思った少年は申し訳なさそうに言った。出雲は不思議そうに首を傾げる。

「何故君が謝るのだね？ 気にしなくてもいいよ、私は月の光のように心が綺麗だからね。困った人を見過ごすことは出来ないのだよ」

「何が月の光のように綺麗な心だ。白いイカが体の中に真っ黒なイカスミをもっているのと同じように、体は白くて心は真っ黒のくせに」

「あんな馬鹿狸のことは信用してはいけないよ。時に少年、君はきつねうどんとためきそば、どちらが好きかい？」

出雲は満面の笑みを浮べて、少年に問うた。その笑顔はどこか怖い。弥助も気になるのか、隣にいる少年をじっと見つめた。

「二人ともまたやっているし。きつねうどんとためきそば、どっち

が美味しいかってことを。僕からすればどちらも美味しいと思うのだけれどね」

三つ目の言葉に、狛が同意する。だが、あの二人にとっては重要な問題なのだ。少年は、弥助と出雲の真剣なまなざしに困惑したが、やがて素直に答えた。

「僕は、きつねうどんのほうが好きだよ」

出雲が満足そうな顔で微笑み、弥助ががくりと肩を落とした。ものすごく悔しそうだ。

少年は、素直な気持ちで答えた。少年は、蕎麦よりもうどんが好きだった。天かすよりは、油揚げの方が好きだったのだ。

「や、君は話わかる子だね。そうだよねえ、あの白くてつるつとされていて、それでいて餅のようにもちもちしたあの麺。そして、やや甘い油揚げが汁を吸い取って、それでもってその汁たっぷりの油揚げをかみしめると……ああ、本当に天にでも昇りたくなるような気持ちになるよ」

「でも、別に蕎麦も嫌いじゃないよ」

少年は、滅茶苦茶に落ち込んでいる弥助をなくさめるようにいった。弥助は、いじいじと右手の人差し指で延々とのの字を描いていた。

「いいんですよ、ええ、いいですとも。坊やの慰めなどいりませんよ。大体ね、おこちゃまには分からないっすよ、あの蕎麦のなんともいえない優しい香りと、天かすのあのなんともいえない味やかき揚げの甘みと食感は大にしか分からないんですよ、ええそうですとも」

いじける弥助を出雲がにやにやしながら見つめた。ほら見る、私のほうが正しかったろうといたげな表情だった。完全に勝ち誇っ

たような顔だった。

「おや、つまりそれはこの私もお子様ということかい？心外だね、君にお子様といわれるほど私は幼稚ではないよ」

「おにぎり一つも握れない奴が何いつてるんすか」

「出雲、貴様握り飯一つつくれぬのか」
鞍馬が呆れたようにいう。

「うわ、嘘、まじで？ 僕だっておにぎりくらいは握れるよ」

たかが十一、二年しか生きていない少年にまで馬鹿にされる始末だ。

「別におにぎりなど握れなくてもどうにかなるでしょう。それにおにぎりが握れないからお子様だなんて滅茶苦茶すぎやしないかい？
そういう単純な考え方しかできないお前の方が、余程お子様ではないのかね」

「二人とも、お子様だと思います」

貉が、小声でそうぼそりとつぶやいた。それを聞いた柳と鬼灯の主人が笑いながらうなずいた。

「旦那あ、あたしは大人だからね。あんな狸公らとは違うからね。あたしには、大人の魅力があるんだよ。ね、だからあたしと鬼灯夜行に行こうじゃないか」

もう首を伸ばしても平気だろうと勝手に判断した白粉が、また首をのばして主人に絡みつく。

「って、まだ諦めていなかったんですか白粉さん」

三つ目小僧はやってやれないわもつという顔だ。

「悪いけど、何度誘われても私はいとは言わないよ。諦めて他の者といきなさい」

「嫌だよう、ああもう冷たいねえ主人はさ。でもそういう冷たいところが好きなんだけどね」

といて、主人の狐面をぺろりと舐めた。その光景をみていた皆は、ただ顔をひきつらせるばかり。柳は困ったような笑みを浮かべながら、白粉の首をぐいと掴んだ。微笑みながら。

「あらあら、あまりお痛がすぎると私も黙ってませんよ?」

いう柳の、首をつかむ手の力がどんどん強くなっていく。白粉は青ざめながら「はいごめんなさい」と謝るしかない。結局するすると元に戻っていった。柳は満足そうに笑いながら、主人に寄り添った。本当に恐ろしい女である。

時間は流れる。

少年は、家に帰ることもわすれて、妖達とおしゃべりをしたり美味しい料理を食べたりした。鬼灯で食べる料理はどれも美味しく、食べても食べても食べたりない気持ちになる。特に少年が気に入ったのは鶏肉にほお葉味噌を塗って焼いたものだった。

月は、より一層美しく輝いている。空を満たす氷水は、ますます冷たくなっているようだった。

ふと、酒を飲んでいた出雲がつばやいた。

「あれ、ところで少年君。君はいつまでここでのんびりしているつもりなんだい」

「え、あ、そういえば、今何時!？」

少年は時間が経っていたことも忘れていたらしい。たこ飯のたこが口からポロリと落ちる。

貉と三つ目はさあ?と首をかしげた。妖達にとって時間の経過というのはあまり重要ではないからだ。弥助が、腕時計をちらりと見た。どうやらこの町にある時計屋で買ったものらしい。

「ああ、もう今は夜の十二時っすねえ。こんな時間まで帰ってきていないのでは、家族も心配しているんじゃないっすかね」

少年の顔がみるみるうちに青くなっていた。まるで、一番最初にこの店に入ってきたときのような表情を浮かべている。

「どうしよう!どうしようどうしよう!うわあ、叱られるどころじやすまされないよ、どうしよう!」

少年は、もう今にも泣いてしまいそうで、いやもう目にはうつすら涙が浮かんでいる。頭を抱え、その場でタコのようにくねくね悶える。何故少年がここまであわてているかわからない三つ目や鞍馬、貉に主人に柳はぼつとした表情を浮かべている。そして皆して首をかしげるのだ。

「はて、どうしようかね」

「出雲、あんたが適当に家族に術でもかけたらどうですかね。この少年君はいつもと同じ時間に家に帰って来て、風呂に入って寝たってことにすれば」

「そうだねえ。どうにかして君が怒られないようにしなくてはいけないね。さて、君。帰るとしようか。主人、お土産でも持たせてあげればどうだい?」

「それもそうだ。それでは、いなり寿司とたこ飯をつめて、土産にしましょう」

そういつて早速主人は準備にとりかかった。弥助はよっこらせといすから立ち上がる。どうやら、桜町に人間として住んでいる彼が、少年を家まで届けてくれるらしい。出雲もついてくるようだ。少年は、できることならここにもつといたいと思った。確かにのっぺらぼうや三つ目小僧の顔を見るのはまだ怖い。でも、この雰囲気はなんだかとてもいいし、料理は美味しいし、なにより暖かい。自分の家も好きだが、ここも好きになれそうだった。

でも、もう行かなくてはいけない。眠いし、あまり遅いと大変なことになるし。それにここは、自分のいるべき世界ではないのだから。

それが分かっていてもやはり寂しい。できればまたここへ来て皆と話したり、美味しいものを食べたりしたいと思った。

「ああ、もうここにはこられないんだね」

「しょうがないよう。ここは元来人間の来るところではないんだからさあ。でも、その馬鹿狸と出雲の旦那は、坊やのいるこの町の中をフラフラしているから、いつか会えると思うよう」

「そうなの？」

「あつしは、桜山の近くにある小さな喫茶店の『桜』SAKURAで働いているつすよ。休日くらいなら遊びにこられるんじゃないですかね？あつちの馬鹿狐は商店街を夕方くらいになるところろしているつす。まあ、鞍馬の旦那や白粉、貉に三つ目は普段は人間の前に姿を現しませんからね、会うことはないでしょうが」

「本当は通しの鬼灯を君にやりたいところなのだがね、これは貴重なものだからあまり簡単にやれないのだよ。まあ、気が向いたら君をここにまた招いてあげよう。気が向いたらただけどね」

「本当？」

「私は嘘はつかないよ」

「万年エイプリル Fool 男の癖に」

「訳の分からない呪文を言うでないよ、馬鹿狸」

「お土産」

弥助や出雲にはいつでも会える可能性があること、そしていつかこの居酒屋にまた来られるかもしれないということを聞くと少年は途端に嬉しそうに笑った。そして、うきうきとしながら、紫色の風呂敷に包まれた土産を受け取るのだった。

「それじゃあ、さようなら。今日は楽しかった」

「まあ、また縁があれば」

主人がそう一言言った。また会えるかどうかは出雲の気分次第ではあるが。弥助が戸をがらりと開けた。

外から、しびれるような冷たい風が吹き込んでくる。白粉がぶるつと身震いした。

「ああ、酔いが冷めちまうよう。まあ、さっさとっておくれ」

白粉が少年の姿を見もせずにてを振った。少年は、ゆっくりと外に出た。

「まあ、この子を送ったらまた店に戻るよ」
そういつて出雲が戸を閉めた。

夢から覚めそうな冷たい風と、月の光に照らされた途端少年は急に眠くなってしまった。

少年は、それから先の事を覚えていない。

少年が気付いたときには、もう朝で、少年は自分の部屋の布団で寝ていた。外から暖かい光が射し込んできて、少年の体を温める。小鳥達が朝がきた喜びを歌にする。

少年はできるだけゆっくり階段を降り、恐る恐る台所で食器洗いをしていた母に「おはよう」と言った。母はいつもと変わらない笑顔で彼を迎えた。出雲と弥助が怪しい術を使って家族の記憶を変えたのだろう。

あるいは、あの夜のことは夢だったのかもしれないと少年は肩を落とす。しかし、冷蔵庫にあの紫色の風呂敷に包まれた箱が入っているのを見ると、ああやはり夢ではなかったのだと思った。

少年は、家から帰ってきたら早速食べようかなと思った。

また、会いたい。会えればいい。少年は心の底からそう思ったのだった。

世界が闇に染まる頃、居酒屋『鬼灯』は開店する。人知れずあるその居酒屋では今日も妖たちが集って、笑ったり怒ったり、ケンカをしたり泣いたり、おいしい飯に舌鼓をうつのだろう。その店は『こちら側の世界』にいる私たちには見る事はまずできない。けれど、ふとしたきっかけで我々にも『向こう側の世界』にあるその店を見る事が出来るかもしれない。そして、その店に入って、妖達と美味

しい料理を食べたり、美味しい酒を飲んだりすることができるかもしれない。

貴方の住んでいる町のどこかの『向こう側』にはもしかしたらそんな店があるかもしれない。そう考えると、この世界で毎日過ごすのも少しだけ、楽しくなるかもしれない。

第三話：鬼灯夜行（1）

昔々のこと。

桜村には、一人の巫女がいた。巫女の名は、桜。

頭から滝のように真っ直ぐ流れるたおやかな黒髪は、地についてもなお流れ、日を受けた清水の如く輝く。肌は白粉いらすの真白の雪、眉は丸くくつきりと。睫は長く。瞳は大粒の黒真珠。口にさした紅の色、よく熟れた林檎の色。白衣の下に赤い衣、花椿の色をした袴の巫女装束は、彼女の姿を神聖なものへと昇華させる。衣から仄かに香るのは桃の花の匂い。

その華奢で儂い体の内に秘めたるは、強大な力。村や山に蔓延る奇想天外にして摩訶不思議なる魑魅魍魎どもを、靈験あらたかな神木より造られた弓矢を以て滅する。雨を乞えば、命の雨が大地を、田を、木々を潤す。また、医者さえ治せぬ重き病を神より与えられし力で治す。先に起こることを予知することもあった。

桜は非常に強い心の持ち主で、どんな怪しき者にも、どんな恐ろしい姿をした者にも臆することなく立ち向かっていった。その姿、遙か昔に山より出でし大鬼に一人立ち向かったという大男よりなお逞しい。どんな女よりも女らしい美しき姿でありながら、どんな男よりも男らしい強き心を持っていた。

さて、桜村にある桜山には一匹の狐がいた。その狐は長い時を生きている化け狐であった。化け狐、畜生の分際で出雲なる大層な名前を持っていた。出雲なる狐、山に入る人々を鋭い歯で次々とかみ殺し、その者らの肝を喰らっては力を蓄え、その力はすでに強大なものとなっていた。

出雲、ある日強大な力を持つ桜の存在を知る。

「そこらにいる人間の肝を何千何万喰らうより、その巫女の肝一つ喰らうほうが余程よいだろう。怪を滅し、雨を降らし、病を治し、先の世を視るその力、我がものにしようぞ」

ある日桜村に一匹の狐が現れた。真白の雪をかぶったかのような色の身体は並の狐より一回り大きく、それでいて細くしなやか。瞳は柀の実のように赤い。鋭い歯には赤黒い血がこびりつき、尾は九つに分かれていた。この怪しき狐こそ、出雲なり。

出雲、罪なき者に次々と襲い掛かり彼らの命をことごとく奪い去る。悲鳴をあげ、泣き喚く女子供にも情け容赦なく襲い掛かり、殺していく。若い男衆、火矢を放ち、大きな石を放つも、出雲に傷一つ負わせることもかなわず。村人たちには成す術なし。騒ぎを聞きつけて、桜が社をでてみれば目の前に広がるのは真紅の血の海。聞こえるは、出雲が村人の首の骨を噛み砕く音、痛みと恐怖入り混じる村人たちの呻き声。呆然と立っている桜に気づいたのか、出雲は口から血と肝と肉を滴らせながら、おぞましい笑みを浮かべる。

「これ以上村人たちを殺されたくなければ、お前の肝をよこすが良いぞ」

「さては、私の力が目当てか。ならぬ、貴様のような怪に、この力を渡すわけにはいかぬ。貴様に我が肝を渡しはせぬ」

「ならば、村人たちが皆死んでも良いのか」

「皆が殺されてしまう前に貴様を倒せばよいだけのこと」

桜、出雲の事など恐れもせず、真つ直ぐな瞳で出雲を見る。出雲、全くおのれを恐れぬ桜に苛立ちを覚え、一声鳴くと桜に飛び掛つていく。その姿、迷うことなく的の中央めがけて走る矢の如し。

桜は、逃げることなく、凜とした表情で弓を持ち、己の力をこめた矢を出雲に向けて放つ。その矢、迷うことなく出雲の心の臓を狙うも、出雲の放った狐火に、跡形残らず燃やされた。

桜と出雲の戦いは三日三晩にも及んだという。どちらも互いの技に傷つき、疲れ果てたが、一瞬でも隙を見せようものなら相手に殺される。お互い、己が強き心のみで立ち上がり、戦い続ける。朝も夜もなく、晴れも雨もなく、ただただ戦い続けるのみだった。

そして、黄色い陽が鬼灯色に変わる頃決着はようやくついた。

桜が、地にどうと倒れたのだ。いかに強き力を持つ巫女なれども、その身は人。かよわき女子おんな。長い時間、一時の間も休まずに戦い続ける事は、不可能であった。桜、雪の如き白い肌を袴の色と同じ紅に染め、その口からも紅の血を吐き、少しも動かない。出雲の嘲笑う声が耳に届くが、もう口を開くことかなわず。ただ、ああくやし、くやしい。おのれ、この化け狐がと心の中で悪態をつくばかり。

もう少しも動けぬ桜を見下ろす出雲、傷だらけになり、朱に染まった体を大きく揺らし、己が勝利を喜んだ。

「所詮貴様もただの人か。無様よの。さあ、貴様の肝と力、頂戴しよう」

出雲、一言そういうと、虫の息の桜の喉もとにがぶりとかみついた。桜、一声何か叫び、そして息絶えた。出雲は、朱に染まった装束ごと桜の肉を食いちぎり、その美しき体の中にある肝を喰らい始める。生きていた村人達は成す術もなく、ただただその様子を見て

いるしかなかった。

あつという間に桜の肝を喰らった出雲は、こおんと一声嬉しそうに鳴くと、そのまま山へと消えていった。村に残ったのは、村人の屍と、血と、抜け殻のようになった人々、そして桜の無残な姿。

出雲、己の中に湧き上がる力に興奮し何やら叫んでいる。勝利を喜び、強大な力を入れた事を喜んだ。体の傷はみるみるうちに消え失せ、疲れもどこぞへと吹き飛んだ。

「噂の巫女の力、確かに本物だったようだ。なかなか美しき巫女だった。何より強かった。もしかしたら我の方が負けていたかもしれないぬ。あの巫女、殺すにはちと惜しい人間だったかもしれない。まあ、よい。そんなことは関係ないのだ。とにかく、我は強大な力を手に入れたのだ、嬉しきことよ」

あまりに嬉しいのか、あまりに体の内から湧き上がる力が強大すぎるのか。出雲は一匹で歌いながらあつちへ行き、こつちへ行き、あちこちを跳ね回る。その様子の滑稽なことといったらない。

と、しばらくたった時。出雲の動きがぴたりと止まる。そして次の瞬間苦しそうに呻き、暴れだした。

「やや、なんたること。痛い、痛い、苦しい。何だ、体の中が熱い。胸が苦しい。痛い、痛い。何かが、何かが我の体の中で暴れているようだ。さては、さてはあの巫女の魂が」

桜の魂、出雲に喰われながらもなお出雲を殺そうと、出雲の体内を縦横無尽に駆け回り、暴れ続ける。

「おのれ、我を殺す事を未だ諦めていないというのか。くそ、痛い、苦しい、苦しい、痛い、熱い、熱い、熱い、熱い、ぐああああ」

出雲、どうにか暴れまわる桜の魂をおとなしくさせようと、溶けた鉄を体内に流されたような苦しみに耐えつつ己が力を桜の魂にぶつける。が、桜の魂、決して怯むことなく暴れ続けて、出雲の体内にある、ありとあらゆるものを溶かしつくす。

やがて、桜の魂が出雲の心の臓を溶かしつくし、出雲はぐえっと呻いて息絶えた。

それから数日後、村人たちが山の中で息絶えている出雲を見つけた。村人達は、己の命と引き換えに恐ろしき化け狐を殺した巫女、桜を奉る為小さいながらも立派な神社をたてた。更に、巫女を殺し、巫女に殺された狐に今後崇られぬよう、その狐も共に奉った。

その神社の名は桜山神社という。

その神社は、今なお桜山に残っている……

鬼灯夜行

作文 題『おもしろいひと』いのうえ さくら

わたしのおかあさんとおばあちゃんは、おべんとうやさんです。いつも、はやおきしておべんとうをつくっています。おばあちゃんは、ずっとまえから、おべんとうやさんです。おばあちゃんは、おにぎりにもものがじょうずです。

おべんとうやさんには、まいにちたくさんひとがきます。おにいちゃんやおじちゃんやおばちゃんが、おべんとうをかっていきます。

おきやくさんのなかに、いずもというひとがいます。いずもさん

は、まいにちやっつけてきて、いなりずしをかいます。いずもさんは、いなりずしが好きです。おばあちゃんのいなりずしが好きだといっています。

わたしもおばあちゃんのいなりずしはおいしいから好きです。でも、まいにちたべたらきらいになります。いっぱいたべてもきらいにならないなんて、へんなひとだなおもいました。

このまえ、テレビでおんなのひとがきつねのいるじんじやにいなりずしをあげているのをみました。おかあさんが「きつねはいなりずしが好きなの」といいました。だから、いずもさんはきつねです。きつねはいろんなものにばけます。いずもさんはにんげんにばけています。

きつねがいなりずしをかいくるなんて、おもしろいなとおもいました。

おもしろいけど、わたしはいずもさんが好きではありません。ちよつと、こわいからです。

おわり

*

あたしの名前は井上紗久羅^{ひのく}。十六歳高校一年生。四月六日生まれ。のB型。性格は短気凶暴にして超がつくほどの男勝り。考えるより先に口が開く手が出る足が出る。女などという単語など、小学校の三年生位の時にジュースの空き缶と一緒にゴミ箱へぽいっと捨ててしまった。

あたしに残っている女らしさといえば、ポニーテールにした長い髪、慎ましやかな胸の膨らみとか。そしてばあちゃんと母さんから

受け継いだ料理の才能。多分それくらいだ。

頭の良さは多分標準。馬鹿でもないけど、特別かしこくもない。得意教科は体育、家庭科（料理関係オンリー）。苦手教科は数学、理科、英語、美術、その他諸々。所属している部活は帰宅部。活動内容は、授業終了後、下校中に事件に巻き込まれることなく、できれば寄り道もせずに家へと帰るという至極単純なものだ。

好きな食べ物は婆ちゃんの作る散らし寿司。シュークリームとか、カルボナーラとかも好きだ。嫌いな食べ物は、セロリとさやえんどう、あとインゲン豆。

好きな奴は特にいない。よって、彼氏もない。野郎に興味はない。かといって別に女に興味があるわけでもない。そこそこいる友人である女子数人のことは好きだが、恋愛感情ではない。あたしは同性愛主義者じゃない。かといって別に異性のことを好きになって、そいつの嫁になって家庭を持って、子どもを産んで、という女の大多数が望んでいる（かどうかは実際のところはよく分からないが。これはあくまであたしの勝手な考えだ）未来も別段強く望んではない。

嫌いな奴はまあそこそこいる。時々首を絞めたくなっちまう奴もまあそこそこいる。

そんなそこそこいる嫌いな奴の中でも、群を抜いて、ぶつちぎりで、ダントツで、他の追隨を許さない位嫌いな奴は、ほぼ毎日あたしの前に現れる馬鹿狐、もとい化け狐……出雲だ。

*

あいつがあたしの前に現れるのは、大体空が熟れた柿のような色になった頃だ。柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺。以前あたしがふとその言葉を口にした時、柿を食べるたびに鳴る鐘か、一度見てみたい

ものだね。柿を食べるたびに鳴るとなると、秋は法隆寺の鐘は大忙しだろうね」などとニコニコ笑いながら、あの化け狐はそんな馬鹿な事を言ったつけ。

全く、あの化け狐はわびさびとか、風流って言葉を知らないのか、馬鹿者め。いや、まあ「花より団子」「鯉のぼりより柏餅」「鶯の鳴き声よりうぐいす餅」なあたしが偉そうに言えることじゃないけどわ。

あいつは、あたしが、というかあたしの婆ちゃんと母さんがやっている弁当屋『やました』に毎日のようにやってくる。

『やました』は桜町のほぼ中心にある、桜商店街の北側から入って十五軒目、左にある小さな弁当屋だ。二階の壁にとりつけてある『やました』と書かれた看板はさびびびていて、読みにくい。曇ったシヨーカーズ、白と橙色のビニール製の屋根。右奥には妙な匂いを放つコンクリート製の階段がある。そこをのぼると二階。あたし達の家へとたどり着く。

あたしは、お小遣い欲しさにほとんど毎日店番をやっているから、嫌でもあいつと顔を合わせることになる。あいつが、あたしが学校に居る時間に店にやってきて買い物をしてくれれば万々歳なのだが、残念、真に残念なことにあいつはあたしが店番をしている時間によってくるのだ。あいつはあたしが自分のことを嫌っていることくらい重々承知だろうから、きつとわざとあたしが店番をしている時間にやってくるのだ。嫌がらせだ、いじめだ、何かの陰謀だ、おのれ化け狐。

しかし、どんな悔しがっても、どんなに嫌でもあたしは店番を続ける。お小遣いが欲しいからだ。お小遣いの為だったら、仕方がない。諦めるしかない。いっておくがあたしは、あいつのことが嫌い

嫌いつていつているけれど、実は心の底ではあいつのことを想っていて、あいつと毎日顔を合わせて喋りたいから店番をしているなんていう、素直じゃない恋する乙女ってわけじゃないからな。絶対に断じて、確実に。誰があんな奴のことを好きになるもんか。何？素直じゃない恋する乙女度の高い奴ほどそういうことをいうものだった？ふざけるな、今度そんなこと言ってみろ、ただじゃおかないからな！

あいつは、今日もここ『やました』へとやってきた。法隆寺の鐘を鳴らす柿と同じ色に空が染まった時。いつもと同じだ。

季節は夏。ミンミンという聞くだけで暑苦しいセミの鳴き声というBGMが商店街中に鳴り響く。もう夕方だというのに、暑い。体内にある水分を根こそぎ奪うような暑さで、拭いても拭いても汗は一向に止まる様子が無い。こういう時は冷たいジュースをぐいぐい飲みたくなる。気を利かせて母さんがもってきてくれた冷たい麦茶は、あつという間にあたしの胃の中へと消えていった。喉元過ぎれば涼しさなくなる。あたしの身体から、みるみるうちに麦茶が与えてくれた冷気が消えていく。

あたしは、あまりの暑さにいらいらしながら、ショーケースにひじをつきながらぼうつと目の前を歩いていく人々を見ていた。

目の前にある、クリームがやたら甘いクレープ屋で女性高校生がきやあきやあいいながら、クレープを買っている。商店街の中では自転車運転は禁止だということになっているにも関わらず、当たり前のように自転車に乗ってぐねぐね運転をしているクソじじい、二人乗りをしてわあぎやあ言っているバカップル共。白いビニール袋がはちきれそうになるくらいに詰め込まれた食品や生活用品の数々をひいひい言いながら、持って家に帰るおばちゃん。週間漫画雑誌

を読みながら歩いているクソガキ。とまらない汗をハンカチで必死にぬぐいとっている中年のおっさん。特に何をするわけでもなく、ふらふらと歩いている人。

いつもと変わらない、少しも変わらない光景だ。少しも変わらないから、見ていても何にも楽しくない。

鈍い痛みとかゆみを感じ、右腕を見ると、そこに蚊がとまっていた。刺されると面倒なので、めいっばい叩いてやった。惜しくも、敵は逃げてしまった。くそ、忌々しい。あたしは舌打ちしながら、顔をあげる。

「やあ、こんばんはお転婆紗久羅姫」

目の前に、あいつが立っていた。

*

あいつの、気味が悪いくらい綺麗な顔と体が、高熱でどろどろに溶かされた鉄のような色をした日の光に照らされている。あいつの雪のように白い肌も、腰よりなお長い、墨のように真っ黒で長い髪の毛も、藤色の着物も全部赤みを帯びた黄金色に輝いている。人を馬鹿にしているような笑みも今は、この世にある全てのものを暖かく包み込んでいるようなものに見える。

悔しいが、今のあいつは神様仏様のようにみえる。神様仏様を実際に見たことがあるわけじゃないから、神様仏様のようにだっというものなんなのだが、まあ多分こんな感じの雰囲気なんじゃないかとは思う。普段は見るだけでむかつ腹の立つ笑顔も、日の光があたりだけで神秘的なものになるのだから、不思議なものだ。夕日の魔力というものは恐ろしいものだ。こんな化け狐でさえ、美しく見せるいや、こんな化け狐だからこそ、夕日を浴びて美しくなるのかもし

れない。

あいつがそこに立っているだけで、この世界が非現実的な世界に変わる。あいつの放つ異様な気のようなものが、この弁当屋を現実世界から切り離してしまおうらしい。実際、さきほどまではつきり見えていた自分の目の前を通る爺さんやばあさん、おばちゃんや同年代の子供たちの姿が急に見えなくなった。確かに自分の目の前を歩いているはずなのに、あたしの目に映るのはあいつだけになるのだ。

周りの音も、急に聞こえなくなった。地球にとりつけられたスピーカーのポリウムをミューンにされてしまったようだった。あれほどあたしをイライラさせていたセミの合唱も今は聞こえない。

ところでこの化け狐の姿は、あいつが店の前に立つまで見る事ができない。あいつが、商店街の通路を歩いているところを見たことがない。いつも、あいつは気がついたときにはもう店の前に立っているのだ。今だって、商店街を歩く人の群れの中にあいつの姿はなかった。だが、あたしが蚊にきをとられているわずかな時間の間に、あいつはここまでやってきて、店の前に立っていたのだ。

でも、これもいつものことだ。何も驚くことじゃない。流石に十年もこんな光景を見続けていれば、流石に慣れる。

あいつ……出雲が、にこりと微笑む。相変わらず人を馬鹿にしたような笑みだ。

「やあ、こんばんは。お転婆紗久羅姫。今日も君が店番かい？ 偉いね」

出雲が、やや首を横に傾け、肩に頭をのせながらにこりと笑う。あいつの、すくえば水のようにさらりと手からすり抜けてしまえば

うな髪の毛が、白い顔にいくらかかかる。あいつは、自分の美貌を十分に理解していて、自分がより美しく見える仕草や格好もよく分かっている。そして、その格好や仕草をさりげなく、それでいてわざとらしくやってみせるのだ。

あたしは、急に気分が悪くなって真下にあるパイプ椅子にどかっと座った。ああ、もう胸糞が悪いったらぬ。もし許されるのなら、奴のすました顔に某頭がアンパンなヒーローよろしく強烈なパンチを食らわせてやりたい。が、悔しいが奴は、この店の常連客の一人であり、婆ちゃんにとってはかけがえのない友人なのだ。おまけにこいつは化け狐だ。下手な攻撃をしたら、世にもおぞましい呪いをかけられたり、祟られたりするかもしれない。

「ふん、心にもない言葉、どうもありがとよ。ほら、どうせいつもの奴だろう？　すぐ用意するから、さっさと買ってあたしの前から消えちまえ」

あたしは、出雲がいつもこの店で買ういなり寿司六個入りのパックを、ショーケースから乱暴に引っ張り出し、ビニール袋にぶちこみ、レジを乱暴に叩いた。頼むからレジを乱暴に扱わないでくれ、と母さんと婆ちゃんには何度も言われているけれど、この化け狐の顔を見るとイライラしてレジを乱暴に扱わないわけにはいかなくなってくる。出雲が困ったような表情を浮かべる。少し眉を下げ、艶やかな唇を開くその仕草もまた綺麗だから腹が立つ。

「なんて乱暴なんだい、君という子は。腐っても鯛、枯れても桜、腐っても女の子なんだよ、君は。美しさは私に比べて遙かに劣っているけれど、そこそこ見られる程度にはかわいらしいのだから」

「うるさい！　うるさいうるさい！　別に女に生まれたからって、女の子らしくしていなくちゃいけない法律なんてねえだろ！　あた

しはあたしらしく生きるんだ。とにかく、さつさと金を払って消えちまえ！」

そうあたしが怒鳴っても、出雲は表情一つ変えずくすくすと笑っている。小刻みに揺れる肩が、あたしを余計にイライラさせる。人差し指を添えた唇は、艶かしくて見ていられない。下手に見れば、視線をそらすことが出来なくなる。そしてその唇に魂が引き込まれていって、しまいには魂をその艶やかな唇に吸い取られてしまいそうになる。

出雲は、ショーケースの上に、青い巾着からだしたお金をぼんと置く。あたしはその金をひつつかみ、おつりを渡した。出雲は細く、簡単に折れてしまいそうな指でつつつとそのお金を引き寄せ、巾着に入れた。ショーケースの上をなぞる様子は、女の白い背中を艶かしくなぞるそれに見えて、いやらしかった。もしあの指で背中をなぞられたら……ダメだダメだ、想像するな、想像したら終わりだ、気持悪くなって死んじまう！

「全く、本当に短気だね。仮にも私はお客さんだよ？　あまり失礼なことばかりしていると、私だって怒るよ？　もしかしたら、君の息の根を止めてしまいかもしれない」

あたしを見下すような笑みを浮かべ、あいつは白く細く、そして氷水の中にずっと浸かっていたかのようなひやりとした右手をあたしの頬に当て、顔をぐいっと近づけた。奴の瞳と、艶やかに光る唇があたしの眼前にある。出雲の吐く息があたしの頬にかかる。桜のような香りがする。出雲が舌なめずりすると、あたしの身体が急に熱くなって、ふらつとした。

あたしの頬を凍らせた手は、少しずつ下へとおりていき、やがて

あたしの首へといく。あいつは、あたしの首を右手で軽くしめた。あいつの、氷の瞳があたしをとらえる。瞳の奥底に、殺意のようなものが一瞬ちらつき、あたしの身体は固まった。あたしの身体は氷漬けにされたように動かなくなり、冷たくなった。

しかし、その殺意のようなものはすぐに瞳から消えて、同時にあたしの身体は自由と体温を取り戻した。

「ふふふ、冗談だよ。君のような素晴らしいおもちゃをそう簡単に殺しやしないよ。それにしても、私が触れただけで随分とおとなしくなったものだね。あるいは私はずっと君に触れ続けていたならば、君は女の子らしく、しおらしくなるのかね」

「うるさい！ 黙れ！ この変態化け狐！」

「変態化け狐なんて心外だなあ。私はいたってまともだよ。大体、その化け狐というのはなんだい？」

出雲は着物の袖で口元を隠し、心外だなんて少しも思っていないような表情を浮かべる。

「化け狐は化け狐だ。狐の化け物、ありとあらゆるものに化ける狐元狐、現化け物。お前は人間にあらず、人間の皮かぶった化け物だ！」

そういつてあたしはびしっと勢いよく出雲を指差した。あいつは、指差されてはあとため息をついた。

「あのねえ、いくら私が人間とは思えないくらい美しく性格がよくて、おまけに稲荷寿司ときつねうどんが好物だからって、勝手に化け狐扱いしないでくれよ」

「お前のように何十年たっても少しも外見が変わらない人間がいる

というなら、一度見てみたいものだねっ」

「はいはい」

出雲はそう笑って言った。苦笑いにも見えるし、こっちを見下している笑みにも見える。どちらにも見えるのがまた腹立つ。まだ言いたりないあたしを無視して奴はばいばい、と細い手をしなやかに振って、あたしに背を向けて店から離れていく。

そして、あたしが瞬き一回する間にあいつの姿は、風の前の塵のように消えてしまった。

いつものことだ。何も驚くことじゃない。あたしは、覚えてるよと捨て台詞を吐いた。そして、思いつきりショーケースを叩く。自分の背後にある調理室から、ショーケースを叩くんじゃない！という婆ちゃんの怒鳴り声が聞こえてきた。

あいつの姿が消えたたん、目の前に再び広がりだす世界。店も、通行人もあいつがいる間はほとんど見えなし、会話も音も何も耳に入らない。しかし奴が消えたのと同時に、だからだとゾンビのように廃れた商店街という名の墓場を徘徊する人々の姿が目に入る。続いて客を呼ぶ声、他愛もないおしゃべり、カラスの嘲笑、五月蠅いセミの合唱が耳に入ってくる。

いつものことだ、何も驚くことじゃない。

第四話：鬼灯夜行（2）

約二時間の店番を終えて、あたしはあくびをしながら、二階へとあがっていく。

調理室で、母さんと婆ちゃんは台所の掃除をしている。調理室の中は、外以上に暑い。あたしは、掃除まで手伝ってやるほどのいい子ではない。

階段を上った先の天井についている、死に掛けのホタルのように頼りない明かりが、階段を照らす。照らすといてもほんのわずかの範囲な上に随分ぼうつとした明かりだから、夏場はいいが、冬になるとほとんど階段が見えず、恐ろしい思いをする。

コンクリートでできた階段は明かりに照らされても暗く、またじめじめした不快な臭いを発している。あたしは、自分の周りをふらふら飛んでいる蚊を手で追い払いながら、人一人通るのが精一杯の狭い階段を上りきり、左側にある黒いドア（といっても随分さびているから、茶色のドアといってもおかしくないな）を乱暴に開けた。ぎぎぎぎぎぎという、モンスターの断末魔の叫びのようなおぞましい音とともに、ドアが開いた。

黒いタイル張りの階段と同じく一人しか同時にいられないような玄関で、あたしは靴を脱いだ。いちいち並べるのは面倒だから、脱ぎ散らかしっぱなしにした。いつものことだ。まあ、どうせ後で婆ちゃんが文句をいいながら綺麗に並べてくれるだろう。

黄泉の国へ続きそうな不気味な階段とは違い、家の中は淡い橙色の明かりに照らされていて、随分と明るい。あたしが小学六年生の

時までは大分じめじめした、暗い雰囲気の家だったのだが、家の中をちよいつとリフォームしたおかげで、大分明るい雰囲気の家となった。とはいえ、TVでやる大改造うんたらみたいは大々的なリフォームをしたというわけではないので、遠くから見ていると綺麗な家だが、近づいてみてみるとそこらじゅうがぼろぼろになっているのがよく見える。

あたしは、玄関をあがってすぐ左側にある自分の部屋の中へと入った。決して広いとはいえない部屋で、ベッドと勉強机とタンスで半分以上のスペースをとられていて、あたしが自由に動き回ることができるスペースはほとんどない。

あたしが中学生になるまでは、この馬鹿狭い部屋を一つ年上の馬鹿兄貴と共同で使っていたから、今よりもずっと狭かった。今思えば、よくこんな馬鹿狭い部屋を二人で使っていたな。この部屋に二人分のタンスと机が置いてあったなんて（ベッドは二段ベッドだったからとるスペースは今と変わらず）。

馬鹿兄貴が向かい側の部屋に消えた今、タンス一個と机一個が消え、ここはあたしだけの部屋になった。それは喜ばしいことだが、馬鹿兄貴のタンスと机が消えたところでこの部屋の広さが、ぐんと広くなるわけもなく。この部屋は相変わらず狭い。部屋というより物置と言ったほうが正しいかもしれない。寝る時とか、テスト勉強という名の悪あがきをする時以外はほとんどこの部屋に入ることはない。

ドアの反対側にある壁の、真ん中より少し右に寄ったところにべったりと貼りついている勉強机へとあたしは向かった。机の上には教科書やいらなくなったプリント、最近買った漫画なんか散らばっていた。物置部屋と貸した部屋においてある勉強机もまた、物置

机と化しているのだ。右下の三段ある引き出しの中にも、プリントとかお菓子とか小物とかがバラバラに入っているし、机の上にある棚にも教科書とか授業で配られた、二度と目を通すことがなさそうなプリントなんか乱暴にいれてある。

母さんは「あんたの部屋、一夜（かずやと読む。あたしの馬鹿兄貴の名前だ）の部屋よりも酷いじゃない。一夜以上にがさつな子に育っちゃって、全く」とよく文句をいう。馬鹿兄貴の部屋がどんな風になっているかは知らないが、母さんがそういふんだから、まああたしの部屋は馬鹿兄貴よりも酷いことになっているのだろう。

しかし、母さんにがさつだと、馬鹿兄貴より酷いと何回言われても、あたしは部屋の片づけをやるきが起きなかった。面倒だし、ほぼ物置として使っている部屋が汚れていてもたいして気にならないから、そのままにしている。ここがもつと広くて、部屋らしい部屋だったなら、定期的に掃除をしたかもしれない。

まあ、多分部屋が広かろうが狭かろうが、結局やらないだろうけど。

あたしは椅子に腰掛けて、明日の授業に使う教科書を、足元に置いていたカバンの中に突っ込んでいった。時間割どおりに入れるのは面倒だったから、適当にいれた。カバンの中に入れていいのだ、何も綺麗に順番どおりに入れることは無い。

机の上の棚は二段ある。一段目には教科書とプリントが乱暴に突っ込んであり、下の段には筆記用具をいれた筒、猫や犬の形をした小さな置物、そして写真立てが三つ並んでいる。一つ目の写真立てには、中学校の時にいった修学旅行で撮ったクラスの集合写真が入っている。二つ目の写真立てには、去年家族旅行で北海道へ行った

ときの写真。

そして、三つ目が六歳のあたしと、今と全く変わらない姿をしている出雲が映っている写真だ。あたしは、ふとその写真が撮られた時のことを思いだした。

ここから、ちょっとした思い出話になる。話は少し長くなるが、我慢してくれ。

出雲とあたしが映っている写真は、家族で桜山へ花見に行ったときに撮った写真だった。桜町は、桜がたくさん植えられていることで有名だった。

町中に桜並木があつて、春になると町は満開の桜でいっぱいになる。春の、ほんの一時の間だけこの町は滅茶苦茶華やかになる。薄桃色の花びらと、桜の花の匂いが町中を包み込み、風が吹けば桜の花びらが軽やかに舞い踊る。

町の外れ、北西に位置する桜山も例外ではなく、立派な桜の木がたくさん植えられていて、春になると山は薄桃色に染まる。

桜が咲く時期は、外部からも大勢の人がやってきて花見をする（ただマナーを守ろうとしない迷惑な奴らもたくさんやってくるから、あまり嬉しくない）。町はこの時期だけ生き生きとしている。そして、桜の季節が終わった途端死んじまう。

桜山を少し登った先に、絶好の花見スポットがあつて、あたしたちは大きな桜の木の下に空色のビニールシートを敷いて、婆ちゃんとお母さんのつくった滅茶苦茶美味い弁当をたくさん広げて、同じく花見にやってきた人達とわいわい騒いでいた。

母さんと親父は途中から、近くにいた知人のところについて一緒

にお酒を飲み始めた。

婆ちゃんの作った五目ちらしは滅茶苦茶おいしくて、口の周りをごはん粒だらけにしながらまるで犬のようにかぶりついてた。

馬鹿兄貴は大量のおにぎりをハムスターのように（ハムスターほどかわいくないけど）頬にためている。別にそんなに勢いよく食べなくてもおにぎりは逃げやしないのに。流石馬鹿兄貴、そんな事実ですら気づくことができないくらい馬鹿なのだ。……まあ、五目チラシを犬みたいにガツガツ食っていたあたしも同じようなものだったんだけどな。

花より団子、頭上に咲き誇っている桜には目もくれずに、あたしはごちそうに夢中になってた。桜を綺麗とおもつどころか、弁当箱の中に容赦なく入ってくる桜の花びらをつつとおしく思った。

ふと、強い風が吹いて、桜の花びらがあたしのまだ小さかった身体を包み込んだ。あたしは、とっさに目の前にあるお弁当箱を自分の小さな身体で隠した。桜の仄かな甘い匂いと、五目ちらしの甘酸っぱい匂いが混ざって、いいにおいのような気味の悪い匂いのような、なんとも微妙な匂いがした。しばらくして、ようやく風がおさまり、あたしは身体を起こしてまた五目ちらしを食べ始めた。

それから数分して、あたしは五目ちらしの最後の一口を口の中に入れた。甘く煮たしいたけと、甘酸っぱい酢飯の味をゆっくりと時間をかけて楽しんでた。

そんな時だ。あたしの身体が急に冷たくなったのは。誰かが後ろから、あたしに抱きついてきたのだ。誰かはわからないが、あたしは抱きつかれたとたん、金縛りにあったように動けなくなり、体温が急激に下がったのを感じた。

恐ろしく冷たくて長い髪の毛が、あたしの肩に、頭に、手に、足にかかった。あたしは、何故か以前TVだか何かで見た、滝に打たれているつるつばげのおじさんの姿を思い浮かべた。あたしの身体にかかってくるさわりとして冷たい髪の毛は滝のようだったのだ。あたしを抱きしめる手は母さんの腕よりずっと細くて白い。少し力のある奴が力を入れて握ったら簡単に折れてしまいそうなくらいだった。おまけにこの腕が、髪の毛以上にひんやりとされていて、あたしの身体はみるみるうちに冷たくなっていった。

もうあたしは、口の中にいれていた五目ちらしを危うく吐き出しそうになるわ、涙がでそうになるわ、身体は震えるわで、もうとんでもないことになってしまっていた。今は思い出したくもない、恥ずかしい過去である。恥ずかしい過去だから、あたしとしては一刻も早く忘れてしまいたいのだが、悲しいかな人間という奴は恥ずかしい、おぞましい思い出ほど強烈に頭に残り、何度デリートしようとしてもデリートできやしないのだ。

勇気を振り絞って、あたしは後ろを向いた。ゆっくり振り向くのは怖いから、思い切って一気に振り返った。そして、振り向いた先にあったのは、心臓が一瞬にしてとまってしまいそうになるくらい、冷たくて綺麗な顔だった。あたしはひっと間抜けな声をあげた。あの時、確実に口の中に入れていたご飯粒の一つや二つは落ちていたと思う。

白くややとがった顔に、切れ長で形の整った瞳、すらりと流れるような鼻、口紅をつけていないのに妙に赤い唇。藤色の模様なしの着物に花菖蒲の色をした帯。あまりに完璧すぎる容姿だから、奴は世界という一枚の水彩画の上に貼り付けられた、裏にノリをべたべたにつけた、マジックペンで描かれた絵のように見えた。早い話が、

全然周囲の風景に馴染んでいない。超不自然。そのくせ妙に目立つ。だが、目立つものほど意外と目に入らないもの。出雲は、目立ちすぎることがゆえに、逆に目に映りにくい。

奴はにこりと意地の悪い笑みを浮かべるとあたしからすつと離れた。

これが、あたしとあいつの『出会い』だった。

すつと静かに立ち上がったあいつは、あたしをじつと見つめていた。あいつは人を見下すような笑みを浮かべながら、肩についた桜のはなびらを細い指でつかみ、手のひらに落とす。そして、それをふつと吹いてとばした。それはひらひらと舞ってぼとりとあたしの頭についた。あたしはぼかんとしながらあいつの顔をじつと見ていた。

あたしは、動くことが出来なかった。まるで、時間がとまったみたいだった。絶えず舞い続ける桜の花びらさえとまって見えた。

「おやまあ、出雲じゃないか。こんなところで会うとは奇遇だね」
反対側に坐って、緑茶をのんびりと啜っていた婆ちゃんが、あいつに気がついて顔をあげた。婆ちゃんがにこりと出雲に微笑みかけると、出雲もそれに応えるように微笑んだ。

「やあ、菊野。家族揃ってお花見かい？ 随分おいしそうな料理が並んでいるじゃないか。菊野と紅葉がつくったのかい？」

「ああ、そうさ。じつくり時間をかけてつくったよ。どうだね、出雲。お前、どうせやることもなくて暇だろう。ここに座って一緒に花見でもしようじゃないか」

そういつて婆ちゃんは、間抜けな顔をして出雲を見ているあたしの隣にあるスペースを指差した。あいつは、桜が描かれた扇を口にあてた。

「おやおや、よいのかねお邪魔しても。私の分などあるのかね」

「あるよ、充分すぎるほどあるさね。餓鬼二人はいくらよく食べるといっても、所詮餓鬼は餓鬼。ここにあるもの全部平らげるほど大きな腹じゃないさ。あたしと紅葉だって、そんなに食わないし、男共はぴいひやりながら酒を飲んでいて、こっちの食い物にはほとんど手をだしてないよ。あんたが食べるくらいの量はあるさ」

婆ちゃんのその言葉を聞くと、出雲はにこりと微笑んで、あたしの横に正座して座った。あいつの不気味に輝いた瞳が、あたしをとらえる。あたしは身動きがとれず、ただ雷おこしのように固まっていた。

出雲の冷たい手が、あたしのまだ小さかった手に触れた。あたしはびくつとして、少しだけあいつから距離を置いた。あいつの手は冷たかったのに、何故か触れられた手は火傷したように熱かった。

「おやおや、随分と怖がられているようだね、私は」

全くそんなことも気にもしないような笑みを浮かべ、あいつはあたしを見た。あたしは、何だか馬鹿にされたようで腹が立ったが、あいつの不気味な笑みを見ると、何もいうことができない。

「お兄ちゃん……だ、だれ」

「誰？ ああ……また忘れたのか」

「え？」

「いや、こつちの話さ」

出雲と婆ちゃんがアイコンタクトをとり、苦笑する。あたしは何がなんだかさっぱり分からず、首をかしげた。

「こいつはね、あたしの知り合いさ。出雲っていうんだ。まあ、この通りお化けのような男だが、よろしくしておやり」

「化け物だなんて、酷いことを言うね、菊野は。私はれつきとした人間だよ。あまりに美人過ぎるものだから、人間に見えないだけさ」

「はいはい、一人で言っただけ。全く、本当に嫌な男だね」

そういいながら、婆ちゃんはいつに紙の皿と、割り箸を渡した。あいつはそれを喜んで受け取り、お重に残っていたいなり寿司をものすごい速さでとっていった。あつという間にあいつがもらった紙の皿の上は甘いたれのたっぷり染み込んだ、婆ちゃんの得意料理の一つであるいなり寿司でいっぱいになった。

出雲はいなり寿司を箸で実に綺麗につかむと、真っ赤な口を小さくあけて、どこぞのお嬢様のような優雅な仕草で一口食べる。

あたしは、料理をそこまで綺麗に食べた人間を見た事がなかったから、ただ呆然としながら出雲がいなり寿司を食べる様子を見ていた。

時々、あいつはわざとらしく唇をぺろりと舐める。あたしは、今以上の餓鬼だったにも関わらず、その様子を見てどきっとしてしまった。やっと学校に通い出した餓鬼がみても、あいつのその仕草は酷く艶かしいものだったのだ。

「全く、お前は本当にいなり寿司が好きだねえ。そんなにいなり寿司ばかり食っていると、しまいにその綺麗な肌が、いなり寿司の油揚げの色になっちまうよ」

お茶を飲み、花見団子を食べていた婆ちゃんは、呆れていた。あいつは、ちまちまと、それでいてものすごい速さでいなり寿司をその腹におさめていく。

「ふふ、それは困るなあ。でも、やめられないんだよ。だって、菊野の作るいなり寿司は最高なんだから。ねえ、紗久羅、君だって好きだろう。菊野の作るいなり寿司は」

急に視線をこちらに向け、あいつは微笑んだ。私は急に話を振られ、心臓が飛び上がったてしまうくらいにどきりとしたが、こくりと一回うなずいた。

出雲は満足そうな笑みをうかべ、そうだろうそうだろうと言って一人うなずいた。

あたしはそんなあいつから視線をそらし、紙の皿にもったちらし寿司を凝視する。あたしは、がちがちに固まった体を、錆びた口ポットのようになぎこちなく動かして箸を握り、ちらし寿司を一口口にいった。さっきまでとても美味しかく食べることが出来ていたのに、あいつが現れてからは、どれだけしつかり噛んでも味がしなくなってしまった。体の震えがとまらない。寒い、寒いのに汗がとまらない。

それでも無理矢理口を動かして、口の中に入れたれんこんやにんじんの入ったちらし寿司を噛んだ。しばらくして、あたしはそれをこくりと飲み込んだ。なんだか、苦い薬でも飲んだような心地がした。

「紗久羅、随分不味そうに食べるのだね」

そういつて笑って、あいつはあたしの頭をぼんと軽く叩いた。途端、雷が自分の体に落ちてきたかのような衝撃が襲ってきた。電撃のようなものが脳みそと骨を通じて体中に伝わって、あたしの体は痺れて動かなくなってしまうた。

(そういえば、このお兄ちゃん、なんでわたしのなまえ、しっぺいするんだろう)

あいつの前でその名を名乗ったことはないのに、どうして。このお兄ちゃんエスパーなのかなあと、あたしは思った。……知り合いです。婆ちゃんから孫であるあたしのことを聞いたのだろうか、という考えは当時のあたしにはなかった。

今にも泣きそうな顔をしているあたしを見て、またあいつが微笑む。あたしは、一刻も早くここから逃げ出したいと思った。

婆ちゃんが、苦笑いする。

「これ出雲、あまりあたしの孫を虐めるんじゃない」

「別に虐めているつもりはないんだけどなあ。ねえ、虐めてないよね?」

そういつてあいつは、未だ痺れて動けないあたしの顔を覗き込んで笑った。まるで「虐められてる、っていつたら後で酷い目にあわせるからな」と言われているような気がして、あたしは泣きたくなかった。

「まったく、どっからどうみたって虐めているようにしか見えないよ。紗久羅、その馬鹿は放っておきな。そうだ、せつかくだから写真を撮ろうか。桜の木の前で」

婆ちゃんに話しかけられ、あたしの体は自由を取り戻す。あたしは、とにかくあいつの隣にずっと座っているのは耐えられなかったから、うんうんとうなずき、飛び上がるようにして立った。

あたしは、今までの人生の中で（といっても当時はたったの6年だけ）一番いい走りをして、桜の木の下に立つ。

婆ちゃんが、母さんのバックに入っていたカメラをもって、ゆっくりと腰をあげ、こちらへと歩いていく。

風がふいて、また桃色の桜の花びらが舞い踊る。婆ちゃんが作った桜餅のような、甘い匂いにあたしは包まれた。日の光が当たった桜の花びらは、とても輝いて見えた。螺旋を描いて、無数の花びらが私の上から降ってくる。宝石のように輝く桜の花びらが……。花びらが……。白い顔……。黒くて長い髪の毛……。あれ？

気付いたら、いつの間にかあいつが後ろに立っていて、桜の木を見上げていた私の顔を見下ろしていた。

「ひゃあー！」

あたしは思わず叫び声をあげた。あいつはくすくす笑いながら、驚くあたしの肩に両手をのせた。

「私も混ぜておくれ」

あいつの細くしなやかな手が、あたしの肩をつかんで離さない。ああ、あいつの手に体温を奪われていく。また足が震える、動けない。

本当に、泣きたかった。声をあげて泣きたかった。だけど、泣くことすらそのときの私にはできなかった。

婆ちゃんは仕方ないね、という風に肩をすくめて、カメラを構える。婆ちゃんの、ほら紗久羅ちゃんと前を向きな、という言葉聞いてあたしはカクカクとコマ数の少ないアニメーションのようなぎこちない動きで前を向いた。

できるだけ、あいつの顔と手を見ないようにした。あいつが後ろにいると思わなければどうということはない、はずだ。

そうだ、いないと思えばどうってことはない。あたしはそう言い聞かせて、必死になってあいつの存在を忘れようとした……が、なかなかできない。

婆ちゃんに笑ってといわれたから、あたしは一生懸命笑おうとした。ああ、笑うってどんな感じだった。あたしは、自分が笑っている姿を思い浮かべながら笑顔をつくってみせる。その笑顔のなんと不自然で不気味なことが。

婆ちゃんは、あたしの笑顔の不自然さにも気付かず、のんきにハイ、チーズといって、シャッターを押した。カシャリ、という音が微かに聞こえた。

「ほい、一枚。さて、もう一枚」

「もういい、もういい、いちまいでいいよ…」

「さっきまであんなにはしゃいでいたじゃないか」

「だって、おにいちゃん、こわいの」

我慢できずに、とうとう私が本音をぶちまけると、婆ちゃんと出

雲は顔を見合わせ、苦笑する。

婆ちゃんが手招きする。あたしは婆ちゃんのほうへ駆け寄って、ばあちゃんの胸に飛び込んだ。出雲は、桜の木の下から動かず、静かに微笑んでいる。

「嫌われたものだねえ、私も。まあ、どちらでもよいけれど。菊野、おいしいなり寿司をどうもありがとう。本当はもう少しゆっくりしていたのだけれど、紗久羅が怖がっているから私はもう帰るよ。お花見、楽しんでおくれ」

あいつが、微笑む。すると強い風が吹いて、薄桃色の吹雪があたしたちを襲った。あたしは目をつむり、婆ちゃんの体にしがみつく。むせるくらい甘い香りに包まれて、あたしの頭は少しだけぼーっとして動かなくなった。

風が収まり、桜吹雪が収まる。あたしは、おそろおそろあいつのいた桜の木を見た。

もう、そこにあいつの姿はなかった。

第五話：鬼灯夜行（3）

これが、あたしとあいつの「出会い」だ。

出会いがそんなだったからなのか、あたしはすっかりあいつのことが苦手になってしまった。

あいつは、毎日のように弁当屋にやってくる。こんなに毎日来ているのに、何で今まで一度も顔を合わせたことがなかったのか不思議だった。しかし、不思議に思う気持ちよりもあいつに対する恐怖心の方が格段に強かったので、あまり深くそれを考えることは無かった。

あたしはあいつが来るたびに、二階にある自宅に逃げ込んで、押入れに隠れたり、毛布にくるまったりして、あいつが帰るのをひたすら待っていた。今思えば恥ずかしい、あんな奴にびくびくしていたなんて。

あいつは、あたしがクソガキだった頃の行動の数々を話題にあげて、あたしをからかう。あたしは、後先を考えずに情けない行動にでていた幼い時のあたしを、心底うらめしいと思った。

あたしの、あいつを苦手に思う感情はやがて「嫌い」という感情になり、そしてそれからほどなくして「大嫌い」となり、最終的には「この世で一番嫌い」という感情に進化していった。多分あいつのことを好きになることは、一生ないとおもう。

あたしは、とにかくあの化け狐が大ッ嫌いだ。

婆ちゃんや母さんは「化け狐だなんて、あまり失礼なことをいうな」とあたしに言うが、あたしはそれをやめるつもりはない。

あたしは、あいつを人間だとは思っていない。あいつは妖怪だ、化け狐が人間に化けているのだ、そう思っている。

この世に妖怪とか、幽霊とかが存在するなんてことは絶対はないと思っっている。そう思っっているはずなのに、あたしはどうしてもあいつが人間だということが信じられない。妖怪の存在を信じていないのに、あいつのことを人ではないと思っっている。矛盾した考えだ。

だって、考えてもみろよ。この世に生きている人間の中で、五十年たっても老いずに若いときの姿をそっくりそのまま保っている奴がいるか？七十歳なのに、外見は二十歳の時と全く同じなんて奴がいるか？答えは、ノーだ。

あの化け狐、出雲と婆ちゃんが出会ったのは、あたしが生まれるずっとずっと前……まだかるうじてお姉さんと呼ばれていた婆ちゃんが弁当屋を開いてから約一カ月後のことだったらしい。もう、五十年前の話だ。

店を訪ねてきた出雲は、店に売っていたいなり寿司を買って食べた。出雲は、婆ちゃんをつくつたいなり寿司がえらく気に入ったらしく、それからというものの毎日のように店を訪れて、いなり寿司を買っようになつたらしい。

婆ちゃんと初めてであった時の出雲の姿は、今と全く変わらない姿だったという。艶のある黒く長い髪、肌が白いことで有名な白雪姫もハンカチを噛んで負けたー！くやしー！と叫んでしまっようなくらい、生気を感じさせないほど白く綺麗な肌。切れ長の瞳、血をたくさん含んだ艶やかな唇。仄かに花の匂いのする着物。

婆ちゃんは、弁当屋を開いてからちようど一年を迎えた日に、常連客と一緒に記念写真を撮った。

その写真の中には、あの馬鹿狐も映っていた。まあ、この写真が撮られた時にはすでにあいつは常連客になっていたのだから、当然

といえば当然だが。

写真に写るあいつの姿は、今のあいつと全く同じだった。今より若いわけでもなく、老いているわけでもなく。白い肌、黒い髪、切れ長の瞳、赤い唇。この写真を撮った頃からもう約五十年近くたっているのに、あいつの姿は少しも変わっていない。静かに微笑むあいつの顔は、あたしがほぼ毎日嫌々見ているあいつの顔と全く同じだった。

ありえない、こんなの、ありえない。人間も、他の動物も、植物も、生きているものは須らく年老いていく。張りのあった肌は、力サカサの紙やすりのような肌になり、動きは鈍くなり、耳は若い時にはしっかりと聞こえていた音をとらえなくなっていく。どれだけ頑張っても、生き物は少しずつ老いて死んでいく運命から逃れることはできない。

それじゃあ、あいつはなんなんだ。五十年たっても老いることなく、若い身体のまままで居続けている、あいつは、人間なのか？この世の生物なのか？答えはノーだと思う。あいつは人間じゃない、この世のものじゃない。あいつが人間だというのなら、宇宙人だって人間になっちまう。

大体、あいつのあの姿はなんだよ。綺麗すぎるだろう、あいつ。眉も目も、鼻も口もどれもこれも、あまりにもきちっと整っているものだから、逆に気味が悪い。やっぱり、何事もほどほどが一番いいんだってことがよくわかる。整いすぎている顔というものは、それはそれは恐ろしいものだ。機械みたい、人工的、生気がない……この世の生物ではない。そんなこと口に出したら、婆ちゃんに殴られるだろうな。殴られるだけですめばいいけど、婆ちゃん怒ると怖いからなあ。このあたしが怖いっていうんだから、間違いない……ってそんなことは関係ないか。

あいつの姿はとにかく目立つ。この世界に住んでいるどんな人間、動物とも違う雰囲気をもつあいつの姿は、ひと目見たら一生頭から離れないはずだ。地味なものは記憶からあっという間に消え、強烈なものはずっと記憶に残る。どんなに記憶力の悪い奴だって、一度見たらあいつの姿を忘れることはないだろう。あたしは十六歳になった今でも、六歳の時に見た、薄桃色の桜の花びらでその身を飾るあいつの美しく妖艶な姿を忘れることは出来ない。

ところが、だ。あいつは目立つから、一回見たら皆忘れることはできないだろう、という予想は大きく外れていたことを、あたしは少しずつ思い知らされることになる。

あたしは、十歳の時まで出雲と初めて会ったのは、六歳の花見の時だと思っていた。あの花見以前にあいつと会った記憶は全くといっていいほどなかったからだ。でも、実際はそうではなかったらしい。あたしは、あいつとはもうずっと前に会っているらしいのだ。しかも一度や二度ではない。赤ん坊の頃から、ほぼ毎日のようにあいつと顔を合わせていたというのだ。顔を合わせただけではない。あいつと会話をしたことも、数え切れないほどあるという。

だけど、あたしはあいつと話したことを覚えていなかった。あの花見よりも前にあいつと会った記憶などこれっぽっちもなかった。「あたしは、あいつと会った覚えなんてないよ」と婆ちゃんに言ったら、婆ちゃんは何らけらけらと笑って言った。

「一部の人間以外はそうさね。出雲と会って、出雲と話をした奴は、あいつの姿が自分の視界から消えた瞬間、あいつのことを忘れちゃうのさ。皆、誰かと話したことはなんとなく覚えていてるようだが、あいつの顔や声や話した内容なんかは全部忘れちゃうようだ」

婆ちゃんは、そのあと「あたしは、そうならなかったけどね」と付け加えた。

「あんたもそうだったよ、沙久羅。あんたは、はいはいを始める前から、出雲と会っていたんだよ。あの花見の前までに一体何百回あいつと会っていたことか。何回も会って、何回も会話をしたよ。全くとおかしかったよ。あいつと会うたび、あんたは『お兄ちゃん誰？』って聞くんだよ。そのたびにあいつは『私の名前は出雲だよ、よろしくね』って優しく言ってる」

……覚えていない。あいつとあの花見以前に弁当屋で会ったことなんて、ちっとも覚えていない。あたしのお世辞にもあまり大きくはない脳みそに、そんな記憶はインプットされていない。ああ、そういうえばあいつとあの花見の日に会ったとき、お兄ちゃん誰と聞いたら、また忘れたのかとかなんとか言っていたっけ。今になってようやくその言葉の意味がわかった。

あいつは、霞のような存在さね、と婆ちゃんは笑いながらそういった。

まだ10歳だったあたしは、霞のようといわれてもイマイチぴんとこなかつたけれど、なんだかもやもやした、はつきりしない存在だといいたいのかなとは思った。

気づいたら目の前にいて、いつの間にか姿を消してしまう。それと同時に記憶からも消えてしまう。目の前にいても、気づかないことも多いという。毎日のように商店街へ来ているのに、商店街を毎日のように利用している人間のほとんどが、あいつの姿をみたことがないというのだ。見たのを忘れたのか、そもそも見えてないのか、そこらへんはちょっとわからないけれど。

まるで、幽霊のようなやつだ。あたしは、人ごみの中に誰にも気づかれずにぼうつと立っている出雲の姿を想像した。誰にも気づかれないにいる出雲は、あたしの脳内でにやりと笑っていた。あたしは、

そんなあいつの姿を想像した途端、寒気がして、ぶるつと震えた。

あたしがあいつのことを化け物……化け狐だと思っっている理由は他にもある。稲荷寿司ときつねうどんが好きだっていうのもまあ、理由のひとつなんだけど、これはどうでもいい。

あたしの住んでいる町、桜町には妖怪とかお化けといった類の奴らがたくさんいたという。そういった奴らがでてくる話が、この町にはわんさかあるらしい。まあ、妖怪とかがでてくる昔話とか、言い伝えとかは全国どの町にも一個や二個、多いところならもつとあるとは思っただけどさ。この町には、そういった類の言い伝えが千個ほどもあるらしい。千個って、桁数間違えてんじゃねえのって感じだよな。まあ、もつと多い言い伝えがあるところももしかしたらあるのかもしれないけれど、あたしは残念ながらそういうことには詳しくないから、なんともいえない。でも、決して少ない量ではないと思う。

その言い伝えの内容は、全国どこにでもあるような、ありきたりなものから、あまりこの町以外では聞かないような話も多くあるらしい。

まあ、量が多いけれどその話全部を知っている奴はそうはいない。大体あたしたちの祖母ちゃん爺ちゃん世代だと、数十個から数百個親世代だと十個前後。あたしら世代にいたっては五個知っていればいいほうだ。あたしたちよりも年下のがき共は桜山神社に関する言い伝えを知っていればいいほうだった。

桜町、またはお隣の三ツ葉市に伝わっている約千個の言い伝えを、百個以上知っている変わった奴といえは、町のはずれにある喫茶店をやっている爺ちゃんと、その爺ちゃんの孫ぐらいのものだと思う。

一応、数十年前にとあるおっさんが（名前は忘れたけど）、文献

を集めたり、爺さん婆さんから話を聞いたりして、その千個もの言い伝えを一冊の本にまとめたものがあるのだけれど、難しくて読む気にもならない。

そんな、一部の物好き以外は読まないような言い伝え集に、たびたび登場する妖怪が一匹いる。その妖怪は化け狐で、そいつの名前は桜町に住んでいる多くの人が知っているものだった。

その桜町では有名な化け狐の名前は、出雲という。

そう、あたしが嫌うあいつと同じ名前なのだ。

化け狐、出雲についての話は婆ちゃんからよく聞いていた。婆ちゃん曰く、その出雲という化け狐は、桜町（昔は桜村）の北西にある桜山に住んでいたという。出雲は、仲間の化け狐と一緒に山や村にあらわれては、作物を奪ったり、畑を荒らしたり、人を殺してその肝を食ったり、娘の結婚を破談させたり、子供を落とし穴に落としたりして怪我をさせたりと、悪戯程度のことから悪戯ではすまされないレベルのおっかないことまで、まあ実に様々な悪事を働いていたらしい。たまに良いことをすることもあつたらしいけれど、そんなことをするのは稀であつたとか。

そんなあいつに関する言い伝えの中で、1番有名なのは、まあ桜町にいる人間なら名前だけは聞いたことがあるはずのもので、その名を「桜山伝説」という。

昔、この町……昔は桜村だったが、に、桜という名前の巫女がいたらしい。その巫女は、そりゃあもう強い力をもっていたらしい。今でいう霊能力者というべきだろうか。未来に起こることを予知したり、雨を降らせたり、村を襲う恐ろしい化け物を弓矢で退治したりしていたらしい。

おまけに、綺麗な黒髪に白い肌の、そりゃあもう綺麗な巫女さんだったらしい。

だけど、性格はその外見とは大違いで、随分と男勝りで強気なものだったらしい。どんな女よりも女らしい外見と、どんな男よりも男らしい心を持った巫女、それが桜だった。漢字は違うけれど、名前は一緒だ。生憎、あたしは美人じゃないけれど、性格に関してはその巫女さんとそっくりのようだ。

そんな彼女を、出雲は狙っていたらしい。出雲は、山に入る人や野生の動物などを殺して、そいつらの肝を喰うことで力を蓄えていたらしい。外見は綺麗だったらしいけど、性格は凶悪、残虐、ついでに気まぐれ。外見と中身のギャップの大きさは、桜に勝るとも劣らないだろう。

出雲は、桜の肝を喰うことで彼女の強大な力を得ようとしていたらしい。人の内臓を食っただけで強くなるものなのかよくわからなかった。うえ、狐が人の腹をむしゃむしゃ食っている場面を想像したら気持ち悪くなってきた。

まあ、それはいいとして。

出雲は、ある日桜村を襲いにやってきて、なんの罪もない村人たちを傷つけたり、殺したりし始めた。村人たちも矢を放つたり、石をなげつけたりして抵抗はしたらしいけれど、相手は化け狐。結局傷一つつけることはできなかったという。

そんなときにあらわれたのが、桜だった。桜は出雲に一人立ち向かった。

出雲と桜は、三日三晩戦い続けた。桜は、出雲を追い詰めたが、どんなに強い力を持っていても、所詮は人間の娘。三日三晩休まず

戦い続けて無事なはずもなく、結局最後には力尽きて死んでしまっ
たらしい。

出雲は倒れた桜の肝を喰らうと、山へと駆けていった。体の中か
ら湧き上がってくる力に興奮しながら。

ところが、しばらくして出雲は、体中が燃えるように熱くなるの
を感じ、苦しみだした。どうやら、出雲に食われた巫女の魂が、出
雲の体を焼き始めたらしい。死んでなお、彼女は出雲を倒そうとし
たようだ。

出雲はその場でもがき、苦しんだが、結局巫女の魂に心の臓を焼
かれて死んでしまった。

村人は桜山の中で死んでいる出雲をみつけた。

そして、命を引き換えにして出雲を倒した巫女を奉り、ついでに
巫女を喰らった出雲も奉ることにした。殺されたことを逆恨みして、
村を祟りかねないと思ったからだ。

その出雲が倒れていた場所に、小さな神社を建てた。その神社は、
桜山神社と呼ばれていて、今も桜山にある。

まあ、そういう伝説だ。

物語の上では、出雲という化け狐は死んだことになっている。

でも、もしその化け狐が実在していて、それでもってそいつが実
は死んでいなくて、今も生きているとしたら……。

きっと、あの馬鹿出雲のようなやつだと思う。

馬鹿馬鹿しい、そんなことであいつを化け狐と決めつけるなんて
でも、容姿が何十年経っても変わらない、強烈な容姿なのにすぐ存
在を忘れ去られる、そもそもその姿を認識されないようなやつが、
人間だとは思わない。

この世にお化けとか妖怪がいるなんて、信じたくはないけれど、

あの馬鹿出雲のように、常識では考えられないような存在がいることも確かだ。

あたしは、ため息をつくとき、カバンを乱暴に閉めた。

第六話：鬼灯夜行（4）

家のチャイムが鳴ったのは、あたしが自分の部屋からでて、乱暴にドアを閉めたときだった。外についているチャイムは壊れかけていて、情けないひよろつとした音をだす。

「はい？ 誰ですか」

あたしがドア越しにそう聞くと、聞きなれた声が返ってきた。

「さくらです。……そこにいるのは紗久羅ちゃんかしら？」

のんびりとした女の声。あたしは、ドアを開けた。ぎざざという嫌な音と共に開いたドアの向こうには、予想通りの人物が立っていた。

臼井さくら。あたしより一つ年上、兄貴と同学年のその人は、あたしと兄貴にとっては幼馴染にあたる人物だ。

あたしとは別の意味で、女の子らしくない人だ。あたしみたいに、男勝りで乱暴で、短気という性格だからというわけではない。むしろ彼女はのんびりしていて、お人よしで、争いごとを好まない性格の人間だ。彼女の場合は、性格が男の子っぽいというわけではなく、外見が女の子っぽくないのだ。

肩にかかるかかからないかというくらい髪の毛はぼさぼさで、好き勝手な方向にはねている。真っ直ぐに伸びているところを探すほうが困難だ。元々癖っ毛であるのに加えて、ブラシで髪をとかすこともほとんどないらしいから、そうなってしまふのも当然だ。

メガネは今時おっさんでもかけないような、やたら大きなレンズの丸メガネだ。フレームが太くないだけまだましかもしれない。

服装といえば、よれよれくたくたの緑のトレーナーに、だぶだぶのベージュ色のズボンに、汚れが落ちなくなってしまった青い運動靴。大体彼女は、こういったよれよれだぶだぶの、しゃれっ気のない服をきている。

服がだぶだぶしていて胸とかがあまり目立たないせいか、今でもよく男の子だと間違われている。

しかし、彼女は周りからどれだけ外見について指摘されても気にしない。気にしないから、直そうともしない。

「さくら姉か、^{ねえ}どうしたんだ、こんな時間に？」

あたしはいつも彼女のことをさくら姉と呼んでいる。よくみると、さくら姉は手にタッパーをもっていた。彼女はあたしにそのタッパーを差し出した。

「あのね、私の母さんがこの前菊野おばあ様から、里芋の煮っ転がしのつくりかたを教えてもらったの。それで、早速菊野おばあ様にいわれたとおりに作ってみたら、菊野おばあさまに食べてもらって、感想をいってほしいのですって」

青いふたのタッパーから、里芋や人参、しいたけの姿がみえる。

「ああ、そういうことか。それじゃ、もらっておくよ。婆ちゃんには挨拶した？」

「いいえ、おばあ様もおば様も忙しそうだったから。悪いけれど紗久羅ちゃんからおばあ様に伝えていただけるかしら？」

さくら姉は申し訳なさそうにそういって、あたしにタッパーを手渡した。

別に断る理由はない。あたしは一回うなずいた。

「別に、それくらいかわまないよ。これ、あたしも食べていいの？」

「もちろんよ。皆で食べて。ふふ、それじゃあ私は帰るわね。今、読みかけの本があつてね。続きが気になって仕方ないの。とっても素敵な話よ、受験勉強に嫌気がさした女の子が逃げるように、外を飛び出すの。真つ暗な道をずっと走り続けているうちに、その女の子は異世界へ行ってしまうの。女の子は受験勉強から逃れる事ができて喜ぶけれど、自分の世界で逃げ続けていた女の子は、その世界でも色々なものから逃げ続ける羽目になるのよ。とっても面白い本なのよ、それで……」

「ああ、もういいよ、さくら姉！　続きは今度ゆっくり聞くからさ！」

さくら姉が一回この『本について語りたモード』になると、なかなかとまらなくなってしまう。あたしは、そうなる前に、話を続けようとしたさくら姉を、無理やり外へ押しだした。生憎、あたしは本について何時間も辛抱強く聞いていられるほど、読書は好きじゃない。

さくら姉は、乱暴に追い出されたにもかかわらず、怒る様子もなく、にこにこしている。

「ん、それもそうね、早く読まなくちゃね。それじゃあ紗久羅ちゃん、またね」

「ああ、またな」

さくら姉は軽く手をふると、のんびりと階段を下りていった。あたしは、それを見送るとドアをしめ、タッパーを台所にある冷蔵庫の中にしまった。

あたしは、ため息を一回ついた。

さくら姉は無類の読書好きで、いつも本ばかり読んでいる。恋愛

ものとか、ノンフィクションものとかよりは、ファンタジーものの方を好んで読んでいるとか。

さつき、あたしは桜町に伝わる言い伝えを百個以上知っている変わり者といえば、町の外れにある喫茶店をやっている爺ちゃん、その孫ぐらいだといった。……さくら姉こそが、その「喫茶店をやっている爺ちゃんの孫」である。

自分の爺ちゃんから、何回も言い伝えを聞かされているうちに覚えていったらしい。読書が好きになったのも、町一番の読書好き、商店街にある小さな書店よりも、多くの本を所持しているといわれている爺ちゃんの家に、頻繁に遊びに行っていたからに違いなかった。

読書好きであることはいっこうに構わないのだが、さくら姉は、どうも現実の世界と物語の世界を混同しちゃっているような印象がある。

自分の身近にいる人間や、自分や周辺で起きた出来事を、自分が読んだ本に登場する人物や、場面に例えてしまったり、言い伝えの中にしか存在しないはずの妖怪や精霊が本当にいるものだと思ってしまう疑わなかつたり。

あまりに物語の世界に浸りすぎるものだから、自然と浮いた存在になってしまい、結果的に友達もほとんどできず、学校の奴らからは変わり者のレッテルを貼られ、バカにされ続けているという。

まあ、本人はあまり気にしていない……というか、気づいていないようだし、学校生活をそれなりに楽しんでいるというから別にいいんだけど。どういうわけか、うちの馬鹿兄貴とは仲がよく、積極的に話しかけたり、一緒に家まで帰ったりしている。まあ、幼馴染だからというのもあるんだろうけど。

あたしは、別にさくら姉のことは嫌いではない……けど、どうにも苦手である。

やがて、親父が、それに続いて婆ちゃんと母さんが仕事を終えて帰ってきた。馬鹿兄貴も部屋からひよっこり現れた。

夕飯には早速おばさんが作った里芋の煮つ転がしを食べた。それはあたしからしてみれば十分おいしいものだったけれど、辛口の婆ちゃんは「まだまだだね」と一言言った。

*

次の日。またいつものように学校から帰ってきた後、軽く宿題をすませ、暇な店番を始めていた。

相変わらず外は暑く、数十分いるだけで干物になりそうな勢いだっ
った。

そして、空が真っ赤に燃えて、暑さでばてているあたしに止めを刺す炎の輝きを見せ始めた頃、また「あいつ」がやってきた。

あいつは、気がつくとも目の前にいた。そう、いつものように。

燃える炎を背にして現れたやつのは、恐ろしく涼しげで冷ややかだった。水で濡らしたような光沢のある髪、氷のように透き通った肌、氷の刃のような瞳。今日の着物は董色だった。

「やあ、こんばんは」

「さようなら」

「いや、さようならじゃなくってさ。いつものように、いなり寿司をおくれよ」

「賞味期限が過ぎたやつでよければ、いくらでもやるよ」

シヨーケースに肘をつき、頬杖をしながらそう言い放つと、やつは困ったような表情を浮かべた。もっとも、それは形だけのものだ

けど。

「相変わらず意地の悪いことばかりいうんだね、紗久羅は。それでいて、私のことを君は性悪狐扱いする」

「うるさい、お前が性悪なのは事実だろ、ついでに化け狐っていうのもな！」

「どうせ、たいした根拠はないくせに」

開いた扇子を口元にやって、出雲はほほ、と笑った。あたしは、あと少しでいなり寿司の入ったパックを奴の顔に投げつけるところだった。婆ちゃんが背後から無言の圧力をかけていなければ、今頃あいつの顔に大好きないなり寿司入りのパックが直撃していたことだろう。

「うるさい！ お前みたいなのが人間のわけないだろうが」

「私がいかに美しいからって、変なことを言わないでくれよ」

「よく自分で美しいとかなんとかいえるな！」

たしかに、あたしの目から見てもあいつは綺麗だけれど、それはあくまで表面上のものであって、内面は光をも飲み込むブラックホールもびっくりするくらい黒くて醜いに違いなかった。

あたしは思わず大声を張り上げて、シヨウケースを叩きつける。そして、いつものように婆ちゃんの怒声が店の奥にある調理室から聞こえたけれど、それは無視しておく。

「まったく、本当にそんなことばかりやっているよ、嫁の貰い手がいなくなってしまうよ」

「結婚するつもりはないから、別にいいよ」

「おやおや。まあ、結婚がすべてというわけではないけれど。ふふ、まあどうしてもというのなら、私がもらってあげるよ」

あたしは、あまりにたちの悪い冗談を聞いて、怒りを爆発させた。あたしが怒れば怒るほどあいつが面白がることは分かっているけれど、それでもあいつに食って掛からないと気がすまない。

「この馬鹿狐！ 今日こそ、その化けの皮を剥いでやる！」

剥ぐ方法なんて微塵も知らないけれど、まあ世の中にははったりという言葉がありまして。あたしは、くすくす笑う奴をびっと人差し指で指した。

「やれるものなら、やってごらんよ。どうせ剥がれるものなんて何もないんだから。頑張るだけ無駄だよ」

「無駄かどうかは、やってみないとわからないだろう！」

「はいはい。まあ、どうぞご勝手に。……しかし、私が仮に本当に化け狐だとしたら、君はどうするんだい？」

出雲は触れたら凍ってしまいそうなくらい冷たい笑みを浮かべてじつとあたしを見つめた。ショーケースの上に右ひじを乗せ、掌でほっそりとした顔を支えている。顔に髪がかかり、その切れ長の瞳を隠している。しかし、絹糸のように細い髪の毛の間から、ギラギラ輝いた黒目がちらっと見える。その奥には気のせい、青い炎がゆらゆらと揺れていた。それは今にも飛び出してきて、あたしの体を焼きそうだった。あたしは、ぞつとして視線をそらした。

「別に。ただ正々堂々と、お前のことを化け狐って呼ぶことができるようになるってだけの話だ」

「今だって正々堂々といっているくせに。……しかし、もし私が桜町に伝わっている言い伝えにでてきている『出雲』だとしたらさ、相当怖くないかい？　だって、彼は多くの人間やら動物やらを喰らったというじゃないか。おまけに悪戯ばかりするし。正体がばれた途端に、君のことを食べてしまいかもしれないよ」

そういっあいつの顔はやけに静かで、冷たい。急に、こいつは唇に血でも塗りたくっているんじゃないかと思うようになった。そう思って見てみると、妙に目立つ唇の色が血のそれに見えてきて、背筋が凍った。

あたしは、恥ずかしながら全力で逃げ出したくなった。微かに浮かべる笑みが逆に恐ろしかった。その言葉は全く冗談には聞こえなかった。

体が、油を失ったブリキのおもちゃのようになって上手く動かない。いつも、あいつにじっと見つめられるとそうなる。でも、今回はいつも以上に酷かった。これが、奴の本気なのかもしれない。

「そんなに、大事なのかい。私が妖怪なのか、人間なのかってことは」

そうつぶやくあいつの顔は気のせいだろうか、酷く疲れているように見えた。あたしは、なんとなく気まずくなってしまった。

大事か大事でないか、と聞かれても……正直、答えに困る。あたしは、一度あいつの顔を見、そしてまた視線をそらした。それでも、あいつはあたしをじっと見つめ続けていた。何も言わず、ただ、静かに。

あいつは、しばらくは黙っていたけど、やがて大きなため息をついた。その瞬間、奴が放つ冷たく恐ろしいオーラのようなものがすっと消えた。

「まあ、いいか」

何がいいのかよくわからなかったけど、あいつはたしかにそうだった。あいつから色々なオーラが消えていったのを認めると、あたしは視線を戻し、あいつをぎろつと睨んだ。

あいつは、ただにこりと微笑んでいた。いつものように、美しく、冷たく、気味の悪い笑みを浮かべていた。

「紗久羅は、今度あるお祭には行くのかい」

「は？」

あたしは、いきなり話題が変わってしまったから、少々拍子抜けしてしまった。何でいきなりそんなことを言い出すのかと思った。

出雲がいう「祭」というのは、恐らく明後日にある、年に一度この時期に、桜山にある桜山神社周辺で行われる夏祭りのことだろう。それは、昔命を懸けて化け狐を倒したという巫女・桜をまつるためのお祭だ。………ついでに、そのとき倒された哀れで間抜けな化け狐の魂を鎮めるのだ。

まあ、そうはいうけれど中身は一般的な夏祭りとはほとんど変わらない。山の麓にはたくさん屋根が並び、町中の人間が屋台をまわる。一応、巫女と化け狐のために、社の中で何人かの巫女が舞を舞うけれど、爺さん婆さんやその巫女さんの家族以外の人間はほとんどそれを見に行くことはない。町の人にとって大切なのは、巫女と化け狐の魂を鎮めるのではなく、友人や恋人と一緒に屋台めぐりを楽しむことなんだから。

隣の街で行われる夏祭りに比べるとずっとこじんまりとしているし、花火も打ち上げられないけれど、そこそこ楽しいものだ。

あたしは、友人と一緒に行くつもりだった。だから、一回首を縦にふった。

「いくよ。ダチと一緒に。屋台で色々買って食うつもりだ。つい

でに、あんたの魂を鎮めるために、神社にお参りに行ってやるよ」
そう意地悪く言ってやると、あいつは少しすねたような表情を浮かべた。

「だから、私はあの化け狐とは無関係だつてば。大体、あつちの『出雲』は巫女に殺されたんだらう？　もうこの世にはいないのだから？？」

「言い伝えなんて、どこまでが本当か分からないだらう。本当は化け狐は生きていたつてことだつてありえるからな」

いや、まあ化け狐が本当にいるなんて信じていないんだけど。いや、でも出雲のことは化け狐だと思っっているし、ううん。難しい。

あいつは、その答えを聞いて少しだけ笑うと、そりゃあもうとてつもなく深いため息をついた。そして、すっかり真っ赤に染まった空をみやり、何故か今にも泣きそうな表情を浮かべる。そしてまたその表情が笑顔にかわる。それでもって、腹が立つほど深いため息をついた。まあ、本当にコロコロと表情を変えるやつだ。悲しんだか楽しいんだか呆れているんだか、はつきりさせてくれと思う。

「いやだね、本当に君という人は。まあいいや。とにかく、いなり寿司をおくれよ。それさえもらえれば、私はすぐに帰るから」

「しょうがねえな。売らなきゃ婆ちゃんに殺されるし。ほらよ」
あたしは、パックに入ったいなり寿司をビニール袋の中に乱暴にいれると、あいつに差し出した。出雲は、それを受け取るとお金を渡した。

こいつが訳のわからないことをするのはいつものことだ、いちいち気にしてはいられなかった。急に冷たくなったり、表情をこころ変えたりしたのは何故だらうなんて、そんなこと、考えるのも馬鹿馬鹿しい。

大好きないなり寿司をもらうと、あいつは飴をもらったガキのように機嫌がよくなった。これ以上の幸せはない、とでもいつているかのような笑みを浮かべている。

「ふふ、ありがとう。それじゃあ、私はそろそろ行くよ」

「ああ、さっさと消えな、化け狐」

あたしがぶつきらぼうに言うと、またあいつは笑った。

「それじゃあ、またね。もしかしたら、明後日のお祭りでも会えるかもしれないねえ」

そして、そのとき。出雲は少し間を置いてそう続けた。

「そのとき、私は君を……」

「なんだよ」

急に無表情になった出雲の言葉に眉をひそめて、あたしはそう返す。

しかし、出雲からその言葉の続きが語られることはなかった。

気付けば、あいつはあたしの前から姿を消していた。

いつもことだ。なにも気にすることじゃない。……だけど、あいつの最後の言葉の続きは、気になった。

笑顔でも、冷たい表情でも、怒っている様子でもない、何にもない空っぽの表情を見せたのは初めてだった。

あたしは、しばらくその場で案山子のように突っ立って、いつも通りの人の流れをぼうつと見つめ続けた。

あいつと明後日の祭であった場合、どうなるというのだろう。あいつは、何をする気なのだろう。

まさか、食うわけじゃないよな。

そんなことあるもんか、何を考えているんだ馬鹿馬鹿しい。
あたしはそう自分に言い聞かせたけど、もやもやした心が晴れる
様子はなかった。

*

次の日、出雲は『やました』には来なかった。今までも時々そういうことがあった。なんでも、時々店に行くのが面倒くさいと思う日があるのだという。「私は元々面倒くさがりやな性格なんだよ」と以前あたしに話したことがあった。だから、別におかしいことじゃないんだけど、昨日のことがあるから、少し気になった。
そういうふうには、あいつがこの店に来ない時は、代わりにあいつと一緒に暮らしているらしい小娘が稲荷寿司を買ってくる。

年齢は10歳くらいで、小柄だ。髪は上のほうで一つにまとめてお団子にし、赤いリボンのついた髪留めでとめている。髪留めには鈴がついているのか、こいつがあるたびにちりんちりと鈴の音が聞こえる。前髪が随分伸びている上にいつもうつむきがちだから、目はすっかり隠れている。たまに顔を上げると、髪の間から大きくてくりつとした瞳が見える。着ているのはいつも赤い着物で、紅葉とか桜の花びらとか、手毬とかが描かれている。こいつが、赤以外の着物を着たところは見たことがなかった。そして、赤い鼻緒のついた黒塗りの草履を履いている。

名を、鈴と言う。出雲と同じく、今時なかなか見かけないような古風なガキだ。

見た目は（前髪さえきちんと切れば）可愛いが、中身はくそ生意気で可愛げのない奴だった。無口で、普段はあまり口を開かない。けど、ひとたびその口を開くと、そこから飛び出してくるのは人を

むかむかさせるような言葉ばかりだった。

鈴は、いつもよりも数倍は機嫌が悪そうで、すっかり髪の毛に隠れている二つの目で、あたしをぎろつと睨みつけていた。店の前にやってきて、五分くらいもの間、何もいわずにそうしていた。まるで人形のようなだった（可愛らしい人形、というよりは自分を捨てた人間を恨む呪いの人形だった）

「なんだよ。いなり寿司買うんだろう？　いつまでもそこで睨んでいるなよな」

いい加減腹が立ったあたしは、頬杖をつきながら、見下すように鈴を睨む。だが、この小娘はあたしに睨まれたくらいで簡単に態度を変えるような奴ではなかった。黙ってあたしを睨み続けている。

「何にもいらぬなら、さっさと失せな。あたしだって暇じゃないんだ」

これは嘘だった。……本当はあくびを1分間に10回以上するくらい暇だった。

それでも奴はまだ少しの間黙っていたけれど、ようやく観念したのか睨むのをやめて、すっかりうつむいてしまった。

「……嫌い」

「は？」

「私、紗久羅のこと、嫌い。出雲のこと……いじめるから」

おいおいおい、ちょっと待て。いじめられている（というか弄られている）のは、あいつじゃなくてむしろあたしの方だろう。あいつ、このガキにあることないこと（主にないこと）ばかり吹き込んでいるんじゃないだろうな。

あたしは、ふざけるなと反論しようとした。しかし、鈴があたし

の反撃を阻止するかのようには言葉を続けた。

「紗久羅は、知らないんだ。知らないくせに、何にも、知らないくせに」

「だから、何が言いたいんだよ。まったく、冗談じゃない。いじめられているのは、あたしのほうだ」

身を乗り出して、背の低い鈴と視線をあわせる。鈴も、負けじと顔をあげて、あたしをぎろつと睨んだ。その目は、尻尾の逆立った猫に似ていた。

「……紗久羅には、一生分からない。きつと、一生出雲のこと、いじめ続けるんだ」

鈴にしては大きな声でそう一言いうと、それっきり黙ってしまった。こつちがチビガキ、とかなんとかいっても何も言わなかった。

あたしは、そりやもう大きなため息をつくと稲荷寿司の入ったパツクを乱暴に袋に入れ、鈴に差し出した。すると、あいつはそのそと巾着袋からお金を取り出して、あたしに静かに渡した。あたしがお釣りを乱暴につきだすと、それを素早く奪い取って、そのまま何も言わずに走っていった。

あたしは、二日連続で訳のわからない目にあって、どっと疲れてしまった。

なんなんだよ、あたしが出雲をいじめてるって。

今度あいつにあつたら、そこらへんのことを問い詰めてやる。あたしはそう心に誓った。

明日は、お祭りがある。もしかしたら、あいつに明日会うかもしれない。

そのとき、私は君を……

その言葉を思い出した途端、心が鉛を詰め込んだように重苦しくなった。あいつの言葉に振り回されるのは嫌で嫌で仕方ない。仕方ないけれど、どうしてもその言葉があたしの頭から離れてくれなかった。

結局、あたしはその日の夜、まともに寝ることができなかった。

第七話：鬼灯夜行（5）

そして、気付けば祭りの日になっていた。

三時ぐらいまで店番をしていたあたしは、婆ちゃんに呼ばれて二階へあがっていった。相変わらず酷い音のするドアを開けると、両手を腰にやり、どんと立ちながらにやにや笑っている婆ちゃんがあたしを待ち構えていた。

*

「ほれ、浴衣着せてやるからこっちへ来な」

浴衣なんて面倒くさい。あたしは、普段着で行くつもりだった。だけど、やる気満々の婆ちゃんからはどうやっても逃げられない。

あたしは観念して、婆ちゃんの部屋へ向かった。リビングのテーブルに座って、バニラアイスを食べていた馬鹿兄貴に婆ちゃんが「覗くなよ」と言う。「誰が覗くかよ、凶暴な妹の着替えをさ」と実に生意気な返事が返ってきた。こっちだって覗かれない。あたしはあかんべえをしてやると、いつもより乱暴にふすまを閉めた。

「さ、着替えだ着替え。ほれ、さっさと身ぐるみはいじまいな」

「どこの盗賊だよ、どこの。……しょうがないから脱いでやるけどな。でもさ、うちにあたしが着られるような浴衣なんてあったっけ？」

ガキの頃は婆ちゃんが作ってくれた浴衣があっただけけど。最近浴衣を買ってもらった覚えはないし、婆ちゃんが浴衣を作っているのを見た覚えもない。浴衣なんて、ここ数年の間一度も着ていない。

婆ちゃんがにやりと笑った。

「それが、あるんだよ。最近、知り合いからもらったのさ。ちよっ

と古いけれど、立派なものだよ」

そういつて、婆ちゃんが何か高貴な匂いの漂う箱を開けて、浴衣を取り出した。

色は、浴衣によくある藍色だった。深いその色は、夜空のようだった。裾の方に、緋色と緑と明るい紫色の手鞠が描かれている。それぞれ、色々な模様が描かれていて、なかなか綺麗だった。そして、明るい色の桜の花びらがひらひらと舞っているのだ。あたしは春の夜に見た、ライトアップされた桜を思い出した。

「へえ、綺麗だな」

「これを見て、素直に綺麗だって言えるとは。あんたも一応女の子だったんだね」

「女で悪いか」

「悪くはないさね。……ったく、あんた、相変わらず胸がないねえ。ったく、頭にも乳にも栄養がいつてないんだね、あんたの場合は」

「うるせえ。別に胸なんてなかったっていいじゃないか」

「はん、まあどっちでもいいけどね」

そういいながら、婆ちゃんは手馴れた手つきで、あたしに浴衣を着せていく。

浴衣から、桜の花の甘い匂いが漂ってきていた。その匂いを嗅ぐと、あたしはいつも思い出す。……馬鹿出雲と初めて「出会った」あの日のことを。

身体中が冷たくなって、微かに震える。その後、火に炙られたかのように熱くなる。

そして、先日の出雲の言葉が頭の中を縦横無尽に駆け巡っていつ

た。

そんなに、大事なのかい。私が妖怪なのか、人間なのかってことは

そのとき、私は君を……

うるさいな。あたしは、蠅を手で追い払うかのように、その言葉を頭から追い出していった。

(何で、あんな奴の言葉のせいでこんなにイライラしなくちゃいけないんだ)

腰に巻かれていく帯のように、ぐるぐると頭と腹の中を巡る思い。どれだけ追い出しても、次から次へと入ってくるあいつの言葉と顔。あいつのことなど、大嫌いなのに。考えないほうが、ずっと楽だというのに。

ぱん、と婆ちゃんがあたしの尻を軽く叩いた。どうやら、着付けが終わったらしい。

「なんだい、その仏頂面は。全く、浴衣を着れば少しは色気が出るかと思っただけれど。駄目だねえ、本当に。何であんたはそんなに色気がないんだ」

「婆ちゃんの孫だからだろう」
そういうあたしの頭を、婆ちゃんが思いっきり殴った。容赦のない一撃だった。

「痛いな！ 何も殴ることないじゃんか」
しかし、その一撃のお陰で出雲のことが頭からぱんと出ていってくれた。その点に関しては、感謝すべきだろう。

「うるさいねえ、とにかく、さつさとお行き。友達と会うまでには、その仏頂面、直しておくんだよ」

あたしは、あかんべえをしようと、ふすまを乱暴に開けた。そして、そのまま家を出ようとする。

「紗久羅」

婆ちゃんが、そんなあたしを呼び止める。

「何だよ」

「出雲にあつたら、よろしく伝えておくれよ」

「……な、なんで」

なんで、そこであいつの名前が出るんだ。ちくしょう、また思い出しちゃったじゃないか。せっかく忘れかけていたのに。

婆ちゃんは、ただにこにこ笑うだけだった。そして、教えてやらないよとばかりにあかんべえをしてきやがった。

あたしも、あかんべえで応戦して家を出て行った。

やっぱり、あたしに色気がない原因は婆ちゃんの血なんじゃないか、と思った。

外は相変わらずむしむししていて、セミはぎやあぎやあ喚いている。更に、浴衣を着た女やガキの、わいわいきやあきやあという声がそこらじゅうから聞こえる。

祭りというものは、本来楽しむものだ。もう少し歩けば、ずらりと並ぶ屋台が見えるはずだ。それなのに、あたしの気分は少しも晴れなかった。ただいらいらするばかりで、いつそのまま方向転換して家へ帰ってしまおうかと思った。

出雲の言葉が頭から離れない。今度会ったらどうするっていうのだ。あれだけまじな顔をしていたのだ、何も無いわけではない。

あいつに、今は会いたくない。でも、このまま進めばあいつに会うかもれない。

そんなことを考えながら歩いてきたものだから、後ろからぼんと肩をたたかれたときは、心臓が飛び上がるかと思った。慌てて振り返ると、そこには青い無地のシャツにジーンズという地味にもほどがある格好をした、さくら姉が立っていた。

あいつじゃなくて、本当に良かったと思った。ああ、くそ、まだ心臓がばくばくいつてやがる。

「びつくりした、さくら姉か」

「こんばんわ、紗久羅ちゃん。素敵な浴衣ね、とても似合っているわよ」

暑さとセミの声でいらいらするようなことなど、決してなさそうなさくら姉は、あたしと違って、にこにこしていた。

「そんなことねえよ。さくら姉も、祭りに？」

「ええ、巫女様のやる、桜と出雲の魂を鎮める舞を見に行くの。とっても素敵なのよ。本当、皆もつたいないわ。皆、屋台ばかりに目がいつてしまって、舞なんて見ないんですもの」

「気が向いたらね」

「あ、そうだ、紗久羅ちゃん。さっき、あの方を見かけたわ」

「あの方？」

「ほら、よくお弁当屋さんに来ている男の人よ。とっても綺麗な髪の毛の、着物を着ている」

……出雲のことだ。やっと落ち着き始めた心臓がまた、それはもういい勢いで飛び上がった。やっぱりあいつも来ているんだ。

さくら姉は、あいつのことを忘れられない。普通の人間は、あいつが視界から消えた途端、あいつの存在を忘れてしまうというのに。

さくら姉の目がとろんとしている。やばい、あの目は自分だけのメルヘンワールドにワープしてしまった時の目だ。

「素敵よね、あの方。長くてとても綺麗な髪の毛、切れ長の瞳。そして、なんととっても着物姿だというところが、最高だわっ。赤い蛇の目傘持って、桜の木の下に立ったら、それはそれは美しいのでしょ。うね。私、その姿を見たら、失神してしまいそう」

あいつがとんでもない悪魔であることを知らないさくら姉は、うつとりしながら、一人語っている。

あれが、化け狐の出雲だと知ったら（いや、そう決まったわけではないけれど。いや、きっとそうに違いない）さくら姉はどうなるだろう。発狂して、町中を走り回り、拳句意識を失って倒れてしまっただろうか。いずれにしろ、狂喜乱舞することは間違いないだろう。さくら姉にとって、言い伝えにでてくる妖怪たちは、憧れの存在なのだから。

ああ、それにしても憂鬱だ。あいつがここに来ているなんて。

うわ、そうだ。あたしは今浴衣姿だった。こんな姿あいつに見られたら、絶対からかわれる。馬子にも衣装、だとか、お転婆紗久羅姫も浴衣を着れば普通の女の子だね、とか言うに決まっている。

奴がにこにこ笑いながらそう言う姿を想像したら、鳥肌が立った。そんな恐ろしい、いやおぞましい事態にならないことを祈るしかない。

い。

「ああ、あの人に話しかけてみればよかったわ。それにしても不思議ね。あの人、あんなに目立つのに、誰もあの人に気付いていないみたいなんですもの」

「あいつは、霞みたいなのなんだよ。掴みどころがないんだ。ああ、ごめん、さくら姉。あたし、ダチと待ち合わせしているから、そろそろ行かないと」

「霞みたい……確かにそんな感じね。ああ、ごめんなさいね。お祭、お友達と楽しんできてね。私は一人でのんびりしているわ。本当は一夜と一緒にいこうかなって思ったのだけど。ものすごい勢いで拒否されちゃったわ」

「そりゃ、いくら馬鹿兄でも彼女でもない人間とは行きたくないだろう。そんなことしたら最後、たちまち噂になるに違いなかった。さくら姉は、本当にそういうことには鈍い。」

あたしは苦笑いしながら手を振って、さくら姉と別れた。

桜山の麓に並ぶ屋台の周りには、大勢の人がいた。隣にある三つ葉市や、舞花市まいはなしから来た人もおり、屋台に囲まれた狭い道は、人で埋め尽くされ、今にも爆発しそうだった。皆、まあよくこんな田舎町の祭りなんかに来るなあ、余程暇なんだなあ、などと感心してしまふ。

林檎飴の甘い匂い、焼きそばのソースの香ばしい香り、射的のぼんぼんという音、ガキが綿菓子わたあめを親にねだる声、ぴいひやららという祭囃子が混ざる道を抜けた先に、桜山神社へ続く階段が、見える。その両端にも、屋台が並んでいる。

神社の入り口には、大きな鳥居がある。朱塗りのそれは、もう大

分色あせていて、ところどころに傷がある。誰かが釘か何かを使って、故意につけたらしいものもあった。かくかくの線で、相合傘が描かれている。全く、馬鹿なことをするものだ。さくら姉がみたら憤慨して、犯人を捕まえてこらしめてやるわ、と言うに違いない。その鳥居の前に、あたしを待っているダチが2人いた。一人は私服姿、もう一人は青地に朝顔の描かれた浴衣を着ている。

「あ、紗久羅。やだ、あんた浴衣着ているの!? もう、あたしは絶対私服で行くっていつていたくせに。私だけ私服なんて、恥かしいじゃない」

私服姿の方……あざみは、ぶんぶんとわざとらしく頬を膨らませて怒ってみせた。

「うるせえ、あたしだって好きで着ているわけじゃないやい。婆ちゃんに無理矢理着せられたんだ」

「問答無用。罰として、チョコバナナ一本おごってもらいますからね」

「何だよ」

「友達に嘘ついた報いです」

「馬鹿いうなや。嘘つこうとしてついたわけじゃないんだから」

「もう、紗久羅もあざみも、楽しい楽しいお祭で喧嘩なんてしないでよ」

そう苦笑いするのは、咲月だ。背が高く、スタイルもいい美人娘。今は別の高校に通っている。どうやら、高校でももてもらっている。

紗久羅、あざみ、咲月。あたしたち三人は、ここ桜町では「お花

トリオ」と呼ばれていた。3人とも名前が花からとられているからだ。

男勝りのあたし、童顔で子供っぽいあざみ、美人で大人っぽい咲月。性格も外見も全く違うけれど、昔からあたしたちは仲が良かった。

「分かってるって。それより、早く行くこうぜ。こんなところでばうと突っ立っていてもつまらないだろう」

「それもそうだ。私もう、お腹すいちゃった。いっぱい食べなくちゃ」

「まあ、あざみったら。私は、巫女様の舞を見たいわ。普段は見ないのだけれど、今年は美乃里姉みのりさんが舞うのですって」

「美乃里、って咲月の従姉妹だっけ」

「そうよ。私にとって、自慢の姉様だわ。美人だし、優しいし、勉強も運動も出来るし」

「その言葉、咲月に全部返してやりたいわ。咲月だって、綺麗で優しく、勉強も運動もできるじゃないの。ああ、もう悔しい。罰として、私に林檎飴一本おごること」

あざみがびしっと咲月を指差しながら、食い意地の張った発言をする。全く、食べることしか頭にないのか、と思う。こいつは、あたしたちの数倍も食べるくせにやせていて、背も一向に伸びない。

「美乃里姉さんには敵わないわ。まあ、まだ舞までは時間があるし、屋台巡りに行くとしましょう」

「はい」

あたしとあざみは、咲月についていった。

*

「紗久羅、射的で対決しようよ。どっちが大きな景品とるかでさ。負けた方は、ポップコーンをおごるってことで」

「お前、本当に食べ物のことばかりだな」

「だってお祭って、食べるためのものでしょう」

その言葉に、あたしと咲月は苦笑いするしかない。こいつにとっ
ては、花火や舞はどうでもいいのだ。まあ、気持ちが分からないで
もないけどさ。

「まあ、いいや。勝負は好きだからな。ふんだ、絶対負けないから
な」

あたしは、射的屋のおっちゃんにお金を渡す。続いてあざみもお
金を渡し、鉄砲を手取る。射的は、一人五回挑戦できる。

「二人共、頑張ってね」

「咲月は、私の応援をしてくれるんだよね」

「いや、あたしだろう」

「二人共、って言ったでしょう」

咲月が困ったように笑った。彼女は昔からあたしたち二人の保護
者役だった。

あたしは、まずは無難な難易度っぽい、軽そうな置物に狙いを定

めた。

あたれあたれあたれあたれ……と念じながら、引き金を引く。ぽんつという間抜けな音と共にコルクが鉄砲から飛び出す。しかし、惜しくもわずかに狙いはそれてしまった。あたしは舌打ちする。

「それじゃ、次は私の番だね。私は、あのくまのぬいぐるみを狙うからね」

そういつて指差したのは、討ち取るのがかなり難しそうな、可愛らしいくまのぬいぐるみだった。

あんなもの、とれるもんか。あたしは油断していた。

奴は、やってのけた。

ほん、と鉄砲から放たれたコルクがくまに見事にヒット。しかも、バランスを崩し、ぬいぐるみはぽてつと落ちた。

開いた口が塞がらなかった。馬鹿な、なんであんなものがとれるんだ。ああ、そうだ。あざみは馬鹿みたいに運のいい人間だった。すっかり忘れていた。

「やったね、大きい景品ゲット！ これで私の勝ちだね」

「いや、まだ勝負はわからないぜ」

そういつて、やってみるが、上手いかない。4発目に小さなキューピー人形をゲットするが、あざみのとった人形には到底敵わない大きかった。

最後のチャンス。こうなったら。あたしは、くまのぬいぐるみより大きい、間抜けな顔のかっぱのぬいぐるみに狙いを定める。

人間、信じるものは救われる、という。

ならば、勝利を信じて撃てば、あるいは大きな獲物でも仕留められるかもしれない。しくじるなよな、自分。頑張れあたし、あたし

は頑張れば出来る子だ。

今のあたしには、周りの音は何も聞こえない。かつぱの間抜けな顔しか、目に映っていない。
いける。

覚悟しろ、間抜けなかつぱ。そして、大食いあざみ。

あたしは、引き金に手をかける。

ぼん。

「ひい!？」

突然、恐ろしく冷たい手に肩を叩かれ、あたしはぎくりとした。

そして、馬鹿みたいに狙いがそれた状態で引き金を引いてしまった。

ぼんと放たれたコルクは、かつぱにかすりもせず、宙高く飛んで、へなへなと力なく落ちていった。かつぱがきゅっきゅと笑う声が聞こえたような気がした。

あんな冷たい手をしている奴、出雲しかない。あの野郎、よくも邪魔を！あたしは勢いよく振り返る。が、奴の姿はなかった。

結局あたしはかつぱに敗れ、くまに敗れ、あざみに敗れた。あざみに敗北すること、それすなわちポップコーンをおごることなり。ああ、貴重なお小遣いが。無念なり。おのれ出雲、今度あったらただじゃおかない。いや、できれば会いたくないけれど。

あたしはあざみにポップコーンをおごってやる。「いやあ、悪いですねえ、紗久羅さん、はっはっは」とわざとらしく言いながらポップコーンを頬張るあざみを、思わず殴り飛ばしたくなった。

その後は、林檎飴を買ったり、チョコバナナを買ったり、らくがきせんべいに絵を描いたり、たまたま出会った知り合いと話したりして、祭りを楽しんだ。

「あ、そろそろ舞が始まる頃だね。二人共、一緒に来てくれる？」

「別に構わないぜ。お腹もそこそこいっぱいになったし」

「私もいいよ。まだまだいっぱい食べたいものあるけど、後でいいや」

あたしと咲月の三倍は食っていた奴のセリフではない。

まあ、今更こいつにそんなツツコミを入れても意味ないか。そう判断したあたしと咲月は、あえてその言葉に対して何も言わず、桜山神社を目指して歩き始めた。

あたしは急にトイレに行きたくなくなってしまい、二人を先に行かせ、近くにある仮設トイレに向かった。

さつさと用を済ませると、再び神社へ向かう。まだ舞は始まっていないはずだ。そう急ぐこともないだろう。あたしは、のんびりと歩いていった。

鳥居と平行になっている道を進み、ようやく鳥居の前までやってきた。あたしは、身体の向きをかえて、鳥居と向かい合う状態になった。

そして、凍りついた。

鳥居の下に、出雲が立っていた。

妙に冷たい風が吹き、木々がざわざわと不吉な音をたてて揺れている。あいつの長い髪の毛がさらさらと揺れている。

出雲の表情は、何も感じていないような表情で、冷たい。棒立ちになっているあたしを、ただじつと見つめているだけだった。

「こんばんは、お転婆紗久羅姫」

第八話：鬼灯夜行（6）

*

出雲は、にこりともせずになんと言った。

あいつの前を、後ろを多くの人を通り過ぎていく。けれど、あいつに気づく人は誰もいなかった。皆には、出雲の存在は認識されていないのだ。だからといって、あいつとぶつかる人もいなかった。皆、綺麗にあいつを避けていく。

あたしのことを見る人もいない。あたしなんて、この世に存在していないかのように皆振舞っていた。あたしは、急に怖くなった。何だか自分が異世界へと迷い込んでしまったような気がしたからだ。動かなければ。ここから、立ち去らなくてはいけない。けれど、身体は全く動かなかった。前へ進むことも、退くこともできなかった。

「動けないのかい。私に見惚れて、体が言うことを聞かないのかな。そういって、あいつは意地の悪い笑みを浮かべた。見惚れてなんかない、そう反論しようとした。ああ、駄目だ。全然口が動かない。」

「今頃、この上にある社の前で巫女役の娘が、舞を披露しているのだからね」

出雲は、階段の上にある社の方へ視線を向け、くすりと笑った。

「さつき、巫女役の娘を見たよ。人としてはなかなか綺麗な容姿をしているが、彼女ほどではないな。……随分優しそうだったし」
彼女？こいつは何を言っているのだろう。あたしが眉をひそめているのを見ると、出雲が首をかしげた。

「訳が分からない、と思っっているのかい？ 彼女、は彼女だよ」

あいつの顔から、笑みが消えた。あたしの前に現れた時と同じ、いやむしろそれ以上に冷たい表情を奴は浮かべた。

そして、あたしにやっとな聞こえるくらいの小さな声で囁くように呟いた。

「私が喰った、巫女……桜のことだよ」

「……っ」

何て、冷たい声なんだ。氷水を頭から思いつきり浴びせられたような気持ちになる。

いや、それにしても。喰ったって何だよ。巫女って巫女の桜ってなんだ、それ。どういうことだよ。

出雲は、話を続けた。あたしが驚いているのが信じられないような表情を浮かべていた。

「なんだい、その顔は。何故驚いているんだい。君は、ずっとずっと私に言ってきたじゃないか。お前は、化け狐だと。……この町に古くから伝わっている言い伝えにでてる化け狐、出雲だと。正解なんだよ？ 私は出雲。数百年前、巫女を喰らった、あの出雲だ」

「ふ、ふざけんな……っ！ いるもんか、妖怪なんて！ そんなもの！」

やっと、声が出た。でもそれは、自分でも驚く位情けない、かすれた声だった。

あたしは、あいつのことを妖怪だと、化け狐だと言い続けていた。ずっと外見が変わらない人間なんて、すぐ存在を忘れられる霞のような人間なんているわけがない。あいつは化け狐だ、数百年前巫女を喰い、その後巫女の魂にその身を内側から焼かれた、滑稽で愚かな化け狐だ、と。

けれど。

「いるわけない！ そんなもの、いるわけがない！」

そうだ。いるわけがないじゃないか。妖怪とか、幽霊とか、そんなものが本当にこの世に存在するわけがない。自分でも、何て矛盾しているんだと思う。本気であいつのことを化け狐扱いする一方で、妖怪とか幽霊なんて存在していないと思っっているなんて。

本人の口から「本当に妖怪です」という言葉を聞いても、信じられなかった。受け入れることなんてできない。あいつの言葉を受け入れたら、今までの自分の世界が音を立てて崩れてしまいそうだった。

「なんて我侂なんだい、君は。私は人間だと言えば、いやお前は化け狐だ、と言いつつ、私とその事実を認めて、本当は化け狐なんですと言えよ、いやそんなものが存在するわけがない、と言いつつ。人間でも妖怪でもなければ、私はなんだというんだい」

その口調は、酷くきついものだった。出雲がここまで人を責めるような口調で喋ったのを聞いたのは、初めてだった。

妖怪か、人間か。あたしにはもう何がなんだかさっぱり訳が分からなくなっていた。いっそ夢であつたらいいと思う。けれど、これは夢なんかじゃない。夢の中で、胃が痛くなったことも、冷や汗が流れたことも、頭が真っ白になったこともない。だから、これは夢じゃないんだ。現実なんだ。だけど、化け狐がいるって現実なんてあるのか？ 少なくとも、あたしはそんな現実知らない。

「放っておいてくれていれば良かったのに。少なくとも、菊野と紅葉はそうしてくれたよ。菊野は、初めて私を見た瞬間、私は人間ではないことに気づいた。でも『お前は人間ではないね』と言ったとき、彼女は二度とそのことに触れようとはしなかった。放っておい

てくれた。紅葉もそうだった。特に何も聞かず、普通の客として接するだけだった」

婆ちゃんと母さんは、いつもあたしに「化け狐なんて言うな」と注意していた。けれど、婆ちゃんと母さんは気づいていたんだ。あいつが人間じゃないことくらい、とつくの昔に。けれど、何も言わなかった。ただ黙っていなり寿司を売り続けていた。

「2人が、何故放っておいたか知っているかい」

「知らないよ、そんなこと」

「触りたくなかったからだよ。……自分達の知らない、未知の世界に」

「未知の、世界……」

「妖怪、幽霊。それらは君達からしてみれば『いない』ものだ。あつてはならないもの、あるいはあるわけがないもの、だ。それらが存在する世界を、君達は知らない。君達の世界にはそれらは存在していない。君達は、それらが存在しない世界で生きている。……けれど、もし自分達の生きている世界に存在するはずのないものが、目の前に現れたら。そして、もしそのことに触れてしまったら。君達が、今まで信じていた世界は音を立てて崩れ落ちる。そして現れるのは、存在するはずのなかった世界だ」

「一度、知ってしまったら。存在するはずのなかったものいる世界を知ってしまったら、もう元の世界に戻ることはできない。嗚呼、それは何て恐ろしいことなのだろう。自分の信じてきた世界が消えてなくなるということは、他の皆が知らない世界を、一人で生きていかなければいけないということは」

だから、と出雲は続けた。

「菊野と紅葉は触れなかった。触れなければ、まだ自分達の世界で生きていける。気づいても見てみぬ振りをすればいい。自分達の常識を、常識のまま生きていけるから」

でも。でもね……出雲が俯いた。目は前髪に隠れてしまった。あいつが今どんな表情を浮かべているのか、あたしには分からなかった。

「紗久羅、君は駄目だ。もう、遅い。ずっと放っておいてくれないれば良かったのに。ただ黙って、私に稲荷寿司を売ってあげればよかったんだ。化け狐だ化け狐だ、と言い続けていなければ君は君の信じる世界で生きていけたのに。君はあまりに触れすぎた。遅いんだよ。今更、そんなものがあるわけないと否定しても」

出雲が、深いため息をついた。息と一緒に、何か他の……自分が今まで溜めていた思いも一緒に吐き出しているようだった。

出雲が、顔を上げた。

その瞳は、真っ赤だった。充血しているとか、そういうものじゃない。大体その場合真っ赤になるのは白目の方だ。

真っ赤になつていたのは、今まで黒かった瞳だった。本当に真っ赤で……夕焼けよりも、ルビーよりもなお赤い。鮮やかで、ぎらぎらとしていて。けれど、少しも違和感を感じなかった。カラーコンタクトなどの人工的に作られた色でないこと位、すぐに分かった。自然の色だった。

「私は君の世界を今日、完全に壊す。文句は言わせないよ、元より君に拒否権なんて、ないのだから」

そういつて、あいつは何かをあたしに向けて放り投げてきた。軽く投げてきたところを見ると、どうやらあたしにぶつけるつもりで

投げたわけではないようだった。あたしは、手を伸ばしてそれを思わずキャッチしてしまった。

しまった、なんで掴んでしまったんだと思った。けれど、もう遅かった。

あたしがそれを手に握った瞬間、強い風が吹いた。それと同時に、何かがぶつかってきた。あたしは思わず目を閉じて、両手で顔をかばった。ものすごい勢いでぶつかってきたそれは、甘い匂いがした桜。それは、桜の花の匂いだった。大量の桜の花びらが、あたしにぶつかっているのだった。

すぐに風は収まった。あたしは、おそろおそろ目を開いた。足元には大量の桜の花びらが落ちていて、肩にも髪の毛にもついているけれど、今のあたしにはそれらを払う余裕はなかった。

目の前には、まだ出雲が立っていた。
けれど、そこにいる出雲は、あたしの知らない出雲だった。

藤色の髪の毛の出雲が、そこにいた。

*

吊られている提灯が放つ、橙色の眩い光に照らされた出雲は、腹が立つほど綺麗だった。藤色の長い髪の毛が光を受けて、きらきらと輝いている。数年前、あたしは家族とキャンプに行った。朝起きて、テントから出たとき、あたしは日を受けて輝く綺麗な川を見た。今のあいつの髪の毛は、まさにその時見たものようだった。提灯の明かりが、白い身体を鬼灯の実の色に、藤色の着物を夕日色に染めていた。

藤色の髪の毛なんて、染めるなりカツラをかぶるなりしなければ、本来ありえないものだ。けれど、その赤い瞳と同様に違和感を全く感じなかった。人工的なものではない。とても自然だった。あいつには、黒よりもこっちの色の方がずっと合っていた。

変わったのは、出雲の髪の毛の色ではなかった。

「あれ……鳥居……」

鳥居は、社へと続く石段の入り口に一個あるだけのはずだった。しかし、今まで無かった小さめの鳥居が、石段にずらりと並んでいた。多分、二段置きに立っている。中学の修学旅行の時に行った、伏見稲荷にワープしてしまったかのような光景がそこにあった。

それだけではない。その鳥居達の内側には、お寺とかでよく見る灯籠があった。その灯籠から、青い光がもれている。

しかも、その石段の両側には桜の木が並んでいる。夏なのに、桜の花が咲いていて、桃色の花びらがひらひら舞うのが見えた。

桜の木にはさまれ、赤い鳥居を生やし、不気味な輝きを見せる灯籠が置かれたあの石段を上っていったら、どこへ辿り着くんだろう。桜山神社があるのだろうか、それとも全く違うものが……。

「それを、私がいいというまで手離してはいけないよ」

あいつにそう言われて、あたしははっとした。そういえば、あいつはあたしに何をやったんだ。

あたしは、出雲が放り投げたものを掴んだ右手をゆっくり開いた。あたしの手のひらにあったのは、鬼灯だった。でも、ただの鬼灯とは違う。中にある実が、光を放っていた。それは淡くて暖かい……今出雲の身体を照らしている提灯の明かりのような色だった。

こんな鬼灯があるわけない。こんなことありえない……もう、そう考える気も起きなかった。馬鹿みたいな勢いで奇想天外な現象を見せつけられたのだから、当然といえば当然かもしれない。よく気を失ってないな、あたし。

もう反論する気もなくなったあたしの顔を見て、あいつが笑った。

「ついておいで、紗久羅。いいかい、絶対にその鬼灯を手離しては

いけないよ。特に、あの階段を上っている間はね。放してしまったら大変なことになるからね」

あいつの顔は、いつもの嫌味ったらしいものに戻っていた。さっきまでの冷たい雰囲気はなんだっただよ、と思う。あたしを脅して楽しんでいただけ？もう、訳が分からない。まあ、いいか。体も口も動くようになったし。

「大変なことってなんだよ」

「戻れなくなるってことだよ、あはは。流石にでもそれは困るんだよね。菊野に殺されるから」

どこから戻れなくなるんだよ。あははじゃないよ。くそ、やつぱりむかつく。まあ、少なくともあたしに危害を加える気はなさそうだ。いや、でもあたしの生きてきた世界をぶっ壊す気みたいだしなあ……いや、もうすでに色々壊された気がする。それって十分、危害を加えているってことじゃないのか？もう、本当訳が分からない。

あいつは、にこりと回ってくるつと背を向け、石段を上り始めた。別についていく必要は無い。けれど、ここにいってもどうしようもない。あたしは、仕方なくあいつに続いて石段を上り始めた。鬼灯は、なんか手離すと大変なことになるらしいので、しっかり握り締める。上へ行くごとに、辺りは暗くなっていった。足元を照らすのは、不気味な青い光と、手に握った鬼灯からもれる光のみだった。

出雲は、一言も喋らない。あたしも、何も喋らなかつた。聞きたいことは山ほどある。ありすぎて、何から聞けばいいのか分からないかった。

あたしは、どこへ向かって歩いているのだろうか。この先にあるのは、きつと神社ではない。神社で無いなら、この先にあるのは、何なのだろう。

赤い鳥居と、青い光。幻想的というか、おどろおどろしいというか。

石段の数は本来のそれより多くなっているようで、あたしは若干へばり始めてきた。

「あと少し。ほら、他の鳥居と違う色のものがあそこにあるだろう。あそこまで頑張っておくれ」

確かに、真っ赤な鳥居ではなく、朱色のものがある。大きさも、他のものに比べて大きく、立派だった。

一段一段上がること、その鳥居は近づき、そしてとうとうあたしはその鳥居をくぐりぬけた。

その先にあつたのは、神社ではなくて、洋館だった。

*

五十メートル位先に、大きな洋館が建っていた。その周りには木がたくさん生えている。当たり前だ、ここは山の中なのだから。

薄暗い空間の中、その洋館はぼんやりと光っていた。月のように静かで、柔らかく。

明治とか大正とかの日本に建っただけいな、レトロな感じのものだった。これといって派手ではなく、シンプルな外観。

「神社は、どこ行ったの」

我ながら馬鹿馬鹿しい質問だと思った。

「無いよ。あれがあるのは、君たちの住んでいる世界だもの。……ここは、君達の住んでいる世界じゃないんだよ。もう君は、世界と世界を繋ぐ道を通って、こちらの世界の入り口をくぐってしまった」
あれがそう、と出雲が指差したのは、さっきあたしがくぐった朱

色の鳥居だった。

「ああ、さっきの鬼灯を返しておくれ」

あたしは、さっきまで握っていた鬼灯を乱暴に投げて出雲にやった。出雲はどうにかそれをキャッチした。

その鬼灯を手から離れた瞬間、さっきまで確かにあった鳥居が綺麗さっぱり消えてなくなった。みれば、石段も消えていて、そこには坂道があるだけだった。

「な、なんで……鳥居は！？ 階段は、どこ行った！？」

「消えたよ。あれは君達の住んでいる世界と、私達人ならざる者が住む世界を繋いでいる道。その道は本来は存在しないもの。……と
いつか、見えなくなってしまうものでね。この『通しの鬼灯』を持ってないと、見ることは出来ない。見ることが出来ないから、通ることもできないんだよね、これが」

出雲は、そういつて肩をすくめた。あたしたちが住む世界と、人ならざる者が住む世界？その世界を繋ぐ道？通しの鬼灯？何の話だ？

「この世にはね、二つの世界があるんだよ」

「二つ？ 何なんだよ、もったいぶっていないで、さっさと教えるよな」

「全く、相変わらずだね、君は。そんなだから、こんな目にあうんだよ。はあ。まあ、いいや。……二つの世界っていうのはね。一つは、君達人間や他の生き物が住んでいる世界。そしてもう一つは、私達妖や、精霊……人ではないもの、君達からしてみれば存在するはずのないもの達が住んでいる世界。この二つの世界は、ぴったりと重なり合って存在している」

あいつは、そう言いながらあたしに近づいてきた。

「けれど、この二つの世界が交じり合うことは決してない。君達の世界から私達の世界が見えることはないし、私達の世界から君達の世界が見えることは無い。君達の世界では、ここにあるのは小さな社。けれど、この世界にはそんな社は存在しない。あるのは、あの館」

「あれは、何の館」

「私の家だよ。満月館というんだ。……だけど、この館は君達の世界では存在していない。だって、この館があるのはこちらの世界だから。場所は同じでも、世界が違うからね」

「じゃ、じゃあ……こっちは、あたしの家も……弁当屋も、ないってこと」

「ないよ。あの辺りには何があったかな。思い出せないけれど。昔はね、ここまではつきりとした境界線はなかったんだよ。君達の世界と私達の世界は、ぐちゃぐちゃに溶け合っていた。……二つの世界を繋ぐ道もまだかろうじて見えていた。だから、妖達は君たちの世界に現れていた。そして、いつの間にか私達の世界に迷い込んでしまふ人間達も、少しはいた。……まあ、迷い込んだ派いいけど、帰れなくなってしまうたという人もいるけどね。所謂、神隠しというやつ」

「い、今は、違うのか」

「今はね。妖と人間達の間大きな溝ができていったから。君達世界の住人が、私達世界に住む者達の存在を否定するようになったか

ら。溶け合っていた世界は、完全に分離した。ぴったり重なっているけれど、交わることはなくなった」

出雲は、淡々と語りながら、あたしの横を通り過ぎて行った。そして、そのまま進んで行く。あたしは、慌てて追いかけていった。こんな訳の分からないところに一人でいたくはなかったからだ。

あいつの話はいまいち訳が分からなかった。とりあえず、この世にはあたし達の知らないもう一つの世界があるということだけはよく分かった。

出雲は、坂をどんどん下っていった。

「もう少し歩こう。連れて行きたいところがあるから。ふふ、今まで見たことのないものを見るたび、君の知っている世界は崩壊していく。滑稽な話だね」

どこがだ。あたしは、出雲の背中を思い切り蹴飛ばしたくなった。蹴飛ばしたら、あいつはこの坂道をころころと、おむすびのように転がっていくだろうか。あはは、それは傑作だ。……いつか絶対やってみよう。

だけど、しばらくしてあたしは、ぴたりと足をとめてしまった。

ここは、妖達が住む世界だという。それが本当なら。

「おい。ここって、お前らが住んでいる世界なんだよな」

「ああ、そっだよ」

「じゃあ、やっぱり、その……でる、のか。ろくろ首とか、一つ目小僧とか……子泣き爺とか」

「ああ、いっぱいいるよ。というか、そういうのしかないよ。まあ、幽霊とかもいるけど」

あたしは、前へ進むのが急に嫌になった。別に怖がりじゃ無いけ

ど、そういうのとこれから会うのだと思うと、やはり気がひける。お化け屋敷なら、いずれ出口に辿り着く。けど、ここには出口が無い。多分、さっきの鬼灯を握らないと、帰れない。それまでは、延々と妖怪と顔を合わせ続けなければいけないのだ。さくら姉なら喜ぶだろうが、あたしはちょっと嫌だった。流石に、ちょっと怖いかもしれない。

あたしが何を考えているのか察したのか、出雲が楽しそうにやりと笑った。実にいい笑みだ。だからこいつは嫌いなのだ。

「もしかして、紗久羅、怖いのか？ あはは、紗久羅も女の子らしい一面を一応持っているんだね。いやあ、それは驚きだ」

「べ、別に怖くなんてないやい！」

「ちょっと怖いかもって顔に出ているよ。大丈夫、誰も君を食べやしないよ。私が守ってあげる。それに、今から行く場所では喧嘩をしたり、用意されたもの以外を食べることは禁止されているし」

「どこへ、行くんだ」

「森だよ。そこで今日、お祭りがあるんだ」
そう言ってお雲が笑った。

第九話：鬼灯夜行（7）

山を下りると、そこにはなるほど、屋台はなかった。人もいなかった。目の前にあるのは、一本の細い道。その道を挟んでいるのは、ただの草むらだった。何か、青白い火の玉のようなものがぶかぶか浮かんでいるような気がする。いや、実際浮かんでいるのだろう。うええ、気味が悪い。

その道の先にあるのは、森だった。多分、そこが出雲のいう「お祭り」がある森なのだろう。

「あそこが目的地だよ。魔珠羅まじゅらの森。この世界にとって最も大切な森だ」

「さあ、おいで。出雲が手招きする。あたしは、仕方なくついていく。」

虫の音が聞こえる。その虫もまた、妖怪なのだろうか。あ、蛭だ。いや、あれは本当に蛭なのだろうか。ううん、分かん。

きつとさくら姉なら、手を叩いて喜ぶだろう。あれはなに、これはなにとしつつこく聞くに違いない。けれど、あたしは流石にそんな気分になれなかった。得体の知れない世界に行ってしまったら、誰だってそうなると思う。

「あんな森が、大切なのか。何、自然遺産みたいなやつ？」

「自然遺産？ なんだい、それは」

出雲が首をかしげる。ああ、この世界にはそんな概念は存在しないのか。

「なんでもないよ」

「ふうん。……でも、あの森が大切なのは確かだよ。あの森は、この世界の始まりの地であるから」

「始まりの地？」

「そこら辺の話も、後でするよ」

「そうか。……なあ、本当にあたし、喰われたり襲われたりしないだろうな？」

「こんなところに連れてこられた挙句、殺されてしまったらたまつたもんじゃない。」

「大丈夫だよ。この祭りの日、しかもあの森で何かを殺めたり、襲ったりするようなことをする愚か者はいないよ。君が危険に晒されるようなところに、連れて行きはしないよ。君のようなおもちゃを私は失いたくない。それに、さっきも言ったけれど、君にもしものことがあったら菊野に殺されてしまう」

「あたしはおもちゃかよ。いつお前のおもちゃになったんだよ、畜生、やっぱり腹が立つ。」

「随分婆ちゃんのことを大事にしているんだな。あんた、婆ちゃんのことを好きなの」

「あはは、と出雲が笑う。」

「そうだねえ、菊野は面白い人だからね、好きだよ。それに彼女の作るいなり寿司は美味しい。君を危ない目に合わせようものなら、私は一生あれを口にすることができなくなってしまう」

「あたしの命はいなり寿司と同レベルなのかよ」

「面白くなかった。確かに婆ちゃんのいなり寿司は美味しいけどさ。」

いなり寿司が食えなくなるから、ってどんな理由だよ。しかもおもちやだと。ああ、むかつく。

その気持ち、顔にでていたらしい。あいつがにやりと笑う。

「何だい、拗ねているのかい？ ふふ、紗久羅も結構可愛い性格をしているね」

「可愛いいうな！ それと、別に拗ねてなんかいないっての！」

「はいはい。素直じゃないところも君の可愛いところではあるね」

「この化け狐！」

「はいはい。ほらほら、そここうしている間に着いたよ」

本当だ。気づけば、森は目の前にあつた。深い緑の森は、月の光を浴びて、エメラルドのようにきらきらと煌いていた。けれど、森の中まで月の光は届いていないのか、真っ暗だった。

出雲が、森の中へと入っていく。慌てて、それを追いかける。

森の中は、本当に暗い。目の前にいるあいつの姿さえ、少しでも目を離したら見失ってしまいそうだった。

空気はひんやりとしている。けれど、気味が悪い感じは不思議となかった。むしろほっとする。澄んだ空気は、吸い込むだけで体の中を綺麗にしてくれるようだった。この先には、人間じゃないものが沢山いる。けれど、さっきまで抱いていた恐怖感が綺麗さっぱり消えていた。この森の雰囲気、そうさせてくれるのかもしれない。かた。恐怖すら、浄化する森。あたしは、こんなに静かで、綺麗で澄んでいる森を他に知らなかった。まあ、そもそも森と呼べるところに足を踏み入れたことがないんだけどな。全ての森が、こうなのかもしれない。違うかもしれない。けれど、きっと人間界にある

森とは何かが違うのだと思う。

しゃらしゃら、という鈴を一気に沢山鳴らしたような音が聞こえる。何かの生き物の鳴き声かもしれない。無機質なものの出す音とはどこか違うような気がした。笑っているように聞こえた。

目の前にいるあいつの体は、半ば闇の中に溶け込んでいた。本当にそこにいるのか、自信がない。手を少し前へ突き出してみる。触れられるだろうか。もしかしたら、そこには何もいないのかもしれない。

いや、やめておこう。何だよ、そんないるかどうか分からなくて不安になって手を出すって、乙女かよあたしは。勘弁してくれ、いや、そりゃ一応女だけどさ。

あたしは、あいつの姿を見失わないように必死になりながら前へと進んだ。

しゃらしゃら、という音は前へ進むごとに段々大きくなっていった。鈴の音色のような、川の流れのような音は、不快ではなかった。むしろ心地いい。

段々、目の前が明るくなっていった。それは大した明るさではなかったかもしれない。けれど、暗闇ばかり見ていた目には、少々きつい。目の前を照らしている光は、あの熟れた柿色に染まった空と同じような色をしていた。

「大分明るくなってきたね。そろそろ、彼らと会えるかな」

「彼ら？」

問うてる間に、光溢れる場所へ辿り着いた。

そこは、小さな円形の広場だった。正面には、周りのよりも一回り大きな木がそびえていた。エメラルド色のその木には、普通のも

のより何倍、いや何十倍も大きな鬼灯のようなものが生っていた。本当にでかい。あれ、鬼灯か。違うのか？いや、でもどっからどうみても鬼灯だよな。……大きさを除けば。

その木の前に、人間に近い姿の者が五人位立っていた。

白い体に、淡いクリーム色の髪の毛。服は何も着ていない。女なのか男なのかは分からない。胸のふくらみはないけれど……その、あの、なんかこう……についてもいなかった。何って、あれだよあれ。具体的なことを言わせるな。髪以外の毛は一切生えていないように、体中つるつるしていた。目は黒い。白目はない。まるで、目のある部分に空洞があるようで、やや気味が悪い。髪の毛のある宇宙人みたいな姿、といえばいいのだろうか。背丈や体型、髪の毛の長さは皆違う。

それらは、淡い光を放っていた。どうやら、この辺りを照らしている光の正体は、これだったらしい。彼らから発する光は、触れたらとても暖かそうだった。

彼らは、体を小刻みに震わせたり、やめたり、また震わせたりを続けていた。体が震えるたび、しやらしやらという、あの音が聞こえた。あの音は、鳴き声でも笑い声でもなく、彼らが体を震わせるときに出る音だったのだ。そういえば、これに近いものをアニメ映画で見たような……うーん、まあ全然違うといえば違うけど。

出雲が、前へ進んで、彼らの前に立った。

「やあ、こんばんは。今年も宜しく頼むよ」

そう言って、出雲は目の前に立っている、五人の中で一番背の高いのと握手をした。すると、その両隣にいた奴らが後ろにある木に生っている、巨大鬼灯を摘んで、出雲に渡した。出雲はそれを受け取った。

「紗久羅、君も貰うんだよ。彼らのうちの一人と握手をしておくれ。

そして、一言何か喋って。君が無害だと判断すれば、彼らがこれを与えるから」

あたしは、驚いた。目の前にいる、宇宙人もどきと、握手をする？あたしは、何だか急に怖くなった。どっからどうみても危害を加えるような奴らではない。けれど、得体の知れないものと触れ合うということは、何だかとても恐ろしいもののような気がした。

初対面の人間と握手をするのも、緊張する。触ったことのない動物に触れるのも、少しだけ緊張する。まして、目の前にいるのは人でも、あたしが知っているどの生き物でもないものだ。

あたしがためらっていると、出雲とさつき握手した奴が、しゃらしゃらと音を立てながら、手招きした。見たところ、イライラしている様子はない。優しく「おいで」と言っている気がした。

ええい、ままよとあたしは、前へ進んだ。そして、手招きしていた奴の前に、ゆっくりと右手を差し伸べた。彼は、あたしのその手を優しく握り締めてくれた。とても、暖かい。人間よりも、少し体温は高い。

「紗久羅っていうんだ、宜しく」

情けない位かすれた声が出る。その声を聞くと、奴は手を離れた。両端にいた奴らが、巨大鬼灯を摘んで、あたしに渡してくれた。あたしは、それを受け取った。何も、怖くはなかった。注射だってそうだ。注射されるまでは怖くて仕方ない。けれど、注射されればあつという間で、実際は何てことはないのだ。

一番左にいた奴がふつと息を吐いた。すると、そいつの手のひらに、自分が発する光とよく似た色の炎が現れる。

そして、まずそれを出雲が持っている、巨大鬼灯に近づけた。すると、その炎はそいつの手のひらを離れて、巨大鬼灯の中へすつと入っていった。巨大鬼灯が、暖かな光を放つ。

今度は、一番右に居た奴が同じように息を吐き、炎を出した。そして、それをあたしの持っている巨大鬼灯にかざす。炎は手のひらを離れ、巨大鬼灯の中へ入っていった。とても明るい。これなら、暗い森の中を歩いてもへっちらに違いない。

「ありがとう。それじゃあ、行ってくるよ。さあ、行くよ紗久羅」

巨大鬼灯が生っている木の右横に、先へと進む道が伸びている。出雲は、さつさと進んでしまった。あたしは、しやらしやら音を立てながら震えている奴らに、会釈をしてから、その後を歩いていった。

さつきは暗くて、目の前すらほとんど見えない状態だったけれど、巨大鬼灯の灯りのおかげで、今は周りをはっきり見える。憎たらしあいいつの姿も、残念ながらはつきりと見えた。

「一緒に歩こうよ、紗久羅」

そういって、あいつは止まった。

「それって、肩を並べて歩くってことかよ」

「うん。その方が楽しいじゃないか」

「そうだな、お前とじゃなければ楽しかっただろうよ」

いやだね、本当に君は、といてあいつは笑った。鬼灯の灯りが照らすその顔は、いつもと違ってとても暖かいものに見えた。あたしは、仕方ないからあいつの横に並んだ。それを確かめると、あいつは歩き出す。あたしも一緒に歩き出す。

「何だかんだいって、私と歩くのが嬉しいんだろう?」

「馬鹿いえ」

さすが馬鹿狐、馬鹿なことしか言わない。

「なあ、さっきの奴らは一体何者だったんだ」

「森の守り人。この森を守る、精霊だよ。私達妖より、力がある。邪気はなく、穢れ無き純粋な魂を持っているんだ。彼らは、相手の手を握り、声を聞くと、その人が邪な心を持ち、この森を荒らそうとしているかどうか知ることができる。害意を感じたら、彼らはその相手を森から追い出すんだ」

「ふうん。はん、あいつらの目は節穴だな。お前みたいなの、邪気の塊を通すなんてさ」

「いやだねえ。私はそんなに邪じゃないよ。自分に素直な、美しい心を持っている。それに、言っただろう。彼らはあくまでこの森に危害を加える気があるかどうかということしか判断しない。その人の性格が悪かったとしても、この森に危害を加える気さえなければ、彼らはその人を迎え入れる」

よく自分で美しい心とと言えるよな。全く、本当に感心するよな。絶対見習いたくないけれど。

しばらく、無言の時間が続いた。

空を見上げる。空気が澄んでいるからなのか、星がそれは綺麗に瞬いていた。星ってあんなに綺麗なものなんだ、と思うくらいだった。天文マニアの人がこの星空を見たら、感動して涙を流しそうだな。そんな風に見上げて続けたら、足元を見ることをすっかり

忘れていた。しばらく歩いていたら、ぐにやりという音と共に何かを踏みつけてしまった。

ぎよっとして足元を見てみる。

そこにあつたのは、一輪の花だった。しゃがんで、その花を見てみた。桜の花に似たものが、あたしが踏み潰したせいでぐにやりと潰れていた。緑の細い茎も、ぺちゃんこになって汁を出している。

あたしが座り込んでしまったことに気づいた出雲が立ち止まって、あたしの方を見た。

「何をしているんだい？」

「いや、あたしが踏み潰した花が、桜の花に似ていたから。何か珍しい花だなって思ってたさ」

「桜の花……か」

出雲がぼつりと呟いた。あたしの横に立って、あいつはあたしが踏み潰してしまった花をじっと見つめていた。しばらくの間、あいつはその花を見つめ続けていた。なんだか、酷くぼつっとしているようだった。

「そういえば、あんたが殺した巫女の姉ちゃんの名前も桜って言うたっけ」

出雲が、はつとする。どうやら、あたしが話しかけるまであたしの存在を忘れていたようだった。

「そうだね。本当、あの町は桜だらけだね。ああ、彼女が居た時はまだ村だったか」

出雲が、花にそつと触れた。自分が喰らった巫女のことでも思い出しているのだろうか。強い力を手に入れた瞬間辺りを。でも、す

ぐに手を離して立ち上がってしまった。

「まあ、こんな潰れた花を見ているより、美しい私の姿を見ている方がずつと楽しいだろう。さあ、先へ進むよ」

あんたの姿なんて見ても少しも嬉しくないけど。口には出さなかった。……顔に思いつきり出したけどな。

あたしと出雲は、また先へと進んでいく。

「なあ、巫女の桜って言い伝えどおりの奴だったの」

出雲があたしの顔を見る。そして、微笑む。

「そうだねえ。それはそれは凄い力の持ち主だったね。ついでに、言い伝え通り、ものすごく気の強い女性だったよ。紗久羅以上にすごかったかもしれないねえ。私と戦った時も、少しも臆する様子を見せなかったよ」

「で、美人だったの」

「そうだね、まあ私の方が美しいけれど。人間の中では、美人の部類に入ると思うよ。まあ、性格のせいで全て台無しだったけどね。私に刃向かってきた時の彼女の剣幕といたら……いやはや、本当に恐ろしかったねえ」

性格のせいで全て台無し。ああ、あんたもそうだな。

「その巫女の性格も容姿も力も、言い伝え通り。あんたが巫女の肝を喰ったというのも、言い伝え通り。……でも、全部が全部言い伝え通りじゃないんだな。だって、あんたは死んでいない。言い伝えじゃ、巫女に魂を焼かれて死んだのに」

「言い伝えなんて、そんなものさ。全てが事実とは限らない。全て

が作り話であることも珍しくは無い。脚色ばかりで、事實はほとんどないものだってある」

「何で、言い伝えではあんたは死んだことになっているんだろう」

「ふふ、私はあの村に散々悪さをしてきたからねえ。巫女を襲った時も村を滅茶苦茶にしたし。私という存在は、あの村の人々にとつて恐ろしいものでしかなかった。……そんな私を言い伝えの中だけでも殺すことで、少しでも心を落ち着かせようとしたのかもしれないね。まあ、ようは二度と来て欲しくない、巫女に殺されて死んでいればいいってことさ」

出雲は、愉快そうに笑った。まあ、よくもそんなことを笑いながら言えるもんだ。やっぱり、妖の感覚ってあたしたちのそれとは違うのだろうか。

「本当に喰ったんだな、人を、人の肝を」

気のせいかな、少し悲しげな表情をあいっは浮かべていた。

「ああ、食べたよ。人の肝を喰らって力を得ること。それは、私にとっては当たり前のことだった。まあ、今は人間の食べ物ばかり食べているけどな。だって、そっちの方が美味しいもの。人間の肝なんかより、菊野の作るいなり寿司の方がずっと美味しいからね」

「人の内臓と婆ちゃんのいなり寿司を比べるよな」

ああ、もう本当にどうという神経しているんだよ。信じられない。そんな神経をしているからこそ、平気で村に悪さをしたり、怖がる人を殺して肝を喰ったりすることができるんだな。

「言い伝え通りくたばっていればよかったのに」

「酷いことをいうなあ、紗久羅は。そんなこと言つと、元の世界に帰してやらないよ」

う、それは困る。あたしがあからさまに困つたような表情を浮かべると、出雲はにやりと笑つた。ちくしょう、この世界ではあたしは無力だ。まあ、あつちに戻つても勝てないけど。

「あんたつて、どうしてそんなに歪んでいるんだ」

出雲は、ただ楽しそうに笑つた。

「さあ、何故だろう。……自分が歪んでいるなんて思つたこと無いから、よく分からない」

嫌味を嫌味にとらないところが、いやらしい。

どれくらい歩いただろうか。そんなに疲れていないから、きっとそこまで長い時間歩き続けているわけではないと思う。

そういえば、なんだか人がわいわい騒いでいる声が聞こえる。それは、段々大きくなってきている。

「そろそろ皆が集まるところに着くかな」

「集まつて、何をするんだ」

あたしが聞くと、あいつはにやりと笑つた。

「鬼灯夜行、だよ」

第十話：鬼灯夜行（8）

「鬼灯夜行？　それが、この祭の名前なのか？　具体的に何する祭なんだ」

あたしは、出雲に聞き返した。百鬼夜行っていうのは聞いたことがあるけど、鬼灯夜行なんていうのは聞いたことがない。

「まあ、簡単に言えば、皆で森中を歩いて、とある樹の下で飲み食いして帰るっていったところかな」

ふうん、とあたしは呟いた。祭っていうよりは、夜の散歩っていったところかな。この鬼灯つばいもので出来た提灯を持って夜歩くから、鬼灯夜行ってことか。にしても、提灯ぶら下げる棒みたいなのはないのだろうか。さつきから鬼灯にくっついている茎のような部分をつまんでいるから、指が微妙に疲れている。

「兎に角、先へ進もう。妖や精霊達が待っているからね」

「一体どれだけの妖怪とかが参加するんだ？」

「まあ、千人は軽く超えるね。幾つかの集団に分かれて、目的地を目指す。さて、そろそろ着くね。本当、すごい数の妖がいるからね。驚いて気絶しないでね。まあ私としては君が気絶する姿を見るほうが楽しいけどね」

馬鹿狐が、くすくす笑う。あたしは、何が目の前で起ころうとも決して気を失うまい、と心に誓った。

けれど、その強固な意志も「奴ら」が集まっている場所へ着いた途端、脆くも崩れそうになった。

狭い広場を埋め尽くしているのは、空想や妄想の世界でのみ存在

しているはずだったものばかりだった。

一つ目にからかさお化けに、子泣き爺っぽいのに、にゆるにゆると首を伸ばしたろくろ首、図体のでかいしましまパンツを穿いた鬼お岩さんのように顔が崩れている女、のっぺら坊、後河童。ああ、射的でとりそこなった間抜け面の河童のぬいぐるみのことを思い出した。でも目の前にいるそいつは、あの河童のぬいぐるみとは似ても似つかぬ、不細工でぬめぬめした感じで。

これを見て、驚くなという方がおかしい。人間なんて、どこにもいない。人間っぽい姿の奴らはいるけれど、肌は妙に青いし、足透けているし、血まみれだし、髪の毛の色はありえないものだし。人間の自分がここでは異形の存在だということが、よく分かる。皆、鬼灯の提灯を手に行っている。青白いその肌を暖かい光が照らしている。

さくら姉なら、声を出して感極まって涙を流し、大いにはしゃぐだろう。うん、でも普通の人間は悲鳴を上げて恐怖のあまり涙を流し、滅茶苦茶うるたえて意味不明の行動をとるか、硬直してしまうに違いない。

あたしはさくら姉のように喜びはしない。ただ、悲鳴をあげることもない。

けど、できれば悲鳴をあげたい。隣に「さあ、どうする紗久羅」と言わんばかりの表情を浮かべ、にやにやしている馬鹿狐さえいなければ、あたしはきつと大きな声で「ぎよえー」とかいう悲鳴をあげていただろう。

全く、あんた達にも見せてやりたいよ。この地獄絵図を。え、私を見てみたいって？妖怪とか大好きだから？けっ、そういうことはこの光景を見てから言いやがれ。

「流石の紗久羅も、声が出ないようだねえ。まあ、ほらこついうのは慣れだよ慣れ。しばらくすれば嫌でも慣れるさ。慣れを越して、君も妖怪になれるかもしれないよ」

「できれば慣れたくないね！ ついでに妖怪にもなりたくないね！」

「まあ、凶暴な君はすでに妖怪のようなものだけだね」

「うるさい、うるさい、この馬鹿狐！ 今すぐその首しめてやろうか！」

あたしはぶんぶんと鬼灯の提灯を振り回す。あいつは着物の袖で口元を隠し、ほほほと笑いながら、それを華麗に避ける。

「おや、出雲じゃないか」

後ろから、あいつを呼ぶ女の声が聞こえた。これで後ろを振り返ったら首なしの女がいました、とかだったらどうしようとか思いながら、振り返って見る。

そこにいたのは、ちゃんと首のついた女だった。人間で言えば三十前後といったところだろうか。顔にべったりと白粉を塗りたくり、真っ赤な口紅をつけ、派手な赤い着物を着ている。わざとなのか、それを着崩していて、艶かしい肩をはだけさせていた。

美人だとは思う。けれど、化粧が濃すぎる。何か、年増の若作りとかそういう言葉が似合いそうとか何というか。とかなんとか言ったら呪い殺されるだろうか。

「白粉か。こんばんは、今日は一人かい」

「ああ、一人さ。今年も鬼灯の旦那は、柳の姐さんと行くんだってさ。嫌になるよう、私のことなんて眼中にないんだ、鬼灯の旦那は」
そういって、白粉と呼ばれた女は口を尖らせた。何かよく分から

ないけど、この女は鬼灯だかなんだかって人のことが好きらしい。けれど、その男には柳という人がいて、その人といちゃいちゃしているらしい。

「仕方ないだろう。彼らは夫婦なのだから」

「え、何。妖怪も結婚するの」

そう聞くあたしを、白粉が見た。今やっとあたしの存在に気づいたかのようだった。好奇に満ち溢れた眼差しを、あたしに向けた。

「あれ、人間の小娘？ あらいやだ、珍しい」

白粉が、顔を近づける。……首を伸ばして。文字通り、びろんと伸ばして。蛇のようにうにようによしている首をあたしに巻きつけ、あたしの顔をじっと見た。

ああ、何かTVで見たことあるなあ、首に大蛇を巻きつける男の人とか。その男の気持ちがよく分かる。なんかひんやりしていて、ああ。

悲鳴なんてあげられない。気絶する余裕も、ない。

「紗久羅というんだ。お転婆なお姫様だよ。おいおい、あまり驚かせないでやっておくれよ。私以外の妖には今日初めて会ったのだから。まあ、面白いからいいけどね。恐怖のあまり固まる紗久羅なんて、滅多に見られないし」

体が動けば、今頃どついていた。くそ、動けよあたしの体。

「本当に歪んでいるねえ、出雲はさ。まあ、そこがあんたの魅力なのだから、仕方ないか、あはは。あんたも災難だねえ、こんな化け狐にとり憑かれてさあ」

ああ、災難だね。化け狐にとり憑かれて、ろくろ首にまでとり憑かれて。

白粉は、笑いながらあたしから離れた。

「そろそろ出発じゃないかねえ」

「だろうね。そう言えば白粉、胡蝶と鬼灯姫と鈴を見なかったかい」
白粉は、首を横に振った。

「そういえば見てないねえ。未だ来てないかもしれないねえ。馬鹿狸の弥助は見たけれど」

出雲の表情が一瞬にして歪んだ。心底嫌そうな顔だった。余程、その弥助という馬鹿狸とやらのことが嫌いらしい。

ん、弥助？あたしは眉をひそめた。さくら姉の爺ちゃんがやって
いる喫茶店に、そんな名前の男がいたからだ。図体のでかい馬鹿力
だけが取り柄っぽい奴。色々な面で化け狐と正反対。何度かうちの
弁当屋に来たこともあって、出雲とは仲が悪くて……いや、まさか
な。

「馬鹿狸のことはどうでもいいよ。あいつの顔など、見たくないよ。
まあ、胡蝶達とはいずれ合流できるだろう。鈴、怒っているだろう
なあ。私が紗久羅を鬼灯夜行に連れて行くと言ったら、思いつきり
頬をふくらませていたし。今度美味しい鰯の開きを買ってあげなく
ては」

そういえば、出雲が妖怪ってことは、あのガキも妖怪ってことだ
よな。あいつ、何の妖怪なんだろう。化け猫辺りか？

鈴で思い出した。あいつ、あたしが出雲のことをいじめていると
か訳の分からないこと抜かしていたんだよな。出雲がありもしない
ことを吹き込んだに違いない。よし、今文句を言っつてやろう。どう
いうつもりなんだ、ってな。

あたしはあいつに文句を言おうと口を開きかけた。が、その口は
出雲の冷たい手でふさがれてしまった。

「何か言いたげだけど、少し静かにしておくれ。彼が来たから」
彼って何だよ、ていうかその手を離せ。滅茶苦茶冷たい、氷を唇
にあてた感じがする。

世間話に花を咲かせていた妖怪達も、今は黙っている。そして皆
同じ方向に顔を向けていた。「彼」というのは、どうやらお偉いさ
んらしい。

あたしも、皆が見つめている方を見た。水晶のような、透き通つ
た葉をつけている木の前に、一人の爺さんがいた。爺さんの背は、
低い。幼稚園生と同じ位だ。そんな背の低い爺さんが、宙にぶかぶ
かと浮かんでいた。浮かんでいなければ、こんな後ろのほうから爺
さんの姿を見ることは、絶対に出来なかつただろう。頭のてっぺん
ははげていて、両サイドにふわふわした白髪が生えている。顔は昔
流行った、某たれているパンダのような、ぽよんとした感じで、目
は閉じられているんじゃないかと思うくらい細い。白い服を着てい
て、右手には杖を握っている。「仙人」という言葉がぴったりな爺
さんだった。

「皆の者、よく集まった。今日は年に一度の鬼灯夜行じゃ。今回こ
の道の先頭に行くのはこの儂、白羽しりゆじゃ。今宵は、妖も精霊も神も
……」

言いかけて、白羽というらしい爺さんが、（多分だけど）あたし
の方を見た。妖怪（や精霊とか神とかもいるのか？）達が一斉に振
り向いて、あたしを見る。あたしの意識は危うく消えそうになった。

「人じゃ、人がおる」

「先ほどから人間の匂いがするとは思っていたが」

「美味そうないじや」

「今日が鬼灯夜行でなければ喰ったものを」

「何故ここに人間がいるんだ」

「変わった着物を着ている。あちらの世界は、あんなものを着ているのか」

四方八方から、妖怪達のひそひそと話す声が聞こえてくる。けれど、白羽の爺さんはこほん、とわざとらしく咳をすると、その話し声はぴたつと止んだ。

「今年は珍しく、人がいるようじゃが。まあ、関係ない。今宵は妖も精霊も神も人間も関係なく、祭を楽しもうではないか。それ、皆儂について参れ。確りと列を作って歩けよ」

おう、と皆が答えた。すると、白羽の爺さんの後ろにあった木が消えて、先へ続く道が現れた。

それと同時に、森中の木が、眩しく光りだした。緑の葉が、青い光を放つ。

森が、青く光っている。ラムネの瓶の中に入り込んでしまったようだ。

爺さんは、宙にぶかぶか浮かんだまま、先へ進んだ。そしてそれに続くように、妖達が列を作って歩き出した。小学校の遠足みたいだ。

「私と紗久羅は、一番後ろを歩くとしようか。妖の好奇の視線を浴びながら歩くのは嫌だろう」

「へえ、あんたもたまには優しいことを言うんだな。こりゃ明日は雨が降るな。いや、嵐か。嵐ですめばいいけど」

「嫌だね、私はいつも優しいじゃないか」

「今度優しいという言葉の意味を辞書でも引いて調べるんだな」

そう言い返したけど、出雲はただ笑うだけで反論しない。調べるまでもない、意味は知っている。そして私は優しい。そう言いたげだった。

あたし達は、列の一番後ろに並んで、歩き始めた。白粉の姿はない。多分、もっと前の方にいるのだろう。

木が放つ光が地面も照らしている。地面が仄かな青色になっている。緑がかつた青い空間に、無数の鬼灯提灯の灯りが見えた。それは、冥府へ向かう魂のように見える。

星空の下に置かれた、ラムネ瓶の色をした大きな森を、あたしにとつての「常識」ではありえない存在と一緒に歩く。なんか、変な感じだな。

前を歩く妖怪達は、何か色々喋りながら、歩き続けている。青く輝く木などもう見慣れているのだろう、皆木なんて見ちゃいない。あたしくらいのものだ、物珍しげに木をじろじろ見ながら歩いていくやつなんて。

「そんなに珍しいかい、光を放つ木は」

「桜の木がライトアップされることはあるけど、木自体が光るなんてことは、少なくともあたしの知っている世界では、ない。で、この森は何で大切なんだ。何となく神秘的な感じ、っていうのは分かるんだけどさ。守り人が守るほどの価値が、大人数でこうして歩く価値がここにはあるのか」

「君達世界には、神話というものがあるよね。国によって、世界を作った神様が変わっているらしいけれど」

「神話？ ああ、ギリシャ神話とかそういうの？ あるよ。日本にもあるな。どうたらこうたらっていう女の神様と男の神様が黄泉の世界でうんちゃらんちゃらみたいな」

随分アバウトだね、と出して出雲が笑う。しょうがないだろう、そういうのにはちつとも興味がないんだから。

「君達の世界に、そういうた物語があるように、この世界にもそういうのがあるんだよ。私達が今向かっているのは、この森のどの樹よりも大きいカガキミの樹のある場所だ。カガキミというのは、私達の世界で最も尊い神様って意味だよ」

「ふうん。最も尊い、ね。つまりその樹はあんたらにとって、一番尊いってことか。……あんたも敬っているのか」

「あはは、私は誰のことも敬わないよ。他人を尊敬するなんて、反吐がでる」

そう奴は、それはそれはいい笑顔を浮かべながら言った。はあ、馬鹿馬鹿しいことを聞いたあたしが悪かった。そうだよな、この馬鹿が誰かを、ましてや樹なんかを敬う訳がないよな。奴ほど、天上天下唯我独尊という言葉が似合う奴はいない。褒めているわけではない、嫌味である。

「まあ、それは置いといて。まあ、この世界に伝わる話はどういうものだ。『昔、一つの樹があった。その樹はある日二つの実をつけた。それは赤く熱い実と、青く冷たい実だった。十月十日後、その実は樹から落ちて二つに割れた。赤い実からは炎をまとう男神、青い実からは水をまとう女神が生まれた。樹は男神にカラドウ、女神にアマルテと名づけた。そして、二柱にありとあらゆるものを作らせた。そうして、この世界は作られていった。二柱は交わり、何柱

もの神を産んだ。そしてその後、母なる樹と一体となった。樹と一体となった今も、カラドウとアマルテは、この世界を見守っている』と、まあこんな感じさ」

「つまり、その樹から生まれた神様がこの世界を作ったということか」

「そういうことになるね。だから、その神様を産んだカガキミの樹はこの世界の母ということになる。だから、この世界で最も尊いものなんだよ。私達は、毎年その樹を訪れ、その木の枝にこの鬼灯提灯をあちらで配られる紐を使って、くくりつける。これはね、魂の象徴なんだよ。貴方のお陰で、こうして私達は存在することが出来ているのです、これは貴方によって作られた一つ一つの魂です……そういう感謝の思いを込めて、つけるんだ」

「で、あなたはそういう感謝もせず、ただ適当にくくりつける、と」

「嫌だなあ。一応感謝はするよ。表向きね」

「表向きとか馬鹿正直に言うなよな。ったく」

「何、それじゃあ嘘でも』それは勿論、私は母なる樹のことを敬い、常に感謝しているよ、嗚呼なんて素晴らしい樹なんだろう』って言うってほしかったのかい」

「いや、遠慮しておく。吐き気がするからな。……こっちにも、そういう神様とか、そういうのに感謝する祭とかってあるんだな。何かあんたらって全然そういう気持ちとかってなさそうってイメージがあったから、意外だな」

そう言うと、あたしの前を歩いていった、牛の頭で三つ目の化け物

が後ろを振り向いて、あたしをじっと見つめた。

「当たり前よ、人間の小娘。俺達は、姿形こそあんたらと違いこそすれ、その本質は大して変わりないのよ、これが」

その右隣を歩いてきたおかめのような顔をした男の妖怪がけらけら笑った。

「左様。人間と妖怪なんて、実は大した違いなどないですよ、娘さん。住む世界や暮らし、考え方に多少の違いはありますけれど、そんなこと、ほんの些細なことなのでございますよ。ほほほ、まあ少し肩の力を抜きなされ」

そう言われても、簡単に力を抜くことはできない。本質は似たようなもの、なんて言われても。はいそうですか、って納得できるほど、あたしの脳みそはもう柔らかくない。これがガキだったらまた違うのかもしれないけど。

やがて二人は、肩をすくめ、また前を向いて歩きだした。

*

特に話すこともなく、あたしと出雲はしばらく無言のまま歩き続けていた。あいつはあたしに話しかけられない限り、口を開く気はなさそうだった。提灯が照らすその顔には表情がない。楽しそうでもない。かといって、つまらないという風でもない。

黙々と歩くことは、あまり好きじゃない。なんか、気まずいし。他の妖怪達の会話は、ほとんど耳に入らない。ただ無言の世界が続く。無言の世界というのは、本当に忌々しいものだ。なんだか体を見えない何かに締めつけられたような感じがする。

かと言って、馬鹿出雲と話すのも気が進まない。話しかければ話しかけたで、意地の悪いことばかり言うし。

聞きたいことは、多分沢山ある。けれど、なかなか言葉としてそれが出ていかない。

ぼうつとしながら歩く。目の前にある無数の灯りを見てみると、何だか眠たくなってくる。そういえば、今は何時なんだろう。まだそんな夜遅いというわけではない気はするけれど……。いや、もしかしたら本当はものすごい時間が経っているかも……。ああ、そういえば、あざみと咲月はどうしているだろう。あたしがいつまでも姿を現さないことを、不思議に思っているかな。祭なんて、とっくに終わっているかな。帰りが遅くなったら、婆ちゃん達心配するかな。というか、何も言わずにこんな所に来ることになっちゃったけど、大丈夫なんだろうか。

「大丈夫だよ、安心おし。菊野にはあらかじめ言っているからね。お転婆紗久羅姫をお借りします、ってね」

あたしはぎくつとした。何だよ、この野郎。あたしの心を読んでいるのか。

「君を待っていた友人達の記憶もちよこつといじつてあるから、そこらへんも心配ご無用さ。私はちゃんと、そういうところも考えているんだ。優しいだろう」

そういつて、あいつはにこりと笑いながら胸を反らした。

「どこが。そもそもあんたが、こんなところに連れてこなければ、そんなことする必要もなかったんだ」

「いやいや、元々は君のせいだよ。君が私のことをいじめるからわざと、いじけたような表情を浮かべる。」

「だから、あたしはいじめてなんかない！ ていうか、どちらかと

いうと、あなたの方があたしのことをいじめているんだろう!?
あの鈴にも、変なこと言ってきた。あたしは何もしていないよ!」
あたしは思いつきり怒鳴って、あいつに殴りかかるうとした。
その時、またあいつが急に冷たい、いやどちらかというとき悲しそ
うな表情を浮かべたから、あたしはどきつとしてその手をとめた。

「本当に? 本当に君は、何もしていないのかい……」

「し、していない! な、そ、そんな顔したって無駄だからな!」
あたしは、自分がとても悪いことをしたような気に一瞬なつてし
まった。けれど、あたしは何もしてない。断じて、していない。
出雲は、しばらくあたしの顔をじっと見つめていた。けれど、た
め息をつく顔をし、また歩きだした。

(なんだよ、意味が分かんない)
あたしも、あいつを殴ろうとした手を引っ込めて、また歩き始め
た。

「あ」

あたしは声をあげた。

前方……光り輝く木々の向こう側に、一際大きくて、青く光って
いる樹を見つけたからだ。ほんのついさっきまでは、そんなものな
かったのに。

その樹は、水晶を彫って作られたんじゃないかと思うくらい青く、
また透き通っていた。ものすごく、綺麗な樹。

「あれが、カガキミの樹だよ。さあ、後もう少しで着くよ。間近で
見ると、あれはもっと美しい」

「まあ、私の方が美しいけどね……ってか」

あたしは、じと目であいつを見た。

あいつは、腹が立つほどいい笑みを浮かべて一言言った。

「ああ、それは勿論。君は大分私のことが分かってきたみたいだね」

第十一話：鬼灯夜行（9）

カガキミの樹は、前へ進むごとにどんどん大きくなっていった。風が吹くと、しゃらしゃら、という音がする。それは、カガキミの樹から聞こえてきた。葉が揺れるたび、その音は鳴る。その音はとても涼しげで、歩き続けたせいで少し火照っている体を冷ましてくれた。

妖怪達は、カガキミの樹を前に随分興奮しているらしい。気持ちは早足になっているし、声はやたら大きくなってる。ああ、おまけにものごく早口だ。目的地である動物園を目の前にしてはしゃぐ幼稚園児と同レベルだ。

あたしは、興奮なんかしてない。といったら、微妙に嘘になるかもしれない。

見たこともないような、綺麗で大きな樹は、あたしの心を少しだけわくわくさせた。少しだけだ。目の前にいる妖怪共ほどじゃない。多分。

隣で歩いている出雲は、ただ、目の前にある樹などどうでもいいという風な顔をして歩いていた。樹なんて見て何が楽しいんだ、それより私の美しい顔を見た方がずっと楽しいだろうに、とかそういうことを言いたげだった。

「何かあいつら、随分と興奮しているな」

「そうだねえ。皆、楽しみなんだよ」

「何が」

「遠足」

「はあ？」

「こうやって皆でわいわいしながら、どこかへ行くことを君たち世界では遠足というのだろうか？」

まあ、ちよつと違うような気がしないこともないけど、いや、あっているかな。でもこれ遠足じゃなくてお祭なんだよな、一応、いやどっちでもいいけど。それにしても、いきなり何を言い出すのだろう。

「まあ、そんな風というな。で、それが何」

「遠足における、一番の楽しみって、なんだい？」

「は？」

あたしは首をかしげる。一番の楽しみって言われても……。

「人間と妖怪は、違うようで同じ。こういう時何を一番楽しみにするか。それも、きつと人間と同じじゃないかな」

最初は、ぴんと来なかったあたしも、しばらくすると段々奴が言いたいことが分かってきた。

何やら、カガキミの樹のある方からいい匂いがしてきたのだ。何か肉を焼いたような匂い、香ばしい匂い、そして……何か酒っぽい匂い。

おまけに、騒がしい声やら拍手のようなものやら、たいこや笛の音が聞こえてきた。カガキミの樹の葉が鳴らす涼しげな音とは正反対の、祭っぽくて騒がしくて、暑苦しいものだ。

やがて唐突に、本当に唐突に、目の前に無数の鳶が絡まってでき

たトンネルのようなものが見えてきた。さつきまでは無かったような気がするのだけど、まあこの世界では別に珍しいことでもないのだろう。

「あれをくぐれば、カガキミの樹へ辿り着く。間近で見るとあれは、とても大きいよ」

今も十分大きい。運動場のトラック一周分位の高さはありそうな気がした。あたしという存在なんて、ただの豆だと思ってしまいうくらいの大きさであることは、明確だった。もっと近づいたら、もっとすごいだろう。あたしは、ほんの少しだけわくわくした。

蔦が絡まって出来たトンネルを、興奮した様子で妖怪達がくぐっていく。歩いている、というよりは走っているという表現の方が、正しいかもしれない。

トンネルの中は、妙にひんやりとしていた。つるについている葉は、カガキミの樹が放っている光に照らされて、青色に輝いていた。先へ進むうち、手にある鬼灯の輝きが増していった。カガキミの樹に「今年もやってまいりました」と報告しているようだった。

それに答えるように、蔦が震え、ハーモニカに似た音色を奏でた。ようこそ、と歓迎しているのだろうか。

トンネルを潜り抜ける。

その先に広がっていたのは。

妖怪大集合の図、だった。東京ドームが何個も入りそうな、滅茶苦茶でかいスペースに、これでもか、という位の妖怪やら精霊っぽいのやらがいた。

その中央に、あの美しいカガキミの樹がある。まだ、樹との間には相当の距離があるのに、それはものすごく大きかった。てっぺんが、ここからも見えないくらいだった。樹にはまだ鬼灯は吊るされ

てはなく、青い光を放ち続けていた。

その樹の周りにいる妖怪達は、樹なんてろくに見ていなかった。奴らが何をしているのかといえば、飲んで喰って踊って騒いで……だった。

樹と同じく青く光っている草の上に、傘にもできそうな、でっかな葉が置いてある。その上には、魚や肉っぽいものや、木の实らしきものなどが、沢山置いてあった。その横にあるのは、竹の筒。多分酒が入っているのだと思う。

何干、いや何万もの奴らがぎゃあぎゃあ喚んでいるものだから、もう何が何だかさっぱりだった。

あたしは頭を抱えた。セミの合唱より酷いものだった。

「これが、目的だったのか、あいつらの」

「そう。遠足で楽しみなのは、お弁当。あと友達と遊ぶこと。祭なら、屋台で売られている食べ物を食べたり、射的をしたり花火を見たり。花見なら、団子を喰らう。……何の祭だなんて関係無い。私達は祭や遠足等を口実に騒ぎたいだけなのだよ」

出雲は、この光景にもすっかり慣れているのか、ただ笑っていた。

確かに「に感謝するため」「の魂を鎮めるため」に祭とというのは行われる。遠足なら「自然と触れ合う」とか「友達と仲良くなる」といったところだろうか。けれど、実際それらを意識して祭に参加したり、遠足へ行ったりすることというのは、殆どない気がする。

花見に行っても桜には目もくれず、婆ちゃんの弁当を食っているだけのあたしも、カガキミの樹をスルーして喰ったり飲んだり騒いだりしているこいつらも同じようなものなのだ。妖怪と同じなんて、

ちょっと嫌だけどな。

「しばらくは、こうして皆で飲み食いしている。普段は、我々妖と余り仲がよく無い……というか関わりたがらない精霊や神も、この日だけは我々を酒を酌み交わし、言葉も交わす。この祭は、不思議な日なんだよ。普段あるしがらみ一切から開放される」

ふうん、とだけ答えた。出雲達の住んでいる世界の奴らのことなんてこれっぽっちも知らないあたしが見ても、その光景が不思議で奇跡的な光景かどうかなんてことはさっぱり分からなかった。

さてと、そうつぶやくと、出雲はあたしの左手を掴んだ。いきなりすぎた上に、恐ろしい位冷たい手だったから、あたしの心臓はびよんと口から飛び出そうになった。

「迷子になったら困るだろう。私から、離れるんじゃないよ。今日は、君のことを喰らう者は誰もいないから、まあ命を落とす心配は無いけどね。けれど、知り合いが誰もいなければ、幾ら心臓に毛が生えていそうな紗久羅でも、不安になるだろう。だから、私の傍についていておくれ」

心臓に毛が生えているのはお前の方だ、そう心の中であたしは言っただけだった。しかし、確かにこんな得体の知れない奴らがうじゃうじゃしている中、一人でぼつんとしているのは、ちよつとばかり、辛い。仕方なく、あたしは出雲に手をひかれながら先へと進んだ。

カガキミの樹があるその広場は、もう足の踏み場もないという風だった。何度も座ってわいわいやっている妖怪と、足がぶつかったその度、あたしは小さな声で「ごめん」と呟いた。ぶつかられた奴らは、どうでもいいと思っているのか、あたしのことなどすっかり無視して、騒ぐことに夢中になっていた。まあ、その方が有難い。ぎろりと睨まれたり、好奇の目を向けられたりするよりは、ずっとましだ。得体の知れない奴らとは、関わりあいたくない。

祭だか何だか知らないけれど、さつさと終ってくれ。あたしは、さつさと帰りたい。こんな祭なんてどうでもいい。けれど、出雲にそんなことを言ったところで、100%ドS男が、分かったすく帰すよという訳がない。かといって、一人で帰るのも厳しいだろう。

全く、何であたしはこんな所にいるんだ。一つ目、からかさお化け、ぬりかべのようなトンデモ生物が集まっているこの場所に。

出雲は、「自分のことを無視せず、化け狐化け狐といい続けたからだ、そうして自分が住んでいる世界とは違うところに住んでいる者と関わろうとしたからだ、紗久羅が悪い」と言っていた。婆ちゃんや母さんのように、何も言わずに稲荷寿司を売っていたら、こんなことにはならなかったんだよ、と。確かにあたしは化け狐とあいつに言い続けた。でも、それだけだ。自分の世界へ連れてきたのは、あいつだ。あたしは、ここに来たいなんて一言も言っていない。

出雲が悪いんだ。妖怪のくせに、人間の世界にやって来た……出雲が悪いんだ。出雲が『やました』に来ていなければ、あたしはごく平凡な毎日を過ごすことが出来たのだ。

逆恨みなのかもしれないけど、自分の「常識」には存在していなかった奴らがうようよしている、気味の悪い空間にずっといると、緊張して、イライラして、吐き気がする。そういう気分ときは、誰かにあたらずにはいられない。自分のせいかな、出雲のせいかなんていうのは関係ない。兎に角、誰かを恨まずにはいられないのだ。そうでもしなければ、落ち着かない。

見上げると見えるカガキミの樹。高貴で清浄なオーラのようなものを放っているその樹を見ると、少しだけ気分が落ち着く。けれど、少しでも視線を落とすと、不気味な集団が視界に入ってきて、結局元通りになった。

高校の入学式の日感じた緊張感と、少し似ている。中学の同級生もそれなりに多かったけれど、それ以上に全く知らない人間の方が多かった。見たことのない人間が、自分の横に、前に、後ろにいる。性格も、好きなものも嫌いなものも、名前も一切が分からない奴らに囲まれていると、いい気分は全くしない。あたしは、人見知りする方ではない。けれど、どうしても緊張する。辺りをきよるきよる見回してみるけれど、知っている部分はどこにもない。壁に、校歌が書かれた紙が貼ってあって、でもそれは飽きるほど歌っていた中学時代のそれとは違う。ステージの広さも、教壇の色も、そこに立っている校長も違う。

慣れれば、何にも怖いものではない。体育館も、教室も当たり前の世界になっていく。逆に、昔いた小学校や中学校の体育館や教室の方が、未知の世界へ変わっていく（いや、居たことはあるんだから、正確に言えば未知とは言わないけど）

それじゃあ、異様な空間に思えた高校にも慣れていったように、じきにここにも慣れるのだろうか。妖怪のいる世界に何の違和感も感じなくなるのだろうか。それは、いいことなんだろうか。

考えているうち、出雲の動きが止まった。手をひかれていたあたしも止まった。出雲が、何かを探すようにきよるきよるしだした。

「何、やってんの」

「待ち合わせをしていた奴らを探しているんだよ。毎年、この辺りで飲み食いしていたのだけれど……と」

何かが、出雲にぶつかってきた。見れば、それはクソガキ……鈴だった。鈴が、出雲に抱きついていて。出雲は鈴の頭を優しく撫でた。

「鈴じゃないか。いや、驚いたよ、もう着いていたのだね」

「出雲、胡蝶達があつちで待ってる、早く行こう」

いつもあたしと話している時よりも大きくて、ずっと明るい声で鈴がそう言った。余程出雲のことが好きなようだ。見たところ、怒ってはいないようだった。出雲は、鯨の開きを買わずにすみそうだ。

「ああ、行こう。紗久羅、ついておいで。私の友人達を紹介するよ」

「出雲。……弥助もいる」

ものすごく嫌そうに、ぼそりと呟いた。出雲の顔も、歪む。

「あいつは友人じゃないから紹介しなくてもいいや。全く、折角のご馳走も酒も、不味くなってしまうよ、やれやれだ」

そう言つて、出雲は肩をすくませた。顔は歪んでいるし、言葉にトゲもあるけれど、ものすごく嫌っている、という風でもないような気がする。何となくだけど。

そんなあいつの袖をくいくい引張っている鈴が、ちらっとあたしを見た。

「なんだよ、チビガキ」

「別に」

それだけぼそつとつぶやくと、それっきりあたしのことを無視して、さっさと出雲を引っ張って歩き出す。置いていかれると非常に不味い。あたしもその後をついていった。

出雲を待っていた奴らがいたのは、広場のはずれで、やや静かな場所だった。

そいつらは、食べ物や飲み物をぐるりと逆U字型に囲んでいた。

「やあ、出雲、来たね。隣にいる娘さんは、人間だね。そういえば、人間の子をこの鬼灯夜行に連れて行きたいと言っていたっけ」

真正面にいた男が口を開いた。大きな葉に正座しているその男は、狐のお面を被っていた。だから顔は分からない。声を聞く限りだと、若くもないし老いていもないと思う。どこから見ても人間だけど、きつと違うのだろう。

「ああ、そうだよ。予想通りぴいぴい泣いてくれて、嬉しい限りだ」

「いつあたしが泣いたんだよ、え、この馬鹿狐！」

あたしは、出雲の頭を思い切り殴った。出雲が顔をしかめながら、頭を抱える。

「冗談の分からない姫様だねえ、君は。まあいい。私の友人達を紹介するよ。狐のお面を被っている彼は『鬼灯』という『向こう側の世界』で居酒屋を営んでいる。鬼灯の主人、と私は呼んでいる」

「名前は」

「さあ、知らない」

「知らないって……友人じゃないのかよ!？」

「だって、教えてくれないのだもの。名前なんてどうでもいいじゃないかって言ってるさ」

「名乗るほどのものでもないからね。まあ、好きに呼んでくれ」

「そういうこと。それじゃあ、次。鬼灯の主人の右隣……こちらか

ら見て左側にいるのが、柳。鬼灯の主人の奥さんだ」

そういうと、柳と呼ばれた女の人が、手をつき丁寧に頭を下げた。細身で、顎がやや尖っている。切れ長の瞳に真っ直ぐな黒髪。何か、江戸時代とかの絵に描かれていそうな人だった。……女の幽霊として。

そういえば、白粉とかいうろくろ首と出雲が話している時、そんな名前がでてきていたような気がする。その白粉は、鬼灯の主人の（あたしから見て）右隣に座っていた。なんかいやらしいポーズをとりながら、鬼灯の主人の方を見ていた。

「よろしくお願いいたします。人間の世界では柳女と呼ばれております、柳と申します」

「え、あ、うん、宜しく」

一応、答えておく。

「次は、鞍馬。まあ、見ての通り、天狗だよ」

本当に、見ての通りの奴が、柳の隣に座っていた。ものすごく図体がでかくて、肌は真っ赤で、鼻がピノキオみたいにびよんと伸びている。山伏っぽい格好をしているそいつは、ものすごくいかつい顔をしていた。地震雷火事親父よりも怖い。

鞍馬は、ふん、とだけ言った。それだけで、後は何も言わなかった。鞍馬の旦那は人があまり好きではないからね、と出雲は笑い、そして紹介を続けた。

「鞍馬の旦那の隣にいるのは、胡蝶。蝶の魂が寄り集まって出来た存在。まあ、蝶の化身といったところかな」

見た目は三十前後位の女は、頭のとっぺんにお団子を一つ作っている。それでも髪はまだ沢山あって、腰まで真っ直ぐな髪の毛が流れてた。お団子の付け根の方に、蝶の飾りがついたものや、金や銀

の、きらびやかなかんざしを幾つか挿していた。虹色の蝶が舞う、黒い着物がよく似合う。胡蝶は、口にくわえていたキセルを離して、ふうと息を吐いた。吐き出された煙は、甘ったるい匂いがした。

「宜しくねえ、おチビさん」

にこりと、いやどちらかというのにやり、と胡蝶は笑った。

「で、その隣が貉。まあ、見ての通りの子だよ」

本当、見ての通りだった。顔がない娘。のっぺら坊ならぬ、のっぺら女といったところだろうか。顔がないのを覗くと、江戸時代位に居た町娘Aって感じた。

「顔無し能無し胸無しの無し無し娘だよ」

白粉がそう言つと、貉が頭をぶんぶん横に振る。

「違います、違います！ いえ、違うことはないかもしれませんが、ああもう、酷いです、白粉さん！」

「皆様、本当に仲が宜しいのですね」

わあわあいいながら、じたばたする貉と、それを見てゲラゲラ笑っている白粉を交互に見ながら笑っているのは、あたしと同じか、それより少し年下に見える（あくまで見た目は、だけど）少女だった。ちなみに、白粉の隣、鞍馬の真正面に座っている。真っ黒い髪の毛を結んでいるのは、大きな、鬼灯の実のような色をした珠を連ねた髪飾りだ。巫女さんのような格好をしている。袴の色はやや褪せている。それもまた、髪飾りと同じような色をしていた。その上から、花の絵が描かれている真っ赤で立派な着物を一枚羽織っていた。

少女は、あたしの方をみて、にこりと微笑んだ。可愛い。女の子のあたしでも、どきっとするくらい、可愛い。

「申し遅れました。私わたくし、鬼灯姫と申します。以後、お見知りおきを」
体の向きを変えて、こちらと顔を合わせ、両手を地面にちょこんとつけて、鬼灯姫は軽くお辞儀した。まあ、なんて礼儀正しい子なんだ。きつと婆ちゃんが見たら『紗久羅、あんたあの子の爪の垢もらってきな。煎じてあんたに飲ませてやるから』とか言うに違いない。悪かったな、礼儀知らずで。あたしは「どうも」と一言だけ言っただけだ。

「鬼灯姫はね、元は人間だったんだよ。今は、精霊だけど。君達の世界で言うところ……えっと、ハイアンジダイだったかな？ その時代の子なんだ。君にとっては人生の先輩と呼べる存在かもしれないね」

「平安時代？ それじゃあ、もう千年位生きているってことか。すげえ」

「そんな、すごくなんかないですよ。此処の世界では、まだまだひよっこです」

そう言っただけでクスクス笑う鬼灯姫。うわあ、やばい、可愛い。あの馬鹿娘の鈴もこの位笑えば少しは可愛くなるだろうに。

そんな、愛らしい鬼灯姫の左横、狛同様一番手前側に座っているのは、むさ苦しいおっさんだった。

でかい図体、ちらちら見える無精ひげ、たれ目で、ボサボサの茶髪を下でちょこんと束ねている、緑色の半纏姿の、可愛らしさとかいう要素が全くといっていいほど見つからない、おっさん。おっさんといっても、見た目三十はいつてないとは思っただけ。いや、いつているかもしれないが。よく分からない。

まあでも、おっさんで十分だ。お兄さんというには……なんといつか、ちょっと。

その男には、見覚えがあった。さくら姉の爺ちゃんがやっている

喫茶店で働いている、弥助だ。もしかして、と思ったけれどやっぱりというかなんというか、出雲達が言っていた弥助とは、こいつのことだったのだ。

つまり、こいつも妖怪だったのか。ていうか、妖怪のくせして人間の世界で働いているとか……変な奴。

けれど、出雲は弥助には目もくれず、少し前へ進むとさっさと座ってしまった。鈴も出雲の右横に座る。

「さあ、紗久羅。紹介も終わったし、さっさと食べよう。私の左横が空いているから、こっちへお座り」

そういって、出雲は自分の左横を指した。座れそうなところは、そこしかないので、仕方なく座った。ところで、弥助のことはどうでもいいのか、弥助のことは。

どうでもよくなかったようだ。少なくとも、弥助からしてみれば。「ちょっとあんた、あつしのことは無視っすか」

早速弥助が出雲に抗議した。出雲は、弥助をまるでゴミでも見るかのような目で見た後、ものすごく嫌な笑みを浮かべた。

「いやだねえ、聞いていなかったのかい君は、最初の言葉を。私は鬼灯の主人を紹介する前『私の友人達を紹介する』と言ったはずだよ。私はきつちり、自分の友人達のことを紹介したじゃないか」

「弥助、友人じゃない」

鈴が、しっかりちゃっかり、小声で補足した。

「ええ、あつしはあんたとは友達じゃないっすよ、ていうかそんなのがめんどすからね。けれど、紹介位してくれたっていいじゃないっすか」

「嫌だよ、何だって君のような馬鹿狸を私がわざわざ紹介しなくてはいけないんだい。大体、紹介なんてしなくたって、紗久羅とは知り合いだろう？ それでも紹介したいのなら、自分でおし。一応君には口も、人語を話す位の脳もあるはずだからね」

弥助は、うぐぐと唸ったが言い返すことはなかった。というか、多分言い返せなかったのだろう。

「まあ、いいや。確かにそっちの方が早いっすね。陰険馬鹿狐に紹介してもらうなんて、よく考えれば気持ち悪いことこの上ないっすからね。というわけで、あっしの名前は弥助。って、まあそれは知っているとしますけど。一応、化け狸っす」

化け狸、か。化け狐の出雲とは相性が悪そうだ。なんとなくだけど。

「けれど、やっちゃん、今は元の姿に戻れないのよねえ」

キセルを口から離し、息をふつと吐いた後、胡蝶がくすくす笑った。

「そ、それはどうでもいいじゃないですか、胡蝶の姐さん」

「はあ？ なにそれ、元の姿に戻れないって。呪いでもかけられたわけ？」

「呪い？ あはは、残念ながら呪いじゃないのよねえ。やっちゃんの場合は、人間の姿で、人間として長い時間を生き続けたせいで、自分が元は妖怪である自覚が薄れちゃったってだけの話。変身するには、自分と変身する対象を頭の中で結び付けないといけないのに、自分の姿をはっきり思い浮かべなくなるわ、自分と元の姿が結びつ

かなくなるわでさ」

けたけたと笑う胡蝶からは、花のような、甘い匂いがした。弥助は、照れくさそうに下を向いた。

つまり、弥助は自分のことを人間だと思い込んでいる、と。そうして生きることが当たり前すぎて、妖怪としての自分が非現実的な存在になってしまったと。なんじゃ、そりゃ。

「弥助の元の姿ってどんなのなんだ？」

「大きな狸っす」

弥助がぼそつと答えた。

大きな狸。あたしがそれを聞いた時、真っ先に思い浮かべたのは、信楽焼きの狸だった。間抜けな顔で、編み笠っぽいのを被っていて、とっくりもっていて、二本足で立っていて、何か汚いものが足の間でぶらぶらしている、そんな、焼き物の狸だ。まあ、そんなものに比べれば今の人間の姿の方がましっばいよな。……うわ、やべえ、なんか笑いがこみあげてきた。

思わず、あたしはぷつとふきだしてしまった。

「何笑っているんすか、そんなに元の姿に戻れない妖怪が可笑しいっすか。全く、皆して意地が悪いっすねえ。ええ、別にいいですよ、あつしは元の姿に戻りたいなんて今のところ、これっぽつちも思っていないから。別にこの姿でも力は十分発揮できるし、二本足で歩いて、手は自由に動かせて。喋ることもできますしね」

彼はもう大分開き直っているようだ。とりあえず、あたしが大きな狸と聞いて、信楽焼きの狸のことを思い浮かべたってことは言わないでおこう。

「ささ、喋るのも楽しいですが、折角の美味しい料理。冷めないう

ちに頂きましょう。紗久羅様も、沢山食べてくださいね」

そういつて、鬼灯姫が小さな（といつてもあたしの顔位はあるけど）葉をあたと、出雲と、鈴の前に置いた。

「姫様がそんなことしなくても、私がやりましたのに」

貉が慌てた風に言った。鬼灯姫が笑う。

「構いませんわ。私は、そういう妖だから、精霊だから、姫だから、というのはあまり好みません。楽しくやりましょう、貉様」

まあ、なんて心の広いお姫様！菊野婆ちゃんが彼女と会ったら…
…ってそれはさつきもいつたか。

「鬼灯姫の言うとおりだ、早速食べようじゃないか」

「食べるのはいいんだけどさ、これ、人間も食えるものなの？」

大きな葉に盛られたものは、まあ肉とか木の実とか魚っぽいもので、ぱつと見は食べられそうだけど。もし食べて毒にやられでもしたら、たまったものじゃない。こんな所で死んでたまるかよ。

「大丈夫だよ、ここにあるのは基本的には君達の住む世界でも食べられているものだ。まあ、ねずみの串焼きとかも用意されているけれど、そこらへんは見れば分かるだろう」

「私も弁当を作ってきたが、これも全て人が食べられるものだよ」

出雲に続いて、鬼灯の主人が口を開いた。彼は背中に置いていた紫の風呂敷に包まれた何かを自分の前に置き、結び目をほどこいた。

現れたのは、三段重ねの重箱。中に入っているのは、黄色い卵焼き、いなり寿司、おにぎり、から揚げ、焼き鮭、煮物、てんぷら等だった。美味しそうだった。

「流石鬼灯の旦那。全部美味しそうだねえ」

などと白粉は言っているが、彼女の目は料理へ向けられず、鬼灯の主人の方へ向いていた。

「さあ、腹が減っては祭りも楽しめぬ。早速、食べようじゃないか」

第十二話：鬼灯夜行（10）

*

出雲がそう言うと、皆一斉に杯に酒を入れればらに乾杯しだした。あたしは未成年だから、ということとで桃ジュースを飲むことにした。聞けば、緑茶もあるらしい。まあ、この世界に未成年もくそもないだろうけれど、酒を飲んだなんてことが知れた日には、婆ちゃんに半殺しにされるだろうから、ジュースで我慢することにする（まあ、一口二口飲んだことなら今までに何度かあったけれど）。

皆、競うようにして、葉っぱの皿に食べ物をとっていった。余程腹が空いていると見える。

あたしも、何か食べよう。お祭の屋台で散々食ったくせにすっかり腹は減っていた。

とはいえ。こんな得体の知れない奴らに囲まれて食事する、というのは予想以上に緊張するものだった。見知らぬ土地で、誰も知り合いのいない大きな食堂で、一人ぼつんと食事をしているような。夢中になつて食べれば、そういう気持ちも消え失せるかもしれない。

出汁の香りが仄かにするだし巻き卵を、一つとってゆっくりと口に入れてみた。変な味でありませんように。

心の底から、祈った。けれど、祈る必要は全く無かった。

美味かった。ぱさぱさしてなく、ふんわりしていて、噛むたびに出汁のいい香りが口の中に広がる。しょっぱくなく、ちょうどいい味付けだった。

「美味しい。これ、鬼灯の……ええと、おじさんでいいかな」

「構わないよ。鬼灯爺さんでも構わないさ」

そういつて、鬼灯爺さん……じゃなくって鬼灯のおじさんは、小さく声をあげて笑った。狐のお面に隠れていて、表情は読めないけれど多分笑っていると思う。何でこの人は仮面を被っているんだ？仮面の下には、とんでもない素顔でも隠されているのだろうか。……あまり、考えないようにしよう。

「これ、鬼灯のおじさんが作ったの？　ものすごく美味しいよ」
正直な感想だった。

「そりゃあ、そうさ、鬼灯の旦那の作る料理は、どれも最高だよ」
「紗久羅っ子は、あんたに言っている訳じゃないっすよ。何で自慢げにあんたが答えているんだ」

味がしっかり染みていそうな色をした里芋を頬張りながら、弥助が白粉を睨んだ。白粉は、あかんべえでそれに答える。

「有難う。作った甲斐があるよ」

「いやん、そんな有難うだなんて、照れちまうよう」

「だから、あんたには言っていないでしょうが」
弥助が、ため息をついた。隣にいた鬼灯姫が、くすくすと笑う。

「白粉様と弥助様は、本当に仲がよろしいのですね」
「どこが！？　白粉と弥助はほぼ同時に叫んだ。それがおかしいのか、また鬼灯姫は笑った。

声がぴつたり揃う位には仲がいいんだな……とか何とか思いつつ、今度は鶏の唐揚げを取った。もし鶏じゃなかったら泣いてやる、と思ったが、泣く必要はなかった。真正銘鶏の唐揚げだった。醤油や生姜や酒で作ったタレに長時間しっかりと漬けていたようで、噛

んだ瞬間醤油の香ばしい匂いと、生姜の強烈な香りがした。何回も噛むと、生姜や鶏肉の甘味が出てきた。あまり美味しいから、しばらく噛んでいた。

「うん、美味い。ねえ、これどういう風に作ったんだ？ あたしさ、これでも料理するのって好きなんだ。味付けとか、ものすごく気になるんだけど」

「秘密、だよ」

そういつて、鬼灯の主人は笑った。あたしは、ちえつと軽く舌打ちした。

次は何を食べよう、どれを食べても美味しいし、一通り食べてみようかな。

気づけばあたしは、周りに妖怪がいることを忘れていた。隣に、憎き馬鹿狐がいることも、すっかり忘れていた。頭にあるのは食べ物のことばかり。花より団子、恐怖より食い気、出雲よりご馳走だ。

対する妖怪達の方も、あまりこちらに話しかけることもなく好き勝手にやっていた。あまり話しかけても、こちらを怖がらせるだけだと思ったのかもしれないし、別にあたしなんて小娘のことなんてどうでもいい、と思っていたのかもしれない。

「鞍馬さん、もし宜しければ、お酒をお注ぎいたしますわ」

そういつて、柳が酒の入った竹筒を手を持つ。すると、元々赤い鞍馬の顔が更に赤くなる。うおお、とかぐおお、とか謎の呻き声をあげつつ、コップ代わりの竹筒を柳の方へ差し出す。柳が、静かに酒を注ぐ。鞍馬の竹筒を持つ手はぶるぶる震えている。それを隣で見ていた胡蝶が、肉にシソを巻いて焼いたものを掴んでいる箸を震わせながら、くすくす笑っていた。それを箸ごと皿の上に置くと、

右手で口を押さえてさつきより大きな声をあげて笑い出す。

「嫌だわ、鞍馬の旦那ったら分かりやすいわねえ、本当」

「え、ええい、黙れ胡蝶！」

鞍馬は大声を張り上げた。その声はどこか上擦っていた。鼻息も荒い。だって、だってえと答える胡蝶の目にはうっすらと涙が浮かんでいた。

「ああ、やだもう鞍馬の旦那って可愛いわね。ねえ、猪」

「え、あ、はい。か、可愛いですね」

香ばしい味噌と醤油の香り漂う焼きおにぎりを、（どういう風に食べているのか一切不明だが）頬張っていた猪は、突然自分に話を振られて驚き、大して話を聞いていないのにそんな風に答えてしまった。

鞍馬の口元がびくびくとひきつっていた。

「ほほう、猪。お前も言うようになったではないか」

「え？ え？ な、何のことですか？」

「猪ちゃん。貴方のことは忘れないわ」

ぼん、と猪の肩に手を置く胡蝶。

「何だかよく分かりませんが、私、もしかして、殺されます？」

「このお祭が終わったら……」

「嫌です、そんなの嫌です！ まだ恋人も作っていないのに、死ぬ

なんて嫌ですよ！」

「あんたみたいな、顔なし胸なしの娘に恋人が出来るとは思えないけどねえ」

白粉がけらけらと笑って、貉をからかう。貉が頬を膨らませた。

「酷いです、あんまりです。そ、そういう白粉さんは顔も胸もあるのに、いつになっても恋人出来ないじゃないですか！」

白粉の顔が一気に歪んだ。顔は笑っているが、目が全く笑っていない。

「ほう、小娘。あんた、鬼灯夜行が終るまでの命だねえ。鞍馬の旦那だけでなく、あたしも敵に回しちゃってさあ」

箸を持つ手に、力が入っている。そのまま握りつぶしてしまいそうな勢いだった。貉がひいっと悲鳴をあげる。

鬼灯姫が、おろおろしながら白粉と貉を交互に見た。

「まあ、白粉様、貉様。落ち着いて下さいませ。今日は折角のお祭なのですから、楽しくやりましょう。そうしなければ、私泣いてしまいます。こうして、皆様と騒げる日なんて、滅多に無いのですから」

本当に鬼灯姫が泣きそうな顔になっていたので、白粉は肩をすくめ、それ以上つかかろうとはせず、果実酒をぐいっと飲んだ。口論の原因を作った鞍馬や胡蝶は、さっきのことも忘れて、ただひたすら酒を飲み、ご馳走を食らっていた。

まあ随分と楽しそうですこと、なんて思いながらあたしはかき揚げや手毬寿司や、里芋の煮っころがしを、ひよいひよいと口の中へ入れていた。不味いものは何一つ無かった。どれも素朴で、何だか懐かしい気持ちになる味だった。

そんな風に、他のことに夢中になっていると、恐怖や緊張も薄れていった。長い時間居たお陰で慣れてきた、というのもあるのだろう。

「紗久羅っ子、随分食っているなあ。何も食ってなかったんですか？」

かき揚げを大きな口開けて、たった一口で飲み込んだ弥助が聞いてきた。

「いや、今日桜町でやってる祭の屋台で、色々買ったけど」

「ああ、そっか。今日はお祭だったなあ、そういえば。朝比奈さんも友達と行くって言っていたっすねえ。紗久羅っ子も友達と？」

「うん、まあな。金魚すくいとか射的とか色々やって……ってああ！　そういえば馬鹿狐！　お前、あたしが射的やっている時、肩叩いて来ただろう！？　お前のせいで、失敗しちゃったんだぞ、どうしてくれる！」

今の今まで、すっかり忘れていた。出雲が隣に座っていたことも忘れていた。出雲は、稲荷寿司を食べていた。本当、よくもまあ飽きないものだ。

「ああ、そういえばそんなことしたっけね。別に、邪魔する訳では無かったのだけれど。しかし、ものすごい驚きっぷりだったね。あれは傑作だった。カメラとやらで撮ってやりたかったくらいだよ」「そういつて、くすくすと笑った。あたしは、むかつとなって、手をぶんぶん振った。

「笑うな！　それ以上笑うと、その髪の毛にぶりの照り焼きをくっつけてやる！」

「それは困る。私の美しい髪の毛がべたべたになってしまふ。つけるなら、弥助の髪にでもつけておやり」

「って、何でそこであっしの名前がでるっすか！？ あっし関係ないっすよ!？」

弥助が口に含んでいた酒を危うく噴出しそうになり、「ごほごほむせながら反論した。

「そうだよ、出雲。……弥助なんかの髪の毛につけるなんて、ぶりの照り焼きが可哀想」

鈴が、宴会を始めてから初めて口を開いた。相変わらず聞き取りづらい声で、毒を吐く。

「それもそうだねえ、鈴。ごめんよ、お前のお陰で大切なことに気づいたよ」

そういつて、出雲は鈴の頭を優しく撫でた。鈴は、嬉しそうに微笑んでいた。

「弥助なんかとは何っすか、この生意気猫!」

「うるさい、馬鹿狸」

出雲に対する態度と、弥助に対する態度が違いすぎる。鈴は冷たく言い放つと、焼き鮭の身をほぐし、一口食べた。弥助はその後も、ぶつぶつ何か言っていたが、鈴も出雲も完全にそれを無視していた。

「弥助様は本当に面白い方ですわね。……ねえ、紗久羅様。私、今あちらの世界がどの様になっているのか、お話を聞きたいですわ。弥助様や出雲様からもよくうかがってはいるのですけれど」

「紗久羅でいいよ。様つけなんて、恥ずかしい」

「いえいえ、呼び捨てなんて、とんでもありません」

顔を真っ赤にして、首を横にぶんぶん振る鬼灯姫は、可愛いとしかいいようがなかった。

「そうなのか。いや、まあ、無理にとは言わないけどさ。で、何が聞きたいの」

「そうですね……沢山ありすぎて、困ってしまいますわ。そうだ、服装。今の服は大分軽くて、とても動きやすいと聞きますわ。後……ええと、スカートでしたかしら。そういうものも履いているとか、その、太ももを出しているとかで……」

鬼灯姫は、恥ずかしそうに急に小さな声になりながら言った。やつぱり、昔の人からすりゃ、あんだけ露骨に足を見せるっていうのははしたないって思えるのかな。

「そうだよ。着物はまず着ないかな。面白いよ、色々種類があつてさ。なあ、今度こっちに遊びに来いよ、あたしが持つてる服着せてあげる」

きつと鬼灯姫なら何を着ても可愛いに違いない。名案だとばかりに声を大きくして言うてみた。けれど、鬼灯姫の表情は急に悲しげなものになってしまった。あれ、あたし何か不味いこと言っちゃまったかな。

「その、お気持ちは有難いのですが。私、あちらの世界へはもう行けないのです。……その、精霊になってからというもの、清浄な場所でない生きてゆけなくなったのです」

「鬼灯姫、というか精霊っていうのは、人間界のごみごみとした空

気の中に長い間居続けると、倒れてしまうつす。昔ならともかく、今は自然も少ないつすからねえ……。桜町はド田舎つすけど、それでも精霊にとつてはきついみたいつす。割と丈夫なものもあるし、あの世界に己が宿るべき存在が居ればまた別つすけど」

弥助が、いか焼きにかぶりつきながら、補足してくれた。なんだ、残念だなあ。

「かといって、こちらの世界にそういつた服を持っていつて着せてやるわけにもいかないんだよね。鬼灯姫と共に住んでいるのは、頭の固い連中ばかりだからね。そんな丈の短いものなんか着ようものなら……ただではすまされないだろうねえ」

出雲が、ため息をついた。

「そつか。残念だな」

「申し訳ないですわ。でも、機会があれば、是非着てみたいものですわね」

そう言つて笑う鬼灯姫。あたしは、しばらくの間鬼灯姫と色々な話をした。

鬼灯姫は、自分が生きていた頃の暮らしがどんなものだったか色々教えてくれた。あたしは、ハンバーガーとか、今の家の造りがどういうものなのかということ、学校の存在等を話した。下手くそな説明で申し訳なかったが、鬼灯姫は文句一つ言わず、にこにこ笑いながら聞いてくれた。

「有難う、紗久羅様。ねえ、紗久羅様。私とお友達になってくださいますか？」

「勿論、いいぜ」

この祭以降、会うことは多分ないだろうと思いつつも、あたしは

その申し出を受け入れた。大歓迎だった。

まあ、もう二度と会うことはないだろうという予想は大きく外れることになるのだが……。

それから、更に時は過ぎる。カガキミの樹は、月の光を浴びて、その輝きを増していた。酒の回った妖怪達が、暴れ始める。

牛の頭をした妖怪が、奇声をあげながらカガキミの樹を上り、さつと服を脱いでほだか踊りを始めた（大事なところは葉っぱで隠していたけれど）それを見物する妖怪達が、口笛を吹いたり、手を叩いたり、「引っ込め」「カガキミ様がお怒りだぞ」「いいぞもつとやれ」等と笑いながら声をかけていた。

河童が、自分の頭にある皿に酒をかけながら、妖怪達の間をぬって全速力で駆けている。「俺様は河童界の頂点に立つ男だ！」とかぬかしながら。

在る所では、愛の告白大会が開かれていた。想いが通じ結ばれた者、失恋した者、多くの者から一度に告白をされて困っている者達の喜び、或いは悲しみや戸惑いの声が聞こえてきた。

早食い競争を始めているところもあったし、喉自慢大会をやっている所もあった。

姿形は違うけれど、やっていることは人間とまるで同じだった。

「ねえ、鬼灯の旦那、あたしはさあ、本気で鬼灯の旦那のことが好きなんだよう」

白粉が、顔を真っ赤に（多分酔ったせいだと思う）しながら、鬼灯の主人の体に首を巻きつけていた。出雲曰く、いつものことであるらしい。

「気持ち嬉しいのだが。私は、生憎柳一筋でね」

うわ、惚気やがった。鬼灯のおっさん、意外とやるなあ。

「分かつてる、分かつているよう。でもさあ、それでもこの想いは止められないんだよう。ねえ、鬼灯の旦那あ、あたしのこともさ、見ておくれよう」

「よくもまあ、奥さんがいる前でそんなこと言えるなあ」
ぼそりとつぶやいた。あたしを、白粉はぎろつと睨みつけた。

「お黙り、小娘。それ以上口出すと、この首でお前を絞め殺すよ」
おお、怖い怖い。恋する女は怖いねえ。あたしは恋なんてしたことないから、どうしてこんなにムキになるのか分からないけれど。
白粉は、また鬼灯の主人の方を向き、彼の耳元で何か囁いていた。何を言っているのかは分からなかったけれど、隣にいる鬼灯姫が顔を真っ赤にしているところを見ると、随分といやらしいことを言っているようだった。

柳は、困ったように笑いながらお酒を飲んでいた。けれど、気のせいだろうか。その笑みはどこか冷たいというか、怖かった。

貉は、その場でくらげのようにくねくね揺れていた。

「にやははははははは。世界が回るにやあ、皆回ってる、にやはははは」

酔っていた。完全に酔って、猫になっていた。手には子持ちししやもを握っていて、それをぶんぶん振り回していた。しまいにそれがすぽーんと手から抜け、真正面に座っていた弥助を直撃する。

「貉、またそうやって物を振って！ どうもあんたは酔うと何か手に持って振りたがると見える」

「にやは？ 酔ってないにや。あれ、ししゃもが消えてる。ししゃも、ししゃも、ししゃも持って来いにや」

そんなにししゃもが欲しいのか。ていうか、何でししゃも。

あたしは南瓜の煮物をもぐもぐ食いながら、ししゃもコールを続けている猪を観察していた。宴会を始めた頃は、正直顔の無いこの娘のことを恐ろしいと思っていたのだけれど、にやはは笑っている姿をずっと見ているうち、その気持ちは大分薄れていった。

弥助はため息をつく、立ち上がって、白粉に囚われている哀れな鬼灯の主人に「少し他の仲間の所へ行ってくるっす」と言って、そのままどこかへいるらしい他の仲間の所へと行った。

鬼灯姫は、酒を一口飲むなり顔を真っ赤にし、あっという間に眠りについてしまった。彼女はお酒に弱いらしく、さっきまで緑茶を飲んでいただけだが、どうも間違えて果実酒を飲んでしまったらしい。眠りながら、その小さく愛らしい唇を動かし、幾つもの短歌っぽいものを呪文のように呟いていた。

胡蝶は、黒色の、金色の蝶が描かれた扇子をぱたぱた振りながら、顔の火照りを冷ましていた。目は死んでいる。上機嫌になった鞍馬は、そんな彼女の肩に手を回して鼻歌を歌っていた。おいおい、あんたが手を回すべき相手はそっちじゃないんじゃないか？ まあ、どうでもいいけど。

出雲は、大して酒には口をつけておらず、ひたすら稲荷寿司を頬張っていた。他のおかずも食べていたけれど、8割方稲荷寿司に手を伸ばしていた。

「なんだ、お前は酒あまり飲んでいないんだな」

「あまり得意ではないからねえ。紗久羅の前で情けない姿を見せるわけにはいかないから。弱みを握るのは趣味だけど、握られるのは

好きでないからね」

はいはい、流石邪悪な狐様。考えることが違いますね。ったく、本当にどうしようもない奴だな。しかし、もしこいつが酔ったらどうなるんだろう。ちよつと、気になる。

鈴は、お酒の匂いにあてられたのか、目をとろんとさせ、顔を赤く染めながら、出雲に寄りかかっている。出雲はそんな鈴を見て微笑み、優しく頭を撫でた。

「さあさあ、紗久羅ちゃんも一緒にお酒飲むにや、お酒はいいにや、夢の世界へ連れてつてくれるのにや」

新たに得たししゃもを振りながら、貉がこちらへ顔を向けた。あたしが、いいよと首を振ると、遠慮しないでがばつといくにや、とかなんとか言いながら、あたしに勢いよく抱きついた。ものすごく酒臭い。あたしは顔をしかめた。

「いいよ、ほら、あたしまだ大人じゃないからさ」

「女子供、関係ないにや、飲め、飲みやがれにや、死ぬ気で飲むにや」

「飲まないよ、ていうかあんだどこで酒飲んでいるんだよ!?!」
どう見ても、貉の顔に口なんてものは無い。

「お、人間の娘。酒飲むのか。俺らも混ぜる混ぜる」

どこからやって来たのか、から傘お化けと全身に目がついている肉の塊と、人と同じ位の背丈の、着物を着た猫が、身動きの取れないあたしの前に現れた。その手には酒が入っているらしい竹筒やら、得体の知れないものの串焼きやらが握られていた。

鬼灯の主人を始めとしたメンバーには大分慣れてきた。けれど、未だ他の奴らには慣れないあたしは、ひいっと悲鳴をあげた。

「こつち来るな、酒も飲まないから！」

頭上から見下ろされる、というのは結構恐ろしいもので、あたしは助けを求めて、思わず隣でのん気に稲荷寿司を食べていた出雲の着物の袖をぎゅっと握った。

出雲はびっくりしたような表情を浮かべ、あたしを見た。

「おやまあ、紗久羅が私に助けを求めるなんて。明日は嵐になりそうだ」

「嵐でも何でもいいから、何とかしてくれよ」

「何とかって……別にいいじゃないか。彼らは悪さはしないよ。少なくとも、この日に限っては。まあ、お酒を飲ませたなんて事が知れたら、私が菊野に殺されてしまうけれど。お酌ぐらい、してあげたらどうだい」

「嫌だ！」

「だそうだよ、君達。すまないねえ、私のおもちゃは、どうにも我俣だから」

出雲は、桜の描かれた扇子を開き、それを口元にやった。目は「だからさっさと私の視界から消え失せろ」と言っているように見えた。から傘達は、悔しそうな表情を浮かべながら、帰っていった。助かった。はいいけれど。

「おい、馬鹿狐。あたしはいつからお前のおもちゃになったんだ」

「何を今更。ふふ、生まれる前から君は私のおもちゃになる、と運命づけられていたのだよ」

「ふざけるな！ 全く、一体どういう人生を辿ればそういう気持ちの悪いことを平気で言えるようになるんだ！」

「まあまあ、そう怒らずに。今日くらい、楽しく仲良くやろうじゃないか。ねえ、紗久羅。月が今日は綺麗だね」

出雲は、あたしの抗議を軽く流し、扇子であたしの頭をぽんぽんと叩いた。

そして、頭上高くにそびえる、銀色の月をその扇子で指した。

カガキミの樹の木の葉の間から覗くその月は、いつにも増して涼しげで、透き通った輝きを放っていた。それを見るだけで、怒りがすうっと鎮まっていくような気がした。

隣にいる出雲も、その月を愛おしそうに眺めていた。この化け狐も、一応他の何かを美しいと思う気持ち、慈しむ気持ちというものも持っているらしい。まあ、とはいえ結局は「月より自分の方がもっと美しい」と思っているのだろうか。

銀色の光が、出雲の藤色の髪の毛を照らす。風に緩やかに揺られ、眩く輝くそれはまるで春の小川のように見えた。

「なかなか、面白い奴らだろう。私の友人達は」

お互い好き勝手やっている奴らを静かに見つめながら、出雲が呟いた。その表情は、いつになく優しげだった。本当に、皆の事を信頼しているのだろう、と思った。

面白くない、ということはない。やっとあたしから離れて爆睡し始めた貉も、愛らしい笑みを浮かべる鬼灯姫も、好きな奴相手に顔を赤らめる鞍馬も、美味しい料理を作る鬼灯の主人も、皆面白い奴らだった。

「ああ、なかなか面白い奴らだな。なんか、楽しいことを全力で楽しんでるって感じ。他の奴らも、似たような感じだよ」

花見を口実に酒やご馳走を食べ、馬鹿騒ぎするあたし達人間と、そう変わらない。酒に酔ったり、誰かに恋したり、喧嘩したりすることも、同じだった。

「だけど。それでも。私達『向こう側の世界』の者と、紗久羅達は、違う。住む世界も、何もかもが。同じような所は多いけれど、でも結局は違うものなんだ……本来私達は関わりあってはいけないんだよ」

出雲が、あたしをじつと見つめた。いつもの、静かで、一切血が通っていないような冷たい表情だった。

あたしは、数日前「自分が人間か妖怪であるということとは、そんなに大事なことなのか」と出雲が問うた時のことを、ふと思い出した。

こいつの言っていることは、矛盾している。自分が人間であるか妖怪であることはそんなに大事なことが、とこいつはあたしに聞いていた。多分、そんなの別に関係ないじゃないかと、暗に言っていたのだろう。そのくせ、今度は自分達妖怪と、あたし達人間は違う者、別の存在。人間だから妖怪だからというのは、大きな違いで、とても重要だ、というようなことをあたしに言っている。

あたしが、出雲の事を化け狐と呼んでおきながら、実際は妖怪なんて存在は全く信じていなかったというのと、同じようなものだった。

「だから」

出雲が続けた。

「だから、私は君や菊野達とは、人間として接していたかったんだよ。君達と対等に付き合うには、深く関わる為には、そうするしか無かった。人間として会っていれば、例えば本当は妖怪だとしても、楽しく平和にやれると思っていたんだ。……人間になりたい、とい

う訳ではない。あの馬鹿狸とは違ってね。……ただ、愚かだけど愛しい、ほんの一部の人間と接する時だけは、人間でありたかった」
それなのに。出雲の表情が、拗ねた子供のようなもの変わった。それは、今まで見たことがないものだった。

「君は、私のことを化け狐と呼び続けてさ。放っておいてくれていれば良かったのに。結局、こうして君をこの世界へ連れて行くことになってしまった。わざわざ、自分の住む世界と君達の世界が違うことを、教えることになってしまった。嗚呼、もう本当、子供だね、君って。空気の読めない駄目な子だ」

いやいや、今のお前の方が余程子供のようだった。頼まで膨らませちゃってさ。自分の思い通りにいかなかったから、まるで仕返しのようにこっちの世界にあたしを連れて行って、しかもグチグチ文句を言つて。まるで、買ってもらいたいおもちゃを買ってもらえなかったからって、親が困るようなことをわざとやるガキみたいじゃないか。

人間か妖怪かはそんなに大事なのかと聞いておきながら、双方の存在は全く違うもので本来交わりあつてはいけない、と言つた出雲。

お前は化け狐だと言つておきながら、そんなものはいない、存在しない、存在なんてして欲しくないと心の底では妖怪の存在を否定していたあたし。

多分、こいつも同じなのだ。

自分達と人間は違うもので、その違いは重要なものだと言つておきながら、そうではない、そんなものは本当は関係ない、自分が人間か妖怪かというのは大事なことなんかじゃない、自分がどつちであるかと、関わりあうことは出来るのだと、心の底では思っているのだろう。

菊野婆ちゃんと話したり、あたしを使って遊ぼうとしたりする為に、人間として桜町を、商店街を、そして『やました』を訪れた出雲。そうすれば、双方の違い等気にすることなく接することが出来ると思っただろう。

けれど、あたしは、決して出雲のことを人間とは認めようとしなかった。あいつの醸し出す異形の雰囲気を見捨てることなく、人間との違いを指摘するように「化け狐」と言い続けた。その言葉を吐いているあたしは、まあ本当のところは、妖怪なんて存在は信じてはいなかったのだけれど。

折角人間として接しようとしたのに、その全てを否定されて、自分と人間の違いを思い知らされてしまった出雲。

その違いを思い知らされる度に、出雲が心の底にしまっていた思いは強くなっていったのかもしれない。

自分が妖怪か、人間かなんて、関係ないじゃないか、と。自分の考えと矛盾する、もう一つの思い。

その思いが爆発して、あの日あたしに、あんな事を聞いてきたんじゃないかなるか。そして、あたしをこの世界に連れてきた。人間も妖怪も、本質は変わらないのだと、言うために。

だけど、一方で。自分とあたしの住んでいる世界は全く違うものだということを完全に証明してしまった。

双方に大差は無い、という事とそれでも双方は大きく違うという事、その矛盾した二つの事を同時に証明してしまった。

それが、たまらなく悔しいのだろう。

ああ、もう何言っているか自分でも分からない。

分からないけれど、思う。

こいつは、本当に面倒くさい奴だ。

面倒くさいし、勝手だし、意味分からないし……。

けれど。

「あんたが、人間か妖怪かなんて、あんまり関係ないよ」

出雲が、驚いたようにあたしを見つめた。いきなりあたしが、ちよつと前にした質問に答えたことにびつくりしたのかもしいない。

あたしは、それはそれはいい笑顔を浮かべて、言つてやった。

「どちらにせよ、あたしがあんたのこと大嫌いだつてことに変わりはないもの」

それを聞いた出雲の頬が、ほんの少しだけ色味を帯び、奴は満足そうに微笑んだ。

「有難う。私は君の事が大好きだよ」

好きになつてもらわなくて結構、とあたしはあいつを軽く小突いてやった。

第十三話：鬼灯夜行（11）

*
どれ程の時間が経っただろうか。きつともう、いつもはとつくに眠っている時間だろうと思う。腕時計をつけてくれば良かったと、ちよつとだけ後悔した。お腹はもうすつかり膨れていて、これ以上は何も入らないと思う。ただ口が寂しくなるから、甘酸っぱい桃ジュースをちびちびと飲んでみた。大分温くなって、甘ったるさも最初の頃より強くなっている気がした。

ああ、やばい。瞼が重くなってきた。少しでも気を抜いたら、眠ってしまいそうだった。けれど、こんな所で寝るのも気が引ける。というか、出雲の横で寝たくない。あいつに寝顔を見られるなんて、屈辱的なことだ。それに、出雲のことだ、寝顔について色々言うに違いない。そういう奴なんだよ。

出雲は、あたしの隣で、飲みもしない酒の入った竹筒を片手に、ぼうつと月を眺めているだけだった。鬼灯の主人は、自分の首に巻きついている白粉は無視して、柳と何か語り合っていた。

他の妖怪達も、先程に比べると若干大人しくなっていた。大きないびきをかいて寝ている奴も多い。妖怪も、眠るのだろうか。けれど、ちつとも眠く無さそうな奴らもいる。人、というか妖怪によって違うのだろうか。

騒いでいる声よりも、穏やかに談笑している声の方が目立っている。歌う奴も踊る奴もいるにはいるが、それも先程に比べれば随分静かで大人しいものだった。流石の妖怪も、ずっと騒ぎ続けていると疲れてくるのだろうか。しかし、中には疲れ等知らない、という風に暴れているのもいる。

なんだか、頭がぼうつとしてきた。さっきから、目を開けたり閉じたりを繰り返している。ふと空を見上げると。優しい色の月が見える。その光が、少しずつ意識を奪っていく。

しやらしやらと、カガキミの樹の木の葉は揺れ続け、美しい音色を奏でていた。それは、子守唄のようだった。

ああ、もう寝てしまおうか。いや、でも……。

あたしの意識は少しずつ遠ざかっていった。

*

気づくと、あたしは真っ白な空間の中、一人ぼつんと突っ立っていた。辺りを見回しても、何も無い。出雲も、鬼灯の主人も、鈴も、皆いなかった。木々も、地面も、食べ物も、何も見えなかった。

ここはどこだろう。きよろきよろしながら、とりあえず先へ進んでみた。

しばらくすると、あの巨大なカガキミの樹が目に見え込んできた。全てを包み込むような、大きくて威厳のある姿。あたしは、樹に吸い込まれるように前へ前へと進んでいく。

太くて頑丈な幹の前に、誰かが居た。

一人は燃え盛る炎の色をした、ウエーブを描いた長髪の男だった。その眼差しは、全ての生き物を一瞬で黙らせてしまっような、ものすごく力強いものだった。ほんのり黄色っぽい白の、弥生時代とか、そっような大昔の人が着ていそっような服を着ていて、胸には真っ赤な勾玉を沢山連ねた首飾り、腰には赤黒い剣を差していた。

その隣にいるのは女で、水色の髪の毛を頭のとっぺんでお団子にしている。耳には翡翠のピアスのようなものをつけている。瞳は今見えた夜空のような色をしていた。男の威圧的なまなざしとは違っ

て、それは暖かく、慈愛に満ち溢れたようなものだった。衣装は男と同じものだったが、ズボンではなくて、裾が地に着くほど長いスカートだった。首からは翡翠を沢山連ねた首飾りをかけていて、両手でドツジボール位の大きさの鏡を持っていた。

人の子よ、ようこそ。我らの世界へ

男が、口を開いた。低くて、お腹に響く声だった。

人間の娘よ。よく、顔を見せて。まあ、とても愛らしい。貴方、きつと将来美人になるわ

女の声は柔らかい。微笑むその顔は、自分の子供を慈しむ母親のようなものだった。

人の子よ。そなたに、我らの母からの言葉を伝えよう

二人のお母さん？誰だ、それ。というか、この人達誰なんだ。人間でないことは確かだけれど。

娘よ、娘。そなたは、これから先幾つもの不可思議な出来事に巻き込まれていくことでしょう。それは、避けられぬ運命です

「え、何それ。どういうこと？」

いずれ、分かることだ。いずれ、いや、すぐにでも分かるだろう。人の子よ、そなたは面倒な男に好かれたな

面倒な男……出雲のことだろうか。男は表情を変えぬままため息をついた。

それらの出来事が、貴方に何をもたらすかは分かりません。苦しみ、喜び……或いは、最終的には何も得ないかもしれません。け

れど、何があっても、例え苦しみしか待っていないとしても、進みなさい。そうすることで、救われる者がきつと出てくるでしょうから

「どづいことなんだ。あたし、これからどづなるんだ」

詳しいことは、知らぬ。只我らは母から託されし言葉をそのまま伝えただけの話だ。人の子よ、母はそなたのことを気に入ったよ。この世界へ来て、しかも妖怪達と飲み食いする人の子など、滅多に現れないから

別に好きでこっちの世界に来たわけじゃないんだけどな。と心の中で呟いた。

結局、目の前にいる二人は何者なのだろう。

「意味がよく分からないけれど、あんた達だれなの。母親って」
女の方が、にこりと微笑んだ。

我が名はアマルテ。隣にいるのは、我が愛しき夫・カラドウです

アマルテ。カラドウ。はて、どこかで聞いたことが……。

あたしは、小さな脳みそをフル回転した。アマルテ、カラドウ、母、世界……。

あ、そうだ。

「もしかして、お前ら、この世界を作ったって言う……!!」
それじゃあ、母って言うのはカガキミの樹のことか。

あたしがそれに気づいたのとはほぼ同時、目を焼いてしまいそうなくらい眩しい光があたしを包み込んだ。光にさえぎられて、カラドウとアマルテの姿も見えなくなっていった。

あつという間に、世界は光で溢れ、やがてもう何もかも見えなくなってしまうた。

*

「紗久羅、紗久羅。起きて」

誰かが、あたしを優しく揺さぶっている。ちよつと待つて、あと3分……。起きるのが億劫で、あたしはしばらく目を瞑り続けた。

誰だろつあたしを揺さぶっているのは。この冷たくて、透き通つた声、これは……。

少しずつ、あたしのぼうつとしていた頭ははっきりとしていった。うつすら目を開ける。キラキラ輝く銀混じりの藤色の、長い髪の毛、真つ赤な瞳、ああ出雲だ。

ん？そついえば、頭がぶにぶにしている。なんだろつ、あたし、何の上に頭を乗っけているのだろつ。ほんのり花の匂いがする。

「紗久羅。いつまで寝ているんだい。そんなに私の膝の上が気持ちいいのかい」

膝の上？ああ、通りで地面に比べて柔らかいわけだ。でも、誰の膝の上だろつ。私の膝の上？出雲がそう言っている。あれ、ということ。

あたしの頭は完全に覚醒した。

あたしは、出雲の細い両膝に頭を乗っけて眠っていたのだ。

勢いよく、起き上がる。危うくあたしの顔を覗き込んでいた出雲のおでこと、自分のおでこをこつつんこさせるところだった。

あたし、いつの間に眠っていたんだ！？ていうか、なんで、なんで

「何であたし、出雲に膝枕されているんだ！？」

顔が急激に熱くなる。今は鞍馬に負けず劣らず真つ赤な顔をして

いるに違いない。膝枕って！何だよそれ、普通恋人同士とかがするもんだろ、それ。ていうか、通常女が男に膝枕してやるんじゃないか、いやそんなの関係ない。何をやっているんだ。あたしは。

「何でって。気づいたら君が寝ていたから。君ったら、私に寄りかかって、頭を私の肩の上のせて眠りだすから。鈴と君、両側から寄りかかられ続けるとちょっと疲れるから、しょうがない、ここは私が膝枕をしてやろうと思ってね。どうだい、私の膝枕は貴重だよ。君はとっても幸福だ」

首を傾け、さらさら流れる髪の毛に軽く触れながら、出雲は意地の悪い笑みを浮かべた。裏でこの世を支配する恐るべき悪女の如き笑みだ。

「どこが幸福だ！ 不幸の間違いだ、不幸の！」

「照れなくてもいいのにねえ」

「どこが照れているんだ！？」

「全体的に」

「んな訳ないだろう、幻覚見ているんだろう、お前！」

「幻覚を見せるのは得意だけど、見るのは苦手だなあ。まあ、それは置いといて。紗久羅、祭もいよいよ終るよ。後は、鬼灯提灯を力ガキミの樹に吊るすだけだ」

そういつて、出雲は、あの暖かな光を放つ鬼灯提灯を手に持った。そういえば、すっかりこれのことを忘れていた。

ふと、空を見上げる。さっき見た時に比べて少しだけ明るくなってきていた。これからもうしばらくすると、もっと明るくなって、

やがて世界は朝を迎えるだろう。

「痴話喧嘩は其れ位にして、さっさと行くぞ」

酒を飲みすぎたせいか、ややだるそうに鞍馬が言う。痴話喧嘩っていうな。彼が人間であり怖そうな奴じゃなければ、今頃殴っていた。

鞍馬が懐から、真つ黒な羽根を一つ取り出した。

「上空から行った方が早かろう。先ずはこの鬼灯を吊るす紐を貰わねばな。貴様ら、皆我から少し離れている」

一体何をするつもりなのだろうか。よく分からないが、ここは鞍馬の言うことを聞いておいた方がよさそうだ。あたしは、他の奴らと一緒に少しだけ移動して、鞍馬から離れた。

鞍馬は、意味の分からない、呪文のような言葉をぶつぶつとつぶやいていた。

そして、突然天地と心臓がひっくり返りそうになる位響く、大きな声で「喝ッ」と一言。同時に羽根をぶんと振り下ろす。

すると、黒い羽根は鞍馬の手からするりと抜け、ぶん、という音と共に上昇し、どんつと一気に巨大化した。羽根が巨大化した瞬間、風が舞い、周りがあるありとあらゆるものを激しく揺らした。浴衣の裾がはらりとめくれたもんだから、あたしは慌てて手でそれを押さえる。隣にいた出雲の髪がふわりと広がり、あたしの顔に少しかかった。

黒い羽根は、横幅が2メートル近くになり、長さは学校のプールの横幅程にもなった。まあ、兎に角一言で言えば……マジ超半端なくでかい。

近くにいた妖怪達は巻き添えをくらい、風で吹き飛ばされたり、慌ててしゃがんだり。ちよっとした大騒ぎだ。

鞍馬は、全く気にする様子も無く、ひょいっと羽根に乗った。

「乗れ。その人間の小娘もな。まあ、せいぜい落ちぬ様気をつけるんだな」

何だよ、あの羽根に乗れってか。命綱も安全装置もついていない、絶叫マシンよりも絶叫ものあれにか？

皆は、いつものことらしく、慣れた様子で羽根の上にぴよんと乗っていく。鬼灯の主人は、重箱を風呂敷で包みなおしたものを抱えながら器用に乗った。出雲も、優しく抱えた鈴を乗せた後、ひょいっと乗った。

あたしも、乗らなければいけないらしい。乗らなければ間違いない迷子だ。一人で「芋洗い」という言葉も驚きそうな位酷い、妖怪の群れの中に突っ込んでいかなくてはいけない。それだけは、勘弁してくれ。

仕方ない、と観念して羽根の上に乗る。なんだかふわふわしていて、尻がくすぐったい。

さあ、行こう、という所で、さっきまで席を外していた弥助が帰ってきた。まあ、なんてタイミングの良い奴。わざとじゃないのか。

「お、やっぱり今年もそれで行くっすね。あつしも乗りますから、もう少し待っていてくださいよ」

「あらいやだ。お前みたいな臭い狸公が乗ったら、この羽根があまりに酷い匂いで、腐っちまうよう」

未だ鬼灯の主人から離れようとしないうちに白粉が、わざと鼻をつまんでみせる。弥助はむっとしたが、気にしない、とさっさと乗り込み、あたしの後ろにあぐらをかいて座った。まあ、おっさん臭い匂いがしないわけではないけれど。これ位ならまだいいだろう。

「さあさあ、出発進行っすよ」

「貴様に指図されずとも、出る。さあ、飛ばすぞ。おい、小娘振り落とされるなよ。貴様が死ぬと、出雲に何されるか分かったものではないからな」

「嫌だねえ、鞍馬の旦那。私は何もしやしないよ。これを操縦していたのが馬鹿狸だったら、狸汁にしてカガキミの樹にお供えするけれど」

出雲が、見返り美人図の様に絶妙な角度で振り返り、にやりと笑った。

「何で狸汁にされないといけないっすか!?!」

「出雲。……弥助の狸汁を供えるなんて、カガキミの樹に失礼だよ」
ぼそつと呟く鈴を、出雲が後ろから抱きしめ、本当に鈴は聡い子だねえ、ああ可愛い可愛いと言う。

「だあ、本当にいつもいつも！ 忌々しい！」

本当に、心の底から忌々しいと思っっているらしい。後ろから齒軋りの音が聞こえ、荒い鼻息が背中にかかる。

しまいに、あたしの両肩をものごく強い力で掴みだした。

痛い。婆ちゃんの拳骨以上に痛い。やめてくれ、骨が折れる！

鞍馬は肩をすくめたきり、何も言わずに羽根を操縦することに専念し始めた。

エレベーターに乗った時の様な浮遊感と共に、羽根が急上昇する。どこかに掴まらなければ、いや、ちょっと待て、これ何にも掴むところがないじゃないか！

羽根は変に傾くことはなく、常に地面と平行に飛んでいた。けれど、その速度は異様に速く、少しでも気を抜いたらバランスを崩し

て転げて、転落しそうだった。

ああ、風を感じる。夏真っ盛りとは思えない位、涼しい。髪の毛は乱れ、ついでに浴衣も乱れそうになった。一度、バランスを崩し、大きく身体が右へ傾き、こてんと倒れてしまった。その時、頭が羽根から飛び出る。

見なければいいのに、下を見てしまった。刹那、あたしの頭は真っ白になった。

そこから数分間の記憶が、あたしには殆ど無かった。気がついたら、白羽が先頭にいる鞍馬の前で、ぶかぶか浮いていて、赤い紐を鞍馬に渡している。

鞍馬は人数分紐を貰うと、それを後ろにいた胡蝶に渡す。胡蝶は鬼灯姫へ、そしてその後は猪、柳、鬼灯の主人、白粉、鈴、出雲、あたし、弥助の順に渡っていった。

紐は、真っ赤で月の光に照らされてきらきら輝いている。太さはうどんの麺位。

あたしは、その紐をまず巨大鬼灯提灯の茎の部分に結びつけた。後は、カガキミの樹へ括るだけだ。

どっしりとそびえ立つ樹の幹の麓の方に、わらわらと妖怪達が集まっていた。少し上から見てみると、まるで甘い菓子にたかる蟻の様に見える。空を飛べない奴らは、空を飛べる奴に頼んで提灯を括ってもらうか、必死に木登りして適当な枝まで行くらしい。

樹の枝にはもうすでに沢山の鬼灯提灯が吊るされていて、それが淡い橙色の光を発していた。でも、まだまだ少ない。これからもっともっと多くの提灯が吊るされるのだ。

あたし達は、またほんの少し上へ行つて、一本の太い枝に仲良く提灯を吊るした。

枝にそつと触れる。ひんやりしている。出雲の手のような、凍りつきそうな、人を不安にさせるようなものではなくて、とても心地のよいものだった。

「提灯を吊るす時は、心の中で、カガキミの樹に感謝の言葉を贈るつすよ」

「ふうん」

感謝、と言われても……まあ、とりあえず。

あたしは、心の中で有難う御座いましたを連呼しながら鬼灯提灯を枝にくくりつけた。皆、吊るす時は無言になっていた。

鬼灯提灯を吊るす作業自体は、あっという間に終った。

「折角だ、もつと上まで行こう」

再び、浮遊感があたしの身体を襲う。ひゅおおお、という風の音と共にぐんぐんと上へあがっていく。

枝と枝の間を縫うように、ぐんぐんと。枝にはぶつからなかったけれど、枝に繁る木の葉には思いつきり突っ込んでいった。冷たくて柔らかな葉が体中にあたる。目を開けたら、不味い。絶対目がやられる。時々、誰かが吊るした鬼灯提灯が顔に当たった。とても、暖かい。近くに居たと思しき妖怪達の、ぎゃあという叫び声も沢山聞いた気がする。

本当に、乱暴だ。このあたしに乱暴だと言わせる位、乱暴すぎる操縦だった。神聖なはずの樹にこんなことしていいのか、と思う。本当にこいつら、樹のことを大切だと思っっているのか？

しばらくすると、木の葉ゾーンを抜けたのか、葉が当たらなくなった。あたしはゆっくりと目を開けた。最初に見えたのは、紺に白

を混ぜたような色の空だった。はっとして視線を下に移す。

出雲は、自分の頭についていた青く輝く葉を手で振り払っていた。「全く、相変わらず鞍馬の旦那は乱暴だねえ。何で、わざわざ突っ込んでいくんだい。少し迂回すればいいのに。ねえ、鈴。大丈夫かい」

出雲に抱きしめられていた鈴は、他の奴ら程の被害を受けてはないらしく、小さく頷いていた。葉の中をとんでもない勢いで進んだのにもかかわらず、少しも怪我はしていなかった。

「おい、馬鹿狐。あたしの心配はしないのかよ」

「ん？ 心配して欲しかったのかい。心配したらしたで、出雲の癖に気持ち悪いとか言いそうだったから、何も言わなかったけれど」

あ、紗久羅、いたの？ というような顔でそう言って、首をかしげた。にやろう、誰のせいでこんな目にあったと思っている。お前がここに引っ張ってこなければ、今頃あたしはベッドの中で気持ちよく眠っていたんだぞ。

「紗久羅はヤキモチ焼きだね」

「誰が、誰にだ！」

「それは勿論、紗久羅が、私にね。其れ位分かるだろう？ 言わずともさ。ま、それはどうでもいいとして。ほら、紗久羅、下を見てごらん」

出雲が、そう言いながら下を指差した。

下。あまり、見たくはなかった。さつき以上に高いところにいるのだ。命綱なりなんなりついているのなら、すぐにでも見ただろうが。この何にも支えの無いものに乗っている時に、下なんて見てい

られるか。高所恐怖症ではないけれど、嫌だ。

あたしが、いつまで経っても下をみようとしなからか、出雲はあため息をついた。

「怖がりの紗久羅には、無理な話か」

あたしは、即座に下を見た。身を乗り出して、下に広がる世界を見た。怖がりなんて、冗談じゃない。

落ちないように、羽根の端をしっかりと握り締めた。

そして、見た。

目に飛び込んできたのは、カガキミの樹。広場を、いや、森全体を抱きしめるように伸びる枝、その枝に繋る木の葉。

さつきまで、青白く光っていたその樹。

今は、淡い橙色に輝いていた。それは、鬼灯提灯の灯り。樹に吊るされた無数の鬼灯提灯の光が、カガキミの樹を橙色に染めているのだった。

一つ一つは強い輝きではないけれど。沢山集まることで、眩い輝きとなって、森中を明るく、優しく照らす。

緑色の木々に囲まれた、橙色の光の樹。カガキミの樹が生んだという命が、一斉に寄り集まって生まれた、奇跡の、命の樹だった。

なんて、綺麗なんだろう。クリスマスのイルミネーションや、東京タワーの展望台から見る夜景なんかとは、わけが違う。

目の前にあるそれには、温もりがある。人工的なものではない、自然で、風景によく馴染んでいた。

輝きは、ますます増していく。まだ樹についていないらしい、灯りも沢山見える。

風が吹くと、しゃらしゃらという音が、聞こえる。遠くからでもそれは、しっかりと聞こえた。樹も、多くの魂に触れることが出来

て、心の底から喜んでいようだった。きっと、子供が久しぶりに実家に帰ってきたことに喜びを隠せず、ついはいしゃく母親のようにおかえり。そんな声が、聞こえたような気がした。

「美しいだろう。私は、好きだ。この光景がね。まあ、ほんの一時の間しか見られないのだけれど。鬼灯提灯の灯りは、やがて消える。数時間後には光を失って、跡形も無くこの世界から姿を消すんだ、鬼灯提灯は」

「でも、だからこそ、美しいのですわ。桜はいずれ散るからこそ美しい。永遠でないから、愛される」

出雲の言葉に、鬼灯姫が続く。

そうだなあ。短い間しか咲かないからこそ、感動するのだろう。

「そうだね。……永遠なんて、醜いだけだね」

そう言う出雲の表情は、酷く冷たかった。たく、こんな綺麗な景色を前になんでこんなにも冷たい表情になれるんだ、この化け狐は。

あたしは、姿勢を変え、羽根から思い切って両足を投げ出してみた。

それから、皆、鬼灯提灯の灯りが消えるまで静かに樹を眺め続けていた。

*

鬼灯夜行、という祭自体は、自分の持つ鬼灯提灯を、樹に吊るした時点で終了らしい。その後どうするかは、自由で、さつさと帰るもよし、もうしばらく飲むのもよし、鬼灯提灯の灯りに彩られた樹を眺めるもよし。

カガキミの樹はすっかり元通りで、あの青い輝きを取り戻していた。灯りが少しずつ消えていく様子も、なかなか良かった。桜と同じく、最後まで楽しませてくれた。

鬼灯の主人は、地上へ戻る途中、樹の枝から一枚葉を摘んだ。葉は摘まれてなお輝いていた。

「カガキミの樹の葉は、枯れることが無い。出雲の大嫌いな『永遠』の葉なんだよ。私はね、毎年一枚こうして葉をとってね、集めているんだよ」

何か意味があるの、と聞いてみた。鬼灯の主人は、別に何も無いよと言って笑った。青地に花の模様が描かれた縮緬で作られた袋に、毎年とっている葉がびっしり詰まっているのを、地上に降り立った後で見せてもらった。

気づけば、もう空は薄紫色から明るい水色に変わりつつあった。白い日の光が、世界を眩しく包み込み始め、月は恥らうように透明になっていった。

「さて。そろそろ解散しよう。今年も、楽しかったよ」

「そうだねえ、今年も鬼灯の主人といられて、幸せだったよう」

「美味しいご飯も沢山食べられたしね」
胡蝶が笑う。

「いい思い出になりましたわ。ねえ、鬼灯姫様」

「ええ、柳様。紗久羅様ともお会いできましたし、私とても楽しかったですわ」

「私もです。うう、それにしても何で私の手、魚臭いんでしょう？」

「我も、まあ今年もそこそこ楽しませてもらったわ。酒もたらふく飲んだしな」

「あつしも、とつても楽しかったすよ。さて、また午後からバイトだ。さつさと帰って休むとするか」

「……」

鈴は、ただ黙っていた。

「ふふ。紗久羅と沢山遊べて楽しかったよ、私も。さあ、紗久羅。帰るとしようか」

「だな。ああ、眠い……結局あざみと咲月と……巫女の舞、見られなかったなあ……ていうか、昨日歩いた道を、また歩かないと行かないのか？」

それだけは、嫌だった。もう、疲れた。歩きたくない。

「いいや。心配ご無用、だよ」

そう言つと、出雲が鈴を見た。鈴が頷いて、真つ赤な巾着袋から、何か取り出した。平安時代とかによく見る牛車のフィギュアのようだった。

出雲がそれを手のひらに乗せ、ふつと息を吹きかけた。

牛車のフィギュアはふつと天空に舞う。すると、ぼんつと小さな破裂音がし、同時ににもくもくと煙が出てきた。

煙はしばらくすると消えてなくなった。同時に、大きくなった牛車が姿を現す。

しばらく宙に浮いていた牛車は、急に浮力をなくし、地面にずがんと大きな音を立てて着地した。

「さあ、乗って。これなら直に満月館のある所まで行けるから」

「乗るのはいいけど、これ誰が引つ張るんだ、牛いないの、牛」

「牛？ 別に牛なんかいなくても動くけれど」

「左様ですか……」

この世界に、あたし達の世界の常識は通用しない。当たり前のことだけ。何を今更、って感じだけれど。

あたしは、牛なし牛車に乗り込んだ。隣に出雲が座る。さらにその隣に鈴が。

「それじゃあ、皆。また『鬼灯』等で会おうね」

「お元気で、出雲様。紗久羅様も、鈴様も」

鬼灯姫が小さく手を振っていた。あたしも手を振り返す。

ちょっと寂しい気はするけれど、まあ人間と妖怪。しよせん住む世界が違うのだ。うんうん。

まあ、もう二度と会うこともあるまい。

やっぱりその予想も、大きく外れることになるのだが。

牛車は、がこん、と一度揺れると、どんどん上昇していった。飛行機に乗った時と同じような感覚。鞍馬の羽根に比べて、安全で丁寧で、それでいて早かった。

「どうだい、紗久羅。楽しかったかい」

「散々だったよ。疲れた、もう二度と来たくないね。……まあ、料理は美味かったし、カガキミの樹と、最後に見たあの景色はとても

綺麗だったから、いいけどな。やっぱり違う世界で過ごすのって、ものすごく疲れるな。……あんまり疲れすぎて、色々ごちゃごちゃと考えるのも面倒になった」

本当に、何も考える気がしなかった。疲れが癒えたら、また悩むのかもしれないが。何か、出雲に振り回されている自分が阿呆らしくなってきた。

出雲が、あははと声をあげて笑った。目を細め、口を大きく開いて笑うなんて。こいつも、眠気が来ているんじゃないだろうか。

「あ、そういえば。あたしさつき夢の中でさ、アマルテとカラドウに会った」

出雲が、それを聞いて驚いたように眼を見開く。あたしは、二人に会ったこと、二人があたしに言った言葉等を話してみせた。

出雲は、さきより大きな声で、あははと笑った。

「成る程、偉大なる樹は全てお見通し、とね。カガキミの樹は気に入った者に予言を託すと言われている……ねえ、紗久羅。私は何故君をここへ連れてきたか、分かるかい」

「そりゃ、あたしが化け狐って連呼するから……そこまで言うのだったら君の常識をぶち壊してやるって思ったからだろう。ああ、後妖怪と人間は似ていること、それでいて、全く違うってことを教えなかったんだろう。残念だったなあ、自分とあたしの違いを証明することになっちゃってさ」

出雲は、くすくすと笑った。その笑みは、魔性の笑みというよりは、無邪気な悪戯小僧のそれに似ていた。

「いや、まあ確かにそういう理由もあるけれど。でもまあ、一番大きな目的は。嫌がらせだね、嫌がらせ。私は自分が好きな人間に嫌がらせをするのが大好きだ。大嫌いな奴に嫌がらせをするのも、ま

あ好きだけれど。紗久羅、君はこの異形の世界に足を踏み入れてしまった。そして、その身体にはこの世界の匂いが染みついた。人間には分からない、強い匂いがね。かわいそう、ああかわいそうに、紗久羅」

全く哀れんでいる風ではない。むしろ、楽しそうだ。
匂い？なんのことだ、それがつくとなんだっていうんだ。

「その匂いは。異形を引き寄せせる。紗久羅、君、これから自分の住む世界に、どんどん異形を呼び寄せられるようになるよ。意味の分からない事件にも、沢山巻き込まれるだろうね」

「は」

「平和に過ごしてきた女の子は、ある日突然トラブルを引き寄せせる体質になる。うん、なかなか劇的で、悲劇的で、喜劇的だね。はは、でも恨むなら自分を恨むんだね、紗久羅。自業自得。この私にたてつくから、こうなったんだよ」

そういつて、出雲は笑った。

あたしが今まで見てきた中で、一番良い笑みだった、幸せそうで楽しそうで。

自分の思い通りにいかなかった子供は、腹いせに親が困ることをやることで、一矢報いる。

自分の思い通りにいかずに、ふてくさった化け狐は、腹いせにあたしが困ることをやることで、一矢報いやがった。いや、一矢どころの騒ぎではない。

ああ、身体の震えが止まらない。それにとっても熱い。きつと頭に四つ角マークができてるなあ。ああ、なんだろう。我慢できない。息を、思いつきり吸い込む。そして、吐いた。

「ぶざけるな、この化け狐！！」

「怒らない、怒らない。折角の浴衣姿が台無しになってしまつよ」
これで、怒るなつて方がおかしい。

ふーふーと、全身の毛を逆立てて威嚇する。

すると、出雲がにこり（いや、にやりといった方が正しいか）と笑いながら、その真つ赤な唇を、狭い牛車の中立ち上がつて、出雲に食つて掛かるあたしの耳に近づけた。

「私が贈つた浴衣を着て、そんなに怒るのはよしておくれ。可愛いよ、紗久羅。とつても、可愛い」

止めを、さされた。

ダメージは、意図せず顔を羽根から出して下を見てしまった時以上の、もの、だった。

自分が着ている浴衣が、出雲の贈り物。確かに、婆ちゃん、知り合いから貰つたものだっていつて、いた、けれ、ど。

魂が口から抜けていつて、あたしは真つ白になってその場に崩れ落ちた。

*

情けないことに、それから先のことは、全く覚えていないのだ。鞍馬の、乱暴で恐ろしい羽根の操縦の時もそうだったけれど。

気づけば、自分の部屋のベッドの上に居た。時刻は14時30分。随分ぐつすり眠つていたらしい。浴衣は、もう着ていない。婆ちゃんが着替えさせてくれたのだろうか。

リビングにあるTVの前には、馬鹿兄貴が座っていた。ランニングにパンツ姿。この馬鹿には、恥じらいというものが無い。ソーダ水を飲みながらうちわをぱたぱた扇いでいる。

蝉が、不快な合唱を続けている。太陽は世界を支配する王様の様に堂々と君臨している。商店街を歩く、餓鬼やおばさん、爺さん

達の声が聞こえる。

不快で、それでいていつも聞いている音や声。けれど、今日に限っては不思議なことに酷く懐かしく感じた。

母さんと婆ちゃんは、下できつといつも通り、店を開いているのだろう。

冷凍庫から、ソーダ味のアイスクャンデーを取り出し、一口かじった。甘くて冷たいものが口の中に広がった。

あたしは、元の世界へ戻ってきた。

いや、むしろあれは夢だったのかもしれない。……現実であつては欲しくないと思う。けれど、あの美味しいご馳走や、楽しい妖怪達、そして美しい景色は、夢であつて欲しくないと思う。夢であつて欲しいのか、現実であつて欲しいのか、正直なところ、よく分かっていなかった。

ああ、でも牛車で起きたこと、言われたことは、夢でいい。ていうか、そこはもう、夢であつて欲しいというか、夢じゃなかったら泣くというか。

あたしは、階段を下りていった。

調理場では、婆ちゃんがせっせと弁当を作っていた。売り子をしているのは、母さんだった。

「あら、紗久羅。起きたの。おそよう」

「おそよう」

おはようというには遅すぎるから、おそよう、だ。

そして、ショーケースを挟んだ向こう側にいたのは……。

「やあ、お転婆紗久羅姫。昨日は楽しかったねえ、ああ、でもこれからが楽しみだね。どんなことが起きるか、想像するだけでも胸が

躍るよ
「

風に揺れるのは、藤色ではなくて、真っ黒な髪の毛。

どうやら、夢で終わらせてはくれないらしい。

昨日の出来事も、そして、カガキミの樹と出雲がした予言も。

上等じゃないか。売られた喧嘩は買うのが礼儀だ。

どんなことがあっても、先へ進んでやる。

「いらっしやい。出雲」

第十三話：鬼灯夜行（11）（後書き）

これでとりあえず「鬼灯夜行」は終了です。とはいえ、これからもまだまだ物語りは続くのですが。

何か変に話を広げて、まとまらなくなっしまいました。反省。

次は、紗久羅主人公でもう1エピソードか、ちよろつと出てきた「さくら」の方が主人公になるエピソードになると思います。

番外編：桜村奇譚集 1

番外編：桜村奇譚集 1

『天狗の話』

桜山に、一人の天狗が住んでいた。強面のその天狗は、自分が一番強いのだと思い込んでいて、いつも偉そうな態度をとっていた。また、酷く乱暴な性格で頭に血が上ると直に手や足が出る。誰に注意されても、耳を貸そうともせず、逆に注意した者を殴りだす始末であった。

ある日、天狗は特にすることもなく、ふらふらと山の中を歩いていった。

山の中にある、小さな泉の近くを通ろうとすると、その泉に誰かがいるのが見えた。木の陰から泉の様子を伺ってみる。そこにいたのは、人間の娘であった。とても美しいその娘は、身にまとっているもの一切を脱ぎ捨てており、その滑らかな線を描く豊満な体を惜しげもなく、晒していた。娘は、天狗が見ていることも知らずに、真っ黒な長い髪の毛を細い手ですいている。

あまりに美しい娘であったから、思わず天狗は見惚れてしまつて、しばらく娘の行水を眺めていた。

しかし、それから暫くしてからのこと。天狗は、うっかり咳をしてしまった。刹那、娘は天狗が自分の行水姿を眺めていることに気がつく。

「おのれ、この化け物め！ この私の裸を見るとは！」

女は声高々に叫ぶと、まず、すぐ近くにあった石をむんずと掴み、天狗へ投げつけた。天狗は、頭に血をのぼらせて、おのれ人間の分際で、と反撃にでようとす。

しかし、天狗が動く隙を与えぬ勢いで、娘は次々と石を投げる。

最後に、おのれまだ立ち去らぬかと言って、泉のほとりに置いていた、大きな弓と矢を持ち、裸のまま泉からあがると、天狗めがけて矢を射る。

天狗はどうかそれ避ける。しかし、娘はその手を緩めることなく次々と矢を射ってくる。女は巫女なのか、その矢に少し触れただけで火傷した。

これはたまらん。天狗はその場を全速力で逃げ出した。娘の天狗を罵倒する、鬼の様に恐ろしい声が、彼の身体に突き刺さる。

どうかこうにか逃げ切った天狗は、すっかり気落ちしてしまっ
た。

まさか、自分が人間の、裸の小娘に負けるとは。

それ以後、天狗は前に比べると少しは大人しくなったという。

『山男』

桜山には、山男が住んでいる。

背丈は六尺（約180cm）ほどもあり、腕と足は大木のように太い大男。日に焼けたせいかやや茶色がかった髪はぼさぼさであった。

男は山を下りて、村を訪れた。そして自分はあるなど行って、村に住みつく。男は恐ろしい位力持ちであったが、心は優しく、村人達にも好かれていた。

しかし、山男は暫くすると、ある日突然村から姿を消してしまふ。それから数十年後、また山男は村を訪れ、また住み、そしてまた姿を消す。

姿を現したり消えたりを繰り返している。理由は、誰も知らない。今も山男は、時々村にやって来ては、人間として暮らしているらしい。

『縁切り男』

桜村に、若い男女がいた。幼馴染であった二人は、やがて愛し合うようになり、ついに夫婦として結ばれることになった。

婚礼をひかえたある日のこと。女は野草を摘みに山へ行く。

その山の中で女は、この世のものとは思えない、それは美しい男と出会った。

女は、あまりの美しさに見惚れてしまった。男が口を開く。その声もまた、鳥肌が立つ程に透き通った美しい声であった。

女は、男と色々なことを語った。

それからというもの、女は毎日山へ行つては、その男と会い言葉を交わした。そうするうち、女はその男の事を好きになってしまった。そして、今まで愛しいと思っていた幼馴染の男への愛が少しずつ冷めていった。

とうとう、女は、婚礼と取り止める等と言い出し、幼馴染のその男と喧嘩をし、結局別れてしまった。

しかし、それ以後あの美しい男が山に現れることは無くなったという。

『仏像を彫る鼠』

一人の男が居た。男はある日、猫に襲われている小さな子供を見つければ、その子供を助けてやった。

それから数日後、畑仕事から帰ってきた男の家の前に、木を彫つて作られた小さな仏像が一つ、置いてあった。それは素晴らしい出来のものであった。

男は何故こんなものが家にあるのだろう、と首を傾げたが、まあいいやと思つて、その仏像を家の中に飾った。

その仏像を飾つてから、男の周りに良いことが立て続けに起こり男はあつという間に裕福になった。

どうしてそんな急に金持ちになったのだ、と訪ねる村人に、正直者の男は木の仏像のことを話した。

するとそれを聞いた欲張りな村人の一人が、こつそり男の家に忍び寄って、木の仏像を盗んでしまった。木の仏像をとられた男は、また少しづつ貧乏になっていった。

折角の幸運を失ってしまった男は嘆き悲しんだ。

それから数日後の夜のことであった。かりかり、という何かを齧るような音が聞こえ、目を覚ますと、そこには一匹の鼠がいた。

男は、この鼠め、と言ってその鼠を叩き潰してしまった。

瀕死の鼠の傍らには、小さな木の塊があった。よく見ると、それは仏像のようであった。しかも、男の家の前に置かれていたあの仏像にそっくり。

男は仰天した。

「まさか、あの仏像は」

死に掛けの鼠は、かぼそい声でこう言った。

「私が作ったもので御座います。私は、人間に化けて村を駆け回ることが好きでしたが、ある日猫に気づかれ、危うく殺されそうになりました。その時、貴方様が私を助けてくれたのです。私は恩返しをしたいと思い、木を齧って仏像を作り、貴方様の家の前へ置きました。しかし、ある日こつそり貴方様の家の中を覗いたところ、あの仏像が消えていることに気づき、それならもう一度作ろうと思い、ここへやってきたのです」

「そうだったのか。すまなかった、許しておくれ」

そう男が言うと、鼠は満足したのか、息を引き取った。

『引つ張り池』

桜山には引つ張り池と呼ばれる池がある。

その池に入ると、誰かに足を引つ張られ、池の中に引きずり込まれてしまうからだ。

そうなつたら最後、二度と帰っては来られない。

『紙喰い』

書物の管理には気をつけなさい。紙喰い男に、全部食べられてしまつてからでは遅いから。

書物を入れるもの、置く場所には必ず蜜柑や柚の匂いをつけなさい。紙喰いはその匂いを嫌う。

『鴉女房』

一人の男の家を、美しい娘が訪ねてきた。娘は何も言わずに家に入り込んだ。そして、家の中から出ようとせず、何も喋ろうとせず、ただ座っていた。

次の日の朝男が目を覚ますと、女が朝餉を用意していた。

女は家から去る様子が無い。男はそれを不気味に思ったが、あまりに美しい娘なので追い出そうともせず、そのまま家に置いた。そして、気づけば二人は夫婦となっていた。

女は一言も喋ることは無かった。

ある日男は、思い切つて言ってみた。

「どうか、一言でもいいから喋つておくれ」

すると女房は

「阿呆」

と一言言つた。女は鴉に姿をかえ、そのまま家を飛び出し、男の前から姿を消してしまつた。

『招き蝶』

仲の良い娘二人が、川遊びの途中、川に流されてしまつた。

二人の娘は気づくと、見事な花畑の中に居た。そんな二人の前を、真つ黒の蝶が飛んでいった。あまりに美しい蝶であるから、二人は

夢中になつてその蝶を追いかけた。

蝶は、小さな川の向こうへ飛んでいった。一人の娘は、その川を渡つて蝶を追いかけた。もう一人もそれに続こうとしたが、後ろから自分を呼ぶ母の声が聞こえたから、引き返して、声のする所まで戻つていった。

目を覚ますと、心配そうに自分の顔を覗き込んでいた母の姿があった。母は涙を流して喜んだ。

蝶を追いかけた方の娘は、ほんの少し前に息を引き取つたという。

『許すまじ』

一人の男が、友人であつた男を殺してしまつた。男は慌ててその死体を、近くにある桜の木の下に埋めた。

それから時が過ぎ、季節は春になつた。村にある桜の花が一斉に咲き始めた頃、男が友人を埋めた桜の木の下から、妙な声が聞こえるようになった。

まじ、まじ、ゆる、じ、お、した、いちば、ゆう

何を言っているかは分からないが、村人達はそれを気味悪がつた。男は、友人を埋めたところから、そんな声が聞こえるようになって、気が気ではない。

その妙な声は、少しずつはつきりしてくるようになった。

すまじ、すまじ、ゆるす、まじ、おれを、ろした、いちばん、の
ゆう

時が経てば経つ毎に少しずつ、少しずつその声ははつきりとした言葉へと変わつていった。

男は、それが友人の声であることを確信した。そして、彼が自分の罪を明かそうとしていることも。

るすまじ、るすまじ、ゆるすまじ、おれを、ろした、いちばんの、
ゆうじ

このままでは、自分が友人を殺し、木の下に埋めたことがばれて
しまう。

男は慌てて、木の下を掘り返した。

しばらく掘り続けていくと、あの日殺して埋めた友人の骸を見つ
けた。さつさと引きずり出して、誰にも気づかれないう、他の場
所へ埋めなければと思った刹那のことだった。

「許すまじ、許すまじ、許すまじ、俺を殺した、一番の友人！」
軀が声をあげ、男に飛び掛った。

あくる朝、目を見開いて死んでいる男と、その男の首を力強く絞
めている、軀の姿が桜の木の下で発見された。

『ふくけ』

時々、桜山には「ふくけ」と呼ばれる家が現れるという。ふくけ、
とは「福の家」から来た言葉であるらしい。

ふくけに入ると、美しい女（女が入った場合は男）が出迎えてく
れて、それは素晴らしいご馳走を食べさせてくれる。また舞を見せ
てくれたり、面白い話を聞かせてくれるという。

ふくけに入ったものは、そこで一晩過ごす。目を覚ますと、ふく
けは綺麗さっぱり消えている。その後、その人間には福が次々と舞
い込み、一生幸せに暮らせるという。

しかし「ふくけ」は山のどこに現れるかは決まっておらず、いつ
も出てくる場所はばらばらだという。季節も時間も、決まってい
ない。また「ふくけ」を探そうとして山へ入ると、絶対に姿を現さ
ないという。

『つば』

見事なつばを、買った男が居た。

しかし、その日のうちに誤ってそのつばを落として割ってしまった。
た。

すると、つばは姿を消し、狸の死体が現れた。つばはどつやら、
狸が化けたものであったらしい。

番外編：桜村奇譚集1（後書き）

番外編的な感じで。桜村（現・桜町）に伝わる物語を幾つか書いてみました。

本当は文章などを昔風に書ければよかったのですが、残念ながら私にそんな能力はありません。

第十四話：桜の夢と神隠し（1）（前書き）

一人称と三人称が色々入り混じっている為、読みにくい部分もある
と思います。ご了承くださいませ。

第十四話：桜の夢と神隠し（1）

桜の夢と神隠し

夢の中で咲き誇る桜には気をつけよ。風で舞う薄桃色の花びらの仄甘い香りが貴方を夢の中に縛りつけてしまっただろうから。

夢の中の桜の木に近付くな。行きはよいよい帰りは怖い。行った方がいいが帰れない。桜の木が貴方を決して離さない。近付いたら最後、帰れなくなってしまうだろう。

夢の中の桜の木の枝に座っている乙女と話をしてはいけない。彼女の微笑が貴方を凍てつかせ、清水のような声が貴方を現の世界から引き剥がしてしまうから。

乙女の「私と共に在ろう」という言葉に貴方はきつと頷いてしまっただろう。貴方は、乙女の誘いを拒むことはできないだろう。

頷いてしまったら、もう終わり。乙女は貴方を連れ去ってしまうだろう。この世ならざる世界へと、貴方は連れて行かれるだろう。そして貴方は夢から覚めなくなってしまっただろう。そして、やがては現の世界に残った体さえ、消え去ってしまうだろう。

そして、二度と現の世界へ戻ってこられなくなるだろう。

だから、夢の中で咲き誇る桜には気をつけろ。

- 桜町に伝わる物語 -

俺の記憶が間違っていないければ、季節は夏のはずだ。しかも夏の中の夏、つまりは、真夏だ。

夏休みが始まり、俺たち学生にとっては、勉強等の忌々しいもの数々から解放される（まあ宿題とかはあるけれど）至福の時間を、過ごしている。

海水浴、アイスクリーム、スイカに花火……セミの声、くそ暑い外、エアコン、風鈴、水着。そんな単語が連想される季節を俺は生きている。

そんな夏の夜、俺は夢を見ていた。

夢の中に出てきたもの。それは……一本の大きな桜の木だった。

何故、桜。どうして、桜。季節はずれにも程がある。もう桜の季節なんて、とっくに終わっているんですけど。

夢に季節もくそも無いこと位は分かっている。しかし、それでも戸惑いは隠せない。今日のおやつが団子だったからだろうか。団子と言えば花見、花見といえば桜……いや、どういう連想ゲームだよ、それ。そんな下らない連想ゲームの結果が、この桜の木だというのが。

いや、違う。

ああそうだ、思い出した。今日、さくらから夢の中に出てくる桜の木の話をされたんだ。いきなり暇だとか何とか言ってきて、俺を無理矢理引っ張り出して、気がついたら一緒に喫茶店でお茶を飲んでいて。で、確かその時あいつが話したんだよな。聞いてもないのに、また一人、下らない話をぺちやくちやと。

確か、夢に大きくて立派な桜の木が出てきたら気をつけるとかなんとか、そういう話だったよな。夢の中じゃ、流石にそんな細かいことまで思い出せない。

全く、あいつは本当、ああいう夢物語を話している時と、本を読んでいる時だけは楽しそうだなあ。ださい大きな眼鏡の下にある目を、キラキラさせてさ。まったく、夢を見るのは構わないけれど、もう少し現実を見て欲しいものだ。ついでに、俺を巻き込まないで欲しい。いつも俺は、臼井さくらの突拍子もない行動に巻き込まれたり、下らない話に付き合わされたりしていて、うんざりしていたとはいえ、何だかんだいっても幼馴染で長い付き合いだから、冷たく突き放すこともできないのだが。というか、俺が見ていないと、何しでかすか分からない。保護者気分だ、本当。

それはまあ、置いといて。

それにしても、立派な桜の木だなあ。俺は、自分の夢が作り出した産物に、感心した。

どうやら、夜らしく、辺りは真っ暗。空には星が瞬いている。空と桜の木以外は何も無い。木は、ライトアップされているかのよう

に、仄かに光っていた。

多分、ものすごく古い木だ。数年数十年どころの話じゃない。きつと何百、いや何千年も生きているに違いない。黒い幹は太くて、がっしりしている。そこから伸びる無数の枝。そして、淡い桃色の桜の花がびっしりついていて、可愛らしい姿を堂々と見せていた。風も吹いていないのに、はらはらと桜の花びらが落ちていく。

なんて、凄いのだろう。

桜の木は、毎年春になると見飽きる位目になっている。花より団子の俺は、桜を見ても感動することは無い。

そんな俺が、感動しているのだ。夢の中で咲き誇る、その桜の木を見て。桜の木に吸い込まれるように、俺の足は少しずつ前へ進んでいく。もっと間近で、あの桜の木を見たい。足が、とても軽くて、自然に動く。妙な浮遊感に襲われる。それがたまたまなく心地よい。

もっとおいで。もっと近くへ、そう、もっと、もっと……

女の声が、桜の木のある方から聞こえてくる。大人の、少し低い声だ。その声を聞くと、少しずつ何も考えられなくなってくる。ただ、進む。その桜の木を目指して。

夢の中なのに、桜の花の、むせるほど甘い匂いが漂ってくる。頭がどンドンぼうつとしていく。気づかないうちに口は小さく開き、目は光を失っていった。

桜の花びらが、頬をかすめる。とてもくすぐったい。続いて、手を、頭を、肩を、足を優しく撫でる。すべすべして、柔らかい花びら……女性の手の様だ（といってもあまり女の手に触れたことなんてないから、あくまで想像での話だけれど）。

ああ、なんて心地よいのだろう。もっと、触れていてほしい。もっと、もっと……。

気づけば俺は、木の真下に立っていた。花びらが体中を撫でる感覚にうつとりしながら、桜の木を見上げてみた。

一本の木の枝の上に、誰かが座っていた。多分、女だ。黒い髪の毛の、とても綺麗な……。

こんばんは、いらっしやい。お前、名前は何ていうの？

それは、さつき俺を呼んでいた声と一緒にのものだった。女が喋る度、少しずつ甘い香りが強くなっていった。

「一夜。^{かすや}井上一夜」

言えたのは、それだけだった。頭がぼうつとしていて、それ以上のことを話せなかった。名前を告げた瞬間、一瞬苦しくなった。何か細い紐で、身体をぐるぐる巻きにされた感じがした。女が笑う。

途端、もうその苦しみも失せてしまった。

か・ず・や。いい名前ねえ。どついう漢字を書くのかしら
数の一つ二つの一と、夜中の夜だ、と答える。また一瞬苦しくな
って、女の笑い声が聞こえると、苦しみが消える。

そう、一夜。一夜、私と共にあろう……

女が俺に向かって細くしなやかな手を差し出す。その手はとても
遠いところにある。けれど、一回頷けばその手に触れられるかもし
れない。

俺は、気づけば頷いていた。女が笑う。そして、ふわりと枝から
飛び降りて、俺の目の前にとん、と立ち俺の手をぎゅっと握り締め
た。桜の花びらの様にすべすべして、柔らかな手だった。

女が笑う。高らかに声を上げて。桜の花びらが一斉に飛び散って、
俺と女を包み込んだ。

俺の意識は、その瞬間、完全に消えてしまった。いや、桜の木を
見た時点でもう、無かったのかもしれないけれど。それを確かめる
術は、無い。

*

昼食の時間もとくに過ぎ、もう十五時だというのに未だ井上一
夜は起きてこなかった。夏休み中、遅くまでぐうすか寝ていること
は別に珍しいことではない。けれど、昼食の時間を過ぎてても起きて
こないなんてことは、まず無かった。

一夜の母、井上紅葉は不審に思って、一夜の部屋へ行った。鍵は
かかっていない（まあ、かけていないことが殆どだが）。紅葉が戸

を開ける。一夜は、ベッドでまだ眠っていた。いつまで寝ているんだか全く、いい加減起こそうかしら。

紅葉は呆れながら、一夜の身体を揺さぶった。さつさと起こして、店の方に戻らなくては。しかし、どれだけ揺さぶっても、一夜は全く起きない。軽く頭を叩いても、大声で呼んでも、目を覚まさない。まさか、死んでいるってことはないわよねえ？それは無さそうだった。呼吸をする音が聞こえるし、胸も上下している。けれど、一向に目を覚ます様子は無い。

よく見れば、やや顔がいつもより白い様に思える。唇も、心なしか青く見える。

「どうしたんだ、母さん。さつきから大声上げて。兄貴がどうかしたのか？」

開けたドアの前に、一夜の妹である井上紗久羅が立っていた。

「それが、一夜が全然起きないのよ。強く揺さぶっても、大声で叫んでも、びくともしないの」

「はあ？ 何それ」

紗久羅もまた部屋の中に入り、試しに兄を叩いてみる。耳元に口を近づけ、バカ兄貴起きろ、と叫んでみる。しかし、矢張り起きる様子は無い。

その後、二人がかりで色々試してみるが、少しも状況は変わらなかった。

「不味いわね」

「不味いな、これは。……ねえ、これってさ、もしかして」

「もしかして？」

「あれだよ、あれ。ほら、最近この町で起きている……」
答えを告げる前に、紅葉はあつと声をあげた。心当たりが一つあるからだ。

「桜町連続神隠し事件！」

紗久羅が、そうだよそれ！と答える。

まさか、でもありえるわ。症状がニュースで言われていたのと同じで、でもとりあえずお医者様を呼ばなくちゃね。そう言ったら、紅葉はよくお世話になっている医者をお呼びしよ、電話をかけた。紗久羅はベッドの下、あぐらをかいて座り、とりあえず一夜の様子を伺っている。

桜町連続神隠し事件。それは、二週間ほど前からこの町で起きている、奇妙な事件の名前だ。

最初の被害者（？）は、美大生の女性。夏休みが始まるほんの少し前のことだった。一緒の部屋で寝起きしている妹が、姉がまだ寝ていると母親に告げる。母親は首をかしげた。明日は朝早いからね、と言っていたはずなのに。まさか寝坊？母親は、娘を起こしにいった。しかし、娘は眠ったまま、目覚める気配が無い。どれだけ揺り起こしてもびくともしないのだ。これはおかしいと思い、救急車を呼んだ。救急車はすぐに来て、娘を運び病院へと向かおうとした。

ところが、だ。病院へ向かう途中で、娘が一瞬にして密室の救急車から姿を消してしまった。まさしく、煙のように。

娘が寝かされていたはずの場所には、無数の桜の花びらが落ちていた……。

その様な事例が、連続で起きている。眠ったまま起きてこなくなり、やがてその姿を消してしまう。そして、その人が眠っていた場

所には必ず桜の花びらが落ちているのだ。たった二週間で、四件もそんなことがあった。

これは、神隠しかもしれない。そう人々は言いだし、やがてこの事件の名は「桜町連続神隠し事件」となった。

間もなく、医師がやって来た。かず坊が大変なことになっているらしいね、とのん気なことを言いながら医師は家へあがる。そして、すぐさま診察に移ろうと一夜に近づく。

しかし、医師が一夜に触れようとした、まさにその時。

鍵が閉まっているはずの窓が突然開き、そこから強い風が吹いてきた。あまりに強いものであったから、その場に居た者は思わず目を閉じてしまった。

目を閉じている間、紗久羅は春の頃にこの町でする、あのむせて眩暈を起こす程甘い匂いを嗅いだ。

風はすぐおさまり、紗久羅はゆっくりと目を開ける。そして、目の前に広がる光景を見て、あつと声をあげた。紅葉と医師も目を開け、同じように驚嘆の声をあげる。

さっきまでベッドで眠っていたはずの一夜の姿が、無い。

そして、彼がいたその場所には、薄桃色の花びらが……。

*

「一夜が神隠しにあったのは、私のせいだわ」

そう言ったら、はあ？という驚いたような、拍子抜けしたような、そんな声が返ってきた。

ここは私の家の和室。茶色いちゃぶ台の上には、きんきんに冷やしたオレンジジュースが二つ。向かい側に座っている紗久羅ちゃんが、眉をひそめながらジュースを口にする。何を言っているんだ、

そう目が語っていた。

「だから、私のせいなの、そうとしか考えられないわ」

私も、ジュースを飲む。けれど、少しも蜜柑の味がしない。冷たさも、何も、感じない。一夜が『桜町連続神隠し事件』の五人目の被害者になった事を紗久羅ちゃんから告げられた時、私の心臓は止まりそうになった。がーんと、何か鉄の塊で頭を殴られたように、ぐわんぐわんと頭の中が揺れた。

「何で、さくら姉のせいなんだよ。何、さくら姉が隠しちゃったの」

「私に、そんな力はないわ。あつたらいいなとは思うけれど、残念だけど、私は普通の人間ですもの」

首を傾げる。紗久羅ちゃんが、何故か頭を抱えた。「冗談なのに……本気で答えるなよ、と小声で呟いているのが少ししてから聞こえた。

「冗談だったの。全く、気づかなかったわ。」

「とにかく。なあ、さくら姉。何で、自分のせいだって思っているの」

本題に戻る。

「私が、桜の木の話をしてしまったからよ」

「桜の木？」

「そう、桜の木。あの連続神隠し事件の話聞いて、何となく思い出した話があったから、一夜に話したの。桜町に伝わる言い伝えの一つよ、桜村奇譚にも載っているわ」

紗久羅ちゃんはただ目をぱちくりさせるだけだった。

桜村奇譚。それは、数十年前に桜町出身の男性が書いた本の名前。この桜町やその周辺の街には、実に様々な言い伝えが存在している。主に、桜町がまだ桜村と呼ばれていた時のものだ。その数は千個近くになるとも言われていて、両親からその子供へ、子供からその子供へ伝えられてきていた。

全国にあるようなありふれたもの、あまり聞かないようなもの、外国の昔話に似たようなものなど、種類は様々だ。

そんな数多くの言い伝えを、その男の人は丁寧に集めた。お爺ちゃんやお婆ちゃんから聞いたり、残っている書物を読んだりして。長い時間をかけて、集め終わった男性はそれを一つの書物にした。その本は、桜町や隣にある三つ葉市や舞花市等まいはなで売られている。残念、本当に残念なことなのだけれど……あまり売れてはいないらしい。皆、自分の故郷をないがしろにしすぎだわ。もう少しこういうことに関心を持ってもいいのに。面白いのよ、とっても。私の一番好きな本。

その桜村奇譚に載っている物語には、桜に関するものも多い。その中に、今回の神隠しを連想させるような不思議な言い伝えがある。

私は、暇だったから、昨日一夜を連れて、おじいちゃんのやつている喫茶店に行って、そのことを話した。一夜は暑いからなのか、寝ていたのを起こされたせいなのか、機嫌が少し悪そうだったけれど、いつものことだから、少しも気にせず、紅茶とチョコレートパフェを食べながら、お話しする。

ねえ、今回の事件ってきつと桜村奇譚に書かれているお話の一つが関わっていると思うの。桜の花に、神隠し。その二つの単語を連想させるようなお話なのよ。あのね、夢の中で咲き誇る、立派な

桜の木には気をつけなさいって話。

桜の花びらの匂いが、その人を夢に縛りつける。木に決して近づいてはいけない。近づいてしまったが最後、戻れなくなるのよ。少しずつその人の意識は桜の木に奪われていく。

そして、最後に桜の木の枝に座っている女の人と出会う。でも彼女とお話してはいけないの。そうした途端、現実の世界から意識は完全に引き剥がされる。そして、女の人の私と共に在ろう、という言葉に頷いてしまう。

女の人は、その人の魂を、異界へと連れ去ってしまう。そして眠りから覚めなくなつて……やがて現実の世界に置いてきぼりになつた肉体も連れ去られ、消えてしまう……つてお話

自分で話していて、興奮してきた私はテーブルから身を乗り出した。パンケーキを頬張っていた一夜が、ふうん、と返事した。話に聞き入っていたのか、生返事って感じだったけれど。

きつと、これよ、これに違いないわ。皆、夢の中でその乙女と出会つて、この世ならざる世界へと連れ去られてしまったのよ！何て羨ましい……つてそんなこといつたら、被害者のご家族の方々に失礼ね。でも、ああ、そんな素晴らしい夢を見ることが出来たら、私だつたら舞い上がるわ。そして、乙女の言葉にも速攻で「はい」と返事するの！

好きにしる。爺さんや両親を悲しませてもいいつていうんだつたらな

確かに。そうよね、それが問題よね。皆を悲しませるのだけは、駄目よね。それじゃあ、やっぱり「うん」と言うわけにも、夢を見る訳にもいかないわ。ああ、何だかやるせないわ。

ちなみに、一夜は私がいなくなつたら、悲しむ？

そう聞いたら、何故か一夜は飲んでいたコーヒーを思いっきり嘔出した。

知らねえよ、何でそういう話題に！ 別にどうもしねえよ、多分な！

何故顔を赤くしているのかしら。さっぱり分からないわ。私は、首をかしげた。

結局その後一夜はお代を払うと、さっさと帰ってしまった。

その様子を見ていたおじいちゃんが、夏だというのにお熱いね、と言った。やっぱり意味が分からず、私は目をぱちくりさせた。

そんなことが、昨日あったのだ。

印象に残っているものを夢で見る、ということとはよくある話。きつと、その時一夜の頭の中に「大きな桜の木」の映像がインプットされて、それが強烈に残って、大きな桜の木の夢を見てしまったのだ。そして、その桜の木の夢が乙女を引き寄せた……。拳句、神隠しにあってしまった。

つまり、私が桜の木の話を語ってしまったことが、原因なのだ。

そのことを、私は紗久羅ちゃんに話した。桜の木の話は、あまり詳しく言わないようにした。だって、変に話して紗久羅ちゃんまで神隠しにあつたら大変ですもの。

紗久羅ちゃんが、頭を抱えた。きんきんに冷やしたオレンジジュースのせい？それとも具合が悪いのかしら。

「大丈夫、紗久羅ちゃん。どうしたの、具合が悪いの」

「いや、大丈夫……ああ、うん……」

「怒っているの？ 私のせいで、お兄さんがいなくなっちゃったから。怒っているのなら、謝るわ。謝って許されることではないと思うけれど」

「いや、そういふことじゃなくて」

「まずまず元気が無くなってきた感じがした。はあ、と大きなため息を一つ。」

「別にさくら姉のせいじゃないと思うぜ。まあ、今更誰のせいとか何とかいっても仕方ないけれどさ。……念の為、警察の人が周辺を探してくれるってさ。まあ、見分かりっこないとは思っけれど。つたく、とんでもない事件に巻き込まれちゃったよ」
「そう言っつて、紗久羅ちゃんが立ち上がった。どうやら、もう帰るらしい。」

「そう。気をつけて帰ってね。一夜、見つかるといいわね」

「まあな。あんな兄貴でも、一応帰ってきて欲しいとは思っよ」
「紗久羅ちゃんはそう一言行っつて、帰っつていっつてしまった。」

兄貴が消えたのは、あたしのせいだ、多分。

そう紗久羅ちゃんが帰る途中呟いたことを、私は知らない。

*

紗久羅ちゃんが帰った後は、彼女の飲みかけのジュースを片付け、自分の部屋へと戻った。机に、宿題のテキストを出してそれを進めようとする。けれど、少しも進まなかった。

エアコンのかかかっていない部屋の中は、とても蒸し暑くて、頭がずきずきする。太陽の光が、身体に突き刺さって、胃が焼かれて酷く痛む。鉛筆は歪な模様を描くだけで、答えを書く様子が無い。

どうしよう。頭の中は、一夜のことではいっばいだった。

幼馴染が、姿を消した。しかも自分のせいで。紗久羅ちゃんは私のせいではないと思うと言ってくれたけれど、それでも頭の中のものもやしたものも消えてくれない。

行方不明になった人達は、確実に人ではない何か（恐らく桜の夢の女性でしょうね）連れ去られてしまった。普通の人間がやったとは考えられないことが沢山起きただもの、夢物語を信じない人だつて、きつと「あれは人間の仕業ではない」と言つてでしょう。

このまま待つていても、きつと彼も、彼の前に消えてしまった人々も帰つては来ない。祈るだけで、全て解決できる世界なら、誰もが幸せに過ごせる。けれど、現実はそうもいかない。

一夜が戻つてこなかったら、どうしよう。私があんなことお話しなければ、彼が消えることは決して無かつたでしょうに。桜の夢を彼に見せたのは、他でもない、私だ。

商店街にある一夜の家を通りかかる度に、夏休みが終つた学校の教室の空席を見る度に、彼がいなくなつたことを嘆く人達の声を聞く度、きつと私の胸は強く締めつけられるだろう。呼吸も、本を読むことも、空想の世界に思いを馳せることも出来なくなる。

私を責める人は、誰もいない。私だけが、責める。毎日、毎日。こつこつ時、物語では必ずといつていいほど、救いの主が現れる。その人はすごい力を持っていて、普通の人には解決できないようなことも、解決してくれる。

けれど、私のいる世界は、悲しいことに現実なのだ。

どれだけ嘆き、叫び、救いを求めても、何も起きないことが多い。時間は、ただ無常に去つていく。

私が、人間じゃなかったら。すごい力を持った人だったら、一夜も、他の人達も助けてあげられたのに。

結局、宿題は少しも進まなかった。夕飯も私の大好きな炊き込みご飯だったけれど、少しも喉を通らない。お母さんが心配したのか、優しい声をかけてくれた。それが嬉しくて、情けなくて、それ以上心配させたくなかったけれど、それでも少しも箸は進まなかった。

眠ることも出来なかった。身を削るような暑さと、止まらない思考が、私の意識を夢の世界へ連れて行くのを妨げる。

どうか、一夜が消えたという話が、夢でありますように。そんなこと、あるはずもないのに、私はただそれを祈った。

*

少しも眠れず、開けた瞳は重いまま。朝の光は眩しくて、涙が出そうだった。

その後は、読書をしたりTVを見ようとしたけれど、結局どれにも集中できなかった。ただお部屋の中でぼうつとしていただけ。それでも、少しも気持ちは落ち着かなかった。

少しも落ち着かなかったから、私は逃げるように家を飛び出した。家から出て何も変わらないこと位、分かっていたのだけれど。

家の中でずっとぼうつとしていた為か、いつの間にかもう15時になっていた。

夕方に近づいていても、少しも涼しくならない。蝉が、短い生を少しでも楽しもうと、賑やかにお喋りしている。太陽は、刃のように鋭い光を地上へと降り注ぐ。激しく動いている訳でもないのに、汗が止まらない。特に、だぶだぶのズボンを履いている下半身は、すでにじめじめと湿り始めている。

あてもなく、歩く。けれど、気づけば私は弁当屋『やました』つまり、一夜の家のある方へと向かっていた。足が少しずつ重くなっていたけれど、それでも私は進んでいく。そこへ行っても、何一つ良いことなんてないだろうと思っただけだ。

けれど、その考えは、間違っていた。

時代の匂いを感じさせてくれる、ゆったりと時間の流れる場所。それが、桜商店街。皆、古臭いし何も楽しいところのない寂れたところだと言っているけれど、私は、好き。暖かくて、とても優しい場所だからだ。逆に私は、高いビルや人の沢山いる場所の方が苦手だ。息苦しいし、時間がやたらせわしなく流れているような気がするから。

沢山のお店に囲まれている、小さなお弁当屋さん。それが『やました』だ。一夜と紗久羅ちゃんのお婆様である菊野さんとお母様である紅葉さんの作るお弁当は、どれも美味しい。余計な添加物等は少しも使っていないし、素朴で柔らかな味で、身体にとっても優しい。たまに私はここで、お弁当を買ってお昼等に食べる。

朝や昼は菊野お婆様と、紅葉お母様、もしくは他の従業員の誰かが店番をしている。けれど、休みの日や夕方は、紗久羅ちゃんが店番をしていることが多い。

今日もきつと、紗久羅ちゃんが店番をしているのだろう。いえ、そもそも通常通り、お店はやっているのかしら。

「大変だね、お転婆紗久羅姫。愛しいお兄様が行方不明になったんだって？ 皆大騒ぎしているよ」

驚くほど、冷たくて澄んだ声が、聞こえた。それは、大分先の『やました』の前に立っている人の口から発せられたみだりだった。

他の人の話し声も、お客さんを呼ぶお店の人達の声も、聞こえない。ただ、その人だけの声が、耳に入った。別段、大きな声でもないでしょうに、不思議と、はっきり。

私は、足を止めた。

『やました』の前にいる人の姿は、遠くからでもはっきりと見えた。その人の輪郭だけがはっきりしていて、後の人のそれはぼやけて見えない。

あのお店によくやって来ている、男の人。

背筋が凍るほど麗しい、魅惑の人。

紗久羅ちゃんが「出雲」さんと呼んでいる人だ。

あまり外に出ない私よりも真っ白い肌、磨かれた黒曜石の如き黒髪が、腰の方まで真っ直ぐ流れ落ちていく。目は鋭く、氷の様に静かで冷たい。身に纏っているのは、藤色の着物。

人間とは到底思えない雰囲気を感じさせている男の人だ。異形の世界の人とは、きっと彼のような人の事を言うのだろうと、会う度に思っている。

そう、まるで。桜村奇譚の中でも幾度と無く登場する、美しく残酷で、風よりも自由で気まぐれな、化け狐『出雲』のよう。

いつも、思う。あの方は『出雲のよう』ではなく『出雲その人』ではないかと。言い伝えの中で、彼の人は巫女の魂に身体を焼かれて、死んだと言われている。

けれど、もし生きていたら。遙か前に立っているあの方は。もしかして。

そんなことを口にしたら、失礼だと感じていたから、私は今まで紗久羅ちゃんにも、一夜にも話していない。ただ、不思議で、素敵

な方だとしか言っていない。あの方と直接話したことも、無い。話したとしても面と向かって「化け狐の出雲さんみたいです」と言う気は無い。そう言った時の反応が気にならない、といえば嘘になるのだけれど。

あの方と、お話することは、難しい。声を掛けようと近づいても、いつの間にか姿を消してしまふ。瞬き一回する間に、あの方は私の視界から消え失せるのだ。また、不思議なことに、一部の人以上は、あの方を見た覚えが全く無いという。先ほどまで、出雲さんと話していた人も、すぐに彼のことを忘れてしまふ、と紗久羅ちゃんが言っていた。

霞のような人だ、紗久羅ちゃんはこの前のお祭の時そんなことを言っていた。

あんなに存在感がある人が、誰の記憶にも残らないなんておかしい。それこそ、あの方が普通の人間ではない証拠ではないだろうか、と常々思う。

出雲さん。彼は、私の求める「物語の世界の人」「異形の人」であるのだと思う。皆、妖怪や幽霊なんて居ないというけれど、私は信じる。桜村奇譚は、妄想や作り話が集められた夢物語ではない。きつと、あの本に記されているものは、真実であると思っている。細かい事実は少しずつ違ってくるのかもしれないけれど。

そんな事を考えるうち、私の頭の中にある一つのアイディアが浮かんできた。

あの人なら、もしかしたら一夜達を助けることが出来るかもしれない。

それは、あまりに情けなくて馬鹿げた考えだと、思う。救世主を

求めるあまり、何の関係も無い人を、そういう存在に勝手に仕立て上げようとしている。普通の人ではない、と思う。けれども、それと助けてくれるかもしれない、というのは別の話であるはず。

夢を見すぎだと、笑われることはよくある。何故笑われるのか、理解できないのだけれど。けれど、今回に限っては、笑われても少しもおかしくないと思う。

助けて、一夜を助けて。

一度も話したこともないような人に、そんなことを言うなんて。貴方は人間ではないでしょう、だからお願いです、と頼むなんて。そうして、何も関係ない人を辱めるなんて、そんなの愚かな行為以外のなにものでもない。

普通の人ではない、というのが私のただの空想に過ぎず、彼が真実普通の人間だったとしたら。私の言葉は、失礼以外の何物でもない。

幾らなんでも、そんなの。言えない、言っちゃ駄目。

けれど、私の脆弱な心は、一刻も早く彼に対して何か言わねばならない、と悲鳴にも近い声をあげていた。

心臓が、早鐘を打つ。足が、寒くも無いのにがたがたと震えている。彼は私に気づいていない。私が一人勝手に、何かと戦っているだけ。

気づけば、出雲さんは『やました』を離れ、私がいる方とは正反対の方へと歩いていった。家へ帰るのだろうか。

私の足が、再び動き出していた。ゆっくりと、静かに、私は出雲さんの後を追っていた。

*

商店街を抜け、住宅街を抜け、少しずつ家の数が少なくなっている。出雲さんは、どんどん町の中心から離れていって、殆ど家の無い、桜町の北側にある桜山の方向を目指し、一人歩いていた。

私は、それをまるでストーカーのように、つけていた。彼は、私が後を追っていることに気づかず、ゆつくりと静かに歩いていた。上質な絹糸のような髪の毛が、時々風に揺られている。着物の袖から見える手は、細くて、少し力を加えたら、折れてしまいそうだった。着物に、何か香りでもつけているのか、彼が動くたび、甘い匂いがした。

ああ、もう私ったら、本当に何をしているのかしら。引き返すなら、今のうち。これ以上進んだら、もう後戻りできない。けれど、出雲さんのことは気になる。引き返したせいで、後悔するかもしれない。引き返さなかったが為に後悔する可能性の方が高いのかもしれないけれど。

彼から伸びる影は、私のそれと何にも変わらない。影に狐の耳や尻尾がついている、ということはない。ああ、そうだったら素敵だったのに。いいえ、今はそんなことを考えている場合ではないわ。

ざわざわと、ぼつぼつ並ぶ家の庭に植えられているらしい木々がざわついていた。それは、これから起きる何かを予言……或いは、これからとんでもない事が起きるよ、ということを警告しているようだった。

それでも、私は足を止めなかった。木々のざわめきが大きくなっても、日光が私を責めるように突き刺してきても、決して。

どれ位、経っただろう。

出雲さんが、ぴたりと足を止めた。私はびつくりして、すぐに足を止め、無駄だと分かっているながら、近くにあった電信柱の影に隠

れた。

彼は、しばらく立ち止まっていたけれど、また歩き出した。私はほっと息をついて、また歩き出す。

刹那。

彼が、恐ろしいほど早く、さっと後ろを振り返った。えっ、と思つた時にはもう何もかもが遅すぎた。

出雲さんの瞳と、私の瞳がかち合った。途端、私は蜘蛛の巣に囚われたかのように、動けなくなつてしまった。

不思議な位、静かな顔をしていた。私が後をつけていたことなんて百も承知です、と言つことだろう。哀れむように、蔑むように、私をじつと見つめていた。

心臓が、止まりそう。私は、呼吸をちゃんとしているかしら。それすら、分からない。

しばらくして、彼は微笑んだ。上手いこと意地悪できたことを喜ぶ子供のような笑みだった。真っ赤な唇が、妖しく光る。

「どうしたんだい、お嬢さん。私なんてつけたりして。あまりに私が美しいから、見蕩れて思わずついてきてしまったのかい？」

男性にしては高く、女性にしては低い声。それは、私の身体の中を一瞬にして冷やした。手の震えが、汗が止まらない。このまま、逃げてしまおうか。

うっん、それじゃ、駄目。

馬鹿にされてもいい、笑われても、怒られてもいい。

今の私は藁にもすがりたい。この行動が、つかむのは、救いの無い只の藁か、それとも希望の光か。

つばを一回飲み込んで、深呼吸する。出雲さんは、そんな私を見つめながらなお微笑んでいた。

あらかじめ、答えが分かっているかのような顔だった。

もう一度、息を吸って、吐いた。そして。

「お願いします……一夜を……神隠しにあった人達を、助けてください」

思えば、この言葉が全ての始まりだったのだ。

第十五話：桜の夢と神隠し（2）

*
沈黙。彼は、ただ静かに私を見つめている。細い指で、自分の唇を撫でながら。

鳥の、これから起きることを予見するような鳴き声が聞こえる。その鳴き声が妙に不気味に響いた。

出雲さんが、口を開いた。君は馬鹿だねってその瞳は語っていた。

「君、かず坊とお転婆紗久羅姫の、幼馴染だつて子だよ。二人から、少し話は聞いている。臼井さくら、だつたっけ」

「そ、そうです」
声が、震える。

「それで？ 何故私に頼むんだい、そんなことを。かず坊達数名の人間が、神隠しにあつたらしいという話は知っているけれど、心当たりは私には全くないよ。私は探偵でもないし、霊能者でもない」
想像通りの答えが返ってきた。やっぱりそうなるわよね。目の前にいる人は、結局ただの人間。夢見てきた存在ではない。それは当然のことだつてきつと皆言うでしょう。私は、その「当然」という言葉を聞くのがとても嫌いだった。

けれども、私はこのまま引き返そうとは思わなかった。予想通りの言葉を聞いても、それでもまだ希望を捨てたくなかった。それに、彼の醸し出す雰囲気は矢張り、どう考えても普通のものには思えなかった。夢見てきた存在であつて欲しいなどと、勝手なことを思っていた。

「貴方なら、助けてくれる。何となく、そう思ったからです。確証なんて、ちつとも無いけれど」

じつと、見つめる。出雲さんも、こちらをじつと見つめている。いつそ、腹を抱えて笑われた方がほっとするかもしれない。何も言わずに、じつと見つめられると、お腹がきりきり痛む。

「私は、貴方が普通の人間であるとは思えないんです。失礼なこと言いました。けれども、そう思うんです。貴方なら助けてくれるって、そういう感じが、するんです」

「君は、危ない子だね」

突然、そんなことを言われた。危ない。確かに、危ない子ね。こんなことを初対面に限りなく近い人間相手にいきなり言うなんて。訴えられてもおおしくないのかもしれない。

けれど、出雲さんが続けて紡ぎだした言葉は、予想外のものだった。

「踏み入れてはいけない世界に、自ずと飛び込もうとするから」

「え」

「君の性格は、きつと破滅を招く。夢見がちで、自分の住む世界と、違う世界との線引きをきちんとしようとしない。ああ、でも私は好きだよ。そういう子って」

何を言っているのか、よく分からなかった。

出雲さんの表情が、先ほどとはまた違うものになった。楽しいおもちやを見つけて喜ぶ子供の顔だった。そのおもちやを、楽しいお鑑賞するように、私を見ていた。

子供と違ふ点は、その瞳がものすごく艶かしいところ。

「良いだろう。あはは、面白い。可愛らしくて、哀れで愚かなお嬢さん。君が、長い間ずっと望んできた世界を、教えてあげよう。そして、大いに喜び、大いに苦しむが良いよ」

そうして、初めて出雲さんは大声をあげて笑った。学校にいる男の子達の笑う様子とは、全然違う。心底愉快だと思っている部分は同じ。けれど、その声は、体中を氷の炎で焼き尽くすような、熱いと感じる位に冷たくて、恐ろしいものだった。

胸が挟られて、心臓が焼き尽くされるような苦しみ。震える右手で、胸の辺りを掴んだ。

出雲さんが、笑いながら、私に何かを投げて寄越した。キャッチボールが苦手な私は、危うくそれを取り落としそうになったけれど、どうにかキャッチに成功した。

何だか、とても暖かい。夏の、意地悪な暑さとは全然違う。優しい……人肌のような、温もりだった。私は、閉じていた手を、恐る恐る開けてみた。

私の掌にあったのは、一個の鬼灯だった。けれど、普通の鬼灯とは違う。それは、ぼう、と淡く柔らかな光を放っていた。心安らぐ、女神の笑みの如き、光。

何かしら、これは。鬼灯を象ったランプ？いえ、そうではないみたい。本物の鬼灯だわ、これ。作り物ではありえない感触だもの。まあ、素敵、なにかしら。これ、どうということなのかしら。

私の心は躍りだす。すぐにでも、この不思議な鬼灯のことを聞きたい。私は、先ほどまで感じていた緊張も恐怖も、忘れて、顔を上げた。

十七年生きてきた中で、一番驚いた光景が、目の前にあった。

出雲さんの、姿が変わっていた。

恐ろしい怪物になっていたとか、違う生き物になっていたとか、そういうものではない。

黒曜石の髪が、真っ白な朝日を受けて垂れ下がる、藤の花の色に変じていた。近くに行けば、あの花の香りがしそうな位、鮮やかな色。

瞳は、嗚呼、なんて赤いのでしょうか。そこにあるのは薔薇のような情熱ではなくて、血の持つ、静かできて強い生命の輝き。その輝きは、他人の生命まで喰らい尽くしそう。

その瞳が語る。彼が、他人の魂を喰らって輝く、美しく残酷な存在であることを。

人では、ありえない。髪は染めたものとは思えず、瞳の色もコンタクトレンズという偽りの物で出せるようなものではなかった。自然で、驚くほど彼に馴染んでいる。それを見た後は、黒髪で黒い瞳であった、寸前までの彼の姿の方が、不自然であったと思えてくるから、不思議。

なんて綺麗なんでしょう。胸の鼓動が高鳴る。自分の求めてきたものが、今日の前に現れた。そんな、気持ち。

その一方で抱く、叫び声をあげたくなる位の恐怖。

私にそんな思いを抱かせた当の本人である出雲さんは、ただ笑っていた。

「それを持って、桜山神社の前へ来て。その様子も、随分変わっているだろう。鳥居をくぐって、本来社があるところまで上っておいで。けれど、これだけは言っておくよ。いいかい、鳥居をくぐっている間、絶対にそれから手を離してはいけない。握り締めながらおいで。手を離れたら、恐ろしいことになるから。そうになると、私でも助けるのは難しい。まあ、君がどうなっても痛くもかゆくもないのだけれど」

「冗談ではなく、本気でどうでもいいと思っている……らしい。出雲さんは、どこからともなく、桜の花の描かれた金色の扇を取り出した。

「それじゃあ、私は先に行っているよ」

扇を、大きく振った。

強い風が舞って、それと共に何か私を襲う。顔をかばいながら、何がとんでいるのか、目を細めて見た。

桜の、花びら。春に舞い踊る、甘い香りの、天女のような柔らかくて美しい花びら。

溺れそうになる位、多くて。強い香りを嗅ぐと、眩暈がする。足が、ふらつく。

危うく、転びそうになった時、ようやく風が収まって、桜の花ももう来なくなった。

さっきまでいた出雲さんの姿は、もう無かった。

*

私は、頭についた桜の花びらを振り落とすこともしないで、早足で桜山を目指す。

その時の私の頭からは、一夜のことは消えていて、ただ出雲さんの妖艶な姿だけが頭を巡っていた。

人ではない、異形の存在。彼は、そういう存在だった。気のせいなんかじゃなかった、本当に、そうだった。

こんな嬉しいことって無いわ。お爺様の家へ遊びに行く度に聞いていた、桜町に伝わる言い伝えの数々。楽しい物語は、いつしか憧れの物語になって行って、そして私はそれが「夢物語」ではなく、「現実の物語」であることを信じるようになっていった。

妖怪や、精霊、幽霊……そういう、異形達は、実在しているのだと。今は、あまり姿を見せないみたいだけれど、絶対にいるのだと。そう思うようになっていった。

けれど、大抵の人は、そんなものはいるわけないと、言った。小さい頃は、笑われなかったのに、気づけばそのことを口にするたびに笑われるようになった。私は、気にしなかったけれど。何か色々言われたこともあったような気もするけれど、全部忘れてしまった。本やお話で見聞きすることしか出来なかったものと、いつか会ってみたい。お話できたなら、どれだけ幸せでしょうと思っていった。その夢が、今日叶おうとしている。

私は、間違っていないかった。

そんなことを色々考えている間に、桜山まで来た。町の北側にあるその山は、春になると薄い桃色に変わる。

今は、夏だから。濃い緑色。朝や昼は、碧玉の様に深い緑色の輝きを見せる。そして夜には、光を全て食らいつくした闇色になって、静かにそびえている。

胸が苦しい。汗が止まらない。鬼灯を握り締めていた手はじめじめと湿っていた。

けれど、口の中はからからに乾いていて、飲み込む唾も無い。けれど、立ち止まっただけでもしょうがない。私は、桜山神社へと向かう。

神社は、山の麓にある。

何百年も前に作られたその神社は、人間とは思えない位強い力を持った巫女様を祀っている所。その巫女様は、村を襲い己の力を得ようとした、桜村奇譚でも度々出てくる化け狐……出雲を、自分の命を懸けて倒したとされている。村人達は命を懸けて村を守ってくださった巫女様に感謝の意を込めてこの神社を作った。ついでに、巫女様の魂に身を焼かれて死んだ出雲が、死後村を祟ることのない様に、彼のことも祀ったのだという。

桜山で死んだとされる化け狐の出雲。そして、桜山神社に來いと書いた、美しく妖しい方……出雲さん。名前が同じなのは、偶然？それとも。

そのことも、知りたい。あの方が化け狐の出雲だとしたら、それはとても素晴らしいこと。言い伝えが真実であったことになるし、それに私は悪さをしながら時に良いこともしていたという、彼に惹かれていた。どこまでも自由なその存在に。

けれど、彼は死んだことになっている。もしかしたら、言い伝えは真実と少し異なるのかもしれない。

ああ、早く行かなければ。

山の麓にひっそりとある、鳥居をくぐるとそこには石段がある。そこを上れば、小さな社がある。

はずだったのに。

「あらあら、まあまあ」

思わず、声をあげてしまった。こんなことってあるかしら。

私の目の前にあったのは、いつも見るものとは全く違う光景だった。

神社の入り口にある鳥居だけは同じだったけれど、それ以外は、全て変わっていた。

まず、石段の数が増えている。本来は4、50段位だったはず。けれど、今はその2倍、いえ、3倍……ううん。きつと、もつともつとある。果てない空に続くように伸びている。見上げて一番先を見ようとすけれど、見えない。眩暈がする。

更に、細くて小さめの鳥居がずらりと並んでいる。生き物の中に流れる血の様な、鮮やかな生命の色をしている。2段置きに……伏見稲荷の様に、ずらずらと延々に鳥居が並んでいるだけで、そこが異質な世界へと変じたように見える。

その世界を更に異質なものにさせているのは、鳥居の両内側にある、黒くて細い、銅で出来ているらしい、灯籠だった。そこから、青白い灯りがもれている。鬼灯の放っている灯りとは正反対の、冷たく不気味で、不安や恐怖を掻き立てるようなものだった。

そして、石段を包み込む桜の木。季節は夏なのに、緑の葉ではなく、あの春の色をした花が零れ落ちてしまいそうな位に木の枝にっいている。

試しに、一度握り締めていた鬼灯から手を離して、ズボンのポケットの中に入れる。一瞬で、いつも見えてきていた光景に戻る。

また握り締める。またあの異様な光景が目の前に現れる。

数多の鳥居、青い光を放つ灯籠、季節はずれの桜。歪で不自然なものが揃い、その空間だけを、異質なものへと変えた。

そこを通った先にあるのは何かしら。きつと、私が目にしたことのないような世界でしょうね。或いは、死の世界なのかもしれない。

けれど、ここを通れば、私が今までずっと見たかったものが沢山見られるのだろう。

ここで引き返す訳にはいかない。そう、だって引き返してしまえば、物語は昨日から一步も動き出さないもの。知りたいことを知ることも出来ない。そして、一夜達を助けることも、叶わなくなる。

物語に出てくる登場人物は、何があっても、必ず前へ進む。その先にあるものが、幸福や希望とは限らないのだとしても。

私は、一歩ずつ前へ進んでいく。鬼灯はうつかり落としてしまうことのないように、ぎゅっと握り締める。もし離してしまったら、どうなるのか。少し気になるけれど、悪いことが起きてても良いことは起きないようだし。

石段に足をかける。その足に力を入れて、身体を上へあげていく。灯籠の灯りが、私の身体を冷たく撫でる。汗は氷になって、身体を冷やす。握り締めた鬼灯の温もりだけが、私の身体を暖めてくれた。

上つても上つても、まだ続く。息が苦しい、足が痛い。体力の無い私には、拷問以外のなにものでもない時間が続く。鬼灯を握る手はぬるぬるしていて、少しでも油断すると滑って開いてしまいそう。

生命の輝きを象徴する様な鳥居の色と、死を連想させる青い灯笼の灯りが瞳の中に次々と入り込んでいく。

「どこまで、続くのかしら」
そう口にした時。

ぼん、ぼん、ぼん、と小さな音を立てて、何かが石段の上を軽やかに跳ねながら、こちらに向かって落ちていくのが見えた。

真っ赤で、丸いもの。それが私の足に当たって、石段の上で止まった。私は石段を少しだけ下りて、それを左手で持ち上げた。

それは、小さな手毬だった。深緋色、山吹色、若草色、瑠璃色……沢山の色の糸を使って作られた、綺麗なものだった。手毬歌を歌いながら、これを使って遊んだら、どれだけ楽しいかしら。

けれど、何でこんなものが。首をかしげる。

上の方から落ちてきたのよね。もう一度、石段を見上げてみる。

少し上の方に、誰かが立っているのが見えた。私は少しずつまた石段を上って行った。

しばらくして、そこにいるのが小さな女の子であることに気づいた。

真っ赤な着物、上にお団子を一つ作っていて、それを着物と同じ色のリボンで止めている。前髪がとても長くて、顔はよく見えない。蒲公英色の帯が、眩しく見える。

歳は10歳位だと思う。それからもう少し上る。ふと思いついた。私は、彼女を見たことがあった。何度か、商店街に来ているのを。お人形さんみたいで、とっても可愛いと思っていたのだ。

その女の子は、棒の様に立ったまま、少しも動こうとしない。そ

うしていると、ますますお人形さんみたいに見える。

私を、多分彼女は見ている。前髪の間から微かに見える丸い黒真珠の瞳が、私をとらえている。あまり歓迎しているようには、見えなかった。

「……みたい」

「え？」

少し木の枝が揺れただけで消えてしまいそうな、とても小さな声が私の耳に届く。

もう一度、女の子が口を開けた。

「馬鹿みたい。本当に、来るなんて。……馬鹿な人」

それだけ言つて、女の子は私に向かって駆けてきた。そして、ぼうつとしている私の手から手毬を奪つて、くるりと背を向けて、さつさと上へ向かつていった。

「待って！」

慌てて、追いかける。女の子は、私よりずっと早くて、あつという間に消えて行った。

夢中になつて、駆け上がる。

しばらくすると、果てない階段の終わりが見えてきた。一番上にあるのは、他の鳥居とは違う色で、大きなものだった。闇を告げる夕日の様な、色をしていた。

息が苦しい。でも、立ち止まっではいけない。私は、今までで一番速く走つて、一気にその鳥居を抜けた。運動会の時だつて、ここまで頑張りはしなかった。

息を整えながら、前を見る。

社は、無い。その代わり、社よりもずっとずっと大きな洋館が、立っていた。

日はまだ出ているのに、洋館を覆う木々は光を失っていて、随分と黒い。そんな木々とは違って、洋館は灯りがついているわけでもないのに、仄かな光を放っている。暗闇の中、煌々と輝く月のように。木々がこんなに黒いのは、館が全ての光を奪っているからかもしれない。

淡い黄色の、レトロな雰囲気漂う洋館。窓枠や、ドアの周りだけ、太く白い線が入っている。

ここに、出雲さんがいるのね。

低い石段を3段上って、見事な装飾がされている、茶色のドアに手をかける。

ドアの隣にある、呼び鈴が鳴らしてもいないのに、リーンと鳴った。緊張していたから、びっくりしてしまった。

深呼吸して、ドアを開ける。

目に飛び込んできたのは、真紅のカーペット。そしてさっきの女の子。

手毬を持ちながら、じっと立っていた。小さなため息が聞こえる。

「出雲が、待ってる。……ついてきて」

ぼそぼそとしていて、聞き取りづらいくれど、とても可愛い声だわ。鈴を転がした様。女の子は、くるっと背を向けてゆっくりと歩き始める。

館には、幾つもの部屋があるみたい。女の子が向かっているのは二階のようで、玄関の真正面にある階段を上っていく。階段は途中の踊り場で左右に分かれている。女の子は右側を進んだから、私も後に続く。

階段を上り、更に右へと進む。そして、そこから三番目にある部屋の前で、女の子は止まった。他の部屋に比べて、戸が大きい。お花や蝶の装飾のある、金色のプレートがとても綺麗。

女の子が、とんとんとドアをノックする。ドアの向こうから、あの冷たく艶やかな声が聞こえた。出雲さんが、いる。

女の子が、ドアを開けて部屋の中へ入っていく。私もそれに続く。嗚呼、足が石になったみたい。階段を上り続けて疲れたから、ということではない。部屋の中の冷たい空気がそうさせる。

部屋の中は、書斎といった感じだった。真紅のカーペット、向かって右手には本棚がびっしりと並んでいる。正面には年季の入った茶色い木製の机。その上には本や水晶玉が置かれている。そのすぐ後ろに出雲さんがいて、更にその後ろには大きな窓がある。

何の変哲もない、お部屋。けれどここは真正正銘、異界なのだ。私の知らない世界。そして出雲さんの住む「本当の」世界。

出雲さんは頬杖をつきながら、こちらをじっと見つめていた。絹糸の髪がさらさらと、水のように零れ落ちている。赤い瞳はその水に落ちる、毒を含んだ甘い果実。

「よつこそ。遅かったね。……随分と疲れているようだね。たったあれだけの階段で。君、もう少し運動した方がいいんじゃないかい？」

「よく先生にも言われます。私、運動は苦手なんです。跳び箱も5段すら飛べないし、逆上がりもできないし、50メートル走だっていつになっても10秒近くで。だって、運動するよりも読書している方がずっと面白そうなんですもの」

そう答えたら、何故か出雲さんが呆気にとられたような表情を浮かべた。あまりに私が運動音痴だから、呆れているのかしら。

「嫌味でいったつもりだったんだけどね。真面目というか、鈍いというか」

ぼそりと呟く。あら、さっきのは嫌味だったの？全然そう聞こえなかったけれど。

「紗久羅とは大違いだ。彼女は、苛めるとすぐむきになって反抗してくるから。……まあいい。改めて自己紹介をしよう。私の名は出雲。そこにいる愛らしい女の子は、鈴だ」

「白井さくらです。高校2年生、です。あ、あのやっぱり……出雲さんって、あの出雲さんですよ、巫女に殺されたことになっている、あのー！」

気づけば足は自然と前に進んでいて、私は出雲さんに顔を近づけた。出雲さんが何故か視線を逸らした。

「そこら辺はおいおいお話ししようと思ったんだけど。まあ、いいや。ああ、そっだよ。かつてこの山に住んでいた、強くて美しい化け狐の出雲様とは私のことだ」

「まあまあまあ！　なんて素敵なんでしょう！　私の目の前にずっと夢見てきた存在が！　言い伝えでは死んでいたことになっていますけれど、実際は生きていたのですね。あ、本来の姿は狐ってことですよね、一度見てみたいです！　白雪の如き身体、ああきつ

と素敵なんでしょうね。何から聞けばよいのでしょうか!」

ああ、何て素敵。眩暈を起こしそう。恐怖よりも、歓喜の気持ちの方が勝っている。身を乗り出して、出雲さんともっと近づこうとするけれど、何故か出雲さんは身体を後ろに反らせて避ける。私の話を聞いている時の一夜のような表情を浮かべながら。

「と、とりあえず落ち着いてくれ……君はここへ来た本来の目的を忘れたのかい?」

そ、そうだったわ。確か私は一夜達を助けてもらう為にここまで来たのだった。興奮のあまり、そのことを忘れるところだったわ。危ない、危ない。

出雲さんは、小声で何かぶつぶつ呟いていたけれど、何を言っているのかはさっぱり分からない。

「兎に角。そのことについて詳しく聞く前に、このこと等について軽く説明しておいた方がいいかな。鈴、二人分のお茶を持ってきておくれ」

そう出雲さんが言うと、鈴ちゃんがごくんと頷いて、とてとてと歩いて部屋を出て行く。出雲さんはそれを見届けると、ゆっくり立ち上がって部屋の左側にあるテーブルへと向かった。そして、そこにある、茶色の椅子に腰掛けた。

そこへ座れ、というように出雲さんの真向かいに置いてある椅子を指差す。私は、その椅子に座った。

テーブルを挟んだ向こう側に居る出雲さんは、とても美しい。髪の毛の先、指の爪先までが、芸術品のよう。その美しさは、かえって不自然にも見え、世界から浮いているようにも見える。

私は、ポケットの中に入れていた鬼灯を取り出して、テーブルの

上に置き、そのままゆっくりスライドさせて、出雲さんの前へやる。

「これ、有難う御座いました。……とても、素敵で不思議な鬼灯ですね。この鬼灯が、私をここへと導いてくれたんですね」

出雲さんは、それを手にとって弄り始める。

「そう。こういう特殊なものが無ければ、君達はここへ来ること等出来ない。反対に、私達も……特別な手段をとらない限り、そちらの世界へはいけない。二つの世界は、遠くて近い。近くて、遠い。重なり合っているのに、交わりあっているのに。その間には明確な境界が存在していて、その境界は、お互いの世界を拒絶する」

もともと、と出雲さんは続ける。

「昔は、それでも無かったのだけれどね。境界はあやふやで、ぐにやぐにやで。曖昧で、出入り口も隠されていなかった。だから、私達の世界へ迷い込む人間も多かったし、君達世界へ行つて悪さをするなり何なりする我々妖達も沢山居た」

「まあ……でも、何で今は行き来できないんですか？」

「世界は、時が流れと共に変わっていく。君達は我々を、我々の世界を否定し始めた。そして、君達の世界はどんどん発展していった……科学とかいうものは、君達世界を大きく変えていった。我々の世界には存在しないものが、どんどん増えていき、その様子は変わっていく……二つの世界には大きな差が出来てゆく。その差、そして君達の我々を否定する思いが、世界をはっきりと隔てることになった。境界ははっきりし、出入り口は隠される」

出雲さんは鬼灯を手に乗せ、ころころとそれを転がす。

「昔はこんなものが無くても、君達住む世界と、私達の住む世界を

繋ぐ出入り口は見えていた。それに、もつと数もあつたんだよ。…今はその数も大幅に減つて、見ることも出来なくなった。見ることの出来ない入り口に足を踏み入れることは出来ない。だから、これが無ければ桜山神社へ続く階段は、ただの階段で、それを上つてもこつちに来ることはできない。それは、桜山神社へ向かう為の階段だもの。この『通しの鬼灯』は、自力では見られない入り口を見ることが出来る。二つの世界を繋ぐ入り口をね。それを上げれば、その先にあるのは、異界さ」

「そうだったんですか……ああ、残念です、悲しいです、切ないです。何百年も早く産まれていれば、不思議な物を見放題だったなんて！ ああ、もつと早く産まれたかった……！」

心の底から、そう思う。異界との境界がはつきりしていなかった頃が羨ましい。今は、こんなにも遠い世界になつてしまった。すぐ近くにあるのに、それはあまりに遠すぎて触れることができないなんて。

出雲さんが、何故かため息をついた。

「君ねえ……」

「あ、でも昔の生活はとっても苦しくて大変なものだったんですよね。私は根性なしだから、きつと耐えられないでしょうね、昔の暮らしは。ああ、でも妖達と会えるのだったら、その苦しみも乗り越えられるかもしれません！」

自然、心拍数が上がって、目がきらきら輝いてしまう。手を合わせ、自分が妖怪と住んでいるところを想像する。ああ眩暈がする。でも、こんなに嬉しい眩暈なら、何度しても構わない。

「……君、本当に人間なのかい？」

何だか、酷く呆れているらしい。ああ、大きな声をあげすぎちゃ

ったかしら。他人の家で、ちょっとはしたなかつたかしら。
人間なの？その言葉が、私の胸を突き刺す。

「残念ながら、人間なんです。只の、無力で情けない、人間なんです」

私は、また一夜のことを思い浮かべた。その途端、舞い上がっていた気持ちはずんと重くなって、また息苦しくなった。

「そう。君は只の人間だ。愚かで弱くて、ぐちゃぐちゃに壊してあげたくなってしまう。嗚呼、人間って素敵だね。私は好きだ。君達人間という、惨めな生き物がね。さて。そんな君は、私に助けを求めにきた。かず坊を助けて欲しいんだよね」

見下すような、哀れむような瞳。僅かに開いた口、赤い舌。口の前にやった、白い指。金縛りにあった様に、体が動かない。ただその麗しく、また艶やかな姿から目が離せない。

私は、この人相手に、さっきまであれだけ沢山喋っていた。信じられない、どうやって口を開いていたのだろう。さっきまでの自分が、幻の様に思える。

「さて。私はその事件について、詳しいことはあまり知らないのだけれど。……もう少し詳しく聞こうか。君の知っていることを教えておくれ」

そう言われたら、少しだけ体が軽くなって、唇が言葉を紡ぎだす。今の私は、出雲さんの言うことだけを聞く、彼のマリオネットだ。

私は出雲さんに、まずは美大に通う女性が、目を覚まさなくなり、直後忽然と姿を消したこと、そしてその女性が居た場所には桜の花びらが落ちていたことを話した。出雲さんは、美大が何なのかよく分からなかったのか、首を傾げたから、私は簡単に「絵を専門に教わる学校」と説明した。

「それが最初と。それで？」

「次は、24歳の男の人です。そして、16歳の女子高生、9歳の男の子。最後に……一夜が。ごめんなさい、詳しいことまでは知らないんです。ただ、全員に共通していることは、眠ったまま目を覚まさなくなった後、忽然と姿を消してしまったこと……そして、桜の花びらがその人の居た場所に落ちていたこと。それだけなんです。も、もつと詳しいことを知りたいのなら、私、調べます。ですから、お願いです。一夜を、そして他の人達を助けてください」

沈黙。

「成る程ねえ。……さて、どうしようか。言い伝えに詳しい君なら知っているとと思うけれど、私は極悪非道と呼ばれた化け狐。君の願いを、笑って無視することだって平気な男だ。というか、基本的には、無視するね。必死にお願いし続ける君の顔にどんどん絶望が浮かび上がっていくところを見る方が、ずっと楽しい。そして、真実を知っていないながら、全てを見過ごし、かず坊達を見殺しにする」

そう、出雲さんはそういう人だ。

私の知る言い伝えの数々が真実だとすれば、目の前にいる彼は数々の悪事を働いてきた。悪戯程度のものもあるけれど、人に一生の傷跡を（肉体的に、或いは精神的に）残し続けるようなことも多くやり、気まぐれに人を殺すこともしたという。

彼は、正義の味方ではない。人が望む、自分を命を賭けて他人を救う、正義のヒーローとは程遠い存在なのだ。むしろ悪役、敵と呼ばれる存在に近いのかもしれない。

けれども。

「けれど、人を助けることもする、と言い伝えにはあります。迷子を無事に送り届けたり、一人の女性が無くした髪飾りを見つけて返してあげたり、病気をあつという間に治す薬をあげたりした、と」
ここで負けたら、何もかもが終わり。自分が今まで望んでいた異界へ行くことが出来ただけで、物語は何も変わらず、一夜達を取り戻すことは叶わない。

私は正義のヒーローでもない。物語の中心にいる人間とも思っていない。けれども、自分が出来そうなことならやりたい、そう思う。
足が震えて、手が震えて、心も震えて今にも崩れそう。崩れてしまった方が、ずっと楽になれる。……けれども、それはほんのひと時だけで、きつとここで崩れたら、一生後悔し続けることになる。
私は、そう思うのだ。

再び、沈黙。

そして、出雲さんの大きな、ため息。

「はあ、面倒くさいなあ。けれど、まあ仕方ないからやってあげるとしよう。いや、別に君の頼みなんてどうでもいいんだよ。どうせしばらくすれば菊野から頼まれそうだったんだ。……菊野は口には出さないだろうけれど、目で語ってくるね。この私を無言で脅迫できる人間は、彼女位のもんだ。彼女を怒らせると、美味しい稲荷寿司が食べられなくなる。それは、嫌だから。まあ、かず坊以外を助ける義理は全くないのだけれど、やっぱり助けないと菊野がね」

つまり、出雲さんは最初から一夜を助けるつもりだったのだ。……他の人達は微妙なところだったみたいだけれど。私のことなんて、どうでも良かったのだ。

けれど、すごいわ、菊野お婆様。大昔、桜村を恐怖へ陥れ続けたあの化け狐、出雲さんを稲荷寿司一つで操るなんて。とてもお強い方だと思っていたけれど、ここまですごいとは。尊敬しちゃうわ。

やがて、鈴ちゃんがお盆に二つティーカップを載せて部屋の中に入ってきた。カップの中に入っているのは、紅茶のようだ。出雲さんの前に置かれたティーカップの方が沢山入っているような気がするけれど、気のせいかしら。

「まあ、すぐに助けられるわけではないけれどね。未だ、誰がこの事件を起こしたのかよく分かっていないから。……まあ、見当はつくのだけれど。君は、動いても動かなくてもどちらでもいいよ。いてもいなくても、変わらない存在だもの」

出雲さんは、とつても正直な人だ。ティーカップを手にとつて、紅茶をゆっくり飲み始める。私も、それに続いて飲む。私達の世界で飲む紅茶と、全く変わらない味だった。もしかしたら、これも私達世界で買ったものかもしれない。

「けれど、まあ。無駄にあがくことを君が望むなら、勝手におし。何をしても、変わらないけれどね」

「はい。勝手にします。頑張ります。……でも、その鬼灯がないとここには来られないですよね。あの、その……できれば」

もう二度と此処へ来ることができないなんて、そんな寂しいのは嫌だった。折角見つけた世界を、もう手放すなんて、私には出来ない。

未だ知らないことが、沢山あるのに。

「そうほいほい簡単に渡せる訳じゃないんだよね。これって貴重なもんだよ。……しかし君は変わった人間だね、本当に。普通はこん

な世界に自分から来たがる人なんていないよ」

「どうしてですか？」

「話をしていて、こんなに疲れる相手はそうそう居ないよ。はあ…
まあ、仕方ない。君用に一つ、通しの鬼灯を用意するでしょう。」

「…いや、もう一つ用意するのも、悪くないかもしれないな」

何か思いついたのか、出雲さんが口元を歪めて、にやりと笑った。
悪戯好きの子供が浮かべるものに似ていた。

出雲さんは、私に3日後の17時、桜山神社の入り口前で待つように言った。

そして、其れまでこの鬼灯を貸していてあげる、といって手の上でこころ転がしていた鬼灯を、貸してくれた。

「これが無いと、ここから帰ることも出来ないからね。けれど、3日後まで、これを使ってこっちに来ないでくれ。……毎日君の相手をするのは、疲れる」

私って、何故か皆に「話していると疲れる」って言われるのよね。
一夜が、よくそんなことを言ってくる。本当に、何でなのかは知らないけれど。

帰りたくは無かったけれど、仕方ない。駄々をこねていたら、最後に痺れを切らした出雲さんに喰われそうだったから。

私は、あの途方も無い数の階段を下りて、一旦自分の世界へと帰っていった。

第十六話：桜の夢と神隠し（3）

*

その日の夜も、結局よく眠ることができなかった。今日起きたことを考えると、全身がかつと熱くなる。でもその熱さは嫌なものはなくて、むしろとても幸せな熱さだった。

出雲さんから貸してもらった鬼灯を、私はベッドに入り込んだ今も握り締めている。ただ触れているだけで、温かいミルクココアを飲んだ時のように、ほっとする。私がずっと望んでいた世界は、この小さな鬼灯を握り締めるだけで手に入るものだった。

なんて、素晴らしいことなのでしょう。

あの世界を、もっと見てみたい。他にはどんな方達が住んでいるのかしら。ろくろ首やのつぺら坊、天狗……桜村奇譚に出てきた人ならざる者達もいるのかしら。ああ、あそこには私の知らないものが沢山あるのかしら、もっと奥へ、奥へ行きたい。あの世界を、知りたい。異界と呼ばれる世界を……。

色々ずっと考えていたら、朝になっていた。

眠くて仕方が無いのだけれど、今日は学校がある。

学校というか、部活。今は夏休みだけれど、そのうち必ず10日間は部活をしなければいけない、という決まりが私達学校にはある。運動部や、吹奏楽部は10日間以上……正確に言えば夏休みほぼ毎日部活があるけれど。

一夜が居なくなっても、部活はある。桜町連続神隠し事件のことは、あまり大きな騒ぎにしたいくない為か、地方のニュースや新聞でも殆ど取り上げられない。けれど、小さな町で起きた大事件。あつ

という間に噂になって、町中を駆け巡ってしまふ。

だから、きつと一夜が行方不明になったことも、もう噂になっている。そして、一夜が部活を欠席することで、その噂は噂でなく、事実として決定付けられるに違いない。

私のせいだ。

出雲さんが助けてくれる、くれないは関係ない。一夜がいなくなっってしまった原因が私にあるという事実が変わることはない。

勿論、誰もそんなことは知らない。けれど。

また、胃がきりきりとする。兎に角、学校へ行かなければ。

そして、私はやれることをしよう。役に立たなくてもいい、事件のことについてより詳しく調べよう。そうすることで、少しでもこのもやもやした気持ちをこまかさなければいけない。

私は、昨日の甘美な経験を思い出しながら、学校へ行った。そうすると、不思議と気持ちが落ち着く。苦しみや痛みを忘れることができるくらい、とつても素敵な出来事だったのである。

私が通う学校。名前は「東雲高校」という。桜町の南側と隣接している「舞花市まいはな」にその高校はある。

舞花市は、桜町とはまた違った雰囲気の中で、古い木造の家が立ち並び、石畳の道が多くある。昔からある和菓子屋や工芸品を売る店が沢山あって、桜町の北側に隣接している三つ葉市とは違って、静かで落ち着いていた雰囲気の街。

何となく雰囲気が京都っぽい、ということの一部の人には「なんちゃって京都」と呼ばれている。

私は、桜町も好きだけれど、この舞花市のこともとても好きだった。狭い道、路地裏はどこか不思議な別世界へ通じているような感じがする。赤い蛇の目傘、着物に草履がとつても似合いそうな場所。

それらを身にまとって、綺麗な女の人が道を歩いているのを想像するだけで、胸の中が幸せでいっぱいになる。

東雲高校は、自宅から歩いて30分位の所にある。運動が苦手な私だけれど、ゆったりとした風情ある街並みを見ながら歩くことは少しも苦ではない。むしろ、好きだった。ビルが立ち並ぶ、ごみごみとしたところは歩いてあまり面白いと感じないのだけれど、幻想的で素敵な物語が隠されていていそうな所を歩くのは、好き。何時間でも、歩くことが出来る。

夏休みが始まっているけれど、部活がある為か、学校はいつも通りとはいかないまでも、賑やかな声で満ち溢れていた。生命力溢れる、男女の声が音の矢となって次々と私の耳めがけて飛んでくる。

校門をくぐると、前方には二つの大きな校舎が見える。右側にあるのは北校舎。こちらは、クラス教室が集まっている。左側にあるのは南校舎で、こちらは美術室や科学室、視聴覚室等の特別教室がある、比較的新しい校舎。

私は、南校舎に入っていく。この高校は校舎の中も土足で行動する。だから、そのまま入って行って、部室のある二階へ向かう。

私が入ってきたところの正反対にあるもう一つの昇降口は、グラウンドに繋がっている。そこから、野球やサッカー等運動部の人達が部活をしている様子がちらりと見えた。

東雲高校は、文化部が多い。そして、その文化部の部室の大半は、こちらの南校舎にある。囲碁部、料理部、吹奏楽部、放送部、美術部……。

私が所属しているのも、文化部に分類される。

私は、文芸部に所属している。皆、そう言うと「白井さんらしい」「だと思った」と返す。私が文芸部であることを意外に思う人なん

て、今まで一度も見たことが無い。

文芸部は、とっても小さくて、部員も私を含めて5人しかない。廃部すれすれの文芸部は、この高校の部活の中で最も地味で目立たない部類だと言われている。文化部の活動が活発で、有名なこの高校で。

たしかに、あまり目立つた活動はしていないけれど。せいぜい、文化祭の時に部員の作品等を集めた冊子を売るくらいだけ。でも、とても素敵な部活なのよ。誰にも邪魔されずに本が読めるし、好きなだけ本について語れるし。皆でリレー小説を書いたり、三題噺や小説を書いて見せあったり。これ程素晴らしい部活は、他にないと思うわ。

二階の階段を上って、一番右端にある部室へ向かう。元々教材を置いたためのものだったらしい部屋。ドアの上に、もうすっかり黄色くなくなってしまった紙が貼ってあって、そこにはマジックペンで「文芸部」と可愛らしい文字で書かれている。

がらがらから。電車が揺れる時の様な音を出して、戸が開く。

部室は、とても小さい。ドアと垂直に設置してある長方形の木の机と、ドアのすぐ左側の壁にある本棚、古い木の椅子、そしてホワイトボード。あるのは、それだけ。他には、何も無い。

「おはよう御座います」

「おはよう、臼井さん」

窓の前に一人、座っている人。この文芸部の長、美吉佳花先輩だ。みよしよしか静かに垂れる二つのおさげ、優しげな瞳。春のお日様の様な、とても暖かくて優しい先輩だ。美吉先輩は読んでいた本を閉じて、机の上に置いた。

私は、入り口から見て右奥の席に座る。美吉先輩は、そんな私に

優しい笑みを向けた。彼女は、絶対に着物や袴が似合うと思う。顔やさりげない仕草の数々を見るといつも、そう思うし、他の部員の人も、部員以外の人もみんなそう言っている。

彼女のような人を「大和撫子」と呼ぶのだ、と。

「他の人はまだ来ていないんですね」

「いえ、ちょっと前に榎田さんが来たのだけれど。暑いから、何か飲み物を買ってくると言って、出て行ったの」

確かに、よく見れば机の下にバッグが一つ置いてある。

噂をすれば何とやら。ドアが勢いよく開いて、小さなペットボトルを何本か抱いた、榎田さんが入ってきた。

榎田……榎田ほのりさんは、私の同級生。茶色がかった、少しごわごわした髪の毛と頬にあるそばかすが可愛らしい、とても明るい人だ。私が、気兼ねなく話すことのできる数少ない人の内の一人。

榎田さんは、私を見るとにっこり微笑んだ。

「なんだ、サク来ていたんだ。おはよ」

「おはよう、榎田さん」

榎田さんは私の隣にどかっと座った。

「あ、皆の分のジュースも買ってきたよ。緑茶だけど、いいでしょう」

「あら、有難う。とても嬉しいわ」

「お金出さなくちゃ。ええと、サイフは……」

「いいわよ、サク、お金は。あたしのお・ご・り。ふふん、ありが

たく飲みなさいよ」

ウインクしながら、櫛田さんはその冷たいペットボトルを私の頬にぺたつとくつつけた。出雲さんと会った時とは違う、ほっとする冷たさだった。

「そういえばさ、サク。井上一夜、例の事件に巻き込まれたんだって？」

唐突に、その話が出て、私の心臓は口から飛び出そうになった。矢張り、もう話は広がっているのだ。

「え、ええ……そうみたいなの」

「まあ、そうだったの。私は知らなかったわ。とても心配ね」

美吉先輩が心配そうな表情を浮かべる。私は、寒くないのに足が少し震えた。

自分のせいだなんて、口が裂けてもいえない。けれど、言うに言えないから余計苦しい。

「本当、不思議な事件よね。サクからすればとても興味深い事件だと思うけれど。でも、流石に幼馴染が行方不明ともなると、そうも言うていられないか？」

「ええ。うん、流石に」

そんな中、出雲さんと会って。一夜のこと忘れて興奮していたなんて、言えない。

櫛田さんは、ペットボトルの蓋を開けて、ごくりとお茶を一口飲む。

「そう。そうよね。そういえばさ、私の知り合いの一人があ的事件の被害者なのよね」

「え？」

事件について調べようと思っていた矢先に出たその言葉に、私は反応して、櫛田さんの顔を真っ直ぐ見つめた。

櫛田さんが、話を続ける。

「ほら、高校生の女の子が一人行方不明になったじゃん？ あれ、あたしの妹の　妹は中学生なだけけれど　の友人でさ……やつぱり、他の人達みたいに眠り続けちゃって、拳銃の果てに一瞬にして皆の前から姿を消しちゃったの」

そうだったの。全然、知らなかった。でもこれはチャンスだわ。ここで少しでも情報を手に入れておきたい。私は、櫛田さんの手をぎゅっと握り締めた。

「ねえ、詳しい話をもっと聞かせて。彼女が眠りから覚めなくなる前、何か変わったこととかはあった？」

急に手を握られて驚いたのか、櫛田さんが呆気にとられた表情を浮かべる。

「あたしも詳しいことは知らないよ。その数日前、彼氏と別れたこと位しか。もう、振られたのが相当ショックだったらしくてさ。彼氏とのツーショットの写真を握り締めて、それ見ながら大号泣しちやって。しばらくふさぎこんじゃって大変だったみたい……知ってるのはそれくらい」

「そう……」

矢張り、聞いたところで詳しいことは分からないわよね。櫛田さんだって、あくまで妹さんから聞いた程度でしょうし。第一、こんなこと聞かれても、困るわよね。

分からないことは沢山ある。

何故最近になってこの神隠し事件が連続で起きているのか。

一夜以外の人は、何故桜の夢を見たのか。ただの偶然か、それとも桜と関連した何かがあったのだろうか。

私が低い声で唸りながら考えている間に、また戸が開いて部員の一人が入ってきたらしい。私は、そのことにしばらく全く気がつかなかった。

「ぱい？ 臼井先輩？」

後輩が私の名前を呼んでいることに気がついたのは、大分後のことだった。はつとして顔をあげると、手をぶんぶん振っている後輩の姿が目に入った。

御笠環君。みかさたまき 艶々している黒髪は刃物のように鋭い。髪型といえば、ぱつぱつの……一言で言えば、おかつぱ頭。やや太めの眉に大きくて鋭い瞳。

「あ、ああごめんなさい。私ったら、ぼうつとしていたわ」

「まあ、先輩がぼうつとしているのは、いつものことですからね」
肩をすくめ、ふつと息を吐く御笠君。そんな彼のおでこに、さっきまで櫛田さんが手にもっていたはずの消しゴムがものすごい勢いで、ぽんと当たった。

「うわ、何するんですか、櫛田先輩」

「うるさい。全く、後輩の分際でその馬鹿にしたような態度は何ですか」

「別に、馬鹿になんてしてませんよ。もう、櫛田先輩乱暴すぎます」

「愛のムチとお言い。あまりぐちぐち言っていると、お茶やらないわよ」

「ええ、それは嫌だなあ」

御笠君は、困ったように笑いながら椅子に座って、カバンからノートと筆箱を取り出した。櫛田さんはペットボトルを、御笠君の手が届くくらいのところまで滑らせた。

「暑いですね。でも、最近桜がどうこう言っている事件が多いせいかな。何だか今いち『ああ、夏だ』って気分にならないですよね」
またまた、唐突にその事件の話が出てきて、私はまたどきっとした。

「あ、その事件で思い出したんですけど。実は、被害者のうちの一人って僕の近所に住んでいる人なんですよ。昔、よく遊んでもらったんですよ」

「え、あなたもあの事件の被害者に知り合いがいたの？」

櫛田さんが目を丸くした。御笠君は、首をかしげながら、はあそうですが、と答える。まさか、御笠君も被害者の方と知り合いだったなんて。世界は狭いわ。まあ、事件が起きているのが桜町限定だから、知り合いが被害者になっていてもおかしくはないかもしれないけれど。でも、やっぱりこんな偶然ってあるかしら。

「ほら、24歳の男の人がいましたよね？ あの人が僕の知り合いなんです。大学卒業したはいいけれど、就職先が決まらなくて。しばらくは別の町でアルバイトをしていたらしいんですけど、最近桜町に帰ってきたんです。それで、その数ヶ月後に、知り合いに仕事を紹介されて、面接にも受かって。ところが、仕事初日になっても

彼が姿を現さなかったのだそうです。真面目な人でしたから、さばるはずがない、何があったのだろうと思っ、その仕事を紹介したという知り合いと家族が心配になって彼の住んでいるアパートまで行った。そして、家族が彼から貰っていた合鍵を使ってドアを開けたら……彼が、眠っていたらしいです。それで、家族と知り合いが一生懸命起こそうとしたんですけど、どうしても起きなくて。これはいよいよおかしいぞってことで、救急車を呼ぼうとした矢先に彼が忽然と姿を消してしまっただけなんです

「それで、彼のいた場所には……」

「桜の花びらがあったそうです」

私の問いかけに答えた御笠君は、深いため息をついた。ずっと話を聞いていただけだった、美吉先輩がまた心配そうな表情を浮かべた。

「桜夢さくらゆめ、ね」

「え？」

聞きなれない言葉を呟く美吉先輩の表情は、とても悲しげで、深刻そう。いつも優しく笑っている先輩のものとは全く違うものだった。

「ううん、なんでもないの。ちょっと、独り言。さあ、そういうことは警察の方達に任せておいて、私達は部活をしましょう。まだ、深沢さんが来ていないけれど」

「ひいちゃんは、多分また遅刻でしょう。数分後には、きっとどたどた駆けてきて、ドア勢いよく開けて、それでもって派手にこげちやうんでしょ」

櫛田さんの言葉は、もの見事に的中することになる。

ひとまず桜町連続神隠し事件のことは置いて、各々秋の文化祭の時に出す部誌に載せる小説のアイデアを練っているときのこと。

ガラガラガラつとまるで夏に落ちる稲妻のような音を立てて、開けられたドアと共に、ひいちゃん……こと深沢陽菜ふかさわひなさんが、部屋の中に雪崩込むように入ってきた。その時、バランスを崩したのか、前のめりになって。そのまま、ものすごく大きな音を立てて、彼女は倒れた。

あらあら、痛そう。というか、大丈夫かしら？私は立ち上がって慌てて駆け寄った。深沢さんは体を起こし、鼻の辺りをさすっている。綿菓子のようにふわふわした長い髪の毛が揺れる。中学生……いえ、小学生にも間違えられそうな位幼く愛らしい顔を思いつき歪めている。

彼女もまた、御笠君と同じ高校一年生。

「いたたたた、です。今日こそは転ばないように頑張ったんですけど、駄目でした」

にこり、と笑う深沢さん。ふんわりした笑顔は、とても可愛い。彼女が皆から「ひよこちゃん」と呼ばれている理由がよく分かるわ。

「やっぱり、ドジなひよこちゃんがダッシュするのは、自殺行為ね。全く、そこまで派手にすっころべる子もなかなかいないわよ」

「はい、です。ああ、でも今日はいつも以上に派手に転んじゃいました」

深沢さんは、えへへと笑いながら御笠君の隣に座る。本当にお前は危なっかしい奴だなあ、と御笠君が呟いた。

深沢さんは、カバンを開いた。そして筆箱とノートを取り出す。けれど、その後「あ」と小さな声をあげた。

「どうしたの、深沢さん」

私が問うと、彼女は困ったように笑いながら、頬をかく。

「カバンに間違えて、パンツを入れてしまったのです」

「はあ？」

御笠君が、手に持っていたシャープペンシルをぼろりと落とし、口をぽかんと開けた。想像もしなかったような発言に、驚いたらしい。

私もカバンに、変なものをに入れてしまったことはよくあるのだけれど。流石に、パンツはないわ。水泳帽を入れたことはあったけれど（しかもプールの授業とは無縁の、冬に）

「パンツって、何をどうすればそんなものが入るわけ？」

「さあ、何ででしょう？ でも、この無数の赤いイチゴ柄は間違いなく私の持つパンツの模様です」

「詳しく言わなくてもいいよ！」

隣に座っていた御笠君の顔は、ものすごく気まずそう。必死になつてカバンから目を逸らそうとしている。ふふ、なんだかとっても可愛いわね。

「流石ね、ひいちゃん。あんたの大ボケ伝説がまた一つ出来たわ」

「増えちゃいましたね。あ、そういえば。部室に向っている時、すれちがった方達が話していたんですけれど、井上先輩と言う方が、

例の事件の被害者になっちゃったらしいですね」

一旦閉じた話の蓋が、彼女の一言でまた開いてしまった。
何でしょう、今日の部活はドキドキしてばかりだね。

「その位、あたしも知っているわよ。大体、サクの幼馴染だしね、井上君って」

「まあ、そうだったんですか。そういえば臼井先輩、よく一緒に帰ってらっしゃる方がいらつしゃいますが、あの方が井上先輩？」
そう、と櫛田さんが頷く。

「幼馴染だったんですね。てっきり、恋人だと思っていました」
あらあら、まあまあ。

私と一夜が恋人同士なんて。そんなこと言われたら、きつと一夜、顔を真っ赤にして怒りだすでしょうね。そして何故かその怒りは、言った本人ではなく、私に向けられるのでしょうか。

確かに一緒にお茶を飲んだり、桜山で家族ぐるみでお花見をしたりするけれど。小さい頃は一緒にお風呂に入ったり、眠ったりしたらしいけれど。でも、恋人ではない、わね。特にそういう感情を抱いたこともないし。

「私と一夜はただの幼馴染よ。それに私の好みは、着物の似合う、物静かで温和で、少し儂げな雰囲気の漂う、中性的な感じの方ですもの」

ただその姿を思い描くだけで、幸せになれる。

一夜と出雲さん、どちらが好みと聞かれたら、間違いない出雲さんと答えるわ。まあ、あの方は色々別格な雰囲気です、近寄りがたい

ところもあるけれど……。赤い和傘と着物が似合う方って本当素敵だわ。桜の花や菖蒲、桔梗や藤の花と組み合わせれば、まさにそれは最強、うん。

けれど、やっぱり一夜がないと寂しいわ。急に彼のことを思い出して、私の胸がきりりと痛んだ。無事かしら、一夜。一夜だけじゃないわ。他の人達だって。家族の方や友達、皆心配で、不安で、胸がいっぱいでしょうね。

「ああ、そういう方も魅力的ですね。あ、そういえば私の知り合いの男の子も、あの事件の被害者なんです」

「え」

「あんたも!？」

榎田さんが驚きの声をあげる。美吉先輩以外の4人が、あの事件の被害者と知り合いだったなんて。

「はい、9歳の男の子と。彼のお母さんと私のお母さんが友達同士で。友達と遊ぶ約束をしていたはずなのに、全く起きる様子がなくて。どうしたのだろう、と心配している間に、消えてしまったそうです。一瞬の間に。とっても可愛い男の子だったんですよ。……最近は、元気が無かったですけれど。飼っていた犬が死んじゃって、泣きながら家の庭に植えてある木にその亡骸を埋めて。あの時の彼の顔は今でも忘れられません。ああ、一体どこにいつてしまったのでしょうか」

心の底からその男の子のことを心配しているらしい。彼女の浮かべる表情がそう言っている。

結局「不思議なこともあるもんだね」という結論に至り、その話

はまた終わりを告げた。それ以上の情報は、得る事は出来なかった。

*

次の日。今日は部活は無い。家の中で読書でもしようかと思つて、本を開ける。けれど、一夜や事件のこと、出雲さんのことなどが頭から離れなくて少しも集中できない。こんなこと、今まで無かった。私が、本の世界に入り込めないなんて。

少し気分転換でもしようかしら。

私は、おじいちゃんがやっている喫茶店に遊びに行くことにした。

『桜〱SAKURA〱』は桜町の外れ、桜山にやや近い場所にある。古くからある民家がぼつんぼつんとある、静かで小さな通りに、レトロな雰囲気漂う喫茶店で、ドアを開けると、とても香ばしいコーヒーの匂い。

そして、流れるのは静かで心が落ち着く音楽。微かに厨房から聞こえるかちゃ、かちゃ、というカップ等を置く音もまた心地良い。

従業員も、お客さんもそんなに多い訳ではないけれど、割合町の人達に愛されているお店なの。

茶色のドアを開けると、ちりんちりん、と鈴が鳴る。

今日は、何を食べようかしら。そうそう、おじいちゃんとも色々お話がしたいわ、そんなことを考えていた。

そしたら。

お店の、テーブルの並ぶ方から誰かの泣く声が聞こえてきて、私は仰天した。相当辛いことでもあったのか、その声は「悲痛」としかいいようのないものだった。

どうしたのかしら。

私は、気になって声のする方へ近づく。見れば、入り口から入っ

て一番手前側、正面から見て左にあるテーブルに、一人の若い男の人が座っていて、顔を手で覆いながら、わんわん泣いていた。

その男性の座っている反対側に、見慣れた人が座っていて、そんな彼をなだめている様子。なだめていた方の人が、こちらに気がついて顔を向けた。

茶色のぼさぼさした髪の毛を束ねた、タレ目のおじさ……お兄さん。

この喫茶店で働いている、弥助さんだ。

「おや、さくらじゃないっすか、こんにちは」

「こんにちはは、弥助さん。……あの、どうかなさったんですか？」

泣いていた男性は、私が現れたことで少しだけ泣くのをやめた。顔を覆っていた手を少しだけ下げる。真っ赤な瞳と、くま、そして涙がうつすらと見える。

弥助さんが、小さくため息をついた。

「いやあ、ちょっと、ね。……ああ、話しても大丈夫っすか？」

私と男性を交互に見る。男性は胸が痛くなる位苦しげな声で「構いません」と一言。

弥助さんは、少し気まずそうにしながら、席を詰めて、私に隣に座るように言った。

素直にそれに従って、座る。男性のいる辺りのテーブルの上は、涙で濡れていた。

「いや、ほら、さくらも知っているだろう。桜町連続神隠し事件のことは」

また、その話が。ずきり、と胸が痛む。

「え、あ、はい……知って、ます」

「まあ、こういう事件をさくらが知らないわけはないっすよね、うん。それで、目の前にいる彼……孝一さんって言うんですけど。彼の恋人が、あの事件の最初の被害者なんですよ」

ああ、と思わず声が出る。

美大生の女性の。……成る程、彼女が不可解な事件に巻き込まれてしまって、落ち込んでしまっているのね。涙が出て、感情が溢れて、どうしようもなくなる位、彼女のことを思ってるのね。

私も、一夜が消えてしまって、とても苦しいわ。自分のせい、なのだけれど。

「あいつ……夕菜^{ゆいな}、夏休み明けにある展覧会に向けて、一生懸命、絵を、描いていたのに。完成したら、俺に真っ先に見せてくれるって、言ったんだ。俺、すごく楽しみに、たの、楽しみにしていたのに、それなのに、い、いなくなっちゃうなんて」

孝一さんは、泣きじゃくりながら、思いを吐き出すように話す。途中で言葉を詰まらせる。鼻水をすする音さえ、酷く悲しげに聞こえる。

「絵、ですか。そ、その、どんな、絵を……描いて？」

どう声をかけていいのか分からず、唾を飲み込んだ後紡いだのは、本題とは全く関係の無い問いかけだった。

関係ない問いかけ、のはずだった。

孝一さんがゆっくり顔をあげ、静かに、小さく、それでいてはつきりと、答えた。

「桜の絵、です」

声を、失った。

桜の……桜の絵、ですって？それを聞いた瞬間、世界から音も時間も色も消えてしまった。頭の中が、真っ白になって。心臓すら、一瞬だけその鼓動を止めた。

孝一さんは、俯きながら、かぼそい声で話を続ける。

「何でも、展覧会のテーマが『忘れられない風景』だったとか、で数年前に見た、ものすごく美しい桜の木のこと、忘れ、わす、忘れられないって」

「桜……」

「はい。ただ、白昼夢だったかもしれないっていうんです。ぼうつとしながら桜山の中を歩いている時に見た、とかで。はっと気がついた時には、もう目の前にその桜の木はなかったって。何回も足を運んだけれど、確かにその辺りにあったはずのそれを見ることは、二度となかったって。まるで、御伽噺のようでしょ、とか笑って、言っていました」

忘れることが出来ない位、綺麗な桜の木。

本当にあつたかどうか分からない、木。

そんな夢の様な風景を、数年後夕菜さんは思い出しながら、描いた。

そして、桜の花びらと共に、消えた。

偶然なの？その絵を描いたことと、消えてしまったということとは、無関係？

そんなことはない、と思う。

一夜が私の話を聞いて、その夢を見たように。

彼女もまた、不思議な桜の木のことを思い出し、毎日のようにその風景を頭の中で強くはつきりと思い描き、キャンパスに描き続けた結果……桜の木に呼ばれ、そのまま引き込まれていつてしまったのだ。

弥助さんが、さつきから何も喋っていない。

ちらりと、見てみると、弥助さんは普段あまり見せることのない、酷く深刻そうな表情を浮かべ、口元に手をやりながら、何か考えているようだった。

「あいつ、とんでもないものを、数年前に見ていたんじゃないでしょうか。あいつが見た桜の木は、化け物だったんじゃないかって。何かにとり憑かれた様に、毎日夢中になって、あの絵を描いていてそんな強い思いがその化け物を引き寄せて、しまいにその化け物に連れて行かれたんじゃないかって、思うんです。馬鹿馬鹿しいってことは、分かっています。でも、そうとしか考えられない。そうじゃなくちゃ、説明できないじゃないですか。人間が、眠ったまま起きない上に、一瞬でその姿を消してしまうなんて」

徐々に孝一さんの声は大きくなり、荒々しくなっていく。涙をその目に浮かべながら、だん、と強くテーブルを叩いた。

その後、顔を突っ伏しながら、何度も何度も小さくテーブルを、叩き続ける。

本当に、夕菜さんのことを大切に思っているのだ。けれど、どれだけ強く思っても、彼にはこの事態をどうすることも出来ない。人為的なものだとしても、十分それは脅威だし、人間一人の力で解決するのは難しい。ましてやそれが、この世界の常識では説明できないようなものなら、なおさらだ。原因も理由も、手がかりも、何も

ない上に解決策も無い。人間が何人集まっても、どうすることもできない。

それは、きつととてももどかしいことだ。涙を流すことしか、待つことしか、出来ないなんて。情けなくて、腹立たしくて。

きつと、戻ってきますよ。夕菜さんは、無事ですすよ。

そう言えたら、どれだけ良いことか。けれど、今この場でそんなことを言っても、気休めにもならない。そんな保証もないのに、よくそんなことを言えるな、と返されるか、なんて能天気な人間なんだと呆れられるだろう。

出雲さんが助けてくれる。

出雲さんっていうのは、化け狐なんです。人間ではない、すごい力を持った人なんです。

そう言えたら、いいけれど。けれど、信じてくれないだろう。例え「化け物に連れて行かれたんだ」と言っている人でも。だって、そんなことは言っても結局心の中ではそんな存在いないんだっと思っていてしょうから。常識では説明できないことは納得している。けれど、決して「人間ではない異形の者」を信じている訳ではない。イコールで結べるように、結べない。

ああ、情けない。私に力があれば、すぐにでも解決するのに。そして、彼の不安も苦しみもぬぐってあげられるのに。

何で人間に生まれたのかしら。

「安心しろ、夕菜さんはきつと無事に戻ってくる。そう言えたら良いんですけれどね。あっしもそこまで無責任なことは言えない。心

苦しいが、本当、今はいるんだかないんだかよく分からない神様に祈るしかないっすよね。なんだかなあ、無力っすよね。あつしも、あんたも。……科学や技術、文化がどれだけ進んでも、結局人間は人間、だよなあ」

空を仰ぎながら、ぽつりと弥助さんが呟いた。

どれほど、色々なことが進もうと、人間は人間。

変わっているようで、結局変わっていないで。強くなっているようで、何にも強くなっていない。

むなしい。なんだか、とつても。

*

結局その後は誰も喋らず、おじいちゃんが出してくれたコーヒー（私はカフェオレ）を飲んで、話は終わった。

弥助さんは仕事に戻り、孝一さんは弥助さん（と、あとは一応私）に思いをぶちまけてほんの少しだけ気分が楽になったのか、涙をぬぐい、ふらふらしながらも帰っていった。私も、結局おじいちゃんと殆ど話すことはなく、家へと帰った。

気分転換のつもりで出かけたのに、気分は軽くなるどころか、ますます重くなってしまった。

あと少しで、約束の日になる。昨日と今日知った事実の数々を出雲さんに話せば、少しは楽になるかしら。

（そもそも、出雲さんは本当に素直に、皆を助けてくれるのかしら……）

最強最悪、超がつくほどの気まぐれ化け狐さんが、果たして本当

にすんなりと、皆を助けてくれるのか、少し、心配。
急に「やっぱりやめた」とか、言い出さないかしら。

言いそうだな。

そう思ったら、急に頭が痛くなった。ため息と共に吐き出される
負の思いは、ますます重みを増していった。

*

そして、うだうだやっているうちに、あっという間に約束の日はや
つてきた。その日も部活があつたけれど、その間何を話したのか、
何を昼食として食べたのか、何回櫛田さんに頭を叩かれたのか、何
を書いていたのか、少しも思い出せない。ただ、ものすごく美吉先
輩が心配してくれたことだけ、何となく覚えていた。

部活から帰り、制服を脱いで、橙色のシャツと、ジーンズを履い
て丁度よい時間になるまで、宿題のテキストを開く。けれど、やつ
ぱり少しも進まない。簡単な漢字すら思い浮かばないほど、私の頭
はいっぱいいっぱいになっていた。

早く解決して欲しい、早く出雲さんに会いたい、あの世界にもう
一度行きたい、一夜の顔が見たい、夕菜さんと孝一さんの笑顔を見
たい。

色々な思いが頭のなかを、ぐるぐる。

ぐるぐるぐるぐるしながら、私は程よい時間に家を出て、桜山を
目指す。あまりぐるぐるしていたものだから、危うく鬼灯を持って
いくのを忘れそうになっていた。

住宅街を抜け、辺りは少しずつ静かに寂しくなっていく。かあ、
かあと鳴く鳥と一緒に、山へ向う。山としては小さいけれど、人間

と比べれば大きなものよね、どんな山も。静かに、動じることなくそびえる山。油断していると、飲み込まれてしまいそうだ。

田んぼに囲まれた、でこぼこの道を、歩く。少し急いでいたから、何度もつまずきそうになってしまった。

気がついたら、もう私は桜山神社の鳥居の前にいた。出雲さんは鳥居の下で、静かに立っていた。髪の毛は、黒ではない。山の緑に、藤色の髪はよく似合う。

けれど、そこに居たのは、出雲さんだけではなかった。その隣に、一人ぽつんと誰かが立っている。

人間だ。しかも、私がよく知っている子。出雲さんが見えていないという訳ではなさそうだ。出雲さんと何かお話しているもの。でも、何で、藤色の髪の出雲さんと、普通にお話を……。

彼女が、私に気づいたようだ。

黒いポニーテールがびよん、と揺れた。同時に聞こえる「あっ」という声。

どうして？

どうして、ここに、ここに……。

「さくら姉！？ 何で、何でさくら姉が!？」

「さ、紗久羅……ちゃん？」

紗久羅ちゃんがいるの……？

第十七話：桜の夢と神隠し（4）

紗久羅ちゃんも、私も、あんまり驚いたものだから、しばらく何も言えず、ただお互いの顔を見つめることしか出来なかった。出雲さんだけが、一人意地の悪そうな笑みを浮かべている。

紗久羅ちゃんは、やがて出雲さんを睨みつけると、私を指差しながら大声で叫んだ。

「おい、馬鹿狐！ どういうことだよ、これは！」

「どういうことって、こういうことだよ。さくらもまた、私によって『あの』世界に導かれた、という訳さ。君と、同じようにね」

紗久羅ちゃんは、口を開けっ放しにしながら呆然と立ち尽くす。

私「も」ということは、紗久羅ちゃんも……あの異界のことを、出雲さんの正体が化け狐であることを知っている……ということかしら。まあまあ、驚いたわ。今まで、そんな様子少しも見せなかったのに。もう、ずるいわ紗久羅ちゃんったら。知っていたのだったら、私に教えてくれれば良かったのに。私がそういうことが好きだったことも、そういうところがあつたら行きたいって言っていたことも知っていたはずなのに。って、そんな風に人を責めちゃいけないわよね。反省、反省。

正体を知っているってことか！？」

「そうだよ。やっと分かったかい、全く物分りが悪いねえ。まあ、そういうところもまた、可愛いのだけれど」

そう言って笑う出雲さん。「毒」というものを擬人化したとしたら、こんな風な顔をしているのだろっな、と思ってしまう位毒々しく、黒い笑みだった。

紗久羅ちゃんは、そんな出雲さんの足を、強かに蹴飛ばした。まあまあ、あの天下の化け狐に蹴りをいれるなんて。すごいわ、紗久羅ちゃん。流石菊野お婆様のお孫さん。私には絶対出来ないわ。というか私は、普通の人間を蹴飛ばすこともできないのだけれど。

「痛いなあ、もう何だつて君はそう凶暴なんだい。まあ、そんなことはどうでもいいや。仕返しは後でじっくりねっとりしてあげるから。とりあえず、ここを上ろう。さ、二人に通しの鬼灯をあげる。ここに来るときは、それを持ってくればいい。まあ、あまり頻繁に来られても困るのだけれどね」

色々叫んでいる紗久羅ちゃんを無視して、出雲さんはさっさと階段を上り始めた。紗久羅ちゃんは「こら待ちやがれ」とか色々言いながら、後を追いかける。

ああ、私も行かなくちゃ。

柔らかな温もりが、幻想の世界への扉を開ける。三日前に見たのと全く同じ光景が目の前に広がった。背筋が凍る程美しい。

先へ進む出雲さんは、ただ前だけを見つめている。私達なんて、居ないかのように振舞っている。紗久羅ちゃんは、時々振り返って、ちらちらと私の顔を、何だか少し気まずそうな表情を浮かべながら見た。

鳥居と階段を囲む、桜の木々。ほの甘い香りは、麻薬の様に人の頭をぼうつとさせる。この香りと、優しげで美しくどこか妖しい花びら、それを統べる人「人ならざる者」が、一夜達を次々とさらっていったのだろう。

ああ、桜の花びらの匂いを嗅いでいると、何だか体がふわふわす

る。階段を上る苦しみすら、忘れてしまいそうになる。この香りに体を預ければ、恐ろしい数の階段も難なく上れる気がした。

気づけば、最後の階段に足をかけていた。威厳とか貫禄、ずっしりした重みのある『異界』への入り口の鳥居を、超える。

出雲さんと紗久羅ちゃんが、足の鈍い私を待っていた。はあはあと、荒く息を吐きながら、二人の下へ駆けていく。まもなく、館の扉が開いた。

「おかえり、出雲」

「ただいま、鈴。悪いけれど、三人分のお茶を持ってきておくれ」

「分かった」

鈴ちゃんは、出雲さんの背後に立つ私達をちらっとだけ見て、くるつと後ろを向いて向こうへと駆けていった。私達は、そのまま例の部屋へ向う。

紗久羅ちゃんは、この館に入るのは初めてなのか、やたらきよるきよる辺りを見回している。

「出雲の癖に、随分と立派なところに住んでいるんだな」

「私にぴったりの、とても素晴らしい所だろう。庶民の紗久羅達にはお城の様に見えるだろう」

「庶民っていうな！」

「でも、確かに私も紗久羅ちゃんもごくごく普通の一般人よね。特別お金持ちでもないし、庶民であっていると思うわ」

「そういう問題じゃないと思うんだけど……はあ、流石さくら姉」
あら、そんな頭を抱えちゃって。暑さで眩暈でもしたのかしら。
出雲さんは、そんなやり取りも気にせず扉を開けてさっさと部屋
の中に入っていく。私達も、続けて入っていった。

*

部屋から見て左にあるテーブル。ドア側の椅子に私と紗久羅ちゃん。反対側に出雲さんが座る形になった。間もなく、鈴ちゃんがやってきて、私達に緑茶と水羊羹を出してくれた。気のせいか、出雲さんの前に置かれた羊羹は私達の前に置かれたそれより大きい気がする。……まあ、隣の芝生は青いつてやつでしょうけれど。

「で、出雲。どういう経緯でさくら姉を、この変てこ世界へ引つ張り込んだんだ」

「変てこ世界なんて。ここはとっても素晴らしい世界よ」

「さくら姉、ちょっと黙ってもらえるかなあ？」

暑さのせいか、やたら紗久羅ちゃんはピリピリしている様子。あまり話の腰を折ってもしょうがないので、とりあえず黙っておくことにしましょう。

出雲さんはその間、水羊羹を美味しそうに頬張っていた。お茶をすすり、ほっと一息。紗久羅ちゃんがテーブルを軽く叩く。はあ、とため息が聞こえる。

「さくら……ああもう二人とも同じ名前でも面倒だなあ、いつそどっちか改名してくれないかい？ そうしないと面倒だ」

「あんたの都合でそうほいほい改名してたまるか！ どっちかあだ

名の様なもので呼ばばいいだろう!？」

「あだ名、ねえ。ああ、例えばサクラの方を『凶暴貧乳娘』って呼ぶとか?」

「サクラってどっちのサクラだよ!」

紗久羅ちゃんが、黄色のキャミソールに覆われている胸を抑えながら、大声で叫ぶ。うーん、どっちなのかしら。私自分の胸が小さいのか大きいのかよく分からないし……。でも、私は自分が凶暴だと思っていないし。となるとやっぱり……。でも、紗久羅ちゃんの胸が小さいのかどうかなんて分からないし。それに凶暴っていうほど紗久羅ちゃんって凶暴なのかしら。ただ元気があるだけだと思っただけだ。

「君の方に決まってるじゃないか。自覚しているから食ってかかってくるんだろう?」

「ああどうせ貧しい乳だよ! そんなの自分で分かっている! 分かっているけれど、お前に言われると何だっ腹が立つんだよ! もっと、ましなので呼びやがれ!」

「ましねえ……。特に思い浮かばないのだけれど。そっちのさくらには何かいい案はあるかい?」

話を急に振られて、私はびっくりする。

「え、私、ですか。えっと……。あ、私友達に『サク』って呼ばれているんです。もし宜しければ、私と紗久羅ちゃんが同じ場所にいる時はそう呼んでください」

出雲さんは、ああそれ良いかもね、とだけいって話を元に戻す。

「何で彼女がこの世界へ導かれたか。それはね、彼女が私に助けを求めてきたからだよ。私の後をつけ回してきた拳句『一夜達を助けて』ってね。貴方は人間ではないでしょう、ってさ。ふふ、とても正直なお嬢さんだよ。ある意味、紗久羅より大胆だ。……まあ、それで話を聞いてやる為に、ここへ呼んだ次第さ。簡潔に説明すると、こんな感じだよ」

「さくら姉……よくもまあ、確信もないのにそんなこと言ったな」

「君だつて似たようなものじゃないか。私のことを何年間も化け狐つて言い続けて。こつちが正体ばらしたら今度は『そんなもの信じない』とか言つてさ。全く、人間つて滅茶苦茶な生き物だよねえ。まあ、だからこそ苛めがいがあるのだけれど」

「この極悪性悪凶悪最悪狐め」

紗久羅ちゃんは、じとつとした目で出雲さんを見る。

「ふふ、そんなことばつかり言っていると、君の大好きなお兄ちゃん達を助けてあげないよ」

言つと、紗久羅ちゃんは齒をぎりぎりさせながらも、大人しくなった。何だかんだいって、紗久羅ちゃん、一夜のことが大好きなのね。ごめんね、紗久羅ちゃん、私のせいで、こんなことになつてしまつて。私は、心の中で彼女に謝つた。

出雲さんは、必死で怒りのエネルギーを抑え込んでいる紗久羅ちゃんを、愛玩動物でも見るかのような目で見ながら、にやにや笑っている。

ああ、でもそんな邪悪な笑みすら、神々しく見えるわ。素敵。

「……まあ、君達がここへ来た経緯については、後で二人でじっくり語り合えばいいだけのこと。それより、さつさと話を先へ進めよ

う。あまり無駄なお話ばかりしていると、助けられるものも助けられなくなってしまうよ。まあ、私はどちらでも良いんだけれどね。最低一夜位は助けておきたいけれど。……菊野に無言で責められそうだし」

出雲さん、本当に菊野お婆様には弱いよね……。菊野お婆様ってある意味、伝説の巫女・桜よりもすごいのかも。

「桜に關係して、且つ人をさらう者。まあそういう存在は幾らかいるけれど、今回の様に人間が眠りから覚めなくなつて、拳句姿を消してしまうという事例を考えると、犯人はある程度絞り込める」

「ある程度つて、はっきり一人に絞り込めないのかよ」

「そういうことが出来るのはたった一人ですつていうのなら絞り込めるけれど。一人つて訳じゃないからね……。恐らく、かず坊達を連れて行ったのは『骨桜』だろう」

骨桜？聞きなれない名前だね。紗久羅ちゃんも、目をぱちくりさせる。

「骨桜、ですか？ 一体、どういう……」

「見た目は、普通の桜よりも大きくて立派で美しい……。まあ私には劣るけど……な桜だ」

「何でそんな綺麗なのが『骨桜』なんて呼ばれるんだ？」

紗久羅ちゃんが首を傾げる。出雲さんが、妖しくにこりと微笑んだ。

「食べちゃうからだよ」

「え？」

私と紗久羅ちゃんが、同時に声をあげる。出雲さんの口が歪んだ形になる。赤い瞳が、きらきら光る。とても楽しそうな、無邪気で、それでいて妖艶な笑みを浮かべて、続きを語る。

「対象者の肉体や魂、全てを逃げられないように縛って、自分の手元に置いてね。少しずつそれらから、生命力……現代の言葉で言えば『えねるぎー』っていうのかな。それらを吸収して、自分の養分にしてしまふ。そして最後には……美しいその桜の木の下に、生命の絞りかす……残骸……骨だけが、残る。だから、骨桜」

言葉を、失った。

エネルギーを吸い取って……相手が死ぬまで全てを搾り取ってしまふ……殺してしまう、ということ？

最後に骨だけになって、しまふ？

「骨桜の木の中には、特殊な空間が広がっている。その木の格によつて、広さとかは変わってくるらしいけれど、大抵その木の大きさ以上の広さがある。その骨桜の精神空間みたいなものだ」

「見たことがあるのか、その骨桜とかいう木の中を」

言う紗久羅ちゃんの声には、さっきまでの覇気が無い。無理もないわ、だって、もしかしたら一夜は……駄目、そんなこと考えちゃ駄目だわ。

出雲さんは、構わず話を続ける。私達が明らかに動揺しているのを見て、楽しんでいるみたい。

「一度だけね。だから、まああまり覚えてはいないのだけれど。……そこには、その骨桜の核と呼べる存在が居る。大抵は女性の姿を

とっているようだね。骨桜は、自分が持つ空間と、人間や妖怪の見る夢を繋げる力を持つ。骨桜の空間と夢を繋げられた相手の意識はふらふらさ迷う内に、気づかぬ間に、骨桜の空間へ続く道を進む。そしてうつかり骨桜の空間までやってきてしまったら最後、余程のことがない限りは逃げられない。骨桜の核は、魅惑の術を使って獲物の意識を完全に自分の空間へ引っぱり込んで、縛りつけてしまう。そうされた相手は、目を覚まさなくなる。意識なんかが肉体から離れて、全然違うところに行ってしまったているのだからね」

「その後……残っていた肉体も消えてしまうのは、何故、なんですか」

「意識だけ自分の手元に置いてても、仕方ない。その意識の持つエネルギーを吸い取るだけじゃ、大した養分にならないしね。骨桜の核は、獲物の意識がどこからかやってきたのか、意識の通った道を辿って、その意識の持ち主である肉体の位置を調べる。位置が分かったら、特殊な術を使って、その肉体を自分の本体である骨桜の木の下にまで、強制的に転移させるんだ。そして、肉体を自分の木にしつかり密着するように置く。後は、そこから少しずつ……ね。意識が縛りつけられているから、目を覚ますことはできない。逃げることも、出来ない。結局無抵抗のまま、死ぬのさ」

「それじゃあ、それじゃあ一夜達は……っ」

「いや、未だ死んではないと思うよ。骨桜は、一気に全てを吸収する訳じゃない。本当にちまちまと吸い取っていくからね。最初の被害者だという娘さんも、生きているだろう。まあ、衰弱はしているかもしれないけれどね」

それを聞いて、私も紗久羅ちゃんも少しだけほっとして、肩を撫

で下ろして息を静かに吐いた。それにしても、言い伝えに出てきた桜の木が、そんなに恐ろしいものだったなんて。

「骨桜。……まあ、桜夢とも呼ばれるのだけれど。厄介な相手だよ、力自体は大したことないのだけれどね」

「えっ」

「ん、どうしたんだい？」

「いえ、なんでもありません」

桜夢。確か、美吉先輩がそんな言葉を呟いていたわ。何で、美吉先輩はその言葉を知っていたのかしら。そういうものに詳しい知り合いが、美吉先輩にもいるのかしら。まあ、噂によれば歴史のある名家のお嬢様であるというし。そういう伝承などを聞く機会も多いのかもしれないわね。

「で、出雲。兄貴達を助ける方法はあるのかよ」

少しだけ元気を取り戻したらしい紗久羅ちゃんが、出雲さんに問う。出雲さんは、艶のある唇を静かに撫でながら、何か考えているようだった。

「無いことは無いと思うけれど、ちょっと面倒かもしれないね。まずは、かず坊達をさらった骨桜を特定する。皆同じ骨桜にさらわれているなら楽だけれどねえ。まあ、同一犯の気はするけれど」

更に、と続ける。

「骨桜の周りには、強力な結界が張ってあるんだよ。折角の獲物を、そこら辺に住み着いている下等な妖怪に喰われたらたまったものじゃないからね。吸収したい養分の殆どは、肉体とその肉体に宿って

いるものにあるから。……まあ、これは私の力を持ってすればそう難しいことではない。とりあえず結界内にある、かず坊達の肉体を木から引き剥がせば、彼らはとりあえず死にはしないね」
でも、と出雲さんは続ける。

「問題はその後かな。かず坊達を真に解放する為には、骨桜の空間に囚われてしまった、彼らの意識も引つ張り出して元に戻さなくてはならない。その為には、骨桜の空間に入らなくてはいけないのだけれど、はいそれじゃあ入りましようっていつて、入れるものではないんだよね」

「でも出雲、あんた一回その骨桜の空間とやらに入ったんだろう」

「その時は私も、かず坊達同様寝ている時に、誘い込まれたんだよ。まあ、この通り無事だったけれどね。私を食べようとした悪い桜さんには、軽くお仕置きして差し上げたよ」

そう言って、楽しそうにやりと笑う。軽くって……出雲さんの軽くって、少しも軽くなさそうだわ。骨桜も、可哀想というか何とというか。とんでもない人を獲物にしようとしたのね。

紗久羅ちゃんはそっぽを向きながら「いつそそのまま引きずり込まれて骸骨になればよかったのに」と悪態をついていた。あらあらまあまあ。

「まあ、美しい桜の木の下で散るのも悪くは無けれど。私は、未だ死ぬつもりはないよ。楽しいおもちゃが増えたしね。生と死の花、桜。そこで死ぬのは、まあ当分先ということだ」

「おもちゃ言うな、おもちゃって！ さくら姉も何か言ってやれ、この馬鹿狐に！」

「桜の花が生と死の花って、どういうことでしょう」

「そっちじゃねえ！」

頭を抱える紗久羅ちゃん。私、変なこと言ったかしら？

「だって、桜の花は桃色だから」

「こっちはこっちで意味の分からないこと言いやがって！ ああ、誰か、誰かあたし以外のツッコミ役はいないのか！？」

叫ぶ紗久羅ちゃんを、きよんとしながら見る。

そうしていると、思う。

やっぱり紗久羅ちゃんと一夜って兄妹ね。色々なところが、そっくりだわ。

「ははは。やっぱり面白いなあ、お転婆紗久羅姫は」

「こっちは少しも面白くない！ 兎に角、出雲！ 何が何でも馬鹿兄貴や他の人達を助けてもらうからな！ 助けなかつたら、一生お前に稲荷寿司売ってやらないし、食わせてもやらないから！」

びしっと出雲さんを指差す紗久羅ちゃん。けれど、どれだけ紗久羅ちゃんがばつちりしっかり決めても、出雲さんの表情は変わらず、ににこしている。

菊野お婆様と同じ事を言われたら、多分顔色を変えるのだろうけれど。

頑張つて、紗久羅ちゃん。本当に。

「まあ、紗久羅が面白い面白くないは、置いておこう。何だかさつきから話が脇道にそれてばかりだねえ。……まあ、とりあえず骨桜の空間に、眠らずとも入れる方法を探さないとね。意識だけあちらへやっても、意味は無い。力を発揮することができないから、相手を懲らしめることもできないしね」

「え、でも出雲さん……以前骨桜に危うく獲物にされかけた時、お仕置きしたんですよ」

「ん？ ああ、あれは骨桜の空間でやった訳ではないから。後日、その骨桜のある場所を調べて、骨桜の木自体にさせてもらったんだ。結界の中に入り込んでね」

「……何というか、本当、執念深い方だわ。そこまでして……。出雲さんに恨まれたら最後、末代まで祟られそうね。」

「同じようなことを紗久羅ちゃんも考えているようで、ぶつぶつと何か呟いている。」

「今回は、骨桜の木自体に何かしたところで、解決する訳ではないからねえ。火で燃やして、灰にしてしまえば、骨桜自体は死ぬけれど。骨桜が死ねば、その木が持つ空間も消え、同時にそこにいる、かず坊達の意識も消滅しちゃって、二度と彼らは目を覚まさなくなる。ああ、面倒くさいねえ……。もうさ、これ以上犠牲者を増やさない為に、骨桜を燃やして終わりにしようよ」

「駄目に決まっているだろう、駄目に！」

「本当に出雲さん、一夜達を助けてくださるのかしら。何だか、急に「やっぱりやめた」と言い出して、私達の目の前でその骨桜の木を燃やしかねないわ。」

まあ、そうよね。出雲さんは人間の味方という訳ではないし。言い伝えに「気まぐれ」「自由人」と書かれる位、自由奔放な人なのだから、きつと。

それにしても、さつきから本当に話が全く進んでいないような気がするわ。

私は、羊羹を一口食べる。ひんやりとしたそれは、体の熱を優しく奪う。ああ、これ美味しいわ。どこかのお店で買ったものなのかしら。こちらの世界にあるお店で買っているのか、私達の世界で買っているのか。それとも、手作りかしら。

ああ、やっぱり和菓子っていいわよね。素朴な味で、とても優しく。四季の移り変わりも感じられて。

帰りに、鈴ちゃんから聞いてみようかしら。ああ、でも鈴ちゃん答えてくれるかしら。出雲さんのことは好きみたいだけれど、私達のこととはあまり好きではないみたいだし。

「さくら姉？ さくら姉、ちょっとさくら姉？ 何か別の世界にスリップしてないか？」

「え？」

美味しい羊羹に舌鼓を打っていたら、遠くから紗久羅ちゃんの声が聞こえた。はっと気づけば、隣にいる紗久羅ちゃんが、顔を近づけて私の名前を呼んでいる。

あら、いやだわ。私ったらまた自分の世界に入り込んでしまっていたみたい。

「もう、すっかりしろよな、さくら姉。はあ……さくら姉ってぼうつとしながら歩いていて、電柱柱に思いつきり頭ぶつけちゃいそう

だよなあ」

「えへへ。実は、一週間に一度の割合でぶつかっているの。あれって、結構痛いわよね。後、側溝に足突っ込むこともたまに……この前、足をつっこんでしまった時、危うく本を落としそうになって、どきつとしたわ」

「本当にぶつかっているのか！ しかもそんな頻繁に！？ ていうか側溝に足突っ込むなんて……いや、しかも自分より本が大切って……」

「だって、自分の足は洗えば綺麗になるけれど、本は洗って綺麗にすることはできないもの」

大切に持ち続けていた本には、失ったら二度と元には戻せない、大切な思いが宿っているのよ。汚れたら買いなおせばいいなんて、ことはないのよ。

紗久羅ちゃん、私があまりドジだから、呆れてしまっているよ。うね。さっきからずっと頭を抱えてしまっていて。頭を抱える姿も、一夜に似ているわ。

出雲さんが、ぺちぺちとテーブルを叩く。

「サクのドジ談義は置いて。話を先に……ああ、もうさっきから何回同じ事を言っているのだろう。今もう激しい既視感というものがある……いや、既視感というか、まあそんな言葉ないけれど。兎に角。無理矢理話を戻すよ。骨桜は、どんな相手でも獲物にできるという訳ではない。かず坊は、まあサクが桜の話をしたのが原因として……他の被害者さん達にも、あるはずなんだよねえ」

「何がだよ」

ふっと、出雲さんが笑う。

「桜に関する思い出。或いは、桜が印象強く頭に残るような何か。頭の中で桜の花がぐるぐる回るような、何かがね」

私は、一度も顔を見たことの無い、夕菜さんのことを思った。

数年前に見た桜の木をキャンバスに描き、そして姿を消した彼女のことを。

夕菜さんの、桜に関する話を思い出した途端、心臓がシエイカーの中に入れられてぶんぶん振られたかのように、激しく揺れた。

暑いからなのか、それとも寒気のせいか。額から頬へと汗がった。

「昔あった思い出を、今になって思い出したか。それとも、桜に関する何か、桜が意識を、頭を支配する何か、最近になっておきたか。……まあ、最近でも昔でも構わないのだけれど。骨桜は、そういう人とじゃないと、上手く繋げることができないらしいよ、自分の空間とね。だから、大抵は花見を楽しんで、酔っ払って眠りこけている奴とかが、獲物になるんだ」

成る程。展示会に向けて、思い出の桜の木を描いている夕菜さんの頭の中は、きっと薄桃色の花びらをつけた、桜の木でいっぱいだったでしょうね。

孝一さんの言う通り。確かに、夕菜さんが数年前に見た白昼夢とも思えるような光景は、結果的に彼女を異界へと連れ去ってしまったわ。

一夜も、同じように。私が桜の木の夢のお話をしたから。多分、何となく「桜」というものが印象強く、頭にぶかぶか浮かんでいてそれが原因で、繫げられてしまった。骨桜の持つ、空間へと。

「けれど、こんな季節に桜？ 花見の時とか、桜山が一面ピンク色のなる時期ならともかく」
紗久羅ちゃんが、頭をぽりぽりとかく。確かに、こんな時期に桜の木が頭の中をぐるぐる巡っちゃうような出来事は、そう起きないと思うわ。

でも、夕菜さんと一夜は、違う。

出雲さんは、何故か私の方をじっと見ながら笑っている。
私があからさまに動揺しているからかしら。その様子を楽しむように、笑っていて。その様子すら、とても美しいのだけれど。同時に、恐ろしくもある。

「サク。何か心当たり、ある？ ああ、勿論かす坊のことは除いてね」

「わ、私……」

出雲さんに会ったら、夕菜さんのことだけでも話そうと思ったのだけれど。出雲さんに、氷で冷やしたナイフの様な瞳で見つめられると、声が上手く出せない。

元々、声なんて出すことができない生き物に、自分が変わってしまったような錯覚に陥る。視線を逸らしても、なおその呪縛から解放されることはない。

けれど、出雲さんがふっと一息つくと、途端に気分が楽になった。

きつとさつきまでは、意識的に出雲さんが、私を萎縮させるために冷たく鋭いオーラを放っていたのでしょね。私がびくびくして、震えているのを見て楽しんでいたのだ。

私は、口をやつとのことので開いた。

そして、話す。

孝一さんから聞いた、夕菜さんの話を。

出雲さんも、紗久羅ちゃんも、静かに私の話を聞いていた。

「……それで、多分、夕菜さんは。骨桜に連れて行かれてしまったのではないか……と。その、現実とも夢ともつかぬ光景を絵にしたばかりに……」

話し終わると、更に気分が楽になった。出雲さんは、唇を静かに撫でながら、何か考えているようだ。

「ふうん。夢とも現実とも……へえ、面白いねえ。今までは心の底にしまっていた思い出。けれど『忘れられない風景』をお題として出されたとき、その美しい風景を思い出す。そして、それを描き続けて。頭の中は桜でいっぱい……成る程ね。それで、後の子達のこととは？」

「いえ、後の人達は、よく分からないんです。偶然、私の所属している部活……部活についてでも分からないですよね。えっと、知り合いの人達が被害者の方達と知り合いだったらしいんですけれど。特にこれといった情報は」

「ふうん。まあ、サクにしては頑張ったねえ。一番最初の被害者のことだけとはいえ、其れ位調べることができたのだから」

「サクにしては……ってそんなさくら姉のことなんて、殆ど知らないくせに」

「妬いているのかい？」

「意味が分からん！」

「もう分かりやすいなあ、紗久羅は」

「だから、違うつてのー！」

立ち上がって、出雲さんの頭をぼかすと叩く紗久羅ちゃん。やっぱりすごい、すごいわ、紗久羅ちゃん……。

「本当、乱暴だねえ、紗久羅は。かず坊の方が、まだしも大人しいかもしれないねえ。ま、あつちはあつちで元気いっぱいのお馬鹿さんって感じだけれどね」

出雲さんが肩をすくめた。

結局、話はそこまで。それ以上話したところで埒があかない、という訳で私と紗久羅ちゃんは、まるで追い出されるように館を出た。ああ、この世界についての詳しいお話を聞きたかったのだけれど。うう、それはまた次の機会になりそうね。

出雲さんは、骨桜の持つ空間へ、直接行く方法が分かったら、また私達を呼ぶという。被害者達のことについても、気が向いたら調べる、と。気が向いたら……あまり期待しない方がよさそうね。

前よりも詳しいことが色々分かったけれど。少しも、気が休まることはない。

幾ら、すぐには死なないだろうといわれていても、やっぱりあせってしまう。万が一ってこともあるじゃない。

助けに行つたときには……やだ、そんなこと考えちゃいけないわね。でも、最悪の事態になつたとしても、出雲さんは顔色一つ変えず、肩をすくめて「ああ、死んじゃつたね」とか「ちよつと遅かつたね」って言うだけなんでしょうね。

出雲さんに任せるのは不安で心配で仕方がないのだけれど、それしか方法がないから。

帰り際、鈴ちゃんと玄関近くでまた会つた。鈴ちゃんに、あの羊羹はどこかで買ったのか、それとも手作りなのか聞いてみた。けれど鈴ちゃんは「店」とだけ言つて、姿を消してしまつた。やっぱり、あまり好かれていないみたいね。

出雲さんから貰つた、鬼灯を手に、私と紗久羅ちゃんは元の世界へ戻つていく。

最後の鳥居をくぐり抜け、元の世界へ足を踏み入れた瞬間、何だかどうしようもなくほつとした。

結局のところ、私の世界はこちらなのだ。

それが、やっぱり残念で仕方がないのだけれど、仕方がない、わよね。

*

さくら、そして紗久羅のいなくなった部屋。心地よい静寂が、戻ってくる。

鈴が、ちよこちよここと歩いてきて、静かに二人分のカップと羊羹ののつた皿を回収する。さくらは、羊羹を全部食べきっていた。

本当に賑やかで、飽きない娘達だ。ティーカップの淵をゆっくりなぞりながら、出雲は思う。

(それにしても、妙だな。今は殆ど手を出さなくなった人間に手を出すなんて。近頃は、あまりにあちらの世界とすっかり区切られているから、人間の意識と己の空間を繋げにくくなったと聞いていたけれど。それに……複数の骨桜がこんな時期に活動して、人間を獲物にしているというのも考えられないし。単独犯だったとしても……妙なんだよね。こんな短期間に、5人も獲物として捕らえるなんて。1度に捕まえる獲物なんてせいぜい2人位で、その少ない人数から、少しずつ養分を吸収するのが普通なのに)

何が起きているのだろう。

現実か夢かよく分からない、桜の木を見たという娘の話も興味深い。

娘が数年前に見たという桜の木。それはもしかすれば……。しかし、詳しいことが分からないから、なんともいえない。

(調べた方がいいかねえ。被害者達のことも。けれど、面倒だねえ……それに、あちらのことはよく分からないし。ここは、あちらの世界とこちらの世界、両方に繋がりのある者に、押しつけた方が無難かな)

出雲は、ある一人の人物の顔を思い浮かべ、そして出雲にしては醜い顔になる。余程、嫌な奴の顔を思い浮かべたのだろう。

(あいつしかいないよね。……はあ、まあ、いいか。只の筋肉馬鹿でも、少し、山椒の粒程は役に立つと信じて)

第十八話：桜の夢と神隠し（5）

*さくらの語り

出雲さんが、満月館で一人あれこれ考えていることなんて、全く知らない私と紗久羅ちゃんは、階段を下りて、畦道を歩き、家のある方を目指した。家の方向は二人とも同じだから、自然同じ道を辿ることになる。

紗久羅ちゃんは、私の前を歩いている。満月館を出てから、一言も話していない。いつも明るくて、気さくに話しかけてくれる紗久羅ちゃんが無言。ただそれだけで、周りの空気が異様なものになる。

「なあ、さくら姉」

紗久羅ちゃんが口を開いた。突然のことだったから、蝉や蛙の歌う声ばかり吸収していたその耳は、危うくその言葉を受けずに流れてしまうところだった。

はっと気づいて、前を向く。振り返ってこちらをじいっと見つめている紗久羅ちゃんと目が合った。

「なあに、紗久羅ちゃん」

「いくらこの町が桜と言いつた数しか誇れないような田舎でもさ。こんな季節に、桜の化け物に次々と人間が連れて行かれるっていうのも、変な話だよな」

「そう……そうよね。季節外れな事件、よね。ひまわり畑で、桜餅を食べる位に」

何だか、とても不安だわ。重くて粘り気のある泥が体の底に、ず

っしりと沈んでいるような感覚。

自然と、足取りも重くなる。前を歩く紗久羅ちゃんは、今何を考えているのかしら。何でも良い、話しかけてほしい。それだけで、きつとほっとする。内容など関係ない。ただ、この奇妙な静寂を打ち碎いてくれる何かが、あればいい。

自分から話しかければいいのだけれど、何を話せばいいのかさっぱり分からない。

体内に重く沈む泥が、吐き出しそうになるくらいいっぱいになった頃。

私は、ゆっくり頷いた。重苦しい泥は、気づけば体の中から外へと流れていったようで、随分と楽になっている。

「季節感ゼロだな。それにしても、何で骨桜とかいうのも、こんな真夏に動きだしたんだろう。ていうかさ、こんなの初めてじゃん。桜の花びらと一緒に人間が消えるなんて事件」

そう、今まで桜町でその様な事件は起きたことがなかった。桜山で友達と一緒に遊んでいた女の子が、行方不明になったという事件は大分前に起きていたとはいうけれど。でも、その事件には桜は一切関与していないはず。

眠りから覚めなくなり、最後に桜の花びらと共に姿を消してしまふという事件は、今回が初めてだと思う。もし以前にもそのような出来事があれば、話題に出てくるはず。まあ、もしかしたら何百年も前とかにはあったのかもしれないけれど。言い伝えとして残っている位なのだから。ああ、でもそれで連れ去られた人がいたとして……生きては帰ってこないはずだから、後世に伝えることなんて、出来ないわよね。それとも、出雲さんのように奇跡的に難を逃れた人でも、いるのかしら。ああ、気になるわ。

はっ、そういえば紗久羅ちゃんと話していたのよね。言葉をずっと返さなかったら、紗久羅ちゃんを不安にさせてしまうわ。

紗久羅ちゃんは、どうしてなんだろうなあとか、皆を連れて行った骨桜ボケでも来ているんじゃないのか、とぶつぶつ呟いていた。紗久羅ちゃんなりに、色々考えているらしい。考えていなければ、不安で押しつぶされそうになってしまうのは、何も私だけじゃないってことかしら。

紗久羅ちゃんが、急に「あっ」と何かに気づいたような声をあげた。何故だかその後気まずそうな表情を浮かべて、こちらに向けていた顔を元の向きへ戻してしまった。

どうしたのかしら？私は首を傾げる。

「……かもしれない」

「え？ なあに？」

「あたしの、せいかもしれない」

やや上擦った、紗久羅ちゃんらしくない声。あたしのせい？どういうこと？

どうして？なんで？私は、早足になっている紗久羅ちゃんに置いていかれないように、必死になりながら、尋ねる。

そうしていたら、急に紗久羅ちゃんの足が止まる。そして、くると振り返ってこちらを見た。両手はぎゅゅと握りしめられている。

「あの馬鹿狐が言っていた。一度あの世界に足を踏み入れると、あつちの世界の匂いが染みつくんだって。……それでもって、その匂

いは、異形を引き寄せるんだとさ！」

半ばやけくそのように、紗久羅ちゃんは叫ぶ。

「綺麗になくならないんだよ。結局、一度踏み入れたら、もう今までの自分には戻れないってやつ。あいつは、それが分かかっていて、あたしをあの世界に連れて行ったんだ。嫌がらせだよ、本当にさ！」

紗久羅ちゃんは、わざとらしくため息をついた。きっと紗久羅ちゃんは、夕菜さんや一夜達が骨桜にさらわれたのは、自分のせいだと思っっている（一夜がさらわれた原因は、まあほぼ確実に私にあるのだけれど）

「あたしが、その骨桜つてやつをこっちの世界へ導いちゃったのかも。それでもつて、運悪く桜の花が頭の中をぐるぐる回っていた人達が被害者になった。あたしのせいかも、しれない」

大きく息を吐きながら、まるで教会の十字架の前で告白する人の様に。

そういう紗久羅ちゃんの姿は、とても弱弱しくて、小さく見えた。いつもは、とても元気で、明るくて、ちょっと気が強いところがある紗久羅ちゃんが。

きっと、私と同じ様に、紗久羅ちゃんも悩んでいたのでしょうね。私は、一夜が消えたことだけを考えていたけれど、きっと彼女は、他の人達のことも考えていたのでしょうね。自分が、異界と関わったばかりに、と。私以上に、辛かったんじゃないかな……紗久羅ちゃん。

出雲さんのその言葉が、真実であるかは分からない。あの人は、人を騙すことだってきつと平気です。嘘に振り回され、頭を抱えて悩む人間を見るのとか、とても好きそうだわ。実際、桜村奇譚で

も出雲さんがついた嘘のせいで不幸になってしまった人のお話と言
うのが度々でてきている。

けれど、思う。多分出雲さんは本当のことを言ったのだ、と。

自分達の住む世界とは違う場所へ一度足を踏み入れてしまったら、
きつと後には戻れない。自分には見えない、永遠に消えない印が
ついてしまうのだろう。

その印が、気づかぬ内に様々なものを引き寄せてしまうのではな
いだろうか。

私達の世界と、異界の世界を繋ぐ、あの美しくも恐ろしい、鳥居
と階段と灯籠で出来た「道」のように。

私達自身が、自分達の世界と異界の世界を繋ぐ「道」となり「道
標」となってしまふのではないだろうか。

もう、後戻りは出来ない。「嫌だから忘れる」といって、例えあ
の世界へ行ったことを記憶から消し去ったとしても、あの世界へ足
を踏み入れたという事実が、消えるわけではない。もう、私達は関
わってしまったのだ。見えない、黒く頑丈な糸で結ばれてしまった。
それを鋏で切ることは、きつと出来ない。

私は、それでも構わない。だって、あの世界は私はずつと憧れて
いた世界だから（でも、自分のせいで周りの人達に迷惑をかけてし
まうのは、少し心苦しいかもしれないわ）

けれど、紗久羅ちゃん、あの世界と関わりたくて関わったわけ
ではないだろう。だから、きつと辛いよね。

「あの馬鹿狐が、皆を助けても。また、近いうちに新しい事件が起
きてさ。もし誰かがそのせいで死んじゃったらどうしよう。そんな
風にさ、思う時があるんだ」

「そうね……。毎回、出雲さんが助けしてくれるとは限らないしね。でも、関わってしまった以上もう、どうすることも出来ないわ。こうなったら、異界へ引つ張り込んだ出雲さんを、とことん利用してピンチを乗りきっちゃいましょう?」

珍しく、ウインクなんかしてみた。片目だけ瞑るのって、結構難しいわよね。左目だけってというのは出来るけれど、右目だけって私は出来ない。

私は、紗久羅ちゃんと違って、この先どんなことが起こるのか、正直わくわくしている。……流石にそんなことは言えなかったけれど。不謹慎だとは分かっているけれど。

紗久羅ちゃんは、目をぱちくり。ちよつと頭をかいた後、いつもよりは未だ元気がないけれど、それでも十分に眩しい笑顔を私に向けてくれた。

「そうだな。あの馬鹿狐をこき使ってやろう」

二人で笑いあった。きつとお互い、不安と恐怖と罪悪感で胸がいっぱいなんでしょうけれど。今は、笑うしか出来ないから。

笑う門には福来る。二人で笑ったのだから、その福も二倍になるに違いない。それを信じて、兎に角、笑った。

*

紗久羅ちゃんは、歩きながら私に、何故自分があの世界へ行くことになったのか話してくれた。

小さい頃から出雲さんと顔を合わせていたけれど、すぐその存在を忘れてしまっていたこと。出雲さんの存在を忘れることが無くなったのは、花見で彼と出会った日からであったこと。いつになっても老いず、気味が悪いほど美しく、いなり寿司が好きでおまけにこ

の町に伝わる物語に出てくる化け狐と同じ名前であること……などから、彼のことを「化け狐」と呼び続けていたこと。

そうして、終いに出雲さんがふてくされて、殆ど嫌がらせの為に紗久羅ちゃんを、桜町で毎年行われる夏祭りの日に、あの世界へ引っ張り込んだこと。

その世界で行われた「鬼灯夜行」というお祭のこと。

色々、聞いた。聞けば聞くほど、羨ましくなった。私も、美味しいご飯を食べて、カガキミの樹という美しくて大きな樹を見て、沢山の妖さんや精霊さん達とお話したかったわ。私だったら、喜んでついていったのに。

そう言ったら、紗久羅ちゃんは「さくら姉はそう言うと思った」といって、ため息をついた。

夏祭りの日、紗久羅ちゃんと会ったのを覚えている。私は巫女役の女の人の舞をその後見た。その時、紗久羅ちゃんとよく一緒にいるのを見る女の子二人を見かけた（確か、お花の名前なのよね、二人とも。確か紗久羅ちゃんを入れて、お花トリオと呼ばれていたよな）けれど、いるのは二人だけで紗久羅ちゃんはいなかったから「おかしいな」とは思っていた。……そうか。あの時紗久羅ちゃん、あの世界のお祭に行っていた（連れて行かれていた）のね。

「さくら姉はやっぱりおかしいよ。そりゃあ、お祭はそれなりに楽しかったよ。飯も上手かったし、ものすごく綺麗なものも見られたし。でも、基本的には気味が悪くて、居心地が悪かった。見慣れない奴らがうじゃうじゃいたんだぜ」

「例えば？」

「河童。ぬいぐるみとかとは違って、超リアルな」

「まあ、素敵じゃない。河童の肌ってどんな感じなのか、触れてみたいわ」

「後は、牛の頭で、目が三つあるやつ」

「まあ、とっても遅しそう。目が三つあると、どんな世界が広がっているのか、見てみたいわ」

「……から傘お化けとか、目が沢山ついている肉の塊みたいな奴とか、人型二足歩行の猫とか」

「まあまあまあ、とっても素敵じゃない！一度是非お会いしてみたいわ！」

「……うん。ごめん、あたしが馬鹿だった」

気のせいかな、紗久羅ちゃんのテンションが酷く低くなっているよ
うな気がした。

何か私変なこと言ったかしら？

その後、私も紗久羅ちゃんに私があの世界へ行くことになった経緯を話した。

「やっぱり、ある意味すごいよ、さくら姉は。そして、やっぱりあいつは性悪狐だ。本当、あいつは人の不幸をおかずに飯を食いそう
な奴だよなあ」

「むしろ、おかずだけでなくそのご飯さえも、他人の不幸かもし
れないわ」

「全然腹いっぱいにならないな、それじゃあ」

「ああ、後。他人の不幸は蜜の味。他人の不幸という名の蜜をかけたパンを美味しそうに頬張るかもしれないわ」

「あいつ、パン食うのかなあ」

「狐は、雑食性らしいわよ。一応肉食寄りではあるみたいだけれど。だから、パンでも何でも食べるんじゃないかしら。やましたの稲荷寿司や、水羊羹を食べている位ですし、きっとパンも食べると思うわ」

言ったら、紗久羅ちゃんが吹き出した。

「あはは、成る程。確かにあいつ一応は狐だもんな。雑食って言葉が何となく似合わない感じがまたうけるぜ。あいつ、虫とかも食べるのかな」

「案外今日のご飯は、ミミズのソテーとか？」

「うええ、絶対食べたくない。ああ、でもあいつがミミズ食っていると想像したら、笑いが止まらなくなってきた」

出雲さん、今頃あの館でくしゃみ連発しているんじゃないかしら。

私と紗久羅ちゃんは「出雲さん談義」に花を咲かせ、異様に盛り上がった。

「ごめんなさい、出雲さん。でも、とっても面白いのでやめられませんか。ごめんなさい。」

明日、おじいちゃんの喫茶店でまた会うことを約束して、私と紗

久羅ちゃんは別れた。菊野お婆様と紅葉おば様のやっている弁当屋『やました』からは、温かくて優しくとても美味しそうな匂いがした。その匂いを嗅いだら、お腹が空いた。

「ご飯を食べて、お風呂に入ったら、ノートに今日聞いたことや部活で聞いたことをまとめよう。それを明日、持って行って紗久羅ちゃんと色々話そう。」

そう決めながら、私は家のドアを開けた。

*語り

喫茶店『桜(SAKURA)』の中では、いつも通り静かで穏やかな時間が流れていた。心地よいBGM、仄かに漂う珈琲の香り。ギトギトした油の様な太陽の光も、弥助や朝比奈さんが毎日丁寧に磨いている窓を通り抜けた瞬間、優しいものにならなくなって、テーブルや床に降り注ぐ。

そんな喫茶店の入り口の扉が、からんからんというベルの音と共に開く。雑巾でカウンターを拭いていた弥助は、笑顔を浮かべて「いらっしやい」とその客に向けて言った。そして、次の瞬間、固まった。

扉を開けて入ってきたのは、弥助にとっては天敵にして宿敵である、出雲だった。

流石に人の世に来ている為か、髪の毛も瞳も黒い。恐ろしく熱い太陽に照らされながらも、その髪は触れたら凍ってしまいそうな位冷たく見える。不気味に艶々冷たい光を放つ髪が、さらさらと揺れる。太くてごわごわしていて、何だかたわしみたいな弥助のそれとは違って、彼の髪は絹糸の様に細くてさらさらしている。炎天下を歩いてきたはずなのに、汗一つかいていない。一応妖怪である弥助から見ても、目の前にいる男は不気味で恐ろしいものに見える。

客は歓迎するが、不倶戴天の敵は歓迎したくない。
えび天やところ天は好きだが、不倶戴天（の敵）は勘弁して欲しい。

「全く、外は暑い。けれど、この店の中も暑いね。暑苦しい男がいるからかな」

開口一番、弥助に憎まれ口を叩く。反論しようとする弥助を完全に無視し、カウンターの後ろで本を読んでいた秋太郎に笑顔を向ける。秋太郎は、こんにちは、とだけ言つてにこりと笑顔を返す。

「ちょっと、弥助を借りるよ」

言うや否や、出雲は指で、入り口に一番近いテーブルを指差す。こつちへ来い、と言っているようだった。拒否権は、ない。

こいつが自分の所に来る時は、面倒ごとを押し付ける時だ。出雲は、自分の事を相当嫌っているくせに、そういう時だけやってきて自分をこき使う。

嫌いなやつにこき使われるほど嫌なものは無い。しかし出雲からしてみれば、嫌いな奴をこき使うほど楽しいものは無い、といったところだろう。人を貶め、苛め、苦しませ、泣かせ、怒らせ、地獄へつき落とすことは最早彼にとって趣味である。他人を巻き込み、不幸にする最低な趣味である。じわじわと体を侵す毒に苦しむ人を見ながら、腹を抱えて笑う様な男、それが出雲だ。

弥助は、ちらりと秋太郎を見た。救いを求めている。しかし、秋太郎はにこにこ笑うだけだ。その笑顔を言葉で訳してみれば「行ってらっしゃい」となるだろう。

弥助は、しぶしぶテーブルについた。出雲もそれに続く。

厨房の奥から、朝比奈さんがとてと駆けてきた。出雲と同じ

綺麗な髪の毛。けれど、彼女の髪からは温かくて優しいお日様の香りがする。絶対零度髪とは対極の位置にある春のお日様髪を彼女は持っているのだ。

ふんわりとした笑みを、出雲に向ける。

「こんにちは。出雲さん、でしたよね。弥助さんのお友達の」

相手が朝比奈さんでなければ、今頃弥助は「友達じゃないっす！」と大声をあげて叫んだだろう。出雲は、あはははと笑いながら首を振った。

「友達？ そんな訳ないじゃないか。この馬鹿は、私の下僕だよ、げ・ぼ・く」

いっすすがすがしくなる位の否定っぷり。けれど、朝比奈さんはその言葉も冗談だと思っっているらしく、相変わらずにこにこと笑っていた。

「ふふ、仲が宜しいんですね。あ、ご注文は何にしますか」

「そうだねえ。アイスカフェオレとチョコレートパフェをお願いしますよ」

「はい、分かりました」

朝比奈さんは、厨房へと消えていく。

「さて、本題に入ろうか」

「今度はあつしに何をさせようっっていうんですか」

「おや、随分察しがいいね。でもまあ、安心おし。真っ裸になって、どじょうすくいしながら商店街を歩け、とは言わないから」

「ええ、できればそうして欲しいっすねえ」

怒鳴りたい気持ちを必死に抑え、体を怒りに震わせながら、答える。

「お前の裸なんておぞましいものを、私は見たくないからねえ。……まあ、それはどうでも良いのだけれど。ねえ、弥助、お前は当然知っているよね。この町の人間が次々と姿を消している事件のことを」

「へえ、あんたも知ってるんすか、あの事件のことを。勿論、あつしは知っているっすよ。この前、その被害者の恋人という男性から話を聞きましたからね。そういえば、紗久羅っ子の兄ちゃんのかず坊も、いなくなっただんですよね」

出雲が、はあとため息をつきながら頷いた。

「そう。そのせいで、私は面倒ごとを押し付けられる羽目になってしまったんだよ。かず坊が被害者の一人でなければ、こんな事件無視したただけだね。だって、私には関係の無いことだし。けれど、あのお馬鹿が連れ去られたせいで、彼はおろか、他の人まで助けることになってしまったのだよ」

「ははあ、それでっすか。あんたが、ああいう事件に興味を持つなんて珍しいとは思ったけれど。……ところで、やっぱり皆を連れ去ったのは、骨桜なんすかね」

孝一の話や、他の被害者達の様子を聞くに、該当する「人ならざる者」といえばその位しかない。弥助が小声でぼそつと呟くと、出雲は静かに頷く。

「だと思っよ。……けれど、骨桜の目的がよく分からないんだよね。

食糧として連れ去るには、時期も連れ去る人数もおかしい。複数犯にしても単独犯にしても、おかしいんだよねえ」

しばらくすると、朝比奈さんがやってきて、出雲が注文したカフェオレとチョコレートパフェをテーブルの上に置く。弥助にも、バナナアイスをくれた。

何て優しい人なんだろうと弥助はじんと胸が熱くなった。邪悪の塊を目の前に沈んでいた心が、一瞬でぽかぽかと温まるのを感じる。このまま、この悪霊怨霊よりも恐ろしくおぞましい、化け狐を浄化してくれないものだろうか、などと思う。

しかし、朝比奈さんは眩しい笑顔を向けると、すぐに厨房へ戻ってしまった。お友達同士の会話を邪魔するわけにはいかないということだろうか。弥助は涙が出そうになった。いろいろな意味で。

出雲は、カフェオレを一口飲み、スプーンでチョコパフェのクリームをすくって口に入れる。

「まあ、勿論。食糧にする以外で連れ去ったというのなら、別に何かしいことではないのだけれど」

「食糧にする以外で？」

弥助は、首を傾げた。

「それなら、おかしくないと思う。……おかしくは無いけれど、意味は分からない。骨桜にとって、人間は只の食糧に過ぎない存在だからね。他の目的なんて考えられないのだけれど……。今すぐ食糧にする訳ではなく、保存して、後で食べるとか？ いや、でも人間は生ものだから、すぐ駄目になるしなあ」

「生もの言うな。あんたは人間だって食糧にするかもしれないが、

あつしはそんなことしたことがないっすから……何か生々しい表現なんすよ、うええ」

「ふん、お前がどう思おうが知ったことではないよ。まあ、理由とかは別にどうでもいいんだよ、最終的にかず坊達を助けることが出来ればね。ただちょっと気になるだけだし。……興味深いのは、一番初めに連れ去られたという娘だ。現か虚か分からぬ、美しい桜を見たというじゃないか」

頬杖をつき、出雲は微笑む。曰く「自分が美しく見えるポジションその1」らしい。

弥助は、出雲から夕菜の話が出てきたことに驚いた。何故、そのことをこの男が知っているのだろう。まさか……。

弥助は、嫌な予感がした。出雲はそれを見透かしたかのように、嫌な笑みを浮かべ、スプーンで弥助をびしっと指した。

「君もよく知っている、頭にお花畑が咲いている娘から聞いたんだよ。お前、あの娘の知り合いなんだろう？ ああ、そうそう。私にかず坊達を助けてくれと言ったのも彼女だよ。すごいよねえ、いきなり貴方は人間じゃないんでしょう、助けてくださいとか言うんだから。あまり面白いから、あちらの世界へ連れて行った」

弥助の無駄に大きな体から、しゅううう、と力が抜けていった。

自分は、今まで秋太郎には正体を明かしたが（というか初めて会った時点であればだった）彼女には明かしたことが無かった。秋太郎は、まだ物の分別がつくというか、踏み入れてはいけないところといいところの区別がつくから、いい。だが、さくらは常に夢の世界をうろつろしているような人間だ。夢と現実の区別が微妙にっていない。

下手に正体を明かせば、何を言ったりやったりするか……。まして

や、あちら側の世界へ連れて行くなんて。そんなことしたら、とんでもないことになることは確かだった。彼女にとっても、周囲の人にとっても、良く無いことが起こる。

夢見ているだけで居て欲しかった。

そんな弥助の、ささやかで慎ましい夢を、目の前にいる馬鹿はにこり笑ってぶち壊しやがったのだ。何で、知らぬ存ぜぬふりをしなかったのか。

面白い、という理由だけで誰かをあちらの世界へ連れて行こうとする出雲の気持ち分からない。分かりたくもないし、仮に分かるうとしても分かるまい。

「余計なことをして。本当に、一度地獄へ行つて来い」

「いやだよ。お前が代わりに行けばいいじゃないか」

「あなたの代わりなんて死んでも嫌だ。全く、本当に、ああ余計なことを」

「まあ、どうでもいいよ、そんなことは。それより、その夕菜つて子の話が気になる。詳しいことが分からないから、なんともいえないけれど、彼女が見たのは」

「あつしらの世界にあつた桜の木……ではないかと。ふらつと歩いている時に、一時的にあちらへ迷い込んでしまった可能性はあるっすね」

人間達の住む「こちら側の世界」そして出雲達の住む「あちら側の世界」二つの世界は、重なり合っていないながらも隔絶され、交わることは無い。

本来は、この世界に幾つかある特別な出入り口を、これまた特別な方法で通らなければ、あちらの世界へ行くことは出来ない。紗久羅やさくら、出雲の場合は桜山神社の階段がある場所に存在する「出入り口」を「通しの鬼灯」を使うことで「見て」通って、二つの世界を行き来している。

しかし。二つの世界は基本的には境界線ではっきり区切られている。けれど、時にその境界線がぼけて曖昧になってしまうことがある。場所によっては、ぼけたりはつきりしたりを繰り返すところもある。特に桜山は、そういうことが多い。

だから、特別な方法を使って、特別な出入り口を使わなくても、適当に歩いていたらいつの間にか、もう一つの世界へ迷い込んでしまうことがある。しかしその場合、下手すると自分の世界へ帰れなくなってしまうことがある。特別な手段を持っている人なら良いが、持たぬ人は、どうしようもない。

「散歩をしている間に、あちらの世界へ迷い込んでしまった可能性はあるね。まあ、その後運よく元の世界へ戻れたみただけけれど。しかし……もし、その時彼女が見た桜というのが、骨桜だったとすれば……」

「今回の事件と何かしら関係が？」

「あるかもしれない。無いかもしれないけれど。……お前、もう少しその夕菜って子のこと、調べられるかい？ 後、一応他の人が『桜』で頭の中がいつぱいになった理由とかも。あ、かず坊はいいよ。原因は、さくらだから」

弥助は、考え込む。どうやら、出雲の用というのはこれらしい。

夕菜のことは、孝一からもう一度聞けばどうにかなるかもしれないが……。

というか、かず坊が連れ去られた理由はさくらにあるのか。大方桜の木に関する言い伝えなんかを、熱心に話したのだろう。そういえば、かず坊が消える前、この喫茶店でさくらが、彼に何かを楽しそうに話していたような気がする。

「夕菜さんのことだけはどうかなるかも知れないです。他の人は、まあ一応やってみますがね。……骨桜の意図がよく分からないですが、もしかしたら、今回の事件は、彼女があちらの世界へ迷い込んだことから始まったのかもしれないですね。いや、まあ彼女が見た桜が、あちらの世界の桜だったらの話っすがね。本当に只の夢だった可能性もありますし」

バニラアイスを、口に入れる。仄かな甘味が口の中に広がる。面倒ごとといえば面倒だが、丁度「孝一や夕菜、そして他の被害者達の為にも何かしてあげたい」と思っていたところだ。

自分の力では、どうにもならない。が、出雲ならどうにかしてくれるかもしれない。悔しいけれど。……本当に助ける気があるのか、今いちよく分からないが。

そういえば、他の被害者達って誰だったっけ……。後でそれも調べないと。

などと思っていたら、また喫茶店の入り口の扉が開いた。からんからん、という涼しげな音。

弥助は立ち上がる。客を迎えねば。弥助は入り口へ向おうとした。そして、またさっきのように固まることになった。

入ってきたのは、さくらと紗久羅だった。

第十九話：桜の夢と神隠し（6）

*さくらの語り

紗久羅ちゃんと一緒に『桜（SAKURA）』に入ると、入り口近くのテーブル辺りに突っ立って、ぽかんと間抜けな顔になっている弥助さんと目が合った。私がこの店に来ることは珍しいことではないのに。何だか驚いているような、気まずそうな表情。どういふことかしら？紗久羅ちゃんと来たことが珍しいのかしら。確かに、紗久羅ちゃんと来たことは無かった様な気もするけれど、でも固まってしまう程驚くことでも。

私の隣にいる紗久羅ちゃんは「変な顔」と呟いた。そうね、かなり変な顔だわ。

とりあえず、座ってゆっくりお話でもしましょう。そう思って、私は自分が一番好きな席を目指して歩く。

「あら？」

弥助さんが立っている近くのテーブルに、出雲さんが思わず見とれてしまう位綺麗な姿勢で、優雅に座っていた。見れば、私も大好きなチョコレートパフェをちまちまと食べている。言い伝えに残る化け狐さんが、チョコレートパフェという近代的で乙女チックで可愛らしい感じのデザートを食べているなんて。私はちょっとそのギョップにきゅんと来た。

それにしても、何で弥助さんと出雲さんが一緒にいるのかしら。出雲さん、ここによく来ていたのかしら。実はこのお店の常連客で、弥助さんとも顔なじみだった……あり得ないとは言いつれないわ。けれど、弥助さんと出雲さんって気が合わない感じがする。相性が

悪そうな人ほど意外と気が合うということかしら。

「何で来たんすか」

何故、と聞かれても。何がそんなに嫌なのかしら？私がおこに来ることなんて、しょっちゅうあるのに。

私は、首を傾げる。

「何故って……紗久羅ちゃんとお話したいことがあったから、折角だからここでお茶でも飲みながらと思っただけです。変な弥助さん、私達がここに来ると困ったことでもあるんですか？」

弥助さんが、視線を逸らして何事かぶつぶつ呟いている。何を言っているのかさっぱり分からない。いつもは少し大きい位の声で喋っているのに、どうしたのかしら。

スプーンをテーブルの上に置いた出雲さんが、手を口元にやりながら、くっくくくと笑う。余程おかしいらしい。笑う姿も綺麗だけれど、何だか不安になる笑い声だ。

ひとしきり笑った後、出雲さんがこちらを見て、にこりと笑った。他人の隠したいことを嬉々として告げ口する子供の様に。

「自分が、私と同じ妖怪であることを、君に知られなくなかったんだよ、その馬鹿狸は。何でもぺらぺら喋ってしまふ私と一緒に居るところを見られたら、あつと言つ間に色々ばらされるからね」

そう言つて、高笑い。

え？

今、何て言つた？え、弥助さんが、え？ええ、ど、どういふこと？
弥助さんが。

弥助さんが……妖怪？狸？

私の頭は真っ白になった。漂白剤を頭の中に入れられて、すつきりしつかり真っ白にされたような。

何年も前から知り合いだった、弥助さん。ここに来る度にお話していた、一人っ子の私にとってお兄さんの様な存在だった弥助さんが。

え、えええ！？

「や、弥助さんがようか……ふがっ」

人生で五本の指に入る位の大きな声をあげて叫ぼうとした私の口を、弥助さんが思いつきりふさいだ。大きくてごっごつした手でふさがれると、苦しい。ものすごく苦しい。

「頼むから、大声で叫ぶのだけはやめてくれ、朝比奈さんに聞こえちまうだろうが！」

恐らく厨房いるだろう朝比奈さんに聞こえぬよう、小さな声で叫ぶ。相当必死らしい。そうねえ、弥助さん朝比奈さんのこと大好きですものね。でも、おじいちゃんにはばれなくていいのかしら。あれ、もしかしておじいちゃん、知っていた……？

苦しいから、うんうん頷けば、ようやく弥助さんは私を解放してくれた。ああ、空気がとても美味しいわ。チヨコパフェよりも、美味しく感じる。

「ああ、そっか。さくら姉は知らなかったんだよな。あたしはこの前の祭の時に知ったけれど。化け狸らしいぜ、そいつ」

紗久羅ちゃんは、すでに知っていたということ、少しも驚いた様子無く、弥助さんを指差した。私は、振り返っておじいちゃんを見た。おじいちゃんは、笑いながらこくこくと頷いている。やっぱ

りおじいちゃん、知っていたの？

それにしても、驚いたわ。まさか、弥助さんが妖だったなんて。酷いわ、私がそういう人達に会いたいこと知っていたくせに、今まで隠し続けていたなんて。

「ああ、もうだから。ったく、何でそうぺらぺらと喋るんだ、この口軽狐！」

「ふん、私が楽しければいいんだよ、楽しければ。お前やサクが、それでどうなるうと知ったことじゃないよ」

はつきりと、言った。本当に、いつでもどこでも堂々としているのね、出雲さんは。自分の道を、迷わず真っ直ぐ進む様は、尊敬に値する。尊敬はするけれど、真似はしたくないような気もする。

「あつしは、人間としてずっと接する予定だったのに、ああもう本当にあんた余計なことしかしないっすね、本当に！」

「お前は、余計どころか必要最低限の事もしないけれどね」

「うるせえ、この馬鹿狐！　いつかこの店に来たときは、七味唐辛子入りのカフェオレを出してやる！」

「おやおや、そんなことしていいのかい？　そしたら私は、お前の愛しの君に『あいつは客の飲み物に七味唐辛子を入れた』と言ってやるよ。文句はいえまい？　だって本当のことなんだからね」

弥助さんの精一杯の口撃は、出雲さんにあっさり跳ね返されてしまふ。弥助さんって力持ちではあるけれど、こういう口喧嘩とかは弱いよね。

「それにしても、驚きました。弥助さんが化け狸で、しかも出雲さんとお友達だったなんて」

「朝比奈さんにははつきり強く否定することは出来なかったけれど、さくら。あなたにははつきり言おう。誰が友達同士じゃ！」

今度は、弥助さんの頭ぐりぐり攻撃。痛い、痛いわ、弥助さん痛いってば。弥助さん、いつもこうやって私の頭をぐりぐりしたり、ぺちぺちはたいたり、ほっぺを引っ張ったりするのよね。沢山の人に「弄られ」と言われている彼に、こんなことされてばかりの私って……うう。でも私別に「弄られ」ではないと思うのよね。よく皆には言われるのだけれど。「弄られ」とか「天然」とか「いつも頭にお花畑が咲いている」って。

「全く、うるさいねえ。もう少し静かに出来ないのかい」

「誰のせいだと思っっているんだ。お前だろう、原因は……」

のん気にチヨコレートパフェを食べている出雲さんを睨みながら、紗久羅ちゃんが呟いて、ため息をついた。

「そつえば出雲さん、骨桜の空間に生身で入る方法とかは分かりましたか」

ぐりぐりされながら、聞いてみる。出雲さんは首を横に振った。

「いいや。そうすぐに分かることでは無いよ。後で、知人の爺さんに聞きに行くつもりだ。あの爺さんに頼るのは嫌なんだけれど、仕方無い」

その知り合いのおじいさんと会うのが、余程嫌なのか、美味しいチヨコパフェを頬張っているのに顔は、不味いものを食べた時の様なものになっている。出雲さんが知らないようなことも、知っている。きつと出雲さん以上に長生きしている方なのね。

「まあ、被害者のことについては、その馬鹿狸に押しつけておいたから、その馬鹿が想像以上の馬鹿で無い限りは、多少は新しいことが分かるだろう。……最初の被害者以外は、別段どうでもいい感じではあるけれどね」

「夕菜さんと、今回の事件が何らかの形で関わっている……ということですか？」

「さあ。偶然かもしれないけれどね。彼女が数年前に見たとかいう桜の木が、仮に骨桜だったとすれば……あり得るかもね、といった感じだよ」

出雲さんは、この世界と向こうの世界の境界が時々ぼやけ、人間があちらの世界へ行ったり、妖怪がこちらの世界へ迷い込んだりするところがある、ということ話を話してくれた。

そして、迷い込んだまま帰って来られなくなることもある、と。そうして姿を消してしまうことを、人々は「神隠し」と呼ぶのだと。

「後は、皆を連れて行った骨桜がどれであるか、特定するだけだ」

「それは簡単に出来るのか？」

「それを押し付けるのに丁度いいのがいるから。彼らに血眼になって、探してもらうさ。すぐに見つけられなかったら、あいつらの目を本当に血だらけにしちゃうだけさ、あはは」

「冗談だよな、おい」

紗久羅ちゃんはそう言うけれど。多分、冗談ではない。彼の笑顔がそう語っている。

「やた吉とやた郎って言う、私の使い魔なんだ。目を潰したくなっちゃう位可愛い奴らなんだよ」

「お前全然可愛いって思っていないだろう!？」

どんな子達なのか分からない、やた吉さんとやた郎さんとやらのことを思うと、なんだか涙が出そうになる。きつとこき使われているのでしょね……鈴ちゃんは割合可愛がられているみたいだけだ。

うーん、それとも妖の方々的には、そういうのが愛情というものになるのかしら。でも、弥助さんの顔が歪んでいるところを見ると、それでもなさそうね。

「ふふ、まあそんなことはどうでもいいんだよ。さて、私は帰るでしょう。帰りにいなり寿司を買って、ね。……真実は、もうそう遠くないうちに、分かるだろう。ふふ、私にこんな面倒くさいことをさせた骨桜にはたっぷりお礼をしなくてはね?」

あの、人の体を氷に一瞬で変えてしまう、冷たい笑みを浮かべて、出雲さんは立ち上がる。そして、おじいちゃんにお代を払うと店を静かに出て行った。

しばらく、季節が夏だということ忘れてしまう位、冷たい何か
が漂い続けていた。

*

出雲さんが去った後、私と紗久羅ちゃんは店の一番奥の窓側のテーブルについた。ここが一番お気に入りなのだ。理由は特に無いのだけれど。何となく、一番落ち着く。

窓から見えるのは、曹達水の空と、薄荷飴の色をした雲。そして、少し離れたところに、桜山が見える。確かに外は暑いけれど、景色

の色だけ見れば、とても爽やかで涼しげだ。

出雲さんが居なくなつて、少し落ち着いたらしい弥助さんは、私と紗久羅ちゃんに注文を聞いた。

「私はチョコレートパフェとアイスティーで」

「じゃああたしは、オレンジパフェとアイスカフェオレで」

「はいはい」

落ち着いてはいるけれど、酷く疲れた様子ではある。弥助さんは、そのまま厨房へ消えていった。

お客さんは、相変わらず私と紗久羅ちゃん以外、いない。元々そんなに多く人が来るわけではないから。だからこそ、ゆっくり落ち着いた時間を送ることが出来る。都会の喫茶店では、こうもいかないのかな、と思う。

注文したものを待っている間、私と紗久羅ちゃんは色々お喋りしていた。

「それにしても驚いたわ、弥助さんが化け狸だったなんて。確かに人間とは思えない、ものすごい怪力の持ち主だったけれど。大人の男の人が、何人も集まつてようやく運べる様な物を一人で軽々と持つてしまうこととかもあつたけれど。まさか、妖怪だったなんて……」

「何か、人間の姿でいる時間が長すぎたからだかなんだか忘れたけれど、元の姿に戻れないらしいぜ、あいつ。ものすごく大きな狸なんだって」

「ものすごく大きな狸……大きな狸。あらあら、居酒屋とかの前に置いてある信楽焼きの狸が真つ先に思い浮かんだわ」

などと言ったら、紗久羅ちゃんが飲んでいた水を噴出しそうになった。変なところに水が入ったらしく、ごほごほ咳き込んでいる。

「それ、あたしも思った……。ごほ、ごほ……。うう、ああ悪い」
おしぼりで、少しだけ濡れたテーブルを急いで拭く。やっぱり思うわよね、だって大きな狸なんてそれ位しか思い浮かばないんですもの。

「だよな！ でも実際どんな姿なんだろう。まじで、信楽焼きの狸みたいな姿だったら超うけるな」

弥助さんだったら、あり得るかもしれない。そんなことを、思ってしまった私がいる。

それにしても、本当に驚いた。自分の傍にいた人が、妖怪だったなんて。もう頭も心もまだこんがらがってしまっている。何度驚いたことを口にしても、未だ足りない。何度も何度も、同じ言葉を繰り返したくなる。

「本当に、驚いたの」

弥助さんと初めて会ったのは、いつのことだったろう。小学生位だっただろうか。あまり細かいことは覚えていない。けれど、何となく初めて会った日のことは覚えている。

いつもの様に、学校帰りにここへ寄った時のことだ。扉を開けると、おじいちゃんと一人の男性が楽しそうに話していた。見れば、その男の人はこの喫茶店の制服を着ている。

背は、とても高い。丁度夏頃だったから、制服も半袖だった。だ

からとても太くて、がっしりとした腕がしっかり見えた。TVで見かける格闘選手みたいだなと思った。

ぼさぼさした髪の毛は、肩くらいまで伸びていて、それを一つに束ねている。目はたれていて、とても優しくそうな顔をしていた。

男の人が私に気づいて、ゆっくり立ち上がってこちらへやって来る。そして、私の目の前で止まる。まだまだ背の低かった私を覆い隠す位、大きな人。けれど、少しも怖いとは思わなかった。

こんにちは。お嬢ちゃん

お腹に響く声だったけれど、怖いものではなくて、とても優しく暖かな声だった。

おじいちゃんが、笑う。

その人こそ、弥助さんだった。

今日から、ここで働くことになった、弥助さんだよ

力仕事とかの方がずっと得意そうな人が、何故ここで働くことになったのだろうと思ったけれど、とても良い人の様だったから、私は何だか嬉しくなった。

白井さくらです。宜しくお願いします

ああ、宜しくっす

そう言って弥助さんは、私の頭を優しく撫でてくれたのだった。とても大きくて、温かい手だった。

私は前以上にここへ来るのが楽しみになった。弥助さんは、色々

なお話をしてくれた。頭をぐりぐりしたり、軽く叩いたり、ほっぺをつねったり引っ張ったりすることもあったけれど、私は彼のこと大好きだった。お兄さんのように、思っていた。

そんな彼が、まさか。

「うう、驚いた、という感想しか出てこないわ」

「まあ、本当に驚いた時ってそんな感じだよな。何も言えないというかさ」

「ほら、注文の品、出来たっすよ」

弥助さんが、注文した品を運んできた。私の前には、チョコレートパフェとアイスティー。紗久羅ちゃんの前にはオレンジパフェとアイスカフェオレを。そのまま去るのかと思つたら、弥助さんは私の隣にどかと座つた。私は慌てて右へ詰めた。

「何だよ、弥助。仕事はいいのか」

「とりあえず、今のところは。……あ、あつしが邪魔だったらどきますよ。女の子同士のお話に混ざるのも悪いっすから」

「あ、でも弥助さんと少しお話したいこともあるかもしれないです。あの、弥助さん……狸……だったんですね……ああ色々聞きたいのですが、また今度の機会に沢山聞くとして。ええと、出雲さんに被害者さん達のことについて調べて欲しいって言われたんですよ」

「あつし、後日延々と事情聴取されるんすか……うええ……カツ丼食べながらの持久戦になりそうっすね、あんたとそういう話をするとなると。ああ、まあ一応な。あの化け狐からしてみれば、些細な

ことも知らないと気が済まないんだろうよ。だったら自分で調べればいいのに」

ソファにもたれて、足を大きく広げ、心底面倒くさそうに。それはいいのだけれど、弥助さん、あまり足を広げないで。座りにくいわ。

「私の所属している文芸部の部員さん達がそれぞれの被害者さん達と、お知り合いだったんです。……結局重要な話は聞けなかったのですが、一応少しでも参考になったら……」

私は、弥助さんに櫛田さんや御笠君、深沢さんから聞いた話をしてみせた。

恋人に振られたことを嘆き、彼とのツーショットの写真を握りしめながら、大泣きしふさぎこんでいたという女子高生。

知人に紹介された仕事場の面接に受かったという男性。

愛犬を亡くし、その犬を自宅の庭にある木の下に埋めてやったという男の子の話。

弥助さんは、それを熱心に聞いていた。

「成る程ねえ。骨桜は、現実から逃避しようとする人間なんかも割合好むっすからねえ。恋人に振られた子に、犬を亡くした子供……辛くて、夢の世界へ逃げ出したかったのかもしれないっすね。更にその出来事と桜が何らかの形で関わっていた、かも。仕事が決まったという人も、まあ新しい仕事に多少不安があったのかもしれないっすね。ま、詳しいことはあっしがばっちり調べるっすよ」

ほんと自分の胸を叩いた弥助さんは、やっぱり頼れる兄貴分といった感じだった。

けれど、一体どうやって調べるのかしら。

探偵や、サスペンスに出てくる主人公達のように、聞き込みをするのかしら。上手くいけば、重要なことが聞けるかもしれないけれど、失敗すれば只の不審者だわ。サスペンスでは、殆ど面識の無い主人公相手に、都合よくぺらぺら色々なことを話しているけれど……。

「まあ、あんたらはあまり難しいこと考えずに、いつも通りでいればいいんですよ。面倒なことは、あの馬鹿に押し付ければいいですよ。それじゃあ、あっしはこれで」

立ち上がって、厨房へと消えていった。

確かに、私達に出来ることは殆ど無い。出雲さんや弥助さんに頼るしかないわね。でもそれだけじゃ、何だかもやもやした気持ちは晴れないから。

紗久羅ちゃんと色々話せば、少しは良くなるかもしれない。

私は、ぱくりとチョコレートパフェを食べる。あっさりした味のクリームに、濃厚なチョコレートソース。チョコがかかったスティック、さくさくコーンフレーク、香り豊かなバニラアイス。私は、このチョコレートパフェが大好きだ。変に甘すぎないから、ぺろりと平らげられるわ。

紗久羅ちゃんの食べているオレンジパフェは、その名の通り、オレンジ尽くしのパフェ。オレンジ果汁入りのさっぱりした味のクリーム、シロップ漬けされた瑞々しいオレンジが沢山入っていて、下のほうには鮮やかな色の、キューブ型のオレンジゼリーが沢山詰まっている。夏だけにでてくる、爽やかで甘酸っぱい味のパフェ。これまた、美味しい。

「うん、美味しい。ひんやりしていて、いいなあ。最近暑くて適わん。これからもっと暑くなるかと思うと、嫌になっちまうよなあ」

「そうねえ。私は、暑い日はここで冷たいものを食べたり、三つ葉市にある図書館に行ったりするわ」

「あたしは家の中でだらつとしていたかなあ。この時期の店番は地獄だぜ。冷房も何もないところに居なくちゃならないから」

「大変ねえ。でも、紗久羅ちゃんはえらいわ。ちゃんとお手伝いしているんですもの」

一夜は、部活とかがあるとはいえ、お手伝いとか全然していなさそうだわ。そういうの何より面倒くさがるタイプですものね。しばらく、一夜の声を聞いていない。顔も見えていない。いつも何だかんだ行って顔合わせることが多いから……何だか寂しいわね。

今頃、彼は骨桜の木にもたれながら、眠っているのだろうか。桜の木の下で眠る姿を想像してみる。とても幻想的だけど、どこか恐ろしい。一夜達からエネルギーを奪って、咲かせる花びらの色を鮮やかにする桜……花びらの落ちる度に、木の中にいる核が笑う。くすくすと、無邪気でそれでいて艶やかな声で。

「綺麗な薔薇には棘がある。……綺麗な桜には毒がある」

「ん？ ああ、骨桜のことか……。全く、結構えぐい奴だよな。そいつの木の周りは骸骨だらけなんだろう？ 土の中に埋まっちゃったのもいるんだろうなあ。犬にここ掘れわんわんって言われても絶対掘りたくないな、骨桜の周りは」

「骨桜もより生き生きとする為には、養分が必要なんでしょうけれ

ど。でも、やっぱりだからといって、一夜達を放っておくわけには
いかないわ。我儂かもしれないけれど」

「だなあ。しかし、こんなことを喋っていること位しか出来ないで
いうのも、何だかなあつてやつだよな。まあ動きようがないし、動
いても何も出来ないんだけどなあ。あんな奴らの相手なんてやって
いられないよ。あたしは。……でもこれからは、ずっとああいうの
と関わっていかなくちやいけないんだよなあ」

と、ため息。あいつらというのは、多分紗久羅ちゃんが鬼灯夜行
というお祭で出会った妖達のことを言っているのだろう。

「私は、空想の世界にのみ存在していたような人達と会えると思う
とわくわくする面もあるのだけれど。不思議な物語は大歓迎。でも、
やっぱり、そうよねえ……。うん。異界へ足を踏み入れる、というこ
とは私達の予想以上にとんでもないことなのかもしれないわね」
私は、アイスの部分をすくって食べた。口の中だけでなく、体中
が冷たくなる。

「そうだな。うーん……。夕菜って人が見たのがただの桜じゃなくつ
て、もし骨桜だったとしたら……。やっぱり今回の事件と関係あるの
かな？」

「どうなのかしら？ 夕菜さんがその光景を見たのは何年も前の話
なのよね。でも攫われたのはつい最近。キャンバスにその時見た風
景を描いている途中。攫われるのだったら、すぐに攫われてしまい
そうなものだけれど……。やっぱり、こちらの世界と向こうの世界が
はつきり分かれているせいで、夢と自分の空間を繋げることが難し
かったからなのかしら」

「難しかったのに、あたしがあっちに行ったらせいで、繋げやすくな

つて、連れて行かれちゃったのかな」
紗久羅ちゃんが頭を抱える。

「でも、あちらの世界へ足を踏み入れた人に、消えない匂いがついてしまうのだとしたら、当然夕菜さんにもついたのでしょうか？ それとも、滞在時間と異形を引き寄せる力の強さは比例するのでしょうか？ 或いは、夕菜さんは向こうの世界へ足を踏み入れていなかったのか。本当に、ただの夢だったのか」

「ああ、分からん！ 頭を使うのは苦手なんだよ、あたしは！」

「糖分をとれば、頭も冴えるかもしれないわ。ほら、目の前には糖分が沢山あるわ」

「摂っても分からん！」

その後は、これとっていい考えも思い浮かばず、話はどんどん逸れていき、最終的には全く今回の事件とは関係ないことを話して、私達は別れた。

美味しいデザートを食べて、少しすっきりしたけれど。やっぱりまだまだ謎は残っているわね。

それから数日後のことだった。

私は夢を見た。真っ白な世界に、人が立っている。長い黒髪の若い女性と、セミロングの髪の高校生位の少女、小学生位の男の子。

……そして、一夜。

皆の後ろに、誰かがいる。多分女性で、顔はよく見えない。その人はふわふわと宙に浮いていた。髪も袖も、ふわふわ広がっている。

彼女達の方へ向って歩いていて、男性の後姿が見えた。どこか見覚えのある感じ。

「ゆうな」と呟く声が、響く。ああ、きっとあの男の人は孝一さんなんだろう、と思った。

これで、きつともう終るわ。もう、大丈夫よね……きつと、きつと

宙に浮かんでいた女性が、ほっとした様な声で、そう言ったのが聞こえた。何が大丈夫なのか、さっぱり分からない。

それだけ。

時計がけたたましい音をあげて、鳴ったから、私の目は覚めてしまった。

じんわり汗の浮かぶ額を拭う。さっきのは何だったのかしら。

あまり今回の事件のことを考えすぎていたから、夢に出てきたのかしら。不思議な夢だった。皆の下へ、うっん、夕菜さんを目指して進む孝一さん……あれがもし、夢でないとしたら。

私は嫌な予感がした。

そして、その予感は的中することになる。昼過ぎに、弥助さんから電話があった。電話の主は弥助さんで、電話に出たお母さんに、私に代わるよう言ったらしい。

私は何だろうと思いつながら、電話に出る。

「もしもし？ 弥助さん？ どうか、なさったんですか」

「孝一さんが、いなくなった！ 多分骨桜の仕業だ……！」

私は、受話器を落としそうになった。弥助さんの声は、とても悔

しそうだった。それならば、あの時の夢は、夢であって夢でなかったのかもしれない。

私は、急いで紗久羅ちゃんに電話をした。紗久羅ちゃんは「えっ！」と声をあげて、今すぐ私の家まで行くと言った。

私の家の前で合流して、二人で弥助さんの住んでいるアパートで行くことにした。

*

弥助さんは、町の中心の住宅街からやや離れた場所にある、古い三階建てのアパートに住んでいる。私は何度か、遊びに行ったことがあった。

ちなみに今日は、お店は定休日だ。

元の色が分からない位錆びたてすりのついた階段を、急いで上がる。踏む度にみしみしと、不気味な音を立てる。何だかいずれ重みと衝撃に耐えられなくなって、壊れてしまいそう。

弥助さんの部屋は、二階の一番奥にある。ドアの左横についている郵便受けのネームプレートには『じょうご庄司弥助』と書かれている。この庄司っていう苗字は、一応無いと怪しまれるからってことで適当につけたものなのかしら。妖に苗字があるとは思えないし……。

インターホンを鳴らすと、誰かの呻き声の様な音が鳴った。多分、壊れている。

すぐに、ドアが開いた。弥助さんは白の半袖のTシャツに、紺のスポンというとてもシンプルな格好をしていた。

「いらつしゃい。おや、紗久羅つ子も。まあ、とりあえずあがりなさい」

おじゃまします、と一声。玄関をあがると短い廊下がある。左側には台所、右側にはトイレとお風呂。廊下を進むと、小さな部屋。

部屋は散らかっておらず、割と綺麗だ。弥助さんは、ずばらに見えて、そういうところは意外ときつちりしている。

部屋の真ん中には折りたたみ式のちゃぶ台がある。

「とりあえずその辺に座ってくれ」

私と紗久羅ちゃんは、ちゃぶ台を囲むようにして座った。弥助さんも、あぐらをかいて座った。

「おい弥助、変な気を起こして、あたしらにいやらしいことするなよ」

「しないっすよ。あんたらみたいな子供なんて、誰が相手にするかってんだ」

「そうよ、紗久羅ちゃん。弥助さんがそういうことをしたいと思っているのは、朝比奈さんだけなんだから」

と言ったら、弥助さんに思いつき殴られた。一瞬、お花畑と川が見えた。紗久羅ちゃんが大丈夫か！と叫びながら私の肩を掴んで揺さぶった。冗談なのに……。

「全く、これだからガキ共は。エ口話に花咲かせやがってからに。

……あっしは、あんたらを、エ口話をする為に呼んだ訳じゃないからな！」

確かに、そうね。私も別にいやらしいお話をしたい訳ではない。

話は、本題に入る。

「すっかり塞ぎこんでしまった孝一さんを心配して、友人達が彼の家遊びに行ったそうなんすよ。そして、そのまま友人達は泊まることになった。ところが次の日の朝、孝一さんがいつになっても目

を覚まさない。もしかして、これは不味いんじゃないのか？ そう思った矢先に……」

消えた、らしい。そして、彼が眠っていた場所には桜の花びらが……。

何でもその友人の一人がこのアパートの住人だったらしく、弥助が外をふらふらしていたら、その友人が顔を真っ青にしながら歩いているのを見つけた。何事かと思って声をかけた。そして、この話を聞いたという。

孝一さんの頭の中は、夕菜さんと、夕菜さんをさらったかもしれない桜の化け物のことでいっぱいだっただろう。ずっとそのことを考えていて。そしてそれが結果的に骨桜を引き寄せてしまったのだ。

「出雲にも後で言うておかないとな。まああいつのことだから、言っても『また増えたのかい？ 面倒くさいなあ』と言って終わりだろうがな」

そうでしょうね。出雲さんからしてみれば、恋人を思って後を追う人の気持ちなんて分からないでしょうし、どうでもいいものですよ。人数増えすぎ、面倒くさい、やっぱりやめる……とか言いそうな気もする。

「まあ、今まで攫われなかったことの方がおかしいって位、落ち込んでいたからなあ……」

けれど、悪いことばかりじゃない。他に報告することがある、と弥助さんは続けた。

「一つ目は、夕菜さんやかず坊を抜かした他の人達が、骨桜に攫われるほど桜のことを考えていた訳です」

「え、もう分かったんですか」

これ位、お茶の子さいさいですよ、と言いながら弥助さんはポケットから黒い手帳を取り出した。どうやらそこにメモしてあるらしい。

「まあ、この前さくらが部員から聞いたって話自体、もう殆ど答えのようなものだったすよ。まずは、二十四歳の男の人。彼が、今度就職することになった仕事場と言うのが……スーパー『さくら』だったんすよ」

言われて、私と紗久羅ちゃんは「ああ」と納得の声をあげた。というのも、その店の外の水色の壁（出入り口の辺り）には、これでもか、という位沢山の、見事な桜の木の絵が描かれているからだ。おまけに、店内には一年中桜の花がついた枝のレプリカが飾られている。ポイントカードの名前は「さくらカード」だし、店長の苗字も「佐倉さん」と、桜尽くしの店なのだ。私は桜の花が好きだから、あのスーパーも、好き。もっと近いスーパーがあるのに、わざわざあそこで買い物をする時もある。

きつと、新しい仕事場である、桜の木の絵が描かれた、ある意味一度見たら忘れられないだろうあの店のことを、ずっと考えていたのでしょうか。きつと、新しい仕事場で働く前ってとても緊張するでしょうし、そのことばかり考えてしまうでしょうから。

「はい、そして次。今度は女性高校生な。恋人と別れて、写真握りしめながらおいおい泣いていたとかいないとかの。まあ、こちら辺は喫茶店に遊びに来た、その子とたまたま同じクラスで友達だったという子達から、さりげなく聞いたんですけれど。何でも、二人は中学の時から付き合っていたとか。で、その二人の記念すべき初デートというのが、桜山だったらしいんですよ、これが」

「え、初デートの場所が、山……？」
普通色々な店とか、遊園地とかじゃね？と首を傾げる。

「まあ、丁度桜の花が満開の季節だったらいいすから。あの時期になると、桜山は一面中ピンクになるから、まあ頭の中ピンク色なバカップルには、丁度いい場所だったんじゃないっすかねえ」

そこまでいうか、と紗久羅ちゃんが返す。確かに、桜山は桜が咲くと、一面中薄桃色になる。淡く、美しく幻想的な色が山を神秘的なものへ変えていく。普段は静かで儼かな空気の漂わせているのに、普段の桜山がどこか神々しい男性的なものだとすれば、その桜の季節は美しく華やかな女性的なものへと変わる。

私は、普段の桜山も好きだけれど、あの時期の桜山も大好き。不思議な世界へ、迷い込んでしまった気がするから。

「まあ、そこで撮った初めてのツーショット写真が、彼女にとって宝物だったようっすねえ。一番の思い出が、きつとその時のデートだったんでしょね。けれど、結果的に二人は別れることになってしまった。……写真を見て、思い出したんでしょねえ、その時の楽しかった思い出を。桜の木の下で笑いあった時のことを」

まあ、これが理由だろうな、と弥助さんは付け加える。

「そして、最後に九歳の男の子っすね。亡くなった愛犬は、庭の木の下に埋められたって言っただろう？ その木というのが」

「桜の木……だったんですか？」

私の言葉に、弥助さんがゆっくり頷いた。

いつも、一緒に庭や公園等を駆け回っていたという。きつと春は、庭の桜の花びらがふわふわ降り注ぐ場所で、大好きな犬と、笑い、

手や足を思いつきり動かして、遊んでいたのだろう。
その時のことを、思い出したのだろう。

「お母さんに、桜の木の下から、ひよっこり死んだ犬が現れて、桜の花びらが舞う庭で遊ぶ夢を見たって言っていたそうっす。きつと未だ、信じたくなかつたんでしょね、犬が死んでしまったことをもしかしたら、また出てきて自分と遊んでくれるかもしれないって……。そう思う位、大切だつたんすねえ……」
そんな純粹な思いが、骨桜を引き寄せてしまったのだろう。

三人共、桜を強くイメージする様な出来事がつい最近あつた。一夜も、夕菜さんも、孝一さんも、同じ様に。

弥助さんが、お茶とお煎餅を出してくれた。濃すぎず薄すぎない、飲みやすい味のお茶だった。今は暑い、ということ、冷やしたお茶だ。

「後は、夕菜さんっすね。孝一さんが居なくなる数日前、あつしは彼に会つたんすよ。彼からは連絡先を聞いていたんですよ。人が立て続けに居なくなる事件は気になってましたし、何より大分落ち込んでいた彼を放つて置けなかつたから」

弥助さんは、とても優しい人で、困つた人を見捨てておけないのだ。自分の都合は後回しにしても、困っている人や悩んでいる人を助けようとする。よく言えば優しく、悪く言えばお人よし。

外見などもそうだけれど、内面も出雲さんとは正反対だ。

「まあ、それで会つた時にこれまたさり気なく、夕菜さんについての話を聞いたんですよ。そしたら孝一さんは、一冊のノートを見せしてくれた。何でも、夕菜さんは絵を描く前に、ノートに絵のイメージやそれに関係したエピソード等を書く習慣があつたらしいんです。夕菜さんが居なくなつた後、彼女の部屋に入れてもらった時見つけ

て、思わず持ってきたらしいです」

そこには、展覧会に出す為に描いていた、あの桜の絵に関することも書かれていた。

「あつしも読ませてもらつたつす。まあ、本人に無断で……というのは、ちょっと気が引けたつすけれど」

日記帳とかではないとはいえ、個人的に書いたものを男の人達が勝手に見て、挙句他人にその内容を喋るといふのは、確かにどうだろうと思いつつも、やっぱり気になってしまふ。ごめんなさい、夕菜さん。

「そこには、数年前に見た桜の木に関することなどが書かれていましたよ。……十中八九、彼女が見たというのは、あちらの世界の桜。しかも骨桜である可能性が高い」

弥助さんは、そこに書かれていたことを、孝一さんが少しその場を離れている隙に簡単にメモしたらしい。気が引けたと言っている割にはちやつかりしているわね……まあ、そういうところも弥助さんらしいかも、と思うわ。

弥助さんは、そのメモを私と紗久羅ちゃんに見せてくれた。一度ささつとメモしたものを、読みやすいように書き直したらしく、とりあえずすらすらと読める程度にはなっていた。

『思い出。山を歩いていると、突然浮遊感に襲われた。エレベーターに乗っている時の様な。気づいたら、目の前に大きくて立派な桜の木。もう桜の季節は終わったはずなのに。こんなに綺麗な桜を私は見たことが無かった。しばらく我を忘れてぼうつとその桜を見つめていた。またはつと我に返った時には、その桜の木は消えていた。きつと白昼夢だったのだろう。』

けれど、その桜を見た日の夜から、私は不思議な夢を見るようになった。あの桜の木が目の前にあって、そしてその木の前に綺麗な女の人が居た。女の人は、泣いていた。よく分からないけれど、その女の人は桜の精だったらしい。女の人は、自分が宿る木を傷つけられ、自分の体も一緒に傷つけられてしまったことを嘆いているらしかった。私は、女の人と、色々話した。女の人は、本当は自分は恐ろしい化け物で、人間や他の化け物を夢で誘っては捕まえて、その後その人の体も捕まえて、食べてしまうのだと言った。それが本当のことかなんて分からなかったけれど、私はその女の人のことを少しも怖いと思わなかった。

そんな不思議な夢を毎日見た。少しずつ、その女の人と仲良くなった。……けれど、しばらくしてその夢は、見なくなった。思い出の風景を描くという課題が出されるまで、そのことを忘れていた。またあの人と会って話してみたい』

本当は、もっと細かなことが書いてあったらしいが、流石にそこまでメモ出来なかったらしい。けれど、大筋はこんな感じだったと弥助さんは言う。

不思議な夢。けれど、その夢は夢であって夢でなかった。夕菜さんは、数年前に異界へ誤って迷い込んでしまい、（恐らく）骨桜の姿を見た。そしてその夜、骨桜に導かれた。そして、骨桜の核である女性と親しくなった。けれど、夕菜さんはやがてその夢を見なくなった。他の事に夢中で、骨桜の事なんて考えている余裕がなかったからかもしれない。

けれど、展覧会の作品を描く時にその時のことを思い出した。そしてその思い出を、頭の中で巡らせながら、夢中になって桜の絵を描いた。

それが、骨桜を再び呼んでしまったのだろうか。

数年前は、骨桜は夕菜さんそのまま攫って食糧にすることもなく、ただ普通に語り合っていた。けれど、今回は夕菜さんを帰さなかった……何故？何故、骨桜は夕菜さん以外の人間も攫ったのかしら。

夢で見た光景を、思い出す。

「私、今日変な夢を見たんです」

何をいきなり言い出すんだろう？そう言いたげな表情で、弥助さんと紗久羅ちゃんが私を見る。

「真つ白な空間に、骨桜に攫われたらしき5人と、多分骨桜の核である女性の姿があつたんです。そして、皆が居る所へ、孝一さんが歩いていったんです。その時、女の人が言ったんです。もうこれで終わりだ、きつともう大丈夫だつて……」

「ふうむ。それがただのさくらの夢でなくて、本当のことだったとすれば……。骨桜はこれ以上、人を攫うつもりは無いってことっすか？しかし、きつともう大丈夫ってどういう意味っすかね？大丈夫って言葉が何か引っかかるっすねえ」

無精ひげの生えている顎を、さすりながら弥助さんが考え込む。

もう終わり、大丈夫。

「全く、何を考えているんだか。あつしにはさっぱり分からないっすよ。まあ、これで大分真相には近づいてきたっばいし、後はあの馬鹿狐が骨桜の居場所と、骨桜の持つ空間へ直接行く方法を見つければ、解決っすね」

そして、大あくび。

結局、骨桜の目的が分かるのは、骨桜の空間に乗り込んだ後のことになりそうね。

ああ、皆大丈夫かしら。時間が経てば経つほど、取り返しのつかないことになっていきそうで、怖いわ。

*

それから、三日後のことだった。

また喫茶店『桜』SAKURAで紗久羅ちゃんとお茶を飲んでいた時のことだ。

一日、また一日と過ぎていく毎にどんどん胸が苦しくなっていて、本にも宿題にも集中できなかった。誰かとお話して、気を紛らわせるしかなかった。そんな時だった。

涼しげな音と共に、出雲さんが入ってきた。もやもやした心や焦る気持ちに押しつぶされそうな私や紗久羅ちゃんと違って、出雲さんはいつも通りの笑みを浮かべている。

入り口に背中を向けている状態の紗久羅ちゃんは、出雲さんに最初気がつかなかった。出雲さんは、にやりと笑って、紗久羅ちゃんの肩に、ぽんと手を置いた。

余程冷たい手だったのか、紗久羅ちゃんの体がぶるつと震えた。

「ぎゃー！ 馬鹿狐！？ 何の用だ、というか何でこんな真夏でもお前の手はそんなに冷たいんだ！」

「そんなに冷たかったかい？」

「井戸水をぶっかけられたかと思った！ いや、というか氷だな、

氷を肩に置かれたかと思った！」

「そうかな？ そんなに冷たいかねえ……。まあ、私の美しい手が暖かいか冷たいかなんてどうでもいいんだよ。ふふ、お待たせ二人共」

出雲さんが、微笑む。窓から優しく降り注ぐ光を受けて、怪しくぎらぎらと輝いていた。

「かず坊達を攫った骨桜の居場所が分かった。……生身で骨桜の空間へ乗り込む方法もね」

第二十話：桜の夢と神隠し（7）

＊
お代を払って、私と紗久羅ちゃんは、静かに歩く出雲さんの後に
ついていった。

念の為に通しの鬼灯を持っていて良かったわ。
拭っても拭っても、体を伝う汗は、暑さからくるものなのか、それとも緊張からくるものなのか。もう分からない。紗久羅ちゃんは何も喋らず、私と同じようにひっきりなしに汗を拭っている。

けれど、どれだけぎらぎらと太陽の光が降り注いでも、出雲さんの手も足も髪も、氷の様な冷たい輝きを放ち続けていた。あの人の体に温もりが宿ることは、どんなことがあってもないのだろうと思
った。

住宅街を抜け、桜山に近くなると少し涼しくなってくる。空の青と山の緑が、目を介して熱を奪っていく様だった。それはとても心地よくて、緊張していた心も落ち着いていく。

けれど、桜山神社の鳥居を前にして、通しの鬼灯を握りしめた途端、和らいでいた緊張感がぶり返してきて、吐き気がしそうになる。涼しいを通り越して、寒さすら感じる。とても綺麗で、私が一番好きな幻想的な光景であるはずなのに、何度見ても目の前に広がるそれは、私を不安にさせた。

曖昧で、不完全で、どの世界にも属していない……境界であるその道。その得体の知れない感じが人を不安にさせるのかもしれない。この階段の先にあるのは、異界だ。自分の常識の通用しない、自分が居てはいけない世界だ。

だから、恐ろしいのだ、きつと。

どれだけ、そういう異界へ行くことを望んでいても、心の奥底にある何かが、そう思わせるのだ。私は、あちらの世界へ行くことを何より望んでいたし、あちらの世界に憧れていたのに。それでも、恐ろしく思うのだ。私でさえ恐ろしいと思うのだから、紗久羅ちゃんももっと恐ろしいと思っているのかもしれない。

けれど、先へ進まなければ物語は進まない。

私と紗久羅ちゃんは、階段を上る。階段を一つ上がる度に、体中の温もりが奪われていくようだ。出雲さんは、何のためらいもなく進んでいる。それはそうよね、だって出雲さんにとっては、今向っている異界こそが、本来の世界なんですものね。

鬼灯を、ぎゅっと握りしめる。優しい温もりが、少しだけ不安を和らげてくれる。

階段を上りきり、鳥居をくぐりぬける。扉の前に、鈴ちゃんが立っていた。出雲さんの姿を見ると、にこりと笑って、とことこ駆けつけてくる。出雲さんは、笑って鈴ちゃんを抱きしめ、優しく頭を撫でた。

「ただいま、鈴」

「おかえり、出雲」

「こんばんは、鈴ちゃん」

笑って、声をかけてみる。けれど鈴ちゃんは無言で、小さくお辞儀をしただけで、そのままそっぽを向いて、扉を開けた。紗久羅ちゃんも私の隣で「生意気な奴」と言った。あら、とつても可愛らしいと思うけれど……。もっと仲良くできたらいいな。

出雲さんがまず館の中へ入っていく。続いて私と紗久羅ちゃんが

入り、最後に鈴ちゃんが入って、扉を静かに閉めた。

テーブルの真ん中にはお皿があつて、その上には切り分けられたカステラが置いてある。後は、小さめのお皿が三つ。

「さあ、座りなさい。カステラも、遠慮なく食べておくれ。なかなか美味しいよ」

出雲さんがそういうなら、遠慮なく。私はカステラを一つ取って自分の目の前にある小皿に置いた。そしたら、鈴ちゃんが扉を開けて入ってきて、私達の前にミルクティーの入ったカップを静かに置いた。鈴ちゃんは、やっぱりその後特に何か話すわけでもなく、静かに出て行った。

「鈴ちゃん、偉いですね。あんなに小さいのに、しっかりお仕事していて」

「まあ、小さいといつても、君達よりはずっと長生きしているからねえ。あれでも、二、三百年位生きているんだよ。正確な年齢は知らないけれど」

そうか。見た目は小さな子でも、鈴ちゃんは妖なのよね。二、三百年前……私も、私のお母さんやおじいちゃんも生まれていなかった頃……。私達よりずっと長く生きている彼女にちゃん、なんてつけたら失礼かしら。

「あいつ、出雲以外には全然懐いていないよな。話かけてもそつぽ向いたり、そつけないこと言ったり。たまにぼそつと毒舌吐いたりさ」

紗久羅ちゃんは、私よりは鈴ちゃんと付き合いが長いらしい。きっと、店番をしている時に会ったことが何度かあるのだろう。忌々しそつに言つて、カステラを手に持ち、食べようとする。

出雲さんが静かに笑った。

「まあね。あの子は、人間はあまり好きではないみたいだ。あの子は化け猫なのだけれど、普通の猫だった時代もあった。けれど、黒猫だったからねえ……まあ嫌な目によくあつたらしい。妖となった後は後で、悪い人間に捕まって酷い目にあつて。まあ、それを私が助けてあげたのだよ」

紗久羅ちゃんのカステラを口元に運んでいた手が、止まった。

「その悪い人間は懲らしめてやったけれど」

「まさか、殺したとか？」

出雲さんが、まさか、と言ってにやりと笑った。とてもいい笑顔で、あまりにいい笑顔すぎて、逆に気味が悪い。

「殺す？ あはは、そんな訳ないじゃないか。それでは、あまりにつまらない。彼があの手この手で手に入れた財を全て奪って、後は再起不能になる位まで色々してあげただけだよ」

流石というか、なんとというか。

桜村奇譚にも出雲さんを怒らせたたり、彼の機嫌を損ねたりすると、後で酷い目にあつと書かれている。命を奪うのではない。ただ「いつそ殺してくれ」と叫びたくなるようなことをするのだ、と。ある人は大切なものを奪われ、ある人は濡れ衣を着せられ、ある人は光も音も一切無い空間に閉じ込められたという。

「まあ、人間に限らず、あの子は他人と接することが苦手みたいだけれど。ふふ、でも私にはよく懐いているんだよ。もう、本当の子は可愛いよ。食べちゃいたいくらいだ」

出雲さんが言うつと、冗談が冗談に聞こえない。いつか本当に取って食べてしまいそう。

カステラを一口、食べる。ふんわりしていて、それでいてしつとりとした生地。甘い砂糖と、卵の味がした。ああ、これ美味しいわ。お口の中が、幸せ。

「ふうん、色々苦労していたんだなあ、あいつ。まあ、それでもあたしは生意気なガキは嫌だけどな。あたしも生意気なガキだけど。……って、あの化け猫のことはどうでもいいんだよ、一瞬忘れそうになっていたけれど……馬鹿兄貴！ 馬鹿兄貴達の居場所が分かったんだよな？ 後、骨桜の空間に入る方法って言うのも！」

あ、忘れていたわ。そういえば、それを聞くためにここに来たのよね。

出雲さんが、立ち上がった。

「ああ。私の忠実な使い魔が調べてくれたよ。……折角だから呼んでこよう。ちよっと待っていてね」

テーブルから離れ、涼しい風の入り込む窓へ向う。

何か笛の様なものを取り出し、それを吹いた。音は聞こえない。人間には聞こえない音なのかもしれない。そうした後、出雲さんは手招きして私達を呼んだ。窓の外を見つめている出雲さんのところまで行って、彼の隣に立つ。

窓の外に見えるのは、無数の木。相変わらず幹も枝も葉も、黒く染まっている。

そんな木々の間で、何かキラッと光った。その光は少しずつ近づいてきて、やがて木々の間を抜けてこちらまで飛んできた。何か光るものをつけた、黒い塊だ。目の前に広がる木々の様に真っ黒なそれは、鳥だった。きつと鳥だ。一羽ではなく、二羽いる。

二羽の鳥は鳴き声をあげながら、ものすごい速さで部屋の中に向かって突っ込んできて、出雲さんが普段使っているであろう、紙やペン、本

がたくさん置かれた机の上に降り立った。

その鳥達を見た紗久羅ちゃんが、ひいっと小さな悲鳴をあげる。よく見てみれば、二羽の鳥の足は、三本だった。三本足で鳥といふことは……八咫鳥やたがらす? そういえば、出雲さんは使い魔達の事をやた吉とやた郎と呼んでいたわね。

光の正体は、勾玉と翡翠の玉を連ねた首飾りだった。勾玉の色は、それぞれ違っていて、片方は赤い勾玉でもう片方は青い勾玉だ。

「こいつらが、やた吉とやた郎だよ。赤い勾玉の方がやた吉。青い勾玉の方が、やた郎」

「ああ、この二人が旦那の言っていたお嬢さん方? 二人共、サクラって名前なんだよな、確か」

やた吉君が口を開く。彼は、人の言葉を話した。インコやオウムの様な声ではなく、小学生位の男の子の声だ。はきはきしていて、とても聞き取りやすい。鳥から発せられた声とはとても思えない。なんていったら鳥に失礼かしら。

首を傾げるやた吉君は何だかとても可愛らしく見える。鳥の瞳つて、よく見るととてもつぶらでキュートなのよね。

「ええ、そうよ。私のことはサクと呼んでくれて構わないわ。宜しくね、やた吉君。あ、君付けでいいかしら」

「構わないよ、呼び方なんて何でもさ。呼び捨てでも、おいら全然気にしないよ」

「俺も、気にしないよ」

と言うのは、やた郎君。やた吉君よりやや落ち着いた声だ。

ところで、紗久羅ちゃんといえば、まだ三本足でおまけに人間の言葉を話す二羽に慣れないのか、嫌っているはずの出雲さんの背中にひつついていた。そこから恐る恐る顔を出し、ちらちらと様子を見ている。

「ただ足が一本多くついているだけなのに、何がそんなに怖いんだい」

「足が二本と三本じゃ大違いだ。それに人間の言葉を話すなんて、おかしいよ」

「え、でも鳥もインコ達と同じように、人間の言葉を覚えて喋ることが出来るらしいわよ」

TVで、喋る鳥を見たことがある。紗久羅ちゃんが、小さくなっ

た。

「う……」

「こいつらは無害だから安心おし。少しも恐くなんてないよ。君よりずっと可愛いし、乱暴じゃないしね」

鳥と比べられた挙句、鳥以下と言われたことにカチンと来たらしく、紗久羅ちゃんが出雲さんの背中を勢いよく蹴飛ばした。

「うるせえ！ ふん、こんな鳥達少しも恐くないよ！」

紗久羅ちゃんは見事にいつもの紗久羅ちゃんに戻り、やた吉君とやた郎君を睨みつけた。今度は、二羽が怯える番だった。

「何か、恐い……」

「巫女の桜みたいだ」

「え、やた吉君達は巫女の桜さんを見たことがあるの!？」
まあまあ、何て素敵。やた吉君とやた郎君は顔を見合わせ、こちらをまた向いて頷いた。

「ちよつとだけ。まだおいら達が只の鳥だった時にね。ものすごく綺麗な姉ちゃんだったけれど、ものすごく恐かった。おいら、あの巫女の姉ちゃんに睨まれたことがある。あの姉ちゃん、睨んだだけで小動物とか殺せたよ、きつと」

「俺は、うつかりあの巫女の肩にフンを落としちゃって。そしたら矢を飛ばされて、危うく殺されるところだった」

「まあまあ、素敵だわ。とっても勇ましい人だったのね。ああ、一度会ってみたいわ、本当!」

そうか……?と二羽が首を傾げる。随分戸惑っているらしい。

やっぱり、巫女の桜さんは本当にいたのね。しかも、言い伝え通り、とっても格好良くて、美人で!素敵!想像するだけで、ドキドキするわ。

「会っているといえば、会っているんじゃないかね。彼女の魂は、私の体の中で未だ生き続けているのだから」

出雲さんが、自分の胸に手を当てた。

「ということは、出雲さんが巫女の桜さんの魂を食べたというのも、本当の話だったんですか?」

「ああ、食べたよ。けれど、私は死んでいない。彼女は私を殺すことは出来なかった」

くすくすと出雲さんが笑う。言い伝えでは死んだことになってい

る出雲さんは、この通りぴんぴんしている。出雲さんが彼女の魂を喰らったところまでは言い伝え通り。でも、その後は違う。

喰らった魂に体内を焼かれて死んだ……それは、出雲さんという大悪党によって酷い目に合わされてきた村人達の、願いや希望のよくなものだったのかもしれない。そうであって欲しい、という思いがああ言い伝えの最後の部分を生み出したのだろう。

「旦那に目をつけられたのが、運の尽きだったんだよな、あの巫女。おいら達は詳しいことは知らないけれど」

「でも、あの巫女のことを旦那に教えちゃったの、俺達なんだよね」

「え？」

私はやた郎君の言葉を聞いて声をあげ、彼に顔を近づけた。やた郎君は、びっくりしたような声をあげた。そして、ため息をつき、話を続ける。

「忘れもしないよ、あの日の事は。やた吉と一緒に木の枝に止まって喋っていたら」

「いきなり旦那に襲い掛かれてさ。旦那が、おいら達のいた木の下で眠っていたんだ。ところが、おいら達が大声で喋っていたせいで、目が覚めたらしくて。それで怒って、さあ」

「前足で押さえつけられて、食われそうになってさ。とっさに『俺達を食べるより、村にいる巫女の肝を喰った方がいいよ』って言ったんだ」

そして、彼らは解放され、命は助けられた。代わりに巫女の命が奪われることになるのだけれど……。

まあ、こいつらから教えてもらわずとも、きっと別のきっかけで

彼女の存在を知ることにはなつたろうと出雲さんは述べた。彼女の死期が少し早まっただけさ、と続ける。

「でも、それから何年か経った後、旦那と再会して。……そしたら何故か知らないけれど、下僕にさせられたんだ」

「で、今に至る」

「下僕なんて。使い魔だよ、使い魔」

「下僕と殆ど変わらないよ！ いつもいつもこき使うじゃないか、旦那！ 今回だって、一本の骨桜を探す為に、休む間も無くおいら達を飛ばし続けて！ 見つかるまで休ませてくれなかった！ 羽がもげるかと思つたよ、羽が！」

涙声になりながら訴えるやた吉君。そんな彼の首を、出雲さんがくいと掴んで締めた。出雲さん死んじゃう、そんなことしたらやた郎君死んじゃう……っ。

「もげてないからいいだろう？ ていうか何口ごたえしているの？ 下等生物の分際で」

下僕扱いはしていないけれど、下等生物扱いはしているらしい。

あからさまにやた吉君達を見下している感じの表情が、とても恐ろしい。

「わあ、許して、死ぬ、死ぬ！」

ようやく、出雲さんはやた吉君を解放した。私は、首を絞められた時に鳥が出す声というものを初めて聞いた。毎回こんなことされているのかしら、二羽共。可哀想、本当に。

そういえば、さっきやた吉君がとても重要なことを言っていたよ

うな……。

「骨桜！ そうだ、骨桜！ また話脱線していたけれど！」

紗久羅ちゃんが大声をあげる。ああ、そうだね。そう、骨桜よ。やっぱり、やた吉君とやた郎君に探させていたのね。

「本当に、面白い位脱線するね、話が。こいつらが、しっかり見つけてきてくれたよ。いなくなった人全員、ちゃんといたそうだ」

「良かった。あ、孝一さんですか？ 後、間違いなく皆さんなんですよね……？ やた吉君達、さらわれた人達の顔、知らないですよね」

「それなら心配ない、あつしが被害者達の顔の映っている写真もしっかり入手して、その二羽にやったからな」

背後から聞きなれた声が聞こえて、振り向けば、いつの間にか弥助さんが腕を組んで立っていた。いつから居たのかしら。話に夢中になっていて、全然ドアが開いたことに気がつかなかったわ。というか弥助さん、喫茶店の方はどうしたのかしら。まだやっているはずなんだけれど。

「そうそう、弥助の兄貴のおかげで助かったよ。初めの頃は酷かったんだ。旦那に聞いても『気合で探せ。目で探すな心で探せ、合っているか間違っているかは自分で判断しろ。ああ、もし間違えたら釜茹でにしてやる』って言うだけだしさ。ああ、孝一っていう最後に連れて行かれたらしい人も、ちゃんと居たよ。結界越しにしか見ることはできなかつたけれど、多分皆無事だ」

それを聞いて、私はほっとした。手遅れにはなっていないようだ。今すぐ助ければ、きっと大丈夫だ。紗久羅ちゃんもほっと肩を撫で下ろした。

「仕方無いだろう。私だって顔を知らなかったのだから。大体、人に『助けて』とか言っておいて、写真の一つも入手しないサクが悪い」

「見事な責任転嫁だな、おい……」

確かに、そういうのを用意した方が良かったわね。失念していたわ。いいのよ、紗久羅ちゃん。私が、悪いの。

「まあ、最終的に皆を連れて行った骨桜が特定できてよかったですね。割と近かったんでしょう、その骨桜がある場所は。もっと遠いところにあつたら、やた吉とやた郎が疲労で死んでいただろうな。で、出雲。どうやって、骨桜の空間に乗り込むっすか？」

「知り合いの爺さんから、いいものを借りてきた。それを使って、入り込む。……ただ、もう少し待たないと。骨桜の空間の活動は、夜の方が活発らしいからね。ふふ、楽しみだよ。どうやっていたぶってやるっ」

自分の左の人差し指をぺろりと舐めながら、妖しく不気味な笑みを浮かべる。こういつ時の出雲さんを見ると「ああやっぱりこの人は人間では無い」とはつきりと思う。

一方、少しも妖らしく見えない弥助さんは、妖しさも怪しさも皆無な人間くさい表情を浮かべ、ため息をついた。本当に弥助さんって化け狸なのかしら。信じられないわ、やっぱり。

「ま、骨桜なんて雑魚だし、すぐに終わるだろうさ。今日の夜にでも乗り込もうか。面倒くさいことは、さっさと終わりにしたいしね。馬鹿狸、お前も行くかい？」

「一応行くよ、夕菜さん達が心配だからな」

弥助さんが頷いたのを見て、出雲さんが「足手まといにはならな
いでおくれよ」と憎まれ口を叩きながら静かに頷いた。

「さて、問題は君達なだけれど。どうする？ 私達と一緒に
行く？」

笑う出雲さん。対して、驚いたような表情を浮かべる弥助さん。
私も紗久羅ちゃんも、弥助さん同様、思わぬ提案に驚いた。どうせ、
危ないし足手まといだから留守番してなさいと言っのたろうと思っ
ていたから。

私としては、願っても無い提案だ。人々を永遠に醒めぬ夢の世界
へ誘う、美しくも恐ろしい骨桜の姿を見てみたいと思っていた。言
い伝えに出てくる世界は、どんなものなのだろうか、気になるし。
文字だけでその世界を想像するのも楽しいけれど、やっぱり、実際
にその世界を見てみたいわ。

それに、一夜達のこと心配だし……。

「いやいや、何言っているんすか、馬鹿狐！ 危ないっすよ、この
二人は人間なんすよ！」

弥助さんが、私達を指差しながら怒鳴る。けれど、出雲さんは怯
む様子はない。

「うるさいねえ。何も、無防備の状態で放るつもりはないよ。やた
吉とやた郎がどうにかしてくれるさ」

ねえ？と出雲さんは、ぺちやくちや喋っていた二羽に話を振る。
話を振られた二羽は、慌てふためき、ええとええとと言いながら、
ようやく何を聞かれたのか把握したらしく、こくこく頷いた。

「ええと、大丈夫だよ、弥助の旦那。おいら達、結界を張るのだけ
は得意だから」

「この二人のお嬢さん達位は守れるよ」

「そうそう。万が一、こいつらの結界がしょぼくて、二人を怪我させるようなことがあったら、この二羽の羽をもちで、目を潰してやるから。ああ、釜茹でもいいかもねえ。逃げられないように縄でぐるぐる巻きにして、水の入った釜に入れて、少しずつ熱していくんだ……ああ、それいいかもしれないなあ」

出雲さんは笑う。笑いながら、脅す。頭の中で、悶え苦しむ二羽の姿を思い描き、幸せそうな笑みを浮かべている。きつと本気だ。本気で、やりかねない。

それならば、いつそ私達はついていけない方がいいのかもしれない。やた吉君とやた郎君の為にも……。でも、気になる。行きたい。ああ、難しいわ。

「それだけはやめて！ おいら達頑張る、死ぬ気で頑張るから！」

「死ぬ気でやりすぎて、本当に死なないようにね」
脅した本人が、そんなことを言う。

「まあ、確かにこいつらの結界が強力ってことは知っているけれど……さくらと紗久羅っ子はどうしたい？」
私と紗久羅ちゃんは顔を見合わせる。

「さくら姉は、行きたい……んだろっ？」

「え？ あ、うん。私は、やっぱり色々気になって。紗久羅ちゃん……は？」

「私も、色々気になる。……さくら姉や、他の皆が行くっていうの

なら、あたしも行く」

「だそうだよ。本人達が行くと言っているんだ。いいだろう？」
出雲さんが、妖しく微笑み、弥助さんが小さく舌打ちする。どうやら、もうこれ以上反対するつもりはないらしい。

「あ、でも骨桜のところへ乗り込むのって夜、なのよね。お母さん達にどう説明しよう……」

行き先も告げずに、しかも夜遅くに外出するなんて。そんなことしたら、お父さんとお母さんを心配させてしまうわ。かといって、「今から妖怪の出雲さん達と一緒に、骨桜のところについて、一夜達を連れ戻してきます」なんて正直に話すわけにはいかないし。誰もそんな話、信じてくれないわ。言ったら言ったで、別の意味で心配されそう。ただでさえ、普段から心配させてしまっているみたいだし……。

「あたしは何とかかなりそうだけれど。婆ちゃん達は、出雲のこと知っているし、何となく説明すれば分かってくれそうだ。でも、さくら姉はどうするんだ」

「秋太郎の家に泊まるって言えばどうですか？ 秋太郎なら、話も通じるし。さくら、しよっちゅう秋太郎の家に遊びに行つて、そのまま泊まっているっていうじゃないですか。あまりにしよっちゅう行くものだから、あっちの家に着替えまで置いてあるって」

弥助さんの提案に、私はぼんと手を叩いた。

「あ、そうか。……て、やっぱりおじいちゃん、弥助さんの正体とか知っているんですか？」

弥助さんはうんうんと頷いた。

「あつしとしては、普通の人間として生きるつもりだったんですけど、何かすぐに見破られちゃいました。はあ……出雲の様に明らかに化け物っぽい奴ならともかく」

そうだったの。ああ、おじいちゃんと弥助さんの出会いとかも気になるわ。というか、いつどこで出会ったのかしら。ああ、今すぐにでも聞きたいわ。

「それじゃあ、一度喫茶店に行こうか。そこで秋太郎に話をつけてそこから家に電話をかければいい」

「はい。それじゃあ、一度戻ります。そういえば弥助さん、喫茶店の方大丈夫なんですか？ まだお店開いているはずなんですけれど」

「ん？ ああ、大丈夫ですよ。今休憩時間中だから。まあ、そろそろ戻った方がいいけれど。で、出雲。どれ位の時間にあつちへ行くんだ？」

「そうだねえ……サク達のいる世界の時間でいうと、12時？ ええと24時？ くらいか？」

「こちらの世界では何時になるんですか？」

「いや、私達の住む世界にはそういう時間の概念とかがってないんだよ。月とか日にちとかもかなり大まかなものだし。大体、そんな細かい時間なんてこの世界には必要ないしね」

成る程、それで。出雲さん達のいる世界は、割と大雑把に生きてるのね。でもまあその方が気楽だし、いいような気がする。それにしても24時なんて。私、いつもその時間寝ているわ……。うう、乗り込むまでの間ちょっと仮眠した方がいいかしら。

「それで、この館からその骨桜のある場所まではすぐに着くのか？」
弥助さんの問いに、やた吉君が答える。

「遠いかな、ちょっと。飛んでいくなら、まあものすごく時間がかかるってことはないけれど。歩いていくには、ちょっと」

「ということを、聞いていたから。あれを借りてきた。紗久羅は覚えてるだろう？ 鬼灯夜行の帰りに乗ったあれだ」

「ああ、あの牛車っぽいやつ？ あれって借りたものだったのか」

「まあね。あれで行けば、そう時間もかかるまい。私と紗久羅、サクはそれに乗って行こう。やた吉とやた郎に道案内してもらってね。馬鹿狸は、自力で何とかおし」

弥助さんは何となくそう言うことを予想していたらしく、特に反論するわけでもなく、へえへえと気の抜けるような返事をした。まあきつと、弥助さんなら木をびよんびよん渡って、楽々と追いつくでしょう。ものすごい運動神経だし。

一度、私と紗久羅ちゃん、弥助さんは満月館を後にした。数時間後にはまた来ることになるのだけれど。結局23時30分頃にまた満月館に集合し、そこから骨桜へ向うことになった。

喫茶店には、おじいちゃんと朝比奈さんがいて、いつものように温かく私達を迎えてくれた。弥助さんはそのまま仕事に戻る。

その時弥助さんは、簡単におじいちゃんに話をしたらしい。おじいちゃんは、自分の家の鍵を私に渡してくれた。

「もうしばらくしたら、私も家に戻るから。紗久羅ちゃんと一緒にお茶でも飲んで待っていなさい。電話も使っていよいよ……まあ、気をつけなさいよ」

おじいちゃんはそう優しく言って、笑いながら店を出る私と紗久羅ちゃんに手を振った。

おじいちゃんの家は、喫茶店のすぐ裏にある。二階建ての、落ち着いた雰囲気の木造の家。時を感じさせる匂いがする。私は、その匂いを嗅ぐと何となく落ち着く。

木の、もうぼろぼろになった塀の内側には小さな庭がある。小さな池があり、松の木や紫陽花、つつじなどが植えられている。

その庭には、ピストルの弾丸の様な形の大きな岩がある。何でも家を建てる前からあったらしく、その黒く光る岩が何となく綺麗だと思ったおじいちゃんは、それを残してくれるようお願いしたらしい。かくしてその岩は、その場に残されることとなった、らしい。おじいちゃんも、私と同じ様に不思議なものが大好きなのだ。

私は、おじいちゃんから預かった鍵を使って、戸を開ける。玄関から見てすぐ左に居間、その奥に台所がある。玄関から伸びる廊下の突き当りにはトイレとお風呂。玄関から見てすぐ右側には二階へ続く階段がある。

おじいちゃんの家は、家と言うより書庫という方が、正しいかもしれない。居間にも本棚がびっしり、二階にある部屋はほぼ全て本で埋め尽くされている。いつか、本の重みに耐え切れず、この家は崩壊してしまうのではないだろうかと本気で心配になる。実際、天井がぎしぎしという音をたてることがある。けれど、本で一杯のおじいちゃんの家は、とても魅力的。まるで、別世界に迷い込んでしまったかのようにだし、沢山の本を、好きなだけ読むことができる。

居間に置いてある電話を使って、私は家に電話をかける。おじいちゃんの家泊まってもいいか、と聞いたらお母さんはあっさり承

諾してくれた。よくあることだから、お母さんも慣れっこなのだ。まあ、若干嘘が混じっているのだけれど……うう、ごめんなさい。続いて、紗久羅ちゃんが電話を借りて、家へ電話をかけた。紗久羅ちゃんは、嘘も何もつかず、正直に話す。しばらくして、電話を切った。

「大丈夫そう？」

「ああ。勝手にしゃがれ、だつてさ。ていつか、あたしまでこの家において大丈夫？」

「大丈夫よ。何にも問題ないわ。昔、時々ここで遊んでいたじゃない。少しも遠慮することはないわ。あ、そうだ。夕飯を作っておきましょう。勿論、おじいちゃんの分も」

「そうだな。折角だし、作ろうか。一緒に料理とか、わくわくする」

紗久羅ちゃんは一応着替えを持ってくる為一度家に帰り、そしてすぐ戻ってきた。

その後、私と紗久羅ちゃんまで煮物を作った。といつても、殆ど紗久羅ちゃん一人で作っていたようなものだけれど。菊野おばあ様と小さい頃から、沢山料理をしていた為か、料理が好きなのだ。野菜を切ったり、味見したりする紗久羅ちゃんはとても楽しそうで見ているこっちも何だか楽しくなってきた。

味噌汁の具は何にしよう、ああそれはそんなに入れなくて良いよ、後何か一品欲しいかな……楽しくお喋りしながら、ご飯を作っている。家庭科の実習よりも、ずっと楽しい。

「やっぱり、こうして料理すると、気持ち落ち着くよ。うん。馬鹿兄貴とかを無事に連れ戻すことが出来たら、もっと楽になるね」

にこりと紗久羅ちゃんが笑う。私も、そうねと笑った。

一夜が帰ってきたら、何を話そう。そのことを考えると、もっと楽しくなった。

絶対に、一夜達を連れ戻す。……実際連れ戻してくれるのは出雲さん達なのだけれど。

その後、帰ってきたおじいちゃんと夕飯を食べ（おじいちゃんは、美味しいと喜んでくれた。紗久羅ちゃんが、とても可愛らしい笑みを浮かべていた）、軽くお風呂に入った。私は、おじいちゃんの家においてきていた服に着替えた。紗久羅ちゃんには、さっきまで着ていた服を入れる袋を貸した。そして、二階にある部屋（一番本棚の数の少ない、一応二人くらいなら寝ることの出来るスペースがある）で、軽く眠った。

といっても、二人とも興奮していて、殆ど眠ることは出来なかったのだけれど。

約束の時間の少し前、弥助さんが迎えに来てくれた。

「全く。あんたら本当に行く気っすか」

「行く気だよ。なあ、さくら姉」

「ええ。行く気満々。待っているだけなんて、落ち着かないもの」

「へいへい。それじゃあ、行くか。それじゃあ、行ってくるっすよ」

「はいはい。気をつけてね。本当は私も行きたいところだけれど、流石にねえ」

おじいちゃんは、ちょっと残念そうな表情を浮かべながら、私達

を見送った。

真夜中の桜町をこうして歩くことになるとは、思わなかった。何
だか、とても新鮮な気分だった。暗闇を鈍い光で照らす街灯も、昼
と同じ蛙の合唱も、家も、何もかもが。

胸の鼓動は桜山に近づく毎にどんどん早くなっていく。息苦しく
なって、胸がかあつと熱くなる。けれど、紗久羅ちゃんや弥助さん
と一緒にいるのだと思うと、少しだけほっとする。

いざ向おう、骨桜の下へ。

この先にあるのが、幸せな結末であることを信じて。

第二十一話：桜の夢と神隠し（8）

*

昼に見ても、どうしようもなく不安な気持ちにさせる、こちらの世界と向こうの世界を繋ぐ道。漆黒に染まる空の下、青白い灯籠の火に浮かぶ鳥居と桜は、いつも以上に静かで、美しく、何より怖かった。余程勇気のある人でなければ、この道をこの時間、一人で通ることは出来ないだろう。

弥助さんが前を歩き、私達はそれについていった。鬼灯を握る手が汗で滑る。油断すれば、優しい温もりを放つそれは私の手から零れてしまう。もしそうになったら……ああ駄目、そんなこと考えていたら、本当に落としちゃうわ。ちゃんと握っていなくちゃ。

最後の鳥居を抜けた先にある満月館は、漆黒の闇の中で淡く光り、その姿をはっきりと見せていた。

その館の前に、出雲さんと、ランプを手に持っている鈴ちゃんが立っている。私達を待っていたようだ。

「……………出雲、来た」

「ああ、来たね。さあ、早速だけれど骨桜の所へ向うとしよう。こういう面倒なことはさっさと終らせてしまっに限る」

出雲さんが、館の右横の方を指差す。そこには、牛車の様なものがあった。牛はいない。牛がないのなら、牛車ではなく只の車とすべきなのかしら。そんな牛車らしきものの前に、二人の男の子が立っている。小学4、5年生位で山伏の様な格好をしている。手には錫杖を握っている。髪の毛の長さは肩位で一人は下の方でそれを束ねて、もう一人は上で束ねている。それぞれの首には翡翠と勾玉を連ねた首飾り。

あら、もしかしてあの二人。

「あの車の前にいるのって、やた吉君とやた郎君ですか？」

私が聞くと、出雲さんがそうだよと頷いた。

「一応、ああして人の姿をとることもできる。結界能力は人の姿の時の方がより強くなるんだって。結界の範囲も広がるらしい。髪の毛を下の方で束ねているのがやた吉で、上の方で束ねているのがやた郎だ」

「おいら達が、骨桜のところまで案内するよ」

「場所は確り覚えた。……乗って」

牛車に、私と紗久羅ちゃん、そして出雲さんが乗り込む。鈴ちゃんはお留守番らしく、出雲さんにランプを渡し、何歩か下がった。弥助さんは乗らない。本当に、自分の足で行くらしい。

「さあ、行こうか」

出雲さんがそう言うと、体がふわりと浮いたような感じがした。ふと外を見てみれば、牛車は地面から離れている。どんどんと高度をあげ、黒曜石を磨いたような色をした空へぐんぐん近づいていく。

まるで、飛行機に乗った時の様な浮遊感。体の重さが消えていく。銀色の月の光が、車の中に差し込む。

弥助さんはどうしているのだろうか、顔を車から出してみる。もう地面からかなり離れている。闇に隠れてもう地面なんて見えない。黒く染まる木々は、銀色の月光を浴びて、所々ダイヤモンドダストの様な輝きを見せる。よく見ると、木から木へ飛び移っている何かが見える。多分、あれが弥助さんなのだろう。大柄な割にあの人は

結構身軽だ。重さなんて少しも感じさせない、大胆でそれでいて軽やかな飛翔。もつと遠くから見ていたら、むささびか何かと勘違いしたかもしれない。

「弥助さんやつぱりすごいわ。昔から化け物じみた体力だなあと思っていたのだけれど」

「まさか本当に化け物だったとは……ってか。しかし妖怪とかそういうのが大好きなさくら姉にすら人間ではないってことがばれないなんて。弥助が凄かったの？ それとも、さくら姉が鈍感だったの？」

「さあ、どっちかしら？ ちょっと変わった人だなとは思っていたのだけれど。ものすごい怪力で、常人離れた運動神経……というところ以外、特に普通の人と変わりなかったから」

出雲さんは全身から「人間ではないオーラ」を出しているけれど、弥助さんはそういったものを一切だしていなかった。彼が化け狸であるという事実を知った後も、彼からそういうオーラを感じ取るこゝとが出来ない。妖怪であるなんてことを感じさせない位、弥助さんは人間らしいのだ。

「あの馬鹿はもう半分人間みたいなものだからねえ。時々、自分はこちらの世界の住人であることをすっかり忘れている節がある。自分の真の姿を忘れ、元の姿に戻れなくなる程の阿呆だ。サクが気づかなかったのも、無理からぬ話かもしれないねえ」

桜の花の描かれた綺麗な黄金の扇をさつと開き、それで綺麗な顔を扇ぐ。微かにそれから、甘い桜の花の匂いがする。月の光を浴びて、出雲さんの白い肌はより白くなり、瞳の赤がよく映える。さらさらと流れる髪は天の川の様。

妖しい微笑は、見る人を凍りつかせる。胸の鼓動が止まりそうに

なる。不安と恐怖を抱かせる、その顔、その姿。

人ではない美しさ。人ではありえない美しさ。異形とはこういう人のことを言うのだろう、と改めて思う。

本当にこの人は一夜達を助けてくれるのだろうか、という不安を振り払いたくて、また外を見る。

嗚呼何だか、闇の深い夜の海を漂っているみたいだ。冷たい空の海の中を、ぷかぷかと。そう思うと、下に見える木々は海藻や珊瑚、緑に染まった岩に思えてくる。

ああ、とても素敵。夢のようだわ、不思議の世界を不思議な乗り物に乗って。

私は、不安を振り払うどころか、その不安の元の元となる一夜達のこととも忘れて、空の海を巡る旅に夢中になっていた。

夢中になりすぎて、時間というものは流れ過ぎ行くものだということをおぼえていた。

誰かの叫び声が聞こえる。男の子……ああ、やた吉君の声だわ。

出雲さんが車から顔を出し、下を覗く。

「おや、もう着いたのかい。それじゃあ、そろそろ降りるとしようか」

出雲さんがそう言っただけで、車は下降し始める。この車自体が意思を持っているようだ。ふわふわシャボン玉の様に浮いている牛車は、地面に引っ張られるように高度を下げていく。

月とその光は遠ざかり、木々の間を縫うようにして降り、やがてコトンという音と共に地面に降り立った。失っていた重みが一気に

体に戻る。

まずは出雲さんが降り、次に私、最後に紗久羅ちゃんが降りた。一度私にランプを預け、出雲さんが手をぱんぱんと叩くと、牛無し牛車はぐいぐいと縮んでゆき、手のひらサイズになった。それを出雲さんが手に取り、懐に入れていたらしい巾着袋にそっと入れた。私は出雲さんにランプを返す。今ある灯りといえば、これと瞬く星、浮かぶ月だけだった。

弥助さんも間もなく追いつき、紗久羅ちゃんの横に立つ。相当動いていたはずなのに少しも息は切れていない。

「旦那、あれだよ、あれ」

やた郎君が、錫杖で目の前を指した。出雲さんがその先をランプで照らす。

無数の木々の中に、一際大きく立派な木があった。幹は太くがっしりしていて、そこから枝が伸び、そしてその先には魅惑の薄桃色の花びら。月の光の浴びたそれは銀色の輝きを帯びている。砂糖をまぶした様なぎらぎらとした輝きが、美しいその花びらをより一層愛らしく、そしてまた美しく見せている。

愛らしい少女の様にも、美しく艶やかな女性の様にも、長い時を生きた老婆の様にも見えた。

多くの人を自分の世界へ導き、美しく無邪気に、そして残酷に殺める骨桜。

恐ろしくも美しいその木が、目の前にある。

夕菜さんが「思い出に残る風景」だと思つのも無理は無い。一度見たら、忘れられなくなるくらい見事な桜だった。

そして、その木の下に。一夜達が……いた。

*

遠目に見ても分かる。約17年もの間一緒に居た幼馴染の姿。間違えるはずが無い。私は慌てて骨桜の下へ駆け寄り、そして「あつ」と声をあげる。

よく見れば、骨桜の木の幹は半分以上無残にえぐれていたのだ。

雷に打たれたのか、火に焼かれたのか。えぐれた部分は真っ黒に焦げている。最早元に戻ることは不可能だろう。更に、焦げていない無事な部分にも深い傷が幾つもあった。

何故、こんな傷が？不思議に思って、もっと木に近づいてその幹に触れようとする。しかし、途中で見えない何かに押し返されてしまつて、触れることはおろか近づくことさえ出来なかった。そういえば、木の周りには結界が張つてあるんだつたわね。

あまり無闇に近づかない方がいいよ、とやた吉君が私の腕を引く張る。そんな彼は、しばらく木を見つめ、ため息をついた。

「やっぱり、この木……あれだよなあ」

「あれ？」

「ううん、なんでもない。出雲の旦那、結界を解こうよ。解かないことにはどうしようもないしさ」

「それもそうだ」

出雲さんが頷き、前へ進んだ。しばらく進むと、ぴたりと歩みを止め腕を勢いよく突き出した。出雲さんの手のひらは丁度結界に触れているらしい。

ばちばちというものすごい音がして、結界らしきものが眩い光を放つ。髪は乱れ、着物の袖や裾がバタバタと音を立ててたなびく。結界を解こうとする出雲さんの力と、解かれまいと必死に抵抗する結界の力。双方強力な力らしく、その衝撃は並大抵なものではないけれど、出雲さんの力の方が圧倒的に上回っていたらしい。雷の様な音と共に、光の粒が四方に散った。

乱れて顔にかかっている髪を振り払いながら、ぼかんとしている私と紗久羅ちゃん達の方を見て、にこりと笑った。

「さ、これで邪魔なものは無くなったよ」

そうして、先へ進む。私達もそれに続いた。眠り続ける一夜達に少しずつ近づいていく。

骨桜に連れ去られた人たちは、木の幹に背中をもたれさせ、眠っていた。私達の真正面にいるのは一夜。その右横にいるのが小学生の男の子、その右が女子高生らしき子、その右が就職を前にしていたという男性。一夜の左横にいるのは、長くさらさらとした髪の毛が印象的な、綺麗な女性だった。恐らく、彼女が夕菜さんなのだろう。その左隣に、孝一さんがいる。

私はしゃがんで、恐る恐る、一夜の頬に触れてみた。ほんの少しだけ冷たかったけれど、大丈夫。生きている。後からじんわりと感じる温もり。見れば、肩が微かに上下している。ぐっすり眠っているようだ。

ああ、良かった。生きている。……他の人達も、無事の様だった。一番最初に攫われた夕菜さんも、すうすうと寝息をたてている。

「とりあえず、皆無事のようっすね。見たところ、そんなに衰弱している様子も無い」

「でも、このままじゃあいつまでも兄貴達は眠り続けたまま、なん

だよな。早く助けにいかないか。それで出雲、どうやって乗り込むんだ？」

一夜達のことなどどうでもいいのか、様子を見るわけでもなく乱れた髪を戻すのに夢中な出雲さんに、紗久羅ちゃんが問う。

「さつきも言ったとおり、じいさんから借りてきたものを使う」

そう言っつて、さつき牛車を入れていた巾着袋を取り出す。そこに知り合いのおじいさんから貰ったらしいものが入っているのだろう。出雲さんが取り出したのは、黒塗りの筒だった。

「現世ではない世界を映し出し、その世界へ導く道具らしい。見た目は万華鏡なのだけれど」

ほら、と出して出雲さんが私にその筒を手渡す。恐る恐る、筒に開いているを覗き込んでみると、成る程確かに万華鏡らしい。赤や青や緑、金、銀という鮮やかな色が、筒を動かす度に形を変え、幻想的な模様を描く。確かに、これなら人を現世とは隔絶された世界へ導いてくれそうだ。

私は、しばらく万華鏡の世界を楽しんだ後、それを出雲さんに返した。

「通しの鬼灯みたいなものっすか、それは」

「似ているけれど、少し違うね。通しの鬼灯は、あくまで私達の世界と人間の住む世界を結ぶ入り口を見えるようにするだけの道具。こちらは、あちらの世界に限らず、様々な世界を映し出し、更にそこへ導くという道具らしい。その気になれば、過去にも未来にも、我々の知らぬ世界にも飛べるようだ。……まあ、使う者の力量によって行けるところは限られてくるらしいけれどね。私達の様な妖では、過去や未来などに飛ぶことなどは出来ないようだ。残念ながらね」

出雲さんは、一夜達のいない木の裏側にまわり、その幹に万華鏡の先の方を軽く押し付け、そのままくるくると回す。

「ああ、見えた、見えた。それじゃあ、早速行くとするか。皆、私の後ろに列になって並んで、前にいる人の肩につかまって」

私は、それを聞いて出雲さんの後ろに並び、彼の冷たく細い肩につかまった。その後ろに紗久羅ちゃん、やた吉君、やた郎君、弥助さんと続く。

出雲さんは後ろをちらつと見て、準備がすっかり出来たことを確認した。確認すると、呪文の様なものを小声で唱える。それは人の世の言葉ではないようだった。

万華鏡が、朝日の様な眩い光を放つ。くらつと眩暈がして、体から力が一気に抜ける。そして、体は万華鏡に吸い込まれていく。ぐにやぐにやでぎらぎらした不思議な世界をもものすごい速さで駆け抜けていく。

何も考える余裕は無かった。円形の大きな光……出口へ皆で仲良く向い、そして仲良く……放り出された。

飛び箱の着地を失敗したように、体勢を崩して地面へ勢いよく倒れこむ。結果、出雲さんは下敷きになり、一番重い弥助さんが一番上になる。出雲さん以外の体重が、重くのしかかる。重い、これは重いわ。み、身動きが全然取れない……。

地面には草が生い茂っていて、草のなんともいえないあの独特な匂いがした。

「いたたた……全く、何て乱暴な道具っすか」

「そんなこと言っている暇があるのなら、さっさとお退き。重いんだよ、お前」

苦しそうに呻く出雲さんの声を聞き、弥助さんが退く。そしてや

た郎君、やた吉君、紗久羅ちゃん、私、出雲さんの順に起き上がる。うう、背中が痛い……。

「美しくない、実に美しくない。……こんな美しくない着地、私は認めない」

「そんなことはどうでもいいだろう、馬鹿狐！ いや、まあ確かに痛かったけれど。兎に角！ 潜入には成功したんだから、さっさと兄貴達連れて帰ろうぜ」

「それもそうだねえ。私をこんな目に合わせてくれた骨桜には、たっぷりお礼をしてあげなくちゃねえ……ふふふ」
可哀想な骨桜……。

そういえば、骨桜の空間に入り込めたようなのだけれど肝心要の骨桜の核はどこかしら。私は、そこへ放り出されてから初めて、周りをじっくりと見た。

空は、墨をぶちまけたように真っ暗。きらきらと金銀の星が瞬いている。薄荷を混ぜたようなすうつと涼しく、爽やかな風が吹いて、果てない草原を静かに揺らす。

ふと見れば、遠くに何かが見える。どうやら、桜の木らしい。遠くから見ても、それは随分大きい木だということ分かる。多分、あそこに骨桜の核……そして一夜達（の精神）がいる。

「さあ、行くとしよう。ああ面倒くさいねえ、あそこまで歩かなくちゃいけないのかい？」

うんざりした表情を出雲さんが浮かべる。そんな、嫌がる程の距離は無いと思うのだけれど。桜山の方から、桜町商店街まで行く方が余程遠いわ、多分。それとこれとは別なのかしら。まあ私も、古

風な町並みや自然を眺めながら歩くのは好きだけれど、ビルしかないようなところを歩くのは好きではない。それと似た様なものかしら。

「その必要は無い。招かれざる客よ」

出雲さんの言葉に応えるように女性の声が、響き渡った。聞き覚えの無い……いいえ、聞いたことがある。そうだわ、あの時の夢でこの声を聞いたんだわ。

その声は、怒りに震えているようだった。お腹を深くえぐる様な、恐ろしい声。それでいて、胸がドキドキするような艶やかな声。

ああ、この空間の主に見つかったのだ。そう思った次の瞬間、何かがこちらめがけて伸びてきた。それが木の根であることに気がついたのと、その根に体の自由を奪われたのは、ほぼ同時のことだった。

*

あつという間に、その根っこに引っ張られ、あれだけ遠くにあった桜の木の前まで連れてこられた。

間近にみる桜の木はとても大きい。先ほどみた骨桜の数倍、いや数十倍はある。見たところ、本体の骨桜とは違って抉れたり傷がついたりしているという事はなかった。月もでていないのに、木は輝いている。まるで、ライトアップされた夜桜のようだ。白樺のように白く輝く幹、枝。そして砂糖菓子のような、女性の肌の様な愛らしくて、滑らかな、花びら。うっとりするような、甘く艶やかな香り……。

ふつと私達は根から解放され、地べたにべたんと惨めな格好で着地した。いたたたた……本日二回目だわ。腰の骨が砕けちゃいそう。

「この私の世界に、生身で入ってくるとは思わなかった。こんなことをする者は初めてだ。……誰かと思えば、憎き極悪狐とその仲間達、か？」

声は、頭上から聞こえる。思いつきり尻餅をついた衝撃で、びりびりいつている首を傾け、上を見た。

見れば、宙に浮いている女性がいた。黒く、艶のある髪はとても長い。目蓋は赤く塗られ、睫毛は長く、黒い瞳はきらきら輝いている。唇は、綺麗に磨いた林檎のよう。淡い黄色の着物の上に、萌黄色の着物を着て、更につつじ色の着物を羽織っていた。ひらひらと、桜の花びらと同じ色の領巾ねんぎんが風に揺られている。首には金色の首飾りをつけていて、それがしゃらしゃらと音を鳴らす。

肌は出雲さんに負けず劣らず、白い。頬は怒りに震えているせいなのか、微かに桃色。

美しく、とても気の強そうな女性だ。

それにしても、憎き極悪狐って。この人は、出雲さんのことを知っているのかしら。でも、出雲さんの方は、こいつ誰だっけって顔をしている。

「ああ、やっぱりそうだ」

口を開いたのは、出雲さんではなく、やた吉君だった。

「やっぱりそうだって、どういふことだい」

「旦那、覚えてないの？ まあ旦那はいつも人の顔なんてすぐ忘れちゃうけれど……じゃなくて……あいつ、あれだよ」

「あれじゃあ分からないよ」

出雲さんは本当に分かっていないようだった。その様子を見て、

骨桜の核（以後は骨桜と呼ぶ事にしよう）はますます怖い顔になる。忘れられてしまったことを本当に怒っているのだわ。

やた郎君が、その問いに答えた。

「あいつというか、この骨桜というか……ほら、ずっと前に出雲の旦那が骨桜に連れていかれそうになったときあったでしょう？ 結局逃げることに成功して、後日……酷い目にあわせた……あの、骨桜だよ」

「あれまあ」

ぼそつと一言呟いて。出雲さんは、骨桜の顔をもう一度見た。しばらく続く沈黙、やがてぼんと手を叩く音。

「ああ、そういえば。こんな感じの顔だったような」

「ようやく思い出したか。……私の身は、貴様の炎によって焼かれ、その爪で引き裂かれ、一生消えぬ傷跡をつけられた。忘れたくても忘れられぬ、おぞましい記憶。……まさか、また会うことになるとは思わなかった」

骨桜は、強く拳を握りしめた。あの立派な木を火で焼き、抉り、深い傷を残したのが出雲さんだったなんて。一度、骨桜の夢を見て彼女の餌食になるところだった出雲さん。お仕置きしてやったとは言っていたけれど……。

「ふん、お前如き下等な妖が、この私を餌にしようとするからだ。お前達骨桜は、兎に角自分の美貌に自信を持っている。美しくあることが、生きがいのような存在だ。……そんなお前達には、一番ふさわしい罰だろう？ その身を焼かれ、傷だらけになり、醜い姿になるといふのは。ただ殺してはつまらないからね、ふふふ。お前の本体である木は永遠に、あのままだ。核であるお前も、術か何かで

ごまかしているのだろうか、本当は醜くなっているのではないかい？」

そう言っつて、出雲さんが、声を立てて笑った。ぞつとする声だ。怒り狂っている骨桜も、その恐ろしい笑い声のせいか、何も言い返すことが出来ない。

「お前、本当どこまでも最低な奴だな……しかもそれだけ酷いことしておいて、そうした相手の顔も忘れてるなんて」

紗久羅ちゃんが、頭を抱え、呆れたように言った。あたしは骨桜に同情するよ、と続けて。弥助さんも私も、頷いた。

「しかし、夕菜さん達を連れ去ったのが、まさかこの極悪非道狐の被害者だったとはねえ」

呟く弥助さんに、出雲さんは心外だと言いたげな表情を浮かべて反論する。

「馬鹿いえ、被害者は私。加害者はあつちだよ。元々私を餌にしようつとしていたのだから、あちらは」

「あつちは未遂じゃねえか。お前の場合は未遂じゃないだろう」

紗久羅ちゃんが、出雲さんの言葉に反論する。けれど、出雲さんは聞く耳持たない。

「ふん、私に手を出そうとする行為そのものがすでに罪なんだよ。

……まあ、この女が昔私を餌にしようつとした不届き者かそうでないかとかは、もうどうでもいいことなんだよ。私達の目的は、かず坊達を助けることなんだから。おい骨桜、お前が攫った人達はどこへ行つた？ さつさとお返し」

他人の家にずかずかとあがりこんだ拳句「お茶とお菓子を出せ」と上から目線で言うお客さんのような、ちよつとずうずうしい感じ

の言い方だ。骨桜が顔をしかめる。

「貴様ら、夕菜達を……っ」

骨桜が絶句する。その表情は自分の大切なものを奪われそうになつて不安になつたときのものに似ている。……自分の食べようとしたものを取られそうになつた時の顔とは、何だか違う気がした。

「あれ、さくらっ？」

毎日のように聞いていた、でも最近は何も聞いていなかった声が背後から聞こえた。私は、さつと振り向いた。紗久羅ちゃんも同じように振り向く。

そこには、一夜……そして、骨桜に攫われた他の人達も一緒に立っていた。

*

目をぱちくりさせ、ぼかんとする一夜達に向つて、骨桜が叫んだ。

「馬鹿者！ 何故出てきたのだ。あの空間から出るなど言つたはずなのに！ 出てこなければ、この者達には決して見つからなかつたはずなのに！」

その表情には焦りや不安が入り混じっていた。どうやら、私達に見つからないようにまた特別な空間に一夜達を隠していたらしい。けれど、皆は約束を破つてでてきてしまった。

「だって、何か聞き覚えのある声はするし、ものすごく賑やかだったから。あれ、紗久羅もいる。あ、出雲も弥助兄ちゃんも。……このガキ二人は知らないけれど。皆して何やっているの？ お前らも、ここに連れてこられたの？」

私や紗久羅ちゃんは、とても心配していたのに、一夜といつたら、

ぽかんとする位能天気だった。骨桜に恐怖を感じている訳でもないし……。

他の人達は、少し疲れているようだった。何だか、元気が無い。とりわけ、一番後ろにぽつんと立っている夕菜さんは酷く疲れているようだった。

「弥助、さんですよな？ 何で貴方が……もしかして、助けに来てくれたんですか？」

その夕菜さんの肩を優しく抱いていた孝一さんが問う。すると、他の人達がほんの少し元気になったようだった。けれど、藤色の髪の毛に赤い瞳と言う、明らかに人間ではない出雲さんの姿を見ると、何だこの人はと訝しげな表情を浮かべた。

「あつしが助ける、というよりはこっちの化け物がですがね」

「失敬な。私を化け物などと。美しい化け狐とお呼び」

「それ、どこが違うんだ？」

紗久羅ちゃんが小さな声でつつこんだ。

「おのれ、忌々しい！ どこまでも、私の邪魔をするつもりか！」

「うるさいねえ。……またあの時の様に、火に焼かれないのかい？

一気に焼かず、じっくり炙りたい？」

出雲さんが睨むと、骨桜は一度は口をつぐんだ。けれど、何か強い思いがあるのか、また口を開いた。

「誰が帰すものか。私は、別に夕菜達に危害を加えるつもりは無い。夕菜が一番愛おしく想っている男がここへ来たのだ、もうこれ以上

人を攫うことも無い」

私は、どういうことなのだろうと首を傾げた。どうやら、骨桜にとつて重要なのは夕菜さんであるらしい。そして、夕菜さんの恋人である孝一さんがここへ来たことで全てが終わった……。ただ分かることは骨桜は一夜達を喰らうつもりはないということ。そして、皆を……とりわけ、夕菜さんを失いたくないということだった。

物語は、やはり夕菜さんを中心に動いていた。でも一体、どういう風に物語は進み、ここへ至ったのだろうか？

骨桜の言葉を聞いた夕菜さんは、切なく苦しげな表情を浮かべる。孝一さんの、夕菜さんの肩を抱く力が強くなる。

「その人、お前達には絶対に危害は加えない、その代わりここから絶対に帰してやらないの一点張りで、俺達の話を全然聞いてくれないんですよ」

スーパーで働くことになっていたはずの男性らしき人が口を開いた。

「私達を帰したくないっていうか、この夕菜さんって人を帰したくないみたい」

続くのは、高校生の女の子。その女の子の手を握りながら震えているのは、愛犬を亡くした小学生の男の子。女の子は、その男の子の手を優しく握り返していて、優しい笑み浮かべる。まるで、お姉さんのようだ。きっと、訳の分からない事態に震え怯えている彼の面倒をずっと見ていたのだろう。

「何言っても聞く耳持たずだからさあ、俺達も参っていた訳」

と一夜が肩をすくめる。けれど、一夜の表情にあまり疲れは見えない気がする。他の人達程、深刻に物事を考えていないのかもしれない。

ない。

「普通の人間はこんな訳の分からないところに連れていかれたら、困るし、疲れるっての。ったく、本当に兄貴は能天気だな。というか、よくもまあこんなところに何日もいて、平気なツラしているなあ！」

紗久羅ちゃんは随分呆れているようだ。けれど、上擦った声には喜びの感情が入り混じっている。お兄ちゃんが無事で、嬉しいのだ、きつと。ちよつと素直じゃないだけで。そういうところが、紗久羅ちゃんの可愛いところだわ。

「別に平気って訳じゃないけどさ。さくらから胡散臭い言い伝えだのなんだの聞かされまくっていたせいで、そういうのに耐性ついちやっただっぽいんだよな、俺」

「胡散臭くなんかないわ。現にこうして、骨桜は本当に実在して……」

「ああ、はいはい。お前が話し出すと長くなるから黙っていようなまあ、酷い。私そんなに長話なんかしたことないわよ。」

「流石、かず坊はお馬鹿さんだね。……さて骨桜。もう一度言うよ。さつさとかず坊達を返しておくね。……前以上に酷い目にあいたくなければ、今の内に従っておいた方がいいと思うけれど」

出雲さんの目は本気だった。これ以上抗えば、骨桜は……。

けれど、骨桜は決して頷かなかった。

「ならぬ、ならぬ！ やつと会えたのだ、また、また彼女と会うことが出来た！ だが、ここで帰せば、また彼女は私のことを忘れて

しまう！ そうなれば、私はまた夕菜と会えなくなってしまう！
嫌だ、そんなのは絶対に嫌だ！ 私の悲しみを、寂しさを、温かい
もので埋めてくれた、私の癒えぬ傷を癒してくれた……醜くなった
私の姿を美しいと言ってくれた心優しい娘！ 失いたく無い、もう
何も失いたくは無いのじゃ！」

激しく首を横に振る骨桜の姿は、悲しいほど痛々しい。狂ったよ
うに髪を振り乱し、目を大きく見開き、口は裂けそうになる位大き
く開いて。

「ねえ、何かやばくないか？」

紗久羅ちゃんが、近くに居た弥助さんに言うと、弥助さんも頷く。

「やばいっすね。……やた吉、やた郎。結界を張るんだ！」

「分かった！ 二人とも、おいら達の近くに来て！」

二人の近くまで行くと、やた吉君とやた郎君は、私と紗久羅ちゃ
んを挟むようにして立ち、錫杖で地面を二回ほどついた。すると、
ドーム状のしゃぼん玉のような結界が私達を包む。

「これで、よし」

「一夜達は？ 結界を張らないと危ないんじゃない？」

「あの人達には必要ないよ。今のあの人達は、精神だけの状態だも
ん。攻撃が当たったら死ぬとか、そういうことはないよ。でもおい
ら達は体ごと入ってきているから、攻撃を受けたらまずい」

「あつしが一応守ってやるから、安心しろ」

気づけば、弥助さんは一夜達の前に、彼らをかばうようにして立
っている。

「殺してやる……かつて私から全てを奪った、憎き男……また私の得た幸せを奪うというのなら、この手で……殺してくれる！」

憎しみの感情を言葉に乗せ、出雲さんに浴びせる骨桜。彼女の体から、黒くもやもやした何かが出ているような気がするのは気のせいだろうか。

「やめて、やめてください！」

夕菜さんが、頭を抱えながら叫ぶ。けれど、もうその声すら骨桜には届いていないようだった。

憎しみをどれだけぶつけられても、出雲さんの表情は変わらない。心底面倒臭そうだった。

「全く……うるさい女は好きじゃないなあ、私は。でもまあ、お前がそこまで言うのなら、仕方が無い。そちらがその気なら、こちらも……ね」

出雲さんはあの金色の扇を取り出し、それを口元にやりながら、笑った。

第二十二話：桜の夢と神隠し（9）

骨桜は、余裕のある笑みを浮かべている出雲さんを、睨み続けている。出雲さんとは正反対に、彼女に余裕というものは全く見られない。怒りと憎しみにまかせて「殺してやる」と叫んでいるけれど、実際に彼女に出雲さんを殺す手だてがあるのかは全く分からない。今回も、出雲さんに酷い目にあわされた拳句、大切なものを全て奪われるかもしれない。

それでも彼女は、出雲さんに刃向かうことをやめない。意地なのか、何があっても失いたくないという思いなのか……それとも、憎しみの感情がそうさせているだけなのか。

「愚かな女。大人しく帰していればよかったのに。その後また、あの小娘達をさらえばいいだけの話だったのに」

「おい、出雲！ 何馬鹿なこと言っているんだ！」

紗久羅ちゃんが出雲さんに向かって叫ぶ。

「今回は助けてやるといったけれど、その後のことは知らないよ。……興味ないからね。でも、もう知らない。私に刃向かうものは、もう許してなんてあげない」

きつと、それは心からの言葉だろう。元々、出雲さんにとって夕菜さんや一夜はどうでもいい存在。今回は特別に助けてくれただけ。どうでもいい存在だから、その後どうなるかが知ったことではないのだ。例え、それが原因で菊野さんに怒られたって……。

酷く冷たい声でそう言われて紗久羅ちゃんは、拳を握りしめながら黙りこくってしまった。

骨桜が、右手を振り上げる。

「ここでは私の力の方が強い！　ここは私の統べる世界なのだから！」

骨桜が一気に右手を振り下ろす。すると、桜の花びらの色に似た眩しい光が天から、出雲さんめがけて落ちてきた。それはまるで雷のようだった。太鼓を思いつきり叩いたような、内臓をぐわんぐわんと揺らす大きな音がした。あまりの衝撃に地面が大きく揺れる。眩しい光に、思わず私は目を瞑った。瞑っても、目蓋に焼きついた光はなかなか消えなかった。耳は痺れて、しばらくの間何も聞くことができない。

地面が揺れがおさまり、私は恐る恐る目を開けてみた。もしあの光が出雲さんに直撃したのなら、幾ら彼でも無傷ではいられないだろう。

やや離れたところに立っている出雲さんは、見たところ無傷のようだった。手に持っている扇で攻撃を受け流したのか、結界のようなものを張ったのかは分からないが、とりあえず無事だ。けれど、あの光を間近で見たせいで目をやられたのか、左手で目を押さえ、頭を振っている。

骨桜がまた右腕を上げ、振り下ろす。私達をこの木の前まで誘ったあの木の根が出雲さんを再び襲った。太い根は反応が遅れた出雲さんの細い体を捕らえる。そのまま締め付けられれば、ただではすまない。良くて全身骨折内臓破裂、悪くて体がぺちゃんこ、或いは真っ二つ。出来ればそんな光景は見たくない。

「あれ、やばくねえか!？」

「何か、違うものに化けて逃げるとか出来ないのかしら？」

「何かに化けるには、ある程度集中して、自分の成りたい姿と自身を頭の中で結びつけるっていうことをしなくちゃならない。あれじゃあそんなこと考えている余裕がないだろう。……うーむ、あの化け狐がくたばるのは別段構わないですが、グロテスクな場面を皆に見せるのはちょっとあれっすからねえ……それに、あいつがないと骨桜を……ああ、しょうがないな！ 女に手をあげるのは好きじゃないっすか」

弥助さんが、ものすごい速さで駆けていく。あつと言う間に木の下まで行き、信じられないことに垂直に木を上っていた。まるで、漫画みたいな光景だわ。

骨桜の近くまで行くと、思いっきり木を蹴り、宙に舞う。呆氣にとられる骨桜に、体当たりを食らわせる。多分弥助さんは相当手加減している。それでも、骨桜はしゃがみ、苦しんでいるようだった。木の根を操る余裕が無くなったのか、少しずつ木の根の締め付けは緩くなっていき、やがて出雲さんは解放される。

「旦那！」

やた吉君が、地面に生えている草を適当に抜き取り、それに思いっきり息を吹きかける。すると、その草はみるみるうちに大きくなり、やがて人一人を乗せられる大きさにまでなる。そのまま、光のような速さで、地に落ちていく出雲さんのところまで飛んでいき、優しく彼の体を受け止める。

出雲さんがそこから飛び降り、着地すると草は元の大きさに戻り、見えなくなった。弥助さんはいつの間にか、こちらに戻ってきていた。出雲さんは何度か咳き込んだが、無事だ。

「やた吉、助かったよ。矢張り、持つべきものは使い魔だ。……私としたことが。ふふ、でも今度はこうはいかないよ。全く……あの時、跡形もなく焼くべきだったかな」

「これ以上、この身を焼かせはしない……焼かれる前に、殺してやる！」

骨桜を包む、黒いもやもやが、どんどん色濃くはつきりしてきている。濃くなればなるほど、何だか気分が重くなっていく。あれに触れてはいけない、と何となく思う。

骨桜が、裾をふわりとさせ、その場でくるりと優雅に回った。細い指先に、ひらひら落ちてきた桜の花びらが吸い寄せられていき、少しずつ集まっていく。何度も回るうち、それはすごい数になっていく。

骨桜の手が「枝」に、そしてその枝を彩る桜の花。そんな風に見える。

「切り刻まれて、死んでしまえ！」

骨桜が手を前へ突き出すと、集めた美しい桜の花びらが出雲さんめがけて飛んでいった。桜の雨、或いは流星群のように。柔らかい花びらを、鋭い刃に変えて憎むべき相手へと降り注ぐ。

それは、出雲さんと大して離れていない私達も襲った。私と紗久羅ちゃんとはつきに手で目をかばった。結界が張ってあるとはいえ、矢張り何か飛んできたらどうしてもそうしたくなってしまう。やた吉君とやた郎君の錫杖をぎゅっと握りしめ、向ってくる桜の花びらを睨みつけている。

一夜達も、悲鳴をあげている。けれど、花びらは彼らの体をすり抜けている。成る程、ここにいる彼らは精神体のようなものだからどんな攻撃も効かないのね。けれど、一夜達と一緒にいる弥助さんは違う。しゃがんだり、思い切り飛び上がったたりしてどうにかそれを避けている。

「やた吉君、弥助さんを結界に入れることは出来ないの!？」

「入れることは出来るけれど、結界に入れる人数が多くなればなる程、結界の精度が下がっちゃうんだよ。それに、弥助の兄貴だったら大丈夫だよ。ものすごく頑丈だし。ちつとやそつとの攻撃位じゃ死なないよ……多分」

……… 確実ではないらしい。

一方、出雲さん。少しも慌てた様子は無く、扇をぶんと振った。すると、出雲さんを襲う花びらが、扇に吸い寄せられていく。先程、骨桜がやったのと同じような感じだ。扇を持つ手を返す様子はとても優雅。

「切り刻まれはしないよ。痛いのは嫌いだよ、私は。そんなに誰かを切り刻みたいのなら、自分の体を刻んじゃえばいいんだ」
花びらは一箇所にまとまり、そしてその花びらをお返しとばかりに骨桜に向けて飛ばした。

「ござかしい!」

けれど、骨桜が腕を振ると花びらは淡い光を放って消えてしまった。

一向に決着は着きそうにない。

「このままじゃあ、埒があかないっすねえ……まあい、とりあえず少しこの場から離れよう。詳しい話を聞くにも、ここじゃあ落ち着いて話もできやしない」

とはいえ、ここは骨桜の空間。遠くに離れたからといって必ず安全とは言えないけれど弥助さんは付け加えつつも、さっさと走り出した。私達も慌ててそれについていく。出雲さんは大丈夫だ

るうか。やられるということは無いとは思っけれど。それだけじゃない。ここを離れている間に、出雲さんがうつかり骨桜を殺めてしまったらどうしましょう。殺してしまったら、何も解決しない。誰かストッパーの役目を持つ人がいた方がいいのでは、と思った。けれど、彼を止められる人なんて多分いない。私にだってどうしようもない。

素直にここを離れた方がよさそうだった。

*

終わり無き果て無き草原を、夢中になって走った。しばらくは、二人の戦う音が聞こえていたけれど、もう何も聞こえない。運動場を少し走っただけで息切れしてしまう私にとっては、たった数百メートル走ること苦痛だった。一夜達は今肉体の無い状態のせいか、少しも疲れた様子を見せていない。私より年下の小学生の男の子もけるっとしている。彼らは、今なら望めば空も飛べるかもしれない。少し羨ましい。

私は、疲れてその場に座り込んでしまった。地面は、酷く冷たいような気がした。

「さて。とりあえずここならいいだろう。……早速だが夕菜さん。今回の事件の経緯を話して欲しいです。何故骨桜はあそこまでお前さんに執着しているのか。何故、他の人達が連れ去られたのか。分かる範囲でいい。教えてくれ」

骨桜の事が気になるのか、青い顔をして冷や汗を流しながら私達の逃げてきた方向を見つめていた夕菜さんは、弥助さんにそう言われてしばし俯く。けれど、ここで事情を説明しないことにはどうしようもないと思ったのか、静かに顔をあげた。

「数年前の、ことです。私、山とかを歩いて気に入った風景をスケ

ツチするのが好きで……よく桜山にも上っていたんです。その日も、いつもの様にスケッチブックを持って桜山をふらふら歩いていたんです。そんな時です。急に、妙な浮遊感に襲われて。立ちくらみかな、って最初は思ったんです。実際はそうではなかったようですね。」

夕菜さんは、続ける。

「何だか、甘い香りがして。ひらひらと薄桃色の花びらが落ちてきたのを見たんです。桜の花びらに似ている、でも今は桜の季節じゃない。それじゃあこれは何の花びらなんだろうって顔をあげました。そしたら」

目の前に、この世のものとは思えない美しい桜の木があった。あまりに立派だったものだから、しばらくは何も考えることが出来なかったという。我に返って、何で今桜？と首を傾げた。けれど、あまりに綺麗だからそんな細かいことはどうでもいいやとすぐ思ったらしい。

そんな時。

「ふと見ると、その桜の木の幹……正面から見るとやや隠れている辺りが抉れていたんです。抉れている部分は真っ黒で……ああ、きつと雷が落ちたんだろうなって思いました。更に、よくよく見ると爪の様なもので深く幹が削られている。美しい。けれどその一方で残酷な傷をつけられている桜。私は、わずかな間にその木の膚になりました。思わず、幹に触れようと思いました。けれど、触れられなかった。見えない何かに阻まれたかのように。その後すぐまた不思議な浮遊感に襲われたんです。気づくと、もう桜の木は無かった。その時は、あああれは白昼夢というものだったのだろって思っていました」

綺麗だったなあ、夢でもあんなに素晴らしいものが見られて幸せ

だった。そんなことを思いながら、眠りについいたらしい。

「そしたら、夢で昼に見たのよりももつと立派で素敵な桜の木が出てきたんです。草原と、大きくて綺麗な桜の木。……私は、数年前にもこの世界に迷い込んだことがあるんです。彼女に導かれて」

この辺りは、ノートに書かれていた通りだ。けれど、ノートを覗いたので知っていますとは流石に言えず、黙って話を聞き続ける。

「その桜の木から女の人の泣く声が聞こえて、何だろうと思いがながら近づきました。そしたら、あの人がいたんです。酷く悲しそうに泣いていました。とても綺麗な人で……ああ、この人はきつと桜の精なのだろうと何となく思いました。どうして泣いているのだろうと思って私は彼女に話しかけました。話しかけたら、彼女は顔をあげて私の方を見ました」

何故泣いているのか？……私は、私の全てを奪われたのだ。美しかった私の体！気が遠くなる様な時をかけて美しく育て上げた我が体が！

奪われた？どういうことです

そなたは、私の体を見ているはずだ。私は今日、そなたを見た

それなら、貴方はあの時みた桜の木の精だったのですね。確かに、酷く傷つけられていました

精、か。どうだか。私はどちらかといえばそなた達が妖怪と呼ぶ存在に近いかもしれない。私は、人を喰らう。こうして夢を通じて自分の世界に人をおびき寄せて閉じ込める。そして、その者の肉

体も攫つて、喰らう。そなた達人間からしてみれば、恐るべし化物だろう

「自らを嘲るように彼女は笑いました。人を食べる……それはとても恐ろしいことです。けれど、どうしてでしょう。私は、彼女のことを怖いと思わなかったのです。大切なものを奪われて嘆く姿は、人間と同じで。哀れに思いました。愛しく……思いました」

けれど、私は貴方を怖いとは思いません。それに貴方は、とても美しいじゃありませんか。私は、今日貴方を見ました。確かに貴方の体は深く傷ついていました。それでも、倒れず立ち続ける貴方の姿はとても綺麗でした。だから、もっと誇ってもいいと思うんです。誇りを持ち続けて生きていけば、きつともっと輝けると。少なくとも私はそう思うんです。泣いて嘆いて、ヤケになっていても仕方無いです。……ごめんなさい。変なこと言いましたね。私だってもし自分の体を傷つけられて、それが一生消えないと知ったら……ごめんなさい、勝手なことを言っ

「元気つけてあげたいと思って、慰めにもならないような言葉をかけたんです。私だって、同じ立場になったら泣き続けたらどうに。誇りをもって生き続けるだなんて……けれど、彼女は私の言葉を聞いた後、涙を拭いて微笑んだんです」

有難う。心の底からの、言葉を。少しだけ……救われた。単純な女だと、笑うか？それでも構わん。ただ、嬉しいと思った。そなた、名前は何という

「優しいあの人の笑みは、ひらひら舞い踊る桜の花びらのようでした」

出雲さんと骨桜のいる方を、切なげに見つめながら彼女は微笑ん

だ。

夕菜といます。夕日の夕に、菜っ葉の菜で夕菜です

そうか、夕菜というのか。夕菜、そなたと話がしたい。人の世のことを聞いてみたい。……安心おし、そなたを喰らいはしないよ。そなたとは、仲良くなれそうだからな

「それで、骨桜とお友達になった……ってことっすか」

「……はい。それから、私は毎日の様に夢で彼女に会いました。最初はただの夢だと思っている部分もありました。けれど、何度も会ううちにこれは夢ではない。夢だけれど、夢ではない。夢であって現実の出来事なんだと思うようになりました。私と彼女は、色々なことを話しました。私は、学校のこととか友達のこととか、悩み事とか色々。あの人は、自分達のいる世界のことを話してくれました。私達が妖怪や精霊、或いは神と呼ばれる人達のことを」

楽しかった……と夕菜さんは呟く。けれど、その顔が一気に曇っていく。

「楽しい夢でした。けれど、私はいつの日からか少しずつ彼女の夢を見なくなっていました。大学受験のこととか、その……こ、恋とか。忙しくてでも楽しい現実の生活。その毎日を心の底から楽しんでいて。彼女のことを考えている暇なんて無かった。彼女と語り合う日々よりも楽しい日々が、あって。最低なんです……私。そしていつしか、全く私は彼女の夢を見なくなりました。彼女のことをすっかり忘れてしまっただんです」

現実の生活に夢中になって、骨桜のことを忘れてしまった夕菜さ

ん。自分のことも桜の木のことも考えなくなった彼女の夢と、自分の世界を結びつけることは出来ない。骨桜の力ではどうしようもないのだ。彼女の意識を自分の世界に閉じ込めない限り、肉体を攫うことも出来ない。自分から会いに行くことは叶わないのだ。

そうして、骨桜は友人を失った。それはどれだけ苦しいことだっただろう。きつと夕菜さんと出会い、彼女と語り合うことで出雲さんにつけられた癒えぬ傷を癒していたのだろう。けれど、かけがいの無い友人は自分のことを忘れて、自分の住む本来の世界へと消えていった。

けれど、誰が夕菜さんを責められるというのだろう。幾ら骨桜と過ごす時間が楽しいものでも……。夕菜さんにとっては、自分の住んでいる現実の世界での暮らしの方がずっと楽しく、大切なものだったのだろう。彼女は自分の大切な時間を選んだだけの話。けれど、その選択は骨桜を苦しめることとなった。

そのまま忘れていれば、物語はこんな風にはならなかった。骨桜は悲しみ嘆き続けるだろうが、夕菜さんは孝一さんや友人や家族と共に幸せな毎日を送る。二度と会うことは無かったはずだ。

けれど、夕菜さんは思い出してしまった。思い出の風景という課題を前にして、数年前にあった不思議な出来事。そして、骨桜と夢の中で語り合ったことを。そしてその彼女の記憶は、再び骨桜の下へ彼女を導くことになったのだ。

「課題のことを聞いた時、真っ先にあの桜の木のことを思い出しました。そしてあの夢のようで夢ではない日々のことも。……そしてすぐに決意しました。彼女を描こう。あの素晴らしい桜の木を描こうって。私が見てきたどの桜の木よりも綺麗なあの木を」

そんな風に絵を描いていたら、また彼女と会えるかもしれない。そうしたら沢山謝らなくちゃ。彼女は怒っているだろうか、泣いて

いるだろうか。もしかしたら、もう私のことなんて忘れてしまったかもしれない……夕菜さんはそう続けた。話は更に続く。

「そうして桜の木を描き続けていたある日のこと。とうとう、彼女が私の目の前に現れたのです」

夕菜！夕菜なのか！？ああ、夕菜会いたかった。私のことを思い出してくれたんだね。嬉しい！嬉しい！

「私が自分の事を忘れていたことを怒るわけでもなく、彼女は心の底から私との再会を喜んでくれました。私は彼女に謝りました。そんなことはどうでもいいと彼女は微笑んでくれました。あの、優しい笑みで。私は自分に恋人が出来たこと、新しい学校生活のこと、彼女の絵を描いていることを話しました。彼女は笑いながら私の話を聞いてくれました。久々に話せて嬉しかった……楽しかった……でもその時の私は知らなかったんです。自分がしたことが、どれだけ彼女のことを傷つけていたのか……」

色々なことを語り合った後、夕菜さんはいつものように帰ろうとした。骨桜が帰り道を開き、夕菜さんの意識はその道を辿って自分の体に戻っていたらしい。

ところが、だ。

「彼女は、私を帰してくださらなかったんです。意地悪で言うような目ではなかった。本気でした。……彼女ははっきりと言いました」

そなたは、死ぬまで私と一緒にいるのだ。もう帰さない、帰してなどあげない。そうしたら、そなたはまた私のことを忘れてしまっただろうから

夕菜さんは、肩を抱き震え始める。

「私は途端に彼女のことが怖くなりました。その後何度も私は彼女を説得しようと思いました。けれど、彼女は聞く耳を持たず……」

そして彼女は少しずつ元気を無くしていったのだという。どれだけ綺麗な世界でも、夕菜さんにとってそこは異界であり、自分の本来の居場所ではなかった。本来いるべきでない世界へ居続けるといふのは想像以上に辛いことなのだろう（私でさえ、異界へ行く時は不安になるのだから）それに、骨桜の世界には彼女以外誰もいない恋人である孝一さんも、家族も、友人も、誰も。

「私のせいなんです。私のせいで……。日に日に元気の無くなっていく私を骨桜は心配したようです。笑ってと何度も言われたけれど、とても笑うことはできませんでした。それどころか、涙や体の震えが止まらなかった。もう二度と帰れないのだと思っただら怖くて悲しくて、苦しくて」

「そこで、どうやらあの骨桜って奴は俺達人間を連れ去ることにしたらしい。ようはあの姉ちゃん、その夕菜って人の元気が無いのは話し相手が自分しかいなくて寂しいからだと思っただらしい。自分みたいな妖怪には分からない話でも人間なら分かるだろうから、良い話し相手になってくれるだろうし、そうして話し相手が増えればまた笑ってくれるだろうってさ」

一夜が、話を続けた。

「話し相手が増えればいいってもんじゃないのにね。それで、たまたまその時桜に強い思い入れがある人達を引っ張ってきては、この世界に閉じ込めたの」

高校生の女の子が更に続ける。小学生の男の子はその時のことを思い出したのか、泣きそうな顔になる。女の子が、そんな彼を優しく慰める。

「成程。じゃあ骨桜にとって必要だったのは夕菜さんだけで、後の人達はおまけつてやつだったんすね。あのにぶちん女は、夕菜さんが何故落ち込んでいるのか分からず、見当違いの方向に進んでいつちまったわけだ」

「それで、最終的には夕菜さんの彼氏の孝一さんが連れ去られたと……夕菜さんにとっては孝一さんが一番大切な人だから。一番大切な人間が傍にいれば、もう悲しむことも無いと思っただけだ」
紗久羅ちゃんが、肩をすくめる。「もう大丈夫」というのはそういう意味だったのだ。孝一さんさえこちらに来ればもう大丈夫。夕菜さんはまた笑顔を取り戻し、元気になってくれると思ったのだ。実際はそうでもないのだけれど……。

「しかし、このままじゃまた骨桜は誰かを連れてくるかもしれない。最悪、両親とか。勿論、彼らが桜のことを強く思っている必要があるけれど……娘が消えた場所に桜の花びらが散っていたんだから……桜のことを考えてもおかしくはない」

「かといって、無理矢理笑って骨桜をごまかすことも出来ない。でも自分に笑顔が戻らない限り、骨桜は何度でも同じことを繰り返す……被害者が増えていくばかりだ」

弥助さんが苦しそうに呟くと、夕菜さんがその場に座り込み顔を覆って泣き始めた。

「ごめんなさい、ごめんなさい！ 私のせいで……私のせいで……。骨桜を傷つけ、何にも関係の無い人まで苦しめて……」

「そんなに謝る必要は無いっすよ。夢のことなんて、普通はすぐ忘れちまうもんだ。それがどんなに楽しい夢でも、現実には適わないだから。まあ骨桜の気持ちも分からないでもないっすかね」

大切な友人が、自分のことを忘れてしまっ。それはどれだけ苦しいことなのだろう。そして、一度自分のことを忘れてしまった人が再び自分の目の前に現れたら。嬉しいだろう、けれどその一方でまた忘れられてはどうかという不安にかられるだろう。もし今度忘れられてしまったら、もう二度と思い出してもらえなくなるかもしれない。

もう、二度と会えないかもしれない。

その相手が大切であればあるほど、不安は大きくなる。骨桜にとって、自分の心を癒してくれた夕菜さんとはとても大切な存在だった。それだけに、忘れられた時の悲しみは深く、そしてその悲しみが彼女の心の底に狂気を生み出した。狂気は、夕菜さんと再会したことで表に出てしまったのだ。

「しかし、一向に決着がつきそうにないっすね。このままじゃあ、間に合わなくなるかもしれない」

「間に合わなくなる？ どういうことですか、弥助さん」

「このままじゃあ、骨桜は『魔』に完全にとり憑かれるってことっすよ」

「……魔？」

「さくら、骨桜の体から何か出ているのを見なかったか」

「え、あああの黒いもやもやですか？」
弥助さんが頷く。どうやら他の人にも見えていたらしい。

「強い負の感情を抱いた者には『魔』が憑く。魔は、元々強い負の感情を更に増幅させる。魔に憑かれた者は、通常よりも強大な力を手に入れる。その代わり、少しずつ正気を失っていく。少しずつ魔に支配されていく。……そして最終的には、怒りや憎しみだけで動く『魔物』と化す。そうになると、もう誰の言葉にも耳を貸そうとしない。殺し、壊し、暴れ続ける」

「それじゃあ、骨桜もこのままだと」

「魔に完全にとり憑かれ、ただの魔物と化す。……きっと、あの馬鹿狐に対する憎しみや夕菜さんを失った悲しみが……魔を引き寄せてしまったんだな」

「ど、どうすればいいんですか!？」

「……あの馬鹿狐は、妖でありながら魔を浄化する力を持っている。多分、桜って巫女が持っていた力なんだろうが……その巫女の肝を喰らったことで、彼女の持っていた巫女としての力も手に入れたようっすね。魔に完全にとり憑かれる前だったら、魔だけを浄化するだけで済む。けれど、もし魔に完全にとり憑かれて魔そのものになっちまったら……」

「なって、しまったら?」

弥助さんが首を振りながら、苦々しげに呟く。

「完全に……消滅しちまう。魔と一体化しちまったら、終わりだ。相手に生きる意志が無かった場合も、消滅する。だから、早くしな

いといけない」

夕菜さんが、声にならぬ悲鳴をあげる。

「やばいじゃん！ あの骨桜が消えたら、兄貴達は帰れなくなっちゃうし……でも、骨桜が今戦っているのは、あの姉ちゃんが一番憎んでいる出雲だから……」

「憎しみの感情がどんどん膨らんで、魔に侵食されるスピードが今まで以上に速くなっているはずだ。とはいえ、ある程度相手を弱らせないことには浄化の技も効かない。もしくは相手が少しの間でも魔を押さえつけていればその間に……。でも骨桜は魔の力でパワーアップしている。おまけにここは骨桜の空間。彼女の力がますます強くなっているし、出雲は多少弱体化している。まあそれでもあの馬鹿がやられることはないだろうが」

「でも、出雲の旦那が骨桜を殺さない程度に弱らせるのも難しいかもしれない。殺そうと思えば、多分本気出せば殺せるけれど。今回の場合は殺したら意味が無い。手加減するとか、自分の思い通りにならないとか、そういうのって出雲の旦那が一番嫌っていることなんだ。早く決着つけないと、やばいよ。骨桜を殺しちゃうかも」
やた吉君の言葉を聞いた夕菜さんは、急に立ち上がった。

「私、あそこに行かなくちゃ！ 今の私なら、攻撃も効かないのでしよう？」

「まあ、大抵のものは効かないはずですが……」

「私が、骨桜さんを止めます！ 少しでも骨桜さんが正気に戻れば、助かるかもしれないですよ？」

「そうっすけど……でも、今の彼女は夕菜さんの声すら聞こえないかもしれない」

「それでも、行かずにはいられません！ あの方は……今でも私の友人なのでから」

そう言っつて夕菜さんは涙を拭い、そのまま急いで駆けていった。それを孝一さんが慌てて追いかける。続いて骨桜に連れ去られた人達、一夜、弥助さん、そして私達。結局皆、先程いたところまで戻る事となった。

*

やはり、骨桜と出雲さんは未だ戦っていた。出雲さんは傷こそついていないようだが、大分疲れているのか息を荒げていた。元々体力が無いのかもしれない。見た目からして、インドア派の運動嫌いっぽい。まあそれでも私に比べればましなのかもしれないけれど。一方骨桜は、深い傷はついていないけれど、衣服はところどころ破れ、髪は乱れてぐしゃぐしゃ。頬から、赤い血が流れている。表情は更に険しい。それでもなお美しいが、一方でとてつもなく恐ろしくもある。鬼女のような。こちららも荒い息を吐き続けている。黒いもやも、確実に濃くなっている。

「ふふ、醜い姿になってなお、私に刃向かうというのかい？ いい加減にしてくれないかな、私ももう我慢の限界なんだけれど」

「知ったことか、貴様を殺して夕菜を取り戻す！ 私は負けぬ、貴様などに負けるものか！」

骨桜が手をあげる。

「やめて、やめて骨桜さん！」

夕菜さんの叫ぶ声が響き渡り、骨桜の手が止まる。夕菜さんは、

出雲さんをかばうようにして彼の前に立つ。夕菜さん自体は精神体だから、かばえるはずもないのだけれど。

「夕菜、何故その男をかばう？ よもや、私よりその男の方が大事だとは言わないだろうね？」

「違います！ 貴方のことが大切だからこそです！ 駄目です、お願い……もうこれ以上、傷つけないで。貴方が誰かを殺すところなんて、見たくありません！ 貴方が、殺されるのも、見たくない！ けれど、このままじゃあ……」

「夕菜、そこにいる男は私からかつて全てを奪った男だ。そして今度はそなたを奪おうとしている。友を失う苦しみを、もう私は味わいたくない。ここで暮らそう、ここにはもうそなたの恋人だっている。寂しくはないだろう？ だが、ここで暮らすためにはそこにいる男を殺さねばならぬ」

骨桜は聞く耳を持たない。夕菜さんは首を大きく振った。

「私は、ここでは暮らせません！ 確かにここは素敵なところですが、けれど……私の住んでいる世界には遠く及びません。私には私の世界があります！ 孝一や、他の人達がいるからって幸せにはなれないんです！ 私と貴方は友達です。けれど、私と貴方は人間と妖怪ずっと一緒にはいられません。貴方には貴方の、私には私の世界がある以上……」

夕菜さんの顔は、もう涙でぐちゃぐちゃになっていた。自分が言っていることが、どれだけ勝手なことなのかは自分が一番よく知っているのだろう。その心からの叫びに、骨桜は戸惑っているようだった。自分のことを大切に思ってくれている気持ち、けれど自分とずっと一緒にいることはできないという気持ち……夕菜さんのその

気持ち、骨桜にも伝わっているのだろう。けれど、伝わっているから理解できるということはない。帰せば、また失う。しかし彼女をここに留めていても数年前のように楽しく語り合うことはできない。

「どうすれば良いというのだ。ああ、いつそ私もそなたのことを忘れてしまつていれば良かった。所詮人と妖の友情など成り立たぬと諦めていれば、こんなことにはならなかったのだ、きつと」

骨桜はその場に崩れ落ちる。空に浮かんだまま座り込み、声をあげて泣いた。

「全く、ぴいぴいうるさいねえ。ほら、これで諦めがついたろう？」

「てめえは黙っている、馬鹿狐！ 話がややこしくなる！ 大体なあ、そもそもお前があゝの骨桜を燃やすわ切り裂くわ、散々なことをしたのが今回の事件の原因だろう。諸悪の根源はお前なんだぞ！」
確かに。出雲さんがつけた傷が夕菜さんと骨桜を結びつけるきっかけとなったのだ。となれば、今回の事件が起きたのはある意味出雲さんのせいと言っても過言ではない。

けれど、出雲さんはそんなことを言われても全く反省しないような人だ。

「おやおや。でも、もし私が傷をつけていなければあゝの骨桜は夕菜を食糧として認識し、数年前に会った時に捕まえて食っていただろうよ。となれば、夕菜は私のお陰で命拾いしたということになる」
屁理屈のような正論の様な。

「まあ、でも出雲さんは黙っていた方が話がスムーズに進みそうですね。そもそも出雲さんの存在そのものが、骨桜の憎しみを増長させるものですし」

と言つたら、出雲さんが舌打ちした。事実だから仕方が無い。

気づけばほんの一時の間少しだけ薄れていた黒いもやが濃くなつてきている。いよいよ、駄目かもしれない。

「嗚呼、苦しい苦しい、憎い、憎い……もう全てが憎い。ああ、憎い憎い……出雲も、夕菜も、もう何もかもが憎い。会わなければ良かった。こんなことになる位なら、いつそのこと。会ったばかりに！奪われ、手にいれ、そしてまた全て失った！」

体が震え、体のもやはますます濃くなる。顔を覆う手の爪が、額を血で染めていく。出雲さんが黙っていても最早無意味だ。このままでは骨桜は魔物と化してしまう。

その時、夕菜さんの体が宙に浮かんだ。彼女はまっすぐ骨桜の下へ行き、彼女を抱きしめた。骨桜が目を見開く。

「ごめんなさい。ごめんなさい……貴方をそこまで苦しめた私を許して。いえ、許してくれなくて構いません。私は貴方の全てを奪った。そのくせ、自分だけ幸せに暮らしてきた……ごめんなさい、ごめんなさい」

それだけしか、言えなかったのだろう。けれどその言葉には夕菜さんの心の全てが詰まっていた。

その心からの言葉は、骨桜に夕菜さんと送った楽しい日々のことを思い出させたのだろう。楽しく笑いあい、語り合ったことを。

会わなければ良かったなどと言えるわけがない。その思い出は忘れた方が幸せと呼べるようなものではなかったから。

骨桜の体が震え、彼女は低く唸った。自我を奪いつつある魔に對抗しているようだった。黒いもやが消えたり現れたりを繰り返す。

忘れたくない、憎みたくないと思う気持ち。

忘れない、憎みたいと思う気持ち。その二つが今戦っているのだ。骨桜が苦しんでいるのは、彼女の呻く声を聞けば分かる。あまりに痛々しくて、思わず耳を塞ぎたくなる。体が千切れそう、とても、痛くて苦しい。

その様子を見ていた出雲さんが、はあとため息をついた。その右手には……いつの間にやら、立派な弓が握られていた。月光を受けて輝くそれは随分と古い木で出来ているようだった。弓に張られた弦は、空に浮かぶ月と同じ銀色だった。

「弓張月。かつて、巫女の桜が使っていたものだ。……今はもう私のもものだけねど」

「射るのですか。弥助さんから『魔』というものについて教えてもらいました」

「ふうん、あいつもうそのことまで話していたの。まあ、でも恐らく大丈夫だ。あの様子じゃ、未だ完全に魔に飲み込まれたわけじゃない。今はこちらに注意を向けていないから……成功するだろう。失敗したとしても、知ったことか」

そう言つて、出雲さんは弓を構えた。けれど、肝心の矢が無い。

「出雲さん、矢は？」

「いらないよ、そんなもの。矢なんて自分で作ればいいだけのこと」

にやりと笑う出雲さんの髪が、ふわりと風にたなびく。月の光を浴びて、銀色に輝く髪。瞳の赤はより鮮やかに。歪む血濡れの唇。弓を支えるのは白く光る、あまりに細い腕。背をぴんと伸ばし、骨桜を見る彼の姿は、獲物を狙う獣のようだった。

弓を見ると、何か白い矢の様なものが見えた。出雲さんの力で作られたものということだろうか。冷酷非情で残酷な人が作ったものとは思えない、眩しく美しい矢。あまりに神聖で、美しすぎる光を見たら気持ちが悪くなった。一点の穢れもないものは、逆に見るものを不安にさせる。心が揺れて、自分の中にある醜いものを吐き出しそうになる。

桜の花はざわざわと揺れ、不安そうに「その時」が来るのを待った。

そして。

出雲さんは、静かにその矢を……放った。眩い白い光は真っ直ぐに骨桜へと向かっていった。骨桜はその矢に気がついたが、最早避ける時間は無かった。彼女に巢食う魔にとってその矢は脅威だ。けれど、自分を苦しめる負の感情を消し去りたいと願っているだろう骨桜にとっては……救いに見えたかもしれない。

矢は、彼女を抱きしめる夕菜さんをすり抜けて、骨桜の胸に当たった。

骨桜が叫んだ。苦しげなその声は最早獣のそれであった。あの叫び声は骨桜のものなのか、それとも。

彼女の体から黒いもやがどんどん出てきて、それを光の矢が吸収する。矢は少しずつ黒くなっていく。夕菜さんは衝撃で吹き飛ばされ、それを孝一さんが慌てて受け止める。

いつそ耳なんて壊れてしまった方がいいと思う位、恐ろしい骨桜の悲鳴はしばらく続いた。彼女の悲しみが原因で膨れ上がった思いが、どんどん矢に吸収されていつている。

どの位の時が経ったのだろう。一瞬だったのかもしれないし、と

ても長かったかもしれない。全てを吸い尽くした矢はやがて粒子と
なって、四方に散った。

骨桜はゆっくり下降して行って、やがて木の下にへたりと座り込
んだ。

彼女は死んでいない。ならば、出雲さんの浄化は成功したのだろ
う。夕菜さんが慌てて彼女のところまで駆け寄った。骨桜は酷く疲
れているように見える。

「……私は、狂っていたのか。私の体の中を巡っていた色々なもの
が、すっかり抜け落ちたようだ」

風が、彼女の髪を揺らす。骨桜はぼそぼそと、力ない声で呟いて
いる。俯いているせいで、顔はよく見えない。

「すまなかつた……夕菜も、他の者達にも迷惑をかけた。……そこ
の化け狐には何が何でも謝罪などしてやらぬが」

「それが助けた人に対して言う言葉かね」

「だから出雲は黙っているって。全く良い神経していやがるぜ、助
けたなんてよくいえるよ」

紗久羅ちゃんはため息をつき、肩をすくめた。

「けれど、少しも心は晴れない。……空っぽだ」

そんな彼女の手を、夕菜さんが優しくとった。

「私にとっては今も貴方は大切な友人です。私が貴方にしたことは、
酷いことだとわかっています。それでも、私は貴方と友達でいたい
のです。……遊びに、きます。また」

「けれど……」

「私は、またこんなことを言っつて、貴方のことを忘れてしまつかもしれません。毎日遊びに来ることは出来ないですし、いつか全く来なくなることもあるかもしれない。絶対に忘れないなんて……言い切ることは出来ません。私にとつてどうしても大切なのは自分の世界ですから。それでもいいのなら、私は友達でいたい。けれどもそれが嫌なら……私のことなんて、忘れてください」

「忘れるものか」

夕菜さんの手に、骨桜の涙が落ちる。

「忘れられるものか。ただ泣くことしかできなかった、惨めな毎日を送っていた私を救ってくれた、友人だ。忘れてくださいと言われ忘れられる程、そなたの存在は小さくないのだ。私は今も怖い。いずれ、また狂うことがあるかもしれない。それでも、それがまた私の下に来てくれるのなら、それ以上の幸せは無い。友達だ、私とそなたは。もう私はそなたを縛りつけぬ。幸せに暮らせ、そなたの世界で。そして時々遊びに来て、私にその幸せを分けてほしい。それこそが、私の幸せだ……」

夕菜さんはうんうんと頷いた。そして骨桜を優しく抱きしめる。

骨桜も抱きしめ返し、二人で泣き続けた。

そんな二人を、あの桜の花びらが優しく包み込んでいた……。

*

私達は、あの万華鏡を使って帰った。夕菜さん達の意識は骨桜が戻してくれた。

一夜達の体もまた、骨桜の術によってそれぞれの家へ帰っていったようだ。消えていた人達が急に戻ってきて、家族達はさぞかし驚いたことだろう。喜ぶよりも、何が起きたのかさっぱり分からずパ

ニツクに陥ってしまうかもしれない。一夜も今頃、自分の部屋に戻っているだろう。

「ああ、終わった終わった。疲れた。もうこんな面倒なことではできればやりたくないねえ」

「どうだか。あんたのことだから、ありとあらゆるところにトラブルの種を蒔いているんじゃないっすかねえ」

「お黙り、馬鹿狸。この役立たずめ」

「ああ、てめえ助けられたこと忘れたっすか」

「覚えていないね。お前の妄想なんじゃない？ さあ、こんな馬鹿の世迷言は聞き流してさっさと帰るとしよう。私もさっさと休みたいし」

出雲さんはまた巾着からあの牛車を取り出す。やた吉君とやた郎君が先導して、私達は満月館を目指した。

出雲さんは車の中から、空を眺めていた。激しい戦いを終えた後とは思えな位静かな表情だった。彼は何を思っているのだろう。何も、思っていないかもしれない。骨桜と夕菜さんの友情も彼にとってはきつとどうでもいいものなのだ。しばらくすれば彼は、今日のことをすっかり忘れてしまいかもしれない。

それでも結果的に彼は骨桜を助けてくれたし、私のお願いも聞いてくれた。一夜達は無事に家に帰ることができた。

「あの、出雲さん」

「なんだい、サク」

「あの、有難う御座いました。一夜達を助けてくれて」

「別に。でも今度は助けてあげるか知らないよ。君達が苦しみのたうち回っているのを見るほうが好きだし」

私のほうをちらと見て、また視線を外へ戻す。ぐちぐち文句を言われないでよかった。てつきり色々言われるのかと思ったわ。一夜みたいに口うるさいことを。

紗久羅ちゃんは、帰ったら馬鹿兄貴を一発くらいどついてやると呟いている。けれどその顔は何だかとても嬉しそうだった。良かったわね、紗久羅ちゃん。

そして満月館へ戻った後、私と紗久羅ちゃんは弥助さんに連れられて帰っていった。私はおじいちゃんの家へ帰り、おじいちゃんに今日起きたことを話した。おじいちゃんは優しく笑いながら私の話を聞いてくれた。

*

こうして「桜町連続神隠し事件」は静かに幕を閉じた。被害者達は皆家族にどう説明しようか随分悩んだらしく結局「よく覚えていない」と言い張ったらしい。一夜だけは菊野お婆様達に何もかも話したらしい。「何馬鹿な話しているんだい、それより宿題をさっさとやっちまいな」と言われたらしいけれど。あくまで菊野お婆様は、知らぬ存ぜぬ深く関わらぬというスタンスらしい。

後日。私はおじいちゃんの喫茶店で一夜と話していた。骨桜の空間に居た時のことをもつと詳しく聞かされた。アイスが溶けるのも気にせず、夢中になって私は話を聞いていた。一夜の方は夏バテしているのか、ぼうつとしながらパフェのアイスやクリームをかき混ぜ、もごもごしながら話している。

「もういい加減にしろよ、さくら。俺疲れたんですけど」

「やっぱり夏バテ？ 駄目よもつとしつかり体調管理しないと」

「原因は夏の暑さじゃなくてお前なんだけど」

「何で？」

「はあ。正直に言った俺が馬鹿だった」

意味が分からず首を傾げていると、弥助さんがアイステイーを持ってやってきた。

「よっ、おしどり夫婦さん。こんな暑い日に、お熱いことで」

「誰が夫婦だよ！ こんな奴の旦那になったら三日でストレスで死んでしまうよ！」

まあ、失礼なこと言うわね。今日のパフェ代一夜に出させようかしら。弥助さんは大きな声を出して笑う。

「まあまあ。あっしから見ればあんた達お似合いだと思うけどな」

「冗談じゃないっての。それにしても、驚いたよ。弥助も出雲も妖怪だったなんてさ！」

一夜は、出雲さんが妖怪だということにも気づいていなかったらしい。紗久羅ちゃんも菊野お婆様も、紅葉おば様だつて気づいていたらしいのに（おじ様はどうか知らないけれど）本当に昔から鈍い人だと思っていたけれど、まさかあんな人を前にして人間だと本気で信じ込んでいたなんて。

「まあまあ、黙っていて悪かったよ。あっしとしては人間として暮らしていたかったからさ。しかし、その頭メルヘン娘にばれちまったせいで、質問攻めされる羽目になっちまった。あれは地獄だったっすよお」

とおいおい泣いている。私そんなに沢山質問したかしら。……していないと思うけれど。一夜はその気持ち分かりますと涙ながらに語り始める。もう二人とも、失礼しちゃうわ。

「そういえば、今夕菜さんはどうしているかしら」

「ん？ ああ、孝一さんから聞いたけれどあの後骨桜の絵を一生懸命描いているらしいっすよ。完成するのは当分先だけれど、心を込めて描くって張り切っているそうっす。時々骨桜のところに遊びに行っているようだし」

「そう。それは良かった。……あの二人の友情はずっと続くでしょうか」

弥助さんはアイステイーを一口飲んだ。

「どうだかね。夕菜さんだつてこれからどんどん忙しくなるだろう。辛いことも楽しいことも経験する。もし孝一さんと結婚して、子供を産んで、そんな幸せな家庭を築いたら……また現実の暮らしに夢中で骨桜のことなど忘れてしまうかもしれない。骨桜が、もう二度と魔に憑かれなれないとも限らない。上手くいくかどうかなんて……誰にも分からないっすよ。けれど、あの二人が自分達の間にある絆を信じ続けているのなら。どんなことがあっても大丈夫かもしれないっす」

「そう、そうですね。……そういえば、あちらの世界に一度行って

しまつとあちらの匂いが染みついてしまつて、異界の人々を呼び寄せてしまつらしいですけど、今回骨桜に連れ去られてしまつた人達はどうなるんですか？」

「まあ、見たくないものが見えるようにはなるかもしれないっすねえ。変なことに巻き込まれるかもしれない。今まで人間や自然の作業だと思つていたことが、実は妖怪達のやつていたことだつた……つてことに気づいてしまつたかもしれない。まあ、でも自分から進んで関わるうとしなければ、そんなに変な目にはあわないっすよ」

「となれば、紗久羅ちゃんも望まなければ変なことに巻き込まれないですむんですか」

「いやあ、あいつは無理だろう。出雲と関わり続けている限りは」と言つて、ため息。哀れ、紗久羅ちゃん。結局出雲さんが近くいる限り紗久羅ちゃんは異界との関わりを断ち切れないのね。

けれど、私は今のところ異界との関わりを断つつもりは無い。どれだけ残酷で、どれだけ自分の住む世界と違つところでも……矢張り私はどうしようもなくあの世界に惹かれてしまふのだ。誰に呆れられてもいい。私は、あの世界のこともつと知りたい。

そして、出雲さんのことも。

こうして私は、あの美しくも残酷な妖と関わることになつていったのだ。この町で起こる様々な出来事。出雲さんは時に私達を助け、時に私達が築き上げようとしたものを壊し、本来幸せな結末を迎えるはずだつた物語を悲劇に変えた。

彼との出会いは、私を大きく変えていくことになる。私だけではない。様々な人の運命を彼は変えていくことになるのだ。

そして、伝えられてきた数々の物語の真実も知ることとなるのだ。

喜劇或いは悲劇の物語の、はじまり、はじまり。

番外編2：桜、憂う

桜、憂う

どん、がらがら、どんつ。派手な音と共に、桜村の長の息子である弥作ややくは村で一番立派な造りの神聖な社から蹴り落とされ、階段に頭や腕をぶつけながら惨めに地べたに転がっていった。当然、痛い。情けない呻き声をあげながら悶絶する。

誰が弥作を蹴り落としたのか。犯人は、社の入り口の前で仁王立ちしている女であった。彼女はこの社の主だ。

美しく、気高く、強くて賢くて……乱暴で凶悪で短気で口の悪い巫女。名は、桜と言う。桜は、地面でのたうち回っている弥作を汚いものでも見るかの様な目で冷ややかに見つめている。彼女に仕える娘達、近くに居た村人達は「またやっているよ」と半ば呆れながらその様子を見ている。

しばらくしてから、ようやく弥作は立ち上がり、自分を思いつきり……一切手加減せずに蹴飛ばした桜を睨み、大声で叫んだ。

「てめえ、いい加減にしゃがれ！ この俺様の愛を受け取らないどころか、こんな乱暴な真似しやがって！ ちよつと手を握っただけじゃねえか！」

「黙れ、腐れ外道が！ 私は神に仕える者。この体も魂も、全ては神のもの。貴様のものにはならぬ。手はおるか髪の毛一本も触れさせてやらぬ。汚らわしい」

桜はそう言いながら、顔にかかった太陽の光を受けて七色に輝く髪を、面倒くさそうに振り払う。

「体も魂も全て神のもの」実に巫女らしい言葉ではあるのだが、彼女が言うとは何か酷く胡散臭いものに聞こえる。平気で人を蹴飛ばし、乱暴な言葉を吐く娘が言っても今いち説得力に欠ける。

「ふざけんな！ 大体、神なんている訳ねえだろう。そんないもないものに、身も心も捧げる？ 阿呆らしい！ 第一もつたいないじゃねえか、そんなにいい体しているのによ！」

そうして、弥作は彼女に聞くに堪えぬ卑猥な言葉を次々と投げつける。

その体、全て俺に寄越せよ。大事に扱ってやるぜ」

そうして下卑た笑みを浮かべる。と、そんな彼の右耳を何かがかすった。それは、矢であった。弥作がべちゃくちゃといやらしいことを言っている間に、桜が弓を用意し、彼めがけて矢を放つたらしい。その弓は、神木から作られた彼女愛用の品であった。

弥作は口をぽかんと開けて、その場に固まっていた。狙いが逸れていればどうなっていたかは想像しなくても分かることだった。

「貴様が神様にでもなれば、考えてやってもよいぞ？ まあ、貴様の様な下種な男が神になどなれるはずもないがなあ？ さて、まだ何か言うつもりか？ これ以上汚らしい言葉を吐いてみる、今度はその脳天をぶち抜いてやる」

脅しでは無く、半ば本気の様であった。弥作は顔を真っ赤にして怒り狂いながらも、覚えていると捨て台詞を吐いてさっさと逃げていった。

桜ははあとため息をつき、さっさと社の中へ入っていった。そしてその後、弥作に触れられた手を、憎いようなものでも見るような目で見ながら、それはそれは丁寧に清めた。

「貴方、またあの村長の馬鹿息子をばこにしたんですって？」
社から伸びる渡り廊下を渡った先には、桜の部屋がある。その目の前には庭がある。庭にある桜の木を眺める桜の隣に、一人の娘が座っている。彼女は桜の幼馴染であり、彼女の身の回りの世話役であった、名をいよと言う。呆れたように言ついよを、桜はちらと見、また視線を庭に戻す。

「本当にしつこい男だ。あれだけやっても、一向に諦めようとしな
い。私は奴のことなど少しも好きではないのに。というか嫌いだ。
一刻も早くくたばってもらいたいものだ。ああ、あいつに触られ
た手から未だ変な臭いがする！ 忌々しい！」
そう言つて、手を乱暴に振った。

「はあ。貴方位のものよ、あの馬鹿息子に手をあげられる人なんて
普通の人じゃ、今頃村長に酷い目に合わされているわよ。あの狸、
息子には甘いから」

村人に影で狸と呼ばれている長は、典型的な親馬鹿であり息子に
非常に甘い。だから、例え息子の方に非があつたとしても、彼に手
をあげた者には理不尽な制裁を与える。そのせいで元々我侭だつた
弥作はどんどん我侭になり、やりたい放題である。我侭で乱暴で欲
張りでけちで助平。桜村歴代ろくでなしの中でもぶつちぎりのNO
1である。2は、その父である。先代村長（現村長の父）が優れた
人格者であつただけに、何故こんなことになつてしまったのかと村
人達は首を傾げ、頭を悩ませている。

そんな馬鹿息子、弥作に手をあげて無事でいられるのは桜位のも
のだ。桜は己の持つ力を用い、幾度と無く村の危機を救ってきてい
た。そんなわけだから流石の馬鹿村長も桜には頭が上がらないのだ。

「ふん。……いい加減射殺した方がいいかもしれぬ」

「貴方ねえ。仮にも神聖なる巫女様でしょう。それが射殺すだなんて……。大体貴方、本当に神のことを信じているの？ いつも思うけれど本当は神様なんていないって思っているんじゃないの」

いよが問うと桜がくすつと笑った。桜の花の様な柔らかくて可憐な笑みだ。

「信じているさ。だって、私に力を授けてくれたのは他ならぬ神なのだから。私は神と会い、そしてこの力を手に入れたのだ。あの日から私の人生は大きく変わった」

桜はそう言って、庭に出た。

庭にある桜の木は薄桃色の花で鮮やかに彩られている。ひらひら舞い散る花を浴びながら、桜はくるりと回る。髪が、手が足が、衣装の袖が日の光を浴びて金色に輝く。彼女の「人」としての部分は日の光に隠れ、彼女の乱暴で男勝りな部分は消え失せる。そして神聖で村の誰よりも女らしい彼女の姿が現れる。この時の彼女には、どんな人間でも触れられないといよは思う。妬く気持ちもおきない程、彼女は美しい。

彼女は変わった。

(昔は、どこにでもいる普通の女の子だったのに)

昔の事を思ういよに、桜は微笑みかけた。

「私は、あの日私の目の前に現れた神のことを、今でも強く想っている」

(本当に、そうなの?)

いよは、知っている。彼女がその『神』の名を口にする時に浮かべる笑みには陰があることを。本人が気づいているのかは分からない。

本当に彼女は感謝しているのだろうか。彼女がよく語ってくれ
「自分に力をくれた神様」のことを。

「桜を見る度に思い出す。あの日のこと。そしてあの日出会った『
神』のことを」

桜は頭上に咲き誇る自分と同じ名の花を、じつと見つめる。けれ
どやはりその姿はどこか憂いを帯びているように思える。

桜の持つ力は、生まれつきのものでは無い。幼い頃の彼女はそう
いった力を一切持っていなかった。

彼女は桜村にあるこの社に住み、占や加持祈祷等で村を助ける一
族の娘だ。この家系のものは皆生まれつき、未来を予言する力や雨
を呼ぶ力、普通の者が見ることの出来ないものを見る力、物の怪を
退治する力等を持っている。彼らはその力を用い、常に人々の力と
なっていた。

ところがその一族の直系の娘であるはずの桜は、そういった力を
一切持っていなかった。一族の誰もが生まれつき、大なり小なり持
っていたものは彼女は持たずに生まれてきた。

それゆえ、村人達には馬鹿にされ、子供達には「お前はあの家の
子供じゃないんだろう」と言われ、家族にさえ見放された。彼女の
ことを心配し、味方になってくれる者等殆どいなかった。弥作も昔
は桜のことを馬鹿にし、率先して虐めていた。

顔も平凡で、特別美しい訳では無かった。昔と全く変わらぬとこ
ろといえば、意地っ張りや男勝りで乱暴だったところ位だ。どれだ
けいじめられたり、からかわれたりしても彼女は決して負けなかつ
た。少なくとも人前では泣いたり弱音を吐いたりすることはなかつ
た。周りの人の冷たい態度が、彼女をそういう風にしていったのだ。
刃向かつてはやらね、そしてますます意地っ張りになり、反抗し、

またやられては……その繰り返しだった。いよはそんな彼女の助けになりたいと想っていたが、手を差し伸べれば彼女に睨まれて乱暴に振り払われそうだったから……何もすることが出来なかった。

昔の彼女はいつも一人ぼっちだった。

酷い世界だと、思っていた。力が無いという理由だけで馬鹿にされる。他の人達だってそんな力は持っていないくせに。皆と何一つ違うところなど無いはずなのに、不思議な力を持つ一族の娘として生まれたばかりに酷い仕打ちを受けることになった。

この世界には何も無いと思っていた。温もりも優しさも色も、無い。喻えるなら冬に降り積もる雪だけの世界。雪は綺麗だと皆言うが、桜にとっては忌々しいものだった。色も温もりも何も無いあんなものを、何故そんなに美しいと思えるのか理解できない。

壊せるものなら、こんな世界壊してやりたいと桜は思っていた。けれど彼女には何の力も無い。ただの意地っ張りで生意気な小娘なのだ。

家族や村人達のいう『神』なんて本当はいないのだと思っていた。そんなもの、いるわけがないと思っていた。いたとしても、酷く残酷で汚くて、力のある者にだけ力を貸す様な、そんな奴だと思っていた。

『神』に出会うまでは。

それは丁度、今の様に桜の花が咲いている時のことだった。

桜はいつもの様に一人桜山を歩いていた。山を薄桃色に染める桜をぼつと眺める。とても美しい花なのに、桜には何の色もついていない雪を被った花に見える。桜の花に囲まれても少しも楽しい気分になれない。かといって村に戻ればまた弥作に腹の立つことを言われ、家族に冷たい目で見られる。どこへ行っても桜に幸せなどな

い。桜は、ため息をついた。

君、一人ぼっちなの

背後から聞き覚えの無い声がした。少年の声だった。一体誰だろうと桜は後ろを振り向く。

桜の木の下に、一人の少年が立っていた。

雪のように白い肌、肩まで伸ばした空に浮かぶ銀の月と同じ色の髪、瞳は秋に舞う紅葉の様な赤。青い着物を着ていて、背丈は桜と同じ位。

甘い匂いのする桜の花の吹雪の中で、彼は微笑んでいた。

力の無い桜にも、彼が人でないこと位は一目見れば分かった。けれど、妖怪の様な穢らわしい存在には思えなかった。

ならば、ならば彼は。

可哀想に。一人は辛いよね、苦しいよね

彼の声を聞いた途端、桜は自分が心の中に溜め込んでいた色々なものが外へ噴き出るのを感じた。

どうしようも無く苦しくなつて、桜は泣いた。人前で（最も彼は人ではないけれど）泣くのは本当に久しぶりだった。もう自分では止められそうになかった。そんな彼女の様子を少年……いや『神』はじっと眺めている。

僕は、神様なんだ。だから君に力をあげることが出来る。力が欲しいだろうか？力があれば、何だって出来る。君のことを馬鹿にしている人達を見返すことも出来る。もうそんな風に苦しむ必要も無くなる

桜は顔をあげる。彼は微笑んでいた。

その笑みは彼女の体を冷やし、暖め、痺れさせ、震えさせ、蕩け

させた。彼女はもう彼から目を逸らすことが出来なくなってしまうた。彼は微笑んだまま、桜に手を差し伸べた。桜はその手を恐る恐る握る。酷く冷たくて、触れた途端体がびりびりと痺れた。

一緒に行こう。僕が、良い所に連れて行ってあげる。そこへ行けば、僕は君に力を分けてあげることが出来る

足音も立てず、ふわふわと歩く少年に桜は引っ張られていった。

そうして彼と歩いているうち、桜は世界に色が戻っていくのを感じた。さっきまで、冷たくて何も無い真っ白な雪の様だった世界は、温かくて優しく美しいものに見えてきた。

それは、自分の手をぎゅっと握り締めながら走る彼のお陰かもしれない。

どうして、私のことを助けてくれるの？

僕は君のことが好きだからだよ。だから、力をあげるんだ。僕は神様だから、ずっと君と一緒にいることは出来ない。力を分けたら、すぐに帰らなくちゃいけない。……約束だよ、僕のことを忘れないで。絶対に。僕のことをずっと想い続けていて。僕も、君を忘れないから

うん、うん。絶対に忘れない、貴方のことは決して。私は貴方に仕える巫女になります。貴方の為に……生きていきます。

神は、その言葉を聞いてまた笑った。

そして桜は神に秘密の場所へ連れて行かれた。そして、彼の力を分けてもらった。けれど、気がついた時には彼の姿は無かった。

以来、彼には一度も会っていない。

そしてその日を境に桜は、無力な娘では無くなった。自分を冷たい目で見ていた家族達よりもずっと強い力を手に入れた。魔を滅ぼし、雨を呼び、傷を癒す霊的な力を。

更に、平凡だった彼女の姿は日に日に美しくなっていくた。そこらにどこにでもいるような村娘とは比べ物にならない位、美しい女性に。……もっとも気が強くて意地っ張りな性格は変わらなかったが。

世界は、大きく変わった。今まで散々自分のことを馬鹿にしていた人々は、手のひらを返したかのように彼女を頼り、敬うようになった。いじめっ子の弥作も最早桜のことを虐めなくなり、逆に彼女に言い寄るようになる（これは迷惑な話であったが）家族は自分のことを自慢の娘と誇るようになった。

壊したくなる程憎んでいたはずの世界。その世界は神との邂逅をきっかけに、ある意味では完全に崩壊した。

こうして桜の人生は大きく変わった。今では、桜様と皆に呼ばれる慕われる優れた巫女となった。

「私は、感謝しているんだ」

そう桜は呟く。けれど、どこかそう自分に無理矢理言い聞かせているような気がして、いよは不安になった。

本当に、彼女は幸せなのだろうか。

昔は力を持つ家系に生まれながら、何の力も持っていなかった娘。たったそれだけの理由で、人間扱いされず、酷い仕打ちを受け続けていた、哀れな娘。

しかし彼女は力を得たことで、誰からも愛され、慕われ、敬われる存在となった。

(確かに桜は力を手に入れた。けれど、私は思う。結局今も昔も……変わっていないんじゃないの?)
神聖で、神に近い存在として彼女を見る者は大勢いる。けれど彼女を一人の人間の女の子として見てくれる人は……殆ど居ない。弥作だつて彼女の顔と豊満な体しか見ていない。あれは、女性として見ているというより、自分の快樂の為の道具として見ているといった感じだ。

結局何が変わったというのだ。昔も今も、彼女を一人の人間として見てくれている人など誰もいない。そんなことを考えているいよもまた、彼女を普通の人間の娘として見ることが出来ない。そんなこと考えられない位、強い力を持っているのだ。

しかし、それは果たして本当に幸せなことなのだろうか。彼女の笑顔は本物なのだろうか。

「桜……貴方、本当に幸せなの?」

悲しげな表情を浮かべ、いよは呟いた。それを聞いた桜が瞬きしながら彼女を見る。

桜の花びらが、桜を包み込む。

……約束だよ、僕のことを忘れないで。絶対に。僕のことをずっと想い続けていて。僕も、君を忘れないから

桜は微笑んだ。その笑みは、いよの体を冷やし、暖め、痺れさせ、震えさせ、蕩けさせた。

もういよの手の届かぬ場所に行ってしまった、幼馴染。桜はただ一言呟いた。

「
幸せだよ
」

番外編3：夏は暑い。恋は熱い。

『夏は暑い。恋は熱い』

「夏は嫌いです」

桜町の外れにある喫茶店『桜(SAKURA)』の中でも、一番日が当たらない、暗くて涼しい場所にあるテーブルに、女が座っている。

髪は白に近い銀色で、触れれば凍りついてしまいそうな冷たい色をしていた。瞳は青玉の様な鮮やかな青。肌は白く、唇はやや青い。着ているのは、飾り気の無い白のワンピース。20代半ば程に見える。少し病弱な、外国に住む清楚なお嬢さんといった感じの雰囲気。の娘だ。

女は、アイスコーヒーを一口飲むなりそう呟き、ため息をついた。そんな彼女の真向かいに座っているのは、この喫茶店で働いている弥助だ。ちなみに休憩中。清楚とか、冷たいとかそういう言葉とは一切無縁そうな、暑苦しくてむさ苦しい男である。弥助は、ソーダを一口飲みながら苦笑する。

「まあ、小雪にとっては天敵だろうなあ、この暑さは」

「ついでに弥助。あんたも暑苦しいから、嫌いです」

「ああ？ 何だと！？ 何さり気なく酷いこと言っているっすか」

小雪と呼ばれた女は、ぷいっとそっぽを向く。そして、窓から差し込む眩しい太陽の光を見て顔をしかめた。

「全く、この世界は地獄です。なんだってこんなに暑いんですか。あちらの世界は、こちらに比べたらずっと涼しいです。特に私の住

む所は、とても涼しくて住み心地がいい。はあ、こんな所に住んでいるから、人間共は常にぴりぴりしてやがるんですよ。全く、弥助はよくこんな所に住んでいられますね。馬鹿ですね、阿呆ですね」「アイスコーヒ―は、あつという間に小雪の体の中に消え、氷で作られたかのような冷たく透明なグラスだけが残った。小雪は、さつと手をあげて店員を呼ぶ。

程なくして現れたのは、ここで弥助と一緒に働いている朝比奈満月だ。腰まで伸びている髪を上で束ねている彼女は、温かな笑みを浮かべる。愛らしいその笑顔に、弥助の顔が一気に情けないものになる。鼻の下は伸び、元々垂れている目が更に垂れて、頬が赤くなる。それもそのはずだ。弥助は彼女のことを好きなのだから。満月は、小雪に心からの笑顔を向ける。彼女の来店を歓迎しているのだ。

「いらつしゃいませ」

「注文の追加、お願いできるかしら」

「はい。ご注文をお願いいたします」

「宇治金時パフェ一つ、お願いするわ」

「宇治金時パフェですね、かしこまりました。少々お待ちくださいませ」

伝票を書き終わると満月はお辞儀して、厨房へ向う。弥助と目が合った彼女は、にこりと笑った。弥助は長時間放置したアイスクリームのようにすっかり溶けてしまった。その様子を小雪が顔をしかめながら見つめている。

「本当、暑苦しい。……恋する男ってやつですね……本当、暑苦しい。ああ、暑い暑い。嫌になるわ、本当」

手をぱたぱたさせながら小雪が冷たく言い放つも、弥助は全く気にする素振りを見せず、満月の笑顔を思い出してとるとろに溶けている。そのまま蒸発して消えそうな勢い。これが「恋する乙女」であれば可愛いのだが、生憎今溶けているのはむさ苦しい男。しかもお兄さん、というよりはおっさんに近い（実年齢で考えれば、おじいさんを遥かに超えるレベルなのだ）のだから、余計にむさ苦しく、見苦しい。

「いいじゃないっすか、別に。人を想う気持ちっていうのはそれ位人を熱くさせちゃうもんなんだよ。まあいつも冷たい雪女のおんたには分からないかもしれないうが」

そう、小雪もまた弥助と同じ「人ならざる者」なのだ。周囲を雪山や真白の森に囲まれた、雪女や雪男等寒い所を好む妖等が集まる雪の里に住んでいる。暑い所にいると溶けて消えてしまうという訳では無いが、長時間いれば命を縮め、最悪死に至る。そんな彼女にとって人間界の夏の暑さは天敵なのだ。

そんな彼女は、弥助の言葉を聞いて顔をしかめる。

「いつも冷たい、とは聞き捨てなりませんね。私だって熱くなる時はあります」

「へえ、あんたが？ それは初耳っすねえ。……全く、そんなに嫌だったらこっちに来なければいいじゃないっすか。何で暑くて死にそうになることが分かっていて、来るっすか？」

何気なく弥助がそう聞くと、小雪の体が急に固まった。見れば、そのぞつとする位冷たく白い頬が赤く染まっている。

もう空になっっているコップを両手で包み込み、視線をテーブルに

やり、あーとかうーとか訳の分からぬ声をあげる。

「べ、別に。弥助には関係の無いことです。ええ、全然関係の無いことなのです」

そう言つてごまかそうとするが、何かあることは見え見えである。先程まで殆ど顔色も変えず淡々と喋っていた彼女とは大違い。顔を真っ赤にして慌てふためく。

弥助は、コップをぎゅっと持ち彼から視線を逸らす小雪の様子を見て、にやりと笑つた。

「ははん、成る程ねえ。あんた、こっちの世界に好きな人がいるんですね。……こっちの世界に来ないと会えない……すなわち、相手は人間。ずばり、そうだろう？」

小雪の顔は、林檎飴の様に真っ赤になつた。あからさまに動揺し、口をぱくぱくさせながら、弥助を力なく睨んでいる。

「図星のようつすねえ。いやあ、驚いた。あつしには暑苦しいとか何とか言つておきながら、自分も恋をしていたとは。冷たい氷の塊よりなお冷たいあんたが、人を、好きに」

小雪が恋をしているという事実が、弥助にとっては余程おかしいことに思えたらしく、テーブルを叩いて笑い始めた。無神経もいところだ。

「う、う、うるさい！ やっぱり弥助は嫌いです！ あの満月つて女も可哀想です、お前みたいな男に好かれるなんて。不幸としか言いようがありません、心の底から同情します！」

立ち上がり、身を乗り出し、弥助に怒鳴る。しかし、その必死な姿が余程おかしかったのか、ますますその笑い声は大きくなつていく。もしここが人の世界で無ければ、今頃彼女は口から冷気を発して弥助を凍りつかせていただろう。しかし今此処でそんなことをし

たら、大変なことになる。小雪は口に乗せて吐き出したい怒りを何とか抑える。

「わ、笑うのをやめなさい！ でないと後で恐ろしい目に合わせてやります！ 夜道には気をつけなさい、私が背後からお前を襲って凍らせて、カキ氷にして喰ってやりますから！」

「あつしをカキ氷にしたって美味しくはないっすよ。多分どう調理しても不味いだろうな、うん。それにしても小雪、あんたが恋をしているなんてねえ。いやあ、妖怪に好かれちまうなんて、その人間の男も可哀想だ」

「黙れ、馬鹿狸。その言葉、そっくり返してやります。汚い面で、馬鹿力位しか取り柄の無いお前に好かれる、あの娘が可哀想です、本当に。あ、あの娘は人間にしてはなかなか可愛い娘です。しかも、心優しく料理も上手。それなのに、よりもよってそんな可愛い娘の顔を見てデレデレしているのが、お前みたいな汚い筋肉達磨だなんて！ 私があの娘と同じ立場だったら……っ」

「汚い面で悪かったなあ。でもそんなことあんたには関係ないだろう」

小雪が、大声で何かを叫ぼうとして、やめて深呼吸し、そして恐らく最初に言おうとしたこととは別のことを言う。

「その言葉もそっくり返してやります。私が恋をしているとか、いないとか、誰にしているとか……そ、そんなの……お、お前には関係の無いことです！」

関係無い、その一言には切ない想いが隠されているのだが、弥助にそんな想いを汲み取れるはずがない。汲み取れていれば、今頃こんなことにはなっていなかったはずだ。

「まあ、確かに関係無いんだが……」

「不潔、筋肉馬鹿、鈍感男！ 大嫌いです！」

「鈍感？ それは今の会話とどう関係しているんですか？ 女心の分からない男ね、この馬鹿ってことっすか？」

「べべべべ、別に、深い、意味は、あ、ありません！」

「だん！とテーブルを叩く。弥助が笑いながらも、意味が分からないと首を傾げた。」

一方、厨房。パフェのトッピングをしている満月の下に、この店のマスターである秋太郎がやって来た。

「またやっているよ、あの二人は」

「そうみたいです。声は殆ど聞こえてこないですけど、いつもの様に言い合っているのが聞こえます」

「あの二人は、ここで会う度に喧嘩しているもんなあ。いつもはまあ、小雪さんの方が優勢なだけけれど。今回は珍しく弥助の方が、ね」

秋太郎が、くすくす笑う。

「私思うんですけど、小雪さんって弥助さんこと……好きですよ、ね」

「だと思っよ。今丁度、小雪さんの好きな人についての話になっているようだけれど。弥助は鈍いから気づいていないけれど……小雪

さんが、遠くから来てまで会いたいのには、弥助だろうねえ」

「向こう側の世界」からやって来てまで、とは言わなかった。秋太郎は弥助も小雪も妖であることは知っているが、満月は知らないのだ。だから、その辺りは上手くぼかした。別に嘘はついていない。あちらの世界は遠い世界。決してこちらの世界と交わることの無い、辿り着くことのできぬ場所なのだから。

「暑いのが苦手で、文句を言いながらもこっちまで来て、それであいつに会いに来て。けれど、いつも喧嘩になってしまふ。……あの馬鹿がもう少し鋭ければこうもならないだろうにねえ。鈍感な弥助と、なかなか正直になれない小雪さん。このままじゃあ、弥助が彼女の想いに気づくこともなく、小雪さんが想いを伝えられることもなく……同じことの繰り返しだろうねえ」

「でも、弥助さんは弥助さんで、好きな人がいるみたいなんですよね。小雪さん……ではないと思うんですけれど、誰なのかさっぱり分からないです」

クリームをしぼって抹茶のアイスの上に落とす満月が、首を傾げる。秋太郎は、心の中で苦笑した。弥助が好きなのは、満月である。しかし、彼女はそのことを知らない。彼の熱すぎる視線にも彼女は全く気がつかないのだ。他人に向ける想いには敏感でも、自分に向けられる想いにはとことん鈍い。その点は、弥助によく似ているのかもしれない。

「ま、まあいずれ君にも話してくれるんじゃないかな」
……果たして話す日が来るのかどうか。

「小雪さんの恋も応援したいです。けれど、弥助さんの想いも成就すればいいなと思ってしまつて。難しいです……」

と本気で頭を悩ませる彼女は、どこまでも優しい娘だ。けれど彼

女知らないのだ。自分が彼らの恋のトライアングルの一点（或いは一辺）となつてゐることに。優しくも愚かな彼女は。きつと永遠にそのことに気づくまい。

傍観者として、三人の恋路を見守つてゐる秋太郎は、もどかしいやら切ないやら楽しいやら。

パフェのトッピングも終わり、満月はそれをお盆に乗せてテーブルへと向う。

「お待たせいたしました、宇治金時パフェです」

ひやりと冷たく、高貴な茶の香り漂うパフェ。それが目の前に置かれると、先程まで大声で叫んでいた小雪も、少しだけ大人しくなる。まあ、言い争いをしてゐた相手が、満月に見惚れて大人しくなつたからというのもあるのだが。

「有難う」

小雪が俯きながら礼を言う。その後、ぶつぶつと何かを呟いていたが、聞き取ることは出来ない。満月はまたにこりと微笑んで、厨房へ向う。秋太郎は、カウンターに戻つていて、新聞を読みながらちらちらと彼らの様子を眺めてゐる。

小雪は、満月に複雑な視線を向ける。彼女のことは嫌いではない。むしろ、好きな部類に入る。けれど、そんな彼女は恋敵。彼女はそんなこと少しも知らないだろうけれど。

そして目の前にいる弥助を見る。何だつて、こんなものに惚れてしまつたのか。心の中で問うも、答えは出ない。具体的にどこが好きかと聞かれたら、頭を抱えて悩んでしまうかもしれない。

彼の優しさに触れたことがキツカケだったことは確かだ。けれど、弥助は誰にだつて優しい男。それが彼の良い所なのか、悪い所なのか。そこに惚れたのか、違ふのか。未だに分からない。

彼は。自分から想いを伝えない限り、自分の想いに気づくことはあるまい。それがどうしようもなく悲しく、切なく、もどかしく、腹立たしい。小雪は、パフェを一口食べる。抹茶のアイスは甘すぎず、クリームと食べると丁度良い甘さになる。そのクリームもくどくない。大人の味、という感じがするのだ。小雪は、人間の事など好きではないが、人間の作る料理は美味しいからそれなりに好きだった。

「暑いのは、嫌い。大嫌い……嫌いです……本当に、大嫌い……」
自分の心をごまかすように、ぶつぶつ呟きながら小雪はパフェを食べる。そんな思いにさせる男は、自分の方など見もせずにはけつとしていく。そうされると、ますます意地を張ってしまう自分が情けない。

秋太郎は、ため息をつきながらそんな二人の様子を見ている。

「夏は暑い。恋する人は、熱い。夏の暑さにはほとほと参るけれど、こつこつ熱さは……嫌いじゃないねえ、むしろ楽しいし、心地よい位だ。人を思う時、心は熱くなる……昔を思い出すなあ」

昔の恋の思い出を懐かしみつつ、彼は思わず声を出して笑った。

果たして、小雪の熱い思いは弥助に届くのだろうか。仮に届いたとして、その熱い思いは、寒い冬を迎えることなく、永遠に夏の間までいられるのだろうか。

この先どうなるのか、楽しみだ。

季節は、夏。今日も……あつい。

番外編 4：桜村奇譚集 2

『紫昏泉』

桜山に紫昏泉ししぐれいずみと呼ばれる泉がある。その泉の水は紫がかっている。大昔は只の泉であり名も『時雨泉しぐれ』と呼ばれていたらしい。ところがある日、密かに思い慕っていた男が他の女と祝言をあげたことを嘆いた娘が、男が好きであったという紫色の紫陽花を胸に抱き、その泉にて自害をした。その娘の悲しい想いは泉の中を漂い続け、泉の色を紫に変えた。死の旅のお供をした紫陽花と同じ色へ。以来、この泉は『紫昏泉』と呼ばれるようになったのだ。

『蛭塚』

桜山には蛭塚と呼ばれる塚がある。それは、死んだ蛭達を供養するために作られたものだ。

ある日山へ入った男は、蛭塚の前に一人の女が立っているのを見た。村の者では無い。とても美しいが、酷く病弱そうな女だった。女は、男の姿に気がつく、突然泣き始めた。どうかしたのかと問えば、女は私は後少ししか生きられない、それがたまらなく悲しい、このまま一人静かに惨めに死ぬのかと思うと、胸が苦しいと言う。

男は、女を哀れに思い、彼女を自分の家へ連れてきた。もし貴方が良いというのなら、私と共に暮らさないかと男は言う。決して裕福な暮らしではないけれど、退屈はさせぬと。女は、こくり静かに頷く。

こうして二人は夫婦となり、貧しくも楽しい毎を送った。

しかし、ある日の夜のことだ。眠っている男は、淡い光に照らされて目を覚ました。見上げれば、女が静かに立っていた。女は淡い黄緑色の光を放っている。何事かと思えば、女が口を開く。

私は、どうやらもう行かねばならぬようです。死ぬのは矢張り悲

しく、こんなにも短い自分の命を恨めしく思います。されど、貴方と過ごした日々はとても楽しいものでした。もし貴方と出会っていなければ、私はただ嘆き続けるだけのつまらぬ生涯を送ったでしょう。心から感謝いたします。それでは、さようなら。

女はそういつて、男の目の前から消えて行き、男の意識はそこで途絶えた。

次の日の朝、目を覚まし、慌てて家の中を見回すが、女の姿は無い。その代わり、女が寝ていた所に蛍の死骸があった。

あの女は、蛍だったのだ。

彼女の魂も、今頃あの蛍塚の下で眠っているのだろうか……男は女を失ったことを嘆きつつも、そう思った。

『髪飾り』

ある日娘は商人から、髪飾りを買った。美しい柄の髪飾りを娘は喜んで頭にさした。しかし、それをつけた後からやたらと臭い匂いがする。どうやらその髪飾りから臭うようだった。あまりに酷い臭いだったから、娘は我慢できなくなり、その髪飾りを力いっぱい地面に叩きつけた。そしたら、髪飾りは狸の姿に変わり、すたこらさつさと逃げていった。

『障子破り』

それは一尺程の小さな鬼で、そうつと家に忍び込んで、障子にわざと穴を開け、満足するとまた静かに去っていく。彼らが何故その様なことをするのかは、分からぬ

『放り出された子供』

ある日、村から一人の少年が姿を消した。数日後、見知らぬ男がその少年を連れて、村にやってきた。何があつたのか問えば、数日前畑で仕事をしようとしていた男は、畑の真ん中に誰か立っているのを見た。見ればそれは見知らぬ少年で、おいおいと泣いている。

少年は、何でも数日前遠く離れている自分の住む村で遊んでいたところ、大きく白い狐に首根っこをつかまれ、連れ去られてしまったのだという。そして見知らぬ土地に一人、放り出されてしまったらしい。曰く、自分の住む村の近くにある山には、出雲という化け狐が住んでいるらしく、それはとてつもなく悪い妖怪で、恐らく自分をさらってここに置き去りにしたのも彼だろうと。

男は、そんな少年を可哀想に思い、わざわざここまで連れてきてくれたのだった。

『家呑み大蛇』おろち

昔、家を丸々呑み込んでしまう恐ろしい大蛇がいた。その大蛇が通った場所にある木は全てなぎ倒され、地面は抉れ、小さな動物等ひとたまりも無いという。

その大蛇に頭を悩ませていた村人は、神様にどうかあの恐ろしい大蛇を退治してくださいとお願いした。

ある日のこと、一人の若者が村を訪れた。若者は家呑み大蛇の話を知ると、それならば私がその大蛇を退治いたしましょうと言った。そしてある晩のこと、家呑み大蛇がやってきた。若者は、村人に沢山作ってもらった酒やらご馳走やらで、自分が中に居る、今はもう使われていない古い家まで大蛇を誘導した。

大蛇は大きな口を開けて、彼のいる家を一口で呑み込んだ。

ところが、しばらくして大蛇が悲鳴をあげた。大蛇の腹が、二つに大きく裂けた。見れば、家の中にいた男が大きな剣を手に持っていた。男は、家ごと呑み込まれた後、剣で大蛇の腹を裂いたのだ。男は見事大蛇から脱出し、大蛇は死んだ。

村人は、男に礼を言おうとした。が、気づくと男の姿は消えていた。

男は、村人の願いを聞いた神様の遣いだったのかもしれない。

『手招き井戸』

今は封印された、恐ろしい井戸が桜村にはある。

その井戸は手招き井戸と呼ばれている。その井戸を覗き込むと、今はもう死んでいる自分が大切に思っていた人が「おうい、おうい」と言いながら手招いているのが見える。しかし、だからといってずっと井戸を覗き込んではいけけない。そうしているうちに、魂が体から抜かれ、その井戸へと吸い込まれ二度と戻れなくなってしまふからだ。

そうして、多くの人が「招かれ」て死んだ。井戸は、巫女の手によって封印された。

今でもその井戸は残っている。

『七黒泉』

七黒泉ななくろいずみと呼ばれる泉が、昔あった。ある場所に固まって存在していた七つの小さな泉を総称してそう呼んでいた。かつては『七泉』なないずみと呼ばれていた。その泉は、体についた穢れを落とす禊に使われていた。しかし、多くの穢れを洗い流すうち、泉の色が黒くなってしまった。そうして黒くなると、次の泉を皆使い始め、またそこが黒くなると、次の泉を使った。そうして、七つの泉全てが真っ黒になつてしまった。そしてその泉は『七黒泉』と呼ばれるようになったのだ。

しかし、ある日巫女の桜が、祈りの言葉を捧げ、手に持っていた扇をかざしたところ、泉に漂う穢れは浄化され元の美しい泉に戻った。だが元に戻った後も、泉は七黒泉と呼ばれている。

『狸の宴』

まあるい月が出てきたら、ぼんぼこ宴が始まるよ
食べ物の家から盗まれていたら、ぼんぼこ宴が始まるよ

夜山の中で笑い声が聞こえたら、ぼんぼこ宴をやっているんだよ

狸が、飲み食い歌い踊って騒ぐ

ぼんぼこ宴だよ

『たたきっこ』

たたきっこという子供がいる。その子供はどこからともなくやって来て、子供の頭をぽかつかつと叩いて逃げる。逃げ足は速く、彼を捕まえることは出来ない。別段悪いことをしていなくても叩かれる。叩かれるような理由が無くても、叩かれる。

『恐ろしいもの』

雷、火事、凶作、毒キノコ、巫女の桜様。

『残してはならぬ』

どんなことがあっても決して食事を残してはいけない。のこ様が夜現れて、貴方が食べ残してしまったものを貴方の顔にぶちまけてしまうから。

『曼珠沙華』

ある日村の娘が道を歩いていると、道端に咲いていた曼珠沙華が目にとまった。不吉な花と分かっていながらも、その美しい赤から目を離せなくなってしまった。じいっとその花を見つめっていると、娘の肩を叩く者があった。

振り返ると、そこには狐の面をつけた、藍色の着物を着た少年が立っていた。少年は黙って手に持っていた曼珠沙華を、娘に渡した。そうすると、そのまま少年は姿を消してしまった。

少年から貰った花を娘は家へ持ち帰り、飽きもせず眺め続けていた。母がそれを気味悪く思い、そんな不吉な花など捨ててしまいなさいと言ったが、娘は聞く耳を持たない。娘は、もう誰の声も聞かえていなかった。ただただ曼珠沙華を眺めているだけ。娘はその花の持つ恐るべき魔の力に、身も心も蝕まれ、その花の虜となった。両親は、そんな娘からその花を奪い取るうとしたが、娘のその花を

握りしめる力は恐ろしい程強く、奪えない。

そうしているうち、娘の体から何か青白いもやのものが出てきて、彼女が手に持っていた曼珠沙華に吸い込まれていった。途端、娘は倒れてしまった。娘はもう息をしていなかった。娘は魂を花に奪われた。

娘の魂を得た曼珠沙華の赤はますます鮮やかに、そして美しくなっていた。

両親が突然のことに呆気に取られていると、家に先程の狐の面をつけた少年が静かに入ってきた。少年は何も言わず、死んだ娘の手から曼珠沙華をいとも簡単に取り上げ、呆然としている両親には目もくれず、さつさと出て行った。

少年が一体何者であったのかは、分からない。曼珠沙華は『狐花』とも呼ばれている。彼は狐であったかもしれない。そうでなかったかもしれない。

『重い』

一人の男が、山中を歩いていると子供の泣き声が聞こえた。声のする方へ行ってみれば、少年が一人わんわんと泣いていた。何でも山で遊んでいる間に迷ってしまったらしい。

仕方無いので、男は少年を村へ送り届けることにした。少年が心細いから手を繋いでほしいというので、男は少年と手を繋いでやった。

しばらく歩いていると、だんだんと自分の体が重くなってきたような気がした。いや、違う。重くなってきたのは自分の体ではなく、自分と手を繋いでいる少年の体の方だ。しばらくすると、少年は石の様に重くなり、男は動けなくなってしまった。どれだけ引く張っても、少年はびくともしない。

この少年は人ではないのか。気がついた時にはもう遅かった。男は慌てて少年から手を離そうとしたが、手が少年にぴったりとくっついてしまって、離すことが出来ない。進むことも戻ることもでき

ず、男はその場で立ち尽くすことになった。

段々恐くなった男は、とうとう泣き出してしまった。

すると、少年がけらけらと笑った。少年は散々笑った末に、さつと手を離れた。そして走ってどこかへと消えてしまった。

『降ってきた』

ある日男が歩いていると、空から小判が降ってきた。

次の日は稲穂が落ちてきた。

次の日は木の実が落ちてきた。

そして次の日、牛が降ってきて、男はそれに押し潰されて死んでしまった。

第二十三話：胡蝶の夢（1）（前書き）

時系列としては「鬼灯夜行」と「桜の夢と神隠し」の間位。三人称。

第二十三話：胡蝶の夢（1）

『胡蝶の夢』

いまみやひろみ
今宮広海は今、ただの生ける屍であった。

ろくに洗っていない髪は油でべたべたで、妙にぎらぎらしている。顔も唇も青く、頬はやや痩せこけている。目の下に出来たくまは濃い色をしていた。瞳の色も、そのくまと同じ位どんよりと暗く、光の無い、死んだ魚の目の様。髭は剃ることをやめたせいで、だらしなく伸びている。数日前から着たままのシャツやズボンは汗を吸ってじめじめしていた。しかし今の彼はそんなことすら気にしていない。

彼自身も酷い有様だが、部屋の中も同じ位酷い。カーテンは閉めっぱなしで、折角の太陽の光もろくに差し込まない。電気もつけていないから、ほの暗い。テーブルにはカップラーメンや弁当、コンビニのおにぎりの残骸が散らばっている。まだ中身が入っているものもある。それに集る虫もそのまま放置だ。布団はたたみもせず、ぐちゃぐちゃに床に敷かれている。この頃全くつけられなくなってしまうたテレビは静かに佇んでいる。洗濯されていない服や下着が散乱し、放置された食べ物の臭いとそれらの臭い、どんよりとした空気が混ざり合い、恐るべき悪臭を生みだして部屋中に漂っている。友人や家族からのメールや電話は全て無視され、彼の携帯にむなしく溜まり続けている。

雀の鳴く声で目を覚ました彼は、何かを食べもせず、歯を磨かず、何もせずただぼうつと座り込んでいた。焦点のあっていない目には何が映っているのだろうか。

彼がこのようになってしまったのは、一ヶ月前からだ。それ以前は、掃除だつてそれなりにしていたし、食事だつてきちんと（といつてもインスタントが多めだったが）摂っていた。風呂にも入り、歯も磨き、大学にも行き、TVを見ては大笑いしていた。亡霊や生ける屍とは一切無縁の、至つて普通の毎日を送つてきていた。何故、そんな彼が。

彼には恋人……いや婚約者がいた。名前は倉橋亜里沙。くらはしあさ 広海の実家の真向かいにある家の娘で小さい頃から遊んでいた、いわゆる幼馴染というものだった。中学の頃からお互いを異性として意識するようになり、中学卒業と共に恋人同士となった。どうせ長く続かないだろう、などと言われていたが喧嘩こそすれど別れることはなく高校を卒業。お互い大学に進学した後も、付き合いは続いていた。そして彼は一大決心し、大学を卒業してしばらくしたら結婚して欲しいと彼女にプロポーズ。返事は、OK。二人は婚約した。幸せだった。二人で過ごす時間は、何よりも大切に愛おしい時間だった。

数年後には、幸せな家庭を築いている、はずだった。

しかし、そんな幸せな未来は一瞬にして崩れ去る。

一ヶ月前、倉橋亜里沙が交通事故によって命を落としたのだ。友人と買い物をした帰り道、信号無視した車に撥ねられて。彼女を撥ねた男は捕まった。けれど、彼女は病院で息を引き取った。

二人が何年もかけて積み重ねてきた大切な時間。それ以上積み重ねられることは、もうない。減ることもないが、増えもしない。そのままの状態で、止まってしまった。

積み重ねられた時間の先にあるはずだった、幸せな未来。それは、見知らぬ男によって壊された。取り戻すことは出来ない。

彼女の死と共に、広海の時間は止まった。以来、彼の体は魂の抜け殻のようなものになってしまった。

*

そんな広海が、ある日久しぶりに外へ出た。理由は特に無い。何となく出ようと思ったから出ただけだ。着替えた後、財布を持って家を出た。携帯は、家に置きっぱなし。今は、誰の話も聞きたくなかった。

久しぶりにまともに浴びた太陽の光。それは、白い炎をまとった剣のようだった。容赦なく、すっかり痩せてしまった体を突き刺す。皮膚も骨も、何もかもが引き裂かれ、焼かれていく。

外の世界に溢れている音。蝉の鳴き声、子供達の笑い声、鳥の鳴き声、車の走る音、風鈴の涼しげな音色……その全てが、今の彼の耳には届いていない。

目に映るもの全てに、色がない。ぐにやぐにやした輪郭、白い物体。人も猫も鳥も、皆。居て、居ない。何も無いつまらない世界だ。その世界を歩いている間思い出すのは、忌まわしき日のことだ。

大学の友人と遊んだ帰り道で、携帯電話が鳴った。見れば、母からだ。何だろうと思しながら、電話に出る。

のん気な声と共に電話にでた広海を待っていたのは、予想もできない信じられない報告だった。母の、酷く弱弱しく掠れた声を広海は一生忘れることは出来ないだろう。

亜里沙ちゃんかね……死んじゃったの

母はそれだけ言って、泣き崩れた。

広海の頭は真っ白になった。何を母が言ったのか、分からない。一瞬で頭の中が熱くなった。いや、或いはあまりに冷たくなって逆に熱く感じたのかもしれない。脳は動くことをやめた。考えること

も驚くことも、詳しいことを聞くことも、言葉の意味を理解するの
も……ましてや、泣くことなど出来るはずもない。

それ以上何も話せなくなってしまう母に代わり、父が電話に出
た。父の声もまた掠れていた。父から詳しいことを説明されたが、
言葉一つ一つが聞いたそばからばらばらに分解されていき、意味の
無いただの文字になっていく。亜里沙という彼女の名前すら、人の
名前として認識できない。

しばらくして、分解された文字が言葉として組み立てられていく。
けれどそれでも、事態を飲み込むことは出来なかった。

亜里沙が死んだ。友人と遊びに行った帰り道、車に撥ねられた。
病院に運ばれたけれど、数時間後に息を引き取った。

たったそれだけの言葉理解することすら儘ならない。

父に、彼女が運ばれた病院の名前を聞いた。すぐ隣の街、三つ葉
市にある病院だ。頭の中に残されている「言葉」が膨張していく。
今にも破裂しそうだ。

広海は急いで病院へと向った。

そして、永遠に覚めない眠りについている亜里沙を、見た。亜里
沙の母が椅子に座ったまま呆然としている。

最初は涙も出なかった。ただ立ち尽くすことしか出来なかった。
数日前に会った時は元気に笑っていた彼女が微笑むことはもう無い。
信じられなかった。彼女によく似た人形が、横たわっているだけだ
と……そう思いたかった。けれど、目の前にいるのは間違いなく自
分が愛した女性なのだ。

もう何もかも訳が分からなくなる。こみ上げてきた色々な思いが、
涙となって外へと吐き出される。どれだけ泣いても、彼女は目を覚
まさない。もう自分の声は彼女の耳には届かない。

全てを吐き出し、残ったのは空っぽの体だった。

毎日のように、その日のことを思い出す。今はもう涙も出てこない。何もかもが空っぽになってしまったからだ。意識は遙か彼方へ行き、ここでは無いどこかを彷徨い続けている。

ふらふらと向った先は、桜町商店街。意識がこの世界に向いていないせいだろうか。店は白い箱に見える。大きな箱、小さな箱が並んでいる。そして店の人や客は、白いもやもやした物体に。広海は自分がどこにいるかもよく分かっていなかった。歩いてても歩いて、色のない物体が続くだけの世界は、見る価値もないものだ。外へ出ても何も変わらない。だから広海は、殆ど外へ出なくなった。出てもなくとも同じだからだ。

どこからか、食べものの良い匂いがした。広海のお腹が鳴る。そして初めて彼は、昨日からろくに物を食べていないことを思い出す。その匂いがする所は、弁当屋だ。『やました』という名の小さな弁当屋で、広海はよくそこで弁当を買って食べていた。その匂いが一瞬だけ広海の意識をこちらの世界に戻す。久しぶりにあの弁当屋で弁当を買うか。意識はまたすぐにどこかへ行ったが、広海の足はゆっくりと弁当屋へ向っていた。

弁当屋まで後少し、というところで広海は足を止める。弁当屋の前に誰かが立っていたのだ。不思議なことに、周りにいる人間には色も顔もはっきりとした形も無いのに、その人物だけははっきりと彼の瞳に映ってきた。色も顔も……ある。一人ではなく、二人だ。

一人は女。頭のとっぺんに一つお団子を作り、残りの髪の毛は下に真っ直ぐ流れている。お団子の付け根の辺りにはかんざしが幾つかついている。黒い着物には色鮮やかな何かが描かれている。金色の帯が日の光を浴びて眩く輝いている。

もう一人は男……だろう。髪の毛が長く、腰程まである上に細身ですらつとしていますが、女の様な丸みを帯びた体ではないから恐らく男だ。藤色の着物に、青い帯。

二人は確かに人間の形をしていた。けれど、どこか異質に見える。他の建物や人間はまともに見えないのに、この二人だけきちんとした形をして見えるのは妙だ。白の世界という水に浮いた油の様……周囲に溶け込んでいるようで、全く溶け込んでいない二人組に、広海は目を奪われた。周りの人が、突然立ち止まった広海をじろじろ見ているが、彼はそのことに気づいていない。彼らのことなど見えていないからだ。

女が、しばらくして広海に気づく。瞬間、冷たい電流が体中に流れる。衝撃と、寒気。この場から逃げる、という警告が頭の中で発せられるが体は動かなかった。女は広海に近づいていく。男もそれに気づいて後を追う。

あつという間に女と男は広海の前に立ち、静かに彼を見つめていた。

どちらも広海よりはやや年上……20代半ばから30歳位に見える。作り物かと思う位整った顔立ち。整いすぎて、逆に恐ろしい。

「あら、私が見えるの？ 今は二人して気配を消していたつもりだったのだけれど。それとも、今私達をはっきり見ているのは貴方だけかしら？」

女が首を傾げる。彼女の髪を飾るかんざしは、蝶の絵が描いてあるもの、蝶を象った飾りのついたものなどがある。着物の絵柄もよく見れば、虹色の蝶が描かれていた。

「まあ、偶にそういう人っているのよね。どれだけ姿を隠して

も、見つけてしまう人って。でもおかしいわね、貴方からは何も感じないわ。ねえ、出雲貴方はどう？」

「私も感じないねえ。まあ、こんな男どうでもいいじゃないか。私はさっさといつもの様にいなり寿司を買って帰りたい」

「そう。まあそれならいいわ。私も興味無いし、人間なんて。あら？」

広海を無視して話を続ける女が、頭上を見る。思わず広海もつられて上を見る。すると、空から見た事も無い蝶が飛んできた。その蝶も、しっかりと今の広海の瞳に映っている。

その蝶は、虹色の羽根を持っていた。模様は無い。その蝶は虹色の鱗粉を撒き散らしながら、徐々に広海に近づきやがて彼の頭上に止まった。思わず振り払おうとしたが、手が動かない。

「あら、お前、その男が気に入ったの。……ふうん、成程ねえ。まあお前の好きな様になさい。ふふ、貴方。その蝶に気に入られたということは、決して手に入れることの出来ない何かがあるってことなのね」

広海はその言葉を聞いて、彼岸へ行ってしまった亜里沙の顔を思い浮かべた。死んでしまった彼女とこの世で会うことは永遠に無い。彼女をどれだけ求めても、無駄なのだ。決して手に入らない……彼女も、彼女と過ごす『未来』も何もかも。

彼が否定しないのを見ると、女は笑みを浮かべた。明らかに何かを企んでいるような笑みだった。女が次に発した言葉は、意外なものだった。

「手に入るわよ」

広海は、大きく目を見開いた。その言葉を聞いた途端亜里沙との思い出が頭の中を巡り、体中の血が沸騰して熱くなる。

「ああ、但し夢の中でのみだけれど。その蝶を貴方に貸してあげるわ。寝る前に、その子の鱗粉を被ってみなさい。そうすれば素敵な夢を貴方は見る事が出来るわ。餌も必要ない、楽でいいでしょう？」

ふふ」

女は笑い、くるりと後ろを向いて広海から遠ざかっていく。出雲と呼ばれた男もまた楽しげな笑みを浮かべて後に続く。そして瞬き一回している間に、二人の姿は完全に消えてしまった。

刹那、約一ヶ月の間消えていた世界の色や形は元に戻り、聞こえていなかった音が再び聞こえ始めた。現実には有り得ない不思議で不気味な邂逅が、彼の意識を自分の体に引き戻したのだ。

しかし世界が久しぶりに元通りになっても、あの蝶は消えることなく楽しげに広海の頭上を飛び回っている。

一ヶ月ぶりに、鳥の鳴く声を聞いた。

*

一応弁当を買い、広海は帰路についた。途中、自分から離れようとしないうちに蝶を入れる為の虫かごを買う。家へ帰るまでの間、女の言葉が頭の中をずっと巡っていた。蝶の鱗粉をかけて寝たら、自分が欲しいものを夢の中で手に入れることが出来る……そんな話、普通だったら信じない。しかし何故だろう、あの女が嘘をついているようには少しも思えないのだ。それはあの女が、色も音も一切ない世界で、色も形も声も全てを保って存在していたからだろう。きっとあの女も、あの出雲というらしい男もこの世の者では無いのだ。現実から離れて彷徨っていたからこそ、彼らを見る事が出来た。

この世の者ではない奴らならば、現実にはありえない蝶を持っていったっておかしくない。

馬鹿馬鹿しい、ろくなものを食べていないせいで頭に栄養がいつ

ていないからこんなことを考えるのだろう、きっと。しかし、そんな風にものを考えたのも随分と久しぶりのことだ。この世の者とは思えない男と女によって逆にこの世に意識を引っ張り戻されてしまふとは。

広海は自分の住むアパートに戻り、ドアを開ける。どんよりとした空気が彼を迎える。電気をつけるのは面倒だから、そのまま入る。薄暗い部屋に、蝶の虹色はよく映える。恐ろしいパンドラの箱に残っていた最後の「希望」という名の蝶も同じような姿だったのだろうかと柄にも無いことを考えた。

その後は、TVも見ず、本も読まず、結局何をする訳でも無くぼうつとしていた。やることは、何も無かった。

あつという間に、日は沈み代わりに白い月があがった。外はもう真っ暗で、明かりをつけていない部屋の中も真っ暗になった。部屋にある唯一の光は、あの蝶で、広海同様何をする訳でもなくただ無闇に飛び回っている。何となく目障りになってきて、虫かごを開けた。そしたら蝶は、広海の考えていることを理解したのか、自らかごの中に入ってしまった。

その蝶をぼうつと眺めながら弁当を食べた。最近は何を食べても味がしなかったが、今回は仄かに味がした。しかし味があっても無くても、今の広海にとってはあまり関係の無いことだった。

消えていた色や音は大分元に戻った。けれど全てが元に戻った訳では無い。あつてもなくてもどうでもいい世界ということに変わりは無く、意識は相変わらずふらふらとあちらこちらを歩いている。

ゴミの散乱している床に寝転がり、明かりのついていない電灯をぼうつと眺める。

手に入るわよ

わずかに残る意識を支配するのは、あの女の声だ。今まで聞いてきたどんな声よりも妖しく、浮かべる笑みは善意ではなくあからさまな悪意に満ちていた。

あの女の言うことは嘘ではないと思う。だが、彼女の言う通りにした結果待っているのが幸福であるとはどうしても思えない。あれはきっと救いの神などではない、死神だ。あの時のことを思い出しただけで全身から温もりが奪われる。

言うことを聞かなければ、愉快な人生は送れないだろうが、これ以上墮落した人生を送ることはないだろう。あの蝶を殺すか逃がすかすれば、また今までと同じ日々を送ることが出来る。それが、最善の選択肢のような気がする。

けれど。

ぼやけた視界に映るブックラック。その上に、伏せられた写真立てがある。広海はふらふらと立ち上がり、その写真立てを手に取った。

そこに映るのは、カメラに向かって幸せそうな笑顔を浮かべる自分と亜里沙の姿。今年の春、遊園地でデートした時の写真だ。

広海は、久しぶりに亜里沙の顔を見たような気がした。彼女が死んでからというものの、彼女の映った写真などを極力見ないようにしていた。

特別美人な訳でもない。けれど、広海は彼女の笑顔が好きだった。彼女は本当によく笑った。陳腐な表現だけれど、太陽のような笑みをいつも浮かべていた。

その笑みが、写真の向こうにある。いや、最早写真にしか残ってはいない。今の広海の頭に残っているのは、病院で見た変わり果てた彼女の姿ばかりだ。

もう一度、彼女と会いたい。

写真を見つめるうち、空っぽになつていたはずの体の中が熱くなつて、彼女への強い想いが溢れてくる。彼女の笑顔を見たい、無邪気な声を聞きたい、彼女に触れたい、派手な喧嘩だつてほしい。

未だふらふらし続けていた意識が、あの二人組を見た時と同じように自分の体にすつと戻つてきて、頭の中を激しく揺さぶり、心を沸騰させていく。

夢の中だけでもいい。彼女と会いたい。例えその先に待ち受けているのが破滅という名の結末だつたとしても。

今まで無くしていた気力というものを取り戻し、目に光が再び灯る。広海は、虫かごを開ける。蝶はゆっくり虫かごから出る。そして、彼の頭上を弧を描きながら飛び始める。やがて、蝶の体から七色の鱗粉が落ちていく。またもに光の差していない部屋の中で、その鱗粉は眩い光を放っていた。

降り注ぐそれを、広海はただじっと見つめていた。

やがて蝶は広海から離れ、自ら虫かごの中に戻っていく。広海は虫かごの蓋を閉め、また床に寝転ぶ。

そして、静かに眠りへと落ちていった。

*

雀の鳴く声、部屋の中を満たす日の光。何かが沸騰している音、甘い米の香り。部屋の中は朝を告げる音と匂いでいっぱいになっていた。

それでも広海は未だ寝ていたくて、ふかふかの布団から出ることなく眠っていた。

誰かが広海の頭をぺちんと叩く。びっくりして広海は目を覚ます。見れば目の前に誰かがいて、自分の顔をじっと見つめていた。

さらさらしたセミロングの髪は光を受けて白く光り、爛々と輝く

瞳は広海を見つめている。大好きな黄色の洋服でやや小さな体を包み込んでいる。

「こら、早く起きろ。遅刻するぞ」

亜里沙が、そこに居た。

「うわ、亜里沙!？」

勢いよく起き上がったものだから、自分のおでこと亜里沙のおでこがごつつんこ。鈍い痛みがじわじわ広がる。

「何するの、馬鹿なのあんた。ていうか、何そんなに驚いているの? 同棲中の恋人が目の前にいるのがそんなにおかしい?」

膝立ちしたまま腰に両手をあて、亜里沙は頬を膨らませた。怒るとハリセンボンの様に頬を膨らませるのが、子供の頃から癖だった。生きている。物言わず、青い顔で眠っている、あの時見た彼女とは違う。

どうやら「ここ」では亜里沙と自分は同棲しているらしい。よく見てみれば、今広海が居るのはあのアパートでは無いようだった。あそこよりも少し広い。

「いや、おかしくは、ない」

その言葉を紡ぐだけで、胸が熱くなる。油断すれば涙を流してしまいそうだ。広海の様子がどことなくおかしいことを亜里沙は感じたのだろう。変なの、気持ち悪いと一言呟いて肩を竦める。

「どうでもいいけれど、さっさとご飯食べてよ。私も大学行かなくちゃいけないんだから、あんただって今日は一コマ目からなんですよ」

「大学? あれ、俺大学卒業する前に同棲しているの」

「今更何言っているの？ 駄目だ、あんた完全に寝ぼけているわ。エロ本でも見て夜更かししていたんじゃないの？」

「してねえよ、馬鹿」

「馬鹿はあんただ」

そう言うと、何がおかしいのか亜里沙はぶつと吹き出し、その後くすくす笑う。彼女にとっては些細な言い争い（という程でもない）が（）さえ楽しいのだ。

それは広海にとっても同じだった。特に今は、彼女の言動、仕草全てが愛おしく懐かしい。気づけば広海は彼女を抱きしめていた。温かい。夢の中とは思えない。亜里沙は彼の腕の中で目を丸くした。

「何よいきなり！ もう、馬鹿な上に変態なのあんたは！」

「そこまで言うことないじゃんか。まあ、とりあえず飯にしようぜ」
亜里沙はぶつぶつ何か呟きながら台所へ向かう。

今日の朝食はご飯と、ワカメと油揚げの味噌汁と卵焼き。ややご飯は水分が多くぺちやぺちやしていて、味噌汁は味が濃く、卵焼きはスクランブルエッグ寸前のぼろぼろとした形をしている。

もう少し料理の腕をあげるよな、そう言いながら口にする彼女の料理。夢の中のはずなのに、はつきりと味がした。食べ物の味をこんなにはつきり感じたのは本当に久しぶりだ。夕方食べた弁当の味だって殆どしなかったのだから。味噌汁はしょっぱいし、卵焼きは酷く甘い。けれど、美味しいと思った。食べ物の味がするというのはとても幸せなことで、それだけで心が満たされる。ましてや、もう二度と食べられないと思っていた彼女の手料理となれば……。

今なら涙を流しても、味噌汁がしょっぱいからと言い訳できるかもしれない。

朝からご飯をおかわりして、広海は満腹になった腹をさすりながら大学へと出かけていった。どうやら「夢」の中で自分達が住んでいるアパートは「現実」の自分が住んでいるアパートからさほど離れていない場所にあるようだった。道も大して変わっていないから、駅にも特に戸惑うことなく行けた。

電車で一時間近く、その後歩いて五分程で着く場所にある広海の大学。随分と久しぶりに見た気がした。すでに教室で喋っていた友人達。彼らのことなどずっと忘れていた。しかし「ここ」の彼らは広海と大学で毎日顔を合わせている。ここは、亜里沙は死なず、自分が引きこもりになることなく、しかも二人で同棲しているという世界なのだから。

友人達は広海の姿を認めると、大声で「おはよう」と言った。広海もおはようと挨拶を返す。そして、実にくだらないうことについて色々語り合う。途中、広海と亜里沙の話になり、散々からかわれた。終いに下ネタに走るものだから、いい加減にしるよこの野郎といって殴るふりをする。それでも止まらないから、今度は本当にぶってやった（といっても軽くだが）。

友人と、こんな風に喋ったのも一ヶ月振りだ。なんてことはない話ばかりしているのに、胸が弾む。

こうして時間は過ぎていき、食堂で昼飯を食べ、久しぶりに講義を受け、また友人と喋って別れ、帰路につく。夢の中なのに、おかしなことは特に起きていない。講義の内容も至ってまともだったし、急に場面が変わったり、誰かがありえない行動をとったりすることも無かった。

(本当にこれは夢なのだろうか)

夢ではなくて、現実の世界では無いのだろうか。そんなことを思う。

家に帰ると、亜里沙が夕飯の準備をしている。亜里沙の通う大学は、広海の通う大学よりも近い所にあるから、帰りも彼より早いのだ。

やや焦げたハンバーグ、バターたっぷりのほうれん草とコーンのソテー、味のあまり無いすまし汁がその日の夕飯だった。

風呂に入り、眠りにつく。そして目覚め、また同じような毎日が続く。夢の中のはずなのに、夢も見る。温もりも感じるし、空腹になったり喉が渴いたりもする。TVに出てくる芸能人も現実に出て来る人達だし、番組の内容等も現実のものと同じだ。

そうしているうちに、こちらの世界が夢の世界であることを忘れていった。

それから数日後のことだった。

その日は土曜日で、亜里沙と水族館へと行った。小さい頃、亜里沙の家族と自分の家族とで来たことのある水族館だ。

「懐かしいわね……。あなた、確かここで迷子になったのよね。ふらふら勝手に離れちゃって。しばらくしたら放送であんたの名前が出てきたからびっくりしたのを覚えているわ」

「え、あの時迷子になったのってお前じゃなかったっけ」

「何自分の都合のいいように記憶をいじくっちゃっているのよ」

亜里沙はじとつとした目で広海を見る。確かに言われてみれば、あの時迷子になってわんわん泣いていたような気もする。しかしく

だらないことを覚えているとは。

「そういうお前は、マグロを指差して、あれ美味しそう！ って大声で叫んだじゃないか。その後も他の魚見る度にあれ美味しそう、あれは不味そう、あれってどんな味がするのかなあとかさ。水族館で働いていた人達、苦笑いしていたぜ」

「嘘、私そんなこと言ってない」

「都合のいいように記憶を勝手にいじらないでください」

先ほどのお返しだ。しかし亜里沙も負けていない。笑う広海の左足を思い切り踏みつける。地味に痛い。

そんな阿呆らしい喧嘩をしながらも、二人夢中になって水槽を覗いていた。

しかし幸せな時間は唐突に終わりを告げる。体が、何かに引つ張られるような感覚。水槽が急にぐにやりと歪んだ形になり、魚達の姿が段々ぼやけて消えていく。足元の感覚が失せてきて、頭がぼうつとしてきて、やがて貧血を起こしたかのようにその場に倒れた。

*

雀の鳴く声が聞こえた。外から来る日の光を拒絶した、薄暗い部屋。硬い床、こもった空気、散乱しているゴミ。

自分は先ほどまで水族館に居たはずなのに。ここはどこだろう、亜里沙の姿が見えない。何で部屋はこんなにも暗くて汚いのだろう。気のせいか、部屋が縮んでいるような……。

霧がかかったようにぼやけている頭の中。しばらくすれば霧は晴れ、先ほどまで居た世界が「夢」の中の世界であったことを思い出す。ここは現実の世界。目を覚ますのと同時に、あちらの世界から

呼び戻されてしまったのだ。

あの蝶は、虫かごに入っている。

ゆっくりと広海は起き上がる。ここは亜里沙の居ない世界だ。手のひらをじつと見つめる。彼女を抱きしめた時の温もりがまだ残っている気がする。ゴミと一緒に床に放置していた携帯を手に取る。日にちは、眠りについた時から一日しか変わっていない。夢の世界で何日過ごそうが、現実の世界では眠りについていて時間の時間しか経っていないようだ。

また、夢の中でのことを忘れることも無かった。どんな会話をしたか、何を食べたか、何をしたのかはつきり覚えている。

夢の中で笑っていた友人は、大学へ行こうとしない広海を心配し、今手に持っている携帯にメールを送ったり、電話をかけたたりしている。未読のメッセージが随分とたまっていた。友人だけではない、母からのメールや電話も……。

久しぶりに、携帯を開き溜まったメッセージを読んだり、留守電に入っているメッセージを聞いたりした。彼のことを心配する友人や親の思いがそれには込められていた。亜里沙が死んだ後、友人や家族のことなどどうでもよくなっていたが、夢の中での彼らの姿を思い出すと、どうでもいい存在などと思えなくなってくる。

広海はゆっくりと立ち上がり、汚くなった部屋を掃除し始める。何となく、そうしたいと思ったから。

こもった空気を外に出し、明かりをつけ、ゴミを片付ける。たったそれだけで不思議と気分が軽くなった。

あの世界は夢の世界。現実の世界では無い。それを思うと残念だし、胸が苦しくなる。

しかし、また眠ればあの夢を見る事が出来る。今またすぐに眠ることは出来ないが人間は必ず睡眠をとる。夜になれば眠くなり、あ

の蝶の鱗粉を浴びて眠りにつけば……。

そう考えるとこの世界で生きること苦では無いと思った。一日を乗り越えた先には幸せな時間が待っているのだから。

第二十四話：胡蝶の夢（2）

*

冷蔵庫にあつた余りものであまり美味しくないと朝食を食べた後、友人にメールを送った。自分を心配して何度もメールをくれたことに対してのお礼と、そのメールをずっと無視し続けていたことを謝罪するものだ。

返事はメールでは無く電話できた。夢の中で久しぶりに聞いた声と同じものだった。けれど夢で聞くのと現実の世界で聞くのとは矢張りどこか違う気がした。心の中にじんわり沁みてくる声。一ヶ月前までは当たり前のように聞いていたはずのものだったのに……。

「心配かけさせやがって……大丈夫なのかよ」

「ああ、何とか。すっかり大丈夫かと言ったら嘘になるけどさ」

「そっか。つたく、全然返事寄越さないから不吉なことばかりずつと考えていたよ」

「実際死人の様なものだったよ。今もそうだけれど」

「皆心配しているよ。まだ気持ちの整理つかないのは分かるけどさ、顔出せよ。無理に講義受けるとは言わないけど」

教授や友人、食堂のおばちゃんの顔等を思い浮かべる。夢の中では会ったけれど折角だからこちらの世界でも会ってみたい。今までこんなこと考えたことも無かった。夢が亜里沙の死という現実の前に消え去っていた思い出を呼び覚ました。

「ああ、分かった。明日……行くよ」

「そっか、うん、じゃあ明日待っているぜ」
そう言って友人は電話を切った。しばらく天上を見上げる。今度は意を決して実家に電話をかけてみる。久しぶりに聞いた母の声。どう話を切り出せばいいのか分からなくて、掠れた声で自分の名前を告げた。酷い声だと思った。母は短い叫び声をあげ、言葉にならない何かをしばらく呟いた後、良かったと安堵の声をあげた。声は広海以上に掠れていて、鼻水をすすする音が聞こえてくる。泣いているのだと思った。

友人相手と同じように話すことは出来なかった。ただ申し訳ない気持ちでいっばいで、ごめんと連呼するだけだった。母の方も何を言えばいいのか分からなかったらしく、ご飯は食べているとか風呂には入っているとかそんなことをぼつりぼつりと聞いてくるのみだった。あまりに痛々しくて何度も電話を切ってしまいそうになる母をそうさせている原因が自分にあることなど分かっている。ふと自分の世界に閉じこもり、周りの人のことなど少しも考えていなかった自分のことを恥じた。

母は涙声で、今度お前の好きな煮物を作ってもっていくからねと言って、電話を切った。亜里沙の話は出てこなかった。話題に出しても良いものなのかどうか分からなかったのだらう。

久しぶりに聞いた母の声が、胸に沁みだ。

掃除をしたり友人や母とメールや電話のやり取りをしたり……。最近全く出来なかった、いや、やろうとも思わなかったこと。

ただ一度の夢が、広海の中の何かを変えた。全てが元通りになった訳ではないが、夜になる度あの夢を見ていれば、いずれはこの世界でも以前と変わらぬ毎日を送れるかもしれない。

家を出て、食糧や生活用品を買い集める。今日は久しぶりに、ち

やんとしたご飯を作ろうと思った。何がいいだろうか、ハンバーグでも作るうか。亜里沙よりもずっと上手に作れる自信がある。

その日は、明かりのついた部屋で手作りのハンバーグを食べた。大根おろしを乗せて醤油をかけた、和風のハンバーグだ。形は不恰好だが、焦がすことなく作ることが出来た。我ながら上手く出来たと思う。それでも何故だろう、亜里沙が作ったものには適わない気がする。

TVは未だつける気がしなかったから、シャワーを軽く浴び、部屋で眠くなるまでごろごろしていた。

目蓋が重くなり始めた頃、また蝶を虫かごから出して鱗粉を浴び、眠りについた。

*

広海は水族館に居た。どうやら、昨日見た夢の続きのようだった。続きから始まるなんて、ゲームみたいだなと心の中で思う。しかしそんなことはどうでも良かった。

隣にいる亜里沙はやたらはしゃいでいる。あの魚可愛い、とか綺麗、とか模様がなんだか気持ち悪いとか色々なことを話しかけてくる。兎に角彼女はこういう所に来ると俄然テンションがあがって、普段以上にお喋りになるのだ。

水の中を、悠然と泳ぎ回る魚達はとても気持ち良さそうだった。あの水槽の中に入って泳いだら、どれだけ気持ちいいだろうと思う。館内は涼しいが、外は暑い。出来れば外に出ないで、このまままつたりしていたいものだ。しかしそうもいかない。もう少しでイルカのショーが始まるのだ。外はきつと太陽が燦燦と輝いていることだろう。考えるだけで嫌になる。だが、イルカは可愛いし亜里沙がどうしても見たいというのだから、仕方が無い。

「お前、イルカ見てあれ美味しそうとか言つなよ」

「言つわけないじゃん、馬鹿。イルカなんて食べないし。大体あれ食べ物じゃないでしょ」

「イルカを食っている地域だってあるんだぞ」

「うそ、マジで!？」

「マジ。TVで見た事がある。兎に角、美味しそうとか不味そうとか言つなよ」

「だから言わないってば。そこまで私食い意地張っていないし」

また頬を膨らませ、ぷいっと目を逸らす。笑いながらそのぷくつと膨らんだ頬をつついてやったら、本気の肘鉄を食らった。鈍い痛みに、思わず呻く。

イルカのショーは思いの他楽しかった。ただ矢張り暑かった。汗で濡れるシャツが気持ち悪い。いっそ目の前にあるプールに飛び込んで、イルカと一緒に泳ぎたいと思った。

「今度一緒にプールにでも行くか」

気づかないうちに出た言葉に、亜里沙はにっこり笑って頷いた。プールから勢いよく飛び出して、輪をくぐるイルカも笑っているように見えた。

お土産に七色に輝くイルカの描かれたペンダントを買い、早速二人でつけて帰る。

その日の夕食は、マグロとサーモンとイカのお刺身。

よく水族館に行った後に食べる気になると、広海は心の中で思

うのだった。

それから数日後のことだ。広海は、夏休み前の試験に向け図書館で勉強をすることにした。本当はテスト勉強なんて面倒臭いことはやりたくないのだが、全くやらずにいる訳にもいかない。亜里沙もうるさいので、仕方なくやることにしたのだ。

テキストと筆記用具をカバンに入れる。桜町の隣にある三つ葉市には、大きな図書館がある。別にわざわざ外に出なくても良いのだが、家でやっているとしてもゲームやマンガに手を伸ばしたりTVを見たりして、結局勉強をしないような気がしたのだ。実際中学や高校の時はそんな感じでもよくに勉強出来ず、散々な結果になることも珍しくなかった。

相変わらずうだるような暑さ。頭は発火しているんじゃないかという位熱を持っていて、じんじんと痛む。汗はぬぐうのも面倒になる位流れている。先ほど自動販売機で買ったペットボトルのお茶もあつという間に温くなった。この炎天下で元気なのは、蝉と蛙位のものだ。また彼らの声がうるさくて頭に来る。暑い時にうるさいものを聞く程いらいらすることは無い。

今頃亜里沙は、エアコンの効いた涼しい部屋の中でのんびりしているのだからなあと思うと少し彼女がうらめしくなる。しかし、図書館まで行けば涼しく快適な空間が待っているはず。ここは耐えねばならない。

三つ葉市に入り、図書館のある街の中心を目指す。坂を下り、街を二分する水瀬川にかかる橋を渡れば、あつという間に着く。

冷房の効いた図書館の中はさぞかし心地よい空間であろうと思いつつながら、坂を下る。

その坂を上つてくる人が居た。この暑い中、黒い着物に黒い和傘を射して歩いている。よくあんな格好で歩けるものだと感じていた。

自分は坂を下り、相手は坂を上る。当然その人の姿がはっきりと見えてくる。坂を上ってくるのは、女性の様だった。髪の毛は長く、日の光を浴びてぎらぎら輝いている。あんなに髪が長いと、さぞかし暑苦しいだろうなと思った。

牡丹の描かれた和傘に隠された顔が、ちらりと見えて、広海はその場で立ち止まった。女の顔に見覚えがあったからだ。

広海に蝶を預けたあの女だった。氷の様な髪、真っ赤な唇、好奇心と悪意に満ちた瞳。女も広海の実在に気づいたらしく、彼の前に立ち、その歩みを止める。

「手に入った？ 貴方の望んだものは」

口を開こうとしても、蟬で固められたかのように動かない。それでも何とか、首を縦に振ることは出来た。女は笑う。

「良かったわね。幸せな時間を手に入れて。死人の様な顔だったのが嘘みたいだわ」

女は和傘をくるくる回す。心の底から祝福している訳で無いということは、悪意に満ちた笑みを見ればすぐに分かる。

急に女は広海に顔を近づけた。黒い瞳は、月の光を浴びた黒曜石の様に輝いている。その奥にあるのは得体の知れぬ恐ろしい何かだ。唇は、赤い血の様。つい先ほど誰かを殺して、その死体から出る血を塗ったかのようにだ。

鬼。女は人を貶め、喰らう、恐ろしくも美しい鬼なのかもしれない。

「忘れないで。これは所詮夢であることを。この世界は、現実では無い。現実と夢の区別がつかなくなると……大変なことになるわよ、気をつけてね」

冷たい声でそう言い放つと、また女は微笑み、呆然と立ち尽くしている広海を置いて、坂を上っていった。慌てて彼は後ろを振り返ったが、もう彼女の姿は見えない。

忠告。しかし、彼女が本気で忠告している様には思えなかった。むしろ、広海がそのまま破滅の道を歩むことを望んでいるかの様だった。恐らく彼女は夢の中で彼のことを見ているのだろう。素敵な玩具が、自分の思惑通りに堕ちていくさまを見る為に。

分かっている。この世界は現実では無いこと位、彼は理解していた。亜里沙はもう居ない。彼女のご飯を食べることも、彼女とデートすることも、ましてや同棲することなんて……本当はもう出来ない。

けれど、せめてこの世界では亜里沙が死んでいるという事実を忘れていたかった。こちらの世界こそが現実で、あちらの……亜里沙の居ない世界の方が夢であると、思っていたかった。

大丈夫だ、あの女の思い通りにはならない。

広海は力強く歩きだし、図書館へと向かった。

*

広海は、テキストを開きノートに重要事項をまとめている途中で目を覚ました。

今日は目玉焼きと焼いてバターをつけたパンを食べ、久しぶりに

大学へ向かう。夢の中では当たり前のように通っていた大学だから、大して懐かしいとは思わない。けれど、いざ構内に入ろうとすると足がすくんでしまった。皆の反応も気になるし、どんな話をすればいいのか分からない。夢の中の様に気楽に話すことが出来れば良いのだが、すぐにそれが出来るようになるとは到底思えない。

いつそ引き返して、家の中に閉じこもり、亜里沙や今までと何一つ変わらない友人や大学の待つ夢の世界へ逃げてしまいたい。けれど、あの世界へ逃げてばかりでは、あの女の思惑通りになってしまうような気がした。

深呼吸をする。大丈夫だ、きっと大丈夫だ。

広海は、覚悟を決めて門をくぐり最初の授業のある教室を目指した。

教室のドアを開けると、昨日電話で話をした友人がいた。その周りにはメールを送った友人達もいる。彼らは広海の姿を認めるとお喋りをやめ、しばし沈黙する。しかししばらくすると優しく笑って広海を出迎えた。

「久しぶり」

「ああ、久しぶり」

広海はぎこちない笑みを返す。適当な席につき、友人と語り合う。

「お前痩せたなあ。飯ちゃんと食っているのか」

「最近は何も食べていないよ。ちょっと前まではまともに食べていなかったけれどな」

「今度焼肉食いに行こうぜ。俺が奢ってやるよ、いっぱい食って太りやがれ」

「サンキュー。絶対行こうな。奢りだからな、俺絶対金払わないから」

その後は殆ど喋ることも無かったので、友人の話聞いていた。彼らは広海が大学を休んでいる間に起きたことを色々話してくれた。教授が奥さんと喧嘩して、顔中引つかき傷だらけにして大学に来たことや、近所に住む人が飼っている犬が構内に迷い込んで大変だったこと、皆で巨大お好み焼きをひいひい言いながら食べたことなど。どうでもいいことといえどどうでもいいことなのだが、そういうどうでもいいような話が何よりも楽しい。

今度は広海の肩をぽんと叩く。

「お前、折角戻ってきたのはいいけれどテストがすぐそこに待っているぜ。テスト範囲はもういつもの場所に張り出されているけれど……大丈夫か？」

夢の中でテスト勉強は多少している（というかやっている途中）。テスト範囲が同じなら有り難い。

「どうにかなるだろう。お前らのノート写させてもらおうかな」

「馬鹿め。俺達がまともにノートをとっているとも？」

「うわ。最悪だ。お前ら少しは真面目にやれよ」

広海は落胆し、机に突っ伏した。そんな彼の頭が何か軽いもので叩かれる。見れば、それはノートだった。

「冗談だったの。ほれ、ノートだ。有り難く受け取れ」

「おお、心の友よ」

汚い字と図が色々描かれている。夢の中の世界とは少しやっついているところが違うようだったが、殆ど同じだった。これならどうにかなるかもしれない。

自分が思っていたよりも、友人達と気楽にお喋りが出来て良かったと、内心ほっとする。夢の中で会っていたおかげかもしれない。もしあの夢を見ていなければ、仮に大学に顔を出したとしてもどうしたらいいのか分からなくなって、ろくに喋ることも出来なかったかもしれない。

最初のうちは、教授や講師の人、同じ授業を選択している人達にものすごく驚かれた。それだけなら大したことは無いのだが、教室内にどこか気まずく重苦しい空気が流れ、広海を苦しめた。一ヶ月という時間は短いようで長い。彼らの目にはもう広海という存在は自分達の空間に入り込んできた「異物」として映っているのかもしれない。おまけに広海が大学に顔を出さなくなった原因は「婚約者を亡くした」という、割と重いものだ。一体どう接すればいいのか、どういう目で見ればいいのか分からないのかもしれない。

そんな彼らの複雑な感情が、空気を澀ませていき、広海を窒息させる。胃がきりきりする。逃げたいと正直何回か思ったが、ここを耐え夜になればまた亜里沙に会える……と亜里沙の笑顔を思い浮かべながらどうにか、逃げたい衝動を抑えつける。

こんなことが毎日続いたら地獄だと思っていたが、幸いにも嫌な空気は、時間が経つごとに少しずつ和らいでいった。皆彼の存在に慣れてきたのだろう。自分のことについて、小声で何か喋っている人も居たが、友人達が気を遣って積極的に話しかけてきてくれたお

陰で、そちらの方をあまり気にせずに済んだ。

まだ空気は重苦しくて痛いけれど、それもじきに無くなって、以前と変わらない大学生活を送ることが出来るようになるだろうと思っただ。

友人と一緒に飲みに行こうかと誘われたが、未だ何となく気分が重いから断った。いつか絶対に行こうと約束する。

家に帰り、靴を脱ぐ。明かりをつけていない部屋は真っ暗だったが、あの蝶の居る所だけ、淡く光っている。その光は虹を閉じ込めたよう。赤、黄色、青、緑。人を幻想の世界へ導く蝶に相応しい光。

しばらく蝶の光に見惚れ、ふと我に返って部屋の明かりをつける。蝶の放つ光は見えなくなつた。虫かこの蓋を開けると、静かに飛び出してきて部屋中をいつもの様に飛び回る。

今日は殆ど具の入っていないお好み焼きを焼き、ソースとマヨネーズをたっぷりとかける。帰り道酒屋で買ったビールをちびちび飲みながら、ちよつとしょっぱいお好み焼きをもぐもぐ食べた。

久しぶりに大学へ行つて、どつと疲れた。肉体的な疲労よりも精神的な疲労の方が多い。同情や好奇、戸惑いの感情が入り混じつた視線が未だ肌をぴりぴりさせている。行く前から分かつていたこととはいえ、矢張りしんどいものがある。

誰もいない部屋はとても静かで、ふと寂しい気持ちになつた。大学に入った時から一人暮らしで、もうすっかり一人に慣れていたはずなのに。

そうか、夢の中では亜里沙と一緒に暮らしているから……。

広海は納得する。ここに亜里沙がいればいいのにと思うと、胸がまた苦しくなる。そんな寂しさと苦しさと紛らわす為にTVをつけてみた。お笑い芸人達がわいわい騒いでいるだけの番組が映った。TVに映る彼らなど、亜里沙の代わりになどなりはしない。友人の代わりにだつてならない。

耳障りな笑い声、無駄に大きな声、つまらないギャグ。

面白いところなんて何一つ無いのに、何故かTVの電源を切るこ
とが出来なかった。ぼうつと見続けている内に、自分でもよく分
らない位愉快的な気持ちになってきて、芸人の笑顔につられて思わず
笑った。

気がついたら、大きな声をあげて笑っていた。疲れが吹き飛んで、
体が軽くなる。笑うだけでこんなにも楽になれるものなのかと思っ
た。

ひとしきり笑った後、風呂に入り、眠りについた。

*

試験も何とか無事に終わり、広海と亜里沙は電車に乗って様々な
種類のプールが揃っている施設に遊びに行った。

矢張り暑い上に夏休み中とだけあって、かなりの人が来ている。

少しでも油断したら、彼女とはぐれてしまいそうだ。

太陽の光は針となって、服を脱いで露になった肌にちくちくと突
き刺さる。そんな光から身を守る為、日焼け止めクリームを念入り
に塗る。しかし効果はあまり期待できそうに無い。どんなに文明が
進んで、便利なものが出来ても自然の脅威には勝てないのだ。明日
は、黒コゲの魚の様な状態になって、ひいひい言うことになるのだ
ろう。

しかしまあ、それでもいいかと広海は思う。水着姿の亜里沙を拝

むことができるのだから。

亜里沙は、ライムグリーンのビキニをつけ、ぺったんこのバナナフロートに一生懸命空気を入れている。広海はわざと手伝わず、必死な彼女の姿をじっと見つめていた。

本当は、あちらの世界でもこうしてプールへ遊びに行く予定だったのだ。夏休みになったら、新しい水着を買って、一日中思いっきりはしゃごと彼女と約束していた。付き合うようになってから、毎年夏になるとプールや海へ遊びに行っていた。それはいつも通りの約束で、破られるはずのないもの。

そのはずだったのに、約束は彼女の死という最悪の形で永遠に消滅した。

だからこそ、どうしても一緒に彼女とプールへ行きたかった。いつも通りの夏を、過ごしたかった。そうすることで、彼女と共にいつもの夏を過ごせないという現実を否定したかった。

我ながら、気持ち悪い考えだと思ひ広海は苦笑する。そんな彼の複雑な思いも知らずに、亜里沙はバナナフロートと格闘している。なかなか上手く膨らまないらしい。

「何よこれ、穴が開いているんじゃない？」

「お前がヘタクソなだけだろう。そんなもの一つ満足に膨らませられないとか。不器用すぎだろう」

「じゃあ広海がやってよ。早く泳ぎたい！」

「嫌だ。俺はお前が悪戦苦闘しているのを見て楽しんでいるから」

「うわ、きもっ。変態」

亜里沙は露骨に顔をしかめ、一步後ずさりして広海から離れる。誰が変態だと殴る真似をすると、あははとお腹を抱えて笑い出した。

結局バナナフロートは広海が膨らませてやった。亜里沙はそれにつかまり、ぷかぷか浮かぶ。利用者が多くて満足に泳ぐことは出来ないが、それなりに楽しんでるようだ。広海はそんな彼女についていく。

水は、ひんやりと太陽熱で暑くなった肌を包み込む。初めは冷たいと思つて、ぶるつと震えたが、慣れればとても気持ちよく丁度いい水温だった。

ただぷかぷか浮かんでいるだけじゃつまらないと言つて、今度は波の出るプールへ行く。人工的に作られた波で体を撫でられ、何だかすぐつたい。突然亜里沙が水を思いつきりかけてきたので、倍にして返してやった。更に倍にして返された。

広海も亜里沙も、「わあ」とか「きゃあ」とか「それ」とかそんな叫び声をあげながら、水をかけあつた。水を叩くばしゃばしゃという音が心地よい。

水のかげあいにも飽きると、亜里沙はバナナフロートに乗ってぷかぷか浮かぶ。先ほどのプールとは違い、ここは波の出るプールだ。体が浮いたり沈んだりする感覚が気持ちいいらしい。広海は、俺にも貸してくれと言つたが、あっさり却下された。

スリル満点のウォーターライダー、施設内をぐるりと囲むようにしてある巨大な流れるプール。それなりの入場料を払っているのだから、思いつきり遊ばなければ損だ。簡単に食事を済ませた後、飽きもせず泳ぎ続ける。

長い流れるプールを、何周しただろうか。ふと亜里沙は、小さな子供用のプールの方へ目を向ける。まさか、小さな子供に混じつて

泳ぎたいとか言い出すのではあるまいかと広海は思ったが、どうやらそうでは無いようだ。

「子供、可愛いなあ。むにむにしていそう」

「食べちゃいたいくらい可愛いってか？ お前、食うなよ」

「食べないわよ、馬鹿言わないで。全くあなた私のこと何だと思っているのよ。私は怪物じゃないっての」

亜里沙は、さっきまでつかまっていたバナナフロートで容赦なく広海を叩く。別段痛くは無いが、いたいいたいといたがるふりをする。そうすると、彼女はむうっとな頬を膨らませる。

「子供……いいよね」

ひとしきり叩いた後、ぼそつと亜里沙が呟く。広海はどきりとする。子供達を見る彼女の瞳は、母親のそれのようだった。

「子供、欲しいの？」

亜里沙は頬を赤らめ、視線を逸らす。

「今は、未だ。でも結婚したら……欲しいなあって思う」

「そうか。俺も、欲しいなあ。男の子だったら、俺一緒にキャッチボールやるんだ」

「あなたそういうの得意だったっけ」

「今から練習すれば、どうにかなるだろう」

「わざわざ練習してまで？ 馬鹿じゃないの。それで産まれてきた

のが女の子だったらどうするのよ」

「その時はその時だ。女の子相手でもキャッチボール位は出来るしな」

「はいはい」

亜里沙は、苦笑いしながらまたバナナフロートにつかまって、ゆっくり流れていく。

その背中を広海はじっと見つめている。

子供。

この世界でなら、そんな未来も作り出すことが出来る。

あちらの世界では、彼女を母親にしてやることは出来なかった。

あちらの亜里沙も……もう居なくなってしまった方の亜里沙も、きっとこの世界の亜里沙と同じ様に望んでいたに違い無い。あちらでも、そんなことを言っていたような気がする。その望みは、一瞬にしてかき消されてしまったけれど。

あちら。あちらとは何だろう。「あちら」が現実で「こちら」は非現実。いや、もしかしたら亜里沙の居ないあの世界こそ夢なのかもしれない。いや違う。そう思おうとしているだけで、矢張りこの世界が夢で……。

何故「こちら」の方が夢で無ければいけないのだろうか。「あちら」の方が夢であっても、別にいいではないか。むしろ、その方が幸せではないだろうか。広海も亜里沙も友人も、亜里沙の両親も、皆不幸になったり悲しんだりしない世界。

いや、こんなことを考えてはいけない。広海は頭を激しく振って、その思いを頭の中から追い出そうとする。そんな考えをしていたら、きつと幸福にはなれない。

それでもどうしても、思う。

こちらの世界に居る方が幸せではないだろうか、と。

「何やっているの、広海さつさと来なさいよ」

自分と呼ぶ彼女の声。広海は分かったよと言って彼女のいる方へ泳いでいった。

その日は、空が熟したマンゴーの色に染まるまでプールで遊び明かした。

次の日、日焼けとプチ筋肉痛に悩まされることになったというのは言つまでも無い。

*

夏は、まだ始まったばかり。広海は、亜里沙と色々な所へ出かけた。

浴衣を着て、花火を見た。人ごみの中手を繋いで、空に咲く色とりどりの光の花を飽くことなく見ていた。屋台で林檎飴やお好み焼き、たこ焼きに綿菓子……定番の食べ物を買って食べたり、射的や金魚すくい盛りがたりした。金魚の泳ぐ青い浴衣を着た亜里沙は、いつもの様に眩しい笑みを浮かべる。何もかもが楽しくて仕方無いという様子。

海にも、行った。少し塩辛いけれど、爽やかで清々しい気分になれる磯の香りが、心地よい。プールの水は消毒液の様な匂いがあるから、体を包む水は心地よいけれど、心まで良い気持ちにはなれない。

砂浜は、熱した鉄板の様に熱くなっている。慌てて広海はビーチサンダルを履いた。サンダルを介して感じる、砂のぐにゅぐにゅし

た感じが何ともいえない。亜里沙は、顔を真つ赤にして膨らませたビーチボールを広海に投げつけては笑っている。広海がそんなことばかりしていると、焼きそばと焼きとうもろこし買ってやらないぞと言うと、彼女はビーチボールをぬいぐるみの様に抱きしめて、むうつと頬を膨らませる。少しの間だけ大人しくしていたが、またすぐ元に戻って、はしゃぎだした。広海も諦めて、彼女に付き合う。泳いで、ビーチバレーをして、海の家で食事をして。沢山遊んだ。

大学の友人達と一緒にバーベキューもした。亜里沙も行きたいというので仕方なく連れて行く。

川で魚釣りをした。広海にとっては初めてのことだった。友人達と、誰が一番多く釣れるか勝負し、見事「ビリ」の称号を獲得した。

釣った魚、とうもろこし、玉葱にピーマン、ちよつと奮発して買った肉を焼き、酒を飲みながら食べた。

亜里沙はべろべろに酔って、誰これ構わず抱きつこうとする。広海はそれを必死で止めた。酔っている時の亜里沙は兎に角たちが悪い。だからあまり飲むなど言ったのとため息をつく広海をよそに彼女はにこにこ笑っている。友人達はこのバカップルと声をあげて笑いながら、からかってくる。

その後亜里沙は熟睡し、結局後片付けを少しも手伝わなかった。友人達は、こういうのは男の仕事だろうと言ってくれたが、何だか申し訳ない気がしたし、何よりずるいと思った。それでもまあ、結局は許してしまうのだが。

いつもと同じ夏を、夢の中で過ごした。

*

朝になり、目を覚ます。昨日のバーベキューで日に当たりまくっていたから、日焼けやばいだろうなあ等と思いつながら体を起こす。しかし、腕も顔も、どこもひりひりしない。おかしいと思って腕を見ると、殆ど焼けていない。試しに腕をこすってみる。しかし、少しも痛まない。

しばらくして、バーベキューは夢の中の出来事であったことを思い出した。以前に比べれば少しは外に出るようになったが、それでも長時間出ている訳では無いから、そんなに日焼けするはずが無い。大して焼けていない腕を見ると、ぽっかりと心に穴が開いてしまった様な気持ちになる。

いかんいかん、こんなでは駄目だと頬をぱちぱち叩く。

大学にも少しずつ慣れていく。ちくちくと肌を刺す、針の様な空気が段々感じなくなっていく、友人達ともより自然に話せるようになってきた。

当たり前だった毎日を少しずつ取り戻していく。

試験もどうにか乗り切ることが出来た。友人達も、まあどうにかなったと笑いながら言っている。

数日後、母がタッパーに詰めた煮物と、買い物袋を手に持ってアパートを訪ねてきた。手際よく調理をしながら、母は広海に色々話かける。大体は、ちゃんと栄養のあるものを食べるとか、歯はきちり磨けとか、あれを買っておきなさい、これは片付けておきなさいとか小うるさいことばかり言っていたが、その言葉には自分を心配する母の気持ちが進められていることが分かっていたから、広海はその言葉の数々を「うるさいなあ」と言いながらも、暖かな気持ちで聞いていた。

母が作った料理はどれも美味しかった。亜里沙にも見習って欲し

い……そんなことを思った後にふと思い出す。ああそうだ、亜里沙はもう死んでいるのだ、と。

どこか深刻な表情を浮かべる息子を、母は心配そうに見つめた。そして、ためらいがちに亜里沙の両親の近況等を教えてくれた。彼らも愛娘の死によって、相当落ち込んでいたが、今は少しずつ元気を取り戻してきているらしい。彼女の死を完全に受け入れることは未だ出来ていないが、このまま落ち込んで亡霊の様に生きていても娘は喜ばないだろう……と考える。いずれ、広海ともまた話をしたいと言っていたらしい。きつと、まだ苦しみ続けるだろうけれど、きつと彼らは前を向いて進んでいってくれるだろうと母は語る。

母の話は、広海に亜里沙の死という現実を否応無くつきつけた。しかし一方で、亜里沙の両親が少しでも元気を取り戻していることは喜ばしいことだと思った。

それでも、今は亜里沙の両親に会う気はしない。彼らに会えば、亜里沙の死という事実を更にはつきりとつきつけられるからだ。そして、あちらの世界が「夢の世界」であることを思い知らされる。あちらの世界を「夢」にしたくない。こちらの世界が夢で、あちらの世界こそが現実なのだ、思っていたい。

広海は曖昧な返事をし、寂しく微笑む。

今は無理でも、いずれ時が解決してくれるだろう。そんなことを思った。

しかし、そんな彼の「夢の世界」に対する強い想いが、現実を侵食し始めることになるうとは、この時の彼は思ってもいなかった。

第二十五話：胡蝶の夢（3）

*
ある夏の日のことだった。

広海は、友人達に飲みに誘われた。大学に再び顔を出した時は未だ飲みに行く気にはなれなかったが、今は楽しく飲めそうな気がしたから、喜んでその誘いを受ける。こうして人としての生を取り戻すことが出来たのも、あの夢のお陰だ。気味の悪い、この世の者では無いだろうあの女に感謝する気持ちにはなれないが、あの女がくれた蝶には感謝したい。そして、電話やメールにも応じずうじうじしていた自分を、責めることなく受け入れてくれた友人や母にも。

割と晴れ晴れとした気分で、広海は集合場所へ向かう。大学のあの街に、友人の知り合いが働いているという居酒屋があるらしい。少し早めに着いた広海は、集合場所である駅の改札口前でコーヒーを飲みながら友人達を待つ。夕方になっても未だ外は暑い。日は俺は未だ沈まないぞと言わんばかりに輝いている。頬を流れる汗を手で拭う。

誰かが広海の隣に立った。何となくそちらに視線を向け、広海は固まった。

そこに居たのは、亜里沙だった。まさか。ここは夢の世界ではないはず。それとも、俺は今眠っているのだろうか？いや、眠った覚えは無いが……混乱する頭をぶんぶん振り、再び隣を見る。しかしそこにいたのは亜里沙ではなく、見知らぬ女性だった。髪型や着ている服等は彼女にどことなく似ているが、全くの別人だ。

女性は、自分のことをぼかんと口を開けながら見ている広海のことを気味悪く思ったのか、困惑と嫌悪に満ちた目で広海を一瞥する

と、その場を去る。

訳の分からない出来事に頭を抱えていると、友人がやってきた。友人はどこか具合の悪そうな彼を心配する。広海は、大丈夫だと答える。やがてメンバーも揃い、皆で居酒屋へ向かう。

焼き鳥やビール、刺身等を頼んでわいわい騒いだ。酒を飲んでいく内に、先ほどのことなどすっかり忘れていた。

心の底から楽しいと思った。下らないことで大笑い出来る喜びを、広海は噛み締めていた。きっと、このメンバーの中で一番今日の飲み会を楽しんでいるのは広海だろう。

(そういえば、つい最近もこうやって皆で飲んだな)

酒で微妙にぼうつとしていた頭でそんなことを広海は思い、ふとあることを思い出した。

「あ、そうだ。この前は悪かったな」

友人が、何が？と瞬きして首を傾げた。何のことを指して言っているのか分からないようだった。

「いや、ほらさ。この前バーベキューに行った時、亜里沙がべるべろに酔っ払って、大暴れしただろう。おまけにあいつ全然後片付けにも参加しないで迷惑かけ……」

そこまで言って、広海ははっとした。それは夢の中での話だ。友人達とこうして飲むのも久しぶりのことだし、彼らとバーベキューになど行っていない。ましてや、ここに亜里沙は居ない。

案の定、周りの空気がしんと静まり返る。友人達は皆困惑した表情を浮かべている。その視線は、久しぶりに大学に行った時に受けたものに似ていた。そして空気は重苦しく冷たく、痛い。まるで霰

でも降っているかの様だった。

「悪い、俺酔っ払っているみたいだな。この前そういう夢を見てさ……やべ、マジ恥ずかしい」

耐え切れず、俯く。友人達は、何だそうなのか、まあ気にするなと答えるもその声は小さい。

その後、友人達が積極的に盛り上げ、冷えた空気は消え失せ一見元通りになったように思えたが、空気の底に沈んだ何かは消えることなく沈殿し続けて、折角の時間を、台無しにした。

その日のそれだけの失敗ならば、何も問題は無かっただろう。しばらくすれば友人達もけるっと忘れてくれて、元通りの日々が過ごせただけだ。

しかし同じ様な失敗を、一度や二度ならず何度もすることになる。

現実の世界と、夢の世界の区別が、つかなくなっていく。

夢の世界で見たバラエティ番組やニュース、ドラマ等を話題に出してしまう。確かに夢の世界の番組は、あくまで夢の世界でのもの。番組名や出演者が同じでも、内容まで完全に一致する等ということはない。

夢の世界で買い物をした時、買った物。食べ物だったり本だったり靴だったり……。目を覚まし「そういえばあれ買ったんだよな」と部屋中を探すが、どこにも見当たらない。散々探した挙句、それを買ったのは夢の世界のことだというのを思い出す。

現実の世界と夢の世界では、毎日を過ごしている家も違うし、部屋のレイアウト等も全く違うのに、二つの世界での出来事がごちゃ混ぜになってしまう。

勿論、逆もある。その場合は、亜里沙や夢の世界の友人達に怪訝な顔をされる。

日にちの感覚も無くなっていった。現実の世界と夢の世界だと、時間の流れが違う。基本的に夢の世界の方が早く進んでいる。そのせいで、今日が何月何日の何曜日であるのか、時々分からなくなった。カレンダーにマークをつけることで、どうにか乗り切ろうとするが、それでも混乱してしまう。

何が夢で、何が現実か。

ただの夢ならばこつも混乱することは無かつただろうが、あの蝶の見せる夢は限りなく現実に近いものなのだ。物を食べればはつきり味がし、暑さや寒さも感じ、走れば疲れ、酒を飲めば酔う。夢から覚めた瞬間、夢の中での会話や出来事を忘れてしまうことも無い。時間も妙に早く進むことが無いし、有り得ない現象が起こることも無い（ここで言う有り得ない現象というのは、亜里沙が生きているとかそういうことでは無く、五十メートルを三秒で走るとか、一瞬で別の場所にワープしているとか、漫画のキャラクターが街を歩いているとか、そういうものだ）

夢であることなどつい忘れてしまう位、リアルな夢。

けれど、蝶が見せるのはあくまで夢なのだ。

そんな広海を心配して、大学の友人が彼を訪ねてきた。酒やつまみを持ってきて、広海に薦める。広海はそれを有り難く受け取り、皆で飲み食いする。

変な言動を何度も繰り返している自分のことを放っておかず、何度でも励ましてくれる友人の存在はありがたい。しかし何か、心がちくちくと小さなトゲが刺さっている感じがして、すっきりしない。

友人達は笑っているが、その笑顔はどこかきこちない。「同情」という文字を浮かべた様なその表情が、痛い。

友人が来たことを嬉しく思う一方で、どうして来たのだと彼らを責める気持ちもあった。

彼らが帰った後、すぐに眠った。

また苦しい世界になってきた現実から逃げて、夢の世界へ行く。そうして夢の世界にどっぷりとはまり込み、同じ失敗を繰り返す。

少しずつ、夢が現実を浸食し、どこからが夢でどこからが現実なのか分からなくなっていった。

*

「あ、あの栗美味しそう。モンブランとか作ってみたい！」

「お前にそんな大層なものが作れるもんか。俺、炭になった栗の乗ったゲテモノモンブランなんて食いたくないぞ」

こちらの世界はもう九月に入り、少しずつ秋に近づいてきた。店には梨や林檎、栗といった秋を感じさせるものが並び始めている。

「そんな酷いもの作らないもん。それじゃあ、この林檎でアップルパイ作る」

「林檎入れ忘れた林檎なしアップルパイとか、シナモンと胡椒を間違えて入れたものを作りかねないから却下」

「いくら私でも、胡椒とシナモン間違えないわよ！ 匂い嗅げば分かるもん！」

「この前砂糖と塩間違えた奴の言葉なんて信用できるか」

と言うと、亜里沙は買物かごで広海の背中を叩く。店の物を乱暴に使うなと怒鳴るが、それでもポカポカ叩いてくる。周りの人が見ているだろうが、と言ったらようやく静かになった。

亜里沙の料理の腕前は、なかなか上がらない。普通の料理はまだましになってきたが、菓子になると途端に酷くなる。オムライスも割とまともに作れるようになったのに、クレープは作れない。

岩の様なクッキー、塩の味しかないチョコレートケーキ、黒こげな上に油ぎとぎとのドーナツ、少しも固まっていないゼリーらしきもの……それはそれは恐ろしい代物を次々と生み出しては、広海を苦しめた。レシピ通りに作っているはずなのに、どうしてそこまで酷いものが出来上がるのか、広海にもよく分からなかった。

しかし、料理の腕などどうでもいい。彼にとって、この世界はとても居心地のよい世界だった。

勿論、亜里沙や友人と喧嘩したり、不快な気持ちになったり、現実の世界と混同した結果妙なことを言っただけで亜里沙達にどん引きされたりすることもある。

それでも、こちらの世界は温もりに満ちている。同情と困惑の入り混じった目で見られ続けることも殆ど無いし、重苦しい空気に押し潰されてしまいうることも無い。

何より、彼女の笑顔を見る事が出来るし、彼女の声を聞いたり、彼女の微妙な料理を食べたりすることが出来るのが、嬉しい。

あちらの世界で彼女を失って気づいた。彼女の居ない世界がどれだけむなしく味気なく恐ろしい世界であるのか。

こちらの世界で彼女と再び会って気づいた。彼女が自分にとってどれだけ大切な存在であったのか。

ここまで彼女に依存している自分の事を、正直気持ち悪い男だと思っている。それでも、彼女と過ごす毎日を幸せに感じずにはいられない。

亜里沙は、広海が今何を思っているか知る由も無く、林檎とらめっこしている。そんなことしたところで、彼女に美味しい林檎と不味い林檎を見分けられる訳が無い。仮にそれが出来て、美味しい林檎を選べたとしても、彼女が調理すれば食べ物とは呼べない代物に姿を変えてしまう可能性が高い。

しかし、林檎と必死にらめっこしている彼女は可愛かったし、何より微笑ましい光景だったから、広海は何も言わずカートに乗せたカゴに食料品や日用品を次々と入れていった。

やがて亜里沙は、自分の見る目を信じて選び抜いた林檎と梨を持ってきて、カゴの中に入れた。

幸い客はあまり多くなかったので、すぐ会計に移ることが出来た。

「いらつしゃいませ、有難う御座います」

舌で体を舐められている様な感覚になる、ぞつとする位艶やかな声。聞き覚えのあるその声。広海は、恐る恐る顔をあげる。

会計をしているのは、蝶を与えたあの女だった。

スーパーの店員の格好をしているが、広海には直に分かった。照明を浴びて七色に光る、水で濡らした様につやつやの長い髪。見た者を刺し殺してしまいそうな、瞳。カゴに入っている林檎より赤くて、妖しく輝いている唇。

足が震え、思わず広海は意味の分からない叫び声をあげてしまった。

亜里沙と、近くにいた客、店員らが一斉に広海を見た。

「何変な声あげているのよ、びっくりした」

「あ、いやごめん。変な虫が居たような気がして。気のせいだったみたいだけれど、寝不足かな」

そう言っでごまかした。改めて店員の顔を見る。しかしそこに居るのはあの女ではなく、どこにでもいそうな普通の女の人だった。亜里沙は店員に、驚かせてごめんなさいと謝る。広海も軽く頭を下げる。

確かに、あの女だったのに。亜里沙と帰り道話している時も、ずっとあの女の笑った顔が頭の中を巡っていた。

それから数日が経った。亜里沙がアップルパイ作りに奮闘している間、広海はふらふらと散歩をしていた。

蝉の大合唱シーズンこそほぼ終わったが、まだまだ暑い。もうしばらくすれば涼しくなるだろう、むしろ早く涼しくなってくれと思いつつながら汗を拭う。

あまり暑いから、我慢できずに近くのデパートに逃げ込んだ。冷房が効いていて、とても気持ち良い。アイスカフェオレでも飲んでしばらく涼もうかと思った。

「この世界は、夢なのよ。本当、貴方分かっていないわね」

背後から聞こえる声。広海は体を硬直させる。振り返らず逃げたしまいたいと思ったが、逃げられず、結局後ろを振り返ってしまう。

あの女が立っていた。デパートという場所に全く合わない、蝶と花の描かれた黒い着物を着て、あの笑みを浮かべて。

「この世界に深く入れ込んで、こちらの世界が現実であつたらいいのにとかそんな馬鹿なことを考えているから、頭が混乱して、こちらの世界で起きたことをあちらの世界で話してしまったり、こちらの世界で買ったものを、あちらの世界で探してしまったりするのよ。

現実には現実、夢は夢ってちゃんと割り切らないと……とんでもないことになっちゃうかもよ」

女はその場でぐるりと回り、あはははと笑う。そんな気味の悪い女の存在に、広海以外の誰も気づいていないようだった。

「でもまあ、私としてはその方がいいけれど。幸せな結末なんて、少しも楽しくないじゃない。自分の不幸はとて不味いけれど、他人の不幸は蜜の味だもの。私、甘い蜜が大好き」

にっと笑い、口を小さく開けると、ペろりと自分の指を舐める。吐き気がするほど艶かしい。

広海は全神経を足に集中させ、そこから逃げ出した。

「俺は割り切っている！　ここが夢の世界だって……現実じゃないんだってこと位、ちゃんと分かっている！」

掠れた声でそう叫びながら。

（あの女の思い通りにはならない、絶対にならない。現実の世界でも、こちらの世界でも幸せになってやる。あいつに甘い蜜を与えない。絶対に……！）

家に帰った後、亜里沙特製のアップルパイを食べた。胃が焼けて消えてなくなりそうになる位甘かった。

*

そう決意したにも関わらず、現実の世界ではどう足掻いても幸せになれそうに無かった。

夢の世界で友人から借りた漫画を、現実の世界で探し回り、拳句その友人にメールをしてしまう。友人から、お前にその漫画を貸した覚えは無いという返信をされて、気づく。

財布に幾ら入っているのか、分からなくなることもある。会計の

時、何度も恥をかいた。

昨日亜里沙にアップルパイを作ってもらったということをつかり話してしまった。友人達の、反応に困った顔が彼の心を突き刺す。

大学後期の授業が始まってすぐのことだった。

延々と一本調子で続く講義はやがて子守唄となり、広海を眠りの世界へと誘う。

友人に体を揺すられて目を開けた時には、もう授業は終わっていた。

「お前爆睡していたぞ。サインペンがあったら、額に肉って書いてやったのに」

笑う友人につられて笑う。だがしばらくして、あることに気がつき、頭が真っ白になった。

ここは「どちら」の世界だ？

現実の世界で眠っていたのか、夢の世界で眠っていたのか。

自分はどう友人と接すればいいのだろう。今は亜里沙を失った方の広海なのか、亜里沙と幸せな毎日を過ごしている広海なのか。

急に、分からなくなってしまう。冷や汗が流れ、呼吸が出来なくなり、固まった顔は自由が利かなくなる。

そつだ、携帯電話。震える手で携帯電話を取り出す。夢の世界と現実の世界では、時間の流れる速度が違う。

滲み出る汗。震える手。携帯電話はするりと広海の手をすり抜けて、床に落ちる。

「おい、お前どうしたんだ、大丈夫か？」

大丈夫と言うことも出来ず、床に落ちた携帯電話を血走った目で睨む。最早、世界を知る術は携帯電話で今日の日付を見る事以外に

無いのだ。ここで失敗すれば、またあの痛々しい視線に突き刺されることになる。

携帯電話を乱暴に広い、画面を覗き込む。

そうか、ここは亜里沙が居ない方の世界だ。

自分がどちらの世界にいるのか分かって、ほっと息をつき、顔をあげる。

笑ってごまかそう。……しかし、再び思考は停止する。

友人達の背後……ごちゃごちゃと小さい字の沢山書かれた黒板の前に、あの女が立っていた。またあの笑みを浮かべ、こちらをじっと見つめている。

あの女は、蝶を渡した後はこちらの世界には出てこなかったはずなのに。それでは、ここは夢の方の世界なのか。だが、日付はこの世界が現実の世界の方であることを告げている。

「どうしたんだよ、お前未だ寝ぼけているのか？」

砕けた口調で話す友人だったが、浮かべる表情から滲み出ているのは、また頭がおかしくなったのか？という戸惑いと憐憫という、刃物の様な鋭く冷たく重たい感情だった。

それならばここは、矢張り現実の世界なのだ。もう一度黒板の前を見るが、そこにはもう女の姿は無かった。

広海は、席を立つ。頭がどうにかなくなってしまいそうだった。これ以上居たら、またぼろを出す。出さなかったとしても、一日中体を、心を刃物で突き刺され続けることになる。

逃げなくては。そう思った。広海は一言、具合が悪いから帰るとだけ言って大学を後にした。早足で駅へ向かい、桜町に着いた後は

走って家まで行った。立ち止まったら駄目だと思った。立ち止まったら、また自分を見失ってしまいそうだった。

古びたドアを乱暴に開け、部屋に入り、閉める。無我夢中で鍵をかけてリビングに倒れこんだ。喉が焼けるように熱くなり、腹の中が熱した鉄の棒でひっかき回されているようになっていた。痛くて、苦しい。

むしかごの中に居る蝶が、静かに広海を見つめている。

(俺を苦しめて、そんなに楽しいか！)

広海は、いつそあのむしかごの中にいる蝶を握りつぶしてやるのかと思った。自分をこんなにも苦しめている蝶が急に憎らしくなる。しかし、蝶を殺せば、もう亜里沙に会うことも出来なくなる。

しばらく床の上に寝そべっているうちに、荒くなっていった呼吸は元に戻り、熱さも痛みも消えていく。冷たくなった汗が、手足を伝う。

何もかも、上手くいっていたはずだったのに。

夢を手に入れたことで、生きる気力を取り戻し、平穏な毎日を取り戻した。友人や、町の人とも以前と同じ様に話せるようになってきていた。

色も形も無かった世界が元通りになっていき、喜びや悲しみ、怒り等の様々な感情が戻ってきた。

きっと、いつか全てを受け入れて、新しい人生を歩んでいけると思っていた。

広海は、そう信じていた。信じているつもりだった。だが現実は……。

(少し、休もう)

今は、心を落ち着けなければいけないと思った。しばらく外出を控えよう。外へ出なければ、少なくとも周りの人間の目を気にしなくて済む。広海以外誰もいない空間で現実と夢の区別がつかなくなつて失敗しても、大した問題にはならない。限られた空間だけで生活していれば、二つの世界をごちゃ混ぜにしてしまう割合も少しは減るだろう。

友人達と連絡を取り合うのも、しばらくの間やめよう。

気持ちの整理がつけば、案外上手くいくかもしれない。

広海は友人数名に「しばらく大学休む、悪い」とだけ書いたメールを送った。

*

部屋の外から出ない。そのアイディアは、思いのほか上手くいった。

他人の目を気にすることなく、言葉の一つ一つに気をつける必要も無い。たつたそれだけのことなのに、気持ちは随分楽になった。

一人、狭い部屋の中に一日中居るといふのは、酷く退屈なことではある。しかし、眠りにつけば友人や亜里沙達と喋ったり遊んだりすることが出来る。夢の中でゲーセンへ出かけてゲームだつて出来る、カラオケへ行つて歌うことも、ファミレスでご飯を食べることも出来る。

現実の世界では殆ど外に出ないから、外でしたことは全て夢の世界の方でしたことなのだと考えることが出来たから、以前のような失敗もやや少なくなった。失敗してしまつたとしても、問題ない。それを話す相手も、それを見ている相手もないのだから。

現実の世界でやったことを夢の世界で話してしまうということは、あつた。それでもあちらの方の友人達は「何ぼけているんだよ、馬

鹿」と言っ て笑っただけだっ た。

友人や母からメールや電話が幾つか来たが、殆ど無視した。多分本気で心配してくれているのだろう彼らには少し申し訳なく思っ た。あれだけ変なことを言っ たりやっ たりしても、未だ気にかけてくれることを感謝した。けれど、矢張り彼らのあの何とも言えない表情を見たくは無 い。もう見ない為には、今こっ して気持ちを落ち着けるしかない。

広海はそう自分に言い聞かせながら、毎日を過ごした。

第二十六話：胡蝶の夢（4）

*

夢の世界では、平凡ながら平穏な毎日を過ごしていた。亜里沙は相変わらずお菓子作りに奮闘しているが、一向に上手くなる様子が無い。数日前、広海の母が、亜里沙にチョコレートケーキの作り方を教えた。チョコレートケーキが完成した後、母は広海に「彼女はあんな意味深い」と小声で言い、ため息をついた……ということがあった。彼女の料理センスの無さは、料理が得意な母でもどうしようもないレベルらしい。基礎が出来ていないのにアレンジを加えようとしたり、レシピに書かれている説明に対する解釈が斜め上をいつていたり。それでも、かろうじて人類が食せるものになるというのがある意味、奇跡かもしれないと広海は思う。

広海の母が全力を尽くして軌道修正した結果、チョコレートケーキは亜里沙が作ったにしてはまともなものになっていた。甘すぎない、程良く苦い味、微かに香るお酒の匂いがたまらない。

母は、あんたが亜里沙ちゃんと結婚したら、びしびし彼女に料理の基礎を叩き込んでやると意気込んでいた。広海は「結婚」という言葉を聞いて何だか急に気恥ずかしくなって、馬鹿言うなよと言った。

結婚しないの？と母に聞き返され、広海はそういう訳じゃないけれどもごもごも口の中で言いながら、チョコレートケーキを頬張る。

結婚。この世界では当たり前のように出来ること。聞くだけで体中がむず痒くなる単語は、もうあちらの世界では聞くことのできないものだ。母が笑いながらその単語を口にすることが、何だか嬉しかった。あちらの世界の母は恐らく二度とその単語を、広海の前で

口に出すことはないからだ。母は、亜里沙が義理の娘になることを楽しみにしていた。彼女は亜里沙のことが大好きだった。

けれど、亜里沙が広海の妻になることが出来なくなったのと同じ様に、母の義理の娘になることも、もう無い。

広海は、紅茶を一口飲む。

こちらの世界では広海だけでなく、母もまた幸せなのだった。そして、亜里沙の両親も。

あちらの世界に居るのは、不幸で、深い傷を負った人ばかりだ。亜里沙はその命を奪われ、彼女の両親は一番の宝を失い、広海は半身とも呼ぶべき存在を失い、母は実の娘のように可愛がっていた存在を失い、広海の友人は彼の奇行や妙な言動等に振り回されることになった。亜里沙にだって多くの友人が居た。親友と呼べる存在も居た。その人達だって、傷を負い苦しんでいるはずだ。

何故、あちらの世界へ戻ってまで苦しい思いをしなくてはならないのだろう。

あの世界には喜びなんて無い。幸せになろうとしたけれど、幸せになろうと足掻けば足掻くほど地へ堕ちていく。

もういつそ、夢から覚めなくてもいい。

そんなことを、広海は思うようになっていった。

*

落ち着いたらまた外に出ようと決めてから、一ヶ月以上経った。しかし広海は一向に外へ出ようとしなかった。

明日こそ、明日こそはと思いつながらたらだと先延ばしにしていた。何も苦しい思いをしなくて済む毎日が、あまりにも心地良かったから。人間、一度楽を覚えるところなる。

人との関わりを避け、温もりに満ち溢れた夢の世界に入り浸っているうちに、広海の思考は墮落していく。

とうとう「明日になったら」と考えることすら、やめてしまった。

心を落ち着けて、外に出たところで何になるのだろう。良いことは何一つ無い。例え心の傷が癒えていったとしても、失ったものは永遠に返ってこない。亜里沙が不慮の事故で死んだという事実は、体の底に沈殿し、些細なことがキツカケで浮かび上がり、多くの人を苦しめるだろう。亜里沙を死なせた犯人も、きつと。

重く黒いそれを、死ぬまで永遠に抱き続けなければいけない。

けれど、目を瞑って眠りにつけば、少なくとも広海は亜里沙に会うことができる。誰も傷ついていない世界がそこにはある。

あそこに行けば、苦しい思いなんてしなくてすむ。わざわざ外に出て、訳の分からない言動や行動を繰り返して周りの人に冷たい目で見られたり心配されたりする必要も、苦しい思いをする必要も無いのだ。

連絡をずっと取らなければ、やがて友人も完全に広海のことを見放し、親も呆れてもう何も言わなくなるかもしれない。けれど、夢を見ればいつでも彼らには会える。何も問題は無い。

広海が強く思えば、夢は現実に、現実が夢になる。夢の世界こそが、広海の世界、広海の全て。

広海に蝶を渡した女の思惑通りにことが進んでいるような気がするのはやや癪だが、もうどうでもいい。大体、夢の世界で生きたからって死にはしないだろう。あの女が笑おうが、監視していようが、もう知ったことではない。

広海は決めた。自分は、亜里沙と共にあちらの世界で生きること

を。

そう決めた瞬間、自分でも驚く位楽になった。

それからの広海は、現実の世界の全てを捨てて、夢の世界に入り浸るようになった。兎に角、一日中眠り続けた。眠くなくても、無理矢理目を瞑り、半ば強引に眠りについた。もう彼にとって昼も夜も無い。食事や排泄、買い物など生きる為に必要な最低限のことをする時だけ、動く。

どうしても眠れない時は、処方してもらった睡眠薬を飲んだ。

時々、あの女が家の中に現れて、何か言ったり、声をあげて笑ったりしたが、広海はそれを無視した。こんな女の言うこと等どうでもいいのだと思ってからは、女のことを少しも怖いと思わなくなつた。

携帯電話の電源は切ってしまった。もう外界と連絡を取る必要は無いから。

広海は、蝶と同じ様に小さなアパートの一室という「虫かご」の中に閉じこもり、ただじつと静かに体を横たえて、眠り続ける。

*

現実を捨てて、生き続け、夢の世界ではあつという間に時間が流れていき、広海は大学を卒業し、小さな会社に就職した。

まだなかなか仕事が覚えられず、怒られたりなかなか上手くいかなかったりすることも多かったが、それでもやりがいを感じていた。仕事の同僚ともうち解け、時々飲みに行くようになった。高校や大学時代の友人と連絡を取り合うことは以前より少なくなっていたが、時々街中でたまたま会うことはあった。

亜里沙は、雑貨屋でアルバイトをしている。こちらもそれなりに楽しくやっているらしい。時間が合った時は、一緒に家まで帰った。慌しくも幸せな毎日を送っていた広海は、あることを考えていた。

亜里沙が出かけて家に居ない時、自分の机の引き出しを開け、そこから封筒を取り出す。その中には、こつこつと貯めたお金が入っている。まだまだ、少ない。

数年前、一応プロポーズをして婚約したが、未だ婚約指輪と呼べるものは渡していなかった。お祭の屋台で買ったおもちゃの指輪（しかも子供向けだから小さすぎてはめられない）を一応渡したが、流石にそれで終わりにはしたくない。

改めて指輪を渡し、プロポーズをしたい。結婚して、幸せな家庭を築く。そう簡単に出来る訳では無いことは分かっている。それでも望まずにはいられない。

必ず叶える。この世界でなら、何だつて出来る。強く望めば手に入らないものは無い。

あまり立派なものを買えないかもしれないが、頑張ろう。早く亜里沙の驚く顔が見たい。夢を叶える一步を踏み出す為のお金を見ながら、広海は微笑んだ。

時間はどんどん流れていく。仕事にも大分慣れ、入社した当初は全く出来なかったことも、出来るようになっていた。後輩も出来た。なかなかノリの良い話しやすい奴だが、ちょっと間が抜けている。亜里沙との関係も良好で、周りからはバカップルとからかわれることも多い。彼女の料理の腕は、あがったような変わらないような。相変わらず微妙な菓子を作り続けるが、お菓子以外の料理は割とまともになってきた。暇を見つけては、何度もケーキやクッキー作りに励んでいる。

お金も、大分貯まった。今ならあまり高くないものなら、婚約指輪だって買ってやれる。それを買って彼女に渡すということは、次のステップを踏み出すという意味表示になる。両親と相談したり、式場等について調べたり、色々する必要がある。お金の問題もあるし、よしやろうと出して出来るものではないが、頑張りたいと心の底から思った。

広海は、亜里沙が友人と出かけている間に店へ行き、婚約指輪となるものを探した。アクセサリーショップなんてまともな足を運んだことがないから、若干緊張したが、そうやって緊張してしまう客には慣れっころしい店員のお陰で、緊張も徐々にほぐれていった（ただ、ものすごく高いものばかり勧めてくるのには困ったが）

彼女の指のサイズについては、数年前プロポーズした時に聞いていた。いずれ指輪を買ってやるが、その時指のサイズが分からないと困るときちんと聞いていたのだ。まあ、それから急激に太ったとかそういうことも無いだろうから、大丈夫だろうと思い、メモに書かれた通りのサイズのものを買った。

銀色の指輪を二つ、買った。あちらの世界ではとうとう買ってやることの出来なかったものが、手元にある。それがたまらなく嬉しくて、あまりの嬉しさに泣きそうになったが、どうにか涙をこらえる。

そして次の週の休日。広海は、亜里沙をレストランに連れて行った。高級とまでは行かないが、そう多くは行けないレベルの所だ。何で急にと訝しがる亜里沙に、たまには奮発して美味しいものを食べるのも悪くないだろうと言いつつ、たまには奮発して美味しいものを食べるのも悪くないだろうと言いつつ、たまには奮発して美味しいものを食

プロポーズにレストランなんて、何かキザっぽいなあと思ったが、

普段生活している家の中でするよりかは幾分ましだろう。数年前と同じ様に、近所の寂れた公園でするのも何だかなあだし……。

特別おしゃれはしなかった。普段通りの服装で、財布と婚約指輪の入った小さなカバンだけ持っていく。亜里沙もいつもと同じ格好だ。

レストランの中は落ち着いた雰囲気、朱に染まり始めた夕空を閉じ込めたような色の照明が天上を飾る。流れているのは、落ち着いたクラシック音楽。題名は知らない。聞いたことも無いが、有名なものなのかもしれない。

料理は適当に頼んだ。決して安くは無かったが、記念すべき日を飾るには相応しいものに思える。いや、記念すべき日になるかどうかは未だ分からない。そこは広海の頑張り次第。

どう話を切り出せばいいのか分からず、始めのうちは、仕事場での話や、TVやら芸能界やら、全く関係ない話をしていた。自分でもおかしくなる位、多弁で早口になる。こついうところではもう少し静かにしなさいよと窘められても、止まらない。一旦話すのをやめたら、もう何も話せなくなり、結局指輪を渡せずじまいになるかもしれないと思った。

そんな広海を、もぐもぐと食事をしながら見つめていた亜里沙が、急に食べるのをやめた。あまり喋りまくっていたから、機嫌を損ねたのかと一瞬どきりとしたが、どうもそうではないらしかった。

「……あんだ、私に話すことがあるんでしょ？」

「え」

広海はドキリとし、思わず話すのをやめた。

「あんたって、いつもそう。何か大切なことを話したい時って、馬鹿みたいに多弁になるのよ。そのくせ、自分が一番言いたいことはなかなか言わないで。私がおか言いたいのって聞くまで、話さない私のおもちゃを壊した時とか、告白した時とか、プロポーズした時とか、全部そうだった。……それで、あんたは私に何を言いたいの？」

亜里沙の、輝く瞳が広海を捉える。その表情は真剣だった。

ああ、確かにそうだったと広海は思った。大切なことをなかなか言い出せず、関係のないことを誰かが何を言いたいのか聞いてくるまで、話し続ける。それは彼の悪い癖だった。

広海は一回息を大きく吸い、静かにゆっくりと吐く。

とうとうこの時が来たのだ。広海は、亜里沙を真っ直ぐ見つめた。大切なのは言葉ではない、気持ちなのだ。

「改めて、お前に言っておきたくて。……結婚しよう、亜里沙。お金はまだ全然無いけれど……けれど、俺はお前と一緒に居たい。幸せにしてやれる保証なんて、どこにもないけれど、それでも、頑張るからさ」

その言葉に亜里沙は口をぽかんと開け、目をぱちくりさせていた。しかしやがて顔を真っ赤にしながら俯き、ちらりところちらを上目遣いで見つめた。

「やっぱりね。……あんたがこんな所にわざわざ連れてくるなんておかしいと思ったのよ。もしかしてなんて思っていたら……やっぱり。ああもう、恥ずかしい、こんなに人が居る中で」

余程恥ずかしいらしく、声の上擦っている。恥ずかしい思いをしているのは、広海も同じだ。こんな恥ずかしい思いをしたのは彼女に一度目のプロポーズをして婚約した時以来だ。

「で、へ、返事はどうなんだよ。言わせておいて、嫌ですとか言ったら承知しないぞ」

「何よそれ、私に選択肢は無いつてこと？ まあ、最初から選択肢なんて一つしかなかったけどさ。……はい、喜んで。幸せにしてくれなかったら許さないから」

その言葉を聞いて、ほっとして、広海は思わず笑った。亜里沙もつられて笑い出す。暖かな気持ち体が満ちしていく。

ほっと気が緩んでいて、危うく指輪の事を忘れてしまいそうになっていた。

慌ててカバンを開けて、そこから彼女に渡す為の婚約指輪の入ったケースを取り出す。亜里沙がその小さなケースをじいっと見つめ、あっと声を上げた。顔を真っ赤にし、頬を膨らませて笑っているような泣いているような、何ともいえない表情を浮かべる。

「そ、それもしかして」

「婚約指輪ってやつだよ、所謂。未だ渡していなかっただろう」

「指のサイズ合っていなかったらどうするのよ！？ 嵌めようとしたら小さすぎて駄目でしたとかなったら、泣くわよ私！」

「何年か前に指のサイズ聞いておいただろう？ そのサイズ通りに作ったから大丈夫だろう、多分。それともお前、あの時からそんなにおデブになっっているのか？」

「そ、そういう訳じゃないけどさ」

「万が一駄目だったら、まあその時はその時だ。チェーンでもくっつけて首飾りにしちゃうえば問題ない」

「全く、しょうがない奴」

肩を竦めた亜里沙は、くすくすと笑った。そしてひとしきり笑った後、手を広海の方へと差し出した。広海は緊張した面持ちで、その手をそうつと受け止める。

彼女の指に、指輪を嵌めようとする。「あちら」の世界では叶わなかったこと……それが今「こちら」で「現実」になるうとしていた。

彼女の手は暖かい。じんわりとひろがる、優しい温もり。彼女は冷たくなど無い。彼女は生きている。ここで、今広海を見つめて微笑んでいる。

死んでなどいない。彼女は、ここにいる。

彼女の居るこの世界こそ、自分の世界なのだ。

ずっと望んでいたこの一瞬。止まっていた時間は再び動き出す。亜里沙の指に指輪を近づけていく。ゆっくりと、ゆっくりと。

あと、少しだ。心臓は早鐘を打ち、喉はからからになっている。食べたものが胃の中でぐるぐるすると目まぐるしく動き続けている。滲み出る汗。

ああ、あと少しだ。

そう思った広海の耳に、どんどんという何かを叩く音が聞こえた。

ゆったりとした空間には似つかわしくない、古びたチャイムの音が同時に聞こえる。

広海の目の前の世界はぐにやりと歪み、亜里沙の指や婚約指輪の形は歪なものになり、全ての色が混ざり合い、真っ暗になった。

*

広海は、はっと目を覚ます。そこはレストランの中ではなく、みすばらしいアパートの一室だった。鳥のさえずる声が聞こえ、刺々しさも大分薄れた太陽の光が閉じたカーテン越しに見える。床などに散らばった、カップラーメンの容器や飲みかけだった炭酸飲料水から不快な匂いが漂っている。

虫かごにいる蝶が目に止まる。綺麗な羽根を動かし、のんびりくつろいでいる。

夢のような地獄に呼び戻されてしまったのだ。しかも、自然に目が覚めた訳ではなく、ドアを叩く音とチャイムを鳴らす音のせいだ。

「今宮さん。今月分の家賃をいただきに来ただけけれど」

それは、大家である女の声だった。耳障りな声がドアの向こうから聞こえてきた。

大切な一瞬を、待ち望んでいた一瞬を、未来への一步を、邪魔された。

また眠りにつけば、あの続きの世界へ行ける。しかし多少のタイムラグは発生する。きつと次に眠りについた時には、指輪は亜里沙の指に嵌っているだろう。

広海の体の中は空っぽになり、頭の中が真っ白になった。その間にも、ドアを叩く音とチャイムの鳴る音は途切れることが無い。

その音を聞くうちに、空っぽだった体内に何かが生まれた。憎悪

と怒りの感情だった。内臓が鉄の棒で掻き乱された様になり、頭はかあつと熱くなる。齒をくいしばり、手を固く握り締めた。

邪魔をされた。ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな！何故邪魔をする、ふざけるな！

広海は勢いよく立ち上がる。机の上には、今月分の家賃の入った茶色い封筒が置いてある。それをぎゅっと握りしめ、玄関へ向かう。

玄関のドアを開けると、大家が立っていた。ずんぐりむっくりした体型、ぼさぼさの髪に、汚れただらけの服。大家は、こんにちわと言つてにんまりと笑つた。虫歯だらけの齒。いやらしい顔。そんな醜い化け物の様な女が、大切なものを台無しにした。

大家は、べちゃくちやとその場で喋りだす。広海には、目の前にいる女のどの言葉も聞こえなかつた。聞きたくもないおぞましい声だ。包丁で刺してやりたいと、そう思った。

広海は無言で封筒を差し出した。大家はそれを受け取り、また何か話している。ここの大家はそうやってすぐに長話を始めようとするのだ。

時間が惜しい。こんな世界なんか、こんな女なんか、割く時間などどこにも無い。頭をかきむしり、叫びたくなる衝動をどうにか抑える。

ああ駄目だ、もう我慢できない。

広海はとうとう大家の体を押しやって、ドアをがちゃんと乱暴に閉め、鍵をかけた。ドアを閉める瞬間、ぼかんとしている彼女の顔が見えた。その後、何かぶつぶつと呟いていたが、家賃を貰った以上もう用は無いと判断したらしく、すごすこと立ち去っていった。

広海は大家の体に触れた両手を見つめる。じめじめとした嫌な温

もりが残っている。亜里沙の手の温もりは消えて、大家のそれが両手を支配する。洗面台に駆け込み、手を夢中になって洗った。彼の手を優しく包み込んでいた温もりすら奪った、あの大家を心から憎らしいと思った。

むしかごの中にいた蝶を乱暴に取り出し、その鱗粉を被ってまた眠りにつこうとしたが、なかなか寝つけない。その間にも、黒い感情が血液と共に体中を巡り続ける。

眠らなければ、眠らなければ。眠らなければ、狂って死んでしま
いそうだった。

蝶は、そんな広海をただ静かに見つめていた。

*

広海と亜里沙は、少しずつ結婚への道を歩み始める。急いでやらなければいけないことではない。自分達のペースで進めばいいのだ。一生懸命仕事に打ち込む一方で、亜里沙と相談する。最初のうちは本当に漠然としたもので、真っ白な画用紙にクレヨンで思い思いの世界を自由に描いている風だった。こちら辺の話は大いに盛り上がった。あれは駄目とかこれは駄目とか、細かいことを考える必要がなかったからだ。

しかし、少しずつ具体的……例えばお金のことや日程の事等を考え始めるようになると、そもいかなくなる。画用紙に描いた夢の様な絵が次々と×マークで消されていく。仮に親に借りるにしたって限度がある。先のことを考えるとあまり無理は出来ないし、でも無理が出来ないからって地味なものになるのは嫌だった。

理想と現実の狭間で揺れて、喧嘩をしたり、全てを投げ出しそうになったりもした。

しかし、そういったものも少しずつ乗り越えていった。乗り越え

れば、眩い光に満ち溢れた世界が待っていることを、知っているからだ。

不安も大きいが、それ以上に希望や期待が大きい。二人して待ち望んでいたものを得るためには、少しずつでも壁を乗り越えていかなければならなかった。

「現実」の世界の広海は、壁を乗り越えることを諦めた。乗り越えたところで、その先には何も無いと思っっているからだ。

「夢」の世界の広海は、壁を乗り越えていこうと強く思っている。乗り越えれば、その先に素晴らしい未来が待っていると信じているからだ。

広海は確実に何かを得られる世界へ逃げた。現実と夢の区別がつかなくなり、苦しみ、苦しんだ拳句に片方の世界から逃げることを彼は選んだ。周りの誰も傷ついていない……虚構の世界の方を彼は選んだ。

話は少しずつまとまっていき、広海はまず亜里沙と共に彼女の両親の家へ行き、亜里沙と結婚する旨を伝えた。小さい頃から二人にはずっと会っているし、よく話もしていたから、スムーズに話もできるだろうと思っていたが、そうはいかなかった。思いつきり緊張し、何度も舌を噛みそうになりながら話した。

彼女の両親は、そんな彼を優しく迎えてくれたし、二人が結婚するということを中心に喜んでくれた。出来る限り、相談に乗ってくれるとも言ってくれた。

続いて、広海の両親の元へ向かう。流石に自分の両親相手なら大丈夫だろうと思ったら、それでも無かった。訳の分からないことを口走り続け、亜里沙に小突かれるまで本題に移ることが出来なかった。彼の両親も、特に反対する訳でもなくすぐ了承してくれた。

双方の両親は大いに盛り上がり、積極的に二人を助けてくれた。お金のことや、将来の事等もよく相談した。

とうとうウエディングドレスを選ぶ段階に入った。亜里沙はこの日が来るのを指折り数えて待っていたという。まるで遠足を心待ちにしている子供の様だった。数々のドレスを前に、あれもいい、これもいい、どれがいいかな、こういうのはどうかとか何とか言いながら、はしゃぐ彼女の姿は、まさに遠足にどのお菓子を持っていくのか悩みつつはしゃいでいる子供そのものだった。

幸せそうに笑う亜里沙の横顔を、広海は飽きもせず見つめ続ける。待ち望んでいたものが、もう少して手に入る。そう思うと、たまらなく嬉しくなって、広海は声を上げて笑い出す。

当然亜里沙と、店員にはドン引きされ、酷く恥ずかしい思いをすることになったのは言うまでも無い。

*

広海の心は、夢の世界に居る間は幸せで一杯になるが現実世界に無理矢理引き戻された途端、その気持ちは彼方へと去り、代わりに頭がおかしくなりそうな位熱を帯びた黒いもので満たされる。

広海の眠りは様々な「音」によって妨げられた。

隣の部屋の住人が、友人と共に酒盛りを始め、大きな笑い声をあげる。

アパートの目の前の道路を、音を立てて走るバイク。

誰かが上るたびにがんと音の鳴る鉄製の階段。ドアの鍵を開ける音。

登下校する子供達の話し声。

音の無い世界など、有り得ない。生の営みの中、多かれ少なかれ音というものは出るものだ。

しかし、その生きていく上で必ず出てくる「音」というものが、今の広海にとっては一番おぞましいものだった。眠く無いのに無理矢理寝ていることが殆どだから、些細な音で目を覚ます。耳栓を試してみたが、どうにも落ち着かない。

何かの音で目を覚ます度、頭がおかしくなりそうになった。いつも皆死んでしまえばいいのと心の中で呪うことさえあった。この世界があの子と出会う前の様に、色も音も無い世界に戻ればいいのにと思うこともあった。

だがどれだけ苦しくもつと、音の無い世界が来る訳は無いし、ずっと眠って居たいと願っていても、目は覚める。

怒りと憎しみの感情を、物にぶつけて少しでも気分を落ち着けようとしたり。周りにあるものを投げとばし、蹴飛ばし、叩きつける。壊れようが割れようが、どうでも良かった。この世界にあるものなど、もう何の意味も持たないのだ。

またある日のことだった。

眠りについてた広海は、誰かがドアをノックする音で目を覚ました。高校時代の友人達と、結婚の前祝という名の飲み会をしていた時のことだった。久しぶりに会った友人達との話は弾み、丁度盛り上がった所だったのに。

広海は近くにあった壊れた携帯電話を壁に投げつけた後、立ち上がる。

ドアを開けると、そこに立っていたのはまさに夢の中で一緒に飲んでた、高校時代の友人達だった。「こちらの」世界で会うのは数年振りのことだった。「あちらの」世界の彼らと外見に大差は無い。男が二人に、女が二人（こちらは広海というより、亜里沙の

友人といった方が正しいかもしれない。広海をじいっと見つめていた。可哀想な人を見るような目だった。

再会を喜ぶ気持ちは、少しも沸いてこなかった。代わりに沸いてきたのは、あの黒い感情。

「……………何で来たんだよ」

「あの……………おばさんから、お前のこと聞いてさ、心配になって……………その……………」

ドアを叩いていたらしい男は、高校時代の一番の友人だった。しかしその友人の顔も今は、以前自分の眠りの邪魔をした大家と同じに見える。醜くて汚れたものが、目の前に立っているようにしか見えなかった。

夢の中では、広海に笑顔をくれていた友人達。だが、この世界にいる彼らは広海を苦しめるだけの存在だ。

友人の皮を被った鬼なのだ、彼らは。

全ての感情を声に乗せ、広海は叫んだ。

「うるさい、邪魔をするな！ 誰も俺の眠りを邪魔するな、帰れ、帰れ、何で邪魔をするんだ！ 皆、俺を地獄に引き戻そうとする……………俺は幸せなんだ、俺はあそこがいいんだ、ここは嫌なんだ。俺は俺はもうここには居たくない、何でこの世界のお前らは、俺の邪魔をするんだ！ いや……………お前達は偽者なんだ……………あいつらの、俺の友人達の……………あの女が化けているんだろう、残念だったな……………俺は騙されないぞ……………消え失せろ！ それが嫌だと言っただったら、今すぐ俺が殺してやる！」

かっと目を見開き、傘立てに置いてあった傘を振り回した。女二

人は泣き出し、男二人は呆然としながら広海を見た。そして少しずつ後ずさりすると、逃げる様に帰っていった。

しばらく見えない何かを追い払うように傘を振り回し続けていたが、やがてそれもやめて、ドアを閉め、部屋に戻った。ドアの鍵をかける余裕は無かった。

そして、その場に力なく座り込んだ。

もう、限界だった。

*

あちらの世界で言えば、今日は亜里沙との結婚式だ。

しかし今までのように、式の途中でこちらの世界に邪魔をされないとは限らない。また眠れば問題は無いかもしれない。だが、折角盛り上がっていた気持ちが一気に下がり、楽しいはずのものも心の底から楽しめなくなることは確かだった。

ほんの些細な出来事でも邪魔をされれば、腹が立つ。これが一番望んでいたこととなれば……。

有り得ないと言いつれない。今回だけは少しも邪魔をされないなんてことは無いだろう。広海の夢のことなど誰も知らない。皆が広海のことを考えて生きている訳でも無い。

それならば、どうすればいいのだろう。

「ああ、いつそ、永遠の眠りにつくことが出来たら……」

その言葉を呟いた途端、広海ははっと気がついた。そして、歪んだ笑みを浮かべる。狂気が最高潮に達した者の笑みだった。

「そうだ、永遠の眠りにつけばいいんだ……」

二度と目を覚まさない方法が、あるではないか。どうせ、こちらの世界にもう用など無い。こちらの世界で生きる必要などどこにも無い。

そう、永遠の眠りにつけば、全てが解決する。二度とこちらの世界に戻ることは無いはずだ。永遠に、眠り続けることで、夢を……いや「現実の」世界で生きることが出来る。

亜里沙とずっと生きていける。誰にも邪魔されること無く、幸せに生きていける。

結婚して、子供を作って、亜里沙のことも子供の事も大事にしてやるのだ。仕事も頑張って、後輩の相談にも乗ってあげられる頼れる上司になるう。いつか孫も抱いてやるのだ。二人でしわくちやになるまで生きて、そしてあちらの世界で死ぬ……。

この世界に、何の未練も無い。

広海はふらりと立ち上がり、蝶の鱗粉を体中にかけた。もうこの蝶と会うことも二度とないだろう。蝶は何も言わないし、広海を止める様子も無い。いつものことだ。蝶は虫かこの近くをひらひら飛んでいる。

ふとTVの方を見ると、TVの前にあの女が立っていた。女はただこちらをじっと見つめていた。それでいいの？と言っているのかの様な目をしている。

女は姿を変え、広海の姿になった。広海は自分の目の前にいる彼を見つめて一言呟いた。

「……馬鹿な奴だ、お前は」

そして、その姿は次の瞬間、跡形もなく消えていく。

こちらの世界や、夢の世界に居た広海の前に現れた女。それは、本物の女では無く、彼の心の奥底にほんの少し残っていた「これ以上、夢の世界に入り浸って全てが駄目になってしまう」という気持ちが姿を変えたもの……つまりは、広海自身であったのかもしれない。

死や不吉を連想させる、あの女の姿をとることで、道を踏み外そうとしている広海に警告をした。広海が自分自身に出した危険信号……。

だが、広海はその危険信号を受け取らなかった。見ようとせず、逃げた。そしてその結果が、これだ。

もう、広海を止める者は誰もいなかった。

広海はゆっくり目を閉じる。

真っ白なドレスに身を包んだ亜里沙が、太陽のように明るく眩しい笑顔を浮かべている。胸に色とりどりの花を束ねたブーケを抱いて。

もう少して、そんな彼女に会える。彼女の隣に立ち、微笑んで、口づけを交わし、永遠の愛を誓い……。

ああ、そして、そして……。

*

しんと静かで、カーテンが閉じられ、明かりもついでない薄暗い部屋。その部屋の中に誰かが、入ってきた。

黒い髪、黒く妖しく光る瞳、真っ赤な唇。……広海に蝶を渡した、

あの女だった。

短い廊下の先に、小さな部屋が一つある。きよろきよろと辺りを見回すと、彼女が探していたものはすぐに見つかった。

虹色に光る蝶がむしかこの周りを飛んでいる。女の顔がぱあつと輝き、ぴよんぴよんと軽やかなステップを踏んで、虫かこの前まで行った。蝶は女の存在を認めると、虫かごから離れ、彼女の頭上で嬉しそうにくるくると回る。

「久しぶりだったわね。ふふ、元気そうで何より」

そう言っただけで笑った後、虫かごを見て、顔をしかめる。

「嫌だわ、お前今までこんな狭い所に閉じ込められていたの？ 可哀想に。酷いことをするわ、こんなに可愛いお前を、こんな物に……ああ、嫌だ嫌だ。ああ、愛しい私の蝶……苦しかったわよね」

飛び回る蝶を優しく抱きしめ、撫でまわす。まるで自分の子供を慈しむ母親の様な、愛情と慈悲に溢れた瞳で蝶を見つめながら。

「おまけに部屋の中はとても汚いし、臭いし……酷い有様だわ」

物が散乱している部屋は、見るに耐えないものだった。

女は長居は無用と、さっさと帰ろうとした。そして一歩後ずさった時、足が何かに当たった。

女は目をぱちくりさせ、振り返って自分の足元を見る。

そこには、真っ赤な血に染まった……今宮広海の死体があった。彼は、満足そうな笑みを浮かべて死んでいた。

広海の顔を見て、女は自分が蝶をあげた相手のことを今思い出した。誰かに貸したことは頭の隅で覚えていたが、どこの誰でどんな奴だったかなど忘れていたのだ。

血の匂いにも、広海が存在にも今の今まで気がついていなかった。

女にとって大事なものは、蝶の方だ。蝶を取り戻すことだけが目的だったから、気がつかなかった。

女は、もう息をしていない広海を見つめる。だがその顔に、どんな感情も浮かんではいなかった。愛情も、憐憫も侮蔑も、何も無い。温度の無い、冷たい眼差しを彼に向けている。

女にとっては彼など、道端に転がっている石ころ同然だった。どうでもいい存在なのだ。

「ふうん、死んだんだ」

蝶が、女の耳元に近づく。女はうんうんと頷く。女は、蝶の言葉が分かる。女は、死んだ蝶の魂が集まって出来た存在なのだ。彼女にとって蝶は同族。同族の言葉だから容易に理解できる。

「結局、現実と夢の区別がなくなっていて、夢の世界こそが現実の世界だと錯覚して、終いに永遠の眠りにつく為に死んだと。成程ねえ」

広海を哀れむ様子は無く、女はただ事実を淡々とした口調で述べた。

「馬鹿な人ね。……夢は生きているからこそ見られるものであって、死んでしまつたら夢も何も見ることも出来ないのでねえ」

「結局、自分で全てを終らせたのね。貴方が一番望んでいたものも手に入らず、一番見たかった彼女の姿を見る事が出来ないまま。ふふ、でもまあ死んだことで、先に逝った本物の彼女と再会出来たかもしれないけれどねえ。一生再会することなく終るかもしれないけれど。ま、どうでもいいか」

本当に、胡蝶にとってはどうでも良いことだった。

胡蝶は、幸せそうに微笑んでいる広海をそのまま放置し、部屋を出た。勿論、蝶も一緒だ。

空は少しずつ暗くなり始めていた。鬼灯と、紫陽花と、桔梗の様な色が混ざっている。時間が経つごとにその全てが闇に溶け込んでいく。

女は、立ち止まること無く、歩き続ける。すでに広海のことなど忘れている。今日は何を食べようかとか、そんなことばかり考えていた。蝶は少しだけ、広海がいるアパートのある方を見たが、それだけだった。

一人と一匹の姿は少しずつ闇に溶けていき、やがて完全に消えなくなかった。

第二十七話・月まんじゅう

『月まんじゅう』

「久しぶりに月まんじゅうが食べたいなあ」

コーヒーカップ片手に、おじいちゃんがぼそつと呟いた。「桜 SAKURA」で美味しいチョコパフェを食べながら涼んでいた私は、月まんじゅうのことを思った。

『月まんじゅう』というのは、桜町の隣、舞花市にある『月下堂^{げっか}』という和菓子屋で売っているお饅頭のことだ。

こしあんと、ふかしたサツマイモをつぶしたものを、薄く黄色い皮に包んだ、そこそこ大きなお饅頭。甘すぎず、くどすぎず。程よく優しい甘味が噛むと口の中にじんわりと広がるのだ。緑茶との相性も抜群。

553

また月まんじゅうは、不思議な力を持っていると言われている。布団から起き上がれない位具合の悪かった人が、月まんじゅうを食べた途端みるみる内に元気になったとか、病気が治ったとか、肩こりや腰痛が治ったとか、憂鬱な気分がすっきり晴れたとか。

効果やその度合いは人によつてまちまち。ただの偶然だろうと言う人もいるけれど、私は偶然では無いと思う。私もあのお饅頭を食べる度、体の疲れがふわつと抜けるのを感じている。他のお店のお菓子を食べた時には感じない何かを、感じるのだ。

ああ私も月まんじゅうが食べたくなっちゃった。月下堂の和菓子は何れも美味しいから他のお菓子も食べたいかも。

「私、今から買ってくる」

「今から？ いやいや、外は今とても暑いし、ここから舞花市まで歩くとなると少し時間がかかるじゃあないか。そんな無理しなくていいんだよ、ただ言ってみただけだから」

おじいちゃんはびっくりしたように目を大きく開けて、手と首を振った。

「大丈夫よ、私お散歩は結構好きだもの。それに私も月まんじゅうが食べたいし。明日部活があるし、部員の皆と食べる用にも少し買っっていきたいわ」

そう言っつて私はお財布を出し、中身を確認する。おじいちゃんの方と自分の分、部員の皆の分位は買えるお金がある。

「そうかね。それじゃあ、行っておいで。私の分は、後で払うから。気をつけて行くんだよ」

そう言っつておじいちゃんは優しく微笑んで、私を見送ってくれた。私は手を振り返して、外へ出る。

*

外は相変わらず、暑かった。太陽は少しも落ち着きを見せず、やんちゃな子供の様に暴れている。バナライスクリームの様な形と色をしているのに、少しも冷たくない。空だつて、ミントアイスクリームの様な色なのに。

歩いて数分で、頭が熱を帯びて触れると熱い。一歩進む度に汗が肌を伝う。

ぐつぐつしているお鍋の中に放り込まれたような気分。

町の外れから中心部、そしてまた外れていって、舞花市へ入る。舞花市へ入った途端、建物や道路の雰囲気はがらっと変わる。延々

と続く石畳、それを挟むようにして並ぶ長屋や、昔ながらの木造の家。勿論、全部がそうという訳では無いのだけれど。

古本屋、駄菓子屋に呉服屋、和風の小物を販売しているお店……ここには私のお気に入りのお店が沢山ある。今から行く月下堂もそのうちのひとつだ。

急ぐ必要は無いから、私はゆっくりと寄り道しながら歩いていた。

(月まんじゅう、月まんじゅう。ふふ、後は何を買おうかしら)

鼻歌交じりに歩いている内に気づけばもう、目の前にある角を曲がればすぐ月下堂に着くという所まで来た。それなりに歩いたし、暑さには少し参っちゃったけれど好きな所を歩くのって楽しいし、時間もあっという間に過ぎていく。

私は、財布の入ったバッグを叩きながら、角を曲がる。

角を曲がった瞬間、何か小さな黒いものが私のお腹めがけて飛んできた。避けることは出来ず、その何かがお腹にどんと当たる。痛くは無かった。けれどその瞬間、お腹が氷でも押しつけられたかのように冷たくなった。

ぶつかった何かはどんと優雅に着地した。

よく見てみれば、それは黒猫だった。艶々の毛は光を反射して青く輝き、月の様な瞳がきらきらと輝いている。黒い尻尾はゆらゆらと揺れていた。

その猫を見て私は「怖い」と思った。何故なのか、自分でも分からなかった。私は猫は好きだし、黒猫を不吉なものとは思っていない。いつもなら「まあ、猫可愛い！」と言って、触ろうとするのに、その猫は禍々しい何かを放っているようだった。触れば、体を蝕まれてしまいそう。金縛りにあったかのように、体が動かない。

逃げることも出来なかった。

黒猫は逃げることなく、ただ私の方をじっと見つめていた。しばらくこちらを見た後「にゃあ」と鳴いた。

その声を聞くと、背筋がぞつとした。夏の暑さを一瞬忘れてしまいう程に、全身が冷たくなる。

黒猫は、その後くるっとこちらに背を向けて、ものすごい速さで走っていき、あっという間に私の視界から消えて行った。私はただ呆然と、消えていく黒猫を眺めることしか出来なかった。

しばらくすると、体は動くようになり冷えた体もあっという間に暑くなる。

一体、あれは何だったのかしら。もしかして、あの……出雲さん達の住む異界の住人？普通の黒猫で無かったことは確かだと思っただけけど。

私は首を傾げたけれど、答えは出そうに無い。ここでぼうつと突っ立っていても、何の意味も無い。それよりも、月まんじゅうを早く買わなくちゃ。

私は、黒猫がぶつかってきたお腹をさする。

「さくらちゃん？」

そんな私に声をかける人がいた。名前を呼ばれて私は顔を上げる。その声には聞き覚えがある。

私の前に立っていたのは一人の女性だ。

ほっそりとした顔、長い黒髪。前髪は真ん中で分けている。上は白い服で下は茶色のロングスカート。何歳かはよく知らないけれど、三十は過ぎていたはずだ。見た目は若いから、二十代に見えるのだけれど。

「月子さん？」

そこにいたのは月子さんだった。彼女は息を切らししていて、真っ直ぐな髪が顔にかかっている。何か急ぎの用でもあって走っていたのかしら。

月子さんは、顔にかかった、髪を手で払い首を傾げる。

「どうしたの、さくらちゃん。そんな所にぼうつと立っていて？何かあったの？」

「いえ、何でもありません。元気の良い黒猫がぶつかってきて、驚いていただけです。あ、私今から月子さんのお店に行こうと思っていたんですよ」

月子さんは、月下堂主人のお孫さん。お店の手伝いもよくやっている。私は小さい頃から月下堂によく行っていたから、彼女には名前も顔も覚えてもらっている。

「黒猫……あ」

はっとしたように月子さんは口に手をやった。思い当たる節があるらしい。近所の猫なのかしら。実は誰かのペットで最近行方不明になっていた猫だったとか……。でもあの猫、どこにでもいる猫にはどうしても思えなかったけれど。

月子さんは真剣な表情で私をじっと見つめていたけれど、やがて笑みを浮かべると、私を手招きした。

「ごめんなさい、ちょっとぼうつとしちゃっていたわ。お店、来るのでしょうか？ 大歓迎よ」

月子さんの笑顔はとても魅力的だ。月まんじゅうの様に、優しく甘くて心がじんわりと温かくなる。出雲さんが浮かべる魔力を持った冷たい月の笑み……それとは正反対のものだ。

私は月子さんに笑顔で応え、彼女の隣に並んで月下堂を目指した。

*

月下堂へは、再び歩き出して二分も経たないうちに着いた。

木造のその建物は横長で、正面はガラス張りになって、そこにはオススメの商品の名前が書かれた紙が貼ってある。入り口の障子風の扉の上には、書道が得意だったと言う初代月下堂主人が字を書いた、味のある形をした木の看板が掲げられている。

お店の前には、白いプランターが並んでいて、色とりどりの季節の花がそれらを鮮やかに彩っていた。

店内は南瓜色の照明に優しく照らされている。店の右側には黒い長机二つと、椅子が六つある。お店の商品を、お茶を飲みながらここで食べることが出来るのだ。

「あ、月子さんお帰りなさい」

月子さんを迎えるのは、店員の冬美さん。大学を卒業してすぐにここに就職した、月子さんの親戚の人らしい。私の方にも気づいてにこりと笑ってこんにちわと挨拶してくれた。

「ただいま、冬美ちゃん。さくらちゃん、急いで居なければちょっとその椅子に座って待っていて。作りたての月まんじゅうをご馳走してあげるから」

「え、いいんですか。あのお代は……」

「いいのいいの。さくらちゃんは常連さんだもの。お買い物は、一息ついた後でもいいでしょう。ちょっと持ってくるわね。ついさっき蒸し終わったものがあるから」

そう言っただけで月子さんは店の奥へと消えていった。私はお言葉に甘えさせていただくことにして、椅子に座ってぼうつとしていた。

冬美さんはにこにこしながらこちらを見つめていた。

程なくして月子さんが戻ってきた。黒いお盆に月まんじゅうと、緑茶の入った湯飲みを載せたものを持ってきて。

「さあさあ、召し上がれ。私の愛情がたっぷり詰まっているわよ」

「これ、月子さんが作ったものなんですか」

「うん、まあ修行の一環でね……ってあ、違うのよ、あの、さくらちゃんにお毒味させようとかそういう訳じゃないのよ。えっと、ちゃんと美味しいと思うの、父さんと母さんの作ったものには適わなけれど……というか、そんなものを食べさせようなんて……ええと」

慌てふためく月子さんはとても可愛らしい。何だか子供みたいで私は少しもそんなこと気にしないのに。むしろ月子さんが作ったものを食べられるなんて、嬉しいわ。

私は思わずくすくすと笑った。

「大丈夫ですよ。私、月子さんが作った月まんじゅう、食べたいです」

「本当？」

「はい」

「有難う、さくらちゃんはいいい子ね。私さくらちゃんのこと大好きよ」

そう言って月子さんは笑い、私に月まんじゅうとお茶を差し出す。

出来立てという月まんじゅうは確かに、温かい。私はそれを手に取って一口。

「美味しい」

とても美味しかった。まだ温かい皮、そして中に入っているあんことサツマイモ。優しい甘味が口の中に広がり、飲み込むとお腹の中がぼうっと温かくなった。冷めても十分美味しいけれど、出来立てはそれよりもずっと美味しかった。つぶしたサツマイモがとつてもほくほくで……幸せ。

甘酒を飲んだ時の様に、体がぽかぽかする。月子さんが、心を込めて作ったのだろう。

「良かった。不味かったらどうしようかと思っていたの」

「月子さんが心を込めて作ったものですよ、不味い訳が無いです。ふふ、やっぱりこう、このお饅頭を食べると、元気が出てきます。月まんじゅうって不思議な力がありますよね……どうして、このお饅頭を食べるとこんなに元気になれるんでしょう」

その問いに、月子さんは微笑んで答える。月まんじゅうのようなあの笑みを浮かべて。

「月って魔を跳ね返す鏡だと思っのよ」

返ってきた言葉は想像もつかなかったものだった。私はびっくりして、目をぱちくりさせる。月子さんはにこにこ笑っている。

その後も何度か聞いてみたけれど、食べた人が元気になるように呪文をかけているのよとか、そういつた答えしか返ってこなかった。なんだか、上手く話をはぐらかされた気がするけれど……でも、素敵かも。月は魔を跳ね返す鏡……そして、月子さんの愛情こもった呪文。確かに美味しくなれていいながら作ると美味しくなるっ

てよく聞くものね。

美味しい月まんじゅうを食べた後、私はおじいちゃん達の為（と私の為）に。お家に帰った後また食べたいし）に月まんじゅう、後は「うさぎのお餅」という白いお餅に芋あんをのせたものなどを買った。

「月まんじゅう、ご馳走様でした。とつても美味しかったです。また来ますね」

月子さんはありがとうと言って、微笑む。

「ええ、また来てね」

私はぺこりとお辞儀して、お店を出ようとする。けれどそんな私を月子さんが一度呼び止めた。どうしたのかしら。私は振り返る。

「夜は危ないから、早めに家に帰るのよ」

何故か酷く心配そうな表情を浮かべながら、月子さんは言う。どうしたのかしら。けれど確かに、夜は危ないわよね。

「え、あ、はい。有難う御座います」

お客さん一人一人のことを気遣ってくれる月子さんはやっぱり優しい人だわ。

私はもう一度お辞儀をして、今度こそお店を出た。

*

その後は喫茶店に戻って、おじいちゃんと月まんじゅうと一緒に食べながらお話した。朝比奈さんと弥助さんの分も買ったので、後で二人に渡してとおじいちゃんに預ける。そしておじいちゃんから鍵を借りて、おじいちゃんの家に入った。

おじいちゃんの家は、家というよりは書庫と言った感じ。沢山本

がある……私にとっては楽園のような場所。

読書に夢中になっていて、気がついたら外はすっかり真つ暗になっていた。時計を見ると、もう夕ご飯の時間だった。私はお母さんに今から帰ると連絡する。それからすぐおじいちゃん帰ってきた。

「おやおや、まだ居たのかね。読書に夢中になっていたのかな」

「えへへ。だつておじいちゃんの家、素敵な本が沢山あるんですもの」

「ははは。まあ、兎に角早く帰りなさい。気をつけて帰るんだよ」

「はい」

私は笑って、おじいちゃんにはばいばいと手を振り、家を出る。

おじいちゃんの家は町の外れにある。古い家がぼつぼつとあり、すぐ近くに桜山が見える。電灯がぼつりぼつりと置いてある。中には点いたり消えたりを繰り返しているものもあった。

桜町はとても平和なところだから滅多に事件は起きないけれど、それでも絶対安全であるという保証は無い。夜の澄んだ空気や砕いたダイヤモンドを散りばめた空、銀色の月はとっても好きだけれど、ちょっと不安な気持ちにもなる。

空でも眺めながらのんびり帰るのも悪くないけれど、さつさと帰った方がいいだろう。お母さんも心配しているだろうし。それともあまり心配していないかしら。おじいちゃんの家へ遊びに行つて、帰りが遅くなるのはいつものことだし。

さつきまで空を統べていた太陽は沈んだけれど、それでも未だ暑い。

歩いているとじんわりと汗が浮かぶ。降り注ぐ月の光はとても涼しげな薄荷飴の色をしているのに。

ぼつぼつと家の数が増え始める所まで来た時頃、私はお腹が急に冷めたくなるのを感じた。そう、丁度今日黒猫がぶつかって来た辺りだ。お腹の中に氷を詰められたような………続いて、背後に何かを感じ、背筋が寒くなった。

何かが、後ろにいる。

私は後ろを振り返る。

電灯の真下に、黒猫が居た。きつとあの時の黒猫だ。電灯に照らされた体毛が青黒く輝いている。

その黒猫と目があつた途端、私は体が動かなくなった。足を地面に縫いつけられたかのように。お腹だけではなく、体中が冷たい。温もりを、感じない。冬でもないのに手がかじかんでいる。

黒猫は、にやあと一声鳴いた。笑っているようだった。

黒猫の体が、ぐにやりと溶けてそれがぐねぐねと動いて、別の形を作り上げていく。

それはバケツを逆さにしたような……お皿に盛り付けたプリンのような形になって、そこから二本の手がにゅっと出てきた。足は無い。丸く大きな目が今にも零れ落ちそうな位に飛び出している。口を大きく開け、にたにた笑っている。

それは泣いている様な笑っているような、獣の雄たけびの様な、恐ろしい声をあげている。

ああ、やっぱりあの黒猫はあちらの世界の住人だったのだ。

黒猫だったそれは、じわりじわりと私に近づいてきている。逃げ

なければ、きつと食べられてしまう。そう思ったけれど、体が言うことをきかない。声を出そうと思っても、喉に何か詰まったようになっただけで言葉はおろか、何かしら音を出すことも出来ない。目を逸らすことも出来ず、逃げることも出来ない。

体が冷たい。

このままでは、食べられてしまう。都合よく出雲さんが来るはずも（来たとしても助けしてくれるとは限らないし）弥助さんがたまたま通りかかるといふことがあるはずも無い。

けれど私には何の力も無いから、目の前にいる脅威を消し去ることも出来ない。

目の前のお化けは、私が何も出来ず、恐怖に打ちひしがれている様子を見て、楽しんでいるのか、にたにた笑っている。

お化けはゆっくりと私に近づいてきた。そして、気づけばもう目の前にいた。

お化けが舌を出す。あれでくるつと包んでぱくつと食べるつもりなのかしら。不思議なことか妖怪とかそういうのは大好きだけれど、食べられてしまうのは流石に勘弁して欲しいわ。

長くて大きな舌が、一気に私に襲い掛かった。酷く冷たい舌が、私の体を捉える。

私は思わず、目を瞑る。ああ、もっと早く帰れば良かった……でも読書は……ああ、そんなことを考えている場合では、ないのに。

その時だった。酷く冷たくなった体が、一気に温かくなるのを感じた。そう、あの月まんじゅうを食べた時と同じ様に。お腹を中心に放射状に熱が広がって、あっという間に体中が温かくなった。お腹の中の何かが、熱を一気に放出した……そんな、感じ。普段より

も多分体温は上がっている。体の中もぽかぽかしている。

すると、ぎゃああという大きな悲鳴が聞こえた。恐る恐る目を開けてみると、お化けが私から離れて、短い手で目を覆いながら、叫んでいた。酷く苦しそうにもがいている。

そして一方、私の体は淡い黄色の光を発していた。黄色い月の様に、あの月まんじゅうの様な、色。

お化けは、その場でのたうち回り、しばらくの間叫び続けていたけれど、その体は徐々に消えていき、やがてすっかりその姿を消してしまった。体も動くし声も出る。

お化けが消えたのと同時に、私の体が発していた光も消えていった。

私はぽかんとしながら、ただその場に立ち尽くしていた。

もしかして、あの月まんじゅうの……お陰、なの？

月はね、魔を跳ね返す鏡だと思っのよ

私は、月子さんの言葉を思い出した。

*

私は次の日、そのことをおじいちゃんと弥助さんに話した。

「さくらが会った黒猫っていうのは、まあ間違いなくあつしらの世界の住人だろうな。そういう奴がいるんだよ。昼間は大した力が使えないから、猫なりなんなりに化けて、狙った獲物に印をつける。夜になると、その印を辿って獲物の所まで行く。その印は、昼間とかその印をつけた本人が近くに居ない時とかは何の力も發揮しない。だが、そいつが近くまでいくと、獲物を動けなくさせちまう。で、

後は楽々とその獲物を喰う……ってね」

成程、それじゃあ角を曲がった時あの黒猫がぶつかって来たのは、私に印をつける為だったのね。

弥助さんは月子さんについても話し始める。

「月子さんにはあつしも何度か会ったことがあるつすよ。多分、あの人は人間だと思う。ただ……もしかしたら、月子さんは呪師まじないしなのかもしれないつすねえ。月子さんに限らず、彼女の家系が呪師の家系なのかも。まじないをかけたものを食べさせることで、自分が居ない所でも、食べさせた人を守る。魔を跳ね返す、或いはもう体内に巢食っている邪悪なものを浄化する。月まんじゅうを食べると具合が良くなるっていうのは、具合が悪い原因が魔とか邪悪なものとかそういったものだから……それを浄化することで……ってことかもしれないつすねえ」

それならば、月子さんは私があいう目に合うことに気づいていて、月まんじゅうを食べさせてくれたのだろうか。

そもそも月子さんが走っていたのは、あの黒猫を追いかけていたからなのかもしれない。そしたら私がいて、しかもあの黒猫とぶつかったと言ったものだから……。

夜は危ないから気をつけてっていうのも、夜歩いているとあのお化けに襲われて、恐ろしい目に合うからという意味だったのかもしれない。

けれど、多分月子さんにそのことを聞いても、正直に話してくれない様な気がした。あの笑みを浮かべながら、話をはぐらかしてしまつかも。

それでも、いいと思う。けれど、今度お店に行った時は月子さんにお礼をいっておこう。月子さんは、美味しい月まんじゅうを有難う御座いましたって意味でと思うけれど、それでも構わない。

ああ、それにしても。

「呪師が、この世界に本当に居て……ああ、しかもあんなに近くに……それって、とつても素敵！ 私もそうというのが使えたらいいわ」
弥助さんが、何故かため息をついて、カウンターテーブルに体を突っ伏した。どうしたのかしら。

まあ、いいか。

ふふ、また月下堂へ行こう。

月まんじゅうの様な、暖かくて優しい笑みを浮かべる月子さんに会いに。

勿論、月まんじゅうも買って食べなくちゃ……ね？

番外編5：桜村奇譚集3

桜村奇譚集3

『蔵神様』

蔵には、神様が宿っている。その神様のことを「蔵神様」とこの地域では呼んでいる。

蔵には必ず神棚を作り、こまめに蔵神様へお供え物をし、蔵を守ってくださるようにお願ひするのだ。きちんとお供え物をし、蔵神様に失礼なことをしなければ、蔵神様は蔵を火事や泥棒などの魔の手から守ってくれる。

しかし、もし蔵神様へ酒や食べ物をお供えすることを怠ったり、失礼なことを言ったり、神棚を壊したりするようなことがあれば、蔵神様は恐ろしい罰を与えるという。

ある時は蔵の中にあるもの全てを燃やし、ある時は蔵に人を閉じ込めて出られないようにし、またある時は蔵を丸ごと浮き上がらせて、家の上に落としたという。

『万花の園』

桜山のどこかに、万花の園と呼ばれる花園があるという。

そこには、この世、或いはこの世ならざる世界に存在する花という花全てが咲いているという。季節も気候も一切関係無い。桔梗も桜も董も椿も紫陽花も、そこへ行けば一度に見る事が出来る。

その光景はとてすばらしく、美しいものだという。鮮やかに広がる様々な色。きつと、宝石箱をひっくり返したかの様なものなのだろう。

その園に咲く花は、不思議な力を持っているらしい。蜜を吸えば

どんな病もたちどころに治り、妖しき力、もしくは怪力を手に入れるなどと言われている。

『花の娘』

ある強い力を持った術師が、万花の園を訪れ、優れた術を用いて椿と菊の花を人間の姿に変えた。

椿の娘は紅椿べにじばき、菊の娘は千代菊ちよぎくと名づけられた。

術師は二人に、桜村をあらゆる怪異から守るようにと命じた。二人は主の言うことを聞き、村人を妖怪達から守る為、日夜戦い続けた。

村人達は、そんな二人に感謝し、きちんとした家をやり、食べ物もやった。友人もあり、普通の女の子の様にはしゃぐ時は思いつきりはしゃいでいた。

しかし、村長の息子だけは違った。彼は妖怪や幽霊、そういった人ならざる者を恐れ、嫌っており、二人の娘のことも例外なく嫌っていた。この村を守ってくれているとはいえ、化け物には違いない。今はこうして村を守っているが、いつか言うことを聞かなくなり、他の化け物と同じ様にこの村に災いをもたらすかもしれないと考えていた。

やがて村長は病で亡くなり、その息子が新しい村長となった。亡くなった村長は息子に、お前があの人を嫌っていることは知っているが、あの二人は本当に私達の為によくやってくれている。彼女達を邪険に扱うことなく、大切にしたいという遺言を残していた。

しかし、息子は父の言うことを聞かなかった。

村長となった男は、ある日二人を呼び出しこう言った。

「親父殿はお前達のことを気に入っていたが、俺はお前達がこの村に居るだけで、気分が悪い。お前達は化け物共を倒したり追い払ったりしているが、お前達とてあいつらと同じ化け物であることに違いは無い。化け物など、この村にはいない。お前達を殺すとは言わない。だが、できればこの村から出て行って欲しい」

二人の娘は、悲しそうな顔をしたが、反論することなく、静かに村を出て行った。他の村人達は、恩を仇で返すような真似をした男を批難したが、男は全く気にしなかった。

その数日後、男は妖怪に殺されたという。二人の娘を追い出していなければ、命を落とすこともなかったろうに……と村人達は口々に言った。

紅椿と千代菊の二人は、二度と村に帰ってこなかった。だが、もしかしたら今もどこかで、この町を見守ってくれているかもしれない。

『河童様』

今の三つ葉市に流れる水瀬川の近くに、小さな祠がある。そこには河童が祀られているという。

きゅうりを二、三本お供えすると泳ぎが上達すると言われており、泳ぎの苦手な子供達やもつと泳ぎを上達させたい人がよくきゅうりをお供えしているという。

私の友人も、幼い頃に河童様にきゅうりをお供えしたところ、みるみるうちに泳ぎが上手くなり、学年一泳ぎの上手い人間となった。新鮮なきゅうりを供えるほど、よりその効力は増すという。

しかし、逆に河童様にお供えしたきゅうりを食べてしまうと、泳げなくなるといふ。

泳ぎの上手かった子供が、お供えされたきゅうりを食べてしまった後川遊びをしたところ、溺れて死んでしまったという。

『おとしもの
多鳥物』

一人の男が、木に向かって石を一つ投げた。
そしたら百羽以上の鳥がばさばさと落ちてきた。

『言い争い』

桜山神社から、時々声が聞こえるという。
それは男と女の声でやたら大きい。はっきりと何を言っているか聞き取れることは出来ないが、なにやら言い争いをしているらしい。
桜山神社には、かつて村を恐怖に陥れていた恐るべき化け狐出雲と、その出雲を命がけで殺した巫女桜が祀られている。
恐らく、神社から聞こえる声というのはこの二人のもので、死してなお争っているのだらうと言われている。

ところで、この二人はその言い争いを聞かれるのが余程嫌いなようだ。

ある村人が、二人の言い争う声を聞き、思わず笑ってしまった。
すると、「立ち聞きするな、あっちへ行け！」と大声で怒鳴られたという。

二人のその声はおかしい位ぴったりと合っていたという。

最近、その声を聞いたという人は無い。二人共、もう疲れてしまったのかもしれないし、誰も居ない時に言い争っているのかもしれない。

『笑い女』

昔村に、いつでも笑っている女が居たという。苦しい時も悲しい時も食事をしている時も墓参りの時も、いつでも笑っている。何故いつも笑っているのかは不明である。しかもその笑い顔は大層不気味なものであり、彼女には殆ど友人が居なかつたし、一生独身であった。

女は笑い続けた。そして最後には流行り病にかかり、看病の甲斐なく死んでしまった。

女は最期まで笑っていたという。

『泣き女』

笑い女だけでなく、村には泣き女なる者も居たらしい。苦しい時や悲しい時、腹が立っている時は勿論、嬉しい時も美味しいものを食べている時も、誰かと喋っている時もいつも泣いていたらしい。

だから女の目はいつも赤く、目蓋は腫れていたという。

女は泣いて泣いて泣き続けた。

ところがある日一生分の涙でも出し切ったのか、ぴたりとその涙は止まってしまった。その瞬間、女はぱたつと倒れ、そのまま息を引き取ったという。

『米の雨』

酷い凶作に見舞われた年があった。桜村やその周辺の村の者達は飢えに苦しんでいた。

ある日、大雨が村を襲った。

降りしきる雨を見て、一人の男が「ああこの雨粒が全て米だったらしいのになあ」とぼそりと小声で呟いた。

すると、雨粒全てがなんと米に変わり、米の雨となった。
その米の雨のお陰で、人々は飢えから救われた。
その言葉を呟いた男は驚くやら嬉しいやら。

「きつと、神様の申し召しだ。ああ、良かった良かった。これで死なずにすむ。ありがたや、ありがたや。はて、ところであの雨が降っていた時、あれが全部金であつたら良いなあと言っていたらどうなっていたのだろうか。金に変わったのだろうか、それともそこまで面倒を見切れぬと神様が呆れてしまって、ただの雨のままだったのだろうか。ちよつとばかり気になるなあ」と言つたと言わなかつたとか。

『踊り着物』

昔、村に不思議な着物があつた。

その着物はとても素晴らしいもので、一目見れば誰もが夢中になるといふ。その着物は神出鬼没で、道端に落ちていたり、売り物の中に混じっていたり、家の中にいつの間にかあつたり。

しかし、どれだけ素晴らしくろうと、その着物を着てはいけない。着たら最後、脱ぐまで踊り続けなければいけないのだ。脱がない限り、足も手も止まらない。そのまま踊りつかれて死んでしまうことだつてある。

誤つて着てしまった人からその着物を無理矢理脱がせると、それは手からすり抜けてまたどこかへ行ってしまうといふ。

『雪隠お化け』

雪隠お化けなるものがある。どういった姿なのか、見た者は誰も居ない。

雪隠お化けは雪隠に隠れており、用を足している人間の足をむん

ずと掴み、ひきずり落とすのだという。

ただ、雪隠のどこかに「清浄」と書いた紙を貼ってあれば、雪隠お化けは現れないという。

『くしゃみ』

ある男が、くしゃみをした。それはそれは大きなくしゃみで、そのくしゃみは男の家を吹き飛ばした。

またある日のこと、村に恐ろしい化け物が現れた。そいつは、村の食糧を奪ったり、沢山の人に乱暴を働いたり、家を壊したり畑を荒らしたりした。

その化け物が、以前くしゃみで自分の家を吹き飛ばした男と遭遇した。化け物は、男を殺そうとした。

男は恐怖に震えたが、何故かその時大きなくしゃみが出た。すると化け物は思いつき吹っ飛ばされ、飛ばされた先にあつた大きな岩に全身を強く打ち、死んでしまった。

男は村を救つた英雄となり、一生幸せに暮らしたという。

『薪盗り』

薪盗りなるものがいた。それは、小屋に積んである薪を盗む。盗んだ薪をどうするのかは知らぬ。

『うなぎ女房』

ある一匹のうなぎが、一人の男に恋をした。うなぎはどうしてもその男と結ばれたくて、自分の棲む池にいる神様に、どうか私を人間にして下さいとお願いした。神様は、そのうなぎを美しい人間の女性にしてやった。うなぎは、お礼を言って、池を出た。

うなぎは、確かに美しい娘となったが、その肌は本来の姿と同様

とてもぬるぬるとしていた。

うなぎの娘は、恋した男を探し、見つけ出すと自分をどうか貴方のお嫁さんにして下さいとお願いした。男は、あまりに娘が美しいものだから、はて一体この娘はどこの娘だろうと疑問に思ったが直に了承し、二人は晴れて夫婦となった。

始めのうちは幸せな毎日を送っていた。しかし、娘の肌が気持ち悪い位ぬるぬるとしていること、水浴びばかりしていることに男は疑問を持ち始めた。この娘は本当に人間なのだろうか。

男は思い切つて、妻に尋ねてみた。うなぎの女房は、最初は何も話そうとしなかったが、男が厳しく問い詰めたので、とうとう自分の正体がうなぎであることを喋ってしまった。すると男は、矢張り人間ではなかったのか、うなぎが嫁さんなんて、気持ちが悪い、さつさと出て行けといつてうなぎ女房を追い出してしまった。

うなぎ女房は涙を流しながら、村を出た。元の姿に戻してほしいと神様をお願いしようとしたが、足はなかなか前に進まない。

それから数日、池に戻る訳でも村に戻る訳でもなく、ぼうつとしていたうなぎ女房だったが、矢張りどうしても男のことを諦めきれず、村に戻った。

すると、男の家が火に焼かれているではないか。どうやら火事らしい。家の中から愛しい男の悲鳴が聞こえた。

うなぎ女房は迷うことなく火に飛び込んだ。そして男の体を庇いながら、男を外まで連れ出した。

男はうなぎ女房に守られたおかげで、どうにか一命を取り留めた。しかし、うなぎ女房は体を焼かれ、死んでしまい、元のうなぎの姿に戻った。

男は、自分のことを命がけで守ってくれたうなぎ女房の哀れな姿を見て涙し、酷いことを言ってしまったことを詫びた。

うなぎ女房の死骸は、丁重に葬られた。

『きゅうり好き』

きゅうりが大好きな男が居た。男は毎日かさずきゅうりを食べていた。

きゅうりを食べ続けるうちに、男の体は緑色になり、体にぶつぶつが出来、みるみる内に痩せ細り、最後にきゅうりになってしまった。

『逆さにするな』

この村では、座敷童子を見つけても絶対に足等を掴んで体を逆さにしてはいけないと言われている。そうすると、折角得た幸運が全て逃げてしまい、逆に不幸になるのだと言う。

『猫石』

ある一匹の猫が、穴の開いた岩をくぐろうとしたが、途中で体がひっかかって抜けなくなってしまった。村人達はどうにかして猫を助けてやろうとしたが、どう頑張っても抜けられない。岩を粉碎して助けようとしたが、その岩は酷く頑丈で何をしてもしもびくともしない。とりあえず餌をやって死なせないようにはしたが、それ以外どうすることも出来なかった。

猫の姿はどんどん変わっていった。少しずつ固くなり、色も灰色に変わっていき、とうとう石になってしまった。それを人々は猫石と呼んでいる。

今もその猫石は残っていて、私も何度かその石を見た事がある。確かに岩に開いた穴を猫がくぐっている様に見えた。

『飛ぶ』

ある男が呟いた。

「金というものは、どんどん無くなっていく。鳥の翼がついていて、あつという間に飛んでどこか行ってしまふ」

すると、男の手元にあった金に鳥の翼の様な物が生えてきて、男の手から離れていってしまった。そのままどんどん飛んでいって、上空へと消えていった

第二十八話：雨唄（1）

物語を動かしたいかい？その手で止まってしまった物語を進めた
いかい？それならば、これなんかどうだい。

ただ、開けるだけでいい。それだけで、物語は動き出す。

お前さんが、動かすのさ……。

『雨唄』

「止みませんねえ……雨」

御笠君が窓から見える空を見ながら呟いた。その言葉に皆が頷く。

今は未だ夏休み。けれど部活は時々ある。今日も文化祭に出す部
誌に載せる為の小説を書いたり、本を読んだりしている。

部室にある窓から見えるのは、青と黒、そして少量の白い絵の具
を混ぜた様な色をした世界。どう頑張ってみても、爽やかな色には
見えない。太陽は厚い雲に隠れてしまっている。天照大神が天岩戸
に籠もってしまった時もこんな感じだったのかしら。

そんな空から降り注ぐのは、眩しい太陽の光では無く、水晶の様
な雨粒。

梅雨でもないのに、一週間前から少しも止むことなく降り続けて
いる雨。あまり激しくはないけれど、傘をささなければそう時間を
かけずに全身が濡れてしまう位には降っている。

「変な雨よねえ、異常気象って言葉がぴったり。いや、異常気象つ
て言葉もびっくりする位の異常っぷりよね」

テーブルに置かれているクッキーをかじり、ため息をつく櫛田さん。

そう、この雨は何だか変なのだ。

まず一つ目。この数日間の天気図をどう見たって、雨が降る天気図ではないということ。どのデータを見ても雨なんて降るわけが無い……といった感じらしい。

こんなに雨雲だらけの空なのに、観測データには雨雲のあの字も映っていないというのも不思議な話。

そして二つ目。雨は桜町全域、そして三つ葉市と舞花市等の一部地域にしか降っていない。全国的には晴天が続いていて、雨が降っているのはこの辺りだけなのだ。

しかも雨の降っている範囲は綺麗な円を描いている。円の中心は桜山。桜山にコンパスの針を刺し、そこからくるつと描いた円の中でしか雨は降っていない。降っているところと降っていないところの境界線は一目で分かる位はつきりしている。舞花市は私の通っている東雲高校がある辺り位まではその円の中に入っているのだけれど、円の範囲の外では雨粒一つ落ちていない。円の外側には爽やかな色をした空が広がり、太陽が燦爛と輝いている。雨が降っている所と降っていない所の境目の光景は非常に奇妙なものになっている。勿論、原因は不明。あまりに奇妙な現象なものだから、ニュースにまでなっている。

「確かに妙ですよね。こんな滅茶苦茶な雨、初めてですよ」

「私も桜町に住んでいますから、毎日雨で何だかだるくなっちゃいます。お母さんも、洗濯物が乾かないってため息つきっぱなしです」
深沢さんもため息をつく。いつもお日様の様に暖かな笑顔を浮かべている彼女も、相当参っているらしい。

私は、窓の外をちらつと見る。運動場が見えるけれど、そこには誰も居ない。いつもは運動部の人達がいて、彼らの出す色々な声や音が校舎の中にも聞こえてきた。延々と聞こえるその声や音をBGMにして、私達は部活動をしていた。けれど今聞こえるのは、地面や窓を叩きつける雨の音のみ。

その雨音は心に黒い染みを作り、そしてその染みは徐々に広がっていく。また、心は雨粒を吸収してどんどんと重くなっていく。黒く冷たく、重い。楽しい部活動なのに、少しも気分は晴れない。

「しかしもしこのまま止むことなく降り続けたら、やばいわよねえ。いくらそんな酷い雨じゃないとはいええ。どこもかしこも水浸しになっちゃうわ」

「確かに危ないですよ。本当、どうしてこんな妙なことに……」

「なんていうか、こういう妙なことが起こると妖怪とかそういう摩訶不思議な存在を信じちゃいそうになるわ。この前の神隠し事件にせよ、今回の妙な雨にせよ、普通じゃ考えられないもの」

シャーペンを器用にぐるぐる回しながら櫛田さんが言う。

そう。多分今回の雨も……以前起きた桜町連続神隠し事件と同様、出雲さん達のいる「異界」の住人が関わっているのだ。ただの異常気象とは。考えにくいし。

だとしても、一体誰が何の為に。シャーペンで頬をぺちぺち叩きながら考えてみるけれど、何も思い浮かばない。

「櫛田先輩まで臼井先輩の様なことを言って……。まあ、確かに常識では考えられない様なことが起きていますよねえ、実際のところ。こんなことがこれからも続くようなら、世も末ってやつですね」

御笠君が、出雲さんの姿とその力を目の当たりにしたら、きつと

失神するわね……。私はため息をつく御笠君を見て、くすりと笑う。それに気がついて、御笠君が首を傾げる。

「何笑っているんですか、臼井先輩」

「ふふ、何でもないわ」

「変なの。ま、変なのはいつものことですけど……。あいた」
御笠君の頭に消しゴムのかけらが直撃する。

「全く失礼な後輩君ね、相変わらず」

櫛田さんが投げたようだ。別に私は気にしていないのに。

そんな様子を微笑みながら見ていた美吉先輩がぼんぼんと手を叩く。

「まあ、この不思議な雨のお話は置いておきましょう。原因を話し合ったところで、この雨が止む訳ではないわ。自然相手に戦いを挑んでも返り討ちにあうだけ。それより、部誌に載せる為の小説をどんどん書かないと。文化祭は待つてはくれないのよ、今の内にどんどん進めて気持ちよく文化祭を迎えられるようにしなくちゃね」
皆「はい」と返事をして、目の前にあるノートや原稿用紙とにらめっこを再開する。

自然の仕業なら、人間では太刀打ちできない。

妖怪を始めとした人ならざる者の仕業なら……。やっぱり人間にはどうすることも出来ない。

自分では何も出来ないけれど、それでもやっぱり気になってしまふ。この不思議な雨は誰が、何の為に降らせているのか。この雨の裏にどんな物語が隠されているのか。色々考えてみる。

そんな調子でぼうつとしていたら、結局原稿が全く進まないまま、部活は終わってしまった。

「はあ、何だか結局全然進まなかった。雨が降っていると心がずんと沈んじゃって、何にもする気が起きないのよね。サクは進んだ？」

「うっん、全然」

「一番書くのが早いあんたでもそれだもの、元々書くのが遅いあたしの原稿が進むはずないわ、うん。ひいちゃんと環はどうよ」

「僕も同じく、です。全く梅雨はとづくに明けたっていうのに。暑いのも嫌ですけど、雨が続くのも憂鬱な気分になるから嫌ですよ。何というかあの暗い空見て、雨の降る音聞くだけで体中に重りがくっついた気分がします」

「私は書いたには書いたんです。でも、何だか自分でもよく分からない話になってしまつて……うっ、集中しないで書いていると訳が分からないことを書きちゃいます」

と言つて深沢さんは原稿を皆に見せる。ぼうつとしながら書いていたからなのか、その文字はみみず文字一歩手前。そして彼女の言う通り内容はすごいことになっていた。ひよこが海を歩いていたら雨が降ってきて、その雨をひよこが飲んだらひよこは怪獣になって、何故か突然海底からよきつと伸びてきたビルを壊しまくり、そのビルの破片が花火になって空に打ち上げられ、空を飛んでいたカラスがびっくりして口にくわえていたポップコーンをぼろぼろこぼし、何故か途中でそれは金平糖に変わって、森に住むクマの頭に当たる。何故か金平糖が当たっただけなのにクマの頭には大きなたんこぶが出来てそのタンコブがぱんと破裂して……そんなお話。ちなみにオチは無い。

こういう独創的な物語も私は嫌いではないけれど……。

「流石だわ、ひいちゃん。あたしには一生こんな物語は書けない」
櫛田さんは引きつった笑みを浮かべながら言う。深沢さんがえへへと恥ずかしそうに笑う。

「そんな照れちゃいます」

「褒めてないっての」

そう言っつて櫛田さん、そして一緒に原稿を読んだ御笠君が肩をすくめた。

その様子を、お姉さんの様に優しく見守る美吉先輩。いつでも先輩の目は優しく、温かい。歳は一つしか変わらないのに、とても大人びている。

皆傘を持って部室を出た。

「それじゃあ、皆またね。気をつけて帰ってね」

「ええ、有難う御座います。それじゃあ美吉先輩さようなら」

「ええ、さようなら。臼井さん」

皆校舎を出て、傘を差し、それぞれ帰路についた。

*

家に帰り、私服に着替えた後、机に向かう。原稿用紙と、物語案を書いたノートを広げ、シャープペンシルと消しゴムを出す。部活中進まなかった分、家で進めないと。

けれど、場所を学校から家に移したところで作業は少しも捗らない。雨音が頭の中にノイズをかける。書きたい場面の情景を思い浮かべようと思っても、そのノイズのせいでなかなか上手くいかない。やっと浮かんできた文章も、雨に流されていく。

意味も無く、先日買った見事な細工のされた木の箱を開けたり閉じたりする。とりあえず何かしら手を動かしていないと、気力ゲージがゼロになってしまいそうで。

箱をシャーペンシルでこんこんと叩いたところで、箱から何かが出てくる訳でもない。この箱に今は何も入っていない。何も入っていないから、何も出てこない。私はため息をついた。

こういう時は、おじいちゃんのお店でお茶を飲もう。お茶を飲むとほっとする。こんな気分も吹き飛ばしてくれるかもしれない。それにあそこには弥助さんもいる。もしかしたら今回の雨について何か知っているかもしれない。

私はお気に入りの紺色の和傘をさして、再び家を出た。

*

「あつしが知っている訳ないだろう」

見事な即答。がらんとした店内には、私と弥助さん、そしておじいちゃんだけがいる。朝比奈さんは用事があって今日はお休みらしい。

弥助さんは私の真向かいに座り頼杖をついている。

「桜山から今まで感じたことの無い力の波長みたいなものを、感じている。だが、それが具体的に桜山のどこから来ているのか、良いものなのか悪いものなのか、そういったものはさっぱりわからん。あつしはそういうのを感じ取る力……及び霊力とか妖力とかそんな風に呼ばれている様な力は殆ど持っていないし。あつしの場合、妖としての力は全部こっちに来ているからな」

ぼんぽん、とがっちりとした立派な腕を叩く。腕だけではない、体全体ががっしりしている。喫茶店のウェイターという言葉がこれほどまでに似合わない人もそうそう居ないでしょう。ジムとか道場とか、そういうのはびったりだけれど。

「誰が何の為に降らせているのか、皆目検討がつかない。ただまあ、あつしが感じる程強い力の持ち主の様だから……悪戯とかそういうくだらない理由ではないと思うが」

「そうですね……」

結局これといった情報を掴むことは出来ず、私は肩を落とす。弥助さんが分からないとなると。後頼れるような人といえば。

「出雲さんなら、分かるのかしら」

その名前を出しただけで、弥助さんの表情は歪む。名前を聞くだけでも嫌なようだ。本当、出雲さんのことが嫌いなのね。

「確かにあの馬鹿なら、山からする気配を辿って、雨を降らせている奴のところこそう時間をかけずに行くことが出来るだろうな。倒すなり脅すなりなんなりして、雨を降らせることをやめさせることも、出来なくはないはずだ」

だが、と弥助さんは続ける、

「あれが、今回の件で重い腰をあげるとは思えない。あいつには関係ないからなあ。別にあつちの世界じゃこんな異常な雨は降っていないし。基本的にあいつは面倒ごとを嫌うタイプだ。雨が降っている山の中を歩き回り、雨を降らせている奴を見つけるなんてことはまあ人をお願いされたくらいじゃあやらないだろうな」

確かに。前回の桜町神隠し事件は解決してくれたけれど、それも被害者の一人が弁当屋『やました』の子供である一夜だったからの話。菊野おばあ様の機嫌を損ねるのが嫌だから仕方なくやりましたといった感じで。そんな彼が自分にとって何の利益にもならないことをやるとは思えない。

「気まぐれな奴だから、暇つぶしとかなんとかいって動いてくれる可能性がゼロって訳じゃないだろうけど。ま、あんまり期待しない方がいいっすね。とりあえず今回の件、あっしが調べてみるよ。確かに力を感じる能力は殆ど無いが、一応あっしも妖怪。まあどうにかなるだろうさ」

「調べてくださるんですか？」

「あっしがやらなければ、あんたがやるうとするだろう」

「弥助さんが調べてくださっても何かするかもしれないわ」

「お前なあ……」

がつくりと肩を落とし、頭を抱える弥助さん。だつてやつぱり気になるじゃない。何もしないで待っているというのは、辛いわ。勿論、私が何かしたところで何がどうなるわけでも無いとは思っけれど。

「兎に角、お前は家で大人しくしている。分かったな」
念を押す様に言われ、おまけにでこピンされた。い、痛い。何もそんなことしなくても。

結局これといった情報を掴むことは出来ないまま、私は店を出た。とりあえず美味しいお茶を飲み、美味しいお菓子を食べたお陰で憂鬱な気分が少しだけ飛んで、ほっとした。

それでも、もやもやした感じは消えない。私は空を見上げる。人の憂鬱な気持ちを吸収して、ますます暗く重くなっている様だった。嘆きの涙の様な雨が降り注ぎ、世界中を黒く染めていく。雨はもやもやした気分を流してはくれない。

一体この雨に隠されている物語はどんなものなのだろうか。

それを考えながら、私は家へと帰っていった。

* 第三者の語り

『桜(SAKURA)』での仕事を終え、秋太郎から夕飯をご馳走になった弥助は、桜山へ行った。すっかり暗くなり、明かりの殆ど無いこの辺りは真っ暗だ。雨は相変わらず降り続けている。

さくらに「調べる」と言った以上、何かしらやらなければならぬと弥助は思った。出雲と違い、彼はお人よし。そして約束は余程のことが無い限りは破らない。言ったからには、やる。

(調べると言ったはいいものの、はて、どうしようか)

妖怪であるから、夜目は利く。体力は無駄に有り余っているから一日中桜山を探したって別に問題は無い。この雨が降り出すようになった辺りから感じる様になった力。感知能力に乏しい自分でさえ感じることは出来るのだから、されなりに強い力を持った存在であることは確かだ。この雨に関係している可能性は十分高い。

しかし桜山中を適当にただひたすらにぐるぐる回って探すというのは、非効率的だ。ちゃんとそういったものを感知する力のある者なら、そんな面倒なことをする必要は無い。力のより強い方向へ進んでいけばいずれその力の持ち主へと辿り着く。

(こういう時困るよなあ、霊的な力が殆ど無いっていうのは)

頭を搔く。普通の人間にちよつと毛が生えた位の……雀の涙程度の力しか彼は持っていないのだ。

別段、そんなものが無くても普段はこれといって問題は無い。

しかしこういう時は、矢張り。

(参ったな。しかしまあ、あつしには馬鹿みたいな体力がある。こっとなつたらやけど、この山中歩き回って探し出してやる。……結界の様なものを張っていたら終わりだが)

傘を持つ手に力が入る。思いつきり深呼吸をする。やってやろうじゃないか、あつしだって妖怪だ。本気を出せばどうにかなるさ、と自分に言い聞かせる。

そうして山の中へ足を踏み入れようとした時のことだった。

「お前さんも、この雨が気になるのかね」
誰かに声をかけられ、弥助は振り返る。

そこに立っていたのは、爺さんと少女だった。
爺さんの方は小柄で、なえ えぼし菱烏帽子に直垂姿。あごには立派なひげ。見た目は平安時代の庶民といった感じ。手に立派な杖を持っている。隣にいる少女の方は見た目十二、三位。おかつば頭に、無地の赤い着物。日本人形をそのまま大きくした様な感じだ。

二人共、赤い和傘をさしていて、弥助をじつと見つめている。
見た目は人間だ。だが、まあ恐らく人間では無いだろう。流石の弥助にも彼らが人間ではなく自分と同類の存在であることは一目見て理解できた。

「あんた達は？」
誰なのか、と弥助は問う。

「儂の名前はえいたつ栄達。こちらの娘は、あんじゅ安寿という。
安寿というらしい娘が会釈する。

「あつしの名前は弥助っす。見たことの無い顔だが、一体何でここに？」

「お前さんと同じく、この雨が気になってな。いや、正確にいうと気にしているのは儂等ではなく、我らが主なのだ。儂等は美吉山の者。あちらの世界ではなく、こちらの世界で暮らしておる」

そういつて栄達は、美吉山のある舞花市の方を指差した。別にこちら側で暮らしているのは弥助のみでは無い。こちらに住み着いている「向こう側の世界」の住人は割と多い。だが弥助のように人間として、人間と深く関わりあいながら生きる者はそう多く無い。恐らく彼らは、弥助と違って、人とは距離を置き山の中で静かにひっそりと暮らしているのだろう。

「美吉山のある辺りではこの雨は降っていない。だから儂等にとつてはあまり関係の無いことなのだ。まあちよつと様子を見に、な」
そうだったのか、と弥助は頷く。そして自分はこちらの世界で人間として暮らしていることや、この雨に興味を抱いている人間の娘に代わって色々調べようと思っっていることを話した。

「まあ、問題はあつしの感知能力が限りなく皆無に近いということなんです。これから山中探し回つてやろうと思つていたところつす」

栄達はこの山を隅々まで？見つかるまで探すつもりなのか？と言つて目を丸くした。何と無謀な、馬鹿じゃないのかと思つているに違いない。言っている弥助自身、馬鹿みただと思つているのだから。弥助はもう乾いた笑いで返すしか無い。

ずつと黙つていた安寿が、栄達の袖をぐいぐいと引っ張る。

「爺様。あのことをこの人に教えてあげたら？」

出雲が可愛がつている化け猫の鈴並に小さいが、彼女同様可愛らしい声だ。

栄達はそつだなあと言つて頷く。

「あのこと？」

「この町は兎に角、あちらの世界の者がうじゃうじゃ居すぎる。あ

ちこちから仲間の気配がする。しかし……」

「しかし？」

「今この桜山から感じる強い力の気配と全く同じものを、ここから離れたどこから、微かに感じるのだ。本当に微かなもののだが、もしかしたら今回の事と関係あるのかもしれない」

「それは本当か！？」

弥助は大きな声を上げる。それが本当だとすれば。その気配のある所で何か掴めるかもしれない。

栄達は大きく頷く。

「本当じゃ。嘘を吐いてどうする。まあ、今にも消えそうな位だが、儂と安寿は、お前さんとは正反対で、戦う力を殆ど持たぬ代わりにこういうを感じる力には優れておるのだ」

「頼む、桜山と同じ力の気配がするという場所がどこにあるのか教えてくれ。情けない話だが、あつしにはさっぱり分からないんだ」

弥助は心からお願ひした。小さな手がかり一つも逃したくは無い。さっさとこの一件を解決したいのだ。

栄達と安寿は顔を見合わせる。

「まあ、困っている者を捨て置いたなどということを知ったら、姫様がどうして見捨てたのだとお怒りになるだろうし……。儂等としても、このまま放っておくというのは、なあ。まあいい、分かった。それならば安寿、儂の代わりに彼を案内しておあげなさい。儂は足が遅いし体力も無い。お前の方がまだしもましだろう」

安寿はこくりと頷く。弥助の顔がぱあつと輝く。

「ありがとう、恩にきるよ」

「礼には及ばないさ」

栄達は、かっかつかと笑う。そうして、弥助と安寿を見送った。彼は一足先に自分の住む山へ帰るようだ。

安寿と弥助は、ゆっくりと歩き始める。感じる力の気配は、ほんの微かなものだから、いくらそれを感知する能力に優れる安寿でもそう容易に辿ることは出来ないのだ。

二人は桜山を離れ、町中へとやって来た。月も星も雲に隠れている。明かりといえば、ぼつぼつとある電灯と、家からもれる明かりのみだ。決して明るく無いが、妖である二人にはあまり関係無い。

こんなところを誰かに見られたら、幼い女の子を夜中連れまわしている怪しいおじさんだと思われるしまうだろうかと内心不安になる弥助だったが、雨の中を歩く物好きは殆どおらず、二人は歩く間誰ともすれ違わなかった。

ずつつと無言で歩いているというのは何だか辛いから、弥助は途中安寿に何度か話しかけた。安寿は特にそれを鬱陶しく思うわけもなく、淡々とだが、きちんと答えてくれた、これが鈴だったら、全力で無視していることだろう。

「安寿、お前さんは今回のことどう思っている」

「分からない。……ただ、桜山やこの雨から感じる力は決して弱く無い。むしろ、強い。そこら辺にごろごろ居るようなのが悪戯で降らせているとは思えない。何らかの意図があって、降らせているのだと思う……。この雨は、少し触れるだけで何だかぴりぴりする。誰かを攻撃しているような、そんな感じが、する」

「そうか……」

弥助には、そこまでは分からない。試しに雨に触れてみるが何も感じない。

そのまま二人は、町中を行ったり来たりしていた。強い力を持った何かが降らせているらしい雨は、少しも止む気配を見せない。

桜町商店街も過ぎ、どちらかというとき安寿達の住む美吉山のある舞花市に近い所まで来た。大分気配のする方に近づいてきた、と安寿は言う。

「意外と美吉山に近い方からしていたのね、この気配。桜山に行くまではあまり意識していなかったから、気がつかなかった」

そしてそれから間もなくのことだった。

安寿は一軒の家の前で、ぴたっと立ち止まった。

「どっした？」

「……」

「え？」

「間違いない。……この家から、桜山で感じた気配と同じものを、感じる」

弥助は目の前の家を見る。

何の変哲も無い、普通の二階建ての家。これといって説明する部分も無い。
だが。

弥助はその家を眺めるうち、あることを思い出し「あ」と声を上げた。慌てて、堀に取り付けられている表札を見る。

そして、頭を抱えた。あと少しで大声で叫ぶところだった。

「どうしたの？」

「嘘だろう……くそ、どうも見覚えのある家だと思ったら！」
表札には「臼井」と書かれていた。

そう、そこは臼井さくらの住む家だった。

「あの馬鹿娘、一体何をしゃがったんだ!？」

大声を出す訳にはいかず、手で口を抑えながら弥助は呻く。

臼井家は三大家族。父と母と、さくらだ。だから何かをしたのがさくらであるとは限らないのだが……しかし一番何かやらかしそんな人間は、さくらだ。

「知り合いの家？」

安寿が首を傾げる。

「まあな。……ああ、安寿有難うな。かなり助かった」

「どういたしまして。でも私に出来るのは道案内だけ。ここからは、貴方の力でどうにかして。……頑張ってね」

それだけ言って、安寿はその場から立ち去る。

真っ赤な着物は闇に溶け、あっという間に消える。弥助はさくらの家を見た。

(明日、さくらに聞いてみるか)

弥助は頭を抱えながら、自分の住むアパートに向かって歩いていった。

さくら以上に、もやもやとしたものを胸に抱きながら……。

第二十九話：雨唄（2）

*さくらの語り

次の日の朝。原稿用紙とにらめっこしていた私を、母さんが呼んだ。部屋から出て階段を下りる。

「さくら、弥助さんから電話よ」

「弥助さんから？」

今日はお店が定休日だから、弥助さんも家に居るのだろう。それにしても弥助さんから電話が来るなんて、珍しい。もしかしてこの雨のことに關して何か分かったのかしら。母さんは、本当仲がいいわねえ貴方達と言いながら受話器を私に渡し、その場を離れる。

「もしもし、今代わりました」

「あなた一体何をしたっすか」

「え？」

開口一番、弥助さんは妙なことを言う。聞き返す私にもう一度弥助さんは同じことを言った。

「何のことですか？」

何が何だか訳が分からず、頭が真っ白になる。

そんな私に、弥助さんは昨日あったことを話してくれた。何でもお店が閉まった後桜山を弥助さんは調べようとしたらしい。そこで二人の妖と出会った。

二人は桜山から感じるものと同じ力を、山から離れた場所で微か

に感じると言ったという。弥助さんは二人にお願いして、その力を
感じる場所まで案内してもらったらしい。

そして行き着いた先は……。

「あんたの家だった。そして臼井一家の中で、こういう妙な事を起
こしそうな奴と言えば……あんた位しか居ない」

つまりこの雨が降り始めたきっかけは私にある可能性が高いとい
うことだ。私が？どういうこと？

「あんた変なお呪いをやったり、何か買ったり貰ったりしなかった
か？ あんた自身には雨を降らす力は無い。実際雨を降らせている
のはあんたじゃ無く、別の誰かだ。ところがその雨を降らせてい
るだろう人物の持つ力の波動と同じものが、そこにある。というこ
とはあんたが何かをその家で呼んだか、もしくはあんたがこの家か
ら解き放ってしまったということになる」

解き放った？私が？

私は雨が降り出す前辺りに買った物を色々思い浮かべた。新刊の
書籍、お菓子、シャープペンシル……箱……あ。

私は小さな声をあげた。弥助さんがそれにすかさず反応する。

「何かあるっすか？」

「箱。箱を買いました」

「箱？」

「ええ。雨が降り始める少し前に……」

「詳しいことは後で聞く。秋太郎の家に来てくれないか？ 丁度秋太郎に用事があったな。ついでにあの家で詳しい話を聞く。秋太郎にはあつしから言っておくから」

「え、あ、はい。それではその箱も持っていけます」

頼んだぞ、と言って弥助さんは電話を切った。私は受話器を置くとすぐ二階へ上がる。そして自分の部屋に戻って、机の上の箱を手に取った。昨日開けたり閉めたりを繰り返していたあの箱だ。

何も入っていないかった……そう思っていた箱。でもこの箱には何かが入っていたのかもしれない。

あのおばあさんが言った通りに。

私はお母さんに一言告げて、おじいちゃんの家へ向かった。

雨は降り続けている。止む気配は、しない。

*

おじいちゃんの家に行くと、居間に弥助さんとおじいちゃんが座っていた。二人共お茶を飲みながらくつろいでいた。おじいちゃんには私にお茶を出してくれた。おじいちゃんの淹れる緑茶は、美味しい。勿論コーヒーや紅茶も。

「こんにちは」

「悪いっすねえ、わざわざ雨の中来てもらって。それで早速なんだが」

「あ、はい」

私はカバンからあの箱を取り出す。

かなり昔に作られたらしい木製の箱。蓋や側面には幾何学的模様が彫られている。またそれが見事な出来で（あくまで素人目で、ということだけけど）目を奪われる。可愛らしいというより、落ち着いた、大人っぽい雰囲気醸しだしている箱だ。中はこれといって特徴は無い。

弥助さんはその箱を手に取り、くるくる回しながらじつくりとそれを眺める。こんこんと叩いてみたり、顔を近づけてみたり、色々やりながら。

けれどしばらくすると弥助さんはため息をつき、その箱を置いた。

「駄目だ。やつぱりあつしには分からない。ものすごく古い箱ということ以外何も。さくら、これ一体どこで買ったんだ？」

「先日あった、なのはな市いちです」

「なのはな市？ ああ、あれか……。一体どういう人から、どういう経緯で買ったのかなるべく詳しく教えてくれ」

「はい」

私は、あの日のことを思い出しながら、弥助さんに語る。

*

なのはな市というのは、毎年二回程、舞花市にある舞花公園で行われるフリーマーケットのことだ。

木々に囲まれた、広い公園。そこで古本や古着、古道具、アクセサリー、おもちゃ等が売られる。一般人だけでなく、地元の古本屋さん等も参加する。屋台も幾つか並ぶ。

私は公園をぐるりと回りながら、古本や、昔遊んだようなおもちゃ、古いお皿や壺等を見、これ懐かしいとかこれ面白いわね、これ

は綺麗とかそんなことを思っていた。その日もとても暑くて、屋台でラムネを買って飲む。

普段は静かな時間の流れる公園が、今日はとても賑やかで、いつもは無いお店が並び、いつもは売っていないラムネがある。何だか不思議な気持ちになる。まるで異世界へ迷い込んでしまったかのような……そんな、感じ。

公園の外れまで来た時、私は一つのお店の前で立ち止まった。

大きな木の下にあり、その木の影に包まれていて、ちょっと暗い。見えない訳ではないけれど、あまり目立ってはいない。他の場所に比べれば涼しくていいかもしれないけれど……。それにお店があるのは見えるのだけれど、売っている人がよく見えない。

ちょっと気になって私はそのお店へと向かった。

青いビニールシートの上に、ピンクの布をかぶせたテーブルがある。よく見ると、段ボールの様な箱を二つほど横にくっつけただけの簡素な物であることが分かる。

そのテーブルの上に並んでいるのは、髪飾りやペンダントといったアクセサリー類のもの。その他にはお手玉や万華鏡、よく分からない形をした置物、蝶の標本……おしゃれなものもあれば、何に使うのか、本当に売り物なのかよく分からないものも置いてある。値札も無い。

そのテーブルの後ろに座っているのは、おばあさんだった。かなり小柄で、幼稚園児位の背丈しか無い。この暑い中、黒いローブを着ていて、頭からすっぽりとフードをかぶっている。この背丈で、この服を着ているから、余計目立たないのだろう。

フードから、細い目が微かに覗いている。おばあさんは顔を上げ、こちらをじっと見つめた。

「あんだ、物語を読んだり書いたりするのが好きだろう」

「え？」

小さくてしわがれた声。それでいて、不思議とはつきりと聞こえた。

確かに私は本を読むことも小説を自分で書くことも好きだけれど、どうしてそんなことが分かるのだろう。不思議だわ。

おばあさん占い師なのかしら。確かに着ている服、雰囲気等は私の中での占い師さんのイメージそのものといった感じだけれど。それにしても名前も生年月日も何も聞かず、顔を見ただけで分かってしまうなんて。このおばあさん、只者では無いのかもしれないわ。

「おばあさん、分かるの？」

「分かるさ。わしにはね。お前さんの好きな食べ物だって分かるよ。手毬寿司だろう？ 散らし寿司も握り寿司も好きだが、それが一番好き」

「あ、合っているわ……」

私は自分の好きな食べ物まで当てられて、驚く。手毬寿司なんて当てずっぽうで出てくる様なものではない。顔を見るだけで好きな食べ物まで分かってしまうなんて、本当、只者では無いわ。不思議な力を持っているのか、そもそも人間では無いのか。

私の驚いた顔を見て、おばあさんがふえっふえっふえっと笑う。

「幻想物語を好み、幻想物語を紙の上に紡ぐ。筆を走らせ、自分の思い描いた物語を動かす続ける。自分で物語を動かすことに喜びを感じているのだろう、お前さんは」

それもその通りだ。

物語を動かす。この世界の何かを動かすほど大きな力は無いけれど、頭の中や紙の上でなら私の手で、私だけの物語を動かし続けることが出来る。自分が動かさなければ、動かない物語。私だけが動かすことの出来る物語……。どきどきわくわくしたり、苦しんだり悩んだり、投げ出したくなったりしながら物語を動かしていくことが、一番楽しい。

おばあさんは私が何を今考えているのか分かっているのか、うんうんとゆっくり頷いた。

「物語を動かしたいかい？」

「え？」

「その手で止まってしまった物語を進めたいかい？」

「止まってしまった物語？」

何のことだろう。私は首を傾げる。誰かが途中まで書いたけれど、結局続けられなくて投げ出してしまった小説とかかしら。

おばあさんはこちらを真っ直ぐ見つめている。不思議とその瞳から目を逸らすことが出来ない。何か大きな力に引きつけられている感じがする。ああ、この小さな体のどこにこれほどまでに強い力が隠されているというのだろうか。

止まってしまった物語。それが何なのか、とても気になる。不思議な言葉は呪文となって、私をどきどきさせた。

気づけば私はその首を縦に振っていた。おばあさんは満足気にたつと笑う。

「それならば、これなんかどうだい」

おばあさんの背中に行李が置いてあった。あれを持って、旅でも

しているのだろうか。おばあさんはゆっくりとこちらに背を向け、がさごそと行李の中を漁り始めた。

しばらくしてまたゆっくり体を動かし、私を見た。手に何かを持っている。

おばあさんは手に持ったそれを、テーブルの上にことんと置いた。

それが、あの箱だ。

「お前さんに、止まってしまった物語を一つ、あげよう。どうやって止まっていた物語を動かすのかって？ 簡単なことさ。文章を書いたり、文章を目で追ったりするよりも簡単だ」

こんこん、とおばあさんはその箱を叩く。

「ただ、開けるだけでいい。それだけで、物語は動き出す」

「開けるだけ？」

「そう、開けるだけさ。苦労しながら動かしていく物語も面白いだろうが、ただ蓋を開けるだけで動き始める物語っていうのもなかなか良いと思うよ。ほんの少しのきっかけで、動くはずの無いと思っていたものが、動き出すことはよくあることさ。何の力も無いから何も動かすことが出来ないなんて、そんなの大間違いだよ。長生きしているわしが言っているのだ、間違いないさ」

ほんの些細なことで、物語は動き出す。

目の前の箱を開けるだけで、一つの物語は再び動き始める。

「止まってしまった物語。お前さんが、動かすのさ……。さあ、どうする？」

フードから覗くその瞳は、一つの答えしか求めていない。それ以

外の答えが存在することを許さないような。

物語の入った箱。どこにでもいるような人にそんなことを言われれば、流石の私も信じないかもしれない。けれど、この目の前にいるおばあさんが嘘を吐いているように思えなかった。一目見ただけでその人物のことを正確に言い当てるような人が言うのだから、本当なのだろうと、思った。

「その箱……お幾らですか」

「安くしておくよ。どの店のも安いみたいだしね」

そう言っておばあさんが口にした値段は、とても安いものだった。その値段だったら、例えこの箱の中に何も入っていなかったとしても、損はしない。小物入れにはぴったりな大きさだ。使い道が無くて困るような代物では決して無い。

おばあさんは私が答えを言う前に、全てを理解したようだった。小さな手でそれを優しく包み込み、私に差し出した。

私はおばあさんから箱を受け取り、お金を渡した。

「おばあさん、おばあさんは一体何者なの？」

きつと答えてくれることは無いと思いつながら、訪ねた。

おばあさんは幾度目かの笑みを浮かべた。

「只の旅商人さね」

そうですか、と私は笑みを返しておばあさんに手を振りながら、その場を立ち去った。

もう二度と会うことは無いかもしれない……ううん、もしかしたらまたこのなのはな市で会えるかもしれない。

不思議なおばあさんとの出会いを嬉しく思いながら、私は家へと帰っていった……。

*

ここで、回想は終わり。私はなのはな市での出来事を弥助さんとおじいちゃんに話し終えた。何故か弥助さんは頭を抱えている。何だか私とお話している時、しょっちゅう頭を抱えているのよね弥助さんって。

「普通そんな怪しげな婆さんから物を買うか……？　　というか信じ
るか、そんな話」

「だって、不思議なおばあさんだったんですもの。普通の人間では
無いっていうオーラみたいなものを感じたわ。弥助さんからは全く
感じないものを」

「悪かったな、妖怪っぽくなくって」
口を尖らせ、いじける。こういう子供っぽい仕草もよく見せる。

「しかし幾ら不思議な婆さんだったとはいえ……はあ、あんた将来
詐欺師とかに騙されて胡散臭い物を買わされるぜ、絶対」

失礼な。幾ら私でもそんなことは無いわ。おばあさん並に不思議
な雰囲気醸しだしているか、不思議な力をこの目で見るとか、そ
ういうことが無い限りは。

「それで、その箱を開けたんだな」

「開けました」

「中には何か入っていたのか？」

「いいえ。多分、入っていなかったと思います」

「多分？」

「箱を開けた瞬間、お母さんに呼ばれてそちらを振り返ってしまっ
たんです。その時、何か光った様な気はしましたが……。その後、
箱を見ましたが何も入っていませんでした」

正直、がっかりはした。けれどこの箱を開けるまでの間のどんな
物語が入っているのだろうかと色々想像を膨らませる時間はとても
幸せなものだった。この箱はそんな短くも楽しい時間を私に与えて
くれたのだ。だからそれで十分だと思った。

そう思っていた。

「だが、実際には何かが入っていたっていう可能性が高いつて訳か
まあとりあえずこの箱はあつしが預かるっすよ。あつしには分から
ないが、他の奴らだったら何かを感じるかもしれないし」

私は頷く。断る理由は無。私だってこの箱に何が……。どんな物
語が詰まっていたのか、知りたいのだ。しかし私には調べる方法は
無い。けれど弥助さんなら、何かしら掴んでくれるに違いない。

「まあ何か分かったらまた連絡するっすよ。箱もその時に」

「分かりました」

あの箱の中に入っていた物語は、一体どんなものだったのだろう。
何も入っていないかったことを知ってからは考えることをやめてい
た。けれど何かが入っていた可能性が高いことを知った今、再び私
はこの箱の中に入っていたものがどんなものだったのか、想像を膨
らませ始めた。

その思いは……。この雨がもたらす憂鬱な何かから心を守る結界に
なるかもしれない。

* 第三者の語り

さくらから箱を預かった弥助は居酒屋「鬼灯」に居た。それは『こちら側の世界』でいうお化け通りのある場所に存在する居酒屋だ。

客は弥助の他には天狗の鞍馬と、出雲のみ。弥助は早速さくらから預かった箱を、鬼灯の主人に見せてみた。鬼灯の主人は牛筋の煮込みがたっぷり入った鍋をかき回しながら、もう片方の手でその箱を持ち、じつと見る。鞍馬の方もその箱に興味があるのか、爽やかな酸味が何とも言えないタコときゅうりの酢の物を口にしながら鬼灯の主人が持つているそれを見ている。

出雲は、弥助の持つて来た物になど興味は無いと言わんばかりに知らん振りしており、一人黙々といなり寿司を食べていた。弥助も最初から出雲に助けを求めようとは思っていない。嫌いな奴に頭を下げるなんてまっぴらごめんだ。無視してくれるのが一番。

「見た目は普通の箱だね。まあ随分古い物の様だが……けれど、つい最近まで何かが入っていたことは確かなようだ。微かだが、力を感じる」

鬼灯の主人は箱を弥助に返しながら言う。

「持っただけで分かるっすか。あっしには全然分からなかった」

「普通は分かるものだよ。お前が鈍すぎるんだ」

出雲は話を全く聞いていないようで聞いている。そして嫌味だけはきっちりと言う。

「じゃああなたには分かるのか！」

「お前に答える必要は無いよ。大声を出すな、折角の食べ物不味

くなる」

自分からふっかけておいて、これだ。出雲はそれだけ言うともた
いなり寿司を口にする。弥助はいっその箱を思いっきり投げてそ
の頭にぶつけてやるうかと思っただ。しかし今は、出雲に構っている
場合ではない。兎に角鬼灯の主人から少しでも情報を得たい。

「他に何か分かったことは？」

「そうだな……。この箱に入って居たのはどうやら一人では無く、
二人だったようだね」

「二人？」

「二つの異なる力の波長を感じるんだ。それぞれ性質が大分違っか
ら、恐らく二人で間違いないだろう」

そこまで分かるのか、と弥助は驚いた。栄達と安寿はもう一つの
力の波長に関しては何も言っていなかった。二人共気がついていな
かったのだろうか。いや、気がついてはいたがあの時重要だったの
は「桜山から感じるものと同じ力の気配を別の場所を感じる」とい
うことだったから、あえてもう一つの力の波長については口に出さ
なかったのかもしれない。彼らにそこまで親切に教える義理は無い
のだから。

「我にもその箱を貸せ」

酒を一口飲み、鞍馬が手を差し出す。弥助は箱を今度は鞍馬に渡
す。鬼灯の主人と同じ様になるくる回しながら、調べる。

「ふむ、確かに鬼灯の主人の言う通りだ。一つは穏やかで優しいも
のだが……。もう一つは冷たく、邪悪なものだ」

そう言われても弥助は箱から何も感じない。優しいものも邪悪な

ものも。まあ出雲と違って、二人はこういう場面で大嘘を吐くことは殆ど無い（はずだ）から信用して良いだろう。

「二人共箱の中に入っていたということはほぼ確実ですか？ 力の一つは封じ込めた人のもので、実際に中には入っていなかったというのは有り得ないんですか」

「全く有り得ないという訳では無いが。ただ、箱の中に入っていた可能性の方が高いと思う。力はどちらも箱の中から感じるからね。一方の力を箱の外から、もう一方を中から感じたというのなら別だけれど」

「そうっすか……しかしどちらにせよ、邪悪な力を持った何かを外に解き放たれてしまった可能性が高いということか」

「まあ、そういうことになるかな。しかし桜山に居るらしい雨を降らせている人物というのが、邪悪な者の方なのか違う方なのかまでは分からない。桜山まで足を運べばどちらがどちらなのかはつきりするが。だが、私もそこまで手伝う気は無い。悪いがね」

「我也分からんな。我は桜山に住んでいるが、結界を張っているから雨の影響を受けていないし力も感じてはいない。それに我也協力するつもりは無い。後は貴様の力でどうにかするより他無い」

それは弥助の予想した通りの答えだった。彼らにとって、人間の住む「こちら側の世界」がどうなるかと基本的には知ったことでは無い。人間にちよっかいを出すことはあっても、人間を助けることはもう今では殆ど無い。人間に肩入れする弥助の方が変わっているのだ。

まあこの先は自分の力でどうにかするしか無いのだろう。どうにか出来ればいいのだが……。

まあ今日のところはこれ位にして、鬼灯の主人の作る美味しい料理をゆつくり楽しむことにしよう。弥助はそう思い、主人に料理を頼もうとした。

がらり。

弥助が口を開こうとした丁度その時、入り口から音がした。誰かが扉を開けたのだろう。誰が入ってきたのだろうと弥助は後ろを振り返る。

しかし、そこには誰も居なかった。透明人間でも入ってきたのだろうかと首を傾げながら視線を下の方に移す。

無人では無かった。誰かが立っている。初めて見た顔だ。

随分と小柄な老婆で、幼稚園児とほぼ同じ位の背丈しか無い。自分の体と殆ど変わらない、いやむしろそれ以上の大きさの行李を背負っている。

紫色のローブを着ており、フードを深く被っている。この暑い季節には似つかわしく無い格好だ。季節が夏以外だったとしても、異様である。水晶玉を手に持たせれば、完璧占い師の婆さんだ。

ちらつと見える目はえらく小さく細長い。対して、口は大きい。

「ここは一見さんでも歓迎してくれるかね」

えらくしわがれた声だったが、何を言っているかははっきりと分かる。

「勿論、大歓迎ですよ」

「そうかい、それは良かった」

老婆は意外としつかりした足取りで歩き、椅子の前まで来る。そして背負っていた行李をカウンターの下に置く。弥助は老婆を抱え、老婆の背丈より高い椅子に座らせてやる。

「すまないねえ。全くちびすけっていうのは便利な時と酷く不便な時があるから困る」

「あつしみたいに図体がでかい奴らも同じっすよ。婆さんは旅商人か何かか」

「まあ、そんなもんさね。こちらとあちらを行ったり来たり……気ままに旅をしながら色々売っている」

鬼灯の主人が老婆に酒を差し出す。婆さんはにんまりと笑いながら、うししししと奇妙な笑い声をあげる。

「酒はいいねえ、やめられない」

言って、酒を水のように飲み始める。豪快に飲んだ後口を手で拭う。弥助がひゅっつと口笛を吹く。

老婆は笑いながら隣に座っている弥助を見た。その後、弥助の手元にある箱を見、おや？と声をあげた。

「どうしたっすか？」

「その箱……わしがこの前人間の娘っ子に売った箱と似ている。いや、似ているのではない、同じ物か？」

老婆は首を傾げる。弥助はえ！と叫び、口を大きく開けてぽかんとした。さくらの話を思い出す。確かにさくらの話に出てきた老婆と外見の特徴は一致している。

「それじゃあ、さくらにこの箱を売った婆さんっていうのはあんだのことだったのか！」

「何だ、あの娘っ子と知り合いだったのかい」

老婆は鬼灯の主人が出してくれた、甘くて少し香ばしい匂いのするタレをたっぷりつけた焼き鳥を大口開いてぱくり一口で食べる。しかも三串同時に。

弥助はその豪快さに呆気にとられつつも話を続ける。まさか箱を売りつけた当人と会えるとは。この上ない幸運。この好機を逃してはならない。

「婆さん、一体この箱には何が入っていたんだ!？」

顔を老婆に近づけ、問い質す。興奮しているせいか声も大きくなる。出雲がうるさいなあと言わんばかりに弥助を睨んでいるが、弥助は気づいていない。

老婆は少しもひるむ様子は無く、表情も変えずにもぐもぐ食べていた焼き鳥をごくろり一口で飲み込んだ。

「まあまあそんなに興奮しなさんな。顔が近いよ、暑苦しい」
弥助はそう言われて、一応顔を離す。

「わしも詳しいことは。あの箱には、かつて桜村に居たという鬼とそいつを封じた精霊が入って居たらしいということ位しか分らん。最初は精霊も鬼を殺そうとしたのでは無いかのかねえ。だが鬼の力は強すぎて、殺すことは出来なかった。鬼を封印し、共に眠るのが精一杯だったのだろうさ。決着はつかず、物語ははつきりしっかりかつきり終ることは無いまま、誰にも知られることなく眠り続けていた」

「それを、あの馬鹿が……」

「物語は再び動き始めたようじゃ。あの娘っ子が箱を開けたことによつてな。この後どうなるのかは、わしにも分らない。わしは世界中で集めた商品を、人に売るだけのただの旅商人なのだから」

言つて、老婆は冷奴を酒と同じくまるで水を飲むかのようにちゅるんと吸つて一口で食べてしまった。弥助としてはそんな無責任な……と思つのだが、結局の所悪いのはこんな胡散臭い婆さんの売つているものを買つてしまつたさくらなのだ。老婆は道を示しただけ。その道を歩いたのは他ならぬ彼女自身なのだ。それにこの老婆を責めたところで事態が良くなる訳でも無い。

「婆さんは、見た人の性格等を見抜く力があるようだが、こういう箱とかを見た場合は何か分らないっすか」

「わしが見て何かを感じるの、生き物のみじゃ」

「そうか……」

弥助はうなだれる。

「まあ鬼が解き放たれてしまったことは確かだろうが、同時にそれを封じた精霊とやらも目覚めたはず。いずれはこの物語も終焉を迎えるじゃろっ」

と老婆は言う。しかし物語は進んでいるのかいないのか、さつぱり分からない状態だ。確かにさくらが止まっていた物語を再び動かした。だがその後はどうだろう……？ 物語は動き続けているのか？ 未だ分からないことだらけだ。

「弥助とやら。わしは辛気臭い話をする為にここに来たのでは無い。上手い飯と酒をいただきに来たのだよ。そつという話はこの辺で終わりにして、大いに食い、飲もうじゃないか」

老婆は大きな口の端をぐいっと上げて笑う。弥助は肩をすくめた。確かにその通りだ。彼としても、こんな面倒な話をしているよりも、飲んだり食べたりすることの方が好きだ。

とりあえず明日、さくらに今夜分かったことを話すことにして。

「そうだな、婆さん、今夜は飲み明かそうぜ」

「そうこなくつちなあ」

「我も付き合つぞ」

鞍馬もにやつと笑う。弥助も笑う。

ただ出雲だけが、そんな様子を冷ややかに見つめていた。

店の明かりは、朝まで消えることは無かった。

第三十話：雨唄（3）

*さくらの語り

私は、弥助さんが昨日の夜に掴んだ情報を色々と聞いていた。何でも弥助さんは私に箱を売ったあの不思議なおばあさんと（偶然）会い、直接話を聞いたという。

箱の中に眠っていたのは、一人の精霊と、鬼。矢張り私はとんでもないものを解き放ってしまったらしい。鬼ってやっぱり、あの体が赤くて頭に角が生えているあれかしら。それともそんな昔話に出てくるような鬼とはまた違うのだろうか。

弥助さん曰く、全ての鬼が悪さをする訳では無いという。大人しく滅多に人を襲わない鬼も、逆に時と場合によっては人を助ける鬼というのも居るらしい。けれど、精霊が封印したというからには悪さをする鬼だったのだろうか。

そこまでは分かっただらしいけれど、矢張り桜山にいるのが精霊の方なのか鬼の方なのかは弥助さんには分からないらしい。

一体雨を降らせているのはどちらなのだろうか。この雨に何の意味があるのだろうか。

精霊と鬼。私が解き放ってしまった二人は今何をしているのだろうか。

今桜町周辺で起きている大きな事件といえば、この不思議な雨のみだ。誰かが襲われて怪我をしたとか、建物が壊されたとか、何か光っているのを見たとか……そういった類の話は一切聞いていない。

鬼が雨を降らし続けて、様々な災害を起こそうとしているのか。だとしたら何故精霊は鬼を止めようとしていないのか。

精霊が雨を降らし続けて、鬼を封印しようとしているのだろうか。けれど雨を降らせて何かを封印するなんて聞いたことが無い。

二人のうち一人は桜山に居るとして、もう一人はどこに居るのだろうか。まだ桜町周辺に居るのだろうか……。

「力の強い者同士がぶつかり合った時の衝撃というのは大きい。そうなれば流石のあっしも気がつくはずなんだが。だがそんなものは全然感じなかった。精霊か鬼、どちらかが雨を降らせている……それ以外の動きは多分、無い」

「止まっていた物語は再び動き出した。けれど、今は？ 私が動かしした後、また物語は止まってしまったような気がする。ただ雨が降り続けているだけ」

私は窓の外を見た。

人々の憂鬱な気分を吸い取って、ますます空は暗くなったように思える。降っている雨の程度は激しくなったわけでも、弱くなったわけでもなく、約一週間前と全く変わっていない。

「しかしどちらが、何の為に降らせているのかは分からないにしても、このまま降り続ければ、いずれ大きな問題が起きるはずだ。今は奇跡的に何かが起こりたつて話は聞いていないが。雨は全く降らなくてもいけない、降りすぎてもいけない。なるべく早く手を打たないと。色々周りの奴らに話を聞きながら、桜山の方も調べるか……。はあ、あっしにももう少し力があれば良かったんだが。持っているのが馬鹿力じゃあどうにもならん」

「といって深いため息をつく。確かに怪力で人探しは出来ない。聞き込みをしたり、がむしゃらに探し回るしか無い。」

「結局、大した報告は出来なかったが。あっしは頼まれたからには

やるつすよ。とりあえず桜山をぐるつと回るしか無いな。……いいか、さくら。あんたは何もするな。山を探し回ろうとか間違っても考えるんじゃないぞ。危ないからな。ここはあっしに任せておけ、頼りないかもしれないが」

ぼんと弥助さんは自分の胸を叩いた。私は一応頷いた。鬼が居るかもしれない上に、雨が降っているのだ。そんな所に足を踏み入れたら、何が起きるか分からない。それ位は流石の私にも分かる。

けれど……。

「それじゃあ弥助さん、お願いしますね」

「おう。気をつけて帰れよ」

立ち上がった私を弥助さん、そして厨房に居た朝比奈さん、おじいちゃんが見送ってくれた。三人の温かな笑顔は、いつも私を元気にしてくれる。

温かい気持ち。けれどそれもすぐに雨で打ち消されていく。

冷たい氷の刃の様な雨が、傘を突き刺す。手や顔に触れる度痛い位の冷たさを感じる。まるで冬に降る雨の様。冷たくて痛くて……無性に悲しくなる。

「誰が降らせているの……どうしてこんなにも、冷たいの……」

空を見上げ、呟く。灰色で、暗くて、どんより沈んだ色の空。振り続ける雨のため息をつく人々の気持ちを具現化したような色。

或いは。

「この雨を降らせている人の気持ちを表しているのかしら……」

呟いても、答えは返ってこない。雨の音だけが聞こえ続けている。

*

それから、二日経った。

家に帰った後も、色々と考えていた。考えたからって答えが分かる訳では無いけれど。ただ、考えずにはいられなかった。与えられた部品を使って、物語を構築することが好きだから。ただその中に、正解が混ざっているのかどうかは分からない。部分的には合っているものもあるのかもしれない。けれど全てが当たっているとは思えない。

精霊は鬼を倒すことは出来なかった。それは、精霊より鬼の力の方が強かったからなのか、同じ位だったからなのか。ただ力がどうこうというより、血を「穢れ」として嫌ったから、血を流さずに解決する為封印したのだろうか。

そして精霊はどうして鬼と共に箱の中で眠りについたのか。普通は鬼だけを箱に閉じ込めて、封印の術をかけるのだと思うのだけれど。鬼を外へ出さないように、自分も箱の中に入って鬼を抑え続けていたとか？それとも万が一封印が解けた時、すぐにまた封印できるように自分も一緒に中へ？

それにしても精霊は、自分の人生を犠牲にしてまでこの町を守りたかったのだろうか……。

無償の行為だったのか、それとも何か特別な思いがあったのか。

「やっぱり、やっぱり気になるわ！」

私は勢いよく部屋を飛び出し、階段を下りて玄関にある傘を掴んだ。

何も出来ない事位分かっているのに。足が勝手に動いてしまった。

雨に突き刺されながら、私は桜山を目指す。まだお昼だというのに、相変わらず空は暗い。夏なのに少し肌寒い。

水を吸った土やコンクリートの匂い。TVやマイクに入るノイズに似た、雨の音。空に重く沈む雲……。箱に眠っていた物語が終らない限り、この雨はきつと止まない。

桜山は雨をたつぷりと吸い込んで、黒くなっている。木の幹も、葉も、桜山神社に続く階段も。何もかも暗い色をしていて、冷たくて、寂しい。

桜山には何箇所か、上りやすい様に整備された道がある。私は自分がよく使っている道の入り口まで行った。道はどう見てもぬかるんでいる。足を滑らせたなら危ないだろうと思った。それでも……。

「ほんの少し。ほんの少しだけ歩いたら、帰ればいい。ほんの少し、ほんの少しだけ……」

呪文の様にその言葉を呟く。そう、ほんの少しだけ進んですぐに帰ればいい。きっとそれだけで少しは気が済むと思う。弥助さんには申し訳ないけれど、ほんの少しなら……。

私は登山道へ一歩足を踏み入れた。べちゃりという音がした。

「君は」

冷たい言葉の刃が背中を突き刺し、心臓を貫いた。危うく傘の柄から手を離してしまいそうになった。恐ろしい位美しく冷たい声。

後ろを振り返る。

そこに立っていたのは矢張り、出雲さんだった。鈍い色の風景に映える真っ赤な和傘。それに対して出雲さんの体は風景に溶けて消えてしまいそうだった。それでいて、目を離すことが出来ない大きな存在。

魂を持たぬ人形のような表情の出雲さんの両隣には、やた吉君とやた郎君が立っていた。

「君は非力のくせに、進んで物語の渦中に飛び込もうとするんだね。本当に愚かで、愛しい子だ君は。そんなお馬鹿な君に、やた吉とやた朗を貸してあげる。やれるところまでやってみれば？ 少しでも時間をあげるから」

やた吉君とやた郎君が一步前へ出る。

「出雲さんは分かっているんですね。この桜山にいるのが邪悪な鬼なのか、そうでないのかが」

「当然だ。あの馬鹿とは出来が違うんだよ、私は。まあ、何もかもお見通しというわけでは無いけれど」

出雲さんはふと桜山を見つめる。降り続ける雨さえ凍りつかせてしまいそうな瞳で。体の芯から冷えていく。自分の体に温もりがあったかどうかさえ忘れてしまうような時間が流れた。

「さあ、行っておいで」

私はぎこちない動きで首を縦に振る。やた吉君とやた郎君が数歩先に行く。私は一步前へ進む。べちゃっという音。靴を捕らえて離そうとしない粘ついた土。

今なら未だ引き返せる。けれど、私の足は前へ進み続ける。この目で物語の真実を見る事が出来るのなら、私は……。

背中に、出雲さんの視線が突き刺さる。

「まあどうせ何も出来ないだろうけれどね」

出雲さんがそう呟いたことを私は知らない。

* 第三者の語り

一方弥助は『桜(SAKURA)』を出るところだった。本来喫茶店で仕事をしている時間なのだが、秋太郎が「今日もそんなに忙

しくないだろうから、手がかりを探しに行っておいで」と言ったので言葉に甘えてそうさせてもらおうとしていた。

弥助は仕事へ行く前や仕事が終わった後など、幾度か桜山とその周辺を歩き回っていた。しかし何も見つからない。山も大分探したはずなのだが……もしかしたら桜山に居る者は、見つかりにくくする何かしら結界の様なものを張っているのかもしれない。そうだとすれば、かなり見つけるのは困難だ。

どうしようと思って弥助が向かったのは、お化け通り。

ぼろぼろの家の立ち並ぶこの通りに足を踏み入れる者は殆ど居ない。ひとたび足を踏み入れればどんな目に合うか分かったものではないからだ。

幽霊や妖怪が「出る」と噂される場所。

いや、というか実際に「出る」のここは。『こちら側の世界』にあるこのお化け通りの居心地がいい為か、やたら多くの人ならざる者が住んでいる。しかし基本的に普通の人間がこのお化け通りに足を踏み入れても、彼等の姿を見る事は出来ない。彼等が強い意思を持って、意図的に人の前に姿を見せない限り。彼等は『こちら側の世界』の者と関わる気が無いからだ。人間達が自分達の居場所を奪い取るうとしない限りは。

「ここに居る奴らに話を聞いてみるか」

弥助は迷うことなくお化け通りに足を踏み入れる。

昔の匂いを残したままのこの場所。ここに来ると懐かしい気持ちになる。昔、未だこの町が桜村と呼ばれていた頃を思い出す。きつとこの懐かしい匂いが彼等を惹きつけるのだろう。

静かで、柔らかい空気の流れる居心地の良い場所。『こちら側の世界』の住人にとっては不気味で古臭い感じのする場所なのだろう

が。

雨が降ろうと槍が降ろうと、彼等の暮らしは何一つ変わらない。下らない話に花を咲かせたり、朝から酒を飲み続けたり、眠り続け、愉快的な夢を見たり……間延びした時間を、気ままに過ごす。

一際騒がしい家の戸に手をかける。少しでも力を加えればぼろぼろと音を立てて崩れてしまいそうな板切れ。弥助はゆっくりと戸を開けた。

その家の中には十人位の妖がおり、酒を飲み、つまみを口にしてわいわい騒いでいた。天井や壁に空いた穴から雨粒が落ちていて、そこから中水浸しになっているが、彼等は一切気にしない。そういう性質なのだ。

体は人、頭は犬という妖である男が弥助に気づく。

「よう、弥助じゃあないか。どうしたんだい」

口からイカの足がはみ出ている。くちやくちやくと音をたてながら弥助に問う。

「犬^{けん}太、久しぶりっすねえ。いや何実は今この変てこな雨について調べていてさ。何かここら辺で変わったこととか起きていないか？」

「最近ずっと雨が降り続けているなあ」

その雨について調べているのだと言ったのに。どうせ話を適当に聞いていたのだろう。この酔っ払いめと心の中で舌打ちした。

「だからそれは分かっているんだって。あっしが知りたいのは、雨が降り始めるようになった前後に何か変わったことが起きていないかってことだ」

犬太は首を傾げる。しまいにイカを口の中に残したまま眠りこける。本当に蹴飛ばしてやるうかと弥助は震える。

そんな時、犬太の後ろで騒いでいた女がまだ中身の残っている徳利を振り回しながらやって来た。酔っているのか、顔は真っ赤で足はふらふら。髪も着物も乱れ、散々な感じになっている。

「変わったことって言えばさあ、最近ここに変な男が来たわねえ。ほうらあ、犬太、あいつよあいつ」

回らない舌で語る女。犬太がぽんと手を叩く。

「ああ、そういえばそんな奴が居たな。確かにあれはこの雨が降り始めてからすぐのことだった」

「男？」

犬太が頷く。彼の隣でうねうねくねく動いていた大蛇が、けひひひと変てこな笑い声をあげた後、話し始めた。

「なんかよう、見た目は若い人間の男なんだよ。だけどよう、どうも人間では無いようなんだあ。人間からは感じないものを感じたからなあ。けれどよう、何か中身は空っぽな感じでしょう、よく分かるのよ」

その話の続きを、女が語る。

「何かさあ、酷く弱っているようだったよ。ふらふらとここにやって来て、ばたつと倒れちまったのさ。まあ放つて置く訳にはいかず、適当な家まで引きずっていつて寝かせてやったんだけど」

ねえ、と後ろに居る手の長い男に同意を求める。彼女と一緒に男を引きずつたのだろうか。

「んだんだ。……熱とかは出してないんだが、苦しそうに四六時

中唸っているんだ。おまけに『唄うな、唄うな、ああ、誰かこの唄を止めてくれ』とか訳の分からないことを言っているんだ」

「唄？」

「誰も唄なんて唄っていないのにねえ。あたし達には聞こえない何かがあの男には聞こえているのかもしれないけれどさあ。兎に角得体の知れない、気味の悪い奴だよ。結構男前なだけどさあ」
顔をしかめたと思ったら、イケメンらしい男の顔を思い出したのか体をくねくねさせ、そして最後に大きなため息をつく。

よく分からないが、兎に角その男から話を聞きたいと思った。

弥助は、男が今どこに居るのか尋ねる。それじゃああたしが案内してあげると女は言う。

「まあ何だかよく分からないけれど、連れて行ってあげるわ。感謝しなさい？」

「はいはい、恩にきるよ」

「それじゃあ、あたしはちょっと出るからね。あたしが居ない間に、酒を全部飲み干すんじゃないよ」

ぎゃはははと騒ぎながら酒を飲んでいる奴等にそう釘を刺して、女は弥助と共に外へ出る。

男が寝ているらしい家は、そう遠く離れていない場所にあった。他の家と同じく、そこから中穴だらけで壁も屋根も腐っている。崩れていないのが不思議な位だ。

雨の音に混じって、男の呻き声が聞こえる。相当苦しいようで聞いているこちらの息が詰まってしまいそうだ。

「ほら、ここだよ。まだ苦しいみたいだねえ……ああ嫌だ嫌だ、聞いているだけで頭がおかしくなってしまうそうさ。まあ、後は適当にやっておくれよ。さてあたしは飲みなおすしようかねえ」

女は弥助に手を振ると、さっさとその場を去った。確かに気が狂ってしまいそうになる位、激しく苦しく恐ろしい声だ。

弥助は戸に手をかけ、そうっと開ける。ぷんと木の腐った匂いがした。

薄暗い部屋の奥に、男は寝かされていた。下にはぼろぼろのごさが敷かれ、体の上には同じくぼろぼろの着物がかけられている。弥助は玄関を上がり、床の上を歩く。天井から降り注ぐ雨は床を濡らし、一歩進む度にぴちゃぴちゃという音と、床の軋むぎいぎいという音がする。

男は最初弥助に背を向けるようにして寝ていたが、彼に気づいたのかくるつと体の向きを変え、震えながら体をゆっくりと起こす。

確かに見た目は、若い人間の男だ。しかし肌は白を通り越してやや青い。黒くさらさらとした髪に、やや細く吊り上った瞳。腕は細く、少し力を入れれば折れてしまいそうだった。男は荒い息を吐きながら、警戒するように弥助をじっと見つめた。

確かに妖達が言った通り、目の前の男からは空虚を感じる。目の前に居て、それでいて居ない様な……奇妙な感じがするのだ。清浄な気配も、邪悪な気配も感じない。弥助の力が弱いゆえ感じないだけかもしれないが、それにしても妙だった。

「……あんた、この雨のことについて何か知っているのか」

びくり、と男の体が動いた。どうやら何か知っているらしい。

「あっしはこの雨について調べているんだ。どうもこの雨はある箱

の中で眠っていた精霊か鬼、どちらかが降らせているらしいところまでは分かったんだが……あんたは……」

どちらなんだと問おうとした弥助の足を、男が掴んだ。弥助は驚き目を見開く。足を掴む力は弱く、またその手は冷たい。男は息を荒げながら、弥助を見る。

「お願いです、どうか、どうか……彼女を、止めて、下さい」

「やっぱり何か知っているのか、あんたは。教えてくれ、この雨のことを、そしてあんたとその彼女とやらのことを」

弥助はしゃがみ込み、男を座らせてやる。白い衣に水色の袴姿の男は救いを求めるような目を弥助に向けながら、静かに語り始める。泣きそうな、悲痛な声で。

「彼女は……鬼です。私を憎み、村を憎み、世界を憎んだ、鬼なのです」

「この雨を降らせているのは鬼の方だったのか！」

男はこくりと頷く。膝の上に置いている手が震えている。

「しかし彼女は元は人間だったのです。優しい、本当に、優しい娘でした」

それがあんなことになるなんて！そう苦しそくに叫んだ男は、激しく咳をした。弥助は背中をさすってやる。ありがとうございます、と男は礼を言う。

「彼女は人間でした。しかし、普通の人間が持たぬ力を持っていた。人の傷を癒したり、雨を呼んだり、邪悪な者を滅ぼしたりする力を」

「巫女のような力を持っていたのか……」

「ええ、そうです。しかし彼女はその力のことを自慢したり、無闇に使ったりすることは無く、余程のことが無い限りその力を揮うことはありませんでした。普通の人間にとっては脅威とも呼べる力を持ちながら、その心優しい性格ゆえ、皆から愛されていました」

あの馬鹿狐とは正反対だな、と弥助は思った。あれは力を揮って人々を恐怖のどん底へ陥れる、冷たくて人が苦しむ様を見て大喜びするような奴だ。

しかしそんな優しい娘が、何故。

男は話を続ける。

「彼女は幸せに暮らしていました。しかしその幸せは一人の女によって、滅茶苦茶にされてしまうのです」

「女？」

「……村に住む、巫女です。村を導く、不思議な力を持つ一族の弥助は頷いた。いつの頃からか村に存在していた霊的な力を持つ一族。その一族の女は巫女となり、村を良い方向へ導く。ある意味村長以上の権力を持っているのだ。出雲に喰われた哀れな巫女、桜もその一族の女だった。」

「その巫女も例外無く力を持っていました。しかし、巫女より彼女の力の方が勝っていたのです。勿論だからといって彼女はその巫女を見下すようなことはありませんでしたし、他の村人と同じ様に巫女を尊敬していました」

それなのに……と男は胸の辺りを掴みながら、苦しそうに呻いた。

「巫女は、心弱き女性だった。巫女は彼女の力に嫉妬し、また恐れ

ました。彼女は自分以上に好かれている。いつか自分の権威を彼女に奪われるのではないか……そんなことを思っていたようです。巫女は彼女を憎み、妬み……」

咳きこみながら男は話を続ける。

「巫女は、村人達の前でこう告げたのです。『あの女はこの村に災いをもたらす。彼女に心を許してはならない、愛してはいけない、彼女は忌むべき存在なのだ』と」

男は手で顔を覆いながら、呻き、震える。

自らの権威を保つ為、嘘を真の様に語った巫女。何と醜く、弱い女だろうと弥助は思った。

しかし巫女の言葉は絶対。村人達は巫女の言うことを鵜呑みにしたのだろう。

そして……。

「彼女の幸せは、巫女の言葉によって壊されました。彼女は村人達に避けられるようになりました。無視され、冷たい目で見られるようになり、のけ者にされていった……。村という小さな世界で孤立するということ……それはどれだけ恐ろしいことか……。けれど、最初のうちはまだ彼女にも私以外の味方がいました。巫女や他の人の目を盗みつつ、彼女を励ましていました」

「最初のうちは、ということとは」

「巫女は、どこまでも心弱く愚かな女でした。巫女は村で良くないことが起きる度、それを全て彼女のせいにしたのです。彼女が災いを振りまいたのだ、と。何度も何度も、巫女は彼女を責め続けました。そうするうち、彼女は村人達にとって憎い敵となっていきました。彼女を支えていた人々も、少しずつ離れていき……気づけば彼女の味方は私だけになりました」

そう言つて、男は荒い呼吸をする。話すのもやつとのようだ。

「身寄りの居なかつた彼女は、孤独になりました。無実の罪を着せられ、虐げられ、苦しめられた。それでも彼女は耐え続けました。私も彼女が憎しみを募らせて過ちを犯すことの無いよう、彼女を支え続けました。私にとって彼女は大切な存在でした。だからこそ、彼女を守ろうと……ですが、彼女の苦しみや悲しみ、怒りや憎しみの感情は私の手に負えなくなる位膨らんでいった。その苦しみは、きつと同じ目にあつた者以外には決して分からないでしょう」

優しい心を持った者ほど、悪意の刃が深く刺さる。その傷を癒すには時間が掛かる。傷が治る前に、新しい傷が生まれ、体を切り刻まれていく。

その傷の痛みがどれ程のものか……きつとそれは、彼女の傍に居たという男にも分からないことだろう。

そして、と男は苦しそうに、悲しそうに、天井を見上げる。

「村で恐ろしい病が流行つた時のことです。多くの村人が死に、村は悲しみに包まれました。巫女は……村人を守るはずの巫女は……村人の一人であるはずの彼女に、残酷な仕打ちを……。巫女は、その病をこの村に広げたのは彼女だと言つた……彼女こそが、この大いなる災いを起こしたのだ、と」

何て酷い、と弥助は呟く。弱さは人をそうさせるまでに追い詰めるものなのかと思つた。人の弱さは時に愛しく、そして時に……。

「家族をその病で失つた者達の悲しみは憎しみとなり、彼女のぼろぼろになつた体を引き裂きました。もう、限界でした。彼女の優しかった心は死に絶えました。そして彼女の悲しみや怒り、憎しみは魔を呼び……魔は彼女の負の感情を恐ろしい速さで増幅させ。彼女

は『鬼』になりました」

心の弱さゆえに人の心を殺した巫女。悪いこと全てを彼女のせいにするのに何の疑いも持たなくなった村人達。

一度膨れ上がった憎しみは、簡単に消え去ることは出来ない。優しい心は簡単に殺すことが出来るのに。

「鬼と言っても彼女の姿は人間だった時と殆ど変わりありません。しかし彼女は真正銘の鬼となりました。元々強かった力は魔の影響でますます強くなり、完全なる破壊と殺戮を望むようになり……」
男は咳き込みながら、胸を抑える。酷く苦しそうだっ

「私は、彼女を止めようと思いました。彼女の白い手が赤く染まる前に全てを終らせようと思いました。彼女を救いたかった、救わなければいけない。私は一人彼女に立ち向かいました。けれど上手くいきませんでした。彼女を止めるだけの力が私には無かったからです。そもそも私には、誰かを傷つけたり、何かを壊したりするような力など殆ど無いのです。魔に完全にとり憑かれ鬼となった彼女を浄化すれば、間違いなく彼女は消える……死んでしまう。だから、浄化することも出来ない。説得しようにも、聞く耳を持たない」

「それであんたは結局彼女を封印することを選んだ」
男は頷く。

「私は彼女と共に眠ることを決めました。彼女を一人箱に閉じ込めるなんて、出来ませんでした。それに封印はいずれ解ける。彼女が再び世に解き放たれてしまった時、また彼女を封印するなりなんなり出来るように、私もまた箱の中で眠りにつきました」

だが、どんな物語が隠されているかなどこれっぽっちも知らなかったさくらが、箱を開けてしまった。

まあ元々封印は解けかかっていたのでしょうと男は言う。封印が

すっかりしていれば、人間の娘であるさくらには箱を開けることから出来なかつただろうから。仮にさくらが開けなかつたとしても、遅かれ早かれ封印は解けただろう。

「まあ大体の事情は分かつたつすよ。だがこの雨のことが分からない。何であんたは娘を再び封印しようとしなのか、どうしてあんたはそんなに苦しんでいるのか」

「この雨は、私に向けて放たれた呪いなのです」

「呪い、だと!？」

かつて愛し、自分を愛してくれた男に呪いをかけたというのか。

「呪いの言葉を雨にのせ、唄う。唄は私にだけ聞こえます。そして私を苦しめる。頭の中を呪いの唄が駆け巡り続ける……深い怒りと憎しみのこもった唄が私を蝕んでいく! 耳を塞いでも、建物の中に閉じこもっても無駄なのです。……しかもこの雨は結界の役目も果たしています。私は、この雨の降っていない所に逃げることも出来ない」

呪いの言葉が四六時中頭の中を巡り続けるというのは、どれほど恐ろしいものなのだろう。きつと頭が割れて気が狂いそうになるだろう。

男は頭を抱え、咳き込み、ぜえぜえと苦しそうに喘ぐ。青白い肌を汗と雨が濡らしている。呪いの言葉を含んだ雨粒は彼の肌に吸い込まれていき、彼をより苦しめるのだろう。こんなお化け通りのぼろ家の中では、防げるものも防げないだろう。

「……勾玉」

「勾玉?」

荒い息を吐きながら男が頷く。

「ある意味では私自身とも呼べる存在です。私の力の源であり、魂であるもの。それを彼女に奪われてしまったのです。……今の私は幼子ほどの力も無いのです。この体を支えるのも精一杯……」

弥助は彼が空虚な存在であると思ったのは何故なのか理解した。彼の体には力も魂も、何も無いのだ。

それじゃあそれを壊されたらあなたは死ぬってことじゃないのか、と聞けば男は首を横に振る。

「あれはそう簡単に壊すことは出来ません。彼女が全てを力を長い時間勾玉のみに注ぎ込めばどうなるかは分かりませんが……。兎に角彼女は、私を身動きがとれなくなる位まで弱らせた後、ここを襲うつもりのようです。自分の邪魔をする者など、私位しか居ないと思っているかもしれません。居たとしても、それは無力な人間位のものだ、と。……時は一刻を争います。どうか、私に力を貸して下さい。私と、勾玉を結ぶ魂の道を辿れば、彼女を見つけることが出来るはずです。勾玉を、取り返してください。あれさえ戻れば私もどうにか戦うことが出来ます」

男は弥助にすぎた。その手も、体も嘘の様に軽い。紙風船に触れているみたいだ。男はまた咳き込み、苦しそうな声をあげる。確かにこの様子ではとても一人で山の中を歩き回ることは出来そうに無い。

弥助は、この雨をどうにかしたい。しかし自分の力では彼女を見つめることは出来ない。目の前に居る男は、彼女を見つめることも止めることも出来るようだ。

「分かった。あっしがあんたを背負って、山まで連れて行くよ」

男は顔をあげ、安堵の表情を浮かべた。弥助のその言葉が彼を元気づける薬になったのか、顔色が少しだけ良くなった。

弥助は男を背負う。兎に角しつかり掴まれと言って、家を出る。目指すは桜山だ。

(あの馬鹿、まさか桜山をうるちよろしていないよな……?)
今回の事が気になっていっている様子のさくらの顔を思い浮かべ、弥助は少しばかり心配になった。

まさかなあ……と弥助はその不安を振り払う様にしながら、先を急いだ。

*さくらの語り

ごめんなさい弥助さん、うるちよろしています。

やた吉君とやた郎君は私に疲れにくくなる術をかけてくれた。そうでもしなければ、とてもじゃないけれど私が二人についていけなかったからだ。歩くのは好きだけれど、それは平らな道に限られる。階段を上ったり、山道を歩いたりするのは苦手で、すぐ疲れてしまう。術をかけてもらっているのに、体はすでに重い。

水を含んだ地面は足をなかなか離してくれない。頑丈な糸で縫いつけられ、その糸を力ずくでぶちぶちとちぎりながら進む様な感覚。足をつける度に新しい糸が足と地面を縫いつける。靴はもう泥の色。靴の中にまで染みこんできて、足を冬の道端に転がる石の様に冷たくする。

心臓や喉が痛い。呼吸と共に痛みも吐き出してしまいたい。

やた吉君とやた郎君は私のペースに合わせて歩いてくれている。私が居なければもっと早く歩けただろうに、と思うと痛む胸がますます痛くなるけれど、今更後戻りは出来ないし、したくない。

傘を持つ手が段々固くなっていく。服はあちこち濡れていてぐっしりしている。傘じゃなくて、カッパを着てくれば良かった。そんな後悔を今更しても、もう遅い。

もうすでに歩いていている所は、整備も何もされていない獣道だ。何
度もつまずきそうになったり、生い茂る草、木に体や傘をぶつけた
りした。傘は時々ごきごきと嫌な音を立てている。もしかしたらも
う壊れているかもしれない。

「大分力が強くなってきた。かなり近くに居るね、これは」
その言葉を聞くと、踏み出す足に力がかかる。

頬を伝うもう汗なのか雨粒なのか分からないものを拭いながら、
私は頷く。

「二人はこの山に居るのが誰なのか、分かるの？」
やた吉君が振り返ってこちらを見る。困惑した表情を浮かべてい
た。

「多分……。けれど、何か微妙に二つのものが入り混じっている感
じで、絶対こつちとは言い切れないんだよね。それに分かったとし
ても、さくらには教えちゃ駄目って出雲の旦那に言われているんだ」

「そうなの……」
ネタバレしては物語は楽しめないということだろうか。

その後また沈黙が続く。個人的にやた吉君達のことについて色々
聞きたかったけれど、話しかける余裕もあまりなくなつただ黙るしかな
い。こういう時自分の体力の無さを呪いたくなる。小学校、中学の
時高原教室でウォークラリーをしたけれど、その時も酷かった。そ
の時とは違って、摩訶不思議な力を借りてもこのざまなんて、ちょ
っと恥ずかしい。

木々に囲まれたある道で、二人は突然足を止めた。何事か話し合
った後、こくと頷く。

「ここだ。ここに、居る」

その言葉に心臓が激しく揺れ動く。やた郎君が目の前を指差す。けれどそこには誰も居ない。でこぼこの道と暗い空が見えるだけ。

「姿を隠しているんだよ。結界が張ってある。多分見つかりにくくする為に」

「その結界は破れそうなの？」

「この雨を降らせることに力を集中しているから、結界自体は大したものじゃない。まあちよつとした目くらまし程度じゃないかな。これならおいら達でも簡単に壊せる」

やた吉君はそう言つて、錫杖を構える。やた郎君もそれに続く。

二人は手に握っている錫杖を、見えない何かに突き刺した。この頃すっかり見なくなった太陽のその様に眩しい光。その光は、風船が割れた様な音と共に弾け飛んだ。

その瞬間、奇妙な音が聞こえ始めた。雨の音に混じって聞こえるそれは、かなり高く澄んだ音。しゃらしゃらんという……水琴鈴の様な。その音は耳から入ってくるというより、頭の中に直接響いてくる様な感じだった。テレパシーというのはこういうものなのではないかと思つた。

ただ本当に「音」なのかは分からない。誰かの「声」かもしれない。何か言っている様に聞こえる気もするのだ。ただ何と言っているのかは分からない。同じ音ではなく、低くなつたり高くなつたり、大きくなつたり小さくなつたり、伸ばしたり……そう。

「……唄？」

そう。唄。誰かが唄っている？

音の様な声の様なものは、少し先から聞こえる。二人は私を結果で包むと、声のした方へ歩き出す。私もそれに続く。

坂道を上った先、そこに、誰かが、居た。

第三十一話・雨唄（4）

*

無数の雨粒の向こう側に立っているのは、女の人のようだった。私達は静かに、ゆっくりとその女性に近づく。どうやらこの不思議な唄を唄っているのは彼女らしい。

大分近くに来ているのに、彼女は私達の存在に気づいてはいないようだ。唄うことに夢中になっているのだろうか。よく見てみると、彼女は目を瞑っているようだった。

砕いた真珠を散りばめた様な、輝きのある黒髪はゆったりと広がり、膝ほどまで流れている。赤の上に白の衣を重ね、翡翠色の帯を締めている。はいているのは真っ赤な袴。衣からほんの少し覗いている手も、顔も白い。

手を合わせ、まるで祈る様に唄う彼女は、とても綺麗で美しい。

「あの人、雨を？」

「やた吉君とやた郎君が頷く。」

「あの人から、この雨に含まれているのと同じ力の波長を感じる」

「でもあの人からは清浄な力と邪悪な力、どちらも感じる……。二つが混じっている感じで」

「鬼か精霊か、やっぱり……微妙な感じなの？」

二人がこくりと頷く。私は女の人を改めて見る。澄んだ声、神々しさすら感じる姿。とても鬼には見えない。

私達はゆっくり、なるべく気づかれないうちに更に彼女に近づい

ていく。雨の中何もささずに立っているのに、彼女の体も服も少しも濡れていない。深緑色の勾玉がついた首飾りが、白い衣によく映えている。

ふと彼女が目を開いた。私はどきりとして、その場で固まった。真つ黒な瞳が私達の姿を捉える。こちらの姿を見て驚いた様な表情を浮かべ、目をぱちくりさせる。

この人がもし鬼だったらどうしよう。不安になった私に向けて、彼女は優しく微笑んだ。穏やかな笑みだった。

「驚いたわ、人間の娘さんがここに来るなんて。そちらの男の子達は人間では無いわね」

頭の中に響く声。彼女は唄いながら、私達に語りかける。さらさらと流れる水の様な、透き通った声。

私の返事を聞く前に、彼女はこちらに向かつてゆつくりと歩いてきた。私はその場から動くことが出来なかった。出雲さんと対峙した時のように、恐怖で体が動かなかった訳では無い。ただ自分とは住む世界の違う彼女が放っている何かに気圧されたというか……。恐ろしいとは思わないけれど、心臓の鼓動が激しくなっている。

「お嬢さん、どうしてこんな所に来たの？」

私はすっかり固まった頬をぺしんと軽く叩いた後、口を開く。聞きたいことを聞かなければ。ここまで来た意味が無い。

「この雨を降らせているのは、貴方なんですか。私は箱を開けました。その箱には鬼と精霊が眠っていたらしいと開けた後に聞きました。貴方は私が開けた箱の中で眠っていた方なのですか？」

その言葉を聞いて、彼女の足が止まった。大きく目を見開き私を見た。

しばらくして彼女はため息をつき、静かに目を閉じる。

「そう。貴方が、そうだったの……。まあ貴方が開けなくてもどの道あの箱は近いうちに開いていたわ。箱にかけた封印はもう大分弱いものになっていたから」

「貴方が封印を。それならば貴方は」

「私の名前は雨音、あまね雨に音と書いて、雨音。私は水を司る者。多分貴方達が精霊と呼んでいるような存在なんでしょうね。雨に豊穰や平和を祈る唄を乗せ、降らせる。そうしながら、私はこの辺りを見守ってきたの」

彼女……雨音さんは、そう言って空を見上げる。その表情はどこか切ない。真っ黒の空から降る雨には一体どんな想いが込められているのだろうか。

しばし雨音さんは空を見つめた後、視線をこちらに移した。

「雨音さん、どうして、どうして貴方はこの雨を降らせているのですか？ 一体どんな物語が……」

「私はこの山で、ある一人の男性と出会ったの」

どんな物語があるのかと問おうとした私の言葉を、頭の中に響く彼女の声が止めた。彼女は笑っているような泣いているような表情を浮かべながら、胸を飾る勾玉を愛しそうに撫でた。

「まのぶ正信という名前で、とても優しい人だった。その人は、普通の人間は持っていない霊的な力を持っていたの。かなり強い力だった。……けれど彼はそのことを鼻にかけることも、私利私欲の為に使うことも無かった。こういうものは本来人間が持っているものではないし、こういう力を使わなくても人は生きていけるから……そう言っていたわ。余程のことが無い限りは使っていなかったみたい」

懐かしそうに語る彼女の姿は、恋する乙女のその様だった。

「彼と過ごす時間は、それは素晴らしいものだった。彼は村のことや自分のことを沢山話してくれて。私も自分のことや、彼の知らない世界のことを沢山話したわ。木の実を採ったり、一緒にお昼寝したり、水遊びしたりした。ずうつと抱きしめていたくなるような、愛しい時間を過ごしたわ」

余程幸せだったのだろう、彼女の声は弾み、暖かな笑みを浮かべている。

私も本を読んだり、小説を書いたり、部活をしたりしている時はとっても幸せで、思い出すだけでも幸せな気持ちになれる。

けれど、彼女の表情はまた段々と暗くなり、今にも泣きそうなのに変わる。

愛しい時間が続くだけだったら、こんなことにはなっていないはずだ。唐突にその正信さんという人のことを話し始めたところを見ると、恐らく今回のことは正信さんと何か関係があるのだろう。

「いつの頃からか、彼の様子がおかしくなったの。塞ぎこんでいるというか、何というか。私はどうしたのと彼に聞いたわ。そしたら彼は『最近私を見る巫女様の目が怖い』と答えたの」

「巫女様？」

「何でも彼の住む村……今は姿形が大分変わっているみたいだけれど……その村には、彼と同じく霊的な力を持ち、それを用以て村を導く一族が居たらしいわ。その一族の中に、村長と同等、或いはそれ以上の権威を持つ巫女が居たらしいの」

ああ、と私は声を上げ頷いた。確かに桜村にはかつてそういう一族が居たと桜村奇譚にも書いてあった。巫女の桜さんもその一族の

人間だったはず。

「最初は気のせいだと思ったらしいの。けれど段々それが気のせいでは無いことが分かってきたらしいわ。まあ最初の内は自分を見る目が怖い、という程度ですんでいたらしいけれど」

「どんどん酷くなっていったんですか？」

雨音さんが重々しく頷く。

「何かにつけて彼に意地の悪いことを言ったり、彼のことを無視したりするようになったって。けれど彼は巫女に何も悪いことはしていない、と言っていたわ。ただ何度も嫌がらせを受けているうちに、何となく理由が分かってきたらしいわ」

「一体、何故？」

「人ってどうしようもなく弱くて脆い生き物なのね。その弱さを愛しく思う時もあるのだけれど。……その巫女はね、彼が怖かったらしいの」

「怖かった？ 力を持っていたからですか？ けれど、その巫女様だって当然」

「勿論、その巫女も霊的な力を持っていたらしいわ。けれど、彼程では無かったようね。巫女は村人達から好かれ、且つ自分より強い力を持っていた彼に嫉妬したらしいの。更に巫女は、自分の権威が彼によって脅かされてしまうことを恐れたらしいわ」

そう言って雨音さんはため息をついた。

何故急に巫女が彼に冷たくなったのかは、はっきりとは分からならしい、と雨音さんは続けた。自分の力が衰えてきたのか、自分

より正信さんの方がずっと良いなどという言葉を誰かが言っているのを聞いたからなのか、元々抱いていた嫉妬や恐怖の感情が強くなったからなのか。その辺りは、もう分からない。

「巫女の仕打ちに、彼は随分傷ついたようね。けれどその時は未だ笑う余裕もあつたの。彼に冷たかつたのは基本的にはその巫女だけで、後の村人達は変わらず彼を慕っていたようだし。私も彼の悲しみを癒してあげることが出来ていた……」

けれど、と雨音さんが続ける。

「ある日のことよ。彼は青い顔をしながら、私に抱きついてきた。驚いたわ。私を抱きしめる手は酷く震えていて、彼は支えを失えばあつという間に倒れてしまいそうな位弱っていた。どうしたの、と私は聞いた。彼は苦しそうに答えた。あの村ではね、定期的に巫女が村人を集め、彼等の前で自分が占で見たもの等を話すということをしていたらしいの。そこで巫女は正信を指差し『その男は忌むべき者だ。彼は村に災いをもたらす』などと言つたらしいの」

信じられない、という風に雨音さんは首を横にぶるぶると振つた。わざわざ皆が集まっている前で巫女は彼を貶めるようなことを言つたの？彼から全てを奪わなければ巫女は気が済まなかつたの？私は巫女がしたことには驚き、口に手をやる。

「酷い話だなあ。正信っていう男の言うことが本当なら、そいつは何もしていなかったんだらう？ それなのに巫女は自分の勝手な思い込みだけでそんなことを言つたわけ？」

やた吉君にも、巫女の仕打ちが理解出来なかつたらしい。

けれど。

「けれど、村人はそんなことを巫女が言つただけで、正信さんが災

いを招く人だと信じてしまったの？」

「少なくともあの村の人達にとって、巫女の言うことは絶対だったらしいわ。まあそれでも、最初のうちは村の人達もそんな馬鹿な、と半信半疑といった感じで、彼にまああまり気にするなと優しい言葉をかけてくれたそうよ」

「正信さんはそういう人間じゃないって、皆信頼していたってことですね」

村の人達には好かれていたらしいから。いざという時は力を使って彼等を助けていたらしいし、心優しくて誠実な性格だったし。女の子にももてていたようだしね、私が妬いちゃう位にはと雨音さんが言い、くすつと笑った。けれどその瞳は変わらず悲しげだ。

「けれど、さつきも言った通り人間ってどうしようもなく弱い生き物なのね。巫女はその後も、村で良く無いことが起きる度にそれを彼のせいにしたらしいわ。一言目にはすぐ正信のせいだ、正信がやったんだって……。勿論彼は否定したし、自分は巫女様の権威を脅かすつもりは少しも無いと何度も訴えたって……。けれど巫女は聞く耳を持たなかったって……。私は彼を癒す言葉を唄にのせた。そうやって、彼を癒そうとした。けれど彼の悲しみは私の唄、そして私の温もりだけでは完全に癒すことは出来なかった。苦しかったでしょうね、私の知らないところで、彼は苦しめられ続けた……」

無実の罪を幾つも擦りつけられ、責められ続ける。自分の気持ちなんてまるで無視して。巫女は自分を守る為に、自分が守るべき村人の一人を貶め続けた……。

「最初のうちは村人だって彼が災いを招く者なんて、信じていなかっただけ。けれど、何度も巫女が言っているうちに村人達の心に、正信を疑う気持ちが芽生えてきたようね。その芽は巫女の言葉

という水を与えられ、少しずつ成長していく。思いの蕾が膨らみ、やがて花を咲かせる」

「村人達は、原因不明の良くないことを正信って人のせいにした。そうするときつと気持ちが悪くなったんだろっね。原因が分からないと気味が悪いけれど、原因が分かればすっきりする。村の人達は原因を作り上げることであんまり安心しようとしたのかもね。一度楽を覚えろと人間も動物も、なかなかそこから抜け出せない」

やた郎君がぼそりと呟く。何となくその気持ちは分かるような気がした。

「憎しみの対象を作り上げて、その人に怒りや憎しみをぶつけることで楽になろうとした、というのもあるのかも。実体の無いものにあたることは出来ない。けれど、人間には実体がある。だから全てをぶつけることが出来る……でも、そんなのってあんまりだわ」

私達の言葉を聞いて、雨音さんが手で顔を覆った。そして苦しうに呻く。

「彼は日に日にやつれていったわ……笑みは消え失せ、口数も少なくなつた。私は人ではない。人の世に必要以上に干渉したくは無かつたし、仮に干渉したとしても彼を救つてやれたかどうか。下手なことをすればますます状況は悪化する、そう思つたわ。私には彼を抱きしめながら、慰めることしか出来なかつた。そして彼に芽生え始めた憎しみを摘み取ろうと必死になつた。けれど彼の中に芽生えた怒りや憎しみ、悲しみは私一人の力では完全に摘み取ることは出来なかつた」

少しずつ早口になっていき、声を荒げていく。降り注ぐ雨が、少し激しくなつた。

「憎しみや怒りの感情に押し潰されて、全てを恨む鬼になってしま

いそうだと。いつそ村を出て、私と二人で暮らしたいと彼は言った。けれどそんなことは出来ない。村を出たところで、彼に幸せは無い。簡単に生きていける訳が無いもの……。ああ、それでも私は彼を連れてどこか遠くへ行つてしまった方が良かったのかしら？ ふふ、今更そんなこと思つたつて遅いわね。そう、遅すぎた。あの日のことを私は決して忘れはしないわ」

全てを恨む鬼に？それなら、もしかして鬼というのは。私が考えていることを察したのか雨音さんが力なく頷く。

「ある日のことよ。私の前に彼が姿を見せたの。私はその姿を見て、絶句したわ。憎しみの炎をその目に宿し、邪悪な笑みを浮かべ、その身から恐ろしく黒くおぞましい何かを発している彼の姿。私の知る彼ではなかった。彼は魔に憑かれ、その身も心も魔に染まり『鬼』となつたわ」

・・・雨音。私はこれから全てを終らせる。あの愚かな巫女も、その巫女の言葉を真に受けて私を苦しめたあの村人共も皆殺してやる。全てを破壊し、無に帰してやるんだ。私はもう我慢をしない。雨音、君を私は愛している。だから、だからこそ・・・

「憎しみに満ちた声で語る彼は、私にこう言つたわ」

・・・私は君を殺す。誰よりも、先に・・・

「冗談を言っているようには思えなかった。私はそんな馬鹿なことはやめて、と必死に止めようとしたの。けれどももう私の言葉すら彼の耳には届かなかつた。このままでは彼は間違ひなく私を殺す。そして、破壊と殺戮を始める。彼は強大な力を用い、自分の魂と力の核と呼べるものをこの勾玉に移した。そうすることで彼は簡単に死

なない存在になったわ」

「雨音さんが愛しそうに撫でたり、握りしめたりしていた勾玉。それこそが、彼の核となるもの。」

「清らかなものと邪悪なものが入り混じり、やた吉君達を混乱させていた訳は、目の前にある勾玉が原因だったのね。」

「けれど、何故それを彼女が？」

「彼の力は魔によって歪められ、そしてますます強いものとなった。私だってそれなりの力は持っているわ。けれどそれは誰かと戦い、傷つけることには向いていないの。それでも私なりに抵抗したわ。」

「……辛い戦いの末、私は彼の隙をついて、この勾玉を奪ったわ。そして昔彼が私にくれた箱に――一番の宝物に彼を封印し、私も共に眠った。封印するのがやっとだったの。」

「強い力を持つていれば何でも出来るとは限らない。雨音さんの持つ力は何かを破壊したり、傷つけたり……殺したりするものには向いていなかったのだろう。勉強が出来るからって料理や運動も同じように出来るとは限らないということと同じことだ。力のベクトルがどこに向いているかで、変わる。」

「けれど、そんな二人を私が解き放ってしまったのね。何も知らない私が……」

「苦しい思いをしながらやっとの思いで封印し、彼女も共に眠ったの。」

「雨音さんは私をじいっと見ながら首を横に振る。」

「貴方のせいではないわ。さっきも言った通り、封印は解けかかっていたの。そうで無ければ、ただの人間である貴方にはあの箱を開けることなんて出来なかつたはずだもの。だからこそ私は彼と共に眠ったの。封印が解けた時もすぐに対処出来るように。いいえ、理由はそれだけではない。私は彼と一緒に居たかった。痛みを抱いて

眠る彼を一人にしたくなかった。本当はその痛みも取り除いてあげたかったけれど……私は無力よ。本当に助けたい人を救えないこんな力、要らなかった」

駄々をこねる子供の様に頭を激しく振り、雨音さんは泣き喚く。思い出すだけでも、辛かったのだらう。

雨音さんは涙を流しながら、私を見る。何故か不思議なものを見る目で。

「貴方は、この話を信じるの？　もしかしたら私の方こそ、鬼なのかもしれないわよ。こうして貴方を騙して、隙について貴方を殺してしまうつもりなのかもしれないわよ」

そう言われてみれば。確かに彼女の話が真実であるという証拠はどこにも無い。けれど目の前に居る女性が、邪悪な存在には到底思えない。

第一「雨音」なんて名前の人間なんて、居ないでしょうし……まあ箱に眠っていた鬼が元人間だったというのが本当だったらの話だけれど。けれど彼女が嘘を吐いているようには思えないし……。

私は雨音さんに向けて笑みを浮かべる。

「私は、信じます。雨音さんが嘘をついているようには思えませんから。やた吉君とやた郎君は？」

二人は目をぱちくりさせ、顔を見合わせた後小さな声で答えた。

「おいら達も、まあ、一応信じているかな。でもその話が本当だとして、正信っていう男は今何をしているわけ？　封印が解けたのなら、そいつだって自由になったんだらう。自分に直接危害を加えた巫女や村人達はもう居ない。だからといって破壊や殺戮の衝動が収まるなんてことは無いはずだと思うんだけど」

「けれど、そいつは貴方を殺すことも、町を破壊することも無く、姿を隠しているみたいだ。貴方が降らせている雨と何か関係でもあるの?」

雨音さんは自らを嘲るような笑みを浮かべ、その問いに答える。

「彼のことを鬼だと私は言いましたが、私だつて似たようなものかもしれないわ。……さっき言つたわよね、私は祈りの唄を雨に乗せる力を持つと。けれどね、雨に乗せることが出来るのは祈りの唄だけでは無いのよ。呪いの唄だつて……乗せることが出来る」

最後の部分だけ、低い声色で静かに言つた。その声には私はぞくつとした。

「実際にやつたのは初めてだつたわ。そんなこと出来るとは思つていなかったから。けれどどうやら、成功してみたよね。私は彼を苦しめる呪いの唄を雨に乗せて、こうして降らしている。そうすることで、彼の動きを止めている。この勾玉がある以上、死ぬことは無いわ。けれど、私の所まで来られない位には弱っているみたいね。大切な人を止める為に、大切な人を苦しめる。……ふふ、恐ろしいでしょう。祈りの唄はなかなか上手く作用してくれないのに、人を呪う唄は簡単に彼まで届き、彼を苦しめている。おかしな話よね……人を幸せにすることより、人を呪うことの方がずっと簡単なんで……力無く笑う彼女の姿はとても痛々しい。こうしている間も、どこかで正信さんは呪いの言葉に苦しみ、悶えているのだろう。」

「更に私はこの雨で结界を作り、彼を閉じ込めた。彼はこの雨の降っている範囲外に出ることは出来ないわ。……本当、どちらが鬼なのか分かつたものではないわね……。私こそが冷酷なる鬼なのかもしれないわ」

彼を閉じ込め、呪いで苦しめ続ける。逃れることの出来ない苦しみ。こんなにも綺麗な唄が、一人の人間を地獄に墮としているなんて。

確かにこれは冷酷で恐ろしい行為だ。けれどそうやって大切な人を呪っている彼女だって苦しんでいる。今の空の色も、冷たい雨粒も全てこの雨を降らせている彼女の気持ちを表しているのだろう。

彼女は苦しみながらも、呪いの唄を唄い続ける。そうしなければ正信さんは――だから唄い続ける――そして雨は――え、ちよっと待って。彼を止める為に唄い続けるということは。

「でも、でも、雨音さん。この雨は正信さんの動きを牽制することしか出来ないですよ。殺すことは、出来ない」

「ええ、そうよ。まあこの勾玉を彼が奪い返した場合、この唄も意味を成さなくなるだろうけれど。彼の力の方が完全に上回ってしまうもの」

「それじゃあ、勾玉を取り返されないように動きを止めるには、この雨を降らし続けるしか無いってことですか？」

正直言って、それはかなり不味いわ。雨は生きとし生けるものを生かし続ける恵みの雨。けれど必要以上に降り続ければ、恵みの雨から凶器の雨へと変貌する。

雨音さんは困ったような表情を浮かべる。雨音さんもこのままで良いとは思ってはいないようだ。

「迷っているのよ、私は。再び共に眠りにつくべきか、否か。彼は何も悪くない。そんな彼を、箱の中に閉じ込めることが果たして良いことなのか」

「その勾玉を壊せば……」

いいんじゃないかと言いかけて、私は口をつぐんだ。その勾玉を壊すということは、つまり正信さんを殺すということだ。

雨音さんは首を横に振る。

「この勾玉は簡単に壊れるものではないわ。まあ、力を注ぎ続ければ壊れるかもしれないけれど。でも、そんなこと、私には出来ないわ。……だって、私は彼を愛しているもの」

ぎゅっと勾玉を握りしめる。封印することすら躊躇っている人が、そんなこと出来るはずがないわよね。私だってきつと嫌だと思う。

愛しているがゆえに彼女を真つ先に殺したいと思っている正信さん。

愛しているがゆえに彼を殺したくないと思っている雨音さん。

どちらも相手を想う気持ちは同じものはずなのに、どうしてこんなに違うのだろうか。

「……結局のところ、封印する位しか手は無い。破壊と殺戮の衝動をかき消すことは容易ではない。説得なんてほぼ不可能。仮に説得出来たとしても……その先に待っているのは、彼の消滅。完全に魔に支配された者はもう何をしても助からない。衝動が消え去れば消滅、浄化をすれば消滅。彼の心の傷が癒え、救われた瞬間、彼は消えるわ。でも彼に消えて欲しくなんてないの。かといって、彼にその手を汚してもらいたくは無い。破壊や殺戮……そんな恐ろしいことを彼にやらせたくは無いの。だから、やっぱり……再び彼を封印し、私は彼と共に眠りにつく。それが一番なのかもしれないわ」

雨音さんは手で顔を覆い、嘆く。

「けれど。……けれど、それで本当にいいのかしら」

私はぼつりと呟く。

確かにそれが一番手っ取り早い方法だとは思う。そうすれば正信さんの手が汚れることも無いし、雨音さんは愛しい人と共に眠ることが出来る。この奇妙な雨は止んで、桜町も三つ葉市や舞花市の一部地域に住む人達もほっと一安心。めでたしめでたし……。

けれど本当にそれでいいのかしら。

だってそれではまた物語は止まってしまふ。完結すること無く。時が経てばきつと封印は解け、再び物語は動き出す。でも雨音さんが正信さんを封印すれば、また物語は止まる。少し動いては止まり、また動き出し……の繰り返し。

何も変わりはない。正信さんは怒りや憎しみを抱き続け、雨音さんは愛する人を無理矢理眠らせ続けることで、ずっと苦しむことになる。自分の無力さを呪い続ける。

「本当に、それでいいんですか。だってそれじゃあ同じことの繰り返しで……二人共、救われないじゃないですか」

物語が終ることを恐れて、物語を止め続けること。それが良いこととはどうしても思えない。

例え雨音さんにとって苦しい結果になったとしても、物語は進めなければいけないと思う。

「それじゃあ、私にどうしろというの？ あの人を殺せというの？

嫌よ、そんなの絶対に嫌！」

声を荒げて彼女が叫んだ瞬間、雨が激しくなった。もう傘は何の機能も果たしていない。強い風と共に、私の体を雨が突き刺す。

「それじゃあ、おいら達が代わりにその勾玉を壊すよ。それなら……」

「嫌よ、私が殺すのも嫌！ けれど、誰かにあの人が殺されるのも嫌！ 封印をするのも駄目、でも雨を降らし続けるのも駄目、それ

じゃあどつしろというの！」

何も答えられなかった。やた吉君とやた郎君も流石に無理矢理勾玉を奪って壊すことはしたくないらしく、困ったような表情を浮かべながら立ち尽くしていた。

聞こえるのは、美しく残酷な唄と、その唄をのせて降りしきる雨の音だけ。私には、この暗く沈んだ空に光を取り戻させることなんて、出来ないんだわ。

彼を封印したところで、彼女の心に暖かな日の光が差すことは無い。冷たい雨に打たれ、重く沈む黒い雲に囲まれて眠り続けるしかない。それは、正信さんも同じ。

けれど、それでも、彼女は。彼を殺したくはないのだ。自分も正信さんも、どちらも救われぬ道を進んでも。

それが良いこととは思えない。でも私にはどうすることも……。

ざわ、ざわ。

風が吹き、木々がざわつき始める。その音は私を何故か酷く不安にさせた。

何かが起きそうな気がした。

ふと頭上に気配を感じ、私は空を見上げた。空からこちらめがけて、黒くて大きな何かがゆっくりと降りてきた。

黒い塊は人の形をしている。どんどんこちらに近づいてくるうち、正体ははっきりしてきた。

大きな体に、乱暴に束ねたぼさぼさの髪。たれ目に無精ひげ……
見覚えのある、姿だった。

「や、弥助さん!?!」

第三十二話・雨唄（5）

*
私は指をさし、大声で叫んだ。弥助さんはそんな私のことなんて視界に入っていない様子。視界に入った瞬間、怒鳴られてしまいそう。まあ遅かれ早かれ気づかれちゃうわよね。

あら？

よく見ると、弥助さんは誰かを背負っているようだった。誰かの手と足が見える。

どん、という鈍い音と共に地面を揺らして弥助さんは着地する。何故か雨音さんから距離を置くように素早く後退すると、背負っていた人を降ろした。こつからだとはつきりと姿は見えない。多分男の人だと思うのだけれど。

その男の人は弥助さんから離れた途端、糸を切られたマリオネットの様にがくつと崩れ落ちた。まさか死んでいる……そんなわけはないわよね、さっきまで弥助さんにしっかりとしがみついていたのだから。

全く動く様子の無い男の人に弥助さんが話しかけている。何と言っているのかはよく分からない。雨の音にすっかりかき消されてしまっているから。

突然の出来事。一体何事？あの人は一体誰？私は首を傾げる。

雨音さんもさぞかし驚いているだろうと思って、私は彼女の方へ視線を移す。

彼女も矢張り驚いていた。けれど、何だか様子がおかしい。白い

肌がみるみるうちに青くなっていき、体をぶるぶると震わせている。大きく見開いた目に浮かんでいるのは驚愕と恐怖。

唄が明らかに乱れている。ぞつとするような低音になったかと思えば、耳がおかしくなりそうな位甲高いものになり。ゆったりとしていたリズムは急に早くなる。音は大きくなったり小さくなったり。聞く者の不安をかきたてるような……。雨音さんは明らかに動揺し、恐怖に震えている。

唄と共に雨の降る勢いも変わる。

彼女は何を恐れているのかしら。雨音さんの瞳は弥助さんを見ていない。となれば、彼女が見ているのは。

そんな、まさか、まさか……。

「正信……！」

頭を抱え、酷く怯えた表情を浮かべながら雨音さんが叫ぶ。

「あ、あの人が正信さん!？」

私はもう一度視線を、弥助さんが連れてきた男の人に向ける。正信、と呼ばれた男の人は少しだけ体を震わせたけれど、また動かなくなってしまうた。

弥助さんは何故、正信さんを連れてきたのだろう。今回の事件について調べている時に正信さんを見つけ、彼を雨音さんに封印してもらうか殺してもらうかする為にここまで連れてきたの？でも弥助さんの力じゃあ彼が鬼か精霊かなんて分からないだろうし……となれば正信さんが正直に全てを話したってことに……でもそんなの有り得ないような気がする。

それとも、鬼だったのは本当は正信さんではなく、雨音さんだったの？私は、彼女に騙されたの？けれど雨音さんが鬼だとはどうし

ても思えない。

まさか弥助さんは……。

「あんたが鬼だとは俄かには信じられないっすけれど……」

弥助さんは、雨音さんの方が鬼だと思っっているのだ。彼は彼女を目の前にしてやや困惑している様子。その思いを振り払うように頭を振ると、今度は彼女を憎い仇でも見るかのような目で睨みつけた。

弥助さんを止めることも、彼にことの経緯を問う暇も無かった。

一歩足を前へ踏み出したかと思えば、電光石火の速さで駆け出し、気づけばもう彼は雨音さんの目の前に居た。

やた吉君とやた郎君は弥助さんを止めようと走り出す。

けれど、間に合わなかった。

弥助さんは、雨音さんからあの勾玉を紐ごと無理矢理引きちぎって奪い取った。雨音さんが顔をしかめ、首を手で抑える。

あつという間に弥助さんは彼女から離れ、崩れ落ちている正信さんの所まで戻った。引きちぎった紐を結び直し、それを正信さんの首に……かけた。

「弥助さん！」

私は思わず叫んだ。弥助さんがこちらを見て、驚いたような表情を浮かべる。やっと私の存在に気がついたらしい。

「ちょ、さくら……お前何でこんなところに！？ あれほど危ないから動き回るなって言ったのに！」

恐ろしい形相で私を睨む弥助さん。ごめんなさい、どうしても気になって、何もせずにはいらなかったのよ。それにしても怒った弥助さんの顔、怖い……。

彼は私のすぐ近くに居たやた吉君達にも気づいた。二人の姿を見て、何かを察したらしい。

「あの馬鹿狐……！」

まあ出雲さんと会っても会わなくても、どの道私は桜山に足を踏み入れていただろうけれど。そんなこと正直に話したら余計怒らせてしまいそうだったので、黙っておいた。

それに今はそんなことでああだこうだ言っている場合ではないのだ。

「そんなことより弥助さん、どうしてその勾玉を正信さんに返しちやっただんですか!？」

「正信？ 何だこいつ正信っていうのか」

雨音さんがさつきその名前を叫んでいたのに。勾玉を取り返すことで頭がいっぱいで、何も聞いていなかったのね。

「ってそんなことはどうでもいい。さくらもやた吉とやた郎もその女から離れるんだ、そいつは、そいつこそが鬼なんすよ!」

やっぱり。弥助さんは雨音さんの方が鬼だと思っているんだわ。

「ち、違っわ弥助さん！ 鬼は、鬼は雨音さんの方ではなくて……」

「はあ？ さくら、一体何を……」

その言葉の続きを言おうとした弥助さんの口の動きが止まった。

丁度弥助さんの背後に居たあの男の人が、正信さんの体が小刻みに震える。

雨の音に混じって微かに聞こえる笑い声。それは段々と大きくなり、やがて雨の音を凌駕した。

愉快そうに笑うその声には、悪意が混ざっている。体の芯まで一気に冷えていくのを、感じた。

正信さんが、ゆっくりと立ち上がる。白い衣に、雲ひとつ無い青空の色をした袴。目をぱちくりさせる弥助さんを無視して、彼は一歩ずつ前へ進んでいく。

彼の姿がだんだんはつきりと見えてきた。

やや吊り上った、細長い瞳。知性的な雰囲気、野生的という言葉がぴったりな弥助さんとは正反対の位置にいそうな人だ。どちらかといえば出雲さんに近い感じ。彼と違って、妙な艶っぽさは無い。浮かべているのが邪悪な笑みでなく、優しい穏やかな笑みだった。とても魅力的な人なのに。

彼が鬼か精霊か。そんなの、今の彼を見ればすぐに分かる。

騙されていたのは私達ではなく、弥助さんだったのだ。

正信さんは坂の上に立つ雨音さんを見つめた。雨音さんがびくつと体を震わせる。彼はあの笑みを浮かべたままだ。けれど……彼女を見つめる瞳からは邪悪なものを感じなかった。穏やかで、恐ろしい位優しい眼差し。

「久しぶりに君の姿を見るよ、雨音。不愉快な唄をどうもありがとう」

不愉快、という部分を強調する。余程苦しかったらしい。

「正信、正信……ああ、どうして」

「死ぬかと思つたよ、本当に。簡単に死ねないというのも恐ろしいものなんだな。永遠にこの地獄から抜け出すことは出来ないのかと思っていた。ふふ、だがこの男のお陰で助かった」

「ははは、と声を上げて笑う正信さん。弥助さんは自分が騙されたことを悟り、怒りで顔を真っ赤にする。」

「てめえ、騙したのか！ あっしに話したこと全て、嘘だったって言うのか！」

正信さんはちらりと後ろを振り返り、怒り狂う弥助さんを馬鹿にするようにふつと笑う。

「全てが嘘だったわけではなかった。『鬼』が生まれた経緯も、この雨の正体も。殆どは真実だったさ。ただ、鬼となつたのはあんたがさつき乱暴に扱ってくれた彼女ではなく……この私だった。それだけの話さ。しかしまあ、私を見つけたのが騒ぐことしか能が無い馬鹿共と、あんたのような心優しく、真っ直ぐな上に恐ろしく鈍感な馬鹿で助かった。鋭い奴だったら、気づいていただろうさ。私の体に僅かに残っていた邪悪な鬼の力にね」

ちくしょう、と弥助さんは地団太を踏む。けれどももう遅い。正信さんは自分の力と魂の核である勾玉を取り返してしまった。

「勾玉から、力が流れ込んできている。……もう大丈夫だ」
正信さんはぎゅつと勾玉を握りしめる。

「正信。貴方はまだこの村　今は違うようだけれど　に、恨みがあるの？　破壊と殺戮を望むの？」

震える手を祈るように合わせ、問う。返ってきた答えは、雨音さんの僅かな望みをいとも簡単に打ち砕いた。

「当然だ。今も私の中を怒りや憎しみの感情が駆け巡っている。この思いは、全てを壊すまで、収まることはない。いや、何をしてもう収まることはないのかもしれない。それでも、私は」

「この町を壊すっていうのか。もうあんたを苦しめた巫女も村人達も居ないっていうのに！」

正信さんは振り返り、弥助さんを睨みつける。

「それで？ 確かに私を追い詰めた馬鹿共はもう居ない。だからといって憎しみが消えるわけじゃあない。今の私が望んでいるのは復讐ではない。全てを壊し、殺すことだ。人間共が恐怖に泣き叫ぶ姿を見たい。今こうして話している間にも私の思いは膨らみ続けている。我慢など出来ない、一刻も早くこの思いを……だが、その前に」
また視線を雨音さんに向ける。彼女は彼の瞳に抱かれ、怯え震えている。

「君を、殺してやる。この手を真つ先に赤く染めるのは君の血だ。私はね、今でも君を愛している。呪いの唄は私を苦しめた。だからといって君への想いが憎悪に変わったわけではない」

正信さんは再び歩き始め、雨音さんに近づいていく。雨音さんはそれに合わせて後ずさりした。正信さんは、本気だ。彼の目を見れば分かる。

「殺してやる、殺してやる。君を殺す者、それはこの世にただ一人私だけだ。君が欲しい、君の全てが欲しい。この手を染めておくれ、君の血で、君の魂で！」

正信さんは心から雨音さんを求めている。けれど、その願いを叶えてはいけない。

「そんなことして、あんたの魂は本当に救われるのか！？ 愛しい人をその手で殺す？ そんな馬鹿なこと……」

「うるさい！ あんたに何が分かる！ もう全てが遅い、何をしても私の魂は救われないんだ！ 鬼になった時点だな。誰かを本気で

憎んだことが無さそうな顔をしているあんたには、この気持ち、一生分らないだろうさ！」

その言葉を聞き、弥助さんの顔つきがますます険しいものになった。聞き捨てならない言葉を聞いた……そんな感じだった。

「誰かを本気で憎んだことがなさそう？ はっ、見当違いもいところだなあ。あっしにだって居たよ、そういう奴が！ だが殺したところで何がどうなるわけでもないってことが分かっているから。あっしは何もしない」

弥助さんにそんな人が居たなんて、知らなかった。正信さんの言う通り心の底から誰かを恨んだことの無さそうな顔をしていたから。

「ははは、随分と優しいんだな。憎まれたらしいその人物は幸せ者だ。まあそんなことはどうでもいい。とりあえず黙っていてくれないか？ 邪魔なんだよ、あんた。安心しろよ、雨音を殺したらすぐあんたも、そこにいる間抜け面の小娘も、餓鬼共も殺してやるからさ」

彼が弥助さんと話している間も、雨音さんは彼から少しでも離れようと後退し続けている。じりじりと、少しずつ、少しずつ。

けれどこのままではすぐ正信さんに追いつかれてしまう。

胸が痛い。喉が渴いて、頬が硬直して、上手く声を出せない。しつかりしなくちゃ、このままじゃ、駄目。

「あ、雨音さん、逃げて！ このままでは、本当に殺されてしまうわ！」

やっと出た声は情けない位、小さく掠れた声だった。それよりずっと大きくはつきりとした声で正信さんが雨音さんに話しかける。

「逃げるのかい？ 君は私と共に居たくはないのか。私が君の全てを抱いてあげる。……君はそれが嫌なのか？ 愛していたのは、想

っていたのは、私だけだったのか？」

真剣な面持ちで語りかける正信さん。嘘なんてついていない。本気なのだ。

逃げ続けていた雨音さんの足が、急に止まった。お人形さんのように動かなくなる。明らかに逃げる意欲を無くしている。

「何しているの、雨音さん！ 逃げて、逃げてよ！」

祈るように叫ぶけれど、雨音さんの耳には届いていないようだった。彼女の目に映っているのは、もう彼の姿だけ。彼女の耳に届く声は、彼の声だけ。

まさか雨音さんは正信さんに殺されることを……。

「一緒に居たいわ、貴方とずっと。それが私の夢、私の願い。苦しい、とても苦しいの。貴方を救うことも、全てを終わらせてあげることと出来ない。惨めで役立たずな自分のことを、私は許せない。ああ、そうね。こんな思いを抱き続けながら惨めに生きていく位なら、いつそ貴方の手で全てを終わらせて欲しい……」

本気だ。彼女は愛しい人の姿を前にして、全てを諦めてしまった。彼を止めたいと言い、どうするべきか悩んでいた彼女。けれど正信さんと再会し、悩むことを放棄した。

彼女にはこの町を守る義務など無い。彼女が守りたかったのは始めから、彼一人だった。

くつと顔を上げ、揺るがぬ真つ直ぐな瞳で正信さんを見据えた。唇も体も震えることを止めた。背筋を伸ばし、両手を臍の前辺りで組む。

迷いを捨てた凜とした姿は綺麗で、神々しさすら感じた。

ああ彼女は、決意したのだ。してしまったのだ。

「貴方が望むのなら、この命、貴方に差し上げます」
大きくはつきりとした声でそう彼女は告げた。その声は頭に響く声ではなく、彼女がその口から直接紡いだものだった。少しの震えもない、強い意志を感じるもの。

その瞬間、今まで聞こえていた唄がぴたりと止んだ。未だ雨は止んでいない。唄を止めたからといってすぐ止むものではないらしい。

「雨音さん！」

私は叫ぶ。けれど矢張りその声は彼女には届かない。正信さんはその言葉を聞いて満足気に微笑んだ。とても嬉しそうで、幸せそうで……それでいてとても悲しそうだった。

その答えに呆然としていた弥助さんは、我に返り。馬鹿野郎！と大声で怒鳴った。そんなことは絶対に許さないという思いが声から伝わってくる。私も勿論同じだ。雨音さんがそうしたいならどうぞ、なんて言えるわけがない。

「さつきから大人らしく黙って聞いていれば、勝手なことを言いやがって。そんな馬鹿なことあつしは絶対にさせやしねえ！ 乱暴な手を使つても止めてやるよ！」

弥助さんが足に力を込めるのが見えた。

獲物を捕らえようとすする獣のように、勢いよく彼は正信さんに飛びかかった。両者がもう他人の言葉に耳を傾けない状態にある以上、力づくで止めるしか方法はないのだ。

「やめて！」

正信さんに飛びかかる弥助さんを止めたのは、他でもない雨音さんだった。

次の瞬間、恐ろしく甲高い声を彼女が発した。その音は人間が聞

き取れるギリギリの高さだと思う。耳がものすごく痛い。頭の中が爆発してしまいそう。ほんの一瞬のことだったけれど、もしあんな声をずっと聞き続けていたら狂ってしまいそうだ。引き抜かれて悲鳴をあげるマンドレイクのように。

その声は白い光の筋を作り出し、弥助さんを貫く。弥助さんは呻きそのまま後方へと吹き飛ばされていった。

攻撃は苦手だと言っていたのに。正信さんを想う気持ちは彼女の力まで歪ませてしまったというの？

「弥助さん！」

「弥助の兄貴！ 何てことするんだよ！」

「やた吉君は雨音さんを睨む。けれど彼女は彼のことなんて見ていない。」

「もうやめて、お願いだから正信を傷つけないで」

「雨音さん！ 正信さんをこれ以上傷つけないといけないのなら、自分の命を彼に捧げるなんてことしちや駄目よ！ 正信さんはそれを望んでいるというけれど、でもきつと本心はちが……」

「黙れ、小娘！ 私の気持ちがお前なんかに分かるものか！」

正信さんが、叫ぶ私に向けて黒い何かを飛ばしてきた。けれどそれは結界にはじき返された。もしかた吉君達が居なければ今頃どうなっていたか。私はぞっとした。

舌打ちしながら、正信さんは視線を雨音さんに戻す。そして彼女に向かってゆっくりと歩き始める。その足取りは酷く重いように感じられた。彼女を殺めたいという気持ちと本当は殺したくないという気持ちが葛藤しているのかもしれない。

時間はまだある。多分正信さんはすぐには雨音さんを殺さないだろう。その間に何か、何か出来ることはないのかしら。

「やた吉君、やた郎君。二人を止めることは出来ない？」

二人共困ったような表情を浮かべ、首を横に振る。

「おいら達にはもう、何も出来ないよ」

「俺達は他人を攻撃するような術とか、得意じゃないんだ。下手に攻撃しようとすれば返り討ちにあう。……雨音さんを連れて逃げること位なら出来るかもしれないけれど」

「そんなことしたって、ただの時間稼ぎにしかない。正信さんをこの場に置き去りにすることにもなるし。町を襲うのは雨音さんを殺した後には言っているけれど、破壊衝動が爆発すればその考えも吹き飛んでしまうかもしれないし」

「そんな」

「弥助の兄貴の方も雨音さんの攻撃をまともに喰らって、身動きが取れないみたいだ。あの攻撃、妖である弥助の兄貴に相当効いているみたいだ」

結局どうすることも出来ないの？このまま雨音さんが殺されるのを黙って見ているしかないの？けれど、雨音さんが死んでしまったら、そしたら正信さんは、今度は。

雨音さんはもう正信さんを封印するつもりは無い。殺すなんて、もつての他。

誰かが正信さんを傷つけることも、彼を殺してしまうことも、嫌

だと言う。

説得も不可能。彼の中に渦巻く狂気は、最早言葉で拭い去ることは出来ないだろう。

正信さんは雨音さんをその手で殺め、そして次に桜町を襲う。

彼一人の力で本当にそんなことが出来るのか私には分からない。雨音さんが死んだ後は正信さんを守ろうとする人は居なくなる。弥助さんが本気で立ち向かえば彼を止めることも出来るかもしれない。けれど、被害が全く出ることなく終ることが出来るかどうか……。多くの人が傷つき、殺されるかもしれない。建物も幾つかは壊されてしまうかも。

破壊と殺戮を繰り返すうち、正信さんの理性は完全に吹き飛び、真正正銘の『鬼』となるだろう。言葉も、人の姿も、理性も失い、ただ本能の赴くままに全てを壊し、殺すような存在になってしまいかもしれない。嫌、そんなのは嫌。

でも私には何も出来ない。私は止まっていた物語を動かした。けれど、物語を終らせる力は無い。

もう雨音さんは正信さんだけを見つめている。私達の声も届かない。短い時間で彼女の決意を揺るがすことはきつと出来ないだろう。このまま、黙ってみているしかないの？物語が誰も救われない方向へ進んでいくさまを、見ているしかないの？嫌、そんなのは嫌だ。嫌なのに、たまらなく苦しいのに、今の私には叫ぶことしか出来ない。

「ずっとこの日を待っていた。長い間待ち続けていたんだ。もう誰にも邪魔なんてさせない。この衣、覚えているか。君が私にくれたものだ。お揃いの衣装と言って君は笑ったね。あまりに立派なもの

だったから貰った後も着ることはなかったけれど。でも大切な日の為に私はこれを着た。そして君から貰った衣を身に纏ったまま、私は封印された」

正信さんの歩みはかなりゆっくりしている。雨音さんに語りかけ、時に立ち止まり。一步一步様々な思いを噛み締めながら進んでいる。恐らく正信さんはその手で雨音さんの体を貫くつもりなのだ。そうすることで、その手を赤く染めあげるのだろう。

ああ、そんなの嫌、嫌、嫌！

誰か、誰か助けて。どうかして。暴走した物語はもう私の手には負えない。

他人にすぎらなければいけない自分を恥じた。惨めで情けないと思った。それでも私は助けを求めずにはいられなかった。

雨が止んだ後、空が明るくなり眩しい太陽が顔を出すように。

この物語が終わった後、誰もが幸せですっきりとした気持ちになれるようにしてもらいたい。雨音さんも正信さんも救われる、そんな物語にして欲しい。誰かに、そうしてもらいたい。

心からそう願った、まさにその時。

白い光がものすごい速さでこの坂道を上ってきた。白く、白く、どこまでも白く、美しく一点の穢れも無い白。見る者の醜く黒い部分を浮き彫りにさせる、恐怖すら感じる白い光。

私はその光に見覚えがあった。それは。

光の、矢。

矢は正信さんの背中を貫いた。……胸の前で輝いている勾玉ごと。

時が止まった。

正信さんは大きく見開いた瞳で、勾玉を見つめる。そして恐る恐るそれに触れた。瞬間、勾玉は粉々に壊れた。簡単には壊れないと言っていたそれはあまりにもあっけなく壊れてしまった。

左手で苦しそくに胸を押さえながら、右手を呆然と立ち尽くしている雨音さんの方へと伸ばす。

矢が貫いた辺りが白く輝き始め、そして消え始めていた。

「正信、正信！」

雨音さんは声を張り上げ彼の名を叫ぶ。突然の出来事に固まった体を無理矢理動かすようにして、ぎこちない動きで彼の下へと向かう。

ああ、でもきつと間に合わない。彼女が正信さんの差し伸べた手を握る前に、彼は。

「あま……ね。あ、ま、ああ、ま……」

「正信、正信！ 嫌、駄目、嫌！」

泣き叫ぶ彼女の言葉は今の彼に届いているだろうか。

正信さんの顔が、腕が、膝が、真っ白な光に包まれて消えていく。雨音さんが手を伸ばす。けれどその手は悲しいほど短くて。

そして私達の目の前で、正信さんの姿は完全に消えた。雨音さんの手に触れることなく。

沈黙。ただ雨だけが世界に音を与えていた。

私はゆっくりと坂の下に顔を向ける。視線の先に立っていたのは、予想通りの人物だった。藤色の長い髪に、赤い瞳。

「出雲さん……」

彼の表情はよく見えない。けれどきつと彼は眉一つ動かしていないだろう。いつものように静かで冷たい顔つきだと思う。

出雲さんが近づいてくる。途中、地に倒れたまま正信さんが消える様子を見ていた弥助さんを蹴飛ばす。何か彼に向けて何か呟いているようだった。きつと彼をなじる言葉でもかけているのだろう。

雨音さんは呆然としていた。何が起きたのか理解できない、ううん、理解したくないといった様子だった。虚ろな瞳は何も見えていない。

少しの時間が経った後、その瞳に再び光が宿った。けれどその光は怒りと憎しみに満ち溢れた、悲しい色のものだった。

「よくも、よくも正信を、正信を、あ、ああ、あああ！」

弥助さんを攻撃した時に聞いたあの声が再び聞こえる。その声は唄となり、辺りに響き渡った。

強い風が吹き荒れ、木々を激しく揺らす。雨は地面を激しく打った。バケツの水をひっくり返した様な勢いで降り、視界を遮る。

激しく大きな音と共に雷が落ちる。

彼女の表情にはもう優しさも神々しさもなかった。とても恐ろしい、鬼の如き顔をしている。

「よくも、よくも、正信を！ 許さない、許さない！」

雨音さんは怒りの感情をエネルギーに変え、出雲さんめがけて突進していった。

「駄目、雨音さん！ 行つては駄目！」

出雲さんにとって、他人の事情などどうでもいいのだ。彼女の怒りも憎しみも悲しみもきつと彼の心には少しも届いていない。

彼は躊躇わない。何も感じない。同情もしないし、彼女の気持ちを受け止めることも決してしない。

出雲さんは矢張り眉一つ動かさないまま、弓を構える。そして現われる光の矢。きつと魔を浄化する矢ではなく。雨音さんを殺す矢だ。

そして。

矢張り少しも躊躇うことなく、その矢を放った。真っ直ぐ飛んだ矢は綺麗に雨音さんを貫いた。見事だった。残酷な位。

精霊である雨音さんを一撃で倒すことは出来なかったのか、出雲さんは何度も何度も、彼女めがけて矢を放つ。雨音さんの体が矢の光で真っ白になっていく。

色々なものを口から吐き出したくなった。涙と雨で世界が霞んで見える。

雨音さんが空を見上げた。先程までと違う、悲しい位穏やかな表情を浮かべているように見える。どこまでも暗く重く沈んだ空に、彼女は何を見ているのだろう。

彼女は微笑んだ。そんな風に見えた。

「正信」

愛しい人の名前を遺して、彼女の姿は跡形も無く消えていった。

私はその場にへたりと座り込んだ。ズボンはみるみるうちに泥水

を吸い上げ、足もお尻も濡れていく。とても冷たい。けれどそんなこと、どうでもよかった。

*

雨音さんが居なくなり、少しずつ勢いを無くしていく雨。その雨に包まれながら、出雲さんは静かに立っている。

「どうして、ですか」

震える口で言葉を紡ぐ。ゆっくりと出雲さんはこちらに顔を向ける。二人の命を奪った後でも、彼の表情は少しも変わっていない。

「道案内ご苦労だったね、やた吉、やた郎。探す手間が省けて助かったよ」

私の問いかけには答ええない。二人は小さく頷く。

「ふう、雨のせいでびしょ濡れだ。着物が肌にくっついて気持ちが悪い」

「どうしてですか、出雲さん、どうして」

こづいづことには一切興味を示さないと思っていた出雲さんが、何故ここまで来たのだろうか。そしてどうして雨音さんと正信さんを。

頬にへばりついた髪の毛を振り払いながら、出雲さんは答えた。

「どうして？ ふん、面倒だったんだよ。美味しいなり寿司を買いにこちらの世界に来る度、傘をささなければいけないことが、たまらなくね。傘をさしても、体は少なからず濡れるし、傘を持ち続けていると腕が痛くなるんだよね」

真顔で彼は言った。冗談ではなく本気なのだろう。

「しばらくは我慢したけれどねえ。でももう限界だった。だからさつさとこの雨を降らせている迷惑な奴を殺してしまおうと思つて桜山の前まで行つた。そしたら君が居た。優しい私は君に少しだけ時間を与えた」

「ずっと、私達の後をつけていたんですか」

「そうだよ。ずっと私は君達の傍に居た。気配を消し、君に気づかれないように、静かについていったんだ」

「やた吉君とやた郎君は、出雲さんがついてきていることを知っていたの？」

「こちらを見て、二人は気まずそうな表情を浮かべながら静かに頷いた。」

「ごめん。旦那から、絶対言つなつて言われていたんだ」

「言つたらすぐ私に助けを求めそうだったからね。それに君と、私の可愛い使い魔達がどんな風に足掻くのか、じっくりゆっくり見物していたかつたんだよ。馬鹿狸がこの舞台に鬼であるあの男を連れしてきたことで、ますます状況は悪化し、どうしようもない状態になつていった。とても愉快だったよ」

ふふ、と出雲さんは笑つた。

「二人共救われる、幸せな結末へと物語を運ぶなんて芸当が自分に出来ると思つていたのかい、君は。無理だよ、無理。君のような何の力も無い人間には出来ないよ。無力なくせに無駄に優しいんだねえ、君は」

その言葉が胸に突き刺さる。

「そうです、私には何も出来ませんでした。結局私は心の中で誰かに助けを求めました。出雲さんは、出雲さんには出来たんですか。力を持つ貴方には。二人を救うことが」

聞いたところで何の意味も無い。二人はもうこの世には居ない。笑みも消え冷たい眼差しで出雲さんは私を見ている。全身が凍りついてしまいそうだった。

「さあね。救ってやるうなんて最初から考えていなかったからねえ。あつたとしても、やりはしなかったと思うけれど。きつと面倒な手順を踏む必要があつただろうし。さつさと殺してしまう方が、きつとどんな方法よりもずつと楽で手っ取り早い。くだらない理由で私の遊び場である町を破壊しようとした鬼も、その鬼が死ぬのは嫌だとびいびい喚いている精霊も、すつきり消せば、万事解決する。こんな簡単な方法、他には無いと思うよ」

冷たい瞳、残酷な笑み。艶やかな唇にのせる言葉は残酷な響きをしている。

ぶれることの無いその生き方は或る意味真つ直ぐで、惚れ惚れするほど美しく、恐ろしいまでに残酷だ。

「君も馬鹿だが、あの二人も相当な愚か者だったねえ。正信という男は、愛しているからこそ殺すとか何とか言っておきながら、さつさと彼女を殺すわけでもなくごちゃごちゃ何か言い、彼女に近づくと足取りは馬鹿みたいに重い。雨音という女は、愛しているから殺したくない、彼が他の誰かに殺されるのも嫌だと言いだす。そしてうだうだやっている間に、赤の他人にその命を奪われることになった。愛する人を殺すことも、愛する人に殺されることもなく、ね」

愛する人を殺し、愛する人に殺される。

愛する人を殺すことなく、愛する人に殺されることなく死ぬ。

どちらが二人にとって幸せなことだったのか。私には分からない。

出雲さんは後者の方が幸せだと思って、二人を殺したわけではない。ただ一番楽な方法を選んだだけ。ただ、話を聞く限りでは出雲さんは前者の方が幸せだっただろうと思っているようだ。思いはしても、そうさせてあげない……それが出雲さんなのだ。

そんなことを話している間に、雨がすっかり止んだ。

暗くて重い雲が嘘みたいに消えていき、清水を湛える泉の様な色をした空と、世界を熱する太陽が顔を出した。

どこまでも青い、青い、青い空。透き通っていて、綺麗で、素晴らしい色をした空。

ああ。

ずっと待ち望んでいたはずのものだったのに。胸が苦しくて、泣きたくなった。

完結することなく眠っていた物語は動きだし、そして終わった。決して幸せな結末ではなかったけれど。どれだけ後悔してももう遅い。

私はその後しばらくその場から動くことが出来なかった。

青い空をただ、ずっと、見つめていた。

第三十三話：幻の国

「暑い。暑すぎる」

外には、一切の幸福も無い。あるのは地獄のみだ。

熱を持ったコンクリートからは何かもやもやしたものが出ているし（陽炎つてやつか？）、余命僅かと思われるセミ達は、みんなみんぎやあぎやあ歌い続けている。恐らくヤケクソだろう。微かに吹いている風を体内に取り込もうと口を開ければ、口の中の僅かな水分が蒸発し、一気に喉が渴いた。流れ続ける汗。

けれど後少しだ。後少し耐えれば、冷房の効いた映画館の中で大いに涼むことが出来る。今日はあざみと咲月と一緒に映画を観て、買い物して。思いつきり遊ぶのだ。

それにしても暑い。ニュースでよく耳にする地球温暖化という言葉。聞くだけで暑苦しくなる。くそ、バス代けちって歩こうか思ったのがいけなかった。結局途中でペットボトルの麦茶を買ってしまったし。

ああいらいらするなあ。いつそあのセミ共のように、大声で喚き散らしてしまおうか。まあ、やらないけれど、そんな恥ずかしいこと。

水瀬川にかかる橋を、あたしは渡っている。ここを渡った先が街の中心部。桜町とは正反対の、都会風の町並みが広がるのだ。

いつものように橋を渡っていたあたしは、橋の終わりを前にして軽い眩暈を起こした。同時に、体がふわりと浮いたような気がした。こんな時に貧血？勘弁してくれよ。

目を瞑り、ぶるぶると頭を振る。うん、多分大丈夫だ。

あたしは目を開けた。

目の前に広がる、見慣れた風景　いや、違う？

「ここ、どこ？」

何故かあたしは、見知らぬ草原の上に立っていた。

*

ビルも、橋も、水瀬川も無い。あるのは青く澄んだ空、白い雲、そして風を受けて踊る、翡翠の色をした美しい草原。

（あたしまさか、気を失って倒れちゃったのか？　そんなはずは無いと思うけれど）

不思議に思いながらとりあえず前へ進んでみる。

さらさら心地よい音を立てて揺れる草が、あたしの足を撫でる。あれ、けれど全然くすぐったくない。草の独特な匂いもしない。

そういえば、風を受けて髪の毛や服は揺れているのに、あたし自身は風を全然感じていない。風に触れられている感じが全くないのだ。

あたしは立ち止まり、しゃがんで草に触れてみる。確かに触れているはずなのに何も感じない。手に一切の刺激が伝わらない。

頭上でぎらぎらと輝く太陽。見ているだけでも暑くなる。しかし、暑さを全く感じない。風を受けても少しも涼しくない。

何も、感じないのだ。目の前に見えるものは、本当に存在しているものなのだろうか。幻？でも草はあたしの足をすり抜けているわけではない。ちゃんと触れている。そこにあるのに、無い。何だこれ。

矢張りあたしは貧血を起こして倒れ、夢を見ているのだろうか。それにしても変な夢だ。

それとも『向こう側の世界』に迷い込んでしまったとか。いやでもあちらの世界のものにはきちんと触れられるし、あそこでは暑さも寒さも感じるし。

とりあえず前に進んでみよう。腰をあげて再び歩き始める。

*

特に風景が変わるわけでもなく、延々と草原が続いている。どこまで進んでも、もしかしたらここには草原と空と雲と太陽しか無いのかもしれない。何も感じることが出来ないから、非常につまらない。だが立ち止まっても引き返しても、意味は無いだろう。どこをどう進んでも、何も変わらないから、

せめて優しく吹く風だけでも感じる事が出来れば、さぞかし心地よいだろうに。

どれ位進んだのかは分からない。もしかしたら進んでいるようで全く進んでいなかったのかもしれない。

あたしは、この奇妙な世界に迷い込む時と同じ様な浮遊感に襲われた。眩暈もして、少しだけふらつく。

気づけばあたしは 十字路の真ん中に立っていた。

コンクリートで舗装された道路を、ブロック塀が囲んでいる。その塀の先には木も、家も何も無い。電柱や標識、ドブ等も無い。十字路とブロック塀だけでこの世界は出来ている。

ぎらぎら照りつける太陽によって、コンクリートの道路は熱を帯びているのではと思って触れてみるけれど、やっぱり何も感じない。陽炎揺らめき、世界はぐらぐらと揺れて見える。

どの道を進もうか。あたしはそれぞれの道の先を見る。けれど、見たところどの道を進んでもあまり変わりはないさそうだった。とりあえず適当に歩いてみるか。

丁度目の前にあった道を進もうと、一歩足を踏みだした。

とん、とん。

あたしの背後で、小さな音がした。軽い何かが地面に当たっているような感じのものだった。振り返ってみる。

そこには、赤い着物を着た小さな女の子が居た。日本人形のような可愛いけれど何か不気味な感じの顔、真っ白な肌。小さな手が着物の袖からちょこつと見えている。

女の子は、金と銀の糸で装飾された、鮮やかで目を奪われるほど美しい毬をぼんぼんとついていた。

「月をついたら楽しかろう、月に憑かれりゃ悲しかろう、月に好かれりゃ嬉しかろう」

赤くて小さな唇を開けて、可愛らしい声で何か唄いながら延々と鞠をついている。一定のリズムで上下する鞠を見ていると、何だか眠くなる。

「ねえ、あなたはこの人。ここはどこなんだ」

あたしはその少女に尋ねてみた。けれど彼女は何も答えない。あたしはさっきよりも大きな声で喋った。結果は同じだった。あたしの存在に気づいていないようだ。

そんな少女のつく鞠の色が、いつの間にか変わっている。今度は青や黄色の糸で花の様な模様が描かれた真っ赤な鞠だった。

「囲炉裏匂えど、血を塗るの。我は誰ぞ、爪足らぬ。初心な奥方、

凶引いて、刃先つけ死に、恋もせず」

今度はいろは歌をもじった様な感じのもの。内容は何だかえぐい。子供の愛らしく無邪気な声で唄われると、非常に怖い。

その後も、少女が唄を変えるたびに鞠の色や模様が、万華鏡の様に次から次へと目まぐるしく変わっていく。

愛らしい唄、恐ろしい唄、愉快的唄、意味の分からない唄。どれも聞いたことが無いものだ。手毬唄には詳しくないけれど、多分あたしの住む世界には存在しないものだろうと思う。

「あ」

少女が鞠をつきそこねたのか、さっきまで規則正しく上下していたそれが、ころころと転がっていった。鞠は道の一つへと転がっていく。あたしはそれを追いかけた。ころころと転がり続ける鞠はなかなか捕まってくれない。

大分進んだところで、ようやく動きが止まり、あたしはそれを手に取る。何の重さも感じない。あの女の子に返そう。あたしはその場から立ち上がった。

「嘘。まじかよ」

また世界は変わっていた。

*

今度は、広いお座敷の真ん中に、立っていた。

体育館並の広さのそこに畳がびっしりと敷き詰められ、金色の様子が描かれた襖に囲まれている。手に持っていたはずの鞠はいつの間にか消えていた。

三味線の音と、多くの人間がわいわい騒ぐ声が聞こえる。けれど座敷には誰も居ない。座敷の外にでも居るのだろうか。いや、違う。

声や音は何故か天井の方から聞こえている。二階があるのかな。それにしてははつきりと聞こえずぎじゃあないか？

まさかと思つて天井を見、あたしは悲鳴をあげた。

天井に、人が居たのだ。

天井にも畳が敷かれ、着物姿のおっさんや子供、花魁っぽい感じの人、頭は猫で体は人間の化け物、じいさんやばあさんが天井にある方の畳に腰を下ろし、騒いでいた。木で出来た長いテーブルの上には豪華なお造り、お寿司、肉や果物、お酒等がびっしりと並んでいる。

普通なら重力によつて人間も料理も、何もかも落ちてくるはずなのに、そういうことは一切無かつた。

「一体何なんだ！」

と言うしかない。随分大声で叫んだのに、誰も気がつかない。どうやらここに居る奴等にあたしの声は聞こえないらしい。

それにしても美味そうな食べ物がいっぱいあるなあ。まあここで食べても多分何も感じないのだろうけれど。

誰にも気づいてもらえないので、若干寂しくなった。視線を何気なく襖にやり、またあたしは仰天した。手にお盆を持ち襖を歩く女の姿を見たからだ。この世界には重力もくそも無いのか。

もしかしてあたしもあんな風に、襖や天井を歩くことが出来るのだろうか。

試してみたくなくて、あたしは近くの襖の前で寝転がり、襖に足をつけた。

右足を上げ、前（上）へつけ体重を乗せてみた。

その瞬間。

ぼじつ。

「ぼじつ？」

ちよつと体重を乗せたただけだったのに、襖は音を立てて倒れてしまった。すると他の襖までもがものすごい速さで次々と倒れていった。

更に天井と、天井に居た人達、並んでいた料理等も落ちてくる。嘘だろう、勘弁してくれ！

とつさに手で顔を覆い、足を折りたたんで体をガードしようとする。ここでは物が落ちてきても何の重さも感じないとは思っけれど

想像通り、あたしは無事だった。何の重みも感じない。

あたしは手をどけ、目を開ける。今までのパターンだとここで…。

「やっぱり、ね」

またあたしは別の場所に来ていた。

*

あたしは地面の上に寝そべっていた。黄金を散りばめた夜空が目の前に広がり、雪の様な色をした満月が浮かんでいる。周りは無数の木に囲まれている。

どうやら今度は、森の中に飛ばされたらしい。

起き上がり、服についた土（実際には何もついていなかったかもしれないけれど）を払った。

(あれ?)

地面のいたる所に、光る何かが落ちているのが見えた。近づいて見てみると、それは碁石の様な形をした(多分)石だった。表面は滑らか。どちらかというところの近くで見つかりそうな感じのものだ。蛍が放つものに似た、少し緑がかかった黄色の光。見ているだけでほっとするような、優しい光だ。

あたしはそれにそうつと触れた。

すると、触れられた石はぽん!と音を立て弾けてしまった。そこから何か黒いものが勢いよく飛び出してくる。思わず尻餅をついてしまった。

石から飛び出してきたのは、蝶だった。漆黒の羽根に、瑠璃色の模様。美しいその蝶は銀色に光る鱗粉をばらまきながら、あつという間に空まで飛んでいき、やがて見えなくなった。

これは石ではなく、卵だったのかもしれない。でも蝶って最初は芋虫だよな。?まあいいか、きつとこの世界では何でもありなのだ。

蝶が出た後の卵は光を失い、やがて塵となって消えていった。

試しに他の卵にも触れてみた。矢張り同じように黒い蝶が中から出てきた。

何だか楽しくなつてあたしは、手当たり次第に卵に触れていった。そうしながら森を進んで行った先にあったのは、大きな泉だった。

透明な水は夜空を映し、きらきらと輝いている。その夜空の中を、気持ち良さそうに魚が泳いでいる。

その泉の約半分を占拠しているのは、巨大なあの卵だった。ダチヨウの卵など、これの前ではうずらの卵と化すであろう。

「うわ、でか！ あれも卵かよ」

泉から、その卵へと続く橋が架かっている。触ってみるといこうとだろうか。

恐る恐る橋を渡り、卵の前に立つ。近くで見るとものすごい迫力だ。

これに触れたら、とんでもなく大きい、最早蝶とは呼べないレベルのものが出てくるのだろうか。まさかそいつに喰われちゃう、なんてことはないよな？

いや大丈夫。どうせここは夢の世界なんだろうから 自分にそう言い聞かせ、思い切ってその卵に触れてみた。

触れた瞬間、腹まで響く恐ろしく大きな音が響き渡り、卵が弾けた。

そこから出てきたのは大きな蝶 ではなく、無数の蝶だった。

青い輝きを持つあの黒い蝶だけでなく、燃えさかる炎の様な色の蝶、虹色の蝶、透明な蝶、黄金の蝶等ありとあらゆる種類の蝶が、次から次へと飛び出してきた。

その蝶達の羽音は鈴の様な、綺麗で透き通ったもの。しかしこれだけ数が多いと、綺麗な音はただの騒音となる。

好き勝手な方へ飛ぶ彼等によって、木も空も泉も、全てが覆われていく。

この世界は蝶で埋め尽くされようとしていた。卵からはまだ新たな蝶が飛び出し続けている。

金銀様々な色に光る鱗粉が雨のように降り注ぎ、あたしを包み込む。

最初の内は幻想的な光景が広がっていたが、あまりに蝶の数が多

くなりすぎて、段々と恐くなってきた。

あたしはその場を離れる為、橋を渡ろうとする。

しかし途中でバランスを崩してしまい、あっという間に泉に落ちてしまった。

冷たくない水。しかも全然苦しくない。

あたしの体は重りがついているかのようになり、どんどん沈んでいく。泉に映る無数の蝶に抱かれながら、下へ、下へ。

多分また、次の世界に飛ばされるのだろう。何となく分かる。

あたしは流れに身を委ね、静かに目を閉じた。

*

目を覚ます。あたしは真っ白な石畳の上に立っていた。

右手には広大な海が広がり、左手にはおしゃれな家が立ち並んでいる。日本には見えない。多分外国。外国の港町といったところだろうか。

空は青く、雲ひとつ無い。さきほどまでいた世界は夜だったが、ここはどうやら昼のようだ。

あたしは街の中へと入っていった。

町の中は迷路の様に入り組んでいて、自分がどこからどういう道を進んでいったのかあつという間に分からなくなってしまった。石で出来た橋が沢山あり、その下には運河が流れている。そこには、巨大な折り紙で出来た鶴が浮いていて誰かが乗っており、水の流れと手に握るオールを利用して前へと進んでいた。

家と家を繋いでいるロープの様なものには鬼灯の形をした提灯が吊るされている。

しばらく適当に進んでいると、大きな広場に出た。広場は特別大

きな建物に囲まれていて、中央に立派な噴水がある。噴水の前で、三味線を弾きながら歌っている男の人が居た。服装や歌は外国のものっぽい。和と洋がごっちゃになった感じの弾き語りに、多くの人がピザらしきものを片手に聞き入っていた。

よく見てみると、彼だけではなく色々な人が色々なパフォーマンスを疲労している。手品、曲芸、劇、ダンス……。

弾き語りをしている男の、噴水を挟んだ反対側にも人だかりが出来ている。何をしているんだろうと見てみれば、そこでやっていたのはパフォーマンスの類ではなく、バスケットの販売だった。

ねじり八チマキに法被にブーツ姿のおじさんが、小ささまざまなバスケットを売っていたのだ。あんなもの売れるのか？とあたしは首を傾げたが、不思議なことにそれはちよくちよく売っていた。あんなもの、こんな所で買う必要がどこにあるんだ？

広場を離れ、また先へ進む。今度はさつきとは別の広場に辿り着いた。

そこにはさつきよりずっと多くの人が出て、殆どの人がその手にバスケットを持っていた。皆笑いながら色々お喋りしたり、広場の奥にある屋台で食べ物を買ったりしている。

今日は何かのお祭なのだろうか。聞こうにも、ここに居る人達にはあたしの姿は見えないし、声も届かない。

つまらない、先へ進もうと思ったその時、広場に居た人達が大きな歓声をあげた。あたしはびっくりして立ち止まる。

皆空を見上げ、両手をあげる。つられてあたしも空を見上げた。

何かが、空から降ってきた。まさかさつきの蝶？いや、違う。

花だ。花がふわりふわりと地上に向かって落ちてきているのだ。

大きさも形も、色も違う沢山の花。見慣れたものも、見たことが無

いものもある。

人々はそれを優しく受け止めると、次々とバスケットの中に放り込んでいく。あのバスケットは空から降ってくる花を入れる為のものだったのだ。空から次から次へと降ってくる花を皆楽しそうに受け止める。あたしもキャッチしてみよう。これがまあ、意外と楽しい夢中になって花を掴み、抱きしめる。気づけば腕の中は花でいっぱいになった。

やがて花は降らなくなる。その後、人々は自分がとった花を見せ合ったり、交換したり、あまりとれなかった人へあげたりしていた。皆とても幸せそうで、満面の笑みを浮かべている。

あたしは自分が手に入れた花を見る。あたしも他の人に見せてやりたい。けれど、誰もあたしには気がつかない。何だかむなしくなった。あまりにむなしくなって、抱いていた花を全て宙へ放り投げた。ばさばさという音と共に、花は地面に散らばった。

「おやおや、もったいないことをするねえ」

しわがれた声が聞こえる。まさか、あたしに話しかけているのか？びつくりして振り返ると、そこには小柄なばあさんが立っていた。ばあさんは手に風鈴を持っている。

「あたしに話しかけているのか？ ばあさん、あたしのことが見えるの」

ばあさんはにんまりと笑った。矢張りあたしのことが見えているのだ。

「見えるし、お前さんの声も聞こえる」

「ここは、どこなんだ。あたしは帰れるのか」

「詳しいことは『あの方』に聞きな。この風鈴を持ってごらん。『あの方』の所まで行けるからね。大丈夫さ『あの方』ならお前さんを元の世界へ戻してくれるよ」

そう言つて、ばあさんはあたしに風鈴を差しだす。それをゆっくり受け取る。見た目は何の変哲もない、ごく普通の風鈴だ。

あの方とは誰か。それを聞こうとしたが、間に合わなかった。あたしは風鈴に吸い込まれ、この世界を後にした。

*

恐らく最後になるはずだろう世界は、一面中砂漠の世界だった。

その砂の色と同じ布に身を包んだ誰かが目の前に座っている。ばあさんが言っていた『あの方』だろうか。

「ようこそ、現の世界に住む者」

男の声だ。若いか老いているか、声を聞いただけでは分からない。

「ここは、どこなんだ」

「ここはどこにも存在しない世界。全てがあり、全てが無い世界だ」意味が分からない。ただ矢張り『向こう側の世界』で無いことは確かのようにだった。

「幻の国、と思つてもらえればいい。実際には存在しない世界。気まぐれに姿を変え、無限の幻想を作り出す。私は気づいた時にはこの幻の国に居た。他の者は時間が経てば消えていくが、私とお前が出会ったあの婆だけは消えずに存在し続けている。しかし私達もまた、実際に存在しているのか、ただの幻に過ぎないのか。それは未だに分からない。ただ私とあの婆は、稀にこの世界に迷い込む、現の世界に住む者と話をすることが出来るようだ。そして、その者達を現の世界に戻すことも、出来る。これは私にしか出来ない

ことだが」

あたしのように、この世界に迷い込む人が居るということだろうか。

「迷い込む条件、もしくは理由は分らん。まあどうでもいいことだろう。お前がこの世界に来ることは恐らく二度とあるまい」

「あなたはあたし達の住む世界へ行くことは出来ないのか？」

「さあ。試したことがないからな。というか興味も無いし。私はこの幻の国の王として、これからも気ままに生きていくさ。私の手を握ってごらん。元の世界へ帰れるから」

そう言っつて、男は手を差し出す。褐色の手。あたしはゆっくりと男のところまで行き、恐る恐るその手を握った。徐々に温もりを感じた。大きくてがっしりとした手。

あたしはまた浮遊感を感じ、目を閉じた。

*

目を開けると、あたしは水瀬川にかかる橋を渡った先に立っていた。嫌な暑さと、喉の渴きを感じる。携帯電話を覗き、時間を確認する。どうやら時間は全くと違っていいほど経っていなかったらしい。普通に集合時間にも間に合う。

幻の国。どこにも無い、全てがあって全てが無い世界。とてつもなく変てこな世界だったけれど、もう二度と行くことはないだろうと思うと、ほんのちよびつとだけ寂しい。

まあ、でもいいか。遠くの虚より、近くの現。沢山遊ぼうと。

あたしは、二人の待つ映画館を目指して駆け出していった。

第三十四話：嘘は真実に

嘘を真実に変えてみよう。

夜を彷徨い続ける私に、男はそう言った。

妖しく歪む口元、闇へ染まる前の空の色をした髪。

嗚呼、男は人間では無いのだ。

男は言う。全てを凍りつかせる、冷たく静かな声で。

私と一緒に、復讐してみないかい？

『嘘は真実に』

「読書感想文、面倒くさいよさくら姉」

「そうねえ。私は読書は好きだけれど、読書感想文は苦手だわ。後小論文とかも」

「ええ、さくら姉も読書感想文苦手なの？ 何か意外。提出するのは一個でいいのに、何個も書いていそうなイメージがあっただけど」

紗久羅は目を丸くしながら、クリームソーダを飲む。テーブルの上を広げている原稿用紙は真っ白。その傍らに本を何冊か積み上げている。

一番上にある本を手に取り、めくる。しかしすぐ閉じる。文字の羅列をちよっと見るだけでうんざりするのだ。

「流石に本にちよこつとだけ書いてあるあらすじだけで原稿用紙五枚埋めるのはきついもんなあ。ある程度は読まないと駄目なんだよなあ」

机に積まれている本の殆どは、さくらが持ってきてくれたものだ。その本の殆どは長編で、かなりぶ厚い。文庫サイズでページ数がそんなに多くないものもあるが、そちらは文字がかなり小さい上にぎつしりと詰まっている。難しい漢字がふりがな無しに並んでいるもの、一昔の作品でよく分からないものなどもある。

ここまで持ってくるのは、重くて大変だっただろうと紗久羅は思った。自分の為にそこまでしてくれた彼女に感謝もした。しかし、自分の肌合いそうなものは残念ながらありそうにない。

正直にちよつと駄目そうだと言っても、さくらは少しも気分を害した様子は無く、気にしないでと微笑んだ。

「好き嫌いあるもの。好きでない本を読んでも、面白く無いと思うわ。自分が読めそうなものを探してみるのが一番かもね」

「ごめん。わざわざ持ってきてもらったのに」

いいのよ、とさくらは首を横に振った。紗久羅はこれがあたしだったらあからさまに機嫌を悪くしていただろうと思う。祖母譲りの短気娘だから。

夏休みも大分終わりに近づいてきた。喫茶店『桜』SAKURAで溜めていた宿題を進めている。それに付き合うさくらの方はもうとっくに宿題はやり終えてしまったらしく、今日は秋にある文化祭で出す部誌に載せる小説を書き進めていた。

大体読書感想文などをやらせることに何の意味があるというのだろう、と毎回紗久羅は思う。国語や数学、英語のテキストをやるというのはまだ分かるのだが。ただ適当に本を読み、あらすじや単純

な感想で原稿用紙を埋め、提出するようなものに、何の意味も無いような気がするのだ。

しかし文句を垂れても仕方無い。やらなければならない。紗久羅はため息をつく。

「いつそ桜村奇譚集を読んでやってみたら？」

さくらは笑い、チヨコレートパフェを頬張る。紗久羅は顔をしかめる。

「ええ、あれをか？ ああいうのじゃ感想なんて書きようがないじゃないか。大体あれってあの化け狐の話が沢山あるんだろう？」

「出雲さんのこと？ 確かに多いわね。しょっちゅう話の中に出てくるわ」

ええと、と言いながらさくらがカバンの中をがさこそやり始める。彼女が取り出したのは灰色のバインダー。表にはサインペンで「桜村奇譚集」と書かれている。

紗久羅はそれを指差し、何それと聞いた。

「桜村奇譚集を、自分なりに纏めたものよ。出てくる妖などでジャンル分けしているの。色つきの仕切り紙で分けているの」

バインダーから覗く赤や青、黄色などの仕切り。

「全部そこに纏めたの？」

「桜村奇譚集に載っているものは多分全て。手で書くのはとても大変だったけれど、楽しかったわ」

「せめてパソコンでやればいいのに」

パソコンでやったとしても、そこそこ時間はかかるだろうが。紗

久羅は感心するやら呆れるやら。

「私パソコン苦手なの。キーボードを打つのも遅いし。それに手で書くほうが味があるし、温もりもあるし。手書きってとても魅力的で」

そしてその後延々と続く、手書きの素晴らしさについての語り。紗久羅は分かった、分かったと慌ててさくらの口にオレンジパフェを突っ込む。さくらは目をぱちくりさせながらそれをもぐもぐと。そうしながらバインダーを開き、紗久羅に渡す。

紗久羅はそれを受け取り、目を通してみる。この話が何ページに載っていたものなのか、読んでどう思ったか、類似している話はあるか、などが細かく書かれていた。最早阿呆としかいいようのない領域に達している。

黄色い仕切り紙に「出雲」と書かれていた。その紙をめくると、出雲に関する言い伝えなどがびっしりとある。

「出雲さんは本当によく出てくるわ。名前ははつきり書かれていなければ、多分彼のことだろうと思うものも多いし。あの人は、桜村とは切っても切れない縁で結ばれていたのねえ」

「あいつとそんな縁で結ばれちゃった桜村の人達……かわいそうに。しかしまあ、本当にろくでもないことばかりしているんだなあ、これを読む限り」

紗久羅は顔をしかめる。書かれているものの殆どが、彼が悪事を働いたというものだったのだ。窃盗、詐欺、誘拐、脅迫、傷害、殺人。他人を精神的に追い詰めたり、生殺しにしたり、友情にひびを入れたり、カップルを破局に追い込んだり、畑を荒らしたり。悪逆非道とは、まさに奴のことだと紗久羅は思った。

紗久羅は目に留まった一つの物語を読んでみる。

村に居た二人の男。二人は親友同士で、とても仲が良かった。ある日二人は夜道で美しい女に出会った。二人は見知らぬその女に見惚れ、思わず近寄った。女はこの辺りに大事な物を落としてしまったのだが、見つからない、一緒に探して欲しいと頼んできた。二人は快く了承し、女が落とすとしたという物を一緒に探した。

二人はしゃがみ、草むらをかき分け、探し続ける。

すると何か鈍い音が聞こえた。男が音のした方を見ると、もう一人の男が倒れていた。後ろを振り返ると、女がにたりと笑っている。手には大きな石を持っており、そこにはべつたりと血がついていた。男は自分達が騙されたことに気づき、慌てて逃げる。女の笑い声は段々低くなり、やがて姿を変え、一匹の狐になった。女の正体は出雲だったのだ。

男は命からがら逃げ切ったが、親友は死んでしまった。

そしてその数日後、逃げ切った男の方も同じように石で頭を割られて殺されてしまった。恐らく出雲がやったのだらう。

狙った獲物は逃がさないということだらうか　なんと執念深く、残酷な化け物だらうか、と村人達は嘆いた。

そんな話。えげつない奴だ、と紗久羅は呟く。

「あいつは悪いことをしなければ死んじまう病気にでもかかっているのか？」

「時々良いこともしているみたいだけれど。やりたい時に、やりたいと思うことをやる。とても自由な人。まあここに書かれていたようなことを実際にやっていたのでしょいうね　まあ全てが真実とは限らないと思うけれど。もしかしたら実際にはやっていなかったことも書かれているかもしれない」

「そう、その通り」

聞き覚えのある、氷の音が聞こえ、二人はどきりとして固まった。見ればいつの間にか紗久羅の隣に出雲が座っているではないか。紗久羅は口をぱくぱくさせ、さくらは目をぱちくりする。

「お、お前いつの間にそこに！」

「全然気がつかなかったわ……」

「そりゃそうだろうさ。見つからないように気配をばっちり消していたのだから。菊野から、紗久羅がここにいるという話を聞いてね遊んでやろうと思って来たのだけれど。随分楽しそうに話していたじゃないか、ねえ？」

意地悪い笑みを浮かべ、わざと紗久羅に顔を近づける。紗久羅はひい、と悲鳴をあげて窓際に避難する。ほんの数センチでも離れなければ、喰われると思ったのだ。

出雲は、バインダーの下に広がっている原稿用紙をつまらなそうにつまみあげる。

「君達は大変だねえ。これって原稿用紙って言うんだろう？ マスの中に文字を書き入れるという、あれ。毎日面倒なことばかりやっついてさ、楽しいの」

出雲の手にある原稿用紙を、紗久羅は奪い返す。

「好きでやっているわけじゃねえよ。しょうがないだろう、宿題なんだから。やらないと、後が面倒なの」

ふつん、とつまらなそうな声をあげ、頬杖をつく。絹糸の様な髪がざらりと揺れる。

「で、そんな面倒なことをやっている最中に、君達は私の行ってきたことについてぺちやくちゃ話していた、と？」

あからさまな嫌味だ。二人は彼から視線を逸らす。

出雲は肩をすくめた。

「まあ、どうでもいいけれど。紗久羅は、宿題を放り投げてまで、私のことを知りたかったのだね。愛されているなあ、私は。幸せなことだ」

窓に視線を向けている紗久羅の顔を手でくいつと動かし、自分の顔と向き合わせる。満面の 邪悪な笑顔を浮かべながら。氷を彫って作り出されたかのような手に、紗久羅の顔中の筋肉が凍りつく。流れる冷や汗。

「うん、良い顔をしているねえ。こういう顔を見るとなんかぞくぞくするよ。個人的にはもっと歪ませてあげたいなあ、って思うのだけれど」

触れられているのは紗久羅のはずなのに、さくらは自分の頬まで冷たくなり、顔中が凍りつくのを感じた。

とても恐ろしい人。でもそこがたまらないとも思う さくらの感覚は普通の人間のそれとは少し違うのだ。数日前、彼が一つの物語の幕を残酷な形で下ろしたところを目の前で見ていたのにも関わらず、それでもまだ彼と関わることをやめたくないと思っているような娘である。

紗久羅は出雲の手を無理矢理引き剥がした。

「やめる、このど変態。全く本当にお前ろくでもないことばかりやっていたんだな！」

まあ色々やってきたねえ、と言いながら原稿用紙を指でなぞる。

「紙って便利なんだねえ、大昔に起きたことをこうして後世に残すことが出来るのだから。もう知られていないような話も、文字さえ読めれば知ることが出来る。まあ書かれていること全てが真実とは限らない、というのが難点だけれど。真実だけで構成されたもの、嘘の入り混じったもの、嘘だけのもの。実に色々あるねえ」

「やっぱり 当時は説明できなかった事象を無理矢理説明する為に、これはこういう妖がやったことですよっていう物語が出来たとかあるんですか」

「そういうのもあるだろうね。……他には、自分の犯した罪を妖に擦り付けたっていうものかな。例えばある一人の男が、人を殺してしまった。当然犯人が自分であるということがばれば、厳しい罰を与えられるだろう。それは何としても避けたい。どうするか。」

そこでその男は考える。そうだ、恐ろしい化け物が殺した、ということにすればいい。男は村人達に、自分の目の前で人が何々に殺されたと言いつらす。村人達はそれを信じる。そして、終わり。男の犯した罪は闇へ葬られ、嘘の物語だけが後世に残る。まあ、こんな感じ」

そう言っただけで出雲は、紗久羅が飲んでいたクリームソーダを勝手に飲む。紗久羅が頬を膨らませる。

一方のさくらは、全ての凶事の原因であると言われ、憎まれ続けた結果、鬼となった男のことを思い出し、胸を痛めた。

「じゃあ、桜村奇譚集に書かれている話のどれが真実で、どれが嘘なんだよ。そんなもん見ただけじゃ分からないよ。向こう側の世界の存在を知るまでは、全て作り話だと思っただけだよ」

「そんなの、知らないよ。私についての記述も多いようだが、どれが本場で、嘘なのかなんて見ただけじゃ分からない。ていうかそん

な大昔にやったことなんて、忘れてしまったよ。いちいち自分がやってきたこと全てを覚えていたら、疲れてしまう」

さらさらと流れる髪をいじりながら、さくらがまとめた、自分に関する話を読んでいるようだが、いまいちピンときていない様子だ。そもそも数年前に自分が傷つけた骨桜のこともろくに覚えていなかったような男。数百年前にやったことなどまともに覚えているはずがない。

「出雲さんが、巫女の桜さんと相討ちになったという部分も真実では無かったように　全てが真実とは限らない」

「そうだねえ、あの話もそうだったねえ。まあ、あの部分は村人達の希望的観測ってやつなんだろう。残念ながら、ぴんぴんしているけれど。私は桜を喰らった後も、色々やっていたのだけれど。その辺りの話は殆ど残っていないようだ。余程私の存在を消したかったらしい」

「そりゃあ、お前みたいな奴居なくなってくれた方が、嬉しかっただろうよ。あたしだって全力であんたの存在を消しただろう」

と紗久羅が言えば、今度は出雲が頬を膨らませていじける。

「酷いなあ、紗久羅は。今の言葉で私はとても傷ついたよ」

「嘘つけ、お前なんかに傷がつくような心なんてあるもんか」

酷い言いようである。さくらも心の中でその言葉に同意したが、流石にちよつと胸が痛む。

「本当に紗久羅は素直じゃないなあ。ああ、可愛い、可愛い」

「お前いっぺんその頭かち割ってやろうか？」

「出来るものなら、やってみれば？ まあ兎に角何が真実で、嘘であるのか。そんなものはさあ、知らない方が楽しいと思うけれどねえ。真実と嘘が入り混じり、二つの境界が曖昧になっているからこそ幻想は生まれ、物語は甘い蜜を垂らす。けれど、二つの境界がはつきりしてしまえば、全てが壊れ、味も素っ気も無い物語と化す。そんなのつまらないじゃないか」

げんこつ振りかざす紗久羅のことも無視して、出雲は話し続ける。確かにそれもそうなのだけれど……とさくらは複雑な気持ち。色々知りたいという気持ちと、知らない方がいいこともあるという気持ちがちやぐちやぐちやに入り混じっている。

出雲は笑う。冷たくて、艶やかな笑み。

「まあ私としては、君達が真実を追究する為にどんどん深みに嵌り、向こう側の世界に入り浸り、堕ちていく様子も見てみたいとは思っただけだね。ふふ、少しも学習せず同じ事を繰り返して墮落していくさまって、見ていてとても面白いんだよ。ふふ、これからも私を楽しませておくれ」

出雲は、オレンジパフェをこれまた勝手に一口食べると立ち上がり、あっという間に店から消えていった。

「あいつ……結局何しに来たんだ？」

「さあ……。さくらちゃんと遊びたかったみたいだけれど」

「どっちかというと、あたし『で』遊びたかったって感じだったな。というかあいつ人のクリームソーダとオレンジパフェ、勝手に飲み食いしやがって！」

「でも一口ずつだったから、まだ残っているわ」

「だってあいつが口をつけたものを、食べたり飲んだりしなくちゃいけないんだぞ。あいつと間接キスなんて嫌だ！」

「あら、化け狐さんと間接キスなんてなかなか出来ないことよ。素敵なことじゃない」

「さくら姉……」

今後さくらが、出雲が言ったように堕ちるところまで堕ちるのではないかと、割と本気で心配する紗久羅だった。

*

私はついさつき、頭を石で殴られて殺された。

一番の親友に。

理由は分からない。恨まれるようなことをした覚えは無い。だが、薄れゆく意識の中で「俺のことを馬鹿にしゃがって」という彼の声を聞いたような気がした。私が彼を馬鹿にした？そんなことをした覚えは無い。酒に酔った時私が何か言ってしまったのか？何か誤解でもしていたのか？分からない。理由が分かったところでどうなるわけでもない。私は殺された。

私の魂は肉体から抜け出している。正座をして、もう動かない自分の体を眺めた。変な気持ちだった。頭から真つ赤な血を流し、目を大きく開けて死んでいる私。

闇の中に、橙色の灯りがぼつぼつと浮かび上がる。それと共に聞こえるのは、足音だ。誰か来る。

炎に照らされこちらに来ている人達の体の輪郭が、徐々にはつきりとしてきた。やってきたのは村人達。そして彼らを率いているのは私を殺した男。

彼らは私の死体を見て、うっと呻いた。顔を手で覆いすすり泣く者もいた。

私を見下ろす形で立っている私の親友は、酷く冷たい目で私を見た後顔を歪め、鼻をすすり、嗚咽した。

「ごめんよ、ごめんよ。俺は何も出来なかった。俺一人だけで逃げてしまった」

私は瞬きし、首を傾げる。一体何の話だ。意味が分からなかった。彼のすぐ後ろにいた村人が、彼の肩をぼんと優しく叩く。そして酷く悲しい顔をしながら、首を力なく横に振った。

「お前は悪くねえ、悪いのは出雲だ。あの性悪狐め、人の親切心につけこんで、酷いことをしやがる」

出雲？何故そこで出雲の話が出てくるのだろう。私の死に、彼は関係していない。しかし皆、あの狐め、出雲めと彼に対して怒りを向けているのだ。

「俺は許さない、あの狐のことを。ああごめんよ、ごめんよ。俺を許しておくれ」

そう言って彼はひざまずき、私の顔を覗き込む。しかしその顔に後悔や悲しみは浮かんでいなかった。むしろ笑っているように見える。涙なんて流していない。だが彼が微塵も私の死を悼んでいないことに、誰も気づいていない。彼の丸めた背中を見て、可哀想にと嘆くだけだ。

違う、私は出雲に殺されたのではない。彼に、今日の前に居る彼に殺されたのだ。私は口を開く。しかし誰の耳にも私の声は届かない。

村人達は神妙な面持ちで、私の体を荷車にのせて運ぶ。私はただ呆然としながら、自分の体と村人達、そして私を殺した友が再び闇の中へ消えていくのを見ているしかなかった。

ざわざわ騒ぐ木々や草、黒い空。

私はこれからどうすれば良いのだろう。どこへ行けば良いのだろう。友の嘘を忘れ、黄泉へと向かうべきなのだろうか。しかし今の私はどこへ行くこともできないような気がした。

あても無く、深い闇の中を彷徨い続けるしかない。自分は今何を思い、何を感じ、何をしようとしているのだろう。思考は暗闇にかき消されていく。

このまま彷徨い続けたら、私はどうなるだろうか。

行くべきところに行くことも出来ず、全ての思いが消え失せ、ただこの世を彷徨い続ける惨めな亡霊となるのだろうか。

ざあ、ざあ、ざあ。不安そうに揺れる木々、不気味に吹く風。

こつ、こつ、こつ。闇の向こうから、誰かの足音が聞こえた。誰か村人が戻ってきたのだろうか。

足音は少しずつ近づいてきて、やがてその人物の姿がはっきりと見えてきた。

その人物は男だった。しかし村の者では無かった。初めて見る顔だ。

空に浮かぶ月の様な肌。熟れた果実の色をした瞳。唇は濡れ、ぎらぎらと輝いている。

宵闇に染まる前の空と同じ色をした髪は、そこらに居る女よりなお長い。その髪の色を見れば、いやそれを見なくても彼が人間では無いことは一目瞭然だった。

ありえない位美しく、妖しく、不気味な男。神や仏では無い。その身に纏っているのは、邪悪な何かだった。

彼には私が見えている。

「可哀想に。殺されたんだってねえ、君」

低くも高くも無い声。可哀想とは言っているが、本気でそう思っていないことは声と表情によく表れている。むしろこの状況を楽しんでるようだ。

「さつき、村人共が話しているのを聞いたよ。……出雲に殺されたんだって?」

そう言っつて浮かべる笑みは恐ろしく、体の中をぐちゃぐちゃにかき乱し、私は吐き気を覚えた。違う、私は出雲に殺されたのではない、と言っつことすら出来ない。

何も答えず、俯き、顔を歪める私を見て男はまた笑う。

「あはは。まあそんな怯えないですよ。私は真実を知っているよ。

君は出雲に殺されたわけではない」

顔をあげる。その言葉は嘘ではないと思った。

「だって、私は 君なんか殺していないもの」

消えた笑み。聞いたものを凍りつかせるその声で、彼は……出雲は、そう告げた。

何となくそうではないかと思っていた。目の前に居る男は出雲なのだろうと。村に悪さをする彼が人に化けた姿は、恐ろしく美しいと聞いていたからだ。

「……お前が、出雲なのか」

「ああ、そつだよ。私は君を殺してはいない。少なくとも私にそんな記憶は無い。では何故君の友人は出雲が君を殺し、自分も殺されたか。嘘を吐いたか。それを考えれば、真実など簡単に姿を現す。君を殺したのは、彼なんだろう？」

私はその言葉に、ゆつくりと頷く。出雲は満足気に微笑んだ。

「都合のいい時だけ、私達を利用して。勝手だよ。人間って。そしてとても脆く、愚かだ。まあそういうところが好きなのだけだ。」

「あんたは、何が目的で私の前に現れたんだ。」

楽しそうに笑う出雲に、鋭い声で問うと彼は笑うのをやめ、冷たい顔で空を見る。

そしてゆつくりと顔をこちらに向ける。

「嘘を真実に変えてみるつもりは無いかい？」

「何？」

「だからさあ、彼が吐いた嘘をさ、真実に変えてみたくは無いかい。って聞いているんだよ。君が彼に殺されたという事実を変えることは出来ないけれど。」

「それは、つまり、どういう？」

「君の無念を、私が晴らしてあげるってこと。勿論君にも少しだけ手伝ってもらうけれど。自分の罪を私に押しつけた、愚かな男に罰を与える。」

「彼を殺す、と。」

自然と震える声。

「憎いだらう？ 殺してやりたいだらう？」
どうなのだらう。出雲に言われて私は考える。空っぽの体から答えは出てこない。頭の中にもやがかったような感じがしている。

「それとも君は放っておくのか？ 罪から逃れ、のうのうと生きようとしている彼のことを。自分の人生を奪った男が、幸せな人生を送ることを、許すのか？ 君は死んだ。もう何も出来ない。食べることも眠ることも、生きている人と話すことも、恋をすることも。全て君は失った。一方の彼はどうか？ 罰せられることなく生きていく。君がもう出来ないこと、その全てを彼はすることが出来る。悔しくないかい？ 憎くないかい？ 全てを奪った男のことが」

出雲の声が、闇の中に響いている。

憎くないのか、悔しくないのか。

許すつもりなのか。

出雲の声と、騒ぐ木々の声が合わさり、少しずつ私の中にあつた何かを呼び覚ましていく。闇は濃い。とてもとても、濃い。それが私の中に入り込んでくる。

楽しい思い出。代わりは居ないという位に大切だった友。ふざけあい、笑いあい、時に喧嘩した。同じ女性を好きになって、火花を散らしたこともあった。結局二人共振られて、思わず笑ってしまった。

彼の笑顔が闇に侵食されて、少しずつ消えていき、死にいく私を見ている時に浮かべていた、鬼のような形相が現われる。

私は死んだ。だが彼は生き続ける。身に覚えの無いことで私を殺

しておきながら、その罪の全てを出雲に擦りつけ、裁かれることなく。
笑いながら生きるといふのか。人を殺しておきながら。全てを奪っておきながら。

それを許せるか？彼の罪をそのままにして、大人しく成仏出来るか？

ざわ、ざわ、ざわ。

闇の中、静かに暴れ狂う木々。暗い、暗い、暗い闇。ぼやけていた頭の中。風に吹かれ、霧は晴れていく。

「私と一緒に、復讐してみないかい？」

月の光を背に受けて、輝く出雲。

私は、目の前に立っている男と同じ笑みを浮かべた。

*

男は、ふらふらとある場所を目指し歩いていた。何かの声に導かれ、ぼうつとしながら。

宵闇の中を歩き、辿りついた先は木々に囲まれた何の変哲も無い場所。

聞く者を不安にさせるような木々のざわめく音も、今の彼の耳には殆ど届いていない。

道の先に、一人の女が立っていた。艶やかな黒髪、ほっそりとした体、真っ赤な唇。肌は白い。

男はその女に一瞬で心を奪われた。夜道に、見知らぬ女が立っていることを少しも怪しむことは無かった。意識の殆どを失っているから。

月に照らされ輝く女は誰よりも美しい。

「もし、その貴方。助けてくださいませんか」

ひんやりした声もまた艶っぽく、男は唾を飲み込む。

「どうしたんだ」

「この辺りに、大切な物を無くしてしまったのです。一緒に探して下さいませんか」

「勿論、構わないよ」

「ありがとうございます」

そう微笑む女が悪意をその内に秘めていることなど、男は気づきもしない。

今自分が置かれている状況が、何かに似ていることにも。

男は「大切な物」というのが何であるのかも聞かず、草むらをかきわけ、女が落としたというものを探し始める。月が落とす雫が冷やしている草が、男の体温を奪っていく。しかし男はそんなこと、少しも気にしない。

ざわ、ざわ、ざわ。

男は知らない。自分の背に立っている女が何をしているのかなど。やがて男は見つけるだろう。

草むらに隠された物を。

*

彼はもうすぐ見つけるだろう。草むらをかき分けるその手が近づいてくる。

後少しで触れる。

私を殺した石を持っていたあの手が。

ああ、今触れた。「あつた」とあがる声。

彼は触れ、そして見ただろう。

にんまりと笑った私の姿を。出雲によつて、ほんの一時の間だけ実体を得た私の魂。実体化した部分はほんの一部。……首だけが、彼の目の前に現われている。

大きく見開いた目、割れた頭、流れる血。

彼があつと悲鳴をあげる。彼の意識は呼び戻された。

そして恐らく気がついただろう。

今自分が置かれている状況が、自分が吐いた嘘のそれと全く同じであることに。

しかし今更気がついても、もう遅い。彼はゆっくりと振り返る。彼は見たはずだ。大きな石を振り上げ、にんまり笑う女の姿を。

「私と共に、地獄へ堕ちよう」

私のその声を、彼は聞いただろうか。

振り下ろされる石。響き渡る鈍い音は酷く懐かしいものだった。

人を恨み、憎み、死へと追いやったからには私も極楽へは行けぬだろう。しかしそれはまた彼も同じだ。

嘘は彼自身に返り、彼の命を奪った。

村人達は彼を見つけ「逃げた彼まで出雲に殺されたのか」と思うだろう。獲物は決して逃さない、執念深い狐だと言うに違いない。

私は出雲に殺されたわけでは無い。しかし彼は出雲に殺された。ただの嘘であったもの。嘘でしかなかったものは、出雲の手によってその姿を変えた。

『出雲に騙され、殺された男』は実在する。出雲が石を振り下ろした瞬間に、嘘は真実に変わった。

意識が薄れていく。ああ私はもう少しで旅立つのだ。赤に染まる血のついた石を持つ出雲は、とても静かで冷たい表情をしていた。

「さようなら。二人仲良く地獄へお行き」

そう言うと彼は踵を返し、深い闇の中へと消えていった。きっと彼は私達のことなどすぐ忘れてしまうだろう。

彼の姿が闇の中へ溶けていった瞬間、私の意識は完全に消えてなくなった。

番外編 6：桜村奇譚集 4

桜村奇譚集 4

『キキヨウ迎え』

桜村及び周辺の地域では、家族の帰郷を迎える時、家の戸に桔梗の花を模したものを飾る。桔梗の花の季節では無くても。紙で作ったもの、布で作ったもの、材質は何でも良い。

恐らく家族が無事に「帰郷」出来ることを祈る為、家族が帰ってきたことを祝福する為等の意味合いで飾るのだろう。

このしきたりのことを「キキヨウ迎え」と呼ぶ。

こんな話がある。

とある幼馴染同士の男女が居た。二人は昔から仲がよく、ごく自然の流れで結婚し、仲むつまじく暮らしていた。しかしある日夫は出稼ぎの為に遠くへ行った。妻は夫の帰りを待った。

しかしなかなか夫は帰ってこなかった。妻は夫を待っている間に重い病にかかり、彼の姿を見る事が出来ないまま、息を引き取った。

夫が帰ってきたのはそれから一月程経った時のことだった。

家に妻の姿は無かった。しかし玄関の前に美しい一輪の桔梗の花が咲いていた。その後すぐ、夫は妻の死を知った。

桔梗の花。それは恐らく、死んだ妻の魂が変じたものだったのだろう。

死してなお、彼女は夫の帰りを待ち続けた。そして彼の帰郷を優しく迎え入れたのだろう。自らの魂を桔梗の花に変えて。

「キキヨウ迎え」はこの夫婦の物語がきっかけで始まったといわれている。

『歩き草履』

歩き草履は、暗い場所に現われるという。見た目はただの草履なのだが、それがひとりで歩き出すのだ。まるで見えない誰かが草履を履き、歩いているかのように。

誰かの後をつけ、ひたひたと歩く。つけられている人が歩くのをやめれば、歩き草履も止まり、歩き出せばそれに続く。その草履は月の様に輝いており、どれだけ暗い場所に居てもはつきりと見える。特別悪いことをするわけではないが、非常に気味が悪い。

『納豆かぶし』

歩いている者、寝ている者等に、大量の納豆を被せる妖が居るといふ。被害にあった者は当然体中納豆だらけになる。ねばねばした納豆を綺麗さっぱり取り除くのはなかなか大変な作業だ。しつかり取り去ったとしても、とてつもない臭いが残ってしまう。

納豆かぶしは、納豆を取るのに四苦八苦したり、強烈な臭いに苦しんだりしている人達を遠くから見ると、大笑いするのだといふ。

『妖になつた娘』

睡蓮咲く美しい池に、一人の少女が誤って落ちてしまった。娘の姿は跡形も無く消え、遺体も見つからなかった。

それから十数年後一人の男がその池を訪れた時、一人の女が水浴びをしているのを目撃した。女の手や足には鱗がついていた。恐らく人では無いのだろう。

しかしあまりに美しい女だったから、思わず見惚れ、彼女が水浴びをしている姿をじっと眺めていた。

しばらくすると女の方が男に気づき、甲高い声を上げた。裸を見られたことに相当腹を立てたのか、不思議な力で男を捕まえた。鬼のような形相で男を睨みつける。

「汚らわしい目で私を見たな、よくも辱めてくれたな。許さない、殺してくれる」

男は見るつもりは無かった、許してくれと泣きながら懇願した。女は許さないと繰り返し言い続けていたが、何かに気づいたのかはっとしたような表情を浮かべ、しばらく固まった。

男に、顔をあげるように言った。男は大人しく顔をあげる。女は彼の顔を凝視し、悲鳴をあげた。

「お前、お前まさか……久助？」

男は自分の名前を言い当てられ、目を丸くした。久助がゆっくり頷くと、女が急に涙をぼろぼろ流して泣き始めた。

「そうか、お前、久助だったのか。そうか、そうか。私はあやだ。お前の姉だよ」

久助は目を丸くした。彼が幼い頃、この池に落ちて行方不明になった姉。

「私はこの池に落ちた。そしてこの池の主に拾われたのだ。私はその人の血を飲み、人では無い存在となった。成長した後、その人の妻となり、この池の中で暮らし続けていたの」

あやは泣きながら久助に抱きついた。久助も大好きだった姉に抱きつき、泣いた。

「出来れば村に帰りたいたい。皆に会いたい。けれど駄目なの。もう姉様は人では無いし、この池から離れて生きることが出来ないの。いいかい、久助。ここで私に会ったことは誰にも話さないでおくれ。こんな姿、誰にも見られたくないから。後生だから、お願いよ」

久助は姉を村に連れ戻したかったし、皆に彼女が生きていることを告げたかった。しかしあやがあまりに必死になって頼み込むので、

しまいにその願いを聞き入れ、頷いた。

あやはそれを聞くと満足そうに微笑み、弟に手を振りながら、静かに池の中へと消えていった。久助は池の中を覗き込んだが、もう彼女の姿はどこにも無かった。

久助は死ぬ間際まで、このことを誰にも話さなかったという。しかし息を引き取る直前に、子供に話し、自分が死んだ旨を書いた文を池に沈めて欲しいと頼んだという。

子供は文を書き、その池に浮かべた。不思議なことにその文はしっかりと形を保ったまま、重りでもついているかのように静かに池の底へと沈んでいったという。

『井戸の妖』

井戸に落とした釣瓶を上げる時、いつもよりも重いと思つたら、迷わず手を離し、釣瓶を落とさねばならない。

もしそのまま上げた場合、釣瓶に入っている妖に首を絞められ、殺されてしまうだろう。

『月が欲しい』

現在の三つ葉市があつた辺りに一つの村があつた。その村長の娘は綺麗な物が大好きで、石や髪飾り、着物等自分が綺麗だと思つた物を拾ってきたり、父にねだつて買ってもらつたり、時に半ば強引に人から奪つたりして集めていた。

そんな娘は、ある日空に浮かぶ月が欲しくなつた。

娘は父に月が欲しいと我侷を言い始めた。しかし月を取ることなど出来るはずが無い。

父はそんなことは無理だと言つたが、娘は聞かなかつた。

月が欲しくて仕方なかつた。

ある日娘は月に少しでも近づこうと、家の近くにあつた大きな木

によじのぼった。空に浮かぶ月に手を伸ばす。

月が欲しい、月が欲しい。娘は月にとり憑かれていた。

短い手を伸ばす。しかし月には届かない。

やがて娘は体勢を崩し、木から落ちた。可哀想に、打ち所が悪かったのか娘は死んでしまった。

娘の亡骸は月に照らされて美しく輝いていたという。

『どの色がお好き？』

青い髪飾りをつけ、緑色の着物を着、紅を差した女と出会ったら
要注意。

女に「青と緑と赤、どの色が好き？」と聞かれても絶対に答えてはいけない。

答えれば女に攫われる。

青と答えれば海まで連れて行かれ、高い所から海へ落とされる。

緑と答えれば樹海に連れて行かれ、木の枝に串刺しにされる。

赤と答えれば火山へ連れて行かれ、どぼんと火山の中に落とされる。

女の魔の手から逃れる為には、質問に答えず、一言も喋らず、彼女が諦めるまで黙っていなければならぬ。

女はあの手この手で質問に答えさせようとするだろうが、我慢しなくてはいけない。死にたくないのなら、黙るしかない。

『金を盗む猫』

金を盗む猫が居るらしい。猫に小判というが……何事にも例外と
いうものがあるようだ。

『月の鏡』

かつて桜村には「月の鏡」と呼ばれる物があったという。月のごとく輝く美しいその鏡は魔を浄化する力があつた。月の光を浴びせた後、穢れてしまった土地や物、或いは人にその鏡を向けると、吸収した月の光が穢れたそれを包み込み、浄化するのだという。

村を守る巫女が、自分の力では浄化しきれないものに対して使っていたらしい。

ちなみに新月の際には一切力を発揮せず、何の変哲も無いただの鏡になるという。反対に満月なら、鏡は最大限の力を発揮する。

その鏡はもう無い。巫女の桜と出雲が激しく争つた際壊れてしまったのだと言われている。

『雪つ子』

村に雪が降る頃にだけ、姿を見せる妖がいる。白い髪、白い肌、白い着物の女の子。悪いことは一切せず、子供達と楽しそうに遊び、雪が解ける頃に姿を消すという。彼女は喋らないが、何故か子供達には彼女の声が聞こえるらしい。

『物は使いなさい』

長く大切に使っている物にはいずれ魂が宿る、という話を聞く。しかしどうも使われることも、誰かの目に触れられることもなく長い間放置され続けた物にも魂が宿るらしいのだ。百年経たずとも、数年から数十年でその身に宿すなどといわれている。

その魂が宿つた物は人の形をとり、夜毎自分の所有者である人間の枕元に立ち、恨み言を並べ続けるのだという。

それでも所有者が何もしないと、今度は祟り始める。酷いものは最終的に妖と化し、所有者を殺す。所有者だけではあきたらず、子

孫にまで害を成そうとする。そうすると完全に理性を失い、当初の目的も忘れてただ人に仇を成すだけの存在となるという。

現舞花市の辺りにあった村に、一人の男が居た。お金持ちであったその男は遠くの町へ出かけた際、美しい茶碗を見つけ、それを買った。

買うまでは、何と素晴らしい茶碗だろうかと感動していたが、しばらくすると興奮も冷め、使うことも鑑賞することも、人に譲ることも無く家に放置し続けていた。

それから長い時が経ったある日の夜のことだ。男は枕元に人の気配を感じ、目を開けた。

すると自分を一人の見知らぬ女が覗き込んでいた。白い着物を着たその女はとても美しかったが、酷く悲しそうな、恨めしそうな表情を浮かべている。

男は叫ぼうとしたが、不思議と声が出なかった。

「何故私をあんなに暗い所に放置するのです。私は一人の職人の手によって、この世に生まれてきました。大切に使うてもらいたい、愛でてもらいたいという思いを込められて。それなのに貴方ときたら、買ってくれた時はあんなに喜んでいたので、家に帰ってきた途端私のことなどどうでもよくなったかのように、あんな場所に押し込めて。私は悲しいです、苦しいです。私はあんな所に入れられる為に生まれてきたわけではありません」

と泣きながら言う。

しかし男には、女が言っている意味が分からなかった。どうみても人間の女なのに、職人によって作られたとはどういうことだと思っただろう。

「自分が買った？ 何を言うか、私は人間の女など買ったことは無い」

「何を寝ぼけていらっしやるのですか。私は人ではありません。あ酷い、貴方は私のことをすっかり忘れてしまったのですね」

女はその後もぶつぶつと文句を言い続け、朝が来るのと同時に消えていった。

そんなことが何日も続く内、ようやく男は女の正体が、自分が買ったまま放置している何かであることに気づいた。しかしそれが何であるかは分からない。

買ったたり集めたりしたはいいが、殆ど使わず蔵や家に保管している物は決して少なくなかったからだ。

男は女に、お前の正体は何だと聞くのだが、女は答えてくれない。自力で思い出してくれなければ嫌と言うことらしい。

女の顔は日に日に恐ろしいものになっていき、やがて男の周りで良く無いことが起きはじめた。女が祟っているらしい。

困った男は、桜村から一人の巫女を招き、相談した。

「物は使われなければ、悲しみや恨みを募らせ、やがて生き物と同じように魂を宿すのです。勿論全てがそうなるというわけでは無いのですが」

巫女はそう言った後、女の正体である茶碗を不思議な力で探り当てた。

男はその茶碗を死ぬまで大切に扱った。彼の枕元に女が立つことも、彼女に祟られることも無くなった。

しかしこのことが余程堪えたのか、男は蔵や家に置いていた多くの物を売ったり、人に譲ったりしたという。

今でもこの町では「物は買ったからにはちゃんと使わないと、祟られる」と言われている。

『袖破り』

その妖は、着物の袖を引きちぎり、露になった腕に思いつきり噛みつき、笑いながら逃げていくという。

噛みつかれるのを防ぐには、袖を引きちぎられたらすぐにもう片方の手で腕をなぞり、素早く「そで、そで、そで」と言えばいいという。

しかし、袖を破られずにすむ方法については、一切伝わっていない。

『変わり池』

今は無いが、昔桜村には「変わり池」と呼ばれる不思議な池があったという。

その池は「生まれ変わりの池」とも言われていた。

池に布で包んだ何か（割れた茶碗でも、抜けた歯でも、着物でも何でも良い）を沈め、しばらく放置する。それを引き上げ、布を広げる。布に包んだ物は、別の何かに姿を変えている。

茶碗が蜜柑になっていたり、仏像になっていたり。何に変わるかは開けてみるまで分からない。特に法則性等は無いらしい。高価な物を入れれば、立派な物に姿を変えするというわけではない。

米一粒やその辺で拾った小石が、翡翠や瑠璃に変わることもあれば、小判や高価な着物が髑髏や魚の骨に変わることもある。

村人達は面白がって、色々な物を池の中に入れたという。この池によって富を得た者も少なからず居たようである。

しかし村人達が次々と池に物を入れれば入れるほど、池の水位は

低くなっていき、やがて池は完全に枯れて跡形もなく無くなったらしい。

『面を被って死ぬ子供達』

子供が次々と神隠しに合い、数日後遺体となって戻ってくるという事件があった。

どの遺体も、狐や猫のお面を被って死んでいた。目立った傷は無く、まるで眠るように死んでいたという。

『田んぼを荒らすかかし』

ある男が、自分の田んぼにかかしを設置した。

ところがこのかかしを置いた次の日、田んぼの一部が荒らされた。

男は「役に立たないかかしだ」と言っ、かかしを蹴飛ばした。

するとかかしは腹を立てたのか、突然動き出し、ぴよんぴよん跳ね回って田んぼを荒らし始めた。かかしはすばしっこく、男はかかしをなかなか捕まえることが出来なかった。

男が泣いて謝ると、かかしはようやく止まったという。しかし田んぼは見るも無残な状態となってしまうた。

以来、男はかかしを見るだけで悲鳴をあげ、ぶるぶる震えるようになったという。

『雨女』

桜村に一人の女が居た。女は俗に言う「雨女」であり、彼女が外に出ると高確率で雨が降ったという。

お陰で女が生きている間は、村は雨が降らずに不作になるということは無かったという。時に雨が長い間降っていない場所まで行き、雨を降らしたらしい。

しかし雨は降りすぎても不味い。

女は感謝されることもあったが、大抵の場合は迷惑な存在扱いされ、必要以上に外へ出ると冷たい目で見られたらしい。

結局女は殆ど外へ出ず、家の中で一人静かに過ごしたという。

『豆腐投げ』

曲がり角を曲がる時は気をつけた方が良い。曲がった途端、豆腐投げに豆腐を顔面めがけて投げつけられる時があるから。

『骸骨に埋もれて死ぬ男』

村人が、道端で山の様に積まれている骸骨を見つけた。しかもその骸骨達の下に人らしきものが埋まっているのが見える。村人が骸骨を恐る恐るどかすと、骸骨達の下敷きになって一人の男が死んでいた。男はまるで毒でも飲んだかの様な、苦しそうな表情を浮かべていた。

後になって分かったことだが、その男は遠くで多くの人を殺した、恐ろしい男であった。自分の犯行であることがばれ、ここまで逃げてきたらしい。

男に覆いかぶさっていた骸骨達。彼等は、男に殺された人々で、彼に復讐をする為にここまで追ってきて、彼を殺したのではないかと村人達は思ったという。

『鞠娘』

村に時々現われる、少女の姿をした化け物。彼女は気に入った人を、人気の無い場所まで連れて行き、その人を殺す。そしてその首を切り、鞠にするのだという。彼女の力が込められた首は、普通の鞠と同じようによく跳ねる。

しばらくすると、少女はその首に飽き、また新たな「鞠」を手に入れる為、再び村に姿を現すという。

『影踏み』

影踏みして遊びましょう、と誘ってくる可愛らしい少女。その外見に騙され、遊んではいけない。

彼女と影踏みで遊び、影を踏まれた者は近いうちに死んでしまうという。

『目には目を』

ある男が、猪の子供を殺し、猪鍋にして食った。

その夜男の夢の中に大柄な女が現われた。女は顔を真っ赤にしなから、大声をあげ、泣いていた。

「よくもおらの大事な子供を殺してくれたな。絶対に許さんぞ」

数年後、男にとって一番の宝であった愛娘が殺された。

村人の一人が、一匹の猪がその子めがけて突進し彼女を殺した瞬間を見ていた。猪はその子を殺すと、そのまま山へと消えていったという。

『熊もびびる』

巫女の桜は兎に角すごかったらしい。ただ睨んだだけで、熊さえびびって逃げ出したとか。

『赤顔地蔵様』

桜山のふもとに、六体の地蔵様が並んでいる。そのうちの一体は、顔が何故か真っ赤になっている。拭いても磨いても、何をしても色は変わらないという。

何でもその地蔵様は、昔自分の体をせっせと洗ってくれていた娘に一目ぼれし、顔を真っ赤にしてしまったらしい。娘亡き後もその顔は一向に元に戻らなかつたとか。

お供え物を盗まれて怒ってしまい、今もまだ怒り続けてから顔が

真っ赤になっているのだと言っている者も居る。

経緯はどうあれ、赤顔地藏様の顔が本当に赤いことに変わりはない。私もこの目でしっかりと見ている。ただ昔に比べるとその色は大分薄くなり、徐々に元の色に戻りつつあるようだ。

『大食い太郎』

昔大食い太郎と呼ばれた男が居た。裕福な家に生まれた彼は兎に角、大喰らいだったらしい。家の財産の多くが彼の食費で消えたという。

ある日、村に一人の大きな鬼がやって来た。鬼は大食い太郎の噂を聞きつけ、わざわざやってきたらしい。鬼は大食い太郎に勝負を挑んだ。

「俺と大食い勝負しよう。お前が勝ったら、俺の持つ宝をやる。でももし俺が勝ったら、俺はお前を食う」

周りの人は止めたのだが、大食い太郎は聞く耳持たず、その勝負を受けてたった。

二人は恐ろしい量を食い続けた。勝負は何時間にも及んだという。やがて鬼が苦しそうに呻き始め、とうとう降参した。大食い太郎は「これ位で降参なんて、情けないなあ」と言っただけという。

鬼は大食い太郎に約束通り、金銀財宝を与えた。

矢張りその金銀財宝も、大食い太郎の食費に消えてしまったらしい。

第三十五話：金魚捕り

『金魚捕り』

「良い所に連れて行ってあげる」

そう出雲に言われて、さくらと紗久羅、そして一夜は満月館へと来ていた。

一夜はここへ（骨桜の精神世界に居たことはあつたが）来るのは初めて。訳が分からぬまま出雲に通しの鬼灯を託され、さくらに引っ張られるようにしながらここまで来た。

言われるまま、通しの鬼灯を握った一夜は目に映った景色に呆然とし、声をあげることもなく顔を引きつらせていた。それを見たさくらと言えば、感動のあまり声も出ないのねと勝手なことを言い、一人頷いていた。

鳥居と灯笼、桜の木がずらりと並ぶ石段は異質な空気を漂わせる。その異質さが幻想を生み出しているのだ。

石段を上った先にある大きな鳥居をくぐれば、向こう側の世界さくらは異界と呼んでいるが　に着く。通しの鬼灯から手を離せば、二つの世界を繋ぐ道は姿を消す。

「で、ここが出雲の住んでいる家、と。随分立派な洋館に住んでいるんだな」

「ここに来たからには、兄貴も仲間だぜ。もう逃げられないからな何のことだ、と顔をしかめながら問う一夜。紗久羅は鼻歌ではぐらかす。

「良い所ってどんな所かしら、楽しみだわ」

心の底から楽しみにしている人など、さくら位しかない。彼女は例え連れて行かれた先が地獄であっても興奮するに違いないと紗久羅は思った。まあ、あれが本物の閻魔大王様なのね、素敵！と目を輝かせながら言う彼女の姿がありありと浮かんだ。それは一夜も同じよう、はあと深いため息をつく。

「久しぶりに部活が休みになったのに……なんだってこんな所に来なくちゃいけないんだよ」

「一夜はここへ来て胸躍らないの？」

「ここに来てきゃっほい言えるような奴なんて、お前くらいしか居ないっての」

「そうかしら。紗久羅ちゃんは楽しいわよね？」

「いや、別にそんな楽しくないです……」

紗久羅は彼女から目をそらす。声は随分と引きつっている。さくらは肩をすくめた。

三人はなかなか満月館に入らず、ぺちやくちゃ喋っていた。

「君達、入らないの？」

いつの間にか三人の前に居た出雲が、呆れた表情を浮かべながら話しかけてくるまで。

*

三人はいつもの部屋に通され、お茶とお菓子を出された。

水を思わせる青味がかつた硝子の皿にのせられた菓子。清水の様

な透き通った色の寒天の中を、白餡で出来た金魚が気持ち良さそうに泳いでいる……見ていただけで涼しくなる、芸術的なお菓子だった。

口の中に入れると、上品な甘味が広がる。単品で食べると結構甘いのだが、お茶と一緒に食べると丁度良くなる。寒天のつるんとした喉越しが、体を冷やしてくれるような気がした。

「ああ、とっても美味しいわ。見ても食べても涼しくなれる、素敵なお菓子」

「だろう？ こちらの世界にある和菓子屋なんだけれど、なかなか良いものを作ってくれるんだよね」

「こちらの世界の……これ、変なもの入ってないよな」
食べかけのそれを指差しながら、一夜がおそるおそる聞く。出雲がはは、と笑った。

「特に変わったものは入っていないはずだよ。入っていたとしても、食べて分からない位のものなんだろう。まあ、毒になるようなものは入ってないし、問題ないんじゃない」

そういう問題なのだろうかと一夜は思ったが、変な味がするわけでもないし、美味しいからまあいいかと考え直す。

紗久羅は、寒天の部分をむにむにと押し遊んでいる。

「何か、この菓子見ていたらさ、金魚すくいがやりたくなったよ」

「ああ、金魚すくい。子供の頃はよくやってたけれど、そういうのは最近はやっていないわねえ。私下手くそで、全然とれなかったのよね」

「TVとか見ていると、馬鹿みたいな数をすくう人が居るけれど、実際にやると難しいよな。コツとか聞いても上手く出来ないし」
「こういう感じですくうといいんだっけか、と一夜はポイを持って金魚をすくうマネをする。」

菓子を一口頬張りながら、その様子を見ていた出雲。金魚すくいねえ……と小さな声で呟く。

「あれって、何が楽しいの？」
その一言で、三人の会話が止まる。目をぱちくりさせ、首を傾げる。

何がと聞かれると意外と答えられないものだ。

「金魚をポイっていうの？ あれで金魚をすくうだけの遊びだろう。ポイが破ければそれでお終い。上手くすくえたとしても、もらえるのはすぐに死ぬ金魚だけだろう？ 飼うのだって面倒くさそうだし。金魚すくって、貰って、嬉しいのかい」

「そりゃあまあ、確かにそうだけれど……でも、やったとったぞっという達成感はある……よなあ？」

紗久羅は兄に同意を求める。

「うん、まあ。具体的な景品とかそういう物を貰うためにやっているわけではないしなあ。ポイを持って金魚と格闘する過程を楽しんでいるっていうか」

さくらの方の意見は、また違うようだ。

「金魚って宝石みたいに綺麗だから、私は嬉しいわ。家に綺麗な金魚鉢があつて。その中に放して眺めるのが、好き。餌を食べる様子も可愛いし……」

「ふうん。一応楽しいんだ。けれど私は金魚すくいより、金魚捕りの方が余程楽しいと思うんだけど」

三人が金魚捕り?と返す。そんなもの、聞いたことが無かったからだ。

金魚を素手で捕るとかいう遊びなのだろうか?どじょうすくいの格好でもして、金魚を大量にゲットするとか……それは嫌だ。

三人の間抜けな面を見て、出雲は満足気に笑う。

「あれは、なかなか良いと思うよ。涼むことも出来るし、頑張れば面白い物を沢山貰えるしね。今から行こうじゃないか。元々そこへ連れて行く為に今回君達を呼んだんだよ。」

*

出雲は皿と湯飲みの片付けを鈴に頼んだ。鈴はこくりと頷いて、お盆に皿などをのせて持っていく。

「鈴も一緒に行くかい?」

立ち止まった鈴は、小さく首を振った。

「いい。別の日に、出雲と二人で行きたい」

ようは、紗久羅達と一緒に行くのが嫌なようだ。出雲は鈴の頭を優しく撫でる。

「ふふ、分かったよ。今度二人で遊びに行こうね。それじゃあ留守番をお願いするよ。お土産も買ってくるからね、待っていてね」

出雲らしくない、非常に優しい声色でそう言つと、鈴はこくと頷いて部屋を出て行く。出雲はそれを見送ると、机の引き出しを開けて何かを取り出した。

「それじゃあ、行こうか。とりあえず一階へ」

出雲に三人は続き、部屋を後にする。階段を下り玄関の正反対屋敷の奥の壁の前まで行って、出雲が止まった。

「どうしたんだよ、出雲。こんな壁の前で止まって」

紗久羅の言葉に出雲はにっこり笑う。机の引き出しから持ってきたのは、A4サイズ位の紙だった。よく見ると障子の絵が描かれている。

出雲はまず壁にその紙をつける。紙は壁にぴったりと貼り付く。そして右手の人差し指をぺろりと舐めると、その紙に文字を書き出した。彼の指になぞられた部分が黒く変色し「翡翠京」とまるで墨で書かれたような文字が紙の上に浮かび上がった。

出雲はゆっくりと手を紙から離す。

すると、紙はぼん！というコルクを抜く時のような音がして、壁に本物の障子が姿を現した。

「何、これ」

「障子だけど？」

「見れば分かるよ。その障子をここに出してどうするんだよ」

紗久羅の言葉に、出雲がはあ、とため息をつく。意味も無く私がかんな物を出すだけでも？と言いたげだ。

「障子、扉、戸、ドア。それらは二つの世界の間が存在し、世界と世界を繋ぐ。まあ兎に角開けてごらん」

言われて、紗久羅は障子に手をかけ右にスライドさせる。

「あれ？」

先程まで確かにあったはずの壁が消えていた。障子がついている所の壁だけが、無くなっている。そして目の前に広がるのは、広い道。そしてその道の先に、建物がずらりと並んでいるのが見える。

満月館は木々に囲まれた山の中にある。当然その館の裏も木々に囲まれているはずなのだが。

「どうなっているんだ？」

「この障子が、満月館と翡翠京つて所を繋いだということかしら」
紗久羅と一緒に、障子の向こう側に広がる世界を見ているさくらは興奮しているのか、顔がやや上気している。

扉は世界と世界を繋ぐ。閉めれば双方の世界を隔絶する壁に、開ければ世界を繋げるものに。

紗久羅は恐る恐る、さくらはやや興奮しながら、一夜は特に何を考えるわけでもなくごく普通に足を踏み出した。

境界を越え、振り返る。渡った先から障子を見ると、それは道の上にぼつんと立っていた。最後に出雲がこちらに來ると、障子を閉める。今度は左手の人差し指を舐め、大きな×印を描く。朱色の×印が障子の上に浮かんだ瞬間、またぼん！という音がして、障子は跡形もなく消えた。

「離れた場所にも、これさえあれば簡単に行くことが出来る」

「素敵！ 何て素敵！」

さくらだけが目を輝かせ、興奮気味に叫ぶ。山ほど積まれたお菓子を目の前にした子供のようである。

「これってどこにでも行けるの？」

一夜が聞くと、出雲は首を振る。そうだったとしても便利なものだけれど、と話を始める。

「一定の場所にしか行くことは出来ない。ほら、あそこに赤い柱があるだろう」

言われて見てみると、確かに道の両端に赤く丸い柱が立っていた。電柱位の高さのそれには幾何学的な模様が描かれていて、先端には大きな青い玉がついている。

「この柱が立っている所にだけ、行くことが出来るんだ。ちなみに満月館の近くにはこれが無い。だから帰りは別の手段を使うしかない」

便利なのか不便なのか 何とも微妙な道具だ。まあこんな道の上で立ち止まっても意味は無い、と言って出雲は先へ進みだす。三人はその後に続いた。

しばらく進むと川があり、木の橋がかけていた。橋を渡った先に広がる風景は、江戸の城下町を思わせるようなものだった。

道の両側に、酒屋や呉服屋、茶店等が並んでいる。

「ここが翡翠京。満月館が一番近い大きな京だ」

「何で翡翠京って呼ばれているんですか？」

「魔珠羅の森が割と近くにあるからだよ。紗久羅は行ったから知っているよね」

紗久羅が頷く。出雲に半ば無理矢理連れて行かれた場所だ。こちらの世界の母とも呼ばれているカガキミの樹、そしてその樹を包むように生えている木々は確かに翡翠の様な色をしていた。翡翠の色をした森が近くにあるから翡翠京。

紗久羅は納得したが、そこへ行ったことの無い他の二人はあまりピンと来ていない様子で、はあ、と曖昧な相槌を打っただけだった。

「一定の規模がある町は、この世界では『京』と呼ばれている。この他にも『紅都京』や『六花京』、『橘香京』等があるんだよ。まあその辺りは大分遠くにあるのだけれど、先程の道具を使えば簡単に行けるから、いずれ連れて行ってあげるよ」

最後に気が向いたらね、という言葉をつけ加えた。

「素敵、素敵！　どんな所なのかしら。ああそちらも気になるけれど、ここも素敵！　町並みも素敵で……しかも本物の妖怪さん達がいっぱいいるわ！」

さくらの言う通り、流石『向こう側の世界』だけあって妖達がうじゃうじゃと居る。ここでは、普通の人間である紗久羅達の方が異質な存在であった。

一つ目に提灯お化け、三つ目小僧、猫耳が生えている女、手足に鱗がある男等が店の中に入ったり、町の中を歩いていたりしている。その光景を見て大喜びしているのはさくら位だ。紗久羅は未だ完全には慣れていないのか顔が引きつっているし、一夜はため息をつきながら頭を抱えている。

「まあ興奮するのは構わないけれど、私から離れないようにね。迷子になるだけならまだいいけれど、腹を空かせた妖達に食べられちゃうかもしれないから」

「恐ろしいことをさらっと言うな！」

顔を青くして紗久羅が出雲に食ってかかる。出雲はそんな紗久羅の顔を見て満足気ににやにや笑っている。

「ああもうたまらないね、その顔。もつと意地悪してあげたくなっ

ちやう。　しかし実際冗談では無いからねえ。何せ生身の人間なんて昔ほどこちらに迷い込んでこないし……久しぶりに生きている人間の肉が食える、とか何とか言って襲ってくる妖が居ないとも限らない」

「普通そんな危険のある所に連れてくるか……？」

一夜は呆れ気味だ。紗久羅はふざけるなど喚いている。さくらは出雲の言葉が耳に入っていないのか、夢に見てきた光景にうつとりしていた。

「まあ、私から離れなければ大丈夫だと思うよ。まあ基本的に騒がしいけれどそこそこ平和な所だし、どうにかなるって」

「万が一食われたら、お前とお前の子孫を呪ってやるからな！」

「子供作る気無いから、子孫も何も私の代で血が絶えると思うけれど。後、私は人間如きに呪われたって死にはしないよ」

「うつ……」

「それとも私の子供を君が産むの？　自分で自分の子孫を呪っちゃう？　そういうことだったらまあ協力してあげてもいいかなあ」

紗久羅の顔が天狗の顔になる。

「殺す！　いつか絶対殺す！」

「駄目よ紗久羅ちゃん、そんな乱暴な言葉使っちゃ」

さくらにまるでお母さんの様な口調で優しく諭され、紗久羅は言葉が詰まらせる。

紗久羅を怒らせた張本人は、彼女達を置いてさっさと進む。離れ

るなどか言っておきながら、平気で置いていく……。一夜も妹と幼馴染を無視して歩いている。

二人は慌てて彼等を追いかけていった。

*

江戸時代へタイムスリップしたような気分を味わいながら、三人は出雲についていく。妖達に好奇の視線を向けられたり、話しかけられたりしてあたふたしている紗久羅の姿を出雲はにやにやしなから見ていて、助け舟を出そうともしない。逆にさくらの方は妖達に自ら近づいて質問をまくしたて、一夜が必死にそれを止めていた。

しばらく歩いたところで、出雲が立ち止まった。

「後少しで着くよ。ほらここから金魚鉢みたいなものが見えるだろう」

出雲が右前方を指差す。確かに彼が指差した先、立ち並ぶ店の奥に大きな金魚鉢のようなものが見えた。周りにあるのが低めに出来た木造の家だから、相当目立っている。

三人は目を丸くした。少し歩き、金魚鉢の前まで行く。遠くから見ても大きく感じたが、近くで見るとますます大きく見え、思わず息を呑む。

青みがかつた硝子は曲線を描き、縁は波打っている。形や色は普通の金魚鉢と変わらない。その大きさだけが、異様なのだ。

「でかつ！」

「金魚どころかイルカも泳げそうだな……」

「鉢というより、巨大水槽って感じね」

「ここは金魚亭。普段は喫茶店だけれど、一定の期間だけ『金魚捕り』という遊びを実施しているんだ。入り口は裏にある、ついておいで」

ぽかんとしている三人を手招きし、金魚鉢の裏にまわる。

裏には看板が立っていて、金魚鉢に硝子で出来た短いトンネルがついていた。

トンネルをくぐると、金魚鉢の中に入る。

「あれ？」

入った瞬間体がひんやりとするのを感じ、三人は立ち止まった。動くとき妙な抵抗を感じ、風も吹いていないのに髪が海藻のように揺れ動く。

「まるで、水の中に居るみたい……」

そう、まさに水の中に居るような感じがするのだ。けれど息は少しも苦しくないし、服も濡れていない。息を吸い込んでみても水が鼻や口に入ることにはなかった。

透明な硝子で出来た金魚鉢の中に居るのに、外の景色は一切見えない。色のついたライト等があるわけでもないのに、鉢の中は青く輝いていた。

硝子で出来た床の下には色とりどりのビー玉が敷き詰められ、見上げると天井は日の光を受けた水面の様にきらきらと輝いている。

「不思議な場所だろう。涼むには絶好の場所だ」

「おや、いらっしやい。よく来たね」

背後から女の声が聞こえ、皆で振り返る。

いつの間にかそこに一人の女が立っていて、にっと笑いながら紗久羅達を見ていた。

赤く薄くて柔らかい布を鉢巻の様に頭に巻いていて、長く余った部分がゆらゆら揺れている。

前髪は両サイドだけが伸びていて、後ろの髪は短めでやや外側にはねている。

袖の無い赤い着物に、黒い帯。丈は短めで、白い足が露になっっている。手首に金の腕輪をつけていて、きらきら輝いていた。何故か茶色い小さな壺のようなものを首にかけている。右手に持つのは黒いキセル。腰には首にかけているのと同じような壺や鍵の様な物等を連ねたものをつけていた。

外見年齢は二十代前半、半ばといったところだろうか。

「出雲じゃないか、久しぶり。あれ、一緒に居る子供達はひよっとして人間かい？ 珍しいね」

はきはきとした、やや男の子っぽさがある口調で話す。

「ああ、ボクの名前は赤魚^{あかな}。今日は楽しんでいったね」

「赤魚、三人に簡単に金魚捕りの遊び方を教えてやってくれないか」
出雲が言うと、こくりと赤魚が頷く。

「ま、遊び方は簡単さ。子供だって出来るだろう」
そう言って、赤魚はにかつと笑い、首にかけていた壺を外し、手に取る。壺の蓋を開け、そこに何かの茎のようなものを入れ、取り出す。

「とりあえず、準備をしなくちゃ」
その茎に赤魚が息を吹き込む。

すると茎の先から、蓮の花が入ったしゃぼん玉が次から次へとでて来て、金魚鉢中へ広がっていく。小さなもの、大きなもの。それらが、ぷかぷかと鉢中を漂う。それを何回か続けるうち、広い金魚鉢に数え切れない位の数のしゃぼん玉が出現した。

ぼかんとしている三人の表情を見て、赤魚が笑った。

「驚くのはまだ早いよ。それっ」

壺を再び首にかけて赤魚がばん！と手を叩く。

それを合図に、しゃぼん玉がぽぽぽぽんと心地よい音を立てて弾け、中に浮かんでいた蓮の花が……。

「蓮が金魚になった！」

「何だこれ、新手的マジックか……？」

「わあ、可愛い金魚が沢山！」

蓮の花は、金魚に姿を変えた。といっても普通の金魚より大分大きく、丸っこい。尾ひれは立派で、水の中で踊る海藻のようにゆらゆらしている。色は、赤一色のものもあれば、黒一色のもの、赤と白が混ざったものなどが居る。大きいしゃぼん玉が変じたものは大きく、小さなしゃぼん玉が変じたものはやや小さめ（それでも普通の金魚に比べれば大きいが）だ。

さくらはその様子を見て興奮し、カメラとか持ってくれば良かった！と叫ぶ。

「ふふん、すごいだろう。さて君達に今からこの店の中を泳ぐ金魚達を捕まえてもらう」

「捕まえる？ 網か何かで捕まえるの？」

紗久羅は、巨大虫取り網で金魚を捕まえる自分の姿を想像した。かなりシユールな光景だと思った。まあ、現時点ですでにシユールな光景が広がっているのだが……。

赤魚が左手の人差し指と、首を振った。

「そんな道具なんか、使わないよ。素手だよ、す・で」

「素手かよ!？」

「まあ、捕まえるといつてもさ、ただ両手でちょいつと触るだけで良いんだよ。ここの金魚達は両手で触れると、別の物に姿を変える。それはそのまま、捕まえた人の物になる。ま、この遊びの景品ってやつだね。ちなみに、大きくて早い金魚が必ずしも良い物に姿を変えとは限らない。そういう金魚でもしよぼい景品に変わることだってある。逆に言えば、動きの鈍い小さな金魚が素晴らしい物に姿を変えるってこともある。まあ、何が手に入るかっていうのは完全な運……だねえ」

あ、今回人間にとつて毒になるものとか、そういった景品は除外してあげたから、安心してねと付け加える。その後腰につけていた壺を三つ外す。地面に置くと、その壺は巨大化した。

「手に入れた景品は、この壺に入れるといい。他人の壺から景品を盗もうとしても無駄だからね。あ、壺に名前を書いておいた方がいいね。君達の名前、教えてよ」

「あたしは紗久羅。糸偏に少ないって字でサ、久しいっていう字で

ク、羅針盤の羅」

「羅針盤って何？ どういう字書くの」

赤魚が首を傾げる。こちらの世界には存在しないのだろうか。紗久羅は説明に困った。

「あ、修羅の羅です」

さくらが助け舟を出すと、赤魚がぼんと手を叩いた。そして壺にまず『紗久羅』と書く。

「それで、私の名前もさくらなんです。あ、ちなみにひらがなです」

「へえ、君もかい。ひらがなね、了解、了解」

すらすらと書き、最後は一夜が名前を告げた。それも書き終え、今度は腰についている赤い雫型の石がついた首飾りを三人に差し出す。

「これは、残りの時間の目安を覚えてくれるものだよ。残りが半分位になると黄色くなって、残り僅かになると青くなる。最終的には白くなって、終了を告げる音を出す。音が鳴っている間に捕まえた金魚は景品に変わるけれど、鳴り終わった後はどれだけ捕まえても景品には変わらないから気をつけてね」

「制限時間って何分なの？」

一夜が聞くと、赤魚が首を傾げる。

「さあ？ 具体的な時間なんて知らないよ。ボク達ってあんまり時間に細かくないからさ。まあでも、皆同じ時間だけ遊べることは確かだよ。あ、そうそう。時間とは関係ないけれど。もう分かっているとと思うけれど、この空間では水の中で出来ることの多くをするこ

とが出来る」

「泳ぐことも出来るってことですか？」
赤魚が頷く。

「勿論さ。この空間は虚水（むすい）というもので満ちている。水の性質を持つているけれど、実体は無い。水であって水ではないもの。まあ、兎に角やってみよう。慣れれば楽しいよ」

確かに、この広い空間を泳ぐことが出来たらさぞかし楽しいだろうと三人は思った。おまけに金魚を捕まえれば何かが貰えるのだ。人間景品とか、プレゼントとか、そういったものに弱い。

「あれ、出雲さんはやらないんですか？」

あくびしながら、赤魚が三人に説明している様子を見ていた出雲にさくらが話しかける。話しかけられたことに気づいた出雲は、手を振る。

「やらないよ。疲れるもの。私は赤魚とお茶でも飲みながら、君達が騒いでいる姿をじっくり観察することにするよ。今回の遊びの代金は払っておくから、気兼ねなく思いつきり遊べばいい」

楽しいよと言って人を誘った当の本人が「疲れる」などと言って遊ばないって……とちよつと三人は心の中で思ったが、口には出さなかった。

「それじゃあ、そろそろ始めようか。準備はいい？」

三人が頷くと、首飾りが赤い光を放った。どうやら開始の合図らしい。

皆ばらばらの方向を向き、三方に散らばって金魚を捕りにかかった。

*

「ええと、ここでは泳げるんだよな。何か俄かには信じられないけれど……ていうか、何で俺こんなことやっているんだ。変てこな体験は、あの骨桜の時が最初で最後だと思っていたのに……大体妖怪とか、別の世界とか何だよ、訳が分からん」

一夜である。二人に半ば無理矢理連れてこられ、訳の分からない世界と再び関わることになってしまった。妖怪等が大好きなさくらと幼馴染である以上、これからもこういう所に来る羽目になったり、変な事件に無理矢理巻き込まれたりするのだろう。

それを思うと、気分が沈む。しかし目の前を泳ぐ金魚を見たら、何かもうどうでも良くなってしまった。とりあえず今は自分達の世界では決して出来ない体験をしておこうと思う。

一夜は、思い切ってジャンプする。体は浮遊し一向に地面に足がつく様子は無い。しかしこのまま動かなければ意味は無いだろう。手で青く染まった空間をかくと、確かに水をかいた時と同じ感覚がし、更に体は浮上する。

手を動かしながら、体勢を色々変えてみる。最初の内は思うようにいかなかったが、一度体勢を整えるとすんなりと動くことが出来た。

悠々と泳いでいる、真つ赤な金魚に背後からそうつと近づく。赤い尾ひれが舞姫の如くひらひらと優雅に踊っていた。

しかし後少しという時、気づかれてしまう。その金魚は目にも留まらぬ速さで逃げていった。

「あ、こら待て！」

足と手を激しく動かし、スピードを上げる。途中、のんびり群れながら泳いでいた金魚達と衝突しそうになり、彼等は驚いてあちこちに散らばる。最初に目をつけていた金魚はそれに紛れて逃げた。

そんな一夜の様子を下から見えていたのは、さくらだ。彼女は彼の泳ぎを見て、どうしてあんなに早く、しかも綺麗に泳げるのだろうと思った。

彼と同じようにジャンプし、体を床と平行にして泳ごうとしたさくらだったが、これが意外と上手く行かない。体勢を思うように変えられないのだ。一夜や紗久羅と違って、残念な運動神経を持つ彼女は、まるで溺れているかのようにもがく。無闇にもがいても無駄なのだが。

周りを泳ぐ金魚達が、彼女を馬鹿にしたような目でじろじろ見ながら泳いでいる。いつの間にか用意されていた、赤い布を敷いた長椅子に腰掛けてお茶を飲んでいた出雲と赤魚まで笑っている。

「さくら姉……何しているの？」

金魚と追いかけてこをしていた紗久羅が、それを一時中断してさくらのところまで泳いできた。

「なかなか上手く体勢を変えられないの。いまいちやり方が分からなくて」

私も金魚さんと泳ぎたいのに、と嘆くさくらを見て紗久羅はちょっと待っててと言っ。

そして彼女の体に触れ、ひょいっとその向きを変えてやった。

「水中と似たようなものといっても、ちょっと違うからなあ。息を吸ったりはいたりしながら上手く体を動かすと、割と簡単に体勢とが変えられるみたい。ま、一度その体勢になればある程度は大丈夫だよ。それじゃ、頑張ってね」

そう言っ、紗久羅は目をつけた金魚に勝負を挑みに行った。

さくらはお礼を言い、泳ぎ始める。そのフォームは矢張り散々なもので、泳ぎも鈍いのだが、彼女自身は金魚を捕れなくても、ただこの不思議で素敵な空間で、泳ぐことが出来れば満足だと思っているのであまりそのことについては気にしていないようだった。

「とつても気持ちいいわ。程よく冷たくて、しかもプールの様に塩素臭くも無いし。息が苦しくなる事も無いし……ふふ、金魚鉢で泳ぐのって夢だったのよね」

そんなのん気なことを言っているのは、彼女位のものだ。

一夜と紗久羅は金魚を捕まえることに燃えている。

この空間では体勢を変えることが若干難しいのだが、一度こつを掴むと割と簡単に出来るようだ。一夜はもうほぼ自由に泳ぎまわっている。変なフォームで泳いでいる幼馴染とは出来が違うのだ。

「絶対捕まえてやる！」

一匹の金魚に目をつけ、追いかけてこをしている。金魚は捕まるまいと、急浮上したり、降下したりして一夜を翻弄する。小回りが利く分、金魚の方が若干有利ではある。しかし一夜は諦めない。兎に角金魚を、金魚鉢の端まで追い込もうとする。

とうとう鉢の端まで追い込まれた金魚。一夜は手を伸ばすが、すんでのところで一夜の足がある方に逃げていった。

「この、金魚のくせに、生意気だ！」

一夜はターンし、足で金魚鉢を思いっきり蹴飛ばす。すると体は勢いよく前へ進み、彼を馬鹿にするかのようにひれをひらひらさせていた金魚に接近する。

油断していた金魚は咄嗟に動くことが出来ない。

「もらったあ！」

一夜は金魚を両手で包み込むようにして捕まえた。赤と白のまだら模様のその金魚は、じたばたした後、ポン！と音をたてて姿を変えらる。

金魚の姿が消え、代わりに一夜の手のひらに現われたのは、金色の指輪だった。何か文字のようなものがびっしりと彫られている。

とりあえずそれを握りしめ、壺のある所へ向かう。

赤魚が拍手で彼を迎えた。

「おめでとう。初めてにしては上手くやったね。君運動かなり出来るでしょう。で、何をとった？」

「えつと指輪かな……これ」

一夜は赤魚に指輪を渡そうとするが、見えない壁に阻まれて、彼女に手渡せない。赤魚ははっと何かに気づき、ぼんと手を叩く。すると見えない壁が消えた。

「ごめん、ごめん。ここに結界を張っていたから。金魚達がぶつかってくるのがあってねえ。……ふむふむ、これは場合によっては役に立つ道具だね。避雷具ひらいぐというものでね、これを身につけていれば、絶対に君の体に雷が落ちることはない。雷避けの道具だよ。ちなみに家とか、そういう場所に置いておけば、そこに雷が落ちることは無い」

ふうん、と一夜は指輪を受け取る。雷雨の日にどうしても家から出なくてはいけない、という時には役に立つかもしれないが……まああつて邪魔になるものでもないから、良いかなと思った。

指輪を壺に入れ、次の金魚を捕まえるべく、再び泳ぎだす。

妹の紗久羅は、他の金魚には目もくれず、一匹の金魚をしつこく追いまわしていた。余程体力の無い金魚なのか、大分へばってきて

いるようだった。

急降下した金魚を追いかける。大きな水の抵抗を感じるが、意地でも泳ぐ。

何故この金魚に的を絞っているかといえば、この金魚、一匹の金魚を捕り逃がした紗久羅を見て、丸い体をぶうつと膨らまして笑いやがったのだ。短気な紗久羅はそれで力チンときた。

「絶対にめえは捕まえてやる、覚悟しやがれ！」

慌てた金魚は、急浮上し逃げようとする。紗久羅の横を金魚が猛スピードで通り過ぎる。

「逃がすか！」

紗久羅は大きく息を吸い込む。すると体がぶうつと浮かぶ。どうもこの空間の中では、息を吸うと風船のように体が浮かび、思いつきり吐くと沈むらしい。

思いつきり手を伸ばす。金魚は逃げる……が、少しだけ遅かった。紗久羅の両手が微かに金魚の尾ひれに触れる。金魚は間抜けな表情を浮かべ、姿を変えた。

「よっしゃ、やってやったぜ！」

しかし。

紗久羅の手に残ったのは たわしだった。どう見てもただのたわし。とりあえず赤魚に見せてみたが、矢張りどこにもある何の変哲も無いただのたわしらしい。

散々追い掛け回した拳句、手に入れた物がたわしなんて、と紗久羅は嘆く。

某番組で、苦労してゲームをクリアしたのに、最後のダーツでたわししか当てることが出来なかったゲストの気持ちが良く分かるよな気がした。

「くそ、最後の最後まで馬鹿にしゃがってあの金魚め！」

「ははは、可哀想にねえ、紗久羅。まあまだ時間は沢山あるから頑張ってね」

出雲は暢気に笑い、金魚を象った饅頭を口に入れる。

「絶対良いものとしてやる！」
そう言って、また泳ぎだした。

「一夜と紗久羅ちゃんは、金魚を捕まえたのね。私もちよつとだけ頑張ってみようかしら」

等と言って、比較的どんくさい感じの金魚を狙い、追いかけるのはさくらだ。しかしその金魚以上にどんくさい彼女。赤く薄い羽衣を身に纏い、踊るように泳ぐ金魚が、彼女を翻弄する。

「この世界の不思議なアイテムを手に入れることが出来たら嬉しいのだけれど、ああ、やっぱり一夜達みたいに上手く泳げないわ。ああ、金魚さんそんなスピードあげないで。追いつけなくなっちゃう」といつて止まる阿呆はいない。金魚だって捕まりたくないのだから。

ばたばたと足を動かしてみるが、それだけで早く泳ぐことが出来るわけでもない。

そうしてちんたらしている間に、一夜と紗久羅は兄妹仲良く協力して、それぞれ一匹ずつ金魚を捕まえていた。

一方が金魚を追いかけて、上手くもう一方の所に誘導し、捕まえる。一夜は『使くと絶対に赤ん坊が泣き止むでんでん太鼓』を、紗久羅は『他の土地で降っている雨を、そっくりそのまま呼び寄せる笛』を手に入れた。まあ、あまり役に立ちそうにない。

「赤ん坊を泣き止ませると言ってもなあ……」

「いいじゃん、とっておけば。いずれさくら姉と結婚した時に使うかもよ」

「何であいつと結婚確定なんだよ！ 冗談じゃない、あんな頭花畑女と結婚なんかしたら、疲れるに決まっている！」

と顔を真つ赤にして否定する。絶対に無理と言われた相手 さくらは、まだ追いかっこをしている。

「さくら姉頑張っているなあ。おい馬鹿兄貴、未来の嫁さんを手伝ってやれよ」

一夜が全力で否定しようがおかまいなしで、そんなことを言う。一夜はうるせえ、誰が未来の嫁だ！と叫びながらも、彼女を手伝いに行く。

紗久羅はにやにやしながら、笛を壺に入れ、また泳ぎだす。

大分時間が過ぎ、雫型の石は青く変わり始めている。

一夜は鈍いさくらにどうにか金魚を捕まえてもらおうと必死にフオローする。しかし彼女の運動神経は、予想以上に酷いもので、上手く金魚をさくらの所まで誘導しても、彼女はなかなか捕まえてくれない。

さくらがとり逃がした金魚を一夜が追いかけて、捕まえる。かなり鈍い動きで、簡単に捕まえることが出来た。……こんな鈍い金魚を捕まえられないのは、さくら位のものだ。

「お前何でそんなにどんくさいんだよ。というか泳ぐのが本当下手

だよな」

とため息をつく。彼女が学校の授業で泳いでいる様子は、周囲から見れば溺れているように見えるらしく、いつも教師や生徒達に心配されている。

「お前のは泳ぐ、じゃない、溺れる、だ。まあいいや、とりあえず俺はこれを壺に入れてくるわ」

「私も金魚のように綺麗に泳ぎたいものだわ」

一夜を見送った後、天井を見上げる。太陽を浴びた水面の様に輝いていて、とても綺麗だ。その光を浴びて泳ぐ金魚の姿もまた美しく、目を奪われる。空を飛ぶ鳥のように、自然で優雅な動き。

「まるで宝石箱みたい」

金魚を追いかけることなどすっかり忘れ、美しい空間に見惚れる。天井を見上げたまま、無意識のうちに手を泳がせる。すると、両手が何かに触れた。

「え？」

両手に視線を戻す。彼女の手が、一匹の丸々太った金魚に触れていた。

この金魚、さくらがぼうつとしていいことを良いことに、彼女の近くを悠々と泳いでいたのだ。しかしさくらが無意識に手を動かし、運悪く彼女の両手に触れられてしまった。

さくらは目をぱちくりさせる。触れられた金魚も、体と同じく丸い口をぽかんと開けていた。

金魚は間抜けな表情を浮かべながら、姿を変える。

さくらの手に残ったのは、瓶だった。瓶の中には、黄色やピンク、青色の塊が入っている。見た目は色つきの氷砂糖といったところか。

「君に捕まるなんて、随分間抜けな金魚だ。……ほほう、それは氷飴だねえ」

床になかなか足をつけられないさくらをにやにやしながら見ていた赤魚が、さくらの手にしていた物を指差す。

「氷飴？ これ、飴なんですか」

「うん、色によって味が違う飴だね。しかも氷の様に冷たい。それを舐めれば、暑さも吹き飛ぶよ。でも一度に食べ過ぎないようにね。お腹壊しちゃうから」

「とても美味しそう。素敵なのが手に入ったわ」

さくらは心の底から喜んだ。早速帰ったら食べてみようと思った。さくらはしばらくその瓶を大切に握りしめ、そして壺の中に入れる。

「お前みたいな奴に捕まえられるなんて……哀れな金魚」

「一夜はさつき何をとったの？」

「俺も飴だよ。蛭飴って言うんだってさ。蛭みたいに、光っているんだ。暗いところで見ると、すごく綺麗らしい……しかし飴が光る意味ってあるのか？」

「あら、いいじゃない。蛭のように光る飴なんて……私にも後で見せてね」

にこりと笑うさくらに、一夜はああ、と答える。そして首にかけた石を見て、顔をしかめる。もう後少しで完全に青くなりそうだったからだ。

「こんな所でのんびりしている暇はない、行くぞ」

「あ、そうねえ。最後まで頑張らないとねえ」

勢いよくジャンプし、泳ぎ始める一夜。それにちんたらついていくさくら。

その後も三人は金魚と格闘し続けた。

一匹の金魚を挟み撃ちにしようとしたら、寸前で上手いこと逃げられ、勢いをつけていた井上兄妹が危うく頭をこつつんこしそうになったり、さくらに追いかけられていた金魚が一夜の口の中に入ってしまった（幸い飲み込んでいなかったが）、一匹の血気盛んな金魚が一夜に体当たりしてきたり……まあ様々なハプニングがあったが、それもまた良い思い出になった。

*

それから程なくして、金魚捕りは終わった。

「ふう、ぎりぎりで一匹捕まえたよ。へへん、馬鹿な金魚。他の金魚を追っているフリをして、油断しているところを捕まえてやったぜ。まさか自分が真の標的だとは思ってもいなかったらうよ。しかし、この石ころは何だ」

紗久羅が手にしているのは歪な形をした、濃い緑色の石だ。

「ほほう、それはなかなか面白い物だよ。幻想石げんそうせきっていうんだ。それは、自分の姿を、別の何かに見せかけることが出来る石なんだよ。使い方は簡単、それを両手で握って、なりたいと強く念じるだけ。例えば、君が猫になりたいと念じたとする。すると、周りの人には君が猫に見えてしまうようになる。喋つてもにやあにやあと鳴いているように聞こえるし。ただ、本当にそれに姿を変えられる

訳じゃないから、猫になつても狭い道を通れるわけでもない、鳥になつても空は飛べない。効果は時間が経てば消える。……ちなみにその大ききの石だと、使えるのは五回つてところかな」

「私もどうにかこうにか、もう一個とることが出来ました」

「俺が死ぬ気でサポートしたからな」

さくらが持っているのは、筆だった。毛先はすでに墨に浸したかのように黒くなっている。

「そちらは、切り筆だね。それで紙をなぞると、なぞった部分が切れるんだ。切れるのは紙のみ。まあ後はせいぜい薄い板かな。ちなみに人を始めとした生きているものの体は切ることが出来ない。怪我をする心配がなく、しかも曲線も綺麗に切れちゃっう優れたもの」

対して、一夜が持っているのは……ストラップの飾りにできそうな位小さな矢。

さくらに金魚を追いかせさせ、相手がさくらのあまりに駄目な泳ぎっぷりに油断しているところを捕まえたのだ。

「それは守りの矢。身につけている者を一度だけ守ってくれるものだよ」

「どんな攻撃からも守ってくれるのか？」

「ああ、そうさ。神の攻撃にすら、耐えることが出来る。まあ神様から攻撃されるなんてまずないと思うけれど」

確かにそうだ、と一夜は呟く。

三人が金魚と格闘している様子を楽しく見ながら、暢気にお茶を飲んでいた出雲が三人に声をかける。

「ね、なかなか楽しい遊びだっただろう？ 体も動かせて、涼むことも出来て、なおかつ面白い物が上手くいけば手に入る」

「ちなみに出雲さんは、この金魚捕りってやったことがあるんですか」

「いや、無い」

満面の笑顔だ。

「お前、やったこと無かったのか!？」

「だってものすごく疲れそうだし、面倒くさそうだし。それより、赤魚と一緒にお茶を飲んでいた方が楽しいもの」

「ボクもやるより、見ている方が好きだなあ。皆が必死になって足掻いている姿ってとっても滑稽で、見ているだけでお腹一杯。楽しいけれど疲れることより、楽しい上に疲れないことの方がずっと良いし」

金魚捕りという遊びを提供している、当の本人までそんなことを言い出す始末。

「はあ……まあ、楽しかったからいいけどさあ……」

「さて、金魚捕りも終わったことだし。今度は先程まで追いかけてこをしていた相手を眺めながら、お茶でもいかが？」

笑顔を浮かべる赤魚に、三人もまた笑顔で答える。泳ぎ回って疲れていたから、ちょっと休みたいと思ったのだ。

三人、そして出雲と赤魚は、自由に泳ぎまわる金魚を眺めながら、

甘くて美味しいお菓子を沢山食べた。

*

店を出ると、溶かした鉄を頭からかけられたかのように、体が一気に暑くなった。しかも泳いだ後の、あの独特な疲労感に襲われる。

三人は、すぐに金魚亭に戻りたくなった。

「楽しかったけれど、結構疲れるな」

「私明日辺り筋肉痛になっていそう」

「それは幾らなんでもオーバーだろうが」

と言った後、さくらの場合ありえるかもしれないと思い直す。

三人の手には、今日の戦利品が入った巾着袋。青い布地に金魚が描かれたその袋は、何と無料でプレゼントしてくれるのだという。

「ちなみに、あの金魚亭はね、冬になるととても温かい虚水を店の中に入れるんだ。まるで温泉に入っているかのようにポカポカ体が温まる。ぬくぬくしながら食べるお菓子もまた最高だよ。冬になったら、また来る？」

「行く！」

即答だ。しかしまた店から出たくなるのだろうか、と思った。

「ああ、でも楽しかったわ。本当この世界って素敵な所ですね。今度は、他のお店もじっくり見てみたいです」

「君は本当に好きだねえ、まあ、良いけれど」

「良くねえよ、こいつに振り回されるだろう俺の身にもなってくれよ」

「あはは、それは可哀想に」
勿論、可哀想なんて微塵も思っではない。一夜はがっくりと肩を落とす。その妹は、あははと楽しそうに笑っている。

出雲は火車という、空飛ぶ車（鬼灯夜行の帰り、骨桜を探した時に使ったものとは違う。人間の世界で言えば、タクシーのようなもの）を呼び、そして皆で満月館へと帰った。

ちなみに出雲は鈴へのお土産を買うのを忘れ、彼女の機嫌を損ねることになり、紗久羅と一夜は未だ残っている宿題と格闘する羽目になるのだが……その辺りの話は、割愛させていただく。

夏休みも、後少しで終る。

今日の出来事を、個人的につけている日記に書いたさくらは、夏休み明けも色々な事件が起きるのだろうか、と思いながら眠りについた。

第三十六話：鏡女（1）

それは、いとも簡単に割れた。大きな音と共に粉々に割れて、床に破片が散らばる。

窓から差し込む月の光を浴びて妖しく輝くその欠片は、まるで美しい女の黒髪の様だった。

その欠片に触れてみる。鋭い痛みが体に走った。指から流れる真っ赤な血。人を惑わす女の唇の色をしていて、それもまた月の光を浴びてきらきらと輝いている。

それを私は、ただ静かに、じっと見つめていた。

『鏡女』

紗久羅は今、三つ葉市にある喫茶店でお茶を飲んでいて。一人では無い。友人のあざみと咲月も居る。

今日で、楽しい夏休みが終わる。明日から新学期が始まり、漢字や数字、ローマ字と睨めっこする毎日が再びやってくる。

夏休み最後の日を楽しく過ごそう、ということと三人は電車でちよつと遠出をして、買い物をしたりゲームセンターで盛り上がった（これは主に紗久羅とあざみだが）、プリクラで仲良く写真を撮ったりして大いに楽しんだ。

沢山楽しんだ後、三つ葉市にある喫茶店に入り、お茶を飲んでお喋りしながらまったりしている。ここで暫くお喋りした後、家に帰る予定だ。

右手でチョコレートケーキにフォークを刺し、左手に持ったスプーンで残り少ないいちごパフェをぐるぐるかき混ぜながら、あざみ

がため息をつく。

「ああ、嫌だ嫌だ。明日からまた学校だよ。友達とまた会えるのは良いけれど、授業面倒くさいよ」

「まあ、面倒くさいけれど。でもあざみの場合授業なんてどうせまともに聞かずに、ぐうすか寝ているんだろっ」

と紗久羅が言えば、彼女はぶくつと頬を膨らませる。

「そんなことないよ。時々意識が吹き飛んじやうことあるけれど、眠ってはいないもん」

「意識が飛んでる……それってつまり寝ているってことじゃないのか。というかあたし、あんたがまともに授業受けている所見たことないし。いつも目を瞑っていたじゃん」

あざみとは幼稚園の頃からの付き合いだ。小・中学校の時も居眠りばかりしていたことを覚えている。高校は別だから知らないが、恐らく授業などまともに聞いていないだろう。

「失礼な。あれは寝ていたんじゃないの。集中する為に瞑想していたんです」

「嘘つけ」

頬杖をつき、呆れながらカフェオレを一口飲む。その様子を苦笑いしながら見ているのは咲月だ。

「もう、別に私が授業中寝ている、寝ていないなんてそんなの二人には関係ないじゃん。ああ、嫌だよ、夏休み終わっちゃうよ。まだ遊び足りないのに、もっと夏という季節を満喫したいのに！ 毎日が夏休みだったら良いのに。夏じゃなくてもいい、毎日が休みだっ

たら良い。ああ、ニートになりたい……」

「お前、いずれ出すだろう進路希望調査に、ニートになりたいとか絶対書くなよ」

「あら、幾らあざみでもそんなことは書かないわよ、きつと」

「甘いぜ、咲月。あざみだったらやりかねない」
「言えば、またあざみが頬を膨らませる。」

「か、書かないもん。もつと綺麗な言葉を使うもん」

「そういう問題じゃないだろう」

「ていうかニートをどう言い換えるんだよ、と聞くとそれはいずれ考える、と言い出す。彼女の場合本気なのか冗談なのか、いまいち分からないので、怖い。」

それはそうと、と咲月が話題を少しだけ変える。

「あざみ、宿題は終わったの？」

その言葉を聞いた途端、あざみが固まる。冷や汗を流し、視線を逸らした。

その様子を見れば、終わったかどうかなど一目瞭然だ。紗久羅と咲月は顔を見合わせ、ため息をつく。

「どうせそんなことだろうと思っていたよ」

「駄目よ、あざみ。宿題はちゃんとやらなくちゃ」

「い、いいもん、大丈夫だもん。今日家に帰った後やるうと思って
いたんだもん！」

絶対やらないな……二人は心の中でそう思った。そもそも後少し頑張れば終る量なのかどうかすら怪しい。

「まあ、せいぜい頑張れよ」

手伝う気は、毛頭無い。咲月は出来れば手伝いたいが、帰ったら習い事の復習をしなくてはいけないから無理だと言う。あざみは落胆したような表情を浮かべながら、パフェを一口食べた。

*

それからしばらく喫茶店で喋り、満足した三人は家のある桜町へ帰ろうとした。

その前に、と紗久羅が立ち上がる。

「ちょっと待っていて。トイレ行ってくる」

トイレは、店の奥にぼつんとある。

「今日は楽しかったなあ。いっぱい買い物もしたし……まあ、大分お金使っちゃったけれど……楽しかったから、いいや」

そう一人呟き、トイレのドアを開けようとした。

まさにその時。

「きゃあー！」

とドアの向こう側から小さな悲鳴のようなものが聞こえたのだ。何事だと思いながら、ドアを開ける。

入り口から見て右側に洗面台、左側にトイレが二つある。どこにでもある普通のトイレ。

ドアを開けた先には二人の人間がいた。

一人は恐らくこの喫茶店で働いている人であろう。店の制服を着ている。紗久羅より少し年上らしいその女性が、ドア側に足を向け、洗面台の前で倒れていた。

もう一人は客らしい少女。こちらは紗久羅と同一年位。セミロングの髪に赤いカチューシャをつけ、白いノースリーブのワンピースを着ている。

その少女は、倒れている女性を静かに見下ろしていた。

紗久羅は彼女が浮かべている表情を見て、背筋が凍るのを感じた。口をぎゅっと結び、女性を酷く冷たい瞳で見つめている。その瞳に一切の感情は無く、無機質なモノに見えた。そしてその表情はどこか大人びていて、妖しさすら感じる。彼女の存在が、今この空間を異質なものに変えているように思えた。

目の前の彼女は、まるで、出雲のようだった。

「何、どうしたの!？」

声が出たのは、ドアを開けて少し経ってからだった。

紗久羅が叫ぶと少女がはっとしたように顔をあげ、彼女を見た。途端、異様な空気が消え失せる。今目の前に居るのは、冷たさも妖しさも感じない、どこにでもいる普通の女の子だ。

「あの、この女の人私の目の前で倒れちゃって……ど、どうしよう」
女性を指差す彼女の声は震えており、やや早口になっている。

「あ、待っていて。店員さん呼んでくるから」
こんな所でぼうつと突っ立っている場合ではないことに気づき、慌ててその場を離れた。

丁度近くに居た女性店員を呼び、三人で協力してトイレの外に女性を半ば引きずるように連れ出す。その後男性店員さんが彼女を抱えて、休憩室へ連れて行った。

紗久羅と少女はその様子を心配そうに見守る。

「あの人、大丈夫かな。私本当びっくりしちゃったの。あそこ洗面台が一つ壊れていて……丁度、あの女の人が洗面台を使っていて、それで、あの人を手を洗うのを待っていて……そしたら、急に女の人が悲鳴をあげて、倒れちゃって」

黙って待っているのが辛かったのだろう、少女が目の前で起きたことを掠れた声で話し始めた。

「確かに目の前で人が倒れたらびっくりするよな。大丈夫だといひけれど……」

二人、休憩室の前で突っ立っている。程なくして女性を運んだ男性店員が休憩室から出てきた。

「あの人、大丈夫ですか？」

少女が聞くと、男性店員は静かに微笑んだ。

「はい。どうやらただの貧血だったようです。今日を覚ましました」それを聞いて、二人はほっと胸を撫で下ろす。

二人は謝罪とお礼を言われた後その場を去る。

紗久羅を待っていたあざみと咲月は、二人楽しくお喋りしていた。

「ちょっと紗久羅、遅いよ」

「何かお手洗いの方が騒がしかった気がしたけれど、何かあったの？」

「うん、ちょっと。ここで働いている女の人がトイレの中で倒れちゃって。でも、ただの貧血だったみたい。本当、びっくりしたよ」

「そうだったの。でも、大事なくて良かったわね」

うん、と返す紗久羅は肩を叩かれ、振り返る。そこにはさっきの少女が立っており、ぺこりと頭を下げる。誰？という顔をしているあざみと咲月に小声で、女の人が倒れた時トイレに居た人だと説明する。

「さつきは有難う。貴方が丁度来てくれて、良かった。それじゃあ私はそろそろ行くね」

「うん。それじゃ」

少女は紗久羅に小さく手を振り、店を出て行く。それからすぐ、三人も店を出て桜町に帰った。

*

まだ、これ位のことしか出来ないのか。酷くもどかしい。あれだけの生気を奪ったところで、何の足しにもならない。

しかし、慌てる必要は無い。この地は私達に力を与えてくれる。

強く歪んだ、異質な気の流れるこの地。もう少し離れた所から、より強い力を感じるが……まあ、ここでも十分だろう。

必ず、全てを取り戻す。

*

楽しい夏休みはあっという間に終わりを告げ、新学期が始まった。夏休みは終わったが、夏は未だ終わっていない。憎らしい暴君が空の上に君臨し、朝から遠慮なしに世界を焼き尽くし、苦しめる。

まだ夏休み気分が抜けきっていない子供達が、暑さに呻きながら

久しぶりの学校へ向かう。ぎゅうぎゅう詰めバス、道路を駆け抜ける自転車、揺れるランドセルやカバン。

紗久羅は久しぶりに校門をくぐり、教室へと向かう。廊下も教室も、一段と騒がしい。携帯のメール等で散々やり取りしていても、まだ話し足りないようだ。せわしなく吐き出される言葉は、海の中無限に浮かび続ける泡沫の様。次々と浮かんでは弾け、多くのそれが重なって騒がしい音楽を作り出す。

日焼けして真っ黒になっている人、髪を染めたまま直していない人（恐らく後で教師にこつてこてに絞られるだろう）、大きくイメージチェンジした人等も居るが、大方の人は夏休み前と少しも変わっていない。

教室に入り、席につく。香る机の木の香りは懐かしいようなそうでもないような。

紗久羅が席につくや否や、仲の良いクラスメイトが彼女のところにやってきた。久しぶり、という言葉から始まり、夏休み中何をしたかという話題へと移っていく。

最初は何をして遊んだとか、宿題は終わったかとか、そんな話題だった。それがしばらくして、話題は夏休み中に起きた桜町連続神隠し事件の話に変わる。

紗久羅の兄・一夜もその被害者の一人であった。そのことについて色々聞かれたが、彼女は曖昧な言葉を返すだけにした。喋りすぎると、一般の人が知りえない情報までうっかり喋ってしまいそうだったからだ。事件の真相を知る者は少ない。しかもその真相はおよそ他人に言っても信じてもらえないようなものなのだ。余計なことを喋って、変な目で見られるのは嫌だった。

夏の間降り続けた不思議な雨の話も出た。紗久羅はその雨の背景にあったものを詳しくは知らない。ただ、雨が降り続いて憂鬱だったとだけ言う。

不思議な事件に、不思議な出来事。今年の夏はいつもと一味違ったねと友人が一言。恐らく今後も不思議な事件が次々と起きるだろう……とは口が裂けても言えない紗久羅だった。

隣の席に、今来たらしい生徒が座った。紗久羅は隣の席に目を向け、にやりと笑う。

「よう、久しぶりだななっちゃん」

なっちゃん……こと深沢奈都貴ふかさわなつきは、紗久羅をじろりと睨んだ。

「だから、なっちゃんって呼ぶなっの」

「そんなこと言わないでよ、あたしとなっちゃんの仲じゃない」

意地悪く笑ってやると、なっちゃんはどんな仲だといかにも嫌そうな表情を浮かべながら返す。

なっちゃん……は可愛く明るい女の子 では無い。クールで一

匹狼タイプな女の子 でも無い。男っぽい女の子 というわけでも無い。

「その女の子みたいな呼び方やめろよ、恥ずかしいんだよ」

そう、なっちゃんは男の子である。両サイドの前髪を伸ばしており、顔もどちらかという中性的ではあるが、正真正銘の男の子だ。数年前から「なっちゃん」と呼ばれるようになってしまったのだが、本人はその呼び方を毛嫌いしている。

「いいじゃん、なっちゃん。可愛いしさあ」

紗久羅は、彼がむきになって反論する様子を見るのが楽しくて仕方無いのだ。

「良くないし。まったく、大体井上のせいだぞ。俺がその女の子みたいな呼ばれ方をするようになったのは」

「あれ？ そうだったっけ？ あはは、全然覚えていないや」

惚けた笑みを浮かべると、奈都貴がため息をつく。そして逃げようように席を立ち、友人のところへ行った。

その様子をにやにやしながら見ていた友人は、相変わらず仲が宜しいことで、と紗久羅を茶化す。紗久羅は別にそんなんじゃないよ、と笑って返した。

遠くで友人と話している奈都貴は、お喋りしている紗久羅をちらちらと見ている。しかし、そのことに気がついている人は誰も居ない。

その後、始業式の為全員体育館へと向かった。生徒達でぎゅっぎゅっ詰めになったそこは、非常に蒸し暑い。散々喋ってもまだ話足りない生徒達の声が体育館中に響き渡る。まるでセミの合唱だ。

そのセミの合唱を教師が無理矢理静め、始業式が始まる。うる覚えの校歌をやる気無く歌い、校長のどうでも良い話を延々と聞かされ、その後は夏休み中にあった大会などで好成绩を収めた者、何か受賞した者の表彰式。始業式という名の苦行が終わり、たらたらと教室へ戻った。

*

校歌の時は情けない位小さかった声は再び大きくなり、弾ける泡沫の不協和音が教室に響き渡る。かなり、騒々しい。

ドアを開け、クラス担任が入ってきた。黒系の服ばかり着ている

「鳥先生」こと加納さえは、相変わらず青白くほっそりしていた。軽く話をした彼女は、何故かちらと教室のドアに視線を移す。

「そうそう。今日、このクラスに一人転校生が来ます」

「転校生、という言葉に生徒達が反応し、ざわざわと騒ぎ始める。

「転校生！ 女？ ねえ、女？」

お調子屋の男子が机から身を乗り出し、手を上げて尋ねる。授業の間は決して上げられることのないその手は、ピンと綺麗に真っ直ぐ伸びていた。拳手に理想のフォームというものが存在するのなら、まさにこんな感じであろうというものだった。

さえは女の子よ、と半ば呆れ気味に答える。よっしゃあとガッツポーズをする彼を、隣に座っている女生徒が軽くはたいた。

さえはドアを開け、転校生を手招きする。

開けたドアから、一人の女の子が静かに教室へと入ってきた。

揺れるセミロングの髪の毛、赤いカチューシャ。可憐なその姿を見て、更に教室内が騒がしくなる。

正面を向いた彼女の顔。それを見て、紗久羅は目を丸くした。

どう見ても転校生である彼女は、昨日喫茶店であった少女だったからだ。

「あつ、あんだ！」

思わず声が出る。その声に皆反応し、一斉に紗久羅を見た。

「何、井上さん知り合いなの！？」

「あの子のこと知っているの！？」

「え、あ、あの……」

紗久羅はうつかり叫んでしまったことを後悔し、体を小さくした。少女の方も紗久羅に気がつき、小さく「あっ」と声を上げ、ほっとしたように微笑んだ。

さえは首を傾げながらも、転校生の名前を黒板に書く。彼女の名前は『及川^{ゆず}柚^き季』というらしい。

「さあ、皆静かにして。それじゃあ及川さん自己紹介宜しくね」
柚季は頷き、小さく深呼吸をした。

「初めまして。及川柚季といます。学校のこととか、色々教えて下さい。後、もしよければ、この辺りでオススメのお店とかも教えて欲しいな、と思います。これから、宜しくお願いします」
そう言って、柚季はぺこりとお辞儀した。それに合わせて、生徒達が拍手をする。

*

休み時間になると、早速柚季はクラスに女子達に質問攻めされていた。

紗久羅も話したいとは思ったがごみごみした輪っかに入り込みたくなかったので、まあ落ち着いた後でいいかと思いつながらその様子を眺めていた。

「井上、あの転校生と知り合いなの？」
奈都貴に聞かれ、うんと答えた後昨日あったことを簡単に説明した。

「ふうん、成程ね」

「何、なっちゃん。あの転校生のことが気になるの」

「別に、そういうわけじゃないけれど。ただいきなり大声あげたものだから、びっくりしたただだよ」

「だって、本当にびっくりしたんだもん」

そんな紗久羅のところに柚季が来たのは、次の休み時間だった。

「まさか、こんなところで再会するなんてね。私本当にびっくりしたわ」

「あたしもだよ。あ、あたし井上紗久羅っていうんだ、宜しく」

漢字はこう書くんた、と近くにあった紙に書いてみせる。井上さんって言うんだ、と柚季がそれを見ながら頷いた。

「宜しく、井上さん。それにしても驚いた。ふふ、でも良かったわ。新しい土地、新しい学校での生活とか、正直ちょっと不安だったのだけれど。貴方の姿を見て、ほっとしたわ。やっぱり少しでも見知っている人が居ると違うわね」

そう言って笑いながら、髪を撫でつける。よく見るとその手の人差し指には絆創膏がついていた。怪我でもしたのだろうかと思いなからそれに視線を向ける。彼女はその視線に気がついたのか、ああこれ？と人差し指をぴこぴこ動かす。

「何日か前にちょっと切っちゃったの。大した怪我じゃないんだけど、なかなかしぶとくてね。まだ完全に傷がふさがっていなくて」

「ああ、成程ね。しかしあの人ただの貧血で本当に良かったよな」

「ええ。昨日は引越しも落ち着いたし、新しく来た街をちょっと見て回ろうかなと思って、しばらく歩いた後あの喫茶店に入ったの」

「それでトイレに行ったら、目の前であの女の人が倒れた、と」

「そういうこと。悲鳴をあげて、突然倒れて。あまりにびっくりしすぎて、叫ぶことも動くことも出来なかったわ」

確かに柚季は、紗久羅が来るまでただ静かに倒れた女性を見ていただけだった。その時浮かべていた彼女の表情は、今思い出してもぞくつとする。あまりびっくりしすぎると、人間逆にああいう顔になるものなのかな、と紗久羅は思った。

「まあ何にせよ、良かったよ」

うん、と言って柚季はまた微笑んだ。その後も自分の趣味などについて、色々話した。

その日は授業らしい授業もなく、半日で帰った。

柚季は家が比較的近いらしい生徒と一緒に帰るらしい。その途中、オススメのお店とか色々教えてもらうのだと、弾んだ声で紗久羅に話してくれた。

紗久羅はいつものように奈都貴をからかった後、下校した。

帰った後、今度は自分が出雲にからかわれ続けることになった：

…。

*

ああ、生気が欲しい。あれを喰らわねば私の力が完全に戻ることは無いだろう。おのれ忌々しい、もう少し上手く動くことが出来れば。しかし嘆いても腹は膨れぬ。力も戻らぬ。

今はただ、待つしかない。絶好の機会が訪れる日を。

*

新学期から五日が経とうとしていた。学校生活もすっかり普段通りのものになり、五日前まで夏休みだったことが嘘のようだったが、夏休みの時と変わらず、暑い。

開け放たれた窓から入ってくるのは、涼しい風では無く、熱風と腹が立つほど眩しい太陽光。

「ああ、暑い。ものすごく暑い。なっちゃん、助けて」

「何で俺に助けを求めなんだよ。ていうかなっちゃん呼ぶな」

次の授業の準備をしていた奈都貴も暑さにほとほと参っているらしく、反論する声に力が無い。エアコンがあればいいのだが、残念ながら三つ葉高校には特別教室等、一部の教室以外には設置されていない。

仕方なく、紗久羅は下敷きをぱたぱたと煽いだ。多少涼しくはなるが、腕が疲れる。そうやって、下敷きや家から持ってきた団扇などではたばた煽いでいる人は少なくない。中には強烈なメント飴を舐めて暑さを忘れようとしている者もいる。

ちよつとトイレに行こうと、席を立ち教室を出る。

「あれ？」

女子トイレ入り口ドア前に何人かの女子が集まり、騒いでいる。楽しくお喋りしているようには見えない。何かあった様子だった。その女子集団の中には、新しい学校生活にも大分慣れてきた袖季も居た。そんな彼女の顔は、何故か酷く青ざめている。

「どうしたの？」

袖季に話しかけると、俯いていた彼女は顔をあげた。

「ねえ、井上さん。こんなことってあるのかなあ？」

「え？」

「……またなの」

「また？」

柚季が、静かに頷いた。

「また私の前に居た子が、悲鳴をあげて倒れちゃったの」

第三十七話：鏡女（2）

*
紗久羅はそれを聞いて驚いた。夏休み最後の日に起きたようなことが、また起きたなんて。

二人は騒いでいる女子達から少し離れる。柚季がかぼそい声でこの経緯を話し始めた。

「トイレに行つて、手を洗おうとしたの。でも丁度洗面台が埋まっていた……それで私順番を待っていたの。そしたら私の前で髪をいじっていた子が悲鳴をあげて倒れちゃったのよ。まるで怖いものも見たかのような声だった」

「あれ、そういえば喫茶店で倒れた人も悲鳴をあげてから倒れたんだっけ」

柚季がこくりと頷く。何かおかしいような気がする、と言葉を続けた。

「皆も驚いていた。虫とかが壁や鏡を這っていたわけでもないし……」

間もなく教師がやってきて、倒れた女子生徒を保健室へと運んでいった。ちらりとその姿を見る。顔色が悪く、ぐったりしているのが良く分かる。

友人達や、丁度その場に居合わせた人達は心配しながらも教室へと戻っていく。

その倒れた少女だが、保健室に運ばれてすぐ目を覚ましたらしく、最後の授業が終わった後、教室に戻ってきたようだ。どうやら軽い

貧血だったらしく、しばらく休んだらすっかり元気になったらしい。それを聞いて、柚季も紗久羅もほっと胸を撫で下ろす。しかしその一方で、何故彼女が悲鳴をあげたのかが気になり、思わず彼女のクラスを訪ね、何気なく聞いてみた。彼女は申し訳無さそうに首を振った。

「ごめんね、驚かせちゃって。でもよく覚えていないんだよね。何かものすごく怖いものを見た気がするんだけど。暑さで頭がぼうつとしていて幻覚を見ちゃっていたのかも」

二人は放課後、今度はあの三つ葉市にある喫茶店を訪ねた。そこで以前柚季の前で倒れた女性に会い、出来るだけさり気なく聞いてみた。しかし回答は先程の女子生徒と同じものだった。

あまり覚えていない、と。二人は改めて彼女に礼を言われ、照れつつも店を出た。

喫茶店の店員さんも、女子生徒も自分が何故悲鳴をあげたのか覚えていない。

二人はどうして倒れる前に悲鳴をあげたのか。

「でも気味が悪いわ。私の目の前で、二人の人が悲鳴をあげて倒れるなんて……。しかも短い期間中に 洗面台の前で倒れたっていうのも共通しているし……。こんな偶然、あるかな？」

「き、きつと偶然だよ。あんまり気にするなっつて」

「そうだよな。いやだな、私ったら。一瞬自分が気づかないうちに何かしちやっつたのかなとか変なこと考えちゃってさ。馬鹿だよな、そんなただ近くに居るだけで誰かを貧血にさせることなんて、只の人間に出来るわけがないのにさ」

柚季は困ったように笑い、頬をかいた。その手には未だ絆創膏が

ついている。

「あれ、まだその絆創膏取れてないの？」

「あ、うん。何か傷がまだしつかり塞がっていないくて。別に外してもいいんだけどね。……ああそれにしても今日はびっくりした。もうこんなこと、起きないよね……？」

「大丈夫だよ。こんなこと滅多に起きないって」

そうだよ、と笑って彼女は紗久羅に別れを告げた。また明日と手を振る紗久羅に、柚季も手を振り返す。

桜町のある方へ歩く紗久羅の後姿を、柚季はじつと見つめていた。その顔に先程までの笑顔は、無い。

人から温もりを根こそぎ奪うような、冷たい瞳を彼女に向け、やがて口元を綻ばせて、再び笑う。しかしそれは先程までの可憐な笑みではなく、人を馬鹿にしたような。何かが上手くいったことを喜んでいるような。そんな笑みだった。

そしてしばらくすると両手を上げて伸びをして、自分の家へと帰っていった。

*
まだ、まだ足りない。これでは腹の足しにもならぬ。カモ大して戻ってはいない。全てを奪われ、傷ついたこの体を完全に癒すには程遠い。

だがある程度力が戻れば……。

*
一人の二年女子生徒が、特別教室が並ぶ場所にあるトイレに行っ

た。

用を済ませ、洗面台で手を洗う。ふと見ると洗面台の上にピンクのくしが置いてあった。誰かが忘れていったのだろう。

それを手に取るとトイレ入り口のドアが開き、一人の生徒が入ってきた。ネクタイの色を見る限りでは、一年生のようだ。セミロングの髪に、赤いカチューシャの可愛らしい女の子だった。

「あ、すみません。それ私のです。置き忘れちゃったみたいで、恥ずかしそうに笑いながら、少女が近づいてくる。

「そうだったの。どうぞ」

くしを差し出すと、少女は礼を言ってそれを受け取った。

くしから手を離れた二年女子生徒は、何故か鏡から視線を感じ、どきりとした。その視線は痛い位強いものだったから、思わず彼女は鏡に目を向ける。

そして、そこに映っている光景を見て呆然とした。

「え？」

くしを渡した相手　一年女子の姿が、鏡に映っていなかった。代わりに　丁度彼女が居る辺りに……一人の女が立っていた。

大人の女性で、黒く艶やかな髪を綺麗に切りそろえている。頭には金の飾りがついていて、光り輝いている。赤く、妖しく潤む唇。萌黄色、躑躅色、瑠璃色の着物を重ね、更にその上から紫紺色の着物を羽織っている。どう見ても現代人の服装ではない。いや、そもそも人間なのかどうかも分からない。

心臓をぎゅっと強く握りしめられたような感覚に陥り、頭の中が真っ白になり、唇が震えるのを感じる。

女はゆっくりと歩き、女子生徒と向かい合わせになった。女子生徒の姿は、その女によってかき消される。

鏡に映る女。けれどその女は現実の世界には存在しない。女子生徒の前にあるのは洗面台と、鏡だけ。女の姿はどこにも無い。それなのに、鏡の向こうに女は、居た。鏡の中でのみ、存在している。

水に濡れた石のように、黒く冷たい瞳。歪む唇。

女が両手を前に突き出す。雪を思わせる手は鏡を突き抜けた。今にも消えて無くなりそうな儚く、透き通ったそれはどんどん近づいていく。

そして、女子生徒の頬に、手が、触れて……。

「いやあああ！」

悲鳴をあげたところで、その手から逃れることは出来ない。少女は自分の頬が凍りつくのを感じ、同時に体から力が抜けるのを感じた。

少女は壊れたマリオネットのように、がたと崩れ落ちる。

倒れたまま動かない彼女を、くしの持ち主である一年女子……及川柚季が静かに見つめていた。やがて彼女の口から漏れるくすくすという笑い声。

倒れた少女を見つめるその瞳と、浮かべている歪な笑みは鏡に映った女のそれによく似ていた。

*

一年女子生徒が倒れた次の日のことだった。

「え、また!？」

「そう。またなの。……今度は、二年生の先輩」
うんざりしたような表情を浮かべながら、柚季はため息をつく。
それを聞いて紗久羅は驚き、声をあげ、うるさいと先生に叱られた。
今は家庭科の授業で、家庭科室で針及び糸、布と格闘している最
中。

「状況とかもまるつきり一緒だし。何かやっぱりおかしい、よね」
紗久羅も流石に「偶然だよそんなの！」とは言えなかった。お手
洗いの洗面台前で三人もの人間が、悲鳴をあげて倒れた。しかも柚
季の目の前で、こんな立て続けに。

（偶然にしてはちょっとおかしいような……。何か悲鳴をあげて倒
れたってというのが気になるんだよなあ。やっぱり『向こう側の世界』
の奴等が関係しているのか？ ううん、分からないな）

お化けか何かに憑かれているのかもしれない、何か最近変わった
ことをやったとか、そういうことは無い？……と聞きたいところだ
が、普通の人にそんなことを言えば、間違いなく「何言っているの
？」とドン引きされることだろう。紗久羅だつてつい最近まではそ
んなものが実在しているなんて、信じてなどいなかった。

そんなことを色々考えながら、余所見をしていたせいで指に針を
突き刺してしまい、顔をしかめる。

「いてっ」

「だ、大丈夫井上さん」

「大丈夫、大丈夫。あはは」

そう言って笑いながら適当にやっていたら、また針で指を刺した。
料理は得意だが、裁縫は滅法苦手だった。

「でも、やっぱりおかしいよね。それとも考えすぎ？ けれど……」
そう言う彼女は、神妙な面持ちで未だ絆創膏が取れていない自分の指をじっと見つめる。何か考え込んでいるようだ。

あのいつになっても取れない絆創膏も何となく気になる、と紗久羅は思った。絆創膏を巻くだけ程度の怪我なら、もうとつくに治っているはずなのだが。まだ時々痛むのだというその指は、一体どこでどういう風に怪我したのだろう。

作業を止め、指を見つめたまま人形のように動かない柚季。

「どうしたの、及川さん」

呼びかけると柚季ははっとしたような表情を浮かべ、そして苦笑いしながら首を横に振る。

「ううん、何でもないの。ちょっとぼうつとしていただけよ、気にしないで」

だが紗久羅は彼女の浮かべている表情を見て、彼女には何か心当たりがあるのではないか、と思った。しかししつこく聞いてもしようがないと思い、そのまま糸、針、布と格闘を再開する。

そして授業が終わり、掃除とHRを経て下校の時間となった。下校の時間といっても多くの人はこれから部活だ。紗久羅は帰宅部なので、一足先に帰ることが出来る。家に帰った後は、いつも通り店番をする予定だ。

学校近くのバス停でバスに乗り、桜町へ向かう。紗久羅の前に、同じく帰宅部の奈都貴が座っていた。

バスから降り、前を歩いていた奈都貴の肩を思いつき叩く。奈都貴は「うわっ」と叫び、振り返って紗久羅をぎろつと睨みつけた。

「痛いな、何するんだよ！ 乱暴な奴だな…… お前本当に女か？」

「一応そうだけど。ふふ、何なら確かめてみる？」

「にやにや笑う紗久羅に、冗談じゃない！と返し、奈都貴は早足でさっさと歩いていった。それを紗久羅は追いかける。」

「何だよ、俺に何か用か？」

「別に。一人で寂しそうだったから、あたしがついていてやろうと思っただけ。」

「うるさい、余計なお世話だ」

出雲相手だと一方的に弄られまくる彼女だが、奈都貴相手だと常に優位に立つことが出来る。どうも奈都貴は女の子に弱いらしい。

紗久羅は何となく今回の不思議な出来事について、話をした。

「及川さん、びっくりしていたよ。そりゃそうだよな。三回も同じようなことが続いたんだから。でも不思議というか妙な話だよな。こんなことってあるものなのかな。大体悲鳴あげてから貧血で倒れるって……別に虫とかが居たわけでもなかったらしいんだけど」

奈都貴はちらっと紗久羅を見、すぐ視線を逸らす。

「世の中なんて、不思議なことだらけだよ。……誰も気がつかないだけで」

「え？」

小さく低い声で、思ってもいなかった言葉を紡いだ奈都貴を見て、紗久羅は目をぱちくりさせた。

いきなり何を言い出すのだろうと思うのと同時に、出雲のことや「向こう側の世界」のことを思い浮かべて、どきりとする。

奈都貴が、突然歩みをやめる。

「なあ、井上」

「何？」

紗久羅は振り返り、そして再びどきりとした。真剣な顔、真っ直ぐな瞳。

「お前は、知っているのか」

「はあ？ 何をだよ」

「俺は……」

奈都貴は何かを言いかけ、静かに目を瞑り、首を横に振った。

「何でもない。 それじゃあ、また明日」

そう言っつて、紗久羅を追い抜き、足早に去っていった。残された紗久羅は訳が分からず、ただ呆然と立ち尽くす。

結局奈都貴は何を言いたかったのか。頭の中でぐるぐると考えながら家へと向かうが、答えは出てこなかった。

「何だよあれは、意味が分からん！」

二階にある家に行き、自分の部屋に入ると、乱暴にカバンを床に叩きつける。制服を脱ぎ、私服に着替え、一階にある弁当屋へ足を運ぶ。

ショーケース前にある椅子に座り、お客さんが来るのを待つ。この時間になると、弁当よりは一緒に売っている惣菜の方が多く買われる。冷房など無いそこは当然のことながら、暑い。

そんな暑い空間を一気に冷ますのは、毎日のようにこの弁当屋を訪れる出雲の存在だった。いつものようにいつの間にか店の前に立っていた彼の姿を見るだけで、全身に流れる血が凍りつきそうになる。

「やあ、紗久羅。今日も暑いね」

という彼の顔はとても涼しげだ。いや、涼しげ通り越して、冷たい。いつもそうだった。

「さっさと買って、さっさと失せる。……と言いたいところなんだけれど、なんかさあ……ちょっと気になることがあってさ」

出雲が首を傾げる。いつもとはやや違う反応に戸惑っているようだった。

紗久羅は袖季のこと、彼女が三回も遭遇してしまったことについて話をする。

「……ふうん。それで君は、もしかしたら私達世界の住人が関わっているのではないか……と思っている、と」

「考えすぎなのかもしれないけれど。でも何か変だなって思って」

「確かに、妙な話ではあるね。しかし流石にそれだけの話じゃ何とも言えないねえ。仮にこちらの世界の住人が関係しているとなれば、その及川袖季という娘との間に何かがあったのかねえ」

「及川さんが何かに憑かれている、とか？」

「さあ、そこまでは……。その袖季という娘と直接会うことが出来れば、何か分かるかもしれないけれど。まあそんなことより、いな

り寿司をおくれよ。その為にここへ来たのだから」

こいつに相談したのが間違いだっと思ひ、ため息をつきつつ、紗久羅はいつものように乱暴にいなり寿司の入ったパックを突き出し、お金を貰う。

結局話したところで何の解決にもならず、出雲は満足した表情を浮かべながらさっさと帰っていった。

*

一人の男が、夜道を歩いてきた。月光、家から漏れる灯り、電灯以外に灯りは無い。その中を歩くのは慣れてる。しかしその日は何故だか知らないが、妙な胸騒ぎがした。気温は夜でもうんざりするほど高い。それなのに、背筋が何だか冷たい。

誰かが後ろに居る。男はそう思った。

別に人が居ることはそんなにおかしくは無い。男は後ろを振り返ろうとしたが、怖くて出来なかった。何故か自分の後ろにいるのは人では無いものではないか……などと妙なことを考え、苦笑いする。そんなわけが無い。しかしそう考えずにはいられない。その位気味の悪い気配がしている。

こつ、こつ、こつ、と後ろから足音が聞こえる。その度に男の心臓はどくどくという音と共に揺れた。

仕事のせいで疲れているのだろうか、ああそうだ、きっとそこに違いないと自分に言い聞かせる。

いつもとは違って気味悪く見える月が、男の進む先にある十字路を照らしている。

くすくす……。

背後から少女の笑い声が聞こえ、男はぎくりとする。頭が痺れて

しまつ位冷たい声だった。男はごくりと唾を飲み込み、後ろを振り返る。

男の後ろを歩いていた少女が立ち止まる。

黒髪は闇に溶け、頭につけたカチューシャと白いワンピースがうつすらと見える。年頃は男の娘と同じ、16歳位と思われた。少女は微笑んでいる。

子供がうるつくにはやや遅い時間だ。しかし見た目夜遊びをするような女の子には見えない。

可愛らしくはあるのだが、子供っぽい子供にどうも見えない。何だか妙に大人びていて、そしてとても、冷たい。

少し気味が悪いとは思ったが、居たのが化け物などではなく女の子であったことにほっとして、進行方向へと再び顔を向ける。

道の先にあるカーブミラー。月に照らされたそれは、妙に明るかった。

その鏡を見て、男は固まった。

カーブミラーに見知らぬ女の顔が大きく映し出されていたのだ。大人の女性で、平安時代の女性のような髪型、幾重にも重ねられた着物、真っ赤な唇。

その女が、鏡から抜け出てきた。頭、手、胸。その胸は蛇のように長く、鏡と繋がっている。

「男の生気はあまり美味くは無いのだが……贅沢は言えぬ、ふふ」

細い指に頬を撫でられた男が唯一出来たこと、それは。

「うわああああー!」

大きな声で叫ぶことだった。
頭の中が空っぽになり、力がふっと抜け、男の意識は底へと沈んでいった。

男が倒れた今、カーブミラーに女の姿は無い。そして男の後ろに居た少女もすぐにその場を立ち去った。

不気味な月の光に照らされ倒れる男。その顔は酷く白かった。

*

「ええ、お父さんが倒れたの!？」

紗久羅が教室に入った時、女子生徒のそんな声が聞こえた。

クラスメイトの梨奈がこくりと頷く。紗久羅とも割と親しい子だ。何だか気になって、彼女の所まで行ってみる。

「何、どうかしたの」

「あ、さくらん。いや昨日の夜父さんが倒れちゃって。……でも、別に病気とかそういうわけじゃなくて、大したことはなかったんだけど」

でもさあ、と頼杖をつきながら話を続ける。

「何か父さん、大きな叫び声をあげていたみたいなんだよね。それを聞いたその近くの家の人が声のした方に行ってみたら父さんが倒れていた、と。誰かに襲われたってわけでも無いらしいんだけど……よく覚えていないけれど、変な幻覚を見て怖くなって叫んだのかなんとか。まあ叫び声をあげたお陰ですぐ見つけてもらえたんだけど」

叫んでから倒れた……という言葉聞き、紗久羅は袖季のことを思い出した。場所はトイレと道路で全然違うが。まあ単なる偶然だ

ろう。

「あまりにびっくりしたものだから、今日殆ど眠れなかった……ああ眠い」

梨奈はそう言うと机に突っ伏して、眠りだした。紗久羅と、他の友人は顔を見合わせた。

梨奈の後ろには袖季が座っている。紗久羅は何気なく彼女を見る。袖季の表情には何故か元気が無く、俯いていた。

「どうしたの、及川さん。具合でも悪いの？」

ううん、別にと答えるその声も力なきもので、酷く小さい。そしてまた、絆創膏の巻かれた指を見つめる。どうしたんだろうと紗久羅は首を傾げる。

その後は多少元気を取り戻したようだったが、矢張りどこか様子がおかしかった。

（及川さんは何かを隠しているのだろうか。そうだとすると、一体何を隠しているんだろう……）

紗久羅は気になって仕方が無かった。

第三十八話：鏡女（3）

＊
授業が終わり、掃除の時間となる。紗久羅の班は図書室、柚季の班は教室掃除となる。紗久羅は一階にある図書室を目指す。

図書室から一番近い所にある階段を下りようとした時、何か自分の肩に触れたのを感じ、後ろを振り向く。しかしそこには誰も居ない。気のせいか、と首を傾げながら進もうとすると「紗久羅」と自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。その声には聞き覚えがあった。……出雲の声だ。しかし彼の姿はどこにも見えない。

暑さのせいで幻聴でも聞いたのだろうか。不思議に思いながら階段を下り、図書室へ行った。

三つ葉高校の図書室にはドアや壁が無い。非常に開放的なスペースなので、居ても息苦しくは無い。入り口にはセキュリティゲート。入り口に対して垂直に本棚が並び、その本棚の群れの奥にテーブルがある。貸し出しカウンターは右端にぽつんとある。

掃除内容はテーブルやカウンター、本棚を雑巾で拭いたり、床を綺麗にしたりするというもの。

カウンターには司書の九段坂英彦くだんさか ひでひこが居た。パーマのかかった髪形の、ひよろりとした三十過ぎ位の男だ。彼は読書に夢中になっており、掃除をしに来た紗久羅達の存在に気づいていない様子。そのせいか奈都貴以外の男子二名は掃除などせずふざけている。仮に英彦が遊んでいる彼等に気づいたところで、真剣に注意することは無い。まあ注意されようがされまいが、彼等が真面目に掃除をすることなど無いのだが。

「司書さん、そこどいてくれませんか」

カウンターにある大きな椅子に座って読書をしている英彦は、は

つきりいつて邪魔である。カウンターのの上には彼が個人的に家から持ってきたと思しき本が積まれている。これでは雑巾で拭くことも出来ない。

紗久羅が同じセリフを三回ほど繰り返したところで（三回目は司書さんの部分がおっさん、になっていたが）ようやく彼は紗久羅の存在に気づき、顔をあげる。

「いけませんよ、先生をおっさん扱いしては」

「おっさんでも司書さんでも何でも良いから、ちょっとどいてもらえますか？ あとその本もどかして下さい」

妖怪論やら、伝承がどうたらとか、そういったタイトルばかりの本を指差す。

「ええ、これどかすんですか。……面倒なんですよねえ。このカウンターは掃除しなくてもいいですから、他の場所を綺麗にして下さい」

「それが学校に勤める人間の言うことか！？」
手に持っている雑巾をぶん投げてやるうかと思っただが、奈都貴に止められた。

「放っておけよ。……この人何言っても無駄だから」

「ったく、しょうがないなあ。それじゃあ床でも掃除するか。なっちゃんも手伝ってよ」

「だからなっちゃん言うなっの」

「ふふ、二人共仲が直しいですね。微笑ましいです」

机を元に戻すだけのようだった。

柚季がゴミをちりとりに入れ、ゴミ箱に入れる。後は机を運ぶだけだ。机を運ぶのは、掃除を終えて教室に戻ってきた人達も手伝う。後ろに固まった机を元の場所まで運ぶ。机によって異様に重いものと軽いものがある。重いものにあたると、結構辛い。

紗久羅も運ぶのを手伝う。柚季も机を運んでいるようだった。

「あつ」

そんな柚季が声を出したのと同時に、何か落ちる音が聞こえた。どうやら運んでいたのは女子の机。その中に鏡が入って居たようで、それが落ちてしまったのだ。

「やつちやった。鏡、割れていないよね？」

柚季はそう言い、落ちた鏡を広い割れていないか一応確認する。しかし、確認するには随分長い時間見つめている。

そして鏡に向かって、ぶつぶつと何か呟いている。どこか気味の悪い光景に紗久羅は胸がざわつくのを感じた。

「ああつ」

そんな彼女が急に声をあげ、手に持っていた鏡を床に落としてしまった。

「及川さん？」

鏡は幸い割れていなかったが、柚季の顔は酷く青ざめており、体は微かに震えている。紗久羅はその鏡を手に取り見てみるが何の変哲も無い只の鏡だった。

「な、何でもないので。ああ、この鏡この机から落ちてきたの。ちゃんと入れないとね」

朝と同じような元気の無い姿。柚季は鏡を机の中に入れなおし、再び机を運ぶ。その様子を見ていた周りの人達も何だろうと首を傾げている。

「……ない……絶対……」

何か呟いているようだったが、その声は彼女のすぐ後ろで机を運んでいた紗久羅にもよく聞こえなかった。

そしてその様子を、奈都貴が静かに見つめていた。

*

ふふふ、少しずつ調子が戻ってきている。明日と明後日はより自由に動くことが出来る。ならば、色々な所へ行こう。そして多くの人間共の生気を奪ってくれる。まあ、ほどほどにしておかないと怪しまれるだろうから……ふふ。

だが、先程妙な気配を感じた気がする。気のせいだと思いたいが、誰にも邪魔はさせぬ。

*

土曜日、紗久羅は満月館を訪ねることにした。というのも昨日出雲に「美味しいお菓子をあげる。後色々他にも、ね」と招かれたからだ。他が何かは気になるが、美味しいお菓子は好きだから遠慮なく行くことにした。お菓子を釣られるというのもどうかと自分自身思うのだが……。

昼は友人と遊んでいたので、桜山に来たのは夕方近くになってからだった。

山は透き通った緑色のガラス瓶のようで、太陽の光を受けてきらきらと輝く。紗久羅は広く伸びるガラス瓶の底へと向かう。

木々に隠れるようにひっそりと佇む鳥居。そこから伸びる石段。

「あれ？ 誰か居る……」

紗久羅に背を向け、鳥居の前に立っている人が居た。祭がある日以外にここを訪れる人間など、殆ど居ない。近所の人（殆どがおじいちゃんおばあちゃん）が散歩で来るとか、子供達が遊び場にするとか、そういうことはあるのだが。

空に浮かぶ雲と同じ色をしたワンピースに、黒い髪。女性であるらしい。

目の前に居る女性に気づかれる前に、さっさと通しの鬼灯を握ってしまおうと思った。

しかし紗久羅が通しの鬼灯に手を触れようとしたまさにその時、その人は振り返ってしまった。

風が吹き、その女性の髪とワンピースのスカートを揺らす。正面を向いた女性の顔には見覚えがあった。

「お、及川さん？」

間違はなく目の前に居るのは、及川柚季だった。しかし何かが違う。

紗久羅を見つめるその表情は冷たく、およそ感情と呼べるものが存在しないように見えた。その表情に紗久羅はぞっとすると同時に、彼女と初めて会った日のことを思い出す。

そう、初めて会った時に彼女が見せていた顔。それと全く同じものだったのだ。歳不相応の大人っぽい雰囲気。

「何で及川さんがこんな所に……」

三つ葉市に住む彼女が、こんな所に何の用があるのだろうかという疑問に思う。

しかし彼女は何も答えない。しばらく紗久羅の顔を見た後、冷たい目のまま口を綻ばせて笑った。

そして紗久羅に何も言わず、彼女の横をすり抜けて立ち去っていた。すれ違った瞬間、紗久羅は心臓を冷たい手で握り締められたような感覚に襲われ、顔をしかめる。

(及川さんじゃない？ いや、でも……)

普段の柚季とは雰囲気が全く違う。けれどどう見ても彼女は柚季だった。ならば何故彼女は紗久羅を無視したのか。

柚季の姿が完全に見えなくなった後、紗久羅は頭を振り、通しの鬼灯を握った。

無数に立ち並ぶ赤い鳥居、気味の悪い光を放つ灯籠、季節はずれの桜の木に囲まれた石段を渡った先にある満月館。夜浮かぶ月のように淡く輝いており、周りの木々は夜空の如く暗い色をしている。

満月館二階にある部屋。そういえばこの部屋以外には入ったことがないな、と紗久羅は思った。

出雲は部屋の正面にある机で、本を読んでいた。怖くなる位整った顔立ち、さらりと流れる髪。本を読むその姿は悔しいが絵になっている。

紗久羅が戸を閉めると、出雲が顔をあげた。

「おや、こんにちは紗久羅。お菓子里に釣られて来たのかな？ ふふ、可愛いねえ。それじゃあ早速お兄さんが美味しいお菓子をあげよう」

「何か誘拐を企てている怪しい男みたいな言い方だな」

「ん、攫って欲しいなら攫ってあげるよ。紗久羅だったら大歓迎だ」

「勘弁してくれ……」

ふふ、と出雲は笑い部屋を出る。部屋の左側にあるいつものテー

ブルにつく。

しばらくして出雲がお盆にお茶とお菓子をのせてやってきた。

「珍しいな、お前が用意するなんて」

「鈴は今居ないんだ。お使いを頼んでいるからね。……さあさあ、遠慮なくお食べ。このお店のお菓子は餡子がとても美味しいんだ」
皿に盛られているのは、どら焼きやおはぎ、栗羊羹だ。試しにどら焼きを口に入れてみる。生地がふんわりしていて柔らかく、中の餡子は甘すぎず、ふわりと豆の香りが漂う。舌を優しく包み込むようなほつとする味。くどくないから、ついつい食べ過ぎてしまいそうだった。お茶と一緒に食べると体がふわふわする。

「これ美味しいなあ」

「だろう。これ売っている店は、この世界では有名でね。高価だし、なかなか手に入らないんだよ。愛しい君の為に頑張って手に入れたんだよ？」

と笑いながらからかう。気持ち悪いことを言うな、とぶつきらばうに言いながら紗久羅は次のどら焼きを掴み、口に入れる。そちらのどら焼きには白玉が入っていて、冷たくて滑らかな喉越しがたまらない。出雲は黄金色の栗が入った羊羹を小さく切って食べている。

「ところで、他にも色々あるとか言っていたけれど……何？」

出雲が顔をあげ、やや首を傾げる。しばらくして何かを思い出したような表情を浮かべる。

「嗚呼、そういえばそんなことを言ったね。うん、いや君に話したいことがあってね」

「話すつて、何を？」

どら焼きをまた一口頬張る。

「いや、実は先日君の学校に行つてね」

栗羊羹を口の前にやり、それを眺めながらさらつと言ってのける。紗久羅は口に入れたどら焼きを危うく噴出しそうになり、「ごほごほと咳き込んだ。」

「な、な、な!？」

「ほら君前話してくれただろう。及川柚季という娘の前で三人もの人間が倒れたつていうの」

「話したけれど……まさかそれを調べるために？」

「ふふ、私はとても優しい人間だからね。困っている人間を放つてはおけないのさ」

胡散臭い笑顔を浮かべ、一切心を込めずに言う。清清しくなる位見事な棒読みだ。

紗久羅はどうやって行つたのか、そもそも何故三つ葉高校の場所を知っているのかとか色々聞こうとして、ふとある事実に気がついた。

「あれ。女子生徒が倒れたのつてどこも女子トイレだよな。……お前、まさか」

「気配は消して誰にも見つからないようにしたし、授業中で誰も使つていなかったし。君が居た教室の近くにあつたお手洗いだから場所は間違つていないと思う。で……何か問題でも？」

つまり、女子トイレに普通に入つて調べたということだ。紗久羅

は頭を抱え、深くため息をつく。誰も居なければ、見ていなければいい、という問題でも無いような気がするが……矢張り人間と妖はどこか感覚が違うようだ。そしてそんなことを思った後、先日掃除に行く途中出雲の声らしきものを聞いたことを思い出した。あれは幻聴ではなかったのだ。

出雲は何故紗久羅が呆れているのか分からない様子で、目をぱちくりさせながら首を傾げる。

「変なの。君たち人間って本当妙に細かくて、面倒な生き物だよな」

「お前等が適当でいい加減すぎるんだよ。……で、何か分かったの？」

出雲は栗羊羹を口に入れ、ゆっくりそれを味わった後飲み込む。

「微妙だね。まあ人では無いものが関わっていることは間違いないと思う。ただあの場にはもう殆ど気配は残っていなかった。まあ日にちが経っているというのもあると思うけれど。……けれどまあ、大した奴では無さそうだね。人を昏倒させるだけの力しか無いのだから」

「及川さんはやっぱり関係しているのかな」

「それもよく分からないな。そもそも私はその柚季とやらの顔を知らないし……一応、君が居た教室を覗いてはみたのだけれど。授業をしているようだったから、その娘も居たはずだ。けれど、あまり妙なものは感じなかった。何かに憑かれているとすれば、その者の姿が見えるか、何かしらの気配を感じれると思うのだけれど……そういうものは特に無かったような気がする。というか、君が身に纏っているこちらの世界の気配が思いの外強くて。まあ単純に君の纏っているものに紛れてしまいう位弱い奴ってだけの話かもしれないけど

ね

「何、あたしそんなに変なものについているわけ!？」

「それはもう、半端ないよ。……しかし本当にその袖季って娘、誰かにとり憑かれているのかねえ。彼女が意図的に引き起こしている、という可能性もあると思うのだけれど」

「そんなことをする意味が無いじゃないか」

友人のことを悪者扱いされ、紗久羅はむっとする。しかし出雲はおかまいなしに話を続ける。

「これといった意味もなく人や動物を傷つけたり、殺したりするのが人間だろう?」

「この捻くれ者。兎に角及川さんはそんなことをする人じゃないし……何か悪いものに憑かれているんだと思う」

紗久羅はついさつき神社で袖季らしき人と会ったが無視されたこと、まるで別人の様な表情を浮かべていたこと、そしていつまで経っても取れない絆創膏のことなどを話す。

「ふうん、それはまあ妙な話だねえ」

出雲は真面目に聞いている様子を一切見せず、用意したお菓子をもぐもぐ頬張りながら適当にも程がある相槌を打つ。自分から話を切り出しておいて、飽きたらろくに話を聞かない。紗久羅は脳内の血管が引きちぎれそうになるのを感じた。

「兎に角どうにかしてくれよ。こんなことがもしずつと続いたら……。及川さんが原因なのかどうかはつきり分からないっていうのなら、今度色々理由をつけてお前と会わせるからさ」

「何でそんな面倒なことをしなくてはいけないんだい？ いいじゃないか、大したことじゃないし、しばらくすれば慣れるよ、きつと」
「助ける為に調べに行ったんじゃないのか!？」

「別に。只の暇つぶしだよ。まあとんでもない大ごとになったら助けてあげるよ。その時の気分次第ではあるけれど、ね」
潤んだ赤い唇を歪めて笑う。紗久羅はその唇と同じ位顔を真っ赤にし、立ち上がった。

「ああそうかい、あんたみたいな馬鹿狐を少しでも頼ろうとしたあたりが馬鹿だったよ！ もう知らない！ お菓子ご馳走様、以上！」
どこどか大きな足音を立て、乱暴にドアを閉めて満月館を
『
向こう側の世界』を後にした。

石段を下り、通しの鬼灯から手を離す。それを同時に携帯が震え、紗久羅はそれをカバンから取り出した。
見ると柚季からメールが入っていた。

『今日三つ葉市で気になるお店を見つけたよ。最近出来たらしい雑貨屋さんんだけど。今度一緒に行かない？ 放課後辺りに』
紗久羅は一緒に行こうという旨の文章を書き、最後に「今日桜町にある桜山神社の前に居なかった？」と付け加えた。
送信してすぐ返信が来た。
可愛い顔文字と一緒に「やったあ」という文章が書かれ、それに続いて紗久羅の質問に答えていた。

『桜町？ うーんまだそつちには行ったことないや。その神社のこともよく知らないし。それがどうかしたの?』

とのことだった。

(良かった……やっぱりあれは及川さんじゃなかったんだ)
紗久羅はほっとした。しかし完全に納得は出来なかった。他人の空似にはどうしても思えなかったから。別人ではないとしたらきつと何かに操られているのだ、と思った。

一応袖季に及川さんに似た人を神社の前で見かけたから、ちょっと聞いてみただけという文章を送る。そしてそのまま袖季とメールのやり取りをしながら家へと帰った。

*

月曜日学校へ行き教室へ入った紗久羅を迎えたのは、何故かどんよりとした表情を浮かべている袖季だった。また何かあったのだろうか、と紗久羅は考える。

「どうしたのさ、及川さん」

袖季は顔をあげ、それがねえと何かにうんざりしているような声で返事をした。そのまま話を続けようとしたが、それはクラスの女子によって遮られた。

「ねえねえ及川さん、昨日テンキューに居た？」

テンキューというのは三つ葉市にある洋服店のことで正式名称を「tenQ」という。

袖季はそう問われ、困惑したような表情を浮かべて首を横に振る。

「ううん、行ってない。そのお店を通り過ぎた覚えはあるけれど…」

…

「中には入ってない？」

「うん」

「それじゃあやっぱり人違いかあ。及川さんにすごく似ていたんだけれど。でも挨拶したのに無視されて。それでおかしいなあと思っただけだけれど……」

「ごめんね、とその女子は続けて友人が居るところへ戻っていった。柚季は小さくため息を吐き、またか……と呟く。

「また？ またってどういうこと」

「それがね……。ほら、井上さん休みの日に私にそっくりな人を桜町で見たって言っていたでしょう。他にも見たって言う人が居てね」

「え、あの及川さんそっくりの人に？」

柚季は頷く。

「井上さんとさっきの彼女を入れて、六人。私だと思って話しかけたら無視されたって。しかも私とはまた雰囲気違って……何か冷たくて気味が悪い感じだったとか。井上さんが会ったそっくりさんも、そんな感じだった？」

紗久羅は桜山神社の前で会った彼女のことを思い出す。あの時見た表情を思い出しただけで寒気がした。紗久羅が頷くと、やっぱりそうなんだと柚季はまたため息を吐いた。

「でもそれは私じゃないわ。私本当に桜町なんて行ってないもの。他の人が言っていた場所も、そう。喫茶店とか洋服店とかで見かけたって言うのだけれど……そのお店に入った覚えはないし。最近妙なことばかり起こっている。嫌になっちゃうわ、本当」

柚季の目の前で倒れる人達、柚季にそっくりな顔の、妖しい雰囲気

気を持つ少女。そして彼女の指には未だ絆創膏が巻かれている。

不思議なことが重なりすぎている。矢張り彼女は何か妙なことに巻き込まれているのだ、と紗久羅は思った。

「もう訳が分からないわ、本当」

「だよなあ。あれかなあ、ドッペルゲンガーって奴かな」

TV等で耳にしたことのある単語を口に出してみる。特別深い意味は無く、ただ何となく出た言葉だった。

しかしそれを聞いた袖季の顔が何故か急に真っ赤になり、ものすごい剣幕で紗久羅を睨みつけた。いきなりのことに、紗久羅はぎよつとする。

「そんなもの、いるわけないじゃない！」

袖季が大きな声で叫ぶ。周りに居た人達が一斉に袖季を見る。赤かった顔は何故か今は青白くなっていて、体はふるぶると震えている。紗久羅に向けた言葉には怒りと憎しみが混ざっていた。

「え、あ、ごめん……」

紗久羅は謝る。自分の想像している以上に袖季は今回のことに参っていたのかもしれないと思った。考えなしに言ってしまったことを紗久羅は後悔する。しかし彼女がそうして叫んだ理由は違うところにあつたらしい。

彼女は口を押さえ、俯く。

「あ、違うの。ごめん……井上さんが悪いわけじゃないの。私幽霊とか、妖怪とか、そういう類の話が好きじゃなくて。私引越す前はお婆ちゃんと一緒に暮らしていたのだけれど、そのお婆ちゃんが迷信家で、おまけに妖怪とかそういうのも信じていて、そのせいで嫌な目にあつたこともあって、それで……ごめんね」

そう小さな声で話す柚季は何だかとても辛そうだった。何か嫌なことでも思い出したのかもしれない。紗久羅は申し訳なく思う一方で、彼女には絶対妖の存在を話すこと、出雲のところまで引っ張っていくこと等は出来ないと思った。

柚季は嫌な思いを振り払うかのように首を横に激しく振り、いつも通りの笑顔を紗久羅に向けた。

「今日の放課後、メールで書いた雑貨屋さんと一緒に行くね。あ、今日大丈夫？」

「大丈夫だよ。母さんに今日は店番出来ないってメールを送ればいいし」

「ありがとう。ふふ、楽しみだなあ。よく考えてみたら、こつちに来てから他の人と一緒にどこかへ行くってことしていなかったから初デートIN三つ葉市ってことね、今日が」

そんなことを言って笑う。紗久羅も一緒に笑った。自分と一緒に買い物をするので少しでもリラックス出来たら良いなと紗久羅は思う。その一方で彼女の身に何が起きているのかますます気になった。

*

力がどんどん戻ってくる。あの桜町なる所に行ってから、ますます力の戻りが早くなっているような気がする。ああ、あそこはとても心地の良い場所だった。

これだけ力が戻れば、わざわざ私が鏡の前に立つ必要も無くなるだろう。

早速試してみよう。昔と同じことが出来るようになったかどうか……。

*

二時間目は体育で、今年最後のプールの授業だった。授業といっても特別何をする訳でも無い。ただ泳ぎが極端に苦手な者とそうでも無い者に分かれて、ひたすら泳ぐだけ。

暴君の居座る空の下、冷たい水に包まれて泳ぐのは気持ちが良い。しかしゆったり自由気ままに泳げる訳では無い。只真っ直ぐ、前の人とぶつからないようにしながら一定のペースで泳ぐ必要がある。しかも水は塩素臭いし、ゴーグルをつけないと目が痛くなるし、うっかり鼻に水が入ると辛い。

紗久羅は泳ぎながら、虚水で満ちた金魚亭で泳ぐ方が楽しかったかなと思った。その思いを振り払うように、心の中で首を横に振った。

(いやいや、あちらの世界の方が良いなんて思っちゃいけない。あそこはあたしの居るべき世界じゃないし)

プールの端まで行き、そこにある短い金属の梯子のようなものに足をかけ、プールから上がる。体に重みがぐつと戻ったような妙な感覚に襲われる。

また移動して、最初から泳ぎ直す。一、二コースは泳ぎが苦手な人が使っているから、三コース目から泳ぐことになる。ぺたぺたと熱されたコンクリートの上を歩いて移動する。

紗久羅の前を泳いでいた柚季が、プールを囲むフェンスの方を向いて、その先にある校舎をじっと見つめていた。泳ぎ疲れたのだからかと思ったが、どうもそうでは無さそうだった。

「及川さん？」

何となく嫌な予感がして、紗久羅は彼女に話しかけた。しかし反応は無い。彼女の顔を覗き込んだ瞬間、寒気がした。

(ああ、またあの顔だ。氷で出来た人形の様な……)
休日、桜山神社で見かけた「及川袖季のそっくりさん」が浮かべていたものと全く同じものだった。

(やっぱりあれは及川さん本人だったんじゃないか？ 及川さんは行ってないと言っていたけれど。それは彼女が覚えていないだけで
或いは嘘を吐いている いや、そんなことは……でも及川さんは何かを隠しているようにも見えるし……)

隣に居る袖季は紗久羅に気づいた様子もない。体はその場から少しも動かない。ただ彼女の髪や肌を水が伝い、雫となって落ちるのみ。その水滴が落ちる様子が艶かしく見え、紗久羅はどきりとした同時に恐怖を感じた。

彼女はやがて口元を歪め、妖しい笑みを浮かべ、小さな声で笑った。とても邪悪で、悪意がたつぷり込められた声で。

紗久羅は胸が苦しくなるのを感じた。今の彼女は人間ではなく、出雲達『向こう側の世界』の住人に見えて、恐ろしかった。

「及川さん！」

もう一度、今度は先程より大きな声で彼女の声を呼ぶ。袖季はびくっと体を震わせ、目をぱちくりさせながら紗久羅の方を見る。

「え、ど、どうしたの？」

「いや、何かぼうつとしていたようだったから……」

「そ、そう。あれかしら久しぶりの水泳の授業で疲れちゃったのかな、あはは、ごめんごめん」

と笑うが心の底から笑っているようには思えず、無理矢理笑っているような感じだった。

間もなく授業は終わり、急いで着替える。ちんたらしていると次の授業に間に合わないのだ。

水着等を入れるバッグを教室に戻す暇も無く、そのバッグと次の授業に使う教科書等を抱えて、どこか近くに止まっているらしい救急車の音を聞きながら小走りで移動する。

授業中二年生女子の一人が倒れ、病院へ運ばれたという話を聞いたのは昼休みのことだった。

第三十九話：鏡女（4）

*

情報通のクラスメイトである吉田霧江は、丁度倒れた女子の後ろに座っていた人から一部始終を聞いてきたらしく（たまたまその人が仲の良い先輩だったらしい）それを友人達に聞かせていた。紗久羅も何となく気になって、その話の輪に加わった。

話を聞き終えた女子達は顔をしかめ、苦笑いしながら「嘘だ」とか「作り話じゃないの？」などと言いだす。

話の内容は、こうだ。

授業中（紗久羅達がプールで泳いでいた時）、二年女子が鞆の中に入れていた鏡が床に落ちた。その落ち方は実に奇妙で、まるで鏡が意思を持ったかのような動きをして落ちたのだという。

鏡の持ち主である女子は首を傾げながら、鏡を拾った。そのまま鞆に戻そうとしたようだが、その動きが途中で止まる。そしていきなり尋常では無い大きな声で叫んだのだという。教室に居た人全員が彼女を見た。真後ろでその様子を見ていた人はそのものすごい声に心臓が止まりそうになったらしい。

悲鳴をあげた女子は鏡から手を離し、そのまま崩れ落ち、床に倒れこんだ。先生によってすぐ保健室に運ばれたが、どう見ても只の貧血には見えない上に目を覚ます様子が無かった為、病院へ搬送された。 というもの。

「それを見ていた生徒達が軽くパニック状態になって、そのパニックっぷりが周りの教室にも伝染して、大変な騒ぎになったって」霧江の言葉に話を聞いていた女子達は「想像しただけでぞつとする」「下手な怪談話より怖いかも」と未だ信じられない、といった表情を浮かべながら呟く。

こくこく頷いていた霧江は「そういえば」と話題を少し変える。

「一年と二年の女子が何日か前にトイレで倒れたよね」

その言葉に紗久羅はどきりとした。何気なく近くに座っている柚季の方を見る。柚季は俯いて体を小さくさせていた。きつと会話を聞いていたのだろう。

「その二人も確か悲鳴をあげてから倒れたんだってね。只の偶然かもしれないけれど、何か気味が悪いよね。あ、梨奈のお父さんも最近倒れたんだっけ」

霧江の言葉にまあね、と梨奈が苦笑する。

「悲鳴をあげて倒れたっていうところは共通しているけれど。もしかしたら今日倒れた先輩も、すごく怖い幻覚を見たんじゃない？」

「ああ、そうかもね。それにしても気味の悪い話だよねえ」

そしてその後女子達の話題は別のものへと移っていき、紗久羅はさり気なくその場から離れる。

柚季はそんな紗久羅を手招きし、図書室までついてきて欲しいと言った。

「気分転換に本でも読みたいなと思って。……一緒に来てくれる？」

元気の無さそうな彼女を見て、紗久羅はこくりと頷く。妙なこと続きで彼女も不安なのだろう。頷く紗久羅を見て柚季はほっとしたような表情を浮かべて立ち上がる。

生徒達でこつた返している廊下を渡り、図書室へと向かう。柚季は何か話すわけでもなく、只無言で歩いている。紗久羅もどう話しかければいいのかわいまいち分からず、無口になった。妙に気まずい空気、やけに長く感じる図書室までの道。

（今日倒れた二年生……やっぱり及川さんが関係しているのか？
けれど、その人が倒れたのはトイレじゃないし、及川さんは彼女の傍に居なかった。……あたし達と一緒にプールで泳いでいたんだから。じゃあ今回のことは彼女とは無関係？）

そう考えたが、すぐに首を横に振った。体育の授業中に柚季が見せた妖しく気味の悪い笑みを思い出したのだ。二年女子が倒れたのは丁度彼女がああ笑みを浮かべた時だったのでは、と紗久羅は思う。

（あの馬鹿狐曰く、及川さんに何かがとり憑いている可能性は低いみたいだけれど……。くそ、全然分からない）

考えがまとまらず首を横に振る。

無言で歩き続ける内に、図書室へと辿り着いた。カウンターには英彦と奈都貴が座っている。今日は奈都貴がカウンター当番らしい。本来当番はもう一人居るはずだが、姿が見当たらない。恐らくさぼっているのだろうと紗久羅は思った。図書委員会の人はローテーションでカウンター当番をすることになっているが、真面目にその役目を全うする人間は殆どいない。

英彦は相変わらずどう見ても私物である書物をカウンターに積み上げ、ぶつぶつ何か呟きながら本を読んでいる。その姿は不気味であり、ゆえに彼は生徒達に「図書室に住む妖怪」と呼ばれているのだ。

「この学校の図書室って結構広いなだね」

柚季は目を輝かせながら辺りを見回している。

「前の高校は狭い上にろくな本が無くて。何かすごく昔の本とか、お堅い本とか、そんなのばかりだったの。小説とか殆ど無かったわ」
そう言いながら笑う柚季の姿は、本のことを語っている時のさく

らに似ていた。本が好きなのに、と紗久羅が問うとそこそこ、と答える。

「暇な時に読む程度だけれどね。文学少女とか本の虫とか、そこまですごく読む程度じゃないわ」

「ふうん、そうなんだ。あたしは読書感想文を書く時以外はまず読まないや。ああ、でも及川さんが本を読んでいる姿って絵になりそうだな」

「そう？ まあ私は何をしても可愛いけれど」

「自分で言うかあ？」

「あはは、冗談よ冗談。私そんなナルちゃんじゃないもん」
そんな会話をしていると、さっきまで頭の中をぐるぐる巡り暴れていたものが大人しくなっていく。そういうごちゃごちゃしたことを忘れて喋ることは、とても楽しい。柚季にも自然と笑顔が戻る。

しかし二人は背後からちくちく痛い視線を感じ、口を閉ざす。ちらつと振り返ると、奈都貴がじろつとこちらを睨んでいるのが見えた。うるさい、図書室では静かにしろ、と言いたげだ。しばらくして奈都貴は隣に居る英彦に声をかけ、何か話し始める。時々紗久羅と柚季の方を指差しながら。

「ぶつぶつ、ちょっと大きな声で喋ったからって。なっちゃんは厳しいなあ」

「なっちゃん？」

まだクラスメイトの名前を把握しきれないらしい柚季が小さ

く首を傾げる。

「今司書のおっちゃんと話している奴のこと。名前が奈都貴だから、なっちゃん」

「随分可愛いあだ名だね。女の子みたい」

袖季がぷつと吹きだす。

「だろう？ あたしがつけてやったんだ。なっちゃんって女の子みたいな字を書くんだぜ」

「そうなんだ。今度見てみたいかも」

奈都貴がこほんとわざとらしく咳をして暗に「黙れ」と言うまで、二人でずっと笑っていた。

ひとしきり笑った後袖季は国内小説が置かれた棚をあさりはじめ、紗久羅はそれに付き合う。

しばらくして借りる本を決めたらしく、カウンターへそれを持っていった。

「これ借ります」

本と一緒に学生証を出す。この学生証の裏にはバーコードがあり、これと本の裏にあるバーコードを読み込ませることで貸し出し処理をするのだ。……ちなみに紗久羅は一度もこのバーコードを使った事が無い。

処理をする奈都貴と、それをぼうつと見ている袖季達を英彦がじつと見つめている。奈都貴が処理の終わった本を袖季に渡そうとした時、その本の上におしゃれな模様が描かれたしおりを静かに置いた。

「この本しおりがありませんから。もし宜しければお使いください」
そう言って英彦は柔らかな笑みを浮かべる。袖季はおしゃれなし
おりに一瞬で心奪われたらしく、目をきらきらと輝かせた。

「有ありがとうございます」

「読書が好きなたには優しいんですよ、私は。君は転校生だそうで
すね。深沢君から聞きましたよ。早く学校生活に慣れるといいです
ね」

「え、ああ、ありがとうございます」

そう言って曖昧な笑みを返す。英彦はその微妙な反応を疑問に思
ったのか、首を軽く傾げた後今度は紗久羅に視線を移す。

「ああ、折角だから貴方……井上さんでしたっけ？ 貴方にも一つ
あげますよ」

「え、でもあたしあまり本読まないし……」

「たまには読んでみなさい。面白いですよ」
そう言って紗久羅にも袖季とは又違う模様が描かれているしおり
を差し出す。貰ったところで使う機会などそう無いのだが、しゃれ
たデザインだし、タダでくれるものにはありがたくもらっておきたい
などと思いきそれを受け取った。

「これ、すつごくおしゃれなしおりですね」

笑いながら袖季は本の上に置かれたしおりに右手で触れる。途端
「いたっ」と小さな声をあげてそのしおりを落としてしまう。

「どうしたんだ？」

「あ、ううん。何でもない。静電気かな？　一瞬びりってきたような気がして」

床に落ちたしおりを拾い上げ、借りた本の間挟む。さあ、教室に戻ろうと紗久羅に声をかけ、一足先に図書室を出る。

紗久羅もそれに続こうと足を前へ運ぶ。盗難防止のセキュリティゲートをくぐろうとしたところで、英彦に呼び止められ振り返る。いつの間にかカウンターを離れて紗久羅の前に立っていた彼の表情は何故かとても陰鬱なものだった。

「井上さん」

「な、何？　どうしたんだ？」

「……鏡」

「は、はあ？」

いきなり出てきた単語に思わず間拔けな声をあげ、眉をひそめた。しかし英彦の方はいたって真剣な様子である。

「鏡に気をつけなさい」

(何をいきなり言い出すんだ？　鏡？　鏡が何だっていうんだ)

訝しがりながらも一応頷き、セキュリティゲートを潜り抜けた。

鏡に気をつける理由も、英彦が突然紗久羅にそのような忠告をした意味も分からず最初はただ首を傾げるのみだった。

まあどうでもいいか、と言われたことを忘れようとして、ふと一つの事実が気がつき立ち止まる。

袖季の前で倒れた三人。彼女達は洗面台の前に立っていた。

(洗面台には……鏡がある)

そして今日女生徒が落ちた鏡を拾いあげた時に倒れたのだ。

気がついた途端、心臓が止まり、頭が熱くなつた。

更にこの前の掃除の時、袖季が鏡を持った途端様子がおかしくなつたことを思い出す。ただ袖季は倒れたわけではなく小さな悲鳴をあげて鏡を落としただけだった。しかし何かに怯えているかのような様子は見せていた。

(ということは及川さんと鏡がキーワードってことか？ けれど何でも今までは及川さんが傍に居る時に倒れていたのに、今回はそうではなかったのだろう。及川さんが傍に居る・居ないは関係ないのか？)

しかしそれ以上に気になることがあり、紗久羅は口元に左手をやり考え込む。

何故英彦は「鏡に気をつける」と言ったのか。

(あのおっさんは司書とはいえ学校で働いている人間だから……女生徒が立て続けに何人か倒れていることは知っているだろう、多分けれど。もし今回のことに鏡が関係しているとして……何である人はそのことを知っていたのだろうか？ 普通の人間に分かるはずがない。じゃあ)

紗久羅は英彦が読んでいる本を思い出してみる。掃除をしている時に見た限りでは、妖怪、伝承、民俗学といった単語が入った題名のものばかり読んでいたような気がした。

「今回のことはやっぱりあっちの世界の奴が関わっているのか……そしてあのおっさんはあっちの世界のことを、知っているのか……」

？」

そう呟くも、答えは出ない。とりあえず今は教室に帰り次の授業に備えることの方が大事。どうせ小さな脳みそをフル回転させても答えは出ないのだ、と紗久羅は心の中で言い聞かせた。

紗久羅は、突然立ち止まって考え事を始めた紗久羅を不思議なものを見る目で見ていた柚季向かって駆け寄る。紗久羅を迎えた柚季は苦笑いしながら、どうしたのと問う。

「いや、別に何でもないよ」

「そう。それならいいんだけど、いきなり立ち止まって考え込むような仕草見せたものだから、どうしたんだろうって思ったわ」

「あはは、ごめんごめん」

柚季のことを考えていた　とは口が裂けても言えなかった。

*

放課後。約束通り一緒に三つ葉市にある雑貨屋へ行くことになった。しかし柚季はその前にもう一度図書室に寄りたいと言った。

「それがさ、さっき借りた本ね前読んだことがあったものだったの。悔しそうな表情を浮かべながら柚季はさきほど借りた本を取り出す。本を滅多に読まない紗久羅は、以前読んだ本をまた借りてしまうことなんてあるんだ、と暢気なことを考えていた。

「とりあえず新しい本は明日借りるとして……とりあえず返却だけさっさとしてきちゃうね。だから図書室の前でちょっと待っていてね」

「ああ、いいよ」

昼休み以来の図書室へ。利用している人は殆ど居ないようだ。本の返却位ならすぐに終わるだろうとセキュリティゲートの傍でぼうつとしていた。

しかし思ったよりも帰ってくるのが遅い。どうしたのかと思って図書室に入ってみれば、袖季は英彦と自分達よりやや年上らしい女性と喋っていた。

「じゃあゆずちゃんは転入生なんだねえ」

ツインテールが可愛い女性は、英彦にべったりくっつきながら袖季と話している。声もまた可愛い。

袖季は様子を見にきた紗久羅に気づき、両手を合わせて「ごめん、と一言。」

「ごめん、待たせちゃって」

「いいや、気にしないでいいよ」

そう言いながら見慣れぬ女性をじいつと見つめる。女性はその視線に気づいてにっこりと笑った。

「ごめんねえ、私が話しかけちゃった所為でお友達待たせちゃったんだね。私の名前は美沙。英彦様の家で使用人をやっているの」
使用人、と聞いて紗久羅は驚いた。

「え、司書のおっさんお金持ちなの？ 使用人を雇っているなんて英彦が苦笑いする。」

「まあ実家が一応、ね。それとおっさんと言わないで下さい。私これでも未だ三十前なんですよ」

「十分おっさんじゃね？ へえ、そうだったんだ」

そういえば時々見知らぬ美人が図書室を訪れている、という噂を耳にしたような……と紗久羅は思った。噂によると一人二人ではないようだが、皆使用人なのだろうか。

「あ、それじゃあ私達はこれで」
引き上げようとする柚季に美沙は笑みを浮かべる。

「ごめんね、引き止めちゃって。これから二人でデート？」

「ええ、まあそんなところです。それじゃあ」

柚季と紗久羅は美沙（と英彦）に軽くお辞儀してから、図書室を出た。

「あの美沙さんっていう人、とっても可愛かったね。後お喋りも好きみたい。出身どころか、その指どうしたの怪我したの、とか色々聞かれちゃった。可愛いもの大好き、って言って抱きつかれた時はどうしようかと思ったわ、本当。あ、でも嫌いってわけじゃないわ。あの人の傍に居ると何か暖かい気持ちになった」

「へえ。それにしてもあの人が、随分司書のおっさんにべったりくっついていたな。本当は使用人じゃなくて、恋人とか愛人とかだったりして」

「あはは、そうかもね。それじゃあ行こうか」

「ああ、行こう」

そうして二人仲良く三つ葉市にある雑貨屋へと向かった。

街の中心にある『リーフビル』の二階に、それはある。入り口の両脇に大きなクマのぬいぐるみがあり、訪れた人達を迎えてくれる。

店内には文房具、アクセサリ、キッチン用具、ぬいぐるみ等がずらりと並んでおり、赤や青、黄緑等様々な色で溢れていた。今はオープン記念セールを実施しているらしい。

店の中に居るのは殆どが紗久羅達と同じ女子高生で、楽しそうに喋る声があちこちから聞こえ、店内を賑やかにしていた。

「色々あるんだな」

「うん。私携帯のストラップ買おうかな。前持っていたやつが壊れちゃって」

まだどこにどんな商品が置いてあるか分からないから、まず店内をぐるっと一周してみた。ちなみにキーホルダーやストラップ等が入り口から割と近い場所に陳列されていた。

種類も豊富で、有名なキャラクターからあまり見かけたことがないキャラクターがいたもの、食べ物を模したもの、大き目のぬいぐるみがついたものなどメジャーなものから変り種まで色々なものがある。

「やだ、これすっごく変」

びよんと伸びたスライムにやる気なげな目のついたキャラクターのストラップを取り、柚季が笑う。ストラップについているそのマスコットはむにむにと柔らかく、何度も握りたくなるようなものだった。

「こっちには目玉がついたストラップがあるぜ。こんなの誰が買うんだろう。あ、この青い薔薇のついているやつ綺麗でなかなかいいな」

「ハートが二つに分かれているのもあるよ。二つで一セット。恋人同士で持つのかしら。お互いのをくっつけると一つのハートになる

っというものみたい」

「バカッブルにお似合いのストラップって感じだな。……そのキ
ーホルダー版もあるみたいだぜ。ええと、あと『学校シリーズ』な
んていうのもあるぞ。フラスコとか黒板消しとか校舎とかがついて
いるものみたいだな。　　うわあ、人体模型つきのもある」

「うわあ、気持ち悪い……。井上さん、それ買うの」

人体模型のついたストラップを指差され紗久羅は激しく首を横に
振る。

「買わないよ、やだやだ、無理！　あたしの趣味じゃないし！　柚
季が買えばいいじゃん」

そう言ったところで、紗久羅は初めて柚季のことを名前（更に言
えば呼び捨て）で呼んだことに気づき、自然と笑みをこぼした。柚
季も嬉しそうに笑う。

「そういえばあたしずっと及川さんって呼んでいたよね。……柚季
って呼んでいい、よな？」

「勿論。そっちの方が嬉しいもん。ふふ、私もずっと井上さんって
呼んでいたけれど……紗久羅って今度から呼ぶね」

「うん。あたしもそっちの方が嬉しい。へへ、この人体模型ストラ
ップのお陰だな」

そう言ってストラップの入った袋を柚季の顔の前で振ってみせる。
そうしたら、それじゃあ記念に買う？などと柚季に返され、絶対嫌
だ！とさっさと元の場所に戻す。

「折角だからストラップを一つ買って、交換しようよ。私は紗久羅

の為に、紗久羅は私の為にストラップを選ぶの。面白そうじゃない？」

「ああ、それいいかも。あ、でもさっきの人体模型は無しで」

「分かっているよ、勿論。店を出た後交換ね。何を買ったか分かるよとつまらないから……」

「それじゃああたしが先に選ぶよ。選んで会計済ませるまで袖季は他のコーナーをまわっていればいい」

紗久羅の提案に袖季が頷く。

「OK。それじゃあその辺りをふらふらしているね」

そう言つて、どこか別のコーナーへと行った。紗久羅は最初ネタっぽいものによろしく、真面目な物によろしく迷ったが最終的にちゃんとしたものを買うことに決める。種類が豊富なのでどれによろしく悩んだ。

良さそうな物を探していると、一つのストラップが目についた。黄緑と透明の丸いビーズが連なっていて、その先に四葉のクローバーがついているというものだ。

（これにしよう。この四つ葉のクローバーが袖季を守ってくれれば……なんて、ちょっと女々しい考え方もしれないけれど、まあいいか）

そのストラップに決め、会計を済ませる。今度は袖季が決める番だと、紗久羅は彼女を探した。

きよるきよると辺りを見回していると、袖季の後姿が見えた。声をかけようとして、紗久羅は立ち止まる。

袖季が居たのは鏡が沢山並んでいるコーナーだった。英彦の「鏡

に気をつける」という言葉を思い出し、紗久羅は不安になる。

紗久羅は無理矢理明るい声を出し、柚季の名を呼ぶ。しかし返事は無い。彼女の目を、意識を掴んで離さない幾多の鏡。どこにもある物なのに、今は異質で気味の悪いものに見えた。

「後少し。後少しだ、あはは」

それは確かに柚季の声で、彼女の口から発せられたものだった。鏡に映る彼女の口が動いていたのだから、間違いない。しかし普段出している声とは雰囲気は全く違う。

ああ、まただと紗久羅は思った。「後少し」とはどういう意味なのかは分からなかった。だがこのままではいけないと思い、紗久羅は柚季の肩を強く掴み無理矢理彼女を振り向かせる。

幾度となく見た冷たく妖しい瞳にやがて光が戻り、柚季は正気に戻った。

「あれ？ 紗久羅、どうしたの」

「え、いや何でもないよ。あ……あたし、もう選び終わったからさ。今度は柚季の番だよ」

「決まったんだ。どんなものを選んでくれたのかな、楽しみだわ。それじゃあ私選んでくるね」

ぎこちない笑みを浮かべる紗久羅を見て、少し顔を曇らせたがすぐ笑顔になって、柚季はその場を離れた。紗久羅は彼女を見送った後、もう一度鏡を見てみる。何だか嫌な感じがして、紗久羅はその場から逃げるように離れた。

（後少し、って何がだろう。柚季が言ったことは確かだ。けれど、やっぱり……）

紗久羅は先程買ったストラップの入った紙袋をそっと握りしめる。

(本当に四葉のクローバーが幸運を呼ぶのなら……守って欲しい、
袖季を)

お飾りのクローバーに力などあるわけないと思いつつも、紗久羅はそう願った。

程なくして袖季が、売り場をうろつろしていた紗久羅の所までやって来て「決まったよ」と笑顔で言う。

その後ぬいぐるみや小物等を見て、幾つかの商品を追加で購入し、店を出ようとした。

出入り口の自動ドアから店の外へ出ようとしたところで、急に袖季がその場に立ち止まる。

「どうした？ 未だ買いたいものが……」

続きを言おうとした丁度その時、物凄い音と共に女性の悲鳴が聞こえた。紗久羅はぎょつとして振り返り、袖季もまた体をびくんとさせた後、振り返る。

売り場に居た近くの店員、客等が悲鳴のした方へ集まった。二人も気になってその場に駆けつける。

悲鳴がした場所……それはあの鏡が並んでいるコーナーだった。

女子高生らしき人が床に倒れているのが見える。そして周りには鏡があり、幾つかは割れている。恐らく商品である鏡を巻き込みながら倒れたのだろう。

見れば倒れている人の顔は真っ白で、びくりとも動かない。悲鳴を聞いて集まった人達はその光景にただ呆然としていた。

「救急車を呼ばないと！」

店員の一人が倒れた少女の傍につき、もう一人が救急車を呼びに

行く。

しばらくして救急車がやってきて、少女は病院へと搬送された。死んではいけないようだったが、危ない状態であることは何となく分かった。

紗久羅と柚季はそれを見送った後、店を出る。

ビルから出て、二人はしばらく無言で歩いた。

(さっきの人は、鏡の前で倒れた。やっぱり今回のことも……)

「ね、ねえ、紗久羅。さっき買ったストラップ……交換しようよ」「沈黙を破ったのは、柚季の小さく震えた声だった。彼女の顔は青く、見るからに元気が無さそうだった。

「あ、ああそうだな。うん、そうしよう。折角買ったんだから」
気を紛らわせようと、二人はぎこちない笑みを浮かべながら買ったストラップの入った紙袋を交換する。

先程見た光景を頭の中で巡らせながら、紗久羅は袋を開いた。

柚季が紗久羅に買ったストラップ。それは透明の丸いビーズと桜の花を連ねた可愛いものだった。

「うわ、可愛い」

「あ、四葉のクローバーだ。色がとっても綺麗で、可愛い。ありがとう」

柚季は嬉しそうに笑う。紗久羅も笑みを返す。

「こっちのストラップも可愛い。こちらこそありがとう」

「それにしてもびっくりしたな。あの人大丈夫かな」
貰ったストラップを携帯につけながら呟くと、柚季は俯く。

「そうだね、心配だね……」

人が悲鳴をあげて倒れるという光景を立て続けに見ている柚季。さぞかし辛いことだろう。

ストラップを携帯につけた後、柚季は紗久羅を見てにこりと笑った。明らかに無理して笑っているようで、紗久羅は胸が締めつけられるのを感じた。

「あのさ、紗久羅。これから私の家に来ない？ 美味しいお菓子とお茶があるの」

「え、いいの？」

「いいよ。どうせ親は仕事で帰ってくるの遅いし。紗久羅さえよければ、是非」

「それじゃあ、お邪魔しちゃうかな」

「有難う。それじゃあ一緒に行こう。ここからそんなに遠くないし」

街の中心部から離れると景色もがらりと変わる。高いビルが消え、マンションや一軒家が増えていく。同じ住宅街でも桜町とは違い、割と新しく出来たと思われる家が多い。

柚季は不安をまるで振り払うかのようによく喋り、紗久羅はそれに付き合う。お喋りは嫌いではないから全く苦にはならず、むしろ楽しいと感じていた。

そうしてしばらく喋っていたら、笑いながら話していた柚季の顔が急に曇りだし、足取りが明らかに重くなる。どうしたのだろうと思っっていると、彼女はぴたっと足を止め、紗久羅の顔を真っ直ぐな瞳で見つめる。

「……ねえ、紗久羅」

「何？ どうしたの」

「紗久羅は……私のこと、信じてくれる？」

いきなり何を言い出すのだろうと紗久羅は思った。

「わ、私。話したいことがあるの。……でも、その……ちょっと信じられないような話で……。紗久羅は、私がこれから話すことを信じてくれる？」
「冗談だと思わず、真面目に、聞いて、くれる？」

微かに潤む瞳。今にも泣きそうな表情に、紗久羅はどきりとした。

（もしかして……それじゃあ、やっぱり柚季は何か知っていたのかいや、もしかしたらそのことじゃないかもしれないけれど、でもきつと、そのことなんだろう。柚季の様子は明らかにおかしかった）
柚季は紗久羅から目を離すことなく、唇を噛み締めながら返事を待っていた。

紗久羅はそんな柚季に優しく微笑む。

「信じるよ。あたしは、信じる。だから……話して？」

もしかしたら重要な手がかりを掴むことが出来るかもしれない。手がかりを掴むことが出来れば、柚季を助けることだって……。

柚季はこくりと頷き、大きく深呼吸する。そして言葉を紡ぎだそうと、口を開きかけた。

しかしその口から声が出ることは無かった。
明らかに彼女の目が虚ろになり、開きかけた口を閉じ、俯く。

「どうしたんだよ、柚季。あたしのこと信じて話してくれていいんだ、と言おうとして紗久羅はその場に立ち尽くす。どこからか、女の笑い声が聞こえた。

くすくすくす、あはははは。若い女の笑い声で、その声は徐々に大きくなり、笑い方も派手になっていく。熱が奪われていく。体が動かない。ただ心臓だけが激しく動いている。

声ができる方を見てはいけない、と言う声が桜の頭の中に響く。男の声で、聞き覚えのある声だった。しかし言うことをきかない体は誰かに操られているかのように、勝手に動いてしまう。顔をあげ、声のした方を見た。

そこにあったのは、カーブミラーだった。しまった、と紗久羅は思った。カーブミラー すなわち、鏡である。

目を逸らすことが出来ない。二つの瞳は完全に鏡に囚われた。

カーブミラーに見知らぬ女の顔が映されている。本来映し出されているはずの風景などは一切見えない。

ミラーを占拠している女は着物姿で、夜空よりなお暗い色の髪は綺麗に切りそろえられている。金の髪飾りが漆黒の髪によく映えている。光を受けてぎらぎら輝くそれは、夜空を飾る星のようであった。

一切の光の無い瞳、真つ赤な唇。

紗久羅は、その女が誰かに似ていると思った。しかし誰に似ているのか思い出せない。女が口を開く。

「お前は邪魔だ。まあ今更小娘一人が抗ったところで何がどうなるわけでもないが。しかしお前からは何か嫌なものを感じる。万が一ということもあるし……芽は刈り取らなければならぬ」
そう言うと、女が手を前に突き出した。その手はミラーをすり抜け、こちら側に飛び出してくる。次に顔が、胴が……。

一瞬の出来事だった。女は獲物を狩る獣の如く素早く、勢いよく紗久羅の眼前までやってきた。胴は伸びていて、離れた場所にあるミラーとくっついている。

「いや！」

かろうじて動いた口で、悲鳴をあげる。あげずにはいられなかった。

女が、にたりと笑った。女の透き通るような いや、実際に透き通っている両手が紗久羅の顔を包み込む。頭の中がかあつと熱くなる。体から何かが飛び出すのを感じ、あつという間に全身から力が抜けていった。目を開けていられない、立っていられない。女から逃れなければ、全てを奪われ死んでしまうと思った。しかし逃げられない。女の手を振り払うことすら出来ない。

頭がぼうつとしてきて、呼吸が上手く出来なくなってきた時何かが激しく光りだした。体中に電気のようなものが走ったかと思うと、女の手が紗久羅の顔から離れる。

「おのれ……！」

女は怒り狂いながらも、ミラーの中へ戻っていき、その姿を消した。

それを見届けたのと同時に、紗久羅は崩れ落ちた。

（ああ、そうだ……あの女。様子がおかしくなった時の袖季に似ていたんだ……）

ひざやひじをコンクリートの地面に強くぶつけたが、痛みを全く感じなかった。

程なくして、意識は完全に途切れてしまった。

第四十話：鏡女（5）

*

気づくと紗久羅は暗闇の中で、一人ぽつんと立っていた。天も地も、右も左も無い。ふわふわ浮いている感覚も無ければ、地に足を付けている感覚も無い。あまりに暗いから自分の手も足も、何も見えない。

これはきつと夢なのだろう、夢でなかったら何だというのだ、と紗久羅は思った。音も匂いも色も無い世界はとても恐ろしい。一刻も早くこの恐ろしい夢から逃げ出し、目を覚ましたいと強く願う。

何も無い世界で、一分か三十分或いは一時間位座ったり立ち上がったり歩いたりし続けていた。周りに時間を示すものが一切無いと、時間感覚が滅茶苦茶になる。

誰か助けてくれと、手を合わせてお祈りする。しかし誰も居ない所でそんなことを願っても意味など無い。

もう誰も居ないのだし、いつそ泣き喚いてしまおうかと思った。

「どうやら命拾いしたようね」

紗久羅が泣くまでとはいかずとも、大声で喚き散らしてやろうと思いき息を大きく吸い込んだその時、どこからか女性の声が聞こえた。吸い込んだ息を変に吐き出してしまったせいで、紗久羅は大きく咳き込む。きよるきよると辺りを見回してみるが誰の姿も見えない。

「ああ、ごめんなさい。今からそちらに行くからちよっと待っていて頂戴」

「え、何、何？」

訳も分からずぼかんとしていた彼女の目の前が急に明るくなった。

暗闇に慣れていた瞳は光を受け入れられず、思わず目を瞑る。あまりに眩しくて、目は熱を帯び、酷く痛んだ。

「大丈夫？」

何か冷たいものが、目蓋に触れる。すると目を襲っていた痛みと熱がすつと和らぎ、紗久羅は再び目を開けた。

見れば紗久羅の前に一人の女性が立っている。彼女の体は光っており、はつきりとその姿が見えた。短い髪にガラス玉の様に透き通った瞳。藤色と紫の着物を重ね、青い帯をつけている。

「良かったわ、無事で」

「あなた、誰？」

「私の名前は夢結^{むむつ}。人の夢や精神世界に潜り込む力を持った妖。今は主の命を受け、貴方の世界にお邪魔しているわ」

主？誰のことだろうと紗久羅は頭をひねる。その様子を見て夢結が肩をすくめる。

「教えても良いのだけれど……。ここで話したことは目を覚ますと、その殆どを忘れてしまうの、大抵の場合はね。だから話しても多分無駄。貴方は直に目を覚ますわ。あれに襲われたけれど大丈夫、命に別状は無いわ。私の主が貴方を守ったから。もし主が何もしていないかったら、貴方は多分死んでいたわ」

死んでいたかもしれない。その言葉を聞いて先程自分の身に起きたことを思い出し、ぶるっと体を震わせた。確かにあの時「死」はすぐ近くにあったのだ。

「まあ貴方は主の力で助けることが出来たけれど」

そこで言葉を止め、ため息をつく。その様子に紗久羅は不安を覚

えた。

「貴方の友達、及川柚季という娘を助けることは主には出来ないわ」
及川柚季を助けることは出来ない……それはどういう意味なのか、
そもそも彼女の身に何が起きているのか。

「哀れな娘。このまま誰も何もしなければ、彼女はあれに全てを奪
われてしまう」

それを聞いた紗久羅は足を前へ踏み出し、夢結に詰め寄る。

「あれって何だ、全てを奪われるってどういうことだよ!」
張り上げた声が闇の中へ溶けていく。

「説明しても、きっと忘れるから詳しいことは言わないわ。けれど
彼女は今、とても危険な状態なの。けれど、主には彼女を救う術が
無い。少しだけ力を貸すことは出来るみたいだけれど」

「柚季が、危ない……。やっぱり、何かにとり憑かれて?」
その問いに答えるように、夢結が首を横に振る。

「似ているけれど、ちょっと違う。とり憑かれているだけだったら、
割と簡単に解決出来ただけけれど。……あら」

夢結が何かに気づいたのか、話をやめる。

黒い空間に光が差し始め、黒から灰へ、そして白へと変わってい
く。夜から朝へと移り変わるような　そんな感じだ。

「もう時間切れみたいね。最後にこれだけ言っておくわ。及川柚季
を信じなさい。　貴方の友を想う気持ちがかもしかしたら、彼女を
救うかもしれないから」

「え、ちよ、ちよつと待つてよ！」

まだ聞きたいことが沢山ある、と紗久羅は手を必死に伸ばすが夢結には届かない。やがて空間中に光が満ちていき、再び全ては無くなった。

*

はつと目を覚ますと、白い天井と蛍光灯が紗久羅の目に映る。白い壁、薬の匂い。少ししてから、自分は病院に居るのだと悟った。

寝ている彼女の左隣には母が座っており、目を覚ました紗久羅を見て「あ、起きた」と一言。

「母さん……」

「とりあえずお医者さん呼ぼうかしらね。全く驚いたわよ、病院からいきなり電話がかかってきて『娘さんが道路で倒れて病院に運ばれた、いますぐ来てくれ』って。私一瞬いたずら電話かと思ったわ」

それを聞いて、自分が柚季と共に彼女の家へ向かう途中カーブミラーから出てきた女に襲われたことを思い出した。まだぼうつとしている。錆ついた歯車のそののように、鈍くてぎこちない脳の回転。

「まあ、大したことがなくて良かったけれどねえ。……あんだ後で一緒に居たお友達に謝りなさいよ。あんだが目の前で倒れたものだから、相当驚いたみたいで　顔を真っ青にして震えていたらしいわ。病院に電話してくれたのも彼女みたいだし、お礼も言っておきなさいね」

(柚季……)

彼女のことを思い出すと、胸がざわついた。意識を失って倒れている間見た夢で、誰からか彼女についての話を聞いたのをおぼろげ

ながら思い出したからだ。詳しい内容までは覚えていない。しかし、あまり良い話でなかったことは確かだった。

その後母が呼びに行った医者にも「特に異常も無いし、もう大丈夫だろう」と言われ、病院を出た。

車に揺られながら、柚季にメールを送る。驚かせてしまつて申し訳なかったこと、救急車を呼んでくれてありがとうということ、もしよければ改めて家に招いて欲しいということ等を書いた。

それから十分ほど経つてから、柚季からメールが届いた。本文には「ごめん」とだけ書かれていた。紗久羅は何で柚季が謝るの？あれはただ単に体調が悪くなって倒れただけのこと。柚季は関係ないよ、と送つた。しかし返事は来ない。

家に帰ると菊野に「軟弱者め」と罵られ、一夜には「お前が倒れるなんて。こりゃ天変地異の前触れか？」などと言われ、笑われた。

柚季からの返事が一向に来ないことに不安を覚え、意味も無く携帯を弄り続ける。電話もかけてみたが、留守番サービスに繋がるだけで応答は無い。

明日になれば学校がある。その時改めて話をしようと思つて、携帯を手から離す。しかし胸の中はざわめき続け、少しも落ち着かない。

柚季は明日学校に来ないかもしれない。何となくそんな予感があった。

不安を無理矢理押さえ込む為に、紗久羅は学校のカバンの中身を乱暴に床にぶちまける。明日の授業の支度、及び宿題をやれば少しは気が紛れるだろうと思つたからだ。明日は必要ない教科書を手に取り、乱暴に机の上に置く。そして今度は必要な教科書を机にある棚から抜き取り、床にあるものと合わせて時間割通りに並べる。

まとめたものをカバンに入れようとした時、一冊のノートの間か

ら何かがひらひらと落ちてきた。紗久羅はそれを拾う。

(何これ……ゴミ?)

水面に着地する鳥のように、床へと落ちたのは紙切れ二つ。元は一つだったのが二つに分かれてしまったらしい。それぞれの紙切れには火で燃やされたと思しき黒こげの部分があり、軽く触れただけでそれはぼろぼろとこぼれ落ちた。

最初、こんな火で中途半端に燃やした紙切れなどカバンに入れた覚えは無い、誰かの悪戯だろうかと思つた。しかし未だ無事な部分に描かれている模様を見て、それが何であつたのかを思い出した。

「あ、これ……もしかして、司書のおっさんがくれたしおり?」

模様と形をもう一度よく見てみる。矢張り英彦がくれたしおりに間違い無さそうだった。紗久羅は炭になつた部分をつつきながら、何でこんな状態になつてしまつたのだろうと疑問に思つた。

カバンの中にしまつただけで燃えるなんてことはありえない。このしおりに何か起きたのだとしたら、それはあの女に襲われた時だろう。

(そういえば、あれに危うく殺されそうになつた時何か光つたよ
うな気がした……)

光つたのもしかして、このしおりだったのだろうかと紗久羅は考えた。だとすれば、紗久羅を女から守つたのはこのしおり、ということになる。

「それじゃああたしはあのおっさんに助けられた……ってことか」
呟いた瞬間、頭の中で「私の主が貴方を守つた」という言葉が、女の声で再生された。女に襲われて気を失っている時、夢の中でそんなことを誰かが言つた気がすると思つた。

紗久羅が持つているぼろぼろのしおりが守つてくれた。しおりを

くれた英彦が紗久羅を守ってくれた　とも言える。

「あのおっさんに聞けば、もしかしたら今柚季に何が起きているの
か分かるかもしれない」

紗久羅はそれをファイルに挟み、再びカバンの中へと入れる。

*

次の日、紗久羅はいつも通り学校へ行った。昨日のうちは未だ
少しだけ体がだるかったが、ぐっすりと寝たらすっかり元通り。柚
季から返信は未だ来ていない。三つ葉市に入った辺りで救急車を何
台か見た。何か大きな事故でもあったのだろうか、とぼうつとしな
がらそれを眺める。

教室に入るといつも通り友人達が迎えてくれた。倒れて病院に運
ばれた、ということは彼女達には話していない。何だか情けないし、
恥ずかしいと思ったからだ。変に心配をかけたくなかったというの
もある。

柚季は未だ来ていないようだった。紗久羅は友人達といつも通り
他愛もないおしゃべりをしながら、彼女が来るのを待っていた。し
かし一向に彼女は来ない。

結局柚季が来ることはなく、SHRの始まりを告げるチャイムが
空しく胸に響く。程なくしてドアが開き、担任のさえが入ってくる。
名簿を開き、出欠席の確認をする。今日は四人もの生徒（しかも全
員女子）が欠席していた。

「今日は及川さん、塚田さん、成田さん、樋口さんが体調不良で欠
席。最近体調を崩して倒れている人が多いようだけれど、皆さんし
っかり体調管理をしてくださいね。未だ当分暑いですし……水分補
給など忘れないようにね」

確かに校内の女子生徒が相次いで倒れている。殆どの人が原因はこの暑さにあると思っっているようだ。普通はそう思うだろう。ああそれと、とさえが話を続ける。

「本日図書室は、司書がお休みの為利用することが出来ません。明日になれば利用出来るそうだけれど」

頬杖をつきながら、柚季のことや今回の事を考えていた紗久羅はそれを聞いて顔を上げた。

（おいおい、マジかよ……。有力な情報を持っているはずのおっさんが、よりにもよって）

完全にアテが外れてしまい、紗久羅は落胆する。一方で今日に限って彼が休んだ理由が気になった。単純に具合が悪くなったのか、用事があったのか それとも。

昨日の出来事が関係しているのか。理由は何にせよ、最低今日一日は彼から情報を得ることは叶わない。

（くそ、どうすればいいんだ。おっさんなら何か知っていると思っ
ていたのに……。柚季のことも心配だ。どうして今日学校に来な
かった？ 本当に体調を崩したのか。いいや、きっとそうじゃない。
昨日の事が関係しているんだ）

紗久羅に胸に秘めている何かを話そうとした、柚季の顔を思い出
す。彼女の話の聞いたかった と唇を噛み締めた。

柚季の話の遮るかのように現われたあの気味の悪い女の事を、心
の底から憎んだ。あの女は柚季に色々喋られると困ることがあった
から、わざと会話を遮ったのかもしれないとも思った。

落胆しながら受けた位置時限目の授業。その後の休み時間、情報
通の霧江から気になる話を聞いた。

「何かさあ、他のクラスも休んだ人が多かつたらしいよ。でね、その殆どの人は朝までは元気だったんだって。ところが出かける前の準備をしている時、突然倒れちゃったんだって。私の近所に住んでいる人も倒れちゃったみたいで。救急車で病院に運ばれたみたい」

「そつえば、今日やたら救急車見たかも」

「何だか怖いね。病気で流行っているのかな」

「もしかして悪霊とかの仕業とか？」

「嫌だ、そんなものいるわけないじゃん。あはは」

霧江の話聞いてる女子達が口々にそんなことを言う。紗久羅も登校中救急車を沢山見たことを思い出す。

（これも全部あの女の仕業なのか？ 何か段々倒れる人の数が増えていっているような……。出雲は袖季に何か憑いている様子は無いし、憑いていたとしても大した力は持っていないだろうとか何とか言っていたけれど。くそ、やっぱりまたあいつの所へ行くしかないのか？ 嫌だなあ……）

しかし、もう頼れるのは出雲くらいしかないのだ。弥助に聞くのも手だが、彼がどの程度役に立つかは分からない。

あ、そうそうと霧江が話を続ける。

「昨日さ、リーフビルに新しく出来た雑貨屋でも人が倒れたらしいよ」

その言葉に紗久羅はどきりとする。

更に他の女子がそれを聞いて話し始める。

「そういえば……この前の休みの日にさ、テンキューで人が倒れたんだって。知り合いがあそこで働いていてさ、びっくりしたって話してくれた。まあ大したことはなかったらしいんだけどね」

この前の休みの時　　テンキュー　　人が倒れた　　その言葉を聞いて、紗久羅は月曜日、柚季が女子の一人に「テンキューにいなかった？」と聞かれていた時のことを思い出した。柚季はそれを否定していたが……。

「何か本当怖いよねえ。私も気をつけようっ」と

「紗久羅も気をつけなよ。まああんたはものすごく丈夫そうだから、心配無いとは思っけれど」

「え、ああ、うん。そうだな」

乾いた笑いしか出なかった。実は昨日倒れて病院へ運ばれたというのを彼女達が知ったらさぞかし驚くだろうと思っただからだ。霧江がこの情報を手に入れていなかったことを心の底から良かったと思っただった。

話を終え、席につく。すると体に突き刺さるような視線を右隣から感じる。

見れば奈都貴が紗久羅をじっと見つめていた。

「な、何だよなっちゃん。あたしの顔に何かついてるのか？」

小さくため息をついた奈都貴が何かを差し出す。それは昨日英彦から貰ったものと同じデザインのしおりだった。

「これを井上に渡せて、昨日九段坂さんから言われた」

「あのおっさんが？　いや、でもあたしもう同じ物をあのおっさん

から貰ったし」

唐突にしおりを差し出され、紗久羅は困惑する。奈都貴は彼女から視線を逸らす。しおりを持つ手だけが彼女の方へ向けられている。

「昨日貰ったやつは、もう使い物にならないだろう」

紗久羅ははつとして、思わずしおりを挟んだファイルを入れた力バンに触れる。奈都貴が視線を戻し紗久羅を見つめる。

「やっぱり、そうなんだ。……なあ井上」

「な、何」

「今日学校が終わったら、喫茶店『桜(SAKURA)』に来てくれないか。当然お前は場所を知っているだろう？ 話したいことがある。弥助と出雲も一緒だよ。やっぱり井上は知っていたんだな……あつちのことを」

「なつちゃん……」

「及川を助けたいんだろう。なら、来い。詳しいことはあつちで話すから」

そう言っつて奈都貴は紗久羅の机の上にしおりをそつと置いた。と同時に授業の始まりを告げるチャイムが鳴った。

チャイムの音に負けない位大きな音を、心臓が出しているを感じる。

(なつちゃんは、いや、なつちゃんも知っているのか。あちらの世界に関わっていたのか。弥助と出雲のこと。あいつらの正体も、知って)

そして柚季の身に何が起きているのかということも知っているの

だ。何か知っているらしい英彦が奈都貴に話したのだろうか？ 兎に角詳しいことは放課後には分かる。

昼休み、紗久羅は柚季にメールを送ることにした。『桜』SAKURA』へ行けば真相の多くは分かるようだが、それでも矢張り紗久羅は柚季自身の口から話を聞きたいのだ。奈都貴から話を聞いた上で、柚季からも話を聞きたい。

『柚季。あたしをどうか信じて欲しい。あたしは柚季のことを信じるよ。柚季が話したことを嘘だなんて言わない。笑いもしない。…あたしの知り合いだったら、柚季を助けることが出来るかもしれないんだ。あたしは柚季ともっと居たい。色んな所に行きたいし、一緒に遊びたい。桜町のことも紹介したいんだ。こんな月並みの言葉しか並べることが出来ないけれど。でも、お願い。信じて』
本当はもつと色々書きたかったが、いざ打とうとすると言葉が出てこなかった。平凡な言葉を並べるのが精一杯。それでも送らないよりはましだと思い、送信ボタンを押す。

返信が来ることを期待したが、結局放課後になっても来なかった。友人と一緒にカラオケに行かないかと誘われたが、紗久羅はそれを断り、下駄箱で靴を履きかえ校門を出てバス停へ向かう。

あせる気持ちだが、足の運びを早くさせる。
バスに乗り、流れる汗をぬぐった。冷房が効いている車内は涼しくて心地が良い。あの女に襲われた時や、人が変わったような柚季の姿を見た時に感じる寒気などとは全然違うものだ。

バスを降り、再び灼熱地獄の地を歩き、家へと着く。また今日も店番が出来ないと言うと菊野が呆れたような表情を浮かべた。

「またかい。まあ別にいいけどねえ……その代わり、お駄賃はやら

んよ」

それは非常に残念なことだが、お金よりも、友人の方が大切なのだ。

ばたばたと二階へ上がりさっさと支度を済ませ、再び降りてきた紗久羅の頭を菊野がぺしんと叩く。

「あまり無茶はしなさんなよ」

「分かっているよ。それじゃあ、行ってくる」

火に炙られた道を、紗久羅は勢いよくかけていった。

*

一刻も早く喫茶店に辿りつきたいが為に全速力で走り出したものの、矢張り熱さにはかたず、速度は目に見えて落ちていく。体が今にも爆発しそうな位熱くて苦しい。矢張り無茶はいけない、と身をもって知ることとなった。

「ああ、もう、暑い。ちくしょう九月つていえばもう秋だろう。なに何でこんなに暑いんだ。あたしは急いでいるんだ、急いで走るにはこの気温はきついんだ。誰かどうにかしてくれ」

などと一人文句を言い始め、ため息をつく。

走るのをやめ、気持ち早めに歩き始めたところで携帯が鳴った。

「あれ、電話？」

震える携帯を手に取り、相手が誰なのかを確認して紗久羅はその場に立ち止まった。

電話は、袖季からだった。紗久羅は心臓をばくばくさせながらボタンを押す。

「もしもし、柚季!？」

「紗久羅……」

電話から聞こえてきた彼女の声は酷く掠れている。鼻をすする音も聞こえる。泣いているのだろうか、と紗久羅は思った。

「ごめんね、紗久羅。ごめんね」

「……柚季が謝ることじゃないよ」

「ううん、私の所為なの。紗久羅が倒れたのは、私の所為。私があることをしなければ、紗久羅も……他の人も……悲鳴をあげて倒れることは無かったの」

弱弱しく、聞いているこちらが泣きたくなる位に苦しくなる声。

柚季が涙をぼろぼろ流して泣いている姿が容易に想像できた。紗久羅は唾を飲み込み、話し始める。

「柚季は何をしたの？ 今柚季の身に何が起きているんだ。知っていることを全部話して欲しい。メールでも書いたけれど、あたしは信じるよ。今近くに鏡は無い。だから、きっと大丈夫。昨日みたいなことにならないはずだ。仮になつたとしても大丈夫。あたしは何度でも柚季に話しかける、何度だって話しを聞こうって思う。お願いだよ、柚季」

紗久羅のその言葉に励まされたのか、柚季がうんと了承を示す言葉を呟き、話し始めた。

「私はね……悪い妖怪を鏡とかそいつった道具に封印することで人々を災いから守っていた一族の子孫らしいの」

「うん」

驚いたような声を出せば、柚季が話を続けにくいと思ひあえて余計なことは言わず、只相槌を打つだけにした。

「お母さんがその一族の家系でね……ほら前話したでしょう、私のおばあちゃんの話。そのおばあちゃんというのがお母さんのお母さん。おばあちゃんはご先祖様達のことをとても尊敬していて、その人達の英雄譚を聞かせたり、蔵や物置部屋に保管してある物を持ってきては、これにはこういう妖怪が封印されている、これにはこういう力があるって話をしたりしていたわ。……同じ話を何度も何度も聞かせるの。お母さんも小さい頃から耳にたこができる位聞かされたって言っていた」

そこで話を一度きり、柚季は深呼吸する。

「おばあちゃんは妖怪が今でも居ると信じているし、家にある物は妖怪達が実際封印されているって本気で思っていたわ。おまけに迷信深くて。……家の中で言っているだけならまだ良かった。適当に聞き流していれば良かったし……けれど、おばあちゃんはね近所の人や私の友達にもそういう話をしたの。大人の人達はやっぱり適当に聞き流した。でも子供達は違う。……私、幼稚園や小学校の頃はその所為でクラスの友達にからかわれたり、意地悪されたりしたの。これに妖怪を封印してみるよって男子達に消しゴムとかノートとか色々な物を投げつけられたこともあったわ。……私は何も悪いことをしていないのに」

紗久羅は何も言えなかった。自分が思っていた以上に辛い目に彼女はあっていたのだ。柚季はしばらく話を続けず泣きじゃくっていた。話すうちに嫌な思い出が甦ったのだろう。

「小学校高学年か、中学に上がってから位になると流石にそういうことも少なくなっていくたけれど……。お母さんはおばあちゃんに何度も注意した。時には怒鳴りつけていたわ。おばあちゃんはその

度に「ごめんね、と言うけれどすぐにけるっとするの。おばあちゃんにはきつと分からなかったのでしょうね、何故お母さんがそうして怒るのが……。私はおばあちゃんがおかしくなったのも、私が酷い目にあうのも全部妖怪や幽霊という空想の生き物の所為だっと思っようなったわ。私は彼等の存在を信じない。けれど一方で私はその居もしないはずの彼等のことを恨んだわ」

また一呼吸おく。

「私以上に長い時間をおばあちゃんと過ごしたお母さんは、とうとう我慢出来なくなった。私ももううんざりしていたし、お父さんも嫌気が差した。私達家族はおばあちゃんから逃げる為に、引越すことを決めたの。今までも何回かそうしようとしていたらしいわ。

けれどおばあちゃんのことをどうしても心の底から嫌いになれなくて、放っておくのは辛くて……。けれど、決心した。引越し先を三つ葉市に決め、準備を始めた。そんな日の夜のことよ」

どうやらここから本題に入っていくようだ。柚季は鼻をすすりながら、静かに話を続けた。

「あまりはつきりとは覚えていないのだけれど……。私は誰かに呼ばれたような気がして、目を覚ましたの。そしてふらふらと家の中を歩いて、物置部屋へと辿り着いた。大嫌いな場所だったのに……。私のはあの部屋の中へと入ってしまった……。そして、棚に置いてある木箱を開けた」

「その木箱の中に入っていたのは……。鏡？」

「そう。鏡。昔沢山の人を襲ったっていう鏡の妖を封印した物っておばあちゃんが言っていたわ。私は、その鏡を手を取った。鏡が私に『壊して』って話しかけてきている気がしたわ。何でそんなことを思ったのか自分でも分からないけれど。手に持ったその鏡を眺め

ているうちに、黒くてぐちゃぐちゃした感情が湧き上がってきた」
こんな物壊れて消えてしまえばいいと思った、と袖季は声を張り上げる。

「妖怪なんて居るわけが無い、これは只の鏡だ、こんな物をおばあちゃんは大事にしている。家族よりも、ずっとずっと大切にしている。そのせいで私やお母さんは嫌な思いをしてきた。それが悔しくて、憎らしくて、私の中で感情が爆発して　私は思いっきり鏡を床に叩きつけた」

鏡は驚く位簡単に割れたと袖季は静かに語った。とても大きい音がしたが、不思議と誰も来なかつたらしい。

「右手の薬指の怪我はね……その時割った鏡の破片に触れた時に出たものなの。鏡を割った直後はぼうつとしていて、はつきりとした記憶が無かつたけれど……怪我をした時の痛みで私は我に返った。そして部屋の中にあつた筈で破片を掃いて、木箱の中に突っ込んで……逃げるように自分の部屋に戻つたわ」

「そしてそれからすぐ、こっちに引つ越して来たんだ」

「そう。……おばあちゃんは、もし此処にある物を壊してしまつたら封印されているものが出てしまうから、絶対壊してはいけないとか言っていたけれど……そんなことあるわけがない、だって何も封印などされていないのだからと思っていた。あれは只の鏡、何の変哲も無い古びた鏡……そう思っていた。けれど」

そうでは無かつたのだ、と言って袖季は泣きじゃくる。

「あの鏡を割ってから、私はおかしくなった。時々意識が無くなるの。鏡を見ると、高確率でそうだった。ぼうつとして……魂が体から離れてしまつたかのように。……喫茶店で女の人が倒れた時も、

学校で目の前に居た子が倒れた時も、そんな感じだった。倒れた瞬間を見た覚えが無いの。気がつく、倒れている」

紗久羅はまた柚季と初めて会った日のことを思い出した。倒れた店員を静かに見つめていた彼女。その時、柚季の意識は恐らく無かったのだろう。

「最初の内は殆ど気にしなかった。けれど、どんどん不安になっていった。私が鏡の前に立つと、人が倒れる。おまけに倒れた時のことを覚えていない。指の怪我也全然治らなかつたし……あのね、ぼうつとする前に必ず指が痛むの。痛いと思つた次の瞬間、意識がどつかにいつちゃうの。私の不安は膨らむばかりで、消えることは無かつた。まさかあの鏡には本当に妖怪が居たんじゃないか……そして、破片に触れた時その妖怪に入り込まれたんじゃないかって……」

でも私はその考えを振り払つた、そんな訳が無い、妖怪なんて居るわけがないじゃないと自分に言い聞かせた、そうしなければ心が折れてしまいそうだった！と叫ぶ柚季。

「けれどそうしている間にも、どんどん事態は悪くなつていったわ……意識が飛ぶ頻度がどんどん多くなつて、時間も長くなつて……気がついたら知らない場所に居たり、皆から行つた覚えの無い場所で見かけたって話を聞いたり……。時々鏡を見ると、そこに私の姿は映っていなくて、着物を着た女の人が代わりに立っていて……その人が、笑うの。お前は私、私はお前だつて。夢の中にも現われたわ。お前のお陰で私は解放された。お礼にお前から全てを奪つてやるって言うの……それでも、それでも信じたくなかつた。違う、私は関係無い、私の所為なんかじゃないって……」

「柚季……」

「自分でも信じられないような話だもの。他の人が信じてくれるは

すが無い。信じたとしても精神的な病気なんじゃない、って言われるだけだと思つた。だから誰にも話せなかった。自分ではどうしようもない、かといって助けを求められるような人なんていなかった。……紗久羅は信じてくれるって言ったけれど」

「信じるよ！」

思わず声を張り上げる。いきなり大声を出されて驚いたのか、柚季が小さな悲鳴をあげた。

「あたしは知っている。妖怪とか、幽霊とか、そういう『有り得ない者』が存在していることを。柚季は信じたくないかもしれないし、そんな事実あつて欲しくないと願っているかもしれないけれど。残念ながら、居るんだよ。……あたしのばあちゃんと母さん、弁当屋をやっているんだ。それでさ、店の常連に出雲つて男が居るんだけど……いなり寿司が大好きでさ。そいつ、化け狐なんだ。すつごく性格は悪いけれど、すつごい強いんだ。そいつだったら、柚季のことを助けることが出来るかもしれない。知っているからこそ、出来ることがあるんだ」

「紗久羅……？」

いきなりの告白に柚季は困惑しているらしい。

「はは、こんな話されても普通は信じないよな。……でも、信じて欲しい。あたしは嘘を吐いていない。そしてあたしも柚季の言っていることを信じる。」

紗久羅は凜とした声で、はっきりとそう言った。電話から聞こえてくるのは鼻をすする音と、嗚咽。携帯を持っている手に力を込め、紗久羅は柚季の返事を待った。

しばらくして、柚季が息を大きく吸い込む音が聞こえた。

「……信じる。私も、紗久羅のこと信じる。未だ友達になってから間もないけれど、でも分かる。紗久羅は嘘を吐くような人間じゃない」

「ありがとう」

紗久羅はほっと胸を撫で下ろした。

「でも……もう遅いかもしれない。今も胸が苦しくて、頭が痛くて今ね、司書さんから貰ったしおりを握っているの。これを握ると何故か少しだけ落ち着くから……けれど、もう限界。多分、もう、駄目。またあの女の人に意識も体も奪われる。今度は、目覚めないかもしれない。私はどこかへ行ってしまうかもしれない。嫌だ、そんなの、絶対に嫌。助けて、紗久羅、助けて！」

言葉なのか、泣き声なのかもう分からない状態だった。柚季の悲痛な叫び、苦しそうに呻く声が紗久羅に突き刺さる。事態は思った以上に深刻なのだと悟る。

「分かった！ あたし、絶対助ける！ 約束する！」

「ありが……」

その言葉を最後まで聞くことは出来なかった。電話が切れたのだ。紗久羅は急いで喫茶店へと向かい、再び走り始めた。

「くっそう、なっちゃんのアアド聞いておけば良かった！ あそこ
の喫茶店の電話番号も知らないし……さくら姉なら知っているかな
？ ああ、駄目だ。さくら姉携帯持っていないんだ……ちっ、やっ
ぱりあそこまで行くしかないか！」

全力で駆け、熱風をその体に受ける。運動能力には自信がある紗久羅でも、これは流石にこたえた。もっとあの喫茶店が近くにあれ

ば良かったのに、と心の底から思う。

やっとの思いで『桜く SAKURAく』のドアを開けた時には、汗はたらたら、顔は真っ赤になっていた。紗久羅の予想外の状態に、彼女を迎えた三人と秋太郎は呆然としていた。

「い、井上、どうしたんだ？」

「あたしのは気にしないで！ なっちゃんがどうして向こう側の世界のことを知っているのかとか……そういう話は後で聞く。兎に角話してくれ！ もう時間が無いんだ」

紗久羅は袖季から電話があったことと、電話の内容について話す。途中喉が渴いて、思うように声が出ずもどかしい思いをしながら水を流し込んだ。どうにか話し終わった後、奈都貴がため息をつく。

「大方の話は本人から聞いたってわけだ。まあ、とりあえず座れば？」

奈都貴は自分の隣に空いているスペースを指差す。更に親切な彼はタオルを貸してくれた。紗久羅はそれをありがたく受け取り、汗を拭く。

その様子を、頬杖をつきながら見ているのは出雲で、酷くつまらなそうな表情を浮かべていた。弥助は真剣な面持ち。朝比奈さんには用事を頼んでおり、今は店には居ないらしい。

「私としたことがねえ……袖季という娘はとり憑かれたわけでは無かった。それ以上に面倒なことになっていたんだねえ」
半ば独り言のような呟きに、奈都貴がこくりと頷いた。

「俺が話すことは殆ど九段坂英彦っていう、俺と井上の通っている高校にある図書室の司書 といっても分からないだろうけれど
が調べたこと、気づいたことだ」

「やっぱりあのおっさんが関係しているのか」

「まあね。まあそこら辺のことは後回しにする」

そして奈都貴は、柚季の家のことを話した。大体話した内容は柚季がしてくれたのと同じものだった。

災いをもたらす悪しき者を鏡や箱、面等に封印することで人々を守った柚季の先祖達。彼等のことを昔の人は『封術師』と呼んでいたという。及川家（柚季の父は婿養子らしい）はその中でもかなり有名な家だったらしい。

妖等を封印した道具には霊的な力が備わり、それを使ってより人々の生活を豊かにしたという。

「そういう家だから、妖が封印された物が保管されていたとしてもおかしくはないとあの人は言っていた」

「確かに柚季は家にそういうのがいっぱいあったって言っていた。その中の一つが鏡だった。柚季は何かと呼ばれたような気がして目を覚まし、鏡を前にして憎しみの感情を爆発させて……それを割った」

奈都貴がこくりと頷く。

「鏡の中に現われ、人を驚かしたり生気を吸い取ったりする妖が居たらしい。……鏡女って言うんだってさ」

「恐らくその鏡女が柚季という娘を自分の所まで導いたのだろうね。元々封印は解けかかっていたのだろう。……永遠の封印など存在しないからね」

「でも、それじゃあ柚季の実家にある他の物……そいつらの封印も解けちゃうじゃん」

あまりにそれは危険じゃないか、と紗久羅が声を張り上げる。それを受けた奈都貴が小さく首を振った。

「いや、どうも妖達は力を根こそぎ奪われて、殆ど搾りかすの状態になっているらしい。封印が解けて出てきたとしても、基本的には何もすることが出来ずに消滅するんだってさ」

そんな搾りかす状態の妖が入った物でも、霊的な力を十分発揮できるらしい。ようは中に何かの魂が入っている、という状態が重要らしいと奈都貴は続ける。

しかし紗久羅にとってはそんなことはどうでも良かった。

「でも柚季に憑いた鏡女は……」

「そのままだと消えちまうからこそ、柚季に鏡の破片を触らせて怪我をさせ、そこから入り込んだんだ。まあ普通はそんな上手くないかな」

弥助がここでようやく口を開いた。

「けれど」

「まあそんなことはどうでもいいじゃないか。彼女の实家で何が起ころうと知ったことではない。私達には関係の無い話だ」

出雲が冷たく言い放つ。冗談で言っている訳ではないことは良く分かった。弥助もそればかりはどうしようもない、と肩をすくめる。

「今は兎に角及川を助けることを考えないといけないんだ。及川の魂は今、鏡女の魂に侵食されている。……井上は美沙さんのこと、知っているだろう」

「あ、ああ知っているよ」

「あの人は九段坂さんに仕えている……ていうかあの人が使役している妖なんだってさ。人に触れるのと同時に、内面にも触れることができる力を持っているって」

「あの妖怪だったのか!？」

紗久羅が驚いて声をあげる。しかも使役とはどういうことだ、と口をぱくぱくさせた。

彼女のことなど微塵も知らないであろう出雲と弥助は只目をぱちくり。

「九段坂さんは化け物使いっていうものらしいんだ」

それを聞いた出雲はへえ、と関心を抱いたかのような声をあげる。

「未だこの世界に居たんだ。……化け物使い。自分の力で妖を配下にし、それらを使役して人々に害を成そうとする妖を退治したり追い出したりしたって……まあ私達にとっては敵みたいなものだねえ」

「そんなのも居たんだ」

封術師といい化け物使いといい　この世界には妖や霊に関わる職業が幾つあったのだろうと紗久羅は思った。そういうものが沢山存在していたほど、二つの世界の繋がりは今よりずっと強かったのだろうかとも思った。

「居たらしいよ。まあそれで……彼女が及川に触れたら……邪悪なものが流れ込んできたらしい。及川の魂はその殆どが鏡女に侵されている……」

そういえば、柚季は図書室で美沙に抱きつかれたと言っていた。その時彼女の内側に触れたのだろう。

「あそこで及川に抱きついたことで、情報を手に入れたんだ。古くて立派な家　鏡　指から流れる血　笑う女　。まあその前から鏡が今回のことに関係していることには気づいていたらしいけれどね」

確かに、英彦が紗久羅に「鏡に気をつける」と言ったのは放課後より前　昼休みの時だった。

言葉を一旦区切り、奈都貴は俯く。紗久羅の顔をちらと見やった後、息をゆっくり吐き、話を続ける。

「このままじゃあ、及川は鏡女に全てを奪われてしまう。体も、心も、その魂も。いずれ及川は鏡女になってしまう」

紗久羅はその言葉を聞き、体を硬直させた。

（柚季が、柚季が　鏡女になるって？）

それはつまり柚季が柚季で無くなるということだ。柚季が妖怪になる。……この世で最も憎い存在に、自分自身がなってしまふのだ。それを思った時、頭の中は真っ白になり、体が冷たくなったような、熱くなったような気がした。

それは大変だねえ、と何の思いも込めずに出雲が呟く。奈都貴は何も言うことが出来ない紗久羅を見て苦々しい顔を浮かべながらも話を続けた。

「普通はそう簡単に魂を乗っ取られることは無いってあの人は言っていた。自分の魂が、入り込んできた魂を拒絶して追い出すんだって。ましてや及川の体に入り込んだ時の鏡女の魂はとても弱い弱いものだったはずなのに……てさ」

「紗久羅っ子の話によれば、袖季って子は妖怪の存在を否定していた。しかし一方でその居るはずの無い者を憎んでいた。あつしら『向こう側の世界の住人』への強く激しい負の感情が、逆に『向こう側の世界の住人』である鏡女を惹きつけ、結びつけちまったのかもれないっすね。……しかもその子はどんどん追い詰められ、精神的に相当参っている状態だろう。鏡女にとっては好都合だっただろうな。ますます乗っ取りやすくなったのだから」

弥助は酷く面白く無さそうな表情を浮かべている。人間好きな彼にとって、人間が『向こう側の世界の住人』に苦しめられているというのがたまらなく嫌なのだろう。

しばらく固まっていた紗久羅はようやく口を開く。

「袖季は、袖季は……助かるのか」

その言葉に出雲は、正直言っただけの難しいかもと答える。

「お前の弓でどうにかならないのか!？」

出雲はわざとらしいため息をついた。

「そう簡単にはいかないよ。第一矢を放つだけで済むなら、こんな所でつまらない話などせず、さっさと袖季って娘に矢を放って終わらせているよ」

「何でだよ、何で、上手くないかって……」

出雲ならどうにかできると思っていた。悔しいが彼が強い力を持っていることは確かだったからだ。出雲はもう一度ため息をついた。先程よりも大きくて、嫌味たらしいものだった。

「だから」

仕方無い、説明してやるかという空気になり出雲が話を始めよう

とした。しかしすぐに開けた口を閉じ、見えない糸に上から引つ張られたかのように彼は勢いよく立ち上がり、店を出る。

三人は何が何だか訳が分からなかった。しかし出雲の様子が尋常では無かったので慌てて彼の後を追う。

ドアを乱暴に開けて外に出て、三人は立ち止まる。

先程まで照っていた太陽は隠れ、空は汚れて曇った鏡の様な色へと変わっていた。気持ちの悪い生ぬるい風が吹き、紗久羅達の体をねっとり撫でる。

どこか遠くで女の笑い声が聞こえる気がした。

「さっきまで晴れていたのに……」

「この感じ……やばいな」

色々鈍い弥助も何かを感じ取ったらしく、苦い薬を飲んだかのような表情を浮かべている。ごく普通の人間である紗久羅や奈都貴でさえ、その異様な空気を感知することが出来た。

バサバサバサ、と何かが羽ばたく音が聞こえて四人は音のした方を見上げる。そこには足が三本ある鳥が二羽居た。やた吉とやた郎だった。奈都貴は彼らのことは今まで見たことが無かったらしく、小さな叫び声をあげる。

「出雲の旦那、大変だ。町の人達が鏡の妖怪に襲われている！」

その言葉を聞いて紗久羅と奈都貴は驚きの声をあげ、顔を見合わせた。

第四十一話：鏡女（6）

*
町が襲われている……そう叫んだやた吉は、地面に着地し主人である出雲を見上げる。興奮しているやた吉、やた郎と違って出雲は冷静だった。冷静を通り越して、冷たい。そういった反応には慣れっこである彼らは構わず話を続けた。

「三つ葉市と桜町の人達が大勢襲われているんだ。鏡から出てきた女が、人から生気を吸い取っている」

「外に居る人達も襲われている。……その妖怪、鏡を自分で作り出す力があるみたいなんだ。町中鏡だらけで　そこから現われた女が」

「町は襲われて倒れている人だらけだよ！　命に別状無いみたいだけれど……このままじゃあ、三つ葉市や桜町に居る人全員倒れちゃうよ。もしかしたら舞花市とかにも現われるかもしれない」

やた吉とやた郎は交互に語る。相当興奮しているのか、早口になっていた。

「相手はどうやら着実に力を取り戻しているようだね。……もしかしたら、封印される前以上の力を手に入れているのかもしれない」

「こんなに早く力って取り戻せるものなのか？」

鏡女が力をどんどん取り戻している……そうなればますます袖季の魂を侵食するスピードも速くなるのではないか、と紗久羅は不安になり、痛む胸を強く抑えた。或いはもう袖季の魂は、などと最悪の結末が頭をよぎる。

出雲は紗久羅に背を向けたまま、町の中心へと向かって歩き始めた。

「普通はここまで早くないだろうねえ。しかしまあ、この辺りの土地には酷く歪んだ力……私達『向こう側の世界の住人』にとっては心地よいものだけれど　　が流れているから。三つ葉市へ引越してきたことで、急速に力を取り戻していったのだろうね。まあ、とりあえず力の中心を目指そう。そこに君のお友達がいるはずだ。……もつとも、お友達の魂が今も残っているかどうかは分からないけれどね」

気を利かせた言葉を出雲の口が紡ぐことは無い。聞きたくもない現実を美しく冷たい声で、平気で語る。もつ全てが手遅れなのかもしれないと唇を噛み締める紗久羅。出雲はやた吉とやた郎に語りかける。

「結界を。……どうせ君達もついてくるのだろうか？」

紗久羅と奈都貴を見る出雲。二人は迷うことなく頷いた。弥助は店に残ると言う。

「この店を襲ってくる可能性だってある。秋太郎を守らなくちゃな。……朝比奈さんは少し遠くの町へ行っているから大丈夫だとは思いますが……」

出雲と違い、何と優しく人間思いな妖怪なのだろうと紗久羅は思った。

やた吉とやた郎がその身を人間の姿へ変える。手に持つ錫杖で地面をつくくと結界が現われ、紗久羅と奈都貴を包み込んだ。

(袖季、お願い、お願いだから……無事でいてくれ)

もう駄目かもしれない、という思いを振り払いながら紗久羅は願

う。

「走っていきこう！」

「そうだな」

奈都貴も同意する。やた吉とやた郎も頷いた。その意見に納得していない様子なのは出雲だけであった。紗久羅の言葉に驚いたような表情を浮かべる。

「え、走るの？」

「当たり前だろう、一刻を争う状況でちんたら歩いていられるか！」

「君達つて馬鹿みたいに元気だねえ……」

出雲は酷くうんざりしたような様子だった。絶対走りたくない、という感情が思いつきり顔に出ている。紗久羅と奈都貴はそんな出雲に構わず（全速力ではないが）走り始めた。

やた吉とやた郎が体の負担を軽くする術をかけてくれたお陰で、随分と楽に走ることが出来た。一方出雲といえ、同じく術をかけてもらったのにもかかわらずへろへろ走りであった。

「何でお前そんなに遅いんだよ！ あつちの世界へ通じている階段を上るときは涼しい顔をしている癖に！」

「階段は毎日のことで慣れたけれど、走るのは慣れてないんだよ。それに君達ほど動きやすい格好をしていないしね、私は」

早くも息を切らしながら出雲はどうにか答える。呆れた二人は彼を無視して走ることにした。

鏡女 柚季目指して走りながら、奈都貴がぼつぼつと話し始め

た。

「九段坂さんとは、随分前から妖のこととかを話していたんだ。……美沙さんと初めて会った時、思いきり抱きつかれて、それで、俺が『向こう側の世界』と関わりがあったことがばれた、ということかなんというか」

彼女に抱きつかれた時のことを思い出したのか、奈都貴の顔がさつと赤くなる。まあ無理もないだろう。

「……俺、小学校五年の時……塾の帰りに変な化け物に追いかけられたんだ。一反木綿ブラックバージョンみたいな奴に」

奈都貴は自分が『向こう側の世界』の存在を知った経緯についてぼつぼつと語り始めた。

「必死に逃げている間に、お化け通りの前まで行って、そこで、出雲に出会った。俺は出雲に通しの鬼灯を渡されて、お化け通りへと入っていった。そこはもうお化け通りじゃなかった。……似てはいたけれど。俺は『向こう側の世界』へ行き、そこにある居酒屋へ逃げ込んだ。弥助とはその店では出会った。他の妖とも出会った。それで、そこで美味しい物を沢山食べて……それで、帰った」

紗久羅よりずっと前に彼は『向こう側の世界』のことを知っていたのだ。時々呼吸を整えながら、奈都貴は話を続ける。

「……その後も、時々弥助と会った。あの喫茶店で。出雲とはあまり会うことは無かったけれど。……出雲が毎日のように行っているっていう弁当屋が井上の家であることもずっと前から知っていた。俺は気になっていた……ずっと……井上は知っているのだろうか、って。出雲の正体も、あっちの世界のことも……」

奈都貴はそのことをずっと聞きたがっていたのだ。そして、自分が『向こう側の世界』のことを知っていると紗久羅に告白したいと

思っていた。しかし相手が全くそんなことを知らなければ、ひかれてしまう。だから聞けなかったし、話せなかったのだ。

紗久羅は胸のもやもやの一つが晴れてややすっきりしたのを感じながら、彼の問いに答える。

「……知ったのは最近のことだよ。夏祭りの時に、知った。小さい頃からずっとあいつのことを『化け狐』とは呼んでいたけれど。でもそんなもの本当は居ないってずっと思っていた」

住宅街に入り始めると、家のあちこちから人の悲鳴が聞こえてきた。ガシャンと何かが割れる音も時々聞こえる。二人は思わず耳をふさぎたくなった。

「これじゃあ無事な人の方が少ないかも……」

「これが原因で事故とか起きていないといいけどな」

そう言って奈都貴は、気を紛らわせるために再び話を始めた。

「俺、井上から及川の前で三人もの人倒れたって話を聞いただろう。あれを九段坂さんに話したんだ。そしたらあの人は最近この学校で妙な気配を感じる様になったと答えた。自分の使役する妖の一人を学校へ放ち、生徒が倒れた場所を調べさせた。……結果、鏡がどうも関係しているらしいことを突き止めた」

「その後も俺にもし変わったことがあったら報告してくれと言われた。……それからはちまちまとあの人に報告したよ。女子達のお喋りを何気なく聞いて気になる情報を手に入れたり、及川の様子を伺ったり……時々お前あの中の誰かに惚れているのか、と男子にからかわれてくそ恥ずかしい思いをしながらも頑張った」

男子に弄られてまで……紗久羅はちよつとだけほろりとした。

「はつきりとした情報を掴むことは出来なかった。けれどあの人は学校で感じる気配が段々強くなってきていると言っていた。心なしか及川の様子もどんどんおかしくなっていった気もして……あの人は、及川に直接会えば何か分かるかもと言っていた」

「そんな時、あたし達が都合良く図書室に現われたって訳？」

奈都貴がこくりと頷く。超ラッキーと二人共小声で呟いたという。喋っている紗久羅と柚季を指差しながら、奈都貴と英彦はきつと「あれが及川柚季です」「ほうほうあの子が」などと話していたのだろう。

「で、あの人は及川と井上の為に術をかけたしおりを渡したんだ」

「ああ、あのしおりか」

奈都貴はまた頷いて話を続けようとした。しかし女の高らかな笑い声で邪魔された。声は頭上からした。

見上げればそこには不気味に輝いた姿見。微妙に上下しながら浮いていた。

これがやた郎の言っていた「鏡女が作った鏡」だろう。

鏡に映っているのは女だった。それは昨日紗久羅を襲った女と同じ姿をしている。鏡女は何が楽しいのか、あはははずつと笑い続けている。

「現われたな、鏡女！ てめえ柚季からさっさと離れやがれ！」

「無駄だよ、紗久羅」

少し遅れて追いついた出雲が息を切らせながら言う。葉を濡らす露の様な汗、顔につく髪。汗だくになってなお美しい。

「そこに居るのは本体ではない。……鏡女の分身だ」

「うふふ、あはは。もう手遅れよ。あの娘の体も、魂も、もうすぐ私のもになる」

残酷な言葉を笑いながら突きつけた鏡女が、鏡の中から飛び出してきて紗久羅を襲う。結界が守ってくれていることが分かっても、矢張り怖い。

鏡女の手が結界に触れる。結界は彼女の手を弾こうと、ばちばち音を立てて抵抗する。手は結界の中に入りそうでは入らない。

更に二つ目、三つ目の鏡が現われ、そこからも鏡女が出て来て結界を破ろうとする。

だが、出雲が放った白い光の矢が鏡女の体を貫くと、彼女達は悲鳴をあげながら消滅していった。鏡も、綺麗さっぱり無くなる。

「消えた……」

「これで終わりじゃないよ。さっきも言った通り、彼女達は分身に過ぎない。核を消滅させない限り、半永久的に出現し続ける」

「その核っていうのが……」

「及川の体を巢食っている奴、か」

「先を急ぐよ」

紗久羅達は再び走り始める。

空や道路……ありとあらゆる所からひっきりなしに鏡は現われ、紗久羅達を襲おうとする。やた吉とやた郎は結界を維持する為に集

中しなくてはいけないのだが、こうしつこく攻撃されるとなかなか集中できないようで、ちくしょうとかもう勘弁してくれとか、そんなことを言いながらひたすら走り続けている。

出雲が光の矢を放てば容易に彼女達は消滅する。しかし数秒後にはまた新たな鏡女が現われ、紗久羅達を襲い、また矢を受けて消滅し……その繰り返しだった。

鏡女の笑い声がセミや蛙の合唱をかき消し、妖しく不気味な笑い声が町を包んでいた。走っても、走っても、その声から逃れることは出来ない。

「本当、きりが無いな！ 何だよこれ……。ああもう、五月蠅い笑い声だなあ」

「確かに、頭がさつきからがんがんする。鏡女の核は 及川はどこに居るんだ？」

紗久羅は分からない、と首を振る。やた郎が後ろを振り返り紗久羅をちらつと見る。

「及川って子が誰なのか俺達はよく知らないけれど……一番強い力を桜町から感じるから、多分こいつらの核は今桜町に居ると思う」
そう話している間にも鏡女が襲ってくる。結界に入り込もうとしても無駄だと察したのか、今度は結界を張っているやた吉とやた郎を襲うようになった。

二人は錫杖を使い抵抗するが、集中力が切れれば結界が消える。そのためか本気を出して彼女達を追い出すことが出来ない。

出雲が次々と光の矢や青い炎などを放って消してくれてはいるが、やた吉もやた郎も相当辛そうだった。

「あたし達滅茶苦茶足手まといじゃん。……もっと戦える人が居ればもう少しスムーズに進めるのに。なあ、九段坂のおっさんとは連

絡つかないのか。化け物使いってやつなんだろう?」

「あの人は今無理だよ。……井上を助けたから」

「え、どういうことだよ」

紗久羅がぎくりとして奈都貴を見る。彼は汗を拭った。

「遅かれ早かれ、井上は襲われるだろうとあの人は踏んで、あの場でこっそりしおりに術をかけて井上に渡した。……あのしおりが、鏡女を弾いて井上を助けた。その代わり、あの人は鏡女を弾いた時の反動をその身に受けたらしい。明日になれば動けるらしいけれど、今日はちよっときついつてさ。美沙さんに学校帰りに会って教えてもらった。その他のことも、色々と」

「そつか……あたしを助ける為に」

少しばかり責任を感じて気を落とす紗久羅の肩を、奈都貴がぼんと叩く。

「井上の所為じゃない。全部鏡女って奴が悪いんだ。あの人がって井上が落ち込むことを望んじゃいないはずだよ。……元々あの人は妖達を自分の配下に置く為の術とかは得意だけれど、その他は苦手らしい。術の反動を受けるのも自分の力不足ゆえって言っていた」

「なっちゃん……なっちゃんはいいい奴だなあ、愛してる」

感謝しながらも弄ることは忘れない。奈都貴の顔がみるみるうちに赤くなっていく。

「お前こんな時まで……ちくしょう!」

「ああ、いいなあ、奈都貴。私でさえ愛してるって紗久羅から言わ

れたことがないのに」

しつかりちやつかり聞いていたらしい出雲がため息をつき、そんなことを言いながら矢を放つ。

鏡女の笑い声に混じって聞こえる、彼女に襲われた人達の悲鳴。道路でたおれている人達。紗久羅や奈都貴の知り合いもその中におり、二人は痛む胸を抑えながら先へ進んだ。早くしなければ柚季も、桜町や三つ葉市に住んでいる人達も危ない。

幾ら術をかけられているとはいえ、走りながら喋り続けるのは相当辛い。五人は徐々に無言になっていく。鏡女だけが腹が立つ位元気であった。

気づけば五人は町の中心まで来ていた。住宅が密集するエリアゆえに、人々の悲鳴が先程より先程より頻繁に聞こえる。鏡女の数もより多くなっているようだった。

紗久羅は後方に居る出雲の様子をちらりと見る。

矢を放ち再び鏡女を消滅させた出雲は、汗でへばりついた髪を払っていた。彼の顔にはあからさまに疲労という文字が浮かび上がっており、息も絶え絶えといった風だ。再び前を向きやた吉とやた郎を見る。彼等がどんな表情を浮かべているのかは、紗久羅には分からない。ただ精神的に参っている……そうだった空気は何となく伝わってきた。

「全く、忌々しいっただら無いね」

低い声で恨み言を吐く出雲だったが、ふと何かに気づいたのか急に立ち止まった。

「近い……」

「え？」

紗久羅と奈都貴が聞き返し、彼等も走るのをやめた。
よく見ると、前方に人が居た。鏡女に襲われた様子は無い。

紗久羅は唾を飲み込んだ。

その人間はどんどん近づいてきている。女のようだった。やた吉とやた郎が錫杖を強く握りしめる。奈都貴は「来た」と小さく呟いた。

厭な風に吹かれてなびく黒髪。その髪を彩る真っ赤なカチューシヤが光を受けた鏡のようにきらきら輝いている。

裾や袖にレースのついた、真っ白のワンピースが薄暗い空間によく映えている。

「袖季……」

目の前に居るのが彼女であって彼女でないことは紗久羅にも分かっていた。しかし自然と口からこぼれ出た名は、大切な友人の名であった。

袖季は　鏡女は　紗久羅を見て、笑った。愉快そうに、妖しく、不気味に。

*

「やっと見つけたぞ。お前達のことを探していたのだ」

妖しく輝く瞳を紗久羅達に向けながらゆっくりと鏡女が語った。ぞっとする喋り方に胃を締めつけられながらも、紗久羅は彼女を睨み叫ぶ。

「それはこっちのセリフだ。探していたぜ、あんたのことをな！」

「おや、そうだったの。それは嬉しい」

「その体、さっさと袖季に返せ」

「いきなり本題？ もう少し話をしようではないか」

呆れたような様子の鏡女を紗久羅がびしつと指差した。

「時間稼ぎしようたってそうはいかないぜ。さっさと消えやがれ、くそばあ」

袖季を、そして桜町や三つ葉市を滅茶苦茶にした彼女が許せず紗久羅は大声で怒鳴る。しかし鏡女は怯む様子を見せない。

「口の悪い娘。お前の様な娘は大嫌いだ」

「大嫌いで結構だ。……いいからさっさと消え失せろ」

「断る。……折角手に入れた体なのだから。ふふ後少しで全てが私ものになる。この体もしばらくすればより使いやすい体になるだろう。あははっ」

高らかに笑う鏡女。そこに袖季の面影は残っていない。そんな彼女を一発殴ろうと結界から今にも飛び出していきそうな紗久羅を、奈都貴が抑えた。

そんな紗久羅達に構わず、鏡女は一人話を続ける。

「窮屈で居心地の悪い鏡の中で、私は長い間眠り続けていた。私を封印したあの男を恨み、憎みながら。……しかしある時、私の眠りは覚めた。封印が解けかかっていることに気づいた。だが鏡から解放されたところで私には力も肉体も無い。……結局何も出来ぬまま惨めに消えるのみのはずだった。けれど、そのまま大人しく消えてやるのはどうしても嫌だった……だから私は呼び続けたのだ。器と

なる者を、な」

その声を聞き、彼女に導かれるようにして物置部屋にやってきたのが柚季だった、というわけだ。鏡女に惑わされ、感情を爆発させ、鏡を壊した。そして鏡女はまんまと柚季の体を手に入れたのだ。

「正直、上手くいくとは思っていなかった。弾き返されるものと思っていた。だが私の魂はこの娘に拒絶されることなく入り込むことが出来た。……元居た土地を離れ、あの三つ葉市という名の地に来たから……魂は一層この体に馴染むようになった」

鏡女が話している間も、分身達は笑い続けている。紗久羅は笑い声で頭がどうにかなりそうになった。

「それでも最初の内は辛かったぞ。器を手に入れたとはいえ、私の力は無いに等しいものだ。だから。忌々しい封術師の男によつて傷つけられた我が魂を癒し、力を取り戻すには人の 特に若い娘の生气が必要だった。だが、分身を作り出す力も、一度に多くの生气を奪う力も、その時の私には無かった。この姿を鏡に映し、道を作り、私が直接鏡に入り込むことでようやく少量の生气を奪うことは出来たが……あんなまどろっこしいことなど一生やりたくない」

むかむかする気持ちを抑える一方で、紗久羅はああそれで、と思つた。

当初、人は柚季がすぐ傍に 鏡の前に居る時に倒れていた。倒れたといつても軽い貧血程度のものですぐ目覚めた。

だがしばらくしてからは、柚季がその場に居なくても人は倒れるようになったし、症状もどんどん重くなっていった印象があった。

「鏡女の器となつてしまつた及川が三つ葉市に引越してきたことで、事態は余計悪化した。この辺りの土地の力が鏡女に力を与えてしまつたんだ」

「最初の内は出雲ですら気づかなかった位、しょぼい力しか持っていなかったのに」

「及川の魂と同化することで、あの鏡女は及川の一部になった。だから余計に判別が難しかったらしい。おまけに井上が言う通り初めのうちはそこまで強い力を持っていなかったから……。単純にとり憑いていただけだったら、すぐ分かったかもしれない、とも言っていたな」

紗久羅を待っている時にそんなことを話したのだろう。奈都貴は小声で補足した。二人の前に居る出雲は口を開くことなく、只そこに立ち続けている。

「まあ、話はこれ位にしておこう。話しているだけではつまらないだろう？　遊びましょう？」

遊びましょう、という部分だけ袖季の声色になる。鏡女が両手を広げ、指揮するかのようになり、軽く手首を振った。

誰がためえなんかと遊ぶか、と言い返そうとした紗久羅だったが口から出かかった言葉は口の中から一瞬で蒸発して消えた。

先程までとは比べ物にならない数の鏡が一度に出現し、辺りを覆いつくしたからだ。鏡同士がしつかりとくっつき、下以外の全てを囲む。ぎらぎらと不吉に輝く鏡の空間が一瞬にして出来上がった。空、道路、家……。先程まで周りにあったものはあつという間に見えなくなった。世界からこの辺りの空間だけが切り離されてしまったかのようだった。邪悪で息苦しい空気が閉ざされた空間に充満しているのがよく分かる。

「この空間からは、私を倒さぬ限り抜け出すことは出来ぬ。鏡は壊してもすぐ元に戻る。私はこれほどの力をすでに手に入れているのだ。……。あはは、驚いた？」

「おいこれ、マジかよ……」

「短期間で力つけすぎ……」

紗久羅と奈都貴はもう驚くやら呆れるやら。出雲は小声で面倒臭いと呟きながら頭をかいている。

鏡女の分身達はこれから起こることに胸躍らせながら笑っている。彼女達は核である鏡女の合図を待っているようだった。やた吉とやた郎は唾を飲み込む。

「お前なんて、私の矢で簡単に葬りさることが出来るのだがね」

鏡女を睨むその瞳は、氷を鋭く削った作った刃のようである。弓を握る力が強くなっている。鏡女はにこりと笑いながらくるとその場で回る。スカートの裾がふわりと舞った。風を受けて揺れる、草原を飾る可憐な白い花のように。

「お前にそれが出来るの？ その娘の前で、私に矢を放つの？」

「出来なくはないね」

そう言いつつも、出雲が弓を構えることは無い。鏡女が愉快そうに笑った。

紗久羅は奈都貴の腕をつつき、彼に話しかける。

「なあ、何で出雲は矢を放たないんだ？ さっきあたしにそう簡単にはいかないとか何とか言っていたけれど」

「……及川まで死んでしまうかもしれないからだ」

言いくそうに口をもごもごさせた後、はあ、と息を吐いて一気にそう言った。その言葉を聞いて紗久羅の心臓がどくん、と不吉な音を立てて大きく揺れた。

「袖季が、死ぬ？」

「鏡女の魂と及川の魂。二つの魂は今殆ど同化している状態なんだ。二人は同一の存在になろうとしているんだ。……今矢を放てば、鏡女の魂と一緒に及川の魂まで消滅してしまうかもしれないんだ。上手く切り離されて鏡女の魂だけが消滅する可能性が無い訳じゃない。でもどちらに転ぶかは実際にやってみないと分からない……らしい」

「そんな……！」

それは鏡女自身も承知しているらしい。彼女が器としているのが袖季。紗久羅の友達でなければ、出雲も躊躇うことなく矢を放っていただろう。

「鏡女を袖季の魂から引き剥がすことは出来ないのか？　引き剥がした後、鏡女を討つとか」

「同化した魂を引き剥がすのは相当難しいことらしい。無理に引き剥がせば、何が起きるか分からない。……奇跡的に一命をとりとめたとしても、魂に大きな傷を負ってしまって……二度と目覚めなくなってしまうたり、記憶を失ったりしてしまうかもしれないだつてさ。紙にしつかりくっついたテープを無理矢理剥がそうとすると紙が破れてしまったり、テープと一緒に紙の一部もはがれてしまったりするだろう。……それみたいなものだつて」

紗久羅は何も言えず、ただ口をばくばくさせる。

二人の会話を聞いていたのか、鏡女がくすくすと笑った。

「ああ、何て良い気分！　あの男に封印された私が、あの男の子孫である娘の全てを手に入れる！　後少しすれば完全に！　あはは、

これ程素晴らしい復讐はない！」

鏡女が右手を挙げ、そしてそれをゆっくりと振り下ろした。
それが、合図だった。

紗久羅達を閉じ込めている全ての鏡から、一気に鏡女（以降、分身とだけ表記する）が飛び出してきて五人を襲う。鮮やかな着物と夜空を閉じ込めたような髪で空間がいつぱいになった。

出雲は顔色を変えることなく、人差し指と中指だけを立てた左手を、右から左へ一気に走らせる。

無数の青白い炎が出雲を囲む。今度は手を上から下へ一気に振り下ろした。

炎は放射線状に飛んでいき、分身達を攻撃する。分身達めがけて飛ぶそれは、まるで空を駆ける彗星のようだった。

今度は紅葉が描かれた黄金の扇を取り出し、手首をすつと捻る。すると燃える様な色をした無数の紅葉が現われ、分身の体を切り刻み、燃やしていく。彼の攻撃は霊的なものであるから、実体を持たない分身達にも有効のようだった。

出雲の攻撃は核である鏡女を避けていた。柚季の体を傷つけないようにする為だろう、と紗久羅は思う。

（弥助がこの場に居ても役に立たなかつただろうなあ。あいつ物理的な攻撃しか出来そうにないし……。いや、そんなことはどうでも良い。これ、一体どうすればいいんだ？ 柚季を助ける為には……）

分身達は消えては現われ、そしてまた消されていく。これだけの分身を放ち続けているのだから、当然鏡女も消耗しているはずなのだが、彼女の顔に疲れという文字は浮かんでいない。町を襲って奪い続けている生気がそうさせているのかもしれない。或いはこの空

間が彼女に味方しているのか。

分身の一人がやた吉の頭をがっつと掴んだ。彼の体が一瞬よろける。それを見た出雲が扇で鏡女をばん、と叩くと分身は悲鳴の様な笑い声のようなものをあげて消えた。

「しっかりおし。二人を守れなかったら、後で死ぬよりきつい罰を与えるからね」

出雲の言葉にやた吉は申し訳なさそうに頷く。そうしている間にも無数の分身達が三人を襲う。

出雲を襲おうと手を伸ばした分身。彼女の手は出雲の扇によって弾かれる。

弓を構え、光の矢を鏡の一つに放つ。鏡は音を立てて割れ、一瞬だけ空の一部が見えたが、すぐに新たな鏡が現われ、そこを埋めた。

「これじゃあ、きりが無い。そうこうしている間に、袖季と鏡女が完全に同化しちまうかもしれない。……そしたら、出雲は矢を放つ。鏡女は死ぬ。袖季も、死んでしまう」

「……或いはその前に、出雲が矢を放つてしまいかも。今もものすごく我慢している状態っばいし……」

確かにそれはそうだ、と紗久羅は頷いた。出雲は割と短気なのだ。というより自分の思い通りにならないというのが大嫌いな性分なのだ。とと紗久羅は思っている。簡単に切れる堪忍袋の緒……切れば相手が紗久羅の友達であろうが何であろうが構わず彼は矢を放つに違いない。それを考えると頭が痛くなった。

出雲に手を伸ばす分身の一人を、彼は扇で薙ぎ払った。そのままくるっと回り、彼の背後に居る分身の体を両断する。右足を軸にし、髪を揺らしながら分身達を消滅させてゆくその姿は、舞姫のようで

あり、恐ろしい鬼のようでもあった。分身達は彼に触れることすら出来ない。

「ああ、でもこのままじゃあどうしようもないよ。……核を討たなきゃ、ここから逃れることも柚季を解放することもできない。けれど、下手をすれば柚季も死んじゃう。だから矢を放つことが出来ない……あたし、約束したのに。助けるって、言ったのに」

口ではそう言ったが、結局の所自分は何もしていない。かえって今は出雲達のお荷物になっている。拳を強く握りしめ、歯軋りする。しかしそうしたところで何が解決するわけでもない。

悔しげな紗久羅を見た奈都貴は、首を横に振った。そして彼女の顔を真つ直ぐ見た。

「まだ、手はある。あの人は術をかけたしおりを、及川にも渡した。……井上が貰ったしおりにかけられていたものとは違う術だ。術は成功したはずだ、と聞いている」

そして奈都貴は、最後に残った手段について紗久羅に話し始めた。

*

目を覚ますと、柚季は暗黒の世界に居た。そこにあるのは果てない闇のみだった。暑くもなく、寒くもない。

「ここは、どこ？」

友人である紗久羅に全てを話してすぐ、意識が飛んだ。意識が途切れる刹那、女の笑い声を聞いたような気がした。

ゆっくり立ち上がり、改めて辺りを見回してみる。しかし何回見ても闇以外に見えるものは何も無い。

闇は不安を煽る。夢も希望も喜びも、全て吸収されて姿を消して

しまいそうな空間。柚季は自分の体を抱きしめながら、震えた。このままでは自分自身も闇に溶け消えて無くなってしまふ……何となくそんな気がして、柚季は涙を流す。

（私はここでこのまま消えてしまふのだろうか。鏡を割ってしまったことを後悔しながら、一人寂しく消えてしまふのだろうか。嫌だ、そんなのは、嫌だ）

だが、どうすればこの世界から抜け出すことが出来るのか柚季には分からなかった。嫌だ、怖い、寂しい……そんな思いがぐちゃぐちゃに混ざり合い柚季を襲う。

「助けて。誰か、助けて」

そんなこと言っても無駄だろうけれど、などと思いつながら柚季は必死で叫んだ。すると「大丈夫ですよ」という男の優しく暖かな声が聞こえ、柚季は肩を震わせる。

恐る恐る振り返ると、そこには三つ葉高校図書館司書……九段坂英彦が立っていた。彼の体は眩い光に包まれており、柚季の心を一瞬で暖める。

「九段坂……さん？ どうして……」

震える唇でようやくそれだけ言うことが出来た。英彦は柔らかな笑みを浮かべている。

「私が貴方に差し上げたしおり。……あれは術のかかったしおりだったのですよ」

「術？」

柚季は目をぱちくりさせる。一体何を言い出すのだろうかと思った。しかし英彦は構わず話を続ける。

「貴方の魂は、妖の魂に侵食されています。このままでは貴方の魂は消滅し、妖　恐らく鏡女と呼ばれる者　に全てを奪われてしまいます」

真剣な表情を浮かべ、先程より低い声で言う。柚季ははっとし、体を震わせる。

「しおりにかけた一つ目の術。それは妖が貴方の魂を侵食するスピードを少しだけ遅くする為のもの。そしてもう一つ。……私、九段坂英彦の魂の欠片を貴方の体内に注ぎ込む術」

柚季は紗久羅と電話で話している間、ずっと握り続けていたしおりのことを思い出した。確かにしおりを握っていた時は少しだけほっとし、また意識を保ち続けることがどうにか出来ていた。ただそれも一時的な効果であったが……。

しかし魂の欠片とはどういうことだろう、と柚季は首を傾げる。

「貴方を助ける為、魂のほんの一部を切り取って、貴方の体内に流し込みました。しおりを私から受け取った時、びりつと電流が流れるような感じがしませんでしたか？」

言われてみれば、と柚季はゆっくり頷く。確かにしおりを貰った時そんな感覚に襲われたのだ。それに驚いて、しおりを落としてしまったことを思い出す。

「今貴方の目の前に居る私は、九段坂英彦のほんの一部なのです。……どうにか成功して良かった。専門外の術だったので……失敗してしまうかとも思っていました」

「術……そんなものを使える人間が本当に居たなんて……」

「居ますよ。まあ数は多くありませんが。貴方のご先祖様も立派な術師だったのでしょう。しかし、ご先祖様が術師であったゆえに子

孫である貴方は苦しむことになってしまった。……人が本来持つべきではない力は、こうしてろくでもない事態を招くことが多い。まあそんなことはどうでもいい。……時間がない。ついてきなさい」

英彦は手招きした後、柚季を導くように歩き始めた。柚季は彼の放つ光にすぎるかのようについていく。

暗闇の中歩いていると、自分がどの位のスピードでどういう道を辿って進んでいるのか分からなくなる。その奇妙な感覚はとても不気味なものに思え、柚季は肩を抱く。

「貴方が助かる為には」

しばらく無言のまま歩いてきた英彦が口を開いた。

「貴方自身も戦わなければいけません。むしろ貴方が一番頑張らなければならぬのです。誰か助けて、と声をあげるだけではいけない」

その言葉に柚季は俯く。

「……今の貴方は殆ど鏡女と同一の存在になりつつあります。貴方はこのままでは完全に鏡女となる。貴方という存在は消滅し、死を迎える。それを回避するには、鏡女の魂を引き剥がすしかない。けれど、外部から無理矢理引き剥がそうとすれば君の魂まで傷つくかもしれない。だから、今鏡女と戦っている人は下手に手を出せない状態にある」

「そ、それじゃあどうすれば……」

「外側から引き剥がすのではなく、内側から拒絶し、引き剥がす。君の体や魂は今や殆ど鏡女に支配されている。けれど、この体の本来の主は君だ」

英彦が、柚季を指差す。柚季ははっとして息を呑んだ。

「君の強い意志があれば、鏡女を拒絶し、この体から弾き飛ばすことが出来るかもしれない。……いや、もうそれに賭けるしかない」
そう言うのと英彦はまた前を向き、歩き始める。柚季はそれにまたついていった。

（そうだ。私も戦わなければいけない。紗久羅達に任せっぱなしで何もしないなんて……そんなこととしてはいけないんだ。元はといえば、自分がまいた種なのだから……）

どれ位の時間、どれだけ距離を歩いたのか。
やがて目の前が明るくなった。

気づけば辺りは灰色になっていた。くもり空のような暗くてぼやけた場所。

「あれを」

英彦が指差した先には、巨大な卵のようなものが浮いていた。光の粒子が集まって出来たようなその左側には、紫がかつた黒色のガラスの破片のようなものが突き刺さっている。光の塊に比べれば小さく、片手で握りしめられる位の大きさだ。しかし圧倒的な存在感がある。

光の塊は時々真っ黒になり、また少しして白くなる。それを繰り返しているようだが、黒くなっている時間の方が圧倒的に長い。

柚季は一目見て、それが何であるのかを悟った。

ああ。ああ、これが、と思った。

「あれを、抜くんだ。只力任せに抜いただけでは抜けない。強く願

うんだ。明日を、未来を、自由を」

柚季はふらふらと前へ進み、その黒い破片の前に立つ。近くに居るだけで頭が痛くなり、体中から力が抜け、気持ち悪くなった。柚季はなかなか決心がつかず、その破片の前でごくりと息を呑む。

否応無く体が震え、目から涙がこぼれ落ちそうになる。あまりに苦しくて、逃げたくなった。しかし逃げれば自分に明日は無いと思っただけ。じきに自分の存在は消えてしまふ。それを考えると、逃げることは出来ない。

そんな柚季の肩に、英彦が手を置いた。優しく柔らかな温もりが柚季を包み込む。

「私がこうしてサポートします。……だから」

柚季はおそろおそろ手を伸ばし、それに触れた。

それは酷く冷たかった。氷など比ではない位に。頭を鈍器で殴られたような痛みが襲い、体がよろける。それを英彦が必死に支えた。

「出来ることなら、代わってやりたい。けれど、それは出来ないんです」

苦々しげに英彦が言う。柚季は彼に支えられながら、その破片を鏡女の魂を握りしめる。

悲鳴のようなものが口からこぼれたような気がしたが、最早自分で何を言っているのか分からなかった。

彼女を支えながら、英彦は上を見る。

(この事態を収束させるための一つの鍵は及川柚季自身。そしてもう一つは……)

*

「それじゃあ、今柚季は戦っているんだな。……自分の体の中で」
紗久羅は奈都貴から柚季が内側から鏡女を拒絶し、引き剥がすしか方法が無いことを聞いた。そして今柚季の体内に英彦の魂の一部が居ることも。

「ああ。……及川が鏡女を引き剥がすのが先か、鏡女が及川の魂を完全に侵食するのが先か。或いは、堪忍袋の緒が切れた出雲が矢を放つのが先か……。全ては及川精神力……。そして、井上。お前次第だ」

「ど、どういうことだよ」

「及川のサポート。それを井上、お前がやるんだ。お前は及川の友人だ。……お前は及川がこの世界から消えるのは嫌だろう。鏡女の思い通りになんて、させたくないだろう」

「当たり前だ」

「お前が鏡女の存在をよしとしない気持ち、及川柚季を必要だと思う気持ち……。その気持ちがきつと及川の助けになる。及川の存在を強く肯定することで、及川の存在を守るんだ。……強く思え。願うんだ」

分身が出雲の髪を掴む。その分身を出雲は弓で乱暴に払った。やた吉とやた郎は汗を流しながら、必死に二人を守っている。

鏡女は相変わらず余裕そうで、勝ち誇ったような笑みを浮かべていた。自分が完全に柚季と同化する前に全ては終わると確信しているようだった。万が一出雲達が倒れなかったとしても……逃げてし

まえば問題ないと思っっているかもしれない。

ここでぼうつとしているだけでは、何も解決しない。鏡女のむかつく笑みを見ているだけなんて、嫌だと紗久羅は思った。

紗久羅はポケットに入っている携帯電話に手を伸ばした。それを飾るストラップの一つに…… 柚季がくれた桜の花がついた物がある。

桜は携帯をストラップごと握りしめ、目を閉じた。

『及川柚季を信じなさい。 貴方の友を想う気持ちがかししたら、彼女を救うかもしれないから』

夢で誰かがそんなことを言っていたような気がしたのを思い出す。自分が強く想うことで柚季を救えるかもしれない。

時間は無い。早くしなければ、と紗久羅は柚季に向けて語り始めた。

「柚季。あたしだ、紗久羅だ。聞こえるか？ あたしは柚季の傍にいるよ。柚季が鏡女をぶっ飛ばして、笑ってこっちに駆けってくるのを、待っている。…… 柚季、あたしは未だ柚季と会って間もなく…… 友達ではあるけれど、まだ柚季のことよく知らないし、柚季との思い出も殆ど無い」

ただ自然と出てきた言葉を紗久羅は並べ続ける。

「なあ、柚季。十一月には学園祭があるんだ。クラス全員で店をやるんだ。何をやるかなんてまだ決まっていけないけれど、でも絶対楽しいと思う。遅くまで学校に残って、看板とか作るんだ。夜の学校って、何かすごくわくわくしないか？ 普段はそんな遅くまで居ないし。他のクラスがどんな店を出すかも楽しみだよな。学園祭とか初めてで、今から楽しみだ。…… 初詣に一緒に行くっていうのもいいなあ。幼稚園から仲の良い友達と毎年行っているんだけど、結

構楽しいぜ。電車に乗って、ちょっと遠くの街にある寺に行くんだ。ものすごくでかい寺なんだ。……二年になれば修学旅行や球技大会、体育祭もある。三年になったら受験とか、面倒臭いものもあるけどさ、でも、でも……これから先、楽しいことがきつといっぱいある」
思いつく行事などを次々と並べた。

「クラスや学校にどんどん馴染んでいって、どんどん友達作ってさ、新しい学校生活を始めてほしい。……ああ、そういえばまだ袖季の家に行っていないかったっけ。美味しいお菓子、くれるんだろう。あたし、お菓子とか好きなんだ。お茶飲みながら食べるクッキーとかケーキって最高だよな。……それとさ、あたし結構料理が得意なんだ。バレンタインの日には友達たちに、手作りのお菓子をあげるんだ。自分でいうのもなんだけれど、美味しいぜ。袖季にも食べさせてやりたいな」

それを隣で聞いている奈都貴は、笑うことも無くそれを黙って聞いている。そんな彼も心の中では袖季に語りかけているのかもしれない。

色々喋っているうちに、熱い思いがどんどんこみ上げてきて、紗久羅の声は徐々に大きくなっていった。

「……良いのか、袖季。このままじゃあ、何も出来なくなるんだぞ。袖季の時間、止まっちゃうんだぞ。いいのかよ、それでも。しかも袖季がこの世界で最も忌み嫌っている存在に、奪われるんだぞ？ 妖怪に乗っ取られて、袖季の体で好き勝手なことをやるつもりだ。いや、もうすでに好き勝手なことばかりして、沢山の人に迷惑かけて……それを楽しんでいる。……そういう最低な奴なんだ。今、袖季から全てを奪おうとしている奴は。腹が立つだろう？ 一番嫌いな奴の思い通りにことが運ぶなんて！ 面白くないだろう？ 嫌だろう？ あたしだって嫌だ！ そんなの絶対に……許さない！」

紗久羅が大声で叫んだ。その声が、柚季に届くことを願って。

*

柚季は鏡女の魂と戦い続けていた。今はもう平衡感覚も滅茶苦茶になって、自分が立っているのか、倒れているのかも分からなくなっていた。

鏡女の魂を握る手の感覚はとつくに無くなっていた。油断すると手を離しそうになってしまう。

そんな彼女を支えている英彦も辛そうで、歯を食いしばっている。

何度も諦めそうになった。もうこんなことをしても無駄だと、思った。今手を離せば、きつと楽になれる……そう思った。

全てを投げ出したくなる位、辛い。頭がおかしくなってしまうそうだった。

(ああ、こんなんじゃないあ、勝てる訳が無い。この手を離して、そのまま消えてしまう方がずっと楽なのかもしれない。ああ、どうしてこんなことしか考えられないのだろう)

もう駄目だ、自分はこんなにも弱かったのか……あまりに情けない自分を惨めに思いながら、手を離そうとした時だった。

ワンピースのスカート部分についている左ポケットから、何か温もりを感じる。心なしか、ポケットが光っているように見えた。

ぶるぶる震える左手をポケットの中に入れる。何か固い物が手に当たる。

「……………」

恐る恐る中に入っている物を取り出してみる。

それは、携帯電話だった。光は、携帯電話についている……………紗久

羅から貰ったストラップから発せられていた。

幸運を呼ぶ四葉のクローバー。それが優しい緑色の光を放っている。柚季はあっと小さく声を上げた。

更に驚いたことに、そのクローバーから紗久羅の声が聞こえてきたのだ。

(紗久羅の声だ……)

紗久羅が、柚季を励ましている。これからあるだろう学校の行事について色々話している。柚季は、自分がクラスメイトと共に看板を作ったり、料理を作ったり、紗久羅や他の友達と店を巡ったりしている姿を想像した。

学園祭だけでは無い。運動場のトラックを全速力で駆ける姿、テストの答案用紙に向かってしている姿、旅行先で写真を撮っている姿。色々な姿を思い描く。

紗久羅にお気に入りのティーポットを自慢する姿を想像し、おかしくなって笑った。この先あるかもしれない未来を思い描き、体が温かくなる。

紗久羅の声が、言葉が、胸にすっと沁みる。それと共に、柚季の中で何か激しい感情が暴れ始める。

『腹が立つだろう？ 一番嫌いな奴の思い通りにことが運ぶなんて！ 面白くないだろう？ 嫌だろう？ あたしだって嫌だ！ そんなの絶対に……許さない！』

その叫びが、柚季の頭をがっんと殴った。

(ああ、そうだ。そうよ……このままじゃあ、こいつの、今私が握っているこいつの、思い通りになってしまう。逃げることは簡単だ

けれど……けれどきつと、後悔する。逃げた後、うんとうんと後悔する)

そう思うと力がみなぎってくる。柚季はきつと目の前にある黒い破片を睨みつけ、そしてそれを握る手に力を込めた。

鏡を割る前に感じた憎しみが、体中を巡る。そしてそれと共に、未来を思ふ気持ちが、巡っていく。

(何故逃げようなどと思ったのだろうか。本当に私は馬鹿だ。まだやりたいことはいっぱいある。友達だって沢山作りたいし、出来れば恋人とかも作りたい。こんなところで終われない、終わりたくない) 柚季は深呼吸をしてから、大きな声で叫んだ。人生の中でもこれほどまでに大きな声を出したことはないと思う。

英彦はもう自分のサポートは不要と思ったのか、彼女から静かに離れ、行きなさいと一言言って消えていった。

「あたたなんて、大嫌い。この化け物め。……この体も、魂も、人生も、全部、全部、私の物よ。他人に……ましてや、お前みたいな化け物にあげるなんて……絶対に嫌。嫌ったら嫌よ」

握りしめている鏡女の魂が、ばちばちと黒い火花を出し始める。手がとても熱い。だが柚季はそんなことおかまいなしにそれを握り続ける。

「出て行け、私の体から！」

その言葉と共に、柚季は鏡女の魂を、一気に引き抜いた。

途端、灰色だった世界は一面眩い光に包まれた。

*

紗久羅が叫んだ直後、鏡女に異変が起きた。

彼女の顔から笑みは消え失せ、苦しそくに胸を押さえ始めたのだ。

出雲達を襲っていた分身達の動きも急速に鈍くなっていく。

「おのれ、これは、どういう……まさか、あの娘が……そんな、こんなことは……嘘だ……ああっ」

柚季の体から、何かが勢いよく飛び出した。同時に柚季はその場に崩れ落ちる。

何かなんだか訳が分からず、ぼかんとする紗久羅はふと上を見る。するとそこには……女が居た。恐らく鏡女の本体だろう。

鏡女は動揺しているようだった。まさか自分が追い出されるとは思いもしなかったのだろう。

柚季は成功したのだ。自分の体から鏡女を出すことに。

「ああ、力が……そんな、力が、出ない。まさか、あの娘に、全て」
鏡女の分身達が消えていく。紗久羅達を包む鏡も心なしか透けてきていた。

出雲が、鏡女に向けて静かに弓を構える。彼がものすごく腹を立てていることは、紗久羅と奈都貴にも容易に分かった。

鏡女がびくつと肩を震わせ、少しだけ出雲から遠ざかる。しかしそんなことをしても無駄なのだ。

藤色の髪が風も無いのにふわりと揺れる。赤い瞳が、鏡女の体を突き刺し、その場に縛りつける。恐ろしい程美しく、冷たい瞳から目を逸らすことは誰にも出来ない。

「や……や、める……」

目が焼けてしまいそうな位眩しく、一点の穢れも無い光の矢が現

われる。

「随分と舐めた真似をしてくれたね。私が何も出来ないのを良いことに……今更それを悔いても遅いよ。まあ悔いても悔いなくても、結果は同じだけれど。さあて。……さつさと私の前から消え失せる。永久に」

光の矢に、瞳よりなお冷たい言葉をのせて、放った。
とてつもない速さで飛んだ矢は鏡女の体を貫いた。

「あ……ああ……お……おお……」
鏡女の体が、矢で貫かれた場所を中心にどんどん消えていく。

「おのれ、おのれ……おのれえ……」

恨みの言葉を吐きながら、鏡女は消えていった。
あまりにも呆気ない最後だった、と紗久羅は心の中で思った。

紗久羅達を閉じ込めていた鏡達にヒビが入り、ものすごい音と共に砕け散っていく。

ぱらぱらと降り注ぐその破片はまるで銀色の雨の様だった。何十分ぶりかに見た空はすっかり青くなっており、気持ち悪い風も消えている。

もう結界を張る必要も無い、と出雲が言つとやた吉とやた郎はすぐに結界を解き、その場に座り込んだ。

「やった。……あ、そうだ、柚季！」

降り注ぐ破片の雨を眺めていた紗久羅は柚季のことを思い出し、慌てて倒れている彼女のところまで駆けよる。

「柚季、柚季、しつかりして、柚季！」

軽く頬を叩きながら彼女の名を呼び続ける。しばらくして柚季はゆっくりと目を開け、自分の傍らに居る紗久羅を見つめた。

「紗久羅……ああ、私、やったんだね……」

「ああ、そつだよ。あいつを追い出したんだ。あいつは、出雲に倒された。もう、居ないよ」

「出雲……ああ、紗久羅が話してくれた……」

そつ言つて視線を動かした柚季は、出雲を見てばかんと口を開けた。ものすごく驚いているようだった。

（まあ、無理もないよなあ……藤色の髪に赤い目の兄ちゃん見たら、誰だつて驚くよな）

柚季は困惑しながらも、小さな声で「有難う御座いました」とお礼を述べる。出雲は表情も変えずに「別に」と一言。

ゆっくり起き上がった柚季は、今度は奈都貴に目を向ける。彼がどうしてこの場に居るのか、理解出来ないのだろう。

「えつと……深沢、君？ 何で深沢君が」

「ああ、なつちゃんはその司書のおっさんから色々聞いていたんだよ。柚季がどうすれば助かるか、あたしに教えてくれたのもなつちゃんなんだ」

「だからそのなつちゃんつて呼び方やめろつて」

「そつか。……有難う、深沢君。紗久羅も、有難う。紗久羅の声が聞こえていなかったら、今頃私は全部諦めていた。……紗久羅がく

れたストラップから、紗久羅の声が聞こえたの。あの四つ葉のクローバーが私を守ってくれた」

「いや、あたしなんて大したことしていないよ」

紗久羅は少し照れる。その様子を見て、柚季がくすりと笑う。

「後、九段坂さんにもお礼を言わなくちゃ。あの人が、私を導いてくれたの。……私、沢山の人に迷惑をかけた。そして沢山の人に助けられた」

「うん。けれど、最終的に柚季は自分で自分を守った。そして、あいつに勝った。それは誇ってもいいと思うよ」

柚季はうん、と頷いた。

「楽しみだね、学園祭。……後修学旅行とか、球技大会とか。私、色んな人に助けてもらったこの命、大切に使う。そして、これからの人生を大切に生きたいと思う」

「うん、是非そうして欲しいな」

そう言って紗久羅と柚季は笑った。

その傍らで伸びをし、大きなあくびをした出雲が柚季をじつと見つめる。柚季はその視線にびくつと肩を震わせた。

「な、何でしょうか……」

「君、妖が嫌いなんだっけ」

「あ、え、ええ、まあ……」

柚季は視線を逸らす。正真正銘の妖怪……しかも命の恩人の一人

である出雲に聞かれ、気まずそうに答えた。

「まあ別に嫌いでもいいのだけれど。君、これからもずっと我々と深く関わり続けることになると思うよ」

「は？」

袖季が目をぱちくりさせる。紗久羅と奈都貴も何のこっちゃと顔を見合わせた。

「……君は霊的な力を持っている。恐らく、先祖から受け継いだものだね」

「え？」

「今までその力が発現することはなく、君は普通の人間として生きていた。けれど、どうやら鏡女の魂と戦っていた時、その力を目覚めさせてしまったようだ。……君は鏡女を追い出すだけでなく、彼女の力を殆ど奪い取ってしまった。……一度目覚めた力は、余程のことが無い限り眠ることは無い。君の体から、そこそこ強い力を感じる。そういった霊的な力はねえ……妖を滅する力があるが、同時に彼等を惹きつけてしまうんだ。おまけに今回こういった事件に巻き込まれて、ますます『向こう側の世界』との縁が深くなってしまった」

「え、ええ……そ、そんな」

淡々と語る出雲の言葉を聞き終えた袖季は、天に昇る煙のようにふらふらしながら倒れた。そんな袖季の体を揺らしながら、紗久羅は出雲を睨む。

「てめえ、余計なこと言いやがって！　うわ、柚季、柚季、しっか
り！？」

「今の内に覚悟してもらった方がいいと思ったのだがね」

「にしたってもう少し時間を置いてからにしろよな！　この馬鹿狐
！」

「酷いなあ、紗久羅は。もっと優しい言葉をかけておくれよ。今回
私は相当頑張ったのだから」

「それとこれとは話が別だ！」

言い合いになる紗久羅と出雲を見ながら、奈都貴は深いため息を
つくのであった。

番外編7：桜村奇譚集5

『桜村奇譚5』

『川流れ』

現在の三つ葉市にある水瀬川には「川流れ」という水の精が住んでいるといわれている。

体はしわくちゃで、頭のとっぺんははげており、ごわごわした白髪がだらりと伸びている、やや緑がかつた色の肌に細長い瞳。中年の男と河童を足して二で割ったような姿をしていたという。

そんな彼が水瀬川を流れているのを見かけたら、注意しなくてはいけない。

彼が川に流されている それは大雨・洪水の前兆とされているからだ。

それ以外の時はどこかに隠れているのか、彼の姿が決して人の目に触れることは無い。

『茶飲ませ』

それは深い緑色の着物を着た小柄の老婆であるとされている。彼女は人々を自分の住処である家へ招き入れ、閉じ込める。

そして、無理矢理茶を飲ませるのだ。その茶は大層美味であるらしい。だが決してこの老婆、美味しい茶を振舞ってくれる優しい妖という訳では無い。

彼女は茶を何杯も飲ませる。拒否することは出来ない。人々はその茶を何杯、何十杯も飲まされ続ける。苦しくなっても、腹がふくらんでもだ。

結局最後には腹が茶で満たされ、大きく膨れ、死ぬことになる。

一度彼女の住処に入ってしまったら最後、死ぬまで出ることは許されないのだ。

しかし例外が一つだけある。

老婆が淹れた茶に茶柱が立っていれば、解放されるのだ。しかもそうして解放された者は一生飲み食いにも困らなくなるという。

ただ、そうして解放された人間は数える程しかいなかったらしい。

『おどろかし』

雪隠に住まう妖の一種らしい。彼は用を足している者の尻等を大きな舌でべろりと舐めるといふ。

舐められるだけで、害は無いのだが、非常に気持ち悪い思いをすることとなる。

『筆喰い』

筆の先端 毛の部分のみを喰らう鳥の妖が居たらしい。大きさは雀や鶯位と小さい。頭の色は黒く、胴や羽は白い。見た目は何の変哲も無い、只の鳥のようで、人に危害を加えることも無い。実際、この妖を飼っていた者も居たという。

良い墨の染みついたもの、年季の入ったものを特に好んで食べたという。家のちよつとした隙間から入ってきて、こつそりと毛を食べたらしい。墨を飲むのも好きだったらしい。

糞の色は黒く、墨の匂いがしたという。鳴き声はまるで「スミ、スミ」と言っているようであったとか。

その数は時の流れと共に減っていき、今ではその姿を見る事が出来ない。

『むすび』

むすび、という妖が居た。それは大柄で太っており、非常に暑苦

しい姿であつたらしい。

この男は時々村までやってきて、そこにある幾つかの家の戸を叩く。

村人達は彼がやってくると、炊いた米や麦、ひえなどを与えた。

男はそれを貰うとおむすびを作つたらしい。彼が握つたそれは非常に美味しかったらしい。

だが、彼に紐等何かを結ぶものを与えては決していけないとされていた。

それを与えると、男はそれを使い、紐を渡した者の首を絞めて殺してしまうのだという。

『文荒らし』

文荒らし、というのが居た。文字通り、文書や手紙を荒らす妖だ。しかし荒らす、といつても丸めたり破つたりするといつわけではない。

文荒らしはそこに書かれている文字を分解したり、ばらばらに並び替えたりしてしまうのだ。

例えば「ありがとう」という文章を並び替えて「がとあうり」としてしまつたり、「好」という字を「女」と「子」に分けてしまつたり。文章は文章で無くなり、意味の分からない文字を羅列しているだけのものとなり、ほぼ解読不可能となる。

文荒らしは、重要な意味を持つ手紙や文書を特に好んで荒らしたという。どうでも良いようなものには殆ど目もくれなかつたらしい。文荒らしの姿を見た者、荒らしている場面を見た者は一人も居なかつたという。

そんな彼から大事な手紙等を守るには、どこかに大きく「固」と

書けば良いとされている。

『鬼石』

かつて桜村、及び周辺の集落を襲い、多くの人を殺し、多くの物を破壊した恐るべき鬼が居た。その鬼は遠くからやってきたという術師によって倒され、桜山の近くに封印された。彼の体は土の下に埋められ、その上に大きな封印石が置かれた。その石には「犬、猿、雉」の姿が彫られている。この石は「鬼石」もしくは「鬼の墓」と呼ばれている。

封印された鬼には未だ意識が残っているのか、時々吠えるという。その声は非常に恐ろしいものであるらしい。

鬼が怒り狂い、吠えると鬼石の周りに雷が落ちるらしい。特に彼が封印された頃（現在でいえば七月頃）は特に多くの雷が降り注ぐとされている。

しかし雷は鬼石に落ちることは無い。もし落ちてしまったら、封印は解けてしまうとされており、人々は鬼石の近くに雷が落ちる度に不安な気持ちになったという。

幸い今現在鬼石に雷は落ちていない。

ちなみに私の知人は先日、何か獣のようなものが吠える声を鬼石の近くで聞いたらしい。もしかしたらそれは封印された鬼のものであったのかもしれない。

『山守り』

これは桜山に限らず、美吉山等、この辺りにあるありとあらゆる山に一人は住んでいるとされている。

緑色の体をした精霊で、自分が住んでいる山を見守る存在であるらしい。

彼等は敬い、大切に扱うべき存在だ。もし山で木の実を採ったり、狩りをしたりしている時に彼に会ったら、必ず深く礼をし、山の命を使わせてもらっていることを感謝する意を述べる必要がある。それを聞くと彼はこくりと頷くという。

もし彼を敬わず、礼もせず、感謝の意も述べなければ恐ろしいことになるらしい。そのようなことをした者は裁きを受け、山の中で酷い死に方をすることになるといわれている。

『やがえしか
矢返鹿』

桜山には千年の時を生きていると言われている鹿が居る。月の光に似た眩く輝く白い体。頭には長い年月を思わせる立派な角が生えているという。美しく、また威厳のあるその姿は山の主と呼ばれるにふさわしいと言われている。

そんな彼を仕留めることは決して出来ないと言われている。

彼に矢を放てば、その矢は跳ね返され自分の胸を貫く。鉄砲で撃とうとしても、その弾は同じように跳ね返される。多くの人が彼を手に入れようとして命を落としたといわれている。

矢を向けても跳ね返されることから「矢返鹿」と呼ばれている。滅多に人の前に姿を現さず、普段は人も来ない山奥で暮らしているとされている。

『いろいろねずみ』

これは鼠の妖で、普通の鼠よりも大きいとされている。うさぎと同じ位、或いはそれ以上の大きさだという。囲炉裏に住み、灰を食べて生きている。また火も好んで食べるとされており、その体は決して火に焼かれることは無い。

これといって人に危害を及ぼすわけでもなく、病気などをばらまく訳でもない。子供も一、二匹程しか産まない。人々は彼らを追い

出すわけでも退治するわけでもなく、見てみぬ振りをしていたらしい。

『言の葉』

昔桜山の麓に「言の葉の木」と名づけられた木があった。透き通った色の、翡翠の様な色をした美しい葉を枝につけた木であったという。

その葉には不思議な力があつたとされている。

木からもぎ取った葉を耳に当てると若い女が喋る声が聞こえたらしい。女は自分が見てきたこと、聞いたこと、思ったこと等を話したという。話す時間はまちまちで、ほんの数分だけ話す時もあるが何時間、何日も話し続ける場合もあったという。女は一方的に話すのみで、こちらの声は一切聞こえていなかったらしい。

この葉の語る話は非常に面白かったらしく、多くの人が木から葉をちぎり、耳に当てたとか。葉は一年中木についており、ちぎってもちぎってもすぐ生えたという。

だが、当時の村長はこの木のことを気味悪く思い「人を惑わす化け物の木だ」と言い、ある日その木を刈り取った拳句、火をつけた。木はあっという間に燃えたという。

その時、思わず耳を塞ぎたくなる位恐ろしい、女の悲鳴を人々は聞いたという。女は妖だったのか、それともその木に宿る精だったのか。それを知る術はもう無い。

『戸隠し』

ぼろぼろの着物を着た、醜い姿の男をした妖、それが戸隠しだ。彼は家等の建物の出入り口を消す力を持ってるとされており、人々を閉めだしたり、閉じ込めたりしたという。出入り口は只待っているだけでは姿を現せない。

元に戻すには、日が暮れた後戸が本来あつた場所辺りの前で土下座をし「戸隠し様お許し下さい」と三回大声で言えば良いとされている。戸が元に戻る前、男の笑い声が聞こえるという。

何でもこの妖、元は人間であつたらしい。だが心無い村人によって自分の家に閉じ込められ、その際発作を起こして死んだのだという。

ちなみに、彼を挑発したり、見下したりするような言葉を吐きながら戸のあつた辺りを蹴飛ばすと、どれだけしつかり作られた家も一瞬で崩壊するといわれている。

『血椿』

血を好む女の妖だという。生前は多くの人を殺し、その着物や体を紅に染めていた、といわれている。

死んで妖となった後も血に対する執着心が薄れることは無かつたらしい。女は人を殺め、その屍の血で白い椿を染めたという。女はその椿を愛で、大切にしていたらしい。

『ひそみ』

これは、箆筒や行李、釜、風呂等に潜んでいる妖だ。頭は異様に大きく体は小さく細い。体はどす黒く、目はぎよろりとしており、舌は長く、鋭く尖つた小さな歯が沢山並んだ口からは、よだれのよなものを常に流しているという非常に不気味な姿をした妖だという。その声は甲高く、聞けば耳をたちどころに痛めるとか。

箆筒を開けた時、釜の蓋をとつたら彼が居た……ということがよくあつたらしい。しかし彼らの姿を見ても、決して慌ててはいけな

い。
心を落ち着け、彼等がそこから完全に出てくる前に引き出しや蓋

を閉め「ノケ、ウセ、ヒケ」と言えばとりあえず彼等は消えるらしい。

彼等が外に出てしまえば大変にことになる。彼等はその鋭い歯で人々に噛み付いたり、そこ等にある物を齧ったりするという。しかも彼の歯に噛みつかれた（もしくは齧られた）部分は徐々に腐っていくのだという。

小さいが、非常に恐ろしい妖なのだ。

『臭い振るまい』

これもかなり迷惑な妖だという。彼は非常に臭い匂いをたっぷり染みこませた、とても汚い扇子を持っており、人を見つけるとにたと笑い、その扇子で思いつきり煽ぐのだという。そうするとそれに染みこませた臭いに襲われることになる。鼻をつまんでも、息を止めても無駄であつたらしい。一度嗅げば、一週間は鼻が使い物にならなくなるといわれている位酷い臭いであつたという。

ちなみに彼自身には鼻が無い。ゆえに自身はその臭いの影響を受けることは無かつたらしい。

『指差し』

指差しという少女の姿をした妖が居たという。

その妖は「あっち向いて」と言いながら左右上下いずれかの方向を指差すという。しかしその指の差した方を決して向いてはいけな

い。そうすると首が寝違えたように動かなくなってしまう。そうなつた場合村の男辺りに力任せに戻してもらうしかなくなる。

回避するには彼女が指差した方とは正反対の方向を向くしかないらしい。

そうすると指差しは怒ったような声をあげながら消えるのだという。

『飯づくり女房』

家の主が寝ている間にこっそり家に入り、これ以上は無理という位豪華な飯を作って帰っていくという、変わった妖が居たらしい。

飯づくり女房、と名づけられてはいるが実際その姿を見たものは誰も居ない。つまり、女かどうかも分からないが、こういうことをするのだから女の妖なのだろうと言われている。そもそも妖なのかも分からない。もしかしたら飯を作るのが大好きな神様であるかもしれない。

豪華な上にかなり多い量が作られるので、それを用意された家は友人や親戚を招き、共に食べたという。その味は絶品で一口食べれば口の中が極楽と化したとか。

『叩き込み』

それは勉強などを司る神であるといわれている。見た目は若い男の姿で、いかにも賢そうな顔をしていたとされている。

彼は、読み書きできない（最も殆どの住人はそうだったが）人の前に現れ、手に持っているぶ厚い書物で頭を思いつきり殴り、去っていく。

そうすると叩かれた人間は文字の読み方、書き方を「叩き込まれ」て読み書きが出来るようになったという。彼が持っている書物には漢字やひらがななどが全て書かれていたのではないだろうか。

彼は桜村周辺のみではなく、もっと離れた場所にも現われたとされている。

『化け物茸』

昔桜山にそれは大きい茸が生えたという。それは一夜のうちに現われ、山を覆いつくさんとする位大きかったとか。その茸がどうなったのかは特に伝わっていない。

『髪抜き』

この妖怪は男に手を出すことは無い。狙われるのはいつも女だったとされている。

女性を襲い、その人の髪の毛をごとっそり引きちぎるのだという。そして奪った髪の毛を自分の頭につける。すると、その髪はひとりで伸びていくという。

その為か、この妖は四方に髪の毛を垂らしており、顔も見えないし、どちらが正面で、どちらが背面なのかもよく分からないという。この妖、相当強い力で人の髪の毛を奪うらしく、襲われた女性はあまりの痛みに悲鳴をあげて泣き叫び、その後熱を出して寝込んだらしい。

女であるのか、男であるのか。それを知る者は誰も居なかったとか。

第四十二話：化け物使い

『化け物使い』

「ここ……で合っているのか」

「ここ、だと思っ」

「地図を見る限り……ここだな」

紗久羅、柚季、奈都貴の三人は地図で示された場所を見て驚愕した。

目の前にあるのは、周りの家が霞んで見える位立派な洋館。

壁の色は黒っぽく、屋根の色は紺色に近い。窓枠は白く、それが良い具合にアクセントになっている。

全体的に暗い色ではあるがかなりしゃれており、ファンタジックな雰囲気を漂わせていた。館の前にある門は花や蔦をモチーフにしたようなデザインでこれがまた素晴らしく、芸術的だった。

周りにあるのはごく普通の家だから、そこだけ異様に浮いて見える。しかしその浮いている感じが、異質な感じが、洋館のファンタジックな雰囲気をより一層引き立てているのだと三人は思う。

「しかし本当に立派な……ここ、まじであのおっさんの家なの」

「……そうらしい。ほら」

家を囲む塀……門のすぐ右隣に『九段坂』と書かれた表札がついており、それを奈都貴が指差した。それを見て、二人は成程と頷く。しかし未だに信じられず、紗久羅は腕を組みながらうーんと唸った。

「ずっと前に建てられた家だとは思っけれど……でも結構高そう。あのおっさん金持ちだったのか？」

「というか洋館ってあの人のイメージにあまり合わないような。どちらかというと和風のお屋敷が合いそうぞ」

「まあとりあえず中に入ろう」

奈都貴は門を開け、仲良く話している二人を手招きしながら入っていく。紗久羅と柚季はそれに続けて中に入る。

玄関までの道には白い石が敷き詰められており、その周りはきちんと手入れされた庭となっている。塀の裏側には木や花が植えられており、それが洋館の雰囲気とあっている。派手さは無いが落ち着いた感じで、かつしゃれている。

奈都貴は玄関前についているインターホンを押した。それからしばらくして聞こえてきたのは、美沙のぴよんぴよんと弾んだ声だった。

「わあわあ、いらっしやい。今開けるね」

そう言っただがちゃり、と勢いよくドアをあげた美沙はそれはそれは嬉しそうな表情を浮かべたまま、目の前に居た奈都貴に飛びついた。

紗久羅と柚季は目を丸くする。抱きつかれた奈都貴は顔を真っ赤にして口をぱくぱくさせる

「ああ、ごめんごめん。あまりに嬉しくて、つい」

美沙は奈都貴からひょいっと離れる。未だ顔を赤くしている奈都貴を、紗久羅はにやにやしながら見つめ、柚季がそれをたしなめる。が彼女の顔にも笑みが浮かんでいた。

「ようこそ。英彦様がお待ちです。ほらほら、あがってあがって」
鼻歌を歌いながら美沙は三人を案内する。

館の中もしゃれており、白い壁には色々な物が飾られていた。美しい女の姿に化けた九尾の狐が描かれた絵、木々に囲まれた湖で戯れる妖精達の絵、狐面や壁掛け時計……どれも素晴らしいもので、紗久羅はすごいなあと感心しながらそれらを眺めていた。

美沙が一つの部屋の前で止まり、ノックをする。扉の向こうからのんびりとした英彦の声が聞こえる。美沙は必要以上に力を入れ、先程と同じように勢いよく扉を開けた。紗久羅は、この扉いつか壊れるんじゃないか？とそんなことを思いながらその様子を見ていた。

扉の向こうにある部屋は教室一つが丸々入ってもまだ少し余裕がありそうな位の広さ。窓は開け放たれており、ぱたぱたと白いレースのついたカーテンがたなびいている。天井には太陽の様な眩しさと、夜空の星の様な輝きを併せ持つ豪華なシャンデリア。正面の壁には大きな古時計があり、振り子が時を刻んでいる。棚には写真や金髪青目の可愛らしい人形などが飾られている。

白いテーブルにはティーカップ、色とりどりのケーキにゼリー、プリン、クッキー、チーズやチョコがのったクラッカー等がとろせましと並んでいる。絵本等によく描かれていたお茶会のシーンをそのまま実写化したような光景に、三人は感嘆の声をあげる。

テーブルの奥……時計の前にある席に、この館の主である英彦が座っており三人を歓迎する笑みを浮かべていた。ついさっきまで本を読んでいたらしく、それを閉じて傍らに置いている。

「こんにちは。すみませんねえ、どうしても美沙が皆さんにお茶とお菓子を馳走したいと言うので」

先日紗久羅達は、鏡女の一件で色々力になってくれた英彦にお礼を言いに図書室へ行った。その時英彦がもしよければ今度の休日、自分の家に遊びに来て欲しいといった提案をしてきたのだ。

「美味しい菓子とお茶を食べさせてくれるって聞いたからな。それに先日のこととかの話もあるしさ」

「私もその件について色々お話ししたいと思っていました。あ、とりあえず座って下さい。美沙、お茶の用意を。ああ後、他の子達も呼んでくれないかな」

「合点承知です」

美沙はくるりとその場で一回転すると部屋を後にした。それを見送りながら三人は少し緊張しながら立派な装飾がされた椅子に座った。

「とても立派な家ですね。びっくりしました」

「はは。私はこういう家より古風な日本の家の方が好きなのですが……美沙がこういう可愛くておしゃれな家に住みたいと言っていますね。まあ引越し先であるこの街に丁度いい感じの館があったものですから」

ああ成程、と三人は納得する。可愛いもの好きであるらしい美沙にとっては和風のお屋敷より、こういった洋館の方が魅力的だったのだろう。

でもさあと紗久羅。

「ここ、滅茶苦茶高いんじゃないの？ おっさん、金持ちなの」

「まあ実家は結構な金持ちだと思いますよ。色々な事業に手を出していますねえ……父も母も毎日てんでこ舞いです」

英彦はそう言って苦笑する。どうやらお金は両親に出してもらったらしい。

それに、と英彦が続ける。

「実はこの館、見た目程高くは無かったですよ。……実は幽霊や妖の住処になってしまっていたが為に『呪われた館』として大安売りされていたのです」

幽霊、妖、という単語を聞いて柚季の顔がひきつる。彼女はそういった類のものが大嫌いなのだ。英彦がその顔を見て、あははと笑った。

「いえ、今は大丈夫ですよ。幽霊さん達には成仏してもらいましたし、ここを住処にしていた妖達のリーダー的存在だった子は……」
言いかけたところ、扉が音を立てて勢いよく開く。美沙かと思いきや、そこに居たのは初めて見かける顔であった。

見た目紗久羅達より少し年上っぽい。髪はショートカットで、白いキャミソールにジーンズとシンプルな服装をしている。

英彦がくすりと笑う。

「ああ、噂をすれば。……彼女の名前は秋野。この館で色々悪さをしていた妖だ。あ、でも今は私の使鬼しきとなっているから、大丈夫」
それを聞いて秋野は頬を膨らませながらふいつとそっぽを向く。美沙と違い、あまり英彦のことが好きではない様子だった。

あのおう、と恐る恐る柚季が手を挙げる。

「使鬼、って何ですか」

「そういえばそういうの全然説明していませんでしたねえ。……え

えとですねえ、私達化け物使いは様々な術を用いてこれと決めた妖と戦うのです。戦うといっても相手を攻撃するとかではなく、心に訴えかけるといふか、自分の実力を誇示して相手を参らせるといふか……ちよつと説明が難しいのですが、でその妖を下すのです。そうして配下となつた者を、使鬼と呼んでいるのです」

理解したのか、袖季は小さく頷きながらちらりと秋野を見る。紗久羅も彼女を見てみるが、ぱつと見妖などには見えない。現代人の格好をしているからだろうか、と紗久羅は思った。

その視線に気づいた秋野は二人にがんを飛ばしながらどかどかと歩いてきて、椅子に座つた。かなり乱暴に座つたので、どしんという音が聞こえた。

「あの時は油断していたんだ。……いつかお前の寝首をかいてやる」

「いつでもかかっておいで」

まあ君ごときに私が負けるわけ無いんだだけだね？と言わんばかりの余裕ある笑みを浮かべて。秋野はその態度が気に入らないのか、馬鹿と一言言つて、目の前にあるチョコケーキを掴み大きな口を開けてそれを食べた。

「強情で乱暴な子だなあ。……まあそういう所が可愛いんだけどね。あ、ほらほつぺにクリームついてるよ。とつてあげようか」

「じ、自分でとれるから、い、いい」

そう言つてほつぺを指差すと、秋野は顔を真っ赤にしながらそれを拭つ。

傍から見ればバカカップルがいちゃいちゃしているようにしか見えない。いや、実際いちゃいちゃしているのだからと紗久羅は思った。

また扉を叩く音がする。今度こそ美沙らしい。奈都貴が立ち上が

り、扉を開けてやると、ティーポットや一口サイズに切られた果物を持った皿をのせたワゴンと共に美沙が入ってくる。そんな彼女の後ろには五人もの女性が居た。

「英彦様、お茶をお持ち致しました。あ、後皆も呼んでできましたよ」

「ご苦労様。さあさあ、皆座つて。早くお茶にしたいからね」

英彦に言われて皆が席につく。美沙も全員のティーカップにお茶を注いでから座つた。突然現われた美女軍団に、三人は呆然とするしかない。

「あの……皆九段坂さんの使鬼なんですか」

「はい。皆可愛いでしょう？ あ、でも皆私のものですから、差し上げませんよ、深沢君」

「いらないですよ！」

話をふられた奈都貴はまた顔を赤くしている。どうやら紗久羅やクラスの人だけでなく、普段から英彦にも弄られているようだった。紗久羅はその様子を見てまたにやにやする。彼女は奈都貴が慌てふためいている姿を見るのが好きだったのだ。

「あはは。あ、とりあえず食べましようか。淹れたてのお茶も冷めてしまいますから。好きなものを好きなだけ食べてください」

「いえい、ラッキー。それじゃあ遠慮なく頂きます」

全く遠慮せず、紗久羅は目の前にあるアップルパイをまずは手に取る。隣に座っていた柚季が苦笑いする。

「もう、紗久羅つたら。……ま、いいか。私も食べようつと」

そう言ってレモンの香り漂うレアチーズケーキをとり、口にする。奈都貴も続いてシュークリームを手取る。

向かい側の席に座っている英彦の使鬼達もきゃっきやと笑いながら好きなお菓子を手に取り、食べ始めた。

紅茶を一口飲んだ英彦が紗久羅達の方を見た。

「それにしても良かったです。及川さん、井上さん、深沢君が皆無事で……幸いあの事件が原因で亡くなった方もいらっしやらなかったようですし」

（そう。鏡女の所為で桜町も三つ葉市もパニックになって、事故とも起きて……怪我をした人は居たけれど、死人は出なかった。奇跡としか言いようがない）

紗久羅はちらつと柚季の様子を伺う。騒ぎを起こした鏡女に全てを乗っ取られ、奪われそうになっていた彼女は申し訳無さそうに俯く。

自分が鏡を割っていなければ、怪我をしたり倒れたりする人も居なかったのに、と思うと辛いだろう。

「貴方が悪いわけではありません。少しも気にしなくていい、とまでは言いませんが……自分をあまり追いつめてはいけませんよ」

「ありがとうございます」

「……本当に、良かった。貴方があの時逃げ出さず戦ったからこそ、こうして皆笑いながらお茶を飲んだり、お菓子を食べたりすることが出来るのです」

「正直言うと、私逃げ出しそうになっていました。逃げた方が楽だ

ろうつなってそう思ってた……けれど、紗久羅の声が聞こえて、それで……」

「井上さんの心からの叫びが、貴方に勇気を与えたのですね」

微笑む英彦を見て、柚季もつられて笑みを返す。しかしその笑みはすぐに曇る。英彦はどうしたの、と目をぱちくりさせた。

「確かに鏡女は消えました。けれど、ちょっとというか、私にとっではかなりなんです……困ったことが起きまして」

柚季は紗久羅を見る。紗久羅は柚季の顔を見て苦笑いした。

「困ったこと、ですか？」

「何か私、潜在的に霊力を持っていたとかで……鏡女を追い出す時、それが目覚めちゃったらしくて」

それを聞いた英彦がやっぱり、といった表情を浮かべたので柚季は驚いた。英彦ははちみつとクリームたっぷりのパンケーキを頬張っていた美沙と顔を見合わせ、苦笑いする。

「いえ、それに関しては……美沙が貴方に抱きついた時に感じ取っていたようなんですよ。鏡女の歪んだものとは違う、強くて清らかな力を感じると彼女は言っていました。そうだろう、美沙」

「そうなのですよ。まあ鏡女の邪悪な魂が邪魔で、はっきりと感じ取ることは出来なかったんですけれどね」

「その力が目覚めてしまったのですね……確かに貴方にとってはかなり面倒な事態になりましたねえ。しかし誰がそんなことを貴方に？」

「い、出雲さんって言う……ええと、鏡女に止めを刺した……化け狐さんです」

「陰険で根性が曲がっていて、人が困っているのを見て喜ぶような奴です」

と紗久羅が付け加える。そんな二人の話を聞いた英彦の目に好奇の色が滲んで見える。

「出雲。……桜村奇譚集によく出てくる化け狐のことですね。深沢君から彼がまだ生きているということ聞いて驚きました。巫女と相打ちになったとそれには書かれていましたから」

「桜村奇譚集のこと知っているの」

「ええ。私は妖に関する本を色々読んでいますから。この辺りには昔から興味があつたんですよ。妖と関わる人間の間では有名なんですよ、この辺って。これ程までにあちらの世界との境界が曖昧な場所ってそうそうお目にかかれませんか」

そう言っつてシュークリームを一口。柚季はよりもよつて何でそんなところに来てしまったのか、と頭を抱える。紗久羅は彼女の肩を、慰めるかのようにぼんと叩いた。柚季はヤケクソとばかりに、モンブランにかぶりつき、続いてレアチーズケーキを食べる。

「今度会つてみたいですねえ、その化け狐さんに。聞くところによれば、かなり強い力を持っているそうですし」

「あの馬鹿狐も使鬼に加えるつもり？」

紗久羅の言葉に、英彦が慌てて首を横に振る。

「とんでもない！ 恐らく私の力で下すことが出来る相手ではない

でしょう。自分とはかけ離れた者を使鬼にすることは不可能に近い
です。……第一、私は女の妖にしか興味ありません。やつぱり使
役したり一緒に暮らしたりするなら、可愛い女の子の方がいいじゃ
ないですか。野郎が野郎を使うとか……そんな、気色悪い。相手が
美形であるうがなんだろうがお断りです」
と満面の笑みを浮かべながら言う。

「英彦様の使鬼は、皆女の子なの。そして全員が英彦様の彼女なの
よ。ねえ、英彦様」

「ああ。皆愛しているよ」

(何だこのエロ男……皆彼女って……)

ドン引きする紗久羅に柚季が小声で囁く。

「あれだよね、萌え系漫画とやらにありそうなシチュエーションよ
ね。一人の男性に、沢山の美少女……。しかも全員その男性のこ
とが大好きっていう」

「リアルにそんなことあるんだな……」

「いや、これは例外だろう。多分……」

黙々とクラッカーや果物を頬張っていた奈都貴が視線を逸らしな
がら力なく呟く。

「あ、ご心配なさらず。生徒とか、人間の女の子とかに手を出すな
んてこと絶対にありませんから。言っただけでしょう。女の妖にしか興
味は無いつて。人間の女の子には興味が無いんです。あくまで妖だ
けなのです」

誰もそんなこと聞いていないのに、英彦が再び眩しい笑顔を浮か

べ更に三人をどん引きようなことを言う。妖（女限定）にしか興味ないって人間としてどうよ、と三人は思った。

（ああ、でもさくら姉も似たようなものか。人間の世界に興味ありませんって感じだもんな……）

案外英彦と気が合うのではないかと紗久羅は思う。

「ああ、そういえば美沙と秋野以外の子達の紹介がまだでしたね」
英彦の言葉を聞き、お菓子を食べたりお茶を飲んだりしていた五人の手が止まる。

「ええと、まず秋野の隣に座っているのがこかき神」

真雪の様に白い髪、陶器のように白くて滑らかな肌、白い着物、とあまりに白くて清らかで……今にも消えてしまいそうな姿をしている。神はこくりと頷いた。年は紗久羅達と同じ位に見える。

「次が、真砂」

こちらは海藻の様に波打っている、ぎらぎらした黒髪を伸ばした女性。見た目は二十歳過ぎといったところ。肌は何故か濡れているように見える。寝ぼけ眼で、へらっと笑いながら軽く手を振った。

次に紹介されたのが阿古という娘で、こちらは小柄でややふっくらしている。くりくりした瞳に小さな口。ぶにぶにほっぺで、とても可愛らしい少女だった。可愛いほっぺをほんのり赤くさせながら、にこりと笑う。

「そして、蕾」

右下にホク口のある、スタイル抜群の色っぽい女性で、宜しくねと甘い声で囁き、ウインクしながら投げキッス。大人の魅力で満ち溢れているが、どこか子供っぽい雰囲気もある人だ。

「最後まで……夢結」

「夢結？」

紗久羅はその名前に聞き覚えがあり、思わず口にする。

夢結と呼ばれた女性は秋野と同じく髪は短い。瞳はガラス玉のように透き通っており、蕾と違って物静かで落ち着いた大人の女性と違った雰囲気だ。

紗久羅は彼女とどこかで会ったことがあると思い、彼女の顔をまじまじと見つめる。視線に気づいた夢結は苦笑いする。

「お久しぶりね、お嬢さん。……最も、貴方は私のことよく覚えていないと思うけれど」

「え、ええとどこで会ったんだっけ……」

「鏡女に襲われて倒れた後、ですよ。彼女は人の夢や精神世界に潜り込む力を持っていますからね。私は術をかけたしおりを貴方に渡しました。そしてその直後、鏡女が貴方を襲った。……その時術が発動し、鏡女から貴方を守った。代わりに、私は体に強い衝撃を受け動けなくなってしまう。……けれど、術が本当に成功し、貴方をきちんと守れたのかはあの時の私には分かりませんでした。私は一刻も早く安否を確認したくて……彼女を貴方の夢の中へ潜りこませたのです」

英彦の話の聞き、曖昧な記憶が少しだけはっきりとしてきた。

（ああ、そういうばあは夢の中で誰かと会った。目を覚ました途端、誰とどういう話をしたのか殆ど忘れてしまっていたけれど……そうか、あの時あたしはこの夢結って姉ちゃんと会っていたんだ）

「私の術が完璧だったら、貴方が倒れる位の生気を奪われる前に、鏡女を弾くことが出来たのですが……元々、攻撃する為の術とか他人を守る為の術はそれ程得意ではなかった。化け物使い　この響きはあまり好きではないのですが　は、妖をもって妖を制す存在で。己を鍛えることでより強い妖を使鬼にし、そうすることで強い妖に立ち向かう力を手に入れる」

「でも、おっさんの術がなければ、あたしは確実に死んでいた。袖季だってどうしていいか分からないまま、消えてしまっていたかもしれない。……おっさんにはこれでも感謝しているんだぜ」
と感謝の意を述べながら紗久羅はフルーツケーキをもぐもぐ食べる。

「紗久羅、お礼を言いながらお菓子食べちゃ駄目でしょ……」
と呆れる袖季。

「照れ隠しってやつじゃね？」
チーズとトマトの上にオリーブオイルがかかったものをのせたクラッカーをひよいつと口に入れながら、奈都貴が一言。凶星だったので、紗久羅はぶうつと頬を膨らませる。

「成程、照れ隠しね。可愛いわねえ、紅茶と一緒に食べちゃいたい」と蕾が組んだ両手の上に顔を乗せ、妖しい笑みを浮かべる。紗久羅はケーキの上に乗っていたキウイを思わず口から噴出しそうになり、慌てて紅茶を飲んだ。その様子を見て、蕾が今度は声を出して笑った。

「あはは、本当に可愛い。……ああ、でも可愛さで言ったらやっぱり佳奈が一番かな」

「佳奈？」

「英彦様の幼馴染なんだけれどねえ……」

と言つてなぜかにやにやしだす。意味が分からず、紗久羅と柚季は揃つて首を傾げる。英彦もよく分かつていないらしい。顔に何のことだろうとはつきり書いてあつた。蕾は「内緒」と一言言つて、結局その続きを言おうとはしなかつた。

何だかなあと肩をすくめていた英彦は、柚季に話しかける。

「そういえば及川さん、霊力が目覚めてしまつたんですね。……
どうです、あれから何か変化はありましたか？」

紅茶を一口飲み、ふつと息をついた柚季は曖昧に首を横に振る。

「幸い今のところは何もありません。けれどいずれ何か起きるの
なつて思つとちよつと憂鬱で」

「柚季は妖怪嫌いだもんな。あたしも別に好きつてわけじゃないけ
れど。あの馬鹿狐は、これから面倒なことになるだらうなつて言つ
ていたな」

「力がありとあらゆるものを引き寄せますからね。面倒なことも当
然起こるでしょう。……となると、もしものことがあつた時自分で
対処できるようにならないとまずいですねえ。及川さんさえ宜しけ
れば、力の使い方、制御の仕方を教えて差し上げます。自分の身を
守る位の術は私にも教えられると思いますよ」

「教えてもらつた方が身の為だと思つぜ。そうしなきゃ、あつとい
う間にお前みたいなのがキなんて食われちまう」

秋野がクリームのついた口の周りをぺろりと舐め、脅すような声
で一言。柚季はその言葉にぞつとしたのか、鏡女に体を乗っ取られ

かけていた時のことを思いだしたのか、顔を青くさせながらごくりと息を呑む。あまり不安をかきたてるようなことを言っではいけないよ、と英彦がたしなめると秋野はべえっと舌を出し、ぷいっとそっぽを向く。やれやれと言いなながら英彦は再び柚季に視線を戻す。その表情は真剣なものであった。

「まあ覚えておいた方がいい、というのは事実です。その力を使い、人々を妖怪から守る為に戦えとは言いません。他人の為に使うかどうか、それを決めるのは貴方自身ですからね。……正直、オススメはしません。しかし自分の身を自分で守る為に、色々知っておかなければいけません」

「柚季、教えてもらった方がいいと思うよ。このおっさんなら信用出来るだろう」

「う、うん……そうだね。このままじゃあ、また色々な人に迷惑かけちゃうかもしれないしね。九段坂さん、お願いします」

「はい。簡単なことでしたら、図書室に来てくだされば教えて差し上げますよ。しかしあの鏡女は消えてなお及川さんの平穏を奪い続けて……全く困ったものですね」

「本当ですよ。これからどんなことが起こるのだろうと考えるだけでも憂鬱です。でも、いいんです。あれのせいで酷い目にあっだし、沢山の人に迷惑をかけちゃったけれど……でも、あの鏡女のお陰で私は素敵な友達と出会えましたし。これから先の人生思いつきり楽しんで、鏡女をくやしがらせてやるんです。ねえ、紗久羅」

「そうそう。きっとあたし達がわいわいお喋りしながらお茶飲んでる姿を見て、鏡女の奴あの世で地団駄踏んでいるぜ」

紅玉に似た輝きを持つイチゴジャムをたっぷり塗ったスコーンを手にし、紗久羅と柚季は笑い合う。奈都貴もそんな二人を見て微笑む。

三人はその後、英彦達とお喋りを楽しみながら、美味しいお菓子をお腹がはちきれそうになるまで食べた。美沙が作ったというそれらは、それ程までに美味しかったのだ。

ご馳走になった挙句お土産まで貰ってしまい、三人は喜ぶ反面色々助けてもらった挙句、ご馳走までしてもらって……と若干申し訳ない気持ちになった。

「それでは皆さん、また学校でお会いしましょうね。もし変わったことがあればどんどん相談して下さい。妖などが関係していそうなものでしたら喜んで話を聞きますよ。ああ、後可愛くて強そうな女の妖の情報とかも大歓迎です」

最後に若干の変態さんな発言を混ぜた別れの挨拶を述べ、英彦は三人を見送る。

きつと彼に相談する機会は今から多くなるだろう、と紗久羅は思う。『向こう側の世界』に何度も通ったその身にはあちらの世界の空気が染みついてきているのだ。あちらの世界の住人を引き寄せてしまふ存在となってしまうのは、何も柚季だけではない。

(まあ、ちょっと……というかなんかなり変わったおっさんだけど、頼りにはなりそうだな)

三人は途中まで一緒に歩き、別れた。

美味しいお菓子を食べすぎた三人は結局夕飯を食べることが出来なかった。

ちなみに井上家の本日の夕飯は散らし寿司であった。……紗久羅の大好物である。

紗久羅は遠慮なく食べまくったことを少しだけ後悔したのだった。

第四十三話・優しい君へ

『優しい君へ』

「野良犬にからまれていた猫を助けようとしたら、自分が今度は野良犬に襲われそうになって、それから逃げようとして思いっきりこけて……そのこけっぷりを見た野良犬が呆れて退散した……。はあ、そんなこと本当にあるのねえ」

「あるのよ。誰かがどこかで書いた物語のような　実際にありそうで、無い、そんな感じの出来事が」

櫛田ほのりと昼食を食べるさくらの膝と肘にはばんそうこうが貼られており、右頬も心なしか、赤い。恥ずかしいのか体を気持ち小さくさせていた。ほのりは、さくらの弁当箱に入っている卵焼きを一つつまみ、口に入れる。

「葱が入っている卵焼きもいけるね。今度作ってもらおうと。……しっかしまあ、転んだだけで済んでよかったわねえ。犬にがぶつと本気で噛みつかれたら大変なことになっていたわよ」

「それを考えるとぞつとするわ。けれど、猫ちゃんが無事で良かったわ。三毛猫だったの。三毛猫つてとても素敵だわ。古き良き日本の風景に一番馴染むもの。大人になったら猫を飼って、縁側で一緒にひなたぼっこをしながら本を読みたいわ」

そう言いながら恍惚の表情を浮かべ、空想、もとい妄想の世界へと一瞬にして入り込む。

「原稿用紙に向かう私の傍らに猫……っっていうのも絵になるわね。書斎には犬よりも猫の方が合うと思うの。本棚とか机の上を荒らさ

れないように気をつけなければいけないとは思っけれど。やせているより、少しふくよかな子の方がいいわ。特に理由は無いのだけれど、その方がずっと良いと思うの」

弁当を食べるのも忘れ、夢想したことを口走っている彼女はかなり浮いており、異様な空気を放出している。ほのりはそんなことは慣れっこなので、特にツツコミを入れることもなく、適当に頷きながらおかずを口に運び続ける。

「いいわねえ、猫。ああ、あの猫ちゃんとまた会いたいわ。あの猫ちゃんが恩返しに来てくれたら、私そこら中を飛び跳ねてしまおうでしょうね。猫の恩返し、鶴の恩返しのような悲しくて切ない結末にはならない気がするの。猫ってどうやって恩返しするのかしら？大量の魚を家の前に置くのかしら。それともにゃあにゃあ歌うのかしら。小判でも持ってきてくれるのかしら。ねえ、どう思う」

「さあ、猫に恩返しされたことなんてないから分からないわ。それより早く食べちゃいなさいよ、また図書室へ行くんでしょ」

もう殆ど食べ終わったみのり。対して、さくらの弁当箱にはまだおかずやご飯が結構残っている。

「それもそうね」

慌てて食べるのを再開するさくらの耳に、校内放送が入ってくる。放送委員会の女子が、十月に行われる後期生徒会役員選挙について話していた。しかし教室中騒がしいので、具体的に何を言っているのかいまいち分からない。

「そっかあ。もう後期の選挙があるのかあ。まあ、生徒会長は御影要でほぼ決定でしょうね」

最後の一口を食べ終え、ほのりは弁当箱を片付ける。御影要というのはさくら達と同じ二年生の男子で、一年の頃から生徒会役員の

活動をしていた。

「掲示板見る限り、生徒会長に立候補している人は御影君だけだしね。他の人がこれから立候補する様子も特に無いし……」

「ま、あの真面目だけが取り柄の堅物優等生君に任せておけば問題ないでしょう。あいつは学級委員か生徒会役員をやっていないと死んじゃう病気にでもかかっているのよ」
と言つて、大きなあくびを一つ。

「櫛田さんと御影君は幼馴染なのよね」

「家が近いからねえ。まあ小学校低学年位までは一緒に遊んでいたかなあ。……でも小さい頃から堅物君でねえ、あいつと遊んでいると疲れたわ、本当。ごっこあそびの設定にまでツッコミを入れてきてさ。それは現実的じゃないとか、そんなこと出来るはずが無い、とかそんな星は無い、とか夢のないようなことばっかり言つて……」

「御影君らしいわね……」

とさくらは苦笑いする。何故かほのりはにやりと笑う。

「あの時は私や、他の友達が主な被害者だったけれど。今一番被害を受けているのはサクよねえ？」

「そ、そんな被害だなんて」

「あれを被害と言わずに何と言う。他人の会話に首を突っ込んできた拳句、ブリザードワードを連発し、空気を悪くした後去っていく。あいつは空想とか、非現実的な物を好むサクにとっては天敵みたいな存在よね」

天敵って、大げさよと言う一方心の中ではひっそりと「そうかも
しれない」とさくらは思った。

（御影君はどうも私のことを嫌っているらしい。すうつと会話に入
り込んできて、私の言葉を全て否定して、そして嵐のように去って
いく……）

さくらは彼のことを決して嫌ってはいない。しかし若干苦手に思
っている。

どう答えればいいのか分からず困惑しているさくらを見て、ほの
りはため息をつく。頬杖をつきながら何事か呟いているようだった
が、さくらには何と言っているのか聞こえなかった。

さくらはその後急いでご飯を食べ終え、借りていた本を返したい
というほのりと共に図書室へ行った。

*

東雲高校の図書室は、あまり大きくない。三つ葉高校のようなセ
キュリティゲートも無く、図書ノートに借りた本の名前、日付、学
生番号と名前をいちいち書かなければいけない。本も新しい物はあ
まり入っていない。校舎の端っこにはぼつんとあり、室内も地味で床
に敷かれているカーペットからは独特な匂いがする。しかし三つ葉
高校の図書室が、開放感がある代わりに周りの音が聞こえてきてう
るさく、いまいち落ち着かない空間になっている一方で、東雲高校
の図書室は心が落ち着く、静かな空間となっている。

がらがら、と戸を開けるとカーペットの臭くは無いがちょっと妙
な臭いが鼻の中に侵入する。テーブルには本を読んでいる人、自習
をしている人が数人居る。

「あら、新刊が入っているわ。……あら素敵、面白そう」

さくらの目に留まったのは、日本の中ではそこそこ有名な作家の

新作だった。

「ある学校には森があり、その森の奥にはおしゃれな家がある。ここでは定期的に放課後お茶会が開かれており、幾人かの生徒が招待される……自称魔女の女性に、うさぎの被り物をしたタキシード姿の男の人、背中に翼に似た模様がある猫達が登場……オニムバス形式の作品。面白そうだわ」

「いかにもサクが好きそうなお話ね」

「ええ。私これを借りることにするわ。学校に森があつて、そこでお茶会が開かれる……素敵だわ」

「君は相変わらずそんな夢物語が好きなんだね」

本を抱きしめるさくらと、肩をすくめるほのりの背後から、体にくさりと突き刺すような冷たい上に鋭い声が聞こえる。さくらはその声にぎくりとし、恐る恐る後ろを振り返る。

そこに居たのは、御影要であった。

さくら程では無いがややクセのある髪、吊り上がる眉、目を浴びる氷の如く輝く瞳、黒縁眼鏡。第一ボタンまできっちり留めてあるブラウス。当然のことながら、裾はズボンの中に入っている。

要はまるで憎き仇でも見るかのような目で、さくらを睨みつけていた。さくらはその剣幕におされ、一步後ずさる。

「うさぎの被り物をした男にお茶なんて出されたらたまったものではないな。そんな奴、十中八九危ない人だ。猫の背中に翼に似た模様が？ だから何だっというんだ。たまたま、何となくそう見える模様があつただけの話だろう。君は、背中についた模様の翼でその猫が空を飛ぶとも思っているのかい？ 馬鹿馬鹿しい。大体、生

徒達をどんな危険があるかも分からない森に入らせるなんて、その人達とんでもない神経の持ち主だ。放課後に茶会なんて始めたら、帰りは夕方、或いは夜だ。冬なら、帰る頃には真っ暗になっているだろうしね」

淡々とした口調で、次から次へと夢を叩き壊していく要。

「僕がもしその学校の生徒会長をやっていたら、即刻そのお茶会をやめさせるね」

「あんたねえ……。ったく、紙の上の物語にまでいちいち文句言わないでよね。ていうか、あたし達が何を読んでいようとあんたには関係ないでしょう」

「ああ、関係ないさ。ただ僕はそういう風に夢物語ばかり愛する、現実を見ない愚かな人間のことが嫌いなだけだ。そろそろ現実に目を向けたらどうだい。来年には受験生だというのに、全く……」

「あたしもあんたみたいに空気読まずに会話に割り込んでくるような奴って大嫌い。ねえ、サク」

話をふられたさくらはどう答えてよいものか分からず、おろおろしている。正直苦手です、とは言えないし、かといって嫌いじゃありませんと言っても信じてもらえないような気がして、答えに困る。要はその沈黙を肯定の意ととつたらしく、むっとしながら視線を逸らす。

「素敵な回答どうもありがとう」

明らかに不機嫌そうだったので、さくらはどうしようとおろおろする。が、ほのりは少しも気にしていないらしく小声で「馬鹿ねえ」と呟く始末。

「ま、こいつのことは放っておいて、本借りてきなさい」
ぼん、とほのりに背中を押されてさくらはカウンターへ逃げるように向かった。

カウンターに居たのは後輩の御笠環で、さくらが来るなり何やっているんですか、と呆れ気味に呟く。どうやら三人のやり取りを見ていたらしい。

「図書室では静かにして下さいよ。私語厳禁、火気厳禁です。……確かこの前もここで口論始めていましたよね。あの先輩、生徒会副会長の人ですよ。大体あの先輩から話しかけてきて、臼井先輩を口撃して、櫛田先輩がそれをたしなめるといっつか、彼の火に油を注ぐといっつか……」

「私、嫌われているみたいで。目を合わせる度あんな感じなの」
さくらはノートに名前などを書き込みながら、困ったような表情を浮かべる。余程私、嫌われているのね……と呟く。しかしその事実が彼女の心を傷つけることは、無い。美しい幻想を追い求め続けることが出来るのなら、誰に嫌われても構わないと思っているのだ。

(櫛田さんや御笠君、一夜や紗久羅ちゃんに嫌われたらちょっと辛いけれど)

ほのりは本を返却するついでに、新しい本を借りさくらと二人して図書室を出た。

「櫛田さんは何を借りたの」

「ん、ちよつと今書いている小説の参考になりそうな本をね。部誌に載せるやつのが構想がようやく出来てきてさ。まあ、別に大勢が見るものでもないけれど、載せるからには出来るだけちゃんとしたも

のを書きたいし。あたし、ざっくばらんなようで意外としっかりしているのだよ」

さくらはくすつと笑い、ああ確かにそうだと思った。ほのりは一見適当な性格に見えるが実はしつかり者で、細かいことにも気がつくタイプ。絶対やってやると思ったものに対しては妥協を許さないのだ。

教室に戻る頃には、要にブリザードワードアタックをされたことなどすっかり忘れていた。早く本を読みたいという思いが、そんなことなどあつという間に吹き飛ばしてしまったのだ。

「あの馬鹿も可哀想に」

「あの馬鹿？」

「うっん、こっちの話」

ほのりがどうしてそんなことを言ったのか、意味が分からずさくらはきよとんとする。

その意味をさくらが知ることになるのは、大分先のことである。

*

放課後、部活が終わり皆と別れたさくらは、昇降口を出たところで立ち尽くしていた。

今日は朝から雨であり、夕方になって更にそれが強くなっている。勿論さくらは傘を持ってきており、それを傘立てに入れていた。

ところが、だ。

何度探してみても自分の傘が見当たらないのだ。誰かが間違えたのか、或いは……。

(朝はそんなに降っていなかったし、傘を持ってこないで来た人が

居たのかもしれない。……きつと盗まれてしまったのね)

折りたたみ傘をカバンの中へ入れておけばよかった、と後悔する。

(けれど、困ったわ。どうしましょう。こんな雨の中流石に傘もささずに歩きたくないわ。そりゃあ確かに自然の恵みを体で感じ取ってとても素敵なことだけれど……帰った後が大変だし。一夜を待ち伏せして傘に入れてもらおうかしら。けれど一夜が家を出た時つて雨が殆ど降っていないなかっただろうし……もしかしたら一夜も持っていないかも)

珍しく腕を組み、うーんどうしましようと考え込んでいたさくらの肩を誰かが叩いた。びっくりして振り返ると、そこにはいつも通りむすつとした顔をした要が立っていた。

「……傘、忘れたのか」

「あ、いえ、その……誰かに持っていていかれちゃったみたいで……」
鋭い目で睨まれ、息が詰まる。また何か嫌味でも言われるのではないかと思ひ萎縮した。出雲のそれとはまた違う冷たい視線が突き刺さる。

しかし要の口から飛び出してきたのはブリザードワードなどではなかった。

「これ、使って」

そう言っただけが差し出したのは黒い傘だった。さくらは驚いて目をぱちくりさせる。

「え、でも」

「僕はいつも鞆の中に折り畳み傘を入れているから、そちらを使う

よ

さくらは要の申し出に喜ぶ反面、親切心で声を掛けてくれた要にびくびくしてしまったことを少しだけ申し訳なく思った。

差し出された傘、受け取らぬ理由などどこにもない。さくらは要からゆっくりと傘を受け取る。少し手が触れた瞬間要が何故かびくつと体を震わせる。さくらはそのことに気づかないまま、暖かな笑みを浮かべた。

「ありがとう、御影君」

笑みと共に素直に感謝の言葉を述べる。途端要の体が強張り、心なしか頬が赤くなる。しまいに視線を逸らしてしまった。

それじゃあ、とぶっきらぼつに別れを告げると折りたたみ傘を広げてさっさと行ってしまふ。

「本当に有難う」

雨に負けない位の声をあげ、改めて礼を言う。そしてさくらも借りた傘を広げて歩き出し、家へと帰っていった。

*

家へ帰り、夕食までの間自分の部屋で宿題をする。大した量ではなかったたので、それはすぐに終わり、本を読み始める。今日の昼休みに借りたあの本だ。

幻想的な表現や単語、固さのない柔らかかで心地の良い文体、優しく暖かな内容……何もかもさくらの好みだった。あつという間に物語の世界に入り込み、想像の旅へと出かけていく。さくらは素敵な作品に出会えて良かったと幸せな気持ちでいっぱいになった。

じゅん、じゅん。

何かを叩く音が聞こえた。想像の旅へ出ている最中だったさくら

は最初「きつつきが木をつついてるのだ」などと思っていた。

その音が何回か続くうち、ようやく自分が今居るのは家の中であり、美しい森の中ではなかったことを思い出す。旅を一時中断し、顔をあげる。音は部屋のドアからではなく、窓から聞こえた。

さくらは窓にやり、えつと驚きの声をあげる。

窓の外に、人が居た。しかも見慣れぬ人間だ。

歳は自分と同じ位の男性で、白いパーカーを着ている。髪は黒いがところどころ明るい茶色が混ざっていた。そんな男の人が窓に張りついていれば、さくらでなくても驚く。

しかもその男は両手に大量の傘を持っていた。どうやら玄関上部についている屋根の上に立っているようだ。

（何で傘を持った男の人が……。というかここ、二階よね。あの数の傘を手にしたままここまで上ってきたの？ 誰にも気づかれず？

そんなこと普通の人に出来るかしら）

もしかしたら『向こう側の世界』の住人だったのかもしれない。そう思ったさくらは、思いきって窓を開けた。普通の人なら絶対開けず、家族に助けを求めるなり、警察に通報するなりするのだが。

「ああ、良かった。やっと気づいてくれた。いやあ流石に大変だったよ、これだけの傘を持つてくるのは」

「貴方、誰なの？」

恐る恐る聞いてみるが、男はにこにこ笑うだけだった。敵意や害意がないことは確かなようだったが、気味が悪い。

「ほら、これ。君にあげるよ」

と明るい声で言い、戸惑うさくらに大量の傘を押しつけた。思わ

ず受け取った傘は十本以上はあった。何が何だか訳が分からずぼかんとしていると、男は目をぱちくりさせ、首を傾げた。

「あれれ、嬉しくないの？」

「一体、これ誰の傘なの。貴方は誰なの？」

「嬉しくないの？ おかしいなあ……」

「だから、貴方は」

男はさくらの言葉に耳を貸そうとしない。急に表情が暗くなり、がっくりと肩を落とす。何でだろう、どうしてだろうと小声でぶつぶつ呟いているのが聞こえる。さくらもどうすればいいのかわからず、おろおろする。兎に角男から渡された傘を返さなければ、そう思った途端、男の表情がぱっと明るくなった。

「そっかあ。さっきのやつみたいなのがいいんだね。ちょっと待っていてよ、必ず同じような物を見つけてみせるからさ。それじゃあ、またね」

男は立ち上がり、くるりと背を向けたかと思うとさくらの制止も聞かず、背中に翼でも生えているかのように優雅に、そして軽々屋根から塀へ飛び移り、あっという間に消えていった。

残されたのはぼかんとその場に立ち尽くすさくらと、誰の物かも分からない傘だけだった。

(ど、どうしよう。困ったわ。必ず同じ物を？ 何のことかしら。よく分からないけれど、また来る……のよね。けれど、どうして……?)

*

次の日、曇り空ではあったが雨はすっかり止んだ。さくらはもやもやした気持ちが消えぬまま、目を覚ます。処分に困ってとりあえず置いている多くの傘。その辺りだけ異様な空気を漂わせている。

一体あの男は何者なのか。調べたい気持ちは山々だったが、手がかりは無いし、学校だってある。夏休みほど好き勝手に動けないのだ。さくらはそれを酷くもどかしく思ったが、どうしようもない。

制服に着替えて一階に下りると、気難しい顔をして唸っている母と目があつ。

「どうしたの、母さん」

「ああ、さくら。おはよう。いや、それがね……傘が」

傘、という言葉にさくらはどきりとした。同時にとても嫌な予感がした。

「傘が五本……塀に立てかけてあったの。しかも塀の外、じゃなくて塀の中に。誰かが夜中に勝手に入ってきて、置いたみたいなんだけれど」

曰く朝起きて庭に面した窓のカーテンを開けたら、黒い傘が塀に立てかけられているのを見たとか。

(きつと、昨日のあの人だわ。けれど、どうして……)

昨日の出来事を話すわけにはいかないから、結局「気味が悪いわね。誰かの悪戯かしら」とだけ言ってご飯を食べ、家を出た。

一体何なんだろうと色々考えながら歩いていたので、丁度塀から降りてきた猫とぶつかりそうになる。猫はじつとさくらを見てからあつという間に立ち去った。

(あの猫、昨日犬に襲われていた子に似ているわ。ああ、それにしても可愛いわね、猫)

そして再び書齋と猫の妄想で頭をいっぱいさせ、結局今度は電信柱にぶつかるのだった。

*

借りた傘は丁度下駄箱に居た要に返した。彼は相変わらずにこりもせず、むすつとした顔で傘を受け取った。

「そんな礼を言われることじゃないよ。……困った人は見捨てておけないだけだ。例え相手があのお口だけは達者な櫛田だったとしても、僕は傘を渡しただろう」

「ええ、分かっているわ。本当に有難う。おかげで濡れずに済んだわ」

そう、とだけ言って要はさくらから離れる。要とさくらが話しているのを見ていたほのりは妙ににやにやしなから、ぽんとさくらの肩を叩く。

「どうしたの？ 随分仲良さそうに話していたじゃない」

「ああ、傘を。昨日御影君から借りた傘を返したのよ。彼、優しいのね。嫌っている私にも傘を差し出してくれるのだから」

「あはは、まあ意外とお人よしだしねえ、あいつは。まあ他にも理由はあると思うけれど」

「え？」

「何でもない、こつちの話よ」

*

部活が終わるまで、特に変わったことは起きず、男と会うこともなかった。

何故あの男は傘にこだわるのか。そして何故傘をさくらにあげようとしているのか。

靴箱に上履きを入れ、靴をとりだす。

（私はあの人のことを知らない。けれどまるであの人は私のことを知っているかのようにだった。さっきのような物って何かしら。さっき、という言葉を使っていたからにはつい最近のことを指していたのだと思うけれど。傘、傘……）
考え込んでいた時、さくらは今日の朝庭に立てかけられていた傘のことを思い出した。傘の色は全て黒。そして大きさも同じ位で。

「御影君から借りた傘……」

要から借りた傘の色は、黒だった。

（けれど、どうして……？）

靴を履きかえようとしたさくらだったが、出入り口の方を見た途端、その場で立ち止まった。

昨日の男が、そこに立っていたのだ。服装も昨日と同じで白のパーカー。フードを被っている男はさくらの姿を見てはあっと明るい表情を浮かべた。

下駄箱に居たのはさくらだけではない。他の生徒も数人居た。だが彼等は男の存在に全く気づいていない様子。どうやら彼の姿はさくらにしか見えていないらしい。

「ここで待っていたらきつと君に会えると思って。昨日ぶり……あ、違う。今日の朝にも会っていたね、そういえば」

朝？さくらは首を傾げる。少なくともさくらには彼を今日の朝見かけた覚えはなかった。見かけていたら声をかけるなり、追いかけたなりしていたはずだ。

「ねえねえ、今日のはどうだった？ 本当はさ、直接君に渡したかったんだけど。君、寝ていたから。適当な場所に置いておいたんだ。今度は喜んでくれるよね？」

期待に満ちた眼差しをさくらに向け、彼女の答えを待つ。

「あの無愛想な男に貰った時、とっても嬉しそうな顔をしていたもんね。ありがとって言つてさ。あの時君には僕の姿は見えていなかっただろっけけれど……あの時実は、僕、居たんだよ」

「え……」

確かにさくらは要から傘を借りた時、微笑みながら礼を言った。それは彼の優しさに対する感謝の言葉。

ところがどうやら目の前に居る男は「ありがと」の意味を微妙に履き違えているようだった。彼は恐らくさくらは黒い傘が好きで、それを要から貰った（実際は借りただけ）から嬉しくてありがとと言ったのだ、と思っている。

「あ、あの、あのね。私は別に傘が好きってわけじゃなくて
男がきよとんとする。」

「その……あ、ええと。ここだと人が居るから……別の場所で話し

ましよう?」

恐る恐る彼を手招きする。すると彼は驚く位素直にかけてきて、さくらについてきた。

さくらは「忘れ物をした」と言っつて部室の鍵を借り、殆ど人が通らない場所にある部室へと向かう。その間男は校内を興味深そうにきよるきよる見ている。

途中教師や生徒達とすれ違つたが、矢張り男の存在には気がついていないようだった。それが分かつていてもさくらは「もし誰かに見つかつたら」と思つと気が気でなく、終始はらはらしていた。

部室の鍵を開け、部屋の中に入る。そして扉を閉めるとほつと安堵のため息をついた。

「それで、どうだった? あの傘、気に入つてくれた?」

さくらが先程「傘が好きつてわけではない」と言つたことをもう忘れている様子で、彼女に詰め寄る。

「あのね、だからね。私は黒い傘……というか傘全体 が好きつてわけではないの。あのまま行けばびしょ濡れのまま帰るところだった私に、手を差し伸べて助けてくれた御影君の優しさが嬉しくて、それでありがとうといったのよ。だからね、あんなに傘を貰つても……困るだけなの。それにあれ、他人の物でしょう? 他人から盗つたものを貰つても、少しも嬉しくないのよ」

男はそれを聞くと、残念そうにうなだれた。

「何だ、そうだったのか。……ああ、残念だなあ! 僕、君に喜んでもらいたくて、笑つてもらいたくて……ありがとうつて言つてもraithなくて、それで、そこら辺にあつたやつを拝借したのに」

徒競走でビリになつた子供のように落ち込む男に、さくらは優し

く語り掛ける。

「ねえ、どうして貴方は私に喜んでもらいたかったの？ 貴方は誰？」

「君は昨日、久々に『こちらの世界』へ来た僕を助けてくれようとしてくれた。正直、あんな奴僕の敵ではなかったんだけれど……それでも嬉しかったんだ。まあ君は僕を助けようとしたせいで思いきり転んで、怪我しちゃったんだけれどね」

「助けた……転んだ……」

そこまで話してもらって、ようやくさくらは理解した。

目の前に居るのは昨日犬に襲われそうになっていた三毛猫だったのだ。言われて見れば髪の色とパーカーの色は、その猫の毛色そのもので。

「君の優しさが嬉しくて、仕方が無かったんだ。兎に角、嬉しかった。だから君にお返しがしたかったんだ。僕を暖かい気持ちにしてくれた君を、今度は僕が暖かい気持ちにさせようと思った。けれど、どうすれば君が喜んでくれるのか分からなかったから、君の後を歩いていった。それで夕暮れ時、君があつた男から傘を貰っているのを見て。ああ、これだと思っただ。けれど、違っただね。ごめんよ、僕ってそっかしいからさ。早とちりばかりするんだ。おまけに、馬鹿だしね」

そう言って、照れくさそうに微笑む。

さくらは彼の、その心からの言葉を聞いて、心が温かくなるのを感じた。今まさに、彼の願いは成就したのだ。

「貴方、あの時の三毛猫だったのね。……貴方、男の子なの？」

三毛猫の殆どはメスだと聞いていたから、何となく気になってそ

んなことを尋ねてみた。男は「うん」と言っただけ。

「何か珍しいらしいね、すごく」

ええ、そうね。とっても珍しいわと言いながらさくらは微笑んだ。そして彼の頭を優しくなでる。男はびっくりして顔をあげる。

「ありがとう」

昨日要に見せたのと同じ微笑を浮かべ、心から感謝の言葉を述べた。

「どうして？ どうして、僕は、間違っていたのに」

「そうね。けれど、嬉しかったの。貴方の想いが、とても嬉しかった。方法はちよつと間違っていたけれど……。物とか、行為とか、そんなものは良いの。そういう風に心から思ってくれたことが、嬉しいの。だから、私はお礼を言うのよ。本当に、そう思っているのよ」

「本当？ 本当に」

「ええ、本当よ。ありがとう」

男はそれを聞くと、今まで以上の笑顔を浮かべさくらから離れ、やったあと両手をあげて喜んだ。さくらの言葉が嘘ではないことを感じ取ったからこそ、彼は心の底から喜んでいられるだろう。

「そうか。うん、うん。良かった。ああ、とっても今気持ちがいいな！ 嬉しいな、嬉しいな。……あ、君にあげた傘……後で元の場所に戻しておくね。君を困らせたくないもの」

「そうしてもらえると嬉しいわ。そういえば貴方、名前は何というの？」

「名前なんてないよ。必要なかったし、あっちの世界でも名前なんてなくても困らないしね」

「それじゃあ、私がつけてあげようか」

「本当！？ ありがとう、僕、君のこと大好きだ！」

男は感極まったのか、さくらに勢いよく抱きついてくる。さくらは驚いたが、恥ずかしいという気持ちには不思議とならなかった。相手が猫だということが分かっているからだろう。

さくらは微笑み、彼の名前を呟いた。

「ユウ。優やさにしましょう。優しいって意味よ」

「ユウ、ユウか。うん、有難う。なかなか良い名前だ。というか君からもらった名前なら、きつとどんなものだって良いものだと思うだろう。あ、そういえば君の名前を知らないや」

「私はね、さくらっていの」

「さくらか！ うん、覚えた。さくらだね！ さくら、また会おうね。僕は君のことが好きだから、何度だって君に会いに行くよ。それじゃあね、さくら」

そう言うときくらの返事も聞かず、部室の窓を開け、そこから一気に飛び降りた。相手が妖で、ちつとやそつとのことじゃあ死なないということが分かっている、心臓が止まりそうになる位衝撃的な光景だった。

さくらは再びユウと会う日を楽しみしながら部署を出、家へと帰っていった。

第四十四話・月夜の宴（1）

『月夜の宴』

真珠と金剛石、青玉を混ぜた様な月が頭上に浮かんでいる。漆黒に近い夜空。

その月を美しく飾るのが金銀の星。うつすら漂う雲はヴェールに似ている。

さくら、紗久羅、一夜、奈都貴の四人は桜山の麓　桜山神社の前に居た。

山は黒く、人の影より濃い色をしているように見える。虫の歌声に合わせるかのように、ざわざわと草木が揺れた。入り口にある鳥居が、訪れる者を飲み込もうと大きく開けている口の様だった。

「何か夜の山って気味が悪いよなあ。近くに建物とかも殆ど無いから余計にさ」

目の前の山を眺めながら、紗久羅はポケットに入れていた通しの鬼灯を取り出す。他の三人も同じように鬼灯を手を取った。

優しい温もりが手に伝わるのとほぼ同時に、景色がさあっと変わる。

無数に立ち並ぶ、季節はずれの桜の木。尋常では無い数の鳥居、青く揺らめく炎を孕む灯籠。異質なそれらが紡ぐのは、息が詰まるほど恐ろしく美しい幻想。

出雲曰く、この道は『こちら側』にも『向こう側』にも属さないのだという。

ここで通しの鬼灯を落としてしまうと、この恐るべき『道』に閉じ込められて出られなくなってしまうとか。

そんな場所に長居などしたくはない。四人は気持ち早足で、長い石段を上っていく。体力のないさくらだけは異様に遅く、一夜は時々心配そうに後ろを振り返る。

上り終えた先にある満月館。紗久羅が扉の傍らにある呼び鈴を鳴らす。しばらくして出てきたのは、鈴だった。

「……来た。……出雲を呼んでくるから、中でちょっと待っていて」
四人の来訪を喜ぶわけでもなく（どちらかといえば嫌そうだ）小聲でそう言い、さつさと背を向けて二階へ行く。相変わらず無愛想な奴だと悪態をつく紗久羅と、苦笑いするさくら。

奈都貴はこの満月館に来るのは初めてだったらしく、辺りをきよろきよろ見回していた。

「なつちゃんはここに来るの初めてなんだ？」

「ああ。……小学五年の時以降、こつちの世界には来ていないからだから、あの『道』を使うのも初めてなんだ。びっくりしたよ、本当。お化け通りから入った時はああいうの、なかったから。境界はあったんだろうけれど、あの時は夢中だったから変化にも気がつかなかったし……」

「多分他にも、ああいう『道』が幾つかあるんだろうな」

そう言う一夜の傍らで、ほわわんとした表情を浮かべているのは、さくらだ。相変わらずしゃれっ気のカケラも無い服を着ている。今の女子らしい格好をしている紗久羅とは大違いだ。男子である一夜や奈都貴の方がまだおしゃれである。しかしさくらはそんなことを微塵も気にしていない。

「きつとこの町、あと三つ葉市や舞花市にはそういう『道』が沢山

あるのでしょうか。通しの鬼灯を使えばどこに『道』があるのか、調べる事が出来そうね」

「やる気が、お前」

「だって楽しそうじゃない。それをまとめてマップでも作るうかしら」

「さくら姉……」

紗久羅と一夜はそれを聞いて、思う。

(やるなら一人で勝手にやってくれ。絶対あたし達(俺等)を巻き込むなよ……)

「面倒臭くないかい？ そういうの。私は絶対やりたくないなあ」
いつの間にか来ていた出雲はさくら……ではなく、紗久羅に後ろから抱きついていて。紗久羅は奇声を発し、一夜と奈都貴はその声に驚き、さくらは暢気に「あら」と一言。

「カキ氷を服の中に入れられたかと思った……くそ、いつまで抱きついてるんだよ、さっさと離れるこのセクハラ野郎！」
手を振り回して暴れる紗久羅から、出雲は舞うようにして離れる。その顔にあるのは人をイライラさせるような笑みだった。

「相変わらず可愛いなあ。美しい月より、やっぱり君を愛でる方が楽しいよ」

冷たくも艶のある声で言われ、紗久羅は体中が熱くなるのを感じる。心臓が月で跳ねるうさぎのようになる。直接言われていないさくらですら、どきりとした。体に直接入ってくるようなその声の艶かしさは半端ない。

言い返すことも出来ず顔を真っ赤にしているさくらを見て、出雲は満足気な表情を浮かべる。紗久羅は兄である一夜の後ろに隠れながら、敵たる出雲を威嚇した。しかしそんなことをしたところ出雲が怯むはずもない。むしろ、その状況を楽しんでいる。

出雲と紗久羅の間に挟まれる形となつた一夜がわざとらしくため息をついた。

「まったく毎度毎度飽きないなあ、お前達。それよりさつさと、何とか京つてところへ行こうぜ。そこで開かれる月見会に参加するんだらう?」

そう。四人がわざわざ夜になってから満月館へ来た理由はそこにある。

お月見をしよう、と出雲が言い出したのは昨日のこと。いつも通り店番をしていた紗久羅の前に現れた彼が、まず彼女にその話をした。紗久羅は学校帰り店に寄つたさくら、部活帰りの一夜にそのことを伝え、更に奈都貴にメールを送つた。

さくらは嬉々としてその誘いに乗り、一夜は「まあ夜なら部活ないからいいか」と承諾。奈都貴も「次の日休みだし、行こうかな」と返答した。

「そういえば、さくら姉とあたし達は一晩中あつちに居ても問題ないけれど、なっちゃんは大丈夫なのか? 帰り、朝方になるって話だけれど」

「ん? 大丈夫だ。多分……九段坂先生がくれた札の術が上手く作動していればの話だけれど」

奈都貴は若干不安そうだ。九段坂英彦は優秀な化け物使いのようで、不得手な術もそこそこなすが、必ず完璧に出来るというわけではない。どういう術かは分からないが、失敗していたら大変なこ

とになる。

まあ、もしも何かあったら私がどうにかしてあげるよと出雲。

「とりあえず後のことは気にせず、月見を楽しもうじゃないか。…今日行くのは『麗月京』だよ。ここは非常に珍しい京なんだ」

出雲は入り口の真向かいにある壁まで歩き、その前で止まる。そして以前翡翠京へ行った時と同じように、障子の絵が描かれた紙を貼る。舐めて濡らした指ですうっと紙をなぞる。なぞられた部分は黒く変色し、やがて『麗月京』という文字が出来上がった。

ぼん！という音と共に本物の障子が現れる。それを初めて見た奈都貴は随分驚いているようだった。そんな彼に、紗久羅がこの障子がどんなものであるのか説明をする。

「それじゃあ、行こうか。幻の京、麗月京へ」

出雲が障子を開ける。鈴は満足そうな表情を浮かべながら、出雲と手を繋ぐ。

*

障子を開けた先に広がっていたのは、非常に美しい光景だった。出雲が使った道具で行ける場所に立っている柱は、水晶だった。貝の内側の様に、白や紫、青や黄に輝いている。そこに青いガラスのようなもので幾何学的な模様が描かれていた。

道の両脇には木々が立ち並ぶ。その木には何か光る実のようなものがついており、その光は通しの鬼灯と同じく淡い橙色だったり、蛍の光のような緑がかった黄色だったり。

「すごく綺麗……」

「クリスマスツリーとかとはまた違うな」

「そうね。ツリーについているのは人工的なものだけれど、この木についているのはそういうものではなくて、自然のものみたい」

出雲の後ろを歩きながら、さくらと紗久羅が感嘆の声をあげる。その木についている実が道を照らしているから、安心して歩くことが出来る。

進んだ先にあるのは大きな湖。そこには光り輝く橋がかかっていた。その輝きはとても眩しく、柱と同じように様々な色をしていた。綺麗に磨いた貝を敷き詰めて作ったかのような橋が、さくらの幻想に焦がれる心をくすぐる。ふと足を止め、橋の光に照らされている湖を眺めた。

水は一点の曇りもなく、透き通っている。色は瑠璃色。出雲曰くこの湖は『瑠璃湖』と呼ばれているらしい。紅玉の如き金魚、翡翠で作られたような鱗を持つ魚、泳ぐ真珠と呼ぶべきだろうもの等が泳いでいるのが見える。この湖は、美しい宝石を沢山入れた宝石箱の様だとさくらは思った。

「素敵。この世のものとは思えない……」
色々言いたいことはあるが、あまりに素晴らしすぎて何も言えない。

感心しながら眺めていた奈都貴が、出雲に問いかける。

「そう言えば出雲、さっきこのことを幻の京って呼んでいたけれど、あれってどういう意味なんだ？」

美しい湖など目もくれず歩いてきた出雲はその場で立ち止まり、後ろを振り返る。橋の光を受けた髪は、月光によってライトアップされた藤の花の様。

「……ああ。ここは特殊な場所だね。普段は『閉じられて』いて、来ることが出来ないんだ」

「閉じられている？」

「そう。隔てられ、閉じられている。そういう場所はここ以外にもあるのだけれど……。一定の条件を満たさない限り、入ることも見ること出来ない。普段はあの紙に『麗月京』と書いても扉障子は現われない。結局緑の炎に焼かれ、紙は消滅してしまう」

「それじゃあ、何で今回は入れたんですか？ 条件を満たしているからですか？」

さくらが手をあげながら質問すると、出雲がゆっくり頷く。

「ここは、一定の期間だけ開かれるんだ。毎年この時期にね。期間としては三日位だったかな？ その間は自由に行き来することが出来る。それでもって、月見会と称した宴を開き、訪れた者達をもてなしてくれるんだ。……ちなみに再び世界が閉じられるまでに帰らないと、約一年の間帰ることが出来なくなる。過去に帰りそびれた妖が居たらしいが、一年間非常に気まずい思いをしたという」

まあ私達は一晩ここに居るだけだから、そういう事態に陥ることはないだろうと出雲は付け加えた。

そうして話している間も、五人の横を様々な妖達が通り過ぎていく。彼等は人間である紗久羅達を物珍しそうに見ていた。中には鬼灯夜行の時紗久羅を見かけた者も居たらしく、あの娘が又来ているぞ、今時珍しい人間も居たものだ……などと話しながら歩いているのを紗久羅は見た。

「ここに住んでいる者達は、元々月の民だったらしい」

月の民、という単語にさくらのメルヘンセンサーが反応する。

「月の民……月から来た、ということですか？」

「真実は分からないけれどね。ここに住んでいる人達は、あまり自分達のことを話したがらないから。けれど、彼等が人や妖、精霊や神……どれにも属さない存在であることは確かなようだ」

「月から来たってことは、宇宙人か？　だとしたらまあ、どれとも違う存在だなあ」

一夜は頭でつかちで、青い体に緑色の目をした生き物を想像する。この雰囲気とは全然合わないなあ、と思いながら。妹である紗久羅も、似たようなことを考えていた。

「……何故彼等が元住んでいた場所を離れ、ここへ来たのかも分からない。まあ、この世界を乗っ取る為に来たというわけではなさそうだけれど」

「ふうん。……征服する為に来たとしたら、SF映画のようなことになるんだけどな。ま、平和が一番だよな」

「そういうこと。私達は君達と違って、無意味で無益な争いは好きじゃないからね。さ、そろそろ行こうか」

全員頷き、先へと進む。

橋を渡った先には円状に背の高い木々が並んでいる。葉は白、桃、緑、黄、青と一秒おきごとに違う色に変わっている。葉によって色の順番は違うようだった。

その木々の向こう側には立派な屋敷がある。屋敷は黄金に　と　いつてもきんきんぎらぎらとした色ではなく　焼く前のホットケーキ生地のような色に輝いている。月光の様な、優しい色。

入り口には大きな鳥居がかかっている。ここをしばらく歩けば宴のある広場へ着くと出雲は言う。葉が光を持つている上に、月が明るく照らしてくれている為、楽々歩ける。うるさすぎない明るさが心地よい。

抜けた先には、巨大な広場。空に浮かぶ月は大きく、手を伸ばせば触れられそうだった。

広場にはござが敷いてあり、そこに多くの妖が座って飲み食いしていた。紗久羅は鬼灯夜行のことを思い出す。さくらは夢にまで見た光景に恍惚の表情を浮かべ、一夜と奈都貴はぼかんとした。

「さあて、月見だ月見。ここの食べ物はなかなか美味だから、楽しみだねえ」

「……ここの魚、美味しいから、好き」

鈴の声は弾んでいた。余程美味しいのだろう。

「って頭の中は食べ物のことだけなのか……」

呆れた奈都貴がツッコミを入れるが、二人は少しも気にしていない風だった。

「そりゃあ、そうだろう。月なんて毎日飽きるほど見ているのだから。わざわざ首を痛めながらじつと眺める程珍しいものでもなし」

「お前、風情って言葉を知っているか？」

「そういう紗久羅だって、結局の所花より、月より団子だろう？」

出雲にさらっと言われ、紗久羅はうぐぐと答えに詰まる。

「食べ物が並んでいる場所がある。そこから好きなものをとってき

て、適当な所で食べよう。基本的に私達が出入りを許されているのは、この広場だけだから、他の所へは行かないようにね。……後、
輝夜宮かぐやぎゆう あの黄金色に輝いている建物 にも入らないように」

「とても立派な建物ですね。やっぱり、偉い人が住んでいらっしやるのかしら」

「どこの京にも、必ずああいう『宮』がある。この場合は身分の高い者が住んでいるようだね。通常は精霊や神と呼ばれる者達が住んでいるんだ。宮に住むのを許されるということは、彼等にとつては相当名誉なことらしい」

広場の奥へと進む間、多くの妖達が紗久羅達を見ていた。まるで珍生物でも見ているかのような目で、興味深そうに。さくら以外の人間は、なるべくそんな彼らと目を合わせないよう努めていた。

広場には透明な植物が生えている。葉と茎、そして蕾らしいものが見える。しかし花開いているものは一つも見当たらない。まだ花が咲く時期ではないのだろうとさくらは思った。咲く頃にはこの世界はまた閉じられ、隔てられてしまうのだろうと思うと酷く残念だった。

「本当、素敵。とても絵になる世界だね。ここで暮らせたら、どれだけ素晴らしいでしょう」

「ええ、ずっと居たら流石に飽きないか？」

紗久羅の言葉に、奈都貴が頷く。

「浦島太郎も結局竜宮城を出て故郷へ帰って行ったし……。こういうのは、たまに来るからいいんだと思いますよ？」

一応相手が年上だからか、語尾は丁寧だった。出雲もそれに続き

「その通り」と一言。

「その存在が当たり前になってしまっただら幻想は現実へと変わる。気づけば、現実だったものが幻想に変わっていく……。桜の花だつて、すぐ散るからこそ愛しい。……散つて欲しくない、ずっとそこに存在していて欲しい、と願う気持ちはまあ、分からないでもないけれど」

「それも、そうですね……。ああ、それでもやっぱり、心の中では願ってしまうわ。こういう所に住みたいって……」

願うだけ位の方が良いよ、きつとと出雲が返す。

輝夜宮の前に巨大な青いガラスのようなもので出来たテーブルがあり、その上に所狭しと様々な料理が並んでいた。海の幸、山の幸、お菓子、何だかよく分からないもの……。数え切れない位多い種類。飲み物も透明で巨大な瓶に淹れられており、丁寧にどんな飲み物であるか書かれたラベルが貼つてある。テーブルの端に透明な皿やコップ、箸、お盆が並んでいた。どれも触れるとひんやりした。

「すごい量。……結構あだし達世界にもある料理が多いな。何か不思議だよなあ。こつちの世界とあだし達の世界は全く別物のはずなのに」

「さあ？ 何でだろうね？ まあ、どうでもいいじゃないか。さあ好きなものをお取り。……ここに並んでいる料理は、人間が食べても多分大丈夫だろうから。もし食べてどうにかなくなってしまったら……まあ、骨だけは拾ってあげるよ」

「取る前に脅すなよ！」

皿と箸を手に紗久羅がきつと出雲を睨んだ。一夜と奈都貴はとり

あえず見た目安全っぽい物を優先して取るうと心の中で思った。

「安心するが良い。……毒などは入っておらぬ。誰が食べても問題無いものしか揃えてはおらぬ」

背後から落ち着いた女性の声が聞こえ、紗久羅達は振り返る。

声が出た方には美しい女が立っていた。銀に輝く髪に、青い瞳。腕や足を覆う白い衣は薄く、月光を受けて輝く白い肌が透けて見えていた。装飾品等のおかげで胸はかろうじて見えない。腰には赤くて薄い布が巻いてあり、後ろで固く結ばれている。

「人が来るとは、珍しい。……我が名は月島。この宴を仕切る者。思う存分楽しむが良い」

出雲以上に冷たく、感情の無い声。精巧に作られた人形と言われるても、誰も疑いはしなかっただろう。月島は特に人間である紗久羅達には興味が無いらしく、さっさとその場を去る。彼女の両脇には可憐な乙女が居たが、何も言わず軽くお辞儀しただけ。そのまま月島についていく。

「あの方が、月の民？ とても綺麗な人だったわ」

「まあ確かに綺麗な姉ちゃんだったな。けれど、すつごく冷たい感じがした」

「月の民にはそういう人が多いよ。滅多に表情を変えないし、無口だし。こうして妖達を宮に入れて、食べ物や飲み物を提供したり、楽を奏でてくれたりはするけれど、一緒に飲み食いしたり、話したりするということはまず無いね。からくりのように、ただ決められた作業を決められたようにこなすだけ。何か、大事なものが欠落している感じで」

「大事なものが欠落しているなんてお前に言われたらお終いだな」
紗久羅が嫌味を言う。欠けてはいけないものが欠けているのは出雲も同じだからだ。もっとも本人はそれを認めてはいないが。

出雲はそんな紗久羅の嫌味など全く聞いてはおらず、食べ物選びに夢中であつた。彼についている鈴木も心なしか楽しそうだ。

弄られるのも嫌だが、無視されるのも嫌だ。紗久羅はやや拗ねながら、乱暴に食べ物皿に移していく。さくらがそれを見て苦笑いする。そうしながら彼女も料理を選ぶ。あまり取り過ぎないようにしないと意思いつつ、見たこともない食べ物を目にするとつい取りたくなる。気づけばさくらの皿には見慣れない料理が沢山盛り付けていた。

「お前チャレンジジャーだな。よくそんなよく分からんものを取れるな」

冒険する気等毛頭無い一夜は、彼女の皿を見て呆れたような表情を浮かべている。

「だって、月島さんはどれも大丈夫だって言っていたし……折角だから、普段食べたことのないものを食べたいんですもの」

「あっそう。まあ、どっちでもいいけど」

しばらくして全員料理と飲み物を選び終える。後はどこかに座りながら飲み食いし、月を眺めるだけ。

「どこか空いてないかなあ……？」

きよろきよろする紗久羅の肩をぽんと出雲が叩く。

「その点はご心配なく。……場所取り役がきちんと仕事をしていれ

ばの話だけねど」

「それってもしかして……」

「あ、出雲の旦那！ 見つけた。やた郎が場所を取ってくれているよ。なかなか良い場所を取れたと思う。音紡をおんむすひ間近で聞けるんだ」
空から飛んできたのはやた吉だった。ああ、こういう時もこいつらはこき使われているのか……と紗久羅は心の中で同情する。

当然というか何というか……出雲は彼等をねぎらう様子無く、そこへ案内するよう命じる。やた吉も「ご苦労」という言葉など一切期待してないらしく、合点承知と出雲達をやた郎の居る所まで導いていく。

やた郎が居たのは、ステージのようなものが近くにある場所だった。幅は広く、高さはそんなに無いもので、赤い毛氈もっせんに覆われているもの。

(ここで音紡、というものをやるのかしら。多分、演奏会か何かよね……)

今の所何も置いていないそこを見ながら、さくらは思った。
正座をし、何も食べずに待っていたやた郎が微笑む。

「旦那、場所ここでいいよね？」

「ああ、悪くないね。さあさあ、皆座って。早速食べようじゃないか」

そう出雲に促され、紗久羅達は各々好きな場所に座る。やっと落ち着いたといった感じで、ほっと息が漏れた。これから、月見が始まる。

皆して手を合わせ、取ってきたものを食べ始めた。

第四十五話・月夜の宴（2）

*
「うん、これ美味しいな」

紗久羅が口に行っているのは、数種類の魚に酸味がきいたソースをからめたもの。魚は脂がのっけていて口の中ですぐとろける。だがソースのお陰でくどさをあまり感じない。

一方さくらは、黄色い粒の入った白い塊を手取る。お菓子のラムネのように持った感じは硬い。匂いを嗅いでみると、お米の匂いがする。

口に入れてみると、お米の香りが口の中いっぱい広がった。お米の旨みをぎゅっと凝縮させたようで、甘味も強い。黄色い粒の方は炒った木の実に似た、香ばしくて甘い味がした。主食やおかずというより、菓子に近いものだとかさくらは思う。

一夜と奈都貴も大方食べ物には満足している様子で、これまたおかわりしようとか何とか言っている。しかし仲には不味いわけではないが、口に合わないものもあった。

黒っぽいソースのかかった、豆腐の様なものを口に入れた紗久羅が奇声を発し、悶絶する。

「どうしたの、紗久羅ちゃん。大丈夫？」

「これ、すごい味がする。なんていうか、もう、色々強烈で……あと、お酒みたいな味もする。これ絶対つまみ用の料理だよ……」

さくらは紗久羅が強烈だといったその料理を試しに一口食べてみる。確かにすごい味がする、と目をぱちくりさせた。

「これ、沖縄の……ええと、豆腐ようだったかしら？ あれに似ているかも……この前父さんが同僚の方にもらったのを食べたことが

あつたけれど、確かこんな感じの味だったわ」

「ああ、それはかなり強烈だよ。匂いで分からなかったのかい？私もそれは苦手だから、代わりに食べるわけにはいかないなあ……まあ、紗久羅が私に抱きついて『お願いします食べてくださいにゃん』と言ったら考えてやらないでもないけれど」

乾燥させた、赤黒い色をした肉らしきものを根気もひもひ噛みながら出雲がそんなふざけたことを言う。当然紗久羅はその申し出を断った。

「それなら私が食べてあげようか？」

誰かが後ろから紗久羅に話しかけてきた。ねっとりとした、艶がある女の声。

後ろを振り返った彼女は悲鳴をあげる。つられて振り返った他の三人も同じように驚いた。

そこには女の首しかなかったのだ。白粉を塗りたくった肌、赤い唇、着物はわざとはだけさせており、形の整った鎖骨が見える。

紗久羅は彼女に見覚えがあつた。案の定、ここから大分離れたところに首から下 胴体があり、楽しそうに手を振っている。

「び、びつくりした。……あんた確か、白粉……だっけ？」

「おや、覚えていてくれたんだねえ。嬉しいよ。おやおや、新しい人間もいるじゃないか。本当、物好きが多いんだね、人間さんには……ん？」

白粉が話をぴたりとやめ、ある人物の顔をまじまじと見つめる。白粉が見ている相手は奈都貴で、彼にぐいっと顔を近づける。奈都貴は冷や汗を流しながら視線を思いつきりそらしていた。その様子を見て白粉が「あっ」と声をあげる。

「あなた、もしかして以前『鬼灯』に來た少年かい？ まあまあ、随分大きくなつて。良い男になつたじゃないか」

頬に唇を寄せ、にたりと笑う白粉。奈都貴はこくこく頷きながらも無言である。彼から発せられているこの人苦手オーラが半端ない。

「隣にあなたもなかなか良い男じゃないか？ え？ まあ、鬼灯の主人程では……ちょ、ちよつと、なんだい、あなた！」

一夜にまでちよつかいを出していた白粉が困惑と驚きのまじつた叫び声をあげる。見れば、ぐによりと伸びた首をさくらが興味深そうにぺたぺたと触っているのだった。一夜と奈都貴はそれを見てぎよつとする。

「ろくろ首さんの首がどうなっているのか、ずっと気になっていたの。骨はあるのかしら、ゴムのように柔らかくて弾力があるのかしらつてずつと考えていたの。気になりはしたけれど、本物のろくろ首さんに会ったことは無くて……ああ、でもやつと分かつたわ。こつういふ感じなのね」

そつう言つさくらの表情はとても幸せそつであつた。逆に白粉はいえ、初対面の小娘に馴れ馴れしく首を触られ、腹が立つやらどつう反応すれば良いやら。非常に複雑そつな表情を浮かべながらさくらを見やる。

「一体何なんだい、この小娘は。あたしを見て悲鳴をあげたり、間抜けな走り方して逃げる奴は沢山居たけれど、にこにこ笑いなながら首を無遠慮に触つてくる奴なんて初めてだよ！」

「ああ、その子の名前はさくら。ちよつと、というか大分変わった子だけれど無害だから安心おし」

「どこが無害だっというんだい？ あれ、そういえばそっちの小娘の名前も……」

「紗久羅だ。二人共名前がサクラなんだ。書く字は違うけれどね。まあ、今君の首を触っている方の子はサクと呼んでやっておくれ」

「そうかい……それは良いけれど……おい、あんた、いつまで触っているんだい？ あまりおいたが過ぎると、この首であんたの体を締めつけてやるよ！」

さくらに顔を近づけ、思いつきりすごんでみせる。しかしさくらは怖がるどころか、目をきらきらさせ、興奮し始めた。

「まあ、素敵！ 私一度ろくろ首さんに巻きつかれてみたいと思っていたのよ。勿論、苦しい思いをするのは嫌だけれど……でも、興味があるわ」

白粉はぼかんと口を開け、やがてため息をつくと逃げるように首を本体へ戻す。そしてすたすた歩いてきて、出雲達の座るごさに腰をおろした（さくらとは距離を置いて）。

その様子に出雲が感心したように頷いた。

「サクも、すごいねえ。ある意味。白粉を打ち負かせて大人しくさせてしまつとは。なかなか出来ない芸当だよ？」

「この白粉姐さんが、小娘に負けるなんて。一生の恥じだよ」
白粉はむすつとしながらさくらを睨みつける。さくらは相変わらずにこにこ笑っていた。出雲は苦笑い。

「で、君は一人なのかい？ それとも鬼灯の主人や柳と一緒に？」
それを聞いた白粉の瞳がうるみだし、情けない顔になった。

「鬼灯の旦那が居たら、わざわざこつちへちよつかいを出しになんかいかないよう。二人は今頃、紅都京で美味しいもの食べながらいちゃいちゃしているよ」

「……いい加減諦めればいいのに」

ずっと黙って透き通った身の魚を食べていた鈴がぼそりと呟く。それを白粉が聞き、彼女をきつと睨む。

「おだまり、ちび猫。恋をしたことなんてない小娘に、あたしの気持ちなんて分からないんだ。……ああ、今年こそはこの麗月京で鬼灯の旦那との時間を過ごしたかったのに。何だって、貉なんかと……」

「貉って……あのっぺらぼうの姉ちゃんのことだっけ？」

「そうだよ。全くあの娘、酔うと本当手がつけられなくなる。魚を指と指の間に挟んで、奇声をあげながらぶんぶんそれを振り回し続けてさ。指からぽおんと離れた魚が何度あたしの顔に当たったことか」

鈴は白粉を見ながら鼻をくくん動かし「……白粉の顔、魚臭い」と一言。悔しそうにこざに拳をたたきつける白粉。さくらはといえ、ここにのっぺらぼうも来ていることを知り、恍惚の表情を浮かべている。

「私、会ってみたいわ。のっぺらぼうさんに」

その言葉に、一夜が顔を歪ませる。

「お前本当物好きだな。そんな気持ち悪いのに会って何が楽しいんだ」

「あら、素敵じゃない。私本物の妖を見ることにずっと憧れていたんですもの。一夜は会ってみたいと思ったことはないの？ 本を読んでいると、ああこの人に会ってみたい、この食べ物食べてみたい、ここへ行ってみたいって思うでしょう？」

「俺は本なんて、国語の授業でしか読まないからな。全然分からな
いや」

「本は読むべきだと思うわ。素晴らしいのよ、本って」

その後いつものように本というものがどれだけ素晴らしくかという話に移りそうになったので、慌てて一夜は彼女の口へ甘く煮た栗を突っ込んだ。ものを食べながら話すことは絶対しないさくらだったから、少しの間だけ彼女を黙らせることが出来た。そうしている間に一夜は立ち上がり、食べ物をおかわりする為（ついでにさくらから逃げる為）にその場を離れた。

栗を飲み込んださくらは、今度は肉や葱、玉葱等が入った皮が黄色の饅頭を頬張る。具の旨みが凝縮された汁が口の中いっぱい広がった。少し独特な風味もしたが、またそれも癖になる。饅頭を食べながら、空を見上げる。

空を覆いつくさんとする月の美しさは、見事としか言いようが無い。
い。

（きつと、どれだけ科学が発達してもあの月のような美しいものを作ることは出来ないでしょうね。純粹な自然の美しさは、人の手では決して作ることが出来ない）

そんなことを思いながら月を見るさくらの視界を、白粉が顔で遮った。また首を伸ばしているのだろう。いきなりのことだったから、さくらはびっくりした。

「なんだい、そんなに月が珍しいのかい？ うつとりしながら見ていたけれどさ。月なんて、あんた達世界でも毎日見られるだろう？ いつでも見られるものを見るのに時間を割いたらもったいないじゃないか」

「滅多に夜、こうして外へ出ることは無いし……それに今夜はお月見をしに来たんですもの。こんなに素晴らしい月を見ないで終わりなんて、寂しいわ」

「そうかい？ 月見なんていうのはさ、こうして飲み食い騒ぐ為の口実じゃあないのかい？ 月見の時、本当に月をじっくり眺めている奴なんて、この世界には殆どいないよう」

風情とか、わびさびとか、季節の移り変わりを楽しむとか……そういうものは妖達にはあまり分らないらしい。彼等は毎日を楽しく、騒がしく、美味しいものを飲み食いしながら過ごすことが出来ればそれでいいのだ。実際、さくらは辺りを見回して見たが、月をじっくり眺めている者等一人も見当たらない。

それはそれで寂しいと感じる彼女の耳に、鈴の音が聞こえた。聞くだけで心が洗われるような、透き通った美しい音色。その音が、この美しい風景にとてもよく合っている。

その音を辿ってみると、一人の女性に行き着いた。出雲の髪に似た、藤色の髪。濃い紫の瞳は冷たく、何の温もりも感じられない。月光を受けて銀色に輝く、白い肌。月島同様、月の民であることは一目見て分かった。

その女性は手にすずらんのようなものを持っている。葉の部分は青色で、ガラスのように透き通っている。花の部分は銀色で、女が手を振る度愛らしくその花が揺れ、美しい音を出していた。

「綺麗……」

「あれで、この地の穢れを浄化しているんだよ。私達妖が沢山来ると、ここが穢れた空気で満ちるのだから。美しい風景を保ち続ける為、ああして月の民があ鈴を鳴らしながら一晩中歩き続ける。…全く涙ぐましい努力だよ」

「最後の部分だけ、全くと言っていいほど感情がこもっていないな……」

それを聞いた奈都貴がぼそり。聞こえない振りをして微笑む出雲。彼のその姿は、月を頭上に冠したことでより美しく、妖しく見えた。さくらは目を瞑り、鈴の音に耳を傾ける。ただ聞くだけで、体に溜まった汚れや、よく無いものを洗い流してくれそうだった。

紗久羅や奈都貴は鈴のことなどすぐ忘れ、学校のことなどを話しながらご馳走を楽しむ。奈都貴が今口に行っているのは肉と小さな白い花を挟んだもの。噛み応えのある肉に挟まっている花は大根のようになしやしやしきして、甘辛い味がした。例えるなら少し癖のあるねぎタン塩といったところだ。

一方の紗久羅が食べているのは淡い黄色の酢飯に色々な具を混ぜたもの。花の形をしたもの、一見青色や赤色をした石のようなもの、羽に似た形の葉、赤い花びららしきものなどが具。酢飯は程よい酸味で、とても良い香りがする。具は甘いもの、しょっぱいもの、苦いものが上手く混ざっている。

得体の知れないものも多いが、大抵の料理は美味しく食べられた。…勿論、自分の口に合わない品物も幾つかはあったが。紗久羅はもう少し色々な種類のものを試してみようと思った。

「ちょっと新しい料理、とりに行くこうかな」

そう言っ腰を少し浮かせたところで、兄・一夜の悲鳴の様なも

のが聞こえ、驚いた彼女は尻もちをついた。

「いてて……何だよ、いきなりあの馬鹿兄貴は！」

命の危機が迫っている……というような声ではなかったから、紗久羅は大して慌てることなく、悪態をついた。

「何だよ、お前等、うわ、ちよつとこつちに寄るなつての！」

見れば、一夜は二人の妖に絡まれている。

「げ」

その妖の姿に紗久羅は思わずそんな声をあげた。一人は上半身こそ美しい女だが、下半身は百足のそれであり、もう一人は巨大な肉の塊に百の目がついている。手は小さく短く、足は無い。

百の足を持つ女と、百の目を持つ（多分）男にぴたつと体をくっつけられ、一夜はとても迷惑そうだ。

「人間なんて、久しぶりに見たわ。今時の人間って、こついうものを着ているのね。着物とは似ても似つかない代物だわ」

と言つて百足女がシャツの裾を思いつきり引つ張る。ちなみにこの女、上には何もまもっていない。長い髪のお陰で胸は隠れているが、一応男である一夜は目のやり場に困った。しかし注意はしなければいけない。出来ることなら睨みつけたいが、首より下がどうしても気になってしまう。

百目男の方は小さな手で一夜のズボンをぐいぐい引つ張っている。

「あらあら。聞き分けの無い子供と、それを一生懸命どうにかしようとするお母さんみたい」

さくらはそんな暢気なことを言い、一夜に睨まれた。

「見てないで、助けるよ！ ああ、もう！ ちよつと、おい、ぺた

ぺた触るな！」

左手に料理を盛った皿を持ち、左手で百足女の白い手を自分から引き剥がそうとする。

「つれないねえ、いいじゃないの。あんなかなか良い体つきをしているね。よく動き回っている証拠だ。……肉は柔らかい方が好きだけれど、固いのも噛み応えがあって好きよ？ 残念だね。あんたが出雲の連れじゃなければ、一思いに食ってあげたのに」

「長い足、ふさふさの髪、がっちりした体。羨ましいんだな。おいらももっとこんな風に格好良くなりたいたんだな」

百目男の声はくぐもっていて、聞き取り辛い。そんな彼は百個の目をつるつるさせながら、羨ましげに一夜を見る。

「ああ、目目。私はこの子よりあなたの方がずっと良い男だと思っっているわよ？ 特にその右手のすぐ横についている小さい目が艶っぽくてたまらないわ」

その様子を眺めていた紗久羅、さくら、奈都貴は、視線を目目の右手近くにある目に素早く移す。しかし三人には他の目との違いが一切分からなかった。

「一白、目目。その位にしてあげ。……いじるなら、こっちの娘におし」

そう言っ出て出雲が指差したのは紗久羅であった。紗久羅はふざけるな！と出雲に食ってかかる。下半身百足の女と、体中に目がある化け物にぺたぺた触られたらたまったものではない。

一白と呼ばれた百足女は紗久羅を見て、興味ありげに笑いながら、内側にはね、頬を隠す髪を弄る。上半身だけ見れば大学生位の若い娘である。

「あら、可愛い女の子。貴方みたいな気の強そうな子って一番弄りがいがあるわよね。何か、こう思いつきり泣かせてあげたくなくなっちゃうというか。私、人間が泣き喚く姿を見るの、大好き」

(満面の笑み浮かべながらいう台詞じゃねえよ……)

紗久羅は背筋が凍りつくのを感じながら、心の中でツッコミを入れた。

「一白の言う通り。やっぱり人間は思いつきり怖がってくれないと、面白くないねえ？」

白粉は嫌味っぽく言いながら、さくらを見た。しかしさくらはその視線には全く気がついていない。何故なら彼女は、目を観察するのに夢中だったからだ。恥ずかしそうにしている彼をじっと見つめている。

「すごいわ。目が沢山……しかもそれぞれ、別々の動きをしているわ。瞬きもするのね。全ての目が同時に、というわけではなく、皆ばらばらに……。大きさは、私達の目より少し大きいかしら？ まぶたもついていて……。一重のものと、二重のものがあるわね」

熱心に観察をするさくらを、一白が気持ちの悪いものでも見ているかのような目で見た。妖の目から見ても、さくらは異様な存在であった。

「変わった子ねえ……普通女子供って目目を見ると悲鳴をあげて逃げ出すものなのだけね。こんなじっくり観察しだした娘は初めてよ、本当。それとも何、最近はこういう根性すわった子ばかりな訳？」

「そいつを基準にしないでくれ……」

「さくら姉は例外だよ、例外」

「やっぱり、そうよねえ……って何よ」

さくらは次に一白に目をつけた。どうやら人体部分と百足部分の境目が気になるらしく、その辺りをじいっと見つめている。

「その小娘の被害者がどんどん増えていくねえ」

さくらの一白へ向ける瞳を見つめながら、白粉が呆れたように一言。

「な、何よ……ま、全く気味が悪いわ。目目、行きましよう！ 白粉、あんたも一緒に来る？ 今広場の奥で、月魚つきなのひれ酒が振舞われているらしいのよ！」

一白は一刻も早くさくらの視線から逃れたいようであった。白粉は喜んでその誘いを受ける。それを聞いた一白は目目と白粉を連れて逃げるように立ち去っていった。

「……さくら。お前さ、ある意味すごい妖怪の被い人とかになれるんじゃない？」

「妖を被うだなんて、そんな、とんでもない！ ああ、それにしても今日は素晴らしい日ね。今日の日記、何ページになるかしら。どの料理がどんな味だったかも記録しておきたいし、もう少し別の料理をとつてこようかしら。紗久羅ちゃんも一緒に来る？ さっき一度立ち上がったでしょう？」

「ん、そうだなあ。それじゃあ一緒に行こうか」

紗久羅とさくら、二人は立ち上がって先程料理が並べられていたところへと向かう。

*

夜の闇はますます濃くなっていき、乙女の黒髪に近い色となっている。それと共に月はよりいっそうその輝きを増しており、夜の国を統べる女王の如く空に君臨していた。

その美しき女王に見守られながら、飯を喰い、酒を飲み、騒いでいる妖達。

幻想的な風景と俗っぽい風景がごちゃごちゃに混ざり合った不思議な世界が今、さくら達の前に広がっている。

「月見なんて綺麗な言葉使っているけれど、実際のところ、只の飲み会だよなあ、これ。飲み会IN夜の麗月京……って名前の方がしっくりきそうだ」

顔を真っ赤にしながら芸をやったり、大声で笑ったり、箸をかちんかちんと鳴らしながら歌っている妖達を横目で見ながら紗久羅が呟く。それを聞いたさくらが頷いた。

「確かに、そうねえ。まあでもこれだけ大勢の人と飲んだり食べたりにするには、それなりの口実がなければなかなか出来ないかもしれないわね。私は月見というからには、月を眺めて静かに語り合いながらお茶を飲む方がいいけれど。でも、これはこれで良いわ。美しい風景に、沢山の妖……眼福、眼福。ふふ」

その言葉に嘘は無いようで、さくらは幸福そうな笑みを浮かべ、鼻歌を歌う。

(あたしにはコメディ要素入りの地獄絵図にしか見えん……)

紗久羅は地獄絵図なのにコメディ要素が入っている、というのも変な話かもしれないが……と自分でそう思っておきながら、自分でツッコミを入れた。

出雲同様、人とあまり変わらぬ姿も者も多いが、何と形容してよ

いのか分からない異形の者も居るし、食欲を一瞬で奪い去るようなとてもグロテスクな姿をした者も多い。妖怪愛好家でも、ホラーやゲテモノ大好き人間でも無い紗久羅からしてみれば、気味の悪い光景にしか見えなかった。外見で人を判断するな、という言葉をよく耳にするが紗久羅には彼等を人間と同じように扱う気持ちにはどうしてもなれない。

袖季を誘わなくて良かった、と紗久羅は心の底から思う。彼女がこんなところに来たら一瞬で気を失い、そして自分が見た非現実的な光景についての記憶を即刻抹消しただろう。

(こいつら妖怪共が居なければ、ものすごく魅力的な場所なんだけれどなあ、ここ……料理も美味いし)

料理の並ぶテーブルへ向かう道中、鈴を鳴らしながら歩く月の民とすれ違った。彼女もまた無表情であった。紗久羅は思わず彼女の背中にぜんまいがついていないか見てしまう。そうしたくなる位、生気を感じなかった。

「月の民もさ、何で毎年こうしてご馳走を用意して、妖怪達を迎えているんだろう？ 自分達も妖怪達と一緒に飲み食いして騒ぐっていうなら分かるけれど……そういうことはまずしないらしいさ」

「そうねえ……」

「別に、やりたくてやっている訳では無い」

いつの間にか紗久羅達の背後に月島が立っており、冷たい視線で二人の体を射抜いていた。

「昔、ここ麗月京に一人の妖が迷い込んできた。……珍しい来客を喜んだ御月様 我等一族の長のことだが は妖にご馳走を振舞い、手厚くもてなした。満足した妖はここが再び閉じられる前に帰

つていった。……だが翌年、彼は仲間を連れて再びここへとやって来た。御月様は今度も彼等をもてなした。そして翌年、更に次の年と徐々にこの京を訪ねる者が多くなっていった。どうやら彼等は最初に迷い込んだ妖から、この京の話の聞いたらしい。話はどんどん広まっていったらしく……」

月島は表情を変えぬまま、ため息をつく。

「……気づいたら、こうなっていた。今更もてなすことをやめることも出来ぬ」

「この麗月京の存在が口コミでどんどん広がって行って、最終的にこうなったのか……成程なあ」

可哀想に、と紗久羅は心の中で呟く。

「まあ、今の話は忘れて楽しむが良い。来る者は拒まぬ。……この京に危害を加えぬ限りは」

月島はそう言い放ち、立ち去っていった。

それを見届けた二人はテーブルまで行き、新しい皿に料理を盛り始める。

「これ、美味しそうだな。……豆を煮たやつかな？」

うぐいす色の豆を紗久羅がよそう。さくらは手のひらサイズの白い花が盛られた皿を指差す。

「これ、お花だわ。……バニラに似た香りがする。お花の砂糖漬けでもないし……どういふものなのかしら。これ、一つ頂きましょう」

「こっちは刺身かな。隣に置いてある壺に入っている薬味を適量つけて食べるだつて」

透明でいかにもぷりぷりしていそうな身が、綺麗に皿に並んでい

る。その横に小さな茶色の壺がある。開けてみれば、中には鯉節を醤油でつけたようなものが入っていた。二人、美味しそうだと思つて皿に刺身を盛り薬味をその隣にちょこんとのせる。

他にも串に刺さつた真つ赤で丸いもの、木の実入り餡がかつた卵焼きらしきもの、七色の石を砕いたようなものが混ざっているクリームをのせたパイ、光にかざすと銀色に輝くせんべいらしきもの、青と白のゼリーの上に魚のムニエルがのつたもの……。見慣れぬものを中心に、少しずつ皿に取り分けていく。

飲み物は水。出雲曰く、この水は『月光泉』げっこうせんという月の光が水に変わる不思議な泉から汲み取られたものらしい。氷も入れてないのととても冷たく、おまけにもすごく美味しいのだ。

「どんな味がするのか、ときどきだな」

「そうねえ。何となく味が予想できるものもあれば、一体どんなものなのかさっぱり分からないものもあるし」

「外国の料理以上に味が予想出来ないものが多いよなあ……。青色のスープとか、銀色のソースがかかった肉とか……」

二人はとつた料理の味を予想したり、先程食べた物の味を言い合つたりしながら出雲達のところへ戻る。

出雲は月の様に黄色いお団子をちまちま食べており、やた吉とやた郎はどちらが酒に強いか勝負しており、鈴は飽きもせず魚を淡々と食べ続けていた。

「おや、二人共帰つてきたんだね。お帰り」

二人を迎える声には抑揚は無く、団子から視線を外すこともない。その冷たさは月島に負けずとも劣らず、だ。

紗久羅はあかんべえしながら座り、さくらと談笑しながら食事す

る。

今回皿に盛ったものは全て紗久羅の口に合うもので、おかわりしたいと思うものばかりであった。クリームに乗ったパイはパイ生地に包まれたフルーツの甘味とクリームの酸味が絶妙。石のようなものは口に入れるとぱちぱち弾けた。

串に刺さった赤い球体は何かの卵だったらしい。とろりとしていて味は濃厚。甘味があり、何もかけなくても十分食べられる。何の卵なのかは怖くて聞けない。

銀色のせんべいは甘辛い味。口に触れて濡れた部分は赤や黄色に変色している。色が変わるせんべいなんて面白いな、と紗久羅は感心した。

「紗久羅ちゃん、このお花。まるでバニラシャーベットみたい。とてもつめたくて、しゃりしゃりするの。仄かな甘味で、ちよつと苦くて……でもとても美味しいわ」

さくらがそれをのせた皿を差し出す。紗久羅や奈都貴、一夜はその花を少し分けてもらい、口にする。

「あ、確かにバニラシャーベットだ。キャラメルソースみたいなの、少し苦い味もする」

奈都貴がもぐもぐそれを食べながら頷いた。手で触れるとそんなに冷たくないのに、口にすると頭がきんとなる位冷たい。

「うん、これはなかなか。……それよりさくら姉、あの刺身もう食べた？ これ、ものすごく美味しいよ」

透き通ったその身はえんがわのように歯ごたえがあり、噛めば噛むほど甘味が増す。油もよくのついているが、しつこすぎない。茶色い壺に入っていた薬味はぴりつと辛い醤油味。これをつけても美味しいが、薬味無しでも十分美味しい。

「ああ、それは月魚だね。月光泉で育つ魚で、麗月京を訪れる妖達の間で一番人気の食べ物だ。鈴も大好きなんだよね？」

優しげに微笑む出雲を見上げ、鈴が恥ずかしそうに俯きながらこくこく頷いた。そう言えばさつき一白が月魚のひれ酒がどうのこうのと言っていたな、と紗久羅は思った。

「今夜は食い倒れちまいそうだな。妖怪達は気味が悪いけれど、飯は美味しい」

一夜は料理を山のように盛った皿と格闘している。奈都貴もそれに同意した。それ位ここにある料理は美味しいのだった。月を愛するさくらでさえ、今は料理に夢中であった。

*

それからどれ位の時間が過ぎたのだろうか。時計が無いからさっぱり分からない。周りで飲み食いしている妖達の会話がどんどん支離滅裂になっていき、笑い声は一層大きくなっていった。

「美しき藤の君」

酒をちまちま飲んでいた出雲に誰かが話しかけてきた。

見た目若い女性で、どうやら月の民らしかった。夜空に似た色の髪を肩まで伸ばしており、白い花が愛らしくその髪を飾る。月島に比べると装飾はシンプル。奈良時代貴族の女性が着ているような衣服に身を包んでいた。彼女は優しく微笑んでいる。月の民にも素敵な笑顔を浮かべる人が居たのか、と四人は思った。

「この世にある、美しいもの」

女性が出雲に問いかけた。出雲は困惑する様子なく、それに答える。

「夜の桜」

「愛しき人を想う女の顔」

「桔梗。土の上に生まれる夜空」

「膨れた腹を撫でる母の顔」

「空架ける虹の橋」

「雨にも風にも負けず、咲き続ける一輪の花」

「黄玉、紅玉にひけをとらない、秋を彩る紅葉達」

「こんな調子で出雲と女性は交互に「美しいもの」をあげていく。一体何をしているのだろう、と何も知らない紗久羅達は首を傾げながらその様子を見守る。」

「それよりなお美しいのは、今日の前に居る貴方の姿」
恐らく締めだろう、とさくらは思った。

「その言葉を贈って下さった貴方こそ、美しい」
出雲が微かに口元を緩め、女性にござへ座るよう手を使って促した。女性はこくりと頷き、出雲の隣に座る。」

「今のって何ですか？」
早速さくらが尋ねた。

「ああ、これは挨拶のようなものだよ。それぞれ美しいと思うものを一つずつあげ、締めの言葉を言ってお終い。まあ、一種の遊びでもあるのだけれど」

「この京にぴつたり、超気取った挨拶ってやつよ。あ、私の名前は影月^{えいげつ}。宜しくね」

にこり笑う彼女は、月島と同族とは俄かには信じがたい人物に見えた。困惑する四人を見て、今度は声をあげて笑い出した。

「嫌だわ、そんなばかんとしなくても。月の民にだって笑ったりお喋りしたりすることが好きな人がいるのよ？ まあ、殆ど居ないけれど。声をあげて笑ったり、必要以上にお喋りしたりすると魂が削れてしまうって思っているの。実際のところどうなのかしらねえ？ それにしてもこの京に人間が来るなんて。驚いたわ。ああ、でも嬉しいわ。私本物の人間に会って見たかったの。どう、楽しんでいる？」

「ええ、とつても」

さくらが微笑む。他の三人もこくりと頷いた。

「良かったわ。それにしても貴方達、随分食べているようね？ 私達ってあまり食べたり飲んだりしないから……。食事しなくても生きていけるしね」

「影月さん達ってどんな料理を食べているんですか？」

「色々。……あの台に並んでいる料理とはまた違うものを食べているわ。私達が食べるものって、他の種族にとっては恐ろしい毒なのよ」

「食べたなら死んじゃう……のか？」

奈都貴が聞くと、影月がうつんと首を横に振る。

「死にはしないわ。ただ、今まで自分達が食べていたものを食べても、飲んでも、お腹が膨らまなくなるの。栄養にもならず、食べても飲んで何の変化もなくする。当然時間が経てばお腹が空くし、喉は渴く。……その飢えや渴きを癒すには、もう月の民の食べ物摂るしかない。けれど食べれば食べるほど、自分が自分ではなくなっていく。そして……最終的には月の民もどきになってしまふの」
それを聞いて四人はぞっとする。死ぬよりずっと恐ろしいことかもしれないと思った。

「麻薬並の恐ろしさだな……」

「まや……？ 魔の薬？」

「いや、そうじゃなくて……まあある意味間違っではないと思うけれど」

紗久羅はそう言って苦笑いした。

「ふうん。まあ、いいわ。……ねえ、人間界のこと色々教えて頂戴よ」

「私も月の民について色々知りたいです。皆さん以前月に住んでいらっしやっただんですか？」

「さあ？ どうなのかしら。私が生まれた時には皆すでにここ麗月京で暮らしていたから。ここに移る前のことってあまり話してくれないのよ、皆。まあでも、以前ここではないどこかに住んでいたことは確かのようにだし、月の民って言っている位だし……月に住んでいたんじゃないの？」

何故話してくれないのか、それは影月にも分からないらしい。話す必要はないと思っているからなのか、それとも話したくないのか。

「何かあつたのかもしれないわね。聞こうとすると、露骨に嫌そうな表情浮かべるもの。普段滅多に感情を表に出さないような人達が、嫌悪を剥きだしにするのだから。さ、私は貴方の問いに答えたわ。今度は私が質問する番よ」

張り切った表情で質問を考え、やがて何かひらめいたのか口を開きかけたまさにその時、聞いた者の体をぐさりと突き刺すような冷たい声で、影月の名が呼ばれた。

見ればそこには紗久羅達とさくらにとっては本日三度目の邂逅となる。月島が立っていた。影月が身を固くさせ、ごくりと唾を飲み込む。

「影月。……そなた、確か明日の音紡で竜笛役を務めるよな？」

「え、ええ。そうですが。それがどうか？」

「急な話だが、今夜も竜笛を演奏してはくれぬか」

月島の言葉に「えっ」と影月は驚きの声をあげる。

「今宵の竜笛役が一人、星條（せいじょう）が姿を消したのだ。大方ここを抜け出し、どこかで遊んでいるのだろう。……全く、困った娘だ」

「で、でも私今この子達とお話を……」

「何だ。私の命に背くと申すか？」

月島の背後に見えない雷が落ちている。ついでに、吹雪いている。影月に選択権はないようだった。

彼女ははい、と答える前に月島についていた女性二人に引きずられていった。

「ああん、折角お話を聞ける絶好の機会だったのに！ 馬鹿、馬鹿、星條の馬鹿！」

影月は大声で喚きながら、さくら達の前から消えていった。

「あの人、結局何しにきたんだ？」

これは奈都貴だ。

「さあ……」

一夜はさして興味無さそうに一言。

「ああ、月の民についてのお話、もっと聞きたかったのに。残念だわ」

「しかしパフォーマンスを披露する予定だった人間が行方不明って……やっぱりなんというか、宴会にはハプニングがつきものなんだな」

「毎年、何だかんだいって色々な事件が起きているらしいからねえ。あの月島って女も大変だろう。私だったら絶対宴の仕切り役なんてやりたくないよ」

「出雲の旦那、面倒臭いこと嫌いだもんな……」

「面倒なことは大抵俺達に押しつけるしね……」

色々苦労しているらしいやた吉とやた郎がそんなことを呟きながら、ため息をつく。

出雲はそれを笑いながら聞き流した。自分にとって都合の悪い言葉は耳に入ってこないらしい。

「人生楽しんで楽しむのが一番だよ」

*

さくら達が座るござの近くにある、何も無かった舞台に変化が訪れたのはそれから一時間程経った時のことだった。

影月が着ていたものより更に飾り気の無い着物を着た娘達が、無言で楽器を運んできた。そしてそれらを舞台の上に慎重に置く。運ばれてきたのは琴のようなものを始めとした大きな楽器だった。ぱつと見た感じはあまり「こちら側」にあるものと大差ない。

運び終わった娘達は音も立てずにその場を立ち去り、彼女達と入れ違いに、奏者らしき女性達が舞台へとやって来た。

頭を花や宝石、布などで飾った彼女達は皆美しく、眩く輝いていた。月を擬人化したような娘達の中に、先程にここにこ笑いながら喋っていた影月の姿もあった。先程までとうってかわって、真剣な表情を浮かべている。

彼女達が舞台上に現れると、今まで騒いでいた妖達が少し大人しくなった。

「音紡がそろそろ始まるんだね」

酒の所為で顔が赤くなっているやた吉がわくわくしながら言った。

「音紡って演奏会のようなものですか？」

「まあ、そんなところだよ。……けれど、只の演奏会じゃない。見ていると、面白いことが起きるから」

出雲が彼女達に視線を向けながら微笑む。

可憐な花も妬むだろう、麗しき乙女達。彼女達は無言で音あわせを始めた。

美しい音色が静かに響き渡る。

「今宵は麗月京にお越しいただき、誠に有難う御座います。歓迎の意を込め、音紡を披露したく存じます」

中央に座っている女性がよく響く声でそう述べながら、頭を下げる。妖達がそれを聞いて拍手をした。つられて紗久羅達も手を叩く。拍手が止んだところで、金髪の女が鼓を叩く。そして始まる音紡。酒を飲んでぐでぐでんに酔っている妖達も騒いだり飲み食いしたりすることを忘れ、静かになる。

始めは非常にゆったりとした曲調。透き通った高い音を出す笛が川を生み出し、鼓が鳴れば魚が跳ねる。鈴の音が星の瞬きを現し、琴は空を流れる雲。

月輝く空の下、ゆったりと流れる川。そんな風景が四人の脳裏に浮かぶ。四人とも音楽とは無縁で、高級な楽器と安い楽器の音の違いも分からないし、普段は曲を聴いてもそれが表しているものはつきりと思いつかべることは出来ない。だが、今回に限っては違った。

穢れの無い音色は一瞬にして聞く者の心をぐつと掴み、体を内側から綺麗にしていく。この演奏を邪魔しようと思う者など誰も居ない。滅多なことでは感動しないであろう出雲でさえ、満足気な笑みを浮かべながら聞きいつている。

しばらくして、中央に座っていた女が歌い始めた。歌といってもこれといった歌詞はない。楽器に負けない、かといって演奏の邪魔は決してしない、丁度良い大きさの声。だがマイク無しでここまで大きく、また響く声が出せるなんてすごい、とさくらは思う。

女の歌と共に、思い浮かべていた風景に天女が現われた。月を背に、領布をひらひらさせながら地へと降り立つ。その辺りから曲調が変わっていき、先程までよりほんの少しだけテンポが速くなった。天女が、舞い始める。彼女の動きを数種類の三味線や琴が表し、

柔らかな音色の笛が彼女の衣服がふわりと舞う様子を表す。
しなやかに手を動かし、月夜を舞台に舞う天女。

木の葉は風に吹かれ、さやさやと。夜の鳥達が歌いだし、蛍が小川の傍を飛び交う。

曲はゆったりと静かになったり、速く激しくなったり。緩と急がはつきりすることで、天女の動きがより鮮明に頭に思い浮かぶ。

曲は少しずつ速くなっていき、段々と盛り上がっていく。通常の音楽でいうところの「サビ」に近づいているようだった。自然と聞く者達の鼓動が早くなっていく。

一番の盛り上がり近づくとつれ、現実の世界にある変化が訪れた。

地面が……というより地面を覆う草花が輝き始めたのだ。その輝きの度合いは曲によって変化している。

(曲が始まる前まではこんな風になっていなかったのに……この曲に反応しているのかしら?)

見れば広場を囲む木も先程までとは違う輝きを見せていた。

「そろそろ来るよ」

出雲が本当に小さな声で、そう呟いた。

やがてその瞬間がやって来た。

地面を埋め尽くしていた可愛らしい蕾達が一気に膨らみ、そして花開いたのだ。虹色に輝くガラスの如き大輪の花。曲の「サビ」がきたのと同時に、一斉に。

人々はあつという間に美しい花に囲まれた。更にその花から、橙や紫、緑がかた黄色の粒子が溢れ、空へと上っていった。まさに月

に降り注ぐ虹色の雨。

そして木々についていた光る実もまた、枝から離れて空をめぐって落ちていく。

人々の脳裏に浮かんでいた天女が「現実の世界に」現れ、空中で踊りだす。

美しい、という言葉以外何も思い浮かばなかった。夢のような光景であり、四人は時を経つのも忘れ、その光景に見惚れながら美しい音楽を聞く。

やがて曲は再び静かに、ゆったりとしたものになっていき、天女は月へと帰っていった。

曲が終わり、しばらくすると花は再び眠りにつき、光の粒子も消えていった。

あまりのすごさにしばし呆然としていたさくら達だったが、やがて我に返ると大きな拍手をした。同じように妖達も拍手する。

「すごい……とてもすごかったわ。綺麗で、心震えたわ。ものすごく素晴らしくて……言葉にならない位に」

「確かに何とさえいいのかわからない。男の俺でも綺麗だなんて思った」

奈都貴も素直に感想を述べた。その言葉に紗久羅が頷く。

本当に素晴らしいものを見た時、人は言葉を失う。言葉で表すことが出来ないもの。それこそが最も素晴らしいものなのだとさくらは思った。

「ここに咲く花は、美しい音色に反応して開く。けれど曲が終われ

ばまた閉じる。彼女達は一晩につき一度だけ音紡を披露してくれる。どうも音紡は気力や体力を使うらしい」

その後もさくら達は、朝が来るまで宴を楽しんだ。

月の民の遊びをやた吉、やた郎に教えてもらった。一つ目は親が選んだ石と同じ形のものを、壺に入った沢山の石から手探りで探し当てるといふ遊び。これが簡単そうで難しく「絶対これだ」と思っ
て取り出したら全然違う形をしていた、などということが多々あった。二つ目は親が指定した色の石が何個あるか瞬時に答えるというもの。沢山の石から、決められた色の石が何個あるか数える……これまた単純な遊びだが、意外と数え間違える。時々複数の色を指定されたり、石を途中で容赦なくシャッフルされたりした。

さくら達は朝が来るまで麗月京に居て、食事や歓談を楽しんだ。

眠気は不思議とあまり来なかった（ただ一夜は部活がある為、音紡が終わった後は殆ど寝ていた。よくこんな所で爆睡できるなと紗久羅は内心感心した）

そして、朝、月が空に溶けて消えた頃四人は出雲に連れられ、麗月京を後にした。

「素敵だったわ。また来年も来たいわ」

「あたしも。妖怪共に囲まれるのはちょっと嫌だけれど、料理は美味かったし。あの音楽、また聞いてみたいしな。なっちゃんもそう思うだろうか？」

「だからなっちゃん言うなつての。……まあ、確かにまた来られたらいいなとは思っつけねど」

「俺は気が向いたら……ああ、眠い。俺部活中倒れないかな」

「まあ、君達がそういうのなら……気が向いたら来年も連れてきてあげるよ。気が向いたら、だけれど」

「……出雲。こいつら、そんなに甘やかさなくても、いいのに」

鈴が唇を尖らせる。出雲はそんな彼女の頭を優しく撫でた。

四人は楽しかった宴の思い出を胸に抱きながら、帰路へついた。

第四十六話：我が愛しのエンデュミオン（1）

ああ、愛しい貴方。貴方こそが私の伴侶。
永遠に貴方は私のものである。

『我が愛しのエンデュミオン』

十月も半ばを過ぎ、大分過ごしやすいく気候になってきた。東雲高校は文化祭に向け少しずつ準備を進めている。十一月に入れば祭が始まってもしないのに学校中お祭りムードとなる。学校全体で行われるビッグイベントがこれと体育祭位しかないのだから、まあ無理も無い。

ちなみにさくらのクラスはホットケーキとジュースを出す喫茶店をやることになっている。

授業が終わわり、昼休みの始まりが告げられたのと同時に、生徒達はポップコーンのように弾け飛び、四方八方へ散っていく。ある者は友人の居る教室へ、ある者は食堂、そしてある者は購買のパン争奪戦へと向かう。

さくらとほのりは教室に残り、食事の準備をする。準備といっても机を合わせて持参した弁当をカバンから取り出すだけだ。

ほのりは大あくびをしながら弁当箱をつつく。先程まであった英語の授業中も寝ていたのに、まだ眠いらしい。或いは寝起きだから眠そうなのか。

さくらは昼食が終わったなら本を読もうと思いつきながら卵焼きを口にする。

何となく教室の出入り口に目をやると、クラスメイトの一人篠宮

しのみや

静香（ちなみにさくらは彼女の名前を思い出すのに三十秒以上かかった）が弁当を包んだものを片手に一つずつ持ちながら、いそいそと出て行くのが見えた。

何故二つも？とさくらは疑問に思う。静香はとても大食漢には見えなないのだが。

「二つ……？」

「はい？」

さくらの眩きにほのりは目をぱちくりさせる。

「あ、いやその……篠宮さんがお弁当を二つ持って出て行ったから、何でかなと思って」

ほのりはまるで1+1の答えって何だっけ？と聞かれたかのような表情を浮かべている。さくらにとっては難問でも、ほのりにとっては超簡単なものだったらしい。

「何故って、そりゃあ愛しい王子様の為に決まっているじゃないの」

「王子様？」

「か・れ・し・よ」

一文字ずつ丁寧に区切り、その単語を強調する。ああ、成程とさくらが納得したように言ったのでほのりはほっと息をつく。

だがしかし。

「篠宮さんって恋人が居たのね」

という言葉聞き、ほのりは余程驚いたのか素っ頓狂な声をあげる。さくらは驚いてびくっと肩を震わせる。

「サク、あんた知らないの？ はあ……信じられない。この学年で知らない人は居ないって位有名よ。……まああんたは知らなかったみたいだけれど。相手は、同じクラスの牧田俊樹。東雲高校のおしどり夫婦なんて呼ばれているのよ、あの二人。知らない？」

さくらがぶるぶる首を横に振ると、ほのりは頭を抱えた。

「あんたねえ……」

「牧田君ってどういう人だったっけ……」

「あんた、一年の時も同じクラスだったはずなんだけれど」

「え、あれ、ああ、そ、そうだったっけ……」

「というか、そもそもさあ。二人共小学校、中学校も同じだったはずだけれど？」

「え、ええ……あ、ああ……う、うう」

さくらは人の顔や名前を覚えるのが苦手だった。本に出てくる登場人物の名前はよく覚えるのだが。彼女には女子の顔が皆同じに見えるし、基本的に関わることのない男子のことなど殆ど記憶に残らない。そんな訳だから、牧田俊樹と言われても顔が全く思い浮かばなかった。

誰と誰の仲が良いとか、どこどここのグループは仲が悪いとか、そういったものにも興味を殆ど示さないから、静香と誰かが仲睦まじそうに話していたとか、そういうところを見た記憶も一切無かった。

人の会話にもあまり興味を示さないから、噂話などにもかなり疎い。

首を傾げながらうーんと唸っているさくらを、ほのりは弁当に箸を刺しながら、呆れたように見守っている。

「あんだねえ、もう少し周囲に目を向けなさいよ。読書や創作活動に夢中になるのもいいけれど。まあ兎に角……篠宮さんと牧田は本当、仲が良いのよ。何でも幼稚園あがる前から家族ぐるみの付き合いがあつたんだって。あんだと井上みたいなものよ。で、いつの間にか異性としてお互いを見るようになり、高校をあがる前には恋人同士になっていたらしいわ。何かこう、五十年以上共に人生を歩み続けてきた夫婦みたいな感じになっているのよね、あの二人」

「櫛田さん、詳しいのね」

「あんだが知らなさ過ぎるのよ！ 全く、この脳内お花畑娘、しっかりしろ！」

割と真面目にほのりは言うのだが、さくらは暢気にえへへと笑っているだけだ。ふざけて言っているだけなのだと思っているのだろう。ほのりは頭を抱えるしかない。

結局ご飯を食べ終え、読書をする頃には静香と俊樹のことなどすっかり忘れていた。

*
授業が終わり、放課後となる。さくらとほのりは仲良く部室へと向かった。

文芸部は文化祭に向けて着々と準備を進めている。文化祭は普段の活動成果を色々な人に見せることが出来る絶好の機会だ。唯一の、といった方が正しいかもしれない。それゆえ自然と力が入る。

原稿と睨めっこを続け、しばらくは殆ど誰も喋らずに自身の作業に没頭する。部誌を見たり、買ったりしてくれる人はそこまで多く

は無いがそれでも適当なものは作りたくないのだ。

しかしずっと集中していれば、やがて疲れてくる。五人は息抜きにお喋りを始めた。

お喋りのお供は、佳花が持ってきたクッキー。彼女はよく手作りのお菓子を持ってきては皆に分けてくれる。彼女は三年生なので、この文化祭を最後に表面上は部活を引退する（ただ、彼女は進路が決まっている為これからも部室に顔を出すという）。

「そういえば最近さ、舞花市とか桜町にコスプレ女が出没しているんだよね」

「あ、その話は僕も聞いたことがあります。何人か見たらしいですね」

「コスプレ女？」

あまり人と話さないさくらはその話を知らず、首を傾げる。その様子を見たほのりが、さくらに話してやる。

「そう、コスプレ女。着物　といつてもごく一般的な奴じゃなくて　あんたは大昔の王族か、と思わずつつこみたくなるようなものを着ているんだって。それでもって、ものすごく重そうなかつらをつけている」

「地面にくつつきそうな位長い髪のかつらをつけているらしいですね。まあかつらかどうかははっきりしないそうですが……まあ、そこまで髪の毛伸ばしている人なんてまずいませんし……かつらなんでしょうね。目撃した人の話によれば若い女性とのことなんです」

ほのりの説明を、環が補足した。女は夕方から夜にかけて主に出没することだが、詳しいことは不明。何が目的でそんな格好を

して歩いているのが皆目見当がつかないという。

「私の友達も、そのコスプレ女さんを見たらしいです。その友達漫画が好きなんですけど……ある漫画の登場人物に似ていた、と言っていました。ですから、もしかしたらその人のコスプレをしているのかも……と」

「へえ、何ていう漫画？」

ほのりが聞くが、陽菜が困ったように笑う。友人から聞いたには聞いたが、全く知らない作品だったので忘れてしまったらしい。

さくらは本当にその女性が（コスプレをした）人間だったのか疑問に思った。

最近『向こう側の世界』の人物が深く関わっている出来事が頻繁に起きているからだ。

（けれど、深沢さんのお友達は漫画の登場人物に似ていたと言ったらしいし……考えすぎかしらね）

と考えを改める。

「まあ、何か悪さをしているというわけではないらしいのですが……何か気味が悪いですよね」

「気味が悪いと言えば。笛吹き魔の話、知っている？」

ほのりが話題を変える。環がぼんと手を叩き、頷く。

「あ、聞いたことあるかもしれないです。それも最近聞くようになった話ですよね」

「それは私も知っているわ」

こちらはさくらも聞いたことがあった。昨日の夕飯時、それが家

族内でちよつとした話題になっていたのだ。

深夜の笛吹き魔。ここ最近桜町に出現する謎の怪物。

笛を吹きながら桜町を決まったルートで歩き、ある地点で立ち止まる。そこでも笛を吹き続け、三十分程してから再び元来た道を辿って消えていく。

笛吹き魔が立ち止まる地点近くに住む男が、一体誰がこんな時間に笛を吹いているのだろうか？と思い、カーテンを開けて外の様子を覗いたらしい。すると道路の真ん中辺りに黒くて大きい、不気味な塊が立っていたのが見え、男は腰を抜かした……らしい。

黒くて大きな塊。それが恐らく笛吹き魔の正体なのだろう。男の目撃証言はあつという間に町中に広がっていった。

だがこの証言を真に受けている人間は殆ど居ない（小さな子供は別として）。

「まあ、夜遅くのことだったらしいし……寝ぼけて幻影を見たか、何かを見間違えたか、夢でも見ていたか……ってところでしょよね。実際は」

大抵の人はほのりと同じようなことを考える。

「けれど、每晚笛の音が聞こえてきたらたまったものじゃないですよねえ。安心して眠れやしない」

「話によれば、安眠妨害には意外となっていないらしいわよ。ただ聞くと金縛りみたいに体が動かなくなるらしいけれど。結局笛吹き魔を見たって言っているのはその男の人だけみたい」

だから余計に彼が笛吹き魔を見たという話は胡散臭く感じるのだ。他の人は笛の音を聞くと動けなくなるはずなのに。何故彼だけ笛吹き魔を見ることが出来たのか。

陽菜はその疑問を口にし、考え込む。

まあもしかしたらその時イヤホン耳に突っ込んで、音楽とか聞いていて……笛の音色が耳にあまり入ってこなかったから自由に動けたのかもねえとほのりが返す。

「それにしても奇妙な話ですよ。僕は化け物なんて存在しないと思っっていますが……けれど、ううん」

「まあ、迷惑であることに変わりはないと思うけれど。それにしても本当、変なことが続くわねえ」

片手でペンを弄くりながら、参ったようにほのりが呟く。黙って話を聞いていた佳花も、出来ればこういうことは頻繁に起きて欲しくないと言いたげだ。

「しばらくすれば大抵の場合落ち着きますがね。神隠しにあう人も居なくなりましたし、変な雨も止みましたし、鏡から変な女が出てきたって話も聞かなくなりましたし……」

「またすぐ別の奇妙な出来事が起きやがるけれどね」
ほのりのその言葉を聞き、一同うんざりしたように頷いた。

こうしてしばらくお喋りに花を咲かせた後、再び作業に取りかかる。さくらは今は笛吹き魔やコスプレ女のことは考えず、ひたすら原稿に文字を刻み続けた。

時間はあっという間に過ぎていき、部活の時間が終わる。
また明日も頑張ろうと思いつながら五人は別れた。

学校帰り、さくらは弁当屋『やました』に寄る。そこにはいつも通り店番をしている紗久羅がおり、さくらを見ると微笑みながら手を振ってきた。

「よお、さくら姉」

「こんばんは、紗久羅ちゃん。……今日はもう出雲さん、来た？」
何であいつのことなんて聞くんだよ、と出雲の名前を聞いただけであからさまに不機嫌そうな表情を浮かべる紗久羅だったが、問いには律儀に答える。どうやらもう来て、いつも通りいなり寿司を買っていったらしい。

「そういえば……さくら姉はコスプレ女と、笛吹き魔の話って知っている？」

さくらはこくりと頷く。先程までやっていた部活で話をしたばかりだ。

「その話をあいつにしてやったんだ。まあどうせ」で、それがどうかしたの？ そんな話はどうでもいいからさっさといなり寿司をおくれ』とでも言われるんだろうなとか思いながらさ」

「それで、出雲さんは何て？」

「あたしが思い描いていた言葉を寸分違わず言いやがった」

ショーケースに肘をつきじと目でそう言う紗久羅を見て、さくらは笑う。

どうでも良いと言われることが分かっているながら、出雲に話す紗久羅は何て可愛いのだろうと内心思う。まあ口に出せば怒られるので、言わない。

「また向こう側の世界の誰かが、こちらで何かをしようとしているのかしら？」

「コスプレ女の方はどうだか知らないけれど、笛吹き魔は怪しいよなあ。噂によれば、同じ道を辿り、同じ場所で立ち止まるらしいけれど。何でだろうな？」

「誰か特定の人に演奏を聞いてもらいたいのかしら？ そうだとして、夜に笛を聞かせる理由が分からないわ。目撃者の話によれば、笛吹き魔は大きくて黒い化け物だつてことらしいけれど……その情報が正しいのかどうかははっきりしないわよね」

「だなあ。あの情報はぶつちやけ微妙だよな。けれどももし笛吹き魔が向こう側の世界の住人だったら……また面倒なことが起きるかもな。全く次から次へと」

紗久羅はうんざりしているようだった。一つの事件が終わるとまたすぐに次の事件が起きるのだから、まあ無理もない。

何か他に変わったことが起きたらお互い報告し合うことを約束し、さくらは『やました』を後にした。

*

翌朝さくらは目を覚まし、小さくあくびをしながら階段を下りる。テーブルにはこんがり焼けたパンと、バターの香りがするスクランブルエッグ等が置いてあり、父は新聞片手にコーヒーを飲んでいった。

TVで流れているのはニュース番組。この辺りの地域で起きた事件についてとりあげている最中だった。

何気なく見始めてすぐ流れたのは、三つ葉市で盗難事件が発生したというニュース。

深夜、三つ葉市の洋服店に何者かが侵入した。防犯カメラには何も映っていなかったが、カウンターに「服や小物を頂戴いたします」と書かれた紙が置いてあったらしい。実際に何をどれ位とられたか、については明言されなかった。

「物を盗んだことを紙に書いて残すなんて、珍しい泥棒だね」

驚きの混じった穏やかな声でそう言っているのはさくらの父・春樹だ。

そんな彼に似た娘、さくらも同様のことを思っていた。

「漫画とかに出てくる怪盗みたい。けれど、何故洋服……三つ葉市なら、宝石店とかもあるのに。高級な洋服を扱うお店だったのかしら？」

「さあ……。どの洋服店がどんなものを扱っているか、私はよく知らないから何とも。けれどニュースの映像を見る限り、高級な服を扱っているという風には見えなかったけれど」

春樹は不思議そうに首を傾げた。確かに映像に映っていた店に高級感はありませんでしたが……。父子揃ってファッション関係には相当疎い。そんな二人が話し合ったところで答えなど出るはずがない。

少し不思議な話ではあったが、盗難事件にはあまり興味が無いさくらはそのことについて考えるのをすぐ止め、母の作った朝食を味わう。

それからしばらくして家を出、学校へと向かった。

教室に入って自分の席に着くと、さくらはすぐ本を取り出して机の上に開く。そしてあつという間に物語の世界へ入り込む。生徒達が喋る声などあつという間に聞こえなくなった。……さくらの場合、本を読んでいなくても他人の声など殆ど耳に入らないのだが。

その為、彼女は俊樹が笛吹き魔について話していることにも気がつかず、彼が興味深いことを話していたことも知らないまま、自分だけの時間を過ごした。

彼がどんなことを話したか。それを聞いたのは昼休みのこと。

情報源は勿論というかなんというか　ほのりであった。彼女はさくらが夢の世界に浸りまくっていることを悲観しつつも、彼女が喜ぶような話をしてやるのだった。

「笛吹き魔についての新しい情報、知りたい？」

「え？」

にたりと笑うほのりを見て、さくらが目をぱちくりさせる。

「実はさ、笛吹き魔が立ち止まる地点って……牧田俊樹の家のすぐ近くなんだって」

さくらは牧田君って誰だっけと一瞬素で思った。少ししてから回路がつながり、その人物が篠宮静香の彼氏であり、同級生であることを思い出す。

「あたしはあんたと違って、他人のお喋りもしっかりはつきりきっかり聞こえちゃうのよね。今日の朝牧田が喋っていたのを聞いたのね、また夜に例の笛吹き魔が現われて、いつもと同じ演奏をしていたらしいんだけど……」

「けれど？」

「何かさ、途中で笛の音が止まったらしいんだよね。今まで笛を吹くのを途中でやめたことなんてなかったのに。でさ……その後、男の人と女の人が喋っている声が微かに聞こえてきたんですって」
ほのりは何も掴んでいない箸をかちかちさせる。結局その後笛の音は聞こえず、男と女の声もフェードアウトしていったらしい。

「笛吹き魔と誰かが話していたってことかしら？　何かを話した結果、笛吹き魔はその場を去った」

「ということになるわよね。まあ、マジ情報かどうかまではあたしには分からないけれど」

「そうね。でも今まで無かった展開っぽくて……気になるわ」

笛吹き魔は誰と喋っていたのか？もし彼（なのは分らないが）が真実黒くて大きな化け物だったとすれば、そんな者と（恐らく）平気で話していた相手もまた人では無い可能性が高い。

「笛吹き魔の正体は人間か、それとも化け物か。サク的には後者であって欲しいのよね？」

その言葉にそうねとさくらは返し微笑んだ。

一方コスプレ女についての話も部活中色々聞いた。陽菜のクラスメイトが彼女を目撃したらしい。

「散歩をしていた犬に思いっきり吠えられていたそうです。そのわんちゃん、とても大人しくてまず吠えることなどないそうなのですが……」

「犬が吠える位奇抜な格好ってことか……。犬さえびびるなんて、恐るべしコスプレ女」

ほのりは感心すればいいのか、呆れればいいのか良く分からず頬を掻く。

話を聞いて苦笑いしていた環は何故か急に真顔になり、おずおずと手を挙げた。何か言いたいらしい。四人は一斉に彼を見た。

「実はですね……僕、昨日例のコスプレ女らしき人物を見たんですよ」

それを聞き、噂話が大好きな女子共（佳花は除く）が驚きの声を

あげた。彼曰く、噂通り妙ちくりんな格好をしていたという。

「大昔からタイムスリップしてきたんじゃないかと思う位すごい格好でしたよ。現代日本の風景に笑っちゃう位合っていますませんでした。髪の毛も本当すごく長くて……地毛だとは到底思えません、あれは地面につきそうってというのは決して大げさな表現ではありませんでしたよ、ええ」

ちなみに環が彼女を見たのは桜町と三つ葉市の境位だったらしい。

「何というか、ものすごく気味が悪かったです。ふらふら歩きながら『愛している、愛している、貴方が欲しい、欲しい、どうしても私は貴方が欲しいの、愛している、愛している』ってずっと低い声で呟いていて。恍惚の表情を浮かべたり、急に暗い表情になったり……下手な怪談より怖かったですよ、本当。僕がすぐ近くを歩いていることにも全く気がついていない様子でした」

それ見てみたかったなあ、とほのりは興味津々。陽菜はと言えば、噂になる位すごい格好をしているコスプレ女さんも、私達と同じ乙女さんなんですねえ、と一人勝手に納得している。

「思わぬところで新情報ゲットね。コスプレ女は誰かに恋をしている。しかし色々危ないコスプレ女ちゃんに惚れられているなんて……。その誰かさんは可哀想ねえ」

「もう、櫛田さん。そうやって人を貶すようなことを言っただけは駄目よっ」

特に口を挟むわけでもなく静かに会話を聞いていた佳花が、ほのりをたしなめる。ほのりはごめんなさいと返したが、その口からペロっと舌が出ている。反省などしていないことが見え見えだ。

「でもあれじゃあ惚れた相手に何をするか分かったものじゃないで

すよ。刃物を手に、貴方を殺して私も死ぬとか言いかねない感じでしたし」

それを聞き、そんなにすごかったのか。見てみたかったとほのりが呟いた。怖いものみたさというか何というか。そう言われるとますます興味がわいてしまふのが人間というもの。

「でも確かに怖いわよね。何か恐ろしいことを引き起こさなければ良いけれど……」

さくらは不安な気持ちを顔に出しながら呟いた。佳花もその言葉に深刻そうな表情を浮かべて頷く。他の三人だって同じ気持ちだ。彼等は人の不幸を心の底から喜ぶような人間では無い。

「実際にやらかすかどうかは分からないけれど、コスプレ女には注意した方がいいかもねえ。無闇に近づかない方がいいかも？」

「そうね。詳しいことは分からないけれど」

しばらく沈黙が続く。その沈黙を佳花が手を叩いて終わらせる。嫌な気持ちを拭ってくれる、優しい笑みを浮かべて。

「さあ。お話はそれ位にしておいて……それぞれの作業に取りかかりましょう。早いうちに終わらせてしまえば、クラスでの作業により集中できるしね」

佳花の言葉に全員が同意し、再び静かな時間が部室に流れるのだった。

*

次の日は休日。さくらが向かったのは三つ葉市にある図書館。高校の図書室や桜町にある図書館は蔵書数が少ないから、大抵の本はここへ行って借りている。借りるだけで本を買うことは無いのかといえば、そうでもない。帰りに書店に寄って気に入った本を買うこ

とだって多い。本棚など幾つあっても足りなかった。

日本文学と児童文学（子供向けだからといって侮ってはいけない。大人だって楽しめる作品が沢山あるのだ）の本が並ぶ棚を物色し、面白そうなものを選ぶ。

本を数冊借り、幸せな時を過ごしたさくらは図書館を後にした。

図書館の次は書店に寄り、面白そうな新刊が出ているかどうか見てみる。少しだけ……のつもりだったのだが、結局一時間以上書店をうろろろしていた。

特に買いたい本は見つからなかったが、授業用のノートを買わなくてはいけないことを思い出しいつも使っているものを購入した。

図書館、書店へ行けばもう三つ葉市に用は無い。他にもお気に入りのお店が無い訳ではなかったが……。高いビルが並ぶ、建物が密集したこの街にさくらはあまり魅力を感じない。ごみごみしていて、騒がしく、美しい色彩が殆ど無い所に長時間居ても只気が滅入るだけだった。

さつさと家へ帰ってしまったおつと思うさくらだったが、歩いているうちに喉が渴いてきた。家に着くまでにはまだ時間がある。

（そういえばこの近くに公園があったわよね……。あそこで何か飲みながら少し休もうかしら）

三つ葉市の南側 桜町に近い方 には大きな公園がある。確かそこには自動販売機もあるはずなのだ。そこでお茶でも買って飲むとさくらは考えた。

公園は歩いて五分程の場所にあり、あっという間に着いた。

背の高い木々に囲まれたその公園は二つのエリアに分かれている。一つはレモン色の石を地面に敷き詰め、脚や肘掛の部分以外が木で作られているベンチを並べた憩いの場。もう一つはそこよりもやや

広く、地面が土の運動にもってこいの場所。その二つの場所を隔っているのが木とフェンスだ。

公園の入り口近くには自動販売機が三台程ある。その内一台はアイスの販売機。アイスもいいが、今はジュースを飲みたい気分だったからさくらはジュースの販売機の前に立つ。

カバンに入っている財布を探している内、隣の自販機に人が立った。何気なく隣に視線をやると、そこには篠宮静香が立っており、お札を自販機に突っ込んでいた。さくらは偶然自分の隣に同級生が来たことに驚き、財布を探す手を止める。

彼女は可愛らしいワンピースの上に白のカーディガンを羽織っており、普段より少し大人っぽく見えた。

さくらに気がつかない彼女は、ジュースを二本買う。

(何で二本……ああ、そうか)

彼女が牧田俊樹と付き合っているという話を思い出し、さくらは一人納得した。恐らく彼とデートでもしているのだろうと思った。

けれどちょっとした疑問がわきあがり、さくらはカバンの中に手を突っ込んだまま首をひねる。

(けれど、普通そういう時って彼女の方ではなく、彼氏さんの方がジュースを買いに行くような……そうでもないのかしら)

ジュースを両手に持った静香は何故か沈んだ顔をしながらため息をつく。それから程なくしてようやく自分のことをじっと見ているさくらの存在に気がついた。彼女はさくらを見て「あっ」と小さな声をあげる。

「う、臼井さん？」

「ああ、やっぱり篠宮さんだったのね。びっくりしたわ。……あの

……やっぱり、その、恋人さんと？」

「う、うん。まあ……その、そんなところ」

少しだけはにかみながら、笑う。だがしほむ風船のように、少しずつ表情が沈んだものへと変わっていった。楽しいデートのはずなのにどうしたのだろうとさくらは心配になった。

「どうしたの？ 何だか元気が無さそうよ」

さくらがそう聞くと、静香は口をもごもごさせた後、ちらりと後ろを見る。

そうしてから再びさくらを見、先程と同じようにため息を吐いた。

「それがね……。彼 俊樹の様子がちょっとおかしくて」

「おかしい？」

「ええ。何かちょっと元気が無いというか 水とかジュースをがぶがぶ飲むの……しかもかなり頻繁に。それにお昼ファミレスへ行った時も……いつも以上の量を食べていて……それでもまだ足りないうって風な顔をしているの」

「確かに、ちょっと妙ね。昨日とかはそんなことは無かったの？」

さくらの問いに静香は重々しく頷く。

「昨日まではいつも通りだったわ。でも今日になって……。お昼を食べた後、映画館に寄っただけねど」

「映画を見ている時も何か食べたり、飲んだりしていたの？」

「ええ。しかもまるで昨日から何も食べていないかのようにな、もの

すごい勢いで。大きなサイズのポップコーンとジュース、後チョコスだったかな……。映画になんてまるで集中していなかったわ。何か変だと思って、とりあえずここでちょっと休憩しようって言ったの」

「今もまだ調子が悪そうなの？」

その言葉に今度は力なく頷いた。

「ぼつつとしているか、水を飲んでいるかのどちらかしかしていないわ。おまけに散々食べたはずなのに……。さっきお腹の虫が思いつきり鳴って……。もう何が何だかさっぱり」

そう言って、黙り込む。一体何が原因でこんなことになったのか考えているようだった。さくらも考えてみる。

（単純に具合が悪いから？ けれど食欲が無くなったわけではなくて、逆にものすごい量を食べているみたいだし……。具合が悪くなつて食べても飲んでも満たされなくなる……。そんなことってあるのかしら？）

何も思い浮かばず、口元に人差し指を添えながら唸る。

「……笛吹き魔のせいかな」

沈黙を破ったのは静香の方だった。さくらは予期せぬ言葉にぽかんとする。

彼（？）の名前が何故そこで出るのか。

（ああ、そういえば櫛田さん 笛吹き魔は牧田君の家の近くで止まっているらしいって言っていたっけ。けれど、それと今回のことがどう関係していると言うのかしら）

返事が無いさくらを見た静香は、俊樹の家の近くに笛吹き魔が現われていることを話してくれた。彼と家が近い静香もまた、笛吹き

魔の演奏を毎晩聞いていたらしい。

「どうもね、俊樹は笛吹き魔の笛を聴くと変な夢を見てしまうようなの。目を覚ますと内容は殆ど忘れてしまうらしいのだけれど。兎に角変な夢なんですって。私や、私の家族はそういう夢なんて見ないのに。……その変な夢を見るせいで調子が悪いのかなと思う……それ位しか心当たりが無いし……あ、でも」

「どうしたの？」

「今回、いつもの時間に笛吹き魔が現われなかったの。だから、久しぶりに笛吹き魔の笛を聞くことなく眠ったのよ。その前の夜も途中で演奏が終わって……俊樹曰く男の人と女の人が喋っている声をその時間いたとか……」

笛吹き魔が現われなかった？その事実にはさくらは驚いた。ここしばらく毎晩現われていた彼が。

「笛の音が聞こえなくなった途端具合が悪くなる……そんなこと……やっぱり笛吹き魔は関係ないのかしら？」

さくらに問いかけているというより、独り言に近い喋り方。

「笛吹き魔はもう現われないのかしら」

「さあ……でも、まあ居るより居ない方が断然いいわ。眠りが妨げられて寝不足になったということはないけれど、やっぱり……気味が悪いし。それより今は俊樹の方が心配で」

大切な人を心配する彼女の顔は、長年連れ添ってきた夫の体調を案ずる妻のようであった。さくらは二人がラブラブカップルではなく、おしどり夫婦と呼ばれている理由が何となく分かった気がした。

(それにしても、牧田君はどうしてしまったのかしら？ 笛吹き魔と彼の体調は関係しているのかしら。笛吹き魔が夜現われなかったという話も気になるけれど)

考え込むさくらに「ごめん、変な話をして。聞いてくれて有難う」と一言礼を言った静香はジュースを手に俊樹の所へ戻ろうとする。

「待て！」

その時大声で誰かがそう叫んだ。

「俊樹？」

その声を聞き、静香は彼の名を呟く。叫びながら走っているのは男で、自分達と同じ歳位に見えた。

こちらに近づいてくる内顔がはっきりと見えてくる。その顔は教室内で見かけた覚えがあつた。彼はさくらの曖昧すぎる記憶が正しければ、静香が呟いた名前を持つ少年……牧田俊樹であつた。

彼は必死な形相を浮かべながら走っている。どうしても捕まえない相手を追いかけているようだった。その相手が誰であるのかさくらには皆目見当がつかないが、静香でないことは確かだろう。

「ちよつと、俊樹？」

静香が彼に声をかけたのは、丁度二人がすれ違う瞬間だった。彼女に声をかけられて振り返った俊樹が手をぶんぶん振る。

「悪い、今日は俺帰る！ 本当ごめん！ また後でメールするよ！」隣に居るさくらになど目もくれず、静香の制止も聞かず、公園を歩く人々の間を縫いながら、あつという間に立ち去つた。

さくらは俊樹の顔を間近でちらつとしか見なかつたが、静香の言う通り少し具合が悪そうだった。本当は全速力で走れる程万全な体調では無かつたのかも知れない。

(何だか気合で走っているって感じだった……)

それにしても彼が、自分のことを心配してくれている彼女を放つてまで追いかけた相手とは誰なのか。

何が何だか訳が分からず、顔を見合わせ、二人仲良く首を傾げるのだった。

*

あの人が私を呼んでいる。今、私だけを見つめてくれている。

嗚呼、その真っ直ぐな瞳、耳を痺れさせる声、少し癖のある髪！その全てを私は手に入りたい。全て、全て。

手に入りたい……いいえ、手に入れる。きつと、手に入るわ。

悲恋なんかには絶対にしないわ。体が蕩けてしまいう位甘くて熱い恋にしてみせる。

きつと出来るわ。私にだったら、出来る。

第四十七話：我が愛しのエンデュミオン（2）

* 「出雲は今日、貴方達と会う気分じゃないって。……だから、帰って」

お茶やお菓子をご馳走になるついでに（懲りもせず）笛吹き魔等についての話をしようと思っていたさくらと紗久羅を待っていたのは、手厚い歓迎ではなく、拒絶。

呼び鈴が鳴らされるのを聞いてやって来たらしい鈴は、扉を少しだけ開け、刺々しい声色でそれだけ言うと乱暴に扉を閉める。ちょっと何だよ、という紗久羅の抗議に対して聞こえてきたのは、扉の鍵を閉める音だった。

満月館に遊びに行つて、お茶などをご馳走になるのが半ば日常化してきていた二人。今までここまであからさまに拒絶されることは無かった（面倒臭そうな顔、嫌そうな顔で迎えられたことは度々あったが）から、もうただ呆然とするしかない。

しかしこんな所でぼうつとしていても仕方が無い。こちらの世界を出雲無しで歩いたことは無いし、何が起きるか分からないから暇つぶしにこの辺りを散策する勇氣も無い。

どうしても出雲と話がしたいわけでもなかったから、二人は素直に引き返すことにした。桜山の近くには『桜〱SAKURA〱』がある。そこでお茶でもしようと紗久羅が提案する。

「あそこだったら弥助が居るし。話を聞いてくれるかも」

「そうねえ……けれど、この時間だとお客さんがいるかもしれない

から、あまりお話できないかもしれないわ」

実際その通りで、喫茶店には何人か客がいた。弥助も今回はさくら達ばかりに構っている暇はなさそうだった。

弥助に注文を聞かれた時、さくらは笛吹き魔を知っているかと彼に問う。どうやら知っているらしい彼の顔は、何故かとても歪んでいた。

「知っているよ。そいつやコスプレ女の噂話は耳にタコが出来る程聞いた。……どうせあんた等も気になっているんだろう、笛吹き魔のこと」

気になっていないはずがないよな、と大した断言っぷり。しかし凶星であるから、断言するなよ！と文句を言うことも出来ない。

「あつしも何度も聞いている内に気になってきたつすよ……今度情報を集めようかと思っている。今は笛吹き魔によって何かしら被害を受けたって話は聞かないが。放っておくわけにもなあ」

二人の注文を受けながら呟く弥助。そんな彼にさくらは静香と俊樹のこと等について話そうとしたが忙しいのかさつさとその場を離れてしまった。

さくらと紗久羅は注文したものを待つ間、話をする。

「ここの所毎晩来ていたはずの笛吹き魔が来なくなった。しかもその前の夜には笛吹き魔の演奏が途中で終わり、誰かと話した後消えていった……先輩達の話信じるなら、そういうことになるよな」

「ええ。笛吹き魔の目的は何なのかしら。わざわざ同じ道を通って、同じ場所で立ち止まる位だから……何かしら目的があると思うのだけれど」

「けれど笛吹き魔は金曜の夜には現われなかった。もし昨日の夜や今日の夜に現われなかったら……」

「もう、来ることは無いかもしれないわね。金曜の夜に彼の目的は達成されたのかも」

「誰かと話していたらしいけれど……その話し相手と会うことが目的だったとか？ 笛はそいつを呼ぶ合図のようなものだったとか。そいつがなかなか自分の前に現れないから何日も続けて吹き続けていたが、とうとう相手が現われ、目的は達成された。夜に吹くのは、その相手もしくは笛吹き魔自身が夜にしか活動できないから……とかじゃないか？」

自信無さそうな紗久羅の声。ただ他人から聞いた嘘か本当かも分からない話だけを頼りに考えるしかないのだから無理は無い。

「そうねえ……。笛吹き魔が笛を吹いていた理由も気になるけれど、牧田君もことも気になるわ。笛吹き魔の演奏と、彼の様子がおかしくなってしまったことと関係はあるのか、ないのか」

「突然ご飯を必要以上に食べるようになって、水分も異常に摂るようになった。彼女である篠宮先輩は気が気じゃないだろうな。ある日突然っていうのが引つかかるよな。ストレスがものすごくたまっている、それが爆発しておかしくなった？ それとも何かの病気？ 笛吹き魔の演奏が牧田先輩にとってものすごいストレスになっているとかかなあ。けれど、家が近い篠宮先輩は元気なんだよな」

「らしいわ。まあもしかしたら牧田君以外に具合が悪くなった人が居るかもしれないけれど……。けれど牧田君の具合が悪くなったのは、笛吹き魔が来なくなっただけなのよ……本当、よく分からないわ」

少ない、しかも不確実すぎる情報が元に考えても、答えは見出せそうに無い。

「弥助が今度情報を集めてみようかなとか何とか言っていたよな。そうすればもつと色々な考えが浮かぶかも。まあどうしたって答えにはいきつかないような気がするけどね。仮に答えが出たとしても、笛吹き魔に会わないことにはそれが正しいかどうか分からないし」
最初に出された水をちまちま飲む紗久羅を見ながら、さくらは静かに頷く。

そして今度はコスプレ女の話になる。

さくらが環から聞いたコスプレ女の話をしてやると、紗久羅は何それ気持ち悪いと顔を歪めた。

「それが本当だとしたら、コスプレ女って超危ない女じゃん。マジで何をするか分からない感じ。ていうか何者なんだよコスプレ女って。最近になって目撃されるようになったみたいだけどさ」

「そうねえ。普段はとても大人しい犬にさえ吠えられちゃうような格好をして、この辺りを歩き回って……何か目的でもあるのかしら？」

「目的ねえ……どうだかなあ。目立った格好をして皆の視線を浴びたかったとか、愛しい王子様に自分の存在をアピールするためとか、それとも元々コスプレとかが好きで、ふと奇抜な格好をして街を歩きたくなっただけなのか……。しかし地面につきそうな位長い髪のかつらってそう簡単に手に入るものなのか？ 昔のお偉いさんの衣装とか……自分で作ったのだとしたら、すごいよなあ。ある意味」

紗久羅の疑問にさくらは困ったような笑みを返すしかない。コスプレなどに興味を持ったことがないから、そこら辺のことはよく分

からない。

結局良い考えが思い浮かぶことはなく、二人は甘いお菓子に舌鼓をうつた後、大人しく家へ帰った。

（笛吹き魔とコスプレ女は何者なのか。牧田君がデートをやめてまで追いかけた相手は誰なのか。……そして何故牧田君は急に沢山飲んだり食べたりするようになってしまったのか。笛吹き魔の笛と、そのことは関係しているのか……分からない。全然、分からない）

*

月曜日、いつもと同じ時間に教室へと入ったさくらはいつも通り本を広げる。

しかしいつものように読書に集中は出来なかった。彼女は本を読むフリをしながら、やや離れた席に座っている俊樹の様子を見ている。

彼は友人達と喋っており、何かおかしなことでも聞いたのか大笑いしている。

見た感じ、今も具合が悪いようには見えなかった。

休憩時間などにもさりげなく彼へ視線を向けるが、特別変わった様子は無い。

（体、すっかり良くなったのかしら？）

さくらはそう思おうとした。だが、出来なかった。

彼が真実元気になっていたのなら、当然静香も笑顔でいるはずなのに。彼女は土曜日会った時以上に暗い表情を浮かべていたのだ。時々俊樹の方をちらりと見ては小さくため息をついていた。

何故彼女がそんな表情を浮かべているのか。俊樹は元気になった

わけではないのか。どうしたのか、と彼女に直接聞きたいのは山々だったのだがどういう風に、どんなタイミングで声をかければいいのか分からない。そもそも彼女とまともに話をしたのなんて、先日が初めてのことだったのだ。下手に話しかければ周りの人が、何故さくらが静香に話しかけるのだろうと訝しがるだろうし、不特定多数の人間の前で話す内容でもないし……。

普段特定の人以外とコミュニケーションをとることがないから、どうすればいいのか分からず悩んでいる間に時間だけがただむなしく過ぎていく。

このまま彼女にその後どうなったか聞くことは出来ないのだろうかと半ば諦めかけていた。

しかしそんなさくらに絶好のチャンスが訪れる。放課後、部室へ向かおうとしていた彼女を静香が引きとめたのだ。

さくらは驚きつつも、運んでいた足を止める。どうしてさくらが静香に声をかけられているのだろう？と首を傾げているほのりに「先に行っていて欲しい」と告げた。

「何だかよく分からないけれど……まあ、いいか。それじゃあ先に رفتっているからね」

「ええ、有難う」

ほのりを見送ったさくらと静香が向かったのは学校の中庭。木々や花に囲まれたベンチに二人腰掛けた。二人を知る者がその光景を見たら、一体何がどうなっているんだ？と首を傾げるに違いなかった。

「土曜日はごめんなさいね。何かみつともないとこる見せちゃって」

「そんな。謝る必要なんてないわ。……あ、あのそれで……」

わざわざこんな所まで連れてきたところを見ると、静香はさくらに何か話したいようだ。俊樹のことを聞くなら今がチャンス。だがなかなか言葉が出ない。

その様子を見た静香が苦笑いした。

「俊樹のこと、でしょう？ 私も、そのことを話したくて。土曜日のことを知っている臼井さんになら話しやすいかなと思って」

「牧田君、見たところ調子が良さそうだけれど……本当のところはどうなの？」

「多分体の具合は土曜日よりよくなっていると思う。さり気なく彼のお母さんにも様子とか聞いたんだけど……特に変わったことは無いって言っていたわ」

でも、と静香は続ける。

「俊樹、一見元気そうに見えるけれど……多分無理している。誰も気づいていないみたいだけれど、私には分かるの。彼が無理をしている時に浮かべる表情を……私は、知っている。付き合い、長いから」

静香はそう言って少し照れくさそうに笑う。

「付き合いが長いとそういうの、分かっちゃうんだ。私は一夜と幼馴染だけれど、あまりそういうの、分からないわ。……元々鈍いから」

「臼井さんがそう思っているだけで、実際はそうでは無いかもしいわ。他の人は決して気がつかないことに、気がつくこともあるかもしれない……何だか、話がそれちゃったね」

そうね、とさくらは困ったように笑う。逆に静香の顔は沈んだも

のへと変わっていく。

「俊樹、何か悩み事を抱えているんじゃないかなって思うの。周りの人 私を含めて に話すことが出来ないような悩みが……。私、思うんだけれど……。その悩みは、土曜日俊樹が追いかけた人と関係があるんじゃないかなって」

俊樹はその後「具合は大分良くなった。心配かけてごめん」と電話をしてくれたらしい。だが、自分が誰を追って走っていったのかについては静香が幾ら聞いても話してくれなかった。

「何でもないって……。その一点張りで。でもそう言う声はどこか上擦っでいて。一瞬浮気でもされているのかなって思ったんだけど……。でもそうじゃないと私は思うの。何となくだけれど。白井さんは、俊樹が誰を追いかけていたのを見ていない？」

半ばすがりつくように静香に聞かれ、さくらは困惑する。さくらもまた、俊樹が追いかけた相手を見ていないのだ。申し訳無さそうに首を横に振ると、静香はそうよね……。と力なく呟き、俯いた。

「俊樹、絶対おかしい。……。今日のお昼にも、変なことがあったの」

「変なこと？」

静香が頷く。

「私達よく一緒にこの中庭でお弁当を食べるのだけれど……。ベンチに座った私に、先に食べていてと言ってどこかへ行ってしまったの。最初はトイレかなって思っていたんだけど」

「……。そうじゃなかったの？」

「多分。……。戻ってきた俊樹の口元に何かがついていたの。透き通

った水色のかけら　　飴か何かだと思っの「

「飴？」

静香がこくりと頷く。

「よく見てみたら口の中にもそれらしきものがついて……。変でしょう？　お弁当を食べる前に飴を食べるなんて。誰かから貰ったのならご飯を食べた後に舐めればいい。……わざわざ私に隠れてご飯を食べる前に飴を　多分舐めたんじゃないやなくて噛み砕いたんでしょうね　食べる理由が分からないの。実は俊樹が飴を食べていたらしきところを見かけたっていう人が居て……。巾着袋のようなものから何かを　飴だと思っけれど　を沢山取り出して、狂ったように食べていたらしいの。しばらくして俊樹とその人の目があつて……。俊樹は、気まずそうな表情を浮かべながら逃げるようにその場を去つた」

そして私のところに戻ってきた……。静香は苦しげに言葉を吐き出す。言葉はやがため息となり、空気を重く沈んだものへと変えていった。

「それと、この前のことが関係しているのかは分からない。けれど何だかもう、どうしようもなく不安なの。考え過ぎだと思ったい……。そうであつたらどれだけ良いか　けれど、絶対違っ。俊樹は今、何かに苦しんでいる。私には分かる。でも、どうしたらいいのか……」

さくらは異性を好きになつたことはない。けれど、大切な人達なら居る。その人達の様子がある日突然おかしくなつてしまつたら、さくらだつて不安になる。

顔を手で覆い、しばしの間俯いていた静香ははつと顔をあげ、さくらを見る。

夢中になつて話している内にさくらの存在を忘れてしまつていた

のだろうか。

「う、ごめんなさい。こんな変な話しちゃって……」

「いいえ。そういう思いは誰かに吐き出した方がきつと楽になるわ。あと紙とかに書いてみるのも良いらしいわよ。客観的にその出来事を見る事が出来るって……ええと、そんなこと言ってもしょうがないわね……ええと」

「ありがとう。白井さん。……少しだけ楽になった」

「そんな、とんでもない。もしまた何かあつたら、私に言つて。色々答えることとかは出来ないけれど、でも、お話を聞くことなら出来るから」

そうして話を終わりにしようとしたが、まだ聞いていないことがあつたのを思い出した。

「そういえば篠宮さん。笛吹き魔はどうなったの？」

立ち上がっていた静香はさくらを見下ろしながら、静かに首を振る。どうやら出ていないらしい。

「あれから、あの笛の音は少しも聞こえない。近所の人にも聞いてみたけれど、皆聞いていないって」

矢張り笛吹き魔は現われなかった。彼が笛を吹く理由はもう無いのだろうか。

「あの笛の音が聞こえなくなつて、皆ほつとしているわ。私だつてそうよ。確かにとても綺麗な音色だつたけれど……でも同時に気味が悪くて……何か嫌だつた。本当、人間が吹いているとは思えないものだつたわ」

彼女が言う通り、恐らく笛吹き魔は人間では無いのだろう。

静香は改めて話を聞いてくれたお礼を言うと、足早に去っていく。さくらもそれに続くように立ち上がり部室へと入る。彼女の姿を認めたほのりは「思ったより遅かったね」と言うだけで、彼女と何があったかについては聞こうとしなかった。聞かれたとしても上手く説明できなかっただろうから、有り難かった。

その日の部活も約一カ月後にある文化祭の準備を進め、佳花の手作りクッキーを食べて終わった。

帰り道、何故か教師数人が校門の辺りをうろろろしていた。どうしたのだろう、と不思議に思いながらもさくらは学校を離れていく。

やや早足で向かった先は喫茶店『桜』SAKURAだ。学校から行くと結構な距離があるが、さくらは少しも気にしない。そして店に入るや否や、やや暇そうにしている弥助に、昨日話すことが出来なかった静香と俊樹のことを話した。

二人のことを知っていた弥助はそれを聞くと、心配そうな表情を浮かべ、唸る。

「そりゃあ心配だなあ。もしかしたらあつし達側の住人が関わっているのかもしれない……まあ、話を聞いただけじゃ分からないがとりあえずそこら辺のことと一緒に調べた方がいいかもな。明日は休みだし、いっちょやってやるか」

出雲とは違い渋ることも、面倒と言うこともなく彼はそう言う。きつと彼ならば色々掴んでくれるに違いない。さくらは弥助を信じ、紅茶を一杯飲んだ後帰った。

*

「ガキンチヨ共、恐怖の不審者情報が入ってきたぞ」

時は朝のSHR。出欠確認を終えたクラス担任 『姫ちゃん先

生』こと姫野晶つるのあかりが学校近くに現われたらしい不審者についての話を始める。彼女は紗久羅同様男勝りな先生で、口は悪いが生徒思いであるから意外と人気があった。

不審者という単語を聞いた生徒の一人が「露出魔ですか？」と手を上げながらふざけた口調で尋ねる。晶は首を縦ではなく横に振った。後ろの下の方で一つに縛った髪が揺れる。

「それが違うんだなあ。その不審者っていうのはむさ苦しいおっさんでも、強面の兄ちゃんでもなく　若い女だったらしい」

「若いお姉ちゃん？　姫ちゃん先生、その姉ちゃん美人だったの？　美人が色々露出しちゃったの？」

エロいことしか頭に無い男子生徒の言葉を晶は「馬鹿」と一蹴した。

「露出魔じゃねえと言っておろうが。後、美人かどうかは知らないよ。あたしはそいつを見ていないし」

その答えに男子生徒達が一斉に口をすぼめてぶーぶー言い出した。

「ええ、姫ちゃん先生役立たず」

「でも大体の女は姫ちゃん先生より美人だよな」

「じゃあ少なくとも姫ちゃん先生よりは別嬪な姉ちゃんだったってことだな」

無論、本気でそんなことを思っているわけではない。分かっているながら、からかう為にクソガキ共はそんなことを言っているのだ。

「うるせえ、クソガキ共。生意気なことばかり言っていると、その舌ちよん切るぞ」

閻魔もびつくりな恐ろしい形相で生徒達を睨みつける。だが生徒達にはそれ程効果は無い。彼等は怖がってもいないのに怖がっているフリをし、わざと体を震わせた。

「姫、姫がご乱心じゃあ」

「へへえ、姫様平にご容赦を」

等とひれ伏すようなポーズをとりながらふざける男子も居た。それを見た女子達がきゃっきゃと笑っている。

「てめえ等、姫様の言うこと聞かないと 国語の宿題増やしてやるぞ?」

どう見ても体育会系でありながら、実は文系人間である晶。彼女が放った恐怖の一言によってようやく茶番劇は終わりを告げる。

再び晶は女性の不審者について簡潔に話し始めた。

その女に会ったのは、分かっている範囲では三年の女子三人組と二年男子一人、一年女子が一人。もしかしたら他にもいるかもしれないとのこと。

女は生徒を引き止め、いきなり訳の分からないことを言い出した。訳が分からないといっても外国語とかだったというわけではなかったようだ。

日本語ではあった。だがいまいち意味が分からなかったらしい。

「散々訳の分からないことを一人でぶつぶつ言った拳句、今度は私の愛する人を恋人にしていた幸福な女性はこういう人なの、とか私の 何か外国人っぽい名前だったらしいが はどんな人なのか教えてとか、よく分からないことをしつこく聞いてきたらしい。…とりあえずお前等、気をつけるよ。後、昨日この女に絡まれたっていう奴が居たら、先生に報告するように、以上」

そう締めて、彼女は詳しいことがのっているプリントを配り、他の連絡事項を述べると教室を出て行った。

さくらは一時間目の授業に使う教科書等を机の上に置いた後、先程貰ったプリントを眺める。

(昨日先生達が校門の近くをうろつろつしていたのは、これが原因だったのね)

不審者である女は見た目二十代後半位、細身で背丈は普通。髪の毛は長く、お嬢様っぽいおしとやかな雰囲気だったと書かれている。女は数回に渡って高校近くに現われ、半ば無理矢理生徒数人を引きとめたのだという。

授業が始まる前にトイレへ行こうと立ち上がったさくらは、前の方に座っている静香にさりげなく視線を向けた。

(…………?)

静香は先程のさくらと同じように、あのプリントを見ているようだった。だがその表情は酷く険しいもので、手は心なしか震えている。

次に俊樹の方へ目を向ける。彼もまた眉間に皺を寄せながらプリントを凝視し、やがてそれを一気に丸めると乱暴に机の中へ。

二人のその様子に、さくらの不安はより一層掻き立てられていく。静香にどうかしたのか、と声をかけたかったが矢張り上手くタイミングがつかめず、話しかけることは出来なかった。

彼女に話しかけることも、彼女から話しかけられることもないまま、三時間目の授業が終わる。お弁当組は教室へ向かい、購買・食堂組は早足でそちらへと行った。

「姫ちゃん先生が朝言っていた不審者って、案外コスプレ女のこと

かもしれないわね」

「え？」

「まあコスプレはしていなかったみたいだけど？ 環の話を聞く限り、コスプレ女は誰かに恋をしている危ない女だったわけでしょう？ どうも今回現われた不審者ちゃんも誰かのことが好きで、その人について聞きたかったみたいだし。微妙に共通点があるじゃない」
確かに、似ていると言えば似ているかもしれない。コスプレ女だって常時コスプレをしているわけではないだろう。今回は私服で行動していた可能性だってある。

「不審者ちゃんが話した内容って具体的にどんなものだったのかしら。何か訳が分からないものだったらしいけれど」

「プリントにも詳しいことは書いていなかったし……不審者さんに会った人達自身、具体的に何と言われたのか理解できなかったのかも」

口元に手をやり、考え込むさくら。そんな彼女の肩を、誰かが力強く叩いた。

その衝撃にびくつと体を震わせ、振り返ってみればそこには授業を終えた帰りらしい晶が居た。手に持っている国語の教科書が全くといっていいほど、似合っていない。ウェイター姿の弥助並に、似合っていない。

「何だ臼井、不審者野郎 野郎じゃなくて女か に興味でもあるのか？」

「え、あの、その、ええと……まあ、そんなところです。姫野先生は彼女がどんなことを話していたのか、ご存知ありませんか」

「一応知っているよ。そいつに絡まれたっていう生徒の一人から話を聞いたから。……ただ具体的には殆ど覚えていなかったらしいがな。唐突に何の脈絡も無いことを言われたら頭が真っ白になるから皆殆ど覚えていなかったらしい。その生徒が言うには、蛍の光がどうとか、川を流れる紅葉とか、女の唇がどうとか言ってきたらしいな」

さくらはぼかんとし、一緒に話を聞いていたほのりは「はあ!？」と素っ頓狂な声をあげる。

「しばらくすると笑って『貴方達ってこう言っていると皆同じ顔をするのね』とかなんとか言い出したらしい。不審者女と最初に会ったらしい三年女子生徒達は『どうして何も言ってくれないの?』と怪訝な顔をされたらしいな。ちなみに彼女達は月の下の水晶とか、舞う女とか……やっぱ訳の分からないことを言われたようだ」

絡まれた奴等は本当にかわいそうだ、さぞかし気味が悪かっただろうなあ……と晶は同情の言葉を口にする。その言葉に、二人共同意した。

「まあ、お前等も気をつけるよ。もしかしたら今日だって来るかもしれないからな」

ぼん、と胸を叩く晶はそこらにごろごろ転がっている男たちより男らしかった。巫女の桜も彼女のような感じだったのだろうか、とさくらは心の中で思う。

その場を去る彼女を見送った後、ほのりは相変わらずカッコイイよねえと感心の声をあげた。そうね、カッコイイわね、とさくら。

「しかしそれにしても、想像以上に意味の分からないことを言っていたのね、例の不審者ちゃん。主な目的は想い人の話を聞くことだったようだけれど」

「もし彼女が東雲高校の生徒にだけ話を聞いたのだとすれば 不審者さんの想い人は東雲高校の生徒、もしくは教師の可能性が高いつつことよね」

「不審者ちゃんは、外国人っぽい名前を口にしたのよね？ 確かにこの学校には何人か外人がいるけれど……皆ごく一般的な名前だから……流石に聞かれた人達も覚えていると思うのよね」

案外、不審者ちゃんの妄想世界にだけ存在する人なのかも、とほのりは付け加え、気持ち悪いと言わんばかりに舌を出す。

そちらの可能性が高いかもと思う一方で、さくらはもやもやした気分も抱いていた。

(そういえば篠宮さんと牧田君は食い入るようにあのプリントを見つめていた もしかしたら違う紙だったのかもしれないけれど プリントを見ていたとして、どうしてあんな表情を浮かべていたのかしら。二人共、何かを知っているのかしら……)

それから午後の授業を終え、放課後になった。

さくらは休憩時間などに、俊樹の様子などを伺ってみる。昨日は元気そうに見えたが、今日は何だか酷く疲れているように見えた。ぼうつとしていて、友人の話す声にも殆ど反応を示していない。

(何だか、元気がなさそう……)

不安な気持ちがちがどんどん膨らんでいく中、全ての授業が終わり、放課後となる。

さくらは部活へ向かう途中で昨日と同じように静香に声をかけられた。そして再び彼女と一緒に中庭を目指す。

黙々と足を運び続ける彼女は、今にも泣きそうな表情を浮かべている。心の中では、涙を流しているのかもしれない。さくらはこういう時どうすればいいのか分からず、結局無言のまま彼女についていった。

今日は中庭にあるベンチには座らず、庭に生えている木に体を預けることにした。少し黄色っぱい葉に覆い被されながら、話を始める。

「臼井さん……やっぱり、俊樹、どんどんおかしくなっていくよ。おかしいよ。あのね……」

苦しい声。静香は一呼吸置いた後、話を続けた。

「俊樹が、見知らぬ女の人と手を繋いで歩いていたんだって」

第四十八話：我が愛しのエンデュミオン（3）

＊
その言葉を聞いて、さくらは愕然とする。

（女の人と？ 手を繋いで歩いていた？）

「それって……」

「……と思うでしょう？ 私も聞いた時、そう思った。頭の中、真っ白になった。けれど、どうもそうではないらしいの」
え？とさくらは聞き返す。浮気でないとしたら、一体何だというのだろうか。

「いつもは一緒に帰るのに、昨日は一人で帰るって言って……一足先に帰ったはずの俊樹。でも俊樹は真っ直ぐ家に帰ったわけじゃなかった。彼が家に帰ったのは夜遅くのことだったみたい。……俊樹は数駅先の街に居たらしいわ。その街に住んでいる友達の一人が、偶然彼を見かけたみたい」

その友人が彼を見かけたのは、夕方頃。俊樹は少し年上らしい、見覚えの無い女性と歩いていた。

「これはもしかして……そう思った友達は、上手く人ごみに紛れて俊樹に気づかれないようにしながら……二人の様子を見ていたらしいの。その友達曰く……俊樹は、ものすごくうかない顔 というか、それはもうとてつもなく嫌そうな表情を浮かべていたらしいの。罪悪感というより、あからさまな嫌悪感……。嫌々その女の人と手を繋いでいる感じだったって」

「その女の人の方は？」

「ものすごく幸せそうな表情を浮かべていたらしいわ。しきりに俊樹に話しかけていたらしいけれど、俊樹は殆ど聞き流していた感じだったって」

「つまり……女の人は牧田君に好意をもっているけれど、牧田君の方は全然そういう感情を抱いていない　てこと？」

「分からないけれど、多分そうだと思うと静香が頷いた。

「友達はしばらく彼らの後をつけていたが、終始そんな様子だったらしい。」

「やがて二人は駅へ向かっていったという。恐らく帰ったのだろう。」

「……他にも、俊樹とその女の人を見たっていう人が居たの。駅や三つ葉市にある喫茶店とかで見かけたんですって。けれど皆口を揃えて言うの。あれは浮気とかそういう感じには見えなかった　無理矢理付き合わされている感じだったって。言い争っているような場面を見たって人もいたし」

「無理矢理。その言葉にさくらは恐怖を覚え、息を呑む。目撃した人全員がそう言うのだから、嘘ではないのだろう。」

「何故、俊樹がその人と一緒に行動したのか、理由は分からない。もしかしたら断ることが出来ない理由があつたのかもしれない。……ねえ、臼井さん。この前の土曜日　俊樹が追いかけたのは、その女の人だったんじゃないかしら」

「ああ……さくらは思わずそう呟いた。そしてそうかもしれないわね、と続ける。」

「金曜日までは、あんなに元気で、少しも悩んでいる様子はなかった　とすれば、金曜日の夕方　私と家の前で別れてから　そ

の人と何かがあったんじゃない……そうとしか考えられない……でも一体何が」

これは静香の独り言だ。かなり混乱しているようで、さくらは見ていて辛くなる。

気のせいよ、そんなの。そんな風に言っ

そうよね、きっと気のせいだよって答えて、笑って。

そんな風になれば、どれだけ良いだろう。

「……昨日、不審者が出たって先生言っていたよね」

「え、あ、ええ……」

「その人にはどうも好きな人が居るらしいって話だけれど。それ、もしかしたら」

さくらをじっと見つめる静香の瞳。その瞳を見れば、彼女が何を言おうとしているのか容易に想像できる。

不審者の女性　彼女の想い人は、牧田俊樹かもしれない……そう、言いたいのだ、静香は。

「二十代後半位で、長い髪で、お嬢様みたいな雰囲気……そうか書いてあったわよね、プリントに。俊樹と手を繋いでいたっていう人もそんな感じだったみたいなの。それでね……お昼、一緒にお弁当食べている時さり気なく不審者の話をふってみたの。そしたら、表情が　体が一瞬で凍りついて……。しばらくした後、無理矢理笑顔を作って、そんな奴の話なんかやめて、他の話をしようって言った　その声が、とても、上擦っていた……」

おまけに今日も俊樹は、弁当を食べる前にどこかへ行っただけらしい。恐らく今日も『飴』を食べたのだろう。口元に飴のかけらはない。いなかっただが、吐き出す息が微かに甘い匂いをだしていたという。

おまけにいつもは幸せそうに食べるお弁当も、全然美味しくなさ

そうに食べたのだという。機械的に箸を運び、口に入れ、適当に噛んで飲み込む。静香はそれを見て背筋が凍りつき、涙が出そうになったと語った。

「具合が悪いのって聞いても、そんなことはないの一点張りで。そんなわけ、ないのに。一目で、分かるのに。私が何も気づいていないと……そう思っているはずなんて……ないのに」

「牧田君が食べていたってという飴も　その……牧田君と手を繋いでいたってという女の人から貰ったのかしら」

そうだと思う、と静香は頷いた。絶対に食べると脅されているのかもしれないと続け、沈黙する。

（お弁当を食べる前に食べるって、その女の人が言ったってこと……？　大量の飴を……）

それは静香に対する嫌がらせだろうか。

静香が作るお弁当を、俊樹に美味しく食べさせないようにするために。甘い飴で口の中をおかしくさせておいてから、お弁当を食べてもらおう。

（もしそうだとしたら　酷いわ）

普段のんびりほわわんとしているさくらにだって怒りの感情はある。自分の推測通りだとしたら　そんなの　許せないと、思った。

しかし仮にさくらや静香の考えた通りだとして。何故俊樹は素直に女の言うことを聞いているのだろうか。弱みを握られたからだろうか。だが、飴を昼食の前に食べたかどうかなど、彼女には確認しようがない。飴を食べるタイミングは特に指定されていないのだろうか。それなら何故お昼の前に飴なんかを。

考えても、答えは出てこない。

「その女の人が誰なのか分かれれば良いのに。その人の類一発でも叩いてやらなければ、気が済まない」

ぐっと拳を握りしめる。俊樹を尾行してでもその女の正体を突き止めてやる、という強い意志が現われているように見えた。確かに直接その女にあつて追及するのが一番だとさくらは思う。だが、一方で素直に彼女の考えに賛成できない自分も居た。

もし俊樹と手を繋いでいた人物が不審者女やコスプレ女と同一人物だとすれば、彼女はかなり危ない人間ということになる。そんな人相手に変なことをすれば、何が起きるか分かったものではない。

「篠宮さん、お願い。無茶はしないで。相手がどんな人なのかはつきりしないんですもの。牧田君と一緒に居るためなら、何でもするという人なのかもしれない。もしそういう人だったら 危険よ。篠宮さんに危害を加えるかも……親御さんや先生に相談した方が、良いと思うの」

「優しいのね、白井さん。心配してくれて有難う」

彼女は感謝の意を述べる。だが、無茶なことほしないで欲しいという願いに対する答えは返ってこなかった。彼女はまた明日、とだけ言つてその場を去る。

さくらは不安で仕方が無い。彼女が何もしないという保証があれば安心できたのだが。

静香の代わりに自分が先生にこのことを話せば良いのだろうか。だが赤の他人がそんなこと勝手にして良いものだろうかと思う。そもそも現状を他人に上手く説明出来る自信がない。

結局その足が職員室に向かうことは無く、さくらは真つ直ぐ部室へ向かうのだった。静香が危ないことをしないことを願いながら。

今日は全く部活動に集中できず、他の部員が心配する位沢山のた

め息をついた。

*

(白井さん、ごめんね)

さくらの願いに反して、静香は今俊樹の後をつけていた。今の所彼は気がついていない。俊樹は桜町のある方へ背を向けて歩いていった。その足取りは見ているこちらが辛くなる位重いものだ。

俊樹はなるべく人目につかないよう、わざと人通りの少ない道を選んでいようだった。大きく広い道から伸びる狭く、日の光も殆ど伸びないような道はさびしく、その道に隣接する家から木の香りがする。静香は胸の辺りを押さえながら彼と一定の距離を置いて歩いた。今の所気づかれてはいないようで、彼が後ろを振り返ることもなかった。

(それとも、周りの音が聞こえない位追い詰められているのかしら)
複雑なルートを歩いているせいで、今自分がどの辺りにいるのかさっぱり分からない。中心部に向かっていることは確かなようだったが。そもそも静香は学校へ行く以外では殆ど舞花市に足を運んだことが無かった。だからこの街のどこに何があるのか、どの道を進むとどんな場所に出るのかということが殆ど分からないのだ。

古い建物に挟まれた細く暗い道を俊樹は進む。誰も通らないような道を、静香はゆっくりと歩く。その道の先には幾つかの民家や店が並んでいた。そこは日の光もまともに当たらず、暗く静かな場所
で人など殆ど居ない。

だが、一つの店 オレンジや黄色の光で満ちた、照明器具が何かが売られているらしい そこにだけ、人が居た。

ショーウィンドウに背をもたれかけていたその人物は、俊樹の姿を認めると顔を輝かせ、彼に勢いよく飛びついた。静香はどきりと

しながらも二人に姿を見られぬよう、丁度よく道の終点に高く積み
れていた箱の後ろにその身を隠した。どうやら気づかれてはいない
らしい。

そこから顔を出し、様子を伺う。

（あの、あの女の人が……）

俊樹に飛びついた女性は見た目二十代半ば、後半位。

腰近くまである黒髪は緩いウェーブを描いていた。すらっと長い
手足は、薄暗い場所であるにも関わらず白く輝いている。

水色がかかった白のブラウスに、紺色の長くゆったりとしたスカ
ート。友人が「お嬢様みたいだった」と言ったのも頷ける。

女は月光の様な笑みを浮かべ、彼の訪れを歓迎しているようだっ
た。

綺麗な人だ。……素直に静香はそう思った。悔しいが、月がよく
似合いそうなその女性は、とても綺麗だったのだ。

だが。彼女が美人かそうでないかということは、今全く関係が無
い。

彼女が自分にとって最愛の人を苦しめているのだとしたら。絶対
に、許せない。

女と俊樹は何かを話している。……といっても女がほぼ一方的に
喋っているという感じではあったが。時々口を開く俊樹の声には棘
と毒が含まれていた。

友人達の言う通り、彼は相当女と一緒に居るのが嫌なようだ。

女が俊樹の左腕に抱きつこうとする。その行為を静香は何ていや
らしいのだろうと思った。彼女はそんなことをしようなんて、一度
も考えたことがなかったからだ。ただ、手を繋ぐだけで幸せだった
から。

俊樹は彼女の腕を乱暴に振り払い、早足で先へと進む。女は立ち止まったまま動かない。

(……?)

俊樹の乱暴な態度を見て、流石に傷ついたのでろうか。静香は首を傾げる。

だが、その予想は大きく外れていた。

「居るんでしょう……? 出てきなさいよ」

女が静香の隠れている辺りを見て、幸せそうに微笑みながらそう告げる。

静香の心臓が大きく揺れ動く。頭は一瞬で真っ白になり、頬を汗が伝っていることにも気がつかないくらい動揺した。

「大丈夫。彼は気がついていないから。ねえ、顔を見せてよ。小さなお嬢ちゃん」

先程までは女と俊樹の後をつけ、機会があれば女を問い詰め、一発ビンタでも食らわせてやろうと思っていたのに。いざ女にそう言われると、どうすれば良いのか分からなくなってしまった。

どうすればいいのだろう。静香は後ろを振り返る。今思いつき走れば、彼女に捕まることはないはずだ。だが本当にそれでいいのだろうか。女に真実を聞く絶好のチャンスだというのに。

俯き、頭を抱えながらどうしようかと思案している彼女の近くに誰かが来た。顔をあげれば、しびれを切らして自らやってきた女が立っていた。

近くで見ても、綺麗な人であった。その顔に邪気はなく、とても俊樹を追い詰めているらしい人物には見えない。

「あら、可愛らしい。ふふ……私の世話をしてくれている女童めわらわに少

し、似ている。彼に愛されていた娘」

彼、というのは間違いない俊樹のことだろう。

静香は胸の辺りに左手をやりながら、女を睨みつける。だが体が震えて眼に力が入らない。女は何か異質なオーラをまとっているような気がした。そのオーラが、静香を上から押さえつけているのだ。駄目だ、怯んではいけない。立ち向かわなくては。静香は呼吸を整え、口を開く。

「貴方……俊樹に何をしたの。貴方のせいで、俊樹はおかしくなっちゃった。……貴方といたら、きつともっとおかしくなる。そしてうんと苦しむ……。何が楽しくて、彼をそんなに苦しめているの」
どうにかこうにか思いを口にするが、女はただ無邪気に首を傾げるのみだった。静香の気持ちちを微塵も汲み取っていないようだ。

「苦しめている？ どうしてそんなこと、言うの？ 私はあの人を苦しめてなどいないわ。私はあの人を愛しているのよ。そして、私と彼は愛し合っている」

「ふざけないで。どう見たって俊樹は貴方と居ることを望んでなどいない。貴方のことを、愛してなんかいない。私には分かるわ。長い間 十数年間、ずっと一緒だったから……私には分かる。彼が苦しんでいることが……。はつきり言うわ。俊樹が貴方を選ぶことなんて、絶対に、ありえない」

静香は女をさっと指差す。

その静香の言葉を聞いて、女がふっと笑った。静香のことを馬鹿にするかのように。それがどうしたの？と言わんばかりに。

「たったの、十数年でしょう。お嬢ちゃん、十数年なんていうのはね 刹那と呼ばれる程度のものなのよ。少しも長くなてないわ……十数年ずっと一緒だった？ それが何だっていうの？」

静香は、呆然とする。女の言っている意味が分からなかった。

女にとって十数年というのは刹那　一瞬　という言葉で喻えるものらしい。長生きしているおじいちゃんおばあちゃんがそう言うなら、まだ分かる。

だが目の前に居るのはどう見ても三十前の女。十数年を「刹那」と呼ぶにはあまりにも若すぎると静香は思った。大体この女に「お嬢ちゃん」と呼ばれるほど、静香は幼くない。

口をぱくぱくさせている静香を見、女は満足気に笑い、彼女に顔を近づける。

「お嬢ちゃん。全てはもう手遅れなのよ。貴方にはもうどうすることも出来ないわ。ねえお嬢ちゃん。『違う』人との恋は必ず悲恋となるわ。けれど私、この恋を悲しいものにしたくなんて、なかった。『違う』から結ばれないなんて、あんまりでしょう？　けれどもう大丈夫……彼はもう少しで私と『同じ』人になる。そうすればエンデュミオンは永遠に私のもの……」

狂っている。訳の分からないことを言うこの女は、狂っていると静香は思った。だが不思議なことに、彼女の笑みから狂気というものを感じなかった。自分が狂っていることに気がついていないからだろうか。

（違う、とか同じとか……どういう意味なの。それより、エンデュミオンって誰のこと？　俊樹のことを言っているの？）

じわじわと込みあげてくる恐怖が、涙となって体から溢れ出そうになるのを、静香はどうにかこらえていた。兎に角、怖い。

彼女の言動が、彼女が放つ異様なオーラが、彼女の笑みが　全てが、怖かった。

「残念だったわね。貴方と彼は『違う』人になるの。だから貴方と

エンデュミオンはもう一緒には居られないのよ。彼は私と一緒にいるの。長い時間を、過ごすのよ。とても長い時間を……ね。ああ、あまりぺらぺらと喋っちゃいけないわね。貴方一人抗ったところで何が変わるといってもないけれど。……お嬢ちゃん、今日の事は忘れなさい」

女はそう言うと、どうすればいいか分からず固まっている静香の頭に手をのせた。驚くほど冷たい手に、静香は肩を震わせる。

（ああ、この人。この人はきつと……）

静香は薄れゆく意識の中、女が何者であるのか悟った。だがもう時すでに遅し。

軽い立ちくらみ、ぼうつとする頭。我に返った時にはもう女の姿はなかった。

そして。

（あれ、私ここで何を……そうだ、俊樹を追いかけて……見失ったんだ）

彼女と会ったこと、そして彼女と話した内容の全てを忘れてしまった。

静香は落胆し、肩を落とす。

（今日は諦めるしかない。けれど、明日こそは……）

そう決意し、踵を返す。だがその瞬間、何故かふっと力が抜けて尻餅をついてしまう。小さな悲鳴をあげ立ち上がるようにするが、上手く足に力が入らない。

（どうしてだろう。明日も同じように俊樹の後をつけて、女の正体を暴いてやるうと思っただら……怖くなった。力が入らない。体中が叫んでいるような気がする。もうこんなことをしてはいけない）

突然訪れた恐怖に、静香はただ戸惑うことしか出来なかった。

（私は、何か大切なことを忘れてしまった気がする。けれどそれが何だったのか、思い出すことが出来ない）

結局頭の中にかかったもやが消えることはなかった。

彼女がこの日起きたことを全て思い出すことは、永遠に、なかった。

静香は次の日さくらに「無茶はしていないわよね？」と問われ、そうしようと思ったが途中で見失ってしまったと説明する。

本当にそうだったのかは分からなかったが……。

*

時間が流れと共に、俊樹は生気を失っていく。その変化には誰も気がついていない。

誰もが気がつく位、彼はおかしくなっていました。いたのだ。

月曜日はまだ（見た目）元気そうであったのに、金曜日にはもう元気のかけらもなくなっていた。約一週間で俊樹は生きる屍へと姿を変えた。

教室に入り、席につくと口を閉じ、生気の無い瞳でぼうつとただ机を見つめる。友人達に話しかけられてもまともに返答しようとせず、ゼンマイがきれた人形のように動かない。かと思えば急に唸り声のようなものをあげながら机をバシんと叩いたり、ボールペンを握りしめながらノートに何か書き出したり、そのページを破って丸めたりする。

授業をさぼるようになっていき、昨日にいたっては体調不良を理由に早退してしまった。だがどうも真つ直ぐ家には帰らなかったらしい。

俊樹の母も彼の変化に気がつき、静香に心当たりは無いかと聞いてきたらしい。

「ご飯もろくに食べなくなつて……殆ど喋らなくなつて……おまけに時々、部屋の中で暴れているらしいの。あのデートから帰つた後も、すごかつたらしいわ。この前聞いた時は特におかしいことはなかつたつて言つていたけれど……本当は……私に心配かけたくなかつたんだですつて。それでね……昨日は俊樹、部屋の中で泣いてたつて……ドア越しにそれを聞いたつておば様が。何があつたのか、どうしてしまつたのか、おば様やおじ様は俊樹に聞いたけれど、何も答えてくれなかつたつて。姫ちゃん先生も、俊樹のことを心配して彼に色々聞いたらしいけれど……」

結果は同じだつたらしい。そして晶もまた、静香に心当たりはあるかと聞いてきたという。

静香は晶に、俊樹に言い寄っているらしい女の内容を話そうとした。だが、上手く言葉にならず結局よく分からないと言つてしまつたと語る。

「最近、殆ど俊樹と話していない。というか俊樹は今、誰とも話したがらない。皆と距離をとつて、一人でいようとして……。無理して笑つこともなくなつた。元気な自分を演じる気力すらなくなる位参っているみたい。俊樹と手を繋いでいたつていう女が関係していることは間違いないと思う。けれど具体的に何があつて、こんなことになつたのかは……全く分からない」

さくらに悲しく辛い現状を語る静香は、顔を歪めながら頭を押さえる。

「どつしたの？ 頭痛？」

「うん。そうみたい。俊樹をあんな風にしてしまったかもしれない女のことを考える度、頭がぼうつとしたり、痛くなったりするの」苦笑いする彼女の目は少し腫れている。気のせいか、声も少しかかっているような気がして、さくらは切なく苦しい思いを体内から出すかのように息を吐いた。

（弥助さんは今笛吹き魔やコスプレ女のことなどを調べている。牧田君のことと、その二人のこと　何か関係しているような気がする……その関係が分かれば、牧田君を……篠宮さんを救うことが出来るかもしれない）

そう思わなければ、不安に押し潰されそうだった。だからさくらは信じた。信じるしか、なかった。

「……心だけじゃなくて、体の方もおかしくなっているよね、俊樹。俊樹の肌の色……白くなっている。青白いかさそういうのじゃなくて」

その静香の言葉に、さくらは頷いた。

俊樹の肌は目に見えて白くなっていた。恐らくさくらや静香に限らず、他の人も何となく気がついていいるだろう。

最初は体調が悪くてそうなっているのだろうと思った。だが後になつてどうもそうではないらしいと思うようになってきた。そう思う理由はよく分からなかったのだが。

陶器のような、月光を浴びたかのような色になった肌。それだけではなく、どこか他の人とは違う空気を漂わせているような気さえました。

（まるで、出雲さんの肌みたい。人ならざる者の……けれど牧田君は人間だわ。出雲さんとは違う。違うはず……ああ、けれど。今の牧田君は、まるで）

さくらはそこまで考えて、頭を振る。それ以上のことを考えるの

がたまらなく怖かったのだ。

二人、そうして話した後四時間目の授業　　さくらが大の苦手とする体育が始まった。

さくらは運動場のトラックを下手なお笑い芸人のギャグより笑える走り方で周る。

「ちょっとサク、あんたもう少しまともに走れることは出来ないの！？」

さくらに比べればずっと速く走れるほのりだが、あまりに走るのが遅すぎるさくらを放っておけず、一緒に走っているのだ。しかしほのりが幾ら言ってもさくらの足は速くならない。

「だって、私、走るの、苦手」

まだノルマの半分も走っていないのに死にそうになっているさくら。息は荒く、足はへるへるだ。

「気合でどうにかなさいよ、あまり遅いと置いていつちゃうわよ」

「い、いいわよ、櫛田さん、もっと、速く、走れる、でしょう。私に、か、かまわず……行って。私も、頑張るか、ら」

気持ち足を先程より早い感覚で動かしてみる。だがなかなか早くならない。

終いに無茶したのが原因で躓き、思いっきり転んでしまった。

いたたたた、とひざをさするさくらを見下ろしながらほのりがため息を吐く。

「全くちよつと足を速く動かしただけで……ほら、大丈夫？　先生に行つて水道で足洗いなさい」

ほのりの手をとり立ち上がったさくらは、膝を綺麗にする為に体

育館の傍にある水道へと向かった。

体育館にぴつとりくつつくように設置されている水道へ行く。よく見ると、その近くに誰かが立っているようだった。

(あれって……)

蛇口の前に立ち、横目でちらりと見てみればそこに立っていたのは俊樹だった。彼は制服を着ている。どうやらさぼりらしい。

俊樹は石で出来た流し台を何故かじっと見つめている。一体どうしたのだろうとさくらはただ首を傾げるしかない。体育館によって出来た巨大な影に飲み込まれているこの辺りは、やや暗い。その仄暗い闇の中、彼のすっかり白くなった肌だけがはっきりと見えた。まるで光っているかのようだ。

俊樹がポケットから何かを取り出す。それはこういう場で使うことはまずないものだった。 外等

俊樹が手に持っているもの。それは、カッターだった。刃を出したそれを彼は死んだ魚の様な目で見つめている。刃を出したり引込んだりを繰り返すその姿はとても危ういものだった。

放っておけば何をするか分からない。最悪の場面がよぎり、さらには背筋が凍りつくのを感じた。

「牧田君！」

思わず、そう叫んでいた。その声を聞いてようやく俊樹はさくらの存在に気がついたらしい。ゆっくりと体をさくらの方へ向けると、にたりと笑った。幸せそうなものとはかけ離れたその笑顔。

「牧田君、それ……何をする気なの？」

「これ……？ ああ、心配するなよ。そういうの、無理だから。やったところで何の意味も無い。これで首とか切ってもさ……手首を

裂いても、意味は無いんだ」

そう言って、自らを嘲るような笑みを浮かべる。そこには諦めという感情も混ざっているように思えた。

「俺は、化け物なんだ」

彼はそう断言した。さくらは何も言えず、口を押さえる。

「化け物なんだよ」

言つと、彼は手に持っていたカッターを右頬へ向け……そして、勢いよく振り下ろした。

「牧田君!?!」

さくらは悲鳴をあげた。短く出された刃が彼の頬を傷つけ、赤い血を流させる。深く切つてはいないようだが、さくらの心臓を飛び上がらせるには十分な衝撃的すぎる光景であった。

赤い血の線。白い頬を染める赤い血。痛くないわけがないのに、俊樹はただ笑っているだけだった。その瞳には生気がない。

「大丈夫だよ。こんなの」

そう言つと俊樹は蛇口をひねって水を出し、それで頬を洗い流す。そうしたところでまた血が流れてくるだろうに……そうさくらは思ったが、不思議なことにそんなことはなく、綺麗なままだった。

俊樹がゆっくりさくらに向かって歩き始め、顔をぐつと近づけた。どうだ、と見せつけるように。

(そんな……)

ナイフで切られたはずの頬。血が流れていたはずの頬。当然切った跡があるはずなのに、それらしきものが見当たらない。血も出てきていない。

恐る恐る彼の右頬に触れてみる。だが、傷らしきものは矢張りな

いようだった。

(それに、どうしてだろう。牧田君の肌、とても冷たい。氷みたい……)

「臼井。お前最近静香とよく話しているよな。……俺のこと、話しているんだろう」

そのことを怒っているわけではないようだった。恐らく、だが。

「あいつが心配してくれていることを、とても苦しんでいることを俺は知っている。分かっている。本当は俺のこと、問い詰めてやりたいと思っているだろう。でもあいつはそうしない。俺達昔からそうだった。辛いことがあるんだろうな、悩みがあるんだろうなと思いつながら、無理に聞くことはしないんだ。ただ、傍に居て、寄り添っているだけで。相手が自分に話してくれるのを、ずっと待っている。それが正しいことなのか、間違っていることなのか……人によってはそんなのおかしいと言うかもしれないけれど。でも、俺達にとってはそれこそが正解だった」

色々な思い出を頭の中に映し出しているのだろうか。一瞬だけ、優しげで人間らしい……生き生きとした表情になった。だがすぐに元に戻ってしまった。

「結局最終的には、話すんだ。実はこういうことがあったとか、こういうことで悩んでいるとか……ちゃんと、話すんだ。話していたんだ。けれど、今回は話せない。話したからってどうなるものでもない。もう全てが遅すぎたんだ。……俺が、馬鹿だったんだよ」

俊樹は血がついたままのカッターをポケットに戻し、力なく笑った。少し笑っただけで魂が抜け出して死んでしまいそうなの、そんな儂い存在に見えて、さくらは胸が苦しくなるのを感じた。

「俺はもうあいつの傍には居られない。何だかなあ……あいつとこれから先もずっと一緒に居るものだ、当たり前のように思っていたのに。気持ち悪いと思われるかもしれないけれどさ……魂の半分だって、思っていた。あいつのこと。好きとか愛しているとか、そついうのを超えて……傍に居るのが当たり前だと。二人で一人だつて……考え方が女々しいかな。女でもそんなこと考えないかもな……はは……でも、本当にそう思っていたんだ」

心からの言葉だろうとさくらは思った。静かで、それでいて激しい声色に彼の思い全てがこもっていた。

（けれど、傍に居られないってどういうこと？ 他の女の人と手を繋いだから？ 自分自身、そのことを許せないから？ 違う、きつとそんな問題なんかじゃない……もっと恐ろしい理由が、あるんだわ）

「俺は化け物になった。もうあいつとは違う……でも、それでも俺は牧田俊樹だ。俺はこんな風になりたくなんてなかった、俺はずつと俺のままだった……けれど今はもう……でも、違う、俺は違う。何度も言っているだろう……俺は違う、違う……俺はエンデユミオンなんかじゃない！」

激しさを増し、最後にはきつとさくらを睨み大声で叫んだ。怒りと憎しみのこもった、声で。

（エンデユミオン？ それって……）

一体彼は誰に言っているのだろうか。今の彼はさくらを見ていない。ここには居ない誰かに向けて言い放っているようにさくらは思えた。今自分がどこに居るのか、何を話しているのか、それすら分からなくなっているように見える。

感情と生気をその時彼は確かに取り戻していた。憎しみが彼を『こちら側』に戻した。ほんの少しの間だけだったが……。

強い憎しみさえ、俊樹を人にする事が出来なくなっていた。

「はは、あなたに話したからってどうなるわけでもないのに……話したって意味は無いんだ。どれだけ話しても、意味が……」

俊樹は独り言に近いものを呟きながら、さくらに背を向けた。そして手を軽く振ると、校舎の方へと向かっていく。そんな彼の後姿が、何故か出雲と重なり、さくらは息を呑んだ。

（牧田君のことを好きらしい女の人　その人はきつと、人間では無い。そして今の牧田君も……）

彼と彼女の間は何があったのか今のさくらには見当もつかない。だが、彼女との出会いが彼を『化け物』にしてしまったことは確かだと思っただ。

さくらは色々な思いを無理矢理洗い流すかのように蛇口を捻り、膝を洗って皆のところへ戻った。

「随分遅かったじゃない。保健室でばんそうこうでも貰いに……行ってないみたいね」

さくらの膝を見、今度は顔を見る。その顔を見て、ほのりは眉間にしわを寄せた。

「どうしたの？　何か元気なさそうだけれど」

「え、ううん。何でも無い。運動場を走って疲れただけ」

笑ってごまかすさくらにほのりがあげたのは超ド級のため息だった。

彼女がその言葉を信じてくれたかどうかは分からないが、それ以上特に何も聞いてこなかったので、さくらはほっとした。

だが彼女が深く追及しようとしてこなかったからといって、不安

や恐怖は少しも消えることは無く、さくらの胸の中で青と黒が入り混じった炎となって心を焼き続けた。

（このままじゃ、いけない。何もかも手遅れになる前に、どうにかしたい）

だが、もう全ては手遅れだった。

牧田俊樹が言った通り。

*

事件が起きたのは、掃除が終わった後のことだった。

掃除を終えてさくらは教室へと戻る。放課後、一応晶に今日起きたことを話しておいた方がいいだろうかと考えていたさくらは、教室の様子がおかしいことに気がついた。

いつも通り騒がしくはあった。だが楽しそうな声が少しも聞こえてこなかったのだ。悲鳴のようなもの、パニックを起こしたような声、そして女子の泣いている声。さくらは同じ班の人と顔を見合わせ、首を傾げた。

恐る恐る教室の中へ入ると、教室へ戻ってきた生徒の殆どが一箇所に集まっており、何か話していた。

「どうか、したの？」

さくらの姿を認めたほのりが彼女を手招きする。それに従ってほのりの傍に行った。

「何かね……牧田から、変なメールが届いたらしいの。どうもあいごとメアドを交換していた人全員にきているみたい」

「変な、メール？」

「たった一言さ『俺はエンデュミオンなんかじゃない』って書かれていたらしいわ」

エンデュミオンなんかじゃない。それは四時間目の授業の時彼が叫んだ言葉と同じものだった。

そのメールに最初に気がついたのは、クラスの男子だった。まだどうせ晶は来ないだろうから没収されることもないだろうと思っていた彼は、携帯電話に俊樹からメールが届いていることに気がつき、そのメールを開けた。

だが書かれていたのは『俺はエンデュミオンなんかじゃない』という言葉だけだったから、その男子は首を傾げる。そして他の男子にそのことを話した。その男子も俊樹とは仲がよく、メアドを交換していたから、もしかしてと思いながら携帯を開くと、矢張り彼にも俊樹からメールが届いていた。内容は、全く同じ……ということらしい。ほのりが説明してくれた。

「篠宮さんにも、届いていたんだって。メール。でも、内容は他の人とは違うものだったらしい」

教室に入る前聞いた女子の泣く声。その主は静香であったらしい。静香はさくらに気がつく、泣きながら携帯をさくらに超越す。手の震えを懸命に抑えながらそれを手に取る。

画面に映っていたのは『俺はエンデュミオンなんかじゃない』という文よりかは幾分長いものだった。

『ごめん。俺は、もう今までの俺じゃない。お前とは違う存在になっちゃった。一緒に居られない。居たって苦しめるだけだから。俺は牧田俊樹だ。エンデュミオンなんかじゃない。けれど、俺はもう俺であって俺じゃない。さようなら』

さようなら。……それは恋人関係を破棄するという意味なのだろうか。それとも……。

静香は泣きじゃくりながらさくらを見た。

「エンデュミオンって何？ 誰なの？ 訳が分からない……けれど、その名前をどこかで聞いたことがある気がするの。思い出せない、どこで聞いたのか思い出せない……白井さん、私とても大切なことを忘れてる気がする。ああ、私どうしたらいいの。怖いよ、このままじゃあ、俊樹、どこかへ行っちゃう……無理矢理でも聞けば良かった……そうすれば、こんなことには、ならなかったかもしれないのに」

「篠宮さん……」

「エンデュミオンって誰よ、俊樹はエンデュミオンなんかじゃない。俊樹は俊樹よ……！」

エンデュミオン。その名前には聞き覚えがあった。

「エンデュミオン……ギリシャ神話にそういう名前の人が登場するわ」

静香が顔をあげる。他の人もまたさくらに視線を向けた。

「その人は羊飼いの青年で、とても美しい顔立ちをしていたらしいの。そんな彼に月の女神、セレネが恋をした。彼女は深く彼を愛した。けれど彼は自分とは違い、老いていく。それを嫌がった彼女は自分の全知全能の神であるゼウスをお願いをしたわ。彼を不老不死にしてください、と。その願いは、叶えられた。でもその代わり、エンデュミオンは永遠に眠り続けることとなった……。彼女は夜になる度地上に降り立っては、眠っている彼に寄りそうの。そういう悲恋の物語に出てくる人なのだけれど……」

さくらが知っているエンデュミオンの物語はそういうものだった。エンデュミオン、と聞いて連想できるのはそれ以外にない。

さくらの話を聞いた生徒達はそういう話があるのかと頷きつつ、だから何だというんだという表情を浮かべていた。さくらだって同じだった。

だがこのままでは不味い、ということも誰かが分かっていた。静香に届いたメールに書かれていた「さようなら」という言葉。それが「もう二度と会わない」という意味だったとしたら……。

しばらくして教室に入ってきた晶は、生徒達の様子がおかしいことにすぐ気がついた。

「おいお前等どうしたんだ？ 何かあったのか」
そう問われ皆が口々に事情を話し始める。

「ちょっと待て、あたしは聖徳太子じゃねえんだから大勢の話を一度に聞くことなんて出来ないんだ。誰か一人、代表して話せ」
そこで一步前に出たのは学級委員長。彼は晶に先程起きた出来事を話したり、生徒達にメール画面を見せるよう促したりした。
話を聞き終えた晶は口元に手をやり、どうすべきか考えた後

「特に連絡事項は無いから、今日はこれにて解散！ もし分かったこととかがあればあたしか他の先生に言ってくれ。以上！」
それだけ言っつて、教室を足早に出て行く。

「姫野先生！」

さくらは呆然と立ち尽くしている生徒達を残して晶を追いかける。そして先程 四時間目の授業に起きたことを話した。ただ彼がカッターで頬を傷つけたこと、その傷が何故かすぐ消えてしまった

ことなどは話さないでおいた。

「……そうか、分かった。ありがとうな白井」

「……いえ」

さくらは晶を見送った後、教室へ戻る。荷物を持って部活へ行くためだ。

泣き続ける静香は女子達に慰められていた。他の人達は気まずそうな表情を浮かべながら、のろのろと教室を出て行く。皆俊樹のことが心配だった。だがだからといって部活をさぼるわけにもいかない。

静香のことは仲が良いらしい子達に任せ、さくらはほのりと共に再び教室を出るのだった。

(部活が終わったら、弥助さんの所へ行こう。……時間が、無い)

まだ間に合う、きっと間に合う。そう信じながら部活の時間を過ぎすのだった。

第四十九話：我が愛しのエンデュミオン（4）

＊
部活の後、さくらはほのりと一緒に職員室を訪ねる。いつもとは違う緊迫した空気が流れているのを感じて二人は理解した。

俊樹の行方は分かっていないのだと。

教師の一人に尋ねてみたが、矢張り彼は見つからないのとどこだった。

俊樹は五時間目の授業まで保健室に居たらしい。だが掃除の時間頃、保健室の先生に「今日はもう家へ帰る」といい、出て行った。しかし晶が彼の母に確認の電話をとったところ、まだ彼は帰っていないと言われたらしい。

学校にもおらず、今は一部の教師達が彼の行方を探しているという。精神が不安定な彼が何かとんでもないことをしてしまいう可能性は高い。早く探さなければ、取り返しのつかないことになってしまうかもしれない。

「君達ももし彼を見かけたら、すぐ学校へ連絡してくれ」

二人ははいと頷ぐが、その声は自分でも驚く位掠れていた。

職員室を出、二人はどこか重苦しい空気の漂う学校を後にした。

さくらは途中でほのりと別れ、家へ行って荷物を置き、念の為通しの鬼灯を持って行き、すぐ家を出る。向かった先は桜町商店街だ。弁当屋『やました』ではいつも通り紗久羅があくびをしながら店番を務めていた。彼女はさくらを見て元気な挨拶をしたが、さくらの様子がおかしいことに気がつき眉をひそめた。

「どうしたんだよ、さくら姉。……牧田先輩と篠宮先輩に何かあつ

たの？」

さくらはこくりと頷き、簡単にことの経緯を説明した。それを聞いた紗久羅が冷や汗を流す。

「それ、かなりやばいじゃん！」

「ええ。だからこれから、弥助さんの所へ行こうと思うの。笛吹き魔とコスプレ女……この二人は、牧田君がおかしくなってしまったことと何か関係があるのではないかと思う」

俊樹のことを想っているらしい女は恐らく『向こう側の世界』の人間だ。

そしてほのりが言った通り、この辺りで噂になっていたコスプレ女と彼女が同一人物である可能性もある。となれば、コスプレ女は『向こう側の世界』の人間であることになる。

弥助が上手く情報を集めていれば、その仮説が確証へと変わるかもしれない。

そして同時期に出てきた笛吹き魔もまた、恐らく『向こう側』の人だ。もしかしたら彼も今回のことと何か関わりがあるかもしれない。

その話を聞いた紗久羅は、困惑しながら後ろを振り向く。そこには作業をしている菊野が居る。菊野は紗久羅をじろつと睨みながらもあごをしゃくり「行け」という無言のサインを出した。

「ありがとう、ばあちゃん。さくら姉、あたしも行くよ！ 何だかものすごく気になるし」

「ええ、一緒に行きましょう！」

紗久羅は二階にある家から通しの鬼灯を持ってきて、勢いよく一

階へと駆け下りてきた。

準備が出来たところで、二人は早足で喫茶店を目指した。その間、さくらはまだ紗久羅に話していなかったことなどを語る。

彼女は頷いたり、質問をしたりしながら、一生懸命頭の中で情報を構築しているようだった。商店街から店までは結構な距離がある。もどかしい思いをさくらは抱きながら足を進める。

やっこのことで『桜〜SAKURA〜』へ辿りついた。ドアを開けると秋太郎が二人を迎えてくれた。店の中には殆どお客さんはおらず、静かで穏やかな空気が流れている。その空気が少しだけ、あせる二人の気持ちを落ち着かせた。

テーブルを拭いていた弥助が二人に気がつき、こちらへやってくる。同じくテーブルを片付けていた満月はふわりとした笑みを浮かべながら、こちらへ軽く手を振り厨房へと消えていく。

「よお、二人共。……どうしたっすか？ 何か随分急いで来たようだが」

「弥助さん、牧田君が」

さくらは俊樹が向こう側の世界の者と関わっているかもしれないということ、メールを送った後学校から姿を消したことなどを話す。それを聞いた彼は青ざめ、思わずテーブル拭きをカウンターへと叩きつけた。

「それはかなりやばいじゃないか！ くそ、なんてこった……」

「弥助さん、笛吹き魔やコスプレ女のことと違って調べたんですか？」

「ああ、一応な。有益な情報になるかどうかは分からないですが…

…後一応俊樹のことについても周りから少し話を聞いた」

「教えて下さい。もしかしたら笛吹き魔達が牧田君と何かしら関わっているかもしれないんです。私が見たり聞いたりしたことなどと照らし合わせれば、何か分かるかもしれないません」

「ああ。だが、今は仕事が……」

「良いよ。少しの間なら。行っておいでなさい」

三人のやり取りを黙って聞いていた秋太郎が口を開く。そして彼らの緊張を拭ってくれる、優しい笑みを浮かべた。弥助は彼の言葉に甘えることにし、満月に少し店を離れるから宜しくお願いしますと言い、休憩室らしき所へ入ると何かを持ってきた。恐らく今回の話に何かしら関係があるのだろう。

弥助はさくらと紗久羅を先導し、すぐ近くにある秋太郎の家へ向かった。

四方を本に囲まれた居間。綺麗に磨かれているテーブルの上に弥助は抱えていたものを広げた。

見てみれば、それは桜町周辺の地図で色々印がついている。

弥助が説明する前に、さくらは改めて俊樹についての話、不審者女の話などを二人に聞かせた。全て聞き終えた弥助はゆっくり頷きながら、自分が調べてきたことを話していく。

「まず笛吹き魔だ。あつしはこいつの笛を聞いたという人達から話を聞いた。その話を元に推定されるルートをここに記入してみたんだ。まあ正確なものは分からないから、あくまでこんな感じといったものだが」

弥助が指差した辺りには赤い線や点が書き込まれている。二人はよくここまでやったなあ、と素直に感心した。

線が書かれているのは桜町中央よりやや西に寄っているところ。さくらがあまり歩いたことのない場所だ。線の出所は舞花市で、そこからずっと伸びている。見たところルートは複雑なものではなく時々右に折れたり、左に折れたりしながらもほぼ真つ直ぐ進んでいるようだった。

線は途中で点線へと変わっていき、やがて途切れた。

「多分この点線で書いた辺りで、笛吹き魔は止まっている。牧田家のお向かいさんである男が見た化け物っていうのが真実笛吹き魔だとすれば、奴はこの辺りで止まったんだろっ」

弥助が指差したところには青いシールが貼られていた。

「笛吹き魔は同じ道を辿って舞花市方面へと帰っていくみたいだ。こいつの笛は不思議な力を持っているのか、笛の音を皆認識はするが、そのせいで眠りを妨げられることはないらしい。夢の中で聞いているような感覚らしいっすね。仮に起きていたとしても、この笛の音を聞くと思うように体が動かなくなるようだ」

その辺りについては静香からも聞いた。美しい音色ではあるが、同時に気味の悪いものでもあったと語っていたのをさくらは思い出す。

「次はコスプレ女だが……この女は舞花市と桜町に出現していたよっすね」

「私はこのコスプレ女さんが牧田君と一緒に居たっていう女の人なのでは、と思うのですが」

殆ど根拠らしいものはないのだが、もしかしたらそうであるかもしれない。

「その推測、当たっているかもしれないな。……この緑色の印が、

コスプレ女が現われたとされている場所です。ほら、ここ見てみる」
弥助が指差したのは舞花市が入ってすぐの所。ある一つの建物を
ぐるっと囲むようにして緑色の点が印されている。

その建物　　やや大きめの四角　　に書かれていたのは『東雲高
等学校』という文字。さくらはそのことに気がついた途端、只の点
が気持ち悪いものに見えてきた。

「コスプレ女はどうも、この高校近くでよく見かけられていたらし
い。目撃されるのは大体昼夕方にかけて。あんたらが授業を受け
たり、部活をやったりしている辺りの時間だな。……東雲高校の近
くに駄菓子屋やタバコ屋があるの、知っているだろう？　その店
をやっているおばちゃんや婆さんが、毎日のようにこいつの姿を見
たと言うんだ。目撃情報を総合すると、コスプレ女は東雲高校の周
りをひたすらぐるぐるしていたらしい。始め駄菓子屋の婆さんは道
に迷っているのだと思い、恐る恐る声をかけた」

奇妙な格好をした女に話しかけるのは相当な勇気が必要だろう。

「ところが、だ。女はにこりと笑って『私は愛しい人を待っている
だけなの』とだけ言って、さっさと居なくなっちゃったらしい。だ
がしばらくするとまた女はこの店の前を通った。……多分他にやる
こととか、行くところとかなかったんだろうな」

コスプレ女が待っていたという愛しい人。それが俊樹である可能
性は決して低くない。

「それに、ほら。桜町の方を見てみる」

桜町にも緑色の印が幾つもある。印は俊樹の家近辺に多くあり、
逆にさくら達が住んでいる辺り　　町の中心や、三つ葉市近く
には全くといって良いほどないのだった。

「噂としては桜町や舞花市全体に広がっているが、本人の行動範囲

自体はものすごく限られている。多分この女は俊坊中心に動いている。……目撃された場所と俊坊が通学する時に利用しているらしい道がほぼ一致しているし……実は、コスプレ女が俊坊の家をじっと見ていたってという話も出ているんだ」

地図には俊坊が通学する時に使っているらしい道を大まかに記してあった。

確かにその道に沿うようにして緑色の印がある。バラバラに話を聞いただけでは分からないが、実際に図などにしてみると浮き上がってくる事実。

紗久羅は気持ち悪い、と舌を出しながら露骨な嫌悪感を示す。

「完璧ストーリーカーだな……で、さくら姉はこの女が『向こう側の世界』の住人かもしれないって思っているんだよな」

「ええ。コスプレ女さんと牧田君のことが好きらしい女の人と同一人物だとすれば、の話だけれど。牧田君は随分と変わってしまったわ……たった一週間程で。傷つけたはずの頬がすぐ元通りになり、肌の色が白くなったり……精神的にも大分不安定になっていたようだけれど」

「確かに近所の人も、俊坊の様子がおかしいって話してくれたな。牧田家から何かが割れるような音とか、俊坊の怒ったような声とかが聞こえてきたらしい。雰囲気もがらつと変わって、まるで別人のようだと言っていたっす」

「精神状態の変化はともかく 傷が一瞬で再生するとか……そういう普通では考えられない肉体の変化は……向こう側の人が関わっていない限り、起きないような気がするんです」

さくらのその言葉に弥助が頷く。

「私達世界の人からしてみれば、コスプレ女さんの格好は奇抜なものに見えたかもしれませんが。大昔の王族が着ていたようなものらしいですから……だからそれを見た人は『何かのコスプレ』だと思っただ。けれど」

向こう側の世界ではどうだろうか。さくらは翡翠京や麗月京へ行った時のことを思い出す。彼らの格好は着物が主だった印象がある。あの世界を基準に見てみると、彼女の姿はそこまでおかしくないのかもしれないと考えた。

陽菜の友人は漫画に出てくる登場人物に似ている気がすると言っただよのだが……それは恐らく偶然だろう。

「後、私の後輩がお友達から聞いたようなんですが……コスプレ女さんは、普段はとも大人しい犬に吠えられたらしいです。それを聞いた時は、ああきつと犬がびつくりしたり怯えたりする位すごい格好だったんだなって位に思っていたんですけど……あの、犬や猫……そういう動物って、人間には分からない何かを感じ取るこゝとが出来ると言いますよね。その犬はもしかしたら、コスプレ女さんが人間ではなく、異質な存在であることを感じ取ったのかもしれない」

「そうらしいっすねえ。あつしもよく犬に吠えられるっすよ。多分あの馬鹿狐とかも同じじゃないっすかねえ」

「あ、あたしそういえば前あいつが犬にわんわん吠えられて迷惑そうにしていたのを、見たことがある。すげえ嫌われようだったぜ」

紗久羅はその時のことを思い出したのか、にやにやと笑っている。余程愉快的な光景だったのだろう。さくらもつられて笑ったが、俊樹のことを思い出した途端、笑うに笑えなくなった。

そしてさくらは、他に考えていたことを口にする。それはこの地図を目にして思い浮かんだことであった。

「あの、もしかして笛吹き魔もまた……同一人物とか……ありえない……かしら？」

二人がさくらを同時に見る。見られたさくらは少し照れながら、地図に目を向けた。

コスプレ女が目撃された場所、笛吹き魔が歩いていたらしい場所。赤い線と、緑の印。その二つはほぼ綺麗に合わさっていたのだ。

「あつしも話を聞くうちに思った。ここまで綺麗に一致するのは偶然ではないと思う。あつしは勝手に笛吹き魔のことを男だと思っていたんだが……。女であってもおかしくはない。こいつの性別に関する噂は一切なかったし」

「それじゃあさあ、牧田先輩のお向かいに住んでいた奴が見たつていう黒くて大きな化け物つていうのは一体なんだ？ 寝ぼけて見た幻覚？」

紗久羅の疑問に、さくらはうつんと唸る。

(大きくて……黒い……塊……)

コスプレ女の正体が黒くて大きな化け物なのかもしれないとさくらは最初考えた。

だが、彼女の特徴の一つを思い出した時、一つの仮説が頭の中によぎる。

「コスプレ女さんは確か、地につく程髪が長いつて話だったわよね。そんな彼女は、牧田君の家の前で笛を吹いていた。彼の為に演奏しているのなら、当然その顔は彼の家の方へと向いていたはず。となれば必然的に、お向かいさん側には背中を向けることになるわよね。笛吹き魔が現れるのは夜。当然外はとて暗かったはず。その闇夜の中で見える、体を隠す豊かな黒髪……それがもしかしたら黒くて

大きな化け物に見えたのかもしれないわ。これが昼だったら、髪の毛だつてすぐ認識できたでしょうけれど。暗い上に、相手は人間ではないんじゃないかと思いつながらそれを見たら……」

「成程。お向かいさんの勘違いではあつたけれど、全くのでたらめつてわけでもなかつたつてことだね」

紗久羅は頷きつつ、納得した様子を見せる。勿論これは推測ではないのだが。

「笛吹き魔とコスプレ女。この二人の噂が出始めた時期も、ほぼ同じようつす。逆に、笛吹き魔の笛が聞こえなくなった時期と、コスプレ女を見かけなくなった時期もほぼ同時のようつす」

「そう言えば、確かにコスプレ女の話とかもあまり聞かなくなつたなあ。牧田先輩と一緒に居たつていう女は、特別変な格好はしていなかったんだよな？」

「ええ。髪の毛が地面につく位長かつたつていう話は聞いていないし、格好も着物とかではなかつたみたい。弥助さんや出雲さんの様に姿を変えられる妖も居るのだし……きっと彼女も変身能力みたいなものを持つていたのではないかしら」

彼女が普通の格好をするようになった為『コスプレ女』は目撃されなくなつたのではないだろうか。そして噂は消えていった。

「こつちの世界の奴全員が姿を変えられるわけではないつすが……まあ出来る奴は少なくないからな」

「しかし何でそいつは急に笛を吹いたり、変な格好でうろつくのをやめたりしたんだろう？」

「そうね……。彼女は何かキツカケで、牧田君に恋をした。そして彼に向けて笛を吹いたり　彼女流の愛の告白だったのかしら　彼を追いかけたりした。最初の内はそれだけで十分だった」

「だが、俊坊への想いは募っていくばかり……。とうとう我慢できなくなった女は、人間の女として俊坊と何らかの方法を使って接触した」

「そして、彼に何かした……。牧田君は自分が変わってしまった、篠宮さんとは違う存在になってしまったと語っていた。それは自分が人間ではなくなってしまった……。ということではないかしら。牧田君はお昼を食べる前に、飴のようなものを食べていたらしいの。それがもしかしたら何か関係しているかも」

さくらの言葉を聞き、弥助があごをさすりながら何か考え事をしている。人を異形の存在へと変えてしまうような食べ物があったかどうか思い出そうとしているようだった。

「確かにそういうものが全くないとは言わないが……。しかし愛する人を手に入れる為に、毒物といってもおかしくないようなものを平気で食わせるとは」

（私には分からないわ。そんなことをしてまで、手に入れたいなんて……。けれど、何か大事なことを思い出しそうなのだけれど……。それに女の人が牧田君をエンデュミオンと呼んだ理由もよく分からないし……。ええと……。毒……。異形……。食べ物……。あら？）
頭をフル回転させているさくらの目に映ったのは、地図の余白部分に書かれている日付。さくらは不思議に思っつてその日付を指差す。弥助がそれに気がついて、ああと口を開いた。

「それは笛吹き魔とコスプレ女の噂が流れ始めた頃の日付っすよ」

「二週間ちよい前位だな。丁度麗月京で月見をした頃だね」

「そうね。あれから二、三日経った後から……みたいね」

「へえ、あんた等も麗月京へ行つたのか。あつしも最後の日に行つたんだ。あそこの飯は美味いから、毎年楽しみにしているんだよ」
にんまりと笑みを浮かべ、酒を飲むふりをしてみせる。

(麗月京……楽しかったわ、本当。夢の様なひと時を過ごすことが出来た。月に住んでいたという月の民の人達は皆綺麗で……)

ほんのわずかの間、麗月京での月見をしたことを思い出し、幸せな気持ちで胸が満たされる。自然と笑みがこぼれ、少しだけ緊張感がほぐれた。

だが波のように引いていった何かが一気に押し寄せ、さくらは石のように硬くなる。心臓が止まり、顔が真っ青になった。

(エンデュミオン……月の女神……人を異形の存在へと変える毒物……笛……不老不死……)

頭の中で巡る様々な映像が、さくらを真実へと導いていく。

「もしかしたら牧田君のことを愛した女性は……月の民なのかもしれないわ」

その言葉に返ってきたのは「はあ!？」という二人の驚きの声。

「紗久羅ちゃん。私達、麗月京で影月さんという女性と会つたわよね?」

「え、ああ、うん。覚えているよ。ものすごく元気な姉ちゃんだった」

た」

「影月さんは音紡のメンバーだった。けれど本当はあの夜、彼女には演奏する予定はなかった。けれど彼女は月島さんに呼ばれ、急遽あの日の演奏に参加することになってしまった」

人間の世界に興味津々だった影月。だが結局彼女はさくら達からまともに話を聞くことが出来ないまま、さくら達の前から姿を消してしまったのだ。

「そういえばそんなことがあったなあ。確か本来参加するはずの姉ちゃんが姿を消していたんだよね……え、さくら姉もしかして」

紗久羅はそこまで言っただけでようやく彼女が考えていることを読み取ったらしい。

ゆっくりと頷くさくら。

「その人こそが牧田君をエンデュミオンと呼び、慕った女性だと思う。確か彼女の名前は星條さん」

「でも、何の根拠があつて……」

「理由は幾つかあるわ。一つ目は牧田君が人間ではなくなってしまう原因。それがもし彼が昼食前に食べていたらしい飴だったとしたら。ほら、影月さんが話してくれたでしょう？ 月の民が食べるものは、他の人達が食べると毒だつて」

頭の中に響く、影月の言葉。

……死にはしないわ。ただ、今まで自分達が食べていたものを食べても、飲んでも、お腹が膨らまなくなるの。栄養にもならず、食べても飲んでも何の変化もなくなる。当然時間が経てばお腹が空しく、喉は渴く。……その飢えや渴きを癒すには、もう月の民の食

べ物を摂るしかない。けれど食べれば食べるほど、自分が自分ではなくなっていく。そして……最終的には月の民もどきになってしま
うの

「牧田君は土曜日、篠宮さんとデートに出かけた。ところがその日の彼はひっきりなしに物を食べたり飲んだりして……しかもそれだけ食べてなお、お腹が鳴った……らしいわ。牧田君金曜日に女の人……星條さん、としておきましょう。星條さんから貰った飴

と偽った月の民の食べ物 を食べてしまったのではないかしら。そのせいでお腹は満たされず、喉も潤いを失った。まあ月の民の食べ物には口にしていただけから、どうにか行動は出来ていたようだけれど……」

そして土曜日公園で、たまたま星條を見かけた（もしかしたら星條が意図して彼の前に姿を現したのかもしれない）俊樹は星條を追いかけた。自分がおかしくなった原因が、彼女から貰ったものにあるかもしれないと思ったから。

「そこで俊坊は、真実を知らされた。自分が毎日を生きていくには、もう星條って女から月の民の食べ物を買いつけるしかないという事実を知った」

恐らく星條は、それをあげる代わりにデートしてくれとかなんとか言ったのだろう。俊樹は嫌だったが、生きるためにはそうするしかなかったから、仕方なく星條の言うことを聞くことにしたのだ。

俊樹が昼前に月の民の食べ物を買って口にしていたのは……星條に言われたからなのかもしれないし、他の食べ物を食べてもお腹が全く満たされない感覚がいやだったから、あらかじめ飽みたいいな食べ物を食べることでお腹を満たしたかったからかもしれない。

「けれどその食べ物を食べれば食べるほど、俊坊は月の民へと近づいていったんだな。……月の民は不老長寿の種族と言われている。

ちつとやそつとの傷ならすぐ再生するっていう話も聞いたことがあるな。どうも不死の属性ももっているらしい。カッターで切った頬の傷がすぐ消えたのは、俊坊が月の民もどきになっちまったからだろう」

そのことに彼は気がついただろう。自分の体がどんどん変わっていくことを嫌でも感じ取っただろう。少しずつ変化していったわけではなく、一気に変わっていったのだから。

彼は自分が異形の存在へと変わっていくことに耐えられず、精神的にも不安定になっていった。誰だってそうなるに違いないとさくらは思う。

彼はきつともものすごく苦しんだだろう。自分が一番愛した人にさえ苦しい思いを打ち明けることが出来なかった。誰にも、話せなかった。そして結局一人で苦しむことになった。

さくらは胸の痛みをこらえながら、話を続けた。

「二つ目の理由は、笛。星條さんが笛吹き魔であるということも前提にした考えだけれど。確か月島さんは、星條さんが竜笛役の一人だって言っていたわ。きつと彼女は笛が得意だったのよ。……ああいう演奏で、下手な人を使うとは考えられないし。……そんな彼女はこちらの世界へ行く時、一緒に笛も持っていったのかもしれない。月の民の食べ物も多分、一緒に」

笛の演奏が得意な彼女は、俊樹に愛を告げる時その笛を使おうと思ったのかもしれない。

「三つ目の理由は、彼女が東雲高校の生徒に話しかけた時の状況。彼女は月の下の水晶とか、蛍の光とか、川を流れる紅葉とか……そんなことをいきなり言ってきたらしいの。そんな訳の分からないことを言っておいて『どうして何も言ってくれないの?』とか何とか言いだしたとか」

「そんな変なこと言われても、こっちだって返答に困るよな」

「ええ。……けれど、彼女にとっては少しも変なことではなかったのかもしれない。……彼女は只、挨拶をただけだったのかも」

「挨拶？」

紗久羅は一瞬何を言っているんだという表情を浮かべる。一方の弥助は納得しているような顔をしていた。

「ああ、この世にある美しいものって奴か。あの京では割と一般的な挨拶だな」

それを聞いて紗久羅も思い出したらしい。

「あれを初めて聞いた時、何をしているんだろう？ と不思議に思ったことを覚えているわ。何も知らない人が、いきなり蛍の光がどうとか言われたら絶対ぼかんとすると思うの」

彼女はしばらくしてようやくここではその挨拶が通用しないことを悟った。だが、さくら達人間が呆然とする表情を見るのが楽しくなって、わざとその挨拶をやり始めたのだろう。

更に彼女が述べていたという外国人らしい名前。恐らく『エンデュミオン』と言っていたのだろう。ジョンやブラウンのように馴染み深い名前ではなかった上に、頭がパニックを起こしていたから誰もその名前を覚えていなかったのだ。

「星條さんは牧田君のことをどうやらエンデュミオンと呼んでいたようなんです。直接彼がそう言ったわけではないんですが……。彼は『俺はエンデュミオンなんかじゃない！』と叫んでいました。友人達に送ったメールにもそういう言葉が書いてありました」

その後さくらは、エンデュミオンとセレネの恋物語を二人に聞か

せた。

「牧田君がエンデュミオンなら、そんな彼に恋した彼女はセレネ……月の女神です。月の民である自分と、月の女神セレネを重ね合わせたんじゃないでしょうか……彼女は」

自分とは『違って』老いていつてしまうエンデュミオン。そのことに我慢できなくなったセレネは、ゼウスに頼んで彼を自分と『同じように』決して老いぬ体にしてもらった。

（星條さんは自分とは違う存在 人間である牧田君に恋をした。けれど『違う』以上、自分と彼が結ばれるのは難しい……そう考えたのかもしれない。だからこそ、自分と牧田君を『同じ』存在にする為に……そんなことをしたって、牧田君の心は手に入らないのに）

「さくら姉の考えは間違っているとは思わない。思わないんだけど……真実牧田先輩を変えてしまった女っていうのが月の民、星條だとして……何でそいつはエンデュミオンとセレネの話を知っていたんだ？ その話ってこっちの世界で伝わっている話だろう？ その星條って奴が毎年こっちへ遊びに来ているとしても、そういう話を知る機会ってそう無いと思うんだけど」

腕組みしながら疑問を口にする紗久羅。それを聞き、さくらは唸る。

（紗久羅ちゃんの言う通りだわ。出雲さんや弥助さんみたいにかなり頻繁にこちらの世界と関わっている人ならともかく……星條さんもまた、こちらで長い間過ごしていたのかしら？ けれど今年の音紡のメンバーに彼女は選ばれている。毎年麗月京が開かれる時期になる度、外へ出て行ってしまったり、そのまましばらく滞在してしまったりしているような人を選ぶとは思えない……。まあ月島さんはあの時『大方ここを抜け出してどこかで遊んでいるのだろう』

とまるで彼女の行動を把握しているかのようなことを言っていた。そういう風に麗月京を出て行ったことが何度かあったのかも。けれど、それにしても……)

「後、もう一つ分からないことがあるよな。笛吹き魔が喋っていたらしい相手って奴だ。あまりはつきり聞こえなかったが確かに男と女の声だったと皆言っている。笛吹き魔が女だとすれば……話し相手は男ってことになる。その男っていうのは一体何者だったのか」

「確かその話し声が聞こえた次の夜から、笛吹き魔は現われなくなっただよな？ それと今回のことは関係あるのか、ないのか。いまいちよく分からないよなあ」

少なくとも今まで集めた情報の中に、その男の正体を示すものは無いようにさくらは思えた。だがその男が何かしらの形で関係しているのではないだろうか、と同時に思う。

(その人と話したことをきっかけに、星條さんは積極的に行動しようと思うようになったのかもしれない。その男の人が、彼女の背を押した……?)

気まずい沈黙が流れる。答えは出そうにも無い。だが三人共分かっていた。

答えが分かったところで、自分達に出来ることは何も無いということが。

もう何もかも手遅れだということが。

恐らく俊樹は星條と共に生きることを選んだのだ。最早人間ではない自分がこの世界で生きることが出来ないと思って。だから静香や友人達にメールを送り、姿を消した。

（牧田君は言っていたじゃない。全てが遅すぎたと）

だが、さくらはそれを認めたくなかった。彼のことを心の底から大切に思っている静香や友人達のことを思うと、どうしても認めたくなかった。

だからこそ、こうして三人ひっきりなしに喋っていたのだ。そうしている間はその残酷な事実を忘れることが出来ていたから。

さくらは弥助を見る。その視線に気がついた彼は気まずそうにしながら首をゆっくり横へと振った。

「最初の内だったらどうにかなったかもしれないが……もう今は。麗月京の奴等に助けを求めることも出来ないし。ちくしょう、結局その女の一人勝ちじゃないっすか！」

「星條さんと牧田君はきつと、こちらの世界から消える。あちらの世界へ『帰って』いくに違いないわ……うん、もしかしたらもう帰ってしまったかもしれない。月にある故郷へあつという間に帰っていったかぐや姫のように。麗月京へは後一年しないと帰れないでしょうけれど、『向こう側の世界』へ行くこと自体はできるはず。俊樹を手に入れることが出来れば、もうこの世界に用は無いだろう。」

「あの馬鹿狐でも、牧田先輩を助けることは出来ないのかな」

紗久羅が腕を組み、俯きながら呟いた。

「分からん。巫女を喰らうことで手に入れた力でどの程度のことまで出来るのか、あつしには分からない」

と言っているが、顔には「多分無理」と書かれている。出雲だつて万能ではないのだから。

仮に俊樹を助ける力があつたとしても、彼がさくら達の助けを求

める声に込えてくれるかどうかは微妙なところだ。もしかしたら本当は助けることが出来るのに「出来ない」と答えるかもしれない。

「けれど、もう相談できそうなのは出雲さんしか居ないわ」

彼が話をまとも聞いてくれるかどうかは分からない。だが聞かないまま只んぼつつと時間を過ごすことも、さくらには出来そうになかった。

「さくら姉、駄目元で行ってみるか？ 相談しに行かなきゃ良かったと後悔する可能性が高いけれど」

紗久羅も同じ考えらしい。さくらの答えを聞く前に彼女は立ち上がっていた。

弥助は勝手にしると、二人を送るかのように手を振る。

「まあ、とりあえず聞いてきな。少しでも現状が良い方向に進むことを祈って。あつしは店へ戻る。……俊坊のことが心配だが、仕事も大事だ。まあもう殆ど後片付け位だけだな。いいからお前等、無茶はするなよ？」

弥助はさくらの鼻の前に人差し指を突き出し、じつと真っ直ぐ目を見つめながら念を押した。さくらは曖昧に笑い、弥助に礼を言ってから家を出た。それを見て弥助は困った奴だと言わんばかりに息を吐く。

「あいつは放っておくと何をするか分からないです。困ったもんだよ、本当。紗久羅っ子、あいつのお守りを頼んだぞ。……あいつの方がお前さんより年上なんだがな……」

まだ家から出ていない紗久羅は、弥助に話しかけられ、苦笑いした。

確かにさくらは色々と危ういところがあるから、一人で放っておくのは心配だと紗久羅も思う。

「分かっているよ。とりあえず今日は出雲の所へ行くだけにするよ。それ以外、何も出来ないしね。しかし、お前よくあれだけのことを短期間で調べあげたなあ」

「まあな。あつしは人から情報を引き出すのが上手いんだ」

弥助がにかつと笑う。紗久羅もつられて笑うと、さくらの後を追いかけて行った。

外はすっかり暗くなっていた。先に秋太郎の家を出たさくらのあちこちはねている髪が、涼しい風にさわさわと揺られている。二人共気持ち早足になっていた。もう手遅れなのだろうと思う一方で、早くしなければいけないとあせる気持ちもあつた。信じたい幻想と、信じたくない現実。入り混じった二つのものが、二人の心と体を硬くする。

家からそう遠くない場所にある桜山。その辺りには月光以外の灯りは殆ど無いものだから、ますます暗かった。油断をすれば闇に、山に、飲み込まれてしまうような気がして、さくらは少し身震いした。たまらず、さくらはポケットに入っている鬼灯に手を伸ばす。かちこちに硬くなったものが、鬼灯の温もりによって少しだけ柔らかくなった。

こちらとあちらを繋げる『道』はいつも通りで、幻想・恐怖・不気味といった美しい言葉と恐ろしい言葉が色々入り混じったような空気を漂わせている。

闇にも負けず、紅く輝く鳥居。フランス人形の瞳に似た色をした青い炎、無邪気で残酷な笑みを浮かべる女を思わせる桜の花びら……足の裏から体温を奪っていく石段……。

その『道』を抜けた先に、満月館がある。二人は最後の数歩を駆け足で上がり、最後にあるとりわけ大きく威厳のある鳥居をくぐり抜けた。

「うわ!？」

勢いよく駆けていた紗久羅が急にスピードを落とし、その場で止まる。少し遅れて、さくらが鳥居を抜けた。

見れば紗久羅の前に、一人の女が立っていた。

空に浮かぶ銀の月と瓜二つの輝きを持つ肌。その肌の輝きを引き立てているのは、艶やかな黒髪。その髪は地面に触れていた。月を抱く、星を散りばめた夜空にも似たその髪は遠くから見ても美しい。淡い黄色と紅を重ねた衣。ガラス細工同様繊細で儂い雰囲気を持った薄絹。

髪に負けない位長い裳。

二十代半ば、後半らしいその女性は、右手に笛らしきものを持っていた。

その姿を見て、二人は絶句した。

(あの格好……まさか。でも、何で、満月館の前なんか、この人が?)

「私を探していたのかしら? 良かったわね、私がまだここを離れていなくて」

歌うように紡がれた言葉。笑みを浮かべながら、女は二人を見つめた。その瞳は何かも理解していると語っているようだった。

「せ、星條……さん……?」

女は先程までよりもずっと美しく、無邪気な笑みを一人へ向けた。

第五十話：我が愛しのエンデュミオン（5）

＊
「そう、私は星條。麗月京に住まう月の民。貴方達は私を　そして私の愛するエンデュミオンを探していたのでしょうか？　それとも、あても無く探しても見つかるわけがないと思って、あの人に助けを求め、ここにこへ来たのかしら？」

女はあっさりと自分が星條であることを認めた。つまり、さくら達の推測は当たっていたのだ。

彼女は背にそびえる満月館をちらりと見る。その何気ない仕草さえ、とても魅力的で美しい。月の化身、月の女神……そんな言葉が相応しい姿に思わず二人は見惚れてしまった。彼女が静香から俊樹を卑怯な手を使って奪った（であろう）人であるということも忘れて。

しばしの間訪れる静寂。

（あの人……って出雲さんのこと、よね。満月館を見ながら言ったのだから。星條さんと出雲さんは、知り合いだったの？）

「彼と知り合っただのはつい最近のことよ。私は彼のお陰で全てを手に入れることができたの」

さくらの思いを見透かすように、星條が答えた。

その答えを聞いて紗久羅がはっとした表情を浮かべ、彼女を指差した。

「ま、まさか、牧田先輩の家の前で話していたっていう男って」

「貴方の想像通りだと思うわ」

目蓋を閉じ、くすりと星條が笑う。

(笛吹き魔 星條さんと話をしていたのは、出雲さんだったの？
そういえば)

さくらは、紗久羅が出雲に笛吹き魔とコスプレ女の話をしてやったと言っていたことを思い出した。彼はどうでも良いと答えたらしかったが……。出雲は気まぐれな性格の持ち主だ。後になって少し興味を持ち、夜笛吹き魔を探しにふらりとこちらへ出てきたのかもしない。

紗久羅が出雲に話をした日の夜、男と女が喋っている声が牧田家周辺で聞こえた。……そして物語は大きく動きだした。

さくらは不安になって紗久羅を見る。さくらが思った通り、その事実が気がついたらしい紗久羅の顔は真っ青になっていた。

自分が出雲に笛吹き魔の話をしたせいで、こんなことになってしまったと思っっているのだろう。

(でも紗久羅ちゃんは悪くない。悪くない……)

さくらは満月館を見上げる。カーテンがかかった二階の窓に、誰かの人影が映っていた。細長いそのシルエットの主が誰であるのかは一目瞭然だった。

立ち尽くす紗久羅を、星條が楽しそうに眺めている。さくらは星條をきつと睨んだ。

「貴方は出雲さんと話をし、その後牧田君と接触した。そして月の民以外にとっては毒物である食べ物に彼に食べさせた」

さくらは自分の考えを一気に語った。こみあげてくる怒りが口をよく動かしてくれる。

しかしどれだけ激しい怒りも、彼女の前では無意味のようであった。太陽のような温もりなどどこにもない、月の様に静かで、涼しげな瞳を二人に向けるのみ。

星條はそんな目で二人を見ながら、小さく拍手した。

「すごいわね。殆ど正解よ。大きく間違っている部分は殆ど無いわ。……昨日したことも、あまり意味が無かったわね」

「昨日したこと?」

「こちらの話よ、お嬢ちゃん。ふふ……折角だから、私のお話を貴方達に聞かせてあげましょう。ちゃんとした答えを、貴方達も知りたいのではなくて?」

「牧田君はどこ」

彼女の物語よりも、彼のことが気になる。

「今はあの館の中に居るわ。まあ、もうじき私と一緒に遠くへ行くことになるけれど。そしてずっと二人で幸せに暮らすのよ」

俊樹を返してくれる気は毛頭ないらしかった。

星條は微笑みながら、二人に「答え」を聞かせ始めた。それは長い長いお話だった。

*女神の告白

私は麗月京が「開かれる」と、貴方達の住む世界へ遊びに行くの。適当な「道」を進んで、出たところをふらふら当てもなく彷徨うの。あの京にずっと居るとね、息が詰まって苦しくなるのよ。温もりも笑顔もないし、面白味もない。静かで淡々としていて、とてもむなしい時間が流れるだけ。

私、あの京のことあまり好きじゃないの。明るくてお喋りで、いつも元気な子……そういう子が全く居ないわけじゃない。でもね、そんな子以上に無口で無表情で、冷たい人が多いの。眩しい陽の光も重く暗い沢山の雲に隠れてしまえば、何の意味も成さないわ。

だから、私は麗月京を出る。二度と帰るものかと心に誓いながら、人間達の住む世界へ足を踏み入れる。

けれど、結局私はすぐ京へ戻ってしまうの。あちらの世界へ足を踏み入れて間もない時は、興奮して、心が弾んで……とても愉快的な気分になるわ。でもね、すぐそんな気持ちも消えてしまう。

貴方達の住んでいる世界はとても汚くて、色が無く、高い建物が沢山並んでいて……広いの、まるで狭い牢獄のようで……息苦しくなるのよ。すぐ気持ち悪くなるし。ああ、でもエンデュミオンや貴方達が住んでいる町は今まで足を踏み入れた所に比べるとまだ長閑のどかで落ち着く場所だったわ。

外へ出ては絶望し、逃げるように帰る。結局あちらの世界はつまらないものなのだと思い、今度は妖達世界へ遊びに行くだけにしようと思いを固める。けれどももしかしたら本当はあの世界は楽しいところなのかもしれないって考えてしまって……また行ってしまおう。同じことを私は何度繰り返したのかしら？自分でも、もう分からないわ。

私は愚かでどうしようもなく馬鹿な娘。けれど、愚かで馬鹿だったお陰で私はエンデュミオンと巡り会うことが出来た。

月の民の食事と笛をお供にして、私は麗月京を後にしたわ。今度こそあちらで長い時間を過ごすのだと心に決めて……別に食べ物や笛を持って行く必要はなかったのだけれど……見知らぬ土地へ行く時、自分にとって馴染み深いものとかを持っていると落ち着くでしょう？何も持っていないと、不安になる。だから、持っていたの。

私は貴方達が舞花市と呼んでいる土地を訪れた。気配を消して、人に気づかれないようにしながら散策をした。何故気配を消す必要

があつたのかつて?……別に。只、その土地に慣れるまではそうしていようと思つただけよ。しばらくしたら姿を見せようと思つた。最初の内は楽しかったわ。麗月京とは全く違ふ雰囲気新鮮で……それがとても魅力的なものに見えて。

でもね、結局いつものようにすぐ飽きてしまったの。もういいやつてすぐ思つた。……さつさと帰ろうつて思つた。

その時だつたわ。私は『彼』と エンデュミオンと出会つたの。誰か……あの人が「かつて」愛した娘だつたのでしようけれどと一緒に歩いているのを、見たわ。

私、ひと目で彼のことを好きになつたわ。今まで感じたことがなかつた位の熱が全身を一瞬で駆け巡り、胸がうるさい位ざわついて瞳に彼の姿が鋭く突き刺さつた。あんなこと、初めてだつた。自分でも驚いたわ、本当。

それが恋であることに私はすぐ気がついた。彼は特別顔立ちが綺麗というわけでもなかつた……直接言葉を交わした訳でもなかつた……それなのに私は彼のことを好きになつた。どうしようもない位好きになつたの。

彼は気配を消している私に気がつくわけもなく、彼女と楽しそうにお喋りしながら私の横を通り過ぎて行き、あっという間にその姿は見えなくなつた。

けれど彼の顔や声はいつまでも私の目と耳に焼きついて離れなかつた。

そして私は、麗月京へ帰るのをやめた。

それから私は彼と会つた場所に立ち、彼が来るのを待つた。一人何をするわけでもなく、ぼうつとしながら。気配を消すのをやめようとも思つたわ。けれど心の準備がなかなか出来なくて……結局姿

を現すことは出来なかった。

通りすぎる姿を見るだけでは我慢できなくなって、私は彼の後を追うことにしたわ。そして彼が住んでいる場所を突き止めたの。あの家の中に入りたいと強く思ったわ。やろうと思えば出来たわ。え？……そんなこととしてはいけない？ジユウキヨフハウシンニユウだから？何それ、魔よけの呪文か何かかしら？

彼に姿を見せる勇気がなかなか出なかったわ。すぐにでも姿を現して、彼に抱きつきたいと、私は貴方のことを愛していると言いたかったけれど。出来なかった。

そう。……だから笛を吹いたのよ。私が彼に聞かせたのは、月の民の間で人気だった愛を告げる曲だった。貴方を心の底から愛している人がいるのよって教えたかった。私の存在を、知ってもらいたかったの。緊張して上手く動かせない足を、笛の音色で励ましながら、彼の家の近くまで歩いていったわ。

どうしたの、お嬢ちゃん。ん？何故毎晩同じ道を通っていたかって？それは……だって、私……彼の家へ行く為の道……あそこしか知らなかったんですもの。下手に知らない道を通って行って、迷ってしまったら大変でしょう？だから、彼の後をついていった時に覚えた道だけを使ったの。納得してくれたみたいね。顔を見れば分かるわ。

姿を消すのもやめたわ。私の存在に気がついて欲しかったから。……けれど、彼を目の前にするとどうしても気配を消してしまうの。意気地が無いでしょう？まあそれもあの人と会うまでの話だったのだけれど。

そう、出雲という名の妖に。化け狐さんなんですってねえ。

あの夜も私はいつものように笛を吹いていた。自分はこんなこと

をいつまで続けるつもりなのだろう、と思いながらね。

彼には恋人がいる。……彼はその女の子のことを心の底から愛している。今まで本気で恋をしたことなど無かった私から見ても、あの二人はとても仲が良さそうだった。妬ましい位に。愛し合っていたのでしょね。

それが分かっっていて、何故彼女からエンデュミオンを奪ったのかって？

決まっているじゃない。私もまた、彼を愛していたからよ。彼を私の伴侶にしたかった。永遠に近い日々を、彼と共に生きたかった。だからこそ私は彼を手に入れる為行動したの。

酷い？あら、どうして？好きな人を自分のものにして、何が悪いの？シノミヤシズカという恋人がいることを知っていて奪ったから？……貴方達人間っておかしなことをいうのね。

愛した人に恋人がいれば諦めなければいけない……そう貴方達は思っているの？諦めず、奪ってしまうような行為は許されないことだとも言っの？変な人達。恋人がいたら諦めなければいけないなんて。

順番とか、共に過ごした時間の長さとか、そういうのってそんなに大事なの？

些細なことじゃない。いやね、どうしてそんな怖い顔をするの？

あの人 出雲も言っていたわ。

手に入れなければ、意味が無いって。欲しいものはどんな手段を使っても手に入れろって。私もその通りだと思っわ。

話を元に戻しましょうか。こんなつまらないことで無駄に時間を使うことはないわ。

私はあの夜、出雲と出会った。夜、月の光を浴びて輝く藤の花の様な髪がとても印象的だったわ。何て美しいのかしらと思った。

ふうん。お前がこの町で噂になっているっていう笛吹き魔なのか。……もう一つ噂があるって言っていたなあ、私のお転婆姫様は何だっけ……訳の分からない言葉だったことは覚えているのだけだ

扇で口元を隠しながら彼はそんなことを言っただわ。私には何のことだかさっぱりだった……その時の私は、自分が噂的になっていることを知らなかったんですもの。

それは愛を告げる曲、かな。この辺りに君の愛する人が居るのかい？

私は彼に話したわ、今までのことを。彼が私と同じ向こう側の人間であることは一目みて分かったから、安心して話せたわ。

彼は自分で聞いておきながら、さして興味も無さそうに聞いていた。まああの人はいつもそんな感じみたいだけれど。月の民と似ているわ、彼。

話を聞き終えた出雲は、ふうんと一言。それから少しして、話を始めたわ。

君は人間を愛したのか。可哀想に。人間はすぐに死ぬよ。瞬き一回分位の時間しか生きられないんだ、彼等は。そんな者と恋をしても、ろくなことにはならないよ。それだけじゃない。色々な点で彼と君は『違う』んだ。『違う』者同士の恋なんていうのはね、大抵上手くいかないものなんだよ

私にだって分かっていたわ、そんなこと。『違う』ってとても残酷な響きのする言葉よね。私は愛した人が自分とは『違う』存在であるという事実を呪ったわ、心の底からね

。そんな私に、出雲が月の女神セレネと羊飼いの青年エンデュミオンの話を聞かせてくれたの。君にぴったりの話だって。あの人、人間の世界で作られた本を集めて読むのが好きなんですって。人間は愚かで弱い生き物だけれど、面白いことを考えたり、言ったり、やったりする素敵な玩具でもあると語っていたわ。こら、舌打ちなんかしないの。はしたないわ。女の子でしょう？

まあそれは置いておきましょう。一人こつして話し続けるのって大変ねえ。

ええと、そう。出雲は私にお話を聞かせてくれたの。そして私を指差して、笑ったわ。

月の民である女と月の女神。老いて死ぬ運命を持つ羊飼いのエンデュミオンと君が愛しているらしい人間の男。……ぴったりだね。……さて、セレネは美しい彼と永遠の時を過ごす為、彼を不老不死にしてもらった。まあ、その代わり彼は二度と目覚めぬ体となったわけだけれど。悲しいねえ……いや、でも女神自身は悲しいとは思わなかったようだから……別に悲しい物語ではなかったのかも。まあでも、そんなことはどうでもいい。……君は、これからどうするの？馬鹿の一つ覚えみたいに、ただ笛を吹き続けるだけなのかい？

そう言われた時、私の心は激しく揺さぶられた。

あの人の声には魔力がある。……ただ彼の姿を見ているだけで、彼に笛の音を聞かせているだけで満足だと思いついていた愚かな私を一瞬で目覚めさせてくれたような気がしたわ。

このまま続けていても、君と彼は結ばれない。彼に恋人がすでにいるのならなおさらだ。そもそも君と彼は『違う』存在だし。笛を吹いているだけじゃ、何も得ることは出来ないだろうよ。残酷な

運命を断ち切る為に必要なのは、海より谷より深い想いではない。
……力だよ。大きな力があれば、何だつて手に入れられる。セレネは巨大な力を持つ神の助けを借りたことで、永遠に美しいままのエンデュミオンを手に入れることが出来た

その、静かで……それでいて恐ろしく邪悪な笑みを見た後、私は視線を月の民の食べ物が入った袋に移したの。

あれが自分達以外にとっては強力な毒物であることを、私は知っていたわ。

それを人間が食べればどうなるかも、知っていた。

君はそれをちゃんと持ってきていたんだね。それなら話は早い。……もし持っていなかったら、私のをあげようと思ったのだけれど、私は珍しいものを集めるのも好きだから……麗月京へ遊びに行った時、ほんの少し失敬したんだよ。月の民の目を盗んでね。……その食べ物、人間にとつては脅威だ。そして君にとつては強力な力となる。それをたった一口彼に食べさせてやれば、運命は大きく変わる。……少しだけ手伝ってあげようか？

彼はとても楽しそうだったわ。小さな笑い声をあげる彼の姿は、とても綺麗で、とてつもなく恐ろしかった。あんな恐ろしい思いをしたのは初めてだったわ。

怖かった。けれど、どうしようもない位惹きつけられたわ。

人間の世界のことをよく知っているらしい彼の言うことを聞いて行動すれば、きっと上手くいくと思った。この絶大な「力」を以つてすれば、セレネとエンデュミオンのような悲恋物語には決してならないと、思ったわ。

笛を吹いているだけじゃ、何も変わらない。全てを変えるには、恐ろしく残酷な手を使うしかない。

少しだけ、迷ったわ。けれど、シズカって子と楽しそうに笑うエ
ンデュミオンの顔が思い浮かんだ時、その迷いは消え去った。
手に入りたい。どんなことをしても、彼を手に入れたいと思った
の。

そして私は出雲の手をとったのよ。

私のこの気持ち、お嬢ちゃん達には分かるかしら。……分からない
みたいね。

まあ、貴方達恋したことなんてないって顔しているものねえ。そ
ういう問題じゃないって？ふうん。まあ、どうでもいいわ。お嬢ち
ゃん達に理解してもらおうだなんてこれっぽっちも思っていないも
の。

さて。私は出雲と、三つ葉市という土地へ足を踏み入れたわ。何
の為に？

出雲は言ったわ。まずエンデュミオンと接触することが必要だっ
て。けれど、この格好のままじゃあ不味いと言われたの。絶対怪し
まれるって。……私は姿を変えることが出来るわ。でも、貴方達の
着ている衣 洋服とかって言うんだっけ？ の構造とかよく分
からなかったし、そういうものを着ている自分を想像することも上
手く出来なかったから、思うように変化出来なかったの。……髪を
短くすることが出来たけれど。

だから仕方なく、そういうものが沢山売られているお店に入って
……ちよつとばかり、洋服や小物を頂戴したの。気配をちゃんと隠
していたから、誰にも見つからなかったわ。

あら、随分驚いた表情を浮かべているのね。どうしたの、お嬢ち
ゃん。犯人は貴方だったのって？意味がよく分からないけれど……
まあ、そうだったんじゃないの？

人間の着るものって軽くていいわね。この格好ってとても動きにくし、重いだよ。

次の日私はエンデュミオンを家の近くで待ち伏せしていたの。彼の姿を待ちながら、私は出雲に言われたことを何度も思い出していた。

いいかい、見知らぬ人にいきなり『この飴を食べてください』なんて言っても、気持ち悪がられるだけ。まず、彼に道を尋ねるんだ。ちよつとごめんなさい、ここへの行き方を知っていますか。聞く場所は……これにしよう。ちよつと待ってね、今紙に書くから

やがて、私の前にエンデュミオンが現れた。彼はシズカと別れて自分の家を目指した。

ものすごく、緊張した。手が汗で濡れる位に。あんな量の汗なんてかいたことなかったわ。体中が熱を帯びて、月の民でありながら太陽になってしまったかのようにだった。

言葉が口からなかなか出なかった。でも喋ることが出来なければ、先へは進めない。私、頑張ったわ。

あの、ちよつと宜しいかしら。道をお尋ねしたいのだけれど彼は私の声を聞いて立ち止まって、どちらですかと微笑みながら聞いてくれた。涙が出そうになったわ。彼が私に気がついてくれた。微笑んでくれた……！

幸せな気持ちでいっぱいになったわ。ああ、やっぱり私はこの人のことが好きなんだと思っただわ。この幸福な気持ちをずっと味わっていたいと思っただわ！

私は色々な思いを必死にこらえながら、道聞いたの。

彼は親切に教えてくれたわ。とても親切に。彼の優しい声が、私

の体を駆け巡った……嬉しかったわ、幸せだったわ。

私はお礼を言って、彼に飴と称して月の民の食べ物あげたの。

少し珍しい飴なだけね。もし良かったら、お一つどうぞ。

ほんのお礼の気持ちよ、是非受け取って

そう言って彼に箱を差し出したわ。……その箱もお店で頂戴した
ものだけね。

彼は有難う、と一言言って、一つ手に取った。その時私の箱
を持っていた両手は震えていたわ。これで彼を手に入れることが出
来るといふ喜びからなのか、それとも彼を私と『同じ』存在にして
しまうことへの罪悪感からだったのか、今ではよく分からないけれ
ど。

お嬢ちゃん達、顔が真っ赤よ。……怒っているの？酷いと、思っ
ているの？

そうね、酷いわね。でもだから何だっというの？酷いことってど
んな理由があってもしてはいけないの？

私は笛を吹くことはやめた。吹いても意味が無いことに気がつい
たから。私は出雲の家に少しの間お邪魔することになったわ。

エンデュミオンと初めて言葉を交わした時のことを、何度も彼に
話してあげた。彼はともうるさそうな表情を浮かべていたわ。そ
の表情がおかしくて、私は笑った。

次の日、私はエンデュミオンと会うことにした。出雲の使い魔だ
という可愛らしいカラス君が、家の外へ出て行ったエンデュミオン
の後をつけていたらしくてね……私はもう一羽のカラス君と一緒に
貴方達の世界へと再び足を踏み入れた。

彼はちゃんと月の民の食べ物 月片げっぺんというのだけれど を食
べていたらしく、とても具合が悪そうだった。……少し可哀想にな

ったけれど、けれどそれ以上に嬉しかった。彼が私に少し近づいた。そのことが、たまらなく嬉しかった。

私は彼と接触しようと、わざと彼の前に姿を現したの。

彼は私に気がつき、私を追ってきた。嬉しかったなあ……他の誰でもない。私だけを追ってきたんですもの。彼は体の異変の原因は私が渡した飴にある……そう思ったのでしょうね。実際そうなのだけれど。

エンデュミオンは昨日とは違って変わってとても険しい形相をしていたわ。

そういう顔も魅力的だったけれど……やっぱり少しだけ悲しかったわ。

あんた、俺に何を食わせたんだ。あれは本当にただの飴だったのか？

出雲と私は、彼に色々説明してあげたわ。自分達のこと、月片のこと……色々。

最初、彼はそんなの嘘だ、冗談だと言ったわ。まあ信じるわけがないわよねえ。信じさせるの、大変だったんだから。……一生懸命説明したり、証拠を見せたりして……ようやく彼は信じたわ。

貴方が生きていく為には、あの飴が必要になる。あれが無ければ、死んでしまうわ。生きる為に食べ続けるしかない。最終的に貴方は人間ではなくなるの。私と同じ存在になるのよ。私のエンデュミオン。死にたくなければ、私に従いなさい

呆然と立ち尽くす彼の姿はとても愛おしいものだったわ。ぞくぞくしちゃった。彼とは違って、私には余裕があったわ。彼の答えは

聞くまでもなく分かっていたから。

飢え死にを彼が選ぶとは思えない。出雲もそう言っていたわ。

しばらく続いた沈黙を破って彼は口を開いた。

お前の言うことを聞けば……俺は生きていられるのか

勿論よ。今みたいに苦しむこともないわ。私は貴方を愛している。だから、貴方を殺したりなんかしないわ、絶対に

彼は悲しげな表情を浮かべて俯いたわ。小声で何か言っているようだったけれど、何と言っているのかまでは分からなかった。

答えは、彼が口にした答えは予想通りのものだったわ。陳腐な感想だけれど、私とっても嬉しかった。

私は彼と街中を歩き回ったわ。色々なお店に行った。人間の世界には、素敵なお店が沢山あるのね。飲み物も大変美味しかったわ。紅茶ってというのが特に気に入ったわ。お菓子も可愛らしくて、まるで精霊の住処のようなものが沢山あって。衣……服も種類が豊富だけれど着てみたいと思うものは少なかったかな。だって、手や足をあんなに露出するなんてはしたくない真似、出来ないもの。

素晴らしい時間を過ごしたわ、私。人間の世界の素晴らしさを知ったわ。出雲はその話を聞いて、悪戯の成功を喜ぶ子供の様な笑みを浮かべたっけ。

それから私は毎日のように彼と会ったわ。彼は月片を手に入れる為、最初の内は仕方なく私に付き合っているようだったけれど……え、今もいやいや付き合っているはずだって？そんなことない、今はあの人、私のことだけを見つめてくれている！

月片をくれと懇願する彼の顔、とても素敵だったわ。今はそういった顔を見せないけれど。

私はとても満たされた気分になったわ。ああ、彼の命を握っているのは私だと！シノミヤシズカには出来ないことを私はしているのだと！私だけが彼を生かし、彼が私を求めている！体を痺れさせ、蕩けさせる甘くて濃厚な蜜が、体中を巡った。貴方達はそんな快楽を味わったことがあって？一度味わってみるがいいわ、きっと忘れられなくなるだろうから。

そういえばお嬢ちゃん達、先日この館の前まで来たわよね？そうそう、エンデュミオンに私が月片の事などを話した次の日のことだったわね。

ふふ、あの時私……この館の中に居たのよ。

門前払いされてしまった理由が、何となく分かったかしら。……まあ、別に貴方達と私があの時点で顔を合わせたからって何が変わるというわけでもなかったのだけれど……出雲が、お楽しみは最後までとっておかなくちゃって。こうも言っていたわ。わざと現時点で会わせ、交流を深める。そして最後に種明かしをして、二人を苦しめる……そういうのも魅力的かもって。私はどちらでも良かったけれど。

俊樹が通っている学校とやらにも何度か足を運んだわ。そこから出てきた人間達にもお話を聞いたわ。皆まともに答えてくれなかったけれど。

月の民流の挨拶をしようとしたら、ぼかんとした表情を浮かべられちゃったわ。そんなにおかしい挨拶なのかしら？

……エンデュミオンはあつという間に人間から、月の民になったわ。あんなに早くなるものだとは思わなかった。

最初の頃は私のことなんて目にもくれていなかった彼が、私に近

い存在になっていく毎に、私のことを、私のことだけを見つめてくれるようになったわ。

あの人は私のことを愛していると言ってくれたわ。本当よ。言っ
たわ、あの人は、確かに。無理矢理言わせた？そんなことは無いわ
よ、ふふふ。

一度、シノミヤシズカともお話したわ。可愛らしい子だった。そ
して、可哀想な子だった。

もうエンデュミオンはあの子のことなど見ていない。あの人は私
だけを見つめてくれている。そのことが彼女には理解出来ない
ようだったわ。

シズカは私に会ったなんて一言も言っていないって？そりゃあそ
うでしょうよ。あの子は私と会ってお話をしたこと、忘れちゃって
いるんですもの。

私には貴方達が持っていないような力がある。強大な力がね。

彼はもう私を拒まない。私と共に生きると約束してくれた。

愛していなければ、そんなことはしないでしょう？私のことを愛
しているからこそ……。

悲恋にはならなかった。私達は永遠に愛し合う。誰にも邪魔はさ
せないわ。

これから私とエンディミオンは旅立つの。麗月京へは当分の間戻
れないけれど、あそこ以外でも私達は生きられるから何の問題も無
いわ。

*

星條は一気に喋り終えた後、ふうと一息ついた。話し終えてすっ
きりしているようだった。

紗久羅は拳をぎゅっと硬く握りしめながら話を聞いていた。自分

のせいだという思いと、ふざけんなこの馬鹿女がという怒りの感情。その二つの激しい感情が彼女の体を小刻みに震わせる。星條がもう少し長く話を続けていたら、彼女は星條に殴りかかっていたかもしれない。

一方のさくらは暴力を好まない。だが、紗久羅の気持ちは痛いほどよく分かった。

(目の前に居る人は人間では無い。人間の尺度で測ることが出来ない存在。そんなことは分かっている。分かっているけれど)

静香のことを思うと、胸が痛くなり、嫌な感情が体中を巡る。

「酷い。こんなの、酷すぎる……」

やるせない思いが言葉となり、外へと吐き出される。紗久羅はその言葉に同意するかのような視線をさくらへ向けた。

「酷い？」

星條は微笑みながら首を傾げる。

「酷いわ。貴方は篠宮さんを傷つけ、牧田君を傷つけた。いいえ、その二人だけじゃない。牧田君のことを大切に思っている人全員を、貴方は笑いながら傷つけたのよ」

「私は傷つけたつもりなどなかったのだけれど。エンデュミオンは自分から、私に愛していると、私と共に生きたいと言ったのよ。そこに関しては強制などしていない。……つまり彼は私のことを愛している。彼は傷ついてなどいないわ。むしろ私と一緒に居られて、幸せではなくて？」

「違う。それは心からの言葉ではないわ。確かに貴方はそう言えとは言わなかったかもしれない。けれど……。……牧田君は貴方のせ

いで、心を殺されてしまった。生きる場所を奪われてしまった。そんな彼が生きるには、貴方を頼るしかない。貴方にもし嫌われたら、彼は途方に暮れてしまう。だからきつと、貴方にそんなことを」

「違うわ。違う！ あの人は私のことを心から愛しているのよ！」

星條は首を横に振りながら、さくらを睨んだ。彼女の白い頬が桃の色に染まっている。

さくらも負けてはいない。星條を睨みつけ、口を真一文字に結ぶ。

（影月さんは、月の民は食事をしなくても生きていけると言っていた。多分牧田君も今はもう星條さんから月片を貰わなくても生きていける。少し位の怪我などで死ぬこともない。……だから、星條さんの下を離れても死ぬことはない。牧田君もきつとそのことは分かっているはず）

星條の束縛から逃れることが出来ないことはないときくらは思う。

だが、俊樹は異界に関しての知識は殆どないはずだ。右も左も分からない世界で一人生きていくのは相当辛いことだろう。

かといって、人間の世界で今まで通りの毎日を過ごすことも、もう出来ない。

暫くの間はごまかせるかもしれないが、いずれ周りの人々は違和感を覚え、最終的に俊樹が異質な存在になってしまったことに気がつくだろう。……そのことに俊樹は耐えられるだろうか。いや、耐えられないだろう。

追い詰められた俊樹が選ぶ道は、一つしかなかった。彼は星條を選ぶしかなかった。

（それに、牧田君と一緒に生きることを拒否すれば、星條さんは何をするか分からない。記憶を消すだけならまだしも、もっと酷いことをするかも……）

唾を飲み込むさくら。

その彼女に代わって口を開いたのは紗久羅だった。

「あんだ、人の記憶を操作する力があるみたいだけれど……最初からその力を使っていれば、まどろこしい手を使わなくても簡単に牧田先輩を手に入れることが出来たんじゃないか？」

自分が人間であることや静香のことなどをさっさと忘れさせて、更に私は貴方の恋人ですと嘘の情報を吹き込み、その上で月片を与えて月の民にするなりなんなりしてしまった方が、ずっと楽だったのではないかと紗久羅は思ったのだ。

星條は非常につまらなそうな表情を浮かべた。

「それじゃ面白くないじゃない。簡単に成就出来ちゃう恋なんてつまらないでしょう？ 出雲も言っていたわ。私もそう思ったからこそ、ちよつとまわりくどい方法を使ったのよ」

それを聞いた紗久羅は二階の窓をぎろつと睨みつける。カーテンの向こう側に見える陰は彼女に睨まれても、一切動くことはなかった。

「あの野郎……余計なことばかり言いやがって！」

「まあ彼が現われなかったとしても……そう遠くない未来、私は動き始めたでしょうよ。エンデュミオンを手に入れる為に……さて、お嬢ちゃん達。私はそろそろ行くわ。彼と一緒に。でも安心して、彼が居なくなってもシノミヤシズカや貴方達が悲しまないようにしてあげるから」

その言葉を彼女が口にした瞬間、場の空気が一気に変わった。闇の色をした木がざわつき始め、見えない氷の鎖がさくら達を縛りつける。

彼女が何をしようとしているのか、二人はすぐに察した。

「てめえ、ふざけんな……！」

我慢できなくなった紗久羅は星條に殴りかかろうとする。だが体が動かない。

星條は悔しがる紗久羅を面白いものでも見るかのような目で見つめながら、笑っていた。

「私って優しい人でしょう？ 忘れてしまえば、何の問題も無いわ。誰一人悲しんだり、苦しんだりすることがなくなる。私の力が、全て打ち消してくれるわ。さようなら、お嬢ちゃん達。私やエンデュミオンのことなどすっかり忘れて、楽しい毎日を送りなさい」
さくらは首を激しく振ろうとした。だが矢張り体は思うように動かなかった。

悔しい。忘れてしまえば何もかも解決すると思っ込んでいた星條に何も言えず、出雲さんの馬鹿と叫ぶことも出来ず、俊樹を助けることも出来ず。

結局何も出来なかったことが、悔しくて仕方なかった。

空から、黄金の光の粒が落ちてきた。眩しい光の雨が、さくら達を包み込む。

その光を浴びてはいけないこと位は二人にも分かった。だが抵抗することは出来なかった。

きっと星條はこの後、一度さくら達の住む世界へ行き、同じようなことをして静香や俊樹の両親達の記憶も奪っていくのだろうとさくらは思った。

（ああ。牧田君は『話しても意味が無い』と言っていた。……あの言葉にはもしかしたら。話したところで、どうせあんたは近々俺のことを忘れてしまうだろうから意味が無い……』という意味も込めら

れていたのかもしれない)

そのことを察したからといって、事態が良い方向に進むわけではない。

「さあ、この光に抱かれて全てを忘れなさい。あ、ちなみにこの光の粒子は只の演出なのよ。こっちの方が綺麗だと思って。さようなら、ばいばい」

星條の笑みは黄金の光にも負けぬ眩しいものであった。手を振る彼女は今きつと、とても幸せなのだろうとさくらは思う。

頭が段々ぼうつとしてきた。真っ直ぐ立つことすらもうままならぬ。

さくらは自分の頬を何か暖かなものが伝っていくのを感じた。微笑みながら手を繋ぎ合う静香と俊樹の姿が脳裏に浮かんだからだ。

有名な位仲が良かった二人が、人間の常識を超える力によって離れ離れになってしまう。そのことが分かっているながら、さくら達にはどうすることも出来ない。

(ごめんなさい、篠宮さん。ごめんなさい、牧田君)

さくらと紗久羅はその場に崩れ落ち、束の間の眠りについた。

*

静香は部屋の中一人うずくまっていた。俊樹が見つかったという連絡は未だ無い。彼は携帯の電源も切っているらしく、電話で連絡をとることも叶わなかった。

暗くて冷たい部屋。膝を抱え、顔をそこにうずめながらただ泣いていた。

そんな彼女を見つめる、机の上に置いてある写真立て。そこには幸せそうに微笑む静香と俊樹の姿があった。

静香には分かっていた。もう二度と俊樹が戻っては来ないことが恐らく彼に想いを寄せているらしい女と共に、どこか遠くへ行くの

だろうと思った。

認めたくは無い。これは悪い夢なのだと思います。だがこれは夢でも幻想でもない。現実なのだ。

「俊樹……」

ただ一言大切な人の名を口にした。魂の半分と呼べる存在である、彼の名を。

刹那、窓の外が俄かに明るくなったのを感じ、静香はゆっくりと顔を上げた。

真っ赤になつた瞳を刺激する、眩い光の粒子が降り注いでいるのが見え、静香はぼかんと口を開ける。やがてその粒子は窓をすり抜けて彼女の部屋の中にまで入り込んでいく。

美しい光だった。この世のものとは思えない、とても美しい……。

「いや」

だが同時にその光はとても恐ろしいものに見え、静香は後ずさつた。だが足は思う通りに動かず、数歩下がったところでバランスを崩し、尻餅をついた。

あれに触れてはいけない。直感的にそう思った。それは果たして生物としての勘だったのか、それとも女の勘だったのか。

「来ないで」

泣きすぎてすっかり枯れてしまった声で、懸命に彼女は叫んだ。だが光の粒子は哀れな兎を狙う獣のように、じりじりと近づいてくる。

ドアの前まで追い詰められた静香は、とうとう捕らわれてしまった。

降り注ぐ光。それを浴びた瞬間、気が遠くなった。
俊樹との思い出が怒涛の勢いで頭を駆け巡る。

(俊樹……)

目蓋が重くなる。頭の中が真っ白になっていく。

静香がまさに糸の切れたマリオネットの如く倒れそうになったその時。

静香……ごめん。さようなら。

俊樹の声が聞こえたような気がして、静香は一際大きな涙を零す。それが床へ落ちるかどうかというところで静香の意識は完全に消え、彼女は床に倒れこみ、眠りについた。

しばらくして目を覚ました時には、彼女の頭から牧田俊樹という存在は消えてしまっていた。

「あれ？ 私は何で床に眠っていたのかしら……やだ、私泣いていたの？ どうして」

腫れた目蓋や、涙の通り道となった頬をこしこし擦る。自分ものすごい勢いで泣いたらしいことは分かったが、何故泣いたかについては全く思い出せない。

首を傾げる静香の目に、写真立てが映る。それには静香が一人笑っているだけの写真が飾られている。

(何で自分しか写っていない写真なんかを、こんなところに……)

今の静香にその理由を推し量る術は無い。

実のところ、写真から俊樹の姿は消えていないのだ。星條の力は写真やメール等にまでは流石に及んでいなかった。だから静香の隣には前と変わらず、幸せそうに微笑む彼の姿がある。

だが、静香は写真に写る彼の姿を最早『認識』出来なくなっていた。目で見てはいるのに、脳がそれを認識してくれないのだ。牧田俊樹という存在（そして星條という存在）を脳が認識することを、拒絶させる。星條が人々に施したのは、そういった術であった。

静香はしばらくその写真を眺めていた。

「あれ……？」

静香は自分の頬が再び涙で濡れるのを感じた。何故かその写真を見たら、胸が苦しくなったのだ。

涙は止まることなく、静香の頬を、膝を、心を濡らし続けた。

「どうして、どうして……苦しい……」

何気なく外を見る。窓の外から、美しい月が見えた。

その月を、何故かとても憎らしいと思い、静香は素早く立ち上がると乱暴にカーテンを引き、月を拒絶する。

月を見ていたくなかった。

明かりを失った部屋の中、静香は只泣き続けた。

それ以後、静香が他の男性と付き合うことはなかった。告白されたことも何度かあったが、全て断り、独り身を貫いた。

何人かの友人は彼女に「どうして恋人を作らないのか」と聞いた。静香の答えは「よく分からないが、何となくそうしなければいけないような気がした」というもの。

彼女は純潔を守り続けた。

月の女神アルテミスのように……。

第五十一話：そして羊飼いは月に抱かれて消える（1）

自分のものとは到底思えない、恐ろしく白くなった手を眺めていた。血が体内を巡っているはずの手。なのに全くといっていい程温もりを感じなかった。

今はもう、色々考えることすらむなしく思える。先日まで暴れていた感情は、どこかへ消え失せていた。考え、怒り、憎み、苦しむことをやめた自分は最早人形と変わらない存在なのだと思う。人形と同じ。その事実さえも、魂を激しく燃やす燃料にはもうならない。

俺は今、ある館の部屋に居る。椅子に腰掛け、自分という存在が完全に死ぬ時を静かに待っていた。

カーテンがかかった窓の前に、一人の男が立っている。薄い紫藤色というのだろうか　の美しく長い髪。人間のものとは思えない……いや、実際そこに立っている男は人間ではなかった。

そして俺もまた、人間では無い。ほんの一週間程前までは、人間だった。でも今は違う。今の俺は人形であり、化け物であった。

俺はすっかり白くなった手を眺めながら、こんなことになってしまった経緯を思い返していた。

『そして羊飼いは月に抱かれて消える』

涼しく心地よい風に撫でられながら、俺は静香と一緒に橙と紺の入り混じった空の下を歩いていた。静香は俺の幼馴染であり、恋人でもある。

部活を終え、いつものように昇降口前で落ち合い学校を後にした。手は繋がらない。そういうことは滅多にしなかった。だって、恥ずか

しいから。幼稚園や小学校に通っていた頃（未だ恋人同士にはなっていないかった頃）はしょっちゅう手を繋いでいたけれど……。

会話も殆ど無い。少し喋っては無言になり、しばらくしてまた口を開く。その繰り返しだった。静香はそこ等に居る女子に比べると大人しい方で、ぺちやくちゃ際限なく喋るといことは滅多にできなかった。彼女が饒舌になるのは、不安や悩みごとを抱えている時や、ものすごく興奮している時位のものだ。

かくいう俺もまた、友人達ほど喋ることが好きでも、得意でもなかった。暗いとか、人付き合いが悪いとか無口な奴だと思われぬ程度には喋っているが。

二人してそうだったから、会話が途切れて静かになっても全然気にならなかつた。

静香が今喋りたい気分なのか、そうで無いのかというのは何となく分かる。

だから彼女が喋りたそうにしている時は、積極的に口を開いた。そうで無い時は口を閉じ、ただひたすら道を進む。

そのことを苦痛だと思ったことは無い。むしろとても楽だった。

彼女と一緒に居て体や心に大きな負荷を感じたことは殆ど無い。

穏やかで心地良い　　喻えるなら殆ど波が無い海に身を任せ、ぶかぶか浮かんでいる時のような感じがするのだ、静香といると。

そんな俺達のことを、友人等は「長年連れ添ってきた夫婦みたいだ」と言う。

まだ恋人として付き合っていないかった中学時代から、そんなことを言われていた。

理由はよく分からない。聞いても「何となく」とか「上手く説明出来ないがそう思う」などという答えしか返ってこないのだ。

ただ俺も静香も、そう呼ばれることを嫌だとは思わなかった。そう言われてからかわれる度、よせよ恥ずかしいと相手をたしなめながらも心は弾んでいた。

幸せだった。きつと自分はこの先もずっと、穏やかな海の上を漂い続けるのだろうと当たり前のように思っていた。

そう思ってた「いた」のだ。

全国どこにでもありそうな、平凡で地味な風景広がる道を二人で歩きながら、部活のことや来月行われる文化祭のこと、そして最近この町　しかも俺達が住んでいる辺り　に出現している笛吹き魔のことなどについて話した。

笛吹き魔。それは決まって夜現われる謎の怪人（？）だ。

舞花市方面から桜町にやってきて、笛を吹きながら町を歩き（どうも毎晩同じルートを辿っているらしい）最終的に俺の家近くに止まり、しばらく笛の演奏をし、帰っていく。笛の音は決して小さくはなく、はっきりと聞こえる。普通なら安眠妨害となるはずなのだが、不思議とそうはならない。耳に入り込んでくるというよりも、頭に直接響くという感じで……。上手く説明出来ないが、兎に角普通の笛の音といった感じではないのだ。

俺は、その音色を聞くと夢を見る。それはいつも同じ夢だった。誰かが何か喋っている夢なのだが……何を言っているのか、どんな人が言っているのかはさっぱり分からない。モザイクがかかっている上に映像が常にぐにやぐにや動いているせいで意味が分からない感じになっていくのだ。同じく笛の音を聞いている両親や静香は、そういう夢は見ないらしい。

「ここ一週間ちよつと毎晩笛吹き魔は現われていた。ところが、だ。昨晩はいつもと様子が違った。笛吹き魔が演奏を途中でやめたのだ。しばらくして男と女の話す声が夢の彼方で微妙に聞こえた。その声はしばらくして消えていき、また笛の音が再び聞こえることもなかった。」

「どうしたんだろつな、笛吹き魔」

俺が呟くと、静香が肩をすくめる。

「さあ？ 私としてはさつさと笛吹き魔には消えてもらいたいわ。案外今夜は来ないかもしれないわね。その方が良い。あの笛の音色……何だか気味が悪いんですもの。とても綺麗だけれど……何だか不安な気持ちになるの。俊樹はそういう気持ちにならない？」

少し苦しげな表情を浮かべる静香を見ながら、俺は首を横に振る。嫌だとか気味が悪いとか……そんな風に思ったことはなかった。

「まあ、居なくなってくれば良いなとは思っけれど。平凡でとても地味だけど平和な日常がぶち壊されるの、俺は好きじゃないからさ」

平和が何より。そんな言葉を付け加えて笑うと、静香の表情が柔らくなつていった。小さな笑みを浮かべた彼女は、こくりと頷く。

「そうそう。平和が一番」

俺も笑顔を浮かべる。そしてまた無言の時間が続く。結局静香と別れるまで、その沈黙が破られることはなかった。

別れ際、彼女は右手を小さくあげて「また明日」と一言だけ口にした。明日は世間一般でいうところの『デート』というやつをする予定だった。

「おう、また明日」

こちらもそれだけ言って、家を目指して歩く。俺の家まではここから歩いて二分もかからない。小さく鳴る腹の虫。空腹を訴える切実な鳴き声に苦笑いしつつ、足を進めていった。

曲がり角を左に折れると、視界に自分の家が入る。今日の夕飯は何だろうか、そんなことを考えながら仄暗い空を見上げた。

だから、最初は電灯の下に立っていた『あの女』に気がつかなかった。あの女が俺に話しかけていなかったら、多分気がつかないまま家へ帰っていただろう。そのまま気がつかなかったらどれだけ良かっただろうと後悔することになるのだが……。

声が出た方を向くと、そこに二十代半ば〜三十歳程と思われる女が立っていた。

まず目に飛び込んできたのは、ぎよつとする位白い肌だった。その肌が月光のように辺りを照らしていた。その体とは正反対に、長い髪はとても黒い。

育ちが良い感じで、どこぞのお嬢様ではないだろうかと思った。少なくともこの辺りに住んでいる人間では無い。

整った顔立ち。正直に言えば、ほんの少しときめいた。半身とも呼べる大切な恋人が居ることを一瞬忘れさせる位、その女は美しかった。だがときめきはすぐ恐怖心へと変わっていった。

顔が整いすぎていて、逆に気味が悪かった。人間ではありえない完璧な（しかも見た感じ化粧は殆どしていない）、美貌をもつ精巧な人形を思わせた。

目の前に居る女は、人間なのだろうか。俺はここから逃げた方が良いのではないだろうか。そんなことを俺は考えた。頭が警報を鳴らしているような気がする。俺は少し身構えながら、女をじっと見つめる。

女は俺が立ち止まったのを認めると、やや緊張しているような面持ちで口を開いた。

「あの、ちょっと宜しいかしら。道をお尋ねしたいのだけれど」
その言葉を聞いて少しほっとした。妙な不安が拭い去られていくのを感じる。

俺は「いいですよ」と言って頷く。この辺りのことなら何となく分かる。女はほっとしたような表情を浮かべた後、微かに笑んだ。

女が聞いてきたのは、ここからそう遠くない場所にある店までの道。そこまでの道順は別に複雑なものではなかったから、説明はすぐ終わる。女は俺の顔をじっと見ながら、何度か理解したことを示すように頷いた。

一通り説明が終ると、女は満足気に微笑む。どうやら一度で飲み込んでくれたらしい。

「ありがとう」

「いいえ、それじゃあお氣をつけて」

俺は女の傍から離れ、再び歩き出そうとした。だがまたすぐ女に呼び止められ、上げた足を慌てて地面につける。

見ると女は箱のようなものをこちらに突き出していた。その箱は女子がアクセサリーや小物を入れるようなもので、可愛らしいデザインであった。

何でそんなものをこちらに突き出すのかと訝しがる俺を見て、女ははっとした表情を浮かべると恥ずかしそうに俯いた。

「いやだわ、突然ごめんなさいね。あの、その、ちょっとしたお礼を差し上げようと思って」

何故か妙に震えている手で箱を開ける。箱の中には歪な形をした、透き通った水色の石らしきものが詰まっていた。夏祭りの屋台である『宝石すくい』に使われるうそっこの宝石にどこか似ている。

「これ、飴なの」

「飴？」

俺は箱の中に詰まっていたそれを凝視する。言われて見れば、飴に見えないこともない。

「少し珍しい飴なのだけれど。もし良かったら、お一つどうぞ。ほんのお礼の気持ちよ、是非受け取って」

飴のような、それとは全然違うもののような……何ともいえない見た目のそれを前に、俺は受け取るうか正直少しだけ迷った。

けれど最終的に折角の厚意は受け取っておこうと思い、ありがとうとお礼を言ってそれを一つ手にとる。それは少しだけひんやりしていて、肌触りはつるつるしている。

俺がそれを取ったのを見ると女は幸せそうな表情を浮かべる。飴一つ受け取った位で何故そんな表情を浮かべるのだろう……その時の俺には分からなかった。

女は改めて礼を言い、会釈するとその場を立ち去った。

「さて……この飴どうするか」

手のひらにのった飴。多分夕飯の支度は殆ど終わっているはずだ。ご飯を食べる直前に飴を舐める気にはなれない。しかしその飴は包装されていないから、カバンなどに入れておくわけにもいかない。

結局今舐めることにした。噛んで碎くなりなんなりしてさっさと終わらせておう。

口の中に放り込んだ飴は、何とも言えない味がした。不味くはない。むしろ美味しかった。けれど何味なのかさっぱり分からない。何種類かの果物が混ざっているのか？何の味なのか推理しながら、家のドアを開ける。

その飴はなかなか口の中で溶けなかったから、仕方なく俺はそれを噛み砕いて飲み込んだ。少しもつたいなかったかなと正直思ったが（それ位美味しかったのだ）。飴で余計刺激されたらしい腹がけたたましい音を立てる。正直な腹だと苦笑した。

*

異変に気がついたのは、夕飯を終えて自分の部屋に戻った後だった。俺は部屋に入るなりベッドにダイブし、買ったばかりの雑誌を開いた。

それから数分後のこと。俺はぐうぐうと何かが唸るような声を聞き、起き上がる。近所の犬が唸っているのだろうかと始めはそう思ったが、実際はそうではなかった。

先程も聞いたような気がする、音。俺はおそろおそろ自分の腹に手を当てる。

ぐうぐう。腹から、空腹を訴える音が聞こえてきた。

「嘘だろう？」

しかしその音は間違いなく自分の腹から聞こえているのだった。その事実を認識した途端、俺は異様な空腹感を覚える。そんな馬鹿なと思った。俺はついさっき夕飯を食べたばかりだ。少量しか食べていないのならともかく、今夜はいつもより多めの量を食べていた。にも関わらず腹が全く満たされていないのだ。むしろ夕飯を食べる直前より腹が減っている感じがする。

更に俺は喉に手をやる。水を沢山飲んだはずなのに、喉が異常に

渴いていた。

頭が熱くなってきた。おまけに、痛い。脳内で花火が打ち上げられているような感覚に襲われる。動悸もした。

骨が熱した鉄のようになってきて、体中の筋肉が悲鳴をあげている。

痛い、熱い、苦しい。悲鳴さえ、出てこなかった。思考も完全に停止した。

ベッドで悶えながら、どうにか親に助けを求めようとするが、上手くいかない。このまま自分は死ぬのかと思った。

しかししばらくして 自分が思っていたよりは短い時間だったようだが 痛みや熱が唐突に消え失せた。

汗が体中を伝う。深呼吸をして息を整えた。苦しくは無くなった。だが、空腹感や喉の渴きは変わらない。

たまらず、買ってあった菓子に手を伸ばす。祈るような気持ちでそれらを平らげるが、矢張り腹は満たされない。

一階に下りて冷蔵庫を開ける。そこに入っていたウーロン茶をがぶ飲みした。けれど少しも喉は潤わない。

頭の中が真っ白になる。浮かび上がっては垂れていく汗。

どうしてこんなことになってしまったのか。早足で部屋に駆け込み、真っ白になったりぐちゃぐちゃになったりする頭をベッドに押しつける。

何の前触れもなく起きた体の異変。その変化をもたらしたものは何なのだろうと「動揺」「混乱」という名の空気によって膨れ上がり、今にも爆発しそうな頭を無理矢理回転させながら、原因を探ろうとする。

病気？それともこれは夢？現実的な考え、非現実的な考えが頭の中を巡る。

考える間にもどんどん頭の中は膨れ上がっていき、空腹感や喉の渇きの度合いは酷くなっていた。

考えた。考えた末、訳が分からない、原因など分かるものかと思考を停止させようとしたその時、俺の脳裏にある光景が浮かぶ。

可愛らしい箱、宝石にも似た『飴』そしてそれを俺に差し出した女の姿。

人間とは到底思えない、美しい顔立ちと白く輝く肌。俺はそんな彼女を見た時、この女は人間ではないかもしれないから逃げた方がいいかもしれないと、彼女が口を開くまで思っていた。

普通なら、幾らものすごい美人を目の前にしてもそんなことなど考えないかもしれない。けれど。……俺の住む桜町は基本的には平和なところだ。だが、時々常識では考えられないようなことが起きる。この辺りには今も妖怪等が住んでいるのだという話を何度か聞いたこともある。

そういうところに住んでいたから、俺は彼女を見た時そんなことを考えたのだ。馬鹿馬鹿しいとは思った。妖怪とか、そういう類のものなど居るわけが無いと俺は思っている。それでも俺は思った。思ってしまった。妖怪等の存在を信じない俺が、そんなことを考えてしまう位に道を尋ねた女の容姿は異様に映ったのだ。

「もしあの女が真実、人間じゃなかったとしたら……俺にくれたものが本当は飴ではなかったとしたら……」

貰った『飴』は初めて口にした味だった。そしてその『飴』は舐めてもなかなか溶けなかった。あれを『飴』だと思っただのは、それにくれたあの女が「これは飴だ」と言っただからだ。あの言葉が嘘だった可能性だってある。

そうだとして、何故女は嘘を吐いてまで俺に飴を食べさせたのか（まさかこれが飴じゃないとは知らなかったなどというパターンではないだろう）。そもそも、あの女が俺に話しかけてきたのは本当に「道を聞く為」だったのだろうか。

女の目的は「道を聞くこと」ではなく「飴（と偽った何か）を食べさせること」だったのではないだろうか。俺が飴を受け取ったのを見て、少しほっとしたような表情を浮かべたのは目的を達成することが出来たからだっただけでは……。

そこまで考えた後、俺は苦笑した。その笑いは、少ない情報を組み立ててファンタジックで馬鹿馬鹿しい物語をつくってしまった自分に対して向けたものだ。この町が妙なことなど一切起こらないところで、かつあの女の顔がいたって平凡なものであつたら絶対にこんなことは考えなかつただろう。

そんなことを考えるために、無駄なエネルギーを使ってしまった腹の音がますます大きくなっているのを感じ、ため息をつく。色々考えている内に心は少しだけ落ち着いた。

原因を推測するより、これからどうするべきか考える方が大切かもしれない。

まあ何をするといいっても、事態が良い方向に向かいそうになれば親に相談して病院へ連れて行ってもらうということ位しか思い浮かばないが。或いは駄目元であるの飴をくれた女を探して問い詰めてみるとか……。

「あんまり心配かけたくないな……それに明日は」

明日は静香とデートの予定だ。まあ具合が悪いといってキャンセルすることは出来る。無理をして彼女に迷惑をかけてしまうのなら、そうした方がずっと良いとは思う。

だが、最終的に俺が下した決断は「とりあえず様子見。のつぴきならない状態になったら言う」というものだった。何故そんな判断を下したのか。エネルギー不足で脳が正常運転をしてくれなかったからなのか、それとも下らない意地だったのか。理由は分からない。

結局その日は風呂に入ってさっさと寝た。といつても空腹のせいでまともに寝られなかったが……。

自分の身に一体何が起きているのか。それを知ったのは、翌日のことであつた。

*

朝目が覚めたらすっかり体調が悪くなつていた……そんな展開を、ほんの少しだけ期待していた。だが現実はそんなに甘くは無い。いつもより多めのご飯を食べたが結局腹は満たされず、水を大量に飲んでも喉は少しも潤わない。

空腹感と喉の渴きは酷いものだったが、それでも体をいつものように動かす位のエネルギーは残っているようだった。これなら倒れることもないだろう……そう思った。

でも、この状態がいつまでも続いたらどうなるか分からない。栄養分や水分がきちんと吸収されていないのだとすれば……いずれは倒れてしまうだろう。

それが分かつていながら、親に話す決心がつかず着替えを終えようと逃げるように家から飛び出す。

「あ、おはよう」

勢いよく玄関前の階段を飛び降りた俺を、静香が出迎える。大体彼女の方が先に家を出て、俺の家の前で待っているのだ。

清楚な服装がよく似合う彼女は、微笑みながら歩き出す。

「今日はどこ行く?」

「うーん、三つ葉市でいいと思う」

正直あまり遠出はしたくなかった俺はすぐ隣にある街の名をあげる。あそこまでならバスで簡単に行けるし、色々あるからそこそこ遊べる。

「あの、私見たい映画があるんだけど……いいかな?」

三つ葉市に向かうバスに乗り、ぽつぽつとお喋りを始める。静香が見に行きたいと言った映画は今話題になっているものだった。拒否する理由は特になかった。俺がいいよと頷くと、静香は満足気に微笑む。

「俊樹ならきつとそう言ってくれと思った。ふふ、ほら」

静香がカバンから取り出したのは映画の割引券。上映時間もすでに調べてあるらしい。

街を適当に歩いて、お昼を食べた後映画を見ようと彼女は言う。

今日一日の予定を簡単に立てた後は、いつものように無言になる。俺は腹の音が彼女に聞こえないことを願った。だが隣に座っている彼女に聞こえないはずもなく。手で覆った口から笑い声が少しだけ漏れていた。

笑ってくれるのなら、それでいい。兎に角今日は彼女を心配させないようにしなければと心に固く誓う。

しかしそう誓ったからといって腹の虫や喉の渴きがおさまるはずもなく。

我慢できず、何度もジュースを買ったり水を飲んだりした。意味がないことは分かっていた。それでも飲まずにはいられなかったの

だ。自動販売機へ足を運ぶ度、静香の視線が体に突き刺さる。

頭の中でペットボトルや好きな食べ物ぐるぐる回っている。静香の話、自分が話している内容、どれも頭の中に入っていない。体を動かすのがしんどい。

静香が俺の異変に気づかないわけがなく、最初の内は輝いていた表情がだんだん曇っていくのが見てとれた。声も段々小さく、暗くなっていった。すっかりしなければ、そう思った。けれどどうしても自動販売機から目を逸らせなかったし、話にも集中できなかった。

昼にしようと思ったファミレスで、いつもなら絶対に食べられない位の数のメニューを頼んだ。ついでにドリンクバーも頼む。俺は「寝坊して朝食をとれなかったから、腹が減っているのだ」とか「喉が少し痛くて、水分をとっていないと落ち着かない」などと苦しい言い訳をした。勿論そんな言い訳が彼女に通じるはずは無く。

静香が段々と饒舌になっていく。いつもの五倍は話している。それが何を意味するのか分からない俺ではない。どうにか彼女の不安を拭い去ってあげたいのだが、そんなことをする余裕が無い。俺は彼女のサインに気がつかないフリをしながら、ひたすら腹に水分と固形物を入れる作業を繰り返していた。

ファミレスを出て、映画館へ向かう間も彼女は喋り続けた。静香が普段これだけ喋ることはまずない。だが俺には彼女が喋ったこと半分も理解出来てはいなかった。頭がぼうつとしていて、耳から入ってきた言葉をすんなり受け止められない。

腹が減った。喉が渴いた。何か食べたい。何か、飲みたい。静香を心配させたくない。けれど食わずには、飲まずにはいられない。

映画を見ながらポップコーンやチュロスを食べ、ビッグサイズのジュースを飲み干す。映画の内容は一切頭に入らなかった。EDテ

「マがどんな曲だったかさえ、思い出せない。」

映画館を出た後、色々な店へ行った。どこへ行ったのか思い出せない。ただ、静香が服を見ている間ジューズを何本も飲んだことだけは覚えている。

「公園で……休もうか」

静香が顔をあげ、じっと俺の顔を見つめる。苦しげなその表情に俺は胸が締め付けられる思いがした。彼女がそんな顔をする原因が自分にあることは分かっていた。分かっているながら、何も出来なかった。それがたまたまなく辛かった。

三つ葉市にある大きな公園には、休日だけあって沢山の人がいた。目の前で空いたベンチに二人で腰掛ける。

「……笛吹き魔、昨日の夜来なかったね」

話題が尽きたらしい彼女はしばらくの間黙っていたが、やがて沈んだ声でぼそつと呟いた。それを聞いて俺は小さく「ああ」と答えた。

そういえばそんな奴いたっけ。すっかり忘れていた。空腹感等がその奇怪な存在から目を逸らさせていたのだった。

確かに言われてみればそうだ。昨日の晩、笛吹き魔は現われなかった。静香の言葉を聞いて、ようやくその事実気がついた。

「このまま来なければいいよね」

「うん、そうだね……」

また沈黙が続く。それを時々破るのは、腹の虫が鳴く音だった。静香が俺の方をじっと見つめている。一体どうしてしまったのか

彼女の目はそう話していた。音無き言葉が次々と投げかけられるのを感じる。それでも俺は話さなかった。

しばらくして、静香は震えながら立ち上がった。

「ジュース、買ってきてあげる」

声も震えていた。俺に向けた笑みは硬く、目は心なしか潤んでいた。

逃げるように離れていった彼女の背中に俺は「ごめん」と小さな声で謝罪の言葉を投げかける。彼女が消えたのを見て、深いため息をついた。

今日のデートは矢張りキャンセルした方が良かった。そう心の底から思った。

静香のせいなんかじゃない。全部俺が悪いのだ。こんな状態でどこかへ出かけようとするなんて、馬鹿のすることだ。

彼女がどんな思いをしながら喋り続けていたか。それを考えるだけで苦しくなる。苦しくて、辛い。でもそんな思いは腹を満たす糧には決してならない。

彼女が戻ってきたら、ちゃんと言おう。幾ら食べても飲んで満たされないという部分は言わない。でも具合が悪いということはちゃんと言おう。そして帰ろう。……帰ったら、親に相談しよう。

静香の悲しそうな表情を見て、ようやく正常な判断を下すことが出来た。

俯きながら考えていた俺を、誰かの影が包み込んだ。ああ静香が戻ってきたのだ、そう思った。

ちゃんと言わなければ。俺は顔をあげた。

だがそこに立っていたのは静香ではなかった。長い髪と細い体が目に映る

女かと思ったが、よくよく見てみるとどうやら男であるらしいことが分かった。昨日の夜会ったあの女によく似た雰囲気を漂わせている。

見た者の心臓を凍りつかせる化け物ではないだろうか、と思う位美しい顔立ちをしていた。

男の瞳はつららに似ていた。鋭くて冷たくて……。その瞳でじつと見つめられた俺は空腹を忘れた。心臓を掴まれる思いがし、頬を冷や汗が伝う。

「見てごらん、あそこに君のお姫様がいるよ」
顔立ち、瞳と同様に声もまた美しく、冷たい。男は細く白い指でどこかを指した。

俺のお姫様？ 静香のことだろうか？ 訳が分からないまま、男の指した方を見た。指差した先には沢山の人が居たが静香の姿は無かったし、見知っている人もいなかった。

「一体誰のことを指して……あ！」
見知らぬ人が誰一人いないわけではなかった。
見覚えのある白い肌が俺の目に映った。まさか、あいつは。長く黒い髪、白い肌、どこぞのお嬢様っぽい服装。

背筋を凍りつかせる位美しい、あの女だった。俺に『飴』を渡したあの。

「お前！」

俺は勢いよく立ち上がり、叫んだ。女は子供の様に無邪気な笑み

を浮かべながら背を向け、舞うように逃げる。逃げられた以上、追うしかない。

あの女は何かを知っている。俺の動物としての本能が叫び声をあげた。追いかける、追いかける、あの女を追いかける！と。

足が思ったように動かない。自分がきちんと走れているのかどうかさえ、分からない。腹が減って気持ち悪い。叫ぶ度喉が枯れていく。

「待て！」

女は公園の出口へ向かって走っていた。どう見ても足が早いようには見えないのに、なかなか追いつけない。女が見た目以上に早いのか、それとも俺の脚がいつもより遅いのか。

追いかける途中、ジューズを持っている静香の姿が見えた。彼女の隣に見たことがある人が立っていたが、その時の俺にその人物の名を思い出す余裕は無かった。

「悪い、今日は俺帰る！ 本当ごめん！ また後でメールするよ！」

振り返り、呆然としている静香に最低限伝えたいことだけ言い、また走ることに集中した。途中何度も吐きそうになったが、懸命にこらえた。

俺の体内に残る僅かなエネルギーがみるみるうちに消えていく。だがここで止まるわけにはいかないのだ。あの女を追いかけて、問い詰めるまで倒れるわけにはいかない。

公園を抜けると左右に分かれた道が現われる。どっちへ行ったのだろうか。まず左を見る……居ない。次に右……こちらにも、居ない。

「くそ、どっちへ行っただ……！」

まさか、見失ったのか？ 絶望と疲れが大波となって一気に押し寄せ、俺の意識を彼岸へさらっていくとする。

「一体、どっちへ……」

「こっちよ」

あの女の声だ。声は 背後から聞こえてきた。振り向こうとした俺の目を白い手が覆い隠す。冷たい……覆われた目が痛い。

それと同時に意識が遠のいていく。立ってられない、何も考えられない。

俺は多分、その場で崩れ落ち、意識を失った。

第五十二話：そして羊飼いは月に抱かれて消える（2）

*

冷たい。とても、冷たい。何かが頬を触っている。氷だろうか？
その冷たさが、俺の意識をはつきりさせていく。そうだ俺はあの
女に目隠しされた途端、意識を失って。

重い目蓋をこじ開け、上体を起こす。ついた両手は柔らかくてふ
かふかしたものに触れていた。どうやら自分はソファの上に寝かさ
れていたようだった。

俺の傍らに、あの女がいた。頬を冷やしたのは彼女の手だったよ
うだ。その事実が気がついた途端湧き上がる嫌悪感。気持ちが悪い。
わずかに残る女の体温を消そうと、頬を激しくこすった。

「おはよう。目が覚めたようね」

お気に入りの人形を眺めるかのような目で俺を見、微笑む女。胃
が痛み、気持ち悪くなったのは果たして空腹のせいか、それとも。
女はテーブルに置いてあったカップを手に取り、俺に差し出す。
中に入っているのは珈琲のようだ。そこから漂う良い香りが、俺の
胃を刺激し締め付ける。

「飲む？ 喉が渴いて仕方が無いでしょう？ ああ、でも飲んだと
ころで何の意味もないわね」

全身の骨が凍りつき、そして燃え上がるのを感じた。その言葉の
意味を理解したからだ。

この女は知っている。俺の体がどんなことになっているかを。矢
張り体に異変をもたらしたのは、あの飴だったのか。

腹が立った。訳の分からないものを初対面であるはずの人間に食

わせておきながら、暢気に笑っている女が憎らしくて仕方が無かった。俺は差し出されたカップを手で払いのける。カップは宙を舞い、黒に近い茶色の液体を吐き出しながらカーペットの上へ落ちる。女は驚いたように目をぱちくりさせていた。

「何のつもりだ」

ソファから体を離して立ち上がり、近くに転がったカップを手に取った女を睨みつけた。

「あんた、俺に何を食わせたんだ。あれは本当にただの飴だったのか？」

ここがどこであるか。今はそんなことどうでもいい。この女に今聞きたいのは、俺が昨日食わされた『飴』のことだった。

睨みつけられた女は、一瞬戸惑いの表情を見せた。まあすぐ笑顔に戻ったが。

女はカップをテーブルに戻すと、すっと立ち上がり俺の瞳を真っ直ぐ見つめた。

「飴じゃないわ。……あれは月片げっぺんというの。月の欠片かけらという意味よ」
月片？月の欠片？何だ、それは。意味が分からず眉をひそめる。
そんな名前の食べ物（或いは薬か）など、聞いたことも無い。

「貴方達の世界には存在しないものよ、あれは。月光を浴びて成長するツキイワを砕いたもの……ツキイワは今レイゲツキヨウにしか存在していない。だからあれは、レイゲツキヨウでしかとれないものなの。レイゲツキヨウというのは私の住んでいる京の名。麗しい月の京と書いて、麗月京」

この女は何を言っているのだ。麗月京？ツキイワ（恐らく月岩と書くのだろう）？私の住んでいる京の名？そんな場所、俺は知らない。今この女が喋っているのは妄想話か？しかし冗談を言っている

ような顔には見えない。けれど……。

「私は貴方とは『違う』存在。本来なら一生貴方と会うことはなかったであろう存在。……私の名前は星條^{せいちょう}。かつて月に住んでいたとされる『月の民』の末裔です」

スカート裾をつまみ、誇らしげな表情を浮かべながら名乗りをあげる。

その姿は気高く美しかった。……美しかった。姿は。だが言っている内容は全く理解出来なかった。

麗月京の次は、月の民だと？この女の頭……大丈夫か？私のご先祖様は月に住んでいました……？いや、いや、いや。月って。

やばい。この女は色々やばい。常識外れの美貌を武器に、月片とかいう変なものを食わせた挙句、私は月の民ですって……。

こんな危ない人間に会ったのは初めてだ。俺は星條と名乗った女の言うことを全く信じようとしなかった。信じてはいけないような気が、信じたら何か音が立てて崩れるような気がしたから。

桜町では不思議なことがよく起こる。それでも俺は信じなかった。

女は俺の顔をまじまじと見つめた後、残念そうな表情を浮かべため息をついた。俺はそんな分かりやすすぎる嘘を簡単に信じてしまう程愚かではない、ざまあみる。

「人間っていう生き物は、認めなければいけないもの程認めたがらないものなんだよ。自分が信じてきた世界を壊したくないんだ、彼らは」

これはあの女の言葉ではない。氷の塊を背中に押しつけられたような感覚にぎよっとしながら後ろを振り向く。

ソファを挟んだ向こう側に居たのは、先程公園で会ったあの男

に似ていた。いや、恐らく同一人物なのだろう。しかし目と髪の色が先程とは違う。

冷たく俺を見下ろす彼の目は真つ赤な色をしている。白目の部分が充血して赤くなっているのではない。黒目の部分が赤いのだ。赤「っばい」のでも、赤みがかかった茶色でもない。誰が見ても「赤」と答えるような、とても鮮やかで綺麗なものだった。

髪は、青味が強めの紫と大量の白を混ぜたような　どこか見た藤の花に似た　色になっていた。

目にカラコンを入れ、髪を染めた（もしくはカツラでも被っている）のか？

いや、恐らく違う。不思議とそういう風には全く見えなかった。人工的に作られた不自然なものではなく、ごく自然な色をしていたからだ。そしてその色は男に馴染んでいる。黒い髪、黒い瞳よりしっくりきている。

自然で、しっくりきていて……だからこそ美しく、また怖かった。そんな男が人間であるはずなかった。それなら、この男は。いや、考えたくない。認めたくない。

男はソファから離れ、俺が手で払ったティーカップが落ちた辺りまで歩く。

カーペットについてしまった染みを見つめた彼の口から、小さなため息がもれた。どうも俺が居るのはこの男の家であるようだ。

「ああ、染みになっている。後で綺麗にしないと……はあ、面倒臭い。まあいい、怒らない、怒らないともさ。私の心は海より深いから」

抑揚も温もりも無い声、見た相手の魂を抜き取ってしまいそうな瞳。それを見た俺は今更になってティーカップを手で払ったことを後悔する。体が小刻みに震える。頭の中が氷水を注がれたかのよう

に冷たくて、ずきずき痛む。

「私が人間に見えるかい、哀れな少年」

冷たく見下ろすその姿。……人間にはとても見えない。彼が人間であるなら、人形や恐ろしい姿の化け物も人間ということになる。この男を見て怖いとか人間じゃないと思わない人間など、居るはずがない。そう断言できる。

それでも頷きたくは無かった。認めるということは、自らを絶望の淵へと追いやるといふことと同義であると思っただからだ。

男の哀れむような、蔑むような視線が俺を苦しめる。

変な物を食わされて体の調子がおかしくなった上に見知らぬ所へ連れて行かれ、更に気味の悪い男女に囲まれ、冷たく鋭い視線を向けられたり非現実的なことをべらべら話されたり……涙が出そうになった。出来ることなら助けを求めたい。

けれど男は容赦しない。優しさのかけらも無い声で俺を追い詰めていく。

「……無駄なことを。真実から目を背けたところで、救われはしないのに。私達の存在を拒絶したってお腹は膨れやしないよ、坊や。彼女は月の民、私は化け狐。……ここは君達が『異界』とか『あちらの世界』とか呼ぶような世界。そして君が食べたのは」

「やめろ！ 嘘だ、嘘だ……そんなもの、信じない！ 人間じゃない？ 元は月に住んでいた一族？ 化け狐？ おまけに異界だのなんだの……馬鹿も休み休み言え！」

そうして叫ばなければどうにかなくなってしまいそうだった。

俺が顔を真っ赤にしながら睨みつけても、男は少しも動じない。

……人形の方だった。いや、人形の方がまだしも温かみがあるかもしれない。

「本当、人間って頑固だねえ。おまけにとても器が小さい。……真実一つ受け入れられない器など、器とは呼べないと思うよ私は。さつさと諦めれば楽になるのに。君はあれ　月片を口にしてしまった。口にした以上、もう後戻りは出来ないんだよ。早く認めた方がいいと思うよ？　死にたくなければ」

死、という物騒な単語にどきりとした。死にたくなければ？　どういうことだ。

男が笑った。俺が予想通りの反応をしたことを喜んでいるかのようだった。

「気になるようだね。それならば教えてあげよう。……もつとも、私達の存在等を全く信じていない君に話したところで何の意味もないかもしれないけれどね。……君が昨日口にした月片は、毒物なんだよ。星條を始めとした月の民以外が口にしてしまうと、大変恐ろしいことになる。私とて例外ではない」

「毒、物？」

「そう、毒物。といつても食べた者を死に至らしめる……というものではないのだけれど。まあでも、ある意味ではそういうったものより恐ろしい代物かもしれない」

何だ、一体どうなるというんだ？　俺はどんな毒物を食わされたのか？　視線は自然と昨日俺に月片とかいうものを食わせた女に向かう。女はほんの少しだけ申し訳無さそうな表情を浮かべている。

「月片　　というか月の民のみが食べられるもの全般　　を食べるとねえ……本来自分達が口にしていたものを食べても、お腹が膨らまなくなる。水を飲んでも喉が潤わなくなる。体が月の民の食べ物以外受け付けなくなってしまうんだ」

「な……」

「心当たり、あるんじゃないかな。君今猛烈にお腹が空いているだろっ」

俺は思わず腹に手をやる。忘れかけていた空腹感が甦ってきた。

「もう君はね、今まで食べていたものを受け入れない体になってしまったんだ。お腹に入れたものはそのまま消えていく。生命を維持し、体を動かす為に必要な力……ええと、エネルギー……だっけ？　そういうものを食べ物で補給することが出来なくなる。エネルギーを補給する方法は只一つ、月の民の食べ物摂ることだ」

夕飯を食べても、朝食や昼食をいつもより多めに食べても腹が満たされなかったのは、そのせいだった……？

泣き喚き叫ぶ腹を満たし、からからになった喉を潤すにはもう、月片なるもの等を口にする以外方法が無い？

「それさえ食べていれば、大丈夫。死ぬことは無い。……死ぬことは、無いよ。けれど」

「な、何だよ……」

男は微笑んだ。その笑みは悪意に満ちていた。

「食べれば食べる程、君は人間から程遠い存在になっていく。食べ続ければやがて……月の民に限りなく近い存在となるんだ。今の君はねえ……人間という枠から半歩程出てしまっている。残念ながら枠の外へ出してしまった足を戻すことは出来ない。君が生きる為にはもう、月の民が居る枠に向かって歩き続けるしかないんだよ」

この男は何を言っているのだ。ばらばらに分解された言葉が頭の

中を縦横無尽に駆け巡っている。それらを再構成して男の言ったことを理解しようとするけれど上手くいかない。

自分は何を言われたのか。分からない、意味が全く分からない。

「月片を食べた後、急に苦しくなったり体が痛くなったりしなかったかい？」

俺は頷かなかった。だが肯定の意が顔に出ていたらしく男は話を続ける。

「君の体の構造等は、月片を食べたことで変わったはずだ。相当大きな変化のはずだから……当然痛みや苦しみを伴うものだったろうね。体が悲鳴をあげただろうねえ」

確かに昨日夕飯の後、息が出来なくなる位の激痛や熱に襲われた。

「そういう変化には、大きな力……ええとエネルギー……であつているよね　を使う。恐らくそれまで体内に溜まっていたエネルギーは全て消えただろう。まあ普通だったらその時点で、良くて意識不明悪くて死んでいただろう。けれど君は死んでいない。月片がもたらしたエネルギーだけは体内に残っていて、かつ君の体が人間のそれとは違うものになったからかな。普通の人間よりかなり丈夫になつたんじゃないかなあ」

人差し指でそつと触れた口元が妖しく歪む。

「まあでも、そのエネルギーにも限りがある。体を動かす力が完全に消えてなくなれば……いずれ死に至るだろうね」

「死……？」

「そう、死だ。飢えと乾きに苦しみながらじわじわと……ね。病院などに行っても無駄さ。人間にはどうすることも出来ない。救いを

求める相手を間違えてはいけないよ？」

男はこれ以上無い位邪悪で冷たい笑みを浮かべ、聞きたくもない言葉で俺を強く締めつける。

ここから逃げ出したいと強く願った。手足を動かさず、ドアを開けて……ここから逃げたい。ここにはもう居たくない、この男の視線から一刻も早く逃れたい。俺は女の存在をすっかり忘れていた。星條と名乗った女のことを考えたり、彼女の方を見たりする余裕がなかったからだ。

「選択肢は三つ。一つ目は私達の存在を認めず、現実から逃避し飢えと乾きに苦しみながら死ぬというもの。二つ目は現実を受け入れ、月の民の食べ物で口にし続けるといふもの。そして人間をやめ『こちら側』の者になる。三つ目は自ら命を絶つというもの。全てを終らせたいならこれが一番良い選択肢かもしれないけれど……普通の人間より死にくくい体になっているだろうから、これまた結構大変かもね？ さあ、どれにする」

何を言っているんだ。一体この男は何を。死ぬか人間やめるかどちらか選べ？

ふざけるな、ふざけるな！俺は絶対に認めない。こんなふざけた現実があるはずない！これは夢だ、夢なんだ！

恐怖を吹き飛ばし、怒りを吐き出すように俺は叫ぶ。大声で。それが体力を奪う行為だったとしても叫ばずにはいられなかった。

「うるさい、俺は選ばない、信じない！ 妖怪とか月の民とか……そんなものがこの世に存在する訳が無いんだ！ これは夢だ……現実じゃない！」

「往生際の悪い子だねえ」

「往生際が悪くて結構！ 誰が何と言おうと俺は信じない！」

「お願い、信じて頂戴。私は貴方を死なせたくないの」

しばらくの間ずっと黙っていた女が口を開く。死なせたくない？ 『毒物』と称するものを食わせておいて何を言っているんだこの女は。

腹が立ち、俺は女の胸倉を掴んだ。こんな乱暴で汚い真似をしたのは初めてだった。恥ずかしい、けれど服を掴む手を離すことは出来なかった。

女は悲しげな表情を浮かべながらこちらを見ている。そういう顔をすれば許されるとでも思っているのだろうか？ 腹が立つ。

「そんなに言うんだったら、証拠を見せろよ！ 自分が人間じゃないうっていう証を！」

「この期に及んで……全く。お転婆紗久羅姫にも負けない頑固っぷりだ。まあ証を見せること自体はそう難しいことではないけれど……」

…
面倒臭いんだよねえとため息混じりに語る男。自由を奪われている女の方は随分困惑しているようだった。

勢いでそんなことを言ってしまった俺はすぐ後悔した。もしこの二人が本当に証拠を 俺を納得させることが出来るレベルのものを 見せてきたら？

どうしよう。俺は今自ら逃げ場を消し去ろうとしているのではないだろうか？

「証拠を見せれば良いのね？ そうすれば私達の言うことを、信じしてくれるのね」

憂いに満ちていた瞳に、希望の色が映し出されていくのを俺は見ただ。女は自分の胸倉を掴んでいる俺の手にそっと触れる。あまりの

冷たさに俺は震え、思わず手を離してしまった。

自由になった女は男に何か耳打ちした。男の顔が歪む。

「まあ確かにそれは一番手っ取り早い方法かもしれないけれど……また汚れてしまうじゃないか。困るんだよね、面倒なんだよね、そういうのって。まあでもこのままじゃ埒があかない……その方がずつと面倒だ……分かったよ。君がお望みのものを持ってきてあげる。視覚だけでなく嗅覚にも訴えてやれば、これは夢だとか喚くこともないだろうしねえ」

男は君の負けだ、と言わんばかりの笑みを浮かべると部屋から出て行く。

部屋に居るのは俺と、あの女だけ。男が戻ってくる間俺は一言も喋らなかった。女はしきりに話しかけてきたが、無視した。

沈黙を破ったのはドアが開く音。男は右手に何かを握っている。それはぎらぎらと銀色に輝いていた。一体あれは何だろう？ 暴れ狂う心臓の上に手をやりながら男の手元を凝視する。男が笑いながら近づいてくる。心臓が張り裂けそうになり、腹が警鐘を鳴らす。これから何が始まるというのか。

男が女の傍らにやってきて、手に持っていたものを彼女に渡す。それは……ナイフだった。銀色の月みたいな色で、男の瞳位鋭く、女の肌のように冷たそうな……。

「彼女　月の民は、不老不死の一族らしい。妖とはまた少し違う存在だ。妖は老いるし、死ぬ。まあ君達よりはずっと長生きだし体も丈夫だし、歳のとり方もかなり緩やかだけれど」

「だから、何だ」

嫌な予感がした。

「目を瞑ったり、意識を失ったりしたら駄目だよ？」
男は女に視線を向け、にたりと笑った。女はそれを受けて無邪気に微笑んだ。

一瞬のことだった。

真っ赤な……彼岸花や夕陽よりずっと鮮やかで赤いものが飛び散った。生温い何かが頬にかかる。とても嫌な匂いが鼻を、喉を深くえぐった。

何が起きたのか理解できなかった。非日常的な光景が俺の頭の中にあつた一切のものをかき消したのだ。頭の中は真っ白で、けれど視界に映っているのはとても赤いもので。

吐くことも叫ぶことも出来なかった。何も、出来なかった。

「流石に、痛い、な……」

弱弱い声と笑み。真っ白だった肌には今鮮やかな彩色がさされている。

銀色の刃も元の色が分からない位汚れていた。

「やりすぎだよ、君。何もそこまでしなくても。可哀想に、とっても痛そうだ」

何一つ表情を変えぬまま男は淡々と述べる。異常な光景を間近で見ているながら、眉一つ動かさない男の異常性が俺を正気に戻させる。

女は自らの体をナイフで切り裂いたのだ。その傷はかなり深いだろう。普通の人間なら……死んでいる。誰がどう見てもそう思える位、刃を深く突き刺していたのだ。

俺はただ、呆然としていた。

「……とても痛い、痛いわ。でもいいの。痛くても、いいの。手に

入るのなら……願いが叶うのなら、どんな痛みにだって私は耐えてみせるわ」

女は笑っていた。何故この状況で笑っていられるのかさっぱり理解できない。

息を荒げながら、自分が切った部分を手で抑えている。それからしばらくして女はゆっくりその手を離れた。

「もう、大丈夫よ。思った以上に回復が早いわ。私達月の民って本当、すごいよね」

もうけろりとしている。呼吸もすっかり元通りで、痛みをこらえている様子も全く無い。そんな馬鹿な、心の中でそう叫ぶ。

「出雲が言ったでしょう？ 月の民は不老不死の種族だと。傷の回復も早いだよ 妖さん達よりずっとね」

女は呆然としている俺の手を取り、自分がさっきナイフで裂いた部分に触れさせた。

嘘だ。触れた瞬間そう思った。……傷が無い。すっかり塞がっている。血も止まっていた。あるのはみみず腫れのようなもののみ。そのみみず腫れも俺が触れている間に消えていき、ものの数分で完全に消えて無くなった。

ナイフで裂いたのは演技だった？ いや、そんなはずは無い。女は確かに裂いていた。おびただしい量の血も、偽物には到底見えない。あらかじめ本物の血の入った袋を隠しもっていて、それを切り裂いた？ いや、そんなものは全く見えなかった。彼女が裂いた辺りに血糊等が入った袋を隠せる場所はなかった。

夢？ いやそれも違う。……この匂い、感触……全てが本物だ。どう考えても夢なんかではない。なら、それなら。

「これで分かったかい？ 私達が人外の実在であるということが。

それともタネや仕掛けがあるんじゃないかとか、これは夢だとか……まだ言い張る？」

言い張れたらどれだけ良いか。強烈ですさまじい光景は俺の体から一瞬で魂を引き抜いた。目の前で起きた出来事を否定するだけのエネルギーはもう俺の体内に残っていない。

何も言えなかった。

再び扉が開き、一人の少女が中に入ってきた。カーペットや女の肌を染めているものに似た色の着物を着ている。十歳位の娘だと思ふ。頭のとっぺんにつくつたお団子を愛らしく飾っているリボンの色も赤い。

少女は手にタオルの様なものを持っていた。

「……汚れ、これで少し拭けばいい」

それを差し出す娘はこの異常な光景を見ても顔色一つ変えず、淡々とした声だった。この娘も矢張り『普通』ではないということか。女はタオルを受け取るとそれを傷口があった場所にあてがい、ごしごとこする。肌は何度もそうしているうちに少し綺麗になったようだが……それでもまだ、白とは程遠い色をしていた。

自分の体を拭き終えた女は俺の頬にタオルをあてがった。

「血、ついているわ。ごめんなさいね……思った以上に飛んでしまっただけ」

恍惚な表情を浮かべながら優しく俺についた血を拭き取る。そんな女からはとても嫌な匂いがした。

しばらくして女はタオルを床に落とし、両手で俺の頬に触れた。

「改めて言うわね。貴方が生きていく為には、あの飴が必要になる。あれが無ければ、死んでしまうわ。生きる為に食べ続けるしかない。最終的に貴方は人間ではなくなるの。私と同じ存在になるのよ。私

のエンデュミオン。死にたくなければ、私に従いなさい」

押さえきれない喜びを笑みにのせながら、残酷な言葉を口にした。エンデュミオンというのが何であるのかは分からない。けれどそんなことはどうでも良かった。

俺は昨日とんでもない物を口にしてしまった。それを食べ続ければいずれ目の前に居る奴等と同じ化け物になってしまう。だが、食べなければ飢えて死ぬ。

どちらを選べばいい？おぞましい化け物になると、死ぬのと、どちらが楽だ？

こいつらは　というよりはこの女　は俺を月の民とかいう奴に近い存在にしたがっている。親切心を逆手にとってこんな卑劣な真似をした女。はい分かりましたといえればそれこそこの女の思う壺だ。

ならばいつそ、死を選ぶか？死をもつてこいつらの鼻を明かしてやるつか。

いや、駄目だ。そんなこと出来ない。自ら死を選ぶなんて……。死の苦しみはきつと耐えがたいものだろう。何故自分が苦しい思いをしてまで死を選ばなければいけないのか。

死にたくない。……死にたく、ない。今だって異常な飢えと渇きに苦しんでいるのだ。これ以上苦しい思いなど、したくない。

「お前の言うことを聞けば……俺は生きていられるのか」

女は微笑んだ。俺の答えなど最初から分かっていたかのように。

「勿論よ。今みたいに苦しむこともないわ。私は貴方を愛している。だから、貴方を殺したりなんかしないわ、絶対に」

愛している？何でこの女が俺のことを？……それでこんなことをしたっていいのか？ふざけるな、こんなことしておいて……。

ふっと思い浮かんだのは、静香の笑った顔だった。

「静香……」

その名を静かに呟く。あの月片というものを食べ続ければ、俺は
いずれ化け物になる。そうなれば彼女とはもう一緒に居られなくな
るだろう。死を選んでも、生を選んでも彼女を苦しめることになる。
それが何より辛い。それにもしかしたらこの女達は彼女のことを知
っているかもしれない。もしここで頷かなければ……彼女の身に危
険が及ぶかもしれない。それは絶対嫌だった。

俺は静香を裏切る。そして目の前に居る女の手を取る。

でも、絶対に目の前に居る化け物のことを心の底から愛したりは
しない。断じて、しない。

俺はゆっくりと頷く。女は俺の思いに気がつくこともなく嬉しそ
うに笑った。

「交渉成立だね。良かったねえ、愛しい羊飼いが手に入って」

「ええ、とても嬉しいわ。ねえエンデュミオン。私を愛してね。心
の底から。貴方の恋人は今日からあの子ではなく、私になるのよ」
矢張りこの女は知っていたのか。静香のことを。

「あいつに……静香には指一本触れるな。俺の友人や家族にも、一
切関わるな」

「ええ、ええ分かっているわ。私の言うことを聞いてくれるのなら、
あの子を傷つけたりはしないわ」

脅迫じみた言葉を笑いながら吐き、そしてゆっくりと顔をこちら
に近づけて。

柔らかく、冷たく、気持ち悪いものが俺の唇に触れた。

これが地獄の始まり。

第五十三話：そして羊飼いは月に抱かれて消える（3）

*
汚い血で汚れた顔は水で洗い流し、服は赤い着物を着た少女（鈴、というらしい）に軽く洗ってもらった。

服が乾くまでの間俺はソファに座り、女と話をした。いや、話をしたというのは正確な言葉ではない。正しくは女の話を経々と聞かされていた……いや、これも正確とはいえない。俺は女の話等ろくすっぽ聞いているいなかったのだから。適当に相槌は打ったが、あの女が具体的にどんな話をしていたのか何一つ思い出せない。

月片も、食べた。毒であると知りながら口にするのは辛かった。だが食べなければ死ぬ。一刻も早く空っぽになった腹を満たし、喉を潤したかった。

口にした瞬間、涙が出た。様々な感情がそれと一緒に外へと流れ出る。

美味しい、満たされる、世界中のどんな食べ物より美味しく感じる、これで俺は死から逃れることが出来る、俺は化け物に一步近づいた、隣に座っている忌々しい女と同じ存在になっていく、生きたい、死にたくない、でもこんな現実を受け入れたくは無い、いつそ死にたい、でも死にたくない……。

食べてからしばらくしてあの痛みと熱が襲った。昨日に比べれば若干ましだったが、それでも辛く苦しいことに変わりは無かった。

「大丈夫？」

女が心配そうにじつと顔を覗き込む。大丈夫なものかと怒鳴ってやりたかったが、溢れ出る色々な感情がそれを邪魔する。言葉にな

らない呻き声がむなしく口から漏れ出すだけだった。

「苦しそう。でも大丈夫よ、しばらくすればそんな風に苦しむこともなくなるでしょうから。ねえ、エンデュミオン外へ行きましょう。貴方と一緒になら、あの世界も素敵なものだと思えるような気がするの」

「エンデュミオン？ 誰だよそれ」

「今の貴方に最も相応しい名前。貴方は私のエンデュミオンよ」

「俺には牧田俊樹っていう名前がある」

「そんな名前より、エンデュミオンの方が貴方には合っているわよ」
女は笑った。悪意など微塵も含まれていないものだった。だから余計腹が立つ。

乾いた服を着、鈴から光を放つ不思議な鬼灯を借りて俺は自分の世界に戻った。身の毛もよだつおぞましい『道』を通り抜けて。あれほどまでに美しく、また恐ろしい風景など見たことが無かった。

「非現実的……」

そう呟かずにはいられない。自分が今まで信じてきた『常識』を木っ端微塵にする程の破壊力がその『道』にはあった。

鬼灯を手から離す。今日に映っているのは何の変哲も無い鳥居と石段。

桜山神社を後にし、二人で電車に乗り数駅先にある街へ行く。三つ葉市や舞花市には知り合いが沢山いる。この女と一緒に居るところを誰かに見られたくない。

「こづいうのをデートというのよね？　嬉しいわ、貴方と一緒に歩けるなんて」

「あんだ俺のこと好きらしいけれど……俺、あんだと会ったことあったか？」

「貴方は気がついていなかったでしょうけど、私は貴方と何度も顔を合わせているのよ」

「ふっん」

「私貴方のことを一目で気に入ったのよ。どうしてなのかはよく分からないけれど……」

これだけ迷惑で面倒で恐ろしい一目惚れがこの世に存在していたとは。

心底うんざりしたが、今は怒鳴り散らす気にもならない。自分でも驚くほど気持ちは落ち着いていた。でもそれもきつと一時的なもので、しばらくすれば色々な感情が再び湧きあがってくるのだろう。落ち着いたり、暴れ狂ったりを繰り返した先に待っているのはなんなのだろう……ぼんやりとそんなことを考えていた。

俺の気も知らず女は色々なものに興味を示し終始はしゃいでいた。自分よりもずっと長生きしている者とは到底思えない位に。幼稚園児でも知っているようなことを大声で聞きまくる女は周りの注目を集めた。なまじ顔が良いだけに余計目立つ。当然、女の話し相手である俺にも好奇の眼差しが向けられる。

出来ることなら逃げ出したい。恥ずかしいし　もし知り合いに見つかりでもしたらえらいことになる。

「あまり大声で変なことを聞くな。怪しまれるだろう」

「別にいいじゃない怪しまれたって。私にとって、貴方以外の人間なんてどうでもいい存在なの」

「お前は困らないかもしれないが、俺は困るんだ。俺のことが本当に好きだというのなら、俺を困らせるようなことはしないでくれ」
そう言うと、女はがっくりと肩をおとした。

「ごめんなさい……」

女は素直に謝罪した。

しかしその後入った喫茶店で再び騒ぎ始め、俺は痛む頭を抱え一人唸った。

しばらく街の散策をし、程ほど満足したらしい女はそろそろ帰ろうと言い出した。俺はその提案を聞き、ほっとする。

桜町へ向かう電車を待っている時、女が俺の右手を握ろうとする。俺は反射的にその手を引っ込め、彼女を睨んだ。

「手なんて繋ぎたくない」

はつきり拒絶する俺を女がじっと見つめる。その瞳はぞっとする位冷たかった。

「私のお願い聞いてくれないの……?」

これは脅しだ。彼女の声と瞳が言っている。「月片を貰えなくてもいいのね、死んでもいいのね」と。

忘れようとしていた事実を思い出し、齒軋りした。

「聞いてくれるわよね、勿論。貴方は私の、私だけのエンデュミオ

ンなのだから」

俺が首を横に振るわけが無い。確信に満ちた瞳が深く胸をえぐる。こちらに抵抗の意思が無いことを確認した女がゆっくりと俺の手に自分の手をからめる。女の手が触れた途端吐き気がした。

「私は貴方に命を与えることが出来る……貴方の生死を握っている……あの娘には出来ないことが、私には出来る」

歌うように呟く女。ああそつだ、静香にはこんなことは出来ない。俺の生死を握ることも、俺を貶めたり脅したり苦しめたりすることも、出来ないのだ。

化け物め。一人勝手に『愛する人の命を手中に収めている私って素敵』とか思っていていいい。

俺は女を心の中で蔑むことで平常心を取り戻そうとした。だが考えれば考えるほどむかむかした感情は激しさを増していく。

程なくホームへとやってきた電車に乗って桜町に向かう。駅前で女から月片を貰い（自分でも情けなくなるくらい必死にお願いして）、逃げるように家へ帰った。家という『日常』の世界へ、全ての災厄から身を守ってくれる結界が張られているような不思議と心落ち着く空間へ、一刻も早く帰りたい。

乱暴に扉を開け、転がり込むように家の中へ入った。そのまま洗面台へ直行し、不快な感触残る手を念入りに洗う。鏡には自分の顔が映っている。ぱつと見変わったところは無い。出雲とかいう男と、星條とかいう女のような異様さも感じられない。大丈夫俺は化け物なんかじゃない。人間だ。人間なのだ……。

自分の部屋に入ってすぐベッドに体を預け、大きく深呼吸する。吸い込んだ部屋の空気が心を少しだけ落ち着かせてくれた。緊張の糸がぷつんと切れるのと共にやってくる疲労感。

何も考えられない。……その方が幸せかもしれない。色々考えら

れる余裕が出てきたら自分はどくなってしまうのか。そんなことを思ったら余計に疲れた。

とりあえず寝よう。そう思って目を閉じる。だが眠りにつくまえにやらなければならぬことがあることを思い出し、慌てて目を開けた。

携帯をとりだし電話をかける。電話の相手は勿論静香だ。具合が悪いから帰るといって彼女を公園に置いていつてしまったことをすっかり忘れていた。静香のことを忘れてしまう位、俺の頭はぐちゃぐちゃになっていたのだ。

「……俊樹？」

程なくして静香の声が聞こえる。小さなその声に不安や心配といった感情がぎゅっと込められている。

それを聞いて散々彼女に心配をかけさせた挙句、逃げるように彼女を置いて去ってしまった自分の馬鹿っぷりを激しく後悔した。後悔だけじゃない。彼女に対する罪悪感も沸きあがってくる。俺はあの後……いや考えるな。今は考えちゃ駄目だ。

今は静香の不安を少しでも拭わなければ。

「あの、今日は本当ごめんな。公園に置いてきぼりなんかにして……あの時の俺、どうかしていたんだ。具合もさ、滅茶苦茶悪かったんだけど……今は大丈夫。ゆっくり休んだら自分でも驚く位良くなっただんだ」

不味い、心なしか声の上擦っている。もっと心を落ち着かせて喋らなければ……駄目だ、上手いかない。普段自分はどんな風に喋っていただろう。平常心でいよう、落ち着こうと思えば思うほど気持ちがあせっていく。

「だから今は大丈夫。きつと今日明日ゆっくり休めばよくなる。今

度また一緒にどこか行こうな」

「……本当？」

疑っている。矢張り静香に対して下手なごまかしはきかない。とはいえ本当のことを話すわけにはいかない。言ったところで信じてくれるはずがない。……当事者である俺だって未だ信じられないのだから。幾ら静香でもあんな荒唐無稽な話、絶対信じてくれないだろう。

ごまかすしかないのだ。

「本当だよ。大丈夫」

「そう。……ねえ、俊樹。貴方公園で誰に会ったの？」

「え？」

「貴方、誰かを追いかけていたわよね。必死になって……誰を、追いかけていたの？ 知り合い？」

どきりとした。絶対逃がすもんかと思いつながら追いかけていたら、大声をあげて叫んだり、すさまじい形相になっていたりしていたのかもしれない。

「別に大したことじゃないよ。気にしないで」

「そういう風には見えなかったけれど……」

静香は疑うような口調でそう呟く。何度も繰り返し「一体誰だったのか」「本当に何でもないのか」と聞かれた。その度俺は嘘を吐いた。

大丈夫、別に大したことじゃない、あの時の俺は疲れていてどうかしていたんだ……そんな言葉を繰り返す。

「分かった。……俊樹がそう言うんなら、そうなんだね」

静香はとうとう諦めたようだ。元々彼女はしつこく問い詰めることを好んでいない。俺もそうだ。いつも相手が話すのをじっと待っているのだ。今回のように何度も同じ問いを繰り返すことの方が珍しい。それだけ心配なのだろう。

「また、月曜日会おうね」

「うん。本当、今日はごめんな」

改めてそう言つと、急いで電話を切つた。疲れが体を一気に重くする。先程までの出来事が夢ではないことをその疲労感が教えている。

信じたくはない。けれど。カバンに入れた袋を取り出す。その中に月片が入っている。食べ物という名の毒物、或いは化け物の素。

「俺は人間だ、化け物なんかじゃない……」

その時はまだ信じる余裕があつた。そう、まだこの時は。

それから少しの間、眠りについた。母親の呼ぶ声で目を覚まし夕食をとる。

いつも通り美味しいと感じた。けれどこの食べ物が自分を生かす糧には決してならないのだと考えた途端、急に味を感じなくなった。不味そうに食べてはいけない。そんなことをしたら親に怪しまれる。それも避けなければいけない。何でもないフリをしながらご飯を口に押し込む。

何でこんなことに。

夕食を終え、部屋に戻つた俺はベッドの上で今日自分の身に起き

たことを思い返していた。

思い出せば出す程頭が痛くなってきた。同時に激しい怒りと憎悪がこみ上げてくる。

「くそ、くそっ！」

人を騙し、変なものを食わせておきながら幸せそうに微笑む女。こちらが逆らえないのをいいことに調子に乗ってべたべたくっついて……きつと目を追う毎にどんどんエスカレートしていくに違いない。

あれ程までに自分勝手に危ない女に会ったのは初めてだ。あの女を許すことなど絶対に出来ない。

このままではあの女の思い通りにことは進んでしまう。そんなのは絶対に嫌だ。しかし俺には抗う術が無い。明日も、明後日もこんな思いを抱えながらあの女と付き合わなければいけない。

そして最後には……。

「嫌だ、絶対に、嫌だ！」

怒りを部屋にある物達に次々とぶつける。一度ぶつけどしたら止まらなくなり、自分でも意味が分からない叫び声をあげながら枕やカバン等を投げたり床に叩きつけたり蹴飛ばしたりした。

気がつけば部屋中ぐちゃぐちゃになっていて、俺は肩を上下させていた。体が熱い。

ひとしきり暴れ、怒りを吐き出し終えた体は虚脱感に襲われた。こんなことをしても何の意味もないのに。自分は何をやっているのだろうかと思ったら、涙が出てきた。

異変に気がつき部屋までやってきた両親に一体何があったのかと聞かれた。俺はただ「何でもない」と答える。繰り返し、そう言った。

そう言うしか、なかった。

風呂に入り、さっさと眠った。自分の身に起きたことを忘れるにはそれが一番だと思ったから。ほんの一時の間だけでも、忘れていたかった。そうしなければ頭がどうにかなってしまいそうだった。その夜笛吹き魔は現われなかった。

*

「そりやそうだろう。……笛吹き魔にはもうあそこで笛を吹く理由が無いのだから」

今俺は昨日連れて行かれた（どうも俺が気を失っている間に男出雲の使い魔とやらが運んだらしい）館にいる。二度と訪れたくないような場所だったが、女に「明日ここに来て」と言われたから仕方なく来ているのだ。

そんな俺の真正面に座っている男は琥珀のようなゼリーをついついている。女は今その辺をふらふらしているらしくじき戻ってくるという。いつそこのまま戻ってこなければいいのにと心の底から思うというか、一刻も早く帰りたい。

視線を落とす。そこには今男が食べているのと全く同じゼリーが置かれている。ここが友人や静香の家だったら遠慮なく食べているところだが……第一、食べたところで満たされやしない。食べればその現実を嫌でもつきつけられることになる。だから、食べたくは無い。

「どういうことだよ、それ」

桜町に最近出没している笛吹き魔がひよつとしたらこいつらと同じ『化け物なのではないか』と思い、男に彼（？）の話振った。その答えが「もう笛を吹く理由がない」というものだった。

「君達が笛吹き魔と呼んでいたのは、あの娘　　星條だ」

「なっ……」

あの女が笛吹き魔？驚き思わず目を見開いた。男は俺に目もくれずゼリーをすくっては食べる作業を繰り返しながら話を続ける。

「そう。一目見て君のことが好きになってしまった彼女は、君の後をつけて家がある場所を突き止めた。それでもって毎晩君の家の前までやってきては笛を吹き、自分の思いを告げていたんだ。……まあ吹いていた曲が愛を告げるものだということが分かるのは彼女と同じ月の民だけだから……君が聞いても意味が分からなかっただろうけれど。彼女もそれで自分の思いを知ってもらえるとは思っていなかったようだし」

笛吹き魔が俺の家の近くで止まっていたことにはちゃんと意味があったのか。

「そうそう。君達がコスプレ女と呼んでいた人も、星條みたいだよ」

「あれも……？」

「今は普通の人間らしい格好をさせているから、仮装しているようには見えないと思うけれどね。コスプレって仮装って意味なんだろう？　まあ、君達からしてみれば彼女の本来の姿は異様に映っただろうねえ……」

今でも十分異様だ。服を人間風にしてもまるで意味が無い。格好だけではごまかせない何かがいいつらにはあるのだ。

「ところで……食べないの」

「は？」

「そのゼリー。美味しいよ。毒も入っていないしねえ、それには」
意地の悪い笑みを浮かべ、少しも手をつけていないゼリーを指差す。

「欲しいなら、食べば？ 俺はいらない」

「食べても満たされないから？」

妖しく歪む口元、瞳。視線が俺を鋭く突き刺す。この男の目は、嫌いだ。見つめられただけで心臓が止まりそうになり、冷や汗が出るから。

「確かに食べても満たされないっていうのは辛いことかもしれないねえ。……けれど仕方がないじゃないか。君はあれを口にしてしまった。口にした以上、もう引き返すことは出来ない」

「あんたはあの女の友人か何か？ あいつの片棒をかついだみたいだけだ」

目の前に居る男もまた心の底から憎むべき相手なのだった。男は頬杖をつき、ため息を漏らした。肯定の意でないことは明確だ。

「友人でなければ、手伝ってはいけないのかい？」

「別にそういうことを言っているわけじゃない」

自分の怒りをこの男は微塵も感じていない。いや感じてはいるが気にしていないのかもしれない。男は静かに流れる小川のような、透き通っていてさらさらとしている髪を弄る。男の指の間をさらりと抜けるそれはとても髪には見えない。

「私は彼女の友人でも、味方でもない。私は私の為に彼女の手伝い

をしているんだ」

「どういうことだ」

俺とあの女をくっつけることに何のメリットがあるというのだから。

訝しがる俺の顔を見て、また男は笑った。時間の流れや怒り、全てを一瞬忘れさせる位妖しく、冷たく……ぞつとする笑み。

「深い意味は無いよ。単なる暇つぶし。退屈しのぎさ。私は人間が醜くもがき、苦しむさまがとても好きなんだ。決して関わってはいけない世界に関わり、なす術もなく堕ちていく……」

愕然とした。頭の中が痺れ、熱を帯びている。暇つぶし？退屈しのぎ？目の前にいるこの男は自分が楽しむためだけに、俺の人生を滅茶苦茶にする手伝いをしたというのか。

だん、という音が聞こえた。気がつけば俺は立ち上がり、テープルを強く叩きつけていた。考えるより先に、体が動いていた。

男は笑っている。ただ楽しそうに笑っている。人に怒りをぶつけられることも彼にとっては娯楽に過ぎないのだ。その笑みを見ると余計腹が立つ。

「怒っているね。……ふふ、友達の恋路を手伝って何が悪いと言えば君は怒らなかつたのかな？ いや、そうではないね。答えの内容が何であれ、君は怒っただろう」

「当たり前だ！」

「でもさあ……最終的にこの道を選んだのは君なんだよ？ 好きでもない女の恋人になること、生きる為に毒を喰らい続けることを選んでるのは」

「選択肢なんて、あつてないようなものだったじゃないか！ 誰だつて苦しみながら死ぬのは嫌だし……それに、下手に断つたらあの女……！」

「君の恋人に危害を加えるかもしれない……そう言いたいのか？ そうだね、あの娘なら平気でやるかもしれないねえ。それだったらいいつそ、君の彼女にも月片を食べさせればいいんじゃない？ 二人仲良く化け物になったところで、愛の逃避行へ……とか。月片を食べ続け、月の民もどきになってしまえばもう食事は必要なくなる。つまり、月片を食べる必要もなくなる。星條の呪縛からも解き放たれるし、恋人ちゃんが殺される心配もなくなる。……うん、なかなか名案かも」

「静香を……化け物にしろっていいのか！？ そんなこと、出来るわけないだろう！」

「でもそうしない限り、君は彼女と一緒に居られなくなってしまうよ？ 坊や、本当に手に入れたいものはね、どんな手を使ってでも手に入れなくちゃいけないんだ。力でねじ伏せ、縛りつけて、星條のようにね。そうしなければ離れていってしまうから。私は別に星條の味方というわけではないから、止めやしない」

「あんたは……そうやって自分が欲しいものを手に入れてきたのか。そうしてまで手に入れたいものが、あんたにもあったのか？」

「さあ、どうだろうね？ それで、どうするんだい？」

俺の質問を適当に流し、男は俺に問う。男の視線を浴びている体が痛い。まるで鋭いガラス片が飛び散っているところめがけてダイブしてみたみたいだ。

きつと男にとってはどちらでも良いのだ。俺にふざけた選択肢を突きつける……その行為も彼にとっては一つの娯楽、遊びに過ぎないのだろう。

「ふざけるな。俺は静香を化け物なんかには絶対しない」

「あ、そう。まあそれならそれでも構わないさ。馬鹿みたいに喚きちらし、怒り、憎みながら堕ちていけばいい。私はその様子を笑いながら見ているとしよう。……楽しみだ……怒り憎む気力も失せ、生ける屍と化した君の姿を見るその日が」

ふざけている、狂っている、この男は！見た目も常識外れ、思考回路も常識外れだ！

頭が熱い、何かが頭の中で膨れ上がっている。今にもそれが破裂しそうだった。それ位、腹が立った。

ドアが開く。入ってきたのはあの女だった。女は俺の姿を認めるとばあつと顔を輝かせる。こいつのせいで俺は散々な目にあっているのだ。

「エンデュミオン、まあ、もう来ていたのね！ ごめんなさいね、遅くなってしまって」

俺は軽く頷くだけだった。すると女は頬をぶうつと膨らませ、口を尖らせた。

「駄目よエンデュミオン。こういう時は『いや、俺も今来たところだから気にしないで』って言わなくちゃ。恋人らしい会話貴方といっぱいしたいのよ」

どこでそんな知識を手に入れてきたのか。しかし何でこの女は俺のことをエンデュミオンなどと呼ぶのだろう。

俺は牧田俊樹なのに。それ以外の誰でもないのに。当たり前だよ

うに変な名前で呼び、恋人を気取る女。この女は絶対に……昨日から何度そう思っただろうか。もう両手では数え切れない位、思った。

「早速だけど、デートに行きましよう？ 昨日とはまた違うところに行きたいわ。ねえ、今日はどこへ連れていってくれるの？」

「さあ。適当」

「行ってらっしゃい、お二人さん。楽しんできてね？」

楽しめるものか。満面の笑みを浮かべ、手を振る男を睨みながら俺は部屋を出た。

今日は昨日よりもっと遠い街まで電車を使って行った。知り合いに会ったり、目撃されたりする可能性を少しでも減らしたかったからだ。

女は電車に揺られている間ひっきりなしに声をかけてくる。俺の左手の上に自分の右手をのせながら。思いつき振り払ってやりたかった。しかしあまり反抗的な態度ばかりとつていると、機嫌を損ねた彼女が何かしでかすかもしれない。それは避けたかった。今はただじっと我慢するしかない。

「ねえ、エンデュミオン」

「だから、その呼び方やめろよ」

大声でその名を呼ぶ女を、小声でたしなめる。周りにいる人達の視線が痛い。

黙っていても目をひく女の容姿。更に大声で訳の分からない名前を連呼すれば……注目を浴びることは避けられない。穴があったら入りたいとはこのことだ。恥ずかしさと苛立ちがつのる。

「どうして？ 貴方は私のエンデュミオンなのに」

「兎に角、やめてくれ！」

「いやよ。貴方はエンデュミオンよ。……それ以外の名前なんて、もう捨ててしまいなさい。ねえ、今はどこへ向かっているの？ どんなどころなの？」

女の声は大きい上によく響く。どこまでも迷惑な女だ。出来ることなら首を絞めて黙らせたい。

目的地（適当に決めた。一度も足を運んだことは無い）に着いた俺は吐き気を催しながらも女の手を掴み、引っ張り、逃げるように電車を降りて駅を出る。

「そんなに急がなくてもいいじゃない。時間はまだたっぷりあるのだから」

人の気も知らないでこの女は。もういい、無視してやる。俺は無言のまま目についた大きめの百貨店まで彼女を引っ張っていく。

女は目についた店にどんどん入っていき、物珍しそうに商品の数々を眺める。

只大人しく眺めているだけなら良いのだが、これはどういうものなのかとか、これの名前は何かとかいちいち質問してくるものだから、面倒臭い。電車に乗っている時同様、声も大きい。何度も客や店員の視線を浴びることとなった。

「これじゃあ昨日とまるつきり同じじゃないか……」

確か俺が困るようなことはするなと昨日言っただけなのに。意図的に人を困らせて楽しむタイプの奴（あの出雲とかいう男がまさ

しくこのタイプだろう)も厄介だが、こういうタイプの奴も非常に面倒臭い。

今俺達は薬局にいる。まず病気にはかからないらしい月の民にとっては薬というのは随分珍しいものであるらしい。

「ねえ、これはどういう時に飲むものなの」

女が手に取っているのは下痢止めの薬だった。

「げ、下痢の時に飲むんだよ」

「下痢ってなあに？」

目をぱちくりさせながら首を傾げる。近くにいた店員が訝しげな表情を浮かべながらこちらをちらちら見ている。

「……説明したくない。とても下品な話になるから」

「下品？ ああ、もしかして」

女は具体的な言葉を述べた。実に下品な……いやらしい……そんな言葉を。

恥ずかしい、という思いとこの女ふざけるな!という思いが混ざり合い、顔を真っ赤にする為の燃料が出来上がった。なりふり構っていられない。俺は女の口を塞ぎ、薬局から離れた。

薬局が視界から消え去るのを確認してから、手を離す。女は暢気に笑う。

「エンデュミオンの手、とても暖かかった。ねえ、もっと触れて？」

「断る」

こちらは気持ち悪くて仕方が無かった。

結局女の奇行及び奇妙な言動は百貨店を出るまで続いた。

フライパンをかぶろうとしたり、TVに映っている人間に話しかけたり、ガラスの置物を美味しそうなどと言って食べようとしたり……。言い出したらキリがない。

店を出た時、よくこの地獄を耐え抜いた俺と自分に自分で賞賛の言葉を送った。半強制的に好きでもない女とデートをさせられるそれだけでも苦痛なのに……。この女が大人しなければもう少し楽だっただろう。憎悪の炎燃やす心に蓋をし、何も考えず、何も思わず行動するだけで済んだだろうから。

女は俺の腕に抱きつき、暢気に鼻歌を歌っている。

俺の隣にいるべき人は、こいつではないはずなのに。たった一つ選択肢を誤っただけで、俺は全てを失おうとしている。

平凡な毎日も、人間としての生も、静香もみんな……。

「貴方は永遠に私のものよ。私をこんな幸せな気持ちにしてくれるのは、貴方だけ。そして貴方を幸せに出来るのも、私だけ」

女は歌うように言う。こいつはそう本気で思いこんでいるのだ。一体何をどうすればそんな風に思い込むことが出来るのか不思議でたまらない。

全ての元凶であるこの女に、今にも爆発しそうな思いをぶつけてやりたい。けれどそうすれば俺は。まだ多分、俺は月片無しで生きることが出来ない。

「明日も一緒にこうして出かけましょうね。この世界のこと、色々教えて頂戴ね？」

昨日と同じ地獄のような一日はこうして終わっていった。色々あった。語りたくもないようなおぞましいことが、沢山。

長い間使っていた枕を夜、びりびりに引き裂いた。新品のノートをカッターでぐちゃぐちゃにした。行き場のない怒りをぶつける方法はこれしかなかった。

明日は学校だ。静香や友人と顔を合わせる。俺は果たして今まで通りの学校生活を送ることが出来るだろうか？

第五十四話：そして羊飼いは月に抱かれて消える（4）

ろくに睡眠もとれないまま、朝が訪れた。しかし不思議と目蓋は重くなく、全く眠くもなかった。だるさも感じない。

まさか食事だけでなく、睡眠も必要としない体になってきて……いや、そんな、考えすぎだ。俺は人間だ、化け物なんかじゃない。リビングのテーブルにはパンと目玉焼きが置いてある。腹は減っていない。

食べなくても全く問題は無い。けれど食べなければ親に不審がられるだろう（最近朝食を食べない若者が増えているらしいが、俺は毎朝かさず食べている）。それにこちらの世界の食べ物を口にせず、月片だけを食べ続けるというのは今までの生き方や自分が人間であることを否定し、化け物となってあの恐ろしい世界の住人になることを受け入れる行為となるのだと思った。

認めたくは無い。そうだ、認めちゃいけないんだ。

パンを口に押し込み、牛乳で無理矢理流し込む。腹が空いていないから、そうでもしないと食べられなかったのだ。腹いっぱいなのにそれなりの量を食べるのは誰だって辛いと思う。

何でこんな思いをしなくちゃいけないんだ。朝食を普通に食べることさえ許してくれないなんて。いらいらしながらテーブルをたち、洗面台へ向かう。顔を洗い、歯を磨く。いつも通りにしていれば、認めたくない現実から目を背けることが出来るような気がする。

顔をあげ、鏡を見る。やっぱり変わったところなんてない。大丈夫俺は今まで通り……いや、何かが、違う。どうしてそう思ったのかは分からない。ただ鏡に映る自分の姿が今までとどこか違うような気がしたのだ。大きな変化ではない　小さな何か……。

「いや、気のせいだ。そうに決まっている」

もう一度顔に水をかける。水が下らない考えを洗い流してくれた。改めて鏡をしてみる。やっぱりいつもと同じじゃないか。少しも変わったところなんてない。

自分にそう言い聞かせながら蛇口を閉め、二階へあがる。

家を出る時間が近づくとつれ、心臓がばくばくしてきた。自分は今まで通りに振舞うことが出来るだろうか、怪しまれることはないだろうか、俺とあの女が二人で歩いていたところを見ていた奴はいなかったか。そんな不安が心臓の鼓動を早くする。

大丈夫。今まで通りやればいい、あの女も流石に学校には来ないだろう。俺が愛してやまない平凡ながら幸せな日常。学校にはそれがある。あそこにいる間は大丈夫なはずだ。

いつもよりのろのろと階段を降り、靴も丁寧に履く。

意を決し玄関のドアを開けた。

「……おはよう」

いつものように静香が待っていた。こちらを不安そうな表情で見つめる彼女の姿を認めた途端、土日の悪夢が甦る。

俺は静香を裏切った。どんな理由があっても、決して許されるものではないことをした。嫌でもそのことを思い出してしまう、心が鉛のように重くなる。

重くなった心が胸を圧迫する。重いし痛いし、苦しい。

「おはよう、静香。もう元気になったから……心配かけたな」

改めてそう言い、無理矢理笑みを浮かべた。

「良かった。あのままだったらどうしようかと思った」

「うん。俺もあの日はあせったよ。でももう大丈夫。……いこうか」

「そうだね」

ぎこちない会話の後に訪れたのは沈黙。いつもとは違う、重苦しい空気が俺と彼女の周りにだけ立ち込めている。あの、静かで穏やかな海に浮かんでいる心地の良い感覚は一切無い。何か喋らないといけない、と思っではいる。けれど口が動いてくれない。そうさせているのがこの重苦しい空気なのか、それとも彼女に対する罪悪感なのか……或いはその両方なのか、それは分からない。

「この前一昨日見に行った映画……楽しかったね」

「え、ああ、うん」

そう言ったはいいが、あの時見た映画がどんなものだったのか一切思い出せない。結末さえ思い出せない。静香が話題に出すまで一昨日映画館へ行っていたことすら忘れていた。

彼女だつて俺がろくに映画を見ていなかったこと位十分承知しているはずだ。

ただ話す内容が無いから仕方なく。静香はまた饒舌になった。沈黙を、気まずい空気を払拭はらいつくする為に、映画のことを延々と語る。けれど彼女が喋れば喋る程空気はより悪くなっていく。静香が悪いんじゃない。悪いのは……あの女だ。あの女さえ現われなければこんなことにはならなかった。

自然と早足になる。早く教室へ入ってしまったかった。そうすればこの重苦しい空気から解放されると思ったからだ。そう思っているのは俺だけではないらしい。静香もいつもより早く歩いている。

二人で過ごす時間。最も愛しく心休まる時間。だった。今まではずっとそうだった。

何かが少しずつ始められている。そんな嫌な「現実」から逃れるように二人して教室へ入った。いつもと変わらない風景が目の前に広がっている。それを見てほっと安堵の息をもらす。教室中を満たす「日常」の空気が硬くなつた体を少しだけほぐしてくれた。

俺も静香も、友人と夢中で話した。現実から目を背けるにはそれが一番効果的な方法だったからだ。

いつも通り適当に力を抜きながら授業を受ける。あの化け物共がやっていないことを俺はやっている。あいつらは学校になど通ったことがないだろうし、授業を受けたり宿題をやったりしたことないだろう。

俺はあいつらとは違う。違うからこそ、こうして教科書や黒板とにらめっこしているのだ。そう思ったら元気が出てきた。このままあいつらに屈服するわけにはいかない。きつと勝てる。俺はあいつらに勝てる。

確かに勝てると思っていた。昼休みがくるまでは。

「よし、今日はここまで。明日の授業までに今配ったプリントをきっちりかつきりしっかりやってくることに、いいな」

姫　こと姫野晶先生のありがたい言葉と共に授業は終わった。

彼女の作るプリント（通称姫プリ）は授業を真面目に聞き、ノートをしっかりとつてさえいければ簡単に出来るものだ。

プリントやノートをしまい終わる前に静香がやっていた。手には弁当箱が二つ。彼女はいつも俺に弁当を作ってくれる（その代わりに

というのなんだが　時々うちの親が篠宮家に色々おすそわけしているらしい）。彼女は料理が上手だった。多分俺の母さんより、上手い。「あんたいいお嫁さんもらったねえ」と母さんはよく言う。まだ結婚はおるか婚約すらしていないのだが……そうツッコミを入れながらも、その言葉を聞きたび俺は何だか嬉しくなる。彼

女を褒められることがとても嬉しかったのだ。

片づけを終え、腰をあげる。その時俺は月片のことを思い出してしまった。

それは今、カバンの中に入っている。一気に気分が重くなった。

腹は減っていない。別段今食べなくても問題は無い。けれど。

あの時の 何を食べても満たされず苦しんだあの短いながらも地獄の様な時間のことを思い出した。空腹があれ程までに恐ろしいものだとは思いつきもなかった。二度とあんな恐怖は味わいたくない。今食べなかつたからといってすぐあんな風に腹が減り、喉が渴くということはない……分かつている、それは分かつているのだが。

静香のご飯を食べている時、もし腹が減り始めたら？美味しいものを食べているのに腹が全く満たされないあの感覚を再び味わうことになってしまったら？嫌だ、怖い、怖い……。冷や汗が出てきた。気のせいか、喉がからからな気がする。嫌だ、嫌だ……。

気がつけば、カバンの中に入れていた月片入りの袋を手にしていった。

「ごめん静香、先に行つててくれないか。ちょっと、ね」

静香は目をぱちくりさせた後、素直に頷いた。恐らくトイレにも行くのだろうと思つているのだ。弁当袋を手には教室を出る静香を見送つてから、俺も外へ行く。トイレで何かを食べるのは嫌だった。なるべく人目につかない場所へ行こう。腹の虫が鳴っている気がする、気のせいだ、腹は減っていない、いやもしかしたら減っているのかもしれない、早く、早く食べなければ。

どの教室にも人がいる。廊下や階段も人がいっぱいいる。かえつて外へ出たほうがいいみたいだ。

外へ出、あまり人の通らない辺りで立ち止まる。まっすぐそびえ

たつ校舎によって作られた、温もりの無い黒い陰。その中にふらふらと入り、校舎に向かい合うようにして立つ。

袋を開け、そこから月片を取り出す。食べたくない。けれど空腹になる事も耐えられない。毒物に対する恐怖より、生きようと思う動物の本能の方が圧倒的に勝っていた。

口に入れるとあの甘いような、酸っぱいような、なんともいえない香りがふわっと広がった。とても人間を化け物にする毒物とは思えない味だ。この味はなんだろう、一度食べたなら忘れられない……多分これは麻薬と同じようなものなのだ。

勝てる。……そんな思いは一瞬にして砕け散る。いや、まだまだまだ負けてはいない。諦めてどうする。

今はそう自分に言い聞かせることしか出来なかった。

ふと誰かの視線を感じ、振り返る。見知った顔がそこにあった。

見られてしまった。いや、でもいい。静香に見られなければ……。用は済んだ。俺は逃げるようにその場を立ち去る。

静香はいつものベンチに腰掛けて待っていた。俺が来るまで食べるのを待っていたらしく、弁当には一切箸をつけていなかった。

「おかえり。……早速食べましょうか」

「うん。今日はどんなおかず？」

「見てみれば分かるわよ」

俺の分の弁当箱を差し出しながら静香が困ったように笑った。この時だけ、いつもと同じ穏やかな時間が流れた気がした。

弁当箱を開くと、中にはねぎ入りの卵焼き、鶏のからあげ、ほうれん草とコーンのソテーが入っていた。

「からあげは昨日の夕飯の残りなんだけれど」

「いいよ、残りでも何でも。俺から揚げ大好き」

静香の家のから揚げは、美味しい。和風の味つけで口の中に入れるとしょうがの香りがふわっと広がるのだ。しかし味は決して濃すぎず、丁度良い。

いただきます。二人で手を合わせる。

からあげを一つつかみ、一口。……何故か変な味がする。ああ、そうだ。

先程食べた月片が邪魔をしているのだ。飴を舐めた直後に食べるご飯というのは美味しくない。月片は飴ではないが、口の中は飴を舐めた後と同じような状態になっている。もう一口。矢張り、奇妙な味がする。甘味と苦味、酸味……色々なものが、混じっている。そういえば初めてこれを食べたのは夕飯直前だった。あの時も少しの間味覚がおかしくなっていたっけ……。

『日常』がぐらりと揺れる。食前にあれを口にしてしまったことを後悔した。

あの女の笑い声が頭の中で響いた。

貴方は私のものよ

夏、騒ぎ出すセミ以上にうるさく、腹の立つ笑い声。弁当箱を支える手に力が入る。俺の理性が完全に爆発していたら、きつと俺は手に持っているこの弁当箱を思いっきり地面に叩きつけていただろう。

弁当を食べ終わる頃には味覚も元に戻っていた。矢張り静香お手製の弁当は大変美味しかった。食べても腹の足しにはならない、俺の体を生かす糧には決してならない……そんな現実に無理矢理蓋をして、俺は笑った。

「ごちそうさま。今日も美味しかった。鶏のから揚げが特に」

「あのから揚げは母さんが作ったものなんだけれど？」

ぶう、と頬を膨らませて拗ねるふりをする。その表情があまりに滑稽で、また可愛らしいものだったから思わず声をあげて笑った。

「いいねその表情。携帯カメラで撮りたいなあ」

「やだ、俊樹ったら。気持ちの悪いこと言わないでよ」

とか言いつつ、顔は笑っている。俺のせいで暗くなっていった表情が少しだけ明るくなって……ほっとした。彼女に辛い思いをさせない為にも俺は頑張らなければいけないと思った。

その後はいつものように、ぼうつと空を眺めながらぼつぽつと喋る。

お喋りな人間は好きじゃない。大声で話す人も好きではない。穏やかで静かな時間を過ごす。それが何より幸せなことだった。

とても、幸せだった。

昼休みが終わる寸前になって、また熱と激痛に襲われた。トイレの個室に閉じこもり、それが収まるのを待つ。昨日より収まる時間は短くなっていたし、耐えられない程酷いものではなくなくなってきていた。

それでも、自分が毒を食べていることを自覚するには十分すぎるものであったが。何でこんな目に合わなくてはいけないのか。

貴方は私と『同じ』になるの。同じになるのよ……

またあの女の笑い声が頭の中で響いた。戸を殴りつける。一刻も早くその笑い声を消し去りたかったから。そんなことをしても無駄だと分かっていたけれど。

授業中も、女の声が幾度と無く聞こえた。もしかしたら俺の隣に
いるのではないか、とちらちら隣を見る。そこには見慣れたクラス
メイトが座っていた。

いるはずがない。あの女はここには来られない。ここは『日常』
の世界。あの女が足を踏み入れることは、出来ない。

それでも何度も確認してしまう。隣を、前を、後ろを。

エンデュミオン、エンデュミオン、エンデュミオン

謎の名前で俺のことを、呼んでいる。また今日もあいつと会わな
ければいけない。頭が痛くなった。胃が焼けるように熱い。ここか
ら出たくない、あの女と会いたくない。

授業の内容は一切頭に入らなかった。ノートには訳の分からない
文字が沢山、書かれていた。

吐き気をこらえながら掃除をし、きりきり痛む腹を目立たないよ
うにさすりながら放課後を迎えた。

このまま学校を出る　のは嫌だった。部活を少しやってから帰
ろう、そう決める。そうしたからといって、あの女とデートしなけ
ればいけないという現実から完全に逃れることは出来ないのだが……
…少しでも、あの女と顔を合わせるまでの時間を延ばしたかったの
だ。

部室のある校舎へ向かう途中、同じく部室へ向かっていた友人と
顔を合わせる。あまり暗くて辛そうな表情を浮かべていたら、怪し
まれる。無理矢理笑顔をつくり軽く右手を挙げた。

「よお、珍しいじゃん。お前が部活に参加するなんて」

九割方部活をさぼっている友人はへへへと笑う。

「ま、たまには顔出そうかなと思ってさ。……実は最近、超可愛い

後輩ちゃんが入部してきてさ。前はテニス部に入っていたんだけど、想像以上に辛かったからやめたんだと」

成程、理由はそれか。鼻の下伸ばしながら語る友人の姿を見て自然な笑みがこぼれる。

「不純な動機だな」

「うるせえやい。妻子持ちのお前には恋人いない暦十七年の俺の気持ちなんて、分からないだろうさ」

「子供はいないよ」

「妻って部分是否定しないのかよ」

「あ、そうか」

素でぼけていた。妻とか夫婦とか……言われ慣れているせいか、違和感が全くといっていい程無かったのだ。少し、恥ずかしい。友人がわざとらしいポーズと共に大きなため息をついた。

「全く羨ましい限りだよ。あんな可愛い奥さんがいるなんて……弁当まで作ってもらって……デートとかして……さぞかし楽しく充実した日々を……あ！」

一人ぶつぶつ愚痴っていた彼は、突然大きな声をあげた。忘れていた何かを思い出したかのような様子だった。

「なあ、篠宮と……臼井って仲、良いのか？」

唐突な上に訳の分からない問いかけに俺はぼかんとする。臼井？誰だっけ？頭を捻る。脳内を占拠していたあの女を追い出し、臼井という単語を頭に思い描く。その単語が一人の人間に姿を変えるまでそう長い時間はかからなかった。

臼井。臼井さくら。俺と同じ桜町の人間だ。無駄に大きな眼鏡と、あちこち跳ねた髪の毛が特徴の……読書ばかりしている地味な女だったはずだ。

「さつきさ、篠宮と臼井が二人で歩いているところを見かけてさ。所属している委員会とか部活が同じってわけでもなかったよな？だからちよつとだけ気になって」

「二人で？」

静香が臼井と遊んだり、喋ったりしているところなど見たことがない（そもそも臼井が誰かと喋っているところをあまり見たことがない）。

「やつぱり友達じゃないよな。じゃあ何でだろう？ 篠宮の方は元気が無さそうだったし、臼井の方も暗い感じの表情でさあ……。まさかお前、浮気していて、その相手が臼井で……。それがばれて……。いや、そんなわけないよなあ」

「ある訳ないだろう！」

思わず声を張り上げる。慌てた友人が全力で謝ってきた。「冗談のつもりで言ったのに、俺が眉を吊り上げて怒鳴ったものだからびっくりしたのだろう。」

そう臼井と浮気などしていない。……臼井とは。

胃が痛む。心臓が早鐘を打っている。

「悪い悪い。お前が浮気なんてするはずないよなあ。ましてや相手があんな地味な上に脳内お花畑ちゃんな奴なわけないよなあ」

浮気をするはずなんてないよなあ……。その言葉が胸をえぐる。気持ち悪い。いっそもかも吐き出してしまいたい。

友人は変なこと言っただけで悪かったと重ねて謝罪すると、逃げるよう

に俺の前から姿を消した。助かった、と思った。秘密を暴露せず
すんだからだ。

しかし何故静香が白井なんかと。元気が無い原因は俺にある。
…待てよ。

あの時 公園であの女を見かけて、全力で追いかけていた時
静香の隣に見知った顔の誰かが立っていたような。曖昧で霧が
かったかのようにぼやけていた脳内映像。それが少しずつはつきり
としたものになっていく。

そうだ、あの時静香の隣に居たのは……白井だった。おしゃれで
女の子らしい静香とはほぼ真逆な格好をしていた彼女。白井も当然
女を追いかけている俺の姿を見たはずだ。

静香はもしかしたら俺の様子がおかしいこと等を白井に話して
それで、今日もそのことについて話そうとしているのかもしれない。
い。

「それがいい。それで、良い……」

他人に余計なことを喋って欲しくない、とは思わなかった。抱え
込んでいるものを吐露することで少しでも楽になってもらいたい。
心から、そう思う。彼女が苦しんでいる原因である俺にはそう思う
資格なんてないのかもしれないけれど。

*

少しの間部活に参加し、用事があるといって学校を後にした。何
故か校門の近くで教師数人がうろつろしている。何かを警戒してい
るような目つき。それを見て言いようのない不安がこみ上げてくる。
何となく嫌な予感がした。

そんな思いを振り切るかのように校門を出た後は、牛のようにの
ろろ歩いた。俺は今家がある桜町とは正反対の方向に足を運んで
いる。舞花市の中心に、駅がある。そこから電車に乗り、また適当

なところまで行くのだ。今はまだ同じ学校の人間が駅にはうじゃうじゃいるだろう。あの女をどうにか説得し、せめて目的地に着くまでは他人のフリをしてもらわなければいけない。

視線を落とす。灰色の道が延々と続いている。硬くて熱などなさそうなお道。

いつまでこんなことが続くのだろうか。いつになったら『日常』に戻れるのだろうか。自分で自分を嘲るかのような笑みと情けない声がこぼれる。

そんな日は訪れない。俺はもう……。

「馬鹿野郎、考えるな。俺は人間だ……人間である以上、いつかあいつらと別れられる日が来る」

俺は救いようのない、馬鹿だ。

人通りの少ない狭い路地に入り、足元さえよく見えない程度道をとぼとぼと歩く。出来るだけ人目につきたくなかったから、集合場所は一応ランプ等を販売しているらしい（こんなところに客が来るのかどうかは怪しいところだが）店の前にした。これからはここで女と落ち合い、どこかへ行くのだ。

「エンデュミオン、遅かったわね」

声が聞こえ、顔をあげる。出雲という男の使い魔とやらに道案内されてここまで来たらしいあの女が立っていた。仄暗い場所においても、女の姿ははっきりと目に映る。星を散りばめた夜空を思わせる髪が風に吹かれてさらさら揺れていた。その髪をじつと眺めていると永遠の闇の中へ吸い込まれてしまいそうな気がして、ぞっとした。

「でも、いいわ。許してあげる。私は心優しいから。貴方を、許す

わ

その瞳は俺を見下していた。この女は相手を許す自分の優しさに酔っているのだ。この女はそういう性格なのだ。貴方を生かして「あげる」貴方を許して「あげる」貴方を愛して「あげる」……自分が優位に立つことで得ることが出来る快樂に酔いしれているのだ。相手の都合などどうでもいい。だからこの女は人の話など聞かない。

「さあ、行きましょう。今日はどこへ連れて行ってくれるの？ 勿論、どこでもいいけれど。貴方とならどこまでも」

笑う女を置いて俺はさつさと先に進む。この女の言うことにいちいち突っかかっていたら、エネルギーが幾らあっても足りない。

「素直になればいいのに。そうすれば楽になるわよ。貴方はもう私がいなければ生きていけない」
放っておく。

「貴方はシノミヤズカを死なせたいの？」

足を止め、振り返る。女は予想通りの反応に満足したのか、くすくすと笑い声をあげた。俺の日常を奪っただけでなく、俺の大切な人の日常すら侵そうとしている（いやもうすでに侵されている）この女。頭が熱くなり、びりびりとしびれてきた。

「あの子は、邪魔。私と貴方の仲を邪魔している。あの子さえいなくなれば、貴方は」

「やめろ」

「そんな言葉だけじゃ許してあげない」

意地悪がなにより好きないじめっ子のような笑み。体が、頭がぎゅっと締め付けつけられているような気分がした。

「……俺が愛しているのは貴方だけです。だから、彼女に手を出さないで下さい」

俯き、小さな声で屈辱の台詞を吐く。そんな俺の頬を、女の冷たいやらしい手が撫でた。気分が、悪い。

「そうよ。貴方のセレネは私。永遠の時を共に過ごす伴侶は、私」歌うように囁かれたその言葉は、呪いの言葉のようだ。逆らいたいの、逆らえない。女の言うことを素直に聞くしかない自分を情けなく思った。

女は一応電車の中では他人のフリをしてくれた。助かった。視界には俺と同じ制服を着た奴らが十人は映っていたから。その中に同級生も混じっている。

体を小さくし、俯く。見られたくなかったからだ。

空は灰色で、街の色も灰色だった。行きかう人々の姿さえ灰色に見えた。

「本当、人が沢山いるのね貴方達の世界は。おまけにとっても賑やかだわ。麗月京にはここまで多くの人はいないわ。あそこは、ずっといると息が詰まるの。皆冷たくて人形みたいで、お喋りも嫌いで……例外がないわけでもないけれど。音が無い世界って、とても恐ろしいものよ。ずっといるとどうにかなくなってしまいうそになるの。何百年も、あそこでずっと生きてきたけれど……いつになってもあの静寂には慣れないわ。私、笛を吹くのが好き。笛を吹けば沈黙から逃れられるから」

女は当たり前のように俺と手を繋いでいる。そうしながら一人でぺちやくちゃ話している。俺はそれを適当に聞き流す。あんたが住んでいるところになんて興味は無い、とはつきり言えばこの胸の

むかつきも少しは収まるだろうに。

「でもうるさすぎるのも困ったものね。エンデュミオンはうるさいと思わないの」

「別に」

あなたの話す声はうるさいと思うけれど、という言葉を飲み込み素っ気なく答える。女は慣れると気にならなくなるものなのかしら？私はある静寂にいつまで経っても慣れないのに……と一人首を傾げていた。心底、どうでもいい。

「ねえエンデュミオン、私に何か贈り物をして頂戴」

「何で？」

「決まっているでしょう、私と貴方が恋人同士だからよ。麗月京では歌を贈ることになっているけれど、こちらの世界はそうではないのでしょうか？ 出雲から聞いたわ。私、貴方からまだ一度も贈り物を貰ったことが無い。何だっていいのよ、貴方がくれたものなら何だって大切にするわ」

あの男はこの女に余計なことしか教えないのか。

「シノミヤシズカには、色々あげたのでしょうか？ 彼女にあげて、私にはあげないなんて道理はないわよね」

静香にもあげたからこいつにもあげなければいけない、という道理もない。

脅迫者に渡すプレゼントなど無い。俺は「金が無い」と言って適当にあしらおうとした。しかし女は納得しなかった。またあの嫌な笑みを浮かべた。

「シノミヤシズカにはあげたのでしよう。シノミヤシズカには」
静香の名前の部分をわざとらしく強調する。

「……安いものなら、やる」

自分で自分を殴りたくなつた。悔しい、情けない。俺や静香の『日常』に笑いながら侵入し、ぶち壊していく女に尻尾を振ることしかできない自分が。

でも、しょうがない。静香を守る為にはこうするしかないのだ。

俺は女に指輪を買い与えた。といっても本物の宝石がついた立派なものではない。小さな女の子向けの、おもちゃの指輪（が何個か入った箱）だ。デパートのおもちゃ売り場で売っていたもので、サイズはとても小さいから指にはめることは出来なかったが……それでも良いと言つので買ってやった。

「妹さんにもプレゼントするの？」

レジのおばさんがにこにこ笑いながら話しかけてきた。

「ええ、まあそんなところですよ。あ、でもラッピングとかはいいんです」

本当のことを言う気にはならない。話を合わせ無理やり作った笑みを顔に貼りつける。

しかし空気を読まないあの女は首を傾げながら一言

「何を言っているのエンデュミオン、それは私への愛の証である贈りものでしょう？」

レジのおばさんはどう見ても小さな女の子には見えない彼女を見て、一瞬呆けた表情を浮かべた。まあすぐ営業スマイルに戻ったが……。

会計を済ませ、急ぎ足でその場を離れた。おばさんはきつと俺の

ことを変な客だと思っただろう。エンデュミオンと呼ばれた、大人のにおもちの指輪を贈ろうとしている俺のことを……。

その後入った喫茶店で女は俺から貰った指輪を満足気に眺めながら、大声で『麗月京』の話を延々とした。皆他人の話などろくに聞いてはいないだろうが、それでも矢張り恥ずかしい。

この女といると疲れる。心安らく時間が一秒たりとも無い。

「エンデュミオンは桜町というところずっと暮らしていたの？」

「ああ……」

「ずっと居て、飽きない？ 私は麗月京に飽きてしまったわ」

「別に」

物足りないとか少し寂しいとか思ったことがないわけじゃない。けれど俺はあの町が好きだ。飽きたとか……そんなこと、考えたことなかった。あの町の雰囲気は俺に合っている。ずっとあそこで静かに暮らしていきたいと思っているのだ。

この女さえやってこなければ、そうなるはずだった。また弱気になり、ぶんぶんと頭を振る。

女の方はふうんと一言。

「十数年位じゃ、飽きないのね」

そういふ問題じゃない。何故飽きる前提なのか。自分がそうなら相手も当然そうであると思っっているのだろうか。

「でも安心して。もうすぐ貴方はあの町とお別れすることになる。

飽きる前に去ることが出来る。それってとても幸せなことだと思っ
わ」

お別れ。その言葉が胸に突き刺さった。

「……俺をあそこから引き剥がすつもりか」

「あそこですつと生きるつもりなの？ 良いことないわよ？ 月の民に近い存在になれば、貴方は老いることがなくなる。周りの貴方を見る目も変わるわ。そんなの嫌でしょう？ 辛い思いをする前にお別れした方がずつと楽よ。貴方は私と『同じ』になるの。幸せ、私とっても幸せよ。エンデュミオン」

胸がむかむかする位甘い声と笑顔。吐きそうになって、俺はトイレへと逃げ込んだ。

桜町に帰った頃にはもうすっかり辺りは暗くなっていた。

夕飯を食べる気は全くしない。無理矢理少しだけ口にした後、救いを求めるように二階へとあがるうとする。階段に足をかけた辺りで親が大丈夫かと尋ねてきた。大丈夫ではない。しかし本当のことも言えないから、大丈夫と一言だけ。

怒りはエネルギーに変わり、そのエネルギーを外に放出する為に物を投げ、蹴飛ばし、そして泣いた。

涙はいつになっても枯れなかった。

第五十五話：そして羊飼いは月に抱かれて消える（5）

*
「ガキンチヨ共、恐怖の不審者情報が入ってきたぞ」

そのことを告げたのはクラス担任である姫野先生だった。にやりと笑いながら教卓に手をつく彼女の姿はとても教師のそれには見えない。

不審者。普段ならその単語を聞いた時「物騒だな」とか「変態気持ち悪いな」とか色々思っただろう。けれど今はそんな話を聞いても何も思わなかった。

そこらにいる不審者よりも物騒な人間につきまとわれているからだ。不審者なんて可愛いものだ、そんなことさえ考えてしまう。

心底どうでもいい話としてそのまま聞き流してしまおうと思ったのだが。

「それが違うんだなあ。その不審者っていうのはむさ苦しいおっさんでも、強面の兄ちゃんでもなく 若い女だったらしい」

男子の下らない質問に律儀に答えた姫野先生のその言葉を聞いた時、頭の中が氷をぎっしり詰められたような状態になった。若い女……その単語に不吉なものを感じたのだ。

姫野先生は生徒といつものように漫才のような掛け合いをした後、その不審者女についての詳細を語りだす。彼女の口から出てくる言葉一つ一つが頭を、胸をきつく締めつけた。

「私の愛する人を恋人にしていた幸福な女性はどういう人なのとか私の 何か外国人っぽい名前だったらしいが ほんんななのか教えてとか、よく分からないことをしつこく聞いてきたらしい」

まさか。そんな。

情報をまとめたプリントが配られる。それを受け取る手の震えが止まらない。

不審者である女は見た目二十代後半位、細身で背丈は普通。髪の毛は長く、お嬢様っぽいおしとやかな雰囲気。あの女と一致する。着ていた服の情報も簡潔に載っていた。その情報もぴったりと合っている。

朝のSHRが終わり、皆一時間目の授業の準備を始めた。といっても授業はこの教室で行われるものだったから、準備などあつてないようなものだったが。

プリントを凝視する。間違いない、ここに書かれている不審者女というのはあの女のことだ。じっと見ている内に、紙に印刷されている文字があの女に姿を変えていく。紙の上にいる女は笑っていた。ぐちゃぐちゃに紙を丸め、机の中につっこむ。

あの女は学校まで侵そうとしている。今は俺との関係を知っている者はいないだろうからいいが、このままではいずればれてしまうかもしれない。そうなれば当然静香にも彼女との関係が知られてしまうだろう。静香を傷つけたくはない。あの女に強く言い聞かせなければいけない。素直に俺の言うことを聞いてくれるか怪しいが……。

頭の中はあの女のことと満たされている。まるで臭くて汚くてどろどろしているヘッドロを詰め込まれたかのような気分。重いし、気持ち悪い。

そのヘッドロは『日常』の象徴である家や学校にも少しずつ流れてきている。

あの女の存在が、家や学校に居る人達を少しずつ飲み込んでいく。

のだ。

また激しい感情に体を揺さぶられ、授業中ノートにあの女に対する呪いの言葉を書き連ねる。シャープペンの芯が何度も折れ、ノートに小さな穴が幾つか出来た。

休憩時間中、誰かが俺に話しかけていた。誰が何を言っているのかその時の俺には分からなかった。ただ、曖昧な返事をし、無理矢理笑みを作ることしか出来ない。そうしている間も、女の笑い声が絶えず聞こえてきた。

逃げ出したい。そう思っているくせに、月片を口に入れることをやめられなかった。昼休み、また静香を先に行かせて腹が立つ程綺麗なそれを噛み砕く。

弁当を食べてからにすればいい、いやそもそも食べる必要がない。頭ではそう思っていた。けれど体が勝手に……。ベンチに座っている静香はうなだれていた。ちらっと見える瞳は少し潤んでいるようだった。隣に座った俺の存在にも少しの間気がつかなかった。

「あ、ああ俊樹来ていたのね。ごめんね……ちょっとぼうつとしていて」

「大丈夫だよ。今日のお弁当は、何？」

「ふふ、今日はものすごく頑張っちゃったの。ウケるといいんだけど」

「ウケる？」

何だろつ。静香に渡された弁当箱を開く。

見ればごはんやおかずで出来た、子供にも大人にも人気のアニメ

キャラクターがこちらを見て笑っていた。いわゆるキャラ弁というやつだ。これがまたよく出来ていて、キャラクターの特徴をよくつかんでいる。

「うわ、これすげえ」

素直な感想を漏らし、思わず声をだして笑った。しかしどうにも上手く笑えない。顔の筋肉がすっかり強張っているようだった。

静香はそんな俺の顔を見て微笑む。けれど矢張りその表情もどこかぎこちない。

「パソコンでレシピを見てね、面白そうだなと思って作ってみたの。とっても大変だったんだから。少なくとも学校がある日はもうやりたくないわね」

「残念。いや、でもこれ本当よく出来ているよ。食べるのが勿体無いくらい。携帯、携帯」

携帯についているカメラで撮ってやろう、と思った。そう言えば昨日は静香の拗ねた顔をこれで撮ってやりたいか思っただけ。ああ、これが日常の姿。今まで日常がどうかこうとか、意識したことは無かったのに……。

「失ったり、壊れそうになったりすると意識するようになるんだな……」
「……」
「……」

「何か言った？」

「あ、ううん。何にも」

声に出していたのか。慌てて首を振る。

口に出した通り携帯カメラで静香作キャラ弁当を撮り、それから何か惜しいなあと思いつつながら、食べる。腹が減っていない上に月片

を食べたばかりだったから、味が分からなかった。箸を動かさず、口に入れ、飲み込む作業を淡々と繰り返す。まるでロボットのよう。

「ご飯やおかずを少し口に入れ飲み込んで、喋る静香。彼女はここ数日間で普段の数か月分喋っているような気がする。そうさせているのは自分だ。」

静香が喋っている、助けを求めている。助けなければいけない、せめて話だけでもきちんと聞いていなければいけない、そう思っているのに彼女の喋っている内容が全く頭に入っていない。

「……それにしても、女の変質者なんて珍しいわよね」
そのくせ、あの女に関する話題だけはきちんと聞こえた。静香があの子のことを口にして……多分今俺は変な顔をしているだろう。それはいけない。

「それとも、そんなに珍しくもないのかな？ 一体どんな人なのかしら……大分危ない人みたいだけれど。俊樹はどう思う？」

口は笑っていたが、目は笑っていなかった。まさか静香はおれとその不審者女が知り合いであることに気がついているのだろうか。いや、そんなはずは。

兎に角話題を逸らさなければいけない、そう思った。

「そんな危ない奴の話なんてやめようぜ。もっと楽しい話をしようよ。ほら、文化祭のこととかさ。今年の出し物も決まったし……ものすごく楽しみだよな」

実際は楽しみでもなんでもなかった。数日前まではとても楽しんでいたのに。

俺の答えを聞いた静香の顔に微かに絶望、あるいは失望という文字が浮かび上がった。

「そうだね、楽しみだね……」
その後静香は黙ってしまい、結局教室に戻るまで一言も喋らなかった。

気がつけばもう放課後になっていて、帰りのSHRも終わっていた。自分は今日ここで何をしたらだろうか？勉強したこと、クラスの様子、友人が話していたこと、どんな風に決められた場所の掃除をしたか……何一つ思い出せなかった。

吐き気をこらえながら静香に「今日も一人で帰って欲しい」と告げる。彼女は理由を聞くことも、責めることもせず、ただ「分かった。気をつけて帰ってね」とだけ言ってくれた。

帰り際、中庭に足を運ぶ。そこには静香と臼井、二人の姿があった。きつと今日も俺のことについて話しているのだろう。あそこは放課後、あまり人が通らない。胸に秘めている思いをぶちまけるには絶好の場所だろう。

今日も少しだけ部活に参加した。適当なところで切り上げ、部室から出た。

下駄箱で丁度静香と会った。俺と同じく半帰宅部状態のところにも所属している彼女もまたこれから帰ろうとしていたらしい（普段は事前に帰る時間を決め、下駄箱近くで合流して帰っていた）。

「一緒には……帰れない？」

「あ、うん。あの……用事あるから。ちょっと時間がかかるものだし……」

「そう。ごめん。また明日ね」

泣きそうな声でそう告げて、静香は笑った。俺も泣きなくなった。彼女に背を向け、足早に去る自分は本当に情けない人間だ。

*

暗く細い路地を通り抜けていく。段々気分が重くなり、ため息が増えていった。周りの音は何も聞こえない。何気なく上を見ると、建物によって切り取られた空がそこにはあった。ああ、空はとても遠いなあと訳の分からないことを思った。

暗い道を抜けた先もまた暗く、光といえばぼつんと建っている店の中を照らす灯りと、俺を待っていた女の体が発しているもの位。女は俺の姿を認めると顔を輝かせ、勢いよく飛びついてきた。ひんやりとした女の肌が俺から体温を奪う。髪から漂う甘い匂いのせいで胸やけがし、思わず呻き声をあげた。

「エンデュミオン、今日も遅かったわね。貴方を待っている時、とても胸が苦しかったわ。貴方が傍にいないと私、どうにかなってしまいそうになるの。ああでも今は大丈夫。貴方が目の前に現われた途端、苦しみも切なさも全て吹き飛んでしまったわ」

「ぶっん」

女はまたぺらぺらと喋り始めた。こうなるとなかなか止まらない。喋っている内容は全く分からなかったが、とりあえず相槌をうつておく。

延々と続く雑音。このまま放っておくとここですつと喚いていそうだったから、途中で話を無理矢理切った。

「それより、早く行こう。こんなところにいたって仕方ないだろう」

「そうね。ねえエンデュミオン、私この世界のこと色々調べたのよ。出雲の家には沢山本があるの。この世界に関して書かれた本もあったわ。……でも読むのはなかなか難しかったわ。正直殆ど読めな

った。漢字というものは何となく読めるのだけれど……カタカナというものは全然駄目。あんな文字見たことなかったし……出雲もその辺りはあまり読めないらしいし」

「そんなことはどうでもいいよ」

「だから本を持ってきたの。エンデュミオンなら絶対読めるだろうから……気になるところには印をつけて……ねえ、この中で行けそうな所はある？」

「どうでもいい、という俺の話など全く聞いていない彼女は本を開き、印がついている箇所を指差した。

それを見るにどうもこの女はゲームセンターや映画館、カラオケ店やボウリング場に興味があるらしい。ようは娯楽施設だ。

「一応行けるよ、殆どの場所には」

「まあ、本当！？ 嬉しいわ。それじゃあ今日はこの印がついているところに連れて行って。今日行けなかったところは明日行きましよう」

女はまた俺の腕に抱きつこうとする。

「だから俺はそっこの、嫌なんだ」

冷たく振り払い、さっさと歩き出した。俺も静香も辛い思いをしているのに、この女だけは楽しそうに笑っている。そのことがどうしても許せない。

罵詈雑言を頭の中で巡らせていた俺は、女がああ場で立ち止まっていたことに気がついていなかった。

店の前から動かなかった女がそこで何をしていたのか……その時の俺は全く知らなかった。

そういえばさつきからあの女の声が聞こえないような？聞こえない方が嬉しいのだが、聞こえなかったら聞こえなかったで不安になる。おそろおそろ振り返ってみたら、数十メートル先に女はいた。長いスカートをふわふわなびかせながら近づいてくる彼女は無邪気な笑みを浮かべていた。

「ごめんなさい、少し余所見をしていて」

「別に。……それと昨日も言ったけれど、目的地に着くまでは」
言葉の続きをさえぎるように、女が口元を耳に寄せる。

「他人のフリをしていればよいのでしょうか？ 分かったわ。貴方の頼み、断るわけにはいかないもの」

よく言う。俺の願いや訴えを笑いながら蹴飛ばし続けたくせに。数駅先の街に着くまでは、他人のフリをした。知り合いに見つかりませんように、あの女といるところを見られませんが、静香にばれませんようにと必死にお願いしながら電車に揺られる。

実際はすでに静香には俺とこの女の間係を知られていたのだが……。

横目で女の顔をちらつと見る。笑いながら聞き馴染みのない歌を歌っていた。

この女と電車に乗ってどこかへ行くのが日課になりつつある。一緒にいるのが当たり前になってきている。そして当たり前だったことが段々当たり前ではなくなってきた……。……。

当たり前だったことや自分が信じてきた常識が崩れ落ちていく。崩れたそれらを取り払われ、そこに新たな常識や日常が築きあげられて、俺は今度は新しく出来たその中で暮らすようになる。最初は居心地が悪く心落ち着かないだろうがいずれは慣れ、以前住んで

いた場所を懐かしく思うように……或いは忘れてしまつのかも
ない。

嫌だ。そんなのは絶対に嫌だ。今の俺は崩れ落ち、撤去されよう
としているそれらを抱えられるだけ抱えてその場に居座っている。
抱え込んでいるそれがこの場から消えれば、すぐにでも新たな常識
や日常という名の家が建てられてしまう。

崩れ落ちたものをそっくりそのまま再生することは出来るのだろ
うか。俺は新しい家に住みたくない。今までであったあの家でのんび
り暮らしていたいのだ。

街中を歩いている途中昨日出沒した不審者女のことを思い出し、
女にそのことを聞いてみた。女の答えは予想通りのものだった。

「そうよ。だって貴方のことをもっと知りたかったんですもの。愛
しい人のことを知りたいと思うのは当然のことでしょう？ でも結
局何も分からなかったわ」

当たり前だ。俺の名前はエンデュミオンなどではないのだから。
まあちゃんとした名前を出していたとしても、具体的な情報を得る
ことは出来なかっただろうが。

「兎に角、学校の周りをうろろろするのはやめてくれ。家の周り
かもだ」

「そうして欲しい？」

「ああ」

「分かったわ。そうしてあげる」

その答えを聞いてほんの少しだけ安心した俺はまた無言になった。

女はその後もぺらぺら喋っていた。

後少しで帰れる、後少しで女と別れられる……そう自分に言い聞かせながら、女と街中を散策する。わくわくとした気分にはならない。ただもういらいらした。

それでもこの時はまだ抵抗したり拒絶したりする余裕がほんの少し残っていただけだった。怒り、憎み、拒絶する……その行為が俺を守ってくれていたし、人間のままでいさせてくれていた。

あの女と桜町で別れるまでは、まだ大丈夫だったのだ。

町に着いた頃にはもうすっかり外は真っ暗になっていて、気味が悪い位しいんとしていた。微かに吹く風は少しだけ冷たい。小さな駅を照らす電灯はぶんぶんと不吉な音を立てていた。大きな蛾がその周りをくるくる飛んでいる。

本当はもっと早く帰るつもりだったのに。あまり遅くまで外をうろろろしていると面倒なことになるから帰りたいと俺はあいつにちやんと言ったのに。

「ああ、とても楽しかった。今日は今までで一番楽しいデートだったわ。エンデュミオンもそう思うでしょう？」

「まあな」

お望みの言葉を口にしてやる。女は「当然」と言いたげな笑みを浮かべた。

俺の言葉に隠された本当の気持ちを汲み取る気はさらさらないらしい。

「それじゃあ、俺はもう帰る。あまり親に心配をかけたくない」

「そんなこと気にしなくてもいいじゃない。近い未来赤の他人になる人達じゃない。私と貴方が幸せならそれでいいと思うけれど」
赤の他人になる。その言葉に戦慄を覚えつつ、反論する。

「あなたにとってはそうかもしれないけれど、俺にとってはそうじゃない」

「もう貴方は彼らとは『違う』存在なのよ。そんな人達のことを気にしたって仕方がないと思うわ」

「俺は人間だ」

「違うわ。もう貴方は人間では無い。……私には分かるわ」

「違う！俺は人間だ、あんたとは『違う』んだ！」
必死に否定する。肯定したら負けだ。唸り、睨む俺を見て女は肩をすくめほうと小さな息を吐いた。

そして艶やかで冷たい……氷の微笑を浮かべた。その笑みは人間には決して真似できないようなものであった。

「違うわいいわ。……ふふ、エンデュミオン、大分肌が白くなってきたわね」

「な……何を」

女の言っている意味が最初、理解出来なかった。脳がぐわんぐわんと揺れる。

そういえば。昨日洗面台についていた鏡を見た時違和感をおぼえて……。あの時は気のせいという結論をだし、早々にそのことは忘れたのだが。

慌てて腕を見る。言われて見れば確かに少し白くなっているよう

な……。

「体温も大分冷たくなってきているわ。思った以上に早く変わるものなのね。今度試しに手を少し切ってみたらどうかしら。きつとすぐに傷口が塞がって、きれいさっぱりなくなると思うわ」

「そんな」

「今日も貴方に月片をあげるわ。ちゃんと食べてね？ 私のことを愛しているのなら、食べるわよね絶対。ねえ？」

女の笑顔が、怖い。逃げなければ。心が折れてしまう前にこの場を去らなくてはいけない。くすくすという笑い声をあげる女に背を向け、石のように硬くなっている体に鞭打ち、走り出す。

どれだけ離れても、家に入っても、女の笑い声が消えることは無かった。

帰宅後は夕食も食べず（親には外で食ってきたと言った。随分帰りが遅かったねと言われたが適当にごまかした）風呂場に直行した。手を見る、矢張り少し白くなっている気がする、風呂のお湯がいつもより熱い気がする……心臓が暴れ、痛む。

風呂から出て、試しに体温計で体温を測ってみた。画面に映し出されたのは見たことがない数値だった。はかり間違いだと思い、同じことももう一度やる。矢張り結果は同じだった。

「嘘だ、こんなの嘘だ……」

枕を壁に叩きつける。

「こんなの、嘘だ、あり得ない！」

机の上に置いてあったペンや教科書等を手で払い落としたり、机

に叩きつけたりした。ここ数日間、部屋にあったものの多くがぼろぼろになった。

「認めるもんか、絶対に認めるもんか、俺は……」

あいつらとは違う。俺は化け物なんかじゃない。しかし自分の口から出てきた声には絶望という文字以外含まれていなかった。

気づかなかった事実、気がつこうとしなかった事実を目の前に突きつけられ、精神がぼろぼろと崩れていくのが自分でもよく分かる。もう……もう、駄目だ。言い逃れなど出来るはずがない。

俺はこのまま化け物になってしまふのだ。人が決して口にしてはいけないものを食べてしまったが為に。化け物に愛されてしまった為に。

次の日、また洗面台の鏡を見た。昨日よりその肌は白くなっている。親にその姿を見られたくなかったから、朝食も食べずに家を飛び出した。静香にはメールと一緒に学校へ行けないことを告げていたから、家の前には誰もいない。

彼女には絶対に気づかれなくなかった。距離を置けば俺の変化に気が付かないかもしれない。そんな虫の良いことを考えて。

一緒に登校することが当たり前だったのに。彼女がいないその場所には毛づくろいをしている猫がいた。心にぽっかりと穴が空いた気持ちになり、小さな呻き声をあげる。

体の変化に気が付いた途端、行き交う人達の視線が怖くなった。周りの人達の目に自分がどう映っているのか気になるようになったのだ。人に触れたくも無い。体温の低さがばれてしまうから。

校舎の中に入るとその度合いはますます酷くなっていき、教室に入り席についた頃には意識が遠のく位苦しくなっていた。自分が思

う程周りはこちらの方なんて見てはいない、そう思い込もうとしても無理だった。

友人達の会話も、先生の声も耳に届かない。それでも視線だけは強く感じていた。それが気のせいなのか、現実なのか今の俺には分からなかった。

気を紛らわせようとノートに色々なことを書いた。呪いの言葉、心の叫び、意味を成していない文字の羅列……。書いて、書いて、書いて、そして少ししてからそのページを見返す。吐き気がして、慌ててその部分を引きちぎり、びりびりに破ってゴミ箱に捨てる。

『日常』が地獄へと変わっていく。女と一緒に居る時よりも辛いとさえ思った。皆の視線が、存在が今はとてつもなく怖い。目を背け続けていればこんな苦しい思いをしなくてもすんだのに。

そんな俺を嘲笑うかのように、頭の中で女の笑い声が響く。その声を遮断しようと、机を思いっきり叩いた。一斉に視線が集まったのを感じ、慌てて俯く。

あまり苦しかったから、とうとう三時間目の授業をさぼり、保健室へ逃げ込んだ。カーテンで覆われたベッドに横たわったら少しだけ落ち着いた。昼休み中もずっとそこでそうしていた。静香は今頃一人で弁当を食べているのだろう。それを思うと、胸が苦しくなる。

頑張つて五時間目の授業には顔を出し、恐怖に身を震わせながら残りの時間を過ごした。そして帰りのSHRが終わると同時に口ケットのよう学校を出て行った。人の視線を少しでも感じないようにする為、全速力で走り、女のいるあの場所を目指す。50メートルを走るペースで足を動かしているのに、殆ど疲れない。その事実がまた俺の心を打ちのめす。

誰の視線も届かない暗く狭い道を進む。嫌で仕方なかった道が何

だか心地良いものに思えてきた。

道を抜けた先にある店。その前にあの女が……いなかった。
代わりに居たのは、山伏みたいな格好をした俺より少し年下っぽい男が二人。

その背には黒い翼が生えていて、バックにあるランプの灯りを受け不吉な輝きを放っている。

少年の一人　赤い勾玉のついた首飾りをしている　が口を開いた。

「待っていたよ。さあ、出雲の旦那のところまで行こう」

第五十六話：そして羊飼いは月に抱かれて消える（6）

*
二人の少年は何故か祈るような目でこちらを見ている。

「あなた達は」

出雲という男の関係者であることだけは確かだろうが、一応聞いてみる。

それに答えたのは青い勾玉のついた首飾りをしている方の少年。

「俺の名前はやた郎、こちらはやた吉。俺達は出雲の旦那の使い魔だ。今日は旦那の命令で君を満月館へ連れに来た」

そういえば公園前で意識を失った俺を運んだのは、あの男の使い魔だったんだっけ。それがこの二人というわけか。

あの女はどこにいるのだろう。きよろきよろ右や左を見ているが矢張り彼女の姿は無い。決して会いたくはない人物だが、いるべき場所にいないと何だか気味が悪くて怖い。

二人はその気持ちを察したらしく苦笑した。

「安心してよ、今日はあの姉ちゃん来ないから」

「出雲の旦那が色々言っただけで説得してさ。今頃あつちの世界でふらふらしているんじゃないかな」

「あなた達の主人は俺にいったい何の用があるんだ」

女と顔を合わせなくてすむことにほっとしながら聞いてみる。二人は「さあ」と首を傾げた。どうやら詳しいことは何にも聞いていないらしい。

「よく分からないけれど、何か話をしたいらしいよ」

「嫌だとは思うけれど、来て欲しい。君をちゃんと連れて行かなければ俺達は旦那に殺されてしまう」

「冗談ではないようだった。目が本気だし、あの男はそういうことを平気ですてしまいそうな奴だったし。祈るような目で俺を見ていた理由を今理解した。

来てくれないと殺される、とまで言われたら断るわけにもいかない。これはもう頷くよりほかなかった。

俺の返事に満足したらしい二人は安堵の表情を浮かべ、次の瞬間鳥に変身した（いや、恐らくこちらが本来の姿なのだろう）。少年が鳥の姿になってももう殆ど驚かなくなつた自分が何だか怖い。

目の前にいる鳥には足が三本あり、図体もやや大きめ。彼らは空高く飛び上がり、俺を導くかのようにゆっくり進んでいく。

桜山神社までたどり着き、借りていた通しの鬼灯を握りしめる。

石段の両側を彩る季節外れの桜、延々と並ぶ鳥居、青い灯を抱いて光る灯籠とんぼ。

非日常という言葉を詰め込んだその美しくも気味の悪い　あの男や女みたいな　道を抜けてあの館に入る。

広い部屋で待っていたのは生物にはとても見えない姿の男、出雲。部屋に入ってすぐ立ち止まっていた俺を、人間の姿に戻つたやた吉が出雲の向かい側にある席に座るよう促した。

「こんにちは。ふふ、思った以上に異形化が進んでいるようだね。恐ろしいね月片というものは」

楽しそうに笑いながら男は紅茶の入ったティーカップを手に持つ。俺は何も言わずただ男を睨んでいる。

「今日は食って掛かってこないんだね。……随分大人しくなったじゃないか」

「あの女のせいで、疲れているんだ。怒鳴る気力もない」

理由はそれだけではない。けれどこの男に何もかも正直に話すのは嫌だったからそれ以上は何も言わない。

男はそんなこと百も承知というような顔で「そう」と言った。

「まあ仕様がな。彼女は他人との距離感とか、適切な会話の量、口を開く時機等が良く分かっていないんだ。彼女達月の民というのはね、余計なお喋りとか、騒々しいものとかが大嫌いなんだ。必要以上に他人と交流することも嫌う。……そんなところで何百年何千年かもしれないけど、生きていたんだ。他人との関わり方なんて分かるはずがない」

「そりゃあ、そうだけれど」

人との距離感をとるのが異常なまでに下手な理由はまあ、分かる。しかしだからといって我慢は出来ないし、許したくはない。

「憎たらしい位が丁度良いと思うよ、私は」

言って皿に盛ってあったチョコクッキーを頬張る。男が少し揺れ動く度、藤の花を映した小川のような髪がさらさら揺れた。

「だってそうだろう？　もし星條が憎むに憎めないような女性だったら……余計辛い思いをしたと思うよ、君は。外見も中身も良い人に想われて嫌な気持ちになる人はなかなかいない」

「だから、あいつが嫌な女で正解だったと？」

「正解かどうかは分からないけれど、まあまだ気は楽じゃないかな。」

すつきりしつかりがつつり憎めるのだから」

まあそんなのと未来永劫付き合い続けなければいけないっていうのはなかなかの地獄だとは思っけれど、と嫌な言葉を付け加えてくる。この男もあの女同様、いやある意味あの女以上に性格が悪いと思う。

彼はまたクッキーを一枚手に取り、ゆっくりと食べる。クッキーをくわえる唇は異様に艶かしく、何かとてもいやらしいものを見ている気分になった。

「君も食べれば？ 毒なんて入っていないから」

「いらない」

食べたいと思わなかった。食べ物を見ても何の感情もわいてこない。石ころと同じだった。あってもなくてもいいもの。結局生きる為に必要でなくなれば、今まで美味しく食べていた物だって石ころと同じような存在に変わってしまう。

生きる為、楽しく豊かな生活を送るために必要か、必要でないか。生物の考えの基準はそんなものなのだ。そんなことを、思う。

「食べたいという欲求まで消えてしまったのか、可哀想に」

「そんなこと思っていないくせに」

「ばれた？」

顔に貼りついている嫌な笑みを見れば誰だって分かる。

「星條を助けて正解だった。私は矢張り好きなんだ、人が堕ちていくさまを見るのが……。今の君の顔を見ているととても気分が良い。自分が生きてきた世界を壊され、創りなおされることを嫌がり、拒絶し……。逃れようのない現実から逃れようと足掻き……。やがて疲れ、

諦めた人間の顔は私にとっては何んな食べ物よりも美味しいものなんだよ」

数日前までの俺だったら「ふざけるな！」と大声をあげて怒鳴り散らしただろう。しかし、今は。

「憎んだって、恨んだって……もうどうにもならないんだ。あいつがあんな言葉を俺に投げかけなければ、昨日鏡を見なければ……まだ目を背けていられたのに。鏡に映っている自分を見た瞬間、全部終わってしまったんだ」

「そう、どうにもならない。何もかも手遅れだ。少なくとも君が人ならざる者になるという運命は、変えようがない。黄泉の国の食べ物をお口にしまった女神は、その国の住人になってしまった。……それと同じさ。時計の針は手を使えば簡単に動かせるが、時間は進めることも戻すことも出来ない。悔やんだって、憎んだって何も取り戻すことは出来ないんだ」

分かっている。そんなこともう、とつくに。それでも足掻かないではいられなかった。今だって何もかも認めてすつきりしたわけではない。きつとこれからだってそうに違いない、そう思った。

「……君は彼女から貰った月片を食べるべきではなかった。見ず知らずの人間から貰ったものを何の躊躇ちゆうちゆうもなく口にするなんて……無防備にも程がある」

星條を唆した張本人のくせに偉そうなことを、と少し腹立たしく思う。けれど反論は出来なかった。男の言う通りだ。世の中には道を尋ねるふりをして相手を車に引っ張り込み連れて行ってしまいう奴だっている。お礼に、と差し出したものが何の害もないものであるとは限らないのだ。

「君、初めて星條と会った時何にも思わなかったの？ この人は自

分達とは何か違つとか、危険な感じがするとか」

思った。頭の中で鳴り響いた警鐘。彼女は人間では無いのではないか、逃げた方がいいのではないか……そう、思った。

男は俺の表情から思いを汲み取つたらしい。呆れたように小さなため息をついてから話を続ける。

「直感を信じればよかつたのに。動物の直感は、どんなものにも勝る最高の情報。それを無視したが為に君は人間としての『死』を迎えることになってしまつたんだ。結局悪いのは」

「もういい！」

分かつているんだ、そんなことだつて。認めたくなかつただけで……結局のところ、悪かつたのは俺だつたのだ。あの女はどう見ても人間ではなかつた。人間だつたとしても、かなり危険な部類のものでつただろう。見た瞬間に思ったのだ、ちゃんと。それなのに俺は。

分かつている。だからこそ余計腹立たしいのだ。人間には見えなかつた女から貰つたものを口にし、拳化け物になつた自分を憎らしく思つていた。あの女の言うことを聞いているのは、静香や家族を守る為だ。そんな偉そうなことを言っているが実際のところは……自分の為だつたのだ。生きたかつた、死にたくなかつた……生き続けるには女の言うことを聞くしかなかつた。

生にしがみつく為なら何でもする醜くみじめな自分。そんな自分を認めたくなかつた。俺は女を憎んだ。そうして彼女を憎むことで自分を守ろうとしたのだ。全てを彼女のせいにして、少しでも楽になりたい……そう思つて。

「君はもう少しで彼女と『同じ』存在になる。その後はどうするの？ 彼女と一緒に行動を共にするのかい」

「それしか無い……」

もうあの世界では生きていけないだろう。老いない上にケガもすぐ治る、おまけに異常に体温が低くなった者に居場所は無い。かといってこちらの世界のこともよく分からない。簡単に死なない体になった（これからなるのだろう）とはいえ、矢張り一人で生きるのは不安だ。見知らぬ場所で一人生きていくのは怖い、誰かにすがるなければいけない……あの女なら、俺の面倒を喜んでみてくれるはずだ。

情けなかった。惨めだった。そんなことを考える自分が。安心して暮らせるのなら、どれだけ憎い女とも行動を共に出来ると思っている自分が。

男の赤い瞳は喜びに満ちている。己の醜さに気がついた俺の顔を見て楽しんでるのだろう。

「まあ君は生き物だからね。生きたいと願い、生きる為の行動をとることは至極当然のこと。生き物としては間違っていないと思うよ、今君がとっている行動はさ」

生き物としては正しくても、人間としては間違っている気がする。

「君に」

顔をあげる。男は俺の顔を真っ直ぐ見つめていた。冷たい瞳に、冷たい笑み。

柳の葉のような指が俺を指差している。

「最後の選択肢を与えよう。私は君が足掻き、堕ちていくさまを影ながら見守り……随分楽しんだ。楽しい思いをさせてくれたお礼を君にあげなくちゃね」

「お礼？ 選択肢……？」

「そう。まあとてもささやかなものだけね。ああ、なんて優しいんだ私って」

優しい自分に酔っている姿はあの女によく似ていた。違うところといえば本気でそう思っている風ではないという部分。

続きを言わずしばしの間自分の空虚な優しさに酔っていた男は、ふふと小さな笑い声をあげてから、俺をまた見た。秋によく見かける彼岸花に似た色の瞳はとても不吉なものに見える。

「君が我々と『同じ』存在になることは避けられない。彼女の伴侶として生き続けるという未来も、もう君がそう決めた以上変えることは出来ない。一応彼女を殺して君を解放してやるという手がなくもないが……面倒臭いし、そこまでしてやる義理は私には無い」

「あの女は死なないんじゃないか……」

「限りなく死から遠ざかっている存在ではあるけれど、やろうと思えばやれるんじゃないかな」

と言つて具体的な方法を語ってくれたが……とても真似出来ない、あまりに残酷でグロテスクすぎて逆に想像出来ないようなものだった。俺にはそんなことは出来ないし、幾ら殺してやりたい程憎んでいてもそこまでして……と思う。

「君に与える選択肢は二つ。一つは何もしないであの世界から消えるというもの。……君の姿は消えても、君という人間がいたという記憶は恋人ちゃんや家族、友人達の頭に残り続ける。エンデュミオンでも羊飼いで無いい、牧田俊樹という存在を残し続けるんだ」

「二つ目……の選択肢は」

問われ、男は自分の髪をさつとかきあげる。その手の動き、髪

流れ……どれもぞつとする程美しい。

「牧田俊樹という人間が居たという記憶を、綺麗さっぱり皆の頭から消し去る」

途端、頭を氷の塊でがっんと叩かれたような衝撃が襲った。

忘れる？皆が俺のことを……？

「これならば君が消えても誰も悲しまないし、苦しめない。まあ記憶を消すというか、君という存在を認識することをやめさせるというか……単純に記憶を抹消するわけじゃないのだけれどね。お望みならば、君の記憶も消してあげよう。そうすれば君は苦しむことなく『エンデュミオン』として生きられるだろう」

「そんなことが」

そんなことが、出来るのか。

出来るさ、男は俺の心の問いを汲み取り答える。

「私だけの力だと難しいが……星條の力があれば可能だ。彼女は元々そうして人の記憶を操作する力を持っているらしいからね。君と関係がある人間なんてそんな多い訳じゃないだろうから……まあ主な人間の記憶さえ封じてしまえば問題ないだろう。後の人はそうして記憶を無くした人に感化されて……連鎖を繰り返し、最終的には君の存在を認識するものは誰もいなくなる」

思いも寄らぬ提案に心が揺れる。忘れる。静香が、両親が、友人が、俺のことを。

「ゆっくり考える時間は与えないよ。今ここで決めるんだ。人間として生きた証を残し続けるか、それとも消し去るか」

どちらにすれば良い。

様々な思い出が脳内に映し出され、目まぐるしく変わっていく。今まで忘れていたような思い出も鮮明に甦った（よみがえった）。

学校の帰り道、いつも俺の隣にいた静香、春になると薄桃色になる山、授業風景、喧嘩、自己紹介、クラスリレー、遠足、肝試し、お正月に貰ったお年玉、七五三……。

皆、俺のことを忘れる。俺は皆のことを忘れる。

忘れて欲しくない。そんな残酷な。俺がいなくても普通に、何も変わらず回り続ける世界を思った。俺のことなんて忘れて、俺なんか最初からいなかったように笑う静香。他の誰かを愛し、誰かに愛される静香の姿を思い浮かべたらどうしようもなく胸が苦しくなった。子供なんか最初からいなかったかのように暮らす両親のことを考えたら頭が痛くなった。

忘れられ、居なかったことにされたら。牧田俊樹は消えてしまう。俺はエンデュミオンになってしまう。

けれど。このまま皆の中に記憶を残して……自分という存在がいたことを残し続けたとして。

誰が幸せになるというのだろう。俺の様子がおかしいことに気づいていたのに俺を止めることが出来なかったと、きつと静香や両親達は自分のことを責めるだろう。俺という存在は触れられたくない傷として残るに違いない。

そして俺もまた、永遠に苦しみ続けることになるだろう。何百年、何千年生きてもきつと俺はあの女のことを愛さない。愛そうとも思わないだろう。

『牧田俊樹』にしがみつき続ける為に、静香達の人生、幸福を奪っていいのだろうか。いいや、良く無い。

笑っていて欲しい。特に、静香には。大切な魂の片割れには。俺のことなんかで後悔して欲しくない。泣いて欲しくない。笑っ

て欲しい、笑顔でいて欲しい。

それに俺と彼女が『無関係』になれば、あの女だって彼女に危害を加えるような真似はしないだろう。きっとこれで彼女は守られる人間として、今までと変わらない『日常』を送り続けることが出来る。

それならば。

涙が溢れてきた。ぼろぼろと落ちてきた雫が手の甲を濡らす。目頭が熱い、目が痛む。苦しい、苦しい、とても苦しい。それでも俺は言わなければいけない。

「お願いだ……俺の、俺のことを、皆……忘れてしまおう、に、してくれ……誰も悲しまないように、して欲しい……それが……皆に、静香にしてやれる、最後の……」

涙は溢れるように出るのに、言葉は口から思ったように出てこない。何度もつつかり、呻きながら、時間をかけてようやく全てを吐き出した。

出雲は笑っていなかった。かといって俺を哀れんでいる様子もない。ただ、俺を見ているだけだった。感情、思い、その顔には何も無い。

「分かったよ。星條にもちゃんと私から話そう。彼女は喜んでこの提案に同意するだろう。私からのお話はこれで終わり。もう、帰っていいよ」

言われた通り、俺はそのそ立ち上がり部屋を出た。

その夜、部屋にあったアルバムを見た。この思い出が全て消えていくのかと思うと胸が苦しくなり、また涙が溢れてきた。

両親に、何があったのかと問い詰められた。けれど俺は答えなかった。

答えたところで、何が変わるわけでもない。それにもう少しすれば二人は俺のことを忘れてしまう。意味なんて、無い。

親の問いかけに無言で答え続けてから、洗面台へ行った。そこにあったカミソリで指を少し切った。焼けるような、鋭い痛みが走る。そこから赤い血が出た。……が、あつという間に痛みは消え、傷口も綺麗さっぱり無くなった。どこから血が出ていたのか分からない位、綺麗に。一瞬のことだった。

ああ、自分は矢張り化け物なのだと思った。

その事実を驚くほどすつきり飲み込んで……そしたらとても楽になった。

もう人間として無理に生きる必要は無い。皆の視線を気にすることも無い。化け物は化け物として、自分が思った通りに動けばいいのだ。

*

学校へ行くのも、何の苦でもなくなっていた。視線も声も周りの風景も何も感じず、聞こえず、見えない。揺れなくなった心。悲しい、苦しい、憎らしい……そういうありとあらゆる感情も、どこか遠くへと行ってしまった。

考えるから、思うから苦しいのだ。何も持たなければ苦しくも気持悪くもならない。どうして今までそのことに気がつかなかったのだろうとさえ思った。

教室。席に座っている。誰の声もこの耳には届かない。誰かが何か言っている、この声は誰の声だっただろう？それさえ分からない。俺はこの世界から切り離されている。皆がいる世界とは隔たれた場所に、いる。そりゃそうだ、俺は人間ではなく化け物なのだから。

姫野先生に呼び出され、最近様子がおかしいが何かあったのかと問われた。

彼女は心の底から生徒である俺のことを心配しているのだろう。その気持ちはよく分かる。それでも俺は話さなかった。話しても意味が無いから。

「分かった……無理には聞かない。だが話したくなったらいつでも話せ。篠宮も友人達も、皆お前のことを心配している。あたしもだ」
自分の無力さを噛み締めるような表情を浮かべながら、先生は去っていった。

ごめんなさい、心の中でそう呟いた。

何の中身もない、空虚でつまらない毎日を送った。後少しでこの世界とも、この生活ともお別れになるのに。今までのように笑い、はしゃぎ、ふざけ、そして静香と共に穏やかな時間を過ごす気にはならなかった。それにきつとそんなことをしたら 未練が、きつと。やっぱりここにいたい、忘れて欲しくないときつと思ってしまう。だから何もしない。

授業をさぼったり、学校を早退したりした。授業を受ける必要も、学校に何時間もいる必要も無いのだから。

女はすっかり大人しくなった俺を見て満足しているようだった。共に過ごせる時間が増えたことで今まで以上にご機嫌だった。

俺はあの女に愛の言葉を囁いた。あの女が望むことはなんでもしてやった。

化け物としての人生を支えるのは、この女なのだ。俺はこの女に見捨てられたら何の支えも無く生きなくてはならなくなる。この女に捨てられたところで、こちらの世界に戻るわけでもないし。

だから俺は、あの女が望む俺になってやった。

けれど「エンデュミオン」という名を心の底から受け入れるつもりはない。

それを受け入れれば、完全に俺は『牧田俊樹』を失う。それは嫌だった。往生際が悪い奴だと自分でも思う。それでも。

そしてとうとう『別れの日』がやってきた。

俺は女に明日あの世界に別れを告げると言った。女はやっとこの日が来たと手を叩いて喜んだ。

最後の学校。最後の教室。最後の授業。

これがもう最後なんだ、二度とここを訪れることは無いんだと思うと抑えていた感情が少しだけ表に出る。たまらず授業をさぼり、保健室へと逃げた。

明日の今頃、自分はもうどうしているのだろうかと思った。皆のことを、静香のことを忘れ、あの女と笑い合いながら仮初の幸福な時間を過ごしているのだろうか。そして静香達もまた俺のことなど忘れ、いつもと変わらない毎日を送っているのだろうか。明日はそういえば土曜日だ。静香は友人と遊ぶのだろうか。俺のことを忘れて。

駄目だ、思っではいけない。思えば後悔する。数日前と同じように醜く足掻きたくなる。駄目だ、考えてはいけない。

時間は過ぎていく。あつという間に。

自分が化け物であることを再認識しなければいけない。そうしなければ封じ込めた思いが溢れ出てしまう。

そつと保健室を抜け出し、体育館近くにある水道を目指した。コンクリートで出来た細長い流し台に五つ程くつついている蛇口。

水をそこから出して一口飲んだ。喉を水が通る感覚が全く無かつ

た。潤いも感じなかった。水など今の自分にとっては必要の無いもの。ありがたみも何にも感じない。

ポケットに入れていたカッターを取り出す。鋭い刃。何の脅威にもならない、もの。それをただ意味もなく出し入れする。

「牧田君！」

誰かの叫び声が聞こえた気がして、ゆっくりと振り返る。ぼやけた視界。誰かがいる。……ああ、臼井か。

臼井は俺が手に持っているものを見て悲鳴をあげたようだった。おかしかった。こんなもの、少しも怖いものじゃないのに。自然と笑みがこぼれた。きつとあの男が浮かべるそれに近いものだっただろう。

「牧田君、それ……何をやる気なの？」

「これ……？ ああ、心配するなよ。そういうの、無理だから。やったところで何の意味も無い。これで首とか切ってもさ……手首を裂いても、意味は無いんだ」

何の意味も無い。自嘲的な笑み。どうしようもない運命に対する諦めの感情。

「俺は、化け物なんだ」

臼井の目が大きく見開いた。

「化け物なんだよ」

妖怪とかがやたら好きらしい女も、俺の発言には流石に驚きを隠せないようだった。ただ何も言わず、俺を見つめていた。

取り出したカッターで自分の頬を裂く。深くは切っていない。それでも鋭い痛みが頬を襲った。臼井が悲鳴をあげる。誰だって驚く

だろう。けれど切り裂いた本人は何にも感じていない。恐怖も、何も。

「大丈夫だよ。こんなの」

水で血を洗い流す。すでに傷は消えていた。水で濡らしても少しも痛みを感じない。ああやっぱり俺は化け物だ。

呆然と立ち尽くしている臼井に近寄り、顔を近づける。彼女は恐る恐る手を伸ばし、頬に触れた。彼女の手が焼けるように熱く感じられた。

「臼井。お前最近静香とよく話しているよな。……俺のこと、話しているんだろっ」

「ごくりと彼女が唾を飲み込む音が聞こえる。肯定もしなかったが、否定もしない。やっぱり、そうなのか。」

「あいつが心配してくれていることを、とても苦しんでいることを俺は知っている。分かっている。本当は俺のこと、問い詰めてやりたいと思っているだろう。でもあいつはそうしない。俺達昔からそうだった。辛いことがあるんだろうな、悩みがあるんだろうなと思いつつながら、無理に聞くことはしないんだ。ただ、傍に居て、寄り添っているだけで。相手が自分に話してくれるのを、ずっと待っている。それが正しいことなのか、間違っていることなのか……人によつてはそんなのおかしいと言いかもしれないけれど。でも、俺達にとつてはそれこそが正解だった」

彼女のことを思い出す。少しだけ心が温かくなった。けれどすぐそれを押さえ込んだ。駄目だ、その気持ちは忘れなければいけない。馬鹿みたいに俺は臼井に自分の思いを話した。話せば話す程体が熱くなつていく。無くした体温が戻ってくる。

いつも一緒だった二人。そこにいるのが、隣で笑っているのが当

たり前だったはずの存在。これからも死ぬまでずっと一緒にいるのだと、思っていた。

こんなことなるなんて思いもしなかった。離れ離れになって、お互いのことを忘れてしまおう日が来るなんてこと。

嫌だ、嫌だ、嫌だ。臼井の姿が消える、目の前であの女が笑っている。

エンデュミオン、と囁いている。

「俺は化け物になった。もうあいつとは違う……でも、それでも俺は牧田俊樹だ。俺はこんな風になりたくなんてなかった、俺はずっと俺のままだった……けれど今はもう……でも、違う、俺は違う。何度も言っているだろう……俺は違う、違う……俺はエンデュミオンなんかじゃない！」

叫んだ。

抑えていたものが溢れ出た。吐き出し終わるとまた体温が消えていき、心も冷めていく。

馬鹿馬鹿しい。憎んだって何の意味も無いのに。

「はは、あなたに話したからってどうなるわけでもないのに……話したって意味は無いんだ。どれだけ話しても、意味が……」

意味が無いことをしたってしょうがない。もうやめよう。

そう思った途端、臼井の姿がまたぼやけた。俺はモザイクがかかったようにぼやけて曖昧になった彼女に背を向け、保健室に戻る。

この世界での最後の時間を、保健室で過ごした。静香の顔を最後に見たいと思っただが、やめておいた。

目を閉じる。思い出の中の彼女が笑っている。十分だ、それでもう、十分だ。

その笑顔ももう少しで俺の頭の中から消える。悲しい、苦しい。でも、良い。

彼女には幸せになってもらいたい。

最後に、友人達当てにメールを送った。

記憶が消えた後はそのメールの文章すら認識されなくなるようだが……それでも良かった。自己満足でも何でも良い。自分がここに居た証を残しておきたかった。俺がエンデュミオンではなく、牧田俊樹であるという事実を、この世界に。

静香にだけは皆とは違う文章を送った。本当はもつと書きたかったのに、言葉が出てこなかった。携帯を前にすると手が止まる。何を書けばいいのだろう、言いたいことが多すぎて逆に書けない。

結局短くて素っ気ない文章しか作れなかった。

最後まで情けない男だ、と苦笑いする。

さようなら。

保健室の先生に「今日は家に帰る」と告げ、部屋を出る。二年もいなかった学校だけれど、一生来られないと思うと矢張り寂しい。全て忘れればそんな思いも消えるのだろうか……。

桜町に、この世界に静かに別れを告げて通しの鬼灯片手にあの男のいる館を目指した。

*

そして、今に至る。あの女と出会ってからまだ約一週間しか経っていないのか、と思う。人間として生きてきた日々を懐かしく感じる。あれは数十年前のことではなかっただろうか、とさえ思った。

あの女は今、外にいる。彼女と対峙しているのはあの白井と、同

じクラスだった井上一夜の妹であるらしい。臼井は知っていたのだ、この世界のことを。

俺がこちらの世界と関わっているかもしれないということにも、薄々気がついていたのだろう。

男はカーテンを閉めた窓を見つめていた。きっとその向こう側には臼井達がいいて、あの女と話をしているのだろう。

「気づいたからって何が出来るわけでもないのにね。それが分かっているくせに、こうして私の所へやってくる。そしてこちらの世界との縁がますます深まっていく。彼女達自身が、こちらとあちらを繋ぐ『道』になっていくんだ」

「どうせあんたがそうなるように仕組んだんだろう」

「まさか。彼女達の方から手を差し伸べてきたんだ。私は差し伸べられた手を握り返したただけだよ」

「どうだか」

「つれないねえ。もう少し信じてくれてもいいじゃないか」

あんたのことなんて信じられるか。心の中で言っただけだ。

俺がどう思っているのかなどすっかりお見通しである男は何も言わず、ただふつと楽しそうな笑い声をあげる。

「君みたいに望んでいないのに巻き込まれる人間もいれば、彼女達のように進んで巻き込まれる人もいる。面白いよね、世界ってというのは」

「面白い……」

そんな感情、今の俺には無い。どこか遠くへ行ってしまった。きつとこれからも……心の底から楽しむことなど無いのだろう。

「……時間を戻すことは出来ない。時を遡って過去にやったこと、過去に起きたことを変えたり抹消したりすることは出来ない」

男が話し始めた。独り言のような、そうでないような　微妙な大きさの声で。

「星條との出会いをやり直すことは出来ない。あの時逃げていればとどれだけ思っても、それはもう叶わない」

男が振り返る。初めて見る、優しいな笑みを浮かべて。

「けれどね、哀れな少年。君が牧田俊樹として生きてきた時間もまた……消すことは出来ないんだ。例えば皆が君のことを忘れてしまっても、君が牧田俊樹として生きていた日々を忘れてしまっても。君があの世界で確かに生きていたという事実は消えない。誰にもその事実を消したり変えたりすることは出来ないんだ」

かつと体が熱くなった。忘れていた、いや、忘れようとしていた何かが蘇る。

「それが、それだけが救いだよ。……忘れることと消えることは同義じゃない。『牧田俊樹』を、牧田俊樹として生きた人生を奪うこととは誰にも出来ない。星條にも、私にもね」

気づけば頬を暖かいものが伝っていた。

「そう思いながら最後の時を迎えるといい。まあ気休めでしかないけれど」

そつだ。この男の言う通りだ。忘れることと消えることは同じじゃない。

似ているけれど、限りなく似ているけれど、違うのだ。

「さあ、もうそろそろ始まるよ。心の準備はいいかい？」

目を瞑る。溢れる思い出。

運動会、修学旅行、遠足、文化祭、合唱コンクール。

山に登って見た桜の花、蝉の声。二人で見た花火、金色の向日葵。夕焼けを映したような真っ赤な紅葉、熱いねと言いながら頬張った焼き芋。

クリスマス、雪、静香から貰ったマフラー。家族で食べた年越し蕎麦、お年玉、皆から届いた年賀状。

家族、友達……そして、静香。

小さい頃からずっと一緒に遊んでいた。時に喧嘩して彼女を泣かせたこともあった。俺は謝るのが苦手で、何日も口をきかなくて……でも結局参ってしまったって、不器用ながら謝った。

いつの間にか一緒にいることが当たり前になっていた。彼女が何を考えているのか何となく分かかって、彼女が心地良いと思う距離感とかも分かるようになって……それは彼女も同じで。

告白とおよそ呼ぶことは出来ないようなものをして、それで。

いつも、一緒だった。ああ本当に、いつも、いつも。

二人で手を繋いで空を見た。その空に自分達の未来を見た。きっと彼女も同じものを見ていたのだと思う。

暖かいものが、体中を流れる。失ったはずの体温が戻った気がする。

彼女や皆と過ごした日々……その日々が消えることは無いんだ。

「静香……ごめん。さようなら」

笑っていて欲しい。幸せになつて欲しい。隣に俺はいなくていい。俺のせいで随分辛い思いをさせてしまった。……でももう大丈夫だから。

「渡さない」

彼女への想い、彼女からの想い。

沢山の思い出。忘れたつて離すものか。誰にも渡さない。

星條。一緒に生きたいとあんたが言うなら、一緒に生きてやる。

恋人として、エンデュミオンとして、あんたが望む俺になつてやる。俺の体も心もくれてやる。

けれど『牧田俊樹』は絶対に渡さない。静香や友人達を想う気持ち、彼等と過ごした日々の思い出は、絶対に。

「絶対に渡さない」

口に出して、そう言った。目の前に居る男は楽しそうに笑っている。

「きっと彼女は気がつかないだろうよ。……欲しいものを手に入れる為に必要なのは、力だ。力があれば色々なものを手に入れられるけれど、手に入られないものだってあるんだ。可哀想に。そのことを知らないまま、彼女は生きていくんだ」

俺の味方でも、あの女の味方でもない男。

この男はいつだって自分の味方なのだ。彼は俺を救う為にあの言葉を吐いたわけじゃない。その言葉を聞いて大切なことに気がつい

た俺と生きる彼女を可哀想にと笑いたいから、言ったのだ。

何でもいい、それでも良い。

「静香」

最後に、一言。

頭がぼうつとして、立っていらなくなる。

どさつという音を聞いた気がした。多分、俺が倒れた音。

*

目を、覚ました。なんだか頭がぼうつとしている。俺は……。

美しい女が目の前に立っていた。女は俺の方へ手を差し伸べる。

「行きましょう。我が愛しのエンデュミオン」

ああ、そうだ。俺の名前は確かそんな名前だった。何で自分の名前を忘れていたのだろう。

差し伸べられた手を、とる。体が熱くなる。

俺はエンデュミオン。そしてこの女は俺の……確か……。

何かが引つかかった。何だろう、この違和感は。しかしその奇妙な違和感は瞬時に消え失せた。多分、気のせいだろう。

俺は彼女と共に館を出た。長い髪の男が笑みを浮かべながらこちらに手を振っている。彼の名前は何と言っただろう。覚えていない。まだ頭がぼうつとしている。

「行ってらっしゃい。さようなら」

そう言った後、更に口を動かした。声は発していない。だから彼が何と言おうとしたのか、分からない。

どうでもいい、そんなことは。

空には綺麗な月が浮かんでいる。

「行こうか」

「ええ、行きましょう」

月に抱かれながら、足を踏み出した。
前へ、前へ。

第五十七話：桔梗の海（1）

これは村を訪れた薬売りが語った話であるという。

この世界には『桔梗の海』と呼ばれる場所が何箇所かあるという。大抵は山中の開けた場所にあるらしい。

桔梗のような色をした海というわけではなく、地面が見えない位咲いている桔梗が風にゆらゆら揺れる様子が波打つ海のように見えることから、桔梗の海と呼ばれているという。

桔梗の海は、人では無い者 妖怪達 の遊び場であるらしい。具体的にそんなところで何をするのかは知らないという。ただ妖怪達の遊び場であるから、例え見つけたとしても無闇に近づかない方がいい……それだけははっきりと言えると最後に薬売りは付け加えた。

本物の海を知らない村人達は薬売りの話を聞いて、桔梗の海とはどんなものなのか、そもそも海というのはどんなものなのだろうと色々想像したとか。

『桔梗の海』

「その、き、桔梗の海……行きませんか」

小さな喫茶店。向かい合う男女。顔を赤くさせながら男を誘う女。銀世界を思わせる髪は太陽を受けてきらきら輝き、青い瞳はその中に熱情を秘めている。雪の中を飛び回るウサギに似た白い肌。

彼女は、雪女である。ゆえに肌寒い今日も半袖のワンピースを身につけている。朝比奈満月に「寒くありませんか？」と心配そうな顔で聞かれたが「寒さには強いのですので大丈夫です」とやや素っ気

なく答えるだけだった。

外国人だが両親が大の日本好きで、娘に日本人っぽい名前をつけたという設定になっている「小雪」は目の前にいる男をじっと見つめている。見つめている、というよりは……睨んでいる。

美しい女性にそんな視線を向けられている相手は、美しい、綺麗ななどという言葉が一切似合わない男。無造作に後ろで束ねられた、水分の少なそうな髪。ややたれた目、微妙に剃りそこなっている髭、ウエイター姿が似合わないがっちりとした筋肉質な体。決して醜くはないが『美』という言葉からは大きくかけ離れている容姿。まさに、美女と野獣。

「何でそんな顔真つ赤にしながら言うつすか？　そして何故睨む」
小雪が自分に対してどういう感情を抱いているのか全く気がついていない愚か者である弥助は、眉をひそめながら首を傾げる。

「顔が赤い？　馬鹿言わないで下さい、私がお前の顔見て赤面するはずなどありません。後、睨んでなどいません。ま、まあ別に行きたくないっていつのならないんですけどね！　友達のいないあんたを哀れんで、誘ってやっただけですから」

あつしにだって友達はあるよ、しかも沢山……と困ったように頭をかいた。

そんなことは小雪にだって分かっている。これは弥助を誘う為の只の口実。

「それで、行かないんですか？　行かないんですね。いいですよ、私はそれでも。全然、これっぽっちも、問題はありません」

勿論これは嘘である。普段はそうでもないのに、弥助を相手にすると途端に素直ではない性格になる。

つんとすました顔で言うてはいるが、実際のところ心臓ばくばく、

体温も急激にあがっている。勿論にぶちんである弥助が彼女の本心を察しているはずもなく。それなら何で誘ったんだと疑問に思うだけ。

「別に行かないとは言っていないだろう」

「それじゃあ」

「行くつすよ。あそこで釣れる魚は美味いからな。丁度そろそろ足を運んでみようかと思っていたところつす。だからその誘い、有難く受けるよ」

良かった、そう小雪は思った。そして弥助をデートにでも誘ってみたらどうだいと提案してくれたこの店の主、秋太郎の方をさりげなく見た。秋太郎はコップを拭きながら彼女に微笑を向ける。弥助が桔梗の海へ行きたがっているという情報も、秋太郎から得たものなのだ。

「まあ店の仕事が終わってからになるけれど……あつちで集合ってことでいいつすか？」

小雪は全然問題ありませんと、激しく首を上下させた。

「よし、それじゃああつしはそろそろ仕事に戻るか。お客さんももうじき来るだろうしな」

小雪とのんびり喋ってはいたが、一応仕事中だ。今はそうでもないがもう少しすればお客さんがちよこちよこ入ってきて、そこそこ忙しくなるだろう。今の内に出来ることはやっておきたいのだ。

席を立った弥助を小雪はじつと見つめ、そして微笑む。

彼と一緒に時間を過ごすことが出来る。それが嬉しくて仕方が無かったのだ。

だが。

「あ、朝比奈さんあつしもお手伝いするっすよ。すいませんね一人で仕事させちゃって」

店の奥にある小さな調理場で作業をしていた満月にかけている異様に弾んだ声を聞くと、一気に気分が沈んだ。微かに聞こえるその声には、満月に対する好意がこれでもかという位込められていた。その声が自分に向けられることは決してない……そう思うと胸が締めつけられる。

(……ああ、どうして私はあんな男なんかを)

満月を前に鼻の下を伸ばしているであろう弥助の姿を思い描きながら頭を抱える。同時に、自分の好意に一切気がつかない鈍感な男のことを呪った。

(あの馬鹿がもう少し聡い奴だったら、これだけ苦しい思いをしなくてもすんだのに)

そう思う。しかし小雪はちゃんと分かっていた。前にも後ろにも進まない状態になっている原因が自分にもあるということが。

もやもやした気持ちを抱えながら、小雪は喫茶店『桜』SAKURAを後にした。

*

桔梗の海は山や森の中にある。その名で呼ばれている場所は一箇所ではなく、『向こう側の世界』に数十箇所存在している。或いはもつとあるのかもしれない。

その内の一つがある森を抱く、とある京。そこで日が暮れるまで時間を潰した後、森を目指す。

月明かりと、ホタルに似た虫の光だけを頼りに歩く。夜空を切り取って作られたような木々、時々すれ違ふ青色の魂魄やろくろ首、顔の大きい男、目玉が一つしかない女　といった妖達。幻想的

というよりおどろおどろしい雰囲気漂うこの場所を一人、顔色も変えず歩く小雪。人間には決して出来ない芸当だ。

しばらく進んだ先には木で出来た高い門がそびえたっており、その隣には同じく木で作られた小さな建物がある。門を通る前に小雪はその建物の中へと入っていく。

建物の中には幾人かの妖がおり何やら楽しそうに話している。最奥にはござが敷かれており、そこには植物のつるらしきものがついた木の棒や手のひらサイズの小さな壺等が沢山置かれていた。

「これが花釣りはな（づり）の道具ですか。初めて見ました」

弥助を誘ったはいいものの。……小雪は桔梗の海へ行ったことが今まで無かった。そこで花釣りという遊びをするという話は聞いたことがあったが、具体的に何で何をどうするのかというのは聞いたことが無かった。そもそも彼女は弥助と会うまで、自分が住んでいる京かよ（風花京かほなというところ）から殆ど出たことが無かったから、故郷に無いものに関してとはとことん疎いのだ。

「お前さん、花釣りは初めてかね」

見れば、ござの向こう側に一人の老婆がいた。背丈は幼稚園児位で、非常にしわが多い。あまりに多すぎて目や口がどこにあるのかさえよく分からなくなっている。声を聞く限りは女であるが、実際のところはどうか分からない。もしかしたら老爺おぢなのかもしれない。頭に生えている二本の小さな角は手で触れればたちどころにぼろぼろと崩れてしまいそうであった。だが、どこにあるかも分からない口から発せられる声はやけにはつきり聞き取れた。

「ええ、まあ。話は聞いたことがあるのですが」

「一人で来たのかい」

「いえ、一応友人と……もう少ししてから来ると思いますが、恋人、と言えないのが何だかせつない。」

「そうかい。友人の分の道具まで持って行くかね」

「花釣りの道具ってどれも同じですか？」

「いや、多少違うね。つるの伸縮する度合いとか、餌の露にも色々種類がある。お前さんは始めてのようだから、この竿がお勧めだね。ほどほどに伸びるつるを使っておる。露はまあこれ　紫陽花あじさいの露で良かるう」

「そう　なんですか」

言われてもよく分からないから、そう答えるしかない。
老婆は困ったような顔をしている小雪を見て小さく笑った。

「まあその内慣れるじやろう。そう難しいものでもないから。……で、その友人というのは経験者なのかね」

「え、ええ。恐らくは。ですから私が勝手に道具の種類を選ぶわけには参りませんし……ここで待っていますわ」

「それがええ。その友人とやらも恐らくここを訪れるだろうからね。そうさせていただきます、と軽く老婆にお辞儀して小屋の端の方へ移動した。

同じく花釣りへ来た妖達と話をする。弥助以外の妖相手だと悪態をつくこともなく、普通に話をすることが出来た。

話に夢中になっていると、弥助がやって来た。彼は楽しそうな様

子の小雪を見て優しく微笑む。その目で見つめられると、小雪はど
うにも動けなくなる。

「よお、小雪。悪いな待たせちまってよ」

「お、遅いです。待ちくたびれました」

嘘である。そつばを向きつんとする小雪と、弥助を交互に見た後
小雪と話をしていた妖の一人が大声で笑った。

「何だ、友達なんていつておいて……本当は彼氏だったんだなあ」

「ち、違います！」

「そんな訳ねえだろう、誰がこんな口の悪い雪女なんか恋人にする
か！」

小雪の否定は、まあ全力ではない。一方弥助の方は……全力だ。
その全力っぷりが小雪の胸を深く抉る。そこまでムキになって否定
しなくても、と肩を落とさずにはいられない。弥助はそのことに気
がつかなかったが、他の妖達は気がつき、小雪と弥助の関係を把握
したらしい。その証拠に、小雪を同情するような目で見つめた。
矢張りそのことにも気がつかない弥助は何故かにやりと笑い、小
雪を指差した。

「それによ、こいつには好きな奴がいるんだ。しかもその相手とい
うのが人間でな。苦手な暑さも我慢して足繁くあちらの世界に行っ
ているっすよ」

「ち、違います！ それは貴方の誤解だと何回言えば分かるんです
か！」

何回言っても分からないだろう。……馬鹿だから。

妖達は腹抱えて笑うやら、苦笑いするやら。弥助はそんなに人の気持ちに鈍感ではない……のだが、どうも自分に向けられている恋愛感情とか……そういったものにはなかなか気がつかないらしい。それは、彼が想いを寄せる相手朝比奈満月も同じだった。

小雪の顔はどんどん赤くなっていく。雪のように白い肌は今にも溶けてしまいそうだった。

「馬鹿！ 本当に馬鹿です、大嫌いです！ 馬鹿！」

「そんなムキになって怒らなくてもいいじゃないか。な？ それより早く桔梗の海に行こうぜ。一緒に花釣りするんだろう？」

「……」

頬をぶくつと膨らませ、しばらく弥助の顔を睨みつけていたがやがて観念する。ここで帰ってしまったら勇気を振り絞って彼を桔梗の海に誘った意味が無くなってしまふ。

「さ、さっさと行きますよ。このぼけ狸」

「あっしのどこがぼけてるっすか。まあいい……さっさと行こう。ちよっと待っている、すぐ道具を調達するから」

言って、老婆の前に置かれていた道具をとりに行った。

二人、目指すは桔梗の海。

*

木の門をくぐり抜け、道を通る。外はやや肌寒いが、小雪は半袖のままでもけろりとしていた。彼女は雪女であるから、寒さに強いのも当然のことだった。

桔梗の海にはそこから五分も経たずに辿り着いた。

木々に囲まれた、無数の桔梗。いや、実は正確に言うとそこに咲いているのは桔梗ではない。よく似ているが、全く別物である。本来の桔梗より花が大きく、丈も長い。まるで水で出来ているような花で、その花の群れの中に飛び込めばあつという間に全身ずぶ濡れになる。

正式名称はこれといって無い。とりあえず桔梗に似ているから、桔梗と呼んでいるのだ。

花の色は薄紫。空も一瞬これに似た色を見せることがある。静かで、それでいて冷たすぎない色。美しい、色。

もう空は宵闇の色をしているというのに、その花の姿は消えることなく、割とはつきり小雪達の目に映っている。頭上高くそびえている月がそうさせているのか、或いは別の要素があるのか。その辺はよく分からない。

風が吹くと、桔梗の花が同じ方向へ揺れる。その時ざあ、ざあ、という音がした。それは砂浜を撫でては引いていく波の音によく似ていた。潮の香りはしないが、代わりにほんのり甘い匂いがする。

花の中を、何か動き回っていた。それは小さな光を発している。はつきりとした眩しい光では無く、仄かで柔らかな光だ。色は様々。金、橙、青、黄緑。

花の群れと木々の間には大きな岩が点々とある。海の中にも岩が幾つか見える。上の方は平らになっているらしく、そこに数十人の妖が座っていた。

(ここが、桔梗の海)

初めて見た小雪は、何も言えずただ目の前に広がっている風景を眺めていた。

美しい、と思った。恐らく人間が見ればより感動するだろう幻想的な景色。

「なかなか素敵なお所ですね。気に入りましたわ」

「やっぱり小雪は桔梗の海、初めてなんすか」

「ええ。風花京近くにはなかったの」

「そうか。……とりあえず行こうか。ここでぼつと突っ立っていても仕方が無い。よし、あの岩場にしよう」

言って、歩き出す。小雪もその横について歩き始めた。弥助は歩く速度や歩幅を小雪に合わせてくれた。

殆どの妖がどこかの岩場に座って、そこからつるを垂らしていた。皆花釣りを楽しんでいるようだった。

端の方を通り、腰を落ち着かす場所を探す。花釣りを極める人にとっては、場所、岩の高さ等も重要であるらしい。

「随分と熱心ですね。来たからには全力でやるということですか」
小雪が聞くと弥助が苦笑いし、右手をちょこちょこ振る。

「いや、普段はそこまで場所なんか気にしないよ。ここでいいかなって所にいつも座っている。でもよ、小雪は……初めてなんだろう、花釣り。だからさ、初心者のおんたでもやりやすいような場所を選んでやるうと思ってるさ」

その言葉にどきりとしてしまう。小雪は自分が思っている以上に恋する乙女であった。ここは礼を言うべきなのだろうが、声が出ず、よく分からない変な声をもらしてしまふ。

(こつこつという優しいところがあるから……嫌いになれない。諦めることも出来ない。ああ、もう！)

小雪が悶々としていることに気がついていない　というか小雪の方なんて殆ど見ていない弥助は、丁度良い場所を見つけたようでお、と声をあげた後小雪の名を呼ぶ。しかし小雪にその声は届かない。すっかり桃色に染まってしまった脳が、外界からの声を受け止めてくれないのだ。

しびれを切らした弥助はため息をついた後、俯きながらぶつぶつ何か言っている小雪の左手をぐいっと掴み、引っ張った。それが良い刺激となりようやく小雪の意識は此岸^{しがん}へ戻る。

「何ぼうつとしているんだ、さっさと行くつすよ」

「え、え、あ、ああ、ええ」

もう自分でも何を言っているのか分からない。自分にも分からないのだから、相手にも分かるはずが無い。変な奴と呟きながらその手を弥助が離すことはなかった。

辿り着いた岩場には掛け軸に手足がついた妖だけが座っている。高さは高すぎず、低すぎず。五人座れば定員オーバーになるようなそこまで大きくない場所。岩場の前には石で作られた簡易な階段があり、小雪は弥助に手を引かれながらそこを上っていった。

上から眺める桔梗の海もまた格別で、ここが第一印象以上に広いことも実感できた。

「とりあえず座ろつ」

「え、ええ……っっていつまで手を握っているつもりですの。い、いやらしいー」

やっと悪態をつく余裕が出来たらしい小雪は、握られた手を振りほぐ。

「いやらしい、とか思っているあんたの方がいやらしいですよ」

「私がいやらしい？ ふ、ふざけないでください！」

「ふざけていないですよ。見た目は清楚、中身はえろえろってか。この脳内桃色雪女め」

「だ、誰が、も、もも……女の子にそんなこと言うなんて、最低です！ この助平！ 空気読めない男！ だ、大嫌い！」

「うるせえ、そんなことばかり言っていると助平男らしくとって喰っちまうぞ！」

子供と子供の喧嘩。しまいに弥助は身を乗り出し、ぐっとその顔を小雪に近づける。小雪の方はたまったものではない。ほんの一瞬とって喰われるなら本望とかなんとか思ったが、矢張りそれは、ま
ずい。

反論できず慌てる小雪の顔をじっと見た後、弥助はにやりと悪戯坊主のような笑みを浮かべ、彼女から離れる。

「冗談つすよ、冗談。あつしは好きでもねえ女を襲う程節操なしじやないつすよ。相手もあつしのことを嫌っているなら、なおさらだ」
笑顔が小雪の心をたこ殴りにする。涙が出てきそうになる。もう
いっそこいつを思いっきり殴ってしまおうかとも思った。

何か言ってやろうと息を吸い込む。……が。

「あんた達喧嘩は別の場所でやってくれないかねえ。花釣りに集中出来ないんだよ」

この岩場にいるのは弥助と小雪だけではない。小さな手の生えた掛軸が、二人を睨みつける。ここが静かな雰囲気漂う桔梗の海であることをすっかり忘れていた彼らは口をつぐみ、小さくなった。

花釣りを本格的に始めたのはそれからしばらく経った後。

第五十八話：桔梗の海（2）

*

「……こほん。くだらねえ話をしている場合じゃない。花釣りをやる。ほれ」

小雪の分のさおも持っていてくれた弥助は、そつぽを向いている小雪にそれを渡す。小雪はしばらく目を合わせようとしなかったが、やがて根負けしたのかやや乱暴にそのさおをとった。

小雪は改めてそのさおを見る。手に持つ部分は細い木の棒。ところどころに枝を切った跡がある。色は濃く、黒に近い。

その棒にとりつけられているのは、植物のつる。具体的になんのつるなのかは分からない。色は枝豆に似ていて、緩やかなウェーブを描いている。その先端には、桜によく似た色をした大きな花がついていた。

よく見ると弥助のさおについているつるは小雪のものとは違っていて、色は濃くやや太い。先端についている花の色は黄色であった。

「この花に、露を染みこませるんだ」

弥助は壺をあけ、その中につるの先についている花を浸した。小雪も真似をする。小雪が貰った壺に入っているのは紫陽花の露らしい。見た目は当然というかなんというか……ただの水。匂いは全くしないわけではなく、草花の独特な香りが少しだけした。

「これが餌になりますの？」

「ああ。草花の露は蜜魚みつなの好物らしい。……海の中、動く光が沢山見えるだろう？ あれが蜜魚っすよ」

淡く柔らかな光が、桔梗の海を泳いでいる。改めて見てみると、確かにその光は魚の形をしているように思えた。光は色だけでなく大きさも様々で、めだか位のもあれば、鯉位の大きさのものもあった。蜜魚にも色々種類があるらしい。

「蜜魚は桔梗の花を満たしている蜜が姿を変えたもの……と言われている。花の魂が一部変じたものじゃないか、という奴もいるっすが。詳しいことはよく分かっていないんだよなあ」

人間だったら長い時間をかけてでも、この花の仕組みを研究するんだろうが……と続ける。細かいことは気にしない主義であるこの世界の住人の脳内には探究心という言葉が無いのだ。研究に没頭する妖等殆ど居ない。

「蜜魚には色々種類がある。美味さも、釣りやすさも露の好みも種類によって変わってくるんだ。小雪はどの花の露を貰った？」

「紫陽花だったと思います」

それを聞くと弥助は納得したようにこくこく頷いた。矢張り初心者にはもってこいのものだったらしい。

「紫陽花の露は蜜魚に好かれているからな。ある程度の種類はその露を使えば釣れる。……ただし、数が少ない上に釣るのが難しい種類の多くは紫陽花の露の味が好きではないらしい。逆にそういう蜜魚が好む味の露っていうのは、大抵の奴等には好まれないものなんだ。だからまあそういう露は玄人向けっすね」

あっしは気軽にやりたいからそういうのは使わないが、と付け加える。弥助が選んだのは向日葵ひまわりの露。これは中級者向けのものであるらしい。小雪はそれを見せてもらったが、矢張り目立った違いは無い。

しばらくの間気がつかなかったが、小雪はこの時随分と弥助に近

づいていた。

彼が手に持っている壺を半身をひねって見ている内自然とそう言ったようだ。

はっと気がついて見上げればそこには弥助の顔があった。慌てて離れる。

「こ、これといった違いは無いんですね本当に。ひひ、向日葵の露とか言っておいて、実は私と同じ初心者向けの紫陽花の露なんじゃないですか？ 見栄張って嘘ついているのでは。や、弥助は狸ですからね。嘘つきですからね」

「ばれたか。実はそう……ってんなわけないだろう。あんた相手に見栄張ってどうする。気心知れた友達なんだから、小雪は」

嬉しいような、悲しいような。何とも言えない言葉に小雪は戸惑うしかない。

痛痒い思いを振り払いたかったから、思わず弥助のたくましい腕をぺしりと叩いた。弥助は何ではたくさんだとむすつとする。

「私は別に貴方のことを友達だなんて、お、思っています。思っていますせんとも。思いたくありません」

「そこまで言うか、普通」

「そんなことよりこの竿の使い方を教えて下さい。私は弥助とお話したくてここに来たわけではありません。花釣りのやり方を教えてもらう為に連れてきたのです。そうでなければ誰が貴方なんか」

勿論、嘘である。見栄っ張りで嘘つきなのは弥助ではなく、小雪の方だ。

小雪は眉をつりあげ、弥助に食ってかかる。また勢いで顔を近づけてしまい、一人で勝手に赤面し、小さくなる。

面倒臭い女、と小声で呟きながらもお人よしで出雲のうん万倍優しい彼は懇切丁寧に使い方を教えてやる。小雪は大人しくそれを聞いた。時々弥助に手を触れられ、その温もりに心臓をばくばくさせた。少女漫画のヒロインかとツッコミを入れなくなる位の乙女っぷり。

「な、成程。このつるは手に持っている人の意思を汲み取って動いたり、伸縮したりするんですね」

「ああ。あつしらの体内に流れている妖の力を通じてその人の意思を感じ取るんだとさ」

まあ、ものは試した。つるを桔梗の海へ投げ込むと言いながら弥助はつるを海の中へ落とす。鈴の音のような、水音のようなものがそれと同時に聞こえた。

小雪もそれにならってぽんとそれを投げ込んだ。つるは花に触れ、不思議な音を奏でる。

「まあ、最初の内は色々動かしてみると良い。いきなり蜜魚を釣ろうとか考えずにさ」

「つるを思い通りに動かせばよろしいのでしょうか？ 簡単ではありませんか」

「それがなかなか上手くいかないもんでな……やってみな」

小雪は何がそんなに難しいのだろうと疑問に思いつつも素直にやってみることにした。

なめてかかっていたが成程、弥助が言った通りそう上手く出来るものではないということが程なくして分かった。

単純に伸ばす、縮ませる、左右に動かす……というのはそこまで

難しくない。

しかし細かい動き、つるの長さの微調整等は非常に難しいものだった。思った以上に動いてしまったり、つるが伸び縮みしてしまったり、それで上手く出来ないからとあせった拳句動かす方向すら滅茶苦茶になっちゃったり。

弥助曰く上手く蜜魚を騙すには、細かく滑らかな操作が必要不可欠だという。

一気に伸びたり縮んだり、ものすごい速さで動くつるに釣られてしまうような蜜魚など殆どいないのだと、小雪の悪戦苦闘っぷりを笑いながら言う。

細かい動きをイメージすることは、大雑把な動きをイメージするよりも難しい。

つるにかき分けられた花々は幾つもの鈴を一気に鳴らしたかのような音を立てる。光を帯びている蜜魚がそれから逃げるように離れていく。

「な、難しいだろう?」

「ちょっと黙っていて下さい、集中出来ないじゃないですか!」

弥助の声すら今はわずらわしく感じていた。そんな小雪はまだ気がついていない。桔梗の海をデート場所に、花釣り初心者的小雪が選んだのは間違いであったことに。これでは弥助と一緒にいる意味が全く無い。

弥助はまあ仕方無いかと一言呟き、自身も釣りに集中する。花釣りが最初の内は割と難しいことを知っているから、自分のことをぞんざいに扱うのも仕方無いと思っている。だから文句も言わない。

涼しく透明な空気が底へと沈んでいき、岩場に腰をかけている妖達の肌をなせる。桔梗の花はその色の深みを増していつていた。そ

の間を優雅に泳ぐ蜜魚たち。彼らは夜の間しか姿を現さない。夜だからこそ美しいその身。

騒がしいことが好きな妖達だが、この海で先程までの小雪や弥助のように声を張りあげる者など誰一人いなかった。全く喋っていないわけではないようだったが、離れた岩場にいる者の耳には届かない位小さな声であった。

只聞こえるのは、寄せては返す花の波音。そしてつるに触れられた花の奏でる音。しゃん、ざああ、しゃん、ざああ、りん、りん。

弥助はつい先程、手のひらにちよこんののる位の大きさの蜜魚を釣りあげた。

頭の方が青く、そこから尾にかけて徐々に紫色になっている完全な夜を迎える寸前の空の色に似ている魚であった。掛け軸の妖から分けてもらった大きな葉の上にその魚をのせる。

「へへ、どうだ。早速釣ったつすよ」

誇らしげな顔を、小雪は頬をぶくつと膨らませながら睨みつける。そうして竿から目を離れた途端、つるは新体操のリボンのようにくるくると回りだした。

悔しくなつて、弥助にあかんべえをしてやるとまた花釣りに全神経を集中させた。

（少しは慣れてきましたが、まだ細かい動きが……というかこれでは弥助と来た意味がまるでないのでは。一人も二人もあまり変わらないじゃないですか）

今頃気がついたようだ。

露は定期的につけた方が良いとのことだから、一度つるを引き上げつぼの中へと入れる。そうしながら桔梗の海に視線を移す。

花々の間を縫うようにして泳ぐ蜜魚は、何だかとても楽しそうだ

った。花びらに擦り寄ったり、ぴよんと飛んで花に口づけてみたり、周りをぐるぐる回った後ぴたりと止まって花を見上げてみたり。他の蜜魚達と遊んでいるらしいものも見かけた。

彼等は、自分達を釣って食べようとしている妖達のことなど気にもとめていないようだった。彼等は、彼等だけの世界で楽しんでいる。

そんな彼等の邪魔をすることをほんの少し申し訳なく思う。しかしこのまま一匹も釣らないで帰るのもしゃくだった。小雪は頑張るぞと一人頷き、つるを海の中へ投げ込んだ。

蜜魚達がどこにどれ位いるのかは一目瞭然。その近くにつるを投げ込み上手い具合に動かしていればいつかはかかってくれるはずだ。なかなかの場所につるをもっていくことが出来た。青や赤の光が、小雪の放ったそれに近い場所でくるくる踊っている。もしかしたら興味を抱いているのかもしれない。

(誰か。誰かかかってく下さいまし)

小雪の肌に触れ続けてすっかり冷たくなっている竿。それを握りしめながらただひたすら祈る。

小声でお願いします、お願いしますと呟いている小雪の様子を見て弥助が笑いを堪えた。サンタさんにプレゼントをお願いしている子供のようにだとかなんとか思いつつ。

どれ位、願っただろうか。ビー玉を水の中へ落とした時のような音が聞こえたと思ったら、さおが突然重くなった。動かしてもいないのに上下左右に振動している。小雪は一瞬訳が分からずぼかんとした。

その変化に気がついた弥助が笑うのをやめ、彼女の肩を軽く叩く。

「小雪、かかっている。蜜魚があんたのつるに喰いついたんだ！」

「え、ええ!？」

お願いの効果があったらしい。しかしかかったらかかったで小雪は困ってしまった。この後どうすればいいのか全く知らなかったのだ。花釣りはおるか、ごく一般的な釣りさえしたことが無かったのだから仕方無いと言えは仕方無い。

「どどど、どうすれば宜しいのでしょうか!？」

「蜜魚の動きに合わせてつるを動かすんだ。ちんたらしていると逃げられるぞ」

「そう言われましても!」

もう何がなにやら。とりあえずつるを動かそうとするが頭の中が真っ白になっているせいである。つるの動きがめちゃくちゃになっている。その様子を見た弥助がしょうがねえなああと面倒臭そうに呟く。そして小雪の持つている竿に手を触れる。自然と二人の体は密着する。当然小雪は、固まる。

「もう少し右、そこで左……もう少し強く……」

(ミギ、ヒダリ、ツヨク。ああ遠くで弥助の声が聞こえる……)

小雪の意識はすでにそこには無かった。自分に対して喋っているのだということすら理解できない。つるに意思を伝達することなど出来るはずもなく。

完全に忘我状態である。

結果、つるは小雪の竿と一緒に握っている弥助の意思を汲み取るようになった。小雪は固まっていたが、つるは彼女が動かしていた時以上に滑らかで的確な動きをしている。

「ほら、小雪！ 釣れたぞ、やったじゃないか！」

「は、はい？」

弥助が嬉しそうに言った言葉が小雪の意識をようやくこちらに引っ張り戻した。見ると、つるの先端にある花に15センチ位の魚が噛みついており、尾をぱたぱたとうごかしている。鷺つくしによく似た色。小雪は先週食べた抹茶パフェをぼんやりと思い浮かべた。ああ、あの色にもよく似ているなと思いつつ。

最初の内は元気よく動いていた蜜魚だったが、しばらくすると大人しくなりやがて石のように固まって動かなくなった。

弥助は花の先についているその蜜魚を丁寧にとると、小雪用の葉の上にそつとそれを置く。動かなくなつた後もなおその体は美しい光に包まれていた。魚より、光にかざした宝石の方が近かった。

「頑張つたじゃないですか。なかなか良い蜜魚つすよ、こいつは。あつしが言うんだから間違いない」

あまり頑張つてはいない。実質葉の上に横たわっているその蜜魚は弥助が釣つたものだ。小雪は何もしていない。まあ何もしなかつたからこそ釣れた……と言えないこともないから。ある意味では小雪の功績であるのかもしれない。

弥助だつて小雪があの時釣りに全く集中しておらず、呆然としていたこと位気がついていたはずだ。だが彼はそのことには触れない。

小雪は「私は何もしていない、これは弥助が釣つたのです」と言おうとしたが、出来なかつた。意地っ張りな性格（特に弥助の前では）な彼女にそんなことが言えるはずがなかつた。

代わりに胸を反らし、ふふんと勝ち誇つたような顔をしてみせる。

「参りましたか。私の手にかかればざつとこんなものです。花釣りなんてちよろいちよろい、ですわ」

「はいはい。すごいすごい」

弥助はただ苦笑いしただけだった。桔梗の海を泳ぐ蜜魚達は小雪を「よくやった」と褒めるわけでも「何を言っているんだこの女は」と思うこともなく、ただ自由に泳いでいた。

また、しいんと静かになる。ここにいると長時間、しかも大きな声で話す気になれないのだ。周りが静かだからなのか、それとも海の美しさがそうさせるのか。

今度こそ自分の力で釣りたい、そう願いながらつるをまた落とす。海には他の妖達が投げ入れたつるも多くあり、それが舞うように動き回っている。緩やかで、鮮やかで……景観を汚さぬ動きはぼうつと見ていると結構楽しいものだった。

風に揺られて波打つ桔梗は優しくつるを、蜜魚を抱く。

（あの中を泳いだら、どれだけ心地良いでしょうか。蜜魚達が、少し羨ましい）

そんなことを思うようになった自分に気がつき、小雪ははにかんだ。

（昔はそんなこと考えようとも思わなかったのに。何を見ても、何も感じなかったのに。何もかもくだらないものに見えていたのに。今は違う。楽しい、とても楽しい）

横目でこっそり弥助を見る。彼はぶつぶつ独り言を呟きながら花釣りに熱中していた。きつと小雪の姿など今の彼には映っていないだろう。

（私はこの男に助けられたのだ。彼と出会わなければこうして花釣りに出かけることもなかった。仮に花釣りをやったとしても何も感ぜず、思わず、何も得ることないまま帰ったでしょう）

弥助には心の底から感謝していた。誰にでも優しい彼は、小雪にも優しくかった。彼の優しさが、温もりが小雪の凍りついていた心を溶かしたのだ。

しかし彼に自分が心底惚れている理由が彼のその性格にあるのかどうかは、矢張りまだよく分からない。優しいから好きになったのか、助けられたから好きになったのか。実は一目惚れだったのか。そもそも自分はいつから彼のことを意識するようになったのか。

（分からないですわ、本当に。まあ分かったところで何がどうなるってわけでもないですが）

つるはぐるぐる回っている。蜜魚は邪魔そうにそれを避けながら泳ぐ。その近くに別のつるがある。あの掛け軸お化けのものである。彼は小雪を睨んでいる。勿論小雪は気がついていない。結局掛け軸お化けの方が折れて、つるを移動させた。

ぐるぐる考えることをやめた頃、弥助は相当な数の蜜魚を釣っていた。

（いつの間にあんなに。負けていられませんわ、私も。このままではあんまりです）

美しい光が沢山集まっているところに、小雪は狙いを定める。提灯色の光、蛍の光に似たもの、銀色の月の様な色の光……それらが夜空の色をした桔梗の花の中で泳いでいるのだ。

花には露をたっぷり染みこませてある。

（今度こそ、自分の力で釣ってみせますわ）

さあ、ざあ、さあ、ざあ。寄せては返す波の音が小雪の心を落ち着けてくれる。時々聞こえるしゃん、ちよん、りんという音もまた心地よい。

肩の力が抜けていく。

(何だか、今度は上手くいきそうです。難しいこと考えずにやるのが一番良いのかもしれないね)

何となく、そんなことを思った。

しゃん。

「あ」

竿が突然重くなる。また蜜魚がかかったらしい。先程よりもずっと重いように思えた。

慌ててはいけない、落ち着いて。自分にそう言い聞かせ、深呼吸を一つ。

こうすれば良いのだろうか、ここはこう動かした方がいいのだろうかと思いつながらつるの長さ、動きを変える。

不思議と的確な判断が出来た。記憶には蜜魚を釣った時のことが残っていなかったが、体はきちんと動きを覚えていたらしい。

弥助は手助けをしなかった。しなくても大丈夫だということが分かっているようで、彼女の方を時々見ながら小声で時々アドバイスするだけだった。

右、左、今は少しづつを伸ばし。そこで一気に縮め、また右へ、左へ。

甘いのか、苦いのか、酸っぱいのか。そもそも味があるのかどうかさえ分からない、水晶のように透き通っている露に引き寄せられた蜜魚。桜色の柔らかかな花びらに今彼は噛みつき、その体を右に左にくねくね動かしているのだろう。

他の蜜魚達は、今まさに釣られようとしている自分達の仲間になど目も向けない。先程まで一緒に戯れていたのに、もう彼のことなど忘れてしまったかのようにであった。ただ楽しそうに輪になって泳

いでいる。

つるが大分短くなってきた。後少しだ。しかしここであせっては
今までの苦勞が水の泡。慎重にいかねばならぬ。とても重い、けれ
ど負けたくない。

はやる気持ちを抑えながら、もうすぐ来るその一瞬を小雪はひた
すら待ち続けた。

そして。

「小雪、今だ、引き上げる」

弥助の囁く声が小雪の耳に届く。その声にとろけそうになりなが
らも小雪はぐっと竿もつ手に力を入れ、桔梗の海からつるを引き上
げた。

しゃん、という音と共に海上から現われたのは5〜60センチは
あろうかという蜜魚であった。月の光を浴びてより一層輝く、染ま
りかけの紅葉のような色をしたその体。赤、緑、黄色のグラデーシ
ョンがとても美しい。

目らしい目も見当たらない、生物なのかどうかよく分からないそ
れを小雪は、満面の笑みを浮かべて葉の上へのせた。自分の力で釣
った魚はとても大きく見えた。

「お、そいつはなかなか珍しい種類の蜜魚つすねえ。紫陽花の露で
良く釣れたなあ。随分変わり者みたいだ、あんたが釣ったのは」

「変わり者とは何ですか。私が釣った蜜魚を馬鹿にすることは許し
ませんよ」

「はいはい」

「私の技量が優れていたからこそ、このような立派な蜜魚が釣れたのです。もっと私のことを敬いなさい。花釣り名人様、と」

「はいはい」

鼻高々にそう言ってみせる彼女を、弥助は生意気でお調子屋の妹を見るような目で見、笑う。その時ふと初めて彼女と出会った時のことを思い出す。

笑顔を知らなかった彼女のこと。温もりなどただただ不快なものであると眉一つ動かさずいった彼女の姿。

(昔のあいつが、今の小雪を見たらきつと驚いただろうな。……顔には出さず、心の中で、な)

「まだまだ釣りますわ。あつという間に弥助が釣った数を超えてみせます」

「そうはさせねえよ。初心者娘に負けるほどしょぼい腕してないっすよ、あつしは」

「どうか。お前は何をやらしてもへぼへぼですからね。きっと花釣りをやってもへぼへぼでしょう」

「へぼへぼって何すか、へぼへぼって。あつしだってなあ、やる時はやるんだ」

「やらない時はやらないんですね」

「当たり前だ」

「何でそこで胸を張りますの。訳が分かりませんわ、全く」

そう言いながらも小雪は楽しそうに笑う。口元に手を添え笑う彼女はとても可憐だった。普段は大人しいクール系美人といった感じなのだが。

弥助も素直にその表情を可愛いと思う。しかしその感情が恋愛感情に変わることは無い。

「さあ、もう少し続けるか。どちらが多く釣れるか勝負だ」

「望むところですよ」

「その勝負、私も参加して良いかな？」

そう言ったのは掛け軸お化け。その優しげで落ち着いた老爺のような声は、どこか秋太郎のものに似ていた。小雪と弥助は顔を見合わせ、くすりと笑い合うと仲良く頷いた。

「こつこつというのは一人より二人、二人より三人の方がいいからな」

「その通りですよ」

弥助と二人きりの時間を過ごしたい、という目的も半ば忘れている。

今は只、この時間を楽しみたい。それだけだ。

今まで釣った数は入れない、相手の邪魔はしない、兎に角楽しんで釣る。

それだけ決めて彼らは露を浸した花を海へと投げ込んだ。

*

そうして過ごした時間は静かに、穏やかに、それでいてあっとい

う間に過ぎていった。

餌である露も殆ど終わり、蜜魚に散々食いつかれた花は大分ぼろぼろになってきている。

「そろそろ終わりにして、この蜜魚達を食いに行かないですか」

「ずるいですが、弥助。お前自分が一番である内に終わらせようとしているんでしょう」

「そうじゃないですよ。それに一番釣っているのはあっしじゃない。指差した先にあるのは、掛け軸お化けの獲物達。小雪や弥助が釣った数よりもずっと多い。」

「あれにはどう頑張っても勝てん」

「うう、確かに。あれだけの数を釣っていたのが弥助だったら意地でも負けを認めませんでしたけど……仕方ありません、私達の負けですわ。……一番は私ですわね」

「何を言っているっすか、どう見たってあっしの方が釣っているだろっ！」

そう。二人の間には相当な差があるのだ。しかし小雪は怯まない。

「私は初心者、弥助は経験者。そのことを考慮し、お前が釣った数から10引くと……」

「何で引く必要があるんだ。往生際が悪いぞこの馬鹿雪女」

「お前如きに馬鹿と言われるなんて、心外です！ 馬鹿、鈍感、筋肉達磨！」

「あつしのどこが鈍感だっっていうんだ、というか鈍いとか鋭いとか今関係ないことだろう！ あんた前もあつしのことを鈍感男とか何とか言っていたな！」

「う……そんな昔のこと覚えていません！」

「そんな昔じゃねえ！」

ああだこうだと再び始まる口論。掛け軸お化けは存在すら忘れられ、呆れるやら寂しいやら。

「それじゃあお前さん達、私は一足先にこいつらを食べに行くよ。また会おう」

一応それだけ言い、その場を後にする。

二人の口論は、弥助が押し負ける形で終わった。

「こほん、まあとりあえずこの位にしておいてやらあ。……蜜魚、食いに行くつすよ。こいつらを調理してくれる所が近くにあるんだ」

「そ、そうですか。分かりました。弥助と不毛な争いをして無駄な時間を過ごしました。さっさと行きましよう」

幾枚かの葉で釣った蜜魚をくるみ、木の下に生えていた太く丈夫な植物の茎で縛りつける。

岩場から降りた二人は、木々に囲まれた狭い道を進む。

「蜜魚は桔梗の海から極端に離れた所に持つていくと、かちんこちに固まってしまふんだ。飴なんかよりもずっと硬くなって……並大抵の歯じゃ噛み砕くことが出来なくなる。無理にやれば歯の方が砕けちまう。普通の魚のように腐ったり、生臭くなったりすること

は無いけれど。観賞用に持ち帰る奴もいるが……まあ大抵の奴は釣ったその場で食うな」

「ふうん、そうなんですの」

特に驚くこともなく、小雪は軽く頷くだけだった。人間からしてみれば不思議なことでも、妖達にとっては当たり前のこととどうか、不思議なことでも何でもない。ここにさくら達がいれば「魚がそんな風に固まるなんて！」とか何とか言って驚くだろうが。

道の先には開けた空間があり、奥に二階建ての平べったい建物がそびえていた。また、端っこの方で焚き火をしながら近くにある石に座って話している妖が何人かいる。そこからあがる煙がとても良い香りを運んでいた。恐らく蜜魚を焼いているのだろうと小雪は思った。

「ああやって自分で調理するものもあるし、あの建物の中にいる奴らに調理してもらおうものもある。自分で焼いたり煮たりしたものを食うのも格別だが、蜜魚の扱いはあの中にいる奴らの方が上手いからな。そちらに今回は頼もう」

海は随分静かであったが、こちらは半分賑やかであった。香ばしい匂い、甘い匂いに混じって酒の匂いもした。

建物の中は外以上に賑やかで、木のテーブルの上に置かれた料理をつつきながら皆酒を飲んでいた。恐らく二階にも食べる場所があるのだろう。

一階の左奥から特に良い香りが漂っている。そこがどうも調理場になっているらしい。楽しそうに歌う声も聞こえてきた。歌いながら調理しているのだろうか。

テーブルに料理を置いた、二足歩行の巨大三毛猫が二人に気がつ

いた。

「これはこれはお客様。美味しそうな匂いが……あ、蜜魚の匂いのことですよ、お客様達が美味しそうという訳ではないですからね。私は蜜魚以外食べませんから！」

そう言いながら口元から垂れているよだれをずるつとすする。黒い瞳は二人が持っている蜜魚をくるんだ葉に釘づけだ。

「それでは蜜魚お預かりしますね。調理方法はお任せで宜しいですか？」

「ああ。一応刺身と焼き魚は確定で。後はお任せってことで。小雪もそれでいいか？」

「え、ええ」

「了解です。それじゃあ蜜魚、預かりますよ。ええとこちらが雪女のお姉さんの、それでもってこちらがむさくるしいおっさん」

「誰がむさ苦しいおっさんだ。お前、絶対にこの蜜魚つまみ食いするなよ」

「するなと言われるとしたくなってしまいますなあ」

冗談にも本気にも聞こえる。猫は分かりやすいように印をつけた後、包みを持って調理場へと消えていった。夜空の下に咲いている桔梗のような色の着物の裾をひらひらさせながら。

そんな彼（彼女？）の背中に弥助が「二階で待っている」という言葉を向けた。包みをもっていない方の手を猫はぶんぶん振った。

「何か心配だが……まあ大丈夫だろう。それじゃあ二階に行こう」

店の右奥にある階段を上ると、妖達が料理を食べながら騒いでいた。一階よりもずっと騒がしい。

香ばしい匂い、味噌や酒、醤油の香りが建物中を満たしている。見れば先程一緒に花釣りを楽しんだ掛け軸お化けもいた。掛け軸には墨で鯉が描かれており、その鯉がぱくぱく口を開けて料理を食べている。彼はその鯉の口にせつせと料理を運び続けていた。

「おや、来たかい。あのまま二人あそこでいちゃついているのかと思っていた」

「いちゃついでないません！」

「どうせいちゃつくなら、朝比奈さんが良い！」

「誰だい朝比奈さんて」

朝比奈さんのことは愚か、弥助達の名前すら知らない掛け軸お化けはぱりぱりと鯉の背の部分をかく。小雪は肩をがっくりと落としている。

まあいい、ここに座りなさいと自分の前にある席を指差す。二人は素直にそこへ座る。

周りの妖達と騒いでいると、先程の猫他数名の妖が料理が盛られた皿を運んできた。猫はぐるぐると鳴いている。途中つまみ食いしなかったのが奇跡のように思えた。

「ほれほれ、完成しましたよう。美味しく食べるが宜しい。残ったものは私達が美味しくいただきますから。というわけで料理残せよ、絶対残せよ！」

最後の辺りは涙声だ。残さなければ自分の爪で自分を裂いて死に

そんな勢いである。

弥助も小雪も特に返事はしなかった。猫は他の従業員に引きずられて一階へと消えていった。

「それじゃあ、早速食べるか」

仲良く手を合わせ、食べ始める。

小雪がまず手にとったのは太い木の棒にささった焼き魚。焼いても光は消えていない。こげの部分は黒くなく、元の体の色が濃くなっているだけだった。

「ぱっと見焼いたようには見えませんが、とても良い香りはします」
ぱくり一口。美味しい。

とてもふわふわしている。とろろのような、綿菓子のような。普通の魚よりも甘い。勿論砂糖の味がするわけではない。魚の味だ。だが普通のそれとは矢張り違う。噛むと濃厚な味の汁が口の中に広がる。内蔵や骨は無いから、丸ごと食べられる。

「普通の魚とは全然違う味。でも美味しい」

「だろう？ だから時々やりたくなるっすよ、花釣りは」

弥助が食べているのは刺身だった。身の色はどの蜜魚も同じで、薄荷飴のようなものだった。

「刺身もまたたまらないっすよ。ものすごく弾力があるんだ。油も滅茶苦茶のっついてさ。でも全然しつこくない。おまけに甘い。甘エビよりも甘い。甘いったら甘い。けれどどくどくない。ぷりぷりむにむにこりこり、最高っすよ」

辛味の強い薬味をのせて食べるとまた美味しいらしい。辛い、でも甘い、その感じがたまらないらしい。

他にも木の実や茸が入ったあんをかけたもの、甘辛い味噌と一緒に軽く似たもの、こんぶと巻いたものなど様々なものを食べた。

他の妖達が釣った蜜魚でつくられた料理も食べたし、自分達のを分けたりもした。苦味が強いもの、ものすごくこりこりしているもの、食べた瞬間口の中で溶けるもの……蜜魚によって味や食感等に違いがあるのが面白い。

酒も、飲んだ。酒は桔梗の海がある所でしか飲めないものを主に飲んだ。

「これは液体状にした蜜魚を混ぜたもので、これはあそこに咲いている桔梗の花入りのもの、これは……」

弥助や他の妖達にすめられた酒を片っ端から飲む小雪の顔はあつという間に真っ赤になった。

「どれも美味しいですわ。体がふにゃふにゃとろけますわ」

酒を飲んで体が熱くなる。けれど嫌な熱さじゃない。昔は体がほてるのが嫌という理由で酒も殆ど口にしなかった小雪であるが。

「うんうん、美味しいなあ。ああ出来ることなら朝比奈さんを連れてきてやりたかったなあ！一緒に花釣りして、料理を食べたり酒を飲んだり……痛い！」

小雪がにやにやしている弥助を思いきり蹴飛ばしたのだ。当然弥助は怒る、叫ぶ。喧嘩になる。この夜何度も繰り返したパターンである。

その様子を見て酔っている他の妖達が愉快そうに笑う。彼らにとつては最高の娯楽、酒のつまみである。

美しい桔梗の海で花釣りを楽しみ、美味しい料理を騒ぎながら食べ、酒を飲み、喧嘩して。

「いいぞもつとやれやれ、仲良し夫婦！」

「痴話喧嘩見ながら食う蜜魚は最高だ！」

「本当騒がしい方々だ。でもまあこういうのもいいですねえ」

外野が盛りあげる。酒の勢いですごいことになっている小雪と弥助の舌戦は、疲れて喉が枯れるまで続いた。

こうして桔梗の海の夜は過ぎていく。

夜が明け、海の色が藤色に近くなった頃蜜魚は静かに消えていく。

海は夜より一層静かになるだろう。

しいんと、しいんと。

また来る夜を待ちながら、揺れる、揺れる。桔梗の、海。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4266f/>

桜町幻想奇譚

2011年12月30日00時50分発行